THE CENTRAL REVIEW

中央公論

秋季大附錄號

第四十年第十號　第四百五十二號



家庭の幸福は健康に在り
サナトーゲンは保險に優さる

眞正の强壯食料品 サナトーゲン

家庭の幸福は、まつたく懸つて、貴下の御健康にあります。なるほど、保險に依つて貴下が現在の財產を失ふことを防ぐことは出來るかも知れませんが、**サナトーゲン**は保險以上に貴下の御爲めになります。

卽ち**サナトーゲン**は貴下の健康を維持し活動力を增進して、從前よりも層一層の働をなし又此を樂しむことによりて、漸次その社會的地位を高めます。

サナトーゲンは元氣と忍耐力の輝かしい源泉を賦與することによりて、神經と頭腦とを强めます。貴下は事業を成功せしむるため、每日規則正しく**サナトーゲン**をお召上りなさい。

さあ、今**サナトーゲン**を御購求になつて、二三週間、御食事の度每に御上り下さい。貴下は必ず間もなう、その恩惠的效果を經驗なさつて、すぐと往年の青春の氣分をまつたく恢復し、好き生活の悅樂を十分に御味ひになることが出來ます。

二萬四千人以上の醫家が健康增進、元氣恢復劑として熱心にサナトーゲンを推奬してをります。サナトーゲンは眞に恰適の强壯食料品です。

サナトーゲンは貴下の爲めにお役に立つばかりでなく、又貴下の御兒にも、貴下の御家族にも御役に立ちます。

サナトーゲンは健康にして幸福なる家庭生活を建設します。

●全國到る處の藥店に販賣してゐます。

興味津々たる小册子
御要求次第無代謹呈

サナトーゲン
日本一手輸入元
株式會社ゼーエル・タムソン
神戸市海岸通一丁目英三番
（神戸三宮郵便私書函二十二號）





秋郊　　森田恒友筆

永年難治の習慣も忽ち改まる

簡易な禁煙方法

驚くべき『カロット』の効力

三月五日の讀賣新聞はポー型の天才富ノ澤麟太郎氏の死を報じてゐるが、その後に『彼の生命を奪つたものはバットではないかと思はれる。彼は一日に十三箱も吸つてゐたからだ』とある。バットの十三箱とは聞くだに物凄い。兎に角、煙草の害は過度に用ふるに依つて起ることは事實だが、吸つてゐる中に段々多量に吸ふ様になるので、不知不識の間に身體を惡くしてゆくものである。煙草を止めると云ふ言葉はよく聞くが、絶對に禁煙し得たと云ふ人は餘り多くない。それは如何に禁煙が困難であるかを物語つてゐるもので永年の習慣は容易に改まるものでない、所が、玆に面白い一つの禁煙方法がある。「カロット」を一度口にすれば煙草を用ゆるに少しも異ならないから手持無沙汰でないばかりでなく適量の朝鮮人蔘の精氣を含んでゐるから根氣をよくすると同時に温雅な香氣と忘れ難き清涼な甘味は、輕い刺戟と快感を長く口中に殘して、一度之を口にすれば煙草に對する永年の嗜好を忘れて斷じて二度と吸ふ氣になれない。殊に口中の惡臭、又は食後や夜中口の中がねばる時に用ゆれば忽ち爽快になり、暫く常用すれば永年のニコチン中毒も完治する效力がある。但し、これは眞に煙草をやめようとするのでなければお勸め出來ない。何故なら再び煙草がまずくて吸へなくなるからである。是は實業之日本社あたりでも實驗して此煙草の害を知りつゝ、永年禁煙出來なかつた人、神經衰弱、慢性胃腸病消化不良その他禁煙したら屹度肥つて身體を改造し得るだらうと感じてゐる方は是非一度カロットを試みられるが良い。大倉男爵と大阪朝日の村山社長との禁煙の約束なども面白い一例である。

カロット（凡百日分）

金貳圓五十錢（ベークライト製）（パイプ付）

金參圓五十錢（サック入象牙製）（パイプ付）

（送料各内地十八錢 臺朝樺四十五錢
代金引替内地卅錢 臺朝樺五十五錢）

東京大森不入斗四五一振東五二九壹壹

發賣元 榮川堂

東京京橋區瀧山町十三

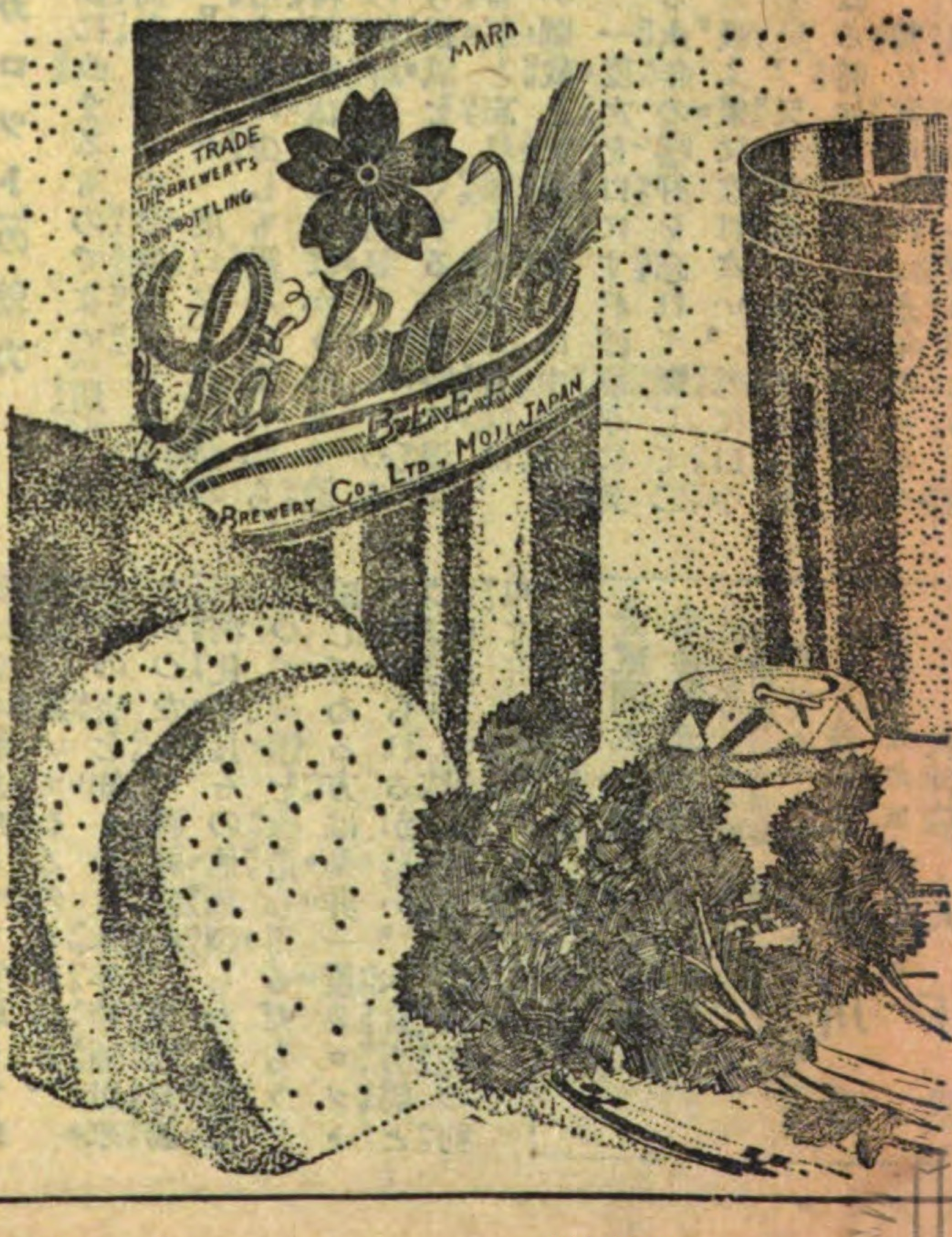
代理店 天下堂

喫るよ！
喫るよ！
食慾を……

生のセロリと
良きパンと
グラスに光る
良きビール

良きビールは
サクラの
名に選べ!!

サクラビール



大正十四年

中央公論

九月一日發行

第四十年　第十號

秋季大附錄號

第四百五十二號

第二次加藤内閣の出現

政友會の脱退に依つて、再び加藤高明子を首班とする憲政會の單獨内閣が出來た。輿論の大勢は斯る之を歡迎するかに見える。成程加藤首相の地味な而も堂々たる態度、若槻濱口諸氏の誠實と聰明、之等はたしかに國民の信頼に値する。其の施設の内面的價値から云ても、其の運用の實際的手腕から云ても、はた第一次内閣の成績から云ても、これ以上の内閣は當分誰人に頼ても作られさうにない。然をいへば限りもないが、吾々は加藤内閣を有つことを先づ國民の爲に幸福と云てい〻。

憲政會が一段と男振りをあげたに對し、最近の政變に於て餘りに見苦しき失態を演じたものは政友會である。總裁の更代にも、一抹の陰翳の認められぬではないが、岡崎小川兩氏の脱退振りの醜さと、政本提携の醜穢さとは、如何に彼等が政權に饑ゑ切つて居るかを雄辯に語るものでなくて何であらう。之に就て論ずべきこと多々あるが、世論も例外なく政友會を醜陋と斷ずるに一致して居るやうだから、此にあらたまつて論ずる迄もなからう。ただ世人のあまり氣付かぬ點で是非讀者の一顧を促したいことが一つある。それは外でもない。此機會で見ん事憲政會をうつちやつた政友會の小手先の器用さは、見物も行司も共に之を認めんと欲せずして結局團扇を加藤子にあげたことは是である。吾人がいろ〳〵の機會に於て常に力説を怠らぬ如く、政界進歩の徴證は專ら政爭の道義化に在る。政爭は負の兆が少しでも陰險醜陋な手段に出るを許すは、結果の如何にかゝはらず、政界腐敗のバチルスとして極力之を排斥せねばならぬと考ふる。此の意味に於て今回政友會に加へられた鐵槌は、徒に一時の小過失などと輕視することなく、少なくも憲政運用上の一先例として深く國民常識に印し置きたいと思ふ。

政友會の失態のため、好の形勢を捉へた憲政會は、其後政務官の配置に研究會を誘つたことに依て思はず世間の非難を買はねばならぬ羽目に陷つた。政友會と手を切り單獨内閣となつた時に多大の期待をかけた國民が、

札付きの研究會との握手に依て裏切られたと感ずるのは無理もない。併し――敢て憲政會の爲に犠牲の側を取るのではないが――一概に之に由て憲政會を憲道無視の公敵と斷じ去るのは亦あまりに早計の嫌でもある。

我國の政論界には自ら二派の傾向がある。一は純粹な理想的標準から現狀を勝手に評論するもので、固より其說の實際に行はるべきや否やを意としない。二は與へられたる政界の實勢を基とし之を如何に運轉すべきやを說くもので、從て時に因循姑息な微温的論議の觀を呈することもある。政治はもと白紙に字を書くやうなものではない。かの超越的政論は乞食に向つて完全な榮養を勸說するやうなものだ。實際的政論としては何處までも與へられた材料に拘泥するの外はないのである。斯んなことを念頭に置いて加藤內閣の貴族院操縱を觀たならば蓋しまた思半ばに過ぐるものがあらう。

如何に其の不合理を證明されても、また誰が何と云はうと、元老も貴族院も共に政界に於ける儼然たる一大勢力に相違ない。だから西園寺詣も必要であれば貴院の操縱も打ッ棄てはおけぬ。斯んな者共を相手にするのが惡いといふは 始めから政權に手を染めるなといふの勝れるに若かず。苟くも政閣に起つ以上、何等かの方法に於て減殺の對策を講ずるは當然である。故に貴院操縱その事を以て加藤內閣を難ずるは間違つて居ると思ふ。是非の判斷の鍵は寧ろ彼此握手の結果として現るゝ今後の成績にある。

尤も握手の結果研究會及公正會の誰彼が 政務官の椅子に就いたと いふことには多少の不平がないでない。けれども此點に於て特に責めらるべきは實は與へたものよりも與へられたものである。併し之等は些細の問題だからどうでもいゝとする。只注視すべきは今後この兩者は如何に影響し合うかの一事である。加藤內閣が貴院に蟠まる頑陋の見に制せられて必要な新施設の鋒先を鈍らさるゝことなきや否や。又はあべこべに內閣に採用した人材を通じて其政見を十分貴院に諒解せしむるに成功するや否や。之等を今後の發展に徴して吾々は始めて此點に關する正しい判斷を新內閣に加へ得るのである。（八、九、千虎俚人）

中央公論



第四十年第十號
秋季大附錄號
第四百五十二號

文明史家としてわが國に於ける
ジャァナリズムの特徴と傾向とを考察す

田中王堂

一　豫備考察

總じて言へば、現代人の缺陷は、隨つて、彼等の惱みは、彼等が近世文明の志向を理會せず、又、理會しようと努めず、纔かに其れの皮相の實利を使用しようとして、知らず識らず之れが誤用と惡用とに墮するに至つたところより生ず

るつてあろう。わたくしのこの宣告は、今日、地球の表面に生息するあらゆる文明國民に對つて下されたのであつて、彼等の中で最も完全と目せられるものと雖も、この嚴正なる宣告の對象たることを免かれることは出來ない。されば、いろいろの行き掛りと事情とより、他の或る文明國民に比して遙かに近世文明の志向を理會する長養と訓練とを缺くに拘はらず、遙かに急速に、盲目に其れの實利をのみ使用することを強要され來たつたわたくし共日本國民が、現代人に共通なるこの缺陥と、惱みとを比較にならぬほど多くの程度と雜駁なる樣式とに於て、わたくし共自身の缺陥とし、惱みとして居ることに何等の不思議もない。實に、わたくし共日本人が現に有てる缺陥と、現に體驗しつゝある惱みとは悉とくわたくし共が卓越して近世文明の志向を理會せず、徒らに其れの實利を使用し來たつた當然の結果である。

古代生活と近代生活との間には尠なからざる相違が見出だされる。然し、其等の中の最も顯著なるものの一つは、古代生活に在つては、其れの諸の機關の間の關係も、交渉も、響應も、平然として互に反對するものを容れ、其等をして共存せしめたほど散漫であつたのが、近代生活となつては、其等はだんだんに親密さと、纖細さと、敏感さとを増して來て、そこには、人をして坐ろに、其等の機關は或は永恒に、例へば、ライプニッツの單子の想像、若しくは、華嚴の因陀羅網の比喩に依つて、暗示される狀態を趁うて其れに近づきつゝあるのではないかとの空想に耽らしめるものがあるのである。

近世生活に於ては、其れの機關の一つに起る主たる特徴は、それぞれの機能に應じて適當に其れの樣式を變じ、其れと交渉し、協同する他の機關に依つても其等の特徴として取り入れられるのが一般の傾向である。かういふ事實からして、近世生活に於ては、普通に政治上の主張として受け取られて居るデモクラシイは、同時に、嚴密なる意味で學問上の、及び、藝術上の主張であることは、普通に學問上の精神として理會されて居る實驗主義が、同時に、嚴密なる意味

に於て政治上の、及び、藝術上の精神であり、普通に藝術上の理想として憧憬される象徴主義と雖も、人間文化の最後の見地よりすれば、同時に、嚴密なる意味で、大した無理をしないで、政治上の、及び、學問上の理想であらねばならぬことと同一である。熟練せる前世動物學者は偶ま地中より發掘された前世動物の枯骨の一斷片の構造より演繹して正確に其の動物の骨格の全體を再現することが出來ると言はれて居る。現代生活の孰れかの機關の一斷片だにあらば、後に來たる文明史家は、さほど熟練せずとも、其れより容易に完全に現代生活を組織するあらゆる機關の各と其等の相互のはたらきとを如實に再現することが出來ると言ふのが現代生活の特色を爲して居るところのものである。

昔は、おのれの弟を殺しながら、神に彼れの所在を尋ねられた時に、『自分は弟の番人でありますか』と空嘯いた人物もあつた。今日に到つては、苟くも一つの協同生活を營む各々のメンバアは他の總べてのメンバアの番人であり、間接と直接との相違の程度こそは無限にあるが、孰れかの一人の行爲に對しては、總べての人々は之れが責任を分つべきであるとの意識と自覺とを有つて來た。そして、彼等の交渉は主として其の協同生活の機關たる彼等の專門、若しくは、職業のヴエヒクルを通して爲されるが故に、若し其等の機關の孰れかの一つに一般文化の反映として或る缺陷が顯現するならば、其れは同時に或る形と勢とを以て總べての機關に潜在して居るのであるから、其等は其れに對してそれぞれ或る風に、程度に、責任を有たなければならない筈である。結局、そこにあるものは唯一つである。たゞわたくし共は殊別的と一般的との二つの見地よりこの一つのものを觀察することが出來る。そして、さうすることが多くの場合に於て便利である。若しわたくし共にして殊別的に其れを其れが顯現した一つの機關の中に剔位すれば、わたくし共は其れを症狀と呼ぶが、若しわたくし共にして一般的に其れを總べての機關の上に擴衍すれば、わたくし共は其れを疾患と呼ぶのである。症狀は個發的事實である。疾患は精神的構造である。さうであると言つて、其等の孰れにしても

わたくし共に取つて、[illegible]たるの價値に[illegible]はない。しかし、[illegible]、わたくし共[illegible]に至つては多大の相違がある。理論的に疾患の如何なるものであるかを判斷するにしても、又、實際的に如何にしたなら ば其れの禍害を取り除き得るかを攻究するにしても、總じて之れが目安となるものは症狀であらねばならぬ。わたくし共は、獨り、症狀の發動を通して疾患の性質を知り、獨り症狀を對治することに依つて疾患を芟除することが出來るのである。

斯くして、社會生活を全體として改造する方策としてわたくし共が實際に利用し得る方法は、其れの症狀の特徴に隨つて、社會生活の機關の各を改整して、其れをして其れの本來の機能を高揚せしむることの他には一つも無いのである。

現代人は、その中でも特にわたくし共日本人は、一つの最も恐ろしき死罪を犯しつゝある。それは、さきにわたくしが宣言した通り、折角彼等の祖先が無數の時代の連續を通して經營し、完成して來た尊き遺產を繼承しながら、其れを冒瀆して居ることである。彼等は近世文明の志向を理會せずして、徒らに其れの實利だけを使用して居る自然の結果として、今日のところでは、彼等にして强烈に近世文明に生活しようと努めれば努めるほど、ますます彼等は其れの形體に拘束されて其れの本來の理想を沒却して生活することになつて居るのである。

わたくしはこゝにわたくしが語つて居る事柄の意味を一層詳しく說明せねばならぬ。

正しく視、正しく考へる時に、事實として、知識は必然に眞の智慧よりの分化でなければならず、智慧の陶育と、指揮とのないところに眞の知識の成長し、はたらく筈はないが、現代人の情操は、行動はベエコンの平凡に表れる意見を裏書きして、彼等は近世文明の供給する知識は、出來るだけ多く之れを享樂しようとしながら、其等の一つ一つが、及

び、其等が全體として明白に彼等に啓示する智慧を受用しようとしないのである。智慧が智識に分化するまでは、其れは纔かに形式的の氣分。若しくは、欲求であつた。實質的の生活の道具となつたのは、其れが知識に分化してからのことである。然し、智慧が知識化されて、青天白日の下に何等の神秘も殘さないものとなると、これまで久しい間智慧を神秘のものとのみ視、さう視ることに依つて始めて智慧を尊崇することに慣れた人間がそのやうに知識化された智慧に慊らず、さういふものを智慧として受け取ることの出來ないのには相應な事情がある。現代人は知識の形と作用とに於て、今日までに人類が達し得た文化が與へ得るものとしては最勝の智慧を所持しながら、彼等は知識の外に、上に、猶ほ依然として、獨立した或る形と作用とを有つて存在する智慧を索めるの空想と不聰明とを敢てして居るのである。智慧と知識との關係に關するこの理會の錯亂は分業と協同との關係に關する理會の錯亂と其の類を同うし、其の結果を同うする。知識にしても、分業にしても、決して其等自づからに悪いものではない。通例、皮相に知識の弊害と見做されて居るものは、其の實、當然其れの發達に假定されねばならぬ智慧の力を無視して知識を理會しようとすることより生ずるのであることは、恰かも其れと同じ程度に皮相に分業の弊害と見做されて居るものは、其の實、必然に其れの成立と增進とに含まれて居る協同のはたらきを不問に付して、分業を理會しようとすることより生ずるのと等しきものである。

「知識は力である」とベエコンは揚言した。如何にも、知識は力である。然し、其れ以上に道理でもあり、道德でもある、否、同時に道理であり、道德であるにあらざれば力たることも出來ないのである。然るに、近世人は知識と力とを同一視するに急にして、道理や、道德のヴエヒクルを其れの外にあると彼等の想像した智慧の中に求めて來た、現に求めて居る。

實に、[illegible]に從つて一變せられる[illegible]、わたくし[illegible]に於て[illegible]の、二つの潮流であるかう。そして、其れは、二つの異なる[illegible]に存在する[illegible]に於て[illegible]現し、相續する。今日汎く世界を見渡したところ、其れの政治に於て、[illegible]に於て、道徳に於て、教育に於て、藝術に於て、學問研究の方法に於て、驚くべき程度の錯誤と愚行と無智との見出だされないと謂ふところの文明國と云ふは一つもない。そして、わが國の如きは其等の中の最も甚だしきものである。其等の數を爲して居るものはいろいろあるが、其等の因たるものに至つては、斷じて一つであつて、其れは其等の國々が揃ひも揃つて近世文明の志向の如何なるものであるかを理會せず、又、理會しようとも努めずして、徒らに其れの實利のみを使用することに關係して居ることにあるのである。されば、其等の缺陷を匡正し、併せて、後來其れの缺陷に類するものの續出を杜絕するの道は、この悲しむべき傾向を轉換するの志を抱き、又、さうする實力を有する人々が擧つて新たに彼等の理智を濶開にし、彼等の情操を純粹にし、遙かに高き地點に立ち、遙かに濶き視野を開いて、未だ曾て一度も試みられない風に、程度に、哲學的にと言しく文明史的に、人間の根本性情と文化の終極趨歸とに照らして、近世文明の發動と意義とを解釋することに依つて、そこに始めて、久しく近世人が踏襲して來た其れの俗務的處置を超越して、其れの豫言的意義を發揚することにあらねばならぬ。現に現代人として生活して居る者で、或る程度にまでは、或る風に、理論的にか、實行的にか、近世文明の處置に携はつて居らないものは一人も無いわけである。然しながら、此等の無數の人々の總べては、其れの實利の使用に滿足して、（まゝそれに漠然たる不滿足を感じながらも）卓然として其れの志向を吟味し、さうして發見された志向に照らして、其れの實利の使用を醇化し、精神化し、統一化しようとする者の一人も出現しないことは不思議である。特にわたくしが不思議としなければならないことは、世の思想家、若しくは、指導者を以て自任し、他稱せられる人々ま

でが、學者、政治家、教育家、藝術家に論なく、近世文明を論評するも、呪咀するも、悉とく其れの眞志向を捕捉し得ず、暗中に模索しながら、さうして居ることである。彼等にして理會のこのレヴエルに徘徊して居る間は、彼等が如何なる與説を唱へ、如何なる改造を圖り、如何なる政策を執るとも、其等は眼前の事件の彌縫と、補綴とに止まるべきであつて、畢竟するに、第二義的、若しくは、第三義的以下のものであらねばならぬ。其等は到底近世文明の方向を轉換するに與かつて直接に大した効能も、感化もあるものではない。

一日本人として、特に其れがわが國に於て現に取りつゝある樣式と傾向とに依據して、現代生活の缺陷が如何に遠く、且つ、深く知識と智慧との乖離、即ち、近世文明の實利の使用と、其れの志向の理會との扞格に相因するかを指摘し、さうすることに依つてわが同胞をして彼等の環境と、能力と、要求とを、標準として、總べての國民に先立つて、斷然清新にして自由なる見地の上に近世文明の解釋と改造とを創めしめる思料を提供しようとするのが本論の目的である。そして、其れには、現在する或る一つの機關のはたらき振りを觀察し、批判することが最も適切な方法であるとわたくしは考へたのである。何故ならば、孰づれの機關にでも見出だされる缺陷は、其れに特有なる機能に隨つて屈曲されつゝ、わたくし共の生活一般に含まれる缺陷が代償的に、暗示的に表現されて居るからである。

其等の機關の中でも、最も露骨に、最も克明に、最も一般的に、わたくし共の生活を、善い意味に於ても、惡い意味に於ても、近世文明的に反映し、描寫し、註釋して居るものとして、わたくしは之れが代表をジャァナリズムに取ることに一段の興趣を感ずる者である。

して見ると、この論文はジャァナリズムのメディイウムを通して、わたくしに依つて為されるわが國の現代生活の文明史論であり、文明批評である。

一　先づ近世文明の志向を闡明す

わたくしからすれば、近世文明は全體として、即ち、公平に、精細に、其れの効果を清算し、總合して、これまで人類に依つて企てられ、建設された種の文明の中で當然とされて最も勝れた、言ひ換へれば、最も精神的なる文明である。其れが人類の到達し得る文化の最後の様式でないことは明らかであるが、彼等がそこに到達するには他に一つの途もないことは更らに明らかである。それほどに近世文明は人間文化の全系列に於て一つの重大なる、否、最も缺くべからざる項を作して居るのである。さうすると、一旦近世文明の如何なるものであるかが決定される以上、勘なくとも、理論的には、現在わたくし共の生活の機關としてはたらきつゝあるあらゆるものの依據する標準を立てるといふこと、その標準に随つて、其れのはたらき振りの功過と優劣とを判別するといふことは、大して困難な仕事ではない。何にしても近世文明の志向を體得して眞に其れの發達を助成して居るものは功があり、優れたものであつて、其れの志向を全然體得するところがないがために、正面より其れに反對するか、さうでなくとも、纔かに其れの質利の使用け に淫する結果、其れの正當なる發達を阻害するものは過あり、劣つたものであるのである。かういふ事由からして、わたくし共は先づ近世文明とは如何なるものであるか、近世文明に依つてわたくし共は如何なることを理會すべきか、如何なることを理會すべからざるかを篤と吟味するところがなければならない。

近世文明の發詳の地たる西洋に於てさへも、前世紀の後半より近世文明を非難する人々は往々にして見出だされた。今世紀に入りて以來、特にあの世界大戰を一劃期として以後、近世文明を呪詛する人々は洋の東西に亙つて急に其の數を增し、其の聲調を激越にして來たのである。此等の人々の中には詩人とし、思想家とし、人道の教師として等く世人

より賞讃と、尊敬と、信頼とを受けて居る者のあることをわたくしは知つて居る。然しながら、わたくしからすれば、彼等は他にどれだけ優れた資格を有つとも、彼等は、彼等の受けた氣質や、彼等の生れた國の傳統や、彼等の馴された教理や、彼等の修め、且つ、從事して居る専門より自づから來たる偏見の囚となつて、尠なくとも近世文明の評價に關しては、正大にして聰明なる見地に立つことが出來ないのである。彼等は口を開けば、忽ち、近世文明を物質的と卑下して、古典より、若しくは、純乎たる想像より彼等の精神的と思惟するものを拉し來たつて、其れに對立せしめるを常とする。然し、苟くも人間の根本性情に徹し、文化の終極歸趨に徹して、彼れの永久の進行の中に的確に近世文明の意義を求める人にして、誰れ一人として彼等が精神的と獨斷するものに比して、其れが比較にならないほどに精神的であるの事實を洞察し得ない者があるであらうか。畢竟するに彼等の態度が物質的であるからである。彼等の理智は雜駁であり、彼等の情操は粗硬であるがために、近世文明の中に彷彿する種のやうな繊細にして、而かも、的確に、エコノミカルにはたらく理想主義は到底彼等の認識するところとはならないからである。詳しくこの間の消息を語るならば、近世文明の實利はたゞ其れの志向の發動に過ぎないから、前者は獨り後者の啓沃と、支持と、指揮とに依つて、始めてそれの機構と併せて其れのはたらきとを全うし得るのであるが、彼等はその深密なる關係を見落して、やゝもすれば輕率に近世文明の實利を其れの志向より切り離して、其れを近世文明そのものの全體であると誤認し、誤解するからである。

わたくしは世間に滔々たる俗人の俗見を排して、飽くまでも近世文明を以てこれまで人間によつて著想され計畫された種の文明の中で、最も精神的のものであると判斷し、稱揚する者であるが、それならば、わたくしがさうするいにはそれだけの根據があるか。其の根據は果して傍人をして納得せしむるものであらうか。

人間には近くに幸福なる人々で、幸福なる生活を實現する力を有つにも拘つて、手段に於てはたらいてゐつて求が賦與された。之れがために、幸福なる状態を實現するには長い歲月に亘つて、試みと誤りとの高き代價に依つてだんだんに訓練され、啓明された叡智の力を俟たなければならないに拘はらず、人間にはこれを待つ忍耐も思慮も缺けて居た。彼れは事實の缺乏を補ふのに想像を以てするに急であつた。そして彼れは事實と想像との間の區別が付かなかつた。彼れの想像力は二つの方角に向つてはたらいた。其等の一つは或る方法に依つては到底期待することが出來ない。が、期待してはならない結果の其の方法に依つて實現されることを期待したことである。例へば、魔法や捧げ物に依つての如く。他の一つは、實際には混沌のみで、まだ秩序の何等の曙光も見えないのに、既に秩序は王位に即いて令を四海に布いて居るとしたことである。例へば、纔かに氣分の統一が、しばしば直ちに完全なる客觀の統一と見做され、受け取られた如く。然し、斯くの如き安價な幸福なる狀態や、其れを實現する方法は、早晩、冷酷なる事實と衝突するに及んで、おのれの中に反省を起し其れの形態と意義とを變更せざるを得ない。但し、さうするのに二つのプロセスが考へられ、そして、事實取られたのであつた。孰づれのプロセスが取られるにしても、想像力の性質を變形し、其れの應用の範圍を制限して、其れをして智力としてはたしかめることには大した相違はないが、さうして出來た智力を主として性情の陶冶だけの其とするのは其等の一つであり、さうすることと、併せて境遇の整頓を圖るのは他の一つである。性情と境遇とは普通の認識に隨つて、人間の生活を組織する二つの成分とされて居るものであつて、生活するといふことは此等の二つの成分が或る風に交渉することを指すのである。されば、生活して居る以上、主として性情の陶冶だけに意を注ぐと言つても、さうする中には必然に境遇の整頓の効もおのづから或る程度にまで舉つて居らなければならないわけである。然しながら、此れと、始めから性情の陶冶と境遇の整頓とを綜合して明確に生活の統一が計畫される

との間には其の成り行きに於いて多大の懸隔が生じなければならない。主として性情の陶冶を目的とすると、兎角行爲の結果を輕んじて其れの動機だけを重んずることになる。性情の陶冶と併せて境遇の整頓を目的として、わたくし共は始めて等分に行爲の結果と其れの動機とを尊重する見地を取ることに至るのである。

性情の陶冶だけを努めて、境遇の整頓を努めず、結果を價値評價の埒外に置いて動機だけを價値の對象としては、何人が如何ほど邪を避けて正に就き、醜を滅じて美を増さうと志しても、彼れの力は纔かに生活と行爲との半分を感化するに過ぎないことは言ふまでもない。世に道德の教師たり、カルチュアの導師たる者はこの苦しき矛盾を知覺するがために、何時かおのれを醇化し、醇化して、彼れの感化の及ぶ部分だけが生活の重要分子である、其れの及ばない部分は生活の不重要分子であるから、そんな部分に關しては其れを感化しようなどと考慮を煩さず、其れの存在やはたらきを蔑視し、無視すれば、するほど、人間としての威嚴を加へ來たるのであると、終には確信するに至つたのである。

大體、このやうなものが、久しい間、古代及び中世を通して其の勢威を逞うした過去文明の生活樣式及び生活理想の輪廓である。其れの生活を統一する方針の積極的ならずして、消極的であり、さうする手段の實質的ならずして、形式的であり、最後に、さうする根本信條の經驗的ならずして神秘的であるのを其れの特徴とする。さきにわたくしの擧げた一般に近世文明を物質的として非難し、咒詛する其等の詩人や、思想家や、社會改良家はこんな生活樣式理想に依戀し、其等を永久不變のものと確信するところから、近世文明の其等がいろいろの點に於て此等と扞格し、擯斥するところ[illegible]ために、一向に其等を近世文明の缺陷、若しくは、弊害と想像し、其の想像を續けて居るのである。

實に近世文明は既に其れの首唱者であり、同時に、其れの創造者と言はれないまでも、少なくとも、其れの暗示者であつたフランシス・ベエコンの説明からしても解かる通り、かゝる生活方針や生活理想に見切りを付け、其等に優れた

許らしきものとして其等に取つて代らしめようとして出現したのであつた。其の主張するところは甚だ簡單なことである。つまり、生活と行爲とを組成する二つの成分の中で、過去文明が閑却し、沒却した一半を當然其れが占めなければならぬ地位にまで恢復し、他の一半と同格に其れが役目を認識し、其れの要請を擁護しようとするだけのことである。一層適切に事實に即して語れば、普遍なる生活を實現する態度として性情の陶冶と併せて境遇の整頓を努め、正しき行爲を完結する條件として、動機の如何を評價すると同時に、結果の如何を評價することを怠るまいとするだけのことである。

今日に至るまで、幾世紀の間、道德の名を以て行はれて來たものは、その實、道德ではなくして超越道德であつた、若しくは、彼岸道德であつた。近世文明の溌剌たる希望と光輝ある使命とは其れを實際生活にまで呼び戻し、不思議にも永久にそこに宿る蘇生力と匡正力とに依りて、開闢以來始めての事件として其れを單なる道德にまで更新せしむる一事にかゝて居るのである。

超越道德、若しくは、彼岸道德を更新して、其れを單なる道德となす！象徴して近世文明の一切の努力はこの事業を完成することに集中されて居ると言つてもよいくらゐである。然し、近世文明は、今日のところ、漸く其れに着手したばかりである。隨つて、其れの最も勇敢にして最も聰明なる傳令使と雖も往々其れの意味を取り違へることを免れない。今、二十世紀も既に其れの四分の一を經過したのであるが、誰れか未來に向つて開かれた其れの無際限のヴィスタを通して、其れに含まれた無限の意義を判讀し、色讀し得るであらうか。

若し人ありて近世文明がこれまで人間に依つて計劃され、建設されたあらゆる種の文明の中で、最も優れて精神的たるの證據を求めるならば、其れに對しては、個人として、社會人として、國際人として、人間の有てるあらゆる欲望は、それぞれ其れの特殊性と複雜なる關係とに從つて、始めて明斷なる理會と、公正なる評價と、同情ある取り扱ひと

を受けることになつた一事を端的に擧げるだけで十分である。この自然の結果として、他の種の文明にあつては、到底調和出來ないと思惟され、隨つて、不調和は其等の關係に關する永遠の理法であるとして取り殘されて來た人間生活の內容を形造るさまざまな存在や、事實や、制度や、意見や、情操や、學說や、信仰は其れの視界が廣まり、其れの活動の様式が自由となり、自然となるに隨つて、漠然と形而上學的詳說の上でなく、明確に實證的理論の上から、個性を一つの中心點として發動する改造的、改造的興味より調和されることになつた。若しくは、其等の根本性質に於て調和され得るものと假定することは合理であるとされることになつた。

ギゾオは彼れの『歐羅巴文明史』の序論に於て、近世文明の特徴を摘出して、其れをして東洋文明に反撥せしめたのであつた。彼れの意見に隨へば、總じて、東洋諸國に於ては、政治上の、若しくは、宗教上の在るものが絕對の權力を以て全社會を支配し、威壓して居る。社會の總べての機關は、何よりも先さに、彼れの幸福と威嚴とのために存在するのであるから、民衆の生活のためにはどんなに利益あり、意義あるものでも、苟くも其れが彼れの幸福と威嚴とに抵觸する嫌ひあるものは、彼れの權力に依つて其等を壓迫して、其等をして發達を遂げしめない。この政策の結果として、社會の總べての機關はたゞ、彼れの制度、若しくは、教權を讃美し、謳歌することを目的として存在することになる。是、東洋文明の專制的色彩を以て極めて單調なる所以である。之れに反して、西洋に於ては、夙に政治にしても、宗教にしても、其の他の孰れの機關にしても、獨り絕對の特權を逞うして、他のあらゆる機關を凌駕し、壓迫する地位や機會を掴むことは不可能になつた。そこで、人間の本來の欲求を滿たすために社會に出現し、發達する總べての機關は、それぞれ、おのれの使命に忠實に成長することが出來る。其等の中には互に衝突し、矛盾するものも少なくはないが、社會の母胎は互に矛盾し、衝突するまゝに其等の總べてを包容する。其等は異なる興味や、利害に依つて相牽制し合ふため

に、時代に此等の諸力の一方にも偏せず、互相に牽制して其の發達を妨げしめることになつた。更に、近世文明が東洋文明に比して遙かに複雑であり、遙かに豐富であり、そして、遙かに其の各個の美を擴大にして居る所以である、といふのである。

皮相に觀察すると、ギゾオのこの東洋文明と近世文明との對比は事實に當つて居るやうにも思はれやうが、一層深く考察すると、正鵠を失して居ることが解かる。東洋文明に就いてもさうであるが、特に近世文明に就いては尚更さうである。どうしてわたくしは彼れの意見をかういふ風に批評するかといふならば其の理由はかうである。

表面はどうであらうとも、社會生活の異なる機關の各は殆ど互に沒交渉であるほど、異なる修養と理想とに生きる異なる階級の人々に依つて運用される結果として、其等は其れの精神に於ては互に分離し、孤立して居るのが東洋文明の特徴である。之れに反して、協同生活の進化は、同時に並行して分化と協同との成熟となつて現はれる傾向があるが、西洋に於て、其れの統一がだんだんに外的權制に依つてよりは、內的要求と合議に依つて行はれるやうになつて以來、其れの機關は其の形體と作用とを特殊化するに比例して、其の關係と目的とを普遍化して來て居るといふ確たる事實がある。畢竟するに東洋文明に見出だされる同質は分立の同質であつて、近世文明の變化は一致に於ける變化である。

こゝでは當面の題目たる近世文明にだけ就いて一歩考察を進めることとしよう。

近世文明の特徴は、人間が尠なくも彼れの經驗に現はれる世界に於て、彼れは萬物の中心であるといふことを新たに自覺し、その自覺に隨つて萬事を處置して行かうと決心したことである。嘗てプロタゴラスは『人は萬物の尺度である』と宣言して大分後世より非難を受けたのであつた。然し、わたくしからすれば、こゝに『人』といふ言葉は、個人を意味するとしても、人間一般を意味するとしても、(當時に取つては)極めて大膽にして、極めて清新であつたこの宣言

そのものには何等の誤謬も含まれて居らぬとも解釋出來る。たゞ、彼れは折角この千古不磨の眞理を道破しながら、彼れには如何にして其れがさうであるかに徹する知見の缺けて居たのが彼れの過失であつた。彼れは人間の活動が分子的であることを證明しようとして、この命題を掲げたのであるが、人間にして最少限度にでも萬物に規範を與へて其れの尺度となるのには、理論的にも、實踐的にも、必然に彼れの活動は綜合的であらねばならぬ。然し、彼れの活動にして綜合的であるならば、彼れが證明しようとした事柄は、たちどころに破れて、其れの反對が證明されることになる。人間、即ち、總べての個人は理論的で、實踐的に、絶えざる綜合的活動の主體であり、運用者であるが故に、それぞれ、他の個人にも共通し、そこに彼等と共に協同し得る限りの世界を組織することが出來るのである。

實に近世文明は綜合的活動の主體として、人間が自分は萬物の中心であるといふことの自覺を得た時に、始めて其の端を發したと言つてもよい。人間は總べてのものの創造者であり、更新者である。人間が活動して居る限り、彼れの經驗内に於ては、彼れに取つて既に固定のもの、老朽のもの、沒交渉のもの、外的にして物質的のものは一つもない、あらう筈はない。彼れの生活を興味の發動する一つの中心とすれば、たゞ、あるところのものは其の中心點より末梢に行くに隨つて次第に知覺すべからざる程度の差を以てぼかされたる一つの經驗の宇宙を形造る幾多の要素の間に距離の遠近と關係の親疏と、價値の高下とがあるだけのことである。

近世文明はどうしてさうはたらくのであるか。何に依りてさうはたらく限りを得て居るのであるかと問ふ者があるならば、わたくしは、一言に、其れは科學とデモクラシイとを其れのヴエヒクルとして居るからであると答へるのである。わたくしのこの答は世人の多數にまで奇怪に響くであらうといふことをわたくしは十分に豫想して居る。其れに拘はらず、わたくしはこの斷定を固執する者である。わたくしからすれば、彼等がわたくしのこの斷定に對して意外の感

を懐くのは、[illegible]に、かゝる科學こそデモクラシイ[illegible]宇宙に關して[illegible]てゐるのに過ぎない。彼等とても日本に科學の目的が經驗の宇宙に於て、理論的に事實を發見するにあつて、デモクラシイの目的が人間關係に於て、實踐的に不等を確立するにあるくらゐには理會して居る。然し、こゝに『事實』といふ言葉と『不等』といふ言葉とを如何に解釋すれば、其等にどれだけの内容を盛れば、始めてこの命題に依つて計畫される意義を完成するのであるかに至つては、彼等は些しも商量するところはないのである。苟くも科學とデモクラシイとが人間の智慧と德とが其れの進化の頂上に達した後、最も美しき、最も自由なる、そして、最も十全なる生活樣式を創造しようとして、今日人間の心の奥底に潜む叡智と道德觀念とを最深に揮摧し、最熾に運用するために、彼れに依つて之れが最後の道具として工夫されたものである以上、わたくし共は事實と不等とに妥當の理會を與へることに十分留意するところがなければならない。この見地からすると、事實の意味は物質的にではなく、綜合的に取られねばならぬことは、**不等の意味も數量的にではなく、作用的に取られねばならぬと同樣である。こゝでわたくしが語つてゐるものゝ意義を一層不明に開張するならば、經驗に入り來たり、其れの要素を形造るものは、**其れの起原や性質の何たるを問はず、それぞれ、其れの個性と價値とを尊重しながら、一つの系統の中に（若しさうすることが人間として永久に不可能ならば、）少なくとも出來るだけ少數の系統の中に組織したものが科學の窮極目的とする事實である。この意味に於て電子や、原素や、植物や、動物が事實となるやうに、美や、善や、約束や、犯罪や、外交や、文化や、國民性も事實となるのである。又、あらゆる狹義に於けると等しく、あらゆる廣義に於て、一つの協同生活に關する總べてのメンバアの幸福と彼等の間の鞏固と相助との增進のために、各のメンバアに特有なる聰明と才能の適應性とに随つて、彼等を公正に評價し、適當に利用しようとするのがデモクラシイの終局目的とする不等である。

かういふ風に、事實、及び、平等といふものを理會すると、此等は人間性の最も鮮明なる發動の最も完全なる樣式として、其れが發動するに隨つてこれまで他のあらゆる事情の下に於ては、啻に事實の上で互に乖離し、反對して居たのみならず、理解や情操の上でも到底調和すべからざるものと見做されて居たいろいろの興味や、利害や、意見や、學說や、制度や、關係や、文化や、國民性が、其れのはたらきの感化に依つて相接近し、合致するのは極めて自然であると思ふ。例へばこゝに一々其の變遷の經過の眞相を說明しようとは思はないが、たゞ思ひ浮ぶまゝに、大した秩序もなく此等の一二を舉げて見ても、個人と社會との如き、一つの國民の文化と他の國民の文化との如き、自己と他人との如き、現在と過去との如き、現實と理想との如き、美と實利との如き、若しくは、其れと道徳との如き、美術と工藝との如き、天才と民衆との如き、其の他、徳と力とや、靈と肉とや、其の他、何と何との如き——此等のコンヴエンショナルな對立の項と項との關係は、共存的の關係、依立的の關係、發展的の關係、精神と發動との關係、若しくは、內容と樣式との關係に過ぎないのであるから、其の實、其等には何等の對立する根柢なきのみならず、一方の存在、若しくは、はたらきは、他方の其等が伴つて、始めて成立するのであるの事由を看破し、力說する人士がだんだんに其の數を增して來た。然し、同時に、わたくし共は實際の事實として、世間に識者を以て自任し、他稱されながら、彼等の性癖なり、若しくは、教養より、若しくは、彼等の從事する所業より、若くは、彼等の屬する國の政治的、經濟的、乃至、文化的現狀より、此等の對立の或るものを組成する二つの項を全然到底調和することの出來ないものと主張し、そして、宣傳して居るのを知るのである。此れは世界の文化の進捗と人類の幸福とのために如何にも悲しむべき現象とせねばならぬ。

人間は幾千年の間、否、幾萬年の間、自分の欲求を、性格を全體として卽發し、運用する所以を有たず、纔かに其れの部分、部分をして同時に生ずる興味に反撥せしめて居たために、因に本能的に、慣習的に沈澱し、結晶した此等の對

さを一層高き調和と、一層すぐれた統一とに於て發揮し、結合することを目的と[illegible]とデモクラシイとに依つて理論的に、實際的に、實行的に、常に個人の生活の中に、[illegible]國際人と國際人との間に存在した偏見と、誤解と、反感と、敵對行動とを征服する[illegible]、[illegible]をこの地上より一掃することを目的として出現したのであつた。然し、近世文明の創造者であり、維持者であつた近世人の子孫は、今日のところ、全然其れの實利の使用に沒頭して了つて、如何にして其れの本來の志向を發揚すべきかの努力を閑却して居るのである。否、如何にすればさうすることが出來るかの術を忘却して居るのである。

わたくしは、この事だけは、如何に強き語氣を以て何遍唱導しても、わたくしは猶は之れが不足を氣遣ふのであるが、近世文明はこれまで人間に依つて工夫されたあらゆる種の文明の中で、苟くも地球の上に生を享けた總べての個人の性情と才能とをして最も自然に、最も自由に、最も豐富に、そして、最も絢爛に其れの成長と開發とを遂げしめる文明である、隨つて、あらゆる意味に於て最も優れた文明である。然し、わたくしのこの觀察は其れの志向が完全に發揚されて居る場合にだけ當て嵌るのであつて、徒らに其れの實利が誤用され、濫用されて居る場合に當て嵌らないことは勿論である。

『さらば何を食ひ、何を飲み、何を着んとて思ひ煩らふな。……まづ神の國と神の義とを求めよ、然らば凡てこれらの物は汝らに加へらるべし。』政治の刷新を企てる前に、經濟組織の變更を企てる前に、女子の社會地位の解放を企てる前に、自國文化の獨立と向上とを企てる前に、國際關係の改善を企てる前に、わたくし共は確かりと近世文明の志向を理會し、體得することを努むべきである。わたくし共にしてまづ近世文明の志向を求めさへすれば、此等のものは自然にわたくし共に加へられるといふことはない。此等のものを實現するには過去の行き掛りと現在の狀態とを無視する

ことの出來ない複雑なる實際問題として多くの聰明と、更らに多くの忍耐とが必要とされる。それにしても、近世文明の志向を理會し、體得することは、此等の問題に關してわたくし共が正しき態度とアップレションとを準備するための唯一の鍵であることだけは爭はれない。

世界の當來大勢に於て孰れが最も優れた邦家であるべきか、其れは言ふまでもなく、最も的確に近世文明の志向を將ゐて此等の問題を解決しやうとするものであらねばならぬ。わたくしが不思議でならない一事は、社會の耳目を以て任ずるジヤァナリズムが西洋に於てもさうであるが、特に、日本に於て近世文明の志向を閑却して居ることである、閑却して、何ほ、此等の問題の解決に或るものを貢獻しやうとして居ることである。

三　ジヤアナリズムの本質は何ぞ、機能は何ぞ

わたくし自身に取つて不思議な經驗は、否、經驗の不思議な缺乏は（見聞を廣めることに就いてわたくしの不精にも依ることであらうか、）このジヤァナリズム横溢の、横行の現代に於て、わたくしはまだ一度もジヤァナリズムの本質と機能とに關して、何人からも纏まつた意見も、説明も聞いたことのないことである。然し、此れはわたくしに取つて別に大して不便な事柄ではない。何故ならば、哲學の研究や、文化の考察に關してわたくしが常に取つて居る態度から考れば、假りにわたくしが外人に依つて啓された、若しくは、邦人に依つて啓された出來合ひのそんなものを幾つ聞いて居たとしても、其れを自分のものとして受取るまでには、體驗と反省とを以て其れを十分に、吟味し、自分が納得出來るやうに其れを改造して了はなければ止まぬであらうからである。

さて、これならばジヤァナリズムは何んであるか、其れの本質と機能とは如何に理會すべきであるか。

今日のところ、ジャアナリズムは新聞と或る種の雜誌とをそれの舞台とする。新聞と或る種の雜誌とはジャアナリズムがおのれの精神を發揮するに利用するために工夫したヴェヒクルである。新聞、若しくは、或る種の雜誌はそのためのヴェヒクルとして工夫したジャアナリズムは一つの志向とし、若しくは、一つの思想として、無論、其のヴェヒクルに先行する。新聞や雜誌が或る樣式を以てまづ存在し、其れの樣式に依つてジャアナリズムの精神を制限するのではなくして、ジャアナリズムの精神がまづはたらいて、其れがおのれのヴェヒクルたる新聞や雜誌の樣式を創造したのである。ジャアナリズムと新聞や雜誌との間には不可分の關係はあるが、一方はエンテレキイとして、他の一方はエネルガイヤとしてであることを知らねばならぬ。

コンコオドの哲人エマソンは彼れのどれかの文章の中で、當時の人々が安價な文字の臚列されて居る新聞に讀み耽り、其れがために大切な時の多量が消耗されて居ることを慨嘆して、其れを當時の病弊の一つに數へて居ると確かに記憶する。あの時代を今日に比すれば、新聞の數も其等の各の發行部數も少數であつたに相違ない。隨つて、其れの社會に及ぼす勢力も甚だ微々たるものであつたに相違ない。其れに拘はらず、エマソンは其れに對してあのやうな嘆息を洩らしたのである。若し彼れをして現に世界の總べての文明國を通じて新聞が經濟的に、文化的に、社會に於て占めて居る地位を見せしめたならば、如何に驚愕と非難との嘆聲を發するであらうか。然し、わたくしから言はせると、エマソンが新聞に對してあのやうな偏頗な評價を下して居たのは、つまり彼れが他の多くの謂ふところのカルチュアの戰士と等しく、大處高處に立つて新聞を人間文化永遠の行程に於て一つの重大なる役を演じつゝある近世文明の機關の一つとして其れの內具意義を洞察することが出來なかつたために他ならない。

總じて、或るものが一つの大なる傾向の一つの機關として出現するか、若しくは、さういふものの變形として出現

し、そして、其れが或る期間を通じて榮えるならば、其れがどういふ種のものであらうとも、わたくし共は一概に其れの存在を卑下し、其れの價値を無視することの出來ない、又、さうしてはならない理由がある。若し其れが全體として全然價値の無いものならば、始めから出現する筈はないし、たとひ出現したにしても、暫らくでも多數の人々の要求を滿たすことは出來ないわけである。されば、一旦其れが出現して、或る期間に亘つて多數の人々の要求を滿たす以上、わたくし共はいろいろの行き掛りや事情の下に、其れの側面に於ては代り代りさまざまな誤謬を醸し、さまざまな過失に陷ゐるといふことは當然あり得ることとして信ずるが、其れの本體に至つては一つの志向とし、思想として合理のものであらねばならぬと信ずる者である。「或る時に或る人を欺くことは出來る、或る時に總べての人を欺くことも出來る。然し、總べての時に總べての人を欺くことは出來ない」とリンコルンは言つたさうだが、この觀察は多くの事件に當て篏めて、確かに妥當である。わたくし共はこれまでジアァナリズムが近世文明を通してだんだん其れの總べての機關に喰ひ入り、微妙に其等の組織を變更しつゝ成長し、發達して來た事實に鑑みて、相當に其れの意義を認識しなければならない。

然し、或るものが在るといふことは一つの事柄であり、其のものがおのれの意義を反省するといふことは又一つの事柄である。そして、反省は根源に觸れてはたらき始めるのを常とする。概して從來生活の機關として顯著な役目を勤めるものでも、その始め衝動の刺激より、若しくは、功利の必然より知らず識らず結集し、發生し、そして其れが他の機關と衝突するか、其等自身の中に矛盾を生ずるかして、變化した事情の下に同時に、當初の目的を逸することが困難になるまでは、無邪氣に其れの成長と膨脹とを續けて行くものである。然し、こゝには詳しく說明し、證明して居られない理由からして、さうして結集し、發生し、成長し、膨脹して行く總べてのものは、其等が人間の生活に屬する

機能である限り、即ちこゝにわたくしが指示した科目の凡べて、若しくは、僅かなに注意するに就きては、そこで其等の苦しき科目を無事に切り抜けるために、其等の科目の性質を会得して、おのれ自身の組織を改ることも必要となる。其等をして其の功を遂げさせるものは反省である。

わたくしは世界に於てジヤァナリズムが近世生活の最も特徴ある機關の一つとして強大に其れの各部分を感化し、支配して居ることを知つて居る。其れが如何に強大にさうして居るかといふことは、ジヤァナリズムを排除しては、如何なる風にでも近世生活の存在の想像出來ない一事に徴しても明瞭である。然し、わたくしがこゝに問ひたいことは、其れが近世生活に取つて如何ほど特徴あり、如何ほど強大なる感化と支配とを與へて居る一つの機關であるにしても、其れは嘗ておのれの機能に對して反省したことがあるか、或は、現に反省しつゝあるか、どうかといふ一事である。其れが嘗てさうしたことは一度もないし、現にさうしても居らないとわたくしは斷言する。確かにジヤァナリズムは現代に於て最も強大なる勢力の一つである。或るものの勢力が強大になれば、なるほど、其れをして正しく、そして、有意義にはたらかしめるにはそれだけ多くの反省が必要とされる。ジヤァナリズムの缺陷の一切は其れがこのやうに強大なる勢力であるに拘はらず、其れをして正しく、そして、有意義にはたらかせるに相當する反省の其れに伴はないところから胚胎するのである。

新聞は十八世紀に於て英國の文壇の二名家、アディソンとスティイルとが共同して『スペクテイタア』と名付けた小判四頁のものを發行したのに濫觴すると言はれて居る。其れに盛られたものは右アディソン、スティイル二人のものした輕妙洒脱な小品文であつて、其等は主として當時の流行社會の風潮を描し、諷刺したものであつた。『スペクテイタア』は早朝ロンドンの有識階級の家庭に配附されて、彼等の朝餐の食卓を賑かしたのださうである。ほんの遊戯氣分を以て

始められた新聞が僅かに二世紀を出てない中に、このやうに驚くべき社會的、國際的勢力とならうとは、其れの創設者の到底夢想することさへも出來なかつたことであらう。

總べてのものに就いて、其れの發達の經過と、其れが最後に占め得た價値とは別のものである。決して、此等の二つを混同してはならないとは、一部の學者のよく力說するところである。そして、この考へは純然たる遊戯氣分を以て始められながら、終に、生活の最も有力にして最も須要なる機關の一つとなつたジャァナリズムにも至極恰當にあて嵌まるやうに見える。然し、事實の眞相はどうであらうか。文藝復興の運動に其の端を發した近世文明の精神の發動の一つとして、ジャァナリズムは既に附物として社會生活の内に蟠踞して居たのであつた。この氣運に促がされながら、十分には其れの意義を判斷することが出來ずに、「スペクテイタア」のやうなものが案出されたのであると見るのが、最も適確に事實の眞相を掴んで居るのであるとわたくしは理會する。更に亦、ジャァナリズムはあゝいふ風に起り、あゝいふ風におのれのして居ることの何んであるかに對しては、殆ど半意識、無意識の有様で成長して了つたのであるから、其れが强大となり、巨大となるにつれて、おのれの機能と天職とに關する理會と自覺とに缺くるところを生ずるのは寧ろ怪しむに足りない。今は近世文明そのものの意義を反省して見なければならない時期であるやうに、ジャァナリズムの機能、若しくは、天職をも反省して見なければならぬ時期である。

歷史を敍事詩の形に於て産出した時代は小邦の雄大なる事蹟に關係を感じて居た時代である。其れを戯曲の形に於て産出した時代は、劇作が最も光榮ある職業であつた時代である。更らに、其れを政治史の形に於て産出した時代は、政治といふものがあらゆる興國の上に其れの威嚴を漲らして居た時代であつたといふ意味のことをヘエゲルは言つた。此れは如何にも眞理に合つた觀察である。此れと同様な觀察は、否、此れより遙かに適當な觀察は、これまで生活がだん

だんに取つて來た自己批判の方法の變遷、若しくは、變化に就いて考へて見たい。

太古より二十世紀の今日に至るまで、自己批判の方法も、其の時代、時代の生活様式と、生活理想とに從つて、大分に變化して來た。即、若しくは、君主の命令と賞罰とを其れの最初の様式として、自己批判が生活統一の道具の一つとなつて現はれて以來、悲劇、ダイヤログよりトリイティイス、エッセエの形を經てジヤアナリズムに至つたのである。ジヤアナリズムは科學とデモクラシイとが生活を支配して居る時代に於ける自己批判の最後の様式として、さきにわたくしが相當に留意して說明して置いた意味での事實と平等とを其れの全體に、其れの各細胞に普及し、導入することを其れの唯一の機能とすべきである。わたくしから言はせれば、現代に於てジヤアナリズムの存在の理由は之れを措いて他に一つもあり得ない。實に、無礙の知見と、博厚なる同情と寛潤なる氣分とはジヤアナリズムの生命である。ロオマの詩人テレンスは、『何でも人間に關するものならば、わたくしは其れに對して無頓着でありたくない』と彼れの喜劇『フォミョウ』の序文に於いて揚言して、聽衆の喝采を博したといふ話であるが、この意氣は直ちに移し以てジヤアナリズムそのものの意氣であらねばならぬ。然し、さうであるのは、散漫なる探訪者、報告者としてではなく、一つの確乎たる目的を有つ醇化者、統一者としてであらねばならぬ。

今日、やゝもすれば、ジヤアナリズム、若しくは、ジヤアナリスティックなる言葉が多くの場合に於て輕蔑の意味を以て用ひられて居る、ジヤアナリズム、若しくは、ジヤアナリスティックと言へば、常に生硬、雜駁等を意味する上に、時としては厚顔、輕薄、冷酷、煽動的等も意味することに取られて居る。然し、此等の性質はジヤアナリズムと離すとの出來ない其れの内具性質であらうか。ジヤアナリズムには此等の消極的の資格の外に、他のあらゆる機關では到底代用することの出來ない、そして、其の限りに於て、他のあらゆる機關の有つて居る第一等の資格と拮抗するに足る其れの積極的

存格は無いであらうか。「人類の恩惠者としては、シエクスピヤよりも綿操り機械の發明者の方が優れて居るかも知れない。」と或る人は言つた。若し世の中にこの意見を聞いて、卒然として、この比較を以て倫を失するの甚だしきものとする者があるならば、彼れはまだ人類の幸福の最高標準から、行爲の比較價値と云ふものを少しも考へたことのない者であるとせねばならぬ。詩に依つて人の心に美しき心像と高尙なる想像とを呼び起し、それで生活のレヴェルを高めるのと、木綿製造の費用を減じて、綿と綿布とを普ねく廉價に供給し、それで生活のレヴェルを高めるのとは、兩者の間に其れの方便に關してこそ大分の相違はあれ、終局の目的に於いては、互に塡補し、融通し一致して居るのである。成る程、或る種の文章に比すれば、ジヤァナリズムの文章は生硬であるかも知れず、或る種の思想に比すればジヤァナリズムの思想は雜駁であるかも知れない。然し、たとひ其等がさうあるとしても、さういふ風に其等のものとジヤァナリズムとを比較して、輕佻に兩者の價値を定めようとするのは、ジヤァナリズムの本來の機能を理會しないものである。ジヤァナリズムは他のあらゆる機關が取つて代はることの出來ない、その存格を以つて居るのである。其れは他でもない。其れは、生活をさきにわたくしが說明した意味での事實と不等、即ち、作用的に理解されたる事實と、人格的に理解されたる不等とをして自由にはたらかせ、交際せしむる事務とするがために、どこまでも其れの總べての個所の意義に忠實でありながら、同時に、近世文明の志向に依りて暗示されるところに隨つて、其等を選擇し、排列し、其れが混亂して無差別に俗眼に映ずる樣式よりも、其れを一層眞實の樣式として其れを描寫し、暗示するところにあるのである。そして、確かに此れは今日に於ては他にあらゆる機關の爲さざるところのものであり、爲すことの出來ないところのものである。詩は日常生活を組織する重要と不重要との分子を識別し、不重要なる分子を打ち棄て、重要なる分子だけを取り上げ、其れを發揮するといふ故を以て、「詩は歷史よりも一層眞で

ある『ミアミストオテレス』にいつたいである。然し、詩と歴史とが[illegible]統一すること[illegible]目的である[illegible]
價値の技術といふやうなことには、こゝでは一切論じないこととして、生活を組織する要素の中より重要と不重要とを識別し、不重要を打ち棄てて、重要を取り上げるといふだけに就いて言へば、詩と同樣に歴史もして居るのである。しなければ歴史とならないのである。たゞ、歴史と詩とは異なつた目的を有つて居るがために異なつた方法を以つてこれをするだけである。知覺の世界に入り來たる總べての事件や出來事を何等の選擇なく、殘らず取り入れるといふことになれば、歴史は愚か、如何なる種の日常經驗さへも出來るものではない。ジャァナリズムには、詩とも異なり歴史とも異つた、然し、其等と同等の權威を有つた目的がある。ジャァナリズムはこの目的に隨つて、詩や歴史と同じ程度に、場合に依つては、其等以上の重要と不重要との標準を立て、其標準に隨つて經驗の上に評價と選擇を施すのである。この意味に於て詩が一つの藝術であり、歴史が一つの藝術であるやうに、ジャァナリズムは一つの藝術、而かも、其れの實際の仕事に關しては、遙かに困難なる一つの藝術である。何故ならば、其れは現代に棲息する總べての人々をして、最も澄明なる意識を以ておのれの生活の一部として世界の現狀と進行とを理會せしむるがために、世界大に擴げられた最も複雜なる、そして、最も氣儘な材料の上に選擇と醇化と統一とを施し、最も簡明に、而かも、最も尚鋭に近世文明の志向を暗示する一つの全體を創造することを其れの目的としなければならないからである。之れを要するに、ジャァナリズムの標的は最も含蓄ある意味に於て、生活全體に關する象徴主義の藝術を創造することでなければならぬ。——

こゝにジャァナリズムの性質や機能に關してわたくしが語つて居るところのものは、或る人々からは、特に現實の經驗に富み、現實の感覺に鋭敏であると言はれる人々からは、一遍の空想を語つて居るものと取られることを十分に承知して居る。然し、わたくしは決して空想を語つて居るのではない。近世文明の志向に依據して、この一つの資格を缺く

ならば、全然、ジヤァナリズムをして其れの存在の理由を失はしめるとも言はなければならない其の資格が何物であるかを暗示し、制限し、闡明し、敷衍したのである。無論、こゝにわたくしの語つて居るところのものはジヤァナリズムの現在の狀態ではない。のみならず、今日のまゝでは、近き將來に於ては、其れに依つて占めらるべしと豫想することさへも困難な狀態である。然し、苟くもジヤァナリズムにして、これから先き、生活の最も重要なる機關の一つとして存在し、其れの役目を果して行かうとするならば、この資格だけはジヤァナリズムの有ち得るいろいろの効用に加へて、或は、其等の効用をして新たに頂點的自覺を有たしめるために、其れをしてぜひとも有つに至らしめなければならない資格であるとわたくしは說いて居るのである。

然し、わたくしがこのロゴスの世界より現實の世界に眼を轉ずる時、大して失望もしないが、そこにわたくしに遺憾に堪えないいろいろの事相を見出だすのである。ジヤァナリズムは其れの起原や機能から言つても、他のあらゆる機關に率先して新らしき酒を造ると同時に、其れを盛るために新らしき嚢を縫はなければならないのに、新らしき酒を造り、新らしき嚢を縫ふことを自づから怠るのみならず、往々にして他人の作つた新らしき酒さへも、舊き嚢に盛つて居るのである。現在に於けるジヤァナリズムの最大缺陷は精當たる理會と確固たる信念とを人類の永遠の進行に於て特異の轉機を成した近世文明の上に置き、常に其れの發展の現象として綜合的に、理想的に新らしく起るものの意義を解釋すると同時に、舊くより存して來たものの意義を改釋することを怠つて居ることである。如何にさうすべきかを全然知らぬことである。彼等自づからが未來に於て自由社會の出現の先驅者として何人にも先んじてさうするの責任あることの自覺を有たぬことである。何を證據にわたくしはこの言を爲すか。證據は數へ切れないほどある。然し、其等の中で最も顯著なるものは、若しくは、其等のものの一つは、歐洲戰亂の勃發に先立つて、其れの經續中、そして、其れの終

[illegible]十二月八日に至るまで、ジヤアナリズムは、[illegible]決して眠つて居なかつた、現に眠りつゝあるどころでは[illegible]の扶つか、永遠に亙つて人口の膾炙の材料の臭いたるあの戦亂を未發に防がうと努めたか、其れが勃發した後、其の戦亂を其れの出現の最小限度に限らうと努めたか、其れの終結してより今日に至るまで、交戦國民の間に[illegible]と、國際情操と、國際道徳とを涵養しようと努めたか、現に努めてゐるか。あの戦亂に關して或る新聞記者は、[illegible]の陰謀を摘發したであらう。或る新聞記者は某外交家の私事を公表したであらう、或る新聞記者は逸早く前面線を踏み越え、正確に敵情を偵察した勇敢を自づから誇つたであらう、或る新聞記者はヴェルサイユ會議に於ける謂ふところの三大國、若しくは、四大國の使臣の間に發生した表裏の情僞を報告して其の機微を穿識させたであらう。然し、彼等がどのくらゐ善く其等のことをしても、（無論、するからには、惡くするよりも善くする方が結構ではあらうが）若し彼等にしてジヤァナリズムの能事は全くそこに盡きたと考へるならば、わたくしは彼等の其れの機能に關して理會するところの餘りに蒙昧であつて、其れの天職に對して期待することの餘りに低劣なるに驚かさるを得ない。ジヤァナリズムは、平生、世界に於ておのれの地位の獨特に優越なると、おのれの勢力の強大なると、おのれの組織の尨大なるとを望んで、天下の事、一つとして其れが望んで得られざるなく、其れが期して達せられざるなきの概を示して居るではないか。わたくしは固より其れに取つて斯くの如き矜持の十分なる根柢あることを信ずる者である。それならば、何故自由とカルチュアとの使徒として、其の強大なる勢力と其の尨大なる組織とを利用して、汎く民衆を教養し啓發して、たとひ貪欲なる實業家、野心に滿ちたる外交家あつて禍心を藏するとも、彼等をして再び乘ずるの機なからしめるの舉に出ないのであるか。世の舊典型に屬する政治家や實業家を向ふに廻して、對等に人類の解放のために戰ふことをせず、彼等の思にも付かぬ一擧手、一投足の從順なる探訪者、報告者たるに甘んじて居るのは、餘りにおのれの天職を輕ん

し、目睹して居るものではないか。

『政治は現在の歴史であつて、歴史は過去の政治である』とシイレエは言つたが、『カルチュアは現在の歴史であつて、歴史は過去のカルチュアである』といふのが、だんだんに事實の眞相を得たことになつた。政治とカルチュアとのこの價値の轉換を民衆に通告し、其の由來と意義とを說明するのは近世文明の嫡子たるジヤァナリズムが今日に於て課せられて居る最初の、そして、最後の任務である。何故ならば、民衆にして能くこの間の消息を理會した時に、新時代の曙光は始めて曉の黎明を破つて眞紅に東方に現はるゝであらうからである。

四　わが國のジヤァナリズムの種々相、種々弊

順序を追うて、こゝにわたくしはわが國のジヤァナリズムの現狀と傾向とに關して考察を試みることになつた。斯くして、わたくしはさきに標榜して置いた通り、この論文の中心興味に達したわけである。わたくしは既に近世文明の志向に就いて考察するところがあり、ジヤァナリズム一般の性質と機能とに關して考察するところがあつた。然し、其等は悉とくわが國のジヤァナリズムを考察するに正しき視點と標準とを準備するためであつたのである。

わたくしは刻下に於けるわが國のジヤァナリズムに就いていろいろと缺陷を見出だすのである。然し、同時に、わたくしは、其等の殆ど總べては、たゞジヤァナリズムに特有の色彩に屈折して、代償的にわが國の文化が現に惱みつゝある缺陷を反映しつゝあるに過ぎないと理會して居る者である。されば、普通の意味に於て其等の缺陷の創造者として獨りジヤァナリズムを責むる意志は毛頭わたくしにはない。然し、世の中に缺陷一般といふものは有り得ないのであつて、有るところのものは、悉とく或る特殊の機關のはたらきとして、其れの特殊の作用に依つて特殊に色づけられたも

のにおいてあるならば、[illegible]
缺點は指摘され、說明されねばならぬ。さうすると、ジャーナリズムの如きは、[illegible]として、格段の注意を以て、何よりも先きにさうされる理由がある。されば、若しわが國のジャアナリズムに於ける缺陥の何たるかが的確に指摘され如何にしたならば其れが匡正され得るかが精當に說明され得たならば、わが國の文化の覺醒と時間とに於て其れの効果は他の或る機關に對してさうしたよりも其れの効果に於ておのづから倍蓰するものがあるであらう。

わたくしは、先年、わが國のジャアナリズム界の巨人徳富蘇峰氏のものされた『新聞記者の心得』とも呼ばるべき小品文を讀んだことがある。所說は簡單なものであつたが、それでも氏の作たるを辱かしめず、如何にも奇警な考察に富んだものであつた。其の中で新聞は足で書かなければならない、手で書かうとしては失敗に終るに定まて居るといふ意味のことを氏に特有の機智を以て面白く語つて居た一節を今でも記憶する。彼れの力說して居るところのものの趣意は何等の註釋を要するまでもなく明瞭である。新聞は社會の出來事を出來るだけ正確に、そして、出來るだけ敏速に報道するのを其れの存在の理由として居るのであるから、筆まめも結構であるが、其れに作なふに足まめがなければ新聞記者たる者の資格に於て大いに缺くるところがある、否、新聞記者たるの資格を全然闕いて居ると言ふのである。

わたくしは、『新聞は手で書くものではない、足で書くものである』と告げて居る德富氏の精神とユウマアとを十分にアツプレシエエトし、尊重する。然し、其れに拘はらず、『否、新聞は手で書くものでもなく、足で書くものでもなく、頭で書くものである』と生眞面目に言はうと欲する者である。手で書くとか、足で書くとか言つても、其れ相當な思想の要ることはおのづから含まれて居る。すれば、わたくしが故らに頭で書くものであると標拔するのは、今日、ジャアナリズムの失敗の大部分は、其れの性質と機能とから、當然其れに費やされなければならないだけの思想が其れに費され

て居らないことに起因するの事實に、世人の注意を引からとするためである。わたくしのこの意見は西洋に於けるジャァナリズムの弱點にもあて嵌ることであるが、特に、わが國に於ける其れの病根にあて嵌るのである。實に、わが國に於けるジャァナリズムの胚胎する有の弊害は其れがわが國の文化の特徴より、西洋に於けるよりも幾倍も思想をはたらかす必要があるのに、反つて西洋に於けるよりも遙かに以下の程度にしかはたらかされて居らないところに化醸されて居るのである。

如何にも正確に、そして、敏速に社會の出來事を報道するといふを以て新聞の最も重要なる、若しくは、其等の一つとすることに對してわたくしは同意する。然し、わたくしからすれば、たゞそれだけでは、決して其の事柄の全部を語るものではない。ほんの其れの一部たる手順の外形に過ぎない。其れは事柄の價値の一部を決定する一つの要素に過ぎないのであつて、其の價値の大部分を決定する要素は他にあるのである。この要素は其の出來事に意義を與へて、其れの內容を完成する洞察そのもの、知見そのものであらねばならぬ。概括に言へば、この世の中には、二人の者に全然同様に現はれる中性的の性質を有つた事實といふものは一つもあり得ない。其れの性質は、それぞれ、其れを考察し、理會し、鑑賞する人々に依つて始めて構成されるのである。「物を在るがまゝに見る」といふ言葉がある。然し「在るがまゝ」といふものは別に特定した性質を有つて居るものでないから、若し物を在るがまゝに見るといふことが實踐すべき態度であるならば、畢竟するに、其れは其れを見る總べての他の人々が容認するであらうと思はれる風に其れの性質を組織するに過ぎないのである。かういふわけであるから、こゝに二人の探訪者があつて、彼等は同じ程度に敏速に、そして、彼等が各考へるところに隨つて、出來るだけ正確に、其の事件を報道するにしても、彼等の各に依つて解釋される、即ち彼等の各に依つて組織される其の意見は彼等の性格差(personal equation)からいろいろの點で異なり、隨つ

て、其の事件に関する真実のを追つて行くにも困難を来するわけである。そして、この人は、[illegible]その人の智力や、情操や、教養や、反省の多寡の如何から生ずるのである。

かういふ風に考へて来ると、わが国に於て優秀なるジャァナリズムを構成する要素は、敏速にして、正確なる報道に加へて、わが国の獨特の文化の由来と、現状と、アスピレエシ*ンとの見地より、總べての出来事を偵察し、其れに安當の意義を與へる聰明であらねばならぬ。そして、概して言へば、今日、わが国のジャァナリズムが最も缺乏し、そして、新聞記者自身をも其の中に入れて、總べての人々が其の缺乏をわが国のジャァナリズムに取つての最大の缺陥と意識して居らないのはこの聰明ではあるまいか。

植物を採集して、其等を材料として一つの學説を組織するまでの手順を、通例、採集、分類、假設、證明の四つの段階に區分する。然し、實際に於ては、或る時期に於て、一つの種の活動が止んで、他の種の活動が始まるといふやうにはたらくものではない。始めより終りに至るまで、一つの目的に依つて支配される單一なる活動がだんだんにおのれを發展しつゝ、續いて行くのである。たゞ其の活動が内部からの膨脹とし、成長として、前の形式を破つて、新らしき形式を取つて行くだけである。されば、採集は既に證明の豫勢に依つて支配され、證明の方向は採集中の些細な出来事に依つて決定されるのである。

この考察はあらゆる種のわたくし其の活動にあて嵌めて、事實の眞相を穿てるものとして受け取られ得るものである。さうすると、事實の觀察、若しくは、報道は、其れが一見したところ、冷静に、中性的に、非人格的に爲されても、其の實は、其の事件の内容を組織し、其の意義を解釋する一種の批判であらねばならぬ。あらゆる新聞の報道が、其れを觀察し、報道する人の人格や、教養や、知見や、興味に依つて支配される一種の構成たるを免がれないならば、

わが社會の出來事に對して如何なる種の批判をはたらかせ得る人々をしてわが國のジヤァナリズム運用の局に當らしむべきかは、實にわが文化の發展に取つて重大なる問題である。

維新以來、謂ふところのわが國の文明は、如何にしたならば最も合理的に西洋の文明を以て固有の文明を増長し、如何にしたならば、最も經濟的に固有の文明を以て西洋の文明を適要し得るかを大して考慮するところなく、沒選擇的に、沒反省的に、沒批判的に、思ひ付くまゝに、手當り次第に移植し、模倣したものゝ長い歳月の間に亂雜に、盲目に衝突し、摩擦しながら、自然に重なり合ひ、結び付いて出來上がつたものである。全體の意義の統一を一切不問に付して、たゞ部分部分の實利だけを目的とした仕事はわたくし共の自發性と創造力とを窒息さして、反つて、實利そのものまでをも失はせることになつた。わが國のジヤァナリズムはさういふ氣運の間に輸入され、若しくは發生したものであるから、さういふ氣運の一部として、其れの特徴を反映して居るのに別に不思議はない。

今は總べてが清算され、切り代へられねばならぬ。

近世文明の繼承者、發展者としては、わたくし共は確かに後進國である。後進國であるが故に、わたくし共はいろいろの點に於て一層幸福である。わたくし共は先進諸國の成功と失敗との豐富な經驗を十分に利用することが出來ると同時に過去の行き掛りに束縛されることが少なく、將來に新らしき計畫を試みる勇氣と餘地とを多く有つことが出來る。

近世文明はあらゆる種の文明の中で最も自由に、最も合理に、そして、最も自然なるものとして、如何なる個人にしても、如何なる國民にしても、苟くも人間性の最も完全なる發達を遂げようとするならば、必らず一度は其れに由りて將來の大成を圖らなければならぬものである。然し、近世文明は一つの精神であり、一つの態度であり、一つの輪廓であるに過ぎない。其れは孰づれの個人、若しくは、國民をも一つの型に入れようとするものでないのみならず、あらゆ

ければ止まぬものである。即ち、若しくは、國民性として十分に發揮し發達するの餘地をなくすことにならしめた。それは自己の發達と發揚とを擁護する者は近世文明である。されば、近世文明を採用したために却て、若しくは、國民性が却つて自發性と創造性とを失なつたといふものがあるならば、其れはまだ近世文明を自分の要求に應じて利用するほどに、其れの志向を體得するに至らない結果である。

如何なる國民が最も光榮ある將來を有ち得るであらうか。其れは、これの固有文明を以て近世文明の志向の正統なる發達を助け、近世文明を以て其れの固有文明の精神の健全なる發揚を遂げることほど、兩者の間に密接なる近親性の見出だされる幸運の下に棲息する國民に限られねばならぬ。若し象徵主義といふものを解して、其れは、經驗を中心として語れば、單純なる經驗の中に出來るだけ複雜な意味を發見しようとし、實行を中心として語れば、出來るだけ簡素な方便を以て、出來るだけ豐富な結果を齎らさうとする生活理想であるとするならば、（ここでは十分に其の理由を說明しては居らないが）象徵主義は近世文明が結極到着しようと志向してゐる境地であり、隨つて、其れに到着しないならば、近世文明に取つて龍を畫いて睛を點ぜざるに等しきものであると同時に、わが固有文明は其れの規模に於ては人生全體の意義の解釋となるほど雄大なものではなかつたが、兎に角、其れの實驗し得た限りに於て象徵主義の其れであつたとすることが出來る。さうすると、『父の遺產を運用する者だけが、始めて其れを相續した者である』といふ意味に於て、近世文明が正しく其れの相續者を失なつて居る今日に於て、わたくし共日本人が血統からではなく、權利から、其れの相續者となることを企てるのを見て、其れを僭越の行、無謀の擧としてわたくし共を非難する者が、非難することを敢てする者が天下に一人でもあらうか。

或る時、或る青年が或る老成人に向つて、『わたくしは自分がこの世に生れ出ることの遲すぎたことをつくづく惱みま

す。總べての仕事は既に誰れかに依つて創められて居て、この世の中には最早やわたくしには一つの仕事も殘されて居りませんと嘆じた。その時、その老成人は、「然し、總べての人々の頭の上は永久に眞空である。あなたはそこにあなたの力量次第で、どんな仕事でも勝手に創められるでは無いか」と彼れに諭したさうである。優越と新奇とは全然離すことの出來ない二つの性質である。どんなものでも、後から生じて、前より存して來たものと同等に優越ならんとするならば、是非ともそれは新奇であらねばならぬ。されば、其れにして、前より存して來たものの樣式を追隨するのは、その行動に依つて必然に自づから優越するの途を塞ぐものである。其れの樣式を追隨しながら、尚ほ其れと優越を爭はうとするのは、到底實現し得べからざる事の實現を企てて居るのであるとのジョン・ラスキンの警告をわたくし共は篤と玩味すべきである。そして、この青年と等しく、近世文明は既に歐米人に依つて計畫され、完成されて了つた。其れに對して、わたくし共の爲し得る一切は、たゞ忠實に彼等に追隨し、僅々乎として彼等の計畫し、完成した近世文明を模倣し、採用することであると考へることを斷然止めて、近世文明の深化と、醇化と、清淨化とに關して、歐米人の頭の上は全然眞空であると豁然大悟すべきである。正しき意味に於て近世文明を發揚するといふことと、正しき意味に於て固有文明を完結するといふこととは、わたくし共に取つて、單一なる事柄であつて、又、さうすることがわたくし共に取つて意義あるやうに生存して行く唯一つの道である。

わたくし共は、今にして、宜しく氣分を清明にし、志操を宏壯にし、世界の大勢に對して高きをくゝり、自分の實力に對して見極めるところがあるべきである。

近世文明は夙に不自然に人間に依つて區分され、そして、一層不自然に其等の各の特徴として考へられて了つた生活の二つの作用たる現實と理想とを、一致させることを目的として來つたのである。現實と理想とを一致させることの外

に、近世文明の使命は一つも無いと言つてよい。それであるに拘はらず、今日に至るまでは未だ、さういふ世に出なかつたたな
かつたために今日までのところ、其れを實際に經驗したに、却時に隔つて居たのである。わたくし共日本人にとつては文明の
志向をはつきり體得し、其れのヴェヒクルたる科學とデモクラシイとの浸透を全般にまで開展し、其れの自然の結果と
して現實と理想との間の障壁を撤廢しなければならぬ。さうして出て來たる文明が、即ち、象徴主義の文明であるので
ある。かういふわけで象徴主義の文明の志向が正しく理會された時に、其れは如何なる意味でも、近世文明の前進に反
對したり、其れを阻止したりするものでなくして、其れを深化し、醇化し、淸淨化するだけである。

當來文明の導師たらんがために、わが日本は世界の文明諸國に先立つて、是非とも實現しなければならないとわたく
しが高唱する象徴主義の文明は、カアライルや、トルストイや、タゴオルや、スプレングラアや、辜鴻銘が考へるやう
に、近世文明を否定し、其れを掃蕩して、始めて實現されるものでは無くして、近世文明を批判的に、匡正的に、繼續
して行く間に、其れの內面より其れの外殼を破つて發動し來たる文明である。されば、象徴主義の文明の出現を促すと
言つても、何もわたくし共の社會生活が現在從事して居る一切の活動を中止することを必要とするのではないのみなら
ず、（勿論、實際に於て、そんなことの出來る筈はないが、）さうしては、反つて其れをして出現せしむる一切の材料と手
順とを失なつて了ふことになるのである。其れをして出現せしむるか、否か、其れを出現せしむるにしても、其の期を
早めるか、或は、其れを無期限の未來にまで延ばすか、否かは、如何なる精神で、如何なる樣式に於て、其等の活動に
從事するかといふ一事に懸つて決せられるのである。

いろいろの事實の中で、わたくし共に取つて何が最も大切なる權威を有つたものだと言つて、現實に增すものはな
い。然し、それならば何が現實であるかといふことになると、其れは普通に考へられて居るやうに單純なものではな

く、普通に決定され得ると考へられて居るほど簡單に決定され得べきものでもない。其れに對する人々の性格や、教養や、職業上の利害から、現實はいろいろ異なつたものとして受け取られる。然し、其等の總べては大した無理をせずして二つの型にまで分類することが出來る。其れを靜的に、沒理想的に考察するのと、動的に理想的に考察するのとの其等である。現實が此等の孰れかに依つて考察される結果、氷炭とまでは無くとも、非常に異なつたものが其れの內容と思惟されるやうになる。隨つて、其れに對する態度、其れを處置する方法に至つても非常に異らざるを得ない。如何なる時代にも、如何なる國民の中にも、そこに棲息する人々の此等の考察の孰づれかを取つて居たが、此れが典型的の實例をわたくし共は古代雅典に於けるソフィストとソクラティスとに於て見出すのである。荀子が性を惡と解し、孟子が其れを善と解したのも、結局は此等の考察の孰づれかを取ることから自然に生じた見解の相違である。孰づれの考察を取るにしても、もともと同じ現實を其れの對象として居るのであるから、それぞれ其れの有つて居る或る側面に當つて居ることは明らかである。然し、其の考察の中にはたらく深と、淺と、廣と、狹と、徹底と不徹底との相違のあるのは免れない。現實を靜的、沒理想的だけに考察すれば、矛盾や、爭鬪や、陰謀のやうな活動となつて現はれる其れの側面が、其れの全體として取られ、そして、さういふものから成り立つ其の全體は、他に何物をも俟たず、たゞ其等の活動で支持されると想像することになる。現實を動的に、理想的に、考察すれば、表面、其れはどんな見すぼらしい狀態にあり、そこにどんなに矛盾や、爭鬪や陰謀が横行し、跋扈しても、其等のために其れが解體に至らざる以上、其等に反抗して、其等よりも、一層力強くはたらいて居るものがあるに相違ない。そして、極言すれば其等の破壞の分子がそのやうに横行し、跋扈し得ると言ふのも、其等を監視し、其等を統制し、はては、其等を善導して居るそのものの感化であるに相違ないと理會することになる。現實を斷片的にしか考察して居らないといふ意味に於て、前のを現實の唯物觀

と云ふならば、[illegible]

さて、此等の二種の要素の中で、[illegible]前、其れは前のものではなくして、後のものであらねばならぬ。何故ならば、前の、即ち、現實の唯物觀に於て現實を構成する或る要素だけを抽象し、其等が到底現實を支持するものでないものであることが明らかなるに拘はらず、其等の價値を誇張して其等を其れの全體であると誤解するに反し、後の、即ち現實の精神觀は現實を構成する要素の一切を取り入れ、公正なるポスチユレエトの立場より其等の各に相當の價値を與へるが、其等の孰づれの一つにも相當以上の價値を與へないことに依つて生活の現狀と方向とを說明しようとするからである。わたくし共の生活を象徴主義の文明に導びくのは、現實の精神觀であらねばならぬ。

ジャァナリズムの當面の仕事は正確に現實を觀察し、敏速に其れを報道することにあることだけに就いては、何人も疑を挾まないところであらう。されば、わが國のジャァナリズムの努力の大部分が擧りてこの一事に注がれて居ることは極めて至當のことと考へる。たゞ、わたくしが、吟味して見たいと思ふのは、現實に關する彼等の理解である。これまでわたくしの見聞に觸れた限りに於て、現實に關する彼等の大數のものの理解は、わたくしがこゝに說明して居る意味に於て唯物的のものであつて、精神的のものでないかを大いに危ぶむ者である。

ジャァナリストに取つて、理想を有つことが必要であるか。わたくしは「然り、さうして、否」と答へようと思ふ。何故なれば、其れは理想なる言葉の解釋次第に依ることである。若し理想を有つといふことが現實に據らずして、其れ以外に其れを率ゐて行く或る力を求めることを指すならば、わたくしはそんなものは何人に取つても無益であるが、特に、ジャァナリストに取つては有害であると考へる。然し、若し理想を有つといふことが、現實をして其れの環境と實

質とを目安として、其れをして出來るだけ善くはたらかしめるために、其れの總べての關係の集合意義を發見し、更らに、其れを醇化して、其れを其の現實を指揮する一つの標準とすることならば、此れは何人に取つても有益であるが、特にジョオナリストに取つては必須にして缺くべからざるものである。何故ならば、かういふ理想があつて、始めて一見したところでは何等の目的もなく、何等の聯絡もなく、日夜混沌として出沒し、消滅するやうに見える社會の事相も、尠なくとも其等の顯著なものに至つては、かういふ理想あつて、始めて正當なるパアスペクティヴを通して、それぞれ意義と價値とは與へられるからである。

サア・ウオルタア・ラァレエが或る事件に座して獄屋に投じられて居た時に、或る日其の獄屋の窓から見えるところに殺人事件があつた。其れを目擊して居た彼れの友人たちは、代はる代はる來て其れの顛末を彼れに報告したのであつた。然し、其等は互に異なるのみならず、其れの孰づれもが彼れの見たところのものと一致しなかつた。そこで、この驚くべき出來事に打たれ、彼れはつくづく史實の眞を傳ふることの不可能なることを覺り、彼れが永年苦心して著想して居た歷史の計畫を斷然放棄したと言ひ傳へられて居る。然し、彼れにして眞に歷史が何物であるか、正しき歷史と呼ばれる歷史とはどの點に於て異なるかを知つて居つたならば、この出來事に遭遇したがために、反つて、彼れは歷史の著作に十分自分の手腕を振つて見る刺激を新たに得たであらうと思はれる。何故ならば、與へられた原料を一つの史實にまで作り上げるのは、現代の文化の中に生きることより得た智識と、智慧と、道德的情熱とに外ならないからである。此等のものが深くなり、廣くなり、盛んになれば、なるほど、其の出來事に對して、其等に依つて爲さるゝ解釋、若しくは、改釋はそれだけ客觀性を有つことになるのである。この點に關しては、個人の反省と體驗とに起り、終に、其れが吾人に共通なる客觀性を有つに至るあらゆる思想や運動と雖も其の經路と意義とに於て異なるところがない。

ジャァナリズムが[illegible]するのは其れの性質と重要さとに於て、正史が[illegible]事實と[illegible]同一であらねばならぬ。たゞ、ジャァナリズムの立つ基礎は遙かに廣汎であり、其れの取り扱ふ[illegible]に[illegible]である。其れが其等の間に關聯を見出ださなければならない興味の數は遙かに多く、そして、其等が互に抵觸する程度は遙かに強烈である。隨つて、其等のものから、厳密なる意味に於てジャァナリズムの事實と呼ばれるだけに價値ある事實を構成するには、遙かに博厚なる智識と、深遠なる智慧と、清澄なる道徳的熱情とが必要とされるのである。かゝる見解よりして、何人に取つても一個のジャァナリストたる資格を獲得することは、今日、あらゆる種の修養の中で最も困難なるものの一つであるとわたくしは言ふのである。然し、さう困難な修養であるが故に、それだけ其れを完成して、現在の文明の方向轉換の目的のために獨得な役目を勤め、顯揚な功績を樹てるのも生を現代に享けた男子の本懷であらねばならぬ。

然し、わたくし共が現下に於けるわが國のジャァナリズムに接近し、其れの特徴なるものを諦察する時、わたくし共は其れを如何に見出だすであらうか、其等の中には其れ自づからの存在の理由を全然裏切つて居ると思惟しないまでも、其れの存在の理由を明確に立證するためには、是非とも其れをして現にはたらいて居るとは異なつたはたらき振りを取らせなければならぬとわたくしが希望するものは含まれて居らぬであらうか。さういふものは確かに含まれて居るとわたくしは信ずるのである。其等はわが國のジャァナリズムの缺陷である。

此等の缺陷は近世文明の所産たるあらゆる他の機關に於て見出だされる缺陷と一様に、近世文明の志向を誤解したところから、若しくは、其れを十分に追窮せずして、夙に邪路に陷り、傍徑にさまよつたところから來たるのである。一層厳密に言へば、科學とデモクラシイとが要求するところに隨つて、（その意味の如何なるものであるかは、わたくしが

さきに十分に闡明し、解釋したところであるが）近世生活を改善し、改造する二大概念たる事實と平等との意義に徹しないところから來たつて居るのである。

つまり　其れの缺陷としてジヤァナリズムに課するところのものは、近世文明の所産とし、其れの最も透明なる道具として、近世文明に依つて創されたる其れの機能を標準として、其の標準とジヤァナリズムの現在のはたらき振りとの間の關聯に於て見出だされるものである。わたくしは斯くして見出だされるわが國のジヤァナリズムの缺陷が如何なるものであるか、其等が如何なる様式を取つて居るかを詳しく實際に就いて吟味するところがなければならない。

缺陷の一

孰れにしても、苟くもわが國の新聞の調子に親炙して居る者は、其れの政治に對する態度の馬鹿らしき程度にまで時代錯誤的なるに氣付かない者は恐らく一人もあるまい。こゝにわたくしは政治の機能を重視して居る事實を指すのではない。わたくしは舊時代に涵養された迷信に加へるに、新時代に化醸された卑俗にして輕佻なる興味を以てし、其れが政治と同様に文明生活に必要であり、随つて、其れの健全なる、そして、充實した發達を望むならば、政治と同格に待遇され、尊重されなければならない他の機關の存在や、はたらきが蔽されるまでに政治の權威と勢力とを誇張し、囃し立て居る事實を指すのである。

過去に於て一度は宗教がさうであつたやうに、政治もそこに存在し、利用し得るだけの武力をおのれの掌中に收め、絕對の權威を挾んで、他のあらゆる機關の上に君臨したものであつた。然し、人間の欲求が豐富になり、其等の各がだんだんにおのれの志すところを遂げ、おのれの本質を發揮することが出來て來るに及んで、其等は、生活の野を分つて

各々一つの團を建てることになつた。否、[illegible]とが保たれねばならぬから、もし彼等を的確にして、し彼等の間に一つの[illegible]ことになつた。さうして、さきに彼等の欲求がまだ幼弱な時代に方つて、彼等の上に[illegible]として權威を樹立した政治も自づからおのれの權力を制限して下つて彼等の聯邦の一つに加はつたのである。若しくは、さうする傾向を取り始めたのである。

トルストイやニイチエは人間性の完全なる發達に有害なるものとして、政治、若しくは、國家を否定した。マシユ・アアノルドやサンタヤナは其れの必要は認めないことはないが、政治よりも一層貴重なる生活機關、例へば、カルチユアの如きものが自由にはたらき、成長し得る境涯の保障として、若しくは、純乎として學問と、藝術と、宗教とより成り立つ一層優秀なる自由社會の出現のための中間手段として、政治の必要を認めるに過ぎない。つまり、彼等に在つては、政治の効用は消極的のものであつたのである。わたくしは政治に關してトルストイやニイチエの取つた態度に反對するのみならず、マシユウ・アアノルドやサンタヤナが其れに與へた解釋にも同意することは出來ない。わたくしは積極的に其れの重要なる役目を認識する者である。未來に於て人間の性情が無制限に發達して行くにしても、其れが今日わたくし共の逆睹ることの出來ない程度にまで一變されるといふことが豫想され得ない限り、今日、政治の滿たして居る職能を全然不必要とする時代の如きは到底出現しないとわたくしは斷言する。わたくしがこゝで語つて居る事柄の意味を一層具體的な言葉で言ひ現はすならば、多數の個人が集まつて一つの協同生活を營んで行く以上、其の協同生活の或る側面に於ては、彼等は協同作業を必要とするが、其の協同作業をして其れの最大効果を發揮せしむるには、其の協同生活を組織する總べての意思は其等の中に含まれる最優の叡智に依つて統一されることと、さうして統一された意思は其等總べての意思に依つて其の權威の承認される強制力を伴なふことが一つの大切な條件である。そして、協同生活が必然

に其れの特徴とする此等二つの條件は其れの形式に關してだけは文明の變遷につれていろいろに變化もしようが、其れの大體の輪郭に至つては、永久に亙つて存在するものであらうとわたくしは斷言するのである。協同生活に於ける合議意思の發動たる此等二つのはたらきを政治と呼ぶのである。

十八世紀の政論家たちは、政治に於て、個人の權利を保護する其れの消極作用だけを認めて、彼等の協同利益を増進する其れの積極作用を認めることが出來なかつた。その結果として、彼等は政治を必要なる惡と想像したのである。然し其の實は、協同利益を増進する意思の發動の一部として個人の權利を保護するはたらきが生ずるのである。かういふわけであるから、政治は人間にして永久に社交動物、若しくは、政治動物である限り、政治は他の機關では到底達することが出來ない程度に、人間を協同生活に訓練し、彼れに妥協と優雅叡智を修得することを教ゆる獨特の機關として、わたくしは十分に高く政治の價値を評定する者である。然しながら、將來に於て、政治が永久に人間の生活の上に有益なる感化を與へて行くのは、カルチュアの他の機關に伍して其れの一つの機關としてであらねばならぬ。若し政治にして、嘗て其れが生活の中に占めて居た絶對の地位を占め、不可侵の權威を以てカルチュアの他の機關の上に君臨しようとするやうなことを企てるならば、其れはカルチュアの他の機關のはたらきを障害し、カルチュアの一つの機關としておのれのはたらきを自殺するものである。政治はカルチュアの一つの機關として人間の生活に於て特有の役目を果たして居るのであるから、其れが當然價するだけに其れを尊重することは正しくあつて、奬勵すべきことである。然し、法外に其れの効能を誇大し、其れの性質からして到底爲し得ないことまでも、恰かも其れが爲し得る如く、若しくは、現に爲して居る如く鼓吹するのは誤りであり、排斥すべきことである。

政治は偉大なる藝術である。然し、其れは使用と分配との藝術であつて、創造の藝術ではない。政治は、其れが貴き

ものである限り、現にあるところのものを使用し、如何にして、今在るところのものに依つて、分配し、如何にして、其れを生產するものであつても、無いところの物を新たに創造することは出來ない。其れをなすのは藝術と、產業と、科學とだけである。わたくしし其が使用と分配とを司る機關として政治を尊重するのは善いが、其れを尊重する餘り、其れが、同時に、藝術や、產業や、科學を超えて創造までをもなし得ると空想するのは惡いことである。

政治が藝術や、產業や、學問や、教育や、宗教と等しく、其等がそれぞれ生活に於て一つの中心點を有つてカルチュアの機關となつて居るやうに、政治も其等と並んでカルチュアの一つの機關を作して居る以上、社會生活のエコノミイより、才能の適應性に隨つて藝術や、產業や、學問や、教育や、宗教の指導者となる者があるやうに、政治の指導者となる者のあるのは、別に怪しむに足らない。其等の人々に就いて才能の優劣はあるが、其等の人々の從事する機關の性質の相違に隨つて、人物の價値の相違のあらう筈はない。其の職業の種類の如何を問はず、最も多くの人格の欲求を代表し、最も優れて文化の進運に貢獻して居る者が、最も多くの價値を有つた人物であるのである。わたくし共は政治が生活のあらゆる機關の中で最も價値あるものであつて、政治に關はる指導者が最も價値ある人物であるとする傳統的迷信を民衆の情操より芟除せねばならない。

今日、わが國のジヤアナリズムの所爲を見るに、政治界の出來事、政治家の行動とさへ言へば、どんなつまらない出來事であり、どんな下らない行動であつても、其等の出來事や、其等の行動が日本國民の聰明を啓發し、彼等の幸福を增進するに與つて、どれだけの貢獻をするものであるかを尠しも商量するところなく、又、さうするだけの智慧も用意も持たず、一向にお祭り騷ぎと野次馬氣質とを以て誇張し、鼓吹し、宣傳するのは、民衆をして現代に於ける政治の意義と作用とに開眼せしむる道では斷じてない。

近世に於ける政治の絶えざる傾向と努力とはおのれをカルチュア化し、社會化することであつた。そして其れのこの進行の中に、人間解放の理想が盛されたのである。然るに、わが國のジャァナリズムは、二十世紀の今日に於て、この傾向と努力とを無視し、この大勢に逆行して、其れを非カルチュア化し、非社會化しようとして居るのである。

缺陷の二

わたくしはわが國のジャァナリズムの第二の缺陷として個性意識の稀薄を擧げなければならない。わたくし共日本人が國民として個性意識を缺乏することを其れの特徴の一つとして居ることは今に始まつたことではない。其れを胚胎した歳月は隨分長いものであつた。どうして、そんな好ましからざる、否、厭ふべき特徴がわが國民性の一部として胚胎されるに至つたか。わたくしは、わたくしが自信を以て説明し得る範圍内に於て、いさゝか之れが由來と事由とを説明するところがなければならない。

わが國は、未だ野蠻の域を脱しなかつた時代に在つて、既に三韓の文化や、支那の文化や、此等の二邦の文化を通して、印度の文化の輸入と移植とを受けたのであつた。勿論、當時のわが國の文化と此等の文化との間には、精緻に於て、規模に於て、完備の程度に於て、雲泥の相違があつた。素朴にして單純なるわたくし共の祖先は其等の文化の起原や、組織や、意向の如何なるものであるかを吟味することなく、多分、吟味することが出來ずに、一目して其れの複雜なる内容と整然たる樣式と、絢爛たる光彩とに眩惑して了つた。彼等の心の中には彼我の文化の相違といふことよりも、其等の優劣といふことが一層鮮明に、強烈に植え付けられたのであつた。斯くして、參考としてのみ、若しくは、刺激としてのみわが國の文化の純正なる發展を補助することの出來た其等の文化は、忽ちにして一向に模型とされ、範

[illegible]ることになつたためたに。從つて、其れの內容となつたことには[illegible]から。それの特異を商量する時は、何人にしても其れを一種の不幸と思惟しない者はあるまいが、其等の文化に、完成された形を以て、わが國の文化が殆ほ極めて幼稚であつた時代に於て來たつたものであるから、或るものの創造、若しくは、改造の必要の起る每に、自づからの苦心に依つて其等を工夫しようとはせず、直ちに其等の範を彼の土に求めるの習慣と依賴心とを養成したのである。斯くして、彼の土の政法や、道德や、產業や、敎育や、藝術や、學問や、信仰はわが國の政法や、道德や、產業や、敎育や、學問や信仰となり、彼の土の其等を外にして、わが國に於て其等の何物もないことになつた。兩者の間に交通と貿易との斷たれない限り、苟くも彼の土に於て其等のものの孰づれかに或る革新が起らんか、其れの波動は必らずわが國に於て其等に相當するものの上にをかれたのであり、又、苟くもわが國に於て其等のものの孰づれかの上に變化生ぜんか、其れの原型はまづ彼の土に於て工夫されたものに定まつて居たのである。事實、わが國の文化史は（多分、實際政治の一面を除き）尠なくとも、其れの樣式と理論とに於ては、彼の土の文化史の模寫であつたのである。

如何に想像と憧憬とに於て、わたくし共の祖先はこのやうに生活して行つたにしても、もともとわが國の民族性、若しくは、國民性は始めから三韓の其れからも、支那の其れからも、非常に異なつたものであつた。この炳乎たる一大事實は、如何にしても、どこにか其の鋒芒を露はさざるを得ない。三韓の文化と、支那の文化と、印度の文化との移植と模倣とを名としながら、固より其等の感化はあつたとはいへ、三韓の文化と支那の文化とがクラシシズムの文化であり、印度の文化が神秘主義の文化であるのに、わが國に於ては、彼等の手に依つて其等とは大分に異なつた象徵主義の文化が結集せられ、建設されたのであつた。象徵主義の文化が人間文化の永遠の行程に照らして、クラシシズムの文化

や神秘主義の文化に比して遥かに悠久なる意義を有することは言ふまでもない。然し、わたくし共の祖先はさうすることとを心懸けて其れを結集し、建設したのではなくして、さうすることを心懸けないに拘はらず、偶然に其れを結集し、其れを建設することになつたのである。わたくし共の祖先は始めより終りに至るまで、意識的には三韓の文化と、支那の文化と、印度の文化との渇仰者であつたに拘はらず、彼等は不意識的に其等の改造者であり、超越者であつたのである。

降つて今より六十年前、西洋の文化は威力と威嚇とを載せて、澎湃としてわが國邊に押し寄せたのであつた。わたくし共の父老が如何なる意氣を以て其れを迎へ、如何なる態度を以て其れに應接したかは記錄に詳かなるのみならず、或る人々に取つては、今猶ほ記憶にさへ明らかなるところであらう。さきにわが國が三韓の文化と、支那の文化と、印度の文化とを攝取したのは、言はゞ、自國の文飾のためであつたが、西洋の文化を採用したのは、自國の獨立を保障するためであつた。前回と後回との間に其れの目的に關してこれだけの相違のあるが故に、たゞ通俗の意味で、政治的に、産業的に、軍略的に、現代に生存し、發展するといふ意味だけにすれば、當時に於けるわが國の文化と西洋の文化との相違は、往時に於けるわが國の文化と東洋諸國の文化との相違ではなかつた。わが國が西洋の文化に逢着し、其れとの關係を決定するに方つて、過去の長き歴史に依つて馴致されたわたくし共日本人の性情の缺陷が暴露されたのみならず、其れが遥かに深刻なる事情の下に、遥かに擴大されて暴露されたのは、誠に止むを得ない。

あの事件あつて以後、既に六十年の歳月を經過した。六十年の歳月は、豐かな天分に惠れ、高貴なアンビッションに燃える國民に取つては、反省と創造とのために決して短かい期間だとは言はれない。然し、この期間を通して、彼等の後繼者に何を反省し、何を創造したか。彼等の為した總べては、為しつゝある總べては近世生活を生活すると稱しなが

ら、[illegible]に[illegible]に、[illegible]に、[illegible]に、[illegible]、[illegible]
して、現に居るのに過ぎないではないか。現下に於けるわが國民の政治も、[illegible]も、[illegible]も、[illegible]も、[illegible]も、[illegible]味も、流行も、一つとして其れを[illegible]ないものはない。

近世文明は個性の尊重、個性の助成を其れの標語として起つたものである。作用的の意味での本質を發見しようとして居る科學も、人材的の意味での平等を建立しようとして居るデモクラシイも、其等の最後の目的とするところはあらゆる存在の個性をして出來るだけ自然なる出來るだけ完全なる發達を遂げしめるにあるのである。近世文明の志向に徹すれば、何人にしても、個人として、若しくは、國民として其れの感化と啓發とに依つて、自然におのれの個性の特徴と大切さとに開眼されなければならない筈である。

外國に於て見出だされる、若しくは、新たに起るものは制度にしても、學問にしても、藝術にしても、主張や運動にしても、將に、趣味や流行にしても、一刻でも遲れんことを懼れて、最大速力を以て輸入されるわが國は世界のあらゆる文明國に冠たるものとせねばならぬ。其等のものは春風駘蕩、百花繚亂の觀を呈して居る。それであるに拘はらず、如何なる理由からして、わが國の文化はこのやうに稀薄であるか。理由は極めて簡單である。其等は滯留するにしても、通過して了ふにしても、わが同胞に依つて同化されて彼等の生活の成分とされることがないからである。わが同胞が、世界の隅々より來たる總べての新らしきものをどんなに歡迎しても、彼等にしてこのやうに自己に特異の性情、若しくは才能と、自己に特異の環境と其等の交渉より自然に生ずる自己に特異の要求とを材料とし、標準として的確に、精當に其等の意義を解釋し、其等の組織を改造することを知らず、若しくは、怠つて居る間は、わが國の文化は未來永劫、依然として稀薄であるべきである。わが同胞がかういふ生活の樣式を續けて居る間は、形態に於てはどんな

に近世文明を生活しても、精神に於ては必しも其れを體得するところはないのである。

わが國のジャァナリズムに依りて日々觀察され、記述され、報道される出來事の大半は、其れが政治に關するものでも、産業に關するものでも、教育に關するものでも、其の他、趣味や流行に關するものに至つても、わが同胞の大多數が、個人として、國民として、近世文明に依つて彼等の個性の照耀され、啓明されないところから來たつて居ることを示さないものはない。彼等の理會をしてかゝる狀態に低迷せしむることは、現代生活に於けるジャァナリズムの機能からしても、わが國のジャァナリズムは果して十分にその任務を盡して居ると言はれ得るであらうか。現代生活に於てジャァナリズムの存在と個性に關する無自覺との存在とは、明らかに共存もし得る事柄ではない。わが國のジャァナリズムにして、日々にわが社會の上下を映げてこのやうに汲々として彼等の個性を尊重することの如何に大切であるかに無自覺であるかを目睹としたら、其れは全然其れの關するところではないとして、晏如、其れを傍觀して居るならば、わたくしは其れが近世文明の趨向と其れより課せられたおのれの使命との二つを理解するところ無きの甚だしきに驚かさるを得ない者である。昔、支那の天子は自分の領域内に罪人が現はるゝ毎に、其れをおのれの不德に歸して罪を天に謝したといふことである。わが國のジャァナリストの中で、おのれの職分に對するデリケエトな責任觀より、能く個性の意義なる人々の斯くの如く多きをおのれの怠慢に歸し、罪を天に謝さうとする者が果して幾人あるであらうか。わが國に於と作用とに關して無自覺に新聞が創始されて以來既でに半世紀にもなるであらう。今日、わが同胞の見出される彼等の智識と、道德との狀態に鑑み、此等の歲月間に其れに取つて成し得た。そして、なさなければならなかつた最も重大なる仕事は、個人とし、國民として言ひ換へれば、對内的にと等しく對外的に、わが同胞の胸の中にしつかりと個性意識を植え付けさせることであらなければならなかつた。何故ならば、わたくしの觀るところに依れば、今日に至つても

、またそれに甚だしく[illegible]、[illegible]
發達しない原因の主たるものの一つに、[illegible]に、[illegible]
なければならぬといふことを反省し、自覺しなかつたことであるからである。事實さうであるにも拘らず、現に、今日に於てわが同胞の個性的に啓明することの一大急務なることをまだ十分に悟らないのが、わが國のヂャァナリズムである。

缺陷の三

わが國のジャァナリズムの第三の缺陷としてわたくしが指を屈しなければならないものは卓越性の鑑識の缺乏である。そして、此れは個性意識の稀薄より自然に分化するところのものである。

卓越性といふ言葉は、他の多くの言葉と等しく、二つの意味に用ゐられ得る。形式的の意味と實際的の意味とが、即ち、其等である。わたくしがこゝで卓越性といふ言葉を用ゐて居るのは、事實的の意味に於てであつて、わたくしがこの意味に其れを用ひてのみ、『わが國のジャァナリズムの缺陷の一つは、其れが卓越性の鑑識を缺くところにある』とするわたくしの命題は始めて妥當の根柢を有ち、悠久の結果を齎らすのである。

或る事柄を形式的の意味で理會するのと、實際的の意味で理會するのとの間には霄壤の相違がある。そして、事柄の種類に依つては、實際的の意味で理會されたる意味だけが、其れに附せられ得る唯一の可解的、若しくは、合理的意味であつて、其れが纔かに形式的に理會されただけでは、何等の意味をも構成しないことが随分多い。卓越性の如きは確かに其等の一つである。されば、卓越性を形式的の意味で理會しないで、實際的の意味で理會するといふことは、こゝで極めて重大なる要件を形造るのであるから、わたくしは、或る事柄を形式的の意味で理會するといふことと、其れを

實際的の意味で理會するといふこととには、どれだけの相違があるかといふことを豫め一通り闡明して置くことの必要を感ずる者である。

水がH_2Oであるとするのは一つの化學上の知識である。然し、たゞ此の形式を書物の上で習つただけでは、或る人がどれほどに善く其れを記憶し、どれだけ堅固に其れの事實なることを信じても、其れはほんの形式的の意味での知識に過ぎない。彼れが、水を分析して其れの結果が果してH_2Oであるか、H_2Oを和合して其の結果が果して水となつて現はれるか、どうかを試驗し、彼れの五官と叡智とに依つて如何にもさうであると納得して、始めて其の化學形式が實際的の意味での知識となるのである。

も一つ例を歴史上の知識に取つて見よう。

こゝに一つの古文書に、頼朝が鎌倉に幕府を開いたといふことが記載されてあつたとする。たゞ、其れを讀んだだけではほんの知識の材料たるに過ぎないのであつて、まだどんな意味に於ても、知識そのものとはなつて居ない。つまり、其れは形式的の意味での知識であつて、實際的の意味での知識ではない。其れを實際的の知識にまでするのにはいろいろの考察と考慮とが必要とされる。其の古文書が信用出來るものと判定されても、そこに記錄されてある事柄が事實になるまでには、猶ほ、多くの條件を缺いて居るのである。過去の出來事を繋ぎ付けて居る因果の鎖を辿つて、其れと今日わたくし共の文化との間にどれだけの關係があるか、其れがわたくし共の生活をどんな風に感化しつゝあるかといふことが理會されて、始めて其れが實際的の意味での知識となるのである。

わたくし共の生活に重大なる關係を有する他の多くの知識に就いても、勿論、大切なる意義を以てこの考察はあて嵌ることである。さうであるのに、世間では、學者も市井人も一般に此等二種の知識の差別を案外不問に付して居るのは

わたくしには不愉快でならない。そのためにどれだけ多くの迷惑と苦痛とをわたくしはそのために嘗めさせられたか知れないほどである。

さきにこゝでわたくしがわが國のジャァナリズムの缺陷の一つは卓越性の認識を缺いて居ることであると言つて居る時に、わたくしは卓越性といふ言葉に實際的の意味を付して言つて居るのであると斷つて置いたのは、形式的の意味で其れを理會するのと、實際的の意味で其れを理會するのとの間には非常な相違のあるに拘はらず、世人の大數が卓越性を語る時に方つて、彼等は此等兩方の意味を無差別に語つて居ることの不合理に彼等の注意を呼び起すためであつたのである。嚴密に言へば、實際的の意味で理會された卓越性だけが本物の卓越性であるのである。

さうすると、卓越性はいつも體驗上の事實であり、新たに工夫される構成であらねばならぬ。つまり、其れの起原や性質の何たるを問はず、或る人が彼れの生活理想を標準として、或る物を彼れの生活の成長と充實とに最も役立つものを鑑賞するならば、其のものは卓越性を有つたものであるのである。この意味に於て卓越性は必然に傳統上の、若しくは、記誦上の事柄ではなくして、創造される事柄である。論語が卓越性を有つて居るか、プレトオの哲學が卓越性を有つて居るか、ダンテの詩が卓越性を有つて居るか、此等が卓越性を有つて居るか、否かは、此等のものを自己の生活に據つて玩味し、其の人々の要求に隨つて、それぞれ適當に其れの意義を改釋して、始めて事實として構成されることであるから、それだけの手數の盡されない前は、何んとも決定されない事柄である。マシュウ・アァノルドは彼れの『ハイネル論』に於て、ゲエテが近世に於ける人類解放の一大導師となつたのは、彼れが、これまで何世紀の間、如何に多くの人々に依つて眞理であると信じられ、受け取られて來た事柄であつても、其れが果して自分に取つて眞理であるか、どうかといふ問を發したに因る、と論じて居る。然し、さうすることは何人に取つても或るものの卓越性を發見

する唯一の方法なのである。天分の高下や力量の大小は其の人に由ることであるから止むを得ないこととして、さうして卓越性を發見し、否、釋成して居るものに限つて、第一義に於て生活して居る人と呼ばれ得るのである。この意味からすると、纔かに十何歳かのロシアの少女、バシカトセエフが父に連れられて、始めてロオマに遊び、バチカンの宮殿にラファイルの評判の繪を見た時に、「この繪は醜くい。他の人々はどんなにこの繪が美しいと言つても、わたしにまでは確かに其れが醜しと現はれる以上、わたしは其れを醜であるといふより他に仕方がない」と言ひ放つたのは尠し無鐵砲のやうであるが、彼の女は確かに卓越性の何たるかを體得して居た稀有の一人であつたと言はねばならない。

さて、刻下に於けるわたくし共日本人は個人としても、國民としても、卓越性の何物であるかを何物であるべきかを正しく理會して居るであらうか。わたくしは彼等の爲體からして、彼等は其れを理會して居るとは考へることは出來ない。彼等の大數は、卓越性といふものを、何かしら古今東西を通じて通用貨幣、(通用貨幣と雖も、正確に言へば、其れの表記價値を別として、其れの内具價値、即ち、對人價値に至つては、其れを用ゐる人物の性格や、富の程度に隨つて無制限に異なつて居るが、人間の工夫したものの中で割合に共通性と恒久性とを備へたものとして、)の如く何人に取つても中性的の意義を有ち、中性的の價値として使はれ得るものであると想像して居る。彼等は或る時代に於て善かつたものは、いつの時代に到つても善く、或る生活に取つて眞理であつたものならば、如何なる生活に取つても其れが不眞理になる筈はないと想像して居る。彼等の全然しないことには、そして、實際にすることの出來ないことには、物事を、例へば信仰にしても、道徳にしても、政治にしても、產業にしても、學問にしても、藝術にしても其等を發生的に、作用的に考察するといふことである。彼等は固定的に考察したり存在的に考察しては全然其のものの意味と價値とを沒却して了ふものまでも猶ほ其等を存在的に、固定的に考察するのである、さうする他に術を知らないのである。

もち[illegible]お互に[illegible]依することには、一つの[illegible]共に、[illegible]になり、外國の生活になり切り出だされるならば、其等の上に何等の改變、若しくは、改造の[illegible]をなすこともなく、そのまゝわたくし共の生活の模倣となるとして、其の點に關しては、何等の考慮も煩はさず、何等の[illegible]も傷めずして、安心して居られることである。この頃、或る人が、わが國が外國の文化を採用する上に於て、其れの採擇力の偉大なるを語つて居る言葉の中に陸奥宗光の其の人への直話として彼れの述べて居るのを讀んだのであつた。彼れの傳へて居るところに據ると、日本が外國の文物を採用するに至つて、選擇などは無用の考慮である、選擇なぞと言つても、どうせ日本としては其れの價値など全完に解かるものではない。何んでも手當り次第に取り入れることである。さうして行く中には、わが社會のエコノミイから、必要なものと不必要なものとは自然に淘汰されて行くであらう。といふのが、陸奥の意見であつたのである。これは如何にも明治初年に方つて當時の謂ふところの先覺者が取つて居た態度と心意氣との極めて忠實なる註釋である。彼等にして其に勝つた方法とては發見することも出來ず、工夫することも出來なかつたと言へばそれまでであるが、わたくしからすれば、あの倥偬の際に在つても、彼等が考へたやうに考へて、彼等が振舞つたやうに振舞ふのは確かに惡い了見であつた。其の結果として、わたくし共は今日其の後始末に惱まされなければならない破目に置かれて居るではないか。西洋文明は言ふまでもなく近世文明である。近世文明はあの文藝復興期に於て當時の學者や文人が傳統上の卓越性を破棄して、彼等の體驗と反省とに依つて新たなる卓越性を構成したことを其れの濫觴として以來、絶えず、新たなる卓越性を工夫することに依つて近世文明を經緯し、開發して居たのである。陸奥の說きそして、實際にわが國の實行したところのものは、全然、近世文明の精神を裏切つて居るものである。わが國に於て、今日に到つて、猶ほ眞の近世文明が起らず、眞に近世文明を理會する人物の拂底なのも、決して不思議ではない。

卓越性の何物であるか、何物であるべきかを體得しないわが同胞が比例感を缺き、恰當感を缺き、外殼と内核と、若しくは、偶然性と本質との間の識別感とを缺くのは、極めて自然である。此れはまだ彼等が物事を固定的に、存在的に考察することに束縛せられて、其等を發生的に、作用的に考察することをしなかつた、さうすることを知らなかつた自然の結果である。わが同胞にしてこの憐れむべき、悲しむべき狀態より蟬脫しようとするならば、わたくし共は卓越性の認識に先行しなければならない解釋の精神を先づ體認するの必要がある。それでは、改釋とは何んであるか。

改釋は或る意味に於て最も寛大であると同時に、他の意味に於て最も嚴格なる一つの精神である。其れは人間の文化に關する限り總べての物を取り入れようと努めるが、自己の生活と關聯せしめられざる間は、其等の一物をも取り入れない。其れは、人間の休戚を左右する總べての物の價値を認めることに吝ならないが、其等の眞の價値は彼れの努力と欲求とを標準として評價されて、始めて、存在するものであることを忘れない。之れを要するに、眞實に、熾烈に、自己に生きるために、日々に過去の經驗と變じ去らうとするものを現實化し行き、他人の生活に墮し去らうとするものを改釋して自己化し、其れにつれて最も遠き過去の經驗をも現在化し、最も異なる他人の生活をも自己化して、其等を悉く自家薬籠中の物とするのが改釋である。されば、改釋の前には舊い何物もなければ、新らしい何物も無い。又、他人の何物も無ければ、自分の何物もない。唯在るところのものは、絶えず新らしくされるものと、絶えず自分のものとされるものとだけである。

然し、不幸にしてわが同胞はまだ正しく近世生活を生活するに大切なる、否、必須缺くべからざるこの改釋の精神を體認するところがない。わが同胞は今日頻りに改造を叫んで居る。然し、彼等は當然改造の準備たり、指針たる改釋を無視して、たゞ改造を叫んで居るのである。然しまづ改釋に依つて解決され、發揚されて、其れに關して適當なる知見

とい、ジョンソンを持たないならば、[illegible]ことすらに、文化の一つの存在[illegible]にはならない。

わが國のジヤァナリズムは、わが國民が近代の意義を缺く上に於いて其の[illegible]ならないところのまたくしは考へる。わが國のジヤァナリズムは其れの發生よりして、當然近世人としてのわが國民のこの最大たる缺陷を匡正すべきであるのに、其れを一向に努めないのみならず、彼等の蒙昧なる情操に阿りて、反つて此等の缺陷を増大しつゝあるかの觀を呈するのである。其れが海外の出來事を報道するにしても或は、國內の出來事を報道するにしても、其の報道が人格に關すると、人事に關すると、制度に關すると、運動に關すると、制度に關すると、乃至、學說、趣味、流行に關するとに論ないどこまでも近世文明の志向の發動として其れの趨勢の中に明らかに現はれて居る統一樣式に徹し、其等の出來事を以て現在の生活を組織する一つ一つの成分と思惟し、全體の要求に随つて其等の各々に正當なる價値は與へるが、正當以上の、若しくは、正當以下の價値を與へないとする新聞なるものが一つでも何處に見出だされるか。其れが生活の如何なる部門に屬するにしても滅び去るものと、榮え行くものと、偶然的のものと本質的のものと、表記價値と內具價値と、雜然として共存し、錯綜し、紛糾して居るのが、この世の中の常態である。一時に强烈なる色彩を放つものが必らずしも永遠に向つて重大なる意義を荷ふものではない。然し、訓練されない常識は、しばしば一時の强烈なる色彩と永遠の重大なる意義とを取り違へ、其の結果として、生活に矛盾と破綻とを醸すために、科學も、哲學も常識のこの短所を補ふために工夫されたのである。藝術にしても、詩の如きは無論のこと、色彩を其れの思想を運出する方便とする造形美術に至つても、其れの終局の目的とするところは、矢張り永遠の重大なる意義の保障、若しくは發揮のために一時の强烈なる色彩を整頓して、其れを或る秩序と法則との中に極限しようとする企に他ならない。さうすると、近世文明の急先鋒たるジヤァナリズムにして、長い間の人間の努力と自制とを裏切つて、たゞ、一向に讀者

の好奇心を滿さんがために、永遠の重大なる意義をして經濟の外に逸せしなるまでに、法外に一時の强烈なる色彩を誇張するといふことは、おのれの尊貴なる使命に孤負するところが無いであらうか。

斯くして、わが國のジヤァナリズムの冷淡なる態度のために、若しくは、其れの惡戯の行動のために、若しくは、其れの頽然たる商略のために、わが同胞は永久に卓越性に對する意識を涵養するの機會を失ひつゝあるのである。

缺陷の四

一つの目的も無いところに何等の統一もあらう筈はない。概してわが國のジヤァナリズムには何か統一があるであらうか、あるとしたならば、其れはどんな種のものであらうか。諸多の種に屬する雜多は出來事がそれぞれ定まつた位置に於て、定まつた順序と紙面の帶欄とが分配されるのであるから、無論、新聞編輯上の統一に關しては多大の苦心の拂はれて居ることをわたくしは知つて居る。然し、こゝでわたくしが問ふて居るのは、問ひたいと思つて居るのは、わが國の文化を增進する目的を以てわたくし共の總べてが有てる才能と、材料と、機關とを最善の結果に向つて役立たせるための統一に關してゞある。

わが國の新聞の總べてには、西洋の新聞にでも同様であるが、社說の一欄が設けられてある。此れは其の社の主筆か時々の出來事の中で、やゝ重大なる意味を有するものと思惟するものにつき彼れの意見を述べ、批評を試みるのである。或る種の讀者に取つては、其れがわが國の現在の政治上の傾向や、社會上の事相に關し、彼等の見解を養成し、標準を決定する道具ともなつて居るであらう。然し、近世文明の志向に依つてジヤァナリズムに課せられたる機能からすると、出來事の報道が新聞の眼目でなければならぬ。言はゞ新聞の論說なるものは恰かも商店に於ける番のやうなも

のである。[illegible]すものにあつては、[illegible]

目は極めて重要なものである、大切なものであるとされて居る。但し、或はまであつて、[illegible]はまることは出来ま

でもない。新聞に於ては、社会の出来事の報道が主であつて、論説は其れの附てである。近代文明の[illegible]する當

り、社会の出来事に関する評聞の報道が盡されて居るならば、其れの論説は蛇足に帰すべきであらう。そして、其れの報道はおのれの他に何物の補足も俟たずして、其れ自づからに最も発達したる、そして、最も洗練されたる意味に於て一つの社会批評であり、人生批判であり文明批評であるべきである。

ライヴニッツの單子説に於ては、宇宙を組織する成分たる諸の單子はそれぞれ叡智に於ての相違はあるが、其等の各はおのれの能力に随つて互ひに他のものの能力を反映することに依つて其等の間に理会と融通とが成り立つて居るのである。さうすると、此れに勝つた協同の方便は想像出来ないから、ライブニッツはこの假定一つで十分に満足して居らなければならない筈であつた。然し、彼れはその上に其等の單子を統率して其等の間の結合を保障する力として更らに神の存在を附け加へたのである。今日のところ、新聞の記事が其れ自づからにジャァナリズムの機能が當然要求しなければならないだけに、其れ自づから正確に、精細に、そして、到徹に批評の役目を満たすに至らないところから、この缺陥を補ふために、社説はジャァナリズムの精神と撞著するところありながら、外部から其等の記事に代はり社会に對して批評の役目を満たさうとして居るのである。さうすると、新聞の發達の目標は早晩社説をして蛇足に帰せしむるやうにだんだんに記事そのものの本質と態度とを改造して、ますます其れをして批評の役目を満たすやうに努めしめることであらねばならぬ。

それならば、わたくし共は如何に記事の性質を改造したならば、其れが現に満たして居るよりも一層其れをして批評

の役目を滿たさしめることが出來るであらうか。それには唯一つの方法しかないやうに思はれる。其れは一層廣く、さうして一層深い見地より特殊の出來事を考察することに依りて、おのづから其等特殊の出來事の中に潜んで居なければならぬ理想的の意義、即ち、相關的の側面を把握することである。さうすれば、其等の側面は表面にはたらき出してそこに總べての出來事の記事の間に、最も自然にして最も自由なる統一は成立しなければならない筈である。

かういふ見解を以てわが國の新聞を檢討する時、わたくし共が何よりも不滿に感ずることは、異なる種の記事の間に甚く統一された精神が缺けて居ることである。成るほど、そこには政治、外交、經濟等に關するものより、學術、文藝、娛樂等に關するものに至るまで、社會事相の標本とも見らるべきものはあちらこちらより少しづつ羅致されて居る。然し、其等の多くはたゞそれぞれ隨分互ひに異なつた教養や、興味や、立場や、理會の中に生活する擔當記者に依つて雜然と書き留められたものが、雜然と臚列されて居るだけである。若しジャァナリズムの終極理想は叙述にして同時に批判たるもの、若しくは、叙述の形を以て行はれる批評たることにあるならば、現今に於けるわが國の新聞記事にして、ジャァナリズムが其れの本來の機能より當然要求するものとなるためには更らに一段も、一段もの工夫が必要であるやうに思はれる。要は、探訪に於ても、編輯に於ても、絶えず全體の光を以て部分の意義を照らすところにある。スピノザの言葉を借りれば、「永遠の見地の下に」總べての事物を縱貫するところにあるのである。

五　結　語

近世文明は、其れの長所と併せて其れの短所を含めて、これまで人間に依つてこの地上に設計され、建立されたあらゆる種の文明の中で最も優秀な、隨つて、最も精神的な文明である。然し、今、この由緒ある文明はそれの弱點のため

に、ここ[illegible]そして、[illegible]

獲ケ國の創始者の意志を紹承して、この光榮ある歴[illegible]と威光とを保るといふ一條件を滿たすだけのことである。[illegible]

わたくし共日本人には現代に棲息する一國民として他の文明國民と倶にこの烈しい生存競爭に入る勇敢なる雄心は無きか。公平に評價したところ、わが同胞はこの競爭に於て月桂冠を戴くに都合好き素質を多く有すると同時に其れの妨害たるべき傳習をも尠なからず有つて居る。彼等は此等の素質を助成し、其等の傳習を破壞せねばならぬ。そして此の目的を達するために、わたくし共は是非とも現代社會に於て獨特の地位を占め、獨特の勢威を振ひつゝあるわが國のジヤァナリズムの力を借らねばならぬ。

然しわが國のジヤァナリズムはわが同胞にまでその援助の腕を差し出す前に、先づ自づからおのれの缺陷を取り除かねばならぬ。たとひ其れが自己の過失から生じたのではなくして、偶まわが同胞自づからの過失の反射であるとしても。

こゝに近世文明の志向の暗示するところに從つて、其等の二三を指摘して見た。

わたくしは現代生活に於けるジヤァナリズムの感化の偉大にして悠久なるを信ずることの厚きがために、其れがますます完全の域に進むことを望むことも極めて切ならざるを得ぬものである。


S.MARUOKA
サテン・色セード
各種の穩雅な色合の深型、淺型、サテン・色セードは曾てない美しい、氣持ちよい新製電燈笠として御好評を忝なく致して居りますが、殊に深型サテン・色セードは古雅で上品なマツダスタンドにお用ひになりましてマツダ瓦斯入電球の光をうけて又となく床しき明りとなります。
褪紅色、空色、桃色、草色、スミレ色、白色、
マツダランプ製造元
東京電氣株式會社
神奈川縣川崎市
マツダスタンド

地主階級と農業政策

有元英夫

地主は農民に非ず

わが國では農村を組織する階級のうち、土地に關係する重要なものに（一）地主（二）自作農（三）小作農の三階級がある。その他に（四）農業勞働階級もあるが、それは數に於て歐洲諸國の如く左程重要な地位を占めて居らぬ。而して地主階級は言ふまでもなく自分の所有地を小作農に貸附け、自分自身は直接農業經營に從事することなく、その土地で農業を行ふ小作農から收得する小作料によつて生活するもので、自作農は自分の所有する土地を自分で耕作する農民である。自作農は自分で土地を所有する點に於て地主と稱することも出來るが、普通に「地主」と稱せらるゝものには自作農は含んで居らない。强て名付ければ自作農は自營地主で、普通の所謂地主は貸付地主といふ風に區分することも出來る。また小作農は自分は土地を所有せず、地主から土地を借り受けて農業を經營し、收穫物の一部を地主に小作料として納める農民である。（勿論三者の中間にある、例へば自作兼小作農、地主兼自作農等もある）。而して土地耕作に從事せぬ地主に對して他の二階級、即ち自作農及び小作農を「農民」若しくは「農業者」と稱すべきものなるが故に、農村には土地に關係するものには結局地主及び農民の二階級が存する譯である。

地主は主として農村に居住し、その收入の大部分は土地生産物で、小作米を市場に販賣して生活するといふ點に於て「農民」または「農家」と稱することも出來る。けれども農業上から見れば地主は決して農民でも農家でもなく、彼等はたゞ土地といふ農業要素を所有し、之を農民に貸付けるだけで、その貸付た土地の上に行はるゝ農業經營と彼等との間には何等の關係を持つて居ない。また自ら農業を經營するものでもないから、

蓋し當然農民と稱することは出來ないことは明らかである。若し小作制度が外國で行はるゝ如く分益法（定率）であつたならば、地主は直接その經營に關係し、勿論彼等は農民と稱することが出來るけれども、我國の小作制度に於ては總て一種の定額法で、地主が農業に關係すると否とは地主の收入に直接何等の影響を及ぼさないから、地主はこの定額小作制度の確立と共に農民といふ意味から全然離脚したのである。實際は農業上から見れば地主は、小作米を販賣して生活する點に於て、米の販賣者で農民だけが米の生産者である。

然るに地主階級はたゞ單なる米の販賣者であるにも拘らずこれ迄常に自ら農民と稱して米の生産者であるかの如く唱へ、社會もまた地主をも農民と同樣に取扱ひ、殊に甚だしきは政府の當局すら地主と農民とを混同する場合も珍しくない、惟ふにこの地主と農民との混同といふ一つの錯誤こそこれ迄の農業政策をいつも不徹底に終らしめた最大原因で、之は實に農政上看過するを許さゞる重大事項である。要するに現時の農村には地主と農民との二階級があり、一は農業と何等關係なき單なる米の販賣者で、他は自ら土地を耕作する米の生産者であるといふことを此際政治的見地から明瞭に區分することが農村振興、農業發達の根本的要諦であると思ふ。

地主階級の離農

封建時代の地主階級は決して今日の如く農業に何等の關係を持たぬ生活はしてゐなかつた。一部の土地は他に小作せしめても必ず一部は之を自作し、直接農業に從事し、若しくは奉公人を使役して農業經營を行つたものであるから、實は當時の地主は總て所謂地主兼自作農であり、且つ當時の小作制度は定率的分子を濃厚に含んでゐたから、たとへ全部の所有地を小作經營に委するにしても、彼等は決して農業から離れることは出來なかつた。維新後に於てもその餘風が殘され可なりの大地主でも、自宅に農舍を設け、奉公人を雇い家畜を飼育して相當の面積を手作したものであるが、其後農村の經濟狀態が發達するにつれて他の地主に適當した仕事が現れ、且つ歴史的に誰もが感染する農業嫌惡といふ普遍的の風習により地主階級は次第に農業から遠ざかり、今では中地主以上になれば、何れの地方でも自作する地主は殆んど皆無の姿となつた狀況である。かくの如く耕作時代には地主もまた一の農民であつたが故に、其後に於ても依然因襲的に地主を目して農民と稱せられ地主は自分に便宜の場合には之を利用して農民と自稱するに至つたのである。

尤も我國の農業經營は一般に極めて小規模で、農民の大部分

が戸別五反以下であるが故、資力も極めて貧弱で、且つ教育の程度も甚だ低く、全く貧民階級に屬するといつてよく、今まで地主は農村の知識階級、資力階級として常に農民を指導し援助して來つたから、その意味に於て農民は之迄地主階級に感謝しなければならぬ。けれども今日は最早や農業上に於ては農民は地主の援助を要せないまでに向上した、却つて地主階級が農業政策に干渉するが故に、難有迷惑の場合が少なくない。苟しくも農業政策の目的が農民の社會的經濟的地位の向上と、農業の改良發達にあるものとするならば、既に農業が分離した地主階級を保護したところで、決して農民が幸福となり農業が發達するものではない。故に我國の如き農業組織の國柄に於ては農業政策は徹頭徹尾農民本位でなければならぬこと勿論である。

地主政府の農業政策

自治制度における代議員の選擧資格は納税額によつて制限され、土地を所有せぬ小作農が主要部分を占める農民の間には殆んど選擧資格を有するもの無く、縣會議員、國會議員等は農村に於ては總て地主階級から選出され、殊に明治時代、未だ商工業の發達しない時代には直接國税を納むるものは大部分農村の地主であつたから、衆議院に席を有する地主議員の數は頗る多く、當時政治界における地主階級の勢力は非常なもので、政府は中央地方とも地主階級の意のまゝに動き、遂に一の地主政府が組織され地主保護の傾向が頗る顯著であつた。例へば農業金融機關として設けられた勸銀、府縣農銀の如きは農民金融機關でなくて寧ろ地主金融機關と云つた方が適當で、地主は低價償還資金、若しくは土地兼併資金を是等の機關より供給を受けた。農事試驗場は小作米改良場の感があり、穀物檢査制度は地主にとつては小作米の格付及び販賣に非常な利便を得たが、農民は却つてそのため苦痛を增した。農業教育は農民を教育せずして地主の子弟を教育し、農科大學は農民學を教へずして地主學を教へ、農會は農民會でなく地主會となつたのである。

地主としては小作料を收納するのは米で、その米を生産する者は即ち農民であるから、あまり農民を輕視し、農業を顧みぬのは小作經營に影響を及ぼすであらふことを恐るゝが故に時に農業を重んじ農民保護に努力した。けれどもかく地主が農業を重んずるのは全く農業生産物たる米を收納するが故であることは恰かも封建時代に、武士階級が單に米の生産者たるの理由を以て農民を尊重したと同様である。若しも小作制度が物納でなく金納に變つたら地主は恐らく今日の如く農業に注意しなくなるであらふ。明治時代の農業の發達、及び假りに農民の生活が

幾分でも向上したとすれば、それに對し地主は一部の効勞があるといふとも出來るかも知れぬが、併し他面から見れば地主政府は如何なる場合と雖も地主を度外して、何等の農民本位の政策が實行出來なかつたことは全く今日農村が行詰り、農民經濟が窮迫した根本の原因となつたといふ點から見れば、地主階級の農民の指導援助は結局農民の發達を妨げたことになる。

惠まれた地主と惠まれぬ農民

これまで地主階級ほど幸福にして安全なる地位を保ち得たものはなかつた。彼等の資産とする土地は燒ける心配もなく盜まれる心配もなく、また減耗する心配もなく、適當に耕作さへすれば、永久に使用に堪え且つ生産力は益々増大して來る。土地の所有權は國家の存續する限り永久に安全確實である。しかも我國は人口年々増加するに反し耕地の供給之に伴はず。從つて地價は鰻昇りに騰貴し、昔し一反歩二十圓、三十圓で買つた田地が五百圓、六百圓、即ち二十倍三十倍に騰貴し、彼等は土地を他人に小作することによつて自分は苦しい農業の體驗も知らず、殆んど勞することとなくして年々一定の小作料を收得し、金利ならば國民經濟の發展と共に漸次低下したに拘らず、小作料だけは國民經濟が發展しても少しも低下せず、且つ米價に逐年騰貴して貨幣に換算した小作料は年々に増加する一方である。例へば一反歩の小作料一石とすれば、明治初年に一石の米價二、三圓時代には小作收入は二、三圓であつたものが、今日の如く米價が四十圓にもなれば小作收入は正に二十倍にも増加してゐる。かくして地主の富は著しく増加し經濟的地位が向上するばかりでなく、社會的にもまた之にともなつて向上するに至つた。更に土地所有に生活の根據を置く地主階級は最も安樂な惠まれた生活を續け得たといひ得る。反之、農民階級は農業經營の規模が技術的にも自然的にも絶對に極めて狹い範圍に制限されてゐるところから、たとへ農業技術の進歩は顯著なるもがあつたとしても、一町歩や一町五反の經營では收入はまるで合せても知れたもので、米價は年々向上したにしても、貧弱の農民は之を地主ほど有利に販賣し得ない。斯くの如く農民の境遇は收入は思はしい増加を見ないにも拘らず、農村經濟の發達によつて自給的生活から流通的生活に進み、日常需要する物價は益々騰貴して生活費は年々に増加し、近年副業の發達によつて幾分收入の餘裕を生じたもの丶大部分の農家は昔しから依然として貧民に均しい生活を甘んぜざるを得なかつた。農民は農業上の資金を潤澤に投入し得ないから、たとへ家族内の勞働の最大能力を農業に傾注し、所謂勞働的の集約農業によつて漸く經濟

的の結果をなしてゐるのだから、何時までたつても農民の教育法は進歩しない。また貧困のため子弟を教育することすら出來ないから、教育機關は完備しても、農民は之を利用することが不可能である。勢ひ、知識の程度は他の階級に比していつまでも劣る狀態である。

殊に小作農になると、營々として土地を耕作しても、その收穫の過半は地主に小作料として納め、薄資と收入の過少のために自作農よりは一層惨目な生活を送つて來た。每年土地を耕作することによつて、その土地の生産力が高まり、よしそれが地價騰貴の一原因をなしたとしても、その利益は全部地主の財産を増すばかりで、小作農は一向に難有味を享け得ない。地主階級は不作または凶作のため小作料收入を減ずることはあるが、反面には、かゝる不作の時は常に米價が昂上するが故に、小作收入の減少は大體に於て米價騰貴の利益を補ひ得るから、彼等の年收は實に安全なものであつた。また、小作法の制定がないため小作人は土地につき何等の權利なく、契約は極めて片務的で、小作農の地位は頗る不安定なものである。斯の如く恵まれた地主階級が常に保護され、恵まれぬ惨目な農民階級が一向に顧みられなかつたのは、地主政府の農業政策としては敢て怪しむに足らないかも知れぬ。

小作爭議の勃發

かくの如く地主階級が、惨目な農民を犠牲にしつゝ、安全幸福な生活を送つてゐる間に、突如として地主の耳もとに警鐘が乱打された、それは世界大戰當時から、そろ〳〵各地に勃發した小作爭議である。小作農はこれまで傳統的に飼ひ馴らされた、その如く地主の前に尾を振り、地主の保護の下に貧民のやふな生活に滿足してゐる境遇にありながら、その小作階級が地主に團結して反抗するなぞは全く地主にとつては意外であつた、併し最初は高を括つて小作爭議は單に一時的の現象に過ぎぬと考へてゐたが、小作農の運動が次第に熾烈となり、徐々に地主を壓迫するに至つて、俄かに狼狽しはじめた。小作爭議勃發の原因はいろ〳〵あらふけれども、經濟的原因としては農業の行詰りのために小作農は小作料の負擔が非常に苦痛に感ずるに至つた。即ち小作料が高すぎるといふ考へが小作農の頭にひゞきはじめたことで、社會的原因としては、今迄地主階級は農村に於て餘りに恵まれた生活を送つた。たとへ地主は土地の所有者であるとはいへ、實際にその土地を利用して米麥を生産するのは我農民である。然るにその地位は兩者の間に非常なる差があり、しかも國家の食料を生産する農民は保護されないで、却つ

て異なる土地の所有者たる地主が保護されるといふのは如何にも不合理であるといふ、地主に對する一種の反感から階級意識を醒めしめた點である。當時の地主本位の政府の下にある警官や郡長等が、小作爭議の場合、小作農を反逆者扱ひとし、刑事犯罪人に對する如く嚴重に取締つたのも當時の農業政策の方針としては强ち無理もないところであるが、たとへ小作爭議が農村に於て種々の害毒を流したとしても、そのために地主を覺醒せしめ、農業經營の改造を促し、殊に地主階級と農民階級との區分を明瞭にし、これ迄の如く地主階級が自ら「農民」と稱して、小作農のやうな眞の農民を社會から掩はふとすることが出來なくなり、地主は地主として、農民は農民として立つて行かねばならぬといふ新らしい局面を開展せしめた副産物となつた點に於て小作爭議の勃發は我國農民史上決して無意味なものではなかつた。即ち小作爭議は新農業政策の樹立の動機をなした點から見て、農業の發達、農民の幸福に向つて進む一過程であつたと稱することが出來る。然し乍ら、當局の小作爭議對策は、なほ多くの因はれを持つてゐた。それは今日なほ優勢なる地位を占むる地主階級の意嚮を無視して公平なる農民政策を實行するまでの勇氣はなく、種々の不徹底なる方策施設が行はれた。地主は昔の主從關係を理想とし温情主義によつて小作人に種々の恩惠を施して昔の關係を續けんとし、政府はかゝる地主を模範地主として賞讃し、小作人に對する種々の施設を地主に奬勵し、それによつて小作問題を解決せんと努めた。併しそれは結局無意味であつた。そして遂に小作調停法の發布となり、小作官の設置となつた。けれどもそれは單に一時的對策に過ぎない。今後徹底的に小作問題の解決をしなければならぬ時期が再び來るものと思ふ。小作爭議は決してこのまゝでは終熄するものとは思はれない、そして爭議が深刻になればなるほど地主政府の農業政策の矛盾が暴露され、そこで新農業政策の出現を促すことになるであらふ。

地主の農民運動

農村問題がやかましくなるにつれて、近時種々の農民運動が起されるやふになつた。政治方面にも農政議員、農民黨等が出現し、地方にも各種の農民團體が發生した。けれども是等の參加者は土地を耕作する農民でなくて總て實は土地の耕作を知らぬ地主階級のみである。尤も農民運動が農村の狀態を世間に紹介し識者をして幾分とも農村問題に注意を向けしめ、今まで殆んど一度も農村問題の如きが議論の題目とならなかつた帝國議會に於て、各種の農村問題が論議せられ、ある期の如きは農政

議會だにすら呼せらるゝほど農村問題に關する[illegible]する に至つた。即ち農村問題が天下の輿論となつた動機は、たとへそれが地主の農民運動であつたにしろ地主に對し認めてやらねばならぬ。けれども地主がかくまで躍起となつて農民運動に熱中するのも實を云へば自己の利益打算上から出發したものに過ぎない。また地主階級が小作爭議の脅威に遇つたことは、彼等の運動を促進するに非常なる力があつた。若し小作爭議の如き問題が農村に勃發しなかつたならば、地主階級は依然として附眠をむさぼり、地主政府の治下に泰平を謳歌してゐたであらふ。地主の農民運動は苟しくも「農民」を標榜する以上、農民の利益に反するやふな運動は行はないにしても、地主自身の利益を度外しては彼等は何等のこの種の運動に興味を持たないことは想像するに難くない。

農村問題が天下の輿論となるや、衆議員、縣會議員候補者は之の趨勢を利用するに油断しなかつた。併し農業に何等關係のないものが自ら農民黨としておれば農民の味方なぞと農民にこびを賣つたところで、漸次階級意識に目醒めつゝある農民の前で、自分は辯護士、新聞記者、乃至實業家で都會に住んではゐるが、土地を所有してゐるから農民などと厚顔しく述べたてる迄の勇氣を持たぬにしても何とか農民を悦ばせるやふなことを[illegible]大部分は地主階級であるから、農民の反感を買ふやふな言説をするのも不利である。そこで彼等の農政意見なるものが如何に苦しい立場にあつたかは氣の毒よりも寧ろ滑稽に近いものがある。併し農村の状態は急速に變りつゝある。今後に於ては最早や、この種の農政議員は遂に存在を許さなくなるであらふ。普選實施の曉には眞の農民議員候補が現れなければならぬ。要するに今日眞の農民運動としては日本農民組合の運動があるばかりで他の總ての農民運動は地主運動であるといつて差支あるまい。地主政府の當局は農民組合の運動の出現に對して猜疑の目をみはつたであらふ。地主は農民組合を蛇蝎の如く嫌忌し、警察は彼等を社會主義的煽動者として取扱つた。地主の農民運動に馴れた社會は農民組合の運動を見て異様に感じたことであらふ。小作爭議は地主と農民との區別を明にする動機となつたが、日本農民組合運動の出現によつて一層之を明瞭にし、地主運動と農民運動との區別を社會に示すに至つた。日本農民組合が一の鬪爭團體であると世間から目されるのは過渡期の事情としては已むを得ないであらふ。今日の如く單に小作料輕減團體として活動するばかりでなく、眞の農民運動の機關として立つなら組合の將來は大ひに注目すべきものがある。吾人は眞の農

民の政治的及び經濟的運動が健全なる發達を遂げんことを希望して已まない。かくして國家の新農業政策と農民運動と相待つて茲に理想の農民の幸福が將來されるものと信ずる。

米價運動と米穀法

今日の所謂農民運動、農業政策が如何に地主の利益を度外して行はれて居らぬといふ二三の例を次に示して見たい。

第一に米價運動である。米價が低落すると常例の如く全國的の農民運動が起される。曾ては米の投賣防止運動を農會が主體となつて行つたことすらある。米價が下落すれば農村は疲弊し、農民は窮迫し、國民食糧供給の基礎を危くするといふ理由の下に、農會長、町村長その他の農村の人々から政府に建議し哀訴して極力米價維持策を要求する。政府もまたそれに應じて關税を改正し或は、米の買上に巨額の經費を投じて所謂米價調節を實行する。そして遂に近來は米穀法といふ常設の法律まで發布して米價維持を圖り、尙ほそれでも足らずとして農會あたりでは米穀法の改正が叫ばれてゐる。けれども是等の運動の實行者は誰か、不利益な農民でなく實に總て地主階級である。或は地主は農民に代つて米價運動をやつてくれるのかも知れぬ。けれども地主階級がかくも死力を盡して米價運動に熱中するのは、眞に米の生產者たる農民のために働いてくれるのであらうか、或はそれもあるかも知れぬが眞の動機は自分達が收得する小作米を有利に處理したいからこそ一生懸命になるのは言ふ迄もない。併しそれを表面に揭げては面白くないから、農村疲弊、農民困憊を標榜して自家の利益擁護に努めるのである。勿論農民としては農業收穫物の高價は經營上有利である。けれども米價の騰貴は常に肥料その他の生產材料の騰貴を伴ふが故にそれは農民にとつて必ずしも絕對に有利であるとは斷定出來ぬ。農家の生產する農產物は米が主要部を占むるにしても、その他に麥その外種々の種類があつて、獨り米價のみが高くても、他の生產物が安價であれば、必ずしも米價高によつて收入が增加するとばかし行かない。まして小作農の如きに、米の過半は小作料として地主に納め、他の一部は自家用として消費し、殊に近時麥食の風習の退減と共に貧農に至るまで米食の風が盛んとなり自家消費米の方が多くなつたが故に、今では大して販賣する米を持つて居らぬ。時としては過小農になると端境期に於て米を買つて食ふ農民すらある。かゝる事情の下にあつては米價の騰貴は絕對に農民が歡迎するものとは斷定し難い。然るに地主側から見れば、米價の騰貴は絕對に經濟上有利で、彼等は米價高に伴ふ生產費の向上を恐れる必要がない。また農民

は資力薄弱のため大抵は生産物に收穫と同時に直に數ケ月間に賣り盡すが、地主になると小作米は端境近くまで持ちこたへてゐるから、後半期の米價高は地主には好都合であるが農民は何等利するところはない。然るに米價は常に後半期に高い。また米價運動の行はるゝのは大抵この後半期であつて、たとへ運動の効を奏したところでその利益を受くるのは實は地主階級ばかりである。

米價と農民經濟との關係は兎も角も地主階級が米價運動に一生懸命になるのは小作米を有利に處理せんが爲たるは言を俟たぬといふ證據には米價運動はあつても、麥價運動といふものはこれまで一度も聞いたことがない。肥料問題といふものも無論起つたことがない。若し地主が小作料として米と並んで麥も收得するのであつたならば、麥價運動もむろん起るであらふ。けれども不幸に麥價と地主經濟とはその間何等の關係を持たないがために農民運動から除外されてゐるではないか。けれども現在の小作制度では二毛作地に於ては裏作の麥の收穫は全部小作農の收得するところであるから、若し麥價が相當な價格を保てば、米價の騰貴以上に小作農の經濟は助かる道理である。けれども麥價が地主と關係がないために殆んど農業政策から閑却されてゐるが、然るに外國の大農經營に於ける生産物は大部分

要であるが、吾々には生産費が極めて安價なために却つて麥價も安い。故に我國の如く生産費の高くかゝる麥は到底外國の麥と競爭出來ない。しかも外國の麥は日本の麥よりも品質がよく、我國人も優良品として之を取扱つてゐる。米が外國の米作地から日本に輸入して引合ふやうな地方の米は大抵劣等品であるから、價格は安くても需要の點に於て日本米とは到底競爭の資格がないから、日本の米作は獨占的地位を保つてゐる。若し農民政策の上から農業を保護する必要があれば、米作よりも寧ろ麥作の方を保護するのが至當であるが、但し裁麥は地主と何等の關係のないため(ばかりでもないが)に保護政策から取り殘されてゐるのである。

政治家は米穀法の適當なる運用を以て農村問題解決の全部であるかの如く唱へてゐるが、農村問題の解決にはその他に、或はそれ以上に施設せねばならぬ重要なるものが數多くある。寧ろ農民から見れば、米價問題の如きは第二第三の問題である。

政府は生産米を有利に販賣せしむるために多額の補助金を與へて全國に農業倉庫の設置を奬勵し、且つ之に對し低資金融の道を開き、或は米の平均賣または共同販賣を奬勵して農家經濟を振興せんとするが、現在の農業倉庫を利用するものは大部分地主階級で、そこに保管さるゝ米は主として小作米である。農民

は之を利用しやうにも倉庫に預ける餘裕あるほどの販賣米を有しない。たとへ持つてゐたところで端境期まで持ちこたへて高價で賣却するなぞの餘裕は到底有しない。殊に小作農の如きは全然農業倉庫を自己のために利用して居らぬといつて差支ない。農會や産業組合で米の平均賣または共同販賣を奬勵しても、農民にしてそれに出すほどの販賣米を有するものは極めて少數である。矢張平均賣の奬勵の如きも小作米販賣のための方策に利用されるに止まつてゐる。現時地主の農民運動に強要せられて當局が米價維持を以て如何にも農業政策の中心問題なるが如く見做しそれに多大の勞費を投ずるのも一の錯誤といはねばならぬ。

農民負擔の輕減

第二には農民負擔の輕減問題である。これも農民運動の一決議であるが、特に農會關係者の間に盛んに唱導され彼等の運動の一焦點となつてゐる。理由は農民疲弊の一原因は近時農民の負擔があまり重すぎる。故に之を輕減して農家經濟を助けなければ成らぬといふ主旨で、そこ迄で聞くと誰が考へても頗る結構なことに違ひないが、更に農民負擔の輕減とは地租減免の別名であることを知つたならば、地主運動の如何に露骨であるかに驚かさるを得ない。地租の負擔者は誰か、それはいふまでもなく地主階級の全部と農民中の僅かに三割しか占めてゐない自作農だけで、大部分の農民即ち小作農は一厘の地租の負擔を受けてゐない。故に地租の減免は地主負擔の輕減にこそ有效なれ、農民負擔の輕減には殆んどならない。しかも「地主農民運動」は「農民」といふ名稱を麗々しく揭げて、自分にのみ必要なる地租の減免運動に浮身をやつすに至つては何人と雖もそれが農民運動だとはとても考へることは出來ないであらう。

今日農民の最も重い負擔となつてゐるものは小作料である。地主の負擔する土地公課は一段歩十圓か十五圓位なものである。然るに小作料は一段歩米一石二斗として、米價を一石四十圓とすれば正に四十八圓で、土地公課の四倍となつてゐる。一段歩十圓乃至十五圓の土地公課は小作料收入の約四分の一であるが、一段歩の土地から收穫さるゝ米の額は、大抵小作料の倍額位なもので、假りに裏作その他から入る收益を以て米の生產費を償却しても、農民の小作料負擔は收入の正に二分の一である。收入の四分の一の土地公課を地主が苦痛と感ずるならば、收入の半分を負擔する農民は更に更に苦痛でなければならぬ。農民運動者が農民の負擔を輕減して農村の振興を圖るならば、何故にまづ、小作料の輕減について努力しないのであらふか。

收穫の半分が土地資本家に[illegible]如き小作制度が[illegible]朝鮮は別として世界の何れの國にあらうか、かゝる原始的の小作制度が今なほ平然として續けられてゐる如きは我國が果して文明國たるの資格があるや否やを疑ふものである。農業が行詰つたとか、農民が疲弊したとかいつても、彼等がかゝる過重の負擔に苦しむ以上それは當然のことである。若し我國に於て之を自然のまゝに放置して小作料が低下しない事情があるものとするならば、政府は何故に積極的に小作料低下策を講じて農民を救濟しないのであるか。一國の資本利子の高低はその國の經濟的發展の程度を示す標準となる。金利の高いのは商工業不振の一大原因をなすが故に、政府は極力金利低下策を講じつゝある。土地利子即ち小作料の過重が農業不振の原因をなすものならば、當局は進んで小作料低下策を講じて農業の振興を圖るべきで、その方が米穀法の運用や地租の減免よりも遙かに效果がある。國家から見れば地主が一段歩に五圓を失ふよりも農民が五圓を得る方が農業の發達、食料問題の解決の上に有效であるものと云ひ得る。英國の如きは小作料低下策を極力實施し、小作仲裁裁判機關の如きも全くその目的で設立されたものである。我國の小作調停法の實施の如きもまた一面に小作料の漸減機關たるべき筈なるにも拘らず、却つて高率小作料維持機關として地主の[illegible]の[illegible]ない[illegible]となるであらう。

その上、我國の小作料はどうしても低下せなければならぬ幾多の理由がある。元來、現在の小作料なるものはもと封建時代の年貢の制度をそのまゝ襲用し來つたのであつて、明治初年地租改正當時、舊時代に行はれた三分法、即ち收穫物を藩主、地主、耕作人間に三等分するの對策を採用して收穫の三分の一を以て地主收入と決定し、三分の一を地租とし、地租は地主の負擔者であるが故に、收穫物の三分の二は小作料として地主が收得することになつた。實はかゝる高率の小作料は他の文明國に於てあまり例がないが、それにも拘らず近來まで小作農がその過重なる負擔に甘んじて、大した小作爭議も起らず比較的平靜に小作經營が行はれたのは明治時代から西洋の農學が輸入された結果として農業が非常なる進歩を遂げ、過去五十年間に米の平均反當收量は少なくも五割は增加し、麥の收穫もそれに應じて增加したが、小作料は之に對して大體に於て引上げられなかつたから、その增收の分はこれまで全部小作農の收益となり、かくして高率なる小作料が收穫增加の御蔭で年々幾分づつ緩和され來つた。即ち事實に於て小作料が低下したそのために農家は過重の小作料をも忍んで來たのである。けれども今日では

農業の進歩も過去の如く顯著でなく米の增收も殆んど停止したがために、農民ははじめて小作料負擔の過重に苦しむやうになつた。これが近時の小作爭議勃發の一原因をなしたので、小作爭議の多く頻發さるのは主として農業の發達した地方(例へば岐阜、愛知、岡山、香川、新潟の如き)であるのは、全く農業技術の行詰が小作爭議を刺戟したことを物語るのである。而して今後依然として過去に於て發達したと同一程度若しくはそれ以上の程度で農業が進歩しないとすれば、小作農は益々負擔の過重に苦しむが故に自然小作爭議は熾烈となる。之を防遏するには、もと〳〵高率である小作料を低下せしむるに在ることは云ふ迄もない。故に政府が小作問題解決に對する根本方策としては、小作制度の改造の外、極力農業の發達を講究して過去と同程度に米の收穫量を高める工風をするか、又は小作料の低減率を講ずるか孰れかを選ぶより途がないであらう。まして明治初年には地主の負擔(地租)と小作農の負擔(小作料)とが同一率であつたものが地租は金納で、小作料は依然として物納であるため、米價の騰貴によつてその均衡が破られた。(明治初年米價一石三圓時代には地租と小作料貨幣換算額は同額であつたが、その後地租改正によつて幾分地租も增加したが、米價四十圓を呼ぶに至つては前述の如く兩者の間に甚だしい差が付いて來た)この點から考へても農村振興といふ廣い意味から云へば兎も角農業政策上から觀れば、農民負擔の輕減のためにはまづ小作料の輕減を圖らなければならぬことが知らるゝであらう。

我國の小作料がかゝる高率であるのは、舊時代に分益小作が行はれた當時の地主の收得した農業經營上の利益分配の一部が、今日の小作制度に於ても慣習として殘されてあるが爲で、定額制度の現時に於ては、かゝる舊時代の餘習たる利益分配を小作料の一部に加へて地主が小作農に要求する如きは全然不合理であるが故に、農業經營と何等關係なき地主階級の要求する小作料は單なる地代でなければならぬから、現在の小作料のうちの或る分量、即ち農業經營の利益分配の量だけは當然漸次小作料から引下げらるべきものと思ふ。

自作農創定問題

第三には自作農創定問題である。我國の農民の過半は土地を耕作しながらその土地を所有し得ぬ小作農である。自作農と小作農とを比較すれば、農民經濟上からいつても、國家農の案敢義から云つても勿論自作農の方が有利で、自作農の數が出來るだけ多い方健全なる農業形態たるは無論である。小作爭議の如

きも地主階級と小作階級とが對立するからこそ起るので、本問の農民が總て自作農であつたならば、喧嘩の相手がなくなつて小作爭議の如き問題は起きる筈がない。故に農業問題からいつても小作問題から言つても自作農の創定といふことは極力奬勵すべきものである。次にその理由から各方面に於て之を奬勵實行し、地方府縣或は農會の如きは時に補助金をまで支出し、農銀、勸銀、産業組合等は自作農創定資金を貸出し、政府もまた多額の經費を投じて大規模に之を實行せんとし、簡易保險局は特に低資を之に供給して社會政策に資しつゝある。これは新農業政策として、土地の社會化といふ世界的思潮に應じて政府が當然施設せねばならぬことで、且つ農民及び農業のために頗る有益な事業である。

自作農創定を奬勵するにしても國家は新らしく植民地または未開地を分割して之を農民に與へるといふのではなく、在來から地主の所有してゐる土地を開放して小作農に賣却することを奬勵するに止まる。ところが現在地主の所有する土地は彼等の先祖傳來の財産で、且つ農村に於ては土地所有の多寡が直ちに社會的地位の標準となるが故に、相當の土地を持つて居らねば農村で昔の格式を保つて行かれぬといふ所から多くの地主は土地の賣却を欲しなかつたが故に、小作農が土地を買ふにも地主が賣つてくれなかつた。ところが大戰後、小作人の權利思想が勃興すると共に於ては大部分に地主が小作農のために壓迫され、從來の如くに小作經營を續けて行くことが困難となり、加ふるに農村は一般財界の不況に伴ふて漸落しはじめたが故に地主は前には先祖傳來の土地を絶對に賣らぬと頑張つてゐたけれども遂に態度を一變して「土地解放」の名の下に土地賣却をはじめるものが各地に現れ、當局は大いに之を賞揚し特志地主と稱し他の模範として一般に推賞したものである。けれども實は地主としては大抵土地に見切りを付けて、財産の置き場合を變へやうと經濟上の打算から土地開放を行ふので、必ずしも社會奉仕といつたやうな公共的を意味するものでは無かつた。それから更に狀態は一變して小作爭議が激甚となるにつれて土地買入の希望者がなくなり、小作農と雖も値段に拘らず之を購入するを欲しない、遂には農民組合では「土地買ふべからず」といふ決議さへなした。そこで地主は土地を賣らうにも賣れなくなり、今迄とは地位が轉倒して、土地の賣却に汲々たるに至り土地の價格はそのため下落する一方で、景氣の好い時分に一反歩千五百圓だ二千圓だと唱へたものが千圓に下落し、五百圓に下落し、今では三百圓でも買ひ手が無いまでに暴落し、おまけに小作料は毎年滯り勝であるのに加へて、土地負擔は容赦なく賦課せられる、故

にかゝる地方の地主は昔と反對に非常な困難な地位に立たねばならなくなつた。

この時に於て當局の自作農創定は地主にとつては實に助け船で、土地開放の美名の下に地主は極力之に應じ、小作農に土地を賣付くることに苦心した。若しこれが小作爭議勃發前であつたならば、かゝる政策は地主は到底賛成することもなく、從つて當局にかゝる政策に多大の經費を投じさせはしなかつたが、小作爭議といふ脅威のために、この案は農民運動に於ても議會に於ても大なる歡迎を受くることゝなつた。それは地主政府の農業政策としては當然なことであらねばならぬ。

自作農創定の奬勵によつて地主が多年持し來つた態度を改めて小作農に地主を分讓するといふ社會奉仕的態度を見せたにしても、土地は無償で地主は小作人にくれるのではない、左程高價をむさぼらぬにしても相當の價格で賣り放したいと思ふのは人情である。その相當の價格といふのが問題で、地主にとつては相當の價格であつても、小作農にはさうでないかも知れぬ。反對に小作農にはさうであつても地主にはさうでないかも知れない。買手賣手の考へ方では今日の地價は安いとも高いともどつちにも理屈が付く、そこで自作農創定は奬勵はするが、土地の價格の點で行詰らざるを得ない。當局の方針は奬勵はするが價格の問題については一向に考慮しない。若し今日の土地の價格が之を自營するものとして農業經營上の採算から到底引合はぬ、即ち今日の土地の價格を以てしては到底合理的の農業は經營し能はぬ(土地を一の消費品として小作農が買入れるなら格別、けれども日本の小作農は消費品を買入れるほどの餘裕はむろん持つてゐない)ものとするならば、當局はそれでも猶ほ自作農創定の奬勵によつて小作農に土地を買はせて、果して農民の救濟になるであらうか、ましてたとへ低利であるにしても金を借る世話をし、小作農に借金までさせて土地を買はせて、農業が餘計に引合はなくなつたら奬勵者は果して如何なる責任を持つか、今後の地價が益々下落して、今日幾分安價だと思つた價格でも二三年も先に一層下落し、遂に元の如き價格に上らないやうなことがあつたら、賣つた地主は得をするかも知れぬが買つた小作農は非常な迷惑を感ぜねばならぬ。また實際に於て我國の土地の價格は農業資本の價値から見れば可なりの高價で、殆んど經濟的の打算を離れたところまで買上げられてゐるのだから、かゝる高價なる土地を買つては農業は到底引き合はないことは世間周知の事實である。それにも拘らず當局は實質價格について何等の干渉を行はずに小作農の土地購入を奬勵せんとするのは地主救濟のためかはたまた農民救濟のため

かを延ばすことを得ないのである。土地購入資金を供給するといつても借りた金はいつか返さねばならぬ。少しばかりの補助を貰つたところでとても追つ付かない。農民組合が土地買ふべからずと決議するのも無理もない所である。

我國の農業經營上の缺陷は土地負擔の過重にある。土地負擔の過重は要するに、土地價格があまりに高價なる爲めである。故に農業經營の振興、農民救濟のためにはこの際國家は土地價格引下策を講じなければならぬ所である。當局は景氣挽回、經濟振興策として物價の引下げ策に腐心しつゝある。然るに近時自作農創定資金として各方面から土地資金を農村に供給し、殊に簡易保險局の如きは既に數百萬圓の資金を土地に放資してゐるが、かくの如く盛んに土地獲得資金を農村に供給することは、當然下落すべき土地價格もこのため却つて煽られて下落しない經濟上不自然な現象を呈しはしないか、これは當局の所謂消極政策に反したやり方のやふに思ふ。要するに地價を維持することは地主のためには利益かも知れぬが、農業經營のためには却つて大なる不利である。

若し當局が徹底的に自作農創定を奬勵しやうとするならば、たゞそれを奬勵するばかりでなく、彼の東歐地方の農業改革に於て行はれつゝあるやうに、これに對する種々の施設をやる必要がある。それにはまづ自作農創定に必要なる土地を政府自ら用意することである。これが實行については大地主の土地沒收といふ極端な方法まで執らずとも、せめて法律を以て土地收用權を政府が把持せねばならぬ。大地主にも種々の種類がある。或る種の地主に對しては積極的に收用權を適用してもよろしい。またある種の小作關係に結ばれてゐる土地に對しては普通の賣買によらぬ方法によつて政府は强制的に自作農創定を實行してもよろしい。それからまた土地賣買の價格に干涉して、公正なる價格を決定し得る權利を政府が持つてもよろしい。斯る實際的の施設なくして漠然と自作農創定を奬勵して見た所でそれは無意味に終ることは當り前である。けれどもそれは地主階級から成立つ小作制度調査會や、農村振興調査會で、かゝる案が通過しよう筈もなく、地主政府が之を實行する如きは全く思ひも及ばぬことであらふ。

農會は農民會か地主會か

農民と地主とが混同し、農業政策に於て地主の利益を度外して何等の方策を立て能はぬが故に、農村振興は地主救濟か農民救濟かわけがわからなくなつたことについて大いに之を助成したものに農會制度がある。我國の農會制度は中央に帝國農會

り、道府縣に道府縣農會、郡市に郡市農會といふ風に町村に至るまで自治行政機關と同様に系統的に組織され、農業の改良發達を目的として各種の事業を行ひつゝある。過去に於て農會が農業の發達に貢獻したところ決して尠少ではない。けれども農會を組織するものは農民と地主とであつて、兩者に對し法律を以て強制的に經費を徴集して事業を行ひつゝあるが故に、農業の改良發達を目的とするが、内容は農民會でなく、地主農民聯合會となつてゐる。然るにその代議員の大部分は地主階級であつて、殊に郡農會以上であつては農會議員は全部地主階級であるといつてよい。故に農會の主張するところは總て地主中心であつて、農民の利益は無視しないまでも、地主階級の利益を忘れて主張し、事業を行ふやうなことは決して無いから農會の主張が農民の輿論と見るのは大なる間違で、寧ろそれは地主の輿論といつた方が當つてゐるかも知れない。それは前に例を擧げた三つの農政問題が主として農會側の主張であるに徴しても知られる。

従前に農會は主として農業技術方面の指導奬勵をやつてゐたが、是等の事業は、縣の勸業係及び縣の農事試驗場でやれるものばかりで、殊に郡市町村農會に至つては自治機關の勸業事務と殆んど區別が付かない有様で、別に農會がなくとも農事の指導奬勵には一向差支なく強て存在を認めるとすれば、農業奬勵費を地主及び農民に特別負擔のために必要であつたに過ぎない。もと農會の精神は農業の奬勵の如きは官廳に委することなく、農民自らの團體で自治的に行ふといふ點にあつたけれども、事實農會の執務者はそんな精神は少しも諒解しないで、單に官廳の手助け機關の如く心得、農會の眞目的に對して進むほど頭が發達して居らぬから、農會の主旨は極めて良いのだが、實際は有つても無くても農民は大して痛痒を感じない、寧ろ縣廳、農事試驗場、農會の三機關が同じ仕事を二重にやつたり、意見の衝突を來したりして却つて厄介物であつた。そこで仕事の行詰の結果が遂に新らしき方面に事業の開拓をはじめた。それは近來の農政運動である。農會が技術方面の仕事だけをやつてゐる間はまだ無難であつたが、農政方面の運動を始めるに至つてたうたう地主會たるの本領を發揮し、赤裸々に地主擁護運動が行はるゝに至つたのである。

農會の經費は地主及び農民から徴集されてゐるが、地主が自ら金を出し農業の改良發達に盡すのはわるい事ではなからふが、地主と農業との關係は、出來るだけ小作料が安全に納まつて、米の價段が高くなり、地租が安くなりさへすればそれでよい。けれども農民はさう簡單には行かない。種々技術上の問題を

お互に協力し、又は政府に向つて建議したりしなければならぬ理由がある。農会は技術方面だけの仕事では存在の意味がなくなる。といつて農政方面の仕事をやれば地主会となる。こんな組織の会を農民が地主と手を携へて組織するといふのが元も〳〵間違である。否こんな会を農民がいやでも応でも組織せねばならぬやうに会費強制徴集の法律を設けたのが、そも〳〵当局の誤りである。農民もいつまでも昔の農民ではない、昔は地主階級に指導せられ保護せられて農業発達の道を講じてゐたかも知れぬが、今日では農民の知識も次第に進歩して来た。今では地主階級のお影を受けなくとも農会を組織する位のことは出来やふ。農会が地主会として進めば進むほど農民会の必要が生じて来る。そこで日本農民組合のやうな団体が発生し必要となつて来るのである。小作争議は地主と農民との立場を明かにするに与つて力が大である。地主農民聯合会たるべき農会が全国に農会網を張つてゐながら、殆んど之が対策に手を付けることが出来ないで、拱手傍観の態度を取つてゐるのは、農会が農会としての仕事を充分やつてゐない証拠である。農会は将来とても到底小作問題なぞに頭を入れることは出来ないであらふ。そして地主が政府の治下に於ては農会は地主会として繁栄するであらふが、その代り、日本農民組合の如きがほんとうの農民会として農業の改良発達、農民の[illegible]る時だから[illegible]に来ると思ふ。また日本農民組合としてもこの[illegible]な抱負は持つてゐる筈である。

農村資産階級の将来

我国の如き農業組織に於ては、農業政策上から観れば地主階級の如きは何等その存在の必要を認めない。これまでは農民及農業の指導者として保護者として必要があつたかも知れぬが、今後に於ては地主は農民階級の経済的社会的向上に寧ろ障害となるであらふ。農業の発達のためには地主保護政策でなく農民保護政策が樹立されねばならぬ。農村振興のために地主救済は必要であるかもしれぬが農民救済を忘れてはならぬ。

農村の資産家は地主階級としては最早やその存在の意味が無くなるであらうが、農村の資力階級、智識階級としては農村振興のためには尽さねばならぬ幾多の任務があり、また彼等の努力に待たなければならぬ点が数多くある。農村振興といへば直に農業振興を連想するけれども、我国の農村は名前こそ昔の儘風で「農」の字が冠せられてあるが、村民が全部農業者で、農業者の仕事は全部農業である如き簡単なるものでは決してない。農村は農業以外に資本と知識を投じて振興発達せしめねば

ならぬ産業はいくらもある。今後の農村の発展はむしろその方面に広大なる活動の余地を持つ。農村の資産家に彼等が地主なるの故を以て農業方面に幾多の義務を強要するのは、決して農民のために取る所ではない。農村資産家は土地を所有するが故に自分は農民などと称し自家擁護の運動をなす如きは最早や時代錯誤として避けねばならぬ。今後の農民は単なる百姓だけではやつて行けぬ如く、今後の地主は小作料だけで徒食することは経済的に許されなくなるであらう。農民と地主とは「村民」としてはお互に手を携へて生活し幸福なる農村を形成すべきであるが、職業上の立場はお互に明瞭にして置く必要がある。農村資産家が自己の為め、社会のために働くべき最も適当なる方面は、近時世界的に勃興し、新らしき経済組織を創成せんとするかの産業組合運動の如きは慥にその一であるが、これにつき詳論することは紙面が許さぬから他日に譲る。

要するに農村問題、農業問題及び農民問題の三者は互に関聯はしてゐるが、意義に於て明かに区別して置かねばならぬ。そして農業政策は、その区別に応じて適切なる手段を講ずべきものである。農村問題は農村全體の問題であつて、独り地主階級だけの問題でもなければ、農民だけの問題でもない。故に農村振興のためには農民救済も必要であれば地主救済も必要であら

[illegible]また農村問題は決して農業問題と同一ではない。単に農業だけ発達せしめたところで、農村問題の解決が付くものでなく、農村工業も農村商業についても考へなければならぬ。尤も農村に於て地主と農民、農業と商工業との間に軽重のあるのはいふ迄もない。農業問題は決して農民問題と同一ではない。同じ農業を考へるにしても国家的見地から見なければならぬ場合と、農民の立場から見なければならぬ場合とある。これ等の農業政策に種々の錯誤のあつたのは全く是等の関係を混同したがために外ならぬ。殊に地主階級と農民との関係を明かにすることは新農業政策を樹立する上に最も必要な事柄である。

政治的舊勢力への最初の一擊

——無産政黨出現の機運と政治的雰圍氣の廓淸——

大山郁夫

一 所謂政體墮落の一般的原因

ルソーは、彼の時代の政治過程に對する深き洞察を以て、すべての政體は究極に於て必然的に墮落の傾向を辿るものであることを指摘した。即ち彼に依れば、如何なる政體の下に於ても、政府を構成する特殊團體は、早晩その團體自身の特殊利益を、全社會の一般利益の上に標置する誘惑に陥るものである。かくて、或る一政體が創建された際に於て絶大の感激を以て政權運用の任務に就いた當事者らも、その特權的地位に馴れるに從つて、何時となく當初の目的から次第に遠ざかつて行つて、遂に全社會の福祉を彼等の手中に簒奪しようと圖るやうになるものだ。——と、かういふのが、彼の所論から抽出し得られるそれの要旨である。

ルソーのこの説明が果して、如何なる時代の、且つ如何なる様式の政體にも當てはまるものであるか否かは別問題として、單に過去から現在に至るまでの東西各國の政治歴史を通觀するとき、我々は、そこに、ルソーの冴えた手腕が、

政治過程の上に於ける救ひがたき一病弊の上に、鋭き批判のメスを下してゐる事實を認めることを拒めないやうな氣持になるのである。

その政治理論の上に於てルソーからの影響を多分に受けてゐることが掩はれないジー・ディー・エィチ・コールは、ルソーの右の提言にもまた、或る重大なる意義を持たせてゐる。それは殊に、優に彼の名著の一つとして算へることの出來る『社會原理』を通讀したすべての人々には、容易に氣附かれてゐる筈のことである。ところで、このコールは、ギルド・ソーシアリズムの立場から將來の社會組織の計畫に專心した際に當つても、常に右の一點を考慮のうちに置いて、特に全社會の政治的統制の上に停滯沈滯の傾向の侵入して來ようとする危險に對して、精細なる注意を以て警戒することを怠らなかつた。この一事は、彼の意見のすべてに亘つて全幅の賛意を示すことを躊躇するものといへども、率直に認めない譯には行かないところのものである。そして私から見れば、コールの論策の我々に對して最も多分の參考價値を包藏してゐる點も、一つはそこから來てゐるもののやうに思へるのである。

かういふのは、コール及びその一派の苦心の立案による將來の社會組織に於て、それの政治機關の墮落の傾向が絕對的に阻止され得る見込みがあるといふことを示唆しようとしてゐるものでは決してない。それは、更らにまた、ルソーの意味に於ける政術の墮落の傾向が、一般に徹底的に排除され得る可能性のあるものか否かといふ事も、全然別問題である。私は茲ではただ、私の眼界を過去から現在までの政治歷史の上に限局して、そこにルソーの言葉の有意義な一面を注意しようとしたまでである。おそらくこの點は、殆んどすべての政治上の觀察者たちの間に異論のないところであらう。無論、そこから先きの一切の諸問題に關しては、議論が多岐多端に分れる境緣が無限にあるか、しかしそこまでのところには、意見の不一致の餘地が殆んどないやうに、私には見られる。そして、議論の多岐多端に分れる分野

は、本文の[illegible]

二　舊勢力の支配下の政治の墮落

我々が特に我國の政界の現狀を凝視するとき、右のルソーの古き言葉が、最も直接に我々の意識の裡に蘇つて、しかも或る新らしき意味を帶びたものとして顯はれて來るのである。一ト口に言へば、年來我國の憲政の進路の上に蟠つてゐる所謂『政局の行詰まり』と稱せられる現象は、それをどういふ意味に解釋するにしても、所詮は既成政治的諸勢力の支配下に在る我國の代議政體の腐敗乃至頽落から來てゐるものである。尤も我國の代議政體は、ルソーが始終眼中に描いてゐた一種の都市國家の政治樣式とは異がつて、近代に於けるすべての有力な立憲國家内の政治樣式と同樣に、大國家組織の下に於けるそれであるから、從つてそれの腐敗頽落の傾向といふものは、直接に政府を構成してゐる特殊集團の退化から來たものであるよりは、寧ろそれの背景を構成してゐる支配階級の退化を、——若しくはその支配階級の頤使の下に動かされてゐる政策の運用が最早現實の社會狀態に適合しないものになつたといふ事實を、——如實に反映してゐるものに外ならないのである。

かくて、『政局の行詰り』といふ言葉が我國の一般の政論の上に於ける一の標語となつてからこのかた、既に幾年になるか知れないほどの月日が經過してゐる。そして今日では、いくら聲を嗄らしてそのやうなことを絶叫してみたところで、『またか！』と聞き流される位のことで、それは最早何人の感興をも喚びさますことが出來なくなりかかつてゐる。『藩閥族打破』だとか、『憲政擁護』だとかの合ひ言葉が民衆を昂奮させたのも、最早返らぬ過去の日の夢となつた。更らにまた、『憲政の常道』といふ標語が近年まで持つてゐた魅力すらも、今では既に幻滅の悲哀を經驗してゐる。無論、

既成諸政黨の人々が、今尙ほ依然として性懲りもなくそれを繰返してゐるとは事實であるが、しかし彼等といへども、彼等自身がそれへの信仰を失つてゐることを知つても居れば、また公衆がそれから無上の感激を得るやうなことがなくなつてゐることを認めても居る筈である。のみならず、彼等はまた、最近の政治事實及び社會事實が、——そして同時にその趨勢に押し流されつゝ刻々當面の糊塗に沒頭することを餘儀なくされてゐる彼等自身の實際上の行動もが、——曾て彼等が『憲政の常道』として概念してゐたものを着々と裏切りつゝあることを、充分に知り拔いてゐる筈でもある。それにも拘らず、彼等が尙ほ依然として、いつまでも斯うした老廢し切つて蛻脫けの殼のやうになつた標語にこだわつて居なければならないのは、彼等が彼等自身の立場から、或る新らしき生きた標語に探り當てることが出來なくなつたところから來てゐるのである。それはそれ故に、滅び行くべく運命づけられてゐるものの悲鳴としてすらも聞かれるのである。たしかにそれは、如何なる點からも『白鳥の歌』として聞くには餘りに散文的なものではあるが、しかしそれは、何づれにしても、將來を支配するために勃興しつつあるものの、若き生命力に滿ち溢れた叫び聲では、斷じてない。

いかにも既成諸政黨は、既に世上に於て充分に注意されてゐる通りに、普選法の第五十議會通過後に於て、急に所謂看板の塗り替へに腐心した揚句、段々と社會政策的立法の唱道の方へ移つて行つたことは事實である。けれども、それは明かに、直接に彼等の生存上の必要から迸り出た要求を代表してゐるものでなくて、普選實施後の約一千萬人の新有權者の大多數を籠絡しようがための手段として見られるものにすぎないばかりではなく、それは實に、普選實施の結果として擡頭することが期待されてゐる無產階級政黨の勢力を最少限度に止まらしめようとする動機から來てゐるものでもある。で、手短かに言へば、それは單に、近き將來に無產階級政黨として產まれ出ようとしてゐる新勢力の主張を、

無意義にして不完全に、無氣無味に、且つ曖昧に、放置して置くに過ぎないといふ事を示すことになる。且つ、て、既成諸政黨が何にもなくさうした曖昧に放任してゐるのは、現在の政治的に自分達にだけ都合の好い利益の爲の有意義なることを語るものであるよりは、寧ろ無產階級政黨がこれを語るものだとすべきである。少くとも、如何なる意味を帶びてゐるにもせよ、また如何なる動機から出たにもせよ、苟くも社會政策的施設を立法の分野の上へ移入することが免れ難きものとなつて來た以上、その趨勢の發生を促した直接の動因となつた社會層であるところの、無產階級そのものゝ中を割つて出た新政黨の方が、本來資本階級の階級的生存上の利害感の政治的表現機關として終始して來て、しかも今でも尙ほその本質を替へないでゐる既成諸政黨よりも、少くともその範圍内に於て一層有意義なものであることは、別に廻り諄い說明を須つまでもなく、そのまゝ正面から明快に理解し得られることである。

もとより、斯ういふことは、既成諸政黨の衰滅が眼前に迫つてゐて、そして無產政黨の興隆が今にも實現されようとしてゐるものだといふやうなことを意味するものでは、決してないのである。既成諸政黨の政治的支配は、今後といへども尙ほ相當の期間に亘つて、その現狀を持續して行く可能性があるばかりではなく、時としては、縱し一時的にもせよ、一層優勢に赴いてゐるやうな外觀を示すやうなことすら、全然ない譯ではないであらう。從つて無產政黨は、將來それが政權の地位に到達するまでには、誰れもに想像がつく通りに、この上尙ほ幾年間かに亘つて、幾多の惡戰苦鬪を潛り拔けなければならない必要に迫られるであらう。が、それにしたところで、衰運を辿つてゐるものと盛運に向つてゐるものとを區別する標識は、その間にも明かに認められるのである。從つてその點から、前者が次第に過去を代表するものとなりかゝつてゐるに反して、後者が刻々に將來を代表するものとならうとしてゐることを、少くとも一の傾向として見る事に對する分には、その事に何等の不自然さもないやうに、私には感じられるのである。

が、兎も角、既成諸政黨の各々が、尙ほその犧牲的努力をでも維持し續けて行く間は、彼等が社會生活上の新機運に對應するためにとの觸れ込みの下に提出する社會政策的方法への進入の聲明も、今日では尙ほ無産階級的生活意識に充分に眼ざめる點までには達してゐない民衆の大部分を、或る程度までそれ自身に追隨させて行くことが出來るであらう。けれども、すでに多少とも無産階級的生活意識に眼ざめて來てゐる民衆の一部分は、當面の諸事情の下に於ても、さうは容易にその手に乘せられるものではない。彼等は既成諸政黨の社會政策的立法の聲明が、それら既成諸政黨の生存上の現實的必要から直接に出て來てゐるものではなくて、單に當面を糊塗しようがための附燒刃にすぎないものであることを、充分に知り拔いて居る。從つて彼等はまた、既成諸政黨のさうした意味の聲明は、縱しそれの幾分かが實現され得る可能性があるものとして見たところで、所詮は無産政黨から出る同樣の主張とは、既にそれの動機の上に於て根本的相違を示してゐる通りに、それの性質、程度、及び範圍の上に於てもまた、それに相應するほどの隔たりを見せるであらうことをも確信してゐる。しかも、民衆中のかうした無産階級的生活意識に眼ざめようとする範圍が、今後比較的急速に擴大してゆくであらうことは、極めて有理に推測し得られる。殊に、民衆中のそれ以外の部分が、既成諸政黨の甘言に釣り込まれがちの狀態に在るのは、確乎たる信念とか、精密なる知識とかから來てゐるものではなくて、寧ろ單に無産階級的生活意識の缺乏といふやうな消極的原因から來てゐるのが最も普通だといふ事實を基點として言へば、今後この原因が排除されてゆくだけづつ、既成諸政黨に不信任の眼を向けるものの範圍がそれだけづつ擴大して行くであらうことが、有理に豫見し得られるのである。しかも、その原因が排除されるといふことは、縱し多大の困難に伴はれることであるに相違ないにもせよ、決して全然の不可能事だとは言へないのである。そこに無産政黨の前途の樂觀される基礎もあれば、そこにまた既成諸政黨の將來の行程が悲觀される根據もある。少くとも、我々が幾分か永い眼で

見る限り、さうしたことを當面の責任を以て遂行し得られるものと、自他共に確信してゐる。

三　無產政黨運動の最近の進展

かうした形勢の下に於て、我國には始めての無產政黨が、今や着々とその組織の方へと急ぎつゝある。殊に、現在の政局の雲行きから判斷すると、來るべき第五十一議會の解散が、八九分通りまでは不可避的のものらしく見られてゐるところから、無產政黨はその時までに政界に乘り出し得る準備を整へておかうといふ意圖の下に、一層の焦燥氣分に驅られてゐる徵候さへも見える。のみならず、三四の地方——委しく言へば、九州での八幡、關西での尼ケ崎、並びに關東での足利及び野田——では、地方的無產政黨が完全に出現してゐる。これらは皆、地方的無產政黨組織運動から出發しようといふ方針を少くとも現在までのところでは採つてゐる勞働總同盟の指導もしくは後援の下に出來上つたものと考へられる。が、勞働總同盟以外の勞働團體の多くのもの、並に日本農民組合の如きは、寧ろ出發點から單刀直入的に全國的に統一された無產政黨の組織に赴くことの有利なることを主張して、殊に後者は、最近そのための準備的協議會を八月十日に大阪市で開くことを、他の諸團體に向つて提議した。私の本項執筆の際は、右の協議會が進行中の筈であるから、そこでの決議がどういふ結果に導かれたかに關する報道は、無論まだ私の手に達してゐないので、私は玆にそれに關して如何なることをも言ふことは出來ない。が、しかし、無產政黨が全國的に統一された基礎の上におかれなければならないといふことは、現在直接もしくは間接に無產政黨運動に參加してゐる殆んどすべての人々に依つて、一樣に痛感されてゐることである。で、前記の三四の地方的無產政黨も、行く行くは全國的統一的無產政黨の中へ呑まれて行かなければならないものであるといふことは、私の聞き知つてゐる限り、それらの當事者たちに依つても、齊しく認

識されてゐるのである。勞働總同盟の意向も、おそらくそこにあるに相違あるまい。

最近ジュネーヴの國際勞働會議から歸つて來た勞働總同盟の會長の鈴木文治氏は、大阪での『朝日』の一記者との會見に於て、『(勞働組合)評議會では地方的無産政黨樹立が惡るいなどといつて居るが、各地にはその土地固有の事情があつて、すぐ全國的の政黨をつくることは困難だ。できるところからドシドシと拵へて行くのがなぜ惡るい?』(十日の『大阪朝日』)と言つたと報道されてゐる。いかにも、この談片の記事だけでは、氏の眞意が充分明瞭でないやうに思へるが、しかし氏がその前日、門司での『毎日』の一記者との會見に於て、『私は無産政黨の組織は急ぐには當らないと思ふ。各團體から候補者を出し、代議士に當選してから政黨を組織しても遲くはない』(九日の『大阪毎日』)と言つたと傳へてゐる記事を之れに配して解釋すると、氏の意向の那邊にあるかが、自ら明かになるやうに思へる。私は別に勞働總同盟を代表しての鈴木文治氏のこの問題に關する意見を直接に聞いた譯ではないが、しかし右の兩新聞の記事から綜合して、氏もまた、時期の問題に關する多少の意見の相異を別にしては、矢張終極に於て全國的統一的無産政黨の出現を促進することの必要を意識してゐるものとの推定に、私は導かれるのである。尤も、かういふのは、右の最後の新聞記事の中に、單に『政黨』となつてゐるのを、『全國的無産政黨』といふ言葉に引直ほして解釋しての上のことではあるが。——

だとして見ると、無産政黨運動に携はつてゐる多くの個人及び團體の間には、なるほど戰術上の問題に關して多少の見解の相異が存してゐることは事實であるが、しかし早晩全國的に統一された基礎の上に立つ無産政黨の出現を要望することに於て、完全に態度の一致があるものとすることが出來るのである。もとより、さうした全國的統一的無産政黨の急速なる出現のためには、戰術上の問題に關するその見解の分岐點も、出來るだけ早く平均されることが極めて望ま

しいことであるには相違ないが、しかしそれに、[illegible]

我國の既成政治的諸勢力が、あらゆる手段を盡くして無産政黨の組織を妨げようと努力して來たにも拘はらず、今日では右に述べた通りに、それの出現は全然不可抗的のものと見られるやうになつてゐる。また多くの人々は、無産政黨運動の進行を、無産階級側に於ける物質的資力の缺乏といふ一點から極度に悲觀してゐたにも拘らず、——且つまた、この物質的資力の缺乏といふことは、たしかに無産政黨運動の上に實在してゐる一の弱味であるにも拘らず、——尙ほ且つ無産政黨運動は、實は當初多大の危惧を以てその企てに着手したそれの當事者たちにさへ殆んど意外に思はれるほどの速度を以て、支配階級側から投げ掛けられた無數の障碍の累積の中を潜り拔けつつ、遂に右に述べたやうなそれの現狀にまで辿り着いたのである。このことは 或る政治的勢力の發生及び成長のためには、物質的資力だけがそれの唯一の條件を構成するものでないことを我々に悟らせるに充分である。この點に關しては、私が、本誌の前號に揭げられた私の小論文中の或る箇所で述べた通りに、問題は結局、社會心理過程に對して或る緊密なる接觸點を持つてゐるものである。もとより、私がまたその同じ論文中で述べた通りに、金力は權力と共に、或る政治的勢力の自己保存の目的の下に、實際上多大の程度及び範圍に於て行使されてゐるものでもあり、また或る期間に亘つて相當の偉力を伴つてゐるものであるには相違ないが しかし終極に於ては、それにも或る嚴格な限界が存してゐることを免れない。少くとも、或る樣式に於ける金力及び權力の行使が、民衆の心理に於て積極的に否認される程度及び範圍が增進すればするほど、それの効果が反比例的に減退するのが常例である。この點に於てもまた、問題はそれ故に、結局は社會心理過程に交涉してゐるものと見ることが出來るのである。

四　我國の憲政上の特殊事情とその成果

しかし私は、初めに事の序にといふほどの輕い意味で、無産政黨運動の現狀を顧みてゐたのであつたが、何時の間にかその方向へ深入りしすぎて、殆んど本文に於ける私の出發點を忘れかけようとするところへまで進つて來た。だが、この邊で私は、今一度そこへ立歸らなければならないやうな氣分に驅られることを感じる。

もつとも、無産政黨運動の進路を跡づけることは、必ずしも私が本文の初の方で提出しておいた問題と全然無關係なものではない。即ち私はそこでは、從來の政治的諸勢力の支配下におかれてある我國の現在の代議政體の腐敗墮落の趨勢を考察しつつあつたのだが、無産政黨の議會への侵入が、かうした不快な傾向に對する一の對症劑として、將來の政治的空氣を廓淸する上に、或る偉大なる効力を發揮するであらうことは、中立的立場の上に在る極めて多數の人々に依つて、屢々言ひ表はされてゐる考へである。のみならず、時として我々は、有理に無産政黨の擡頭を悦ばないところの既成政黨側に屬する或る一部の人々の口からも、略ぼ同樣の意味合ひの言葉が漏らされるのを聞くことすらある。無論彼等は、或ひは多少の負惜みの氣持を混じた寬大さを示さうとする心理からとか、或ひはまた、無産政黨が近き將來に於て大した勢力にまで發展する氣遣ひはあるまいといふ豫想に伴ふ安易感とかから、さうした物の言ひ方をしてゐるものには相違なからう。がしかし、それにしたところで、彼等が斯くもさうしたことを口にするには、更に何それ相應の根據が——彼等が明確にそれを意識してゐると否とに拘らず——そこに存してゐるものと見なければならない。で、その根據を出來るだけ明確に見極めようといふのが、本文の標題が示唆してゐる通りに、實は私が私のこの論文の歸着點として豫見してゐたものである。このことが絕えず私の念頭に蟠つて居たところから、私が幾分か不用意で居た間

た、[illegible]、[illegible]
自我と政治的不[illegible]の經濟との關係の[illegible]に入り込む前に、[illegible]とも、私は[illegible]に[illegible]に[illegible]付けておいたことの[illegible]
附けてしまはねばならぬ。さうすることが當然の順序でもあり、またこれからさきの論點を發展せしむるための最も自然的な端緒をつくることにもなるであらう。私はそれ故に、少くともこの目的の範圍內で必要と認められる限りに於て、現政界の腐敗墮落の趨勢に關する私のさきの論述に續けて筆を進めてゆかうと思ふ。

ブルジョア政治のイデオロギーの記號ともいふべき「憲政擁護」とか、「憲政の常道」とか言つたやうな各種の標語が、民衆の感激を喚る力を失つて、さうしたことを口にすることすらが、何となく時代錯誤的な感じを與へるやうになつたことは、多年我國の代議政體の內部に於て醸成されつゝあつたそれの腐朽狀態の外的表現でなければならぬ。が、かうした點に關して細說を重ねることは、今日では最早餘りに常套的のものになつてゐるやうに見られてゐる樣々の議論を今更らしく陳列することになるばかりでなく、私自身は本誌前號所載の私の小論文に於て、それの或る重要なる一二の方面を、或る程度に詳說したことでもあるから、茲ではそれに就いて、餘り多くを語らないことにするつもりである。

ただ我國の憲政史が、西洋諸國のそれに比べて、大體に於て極めて著るしき對照を示してゐるのは、我國の代議政體が未だ曾て一たびもその盛時に遭遇したことがないうちに、既に早くもその衰頽期に入つてゐるといふ一點に於てである。私から見れば、これは言ふまでもなく、我國の歷史上の特殊事情と、最近の半世紀間に於て特に著るしく世界の共通事情としての性質を得て來た社會的經濟的政治的進化過程との交錯及び抱合の裡から産まれて出たものである。最も

簡短に言へば、まづ第一に、我國の市民階級は、明治維新の社會的經濟的政治的大轉換期に當つても、決してそこでの主導力として活躍した譯ではなく、從つてそれ自身の單獨の力の上に立つて、封建的舊勢力に向つて挑戰しつつ、それの最後の崩壊の時期を促進したものでもない。否、我國の封建制度の最後の命脈を斷つたものは、事實上却て封建制度の中に在つて力を蓄へたところの、或る封建的諸分子であつた。即ちそれは、薩長土肥の諸藩を中心とする西南日本の諸侯の統率の下におかれてあつた封建的諸勢力であつた。それらの封建的諸勢力は、三百年に近き平和時代の間に於て徐々に經濟的實力を集積しつつあつた市民階級からの財的援助を後楯として、徳川幕府の政治的支配を根本から覆滅し了ふせたのであつた。

これらの封建的諸勢力が一の封建的支配を倒したその跡へ、他の封建的支配を打建てることを企てなかつたのは、一方に於ては、當時の我國の社會的經濟的進化が、もはや地方分權主義に基礎づけられることを以てそれの根本主義とする封建制度の再建設を許さない段階にまで發達してゐたためであつたと同時に、他方に於ては、當時既に西洋諸國の資本的帝國主義の壓迫の手が、我國の上にも臨んでゐたためでもあつた。

かうした諸般の事情の複合の下に於て、徳川幕府を倒潰せしめることに成功した右の封建的諸分子は、それの破壊の上に他の新たな封建的支配様式を樹立する代りに、一の官僚政府を組織して自らそれの主人公となり、そして維新の改革事業の手始めに、先づ中央集權主義の政治的支配様式の基礎を確立し、その下に於て所謂富國強兵主義の政策を行つて、かくて我國をして、將來には資本的帝國の一として世界の列強の班に伍せしめようと圖つたのである。かういふ譯で、國民皆兵主義の兵制や、國民教育制度やを創設したのも彼等であつた通りに、新生日本の商工業を哺育乃至助長したり、地方の自治制度や、全國的代議制度やを立案し實行したりなどしたのもまた、矢張り彼等であつた。

かういふ國に、我國の市民階級は、あゝした社會的政治的大轉換期に際しても、決してそこで一つの社會的地位を獲得して、そこから新時代を導き入れた譯ではなく、從つて彼等はまた、立憲政治の樹立に關しても、決して戰鬪の全力を盡した死生の戰ひの間からそれを贏ち得たものでもなかつた。それ故に、西洋諸國においては、立憲政治上の習慣中には、市民階級の誇りとする生活上の傳統から受け繼がれてゐる行事が多く含まれてゐて、そしてそのことが立憲政治上の重要なる用語の或るものの上にさへ反映されてゐるやうな事實も存してゐるが、我國に於ける事情は全然それに反して、立憲制度がそれの模範を、主として西洋諸國の代議政體から取つたものであるにも拘はらず、それの習慣及び用語の中には、寧ろ多分の封建的もしくは官僚的臭味に充ちたものが少からず含まれてゐるのである。そして、さうしたことのすべては、その根本をただせば、つまり前に述べた通りに、我國の歴史上の特殊事情と、世界の共通事情として見られる社會的經濟的政治的進化過程との交錯及び抱合の裡から生じて來たものである。

かうした我國の特殊事情と世界の共通事情の交錯抱合の裡から生じた一種特異の空氣は、殆んど宿命のやうに、維新以來の我國民生活を方向づけて來て、しかも現に今でも尚ほ、我々の生活を強く支配してゐるのである。否、單にさういふことが言へるばかりでなく、我々は現在に於てこそ、却て過去のどの期間に於てよりも、一層痛切に、かうした宿命の手に囚へられてゐることを感ぜしめられてゐるのである。少くとも、交通が文字通りに世界的になり切つてゐる今日に於て、東隣の資本帝國のアメリカと、西隣の共産主義國家のロシアとの中間に介在する地位におかれてゐる我國民生活に關してそれを言ふことは、如何なる點から見ても、決して根據のないことだとは言へないのである。だが、我々が今特に我々の視野をそれより遙に狹ばめて、單に現代日本の憲政の進化の方面だけに着眼して言ふことにしても、今日多くの人々によつて注意されてゐる通りに、我國に於ては政治的自由主義が何等見るべき程度に完成せしめられない

うちに、既に早くも、それに逆行する資本的帝國主義の時代が到來してゐるといふやうなことも、結局は矢張り同じ原因から出て來てゐるものに外ならないのである。で、今日新興の氣配を示してゐる無產政黨が、それの發生の根本動機に於て、無產大衆の階級的生存上の利害感の政治的表現といふことを目標として發程しやうとしてゐる點に於て、明かに經濟的性質の樣々の主張を以てそれ自身の生命としてゐるものであるにも拘らず、尙ほ且つこの目標に到達するための豫備的段階上の一必須事として、ブルジョア政黨が當然企てるべく豫期されて居て企てることが出來なかつた各種の政治的自由を確立する事業をも同時に負擔しなければならないやうな境地におかれてゐることなどは、決して偶然だとは言へないのである。更にまた、私が本節の初めの方で提示しておいた通りに、我國の代議政體が、未だ曾て一度もその盛時に遭つたことがないうちに、既に早くも、ルソーがすべての政體の必至的運命と觀じた腐敗墮落の道程を辿りつつあるやうな事情も、つまりは矢張り同じ原因に胚胎した他の一現象と見做されなければならないものである。

五　現下の政治的倦怠の歴史的原因

以上略述したやうな事情の下に發生し成長した我國の代議政體が、今日に至るまで未だ曾て一たびもその光榮時代といふべきものを持たなかつたことには、歷史的に見てこれ相應の根據があつた譯である。今茲で再びその要點だけを概說することにすると、まづ第一に、我國の封建制度を最終的に撲滅した直接の當事者は、當時既に漸次に興隆の機運に向ひつつあつた市民階級だつたのではなくて、却てそれら自身封建制度そのものの上に成長したところの封建的諸勢力であつた。もとより彼等が倒幕の事業に比較的容易に成功したのは、主として彼等が、既に久しく我國民生活の内部に於て漸々と醱酵されつつあつた社會的經濟的進化の新傾向と、海の彼方から滔々と殺倒しつつあつた諸外國の資本的帝國

[illegible]

て、その時以來彼等の間から擡頭した支配的勢力は新たに官僚政府を組織してから後も、[illegible]じて手に唾して贏ち得た權勢を、その上引續いて完全に維持してゆくためには、さうした大勢に逆つて何事をもなすことは出來なくて、寧ろそれに順應しつつ彼等の行程を進めてゆくより外に途がなかつたことを痛感せしめられた。かくて彼等は、舊封建制度の廢墟の上に、新たに中央集權主義の政治様式を展開せしめて、その下に於て內治外交上の萬般の政務を熱心に處理し始めた。そして殊に經濟的方面に於ては、彼等は我國をして、少しも早く資本的帝國の一として世界の列强の間に獨自の地位を確立すべく、何よりもまづその富力を集積せしめることを目標として、それに關する一切の政策を切り盛りした。從つて彼等はまた、政治的方面に於ても同じ目的から、當時の我國の社會的諸關係に立脚した打算を基準として、一種の變態的立憲政治——少くともイギリス流の政黨政治及び責任內閣制を立憲政治の常型的様式と見る習俗的見解からは、たしかに一種變態的のものと指摘することが出來るそれ——の方向へ赴かしめるべく、彼等の得意の指導誘掖の結晶とも見られるべきプロシア式パターナリズムを、思ふ存分に發揮したのであつた。

他方に於て、我國の市民階級は、微々たる勢力蓄積時代の初期から、最早押しも押されもせぬ産業的アリストクラシーを構成する今日の資本階級の地位に進み入るやうになつたまでの、それの發達の全過程に於て、曾て彼等が舊時の封建政府に對して極めて忍從的であつた通りに、維新以來の官僚政府に對してもまた同様に、未だ曾て一度も表立つた反抗の聲を擧げたこともなければ、從つてそれに向つて敢然と自由解放の戰ひを宣したやうなことなどは、尙ほ更らにないことであつた。また彼等は、さうした積極的反抗態度に出る必要を持たなかつたのでもあつた。即ち、資本階級の經濟的實力の增進は、當初から官僚政府の哺育的乃至助長的施設もしくは行動に負うたことも、決して少くはなかつた、

日清日露の兩戰役を經てその羽翼を完備せしめた我國の資本階級が、官僚政府が維新以來細心の注意を以て守り立てた資本的帝國主義、及びそれに必然的に附隨した軍國主義の恩惠に感謝する理由を持つたことは、自明のことのやうに考へられるのである。

かういふ譯で、我國の資本階級と官僚政府との間には、如何なる意味に於てかの敵對關係が存してゐたよりも、寧ろ大體に於て一種の平和關係が成立してゐたのであつた。もとより、この平和關係は、それの裏面に於て幾多の醜惡な部分を藏してゐたものであることとは、爭ふべからざる事實であるが、しかしこの問題に關するさうした美學的考察は、茲では直接に交渉のないことであるから、私は暫くそれを不問に附することにする。それで兎も角、これらの兩側の間に於て、敵對關係よりは寧ろ平和關係が支配してゐたといふ一事實は、更らにそれの必然の歸結として、新日本の憲政史上に於て、各種の政治的自由が堅實に確立される道もなかつた間に、既に早くも資本的帝國主義が鞏固なる地盤を得たと言つたやうな、他の別個の一事實を派生せしめたのである。

更らにまた、我國の資本階級と官僚政府との間に成立つてゐた右の一種特異の關係は、憲政開始以來の政黨と官僚との間の關係の上にも、極めて根強き影響を及ぼして、そして今日に於ても尚ほ、歴然としてその痕跡を殘留せしめてゐるのである。尤もこの事は、我國の政黨そのものの發生に伴つた諸事情にも交渉を持つて居ることは、同時に我々が認めなければならない事實である。一ト口に言へば、我國の政黨は、その發生の初期に於ては、市民階級の中から起つたのではなくて所謂失意の志士たちの或るものの首唱の下に組織されたものである。これらの失意の志士たちは、曾て維新の改革事業に參加しながら、その後の事件の推移のまにまに、何等かの理由に依つて、思ひ通りに廟閣に列して驥足を伸ばすことが出來なかつた不平を攄べようといふ動機から、彼等が西洋諸國のブルジョア政治のイデオロギーから—

[illegible]烈に國會開設促進運動に從事したものである。この國會開設に於て[illegible]起つた愛國公黨とか、自由黨とか、改進黨とかの諸政黨は、いづれも皆その當初から意識的に資本階級の利害代表機關として發生したといふよりは、寧ろ時の政府に立ち向つて反對の烽火を有力に擧げる役割りを演ずる目的を以て產まれたといふべきものである。かうした動機から擡頭した諸政黨も、時日の經過につれて次第々々にブルジョア政黨としての色彩を濃厚に帶び、遂に憲政樹立以來一貫して、意識的にも無意識的にも純然たる資本階級の傀儡として行動するやうになつたのは、どうにも拔き差しのならぬ歷史的必然の理法の然らしめたものといふより外はないのである。即ち、さうした運命は、本來ブルジョア政黨のイデオルギーの結晶である所謂『立憲主義』の信條の上に立ち、それに終始することを以て、それ自身の中心的使命とし、終極目標とする――若しくはさうすることを衒ふ――政黨には、必然的のものと見られる根據があるのである。そこに我々は、現在に於て無產大衆の階級的利害の政治的表現を目標として議會行動に入らうとしてゐる無產政黨の當事者たちが、極度に警戒しなければならない陷穽が標示されてゐることを、不注意に見逃がすことが出來ないのである。

政黨と資本階級との密接なる相互關係が特に著るしく表面に顯はれるやうになつたのは、日清戰役後に於て資本階級の經濟的實力が飛躍的進展を遂げてからのことであつた。それから更らに日露戰役及び世界大戰を經て、その傾向が更らに層一層と加速度的に增進したことは、改めて細說するまでもないことであらう。更らにまた、それが如何に多くの社會的政治的弊害を國民の頭上に累積せしめる原因となつて働いたかに關しては、既に世間公知のものとなつてゐる諸事實の中からだけでも、無限に多くの實例が算へ立てられる。私自身は、本誌前號所載の拙稿中に於て、それらのうちの

或る重大な抑制のものの一二に觸れておいたから、茲ではそれを再說することを避けよう。寧ろ私が茲で特に言はうとしてゐることは、資本階級の發展と共に急に自分達の實力の增進したことを意識し始めた諸政黨が、政權爭奪の目的を中心として、官僚に向つて挑戰しかけてからの彼等の態度の特徵に關してである。

私は既に、我國の資本階級と官僚との關係を瞥見した際に、そこに大體に於て何等の根本的意義を帶びた爭點のなかつたことを述べた。が、諸政黨と官僚との間には、尙ほ更らさうしたものが缺けてゐた。維新以來の歷史を辿つて見ると、彼等は、少くとも彼等の指導者らは、畢竟官僚と同穴の狢であつた。唯々その間に於ける政治事情の推移が、彼等と官僚とを、異つた兩側に組み分けしたまでのことである。もとより彼等は、彼等自身の政治的地位から出た當然の要求として、彼等が諸外國のブルジョア政治のイデオロギーから完全に若しくは不完全に借りて來た政治的自由主義を高唱したことはある。けれども、彼等は彼等自身のその場その場の便宜に任せて、それを標榜するのを常例としたばかりであつて、真心からそれを生活行動の信條としてゐた結果として、已むに已まれぬ衝動からそれを絕叫したのではなかつた。從つて彼等は、それがために死生を賭して戰ふといふやうなことを、絕えてしなかつた。また彼等は無論、官僚と同樣に資本主義の謳歌者であつたばかりでなく、資本階級との彼等自身直接の接觸のために、その態度を一層露骨に表示して來た。彼等は更らにまた、資本的帝國主義及びそれに必然的に附隨する軍國主義に向つて、主義として反對すべき如何なる根據をも持つたなかつたばかりでなく、寧ろ他に相當の反對的原因がない限り、自ら進んで積極的にそれを助長しようとする傾向にさへ驅られた。かう見て來ると、彼等が政治上の根本主義もしくは基礎的見解からは、如何なる點に於ても、官僚に向つて抗爭すべき理由のなかつたことが、極めて明白に認められるのである。從つて彼等が官僚に向つて挑戰する必要を感じたのは、ただ單に政權爭奪といふ一點を中心としてだけであつた。即ち、政權が官僚の

手にあるか、それとも彼等の手にあるかといふこと、[illegible]唯これだけが、彼等とその[illegible]についての標準であつたにすぎなかつた。

無論彼等は、さうした實際上の關係を包みかくすために、立憲政治のイデオロギーから出た樣々の標語を發明し、また自由にそれらを使用した。『閥族打破』『責任内閣制の樹立』『政黨内閣の實現』『憲政擁護』曰く何、曰く何。最後に『憲政の常道』。――かういつた安價な合ひ言葉が順々に彼等の手に依つて製造されて、民衆の間に頒布されて來た。けれども、彼等の實際の政治上の行動は、無論かうした薄利多賣式の標語の中に潜む魔力に依つて操縱されたのではなくて、最も直接には、政權爭奪を中心としての樣々の打算に依つて指導されて來たのである。そして、その間から生じた政機の推移は、官僚と諸政黨との關係、及び諸政黨間の相互關係の綜合としての、三角關係以上の多角關係の上に於ける刻々の變動に依つて著るしく複雜化されたが、その根本の筋道には何等の變はりがなかつた。從つて、諸政黨の官僚に對する鬪爭は常に全然眞劍味のかけたものであつて、そこには、激烈に交はされた戰ひの叫び聲の直下に、既に妥協のための握手が用意されてあつたのが、始終のことであつた。いかにも今日に於ては、官僚の勢力は凋落の最後の段階の上に在るやうに見えるが、しかしそれは、諸政黨から與へられた致命的打擊のためでなくて、官僚圈内に於ける人物の上に起つた自然淘汰の結果である。

官僚の横勢失墜後の政治舞臺は、當分の間ブルジョア諸政黨の跳梁に任かされてゐる。その上で彼等は、あらゆる陰謀乃至陽謀をめぐらして、恣まに飛んだり跳ねたりの活劇を演じてゐるが、彼等の醜陋裏の魂膽が明かに見え透くやうになつて來た今日では、それが公衆の感興を唆る力が甚だ稀薄になつて來てゐる。それは最近の『護憲内閣』の上に起つた動搖に伴つた始終の事情に依つて、最も有力に證明されてゐる。彼等ブルジョア諸政黨は、依然として政權爭奪と

いふ單一の中心點をめぐつて無際限に立ち廻はつてゐるが、それは同じ支配階級の利益圏内の諸集團の間の仲間喧嘩以上のものではない。そして、それが縱し直接間接に民衆生活に影響を及ぼすものであるにしても、今のところ民衆の大部分は、それを對岸の火災を觀るやうに傍觀してゐるより外はない境地におかれてゐる。付てはさうした政治上の模擬戰も、觀劇氣分に似た一種の感興を民衆に與へた時代もあつたが、しかし外題が變はつて筋が變はらない芝居の果てしない繰返しは、たゞ見物に欠伸の材料を供給するにすぎないものである。今日實際政局の上に立つて活躍してゐる既成諸政黨の側には、腐敗墮落の空氣が一面に漲つてゐる傍ら、他方に於て實際政局の外に立つて政機の維持を眺めてゐる一般民衆の側には、濃厚なる倦怠氣分がすべてを支配して居るやうに見えるのは、決して理由のないことではない。それは一つには、實際政局の内外に分れて各々その地位を占めて居る民衆と諸政黨との間を繋ぐ共同利害感の脈絡の缺けて居るところから來てゐるものであると同時に、また一つには、ブルジョア諸政黨間の政權のための政權の爭奪戰の反復的實演が、最早民衆の好奇心を挑發したり、その視覺的興味を刺激したりする力をさへも、殆んど全然といひ得られる程度に喪失しかかつてゐるところから來てゐるものだといはなければならぬ。

ところが、今やこの政治的倦怠氣分を打破らうとする一新政治的勢力が擡頭しかけた。私は無論、無産政黨の差し迫つた出現に關して、それを言つてゐるのである。

六　無産政黨の出現と政局の動搖

現在に於ける無産政黨出現の最大意義は、畢竟するに、それが因つて以て立つところの新政治意識の社會倫理的價値の上に求められるべきものだといふ點は私は既に、本誌前號の所載の拙稿、及び他の場處で發表した二三の關係論文て

[illegible]

機械論的解釋に固執する人々の側から、時としては反對に持ち出されることであるけれども、[illegible]理的に解釋すべきものでなくて、それは寧ろ社會心理上の問題として解釋すべきものだといふ見方を取つてゐるから。從つて私は、社會運動が或る一定の社會生活狀態の下に於て持つ社會倫理的價値といふやうな、著るしく社會心理的性質を帶びてゐる現象を因果律的觀察の對象とすることが、決して唯物史觀の立場と背馳するものではないと考へてゐる。殊に、さうした因果律的『觀察』を離れて、その社會運動の實際上の必要に從つて、それの社會倫理的價値の『主張』の段に移ると、それの唯物史觀に對する交渉が、更に一層間接的になるのである。もとより、或る主張が空想的なものに止まらずに、或る具體的効果を期する限りは、それは關係現象の因果律的觀察から出た關係知識を無視する譯には行かないことは、たしかな事實である。そして、その範圍內に於て、『主張』は『觀察』と交渉を持つてゐるものだと言へる。けれども、それ以外に於いては畢竟、『觀察』は『觀察』であり、『主張』は『主張』である。私は初め、この論文に於て、この問題を或る程度まで詳論するつもりでゐたが、しかし實は私はこれを、慌しき旅から旅への途上で書いてゐるのであるから、今は緩くり落ち着いてそれを企てゝ居ることが出來ない狀態に在る。で、私はその仕事を今後の論文に讓ることにして、玆ではただ、マルキシズムのオーソドックス的な解釋者の一人であるカール・カウツキーが、唯物史觀と倫理との關係に觸れてゐる言葉の中から、次の一片を拔き書きすることで滿足することにする。彼はそこでかう言つてゐる。

『倫理學は經濟學のうちにも、經濟學に基礎づけられてゐる科學的社會主義のうちにも、何物をも探求する必要はない。後者は社會的諸關係を研究することを目的としてゐるものである。もとより科學的社會主義は、さうした研究か

ら將來に對する結論を抽き出しはするが、それも倫理上の要求から導き出されるのではない。寧ろそれは恰度、衞生學に於て、實行上の結論が、その科學的研究から導き出されるやうなものである。しかしながら、科學的社會主義はただ、社會民主々義の一面だけを構成するにすぎぬ。社會民主々義は理論と實行との、科學と鬪爭との綜合である。そして、倫理學若しくは美學は、科學的研究に對してこそは全然沒交渉であれ、プロレタリアートの階級鬪爭のためには非常に大切である。如何なる階級といへども、倫理的の力を、即ちそれ自身の目標に對するそれの追隨者らの獻身及び感激を、離れて立ち行くことは出來ない。だが、プロレタリアートの如く、國家の强制手段と經濟的從屬とを、ただ大衆の共同一致の大決心によつてのみ拂ひ退けねばならない階級は、尙ほ更らさうである。即ち大衆は、その倫理的感情が强ければ强いほど、益々力强くなるものである。』（麻右の、Vorlaender, *Kant und Marx*, 1911, p.243 から孫引き。）

無產政黨の出現が、現在の政界の腐敗墮落の客觀的の廓淸力として、並に現在の政界の上に橫溢する濃厚なる俗惡氣分の退散力として、期待され得る根據は、結局は、それが因つて以て立つところの新政治意識の倫理性に歸着するものでなければならない。この點に關する私の意見は、『改造』の八月號所載の私の論文に於て、大體陳述しておいた。けれども私は、無產政黨の出現がもつと直接的な意味で一般的興味を刺激する他の根據があることをも、同時に茲に附け加へておかなければならない。私が前に述べた通りに、そしてまた多くの人々に依つて既に充分に注意されてゐる通りに、現在の政局を支配してゐる既成諸政黨は、幾つもの黨派にこそは分れては居るものの、根を洗へば皆同じ支配階級の利害圏内に浮動してゐるものであり、從つてその本質に於ては齊しくブルジョアジーの階級的生存上の利害感の政治的表現機關である。それ故に、彼等の間に於ける相互的鬪爭は、畢竟仲間喧嘩の性質のものに過ぎないのであつ

て、しかもただ[illegible]これの[illegible]として[illegible]にすぎないといふことを[illegible]と同類の階級の繰り返しのやうに見えて來だしてゐるのだ。それだけである。ところが[illegible]以前に、それから又大衆の階級的生存上の利害慾の政治的表現機關だといふ、それの本來の立場を忠實に固守する限りに、根本に於てはどこまでも階級的主張を提げて議會に臨むものと見なければならぬ。さうなると始めて、年々流調に流れ行く議會の沈滯氣分も打破られ、從つて現政黨の倦怠氣分も退散される可能性も生じて來るのである。

のみならず、民衆の大部分と直接に共通の利害關係を持つ無產政黨は徹頭徹尾新生の一個の政治的勢力として、それの内外から來る情實關係に累されてゐることが絕無であるところから、それの討論に於ても、乃至それの行動に於ても、既成の諸政黨よりは遙に自由に、理論に徹底することも出來れば、正義感に即して活躍することも出來るのである。それ故に我々は、それが議會に於て、老朽に傾きつつある、既成諸政黨に直面して立つ日には、そこに曾て見られなかつたやうな程度もしくは種類の緊張味が湧き出で、波瀾が卷き起されることを豫想することの、必ずしも根據のないものでないことを思はせられるのである。

このことに關聯して我々は、無產政黨の物質的資力との關係の或る一面を、序に注意することが出來る。既成諸政黨の腐敗墮落の主因は、金力を通じてのそれの資本階級との關係の裡に求められる。けれども無產政黨は、それがそれ自身の階級的立場に忠實である限り、この原因から來る危險に陷る危險は割合ひ少いことが、當然のこととして考へられる。さうだとすると、物質的資力の缺乏は、一面に於てはたしかに無產政黨の弱味に相違ないが、しかし同時に社會心理的及び社會倫理的見地からいへば、それが却て無產政黨の强味であることも考へられるのである。

無產政黨の出現の日は、益々近づきつつある。そしてそのことの豫想だけでも、既に或る程度に政局の動搖を促しつつある。既成諸政黨が看板の塗り替へに急いで居ることなどは、たしかにそれの現はれと見ることが出來る。だとしてみると、縱し小さき勢力を提げてにせよ、それがいよいよ實際に議會へ乘り出した曉には、それは單に政界に活氣を注入することからだけでも、非常に重要なる役割がそれに振り宛てられてゐることを發見するであらう。

◇市川一郎氏譯著◇

大好評 新刊

高尚なる理論を平易に講義せる 哲學概論

《眞に自ら哲學せずには居れぬ眞面目な初學者の侶伴》

本書はフレッチア博士の原書を譯述せるもので內容は用語の簡潔にして平明なるは勿論吾々各自が日常屢遭遇する所の經驗を例證として講述し眞に自ら哲學せずには居られぬ眞面目なる初學者をして毫も失望せしむる所が無い。煩雑無味なる哲學的知識の押賣を事とする從來の類書に依つて充されざる人々は速に本書に就て自家內心の深奥なる要求を滿足せしむ可きである。—《哲學研究初歩として必讀》—

菊判最上製美本 全壹冊五百餘頁 正價金四圓八拾錢 送料十八錢

現代文學新選

（石川誠編） 四六判最上製 千二百餘頁 金四圓八拾錢 送料金十八錢

忽三版

本書は現文壇の中必作家芥川龍之介：有島武郞：江口渙：菊池寛：北原白秋：久米正雄：厨川白村：倉田百三：相馬御風：佐藤春夫：志賀直哉：島崎藤村：田山花袋：中村吉藏：長與善郞：武者小路實篤：吉田絃二郞：若山牧水等十八氏の代表的作品長短篇七拾篇を收め頭註を施し各篇毎に鑑賞的なる著者獨特の批評を加へ猶作家の閱歷作風を叙述せるもので ある文檢受驗者高等學校入學志望者中學上級生等が現文壇の大勢を知るに最も要を得たる好の新著也

西洋哲學史講義

高橋敬視著 参圓八拾錢

文檢受驗用

西洋通史

（上卷）六圓八拾錢 （下卷）四圓八拾錢 各金十八錢

和歌俳句入門 唯一の手引書

本書は「和歌が作つてみたい」「俳句はどうしたら作れるだらうか」「和歌俳句を研究して」と望む人々の爲に親切な入門書として生れしものである特色とする所は「作り方」の篇に例歌例句を多く挿入した事で、「解釋」の篇に新しい歌句數百首を選載せる事である行文平淡にして水の如く一讀初學者には無二の指導たるべくすでに入れる人には必ずや好箇の參考書たるべし。

和歌俳句自習讀本

（森山[illegible]二著） 四六判 金貳圓 送料金[illegible]

東京市神田區表神保町七番地

大同館發行

振替貯金口座東京八七貳番

支那對外運動の現在及び將來に對する觀測

(一)支那の對外運動とその立體的考察

小村俊三郎

一　緒　言

支那の對外運動は、一體どうして起つたのか、今後果してどうなるのか、隨つてこれをどうすればよいのか、これ歐洲大戰や、露國の革命以後、新たに全世界に課せられた重要な問題である。就中我日本に取つて最も重要な問題である。その原因、傾向、對策の如何については、關係各國並びに我日本に於ても、既に種々の論議が公にされてゐる。そのうち原因と、傾向の如何については、論者によつて或はその觀察を異にし、同一の觀察についても、またその深淺の度を異にするが、たゞ不思議に一致してゐるのは、その結論即ち對策に關しての意見である。各國及び日本の意見は、この點につき、奇妙にその一致を示してをる。それは即ち支那國民のアスピレーションには同情する。乃至そのアスピレーションが、假令ゼニュインなものでないとしても、支那に限つて現在のやうに不平等な國際的關係が、無限に持續さるべきものでないから、早晩にその要求を容れてやらねばならぬ。但し支那がその不對等條約の廢棄か修正かの根本主張を貫徹する前には、先づその內政改革を全くせねばならぬ。その前に列國の與ふるものは、ワシントン會議において、約束された關稅二分五厘の增加と、治外法權撤廢に關する調査位いのもので、支那は當分これに滿足せなければならぬと、いふのである。支那の對外運動には、既に危殆性となつてをり、否な寧ろその刺戟劑となつてをる勞農露國、乃至その流れを酌むラディカリストの一派を除いては、日本も列國も殆

ど例外なしに、上述の意見に一致してゐる。

それをかの一派から見れば、掘つてゐるのは成るべくこれを放さぬといふ保守的、傳統的なブルジョア資本主義國家の共同利害の上に立つた、對支外交の共通觀念とも見られやう。自分は決して左様な意味のラディカリストではないが、但だラディカリストなる語が、十九世紀の前半に、英國のチャーティスト一派の專有物となつた以前には、その語源の示すが如く、たゞ物事を根本的、徹底的に考へるといふに止まつた時代のラディカリストであるかも知れぬ。自分は物事をかく考ふるが故に、仕様には現に何、初めには多くその時の輿論と相容れられぬが、今度の支那問題についても、正にかく考へつゝあるものである。

随つて自分丈は、支那の對外問題についても、略ぼ次の如く考へてゐる。即ち、支那の主張要求を、客觀的な正義公道の上に立つて考へる一方に、日本を始め關係列國は、その主觀的自己本位からしても、一たび掘つたものをば、成るべくこれを放さぬといふ態度で、これに臨むよりか、果してその利益であらうか。これを放して見たところで、案外不利益でなかつた反對に、却つて大に利益なることとなりはせぬか。日本の支那に對する特殊な關係は、就中經濟政策上、そんなことが多いのではあるまいか。且、そうせぬ限り、支那の對外運動は、永久に終熄の時がないのではあるまいか。随つて、列國の望む支那の國内改革も、亦た永久に實現の時がない譯ではないか。然らば、列國殊に日本は、その保守的傳統的な考へから離れて見て、全く新たな心持で之れに臨み、少くとも根本の原則上、その要求を容るゝ約束を與へてやることにしてはどうか。その結果支那の對外運動を、一轉して對内改革に變ぜしめ、大局上に最大の利益を收むると共に、不對等條約の廢棄は、對等條約の改訂となり、支那がその適當條件を充たすまでには、矢張り幾年かの歳月を要し、結局朝三暮四流でこれに臨むのと同様の結果となり、寧引き排外運動を終熄せしめて、その國内改革を助くることだけが、支那及び列國の利益となる譯ではないかと、いふのが極大體の輪廓である。

で、自分が目下の支那問題に對する考へ方は、日本及び列國の議論と、根本的に相違するのであるが、その相違も要するに、順に行くか逆に行くかの差だけである。但し、その對策即ち結論の相違は、一個今度の對外運動は何が故に起つたか、乃至如何なる經過を取るであらうかの前提や、プロセッスに對する觀察の相違、即ち事態を小に觀るか大に觀るかの差に起るのであるから、これに關する自分は自分だけの觀察を述べることが、至當の順序であらうと思ふ。

二　觀察の方法

全體物事の見方には、平面的と立體的との二つがあらう。これを今度のやうな支那問題に當ふるなら、上海の紡績爭議に端を發して、全國的な國民運動となつた表面の現狀のみに就いて觀察するのは、これ平面的の見方である。しかし、その運動の起つた原因については、事件發生の單なる動機以外に、必ず既往において現實的、思想的、並びにこれに伴ふた運動もある。それ等を合せたものが、その近因ともなり、遠因ともなり、間接直接種々の原因ともなつた譯であらう。それが即ち現在の事實に對する過去の歷史であり、これを考察するのが、即ち又た立體的の見方である。故に今度の支那問題に關する觀察は、必ずこの二つの方面を備へたものでなければならぬが、その平面的の見方だけなら、直接これと交渉をもつた列國の外交官や、居留民の報告意見等によつて、略ぼその概略を悉くす事が出來るかも知れぬ。但し立體的即ち過去の歷史、しかも內面的思想的方面から來る種々の原因については、インサイトや、フアサイトや、レトロスペクトや、サーカムスペクト等あらゆる觀察眼を要する哲學的考察に、彼等の報告意見が、何程の價値を有ち得る筈もない。現在日本政府を始め、關係列國政府の對支外交方針に、[illegible]ぎぬから、決してこれ[illegible]に信頼するとは出來ぬ[illegible]す、彼等の見た現在の事實は、平面の全體に見つたとしても無く、僅かにそのうちの一點に過ぎぬ。しかしてその一點は、日に〳〵變動し推移して行くものであるから、その度毎に列國の態度も亦た動搖定まりのないとは、現に何よりも日本を始め各本國政府北京外交團が證示する通りであるから、何等の權威もないものになつて行くのである。

尙、進んで、その平面的觀察の上に、立體的思索を加へ、その兩者の交叉した點を、現在の事實と認め、しかして更にその交叉點を延長し、これを想像線としたものを以て、將來の歸趨とし、こゝにその對策を求めてこそ、始めて徹底的根本的な方針態度も極まり得るのである。それには先づ過去の原因即ち歷史を思想運動と現實の兩面に求め、これに現在の事實と經過、即ち支那對外運動の起つた當時の事情と、以後における支那自身と列國との關係を加へ、既往に顧み、現在に照らし、しかして將來の歸着を考へてかゝらねばならぬ。それ故今後自分の公にしたいと思ふ意見も、略ぼ以上の三點に分れる。そのうち、第一のものゝ中には、思想問題の上では、古くは支那古代からの國民思想の狀態と新たに加はつて來た世界思想の影響と、そ

の新舊二つの思想を現代化して、現在の國民運動とし、漸次これに訓練と組織とを與へて來た過去の事實を含み、又現實問題の上では、阿片戰爭後八十年の今日に至るまで、…………………………、…………………………、…………、……………………………………、………………………………………、…………………………實際事實の大要を述べ、その思想と現實との二つが相集まつて、僅かな流血事件から、今度のやうな一大國民運動となつたことを、明瞭にせねばならぬ。第二には、尚進んで、その國民運動の起つてからの經過、それには、支那自身の態度の上に、これに對する關係列國の態度をも加へ、以上の過去現在から、第三將來の歸着を豫想して、これに支那自身と列國共同の利益、殊に日本の特殊關係から考慮した結論、即ち對策を論述する順序となるのである。自分はそれでこそ、本問題に對する總べての方面に亘つた、系統あり組織ある全體的考察を遂げ得るものだと信ずる。

三　曲突徙薪の說

が、その本論に入るに先立ち、一寸こゝに斷つて置かねばならぬことがある。その一つは、自分のこの意見は、三ケ月以前の事變直後にもつた考へと、全然同一のものであつて、今日少しもそれに變更を加へてをらぬといふことである。右直後の觀察は、その一部分だけ、事情の許された範圍で、或る形ちで或る紙上でも、引續いて論述してをり、其他限られた集會の席上でも、その當時からして、旣に同一の所見を披露してをる。その以上は、思ふ所もあり、また餘儀なき事情もあつて、今日まで全部に亘る意見の公表をば差控へて來た。今日これを公表するのも、實はまだ早いと思ふ。何となれば、一般には支那の事態を、自分の思ふ程に、重大視してをらぬ。故に却つてその驚き怪しむ所となつて、これを受け容れる用意があるまいと、思ふからである。支那の昔に、烟突が曲つてゐて、火事の恐れがあるから、薪を徙せと、注意したものがあつたら、妄りに人を驚かすものとして、咎めを受けたといふ話がある。言論を以て世に立つ程の人には、往往同樣の感じがあらうが、自分も實はこの感じがしてならぬ。

次の一つは、自分がかねての意見には、誰もがする如く、餘り支那の行動を非とし、これを咎め、これを責するやうな點を含んでをらぬことである。この點にも、多少の非難を受けて來たが、但し自分の考へでは、支那國民と雖、勿論その行動を是としてやつてゐる譯ではあるまい。その暴動的行爲を非とするとは、誰れよりも先づ彼自身が、これを認識してゐる筈である。たゞ彼等にはかくする外に、弱者の強者に對抗し、これを覺醒

[illegible]することには、恰も烏を黒いといふのと同然で、それだから、黒い烏が白い鷺となる譯ではない。言ひ換へれば、今日支那の爲、列國の爲に、必要な事は、是非曲直の道徳論ではなく、いかにこれを解決するかの方法論であるといふ事が、自分が最初からの、また最後までの意見であるのである。これは、自分の議論が、兎角ラディカルである爲に、その思想も或はボルセウヰーキであると、誤解され、議論の價値を減殺さるゝ虞のある爲に、特にこの事を斷つて置くのである。

四　國内思想の變化

で、今回支那國民の對外運動を、先づ思想方面から見るならば、要するに、その箇人思想國民思想の自由解放が、同じく國際的のそれと結びついた民族自覺、民族自決の結果であるといはなければならぬ。支那箇人思想國民思想の自由解放は、その根抵を二千年前の戰國時代に、根さしてをる。それ以來、舊思想の爲に、桎梏せられ、束縛せられて來たものが、一は國内的に第一革命によつて解放せられ、一は歐洲戰役の世界的影響によつて解放せられた。第二については、後にこれを說くが、第一については、自分は古くから、次の如き考へをもつてゐた。孔子

[illegible]に、[illegible]

民主の時代には、[illegible]

はまらぬ。これを二千年前の[illegible]

至るまで、その儒教[illegible]制君主に利用せられた結果、[illegible]の政治に封建の道徳を襲用し、しかもその道徳をば政治には實行せず、道徳と政治とは相背馳して、虚僞の政治を行なつて來た。これが抑も支那の社會に道徳の頽廢した主なる原因である。勿論儒教がなければ、君主は如何なる悪政を行なつたかも知れぬが、兎に角儒教の爲にも禍であつたが、民衆の爲には更に禍であつた。これが爲二十四代の革命は行はれても、それはたゞ統治權のやりとりだけでのことであつて、統治の内容は、少しも變らぬ。いはゞ兩箱のやりとりのやうなもので、政治社會の内容には、更に變化が加へられなかつた。箇人思想、國民思想は、これと共に、そのオルソドツクスの桎梏から、脱するを得なかつた。王莽や王安石の改革も、要するに、その復古思想を主としたものであつた。多少なり、そのオルソドツクスの思想から離れやうとしたものは、正義人道と民主政治を主張した孟子の後には、封建論を書いた柳宗元や、明夷待訪録の著者黄宗羲位のもので、千年に一人位の割に過ぎなかつたが、彼等の所說も要するに又た封建道徳化した儒教を、原始の王道に反さんとする

努力にしか過ぎなかつた。それを悉く數千年來の原始儒教又は封建儒教の束縛から解いて、全く新たなる思想の自由解放を行つたものは、實に民國元年の第一革命であつた。

第一革命は、普通に政治革命よりも、民族革命の點に重きを置かるゝが、成程政治革命は、現在尚ほその繼續中にあるけれども、その思想革命、社會革命に與へた影響は、實に偉大なものであつた。孝弟を說いて犯上を戒め、一姓に忠順ならしむる爲に專制君主に利用せられた儒教は、少くともその政治からは解放せられた。民衆は始めて自由に考へ、自由に行ふことを得るに至つた。不思議な事には、第一革命の當時、何時の間にか輸入せられてゐた新たなる社會主義、共產主義、乃至無政府主義の思想までが、盛んに流行し、政黨や結社の組織さへも行はれたことである。數千年の舊思想の桎梏から、自由解放を得た國內思想は、八十年來の國際壓迫から逸れんとする對外思想や、運動とに、果して何等の交涉なしに終り得るものであらうか。

支那の君主政治が二千年來、虛僞な儒教の利用策により、民衆の思想を劃一にし、錮蔽せしめてゐた以前の戰國時代には、所謂王道と儒教との衰頽に乘じ、諸子學派の自由討究によつて諸種の思想學術に百花繚亂の盛を競ふてゐたともある。其等諸子百家の學術思想も、儒教を正統學派とする漢以後の帝王政治の下には、一部の學者の外、餘り自由にこれを研究することをすら許されてゐなかつた。其等の所謂異端邪說の中、例へば老子の虛無、墨子の兼愛、楊子の利己主義等の如き、正統學派の桎梏を脫した革命以後の學子に取つては、恰も土用の蟲干に、始めて我家の家珍を數へ得たかのやうな感に打たれたとであらう。その中には、近代歐洲の無政府主義や、社會主義や、人道主義や個人主義其他の新說に類似したものすらあつた。これがまた一面には、舊思想の自由解放と、新思想の受容と領會とに、どれだけの助けとなつたかも知れぬ。現に自分は、クロパトキンの學徒たる張繼君が、民國の初年に墨子を愛讀してゐたのを見て、不思議に思つたともある。獨り異端邪說の諸子百家のみでなく、三代の王政中にも、共產主義に近い井田制の如きものがあつた。それについて、自分は又た段祺瑞氏のやうな舊思想の持主から、支那には共產主義は怖るゝに足らぬ。共產主義は支那の三代にも行はれてゐたと、一知半解の辯護說を聞かされたともある。同樣に孟子の王道論抔は、今の軍閥政治の攻擊論者と、世界人道主義の讚美者に取り、好箇の材料を供給するであらう。

かやうにして、古來の舊思想から脫却し、又はその舊思想に

[illegible]を[illegible]るに至つた。[illegible]民に取つては、十九世紀以來の民主革命思想や、社會主義、乃至歐洲戰後に勃興した民族自決其他の思想運動は勿論、露國の革命以後輸入し宣傳せらるゝ反資本主義、反帝國主義杯を受入れて、これを諒解するのは、單に以上の古來から現今に至る國內思想の歷史や、現狀やだけに照らしても、少しも怪しむに足らぬことである計りでなく、數千年來の反動からも、更にその思想運動が、自由奔放を極め、時には自らその常規を逸して、窮極するところを知らぬやうな事になるのも、更に無理のないことであらう。かゝる思想問題の根柢からこれを見ぬ限り、その對內對外に關した所謂學生運動や、勞働運動や、乃至國民運動の如きは、その眞相を透達し、隨つて完全な對策を考ふる譯には行かぬ筈である。

六　世界思想の影響

以上は主として國內思想の歷史的考察に關した部分だけであるが、それが第一革命以後、世界思想の影響を受け、思想そのものゝが現代化されて來たと共に、その現代思想を對內的並びに對外的の運動の上に表現し、且つ右に學生左りに勞働者を、その前線として、一般の民衆運動に經驗と訓練、組織と團結を[illegible]へ、ついに今日の[illegible]原因となつた[illegible]事實[illegible]

支那の對內對外運動は、共に[illegible]南に[illegible]、北に北京に置き、しかして中の上海が中心となり、天津[illegible]とがその羽翼をなし、事實是等の地方は、各地相通じて一大地下水脈のやうな形ちをなしてゐる。それが或は學生運動、或は勞働運動、或は對外的排日運動、或は對內的軍閥打倒運動となつて、隨時隨處に地表に噴出し、而して四方に氾濫するのである。しかして、また、是等の思想運動は、その初めか終りかにおいて、故孫文氏の主義思想や、國民黨の運動と相共鳴し、多くの場合は、これをファウンテンヘッドとし、フヰギュアヘッドともするものであるとは、今度の國民的對外運動が、尤も善くこれを證明してをるのである。

民國八年は、是等の思想運動に取り、最も紀念すべき一年である。共和革命以後、袁世凱の帝制運動、段祺瑞の南方討伐等の爲、國內の爭亂と軍閥の跋扈とに疲れた支那の民衆は、一方に歐洲の大戰も、初めにはその勝敗の數が明かでなかつた等により、二十一ヶ條要求に對する民國四年の排日運動以外には、餘り著しい事件もなかつた。民國四年の排日運動は、勿論學生運動、民衆運動の始まりであつて、それが一般思想の動搖

に、大なる影響を與へた上は、勿論であつて、これを一ツのエポックとして、次の民國八年前後から今日に至る新思想、新運動の準備時代といつてもよい。二十一ヶ條要求や、西原借款は、獨り日支の關係のみならず、併せて支那内外の覺醒運動に、非常な刺戟を與へた譯である。其處に至り、米國の參戰になるデモクラシーの宣傳に次ぎ、露獨の崩壞就中勞農露國の大革命は、支那の民衆にも、勿論異常の感動を與へ、既に蔡元培、陳獨秀、胡適等によつて、自由懐疑の新文學、新思想が鼓吹し始められてゐた。が、何といつても、支那の思想運動に、最大の衝動を與へたものは、民國八年即ち一九一九年の巴里會議と、ウヰルソンの十四ポイントであつた。翌一九二〇年三月のカラハン通牒は、勿論それ以上であるかも知れぬが、それは別に之を論ずる。就中ウイルソンの民族自決主義、小國弱國の自由解放は、現に同年の三月に、…………を惹起した程である。當時……の愚民中には、飛行機に乘つてウイルソンの來るを信じたものすらあつた。同樣に支那に與へた感化も、非常なものであつた。ウイルソン自身は、勿論飛行機に乘つては來なかつたが、彼れに關したパンフレットは、飛ぶが如くに賣れた。兎に角大戰終了後の民國八年は、支那の内外關係に取り、第一革命に次ぐエポックメーキングの年であつた。

七　排日運動と文化運動

巴里の平和會議においては、國權回復の七ヶ條要求を提出し、それは、よし、容れなかつたとしても、代りに山東還附の大體目的を達した。當時の支那國民は、外においては、その外交的勝利に醉ふて日本の恐るゝに足らぬを知ると共に、内においては、その日本の支持した段政府や、軍閥政治の壓迫も、既に恐るゝに足らぬものであることを知つた。その結果として、山東問題、西原借款に關聯して、學生運動の火の手を揚げたものが、即ち同年五月四日の曹汝霖邸燒打であつた。それが爲、民國四年廿一ヶ條要求以來の排日運動に加ふるに、新たに五四運動、五七紀念が首唱され、上海、天津、漢口其他全國に亘つて、商人の罷市や、勞働者の罷工や、新たな排日運動が、年中行事として繰返さるゝに至つた。罷學、罷市、罷工を打つて一丸とした現在の一般的對外運動は、民國四年に次ぎ、主として此時に起原するのである。民國四年の排日運動は一時的であつたとしても、民國八年以來の排日運動が、約六七年の今日まで持續されて來たのを見れば、現在の對外運動、就中今度は排英運動が、向後又た何年かに亘つて、持續さるゝであらうことを、何人が否定し得るであらうか。

五四運動の排日風潮によつて、軍閥の官僚をも、學生の勢力をも、共に侮るゝに足らぬことを知つた支那の民衆は、ますます各種の思想運動、社會運動、國家運動等に、その全力を注いで、勢威を衒ふに至つた。かゝる民衆思想の高潮は、民國四五年來、漸く黎明時期に入つた蔡元培、陳獨秀、胡適等の首唱になる文學革命や、思想革命や、新文化運動を以て知らるゝ支那のルネサンス運動と、密切緊要な關係があるのである。是等の思想運動は民國八年に、世界思想の動搖と共に、その最高潮に達したが、同年には、恰もコロンビヤ大學のデューイー教授が來て、熱烈なる同情を青年運動に寄せ、青年の渇仰はその頂點に達した。デューイー博士は就中民衆教育の必要を說き、これが爲青年學生の間に、平民教育の運動も起つた。其後に來たラッセル博士よりも、その感化力は偉大であつたが、兎に角支那青年の思想運動は、かくして世界の最新思潮とも、又た緊密な關係を有して來たのである。

前述の文學革命は、主として口語體を詩や文に用ゐ、貴族文學に代ゆるに、平民文學を以てし、數千百年の古文に盛られた傳統的、古典的儒教の舊思想を打破することをその目的とした。古文を提唱して、八代の衰を起した韓退之とは、正反對の意味ではあるが、首唱者たる胡適は、兎に角その盛名を後代に垂る

ることであらう。陳獨秀はこれに基いて、國粹思想を否定し、あらゆる舊道德に挑戰して、あらゆる舊思想に反逆し、非孔、非孝說を唱へて、儒教と家族主義に反對し、迷信より懷疑へ、服從より批判へ、傳統より創造への新學說を唱へ、禮教宗教を破壞して、科學的合理的の新社會新民族を建設して、世界の戰爭に對立せんことを目的とし、同時に女子解放、勞働運動等の社會革命をも提唱した。陳獨秀はついに、それ等の新舊思想の衝突の爲、蔡元培が五四運動の爲に北京を逐はれた跡を遂ふて、同じく官僚軍閥に追はれて、廣東に去つた。その後の陳獨秀は、一轉して過激派、共產主義者となり、思想革命の外に、社會革命の急先鋒となつて、北京大學に殘留せる李大釗と南北相應じ、同大學と廣東國民黨とを結びつけ、更に勞農露國と接近せしめたのは、即ち主として彼等兩人の所業であらう。

八　勞働運動

以上の文學革命、思想革命は、勿論主として學生を相手とし、延いて一般民衆にその影響勢力を及ぼすものであるが、此外に陳獨秀以下、又はその以外に、過激なる共產主義者もあれば、溫和なる社會主義者の各階級もある。是等は直ちに政治革命、社會革命、乃至產業革命の主義思想を代表するものである

が、これは學生の外に、主として勞働者を相手とする。それ等の指導や煽動による勞働運動も、學生運動と共に、支那の思想運動の潮流と、その對內對外に及ぼす影響勢力を知る爲に、見逃がしてはならぬ一大現象である。

支那において勞働者の同盟罷工の行はれたのは、民國九年三月三日の香港機械工の同盟罷工を始めとする。爾來二三年の間に亘り開灤炭礦、京綏、粤漢、隴海各鐵道、香港及上海の海員同盟罷工等、大小數千のストライキが引續いて行はれ、就中香港の海員同盟罷工は、數十日に亘り、猛烈なる反抗を續けた。京漢鐵道のも、同じく猛烈なものであつたが、直隷派の武力的高壓手段によつて、無慘なる流血に終つた。以後排日的性質のものを除いては、與個等の武斷的取締の爲、大規模のものは、閉息の形ちであつた。

支那に同盟罷工の行はるゝ直接の原因は、經濟上の原因、即ち一般に物價の騰貴、生活の不安、幣制就中銅貨の濫發等による賃銀の値上げの外、支那の工場に特殊な、…………………………………………、言を俟たぬ。しかして、支那には、古來からのギルト組織による一種の商人組合や、勞働組合もあり、それによつて、行はれた舊式のストライキもあり、罷市罷工の如きは、昔しから種々の場合に實行されボイコットが、決して愛國人の創造でないとは、恰も學生運動が、遠く後漢の太學に始まるのと同一である。支那新人の指導的煽動者は、これに新輸入のマルキシズムや、ボルセウイズムの思想方法を加へ、舊き基礎の上に、新らしき勞働運動の鐵筋コンクリートを打建てた。支那の勞働運動は、こゝに二重の強味を有する。その強味は、…………………………………………、遙かに勝つて居るものであることを、記憶して置かねばならぬ。

しかして、その勞働運動は、單純な固有の經濟的原因の外に、世界共通の反資本主義的階級鬪爭的思想の上に、少くともその指導者等が十分の理解や同情をもつと共に、その資本主義は、即ち帝國主義であり、帝國主義は即ち、軍閥政治の後援をなすものであるとの、三段論法的簡直の信條から、一は對外の資本主義的國家に反對し、一は對內の軍閥政治に反對してをる。隨つてその指導者等の宣傳運動により、一般の勞働階級も、固有の經濟的必要から自然にこの新主義、新思想の感傳をも受け、又たその犧牲にも供せられるのである。故に支那の勞働運動は、決して單純な經濟問題にのみ、その原因を置くものでなく、其外に世界的共通の階級觀念、對外的反帝國主義、對內的反軍閥主義との三面をも、兼ね有せるものであるとを。併せて記憶して置かねば

ならぬ。日本の紡績業者等が、これに頓着せずして、單純なる經濟問題に發するものとし、乃至一般社會までが、今度の對外運動を、專ら紡績罷業から起つたものゝやうに、言ふものゝあることは彼等の無智と短見とを自白するものである。同時に我紡績業者は、對支企業の最前線に立ち、しかして勞働者と接觸し、その勞働者は前記各種の思想の虜となり、乃至その犠牲にも供せらるゝものであるから、彼等は我對支外交大會の利害からも、その勞働者の待遇や交渉等に、愼重の用意を缺いてはならぬことを、我國民に要求の權利があるのである。

九　右に學生左に勞働者

前述の次第であるから又た、支那の勞働運動は、少くともその指導者側に、かく多方面の目的を有し、その一方面の目的か、乃至各方面の目的を一時に達するか、即ち時々のストライキに依り、一部の敵に當り、又はゼネラルストライキに依り、政治、社會、產業、國際の革命等あらゆる理想を、一擧に企くするかの方便としても、役立たらしめんとするものである。その點から見れば、支那の勞働運動は、寧ろ佛國のサンデイカリストの方法を、學ばんとするものであるともいへる。兎に角彼等新人が、勞働階級を指導し、煽動し、過去にも現在にも太小數十のストライキを實行して行くのに、二つの手段と方法、組織と團結とを敎へ、且つ學びつゝあるのに、注意すべきであることを知らねばならぬ。

しかして、彼等の運動方法は、獨り勞働者には止まらぬ。支那民衆運動の特徴は、右に學生、左りに勞働者をその前線に立たしめ、しかして一般の商民をも、これに引摺り込むことである。是れは恰も彼等が外敵とする資本主義的國家が、右に法權左りに政權を提げて、支那に臨むのと好箇の對照であるが、その學生と勞働者とは實のところ、一はブルジョア階級に屬し、一はプロレタリヤ階級に屬するのにあるけれども、彼等は共に被壓迫者被搾取者として、內は軍閥、外は列國に對し、共通の觀念を有し、随つて共同の運動に從事してをる。しかして、勞働者がその運動によつて、訓練、經驗、組織、團結を與へらるゝ如くに、學生もまたその各々を與へられ、一回は一回より巧みに、日强くなり行きつゝあるのである。

殊に注意を要するのは、勞働者の團結は、商人を强要し、商人はその營業と生活の兩面から勢ひ勞働者に屈從し、例へば今回の對外運動の如き、商人自身として有する對外反感や、外品排斥の利益の外に、已むを得ずとも、罷市即ちボイコットをやつて、勞働者と共同することになるのである。同樣に學生に至つ

ては、社會的家族的に、更に有力の地位に在る。學生とはいふものゝ、彼等の內には、女生もあれば、少年の男子もある。彼等はまた出て社會に活動すると共に、入つては父兄を强要する。父兄の中には、商人もあれば、官吏もあり、軍人もある。この父兄にも共通の對外觀念もあり、子弟に對する愛情もある。それが爲、歷次の排日騷動を取締るとも出來ねば、張作霖や段祺瑞でも、今度の對外運動に反對は僞か、これを煽動するやうな立場にも、置かるゝことになるのである。

兎に角、かやうな譯で、今度の對外運動には、假りに上海だけについて見ても、全國學生聯合會、總工會即ち勞働總同盟、及び總商會即ち商業會議所の如きものが、一緒になつて幹部を組織し、ここを策源地として、罷學、罷市、罷工を續行し、就中勞働者の如きは約二十萬の失業者を、約三ケ月に亘つて扶持し、勿論不斷にその用意のないストライキファンドも、中央政府や、全國から醵集してをる。廣東の如きも、一手に英佛兩國を引受けて、今尙ほその頑張りを續けてをる。勿論彼等も人間故、腹が減つたら休むであらうが、その代り腹を拵らへたら、又た始める。かやうに恃るべき勢力を輕視し、列國政府も、紡績業者も、現在のやうな態度で、何時までもこれに臨んでゐるとは、單に彼等の利益ばかりから考へても、果してそれが商企の策であらうか。

十　カラハン通牒と赤化運動

支那の思想運動は、第一、民國革命以後、反孔運動に依つて、それ自身の舊思想から脫却した。次ぎに大戰以後、世界的最近思想の影響を受け、思想と共に運動を繼續した。文學革命、思想革命、社會革命、婦人運動、勞働運動、平民教育、反宗教運動、反軍閥運動等の外、排日排貨の愛國運動をも年々實行して來た。最近更にこれに勞農露國の感化による非基督教運動を加へ、しかして反帝國主義、不對等條約廢棄の宣傳を經て、ついに今日の一般的對外、就中排英運動を見るに在つた。それは皆な、一貫したる民族思想の覺醒と、民衆運動の新興によるものであらう。その脈絡あり系統あり、一定の大勢を追うて、最後の目的に到達せざれば、已まざるの概がある。古人は群山萬壑荊門に赴くと詠んだが、成程過去は巴蜀千里の上流であつて、現在は江山雄壯の荊門の大觀であらう。されど滾々たる大江の流れは、尙こゝには盡きぬ。眼前一時の局面のみを見て、支那の國民運動が、無事に收まるとするものがあれば、それは猶ほ荊門を指さして、長江こゝに盡くるといふのと、同然であらう。

自分は尙こゝに前段に言漏した勞農露國の舊條約廢棄の通

[illegible]や、孫文[illegible]について、[illegible]して置かねばならぬ。民國八年三月カラハンの名に依つてなされた[illegible]約廢棄の通牒は、支那に異常の感動を與へた。彼等は驚[illegible]して狂喜した。何しろ、八十年來英佛の……………されたままの治外法權や、協定關稅其他の諸條約を廢棄し、諸列國の密約や、東支鐵道、庚子賠償金等一切の權利を放棄し、新たに支那と對等の國際關係を樹立せんといふのである。恰も同時に、巴里會議においては、支那の國權回復の要求を列國に一蹴され、獨墺の舊約廢棄は、これを許されたけれども、それは支那が參戰の報酬と、獨墺が戰敗の結果である。然るに勞農露國は、全くその自發的に出て、その總べてを放棄して、對等の條約を結ばんとする上に、支那を援助して、資本主義の羈軛より脫せしめんといふのである。支那が驚き且つ喜んだのも無理はない。

支那の新人は、是より先き、露國革命の報を聞き、マルクス主義や、過激主義の研究を爲し、これに傾倒して、自ら進んで赤化の傾向を帶びつゝあつた時である。爾後ユーリンや、ヨッフエや、カラハン自身の入京により、一部の學者と密接の關係を結ぶに至つたことは、想像をも要せぬ。陳獨秀や、李大釗やは眞先に共産主義者となつた。爾後曹琨の燒打を始め、赤化運動の行はれたのは、一般にはこの文化によつてであつた。京漢[illegible]や、開灤[illegible]礦のストライキも、これ等の學生の指導によるものであつた。嘗つて北京に反基督教大同盟や、反宗教運動の狼火の揚げられたのも、勿論また同樣の思想系統によるのであらう。露國が支那を誘うたのか、支那が露國に傾いたのか、これは猶ほ露と尾花の古歌の如く、問ふだけが野暮であらう。支那の赤化は、それ自身に內亂の繼續と、列國に對する反感によるものが多い。支那程赤化に適した處はない。支那の赤化を防ぐには、即ち國內の整頓を助けてやることと、外來の壓迫を除いてやることである。

十一　孫文の民族主義反帝國主義

廣東の國民黨部が赤化したのも、大部分それが爲であらう。廣東は近く香港を控へる。反英は即ち親露の捷徑である。民國八年北京を追はれた陳獨秀は、廣東に赴いて、共産主義を唱へた。爾來ヨッフエやカラハンとの親交も結ばれ、孫文氏までが、共産主義とまでは行かぬが、過激主義には贊成した。彼れは露國の革命手段を學び、露國の援助を求めて、支那國內及び國際の革命に從事すべきことを、その黨員に教へた。廣東政府の顧問や、軍官學黨の教師も、ソヴイエット政府より派遣せられ

た。輿論から武器を送つたともあれば、麥粉を贈つたともある。多少のストライキフアンドも、手にしたらう。インタナショナル運動の共鳴者である勞働者は、それを不都合とは思はぬであらう。廣東は支那勞働運動の本部である。支那全國勞働者の總聯合會もこゝに開かれ、勞働法規も發布してゐる。

孫文氏の三民主義中の民族主義に、新たな生命を吹込んで、反帝國主義、不對等條約廢棄の宣傳運動となつたのも、又た露國の感化であらう。民族主義の新解釋によれば、支那の中華民族も、蒙古西藏等の民族も、各々これを平等の一單位とし、その單位の自由解放と、民族自決を行はしめて、その生存能力を發揮し、その各單位を結合した總和の力を以て、白人の帝國主義資本主義に當るといふのである。故にその民族主義は、帝國主義の一部であつて、その故に又た孫氏は、終始親日主義を以て一貫して來た。今日排日が排英に轉換し、親日主義が橫溢し始めかけて來たのも、孫氏の主張に負ふところが少からぬ。

次にその反帝國主義の主張には對外と對內との兩面がある。對外的には、支那は……………、……………、……………、……………………、……挑調に陷らしめてゐる。その帝國主義、資本主義を除かされば、支那は自滅する。對內的には、……………………、……………………、……………………、………………………。……………………………………。要するに兩者は一にして二、二にして一であるけれども、先づ帝國主義を除くにあらざれば、軍閥を倒すとが出來ぬといふのが、目下の意見であるらしい。

不對等條約の廢棄は、即ち以上民族主義と反帝國主義の目的を達する爲の手段であるといつてもよからう。その理由は、こゝに說明するまでもないが、國民黨政綱中の對外政策中には、一切の不平等條約、領事裁判權、外人關稅管理權等の外、支那領土內において、政治的權力を行使して、主權を侵害するものは、悉くこれを取消し、改めて双方に主權を尊重する條約を訂結すべしとある。こゝに注意を要するのは、條約の廢棄は、勿論無條約を意味するものでなく、改めて、對外條約を訂結するといふのであつてその改訂以前には、現狀維持となるのである。勞農露國でさへ、正式條約の訂結以前には、他國の條約に均霑することとなつてゐる。これは知れ切つてゐることでありながら、世人は今にも支那の法權稅權に服するものの如くに、思ふものもあるから、これを一言して置く。

更に何日下の不對等條約の廢棄運動は、主として孫文氏が、生前の北上以前から主張し、國民黨がこれを全國に宣傳した結

與、今日の勢をなしたものである。しかして、その外交に於ても、終始一貫の親日論者であり、日支經濟同盟論者であつたことは、特に記憶の要があらう。

十二　侵略と壓迫の裏史

以上は自分の所謂立體的即ち歷史上の新舊思想の關係と、その思想と運動とが、結びついて來た過去の因、即ち現在の果を、極大體に亘つて述べて來た積りである。是れから同じく立體的觀察の一面、即ち是等の思想と運動とが、更に相合して今回の對外的大運動となつた現實の方面に移るべき順序である。それは即ち過去八十年來英國の阿片戰爭、英佛の聯合軍の北京侵入以來、…………、…………侵害屈辱の事實、並にそれには、假令支那自身が自ら招いたものがあるにせよ、これによつて起つたその國民の思想感情等についてである。

支那が現在の歐洲列國と互市通商を開市したのは、明朝の末に始まるけれども、爾來二百餘年間は、所謂閉關自守の時代であつて、中華民國を以て自ら居り、夷狄を以て彼等を遇した。その使臣は叩頭の禮を守り、朝貢國の班に伍した。廣東の互市は、時典の許可に止まり、税則の如きは、支那自らこれを定め、述べて[illegible]以上であつた。[illegible]め、治外法權と[illegible]を以て、[illegible]とし、[illegible]け、島嶼を占領し、反對に不對等の條件を以て、同國を[illegible]したのは、阿片戰爭や、英佛聯合軍等の武力を以てしたのであるから、支那はその開港の初めから、英佛諸國に對し、深く屈辱と怨恨の念とを抱き、且つ鎖國時代對等自主の古き誇を忘るゝことを得ぬのである。その清朝の初めから、南京條約を經て、北京條約の一八六〇年に至る第一期の開港時代に次いでは、清佛戰爭や日清戰爭を經た一八九五年に至る第二期は、藩屬の喪失や、領土の租借を…………時代があつた。支那の排外熱は、ます〳〵その頂點に達した。變法自强を標榜した光緒帝の改革運動は、即ちその反動であり、扶清滅洋を叫んで起つた義和團事變は、更にその反々動の結果であつた。一八九五年から、第一革命の一九一一年に至る第三期は、中間に日露戰爭を挾んで利權獲得や、勢力範圍や、支那分割論の盛行と共に、米國の發議による機會均等や領土保全の時代であつて、支那に國權回復や、憲法運動の勃興したのも、これが爲であり、排滿興漢の第一革命は、即ちその刺戟の結果であつた。最後に一九一一年から今日に至る第四期は、列國の協調や、共同管理論の行はるゝ時代であつて、支那には內亂の繼續する一方、歐洲戰

爭に參加し、勞農露國の革命を見、現代思想の影響を受け、排日運動が勃發し、繼續すると共に、巴里會議や、ワシントン會議を經、領土主權の回復や、不對等條約廢棄の主張運動が擡頭し、ひいに今日の國民的對外運動とはなつた。

十三　國際的反抗思想の黎明

支那の國際關係は、これを阿片戰爭以後八十年來の歷史に顧みて、實にかやうな侵略壓迫の事實に滿ちてをる。その多くは、勿論彼等自らの招いたところではあるが、支那國民としては、そうは思はぬ。壓迫者と被壓迫者との双方に、各々言分はあるであらうが、政治や外交は、何れの國何れの時代でも、感情がその大部分である。是非の議論は別として、列國からかやうな待遇を受け來つた支那が、その積年と感情とから、強度の反感を抱いてをるとに、無理はあるまい。しかして、その反感は、獨り國家と國家との接觸から起つた叙上の歷史的事實に養はれて來たのみでなく、商人と商人との接觸から起る日常の關係も、更にその反感を深くする。歐米人が白人種の優越感、基督教文明國の劣等國支那蔑視を、傳統的特權として支那國民に臨み、……………………………、同樣の態度と觀念とを以て、支那國民に臨み來つたことは、いかに彼等の反感を挑發

して、今日に至つたか。この國民感情が、渦となり潮となつて、國家的對外運動を進めつつあるのであるから、その感情こそは、今日の對支外交を考察するものに取り、最も重要な事實でなければならぬ。この故に、自分は、支那の學生を學匪と稱し、これに惡罵を加ふるものは勿論、支那の國情を指摘して、無暗にその非望を抑へんとするものにも、與みすることは出來ぬ。殊に支那の喜怒哀樂を最も諒解し易き歷史を有する日本人、その生活存在共に、支那と離るべからざる日本人の口から、これを聞くに至つては、自分は彼等を以て自己の面に唾きするも同樣の徒輩としか思はぬやうな、感じがしてならぬのである。

成程從來の支那國民は、徒らにその感情のみに走り、自家の實力を顧りみずして、無暗に慷慨悲憤をし、時には無謀な主戰論を唱へ、排外熱を煽つて、淸佛戰爭や、日淸戰爭の如き失敗を繰返し、或は又た義和團事件の一大惡擧を敢てした。しかしてその結果は、またく犧牲を多くし、負擔を重ぬるに終つた。その結果又た極度の恐外病や、媚外熱に罹つた事もある。さり乍ら、今日彼等は覺醒した。その覺醒も、彼等自身の自覺といふよりも、寧ろ列國がこれを覺醒せしめたのである。歐洲大戰の結果、彼等白人は同胞相殘殺して共に地獄の淵に陷り、基督教文明國の自負も、自由正義人道の看板も、自らその

現實を暴露した。その大戰の結果、歐米方面に關りを減退して、彼等の所謂劣等民族に、その恐るゝに足らぬことを示した。又たその大戰に依つて、物質文明の行詰りを暴露し、資本主義的國家組織に對する反抗思想を勃興せしめ、被壓迫民族にも、同樣にその反抗思想を教へた。その上、露獨兩國の社會革命や、土耳古の獨立戰爭や、愛蘭、埃及、印度の反抗運動や、其他の歐洲及び亞細亞の小國弱國の自由解放等は、更に支那に與ふるに實物教訓を以てした。同樣に、若くはそれ以上の壓迫狀態に在る支那民族が、國內的にも國際的にも民主、自由、獨立の思想を挑發されぬ筈はない。しかも、その支那は、その小國弱國にも取殘され、依然として列強の犧牲となつてゐる。東方の病夫として、竝び稱せられた土耳古さへ、今はその治外法權を回復し、朝貢國の列に在つた暹羅でさへ、同樣にこれを回復した。支那國民は、その感情だけからいつても、長く現狀に安んずるとが出來ぬのみならず、事實支那のみを、何時までも、現狀のまゝにして置かるべき譯もない。」

十四　支那の要求と失望

かくして覺醒せしめられた支那は、始めてその排外感情を近代的に合理化し、その國際地位を、法理上からも經濟的原則の上からも、且つこれに確保させ、且つこれを主張して、これを國際會議の前に提出する機會をも與へられた。これが即ち巴里會議に於ける主權回復の要求であつた。同會議に於ては、戰敗國の獨墺に對する對等的權利と、山東問題に關し、日本に對する主張との外には、列國の利己的政策の爲に、その要求を斥けられた。支那は再びワシントン會議に、略ぼ同樣の要求を提出した。但し、この時も、條約以外に主權の侵害となつてゐるものでしかも、英米就中米國の既得權には餘り關係のないもの丶みが、その要求を容れられた。肝腎な法權稅權の如き、條約上の主權回復の如き、資本主義國家共同の利害を有するものは、毫もその目的を達するを得なかつた。その外は、日本に對する山東還附の終局目的を達したゞけであつて、最後に僅かに約束せられたものも、關稅に關し、現實五分稅の實施と、二分五厘の附加稅と治外法權に關し、實行の見込もない調査研究とだけであつた。關係列國は、支那が今回の如き擧國一致の對外的大運動を起し、そのこれを起すに至つた種々の原因は、自分がこゝに詳說して來た程、深刻でもあり、重大でもあるのに拘らず、尚且右ワシントン會議の約束だけを以て、滿足せよといふのである。地を易へて考へて見なくても、支那は果してこれに滿足して、引込むとが出來やうか。支那の慾望を制す

ろには、隴を得た上に蜀を望むなとは、關係列國の口癖である。反對に支那から列國に對しては、果してどんな言葉を以てこれに答へたら可からうか。自分は支那の爲に、これに迷はざるを得ない。兎に角、支那が巴里會議に提出した主權回復の要求、即ちクエスチョンス・フオア・レアッヂアストメントと、ワシントン會議に於ける同樣の要求に關した、支那全權委員の顧維鈞や、王寵惠等のステートメントとは、支那の主張要求に、法律的經濟的な現代的說明を加へた、國民的思想感情の結晶である。研究資料としても、最も重要な基礎的文書である。そのうちの全部か、又は或部分の目的を、一時か漸次かに達するまでは、支那國民の國際的水平運動は、假令斷續的にしろ、到底已む時はなからう。

十五　右に法權左りに稅權

で、前述の巴里會議や、ワシントン會議に提出して、その要求を容れられなかつたものの內條約に根據したものでは、治外法權及領事裁判權の撤廢や、關稅自主權の回復、租界や租借地の還附、最惠國條款の規定、北京天津等の駐兵等が、その主なるものである。その他條約に根據しないもので、同じく支那の國家主權や、國民利益を侵害し、虧損せしめてをる事實は、數ふるに暇がない。それ等の不平や、矯正の方法を、獨り感情の上許りでなく、事實の上から論じたものは、古くは清朝時代からもあつたが、今日に至つては、猶更數限りもあるまい。支那の國民は、目の當りその事實を見、またその議論を聞かされて、日に〳〵その反感を深くしつゝあるのである。是等の主權回復の要求理由は、第一前述の巴里會議、及びワシントン會議に提出したものにも聲明せられてある通りであるが、其他支那人中顧維鈞のゼ・ステータス・オブ・エーリエンス・イン・チヤイナや、刁作謙のトリーテイー・オブリゲーションス・ビトウキーン・チヤイナ・エンド・アザー・ネーションス等の英文著書は、是等の國際關係を法理的に論述してをる。就中エム・ゼー・バオのゼ・フオーレン・レレーションス・オブ・チヤイナは、名の如く支那の外交關係を、歷史的現實的に論述したものであるが、その中の支那主權の侵害に關する一節は、巴里會議やワシントン會議に提出した支那の主張を、敷演詳說したものであるから、所謂不對等條約廢棄か修正かの主張を、研究し理解せんとする人士に對しては、特に此一書を推薦する。

以上の文書や、著述に含まれた議論だけによつて、支那の不對等條約改廢要求の、果して如何なる理由に基づくかゞ、十分に知られ得るのであるか、是等は多く過去現在の條約關係を、

主として法理的見地に基づいて論述し、二つの民族の主張を支持し、同時にその回復廃止を求めたものであるから、こゝにその詳細を紹介する煩にはたへない。但し両者は、列国がそれ等の條約權に基づき、しかもその條約權は、…………、租界租借地の如き、帝國の中に帝國を築いて、政治外交上いかに支那國家の…………、乃至その條約の結果により、右に法權左りに稅權を柄とし、或は又た全く條約の權利にもよらずして、…………、通商貿易投資企業を營んで、經濟産業上いかに支那國民の利益を壓迫しつゝあるかの事實に想到しただけで、彼等の主張や感情やを、十分に諒解してやることが出來るであらう。

十六　大きな漏斗

故に自分はこゝでは、餘りその內容に立入らぬが、但し條約上の法理的解釋を外にして、支那が列國の爲に受くる財政經濟上の損失影響に至つては、是れまで餘り日本では論議されてをらぬから、それを少しこゝに述べて見たいと思ふ。

その第一は、勿論關稅の問題である。日本も安政年間の各國條約から、日清戰後の日英條約の改正に至るまで、約五十年間治外法權の外に、關稅自主權を奪はれ、輸出入共平均五分の稅率に制限せられてきた。支那も一八四二年の中英條約によつて、約八十年間、殆ど輸出入共五分のまゝ、今日に至り、未だ一度の改訂をも經たとがない。現實五分に輸入稅を引上げてもらふ相談すら、一九〇二年の上海會議以來、二十年を經たワシントン會議の後、漸くこれが實行を見た位である。それまでの何十年間は、實際の從價二三分位にしか當らなかつた。しかもその稅率は、輸出入共一律に五分であつて、奢侈品日用品等を區別した差別稅でもない。日本は酒には十割、煙草には三十三割を課するが、支那にはそれが出來ぬ。五色の酒に醉ひたければ、支那に行くがよく、煙草の密輸入が行はれるのも、それが爲である。かくまで強制的に惨酷な稅の支那の協定稅率は、單にこれを收入政策の上から見ても、假りに以上の輸出入稅率を文明國並みに引直し、これに從價五分に達しなかつた損失をも見積り、しかしてこれを年々の關稅收入に乘じ、總年數八十年に加算して見たら、驚くべき高に上るであらう。現にワシントン會議の時の計算によれば、僅々普通二分五厘、奢侈品五分の附稅だけで、四千萬元の收入增加を見るの勘定であつた位である。

但し問題は勿論それには止らぬ。抑も支那の稅關には、輸入輸出の區別もないが、第一輸入稅率が、一律の上に、非常な低率であり、支那は勝手にこれを增減することが出來ぬから、一

れを產業保護の政策に利用し、國產品を奬勵し、外國品の競爭を防ぐとか出來ぬ。その上に五分の低率の外に、反對に外國製造品の利益を保護する爲に、自國製造品、就中綿絲布及び原棉に對し、種々の負擔や制限を課せられてゐる。外國租界には、外國法律の下に、外國人が勝手に工場を設け、その製產品を、上記の如くに條約に依つて保護してゐるのである。以上は主として輸入稅に關したことであるが、支那の輸出稅は、輸入同樣八十年間矢張一律五分の差別なしである。輸入稅で何れの國も、經濟政策社會政策の上から、日用品必要品等は、割合に低率であり、輸出稅は殆ど無稅であるのを原則とする。然るに支那では、その國內產業の立場から原料食料の輸出品は、これを無稅にするのを、利益とする筈であるのに、是亦條約の規定上、八十年間依然として五分の無差別稅を課せねばならぬ。生絲、茶、棉花の如き重要輸出品で、外國市場に競爭があるものでも何でも、これを無稅にすることは出來ぬ。反對に外國輸出先きでは、これに重稅を課せられる。一方には輸入稅の自由を奪はれて、反對に外國品の輸入を奬勵し、一方には輸出稅を無理矢理に課せしめられて、自國產の輸出を増加することも出來ぬ。以上輸出入稅の關係からだけからでも、その支那國家經濟、國民生活の上に與ふる損失は、迚も數字でこれを計上することは出來まい。

その結果は、貿易面に輸出入貿易のバランスの上に現はるゝ、年々の異常な輸入超過である。支那の各通商地は、大連や張家口の如き農產品の輸出口の外、何れも輸入超過の繼續である。その額だけは、稅關の統計によつて、的確な數字を見出すことが出來るが、これを八十年間に積算して見ただけで、數百億兩に上るであらう。支那ではこれに、八十年以上の阿片輸入高、是亦何百億兩以上に上る高を加へて、これを中國の漏卮といふて來た。漏卮とは漏斗のことであるが、國が支那だけに大きな漏斗もあつたものである。この漏斗を漏つて出た丈は、即ち銀の輸出となつた譯である。

十七　孫文の國損勘定

以上は單に輸出入稅率の不公平と、輸出入貿易の不均衡から起る、有形無形の損失を、勘定して見たものに過ぎぬが、この外、列國が右に法權在りに稅權の資本主義帝國主義を以て、支那に臨んで來た爲に、單に經濟產業の上だけについても、尙ほ幾多の利權外溢の事實がある。今度は自分の說明をこれに加ふる代りに、孫文氏の三民主義中に、これに關する一段の議論があるから、その大體を借用することにする。

孫文氏は、第一、前述輸入超過の損失を、一九二一年の稅關

…支に依り、五億萬元と計上してをる。第二、入超決済に、銀界において紙幣を發行し、僞幣を密み、現金を吸收し、且つこれを利殖するだけで、年々の損失を一億萬元と見積り、第三、航運業の獨占により、輸出入品の運賃を引上げる損失が數千萬元から一億萬元、第四、租界租借地、割讓地等の租稅、地租、地價等が若干、第五、投資企業、及び鐵道礦山等の特殊事業が若干、第六、投機其他の不正營業によるものが若干等を計上してをる。しかしてこれにくわしき説明を加へ、かくして支那は、外國の政治力と經濟力との侵入壓迫により、假令支那の領土はどうならうと、四億萬の民衆は、アメリカのレッドインデアンと、同樣の運命になるだらうと慨歎してをる。

孫氏の言つた所は、必ずしもことごとく、外國の壓迫によつて、支那の利權を損失するに至つたものでなく、支那の政治經濟狀態が、過去も今日も、依然たる現狀であるが爲に、起る現象が、その多きに居り、一も二もこれを外國の罪に歸すべきでないとは、前段に自分が説明した輸出入稅率及び貿易の上から起る現象と同一理である。但し列國が現在の如く、……………獲得した不對等條約、債務條約の武器を棄て、法權や稅權等總べて文明國同等の國交を以て、支那に臨むものとしたら、支那の不平は起りやうなく、退いて自ら省りみ、自ら改むるの外なきに至るであらう。之に反して列國がいつまでも、現在の如き態度を以て支那に臨む限り、支那は自ら省むるよりも人を恨み、その反抗は無限に繼續すると共に、國内の騷亂も亦無限に延長され、ついには直にその國を亡ぼすに至るであらう。是れ何等列國の幸福と利益とでもない。

十八　最惡の想像、支那の鎖國

兎に角、現在では、支那人の眼から見た列國は、法權と稅權とを以て支那を縛り上げ、支那をばいつまでも、プリミティーヴな經濟狀態に置き、植民地屬國同樣に、その製造品の消化國であると共に、原料品食料品の供給國たらしめ、支那自身がその產業貿易を指導管理して、これを自國の利益の爲に、發達進步せしむるの餘地なからしむるものであると、考へても仕方があるまい。現に老支那通のジェー・オー・ピー・ブランド氏は、ワシントン會議の當時、同樣の所説を露骨に陳述し、日本にその政策を勸めたとすらある。左樣な見方からすれば、支那は實に資本主義帝國主義國家の搾取壓迫に對する、絕好の見本國であるといつても可からう。隨つて支那程マルクス主義の感化受容に都合のよい國はなく、インタナショナル思想の宣傳運動に好適した國もないことになる。勞農露國が手を伸べて支那を誘

はずとも、支那自らが勞農露國の同情援助を求むるのが、當り前かも知れぬ。まして、その勞農露國は、獨墺の如く戰敗の結果でもないのに、自ら總べての舊條約を廢棄して、支那と對等の國際關係を打立てた。支那がこれを德として、全く新しい意味で眞の最惠國待遇を求るといふのに無理はない。支那の過激化を恐るゝ爲に、支那の運動を抑壓し、その希望を阻止するのは、是れ叢の爲に雀を驅り、淵の爲に魚を驅るの類で、ますます支那の赤化を助くるゆへんにしか過ぎないであらう。

現に反帝國主義、反資本主義を新たなモットーとする不對等條約廢棄の宣傳運動は、先づ北京に起り、後に廣東に傳はり、孫文氏が生前の北上に先立つて、極力これを高調し、我國にも立寄つて、その諒解を求めんとした程である。それに次いで、直隷戰爭以後の國民黨が、國民會議の主張と共に、廣くこれを全國に宣傳した事が、ついに今度の運動の一大原動力となつたのである。その反帝國主義の宣傳が、最初北京に起り、後に廣東に傳はつたのは、マルクス主義を信ずる一派の思想から來たのは勿論、その裏面には、或は直接にカラハン氏の助言があつたかも知れぬ。更に又、支那が社會主義や、共産主義等の思想を受入るるに、最も都合のいゝ國であるとは、前にもいつたが、就中支那と露國とは、農業本位の原料供給國たることにおいて、その面積と生産の豐富なることにおいて、共によく相似てをる。但し氣候に著差異變化のある爲に、産物の多種多樣であることは、支那が遙かに露國に勝つてゐる。露國は十分の自給自足を爲し得ぬが、支那はこれを爲し得るのである。それ故、支那が萬一露國の經濟政策を學び、自ら生産し、自ら消費した殘りだけのものを賣つて、賣つただけのものをしか、買はぬといふ國家貿易主義をでも、採用することにでもなつたら、支那は露國よりも、遙かに幸福な國となるかも知れぬ。列國が現在の如き態度を以て、何時までも支那に臨み、支那はこれが爲、自國の産業を自國が保護し得ず、ついには經濟的破産を免れぬといふ觀念を假令誤つてゐても、ます〳〵深く增加して行き、然らば寧ろ自らその産業を管理し得るまで、鎖國主義の昔に返つた方が善いと、いふやうな思想に、驅られるやうにでもなつたら、その實行は勿論不可能ではあるが、但し單にその思想が勢力を得ただけでも、列國の對支關係は、更に大に困ることとなるであらう。

然らずして、支那が不對等條約の廢棄や修正に滿足し、現在の所謂文明國家の組織や、資本主義の國際關係に對し、たゞ平等の待遇を求めるだけに止まるなら、それは彼等に取つて、寧ろ仕合の中であらう。但し現在の不對等條約の爲に支那がその主權

[illegible]反、若くはこれを受けこさるとの[illegible]があるにも拘らず、列國[illegible]尚ほその[illegible]と目的とを、[illegible]阻止せんとするならば、支那は或は如上の方面に進んで行くことになるかも知れぬ。自分がこれをいふのは、勿論列國の爲に、支那の受けつつある經濟上の苦痛損失に對し、支那がいかに深く、これを感じつゝあるか、隨つてその反抗の起る原因を列國に知らしめ、彼等の利益の爲に、その覺醒を促さんが爲、假りに自分の想像を、無限に延長して見たのに過ぎぬが、或は外國人に教へられつゝある支那人中には、或は眞にそう考へつゝあるものが、あるかも分らぬ。

十九　支那の爲は日本の爲

以上述べ來つたうちの後半は、自分の所謂立體的考察の一面、即ち今回の大運動が起つた直接原因中で、阿片戰爭以來八十年に亘り、その不對等的條約偏務的關係により、現實的に政治上經濟上の主權利權に對し、支那が受け來つた損害屈辱の事實、若くはこれを受けつゝあると信ずるが故に起るところの、思想感情等に關したものである。これを前半の他の一面、即ち歷史上の新舊思想の關係と、その思想が民衆運動と結びついて今回の大運動の間接原因を爲したものとを、相合してこれを見れば、[illegible]國民中の[illegible]ある[illegible]によつて、[illegible]に懷抱の勢とたつた理由が知れ、隨つてその將來も、その勢力の目的を達するまでは、一時は更に何、永久には到底終熄の見込のないものであることが知れやう。この將來の觀測が、即ちこれ列國のこれに處する態度如何を決するに、重要な基礎となるのである。但しその觀測には、獨り過去の原因のみならず、事變發生以來の事實と經過、それには支那と列國との態度如何をも加へて、これを點檢せざる限り、自分の所謂平面的な考察を全くしこれと立體的考察とを交叉せしめ、しかして將來を豫測し、その對策を講ずる段取には到達せぬ。自分は本論中において、その全體考察に關する鄙見を述べ終る積りで、筆を採り始めたのであつたが、都合に依つて、今回はその立體的な部分に止めて擱筆する。實は自分も、その結論を公にするのは、今日でも尚早く、隨つて餘り急ぐ必要もなからうと思ふ次第である。

但し、斷つて置かねばならぬとは、本論を草するに就いて、自分の考ふる限り、今度の大運動は、假令一時的には休止しても、永久には到底終熄するものでないとの信念から、成るべく深くこれを讀者に印象せしむるのが、主眼であつた。それには

支那國民の立場になつても考へ、客觀的よりも寧ろ主觀的に、同情と理解とを備へて、これを考察せざる限り、その眞相を摑むことが出來ぬとの念慮から、その結果は、支那側に偏し、寧ろ支那人自身の說でもあるかとの非難もあらう。自分が支那の爲を思ふのは、即ち日本の爲を思ふからであるが、それが假令一日本の罪人となつても、支那の友人となることが出來れば、自分に取つては、寧ろ本望である。七千萬中の一人が、その同胞には嫌はれても、四億萬の隣人と心を結ぶことが出來れば、それは寧ろ安價な犧牲であらう。それにしても自分は未だ自分の結論を公にしない。その結論が、日本の爲にも、支那の爲にも果して有害か有益か。これを斷じてもらうのは、その全豹を見た上のことで敢て遲くはあるまい。

(二) 支那の國權問題と英米の政策

法學博士　米田實

一

上海における紡績勞働爭議に、端もなく支那全國に亙る國權回復問題を勃興せしむるに至つたのである。而して之が導火線が五月三十日上海租界警察衙門で、罷業煽動學生公判の際、群衆の租界外人警察署侵入事件に次いで起つた英國警官の支那人射殺事件であり、即ち之によつて平素支那人の胸中に懷抱せられた租界組織に對する反感が勃發したのに端緒を發したことは言ふ迄も無い所である。無論今回の紡績罷業には最初から少しも政治的色彩がない譯ではなかつた。支那の勞働運動殊に勞働組合運動が、國權論の強き國民黨の本據たる廣東を發祥の地として居る關係から國民黨系統のものが、各地勞働運動に關係あり、その裏面に策動せる實例の今迄も多かつたのは誰も知る所である。併しながら他方から之を見れば、上海の勞働爭議は矢張り主として勞働爭議であつた。本來支那勞働者の境涯は憐むべきものであり、殊に近頃物價いよ〱騰貴を見、銅貨益下落

しても、その賃銀にては到底生活し得ないので、收入の足らざる[illegible]窮に陷まつて居た。今支那における一般の賃銀を如何と見るに、一昨年支那農商部の發表せる所によれば、二十九の主要工業に働く三十萬男子の日給調べは、一日四十錢より一圓であつて、最も低いものになると一日三錢乃至十五錢である。婦人勞働者においては二十八種の工業に從事する二十二萬についての調査によれば最低五錢最高八十三錢といふ情けない有樣である。以て大體が分るのである。そこで大正八年から十一年頃にかけて最近支那勞働者の要求には、常に賃銀の値上げ及び勞働時間短縮が主要なるものであり、同盟罷業が手段として行はれて居たのである。而して是等罷業の實際の結果を見るに、婦人勞働者罷業の場合の外は多くは勞働者側の成功に歸し、一割二割若くは三割の増賃を見てゐる有樣であつた。そこで一昨年京漢鐵道罷業問題に關して吳佩孚の武力壓服があるまでは、勞働運動は猛烈に發展し來つたのである。斯く考へ來ると、今回の罷業の誘因は種々あるとしても、要するに一昨年より一時衰へたる同運動の再燃たるは疑ふべからざる所である。是れ我等が忘れてならぬ所である。尤も之にも、最初から多少之に政治的意義の加はつて居なかつたと言ふのではない。即ち日本人側の張作霖援助に對する國民黨系の不平嫉視は最近における國民黨

と[illegible]の存在、更に又[illegible]に日本から[illegible]れて、排日[illegible]に國民[illegible]の間に[illegible]し[illegible]め、これが上海商人の[illegible]の中に現はれ、更に[illegible]する張作霖系の武力征服[illegible]の[illegible]し、[illegible]第二回の上海罷業の上に影響し之を變化せしめたことも[illegible]なかつた。併しながら玆に否認し得ざることは、單にそれだけであつたならば、假令政治的意義が交つて居たとしても、今回の如き國權回復運動は起らなかつたと言ふ點である。即ち上海租界における英國警官がよしや幾多の武器を備付けてゐる警察内に、罷業を侵入せしむる結果の恐るべきことを考へた爲めであつたとしても、又た多少狼狽した爲めであつたとしても、充分の警告を爲さず（尤も英國側にては空砲を發すること其他によつて警告を爲したと云つてゐるが）約七名を射殺し十數名を負傷せしめなかつたならば、今回の如き國權回復論が急激に擡頭する如きことはなかつたであらう。何故に本件がそれ程支那人の神經を刺戟したかと言ふと、それは上海租界其ものは支那人に執つて自國の屈辱的地位を表示してゐる實物教訓の如く考へられて居たからである。蓋し一八四三年江寧條約追加約款第七條において「地方官吏は領事を通じて土地及び家屋を取極け置くべし」といふ文句を元とし、最初の意味を不當に擴張し、曲解し

て國の中の國ともいふが如き租界なるものが作られて來たこと、及びこれが時を經ると共に一層重大であり權力あるものとなつたこと、殊に租界内においては外國人極めて少なく、支那人その九割以上を占め、之を維持する經費亦支那人の納税頼る重きを爲せるに拘らず、參政の權は獨り外國人にのみ限られ支那人に附與し無いこと、即ち租界の行政機關たる工部局若くは上海市會の如きも、英國人六、米國人二、日本人一名より成るが、支那人は之に參加することを許されず、唯だ諮問に應ずる爲め商業團體より三名の委員を設けて居るけれど、之には何等實權無きが如き、久しく彼等の憤慨の目的物たりしところである。次ぎに租界に在る會審衙門が支那と各國との條約以上に外人側の權力を進め、例へば純粹の支那人及び支那人間の裁判事件に對しても、この判決には外國人側の同意を得なければならぬ組織とされるが如き、又た一九一一年民國革命を機とし、不當にも全く領事團の下に置かれ、支那人側の「復舊」要求が容れられぬ如き、或はこの租界が往々支那國内を擾亂せしむる武器供給の根據となり、或は阿片供給の本據となるが如き事實ある等、一層支那人の對租界惡感を助長したものであつた。而して此等惡感の目的物たりし租界において端なくも、支那人虐殺事件の發生を見たことが、その事情の如何を問はず彼等の國權回復問題を刺戟せずには措かなかつたこと、誰か首肯するに難しとするものがあらう。斯くの如くにして遂に今回の如く全國に亘る國權回復運動を見るに至つたのである。

然らば目下支那の所謂國權回復論は今や如何なる姿を取りつゝあるか、無論それには租借地問題駐兵問題等種々なるものが存するけれども、差當つて最も重視せられてゐるのは、矢張り（一）租界問題（二）關税問題（三）治外法權撤廢問題等である。併し支那人の希望する所は、何れの點たるを問ふのでは無く、すべて對外關係及地位に於ける不對等の狀態を一掃するにあるのである。之については無論急進論もあれば漸進論もある。過激論もあれば穩和論もある。從つてその内容については別に研究を要する。併しこの種問題の内容解剖については別に論議したことがあり、本誌上再說を試みんとするものではない。今予が本論文において一考せんとする所のものは、この不對等狀態一掃を目的とする支那人の希望に對し、英米等の強邦が果して如何なる政策若くは態度を取り若くは取らんとするかの問題である。思ふにこの點は何人も注意し又注意せねばならぬ重大問題である。依つて予は聊か管見を述べて見たいと思ふ。

（序に一言しておく、予は上記の文に治外法權といふ言葉を使用し

た、支那の治外法權といふ文字の使用については、國際法學者の少からざる部分において、此の論を唱ふるものがある。それは何か。治外法權は一の擬制である、そこでその擬制に關する沿革上の理由に基いて、之は獨り國家の君主外交官等公的機關の特權にのみ適用すべき文句であつて、外國に在留する私人が地方法律の適用より除外せらるゝ特權には適用すべからずとの議論が爲さるゝのである。そして此の種の論者は右の理由を以て治外法權の言葉を使用する代りに、領事裁判權なる語を使用しなければならぬことを主張するのである。是は一應の理由がないではない。併し所謂領事裁判權なる文句は支那の現實に即して表示上極めて狹小で不適當なるものである。然も之れ以上に支那には治外法權なる文句の使用が止むを得ざる重大なる事情がある。それは列國が今日まで國際會議において、國際條約において、國際決議において、支那の國權回復問題に關聯しては治外法權なる文句を使用して居る關係があるからである。現に英國は一九〇二年支那に對し「治外法權撤廢」の豫約を與へ、我日本及び米國は一九〇三年同じく「治外法權」撤廢の豫約を爲した。最後に一九二一年ワシントン會議における決議を見るに、列强はやはり治外法權問題として取扱ひ、之が撤廢の爲め調査委員會を設くることを明言してゐる。而して目下の問題は實に此ワシントン會議からの繼續であることを忘れてはならない。斯の如き國際公文の狀態では吾人もこの文句を使用することが、最も必要且つ便宜な條件である。然らずして別箇の文句を使用する時は、その意義解釋に關して種々の疑問を喚起し紛議を誘發し收拾すべからざるに至るものである。其非領事裁判權なる語を使用せざるべからずと主張する論者は、先づ支那の國權回復問題が國際會議國際條約等において（他の條約、會議等の例ではいかぬ）權力ある列國政府をして、その國をして支那のいふ改訂の文句を使用せしむることに努力すべきであらう）

二

然らば此の支那の國權回復問題に對して列强は如何なる態度に出でんとする乎。先づ之に關し最も重要なる地位に在る英國は如何なる政策を取らんとするか、又現に取りつゝあるかといふと、吾人は同國が比較的右國權回復に對する一大障害であることを承認せざるを得ないのである。それは何故乎、第一、英國人そのものゝ性格、第二、支那に於ける英國の地歩、第三、英人の對露疑懼、第四、在支英人の主張の爲めでもあるが第五として統一黨が內閣を占めて居る事實をも掲げ無い譯にはいかぬ。少しく之を說明せんに、先づ英國人その物の性格を見ると、元來急激なる變化を欲せず、自己の內治外政を通じて上においても漸進論勝を制するの國民である。步一步進むのが彼等の特長であり、躍進といふが如きは彼等の敢て取らざる所である。自國內の事物を處するに然るが如く、他國の問題に對する場合でも亦然らざるを得ないのである。是が英國人の對支那態度に影響なきを得ざるは勿論と言はねばならぬ。

ところで獨り之ればかりではない、尙色々の點が英人をして

支那に對し強硬態度を取らしむる原因となつてゐる。その一は何か、現在支那において最も深き地盤を有し、他國よりも優れたる地歩を占むるものは英國であるので、自然自己の立場に顧み支那における外人の權利を弱め若くは讓歩するが如きことが自己に對する影響の極めて重大となるのみならず、他外國人にも少からざる影響を及ぼすを考へ、現在最も重要地位を占むる英國は自國のためにも、他國の爲めにもこの權利の防護者たる責任を有すとし、自然變化嫌惡の傾向を造つて居ること是れである。蓋し古き時代は暫く措き、支那において列國が漸次地歩を占めたる十九世紀において、英國は少くともその先導者であつたことは否認し能はざる所である。即ち一八三九年四〇年時代における阿片紛議及び之に伴ふ阿片戰爭の結果として、英國は一八四二年江寧條約において、廣東、厦門、福州、上海、寧波の五港を開港せしめ、以て獨り英國の爲めのみならず他國の爲めに支那を海外に開かしめたといつても宜いのである。斯くして五港を開かしめた英國は、第一番にそこに自己の地歩を作つたのである。他の外國人にも恩惠を與へたに相違ないが先づ自身の地歩を確立することを忘れなかつた。港灣に於ける事實、二の立派なる埠頭、整然たる租界の美しき公園、それ等を見ただけでも英人努力の反映とこの地位を明かにするものたるに、是等諸港を訪問する外國人の誰もが賞揚せざらんと欲しても得ざる所の圖である。ところが開港地に斯の如き地盤を作れる英國は内部に向つても着々手を伸し、或は往々政治的意味をも加味せしめ、次第に發展の歩を進めて來た。南方から言ふと誰も知る如く前出江寧條約の恩惠として彼は香港を自己の屬領とせるのみならず、一八六〇年の條約でその對岸九龍を租借し更に一八九八年の條約で約三百五十方哩以上該租借を擴張した。斯くて香港と九龍とは相俟つて南支における英國活動の根據地となり、之に巧妙なる外交政策が働き、その勢力は漸く南支に發達して來つたこと、世人の熟知する如くである。少しく北進して揚子江一帶は如何といふに、是亦英人が自己の河を以て自から居つた所である。此勢力は夙に同方面の鐵道鑛山經營に現はれたのみならず、日英同盟條約締結の際にも反映して、曾て日本は滿洲方面を自己發展の地域とすると共に、長江一帶は英國の發展に委するといふが如き諒解が出來たことさへあつた。而してこの諒解の結果曾て日本の資本による江西の南潯鐵道がその線路延長を企てた場合、英國は同地域が所謂長江支流地帶だといふが如き點を基礎とし、極端なる我儘を云ひ出し、遂に日本側の發展計畫を邪魔したことさへもあつた。此外支那の重要財源たる稅關が殆ど英人によつて支配されて居る事

實、英國勢力ご等しく英人のインフルエンスの下にあるといふ事實は、何人と雖も之を承認するに躊躇せぬ所である。外國人は往々我日本を以て支那に特殊的地位を有し、若くは主張するが如く唱へ暗に攻撃の口吻を弄するが、實質的に之を云へば、英人ほど支那において所謂ベステッドインタレストを占めて居るものは少からうと思ふ。而して斯ういふ關係にある英國人は、關係淺く地盤少き他國民に比し支那の國權回復要求に對し容易に讓歩せぬ傾向を持つことも、決して無理由ではないのである。次ぎに英國人はロシアの對支宣傳殊にそれと今回の國權運動との關係につきて多大の惡感と疑惑とを持つて居る。けだしロシアは共産主義を元として立てる國家であり、その主義の宣傳普及は一日として忘ることの出來ない地位にある。よしや最近國内において新經濟政策を取ると共に、外交關係において所謂資本主義系の國家と妥協する策を講じては來たけれども、然も自己の政策上何等の不便を來すことなくして自己の主義を擴張し得る地域ありとすれば、其同志を使嗾し彼の所謂世界革命に對する用意を爲すことについて、着々歩を進め來るは寧ろ自然の歸趨でなければならぬ。そこで彼等は極めて抵抗少なく然も成功し易しと思はるゝ地域に向つて宣傳政策を實行しつゝあるのである。即ちバルカンに對して その宣傳政策を進め、中央アジア方面に及ぼし、このアフガニスタンを不穩ま國境方面の住民に對し、大いに反英政策を進めて止まないのである。之が英人側の對露惡感對露疑惑を生ぜしめて居ることは、天下周知の事實であらねばならない。而して今回の上海の罷業並に之に伴ふ支那の國權運動に對し、裏面でロシアの手の動いて居るとの觀測の英國官民側において行はれて居ることは實に延いて彼等の對支態度に影響しない譯には行かないのである。而して此ロシア、對支活動說は、決して無根據のものでは無い。顧みると昨年五月三十日露支條約が締結され、始めて親善關係に復歸せる以來、ロシアは從前から深き關係を結んだ廣東の國民黨政府並に同黨系と連絡を取り、自己の主義宣傳に怠らなかつたのである。而して今回の上海の同盟罷業勃發するや、ロシアは熱心にその罷業を支持する態度を取つた。北京駐剳大使カラハン氏又自からも斯の如き宣傳を爲し、同時に六月下旬には上海露國總領事館の手を經て、モスコー勞働組合中央會議の名目の下に五萬ルーブルを學生運動に寄附し、更にモスコー鑛業勞働者協會の名前において一萬ルーブルを寄附し、その他五千、六千ルーブルと度々送金せられたと傳へられてゐる。ところが五月末英國警官の支那人射殺事件發生後ロシア側の言論は官憲民間を問はず、一齊に支那國權回復論に對し猛烈

なる同情を示し、カラハン氏の如きも同時に之が聲明を爲した。殊に彼の勞農政府三巨頭の一人たるチノヴィエフ氏の如き又熱烈なる聲言を爲すと同時に、國民黨系を經由して之と聯絡せる馮玉祥が英國征伐の聲を高めた事實の如きは、一層英人をして本問題におけるロシアの刺戟煽動を重視する傾向を生ぜしめたのであつた。彼等の眼から見ると、支那に對する目下のロシアの活動振は、恰もアフガニスタン、印度國境方面におけるロシアの宣傳と相共通せるもので、英國に對するロシア脅威策の一部的な現はれとしか思はれ無いのである。よし支那人民の國權回復論は相當に有利であり有力なものであるとしても、斯くロシアにより煽動せられる事實においてその政策の一端なるかの如く見らるゝことは、實に印度方面其他で之と衝突して居る英人をして支那に於ても讓步策に出でしめない所以の一となるのである。

次に予は現に支那に在留し、若くは之と關係を有する英人側が甚だ強硬策を鼓吹しつゝあることが、是亦英國を強硬的態度に傾かしめる助因の一たるを思はぬ譯には行かぬ。蓋し英支貿易關係極めて重大なる地域はマンチエスターを含むランカシャ方面である。その生産物就中紡績品を輸出先として上海は、印度カルカッタ、ボンベイに次ぎ第三位を占むる大切なる貿易地である。然らば此等マンチエスター事業家の對支觀はドウかと言ふと、近着の英紙に依ると、彼等はもし英國にして軟弱なる對支策を取り歩一步讓るが如きことあらば、支那に於ける英國商人の地位は安固を期し難く、その貿易は到底安全に行はれない窮境に逢着せざるを得ないと考へて居る。有名なマンチエスター輸出業者ケーデー・ステツート氏の如き其一例であり、氏は飽くまで英國政府に強硬策を取らしめねばならぬと呼號して居る。一轉して上海を始め支那在留英國商人達の態度如何といふに、彼等は直接事件の地に在留する關係から第一に生命財産の保護を重視すると同時に、今日まで強き英國の權威下に彼等の事業が行ひ易かつた事實に鑑み、もし政府にして遽かに讓步するが如きことあらば、却つて支那人の輕侮を招き啻に將來生命財産の安固困難となるのみでなく、彼等の事業にも種々なる障害あるべきことを指摘してゐるのである。それは六月中旬在上海の英國有力商館が本國外務省に向ひ強硬政策の必要を主張し、當局は現に強硬策を取りつゝある在支英國官憲を支持せられんことを望む旨打電せる事實に徵しても、明白な所である。

然らば在支那英國人が斯くの如く強硬論を固執し居れる所以は何か、それには種々の點がある。その一は彼等の所謂支那國民性觀である。彼等は支那人を以て隴を得て蜀を望むものとし、」

讓歩すればする程要求する所大なりと考へて居る。即ち讓歩するものは弱きが爲めに讓歩すると見て增長するものだとは、彼等が長年支那滯在の結果として、之を支持する實例を見聞した爲めでもあらうが、彼等の支那人觀の根據である。尤もこの觀念を有するものは獨り英人のみでない。米人及び日本人中にも少くないことを記憶せねばならぬ。

その二として彼等は又た支那に於ける諸運動の裏面に必ず策士の細工のあることを熟知してゐる。例へば多數支那人民は決して自動的に動くものでない、極めて少數者が裏面に於て畫策せる事實を彼等は熟知し得るのである。併し此の細工なるものは決して國民運動の如きものを造り出すのでは無く、唯その機運熟せるところに僅かに火をつける燐寸たるに止まるのであるが、餘りに近くその方面の事物を見る在支英人間には、所謂樹を數へて林を忘るゝの弊害に陷り易く、唯裏面に尊敬すべからざる事件、顰蹙すべき種々の事情の存在する點に捉はれて、往々國民的大運動にも正當に價値附けることを誤つて居るものが少くないのである。斯くの如くにして今度支那の國權回復運動についても、回復運動そのものとして見ず寧ろ策士の活動殊に漠然たる彼等の議論振りに基いて之を單に「支那人の排外的精神の復活なり」と結論して居るものが多い。現に之はロンドン方面でもデーリーテレグラフ紙上に於て一支那通の運動が特殊の意義を有するといふよりも、漠たる排外心の發作に一といふやうな解釋を流行せしめて居るのである。而して之が支那關係英人殊に事業關係の人々をして强硬策の唱道に傾かしめつゝあるは忘れてならない所である。

予以爲らく、以上に述べた諸點は、英國の對支政策を强硬にする傾向の要素に違ひ無いと。併し翻つて考ふると、此點で一層重大であり、一層閑却してはならない一事あるを忘れてはならぬのである。それは外でも無い、昨年十月總選擧でマクドナルド勞働黨內閣敗れ、その結果十一月以後ボールドウヰン氏を首相とする統一黨即ち保守黨內閣が英帝國の政治を支配して居ることであらねばならない。

けだし目下英國の政界は自由、勞働、統一の三黨派の鼎立である。此中自由黨はその名稱の示すが如く自由思想に依つて立ち、對外關係に於ては非帝國主義の鼓吹者である。武力を以て外國に臨み或は他の民族を壓迫するといふが如きことは彼等の考へない所である。彼等は成るべく他の民族にも自由なる發展の機會を與へ、成るべく武力的壓迫の如きを避け、その政治振りにおいても地方自身をして自ら支配せしめんとする政策を主とするものである。之は支那問題に於て同一の傾向を持たねばな

らぬ。現に六月十八日英國下院における自由黨領袖ロイド・ジョーヂ氏の演說にも此片鱗が現れてゐる。即ち氏は述べて曰く「上海に於ける人口の多數は支那人である、租界内にて最も多く納稅するものも支那人である。この事實に鑑みるも是等支那人に對し租界の支配に關して何等發言權を與へざるが如きは實に驚くべき現象と言はねばならぬ」と。而して彼は更に進んで支那國民に對し所謂フエアー・プレーを與へなければならぬ事を公言して憚らなかつたのである。次に勞働黨は如何といふに之もその系統においてその思想において非帝國主義である。是れ過去におけるラムシー・マクドナルド氏の主張に照しても判明する所であるが、同じく六月十八日下院におけるマクドナルド氏の議論は極めて短かゝつたけれども、やはり支那民族に對する寛大なる政策を主張した所は、彼の思想の傾向を現はせるものたると言ふ可きである。此以外勞働黨はその名稱の示すが如く勞働者の味方たる立場から從來問題外に支那勞働者側に對し聲援しつゝあつたのである。要するに同黨は國權問題に關聯して此の支那に對する同情の程度は、自由黨に優ることあるとも決して劣らないものがある。無論斯く云へばとて吾々は英國の自由勞働兩黨ともその英國人たる事を忘れてはならない。彼等は常に理想を重んずるけれども又頗る實際的である。その國民性たる漸進主義も自由勞働兩黨に於ても共通に現はれて居ることを忘れてはならぬ。予は唯此漸進主義の範圍内において彼等が比較的支那國權回復論に同情する地位にあることを指摘するに過ぎぬのである。所がこの二政黨は今や政局に立つて居らぬことを忘れてはならぬ。即ち現在英國の政權を掌握せるは統一黨内閣であることを忘れてはならぬ。統一黨は本來對外硬を以て其の本領と爲すものである。即ち英國の傳統的地位を確保しその名聲を維持し、威力を失墜せさらんことを以て同黨の特色であり本分であると自任してゐる。是れは何人にも認容せらるゝが如く十分英國の歷史に反映して居る所である。即ち自由黨が政權を掌握すると、一見その對外交は不振なるかの如くに見えるが、統一黨（保守黨）が一度天下を取ると、その外交の動きは一段と活氣を呈し來るのが常であつた。即ち十九世紀において英國が國威振張に熱心したのはラッセル卿グラッドストーン派等の自由黨内閣時代にあらずして、ヂスレリー及びソルスベリー卿等の保守黨内閣時代であつたことは誰も認める吝にかならざる所であらう。而してこの傾向は今回のボールドウイン内閣にも現はれて居る。その最も顯著なる例は昨年以來の對エジプト問題の處置である。世人の知るが如く昨秋エジプトスーダン總督たる英人スタック將軍の暗殺事件起るや、英國はエジプト

に對して[illegible]エジプト[illegible]ザグルールパシャを引退せしめ議會解散を餘儀なくせしめたのであつた。而して今春總選擧の結果ザグルールパシャ派又復勝利を得るや、英國は無法にもエジプト政府を脅迫して議會召集と共に直に之を解散せしむるに至つたのである。是れ即ち現内閣の對外硬策＝英國の威信を極端に維持せんとする政策の現れであつて、自由黨勞働黨の内閣に在つては望み難きところである。而して斯ういふ統一黨系の一般的政策は、特殊問題たる支那問題に關聯しても現はれ易いと言ふことは、何人も想到せざるを得ぬところであらう。

殊に支那における英國の地位上の影響は獨り支那そのものに關するばかりでなく、延いて人口三百萬を數ふる英國の寶庫たる印度にも影響を及ぼすべきことは、國權論强き統一黨系の常に考へて居る所である。之を要するに前に述べた諸種の事情、原因存在するに加へて、目下英國の政權が統一黨の手に在ることは　少くとも英國をして支那の國權回復上の最大障害物たらしむる所以と言はねばならぬのである。

吾人は徒らに抽象論を弄ばんとするものでは無い。想像に耽るのでも無い、見よ之は最近英國の具體的な强硬態度に現はれたのである。その一端を擧ぐると六月上旬英[illegible]領[illegible]が强硬なる[illegible]ナード・マックレー氏の[illegible]、[illegible]べしとの支那側の想像に反して、[illegible]どもその一例である。又同月十八日外務大臣オースチン・チエンバーレン氏が、英國下院において猛烈に支那の局面に對して支那の責任を問ひ、或は支那の地方政治に何等の信なきことを指摘し、支那は今日人類の殆ど五分の一を占むる大人口を含みながら、ヨーロッパ的意義より見て國を爲せりと見ること能はずと聲明し、同時に支那に對する强硬策を標榜した演説にもそれ等が反映してゐることは　今更らに喋説を俟たぬ所ではあるまい乎。

三

英國の此强硬態度に對し一見正反對に立つが如く見ゆるものは何國であるか、言ふまでもなくそれは米國である。英國外交當局若くは民間の議論が支那における欠陷を說き、威信を保つべきことを主張し、支那をして飽くまで英人其他外人の生命財産に對し責任を負はしめざるべからざることを述べ　國權回復問題に對しては成るべく[illegible]過眼の態度を示しつゝあるに反して、米國は今回の問題發生と共に進んで國際會議を提唱し、或は

治外法權撤廢委員の任命を列國に勸誘するなど、支那に對し頗る親切極まる態度を示したのであつた。併し是は米國の地位を知れるものに在つては　何等不思議とするに足らぬのである。

何故ならば　米國は支那において英國の如く何等特殊的地位を占めて居らない、英國は香港を領有するのみならず、その對岸九龍を租借し威海衛をも租借するに反し、米國は斯る關係がない。又租界問題について英國が重要なる地位を占むるに對し、米國は然らず寧ろ從屬的地位に立つて居る。又支那における稅關行政郵政など等が英國人の勢力の下にあるに對し、米國は斯の如きものを有しない。或は支那國內の交通機關鑛山その他の業にも、將來はともかく今日において米國は到底英國と匹敵すべき地位に居らない。何れ米國の政策は之と地理的に遠き中米南米において、特殊的地位を作り又は作らんとしつゝあるが、極東に地理的に極めて遠隔であるから、その排他獨占政策の鋒鋩內に置いて居るのみならず歷史的に見るも英露佛その他は夙くに租界を獲得し、特殊的利權區域を獲得するの道を取れるに、米國は獨り之を希望しないばかりか　假りに之を希望しても自己の活動的機會が許されの爲めに實現すべき狀態に在らなかつたのであつた、そこで政策としては何等特殊的地位を占むるにあらずして、寧ろ門戶開放機會均等てふ公平なる見地から他國が特殊的地位を占むるを防止し、かくて列國の爲に割込むの一點にあつた。否な他の國が特殊的地位を占めんとするを破碎することが、實際に遲れた米國に取つては便宜な政策であつた。そこで誰も知る如く一八九九年國務卿ジヨン、ヘイ氏の門戶開放機會均等の宣言となつて現はれたのである。蓋し若し此機會均等主義が完全に行はるゝとゝなれば、彼等の見る所にては米國は相當有利の地位に立たねばならない譯であつた。何故ならば他國の資力缺乏せる中において、獨り米國は豐富なる資力を抱いて、充分に活躍する餘地を有するからである。次に又た米國を動かせるものは在支那宣教師達の理想的議論である。今回の上海同盟罷業並に全國に亘る國權論勃興の前後に現れる在支米宣教師達の議論は如何と見るに、彼等の多くはヨーロツパアメリカにおいて養はれた西洋流の思想を根柢に有ち、然も身は宗教の傳道に任じ人道的思想の强き爲めでもあるが、常に支那人の地位向上論に味方し、同盟罷業についても或は國權囘復についても之が支持說を取り來つたからである。この態度は在支外國人等より抗議を受け、殊に英國新聞等において批難の的となれることは世人熟知の事實である。ところがこの種宣教師達並びに與論等の言議は、過去久しきに亘つて米國言論界に勢力を有し、長く米人を教育せる歷史がある。加ふるに支那が十四年前

共和政治を採用せる爲め、同じく共和制國たる米國に一種の同情意感を生じ、これだけ同情を強め、それは遂に一九二一年より同二二年にかけてワシントン會議において成立した例の九國條約に現はれたのであつた。右九國條約については今更ら詳說す必要もないのであるが、要するに支那の門戸開放機會均等領土保全の主義を再び聲明せるのみでなく　將來における支那の統一及び國權回復の準備を示せるものなることは誰も異論を挾まぬ所である。而して斯の如き態度を取つた米國は今日と雖もその根本政策においては何等變更を見ないのである。

茲に於て乎今回の問題發生と共に、同じ政策が現はれずには止まなかつた。その一端は最近米國に現はれた上院外務委員長（アイダホ州出身上院議員ウイリアム・イー・ボラー氏の對支親善論を以て證することが出來やうと思ふ。彼は六月中旬その發表した議論において「米國は支那に對して不當なる干涉を爲すが如きことあるべからず」と說き以て當時英國などに行はれて居た外人生命財産保護論に答へ、更に米國は支那において何等帝國主義的膨脹主義的傾向も野心もなきことを繰返して聲明し、成るべく早く支那の治外法權を撤廢せねばならぬと呼號し、同時に目下の支那の形勢を以てその罪專ら外國人にありとするの議論を進めたのであつた。否なそればかりでない六月下旬[illegible]英國の[illegible]するや、ボラー氏はこれに對して[illegible]へ、[illegible]所が支那における英人その他外國人の後を追ふて、帝國主義的膨脹主義的傾向に陷りしつゝあることを遺憾とする旨を世上に發表したのである。即ち彼の態度は飽くまでも支那人に同情を表し同時に英國以下友國の態度を不當とする意見を公表示して憚ら無かつたのであつた。而して吾々の注意すべきことはボラー氏は昨年末マサツセツツ州選出上院議員ロッヂ氏逝去の後を襲ふて上院外務委員長となつて居る點である。上院外務委員長の地位が同國憲法上、上院に條約批准協贊權、大公使等選任につきての容喙權を與へて居る結果、その外交に於て重大なる關係を有し、或意味において、大統領及國務卿と共に外交に對する責を分たねばならぬ立場にあることは、消息通のよく知る所である。此ボラー氏が右の如き主張を爲せることは米國政府が恰も本年七月に入り着々親支的態度を進めつゝある事實と相俟つて、前記英國の態度と全然異れる對支政策の現はれなることと、誰か之を否定し得るものがあらう、

四

以上は試みに英國と米國との對支態度を對比したものであ

が、茲において問題が起つて來る。それは何か、前記の如き立場に在る英國と米國とが、その對支態度について、殊に今後の支那國權回復問題について相衝突するかどうかである。予は無論或程度においての軋轢は是れあるべきことを認める。即ち右の如き態度を取れる英國は、自己の威信を維持し容易に自己の既得權を放棄せず、よし放棄するも漸進的に之を行はんとするのであるから、支那人の國權回復の希望に副ふに於てその進み方の遲緩たるは論を俟たざる所であつて、之に對し、米國が比較的迅速なる進み方を取らんとすることだけは疑ひなき所である。要は唯その相違が何れの邊に在るかと言ふことが問題となるのである。然らば其差異は如何。予は以爲らく「根本的立場右の如く異つて居る兩國と雖も、事若し議論の境域を離れ、實行問題に移つて來ると、その間の差異は漸次減少する傾向があるでは無からう乎」と。

先づ米國から見やう、米國は支那の國權回復に贊成したが、同時に實際的な米人の事とて之が實行には階梯あるを知れることを忘れてはならない。先づ假りに治外法權撤廢問題とせんか、米國は今後治外法權問題調査委員任命について、今より以上列國に慫慂しその時機を早むることに努力するかも知れない。併し乍ら米國人も支那の治外法權の撤廢殊に今日の外國裁判所撤廢の如きに對しては、先づ支那の法制完備が先決問題でなければならぬことを熟知して居る。後者未だ成らざるに、前者を廢す可しと言ふのでは無い。然らば支那の法制は目下如何なる狀度にあるかといふに、假刑法は舊清朝の終において起草せられ、民國元年三月發佈せられたもので、ヨーロッパ大陸系のそれに倣つて作られたのであるが、その後更に研究を重ね、一九一九年第二回目の法典が起草され英文佛文により發表せられた。その外民事訴訟法、刑事訴訟法の如きものも出來たが、民法と商法とはまだ修正の半途にありて成立を見た譯でない。然らば則ち、この支那諸法典の完成が先決問題でなくてはならない、何故たらば近世式法典完成せざる國の法廷において外人の裁判を委することは、今日米國人と雖も問題とせざるを得ないのみならず、否た彼等の平生に鑑み、一層之を問題とす可き狀境に居るからである。

次は支那の政治の現狀である。支那は袁世凱が自己の勢力維持の立場より、その大總統となるや、各地に將軍の名の下に軍人を配置したが、是等軍人は獨り軍權のみならず勢力强きゝに一般地方的政權をも手中に掌握した。袁世凱死後彼等は將軍と名稱を變更されたが、今や支那は彼等の割據の下に殆ど分立の姿となつて居る。而して斯の如き彼等の專制政治の下

においては法權の確立、法律の完成といふが如きは寧ろ望むこと難きにさる狀態である。之れも矢張り米人の本問題に於て再思三思を促さるゝ原因となつて居る。試みに目今米國の學者及論者に行はるゝ議論を見よ、やはり司法制度並に設備の完成が、治外法權撤廢の先決條件であるといふ點に一致してゐるでは無い乎。尤もその間において實現を急がんと欲する論者があることは、勿論である。然かもそれは決して盲進論では無い、彼のウッドヘット氏其他の學者は曰く、「支那の近世裁判機關の完成は、今の督軍制の下では到底急に行かない、それを待つ時は時期極めて遲延するものと見ねばならぬ、故に差當り支那の法典の完備せる曉、先づ第一歩として現在の領事裁判在支外國裁判機關において、從來各國が自國法律を元として支那に裁判を加へるが如き制度を廢し、之に代ゆるに統一せる支那の新法律の適用を以てし、之によつて先づ支那の國權確立の端をなし次で司法機關の充實せる曉において、始めて現在の外國裁判權を完全に撤廢するの策に出でよ」と予は斯る案の是非善惡については茲に評論を加ふるものでないが、よしや米國人が急進的であるとは云へ、突如一躍支那人希望の實現を見せしめんとしつゝあるものでないことを知る可きである。然らば次の租界問題は如何、支那人の希望する所は現在存する上海共同租界は勿論、天津漢口その他各所に在る租界の全部の回收にあることは論である。それでは是等租界廢止に對する米人今日の意嚮はどうかと見るに、彼は結局において租界廢止に同意すると雖も、差當つて急激にその廢止するが如きことは、同じく支那國情に鑑みて同意せんとするものではないのである。例へば支那人が、常に不平とする租界における支那人投票權の拒否を改め、彼等に參政權を與へんとする案の如きは、無論米人が贊成する所である。又會審衙門組織問題殊に一九一二年支那が共和政治となれる際、一時國內紛亂狀態に陷り領事團が新たに會審衙門を全く自己の支配下に置き今猶依然たるが如き事實に對する支那人の不平は無論米人が正當として居るところである。是が舊狀態の回復については米國人側にも相當に同情を有つものがある。併しながら之より進んで急速に租界そのものゝ廢止を行はんとする論につきては、米人はそれが結局外人の內地、發展に貢獻すと言ふ交換的便利あるにも係らず、未だ急激なる實行に贊成するには至らないのである。即ち米人と雖も、一度支那の國權回復に關する實際問題具體問題に逢着した場合、餘程その態度が漸進化することを見なければならぬのである。

翻つて英人はどうか、彼等は前に述べたが如く一般的においては強硬と云はんよりは寧ろ頑強である、然かも此頑強なる

度を持しつゝある英國人は、飽くまで支那の國權回復を拒否せんとするかといふに必ずしもさうでない、この點は吾々の大いに注意して考へねばならぬ所である、無論彼等はその時機の遷延を便とし希望し居るかも知れないが、決して之を拒否せんとするものでない、その一端は本年六月にも現はれた。即ち恰度本年六月上海事件に於ける同地派遣列國委員及支那側委員の協議に際し租界における投票權問題若くは會審衙門問題が提起せられると、列國委員は權限なきを理由として是等の點について約諾を與へ無かつた。ところが、その後六月中旬より下旬にかけ北京で之が問題となるや、英國側は必ずしも租界における參政權を支那人側に拒まんとするものにあらず、適當なる計畫に基く修正變更は之を認むるのに吝ならざる態度を示したことは、當時（吾人の耳に達した所であつた。又會審衙門も同樣で、英國側は是等の點について頑強に現狀維持を主張するものにあらざることを明示したと傳へられて居る。否た此點は、頑強な議論が行はれた英國下院における政府當局の言明の中にも特に之を示したところである。それは本年六月九日英國下院にて勞働黨議員ウイッチウッド氏の質問に對し外務次官マックネール氏が答へた言辭の如き適例である。彼は曰く「英國政府は支那に對し支那が平和となり而して繁榮とならんことを第一に希望し且考へてゐるのである。吾々は支那の傳統と文明に對して尊敬を有つものであつて、同時に吾々は世界大戰に際し同盟の地位に立てる所の支那人の民族的抱負希望について至深の同情を有つものである、而して吾々は支那を援くる義務あることを知る、關稅會議の如き遠からず行はるゝ場合には吾々は支那の爲め大いに助力する機會が來るであらうことを思つてゐる」と。而して彼れは、繰返して支那援助の義務あることを承認する旨言明して居るのである。否な之ばかりでは無い七月二十五日首相ボールドウイン氏がランカシア・プレスコットに行はれたランカシア及び同方面の統一黨員五萬人の大會に述べた所に徵するも亦「租界內における統治權問題に關しては、支那の正當なる要求を考慮するの當然なること及び考慮する時機の到來を信ずる」と言明して居る。而して同じやうなる同情的字句は外務大臣チェンバーレン氏の諸演說中にも散見せる所である。即ち「統一黨政府と雖も多少の讓步と漸進的態度を本問題に關して支那に行はんとすることに對しては異議あるはずがない」と。」

五

然らば則ち一方に於て頑冥な立場に在る英國が、如何にして他方に於て讓步の風をも示す乎、予はそれが（一）支那の國權

實現が何んせられねばならないか、其の上に於て[illegible]て[illegible]の一二一經驗に支那方面の民間關係が、英國に建設して居る結果であることを思はゞ、遂には行かぬのである。

先づ第一の點から言ふと、英國と雖も大勢は知つて居る。即ち同國は支那における國權回復問題の起らねば止まぬことを認めて居る。その實現の時期が何時になるかは別とするも、何れは實現せられねばならない事柄であることも、夙に承認し居り、そこで何れは實現せざるを得ないものであるならば、英國と雖も急進的では困るが、漸次的に一歩々々讓歩しない譯には行かないと考へて居る。唯英國にしては既得利益に最も少き害を及ぼす方法を以て、急激なる變化をその事業狀態若くは在支外人の社會狀態等に及ぼさゞる方法において、之を實現することを便宜だと信じて居るに過ぎぬのである。而して又た斯の如く國權回復問題が何れ實現しなければならぬものであれば、本問題に贊成する國が、將來その國內において國民間に於て評判よく、反對する國が評判惡きは論を俟たぬ所で、將來における對支外交の立場から＝支那における自己の地盤維持の關係から、支那人に同情を示すを以て有利とするは、彼等と雖も考へて居る所である。之が英國が頑冥の裡に、理解の曙光を漏らして居る一因に外ならぬのである。併しこの場合吾々が考慮以外に措いて[illegible]ことは、[illegible]に於けるドイツ[illegible]支那[illegible]在して居る點是れである。之れは何であるか、第一は大戰後支那におけるドイツ並にロシアの失つて來た立場が、支那の列國外交上に大なる影響を生ぜねばならぬこと、第二は我日本と英國との關係の問題がそれである。蓋し世界大戰前においては、支那に於てドイツロシア等を含める諸大國の團結は彼等の地位立場は同一であつた爲め割合に鞏固であつた。所謂北京外交團の如きも比較的結束が保たれて居たと云ひ得る。然るに戰後の新形勢は如何といふに決して從前の如くならず、殊に支那の國權問題に關聯しては各國その步調を一にせざる狀態に置かれて居る。見よ、ドイツ、オースタリーは支那參戰の結果一九一九年、ヴェルサイユ講和條約第百二十八條以下の規定により、支那における自己に有利なる不對等狀態を拋棄することゝなり、今やドイツ、オーストリーは自國民に關聯して支那における治外法權を撤廢し特殊の裁判權も警察權も有せざることを忘れてはならぬ。又た支那は一九一七年參戰と共にドイツ、オースタリー租界を沒收し爾來支那の行政下に置き總ての既得權をも回復して了ひ、それはウェルサイユ條約百三十二條等に確認せられた治外法權問題租界問題等において何等特殊的地位を有せ

す、相互對等となれるドイツ、オーストリーは、今日不對等なる有利の地位に立てる英米日其他の國と事を共に爲すべき道理がないのは、分り切つた所である。ところが、獨りドイツ、オーストリーのみでないロシア又然るのである。ロシアは昨年五月三十一日露支協約成立の結果、治外法權及び租界等につきこの各種の權利特權の如きは直に放棄せられた（一九二四年五月三十一日の露支協約第十條及び第六條附屬聲明書參照）斯の如くドイツ、ロシア等の白人國が以上の如き權利を放棄したことは、實に最近トルコ及びシヤムが治外法權問題に於て列國より得たる有利の立場と相俟つて、大いに支那を刺戟したものであつた。又支那が南米ボリヴイア國との交渉、ペルシヤ國間の交渉においてボリビヤにもペルシヤにも法權上の束縛を許さ無かつたことも、支那人の勇氣を鼓舞し、その國權回復問題の主張を一層強固ならしめたものがあつた。この事を茲に論ずる要を認めぬが、併しともかくドイツとロシアが英米日佛諸國と相離れ、別箇の地位に立てることは、北京外交團の統一が從來の如くならず、今後同權問題其他において列國の統一的態度が困難にならねばならず。それ丈け支那側の有利になることを示すものである。加之ロシアは對東洋勢力扶植の政策的立場から、この問題を利用し支那を成るべく自國に接近せしめ、排英的態度を取らしむる外交策を支那に行はんとするは疑ひなき所であり、同時に本問題は英國より見れば正に敵に刃を與へるものにて、ドイツ、ロシアと支那との接近は國際政治の上に齎らし易いものと注意せねばならぬ所である。而して是等の接近は英國として世界政策の上から成るべく妨害せねばならぬ必要に迫られて居ること言ふ迄も無い。それは本論の前段に述べたる英國の對支強硬態度及び政策を緩和する一材料でなくて何であらう。

ところが此外に英國にとり重大なことがある。それは、日英兩國の關係である。日英兩國は一九〇二年一月同盟を作りそれは約二十年間の生命を持續した。遂に一九二一年十二月四國太平洋協約成立と共に廢棄せらるゝことゝなつた。然るに今回支那において日本人紡績會社に對する罷業問題に關聯して國權問題が發生した關係もあり、延いて支那の運動が日英を敵とするが如き態度を現せる事實もあり。然も現英國外務卿オーステン・チエンバーレン氏の父君ジヨセフ・チエンバーレン氏が、日英同盟の最も有力なる主唱者たりし關係もありて、其息チエンバーレン氏も亦久しく日英同盟の支持派たりし事實もあり、その他諸種の事情が加はり來つて日英接近、日英新同盟說さへ起るに至つたのである。之が爲め東京駐剳ロシア大使コツプ氏は

我々は省[illegible]ところが以上の[illegible]にして[illegible]國の立場から論じて或は支那に對して強硬態度を持し得る一面因とならぬとも限らぬ。何となれば日英兩國の強固なる提携は、多少英國をして強硬態度を支那に取らしむる原因となり得るからである。殊に地理的に支那に近き一大陸軍國日本との提携は英國の無論歡迎する所であらう。併し此日英新接近が可能なるや否やは大なる疑問である。今日の日本は昔日の日本にあらず。支那の國權回復問題民族覺醒問題については、日本國民既に至深の同情を表して居り、少數紡績會社の如きその他商業團體の中には、一時的の利害主義を元とし、關税問題その他に關聯して、對支高壓論者と手を携へんとする分子もあるが、國民多數の傾向になると、最早や支那の國權回復運動に同情を寄する狀態に變化し來つた。從つて斯の如く隣國民の覺醒昔日よりも遙かに理解を持ち來れる日本國民が、今日對支高壓方針の下に於て日英接近を齎らすことに贊成しやうとは思はれぬのである。予は思ふ、此一事こそ今後一層英國の對支態度緩和を齎らす所以となるのではあるまい乎と。

以上は大體において支那の國權問題に對する英米の傾向とその立場とを説明したものであるが、唯だ予は將さに九州旅行の[illegible]立場にあるを看取せば、恐らくその側において我日本の取るべき態度及び立場は當然示されて居ると言ふことである。思ふに日支兩國は隣國であり然も同文同種である。國民も大體支那の國權回復に同情を有するは明かである。我外政當局は此種問題については日本こそ當然他國に率先し他國を誘導して、支那國民の希望を實現せしむるに努めねばならぬことを記憶す可きである。否なそれが本來の使命でなくてはならぬ。殊に英米の外交的地位が以上の如き事情にあるに於て、我日本は一層熱心にこの方面に歩を進むるとが適當であるといふ結論に到着しなければならぬと思ふ。併し同時に隣國支那國民に對しては、それが速にその内政上の缺陷、即ち督軍對峙より來る不統一の救治、法制の確立等に努力し、以て外人の安意を得るのが、最急務なるを指摘し、反省と奮勵を求めねばならぬことと勿論である。

(三) 支那問題の重點

松井等

一 古くして新らしき問題

隣り合つて居るだけに、支那に關する問題は、いつもながら我が日本に直接の影響を及ぼして來る。溯つて考へると、支那の唐朝の勢力が朝鮮半島に波及して來た時には、我が國では中國九州の沿岸を警戒した。蒙古が支那を併呑しつゝあつた際には、我が國は直接に蒙古の元朝から脅威された。滿洲人の清朝が支那の明朝を壓迫した場合に、我が國は明清交戰の形勢について大に懸念しなければならなかつた。清朝が倒れて支那共和國が興つた際にも、その影響が如何なる形で我が國に現はれて來るだらうかといふ疑惧を感じた人たちが少なくない。支那と我が國とが人混ぜもせずに隣り合つて居た間にも、支那に起る變動は、何かの形で我が國に影響を及ぼして來た。そこへ、歐米の勢力が混入して來てからといふものは、問題が複雜になつて、支那だけの動靜で無く、それに絡まる歐米勢力の起伏にも周到の注意を向けなければならなくなつた。

遠い昔からの隣り附き合ひであるから、我が國の人たちは、苟くも支那と何等かの交渉を有つ程の人たちは、十分に支那の國情とその國民の性格とに付いて觀察を凝らし、或る斷定を握つて居るだらうと想はれるのが、案に相違して、支那研究といふ事が凡ての方面を通じて近來の題目となつて來たばかりである。近來と謂つても、かなり久しい事であるのに、今回の上海事件のやうな問題が起つて來ると、今更のやうに驚き慌てゝ、支那研究の必要を叫び出すといふ有様である。支那を不可解だといふ前に、この驚き慌てる姿の方を不可解だと謂はなければならない。

支那研究といふ聲を餘程以前から耳にして居るにも係らず、或る事件が支那に起ると其の度毎に事新らしげに支那研究を叫ぶといふ點から考へて見ると、支那研究といふ事は、我々に取つて、古くして新らしき問題であると謂ふ外はない。その必要

が古くから唱へられて居ても、[illegible]に、問題は古くして且つ新らしいのである。支那問題に限らず、古くて新らしいといふ問題は、政治上にも經濟上にも教育上にも、又社會生活の諸方面に亘つて、いくらも其の例があると謂へようけれども、支那問題の如く、その研究の必要が古くから叫ばれながら、着實に之れに手を染めて居る人の少ないといふ例は少なからう。我が國の前途は支那問題に由つて左右されるといふ事は、甲唱へて乙隨ひ、口から口へ、耳から耳へ傳へられて、皆が皆、一ト思案ありげな顏をするにも係らず、さて或る問題にぶつかつて來ると、多くは不可解といふ語を以て解決しようとする。其の語の中には、蔽ひ難き不安の念が包まれて居り、古くて新らしき問題に對する姑息の氣休めが漂うて居る。

二　二つの迷路

支那に關する問題が、多くの場合、不可解の一語で解釋されると共に、不可解と謂ひながらも、其の人の位置職業境遇經歷等に由つて、樣々の說明が各方面の人々から與へられる事もある。山の上から遠方を展望する人には、全景を手取り早く見渡す事ができる代りに、一々の森林部落河流丘阜等の地形地物が[illegible]して其河に足を踏めて居る人には[illegible]ない、それと同樣に、支那問題のやうな錯雜した問題の說明に於ては、その說明者の職業なり經歷なり地位の關係が伴つて來る。同じ支那に居る人にしても、北京に居るのと上海に居るのと廣東に居るのとでは、その觀察が異つて來べき筈である。又同じ上海に居る人でも、三年居る人と五年居る人と十年以上居る人とでそれぞれの着眼を同じくしない。支那に居る人と我が內地に居る人との觀察が黑白相反するやうな場合の多いのは當然の次第である。

支那問題それ自身は不可解でないにも係らず、觀察する人たちの立場に因つて不可解なものと決められて了ふ場合の多いことを考へなければならない。雲そのものに色は無くとも、日の照り工合と仰ぎ見る人の位置とに由つて、變幻極まり無き色彩を放つことがある。上海事件のやうな層雲を眺めて、その色彩と其の中に含まるゝ徴候とについて雜多な觀察の紛出するのも、畢竟觀察者の職業や經歷などを異にして居るからである。

職業や經歷などに由つて觀察を異にするといふのは、支那問題に限つた事では無いから、これには餘り重きを置く程の事は無からう。こゝに、殊に支那問題について觀察の異つて來る二ツ

の相異つた立場がある。二ツとも當を得ない立場であるから、之れを支那問題觀察の二ツの迷路と名づける事ができる。その一ツの迷路は、支那の歴史といふものを偏重してその知識から凡て今日の支那問題を判斷することである。他の一ツの迷路は、眼前の時局に眩惑されるだけで、少しも支那の歴史上の知識を適用しない事である。どちらにしても迷路たるに於ては同じである。

先づ第一の迷路から批評を始める。歴史といふものを偏重する人たちは、彼等の研究の成果だと誇稱する漠然たる概括的結論をば、目下の問題の上に適用して、其の判斷が最も正確なものであると妄信して居る。歴史の示す所に據ればといふ語に最上の權威がこもつて居るかの如く速斷して居る。實際、歴史は過去の生活を今日の状態へ推進させた徑路を示すものであるから、今日の状態が如何にして現はれ來つたかといふ事を説明するには、溯つて過去の生活状態を探究しなければならないのは判かり切つた話である。目下の問題の中に過去の姿か何れ程遺つて居るか、又過去のものが現在のものへ何れ程の影響を及ぼしたかといふ事を説明するのが歴史の本務とする所であつて、現在の状態をば過去のものに由つて悉く説明し盡さうとするのは、歴史を誤用するものである。

歴史の研究から得た知識といふ事を誇稱する人たちは、現在から一足飛びに數百年數千年の昔の社會へ立ち戻つて、その時代の人と全く同じい社會的環境の中に行動することができるものかできないものかといふ事を靜かに考量して見るがよい。我々が數百年數千年昔の社會へ立ち戻つて、その時代々々の生活状態を考察し得るといふのは、一ツには人間の性情は古今を通じて著るしい變化の無いものだといふ假定の上に立つて居るのであり、二ツには現代人として現代生活を觀察して得た結果を推して、過去の生活状態が如何に現在のものと異つて居たかといふ差別を見出し得るだけである。現在を通して過去を觀察するのであつて、過去を過去のまゝに觀察するといふ事は、現代人として全く不可能である。所謂歴史家は、自分の研究をば、過去を過去として、(全く現代生活の影響を離れて)觀察した結果だと考へて居るのであるが、少し深く反省して見れば、不知不識の中に、現代意識を以て過去を眺めて居るのだといふ事に考へつかなければならない筈である。

何やら史學概論の講義めいて理に落ちて來るが、要するに、歴史から得た知識といふものは、過去の影響が如何程今日に及んで居るか、その影響が如何なる徑路に由つて今日に傳はつて來たかといふ事を指し示すものであつて、數百年の昔も數千年の

習も、今日の社會も、皆引きくるめて一括に古今一貫の社會とな[illegible]ものではない。それであるから、過去の生活に對する研究を通して[illegible]得た知識といふものは、假令其れが研究に[illegible]として得た結果であるにしても、其れを唯一の據り所として、現在の生活狀態に絡まる凡ての出來事を說明し盡さうとするのは、畢竟一種の誇大妄想である。歷史の示す所に據ればといふ語の使ひ方を誤つてはならぬ。

然かし、支那の生活狀態は、昔も今も、根本に於て相違する點が比較的僅少であるから、過去の研究は殆ど凡て現代の解釋に適用し得るでは無いかと論ずる人があるに相違ない。これは一理ある所見であつて、社會制度といひ生活信條といひ、生活樣式といひ、政治の運用といひ、經濟組織といひ、支那に於ては、古今相異る所が、本質に於て極めて僅少である事は、支那研究者の大部分の首肯する所であらう。歷史に重きを置いて、歷史上の知識を誇張する人たちも、眞に其の古今相異る所少なき所以を明確に指摘して、現代支那に關する說明に確實な根據を與へるのみならば、一見識として推稱する事もできるが、不思議な事には、歷史的知識を誇張する人たちの多くは、現代支那事情の考察について實に疎漏であり、甚だしきは、現代事情を度外視する事が歷史研究の正當の途であるかの如く考へて居る。時々には[illegible]に、[illegible]支那の[illegible]にしたことすら無い[illegible]ものさへあるやうであつて、そのため[illegible]もつと全く骨董化して、現代支那のそれには何の興味をも持たないやうになるのは當然の成り行きである。

さういふ人たちが、個々その歷史的知識といふものを現代の問題に適用して、支那の社會組織とか生活信條とか特有の性情とかを論ずる場合には、その知識といふものは、支那の經書や正史の類を表面から解釋して手取り早く作り上げたものに過ぎない。戲曲小說稗史の類に鮮やかに描き出されて居るものには殆ど一顧すら與へないのが彼等の通癖である。德川時代に於て、漢學者が經書や正史の類を表面から淺く、而かも日本風に解釋して、紙上の支那を捏造し、戲曲小說稗史の類は戲作者の手に弄ばれて、只觀衆の種本となつて居たに過ぎないといふ實況が、尙ほ今日にも遺つて居る。これも支那問題が古くして常に新らしい所以の一因をなして居る。

第二の迷路に立つ人々といふのは、觀察の範圍を時局そのものに限つて、過去の影響と過去から今日へ轉移し來つた經路とを無視する人たちを謂ふのである。第一の迷路に立つ者よりも、第二の迷路に立つ者の方が、支那問題の說明に於て、より有益な所見を吐き得ると思はれるが、然かし眼界を時局に限

つたゞけでは、時局の目まぐるしい轉變に眩惑されて、如何に處置すべきかの根本の方針を決定しかねる。

　眼界を時局に限つて了うと、或る一部の局面に精通し得る場合がある代りに、その精通が却つて禍を成して、自分で自分の成見に曳きずられて、大勢を達觀することができなくなる。支那問題の解釋、殊にその問題に對する處置といふものは、結局、大勢を達觀する所から案出されるものである。對支政策といふやうな處置の問題は、時局の一局面に曳きずられて行く可きものでは無くて、大勢から判斷した決心を本とすべきものである。大勢は、時局そのものからだけでは判斷できない。過去から今日への變移の經路を參考して判定し得るものである。

　時局の一局面に深入りして大勢を考量しない人たちの言ふ所は、多くは、支那の或る有力な人物とそれを繞る有象無象の行動を仔細に探り上げて、其等の勢力集團の目的を推量し、又その行動の隱微の迹を尋ねて、將來の出來事までをも推測し、併せてこれに對する處置を決しようとする。主として政局に現はれた問題に注意を集めがちである。今回の上海事件のやうに錯雜した多方面の事情から湧き出てたものに對しては、到底或る人物や或る黨派などを目標として觀察し得べきものでは無いが、從來は或る人物或る黨派を目標として觀察の方向を決しがちであつた。私の卑見を以てすれば、大正八年以前の支那問題は、その觀察でも要領を捉へ得たであらうが、大正八年以後となつては、支那問題の中には政治的經濟的社會的思想的各方面の動因が混淆して、或る一面からの觀察では要領を捉へ難くなつたと考へる。今日以後益々その傾向が著しくなるに相違ない。或る人物や或る黨派を目標としての觀察は、その時限りの處置を定めるには適當な場合もあるが、根本方針を決定するためには、害こそあれ、益ありとは考へられない。

　或る人物又は或る黨派を目標とするのは、支那問題の觀察上、陷し易くもあり、又局面轉變の迹をたどり易いからである。單純な觀察者に取つては、確かに好目標となり得るものである。支那に對する或る企圖を速成させようとする場合にも、或る人物或る黨派を目標とするのが手近かな道となる。ところで、その人物なり黨派なりが、觀察者の推測し希望する如くに行動してくれゝば珍重であるが、意外の番狂はせを生ずる場合が多々あるといふのが、支那の常態である。人間として揉みに揉まれた老猾の支那民族、殊にその中での有力者となる程の者が、單純な事情の下に、容易に見透かされるやうな行動を敢てするであらうか。こちらから或る企圖を秘して支那の有力な人物又はその一黨に交渉を開いたとして、彼等がこちらの希望通

く[illegible]。若し[illegible]一々には[illegible]の[illegible]ないやうた[illegible]下にし[illegible]の行動を敢てした場合には、彼等の行動は、背信と見える事もあり、無恥と見える事もあり、陰險と見える事もあり、不可解と見える事もあらう。

眼を支那時局の或る一面に限る人たちは、支那人の性情の長所を捉へるよりは寧ろ其の短所を見つけ易い。殊に、こちらの企圖がこちらの思ふ壺に篏まらなかつた場合に於て然りである。背信といひ陰險といひ無恥といふやうな惡名を彼等に與へて、到底眞面目の交渉を開く事はできないといふ斷定を下だし易い。その際、こちら自身が初めから淸らかな白紙の心情を以て彼等に接したのであらうか如何かといふ事を反省する者が幾人あるだらうか。たとへ、或る人物或る黨派が、こちらに對して誠意を示し、協同の實を擧げ、相信するに足るかの如く見えても、彼等の求むる所のものが滿足されて、利害の關係が薄くなつた際には、いつ離れて行くか判からない筈であるから、其の協同といひ信賴といふ事は、一時便宜の處置としては成立するかも知れないが、之れを久しきに亙つて確保する事はできないのである。さうすれば、一人の有力者又はそれを中心とする一黨派の行動、並に數多の勢力集團の彼此關係を仔細に探るといふ事は、[illegible]從つて[illegible]爲めには、さほどの効果は無いと言はなければならない。

政局といふ一面の外に、近來支那問題の中で注目をひいて來たのは、社會問題であり、それと相俟る可からざる思想問題も亦輕々しく看過することができなくなつた。社會問題と思想問題とは、近來殊に大正八年以後の支那問題には、いつもながら附き纏つて居る案件である。時局の一面に觀察の眼を凝らす人たちに取つては、是の二ツの問題も、實況よりは誇張されて考へられ易い。社會問題の中でも勞働に關する件は、現代各國通有の題目であるだけに、支那の勞働問題も、今後の支那を考察するについての肝要な一視點となつて來るに相違ない。然かし、大正十二年に支那政府が勞働法案の一として暫行工廠通則を發布して、職工の年齡や就業時間を限り、其の待遇に關する共濟を示したりしたからと言つて、現代の支那に於て、他の東西諸國で渦卷きつゝあると同じ意義同じ狀態に於ての勞働問題が懸念されつゝあるものと考へるのは、早計である。暫行工廠通則の發布されたにも係らず、幼年工や女工が時限外の勞作を强いられ、待遇に於ても改善の實を擧げて居ないといふ實況が支那工場到る所に現はれて居る。この點は、ひとり支那に於ける邦

人經營の工場について云々すべきものたるのみならず、支那人の經營せる工場に於ても同然である。元來、支那の制度殊に法制は、體裁を飾つて一時の便宜に應ずる爲めに設けられるものが多く、その實施の監督については極めて疎漫である。只、支那の勞働者も段々勞働問題の世界的潮流に捲き込まれ、自身の生活も樂で無くなつて來るにつれて、他の諸國の勞働運動と同じ方面へ進むやうになるであらうが、現今の場合に於ては、支那の勞働者自身が勞働問題といふものを生活上の一大案件として切實に考慮するといふ程度には到達して居ない。

支那の思想問題となると、所謂新思潮が何れほどの廣さに亘り、又何れほどの深みに達して居るのかといふ事を見極めるのは、頗る困難である。只如何なる大勢が動いて居るかといふ事を認め得るだけである。新思潮は、北京からも上海からも廣東からも流れ出て、その發表機關としての新聞雜誌又は著書の類は、日々に多きを加へて來る。支那政府が發賣禁止を命じたものも少なからず、我が官憲がその輸入を禁じて居るものもある。其の論説は、政治經濟乃至社會生活の各方面に亘つて所慣故習の打破を叫んで居る。貞操の經濟的價値を論ずといふやうな例は、我が國に於ても未だ公にされたのを聞かない。

支那時局の或る一面を凝視した結果を以て全般を推測しようとする人の中には、支那の新思潮が現代支那思想界の主潮であつて、支那が思想の上から世界化される日近きに在りとまで極言する者もあらう。後に述べる通り、私も思想變調が今後の支那問題の重點であると信ずる一人であるが、目下の思想變調は、古るき支那から新らしき支那へ、昨日の支那から明日の支那への轉換を指し示す大勢の重要な目標として眺め得らるゝだけである。目下の思想變調は、西洋かぶれの色彩を濃厚にして居るから、或る觀察者は、全く一時の盲動であり輕薄な狂奔に過ぎないものとして之れを眼中に置かないと斷定するかも知れないが、この斷定は、現代支那に對する誤解の最も甚だしきものである。

二ツの迷路のどちらかに立つて、支那問題の或る一面を斷片的に考察しつゝ、甲是乙非を繰り返へして來たところへ、今回の上海事件が起つて、こゝで一ト先づ支那考察の總勘定をして見る必要に迫られた。政治からでも經濟からでも思想からでも外國關係からでも、從來切れ／＼に觀察しつゝあつた結果を總括して見る機會を與へたものが上海事件である。初めは紡績會社の內部の紛擾に過ぎないと想はれて居たものが、意外にも排外運動の氣潮を捲き起して關係列國を惱ませ、今以て思はしき解決を得ないといふ泥濘の狀態に陷つたのであるから、不可解

の一[illegible]を以て支那[illegible]に[illegible]したゞけでは死んだ人も承知せず、今度は、何等かの積極的の[illegible]を試みなければならなくなつた。

三　上海事件

上海事件の經過と其の影響とについては普く報道されて居るから、こゝに説明する必要は無い。この事件が案外大きな波紋を捲き起したについて、その原因が何であるかといふ事も、既に支那研究に從事する人たちの詳細な意見が多々公にされて居るから、それもこゝに詳論せず、只必要な程度の觀察を述べて置かう。

上海事件があれ程擴大されて、殊に排外運動として險惡な方向へ轉換しそうに見えたに付ては、大要、左の諸項の原因を數へる事ができる。

（一）外國の壓迫に對する支那人の反感。

是の壓迫は、支那の國に關するものと支那の人に關するものとの兩面を含む。上海に起つた支那紡績職工の罷業は、支那の人に關する壓迫に對しての反感の一端が勃發したものである。

（二）世界的社會思潮の影響。

[illegible]の支那[illegible]にも[illegible]て、政府[illegible]間にも是の氣分が浸み込んで[illegible]支那人[illegible]の自覺とまで[illegible]する事はできない。

（三）支那青年學生を中心とする國民運動の發展。

是れは第一項と聯關する現象であつて、支那の國民的自立を固めようとする意識が成長しつゝある。所謂支那の新思想の中で、是の意識が最も注目に値するものである。

（四）社會主義者の活躍。

是れは前三項と聯關して考へなければならない。支那の社會主義思想を懐く人たちが反帝國主義を唱へるのは、外國の壓迫に對する反感に併せて世界的思潮に感化された結果である。殊に陳獨秀・胡漢民等の諸派は、強烈な共產主義を宣傳して居るが、その目的とする所は、紛擾を起させて、之れを政爭に利用して自分たちの利益を握る機會を捉へようとして居るのでは無いかと察せられる。露國の赤化宣傳の手が、支那の共產黨に後援を與へて居るのも、露國としては、赤化宣傳の背後に自國の經濟的利益の擴張といふ目的を秘めて居るのであらう。是等の社會主義系の人々が上海事件の紛擾を擴大させた

のである。

（五）確乎たる政治的中心を有せざる缺陷。

（六）支那に對する列國態度の不協。

大體、上述の六ツの原因を擧げる事ができる。かういふ原因が、或は強く或は弱く、或は顯はに、或は隱れて、彼此錯綜して紛擾を捲き起すのであるから、支那時局を或る一面から覗いただけでは見當がつかなくなるのは當然であり、不可解といふ語は、この一面觀察の頼む可からざるを悟らない性急者の不用意の敝竇に過ぎない。

如上六因を、ばら〳〵と數へ上げただけでは議論が完結しない。六因には、それ〳〵場合に由つて、強く働くものもあらうし、ほんの助因となるに過ぎない事もあらうし、或る時は、其の或る者は隱れて現はれない事もあらう。然かし、今後の支那は、右の六因の全部か又はその一部かに因つて、今回の上海事件に優るとも劣らないやうな紛擾を現出する事があるに相違ない。華府會議の九國條約が實行される事となり、近く關稅會議が開かれて列國の利害の衝突が起りかねないといふ狀況を直視すれば、今回の上海事件よりもつと大規模で且つ意味深重な混亂が起るかも知れない。さすれば、今回の上海事件が曲りなりに片附いたといふので、例の線香花火かと謂つて、今後の用意を怠るといふが如きは、不心得も亦甚だしい次第である。そこで如上六因の中、何が今後の支那問題の重點となるのかといふ事を、一歩進んで考察する必要がある。この點については、支那研究者の所見は各々相異るであらうが、私は支那の思想變調が今後の支那問題の重點であると信ずる。

四　支那問題の重點

今後の支那問題の重點となり、支那考察の最高目標として選定すべきものは、支那の思想變調である。

こゝに思想變調といふのは、世界的思潮に感化されて、支那殊にその青年の思想が變化して、漸次、國民的結合意識の向上へ進み行くといふ意味である。古るき支那から新らしき支那へ、昨日の支那から明日の支那へ移り行く最大の推進力は、是の思想變調である。是の變移——古るき支那から新らしき支那へ——が今日既に徐々として進行しつゝあるといふ實況を承認しない人たちは、其の人自身が向上發展の意氣を缺いて居るに相違ない。

前にも述べた通り、今日の支那の思想變調は、西洋臭味を多分に帶びて居り、殊にアメリカ色に染られてゐるから、支那固有の思想から見ると、狂奔とも見え、脫線とも思はれる點が少なくない。殊にその變調の發表者たる青年學生が、學匪と罵られる程の暴行を敢てする例が多いので、その暴行と思想變調と

を混一して、一[illegible]して[illegible]傾向がある。然かし、學生の[illegible]行と思想[illegible]とを混一して、其の差別の存する所を考慮しないやうならば、到底時局の[illegible]ある資格無しと謂はなければならない。前に述べた大勢といふ事は、右の差別を立てるについて極めて必要な事である。

今の支那の思想變調は、只青年學生に限られた事では無い。現代支那の新聞雜誌著書等に現はるる論說感想などを仔細に味はつて見ると、學生以外、多數の識者が現狀に甘んじないで、生活樣式の上にも生活信條の上にも、對外關係の上にも內地施政の上にも、改善を望み新途を開かうとして居る有樣が窺ひ知られる。

勿論、今の處では、古るい支那の遺習がまだ根強く殘つて、新らしい支那の芽が生ひ出づる餘地に乏しいことは明白であるが、古るき遺習の荊棘を押し分けて點々たる鮮花の微笑み初めた姿に眼を着けるやうに注意しなければならない。

その新思潮といふものが、日下の處では、西洋かぶれした色彩を濃厚にして居るから、一概に其れを罵倒する者の多いのは尤もである。ところが、西洋かぶれでは無く、西洋から得た知識を適用して、新生活の途を開かうとする思潮の流れが段々強くなつて來た事をも見逃してはならない。注目すべきは、是の流れである。かういふ流れが、國民的結合意識の助成に與つて力あるものとなるのである。

暫く支那の事を差し措いて、我が國自身の思潮變動を反省して見ると、一[illegible]に西洋[illegible]に[illegible]眞に自己の新生活を開[illegible]とする[illegible]に見えて來た。これは世界的思潮變動の影響を蒙つたものであつて、而かも從來とは異つた意味の國民主義を樹立しやうとするものである。この思潮變動は、我が國の老人たちから見ると突飛とも、極端とも、險惡とも思はれるであらうが、思潮の動きは到底之れを堰き止めることはできない。支那もそれと同樣の狀態になつて、而かも舊慣故習の制裁力がまだ強く行はれてゐるからして、新生活の途を開いて漸次國民的結合意識を向上しやうとする機運は、我が國におけるよりも、もつと突飛なものと考へられがちである。我が國の老人たちが、我が國自身の思潮變動を苦が〳〵しく思ふにつれて、支那の思潮變動をも罵倒して憚らないといふのは、老人としては尤もな事である。然かし、新しき意味に於ての國民主義を樹立しやうとする我が國の若き人たちは、支那の思潮の動きを眺める場合に、その西洋かぶれの一面のみに眼を着けて他の重要な一面、即ち國民的意識の向上といふ微かながらも鮮やかな光りを看過するやうな事をしてはなるまい。この微かながらも鮮やかな光りを認める事は、實に日支親善の要諦である。

五　對支態度

支那の新思潮のなかに閃めく國民的意識向上の光りといふものは、彼れ是れと一々指摘し得るものでは無く、一ツの大勢と

して認め得らるゝものである。その大勢を認めるのと認めないのとでは、對支態度の上に大きな相違を生ずるわけである。支那の民意を尊重するといふ事も、畢竟、この光りを認める事に外ならぬのである。複雜した社會組織の中に生活する支那民族の民意といふ事は、何を指すのであるかと謂へば、右に述べた新思想の光りの閃めきを指すものと解釋すべきである。

今回の上海事件に於ても、列國が手の附けようも無く、一旦は列國の方で讓歩的態度を執らなければならなくなつたといふのは、列國間の協同が成立せず、列國別々の目的を懷いて居たからでもあるが、實は支那の民意を害する事が將來に取つての不利益を來たすと考へたからであらうと想はれる。露國が、先年支那に通牒を送つて、白紙狀態で新らしい交際を結ぶといふ條件を提出して好評を博し得たのも、民意の赴く所を察しての策略であつたと察せられる。英國にしても米國にしても、今後は、支那の民意を正面から犯すやうな態度を執るまいと想はれる。我が國ひとり支那の民意を考量しないとすれば、その招く所の不利益は察するに餘ある所である。

こゝに尙ほ一ツ考量すべき要件がある。支那の民意を顧慮し之れを尊重するといふ事は、決してそれに迎合する意味では無い。如何に民意を尊重しなければならないと謂つても、それに迎合して、我が當然の主張を曲げるといふのは、決して民意尊重の本義では無く、却つて支那の民意の健全な發達を邪路に導くものである。昔からの隣り附き合ひから考へても、我が國としては、支那の民意の健全な發達を助成する爲めに努力する事が彼我双方の利益であるからして、他の列國よりも尙ほ愼重に支那の民意を考量する必要がある。然かし我れを曲げて彼れに從ふといふのは、支那自身の爲めに不得策である。如何なる場合に支那の民意を考量すべきか、如何なる當然の主張の前には支那の民意に曲從してはならないかといふ事は、その問題に由つて決定されるのであり、又我が政府當局者の責任とする所である。

支那研究者としては、支那時局の觀察について、過去に參照し、現在を直視して、最も重きを大勢の觀測に置かなければならない。大勢は原則では無い。大勢は個々の方面と個々の場合とに一々適用さる可きものでは無く、只指導方針として或る方向を指し示すものである。この指針が無くては、對支態度を決めることができない。支那に關する各方面の個別調査は、畢竟、大勢觀測の資料として必要なものである。この綜合的觀測が、從來の支那研究に於て徹底されて居なかつたやうに思はれる。支那研究は、各人各箇の割據では十分の成功を期待し得られない。官民合同の力を傾けて、對支態度の指導方針たる可き大勢觀測の正確を充うし得るやうな組織の下に行はれなければならない。(大正十四、八、十五)

各方面に行詰れる我國の現狀轉回策

歴史の轉換期に於ける組織的進化

長谷川如是閑

現代の行き詰りといふやうなことを、一般の人が漠然と感じ出したといふことはかなり古い話で、日本などが漸く新時代に入つた頃には既に世界的にそれが感じられてゐたくらゐである。所謂自由主義の政治、自由放任主義の經濟が發達して、一方に產業革命が完成し、他方にデモクラシーが完成した時に世界は早くも行き詰りを感じたのである。日本などはその二つともがまだ完成してゐないのであつて、從つて未だ行き詰りを感ずる資格がないのである。降り坂になるにはまだまだもつと昇り詰てからでなければならぬ筈である。然し世界の歴史の中心點に近い方面では既に早くから行き詰りの兆候を感じて、政治も經濟も學問も藝術も宗教も家庭も皆何等かの意味で行き詰りを感じてゐるのである。一般の動揺——中世紀の終りに襲來したやうな世紀末的動揺——がそれらのあらゆる方面に起り初めたのである。所謂現代思想なるものがそこに端を發して、この一般的な動揺を意識づけたのである。

如何なる現象を所謂行き詰りと認むべきものなるかといふことは、右に擧げたやうな各方面の歴史的事實、心理的事實の研究に待つべきものであつて、既にそれぞれ各方面に於ける諸形體の支持すべからざる事情が探求され、相當にその資料が提供されてゐるのである。各の方面の行き詰りの事情は、專門的研究の態度としてはそれぞれ分科的に研究されるべきものであるが、それは決して孤立した事實ではなく、一の方面に於ける事

情は他の方面に於ける事情と、必然に關聯し、經濟も政治も學問も藝術も宗教も、網の目のやうに一つの關係に結びつけられてゐるのである。從つてその内の唯一つだけが單純に行き詰るといふことは、それが單獨に發達することの出來ないのと同じく不可能である。然し社會現象はその交錯した複雜な過程を通じて一貫した中心勢力に依存してゐる。何がその中心勢力であるかについては、非常に說が分れてゐて、昔の見地は主として中心を形而上學的勢力に置いたのに反して、近代に於ては科學的機構を重大視することとなつた。その結果人間の經濟行動の組織が社會現象の中心勢力として認められることになつた。無論今日でもなほ前代的信仰の下にあるものはさういふ見地を承認しないのであるが、然し社會現象の科學的研究はどうしてもそこに歸着する。從つて今日の漠然たる行き詰りの感じはやはり產業組織の行き詰りを中心としてゐるといふことが一般に認められてゐる。

漠然と行き詰りを感ずるといふとは、實は精密な科學的研究のそれとは全く沒交涉な、極めて非科學的の意識であるが、然し一般に與へられた感じといふものは、現象の科學的判斷に先驅して重大な暗示を與へてゐる性質のものである。精密な科學的研究が起る前には必ず一般人の間に漠然たる豫感を持つものである。自由放任主義の經濟學が起る前には、人々は漠然と舊組織の壓迫を感じて、全く感情的な空想的な自由平等を叫んだのである。この漠然たる感じは畢竟生活衝動が盲目的に動き出すその生存行動の感情である。生存行動が無意識的に、盲目的に突進し、一定度合まで舊組織を破壞し、同時に新組織の建設の端緒を開くことが出來た時に初めて、さういふ過程に對し科學的認識が起り、漠然たる感情的自由主義に代つて科學的な自由主義の政治的經濟學が起つて來たのである。科學的社會主義も亦さうであつて、舊組織、新組織が共に何等かの組織的缺陷を同じやうな性質で作り出してゐるために、生存衝動の根本的な作用が常にそれを否定する行動となつて頭を擡げやうとしてゐる。が頑强な組織がそれを壓迫して働かせない。從つて空想的な共產的生活組織が頭の中だけで組み立てられて、早くから空想的社會主義のやうなものが何處にも起つてゐる。而かもそれを壓迫する組織が緩んで、近代的產業組織の動搖となり、それと共にその漠然たる空想は科學的認識をもつて發達して、科學的社會主義が起るのである。

產業の組織にさういふ進化が起つてゐる時には、政治にも宗教にも道德にも法律にも哲學にも、それ〴〵動搖が伴つてゐるのである。無論それらの各方面の組織の形體や結合の如何によ

つて動搖が長く續く、或は若く、又種々の形式で起り得る。自由主義の産業狀態に成るべく國家の干渉を排除した爲めに、その形體並びに連絡の力は軍隊や道徳やによらずに、その産業組織自體の機構によつたために、その機構が動搖すると直ちに一般的に動搖狀態がはつきりする。だから産業組織の動搖が最も早く感じられる。政治的動搖はいつも歴史の順序としてはそれに次いで起る。國家は武力を有し、教化機關を有し、道徳的強制と武力的強制とで結束せしめる組織を有するが故に、政治組織の變化は強力的に阻止される。從つて政治革命は産業革命と違つて軍事的變亂を伴ふ。産業の行き詰りは産業組織の有機的變化で打開されるが、政治の行き詰りは、政權の把持者が同時に武力の把持者である爲めに、往々暴力的に發展する。

それは長い歴史の經驗であつたが、新しい歴史も亦それを繰返した。産業的進化が平和を標榜して、いつの間にか武力的強制以上の有機的勢力を以つてその革命的變化を進行せしめてゐるに關らず、政治は依然として武力に依るに非ずれば、決して變化しまいとするやうな頑強な態度を支持する。又場合によつては政治は産業の平和的競爭を阻止する爲めに――言ひ換れば、それ自らの舊組織を支持する爲めに――武力を用ゆる。世界戰爭も或る意味で、その結果として起つたといへる。

組織の進化によつては十分有機的に發展する過程を、暴力的に阻止しやうとすれば、要するにその組織を支持してこの組織の有機的變化を暴力で喰ひ止めるのではない。昔の國家が其の進化の過程に於て取つた態度は必ずこれであつた。これは蓋し古代の軍國國家はその國家組織の機構が今日のこれのやうに産業上の支配者を包含せしめないで、武力的支配者だけを中心とした爲めに、社會の組織が、産業組織の進化を中心として進展する時に、昔の國家はその進化を認識する生活上の手段を持つてゐない。軍國政府は産業の支配者のやうに、社會生活の組織的變化を認識して組織の中からそれを防禦する方法も知らないし、又手段を持たない。昔の軍國國家はその産業の進化に基く社會の進展を、唯外部から暴力で防ぐの外はなかつたのである。從つてその軍國的勢力が強大である限り、或る度合まで組織の進化を喰ひ止めることが出來た。その結果彼等は軍國的勢力を強大にすることが彼等自身の組織を維持する所以だと考へた。そしてそれを企てたが、然し一切の生活が産業組織を中心とする人間社會に於いて、經濟的根柢を離れた軍國的勢力なるものが成立ち得る筈がない。フランス帝國の末路はそれであつた。そこで昔の軍國國家と雖もその經濟的根柢を支持する爲めに、一定の管理を行つたが、而かも軍國國家それ自體が軍事上の組織で

ある爲めに、その產業管理も亦唯外部から勢力を以て一定の產業組織を支持せしめ、その進化を勢力で阻止するといふに止まる。而かも經濟的組織は社會的勢力としては殆ど絕對であるが故に、それが反對に軍國組織の運動を支配する。そしてその軍國組織の根柢が弱められる。それに乘じてより强い經濟的根據を持つた軍國的勢力が起り、貧弱となつた軍國的勢力を打破して、新たに軍國政府が出來上る。これが昔の國家の政治革命、即ち行き詰つた局面を打開する過程である。

近代國家はこれとやや事情を異にする。近代國家の特徵は所謂經濟國家たる點にある。軍事的勢力はたゞこの經濟國家の經濟行動を支持する强制力として保存されてゐるのである。近代國家が經濟國家であるといふ意味は、產業組織の支配者が同時に國家的支配者であるといふことである。即ち國家的勢力は近代國家に於いては軍事組織の中心勢力ではなくして、產業組織の中心勢力である。即ちそれは軍事的侵略階級ではなくして、經濟的侵略階級である。無論この階級はその經濟的行動を、純然たる村民や市民のやうに、全く平和的にのみ働かせるとは限らない。東洋や南洋やアメリカやアフリカに對し、この經濟國家が經濟行動を押し進めて行かうとした時には必ず武力をそれに從屬せしめて、昔の軍國國家がやつたと同じやうに軍國的侵入を試みた。けれどもその目的は決して軍事的掠奪にあるのではなく、平和な經濟的交通をそこに開始しようとするのである。唯アフリカ內地のやうな野蠻國に對しては純然たる軍國行動を取つてゐるのであるが、文明國に對しては、如何に戰爭を行つても軍國的掠奪の目的を以てするのではなく、經濟的交通を强制しようとするのである。

近代國家が經濟國家となるについては、社會組織が經濟的侵略者を中心として、その政治並びに一般管理狀態を組立てたことを先驅としてゐる。經濟の上にさういふ狀態が成立つて初めて一般の管理並びに政治管理が軍國階級の手を離れたのである。それが完成するまでは所謂軍國階級が國家的中心勢力であつたことは日本の維新後の例を見ても明かである。が次第に軍事的勢力に代るに經濟的勢力を以てして、そこに經濟國家が成立すると、國家的管理は要するに軍人の手から產業上の管理者の手に移される。そこで國家的制度に一大變化が起る。

經濟國家は一口に云へば產業組織の管理を唯國家の名に代へたに過ぎない。所謂資本主義國家なるものは昔の意味の絕對國家ではなく、要するに產業組織の延長である。資本主義國家と名づけられてゐる通り、資本主義的管理組織の延長としての國家が存在するのである。故も產業の發達した國家ほどさういふ關

…になる。イギリスの國家權力が國民の自主的支配に對し、さしたのも、つまりそれはイギリス國民の支配を國家の下から產業組織の自主的支配者の手に移さうとしたのであつた。これは一方から云へば、その壓迫されたものは昔の意味の國家で、產業組織に依賴する國民の自主的支配は要するにこれまた一つの新たな有力な國家だつたのである。經濟國家はその意味の國家なのである。だからイギリスは自分の舊國家を壓迫したが、自分自身は新たな一大經濟國家として勃興したのである。

その組織においては、經濟國家は產業組織の變化がそのまま國家組織の變化を惹き起す關係が甚だ密接である。昔の國家は產業社會にどんな變化が起つても、不關焉である程度までそれを武力で壓迫したが、經濟國家はさういふ譯に行かない。產業組織に起つた變化は、直ちにそのまゝ政治組織に影響する。產業支配者が同時に國家的支配者なのだから、支配者が產業社會で受けた變化はそのまゝ國家的變化となつて現はれる。これが經濟國家の特徵である。

さういふ國家の標本はいふまでもなくイギリスである產業社會に於ける勞働者の勢力が擡頭して、その團結が產業支配者の團結に拮抗して、產業組織を支配しようとするに至れば、それと關聯し、その勞働者の勢力がやがて國家的勢力となつて現はれた。故に國家の政權が失墜するといふことになる。これは英國の今日までの歷史に於ける最も有機的な組織である。

けれども前に云つたやうに、國家が行いやうな進化を取るには、產業組織そのものの社會的支配が完成してゐなければならない。多くの國家に於いては、一方に於いて產業組織自體がそれほど進まないと同時に、舊國家の組織が堅固に支持され、或る程度まで權力的に經濟的進化を阻止する。その結果產業組織の有機的進化がそのまゝ國家生活の進化となつて現はれるといふことが困難である。從つて局面打開はイギリスのやうに行はれることが考へ得られないで、昔の專制國家に行はれたやうに、武力による壓迫に對し武力による革命が脅かすやうな傾向に發展する。

一般的行き詰りの抽象的觀察によれば、右のやうな結論となるが、局所的な行き詰りはそれぞれ局所的な進化を取るべきであつて、複雜な具體的條件に依存する。日本の目下の行き詰りは、その具體的條件を究めることによつてのみ正確な判斷を下すことが出來るのであるが、抽象的にいへば、目下の行詰りには二つの事情が存する。一つは資本主義經濟學が說明してゐる通りの資本主義經濟に於ける周期的現象であり、他の一つは日本

の經濟社會が未だ資本主義的に完成してゐないに關らず、資本主義組織の一般的進化の影響を受けて既に一定の進化程度に這入つてゐる結果である。前者はその周期的律動が約束通り進行することによつて間もなく恢復するであらうが、後者は前に述べたやうに近代國家が取るべき必然の過程を取つて有機的に進展せねばならないのである。それには國家的勢力がその產業組織の中心勢力に最もよく順應する有機的機構を完成せしむることが國家として國民として最も努むべき點であると云はねばならぬ。一般的には產業組織は資本の把持者を中心とすることから次第に生產行動の主體を中心とする組織に移りつゝある。この產業組織の進化が國家の進化として現はれることが近代國家の現象として一般に共通的に認められてゐる。この過程に順應する方法は國國によつていろいろであつて、必ずしもイギリス風に順應せねばならぬといふこともなからうが、兎に角この順應性の有無が國家的生存の問題を決定することは確かである。

「好景氣」美酒の醉醒

清澤洌

一　不景氣の實質なし

日本人には『何故（なぜ）』といふ疑問がない。『火事だ！』といふと、向ふ鉢卷で飛び出し、餘程駈けた後で『一體火事は何處だつたんだい』と、改めて其の所在を搜さうといふ性格と習慣とが、何時の間にか日本人から、まづ事の確實性を設定してかゝらう、といふ努力を奪つてしまつた。

『近頃は不景氣のドン底だ』とか『濱口の消極政策にも困つたもんじやないか』といつた近頃誰もが、朝起きて『お早う』と挨拶する程度にしか考へない流行語（はやり）がまた、この『火事だ！』と飛び出す流儀である。不景氣といふことを、テンで頭から決めてかゝつて、それ氣狂ひが多いの、それ自殺者の數が記錄破

のだッと、いかに[illegible]ない時[illegible]とに[illegible]作ら、その内には大[illegible]の惡いこともさて、不景氣の[illegible]にして[illegible]ひさうな勢ひである。けれども問題は[illegible]記者の頭で、これはくり廻す程容易には解決されるものではない。實際、備へられる程不景氣であるのかどうか。問題はこゝから出發する。

不景氣については後で書くやうに、種々な說があるけれども、何人も異論のないのは事業の沈滯といふ點である。ジョージ・ハルはその Industrial Depressions で、不景氣（デプレッション）を定義して、

沈滯(ドル)或は不活動の狀態であり、商賣(ビジネス)が平常以下に落ちて、これが長びく時節だと云ふことが出來る。故に產業的不景氣とは、國家の產業が、字義なりに沈滯或は不活動に陷いり、諸種の物品の生產が平常以下に落ち、これが長びく期間を意味するのである。

といつて居る。然らばわが國現下の事業はこの定義に從つて沈滯してゐるか、といふと本年の上半期を通じて、例年に比して特に目劣りするものは、殆んど何にもないといつてもいゝ。商業取引の額を表徵する手形交換高は、本年上半期に三百九十五億圓を數へ、昨年の同期と比較すれば、十四億餘圓の增加であり、最近五ケ年の最高記錄を示してゐる。また事業計畫資本を見ても昨年より餘程多く、殊に五月以後激增して、大正十一[illegible]されたやうに[illegible]力の[illegible]途の見込がたゝないといはれる程である。

財界の晴雨計だと見られる株式市場はとみると、[illegible]高値を張り、賣買高も受渡高も合高として昨年よりも餘程多い。また國有鐵道による本年の荷捌きを見ると、最近こそ漸次減少して來ては居るが、本年上半期を通計して見ると、その輸送狀況は昨年よりも大分增加してゐる。肥料は昨年の今頃より三割もあがつて、賣行きがいゝ。米價の高いのはこゝに說明するまでもないとして、繭(まゆ)の値段も高く、輸出も七月には、一大出超[illegible]などといふ活字を使はれる程澤山出た。

然らば、物價はどうか。物價の下落は不景氣と並行するのを常とするが、その物價は少しも下がつてゐない。この文を書いてゐる時には、まだ七月の物價指數の發表がなかつたが、六月中の卸賣物價として商工省が十三都市で行つた調査では、前月よりも五厘の騰貴である許りでなく、大正十年乃至十二年の全三ケ年平均價格を一〇〇とし、これを六月の物價に比較してみると、一〇二・五となつてゐる。同じやうな分類法で商工省の賃銀調査を見ると、六月は一〇三・九、即ち大正十年乃至十二年の平

指數に比して、二・九の昂騰に當つてゐるわけである。不景氣だからといつて、勞銀はそれ程下がるものでないのは、經濟の初學者でも分つてゐる話しであるけれど、物價も賃銀も二三年以前に比して高位にあるといふことが、普通いはれる『不景氣』といふ文字を無條件に受け入れ得ない充分なる理由にはなる。

たゞ殊に問題は失業者の數である。各職業紹介所の數字によると、いかにも求職者が多いやうである。併し乍ら遺憾なことには、日本において此點の全國的なる調査がない。歐米においては失業者數が、總べての問題の基礎條件をなして居る。政治の好惡すらが、多くの場合この問題によつて定まるのであるが、「腹が減つても、ひもじうない」日本人の特性は、この問題に對しては、朝も野も殆んど物の數にも入れて居らない有様である。從つて失業者數を掲げて、不景氣論を確定することは、今のところ至難であらう。

二　濱口藏相は消極政策に非ず

不景氣は何處にある。最近特に不景氣だといふ具體的事實を示す數字が、日本の何處に存在する。私は改めて漠然たる不景氣者——實は日本國民全體にこれを聞いて見たい。

外國に起つた不景氣はこんなものではなかつた。私はたゞ一つの例として米國における一九〇七年から八年までの事實を引照する。一九〇八年の不景氣期において、米國大都市の手形交換高は、一月終りの週間において約二十億ドルで、前年の同期に比すると二割三分三厘の減少、前々年のそれに比すると三割七分二厘の減少であつた。汽車會社の收入は一月始めの二週間を前年同期に比すると一割三分の減少であり、一九〇五年十二月の收入は、一割七分五厘の減收であつた。一月中株式の賣買高は二割五分を減じ、物價は二三ケ月の間に一割も下つた。ユー・エス鋼鐵會社の收入は三ケ月間に七割も減じた。

これを金融に見ると、不景氣の形勢が益々よく分る。一九〇七年十一月廿二日に組合銀行の貸出し超過が五千四百萬ドルであつたのが、超えて三ケ月を經ない二月一日には四千萬ドルの手持餘剩が生じ、金利はコール・マネーが秋の二割五分から、僅かに二分になり、タイム・マネーが一割二分から四分五厘と下がつたといふ有様であつた。そして此結果として公債の値段は普通株のそれの倍になつた。（ハミルトン氏の「デフレツションの程度」による）

日本の場合においても、米國の場合においても、私は無趣味な數字を並べることを、成るべく遠慮するが、以上述べた簡單な數字によつても、不用意に『不景氣』といはれるものゝ中に、いかに格段の相違があるかゞ分る。米國の場合には景氣の好惡を示す重要機關は、總べて一割、二割、三割の減少乃至は低落を示してゐるのに、日本の場合は、いづれも反對に増或加は昂騰を示してゐるのである。

同じ誤謬が、この問題と關聯して考へる濱口藏相の所謂消極

政府についてもいきかつたらう、十人が十人、同口に消極政策だといふ。併し當政府と、かれは果して世に傳へるやうに消極政策であらうか。もし經濟學といふものが、その人の希望なりインテンションなりを汲みとつて、算盤の上にはぢき出すものであるならば、私も無論かれが消極政策であることに不同意は稱へない。かれが、さうした議論と意志を有してゐることは、その言動によつても明らかである。併し經濟學は哲學や倫理學ではない。それは冷めたい數字の上にのみ礎かるべきものである。そこで此立場から試みにかれが編んだ大正十四年度の豫算を見るがいゝ。何處に傳へられる程の整理緊縮があるか。その實際の整理額は前年に比して僅かに六千四百五十萬圓であつて、本年の豫算を戰前大正四年のそれに比すると、實に約二倍半に當つて居り、戰時中及び其後の大景氣の時と殆んど變つて居らない。これを米國が金の洪水に悩まされながら其歳出を戰後六分の一以下に切り下げ、英國があの大負債を背負つてゐるに拘はらず、一九一九年の二十九億七千萬ポンドを、昨年は八億三千萬ポンド、本年は約八億ポンド即ち三十五割の削減したのに比すると、消極どころの騒ぎではない。或は濱口藏相が一億五千萬圓の公債を民間に賣出さないで、預金部其他から調達したのを消極政策にあげるものがあるかも知れぬけれども、手許の財布から出さずして、金庫の奥から出したところが、一家の收支が減少するものではない。お蔭で預金部は、昨今砂地の水やうに干からびてしまつたさうではないか。今度この預金部から、税制整理を要求された。これには甚しく困が、その消極政策を非なりとして、喧嘩分れをしたものであるが、この「整理」の結果が、増收一千三百萬圓といふことになつてゐる。かけ聲だけにしたところが、不景氣だといはれる眞前中に、年收一千三百萬圓といふ巨額を見込んだ税制案を出す藏相が消極主義で通り、この又税制案を「消極主義に過ぐ」と大きな政策が、政變を捲き起す道具に使ひ得たのも、日本といふ算盤勘定のない國なればこそである。この點からだけでも、日本は不景氣といふことを知らない國柄だとも云ひ得る。

併し乍ら現下の經濟狀態が、不景氣の數字を示して居らないといふ事、濱口藏相の財政策が、世間の思ふやうに消極的でないといふ事、さうした事實が證明されたところが、日本の直面する國家的な悩みが毫末も輕いことを意味するのではない。否、かうした慢性の狀態が戰後四年を經て、今もなほ舊の如く、しかもこの改善の途程は未だ半ばを走らざるに、内に顧みずして早くも正體不明の積極政策に耳を傾くる狀勢にあるにおいて、日本の問疾が意外に根深いものであるのを嘆ぜざるを得ないのである

三　不景氣に關する學說

私は日本の現狀は不景氣でないといつた。併し乍らこれは世間普通に通用する意味の不景氣ではないといふのであつて、不

景氣といふ文字が新らしい意味を持つて來れば、話の筋は無論違つて來る。

元來不景氣とは何だ、そしてその原因は何處にある。これについては各學者、何れもその好むところに傾いて歸一するところがない。マルクスの流をくむものは、不景氣の原因を、資本家の搾取に基く生産過剩に歸してゐる。この人々の説によると、生産物に對する需要の大半は、勞銀階級から生ずるものであるから、勞銀の増加と生産物に對する購買力の増進とは正比例すべき筈であるのに、資本家は生産物に對して當然拂はねばならぬ勞銀の大半を搾取するがため、生産物が増加すればする程、その生産物を購買する力は減少して行き、從つて生産過剩を來たし、生産物の價格は下落せざるを得なくなる。といふにある。もつと之れを判り易く説明すると『富を生産する者が、その勞力に對し、生産した額と同等のものだけを買ひかへすに充分なだけの報酬を得なければ、混亂は免れず、不景氣は襲つて來る。之等の不景氣の度數と深度は、生産した價値と、受けとつた價値との相違に應じて直接比例で異なつて來る……富を生産する者が産物を使つてしまうのは大富豪ではなくて、毎日そのパンのために勞働してゐるところの僅かな收入を有する人々である。從つて經濟的恐慌は、物資の生産における利潤が、投機者や搾取家に行かないで、生産者に行くやうになるまでは、免かれることは出來ない』といふのである。

(Frank Foster, The Cause of Industrial Panics による)

社會主義系學者の説は之に止まらない。彼等は例によつて、その搾取關係を説明するのに貧乏人と金持、無産者階級と資本家階級を對立させる。そして勞働力以外に自己の生活を支える武器を有しないところの無産階級は、資本家の云ひなり次第で、自己の勞働力を賣却する。資本家はかく安價に買とつた勞働力を以て、商品の生産をなし、しかして高く勞働者に賣りつけるのである。即ちマルクスが云つたやうに、對等の條件で賣買を行ふことは、剩餘價値を可能ならしめないから、現代の資本主義經濟組織は生存に脅かされて居るところの無産者階級を造つてゐるのである。この無産階級から不景氣時代に物(勞力もその一つ)を買つて、好景氣時代に有産階級にそれを賣りつけ、かくして資本を造るのだ。かういふ風にすら說いてゐる。

ホブソン氏の如きは、この不景氣を貯蓄の偏頗に歸してゐる。かれによると『全體としての國民は常に其收入の一部を貯蓄してゐるのであるが、この貯蓄の分布狀態を見ると、貯蓄は資本家階級の側に最も多く、收入階級の側に過少である。ところが貯蓄の大半を占むる少數資本家側は、之を消費に振向けないで、益々生産に振向け、收入階級の人々にその製品を賣付けて一層の利益を得んとするから、財界が好況に向ふに從つて、生産と消費とは釣合を失し、財界は却つて不況に轉ずるに至るのである』とて、貯蓄の偏頗、分配の不均等を以て、財界好惡

の所謂ことであつた。その言ふ所である。スピツトホッフ氏は更に同じやうな見解を抱いてゐる。氏は、財界が好況になるに從つて、人々は資本を大に固定資本の形式に振向け、その結果流動資本の減少を來し、かつ固定資本の必要を増すので金利は昂騰を示し、金融は逼塞を來たし、かくして恐慌は起るものである。即ち繁榮期において企業が放資市場から多くの流動資本を吸收して生產財に、それを固定せしめたことが金融硬塞の原因であり、外の言葉を以ていへば消費品に對する生產財の過剩こそ恐慌の根本原因だといふのである。

これ等の說は、財界循環に關する說の一部に過ぎない。この問題を企業界の競爭に歸する者（ベバリッヂ氏）、評價と收益見込みとの間の不一致、即ち收益見込みが多くなると、企業の評價は急速に高まり、信用は膨脹し、景氣が出る。然るにその評價が低下すると信用收縮の關係から不況が來る――別の言葉でいふと利益見込みと企業評價との間の不一致から來るとするもの（ベブレン氏）、金利の騰落が物價の騰落に遲るゝ點に歸する者（フイツシャー氏）資本家の供給する資本の分量を企業家が過度に見積ることから來るとする者（カッセル教授）等、その一つ一つを紹介すれば數冊の書籍を以ても足らない。

併しかうしたアカデミックな議論は、その道の人に任せていゝ。われ等の領分は、日本現在の不景氣の原因と、それに對する對策を議する點にある。

四　戰時好景氣の美酒の醉醒

一八八五年、英國は嘗て長い間の不況に對する調査をなすべく、有力なる委員會を作つた。この報告において、不景氣なる意味を定義して『利益の減少乃至は消失、これに比例して勞働階級の勞銀の減少』といつて居る。即ち不景氣とは、利益が得られない經濟狀態であるといふのであつて、頗る常識的なる解釋である。けれども常識的なる事、必らずしも非學理的でない證據には、ハーバード大學教授コッペルランド氏は『凡そ景氣が良いとか、惡いとかいふのは、一體如何なることを意味するかといふに、景氣が良いといふのは利益が得易くなつた狀態であり、景氣が惡いといふのは利益を得難くなつた狀態に外ならぬ。從つて景氣といふのは利益の概念であつて、利益を得ることの出來ない經濟組織の下に於ては、景氣の現象も存在するを得ない』と述べ、この利益を得ることの出來ない經濟組織は、自分で生產して自分で消費する自足經濟時代、或は社會全體を統一管理する機關があつて、全體から割出して公平に生產、分配、消費をなさしむる社會主義經濟組織の下におけるやうな狀態であるといつてゐる。但し同氏はかゝる狀態を持ち來たすことは實行不可能だと述べてゐる。

もし以上の說のやうに不景氣といふことが、事業の利益が減少し、或は利益が皆無だといふのであれば、現在の日本は如何

にも不景氣に違ひない。戰時中には二百圓拂込の日本銀行の株が千五百圓になつた、鐘紡の株は五百六十圓に上つた。綿絲は一梱七百圓に上り、この頃の紡績會社の儲けは一梱について百三十圓から百五十圓だといはれる。また生絲の値段は大正七年には千四百圓であつたのが、大正九年には四千三百五十圓になつた。これを物價指數から見ると、大正三年を百と見ると、大正九年三月には三百三十八になつてゐる。何のことはない、好景氣の美酒に醉つて、金の峠を、よぢ上るやうな狀態である。かうした狀態を頭に置いて、現在の狀態を顧みると、それが如何に不景氣であるかゞ分る。私は日本に關する限り、不景氣とは、戰時中の好景氣の記憶と、現在の狀態を對比して起るヂスイリユージョンの現象——早くいへば戰時惡酒の醉醒めの現象だといひ得ると思ふ。

けれども問題は醉醒めの一時的苦悶のそれではない。最大至高の問題は、この利益が益々減少して、日本國の生存を脅かし、日本國民が將來、完全なる生活を續けて行けるか如何かの點である。財政の止るところなき膨脹と、輸入の超過、輸出品市場の閉塞と原料品の不足、かうした狀態を以て、日本が『一等國』の面目におへぎ乍ら、何時まで前進することが出來るかの點である。

私は議論の本筋に入る前に、餘りに道草を食ひ過ぎた。私は之等に關する敍述を一切省いて、直ちに對應策に入らなければならぬ。これには現在目前の對應策と、比較的タイムを要するものとの二つに分けたいと思ふ。

五　混亂の原因は『間違つた物(ロング・シング)』の製造

第一に私は、經濟界の徹底的な整理を主張するものである。私は現在の經濟的困難の直接原因は、第一には戰時の不自然な膨脹によるものであり、第二にはこれより輕い意味で大震災の影響なりと信ずる。前述した一八八五年の英國での經濟狀態調査委員會は、その當時の不景氣を調査して一つの結論に達した。それは不景氣の原因は、普通にいはれる生産過剩ではない。普佛戰爭のために非常なる需要があつた結果、間違つた物(ロング・シング)を生産したのに原因して居るといふのである。

私はこの言葉を移して、日本の現狀にあてはめる事が出來ると思ふ。試みに戰時中における日本工業の發達の樣を見るがいゝ。それは普通の場合において需要される物資ではなくて、殆んど悉くが戰爭といふ變態の狀態の下における需要に應ずるためのものであつた。かくして急速に發達したものは、多くの場合に所謂間違つた物(ロング・シング)であるのは實に已むを得ない現象であつた。この事は當時における事業計畫資本の狀勢を見ればよく分る。

事業計畫資本金高表（日本銀行調査）

年次	製造工業	鑛業	海運	紡績
大正三年	二八、三二五千圓	一六、六八五千圓	一九、三〇〇千圓	一、七〇〇千圓

大正四年	八八、〇〇七	一、〇〇〇	一〇、八八〇	一〇、〇〇〇
大正八年	一、一六一、一八九	一八八、四〇〇	一八八、六〇〇	一六一、一七九
大正九年	一、五七一、一三一	一五五、六八五	一〇一、一三〇	一一一、五四〇
大正十年	四〇七、一一三	一三一、七〇〇	一四、五八〇	六六、一八五

以上の數字によつて、戰時中日本の工業が如何に飛躍的な發達をしたかゞ分る。しかもその發達した工業は、例へば製造工業の大正九年度における事業計畫資本が、大正四年に比して、實に四十倍の多きに上つた如き、また同期間に鑛業が十六倍に、海運が大正八年は、一年に比し二十八倍に、紡績が二十六倍に上つた如き、しかも顧みて農業の方面における活躍が見るに足るものなき事實に見ても、所謂間違つた物の發達が甚だ多きを占めて居るのを知るべきである。

もしその際先覺者があつて、マーシャル教授が說くやうに、ショート・デマンド（一時的の需要）に對しては、出來るだけ在來の工場と機械とを以て之に應じ、たゞロング・デマンド（常住的な需要）に對してのみ事業を擴張する方針に用たならば、今の如き混亂は招かなかつたであらうけれども、盲目が金貨でも漁るやうに、向ふ見ずに擴張をなしたが故に現在の結果を見たのである。

米國の經濟調査局の會頭であるロバート・ブルツキングス氏は、最近著した“Industrial Ownership”において、總べての産業における生産過剩は、多くの場合において他の産業における生産過程の行詰りである。そして、ホブソン氏は戰時を、ここにおいてバランスを欠いてゐたものが、戰時からいよいよだと述べてゐる。アンバランスを失なつた時代に、殊に日本において最も顯著であつた。そして同氏が說くやうに繁榮とは、バランスのとれた産業狀態をいふのであるならば、かく不自然に發達した工業をバランスのとれるまで整理することは、日本が新しい發足點を求むる為に已むを得ざる過程である。

六　資本の浪費を避け生産へ

第二に必要なることは資本の浪費を避けて、これを有用に利用することである。即ち死に金を使はないで、これを生産方面に振り向けることである。

これには第一の項目として、政府の政費削減の必要が起つて來る。この文の始めに述べたやうに、豫算の削減もなし得ないと緊縮載相が、世界の何處に存在しよう。經濟問題の解決に懸命だと云ひ乍ら、好景氣時代の豫算と同等な額を支出して行く政府が、果して有終なる結果を持ち來たすことが出來るであらうか。この豫算縮減の方法として、ありふれた說ではあるけれども、軍備の縮少以外に道はない。私は全く實現性なきことを覺悟し乍ら軍備の撤廢を主張する。スカンヂナビヤ其他の諸國に於いて試みられ、或は試みられんとしつゝあるやうに、日本は支那、朝鮮等におけるわが國のインテレストを保護するだけの海

隣の警察力を殘して、軍備の撤廢をなすべきことを主張する。

『日本が軍備を撤廢したら、一體世界の何國が日本をとらうといふのだ』私は、よくこういふ質問を發する。支那が對外的には殆んど一兵をも有さずして、最早其一隅をもとらるゝ憂ひはなくなつたではないか。ヒリッピンの獨立も時期の問題である。英帝國も、今有する領土をも持て餘してゐる。さらばこの日本を何國が奪はんとするのか。かゝる國際問題については、本論の關するところではないけれども、そして此問題については、後の教育の條項で、もう少し書くけれども、かくして得た資本——假りに毎年三億圓の流動資本と、十萬人の壯丁が浮き出で、これを適當に利用するとせよ、經濟問題は半ば解決するといつてもいゝのである。

第二の項目として、私は銀行制度、取引制度の改善を主張する。私はその一つの例として銀行利子をあげたい。日本における銀行の收入は一年に約二十億圓を超える。この内訳各銀行が持つ有價證券の手持は、約三十億であるから、この利息が六分として一億八千萬圓であると見て、これ等を差引き、少なくとも十五億圓は利息收入である。銀行制度の改革によつて、取引の圓滑を來し得る上に若しこの利息收入の中から三割を減じ得れば、四億五千萬圓といふものが浮びあがる譯である。この巨額の金を、單なる利子取得者の手に置かないで、商工業者の手に移せばそれだけ有用に使用され、産業の發達も可能になるのである。

國民全般の産業の智識が幼稚である場合に、單に銀行業の欠點をのみ指摘するのは聊さか當を得ないけれども、日本の金融業者が、信用の對照を生産品のトランサクション、即ち生活必需品の實質に置かずして、土地や公債の如き不動産をのみ目がくるにおいて、金融の圓滑を來たすのは當然である。殊に政府は或る特殊銀行に、流動資金を貸せつけ、之を殖民地の事業に固定せしめ、しかも尚救濟金と稱して金を送り與へる狀態にあるにおいて、本國における金融界に大なる障害を與へるものは毫も異とするに足らないのである。

第三の項目としては、國策を全く産業立國におき他を顧みないことである。この意味は日本は從來軍事上の目的に餘りに重きを置くの結果、非常なる資本の浪費をして來た。われ等は一國の保護政策を否定しない。しかもこの保護政策は眞に保護して發達し得るものに止めねばならぬ。日本において紡績事業の保護の如きは好結果を見たものゝ一つである。併し乍ら算盤をとらずして、所謂軍事上の必要によつて保護して來たものは殆んど悉く失敗である。鐵や石油は此種に屬する。われ等の軍備縮少はこの點まで徹底せねば意味をなさないのである。

保護關稅と關聯して、こゝに一言せねばならないのは、一般の日本人、殊に政府當局が有する傳統的に輸入に對する一種の迷信である。輸入を懼るゝこと恰も蛇の如く、些少の輸出でも之を見ると、子供が金の玉を抱いて喜ぶ程の喜び方をする點である。無論輸出入はその商況を知るバロメーターとして大切なるものではあるけれども、併し記憶しなければならぬのは、輸入の五億圓、六億圓といふ額は、國民生活のホンの一部のものであることである。元來經濟的發達に遲れたる後進國は、經濟的先進國より、物資の形式を以て資本を輸入し、かくして其國の生産事業の發達を庶幾するのは經濟上當然の過程であつて、たゞ問題はその借り入れ金が單に消費の目的を以て費消し盡され、生産的方面に使用されざるや否やである。輸入の多き一事を以て『不利』なりとし、これに一喜一憂するは、古き重商主義思想の迷夢に囚はるゝものであつて、濱口藏相が、かの贅澤稅を課し、數ふるにも足らざる輸入品を防壓することにより、却つて大切なる物價騰貴を促がす如きは、甚だとらざるところである。

第四には稅制の改革である。日本が世界一富が不均して居るなどとは、一種の傳統的迷信である。最近の所得稅の調査では個人の所得高約四十億である。しかしてその所得者の數は百七十萬人といふことになつてゐるから、四十億圓の所得を割あてると一人の平均は[illegible]、[illegible]一千[illegible]二十億圓で之が[illegible]から（小林博士の說）前記四十億圓を差引いた二十億圓に對し、八百三十萬戸に割當てると、一戸の平均は二百四十圓にしかならないのである。

かうした貧窮な國民に多大の間接稅を負はせ、しかも直接に生産せざる者、所謂アイドル・リッチに對する負擔が比較的輕きことは、資金の浪費である。稅制改革によつて、相續稅、所得稅に大部分の稅源を見出だし、生産的方面の負擔を輕減すべきだと思ふ。

以上の外、物價引下げ、金解禁其他多くの問題があるけれども之等は既に世間で論じ盡されて居るから、こゝには說かない。

七　産業立國の基礎は國際的教育

目前の問題は、以上の如き政策をとることにより解決するけれども、日本の將來を永遠に光明に導くためには、依然教育の改善をなすの外に道はない。そして私は此點において岡田文相の教育方針に全然賛意を表し得ざるものである。『一旦緩急』の場合をのみ目がけ、この目的以外には、殆んど何等の教育を授けられざる日本國民に對し、今にして産業立國を說くは、瓜

の發に梃子を求むるものである。私は第一に專門教育の普及を主張する。これはドイツをして、工業國として今日をあらしめたるものであつて、工手專門教育を以て、今までの文學、法律、哲學に進んで居るものを分布すべきことを意味するものである。

而して之を並行して教ふべきは國際主義の教育である。經濟は孤立を許さない。今や單なる景氣論からいつても、國際循環（インターナショナル・サイクル）が、一國の經濟を左右するに最も力あり、戰後の世界的大恐慌は、日本の大正九年三月十五日以後の狀態が口火の役を勤めたといはれるやうに、一國だけの繁榮は絕對に期待出來ない狀態にある。これを輸出から觀ても、日本の特殊なる國情と習慣は、どれだけ經濟的に不利益を與へて居るか分らない。元來一國の輸出は、その國民消費の剩餘であるのを原則とする。然るに日本の所謂「輸出品」は多く內地において使用せられざるものである。日本の輸出品職工は、その製品が、如何なる場合に、如何に使用せらるゝかを知らずして、製作して居るのである。かくの如くして如何にして加工輸出工業（そして之れこそ日本が進むべき工業だ）が發達し得よう。日本が國際經濟の單位とならんがためには、風俗習慣をも國際化するの外はないのである。

問題は之に止まらない。富源の少ない日本の今後の行くべき道は、外國に對する投資及び外國における運輸、商業の實權を、わが國人の手に收め、かくして貿易外の受取勘定を增すやうにすることを重要なる政策の一つとしなければならぬ。これはシベリヤ、支那其他に特に有望であると思ふが、日本が之をなすためには、今の教育は餘りに偏國家的（ナショナリスティック）であり、排外的である。常に戰爭を目標にして訓練する國家が、如何にして腰を落ちつけて、他國における平和的事業に一身を捧ぐるを得よう。私は現今の經濟的行詰りは、明治初年來の偏武的、偏國家的教育方針が持ち來たした當然の結論なりとする者である。

教育を國際的にし、かつ工手教育を施して、始めて勞働者の能率問題にも及ぶことが出來る。富源なき日本が唯一の便るべきものはマン・パワー（人間動力）であるのに、現在の如きこの濫用（ウェイスト）は國家的罪惡である。世界一の統率あり規律ある軍隊を有する日本は、經濟的勞力軍隊においては、如何なる文明國にも見得ざる亂軍である。更に又この經濟教育の普及により私が、前々號の本誌にのせた「農村產業化の必要」で論じたやうに、農村を經濟的單位とし、その產業化をも計ることが出來るのである。政治の產業化を計らずして、謂はゞ產業の政治化——東北における農工銀行に、低級なる野次馬代議士が、總令を

叩き流すといふやうな主張に、[illegible]日本の經濟的運命に光明はみえない。

八　經濟調査委員會設立の提唱

私に與へられたページは既に超過した。併し乍ら私は最後に、目前の問題として、今まで書いて來たどれよりも大きな一つの提案をなさずして筆を擱く譯にはゆかない。それは經濟調査委員會、或は經濟調査局の新設に關するものである。

不景氣に對する對策は具體的にいへば種々あるけれども、既に財界循環が一定の法則であるとすれば、之を避けるためには科學的の方法がある。ミッチエル氏の說に從へば、第一は財界を先見することによつて豫防するものであり、第二は財界を管理することにより豫防するものである。この二つの方法の內後者の方策は二つに分れて、その一は財界循環を絕對的に中止せしむる豫防法であり、その二は財界循環の程度を緩和することによつて相對的に豫防せんとするものである。即ち第二の財界コントロールによる豫防法は、金融政策を中心にして、營利經濟を制御するものであるから玆には說かないが、第一の財界先見による豫防法は經濟學者が、經濟事情の研究、統計蒐集及び綜合的經濟知識により、經濟界の傾向を歸納してバロメーター[illegible]することになる。

ハーバード大學教授コッペルテランド氏も、[illegible]は思想による得失關係からであるから、[illegible]せしめやうとするならば、（一）經濟界の全體的狀態を明示し、（二）不平等を求める心を抑制するに務めねばならぬといひ、第一の全體性を明示するとは、財界調査機關の設立だと述べてゐる。

顧みて日本においては見るに足るやうな經濟調査機關が一つでもあるであらうか。たまに相當なものがあつても、これは全然外國ものゝ飜譯で、一個の商業事業に過ぎないのである。日本の經濟學者といへば、殆んど例外のないまでに外國の一特にマルクスの流れをくんだ學說を紹介するに忙がしい人々のみであるやうに見える。そして一般的知識階級が、また分配の研究には詳しいけれども、生産の研究は殆んどなして居らないやうである。この事が惡いといふのでは無論ない。併し乍ら國民一般としては、かくの如き研究がその實際生活に得るところ甚だ少なきは當然であつて、彼等の望むのは寧ろ時の問題に對する學者、研究家の指導である。かうした機關が澤山あればある程、經濟的知識は向上し、健實となるのであつて、私は各方面にこの種のものが續々起ることを希望すると同時に、まづ、政府が其一局を設けて之に當らしむることを主張するものである。

在は永久的なものであるけれども、更に臨時的なものとしては、現今の狀態を調査するために、特別なる經濟委員會を起すことを望むものである。前に引照したやうに、一八八五年に英國政府は、當時の不景氣に對する調査をなすために、帝國調査會（ローヤル・コミツシヨン）を任命した。更に大戰後英國の財政、經濟其他萬般の調査をなすために、ゲツデス委員會を任命したのは、われ等の耳新しい事實である。また米國においては同じく景氣循環を研究するためフーバー氏自身が委員長となつて、其調査をなし、この報告書が發表されたのは大分前のことである。

從來日本で設けられる委員會の試みは、第一には清浦内閣時代の帝國經濟會議の如く、財界と政界とより、單に有名なる人々を羅列するに止まるにあり、然らざる場合には、たゞ外國の學者の説を紹介する人々を集めて、餘りにアカデミツクな論議に走り、一般に對し實際上何等利益を與へざるにある。故に私は此際、この弊害から離れて、第一には現下の諸問題を研究すべく有力なる臨時經濟委員會任命を提議し、第二には恒久的なる財界調査機關設立を提議するものである。（八月十日）

今日一利を興すは一害を除くに若かず

文學博士 三宅雪嶺

日本で外國と交通してから、景氣不景氣が多少外國の影響を蒙つたが、大正三年より世界戰役の影響を蒙つたほど著しいのはない。世界で未曾有の大事件であり、善い事、惡い事共に目醒しい影響を及ぼしてゐる。開戰の報道に接した時、恐るべき不景氣に陷ると心配し、次いで反對に驚くべき好景氣になり、二十八億圓の金が入込み、大小成金が續出し、世間が有頂天になり、休戰に接してガタ落ちし、之れではならぬと狼狽すれば、思ひ懸けなく景氣が恢復し、氣が緩みかけるか否や、九天直下、殆どドン底に墮ちさうに見え、搗てて加へて、十二年關東に大震火災があり、少くとも五十億圓以上の財物が消滅し

[illegible]

[illegible]何分にも人の[illegible]。思はず好景氣になり、思はぬ不景氣になるので、[illegible]すべきを[illegible]ずに過ぎ來つた所がいろいろある。

何にしても開戰當初は、一部の財政經濟家が、戰役を以つて三ケ月で終るもの、それ以上は交戰國の財政が許さぬとし、これが三ケ月どころか四年半も續いたので、手違ひの起るのも怪しむに足らぬ。幸にして當れば、不幸にして當らぬ事がある。好景氣に際して程よく締括つてゐたならば、今のやうになるまいと云つても取返しがつかぬ。景氣が好くて何でも事を起しさへせば可いとなり、景氣が好くなくつても放慢政策に傾き易く、恰かも身體の發育盛りに結核菌が襲ひ來る如く、政府で手を擴げれば何處までも寄生物が食ひ込まうとする。計劃の間違つたのもあるけれど、寄生物のために豫期の効果の擧がらなんだのが何程あるか知れぬ。悉く豫期通りに行くものでないと言はば云へ、新たに發展すべき途を拓きつつ、之れを塞いで終ふなど餘りの次第とせねばならぬ。

好景氣に浮かれる時、早くも不景氣を察し、其準備すべしとするは、難きを人に望むものとなるかも知れぬ。然し國家的事業として、着手しながら、高い物を高く買ひ、高い物を安く賣

た、[illegible]とも[illegible]ない。[illegible]れば、[illegible]り。[illegible]の影響とも見るべきでなく、[illegible]に相違ないとし、政府關係者に[illegible]責任なものあるを惱ますに居れぬ。當人は無責任でなく目算違ひに過ぎぬとしようが、目算違ひで不氣になつて居るとは、虫の好い話でないか。不景氣は必然の勢であつて、誰が何をしたとて免かるべきでないにせよ、種々の手落ちあつた事を辯解するに苦しまう。職を去れば責任が解除され、後に之を追究しても效がないので、其位になつて居る。不景氣は已むを得ぬものの、今よりも都合好く爲し得ただけのことは確かとする。特殊銀行會社の不始末のみで明かに損失を及ぼして居る。それからそれへと關係がつき、一つ倒せば將棋倒しとなるの恐あるので、倒るべきを倒さずに置くのがある。會社で事業に損しても株主の信用を得るが爲めに、配當を多くし、強いて解熱劑で熱を下げるなど、健康を閉する所以でない。大なり小なり無理算段が行はれ、それが不景氣の惡影響を強めて居る。

然し適當の處置を以て今よりも好くするの可能性あつたと同時に、一層處置を過つて今よりも惡くなりはしなかつたかとの慰安が無いでもない。當局者其人を得たならば、適當に處置し

たらうが、より凡庸らたる者が事に當れば更らに誤つたらう。他の國々を見れば、確かに腕の冴えたのがあり、羨しく思ひもするが、隨分失敗したのもある。周圍の事情にも因らうが、日本で落第點をつける者も、お情けにでも及第させねばなるまい。景氣の好い時に弊を醸し易く、不景氣になつて弊を除くのがせめてもの事とする。不景氣になつては一般に其心得で忍耐し、此處が忍耐の仕時と考ふべきであるが、政府關係者は唯徒らに必然の勢として通り過ぎるべきでなく、これ相應になすべき事がある。

人は不景氣で辛抱すべきを知つても、熊が冬眠して居る如くして居れず、何かた面白い事をと求めて居る。政府の力は知れたものにせよ、成るべく人をして倦まないやうにするを要する。故大隈侯は自讃して云ふた。誰でも來る者に勢づけてやる、希望を持たして歸すと。皆々さうは行かず、大風呂敷の効能無いのを非難した者あるけれども、人に氣強ひ思ひさした所あるを打消してはならぬ。現代の不景氣は必然の勢にせよ、空しく捨てて置くべきでない。如何にすれば可いか。社會の組織を改めようとしても間に合はぬ。政府でいくらか失業者を救ふが爲めに、緊縮方針を緩めようとする所があり、公債をも許さうとするが、大體に於て好景氣に作つた弊害を除くの任務を帶びて居り、綱紀肅正と云ひ、行政財政整理と云ひ、何れもさうである。憲政會が兎も角も政友會よりも受けが好いのは、放漫政策の弊害を大きくしまいと見られて居るに因る。三派關係の内閣の割りに後暗い事をする迹が無く、何かあつても目立つて居らぬ。不景氣に際して積極的に適當の處置を得れば、消極的に事の宜しきを得るやうにと望まれる。何の方面にも弊害多く、次から次ぎと改正改革を施せば、何とか人を倦まさずに通つて行かれる。何處でも弊害ある所に矯正の手を下すのは、直接に不景氣と關係なく、人心を倦まさらしめる點に於て不景氣を耐へ忍ばしめるに關係がある。不景氣に臨んで弊害を除く事が何よりとする。弊害の多いのに厭き果てたのが、次第に弊害の除かれるのを見て愉快に感ずる間に、景氣が直り、續々事業の起るを見るに及ぶ。今も何か事業を起し、失業者をして業に就かしめるといふのは、全く不必要でないにせよ、切り詰めた財政で何程の事が出來るかが疑はしい。それならば道路の工事を急がすだけでも、いくらかの仕事がある。不景氣を緩和すべき策があれば、片々から實行するも可いが、それで効果が見えるくらゐならば不景氣になりはせぬ。不景氣は政府か根柢が深い。腸チブスとなつては何とかしても、半月又は一月で全快しない。二三月又はそれ以上を要する。捨てて置いてはならぬが、

[illegible]ならぬ。現在の[illegible]にこれ、いくらか[illegible]んだくらゐで[illegible]らぬ。[illegible]して空しく袖手て過すやうな事があつてはならず、他人は知らず我が隣で何時でも我が運命を切り拓き得るとの自信を致がしめるを肝要とする。さういふ人も相應にあるが、廣く一般に氣強く思はしめるに若くはない。政府關係者に於て單に位置を占めるのでなく、見よや斯くの如く爲すとて、弊害といふ弊害を片はしから改ため、力を伸す餘地の裕かなのを示すべきである。大小の弊害に對し斧鉞を下すといふ事は、人をして痛快を感ぜしめる所がある。加藤内閣はいくらか斯くて經過して來つたが、何分にも微温るく、折角單獨内閣を形造つたかと思へば、早くも研究會の機嫌取りを初め、疑問の人物を引き入れたりした。司法問題が起りかけては有邪無邪になつて終ふ。消極の方針で弊害を[illegible]するに[illegible]切つて[illegible]ある。古來世界で最大帝國を[illegible]出したのは[illegible]であつて、宰相耶律楚材は、一利を興すは一害を除くに若かずといふを政治の方針にした。一害を除くは一利を興すに若かざることもあるけれど、弊害を除くに最も重きを置くべき時代もある。日本にて現在の不景氣の續く間は、政府は弊害を除くに專[illegible]氣を現はし、以つて人意を強くすべきであつて、之れならば失敗しても害なく、成功すれば長く利を遺す。國民一般は政府に依頼せず、今の不景氣の如き、優に堪へ得られるとすべきであつて、階級問題や、職業問題や、景氣不景氣に拘らず、とくと思慮すべきである。

我が經濟生活の過渡的行詰と根本的行詰及其轉換

高橋龜吉

一　經濟生活の一時的行詰と根本的行詰

今日の所謂不景氣、及び之を非調とせる國民生活の行詰には、二つの性質を異にせる原因がある。(一)は普通に云はれてゐる「不景氣」であり、(二)は現在の社會制度の國民生活を賄ふ能力が根本的に衰微しつゝあることである。(一)の不景氣とは、資本主義制度の一の疾患であつて、國民の生活が資本主義經濟制度に依存してゐる限り、一定の期間を置いて、周期的に必ず襲ひ來る一の經濟現象である。いま、資本主義經濟には、何故に周期的に「不景氣」が襲ひ來るかと云ふに、之を極く砕いて云へば、何かの事情で資本主義經濟の有機體の何處かに無理や負傷や疾患が出來ると、この無理を矯正するために起るものが、即ち不景氣である。喩へば、身體の何處かに無理や負傷や疾患が起ると、其處に苦痛が起り、之を平癒さすために、他の機關の活動を犧牲にして、自働的に治療運動が行はれるが如くである。であるから、この種の不景氣は右の自働的治療運動が終ると共に、玆に終熄して、經濟界は、再び活潑なる運動を續け得る。しかして、斯る場合、われ〳〵のなすべきことは、良醫の診察に基いて、適當なる個所へ、適當なる手當てを加ふることである。その手當ての善し惡しによつて、身體の恢復に遲速の差は無論起るが、しかしながら、兎にも角にも健康は再び恢復するわけで、國民は、そのため一命にかゝはるが如きことを殆んど心配する必要はない。之れが所謂、(一)の不景氣であつて、その性質は一時的のものである。今日の我が經濟生活の行詰原因の中には、云ふ迄もなく、かうした一時的不景氣に基く分子を渺からず含んでゐる。

所が、普通に、我國現在の經濟生活の行詰と云ふことが論ぜられる場合には、その原因は、專ら、右の如き一時的性質の不景氣に基くとのみ考へられ、それ以上、(二)の如く、現在の社會制度の國民生活を賄ふ能力に、根本的衰微が起りつゝあることが、現在の我が經濟生活行詰の基因であると考へるものが極めて少ない。然るに、歷史を顧ると、恰も人間社會に、幼年時代、壯年時代、老衰時代があつて、常に新しき人によつて代られるが如く、社會制度にも、斯樣な幼年期、壯年期、老衰期が繰返されるが常である。即ち、その社會制度が壯年期を過ぎて、老衰期に入ると、從來の如く、國民の生活を賄ふ能力なきに至ること、全く人間が壯年より老年に至れる場合と同一である。現に、われ〳〵は、近く、德川封建制度の盛衰の歷史に由つて、最も印象深く、この間の事情を看取し得る。例へば、元祿以前がその幼年時代、元祿から天保時代までがその壯年時

代、すなはち徳川時代の老衰期であつて、再び行詰りに入つて、遂にその極に達したのである。事實、徳川封建の全盛期に於ては、國民の生活程度は向上したが、その老衰期に於ては、國民生活は行詰つて、國内到處に生活難が永久的に襲ひ來つたのであつた。之を最もよく實證するものは、當時、國内到處、就中東北地方に於て、頻繁、生活難を原因として、幼兒殺害が殆んど公然と一般に盛行するに至つた事實である。

宛も、斯く徳川封建制度に老衰期の襲ひ來れるが如く、最近迄も、全盛期にあつた現在の我が資本主義制度にも亦、老衰期が已に襲ひ來りつゝあつて、これが、私の信ずる所によれば、現在の國民生活行詰の基調をなすものである。斯る場合に於ては、その經濟生活の行詰を打開するには、已述(一)の際とは全然異つた根本策を採らねばならない。例へば徳川封建制度の行詰は、明治維新の社會革命、即ち封建制度から資本主義制への轉化によつて打開かれた。それと同じく、現在の資本主義制度の行詰は、その制度よりも更に進化した社會制度によつて代られない限り、現在の國民生活の行詰りは打開かれる望はない。

以上之を要するに、現在の我が國民生活の行詰りは、(一)資本主義經濟の一時的疾患である不景氣と、(二)我が國資本主義經濟の老衰期に入れる永久的衰退との二つの原因から成立てゐる。であるから、(一)に對しては、一時的に適當なる對策を講ずることによつて、現在の國民生活の行詰りは、(一)に適用すべき對策によつて緩和し得るが、併し、假令その不景氣が解決したとて、(二)の原因に基く國民生活の行詰りに對し適當の打開策の行はれざる限り、恰も幕末に於けるが如く、國民生活はジリジリと衰退を續けざるを得ない。所で、(二)の現在の我が資本主義經濟の行詰りに對する打開策は、ことに極めて根本的に且つ多岐であつて、到底この限られた紙面に於て論じ盡すことは出來ない。そこで、茲には、先づ(二)に對しては、その根本要點を極く簡單に述べるに止め、次いで(一)の一時的性質の不景氣對應策について論ずることにする。

二　根本的行詰に對する打開策の要點

或る社會制度が老衰期に入つたと云ふことは、その制度に依存しては、最早生産が増加せず、乃至は國民生活の程度を向上さすことが出來なくなつたことを意味する。幕末に於ては、現に、この社會現象が起つて、これ迄、増加しつゝあつた人口は遂に停頓乃至減少するに至つた。いま、私が、日本の資本主義が已に老衰期に入つたと云ふには、幕末に於けると同じ歴史的社會現象を現在に於て認めつゝあるからであるが、之を最も代

表的に且つ端的に示し得るものは、思ふに、これ近代資本主義制度の下に於て、始めて長足の發達をなし得た、我が原産品の生産が、最近に至り、已にその生産能力を低下しつゝある事實である。

(一) 主要農産物一反歩當り收穫高表

平均	米(石)	大麥(石)	裸麥(石)	小麥(石)	大豆(石)	甘藷(貫)
明治一二―一六年	一・二〇	〇・九一	〇・七九	〇・六〇	〇・五三	一六八
一七―二一年	一・三四	一・〇六	〇・七五	〇・七一	―	―
二二―二六年	一・四〇	一・〇七	〇・八四	〇・七一	―	―
二七―三一年	一・四一	一・一八	一・〇一	〇・八六	〇・六九	二九九
三二―三六年	一・四八	一・一八	〇・九三	〇・七八	〇・七六	二六二
三七―四一年	一・五三	一・四一	一・〇三	〇・九〇	〇・七七	二八五
四二―大正二年	一・六九	一・五八	一・一四	一・〇二	〇・七一	三〇〇
大正三―七年	一・八三	一・五三	一・一八	一・〇八	〇・八一	三一七
八年	一・九八	一・八四	一・一八	一・一六	〇・八〇	二七二
九年	二・〇二	一・七七	一・一三	一・〇七	〇・九〇	二七一
一〇年	一・七八	一・六一	一・〇六	一・〇八	〇・八五	三四七
一一年	一・九五	一・七四	一・一六	一・一四	〇・八二	三四四
一二年	一・七六	一・九九	一・一一	一・〇六	―	―

例へば、右の第一表の主要農産物一反歩當りの收穫石數を見るに、何れも已にその頂點期を過ぎて下り坂にあることを發見する。例へば、その最も主なる米について見るに、明治初年以來大正九年の二石二升までは、例外なしに增加し來つたものが、大正十年以來始めて減少を示し、十二年に於ては一石七斗六升に減じてゐる。而して、大麥、裸麥、小麥は大正八年を頂上に、大豆は九年を頂上に、甘藷は七年を頂上に何れも、爾後一轉して減少を示してゐる。即ち我が、農業が愈々具體的に收穫高に於て報酬遞減の時代に轉入せることを看取し得る。

(二) 鑛産物産出高表

	大正一二年	大正一一年	大正八年	大正七年	大正六年	大正二年
銀(千匁)	二九・八〇七	三三・八四二	四二・八二二	五四・七四四	五八・九九二	三九・〇〇七
銅(千斤)	九八・九〇九	九〇・二二〇	一三〇・七三九	一九〇・五六九	一〇〇・〇六四	一二〇・八五五
鉛(千斤)	四・五〇〇	五・三九九	九・六九九	一七・八〇七	一六・三四五	六・六九五
アンチモニー(千斤)	―	―	三	六五一	一一・一二三	三七(大正三)
亞鉛(千斤)	二三・九〇七	二〇・八七六	三三・〇〇七	六六・九二六	九一・九七	九・八六六
鐵(佛噸)	一三・二四一	七八・四〇七	一三三・四四八	一九九・七七一	一三九・〇〇五	七二・一七二
マンガン(千貫)	一・三六五	一・二八四	六・一〇〇	一五・一九八	一三・七〇〇	四・八〇九
石炭(千佛噸)	二八・九四九	二七・七〇二	三一・二七一	二八・〇一九	二六・三六一	二一・三一六
硫黄(佛噸)	三七・四一六	三四・六四二	五〇・六二一	六四・七一一	一一八・〇八九	五九・四四八
原油(千石)	一・二七六	一・七〇九	一・九六四	二・二四五	二・三〇九	一・六九四

次に、右の第二表によつて主要鑛産物の生産高を見るに、最近の生産高は、何れも歐洲戰爭の最高に比し、遙かに減少を示せるは勿論、戰前の生産高に比するもその殆んど全部は減少せるものと云つてよい。例へば、銀、銅、鉛、アンチモニー、マ

ンガン、[illegible]著しく減少し、唯だ、石炭のみが戰前に比し云ふに足る[illegible]を告げたるのみにて、石炭は戰前二千百三十萬噸に比し現在（大正十二年）約二千九百萬噸を示せるに過ぎずして、大體に停頓狀態に陷れることを看取し得る。

然らば、斯く我が資本主義經濟が老衰期に入れる場合之を如何にして打開するかと云ふに、（海外に領土擴張の餘地あれば之を行ふことによつて打開は出來るわけであるが、今日の時代に於ては、もう、帝國主義的に發展し得る餘地はない）それは、一言にして云へばその社會制度の中心となり本位となる階級を變更することに在る。例へば、封建制度に於ては、武士階級本位にすべてのものが組立てられてゐた。そうしてすべての國民は武士階級がゐなくては、日本は破滅するものと云ふ無條件な信仰を持つてゐた。如何にも、戰國時代の社會に於ては、さうしたものの見方が本統であつた。丁度最近に於ても戰爭中は、すべてのものゝ見方が軍隊本位となり、社會の組織が軍國本位となつたと異る所はない。然るに、封建制度の老衰期なる幕末に於ては、武士階級本位に社會を組み立てゝ行くためには、當時の我が產業の根幹であつた農民を苛斂誅求して、農業を衰微せしめたのみならず、封建制度が米本位に組立てられてゐると云ふ

事實[illegible]ために[illegible]

と工業を一層窮迫せる[illegible]著しく[illegible]來した。

茲に於て、幕末に於ける農民生活の行詰を打開する使命を負つて立つた明治政府は、從來の武士本位の社會の組立てを撤廢して、今度は、武士階級が從來賤町人と輕視してゐた町人階級（今日のハイカラな言葉で云ふ資本家階級）本位の社會にした。明治維新以來の有ゆる社會制度の改革は、實に、從來の武士本位の社會を町人本位に引直すに必要な制度上の改革に外ならなかつたのだ。蓋し、社會が平和を常とする時代に於ては、專ら、產業に從事するもの就中、營利心に燃えて最も產業活動の活潑なる分子、即ち資本家階級が、社會に最も有効な階級であつて、その階級を本位にし、中心にして、すべての社會制度が組み立てられると云ふことが、最も社會の發達に有効な方法であつたからだ、事實、周知の如く、維新の社會制度の變化の結果、日本は僅か五十年間に於て、世界を驚倒せしむるが如き大發展を成し遂げたのであつた。

斯樣に、明治の初めに於て社會制度が武士本位から町人本位即ち資本家本位に變化したと云ふことは、云ふ迄もなく、當時の社會狀態から云つて、賢明なやり方であつた。しかし乍ら、

今日に於ては、資本家本位——即ち資本家の營利本位——に社會を組み立てゝ行くためには、今日に於ける產業の根幹である勞働者を苛斂誅求（賃銀の引下げ、勞働時間の延長）して、我が產業の幹根である、人力を愈々衰微せしめることになる。のみならず、前記せるが如き多く生產高が已に衰微しつゝあると云ふことも、資本家の營利本位に任かせておくからこそ、斯く衰微しつゝあるのであるが、之を國民全體の福祉、厚生と云ふ立場から經營し、助育して行けば、（茲に詳論する紙面を持たないが）尚ほその生產高の發展して行く望みは豐富にあるわけである。このことは例へば幕末に於て已に行詰つた武士階級本位の我が農業が、維新の社會革命の結果、明治初年以來最近までの如く、その生產力に長足の發展を示し得たことによつて之を證明し得る。

所で、斯樣に、產業を國民全體の福祉と云ふ立場から經營し、助育すると云ふことは、之を今日の流行語で云へば、產業を無產階級本位の社會に組み立てると云ふことを意味する。こう云ふと、多くの讀者の中には、「資本家が居ればこそ、その力があればこそ、日本は今日の如く發展し得たのだ。いま若し、資本家を無視して、無產階級本位の社會にしたら、日本は、またゝく間に破產するに違ひない」と主張する方があるに違ひない。しかし、それは丁度、明治維新の當時に於て、武士階級本位の社會を、町人本位（資本家本位）の社會に引直すことを杞憂したと同じ杞憂を繰返すに過ぎない。按ずるに、營利主義的資本家本位に社會を仕組んで行くことが、從來、社會の發達に最も有効に貢献する方法であつたわけは、當時の我が資源が、當時輸入移植せられた產業技術や科學に比して、少からず豐富であつたからである。然るに、その資源が已に一應利用せられ盡して、今度は、當時の產業技術及科學に比し、資源が欠乏せる場合に於ては、（即ち現在の日本はいまこの時代に轉入せること已述の如し）營利主義的資本家本位の社會の仕組は、最早社會を發達さす最有効の方法ではなくなるのである。之を喩へば、橋幅に比して渡手が少數である際に橋を渡るには、各自が互に競爭して我れ先にと渡ることが、一番早く皆なをして橋を渡らしむる方法であるが、しかし橋幅に比し渡手が多數で込み合ふが如き場合には、我れ先にと競爭で橋を渡ることは、徒らに混亂を增すだけで、却つて、皆なをして橋を渡らしむるに長時間を要することとなる。斯る場合には、秩序を立て、列を組んで、駈け足で渡るのが一番早く橋を渡る方法である。いま私が、我が現在の經濟生活の行詰を打開する方法として、資本家本位から、無產階級本位に社會の組み立てを變更せよと云ふ

意味に、以上の如く、[illegible]早く[illegible]は、その時の事情の如何によつて、異ると云ふと、暫くこの意味を同ふする。尙ほついでに、よく誤解されることだから一言しておきたいことは、無產階級と云ふ意味である。玆に無產階級とは、その人の生活が、專ら、勤勞所得に依存する階級と云ふ意味であつて、逆に云へば、その人の生活が財產收入、資本收入に依賴してゐない階級と云ふことである。從つて、之を他の言葉で繰返して云へば、いま、社會のために、現實に、働きつゝある階級と云ふことであつて、資本に依食してゐる階級ではないと云ふことである。

以上の如く、今日の我が經濟生活の行詰を打開するためには、社會の政治、經濟、其他を、資本家本位から、無產階級本位に變更せねばならぬと私は云ふが、併し、いま突進、資本家を全然無視して無產階級本位に社會を改革すれば、それで、直ちに現在の國民生活の行詰が打開せられると云ふ意味では決してない。社會が無產階級本位で、旨く運轉して行くためには、先づその社會の經濟制度から、之に適應したものに組み換へねばならず、政治にも之に適應した變革を敢行せねばならぬ。而して、その新しき經濟制度、政治制度とは如何なるものであるかと云ふに、今日の流行語で云へば、それは即ち、社會主義制度であること[illegible]解が作はれ易いのであるから、更にこ[illegible]で云へば、科學（社會科學及自然科學）的[illegible]である。然らば、その科學的社會制度（又は社會生活の科學的統制）の內容如何、現在日本に於けるそれの實行策如何と云ふに、綜合玆に詳示する紙幅を持たないが、（詳細の一班は拙著「末期の日本資本主義と其轉換」參照）要するに、明治政府が行つた如く、先づ根本に於て、資本家本位より無產階級本位に、社會制度を變更すると云ふ立場を定め、機會の熟すると共に、先づ部分的に必要な社會制度の改革を行つて、その完成を期することである。いま私が、突然と社會主義制度の實施と云ふと、如何にも、社會がデングリ返るやうに考へる人が尠くないが、しかし、その變更の有樣は、若し國民が聰明にして之れに努力すれば、明治維新當時の社會制度の變革よりも、より輕微であつても、決してより激しいものではない。それは現に、大なり少なり、先進歐洲諸國に於て實行されつゝある所のものである。

三　一時的不景氣に對する對應策

現在の我が經濟生活行詰の原因には、以上の如き資本主義制度の根本的行詰の外に、一時的疾患である不景氣が手傳つてゐ

ることは前に述べた通りである。所で、いま、我が資本主義經濟が一時的不景氣と云ふ疾患に惱んでゐる原因には勿論色々あるが、しかし、此際、醫者として、最も有效な而して實行的な手當の方法として示し得る方策は二つある。（一）は我が産業から過重な利子負擔を除くこと、（二）は爲替相場を現在の相場に安定さし、その相場で金の輸出入を自由にすることと之れである。先づ（一）から述べる。

元來、産業が利子を支拂ひ得るわけは、それに相當する資本を有效に利用してゐるからである。所が、現在の我が産業の多くは、實際の資本は已に滅失してゐるにも拘らず、それに對する利子だけを負擔してゐるといふのがその大部分であつて、その程度には無論大小の差はあるが、全體として見れば少からぬ負擔を産業に課してゐる。そのわけは一つには歐洲戰爭中の高物價時代に建設した生産設備が、今日に於ては或は其の半分の價値しかなく、或はその價値の全滅したものが少くないこと。一つには已述の如き日本經濟の資源の衰亡によつてその價値が減少したことである。にも拘らず、利子は從前のまゝ支拂はねばならず、配當もさう減少さすわけには行かないといふわけにある。之を喩へば、健康體の時は十六貫の荷物を安々と擔ふことが出來たが、負傷又は病氣して、荷物の負擔力は半減したにも拘らず、依然、昔の如く十六貫の荷物を擔はされてゐるが如くである。若し、此際、荷物を八貫にしてやれば、間もなく健康は回復して、再び十六貫のものを擔ひ得る望はあるが、しかし、非健康體に依然十六貫を擔はしてゐては、苦痛は甚しく健康體への回復は著しく後れるか、乃至そのまゝ死へまで衰弱する外はない。これが、日本現在の産業とその利子負擔との關係である。いまその一例として、現に行詰れる代表的産業會社數社の損失と利子支拂額との關係を見るに、左の如く、損失の過半乃至その全部以上が利子負擔にあることを發見する。

大正十三年下半期欠損會社と利子負擔表

	收入（千圓）	支出（千圓）	損失（△益）（千圓）	支出中利子（千圓）
國際汽船	一八、三三七	二三、一九二	四、八六五	六、四二二
東洋汽船	七、九五一	一〇、四八一	二、五三二	一、二一八
上毛モスリン	一〇、四五三	一三、〇三二	二、五七九	五〇六
名古屋紡績	七九六	一、二四二	四四六	三一八
三菱製鐵	三、〇三六	三、〇六五	二九	三〇〇
大島製鋼	八一五	八三〇	一五	七八
旭石油	七、九六三	七、九三八	△二五	七三四
日英釀造	七一一	九五四	二四三	一一〇

（備考）國際汽船は十二年度である。本表は東洋經濟新報第一一四四號より採る。

斯様のわけで、現在の傷ける我が産業をして可及的速かに健

民價を恢復せしむるためには、——これ以外に我國經濟の行詰を打開し得る方策はない——、その行詰の結へる國民の利子負擔を輕減する外にない。これには、先づ政府が最近、××××××××××××××、の健康恢復策として、或は、金利を引下げ、或は元金の支拂に年賦償還を許して、事業の徹底的整理を行はしめたるが如く、一般銀行をして、その貸金その他の不良貸出に對し、利子の引下げ又は元金年賦償還其他を斷行し、當該事業の徹底的整理を行はしむべきである。而して、之を實行するためには、宛も、過般の政府の銀行減配の勸誘の如く、銀行の檢査を嚴重にすることを威嚇することによつて、之を強要すれば、政府に腰さへあれば出來ることである。この外、金融制度、就中中央銀行制度を根本的に改正して、金融市場の利子を合理的に低下する方策をとる必要があるが茲では觸れないでおく。

第二にいま我が傷ける財界の恢復を阻んでゐる一大原因は、爲替の不安定である。政府及び財界各種の方面には、現に平價から一割七分ばかりを下落してゐる爲替を、平價に引戻さうとする運動が旺んである。さうしなくては、いかにも日本が損であるが如く考へ、又は日本の信用に關するが如く考へてゐる。無論、若しそれが大した犠牲なしに出來ることであれば、平價への回復運動大いに可であるが、實際に於ては、之を平價に引戻すためには、國民は一大犠牲を忍ばねばならぬ。否それどころでなくも、爲替を現在の相場で安定さし、これで（即ち一割七分下落した約四十一弗半で）金の輸出入を自由にした所で、事實我國は少しの損失もないのみならず、信用も失ふわけでもない。（例へば××××の如く借金で穴があいてゐることが已に公知のものが、公然と整理したからと云つて、信用を却つて増加しこそすれ、決して信用を失ふものでないことは最近の事實が之を證明する。しかも以前に於ては、××××の整理が「信用を落とす」と云ふ口實で延び延びにされた）

事實、今日の我が社會に於て、爲替を平價に引戻すことは、そのために起る不景氣の苦痛の大なるべき事實のため、容易に實現される望は先づなしと考へられる。現に、經濟上今度の爲替相場回復運動と同じ運動であつた松方侯の明治十四年乃至十七年に至る不換紙幣整理。（即ち紙幣の下落を回復さす運動）すら、政治的には專政的官僚政治であり、財界は今日と違つて百姓が大多數であつて不景氣に耐え得る能力が遙かに多大であつたにも拘らず、之を斷行するには、不景氣の大苦痛を伴ふので強硬な反對運動の起るは必定と考へられたから、松方侯は御前會議に於て、如何なる反對運動起るも、中途では中止せぬと云ふ言質を要求せられたのであつた。例へば、松方侯自身、當時

のことを左の如く述べられてゐる。

「……紙幣整理を實行して、紙幣の價が次第に回復（爲替が回復するも同じ）すると、……孰れも甚しい不景氣に襲はれることとなるからして、其時は必ず各方面から有力な反對が起つて來るに違ひない。若し其の反對のために中止する位ならば、唯だ、波瀾を起したと云ふに過ぎないこととなつて有害の結果を見るわけである。其位ならば、始めから着手せぬ方が寧ろ宜いのである。私はそう考へたから、太政大臣三條實美公、右大臣岩倉具視公には列席を願つて、御前で此の意味を詳はしく申上げた。一度着手する以上は中途で見合はすと云ふやうなことは決してないから遣れと云ふ難有い御思召を下された、其處で私は身命を賭ても此事を遣り遂げやうと決心したのである」（明治財政經濟史論二八〇頁乃至二八一頁）

今日の輿論政治、今日の政黨政治で、爲替回復政策の實行し得られないことは以上によつて容易に之を理解し得る。しかも松方侯左程の努力も、今日の經濟論から云へば、無駄な動搖と甚大な犧牲とを我國民經濟に與へた拙劣な方法で、何故に當時の紙幣相場で、紙幣價値を安定し、幣制を確立しなかつたかと云ふ非難に値する。斯く、之をその實行の可能性から見るも、その効果から云ふも、爲替相場を回復せんとする運動は、不景氣を深化し又は長期化するだけで、何等得る所まないものである。そこで、此際、我が財界をして出來るだけ早く不景氣から免かれしむるには、爲替の回復運動を捨てゝ現在の爲替相場で我が通貨の價値を安定せしむることが何よりも大切となるのである。

所で、前記の利子負擔の低下にしても、爲替の時價安定にしても、政治の局に當る者に、多大の決斷と責任とを負ふ一大覺悟が何よりも必要である。然るに、いまの政治家も、官僚も、維新當時のそれ等の如く、この大決斷と責任とを負ふ大覺悟なく、徒らに、如何にせば若しもの場合の責任を回避し得て、位地の安固を圖り得るかと云ふことを主にしてゐる。從つて、宛も幕末の諸侯の如く、前例や振り合ひやと云ふが如き、舊殼の中にのみ縮こまつて、殼を出でゝ、新たな政策を實行せんとする熱と誠意を持つてゐない。斯樣に考へると、一時的不景氣に對する施策すら、之を實行するには、根本的に、從來の政治組織や爲政階級やを、先づ改造してかゝらねばならないことを痛感させられる。

不景氣の根本對策

中澤辨次郎

一

國民の日常生活に必要なる物の價格が一向低落しないで居て、而も今日に於て見るが如き不景氣が長く繼續して居ると云ふことは、此の一點から考へた丈けでも、大なる國家問題であり、同時に社會問題であると思ふ。

然るに我が國今日の現狀は何うであらうか。單に經濟界が行き詰つて世の中が不景氣であると言ふ丈けではない。其の他、政治に於て行き詰つて居る。外交に於て行き詰つて居る。教育に於て行き詰つて居る。即ち何れを向いても八方塞りの狀態にある。其の上に前記の如く、不景氣であり乍ら國民の最低生活に必要なる物價が容易に低落しやうとはせず、否な國民の最低營養を保證すべき穀物價格の如きは、寧ろ暴騰を續け、一般無産階級の生活を甚だしく脅威しつゝあるとき、現下の不景氣が齎らす社會的遠因には蓋し重大視す可きものがあるであらう。近頃日の如く新聞の社會面を賑はして居る各種の刑法上の問題の大部分の如き、其の背景に上述の如き經濟事情、從つて社會事情を背負つて發生して居る問題であることは、一般の直ちに首肯するに吝かならぬ所であらう。と同時に此の種の社會問題の頻繁なる發生から考へても、如何に今日の不景氣の影響が社會の各方面に深刻となつてゐるかゞ了解される。

二

我が國今日の不景氣の實相を知り、之れが對策を考へやうとすれば、先づ第一に我が國の資本主義經濟社會の機構を大觀する必要がある。我が國の資本主義は鐵に惠まれず、棉に遠ざかり、石炭亦其の前途の餘脈渺なく、石油に殆んど惠まれずに居た結果根底のある經濟機構は成り立たなかつた。が其れでも國內的發展は、極めて迅速に向して亦極めて餘地を止めざる點にまで一巡して終ひ、更らに第二段の陣立てとして、國內的發展

より國際的發展（それも主として帝國主義に立脚して）を試みる可く努力したが、此の點に於いては先進の歐米資本主義、並びにその後ろ立てとなつて居る帝國主義に有形無形上の制裁を蒙り、更もすればそれに驅逐されて行き、殊に今日の狀態の儘では、之れ以上發展を試み得られない現狀にあると見る事が出來る。斯く見ることに依つて今日我が國を襲ふて居る不景氣の意味が始めてハツキリ大觀されるのである。

三

第二には我が國の資本主義は先年の財界好況當時、好景氣は永遠に續いて亦終りなきものかの如き、極めて無計畫的生産に狂奔して居た。此の無計畫的生産の直後に來たものは大不景氣であることをも一向頓着して居らず、表面の景氣に乘じて出來る丈けの發展策を講じた。進んでは供給を旺ならしめることに依つて、需要を喚起出來るものであるかの如き手段を執つた。斯うして正常需要以外には消化し切れない商品の無計畫的生産を、假需要を誘發することに依つて表面的市場消化の行はれる丈けでも結構であるかの如く考へ、之れを盛んに實行せしめた。斯くの如き異常なる人爲的手段に依つて、我が資本主義經濟社會は、歐洲戰中戰後の數年間に、異期上の好景氣を實現し、それに心醉して居た。然し乍ら斯くの如き異常なる經濟關係が何時までも其の儘好條件の下に繼續されるものではなかつた。終に之れが破綻の日は來た。大正九年三月に於ける財界の恐慌は即ちその破綻の第一步であつた。根底の淺い我が資本主義經濟が大正十二年九月の地震を動機として、破綻の第二步に進むだ。今日は正に第三期の破綻期に當面し、此處に無計畫的生産を主とせる資本主義經濟もホントウに整理されねばならない時に直面して居るものと見ることが出來る

四

斯くの如くみ來ると工業資源に乏しい我が國の商工資本主義が歐洲戰爭當時、異常需要の激增に調子付いて、空中樓閣的發展を目論見た其の計畫の第一步に既に今日の不景氣の禍因は孕まれて居た。戰後の好景氣時代に當面しては、資本主義はこれを永久に維持出來るものと自惚れて居た、亦これを永久的に維持する手段として既述の如き姑息なる人爲手段を執つて需要の正常ならざる開發を試みた。然し乍ら斯くの如き亂暴な根底のない商品生産が、何時迄も繼續を期し得る譯はなかつた。戰後に於ける歐洲方面の産業秩序が恢復されるのを限度として、先づ第一に我が國の資本主義的生産商品は國際市場から驅

達さなかつた[illegible]需要に對して早くも飽和點に達して居つた狀態に於いてお我が國の資本主義的産業に、イヤでも最後のドン詰りに直面せざるを得なかつた。斯くて發生したものが今度の深刻なる不景氣であるのだ。

五

斯う云ふ風に見て來ると、現今我が國を襲ふて居る不景氣と云ふ經濟現象は、決して一時的現象と見ることは出來ない。殆んど慢性的症狀を持つて居る不景氣である。決して一部の人が言ふやうに一昨年起つた地震を動機として偶發した急性的不景氣ではない。我が國の特有經濟關係の上に立つ資本主義經濟の續く限りに於いて斷續的に起こる慢性不景氣であると見ることが最も此の狀態を正當に解釋出來る。

由來資本主義經濟社會に於ける不景氣と云ふ現象は、其の經濟社會である限りに於いて、好景氣（即ち需要超過して供給不足を告げて居る場合と、既に需要供給が飽和點に達する頃までの狀態及びそれ以後資本の魔力に依つて供給に依り需要を喚起する期間並に假需要の繼續する期間を指す）の半面に當然起こらねばならない必然性を帶びた經濟現象である。資本主義的生産の[illegible]として[illegible]、[illegible]りに於いて、[illegible]る。從つて政治が此の經濟制度を認める限りに於いて、[illegible]制度に超然性の不景氣と云ふ表面に現はれた現象のみを捉へて何う斯う云ふのは愚の骨頂である。況んや此の社會制度を熟々考へるに、社會の締め括りをして居る政治が實際は經濟に左右されて居る今日のやうな社會機構となつて居る場合に、此の不景氣と云ふ經濟現象を政治的方面からのみ、更らに進むで謂へば國家の法制的政策の上からのみ挽回しやうとして居る者があるが、左樣な政策は實際に於いて、今の所大なる効果はない。と言ふのは繰り返へして言ふ迄もなく政治を實際に於いて左右して居るものは經濟であつて、其の經濟そのものの本體が上述の如く既に行き詰つて居るからである。

六

資源に乏しく人口に於いて過剩を來して居る我が國に於いて、科學的生産組織を立てず、無計畫的生産に沒頭し、營利を目的の本體として社會的必要を顧慮しない現時の資本主義的生産は、其の發達の初期、並に國際市場に於いて、多少の足場を持つて居る内は、國内の一般民衆に對して、その生活を或る程

度まで保證し、亦多少向上せしむることが出來る。然し乍ら旣述の如く我が國の資本主義經濟は、旣に國内的には新たなる開發の餘地が極めて少なく、國際市場からは殆んど締め落されやうとして居る關係に於いては、最早國民の生活向上は愚かなこと、それを支持する能力さへも失ふに到つた。此處に於いてかその副射作用として今日街頭には百萬の失業者を彷徨せしめ之れに適當就職の途を與ふ可き餘地を失つて居る。他方更らに一般民衆に對しては、生活程度の低下を强要せざるを得なくなつて居る。消費節約、勤儉貯蓄の聲が最近露骨に官僚方面から放たれ、民衆に對して異常なる節約、最低生活以下の節約が强要されるやうになつて來たのも、一つは政治を左右して居る資本主義經濟が、別個の形態の下に、資本主義そのもの丶行き詰りの負擔を一般民衆に轉稼し、斯うすることに依つて大局的に今日の不景氣狀態を一日も早く切り拔けやうとして居る資本主義經濟社會の唯一つの手段と見ることが出來る。然し乍ら一般民衆は之れに依つて大なる生活上の困難を荷重されて居ることを顧みねばならぬ。無計畫的生産に依つて招いた、失敗を何等の責任なき民衆一般が殆んど共同的に負擔せしめられねばならないで居るのであるから……。

七

翻つて我が現下の資本主義經濟の力では、最早一般國民の生活を合理的に支持し得らない狀態に陷つて居る。此の點は單に商工資本主義がさうである許りではない。土地資本主義の立場から考へても、狹少なる土地が今日の如き狀態に配分され、多數の實際耕作農階級の手には、何等その土地の上に權利を認めて居らない農經營干係の下に於いては、國民の生活維持に必要なる穀物生産の支持力が缺けて居る。近來米穀が約平均五百六十萬石、麥類が二百五十萬石以上其の他の食料品を併せて一億七八千萬圓の輸入が行はれて居るのは、即ちその適例である。更らに他方商工資本主義の發展に原則として必要視せられる鐵、石炭、石油、棉花、羊毛の如き原料品に就いて調べて見ても、鐵の如きは一昨年一億九千萬圓、棉花六億圓以上、羊毛八千萬圓の輸入に及び其の他を合すると一昨十二年度に於ける總輸入超過額が五億三千萬圓、昨十三年度の如き六億六千萬圓、本年度は旣に上半期に於いて五億圓以上の大入超を來して居る。

斯くの如く對外貿易干係から我が國の資本主義的發展の推則を下しても連年その行き詰り狀態を露はに現顯して居る。此處

に於ける資本主義[illegible]以上の大なる矛盾[illegible]而もそれに附隨する不景氣の時代が益々釀成されつゝあるのだ。

八

斯く觀察し來ると如何にも我が國の資本主義經濟は、八方行き詰りの狀態にあることが解かる。而も此の八方行き詰りの狀態を在來の傳統勢力では何うしても打開することが出來ないと云ふのが我が國現下の事實である。政治が經濟制度、社會制度の機構を大きく抑さへて居る限りに於いて、之れを展開すべき責任は一應今日の政治家の手にあると云ふことが出來る。然し乍ら我が國の今日の政治家に果して之れが展開策を講じられるものがあるか何うか。と言ふことは是れ迄彼等の遣り來つた仕事と能力から推して判明する。彼等は大體に於いて今日の資本家の走狗であるに過ぎない。資本主義經濟の支へ捧となつてそれの經濟的發展の助成をなして居るに過ぎない。斯くの如き階級に此の行き詰りの打開策を托する譯には到底行かない。それかと言つて政治を實際に於いて左右して居るものは經濟であるから、之れが解決を今日の資本家に求めやうとしても、既述の如く今の所彼等にもその能力がないから今日の如き行き詰りを來したのである。況んや營利本能の充足に目が眩み、無計畫的生産であるから、[illegible]目的計畫に手段の無い方法で[illegible]其の何れにも手を出さうとして居る今日の資本家に、之れが行き詰りの打開策を持ち合はせて居ないのは言を用しない。此處に資本主義國家としての日本に不景氣に當面して一般の立場から重大なる問題がある所以だ。

九

果して然らば現下の資本主義經濟の半面の存在たる不景氣を如何にせば轉回することが出來るか、之れから簡單に私共の考へて居る所を述べて見度い。一體不景氣を根本的に轉回しやうとするには、不景氣發生の根本原因たる資本主義經濟の改革を斷行するより外に其の適策は見出されない。資本主義經濟の缺點たる無計畫的生産を排して科學的生産たらしめ、營利生産に代ゆるに社會的必要生産に、その生産の樣式も目的も改められなければならない。（之れを行はずして如何に妙案適策を考へ出しても、それは畢竟するに資本主義經濟の他の半面たる不景氣を斷續的に維持しやうとする愚策に陷るより外はない。）必要生産と申しても一定社會の其の當時丈けの必要量を意味するのではない。異常の場合に備へる爲の貯藏量も加へなければなら

ぬ。増加して來る人口の給養額も加へねばならぬ。貯藏保存に要する經費に相當するものをも加へねばならぬ。

斯くの如くして生産方針が決定したならば、之れが經營に任ずるものは、個人的營利目的丈けを貫徹するに汲々たる人々に託さず、社會の公益を主眼とする共同組合の手に渡す可きである。現時の法制下に於いて合法的に之れを行はふとすれば産業組合法に則れる形態を取つて宜しい。之れが生産物の交換配給の機能は、之れ亦營利を目的とせざる國家若くは公共團體が之れに當る可きである。此の點にまで不景氣の對策を討究しない對策は畢竟は、其の場凌ぎの彌縫策たるを免れない。

十

更らに亦此の場合の所有權對使用權の場合を如何にすべきかと言ふに、今日迄の如く所有權のみを重く見過ぎることは大いに考へ物である。尠くとも物を所有することを丈けに依つて、大なる不勞所得を發生せしめ、如何に日夕勞働を惜しまぬ者と雖も、所有權を持たない爲に、永久に悲慘なる生活を送り、その使用權さへもハッキリ確認されて居らないやうな規制に甘ぜしむ可きではない。所有權を持たない者と雖も使用權即ち勞働資格を以て所有權と同等の分け前に有り付かせる制度を新たに守り立つてやらねばならぬ。

更らに進むでは現下の資本主義營利經濟社會に於いては營利事業として成り立たない産業であつても、社會的には大なる必要性を帶びた産業がある。例へば現在の經濟制度下に於いては、農業の大部分は營利生産の目的に添ひ難い事業であるが、斯くの如き産業は國家社會の立場から乃至國民生活の上から最も必要とする産業であるから、之れを最も合理的に守り立つて行く。例へば農業電化を行ふて窒素肥料の自給策を取るが如き、或は農業の工業化を計つて工農連結産業とするが如きその一方法である。

十一

翻つて當面の問題として資本主義經濟制度の下の不景氣の對策を考へる場合には、出來る丈けよい品物を出來る丈け廉く生産して國内に供給する。其の爲には産業資金の低利配給と、有能勞働力並により有能機械を選擇すること、海外市場に對しても帝國主義的權力の發動を見ない限り、略ぼ之れと同一の方法に訴へて商品の通路を開拓するより外はあるまい。然し乍ら帝國主義的商品販賣の方法に訴へるならば必ずしも良品廉賣の必要はない。自國勢力範圍内に關税制限を施すことに依つて市場

の獨占を行ひ、以つて自國内の商品市場を維持して居るからである。然し乍ら我が國に於いては斯くの如き帝國政策に訴ふ可き餘地がない。いやでも外國の市場獨占政策下に纔かなる商品の通路を良品廉賣主義で得なければならないで居るが、既に我が國に於いては良品廉賣主義實行の可能性を失つて居る。今迄唯一の賴りであつた勞力が、近來非常に暴騰して居ると共に、既述の如く原料資源を持たず、大部分資料を國外に仰がねばならないのであるからである。此處に我が國の産業經濟は多大の行き詰りを來して居るのである。從つて斯様な制度下に起つた不景氣と云ふ副射作用を轉回する方法には多大の困難を伴ふ所以である。否な殆んど此の制度下に於いてはその轉回策は見出されない狀態にある。（八月十五日石川縣片山津温泉森本旅館の二階に四圍よりの旅疲れに眠むい目を擦り乍ら、柴山潟に見惚れて）

一時的景氣挽回策より永久的好景氣持續策へ

安部磯雄

不景氣といふことは屢々云はれるが、今度の不景氣は恐らく其最も甚しいものであると思はれる。何時でも不景氣の際には多少郵便貯金に其影響が現れるが、此度は餘程の打撃があつたやうである。又私共が旅行をしても平常は混雜して居る汽車が非常に空いて居るやうなことがあるのは近頃見受ける現象である。之等は固より一部分の觀察に過ぎないが、今や不景氣は國民全體の沁々と感じて居る處であるに相違ない。誰しも不景氣の一日も早く去つて、景氣恢復の時期の一日も速かに到來することを希望するものであるが、私共は只漠然とそれを翹望するに止まらず、如何にして景氣を挽回し得るかに就いての方策を眞面目に考究することが必要である。無論斯かる大問題に對しては一の方策を以て足れりとはしないが、種々ある挽回策の

中でも、最も重要なるものは産業全般に對する振興策であつて、之れを除いて他に景氣恢復の途はない。農業は固より、商工業が盛んになることが即ち景氣恢復なのであるが、元來産業の勃興といふことは非常に具體的な問題であつて、徒に果報は寢て待つ主義に依るべきものではない。それに關して直ちに現在我々の頭に浮ぶものは、物價の引下げといふことであつて、要するに産業の振興、景氣恢復の第一歩は先づ其處から初まるのである。斯く考へる時に我國は永い間物價騰貴の爲めに苦しんで來たことを深く思はずには居られないが、結局それが禍して今日の不景氣を來して居るのである。戰爭の好景氣時代には日本品は續々外國に輸出せられたが、一度反動時代來るや今日に至るまで輸入超過の状態が繼續して居る。最近一寸輸出超過の形勢を示したが、それは未だ云ふ程のこともないのであつて、輸入超過の状態は當分引き續くと見るべきである。輸入超過は何事を語るかと云ふに、それは畢竟高價なる日本品が廉價なる外國品との競爭に堪えないで外國品が日本に流れ込んで來るのであるが、若し我國の物價が下落すれば形勢は代つて日本の商品が反對に續々外國に輸出されるに至ることは當然である。斯くの如く外國貿易の上から見れば我國の物價騰貴は現在非常なる不利益であり、それが又今日の不景氣の大たる原因となつて居るのである。併しそれは單に外國貿易に關する問題のみではなく、物價騰貴の趨勢は我國の内地に於ける生活の種々なる方面に惡影響を與へて居るのであるが、其中でも國民の大多數がその爲めに生活難を感ずるやうになつて居ることは大問題でなければならない。故に今日の窮境を脱して景氣の挽回を遂するに當つては、先づ物價の引下げに對して總ての人が注意を向けなければならないが、物價の引下げに就いては其方法に自ら二つある。其一は現在直ちにそれが効果のあるやうに物價を引下げる方法であり、他の一は根本的に、寧ろ永久的に物價を引下げる方法である。

第一は外國との貿易關係に就いてゞある。我國は從來輸入超過の爲めに貿易關係上不利な地位に立つて居る。輸入超過の結果は我國の正貨が當然外國に向つて流出する。然るに一方に於いて不景氣以來政府は金の輸出を禁止して居るのである。無論歐洲大戰に際しては貿易關係の好況に依る我國への金の多く流入した事は事實である。從つて茲に通貨と物價との關係を見れば、經濟の原則上明瞭な事實は、通貨が多ければ物價が騰貴し、反對に前者が少ければ後者が下落するのであるが、然らば現在の如く輸入超過の際に金貨をどし〳〵外國に輸出することになれば、我國の物價は自ら下落せざるを得ぬ。金貨の流出、

即ち物價の騰貴は轉じて下落の結果を招來するとすれば、茲に貿易關係に於いて輸入超過の趨勢は反對に輸出超過の形勢に轉ずることゝなり、斯くて金は再び日本に還つて來ることになる。故に經濟上の原則から云へば金の國の內外に對する流出、流入の關係は自働的に行つて居る譯である。然るに今金の輸出を禁止することは金の自働的作用を人爲的に防げるものであつて、此勢が長く續けば何時迄も物價の下落を望むことは出來ない。之れを譬へれば我々の腹中に食物が停滯して身體の具合の惡い時には思ひ切つて下劑をかけて下痢をして了つた方がさつぱりするやうに、一時窮境に陷入ることはあつても、思ひ切つて金を外國に出すことに依つて財界に下劑をかければ遂に不景氣は恢復の曙光を見出す希望がある。然らば日本の當局者は何故に此方法に依つて金の輸出解禁を斷行しないのであるか。然しそれには相當の理由もあるのであつて、下痢をかける位の簡單なことで濟めば好いが、藥が利き過ぎると一命に關する恐れのある如く、金を自由に外國に出すことになつた結果一時實業家で破產する者が續出する恐れのあることを顧慮した爲めに外ならぬ。實業家、殊に貿易業者は安く仕入れた品物を物價騰貴の際に賣つて莫大の利益を得るのであるが、反對に物價の下落に依つて高い仕入物を持つて居る者は大なる損害を受けなければならぬ。故に今日の經濟界の爲めから云へば思ひ切つて下劑をかけることが必要であるが、そのために一時に非常に苦痛を來し、澤山の負債や死者を出すことの大なる犧牲に堪へられぬ爲めに政府當局者は斷然たる態度に出ることが出來ない。現在においては物價引下げ策としての金の輸出解禁問題に關しては贊否兩論の立場があるが、併し之れも時の問題であつて、何うしてもそれを實行しなければならぬ時期が到來すれば、政府も此政策に依るより外に途はないが、今は只それが容易に行れ難い事情が存するといふに過ぎない。

茲に於いて更に第二の手段として、外國貿易の關係を離れて物價の引下げを計るに當つて、如何なる方法に依るべきかを考へねばならぬ。第二の方法は比較的に容易であるが、併しそれも前の應急策の場合と同じく、其實行には多くの困難な點が存する。物價引下策の窮局的意味は生產費の縮少といふことであつて、生產費の減少が即ち物價の下落を生ずるのである。それは今日の商工業にとつて重大なる問題であるが、私は今生產費の減少に關して少しく研究して見たいと思ふ。生產費を構成する要素は、其主なるものを擧げれば、地代、動力、運賃、賃銀、原料及び利子等であつて、其他に事務費や、業家の報酬の如きものも其中に入るが、それらに就いては茲では省略して、

生産費中の重要なるものゝみに就いて、現在それの高いことから推して考へて見れば、我國の生産業は目下非常に困難なる地位に在ることを知るのである。同時に又國民が餘程の努力を爲すに非れば、生産費の引下げに成功することは難かしいが、併しそれは決して不可能ではなく、努力の如何に依つて或程度の引下げは可能である。玆では先づ生産費中の地代に就いて考へて見たい。工業をやるにしても、商業を始めるにしても全然土地を無視することは出來ぬ。殊に工業に於ては、工場を建てるために土地が大いに必要である。然るに我國の如く人口に比較して土地の狭い處では、工業の行はれる都會地、若くは都會の附近の土地は地價が高いので、外國に比べると日本の企業家は土地の買入れや借受けのために常に苦しんで居る。今日では國民全體が土地問題のために惱んで居る時であるが、殊にそれは土地の狭隘に依る都會地の膨脹のために附近の土地の大なる騰貴を來し、然もそれが單に合理的なる騰貴ではなくして、土地の賣買が必要に基かざる投機的事情に依つて行はれるために、いやが上にもそれが騰貴する爲めに、現在都會に於て仕事をすることは土地に對して莫大なる資本を注入しなければならぬ困難な事情が存する。之れは獨り實業家ばかりではなく、東京市の場合に於てもさうであつて、例へば東京市が總ゆる方面に市を改造することを企てると、先づ差當り土地の買收に苦しまなければならない。つまり東京市が自分で自分の土地が自由にならないのであつて、市民のために道路を擴張し、公園を設置したりするのに、市の地價が高いために市の仕事が妨害されるのである。之れは畢竟土地といふものが私有財産となつて居る爲めで、維新の際に土地私有制度を其儘にして置いたゝめに爾來久しい間それが我國の禍となつて居るのであるが、之れがアメリカのやうな國に於てならば土地が私有制度になつて居ても大して弊害がないが、我國に於てはその事が忽ち商工業に影響し、更にそれが生産費を増加せしめるに與つて力がある。今後我國の生産費を引下げるためには、國家自身が土地問題に注意するやうにならなければならないが、それは結局土地國有といふ點に迄行くことでなければならぬ。町が工業都市になるに從つて地價が騰貴し、地代が生産費の重要なる部分を構成することが、延いて物價引下げの困難な事情を來すことに鑑み、土地國有に依つて低廉なる土地を工業家に貸與するやうにする方法を國家自身考慮することが必要である。第二に動力の問題である。動力と云へば石炭とか、水力電氣を我々は考へる。併し我國に於ては石炭の産出少く、五六十年乃至百年の中には石炭の缺乏を見ることは明かであるが、假令石炭が其時分まであるに

しても石炭の方は高くなり、又之等の石炭を買ふことにし得るとしても運賃を要するために安くこれを買入れることが不可能であるから、結局動力としての石炭を期待することは冒険に屬する。然るに我國は水力に於いては世界有數の國であつて、石炭の缺乏を補ふて餘りある。此天然自然の動力たる水力を國家が經營することになれば、動力を安く供給することが出來て產業の助けとなるが、不幸にして我國においてはそれが個人經營となつて居るために其供給が安く行つて居ない。其理由は種々あるが、大分前に私が調べた處に依ると、無論今日とは比較にはならないが、一キロワットの水力電氣を起すのに日本では四百圓の資本がかゝつて居る。然るに伊太利に於てはそれに要する費用一キロワットに就いて百四十圓位にしか當らぬ。今日我國に於いては水力一キロワットに就いて千圓近くもかゝるといふが、伊太利と比較して經費に斯く迄大差のあるは不思議である。之れは我國に於ては水力電氣を正直に供給すると、石炭や他の動力に比較して餘り安過ぎるので、儲けを考へる企業家は創設費を多く見積ることに依つて、現在の水力電氣を高く供給して居るのであつて、即ち創設費の名目の中に儲けが食入つて居るのである。少くともさういふ誤魔化しがあると疑はれる點がある。有利なる事業を個人の獨專事業に任せると何處の國でもさういふ弊害が生ずる。故に國家にこれを一手に經營することになれば、安い資本金でやることが出來るから、其の料金も廉く行く譯である。殊に公共の仕事、電燈の如き公共的性質に屬するものは個人經營に委ねるべき性質のものではないが、今日水力電氣を個人の手に任せたことはかへすがへすも惜しいことである。それは明かに我國の政府の誤りであつたが、然るに近頃になつて政府部内においても其國有論を說く者が出て來た。併し今日に至つては水力電氣を國有にすることは容易の業ではない。私は明治四十四年に雜誌「太陽」に水力電氣國有論を書いたことがあるが、其頃の我國の水力電氣事業は猶未だ幼稚であつて、其資本金は純粹の水力電氣會社だけに就いて云へば合計一千六百萬圓、水力、火力を併用して居る會社も入れゝば、一億六千六百萬圓位であつたが、其時分ならば國有といふこともさまで困難ではなかつた。然るに現在我國の水力電氣資本金合計二十五億圓以上に達し、而も毎年新事業の起る結果それは三億圓の割合で增加して居る。今二十五億圓以上の水力をこれの三割乃至四割增位で買收することは政府にとつて甚だ困難であるが、如何に高くともこれを買收して國有とすることが結局大なる利益であることが明かである以上は、國家は此方針に從つて永い間に遂にはこれを斷行することが必要であるが、先づ其

前提として、水力電氣會社從來のものは當分其まゝにして置いても、今後新規のものには絕對にこれを個人經營を許さぬ方針を政府が執ることにし、將來起るべき水力電氣は之れを中央政府、或は府縣、若くは市町村の事業とすれば、國家は安い動力を國民に供給することを得て生產費の縮少を計ることが出來る。次には金利の問題であるが、產業には巨額の資本を必要とする。株式會社ならば、株主が其資本を供給するが、小さな會社を經營する實業家などは資本を他から借入れねばならぬし、又大なる會社であつても常に資本の融通は他からつけねばならぬ。然るに我國の金利は外國に比較して遙かに高く、米國では普通の金利年四分、英國は五分であるのに、日本は八分である。之れでは生產費を減少することは困難であつて、高い地代、高い動力、高利の金を使はなければならぬ日本の工業家の立場は甚だ不利である。然し我國の金利の高いのは、貸手の少く、借手の多い、需給關係に依る止むを得ざる事情に基くのであつて、此問題を解決するには二つの途がある。第一は、大會社ならば資本を外國から輸入することである。之れは現在でも盛んに行はれて居るが、外國からならば年六步位で資本を借入れることが出來るから大分助かる譯である。外資の輸入は決して恐ろしいことではなく、金を借りるのに內外の區別はない。其支那の場合のやうに、外資の輸入と共に直ぐ外國から人間が入込んで來て、鐵道や鑛山の仕事を始めるといふやうな支那自身の狀態は面白くないが、それも資本丈けが支那に入つて來るならば別に心配はない。私共は生產費を減少する一助として、廣い考を持つて、外國から安い資本を多く輸入することが最も賢明なる策であると思ふ。第二には永久的な方法として國民の勤儉精神を養ひ、一般に貯金を奬勵することに依つて、貯金額の大なる增加を來せば、我國は其貸附けだけでも容易でなくなるから、金利は自から低下するに至るであらう。更に運賃に就いて云へば、其中には汽車、汽船、貨物自動車等のそれを含むが、日本は鐵道が國有であるから、今回の如き不景氣の際には生產費引下げの目的で、貨物運賃を出來る丈け、一時的でもいいから思ひ切つて引下げを斷行すれば、それが間接に景氣挽回策となる。最後に賃金の問題は生產費の重要なる部分をなすものとして注意を要する。賃金の大戰前後に於ける振り合ひは明白に云はれぬが、現在の如き高い賃金の下に於いては生產費の引下げは困難であると資本家は考へて居るに相違ない。全體の物價が下がれば賃金もそれに從つて下がるのは當然であるが、併し我國に於けるが如き劣等なる賃金をそれ以下の程度に引下げることは更に一層困難な事情がある。現在の賃金を以てして

は[illegible]級に生活を成立たしめることの出來ないのに困つてゐる。然し玆に勞働階級の反省に依つて能率増進を期待することが出來るならば、賃金を引下げずして、それと同じ効果を擧げることが可能である。能率一割増進すれば生産費はそれ丈け低下するのである。これは經濟問題といふよりも寧ろ道徳問題であるが、總ての人間が職務に從事するに當つて、其心がけとやり方如何に依つて能率の増進を計ることは決して不可能ではない。

以上述べた處を綜合して云へば、國家の力で出來ることが三つある。土地と、動力と運賃とがそれである。此三者の點に就いて、國家のやりかた如何に依つて或程度迄生産費を減少することが可能である。又資本の點に於いては、當面の策としては[illegible]つことが必要になつて、[illegible]ることが其[illegible]なければならぬ。資本問題としてのこれを無産階級よりは有産階級に其實行を望むことが至當であつて、有産階級の人々が貯蓄節約して蓄積し得たる金を國家が資本として運用するやうにならなければならぬ。更に賃金の引下げは困難であるが、能率増進は可能である。右の諸點を考察することが景氣挽回策の根本的意義であるが、そこまで行けば景氣は一時的でなく永久的に持續することが出來る。一時の不景氣は堪え得られる。私共は寧ろ好景氣の永續を計る意味に於て其根本的方策を樹立することが必要である。

不景氣常態論

澤田　謙

一

『足らざるを常と思はゞ不足なし』と、東照宮様は仰せられた。封建時代における經濟政策の要道である。そしてまた、殘念ながら、現代日本における經濟政策の指針となりさうだ。

不景氣だといふ。どうもこう不景氣では困つたものだとい

ふ。いかにして景氣を「恢復」すべきやと策する。「足らざるを常」と思はぬ徒である。景氣が常態で、不景氣が變態だと考へるからである。しかし、果して不景氣は「變態」であらうか？實は、不景氣が常態で、景氣がいゝのは、何かの「變態」ではあるまいか？

最近における日本經濟史を回顧して見やう。日本の資本主義經濟が確立したのは、三十年ぐらゐの間のことであるが、その間に、われらは三回の「景氣」を迎へた。第一回は日清戰爭後、明治二十八年の下半期から明治二十九年一杯に亘る、約一年半の好景氣である。第二回は日露戰爭後、明治三十八年の下半期から明治三十九年一杯に亘る、約一年半の好景氣である。第三回は世界大戰中及び後の、大正五年から大正八年に亘る、約四年間の好景氣である。この三回の景氣が、いづれも、日清戰爭、日露戰爭、世界大戰といふ、變態的社會事變の後にあらはれたといふこと、――それは、好景氣は「變態」であるといふことの、一つの事例になりはしまいか？この變態的な、勃發的な「景氣」事期を除けば――尤も、その間に、いはゆる「中間景氣」と稱する。やはり變態的な好景氣はあつたが――わが國は、この三十年間を一貫して、不景氣を押し通して來たのである。

やはり、東照宮樣の仰せらるゝ通り、「足らざるを常」と思はねばならないのではなからうか？

二

どうも不景氣だといふ。まことに、まことに不景氣である。この不景氣は、關東大震災の影響であると考へてゐる人がある。その影響もある。また、大戰後好景氣の反動であると考へてゐる人がある。その反動も勿論ある。しかし、この不景氣は、單なる震災の影響、好景氣の反動であらうか？すなはち一の「變態的」不景氣であらうか？若し然りとすれば、その影響と反動とが遠のくにしたがつて、漸次「常態的」好景氣に輪轉すべき筈である。戰後景氣の變態的反動――「恐慌」――のきたのは、大正九年三月であつた。それから五ケ年半を過ぎてゐる。關東大震災も、滿二ケ年まへのことである。而して不景氣は、なほ深刻を加へつゝある。そこには何か、「本質的」な不景氣の原因があるのではあるまいか？

われらは、漠然と、景氣を「恢復」すると稱してゐる。しかし、その恢復さるべき「景氣」とは、いかなるものであらうか？　まづ、最近三十年間に迎へたところの、三大景氣をしらべて見やう。

三

第一回は、日清戰爭直後の大景氣である。軍債一億八千萬圓の拂込は、明治二十八年の六月に終つた。八月には講和條約の批准が交換され、三億七千萬圓の償金が流入することになつた。この事實が、戰捷に醉へる人心を、ますく昂進せしむるに役立つたことは、いふまでもない。しかも當時の日本銀行は、この人氣に油を投ずるの政策をとつた。すなはち、戰後の急務は產業の發展にあるから、日本銀行はこの目的のために極力援助すべき旨を公表して、貸付日步を二厘方さげて二錢とした。

この日本銀行の政策は、償金の流入と相俟つて、兌換券を膨張せしめ、したがつて金融は引緩み、物價と株價は奔騰し、新企業は冲天の勢で勃興した。二十八年より二十九年末に至る企業計畫十二億八千萬圓に上つたとさへ傳へらるゝほどである。

これが第一回の好景氣である。そしてその反動として、明治三十年の恐慌を來し、つひに再び不景氣時代に入つたことは、いふまでもない。

第二回は日露戰爭後の大景氣である。このときは、償金こそ入らなかつたが、第一回と殆んど同樣の經過で、好景氣に入つた。すなはち、償金の代りに、外債が流入した。明治三十八年の三月に[illegible]外債が成立し、さらにまた、[illegible]立によつて、僅かに[illegible]されたたとへ[illegible]にせよ、償金が流入したのは事實である。景氣は昂進せざるを得ない。しかも明治三十九年には、二億五千萬圓、二億三千萬圓と、二回の外債が成立した。したがつて通貨の膨張になる。金融は引緩む。日本銀行は金利を四厘方下げて、貸付一錢九厘、割引一錢八厘とした。その結果は、いふまでもなく、物價の騰貴、株界の隆盛、企業の勃興である。明治三十八年下半期から四十年上半期に至る二年間に、會社事業の新設計畫資本十二億二千、既設擴張計畫四億七千、合計約十七億圓に上ると稱せらるゝ。

これが第二回の好景氣である。この變態的景氣が、明治四十年一月に入つて、俄然と『恐慌』に化したことに、なんらの不思議はない。

第三回、歐洲大戰の際の好景氣は、前二回のそれに比して、稍々實質的であつた。すなはち、その原因が、償金や借金ではなくて、對外貿易の利金だつたのである。それだけ、好景氣も永かつた。戰時中、それから戰後に亘つて、歐洲の產業の疲弊せるに乘じ、その間に儲け得たる金高を、日本銀行は三十九億圓と見積つた。これを內譯にすれば、戰前十九億だつた借金

が十六億に減じて、つまり三億圓を返却したこと。對外債務の四億六千萬圓が、二十二億圓となつて、つまり十七億四千萬圓を增加したこと。以上の二口の增加が、二十億四千萬圓。つぎに日本銀行の正貨一億三千萬圓が十一億一千萬圓となり、在外正貨二億二千萬圓が、十億六千萬圓に殖え、結局正貨で、十八億二千萬圓を儲けた。この債權と正貨と兩方の儲け高を合計して、約三十九億圓になるのである。

しかしながら、この未曾有の大活躍も、畢竟は、歐洲大戰といふ、變態的な世界經濟に隨伴して起つた變態的現象にすぎなかつた。したがつて、戰爭が終り、この變態的世界經濟が次第に常態に移るにつれ、『好景氣』といふ變態現象も、終局を結ばなければならなかつた。のみならず、それが大正九年三月の悲劇的『恐慌』によつて終つたといふことは、官民一致して、好景氣に醉ひ、放漫なる經濟政策をとつた罪で、以來五ケ年半を經る今日においても、われらは大小の程度において、その餘波を蒙つてゐるのである。

四

いづれにしても景氣常態論者の、いはゆる『恢復』せんとする『景氣』なるものが、かゝる變態的な好景氣でないことは、たしかであらう。それはすべて『戰爭』の結果だ。したがつて、かゝる變態景氣を再現しやうと思へば、戰爭より外はない。ところが、現在のところ、戰爭しさうな國といつては、日米兩國しかない。米國に於ける日米戰爭論は案外に猛烈である。明日にも始まりさうなことを言ふものもある。日本でもかゝる日米戰爭說に同意するものがないとは言へない。しかし正直なところ、日米戰爭が始まるにしても、こゝ半年や一年では、とても開戰とはなりさうもないばかりでなく、景氣を恢復するために戰爭をしやうなどと唱へるものは、おそらく一人もないのであるから、戰爭は景氣恢復策としては、價値がないわけである。したがつて、そのやうな變態的景氣は『恢復』さるべき景氣の模範例ではないといふことになるのである。

それでは他のいかなる『景氣』を、われらは望みつゝあるか？われらは、その他に、好景氣といふものを經驗したことがあるか？ないことはない。いはゆる『中間景氣』と稱するものがこれである。

しからば『中間景氣』とは、いかなるものであつたか？最近三十年の日本經濟史のうちで、これを調べて見やう。

五

中間景氣の出現したのは、明治三十二年の春であつた。これよりさき、日清戰後好景氣の反動に疲れ果てたる經濟界は、しきりに政府の救濟を要求した。これに應じて起つたのが伊藤内閣で、財界救濟策として、(一)政府は財力の許す限り勸業銀行をして貸付を爲さしむること、(二)日本銀行をして償金の一部をもつて公債の買入を爲さしめ、以て資金の融通を計ること、(三)日本銀行の利子は今後これ以上に引上げない方針を取ることにし、勸銀は三十一年中に約百四五十萬圓の工業貸付をなし、政府は約三千萬圓の公債を買收して、資金を市場に放下した。この救濟資金が、内債の海外賣却代金――すなはち外資輸入――であつたことは、いふまでもない。加ふるに、三十二年五月末には、一億圓の四分利外債が成立し、財界は再び外資の滔々たる流入に接したので、經濟界は漸く生色あり、通貨の供給は増加し、金利は激落し、株價は騰貴し、投機熱は旺盛となり、企業熱はたちまちに復興した。これを中間景氣と名づけるのである。

この中間景氣が、要するに『借金』による不自然の旺盛であつたことは、いふまでもない。そしてこの不自然なる景氣が、三十四年下半期の恐慌となり、不景氣をます〳〵深刻ならしめたことも、また自然の成行だつたのである。

第二の中間景氣は、明治四十二年末から現はれた。その發生も、大體において、第一回の中間景氣と同じであつたもので、主として、政府の公債政策に伴ふ外資の輸入によつ、不自然なる景氣を現出したものである。すなはち、明治四十一年には、財界救濟のために一億圓の國庫債券の償還を行ひ、さらに四十二年には、國債償還資金繰入高を六千萬圓に増加するとともに、一千萬圓の公債償還を行つた。かくして、金融の困難を脱し、漸く復活の兆を見たる財界は、明治四十三年五月、四億五千萬法と一千一百萬磅の四分利外債が英佛兩國に成立して、海外にある五分利付九千三百萬圓と、内地にある一億九千餘萬圓とが償還さるゝに及び、すなはち政府の手だけで、約二億の外資が新たに輸入されたのであるから、景氣は好轉せざるをえない。この政府の手による二億の外資輸入と、公債の海外流出、市街債の海外賣出による一億内外の外資流入とによつて、明治四十二年の中間景氣は現出したものである。

これを要するに『中間景氣』とは『外資輸入』を除いて言へば、『借金の空元氣』といふにすぎない。知らず、いはゆる『恢復』されんとする『景氣』とは、かゝる『空元氣』にはあらざるなきか？

以上、はなはだ粗雑ながら、最近の日本經濟史を回顧した結果は、次のごとき結論になる。

第一、好景氣は、これまで、變態的にしか起らなかつた。

第二、現在われらの當面してゐる不景氣は、變態的現象といふよりも、むしろ常態的なものである。

第三、不自然な經濟政策によつていはゆる中間景氣をつくることは可能である。(可能であつた) しかし、それは結局において、不景氣をさらに深刻化にするにすぎない。(すぎなかつた)

この結論に達したるわれらは、つぎに、二つの新たなる問題に逢着する。

第一は、なに故に不景氣は常態なのであらうか、といふ問題。

第二は、この不景氣に對しては、いかなる態度を採ればよいか、といふ問題。

第一問に移るであらう。

七

第一問。なに故に不景氣は常態なのであらうか?

答はすこぶる簡單である。日く『資本主義經濟組織においては、社會の生産力が絶えず増進しつゝあるときには、常態的な好景氣といふものもありうるが、生産力の増進が停止し、或はその増進率がある程度以下に降れば、不景氣が常態になる。それが資本主義經濟組織の特色である』と。

これをも少し詳しく説けば、つぎの如くである。

御承知の通り、資本主義經濟の特色の一つは、資本に金利がつくといふことである。『利子』とは何ぞやといふことは、經濟學上の大問題だが、とにかく資本が利子を生むことは確かな事實だ。その資本は、必ずしも、生産に投ぜらるゝを要せぬ。銀行に預けておけば、眠てゐても利子はつく。したがつて、生産に投ぜられた資本は、少くとも、銀行利子だけは純利がなくては、資本が資本の用をなさぬわけである。これが資本主義經濟の特色の一つである。

したがつて、實際に生産に從事するものは、百から百を生産したのでは、資本主義的に生産したとはいへない。銀行利子を六分とすれば、是非とも百〇六を生産したくてはならぬ。その翌年には、百〇六の資本に對して、百十二・三六を生産し、翌々年には、一一九・一〇を生産したくてはならぬ。かくして、年々複利的に生産が増加しなくては、資本主義經濟は成り立たないのである。

尤も、この利子が、すべて『生産』に投ぜられ、資本化さるるわけではない。そのあるものは、不生産的に消費さるゝ。成

なほ大きな邸宅を拵へ、それでも足らずして、別莊をしつらへて、妾を養ふの類である。これに消費された金は、一見不生産的に消費されたかの觀を呈する。しかし、これは「成金」だけを見た上のことで、實は、その消費されたる資本は、他方において、建築會社の利益となつたり、妾の着ける着物や寶石が、呉服屋や寶石屋の利益となつて、資本化されつゝあるのである。すなはち、資本はつねに輪轉するが、その間に「消費」といふことはない。すべて利子を生み、そして社會經濟の上からは、資本は複利的に増殖するのである。

そこで、資本主義の經濟が、上り坂にあるときには、問題は起らぬ。生産力が金利を超過して増進するときは、經濟社會はいつでも好況である。すくなくとも、好景氣が常態であつて、不景氣は變態的に起るに起ぎない。ところが、かくして資本の増殖は、間斷なく、夜も晝も行はれる。しかも幾何級數的に増殖する。であるから、いつかは、社會の生産力は、この増進の勢に追つかなくなるときが來るにちがひない。そのときには、資本が資本の用をなさなくなつてくる。すなはち、不景氣になるのである。すくなくとも、不景氣が常態となつてくるのである。

現在の日本の經濟は、丁度、この不景氣常態の時期に、到達したのではあるまいか？これが第一問に對する解答である。

第二問。この不景氣に對しては、いかなる態度を採ればよいか？

答。これに對しては、從來二樣の態度が考案されてあつた。第一は積極政策で、第二は消極政策である。

積極政策といふのは、つまり『借金』をして、中間景氣をつくりだすことである。われらは二度これを試みた。すなはち。借金した金を、これまでの資本利子として支拂ひつゝ、殘りの金で、生産を増加して見やうといふ策である。これでも一時はしのげる。しかし恐ろしいのはあとである。資本は急激に増加し、支拂はねばならぬ利子は、さらに重加する生産に投ぜられた金が、首尾よく、この利子を支拂ひうれば、それで問題は解決するけれども、大ていの場合さううまくはゆかない。現にわれらはそれに二度とも失敗した。はなはだ危險な策である。（現在政友會あたりで唱ふる『積極政策』も、結局はこれに歸着するまではあるいか？）

つぎに消極政策とは、いはゆる『勤儉論』である。憲政會は、『勤儉』の二字をかざして、國民を警戒しつゝある。しかし、不景氣に對しては、『勤』といふことは、矛盾してはゐまいか？

いま失業者は、都市に滿ち村落にあふれてゐる。それが『勤』になつたら、三人でしてゐた仕事は二人ですむ。すなはちそれだけ失業者を增すわけである。問題は、生産を發展せしむることにある。しかるに、資本主義の經濟においては、生産の發展とは、資本の活動範圍の擴大といふことで、勞働力の增進といふことではない。資本を停止せしめて、勞働を增進するのは、失業者を增加するにすぎない。

『儉』にしても同樣である。『儉』とは、生活程度の低下といふことである。生活程度の低下は、したがつて需要を減退せしめ、そして資本活動範圍を、それだけ縮小することにしか當らない。これが、不景氣をますく增進せしむるは、勿論の儀である。尤も、『儉』によつて浮み出した金は資本化して生産に投ぜられ、そして生産を增加するの望みはある。しかし、それも、生産が上り坂にあるときの話しで、一旦下り坂となつた今日においては、折角資本化されたる剩餘金も、生産（資本主義的生産）對照に窮するであらう。

九

こういふわけで、一度び資本主義經濟が行き詰ると、不景氣が常態となつて、そこには打開の路がなくなるのである。もとより、一時を糊塗することは、できないこともない。一時を糊塗すれば、それだけあとの苦しみを增すだけである。そのほかに、景氣を恢復する策はないのである。

唯一の策は、英斷的に、資本の切下げをやることである。行き詰つた會社がするやうに、減資を社會經濟的に斷行するのである。社會の生産力に適當する程度にまで、社會的減資を斷行するのである。そして、後顧の愁のないやうに、『利子』を否定するのである。さうすれば、社會の生産力は增加せずとも、景氣は平靜でありうる。もし生産力が增せば、それだけ生産者の生活を向上さすことが、できるわけである。

しかし、どうして資本の『利子』を否定することができやう。資本が利子を生まなくなつたときは、すなはち資本が資本でなくなつたときで、資本主義經濟が崩壞したときである。資本主義經濟を維持するかぎり、それは不可能だ。

もしそれが不可能とすれば、わたくしには、それ以外に、この常態的不景氣を打開すべき名案はない。止むをえず、東照宮の故智にならつて、『不景氣を常と思へば不景氣なし』と、濟してをるのだ。それよりほかに途はない。それでも、この不景氣が益々深刻化して、二進も三進もいかなくなるまでは、まづ胡麻化してゆくことはできやう。

經濟社會の行詰りと其打開

法學博士 堀江歸一

不景氣必ずしも經濟の行詰りでない

我國の經濟社會が昨今行詰りの狀態に陷つたと云ふことは、從來私共の能く耳にする所の言葉であつて、近頃に至つて、此言葉の到る所の方面に於て、繰返されるのを聞く一方に、斯る行詰りの狀態に陷つたと云ふ事實から出發して我國經濟社會の現狀並に將來を悲觀する絕望的言論すら行はれるやに認められる。經濟社會の行詰りと云ふことは、經濟上の狀態窮迫し、加ふるに將來に於て發展の望みの乏しきを指すものと解される。我國經濟上の狀況に對して、斯る觀察を下すことが果して妥當であるかどうか、一個の問題とするに値する。

大正九年の恐慌以來、我國の經濟社會は不景氣の襲ふ所と爲り、全體に活氣の見る可きものなく、諸種の產業を擧げて、不振萎靡の狀論に沈淪せしめて居り、殊に近頃に至つて、不景氣の慘害甚だしきを加へたやうに觀察される。然しながら之を以つて直に經濟社會の行詰りと解するのは、聊か燥急の嫌なきを得ない。蓋し景氣不景氣の變は如何なる國の經濟社會にも行はれる所であつて、不景氣の後に好景氣あり、好景氣を踵いて、不景氣のあるが如く、互に循環する約束のものであるから、單に經濟社會の不景氣であると云ふ故のみを以つて、現狀を悲觀するのは、當らない。不景氣時代には、諸種の事業の盡く沈衰する結果、是等の事業に投下された資本から生み出される收益は少なく、之に勤勞を致す者に與へられる報酬も亦低く、生產物は生產者問屋商人の手元に於て、滯貨と爲り、失業者は道途に充ち、勤勞若しくは勞働に依賴して、衣食しようとする者の生活に大なる打擊を與へる。斯くて社會を擧げて、滿目蕭條たるの趣きを生ぜしめる。而して斯る、狀態が續けば續くだけ、國力の發達を害することは勿論であるが、此事たる、必ずしも久しきに亙つて、永續するもの、永續す可きものとは考へられない。不景氣時代に於ける國家の政策、國民の態度共に宜しきを得たならば、不景氣の沈衰狀態を脫して、轉て好景氣の振興

狀態を持續することを難しとしないからである。唯我國に於て、大正九年三月に始まつた不景氣が大正十四年八月の今日に至る五年五個月を通じて、終始渝る所なく繼續するのは、聊か異例に屬し、世人をして徒に不景氣の繼續することの永きに過ぐるを嘆ぜしめる次第であるが、此事たる、要するに我國に於て官民共に不景氣に處する對策を誤まつた結果である。即ち不景氣に陷りながら、政府は其勢の徹底することを恐れて、財政上に積極政策を施し、過大の經費を支辨して、物資と勤勞とを需要し、民間に多額の資金を撒布し、斯くて不景氣の勢を中途に遮斷して憚らざる一方に、民間の當業者亦政府の爲す所を見て、事業の整理、費用の緊縮に熱心を缺き、寧ろ放漫時代に行はれた經營法を一日一刻も永く持續せしめようとし、又斯る經營法の續く間、個人の日常生活に於ても、好景氣時代に於けると略ぼ異ならざる程度並に種類の奢侈や濫費を事として、踰らなかつた。斯くて不景氣は經濟社會の一部に行はれたが、廣く之を世間の全般に擴布せしめることが出來ず、其徹底する爲めの頗る不充分である代りに、五年以上の歳月を經て、尙ほ景氣の恢復の容易なるを得ないのである。加藤内閣の成立以來、不充分ながらも消極政策が聲明され、經費は甚しく緊縮されないまでも、其膨脹の勢を絶ち、公債の市場に於ける公募は廢止され、特殊銀行中、行務の紊亂、甚だしきものに對しては、整理を强要し、減資と無配當とを以つて之に臨むことゝ爲つた一方に、一般銀行に對しても、配當の減率を命じ、所謂蛸配當を行ふの弊なからしめる等、事の細目に就ての可否は兎に角、消極政策の或るものを行ひ、一方に民間當業者亦此内閣の下に於ては、到底中間景氣の如きものゝ起ることを期待するを得ない、隨つて斯る期待の下に、事業の整理を不即不離の間に置いたならば、將來如何なる災禍を蒙るかも知れない、寧ろ今日に於て、整理を果すに如かずと考へ、從來に比較すれば、餘程眞實に整理に力を致した結果、今や不景氣の勢は漸く世間に普及し、所謂不景氣ドン底說なるものを生ずるに至つた。而して不景氣のドン底に達した、又は之に近づいたと稱される今日、一方には物價が漸く低落し、金融緩和し、金利亦低落しつゝある諸種の事由に徴して、之を考へると、不景氣なるものも、敢て何時までも無限に續くものでなく、或る時期の後に、景氣恢復の機運の打開されることは、明瞭の事實である。

故に我國に於て不景氣の狀態の意外に永續したことは、經濟社會の爲めに考へて、不利には相違ないが、必ずしも之を以つて我國經濟社會の行詰りとして、悲觀するのは、當れりとしない。或る時期の後に相當の景氣恢復を告げることはあり得るか

ら[illegible]。此[illegible]とする所は[illegible]なる[illegible]如何なる基礎の上に行はれ、如何なる程度まで發展し、又如何なる[illegible]如何性質を有するかの諸點に於て、我國經濟社會の[illegible]れるか、其れとも其勢を打開して、將來に大なる進展を遂げるを得るかと云ふことが定まれるのであつて、上記諸點に對する觀察こそ、我國經濟社會の將來に於ける運命をトするに就て、重大なる關係を有する。

不景氣を一掃し、徐々に經濟社會に不安を惹起す現象を除却して、其面目を一新するには、官民共に消極政策の下に、姑く隱忍自重して、冗費の節約、事業の整理に勉めることを要するのであつて、此事に堪へたならば、經濟上の景氣は或る時に至つて、必ず恢復するであらう。然しながら景氣は恢復するとしても、我國の經濟社會が堅實の基礎の下に、其經濟力を中外に向つて、發展せしめるを得るかと云へば、其處に大なる疑を存するのであつて、其疑が凝つて、經濟的行詰り説の生ずる根源と爲るのである。

我國經濟行詰りの一面

如何なる點から、我國現時の經濟を以つて、行詰りの狀態に居るとするか。世人は我國の輸入超過に就て、大なる疑惧の念を懷くものゝ如くである。輸入超過其ものに對しては、必ずしも之を以つて一國に取つて[illegible]とするを得ないと共に、[illegible]に一國に輸入超過の大なるもの[illegible]にして輸入超過を決濟するに[illegible]つて居り、而して其收入が何れも依頼するに足る確實なるものであるならば、輸入超過は經濟上に於て、何等不健全とす可きに非ざるのみならず、却つて外國から輕易なる條件の下に、物資の供給を得る道とするを得るのであるが、我國の如く貿易外の收入の金額の小なる其上に、其性質確乎たらざるものであるとすれば、輸入超過に對して、何を以つて其決濟に當る可きやと云ふことが一の難問題と爲る。現に之を我國の實際問題として考へると、輸入超過の數量は近年五、六億圓の多きに達するに對して、貿易外の收入は昨今の狀態に於ては、一億圓内外に止まり、兩者の差は辛うじて我國の内外に有する正貨に依つて、決濟されるのである。而して其正貨其ものは決して無盡藏であるとは云へず、之を入超額の決濟に充てれば、直に其金額に相當する減少を在外正貨の上に來さゞるを得ない。元來一國が爲替調節、貨幣價値維持の必要から、外國に若干の正貨を所有することは、實際にあり得るとしても、此以上に一國財政の信用を維持する爲めに、特に多額の正貨を所藏するが如き、一國財政

の信用と正貨の所在高との間に、或る不可分の關係を生ぜしめるものであつて、國家として適當の策とするを得ない。然も我國は餘程以前から此政策を繼承し、殆ど一の傳統を以つて目される位に爲つて居るのであるから、財政の信用に於ける根源は自ら正貨所藏額の増減に依つて、定められるが如き事情を馴致し、正貨に減少を來せば、如何なる犠牲を拂つても、之を補充することを必要とする勢と爲つて居る。斯くて正貨を補充するには、高利の負擔を敢てして、政府自ら外債を發行するなり、民間會社の外國に發行した債券の收入を借入れるなりしなければならず、斯る發行は其行はれる度毎に、我國の對外的信用を傷ける、近年國債の相次いで下落するが如き、其基く所は對外受取勘定の少なくして、支拂勘定の多き一事であつて、輸入超過に對する決済方法の確定せざることは、我國經濟の行詰りを語る一端としなければならない。

貿易均衡の方法ありや

然らば我國經濟の行詰を打開するには、貿易の均衡を維持する、少なくとも輸入超過額をして貿易外の收入額以內に居らしめることを必要とし、其れには輸入を抑制するか、輸出を増進するか、二者の一を果さなければならない。是れが從來我國に於て輸入抑制又は輸入減少を目的として、種々の政策を施す可しと云ふ主張の行はれて已まない所以であるが、私の見る所を以つてすれば、此事たる、其實行に於て至難であり、不可能であると云はざるを得ないのである。蓋し我國輸入貿易の數量は近年著しく増加したと云ふもの丶、其種類には自ら限りがある。品目に依つて分類すれば、我國輸入貿易の大半は原料品、原料用製品並に食料品であつて、殊に前者の多大なるを見る。我國に於て綿絲紡績業の盛なるも、毛織物業の勃興しつ丶あるのも、製鐵業が其規模を維持しつ丶あるのも、要するに外國から棉花、羊毛、銑鐵の供給される結果である。然らば今貿易調節に藉口して、是等の輸入に制限を加へたならば、爲めに我國の工業に對して原料品の供給を脅かし、又我國民に對して、生活資料を乏からしめるに至るであらう。如何に輸入の制限に熱心なる歴代の政府であつても、其爲す所は保護政策に依つて或る程度まで輸入貿易を不利ならしめたり、又は年額三千數百萬圓を數うるに止まる奢侈品に十割の輸入税を賦課して、其輸入を制限しようとしたりする位のものであつて、是等以外に著しき輸入制限を講じ得ないのは、要するに輸入を制限したならば、內國の工業に對して、原料品の供給を困難にし、斯る原料品を以つて製造された既製品の輸出を衰微せしめ、其間何等得る所のものを見る能はざることを恐れたからである。

然らば輸出を禁止して、輸出入の均衡を保たしむる道があるかと云ふに、本來我國の輸出貿易には種々の弱點がある。第一輸出品が生絲、絹織物、綿絲、綿布の數點に限られ、他は何れも些々屑々たるものであつて、殆ど數ふるに足らない。第二輸出品の販路として、重なるものは、北米合衆國、支那、英領印度の三個所であつて、實際の事情を約言すれば、生絲絹織物を北米合衆國に、綿絲綿布を支那に、綿布綿製品を英領印度に輸出して、以つて、輸出貿易を維持して居る次第である。随つて是等市場の何れかに變動が起つたならば、我國の輸出貿易は直に不利の影響を蒙る。第三殊に北米合衆國に輸出される生絲絹織物の如きは、合衆國民に取つて、生活上の必要品でなく、寧ろ奢侈品である爲めに、經濟上の景氣如何に依つて、、其價格に、其輸出額に影響を蒙ること、最も甚だしい。第四加ふるに生絲に對しては、人造絹絲の競爭、漸く人目を惹くに至つた一方に、支那に於ては國産奬勵運動の下に、內國に綿工業を起して、外國の綿絲綿製品を排斥しようとし、殊に今後關稅權を自國の掌握に回收するか、回收しないまでも、稅率引上の自由を得たならば之を利用して、國産品保護、輸入品排斥の目的を達しようとするに相違ない。今秋を以つて、上海に開催されんとする關係諸國の支那關稅會議が此點に於て幾何の自由を支那に與へんとするであらうか、更に之に依つて影響するであらうか。注目を要する。

是等は何れも我國輸出貿易に於ける弱點の主なるものであつて、斯る弱點の存する以上は、輸出貿易の發達に伴つて、貿易の均衡を期することも亦至難なりと考へられる。殊に我國に於て多年に亘つて財政上に積極政策の行はれたことは、物價の騰貴と生産費の加重とを惹起し、此點から輸出貿易を不利ならしめるもの少しとしない其上に、金利歩合の上進、金融の梗塞は輸出業者に大なる不便を與うると、爭う可からざる所に屬する。

貿易外の收入を增加する道

玆に於てか貿易外の收入を增加して、輸出入の不均衡から生ずる債務を決濟する道を講ずることが我國に取つて、重大なる問題と爲る。我國の實際問題として、貿易外の收入は如何なる項目であるかと云へば、其重なるものは(一)運賃、傭船料(二)移住民送還金(三)在外事業從金(四)對外放資の利子(五)外國人內地消費金(六)保險料手數料であるが、今日是等の收入合計を合せて、一億圓內外に過ぎないと云ふ一事を以て、我國貿易外收入の如何に不振であるかを窺ひ知るを得るのである。我國の地理的環境から云つて、我國に最も大なる貿易外の收入を齎すものは、海運業でなければならない。往年世界を通じて、海運

業に大なる活躍を來した其際我國も亦當時諸外國の船舶不足である際に乘じて、或は高率の運賃を賦課し、或は不廉なる傭船料を徵收したればこそ、我國々際貸借をして著しく有利なる狀況に轉換せしめるを得たのであるが、海運業の世界的に不振なる今日に於ては、斯の如き好都合の事は遂に之を望むを得ざるのみならず、今後世界の經濟の恢復した曉に、我國の海運業が之に伴うだけの活躍を爲し得るかどうかに就て、大なる疑問を存する。其れは外でもない、諸外國の船會社は今日の休戰時代に於て、夙に優秀船を建造して、他日に供へつゝあるに拘はらず、我國の有する汽船は其噸數に於て、其速力に於て、何れも外國の競爭に堪へ難き程に劣つて居り、隨つて今後國際貸借の一科目として、運賃傭船料の收入に幾何の增加を期するを得るか、私の疑を挾む所である。斯る疑惑なからしめるには、我國も亦外國に對抗するを得る程度に於て、優秀船を建造することを以つて、捷徑とする。然も我國に於て海運業に從事する汽船會社の經營法を見るに、甚だしく短見のものである。戰時の好景氣に臨んで、諸會社が營業上に收めた利益は莫大なるものであつたが、諸會社は其大部分を株主配當金と役員賞與金とに充てゝ、之を費消し、積立金として、他日の用に充てるの準備を缺くこと甚だしかつたし、株主も亦會社に[illegible]增配を迫つて、一時の利益を貪るに忙はしかつた。故に今日如何に將來の海運業に用ずる爲めに、優秀船の建造を必要としたとした所で、會社の資力は之を果すことを許さないし、左ればと云つて、國家の補助を求めることも、殆ど不可能であると考へられる。斯の如きは我國會社經營者が如何に其日暮しであるか、會社の株主が我慾一天張りであつて、如何に目前の利益を求めるに急であるかを語る。彼等の不心得は即ち我國海運業をして將來に或る望みを繫ぐ能はざるものたらしめたのである。

若し其れ移民送還金、外國人內地消費金の如き幾何か增加するを得たとした所で、本來金額の小なるものであり、又對外放資の利子、對外事業の收益の如き、元本其もの〻金額の小であり、又國內に於ける金利步合の高き今日、元本の增加の望まれ難き以上は、利子收益も亦增加するを[illegible]されない道理である。

斯の如く考へると、外人觀光が其途を開かず、貿易外の收入に依つて、之を補給することの不可能である以上は、兩者の差額だけ、我國の有する正貨に減少を來し、之を補塡する場合には、外債を募集しなければならない。而して其外債の利率の高貴なることとも、亦我が外債の[illegible]所であつて、利率が高くとも、外債の發行される間は可なりとするを得るが、外債が如何なる利率を以つてしても、發行されるを得ないとか、國家の體面上、斯る高率を負うことは、許されないと云ふ場合に臨んで、何とし

て之に處すべきであらねばならぬ。政府に於て之を爲したならば、人心の安んずる能はざるのが當然であつて、我國經濟の行詰つたと云はれるのも、一理ありとしなければならない。

我國の物價と金利

我國に於て、物價と金利と共に高いことは、世界公けの事實である。啻に絶對的に不廉であるのみならず、諸外國と比較して、著しく高貴であることは、掩ふ可からざる所である。金利歩合の高きに就ては、資本の供給乏しき上に、其固定せることと、經濟社會安定せずして、資本の運用に伴ふ危險の大なることと、財政を以つて絶へず金融を壓迫したこと等種々の理由が考へられるであらうし、物價の不廉なるに就ても、奢侈の流行、通貨並に信用の膨脹、爲替低落に依る外國物資の價格騰貴、生産業者を始め問屋業者、小賣商業者の聯結に依る横暴等幾多の事情が擧げられるであらうが、本來物價と金利とは互に相聯繫し、一方が高ければ、他方亦高く、他方が不廉であれば、一方亦高貴と爲るの關係に居ることを免かれないのであつて、随つて我國に於て今日金利を低廉ならしめるには、物價を適當の程度に調節し、或る點まで之を低落せしめることを以つて、其捷徑とする。然らば如何にして物價の低落を期す可きか。其手段として最も穩當なるは、政府自ら經費を縮小するの一事に外ならない。物資に對する需要の旺盛なることが物價騰貴の原因と爲るのであるから、政府自ら物資需要の一大要素として、消費を節約するのは、之を減少したならばから云つて、政府の率先するところであると云はなければならない。果して然らば今日の我財政に於て、根本的に見るも、斯くなる消費を節約する政策を實行したならば、自ら物價に影響を及ぼすの目的を達する道と爲るのであるが、固より物價下落と共に、一時經濟社會に不景氣の襲來を豫想ならしむる恐れはあるかも知れない。然も此事が一方に金融を緩和し、他の一方に生産費を低下し、堅實に經濟社會の發達を促すに至る所以であることを認めたならば、一時の苦痛の如き、暫く之を忍ばなければならないのである。然るに我國に於ては、近來漸く財政上に消極政策を取ることの必要の認められるに至つたに拘はらず、經費は著しく減縮するを得ず、随つて物價低落の勢を阻致して、金利低落の趨きを生ずるが如き、容易に之を覘うを得ない。唯僅に財政上に非募債政策が行はれ、少なくとも公債を一般市場に募集することを廢した爲めに、金融に對する財政の壓迫を除き、其趨勢に聊か緩和の趣きあるを得せしめた位の話であつては、固より全體に有利なるを見ないのである。

金利の高いことは、企業に對する大なる妨害である。資本家は貸出資本に對する利子の高きこと、我國に於ける如き場合には、特に危險を冒して、事業に資金を放下することを要しない。相當の擔保物を徴して、自己の權利を保護しつゝ、他人に

資本を貸出して、優に自己の欲する所を充すを得るし、時に事業に放下する場合には、配當金として一割五分なり、二割なり、三割なり、異常の利益を求めされば已まない。我國に於て株式會社が一樣に高率の利益配當を維持しようとし、株主亦其高きを求め、此點に於て自己の希望の充されざる場合には、直に重役攻撃の聲を放つが如き、固より資本家の我慾的精神に出づるものと見られるが、同時に金利の高いことが株主を驅つて、此處に至らしめるのである。經濟社會繁昌し、會社の經濟亦極めて順調なるに當つては、配當金を相當の率に維持するは、會社に取つて、容易の事であるが、近年の如き不景氣時代に於て、好景氣時代と略ぼ異ならざる程度の配當を續けようとするには、會社自ら(一)營業費を節約するか、(二)積立金を切崩すか、(三)財産の評價を格外の高きに置くか、(四)產出する物資の價格を騰貴せしめるか、四者の或るものを行ふの外に道はない。斯る手段の行はれゝば、行はれるだけ、會社經濟の基礎は薄弱と爲つて、他日に於ける事業の活躍を妨げ、或は會社の經營法を通じて、物價を不自然に高からしめ、以つて國民の生活を壓迫するに至らざるを得ない。

物價の高貴であることは、或る程度まで國民個々の所得を增加せしめる所以と爲り、國民個々の所得の增加した爲めに、物資に對する需要を增加して、物價を騰貴せしめる所以と爲る。

斯くて物價と所得との間には、交互的關係を有するのであつて、國內經濟上の關係に於ては、必ずしも憂慮するに値しないと云へるかも知れない。蓋し國民は一方に失ふ所を他の一方に於て利し、所謂共喰ひ經濟の行はれる道があるからである。然るに斯る共喰ひ經濟の何としても行はれないのは、外國との關係であつて、比年我國に於て物價の高きことが一方に輸出を妨害し、他の一方に輸入を刺戟しつゝあるは爭ふ可からざる事實であつて、既に述べた如く、輸入超過に對する決濟方法の定まらざる爲めに、內國經濟に行詰りの狀態を呈するの已むを得ざるに至らしめるのである。

打開の道は自ら存す

我國經濟に行詰りを來すに至つた事情にして、右の如くであるとすれば、之を打開して、局面を轉換する道の何れに存するやは私の管々しく申すまでもなく、自ら讀者の了解される所であらう。積極政策の主張も一應の道理あるやに思はれるが、彼の如き濫妄なる經濟財政の後を承けて、整理緊縮の未だ充分に行はれざる今日、積極政策を以つて、一時を彌縫するが如き、決して經濟社會の行詰りを打開するの所以ではない。其目的を達するには、行詰りを來した原因に遡り、其本源に就て、一々施設する所なければならない。此點に關する議論は姑く他日に譲りたいと思ふ。



日本の一社會記者の活きた米國觀

矢田挿雲

一、鞄の番人

昨年七月一日に米國の排日法案が實施されて後ち、丁度日本から桑港へ着く二度目の船で私は横濱を出た。太平洋沿岸に住む日本人は無論のこと、是から米國へ上陸せんとする日本人までが實に無法な虐待を受けると云うことが、新聞紙上に散見したので、私は友人だちから能く

『武器の用意をしましたか？ピストルの一挺ぐらいは持つて行つた方がいゝでせう』

と氣づかはれたほどであつた。

ケー・ケー・ケーの一團が日本人の部落を包圍したとか、日本人の雜貨商がピストルで强迫されて立退かされたとか、丁度ホールドアップと稱する持兇器强盗が、往來の人を追剝ぐにも似たる物騷な話を聞く毎に私も甚だ不安ではあつたが、思ふ仔細ありてピストルに拘らず一切の兇器を携帶することを斷念した。そうして其の代りには、できる丈け合法上の手續を完備して行つて、少くとも米國官憲をして上陸を拒む餘地無からしめやうとの方針を執つた。

一等船客の健康診斷は所謂傍診と云つて脈一つ取らぬホンの形式的のものだと聞かされたが、それは平時のこと、このやうに空氣が險惡になりつゝある際には、檢疫官の手ごゝろ一つで

は、どんな難癖をつけられて、檢疫所に拘束されるか、乃至は送還されまいものでも無い。即ち意地の悪い檢疫官に

『あなたは大分顏色がいけません』

と云はれることは、ホールドアップにピストルをつきつけられるよりも恐しい。とりわけ船に弱い私が半月の航海で若し色青ざめて元氣銷沈したとしたら、事は意外に紛糾しさうである。そこで私は外遊の事が決すると、運動會の日が近まつた選手のやうに、能う限りの節制をして體力の增進を心がけた。

一方私は丸ビル眼科の内田博士から、トラホーム患者で無いと云う證明書と、傳染病研究所から、十二指腸蟲保持者で無いと云う證明書とを得て、之を外遊虎の卷の三幅對とした。三幅對の第一は旅券であり第二は橫濱正金銀行の發行せる信用狀であり。そして第三は此の二通の無病證明書であつた。私は此の三つの寶物を新調の折鞄に入れて錠を卸し、そのカバンを毎晩トランクの底に秘めてトランクの錠を卸して出發の日を待つた。

愈々出發の日が來た。親近者に取卷かれて東京驛を出で橫濱埠頭で暫しの別れを叙したが、偖て、愈々船が出ようとする時氣がつくと大事の〳〵の折鞄が見當ら無い。見送りの人々は皆船から降りて、送る者と送らるゝ者とを結びつけた五色のテツプも一筋づつプツリ〳〵と切れつゝある。船は徐々に棧橋を離れて居るのに我が賴む老人のN君は何處へ行つたかわからない。私は青くなつた。併し突差の事とて何の思案も浮ばず青くなつたまゝケビンに戻つて見ると、ベツドの上に例のカバンが無造作に抛り出してある。私は今度はギヨツとした。船中怪談――そんな事が頭を掠めて過ぎた。けれども兎も角まごう方なき寶物入りの折鞄であるからギヨツとしながらも安堵した。

ボーイに聞いて見ても、此の折カバンが何時の間に誰によつて私のケビンに持ち來たされたのか知らぬと云う。抑も其の日の朝私は大森の宅を出る時、此のカバンを自分が持とうか、人に持たせようかと思つて餘程考へた。その結果、自分は多くの人に挨拶せねばならぬ事を想ひ、自分の豫て信賴せる老人N君に、

『是は大切なカバンですから、決して手離さずに持つて居て下さい』

と云つて渡した。

N君は力を罩めて其のカバンを抱へて東京驛から橫濱驛から棧橋から船内まで附いて來て與れた。その日は大變暑い日であつたが、N君は右に左にカバンを持ちかえては額の汗を拭いて居た。談話室で皆と冷めたいものを飲む間も、N君は片手をコツプに片手をカバンに掛けて居るのを私は確かに見た。その

うち[illegible]見送り人[illegible]は、N君の姿を見失つた。ひよツとしたら氣を利かして、ケビンの中へ擔り込んで行つて呉れたかも知れぬと思つて、私は大いそぎでケビンを覗いたが無論有りはしなかつた。

船が棧橋を離れて、見送り人の顔が次第に小さくなるのを見ながら、私は笑顔を以て下の萬歳に答えて居たが、心はカバンの事を考へて居た。

『手離さずに持つて居て下さいとだけでは言葉が足りなかつたな、私が今度歸る時まで預けられたのだと思つて、持つて歸つたかも知れない』

何しろ是は一大事だとあわてて氣味の底に、若しそんな行違いであつたとしたら、劈頭第一の秀逸だと思つて可笑しくもあつた。

其のカバンは要するにヒョツコリ出て來たが、前にも云つたように、その出て來た筋道が更にわからない。奇妙な事が有るものだと其鞄を膝の上に抱えて眺めて居ると、ボーイが來て、

『どうかパスポートを持つてサルーンへお集りを願ひます』

と觸れて行つた。そこで早速例の折鞄を抱えてサルーンに出た。旅券の檢査は無事に濟んだ。

それから一年の間私は此の事件を全然忘れて居た。歸りは歐[illegible]の野山の美しさに醉つてしまひ、[illegible]子、淡路島とさまよひ歩いて歸つて來た。[illegible]したトランクやスーツケースなどで、狭い家は足の踏みどこもない有様であつたが、彼是するうちに家人と私との間に次のやうな問答が初まつた。

『旅行券を入れてらしツた小豆色の折鞄をどうかなさいまして？』

『あゝ、あれはアメリカで友達が餘り褒めるものだから、世話になつた禮に遣つて來た』

『あんなもの西洋には、いくらだツて有るでしように？』

『あんな小綺麗に出來てるものは西洋には無いよ、鞄に限らず何品でも、手の込んだものはヘドが出るほどしつこいし、手の込まないものは、間がぬけて居て見られやしないよ、こちらから持つて行つた物は行く先々で皆に褒められた。』

『そう云へば、お立ちの日にあの折鞄が見えなくてお困りだつたでせう』

そこで私はあの日の事を思出した。

『あれは一體どうしたんだい　今に、わけがわからないんだ』

『私たちは棧橋に降りて一生懸命テツプを握つて居たんです

が、もう愈々船が出るきわになつて、何氣無しにMさんの方を見ますと、Nさんが片手に折鞄を抱え、片手にチツプを引張つてニコ〳〵してらツしやるんですもの、私はびツくりして、おぢさんそれはどうなすツたの？と聞きますと、おぢさんも漸と氣がついて、是は大變だ、先生に手渡しするのを忘れて來ましたと云つて、さあ大騷ぎになつたんです。義雄にそれを持つてモウ一度船の中へ行つてお出でと云つたんですが、義雄は二の足を踏みますし、誰もいゝ考が浮びませんの。

しますと側に居た方が、なあに船の中へ這入りこみさへすれば、歸りは舷外から檢疫所の船に乘せて貰えます、と云つて下すつたんで、吉松が夫れぢや僕が行くと云つておぢさんから折鞄を引つたくるようにして船の方へ驅け出しました。するとモウ其時は梯子を五六尺も引上げて、舷の方へ廻しかけて居るところでしたから、迚も駄目だ、大變な事になつて了つた、と思つてますと、吉松は折鞄のハンドルを口にくわへて、器械體操の要領か何かでヒラリと梯子へ飛びつきました』

『ふーん？』

『見ると、船と棧橋の間が其の邊の所でモウ二尺ほども離れて、水が見えるんでしよう。梯子は委細構はず上におがりながら少しづつ船體の方へ廻轉する、吉松は猿が鞦韆へブラさがつたように、ゆれながらお尻を持上げようとするが、奇觀でしたわ』

『うな、ハラ〳〵させたネ』

『それでも、とう〳〵梯子にあがつて、四ん這いになつて舷門の方へ行きました。するとそこに船員の人が居て何か云つて咎めた樣子ですけれど、吉松はそれを振り切つて驅け出しました。』

『すばしつこいからな、あれは』

『無論歸りは檢疫所の船に乘せて貰ふ事と思つて居ますと、どうでせう五分と經たないうちに、歸つて來て、鞄は大丈夫ケビンに拋り込んで來た、と云ふんです。一體どこから歸つて來たの？つて聞きましたら、ずつとトモの方からとか飛び降りたんだツて濟まして居るんですもの』

『滑稽だネ』

『乾度、あとで船員の人だちも、何がなんだかわからないで、驚いてたことでしよう』

『そうらしかつたネ、何しろ夫れは殊勳者だ。第一あの鞄が無かつたとしたら、おれは少くとも四五十日間はエンゼル島の

移民局へ送致されたろうからな—
私はそこで考へた。パスポートには寫眞ピストルよりも大切であるが、パスポートを托するのは物堅い老人より、多少は探偵作助式でも器械體操の心得のある若い者の方が優しだーと。

二、排日常習者

桑港に船が着くと、日本語の達者な女の移民官がやつて來て、水も洩らさぬ調べ方をした。私は日本を出る時、最新式に據る領事の査證を貰つて行つたのに、そのオースチンと稱するオールド・ミスは、舊式の査證法を盾に取つて私を苦めた。勿論故意では無い。考へ違ひからであるが、私がそれをいくら說明して聞かせても頑として肯かない。とゞのつまり東洋汽船會社の保證の下に上陸を許可する形式で、

『オーライ』

と云うことになつた。そうして私の米國通過の期限は、二ヶ月以內と云うのが自づから上陸許可の條件のようになつた。私は通過旅客は六ヶ月の期間を許されて居ることを知つて居るので、

『わかりました』、

と云つて決つて居る者だけへこそ二六ヶ月[illegible]くもだろうとタカをくゝつて居た。

なんでも私が上陸した時の米國官憲の方針は、官吏、宗教家、—貿易商、正規の手續を踏める學生以外の者、例へば僧侶でも人の妻君でもすべて之を移民と見なすものらしかつた。現に米村組や三井物産の紐育支店に赴任せんとせる社員や、紐育に多年商店を經營せる某君の新夫人なども、本來なら移民の取扱を受けて其まゝ送還される筈であつたが、夫れ〲關係者の運動があり、特に六ヶ月期限の通過旅客と見做され各五百弗ぐらいのボンドを積んで纔かに上陸することを許された。其の後半年ほどするとそんな杓子定規的の解釋は次第に緩和されて、人妻も會社員も移民に非ずとの取扱を受くるようになつた。私の上陸したころが一番排日空氣の引緊つて居た時分であつた。

そう云う關所をくゞりぬけて上陸したのだから、その當座私の心は何處と無く硬ばつて居た。早い話が稅官などの人民取締について必ず日本人に薄く白人に厚い事が有ろうと想ひ、行きずりの勞働者を見ては、さゞえ大の鐵拳が理不盡に私の頭に飛んで來ることを覺悟した。レストーラントは私たちに開かれず、電車は私たちに止まらぬことも豫想した。そうして日本に居る時、新聞紙上で馬が跳ねたような大きな活字で每日書かさ

れた、秘密結社などの直接行動が、やはり毎日の如く各地の日本部落に行はるゝことを信じた。

一體排日の理論と感情とは、米國民の胸中から自然に發したものでは無く、主としてマクラッチーやインマンやジョンソンのやうな一部政治家の政爭題目として捏造されたものであることは、今更ら言ふを俟たぬ。ハースト系の新聞が之を代辯して、一部の人心を煽動し、次第々々に日本嫌ひの感情を作りつつあるのは事實だが、それは決して米國人全體の調子では無い。排日の論據はそれまでにも度々變化した。或時は東洋文明が西洋文明に劣ると云ひ、或時は兩文明が異質不調和であると云ひ、或時は日本勞働者は米國の勞銀を低下させると云つたが、事實は片ッ端から之を裏切つた。如何なる大膽な學者が東西文明の優劣を結論できよう？又誰が東西兩文明の不調和を豫言し得よう？　勞銀問題は取りも直さず職業的權威の問題であるが、今日の有樣では勞銀は多くの場合實力によりて定まり、人種によりて定まりはしない。百姓や花作りなどに從事する日本勞働者は白人よりも高い勞銀を得て居る。それは日本の勞働者が夫等の方面に得意だからである。その代り機械を操縦したりすることになると、日本人は遙に米人に及ばないから、從つて勞銀も安い。殊にその方面に、ルーズベルトの大統領就任前まで、暴威を振つた勞働ユニォンが陰に陽に日本の勞働者を迫害した結果、勞働ユニォンの勢力不振の今日でも職工としても日本人の地位は、殆ど問題で無い。併しながら勞働ユニォンの邪魔が無いにしても、在米日本勞働者の素質が既に農業向であつて工業向きでないのだから、百姓として優秀の地位を占めて居ると同じ地位を職工として占めることは殆ど不可能である。

昨年私が太平洋沿岸を轉々した當時の排日屋の一枚看板は、『人種統一難』と云ふことゝ、『日本の軍禍』と云ふことであつた。私はサクラメントに滯在中、一日米法學士の田口高明君の紹介で同じ辯護士仲間である上院議員インマン氏を其事務所に訪ねた。取つつきの部屋には美しいタイピストが四五人精々とタイプライターを打つてゐた。奥の一室にインマン氏は來客と語つてゐたが、客が辭し去ると自分で出て來て、いかにも懐しさうに我々を迎えた。此の排日政治家の巨頭は年齢五十左右、血色のよい大型の顔に微笑を浮べ、先づ遠來の珍客に接見するのは非常な光榮であると云つてから、私の問に答へた。

『私の會長を勤めて居る亞細亞人排斥會の趣意は、亞細亞人を憎むのでは無く、之以上亞細亞人の入國するを食止めるとが双方の利益だと信ずるものであります。最初亞細亞人を歡迎した責任は米國に在りますが、どこの主人でも我家に來客

を歡迎する權利と、お斷わりする權利とを有つて居ります。國と國との交際もその如くで、もはやお斷わりせねばならぬ時が來れば詮性なからお斷りする外は無いのです。其自由は米國自身にありまして、決して外國の干渉を受ける必要は無い、如何となれば是は純然たる内政問題でありますから……。

なぜ米國が今になつて亞細亞人をお斷わりせねばならないかと申すに、亞細亞人の有つて居る文明は誠に立派なものでありますけれど、人種として到底我々白人と調和の道が無いからです。異人種が互に結婚せずに一國内に離群索居し、その宗教、歴史、感情を異にする以上それが、どれほど米化政策の妨害となるか、あなたにもおわかりでしよう。米國が自國内の住民を悉く米化せしむることは固より當然の理想でございます。日本人は個人としては勤勉、正直、そして能く法律を守り犯罪者の極めて稀な良民であります。其點は私共豫々敬服に堪えませんけれども、民族として到底米化する見込は無いのです。それにも拘らずドシ〳〵日本人が米國に入込めば、ます〳〵兩國の親交を害し感情を破り、果ては悲しむべき終局に達することでしよう。日米戰爭を避けるが爲めには、どうしても双方が互に權利を尊重して、通商上の親交によりて平和を維持するの一途あるのみと信じます』

記者に笑は

『日本に[illegible]て來ても[illegible]に[illegible]するの理由は無いと思つて居ります、[illegible]と附け加へ、此話の序でに言ひ出したる一層もつともらしい感じるしては有るが一方では大部分の州で黄白結婚を禁じて置きながら、人種統一論も無いものだ。ストリート・ウオーカー（賣春婦）を白人が買ふことは違法で無いが、若し有色人種が白人の淫賣婦を買つたことが知れると、その者は本國に送還される掟である。況んや正式結婚おや。

昨年の九月の初めで有つたと思ふ。秋晴れの日に金門灣頭で、太平洋艦隊の桑港砲臺攻防戰が行はれた。私もルシヤン・ヒルの高みに登り、唯一人の日本人として多くの米人に立交りて眼の下に展開せる海陸戰を半日ほど見物した。視野の内にある大小艦艇二十三四艘は鍋のつるの形に桑港を取卷いて、盛んに砲門から煙と音とを擧げて居る。馬背の如き地形を成せるルシヤン・ヒルには無數の自動車が足を止めて、紳士淑女は車内から望遠鏡で灣内の決戰を見て居る。舷側に折々拳大の白煙が騰るのみで、我々素人には軍艦が優勢なのか、それとも砲臺が優勢なのか見當がつかぬ。恐らく他の見物人も見當が附くまいけれど、片唾を飲んで肅然として見物して居る。

翌朝の新聞は、敵艦の大勝と砲臺の大敗を報じ、要塞司令官

は

「若し日本の長門艦が一艘攻め寄せたならば、香港の砲臺は沈默するの外は無からう。砲臺からの着彈距離の二倍の沖合に在る長門艦から打出す砲丸は、一發で砲臺を沈默させるに充分である」

と云ふ露骨な意見を發表した。この成績が米國民をショックしたことは非常で有つた。米國民の大多數が、他日の日米開戰を豫想するに非れば、あんなに昂奮できまいと思うほど昂奮した。日頃排日政治家のコヂツケ排日論を冷笑する者も、海軍力比較となると皆な眼に血をあげて日本を目當に躍起となるらしかつた。

最初から加州勞働者と結托して排日の先驅を勤めて來た在郷軍人團は、此成績に感激して、忽ち海軍充實の請願書を下院海軍委員長に提出し、委員長バトラア氏は之を接受した。請願書に從へば、

「現在の日本海軍力は米國の夫れに二倍せり。萬一開戰の曉は米國軍艦が太平洋の中に達せぬうち、日本軍艦はマニラ其他を占領するならん」

と云ふ理由であつた。日米開戰を前提とする海軍擴張熱は、見る〳〵米國民の間に高まつて行つた。

夫れから海軍省の尨大な海軍費編成となり、海軍卿の放言となり、引退となつて、現大統領の平和愛好の精神が、暗雲を破つて輝く朝日の如く、全國民の神經を慰撫せし事は、世人の記憶に新たである。

全米の牧師會が排日法案や國防日や其外是に類似の行動に極力反對し、長袖に似ぬ硬論を日曜毎の教壇から撒布するのは職掌柄當然とは云へ痛快であつた。そうかと思うと在郷軍人團や辯護士協會などは牧師會の態度を賣國奴なりとして反駁した。排日政治家の雄將のショートリッヂ氏などはカン〳〵に逆上せて了ひ、或俱樂部の卓上演説に

「我々は武力に訴へても現狀維持に努めねばならない。加州防禦上最も必要なるものは港灣設備である」

と叫んだ程であつた。

丁度その前後であつた。私は何氣無く寄席に入ると、東京灣攻撃の起し繪を見せてそれが濟むと「チヤップ〳〵」と連呼しつゝ、五六人の米利が下等なダンスをした。所が淺草の十二階が轟破されても、東京、横濱が兵火に全燒しても不思議に大向うが唸らなかつた。私も不愉快には相違無いが、それを相手にして腹を立てる氣には成れなかつた。つまり是れは興行師の迷途であつたのだ。

三、農場めぐり

マクラッチやインマンの諸氏が、「日米平和の爲め」と稱して、事每に日本人の存在を防害しつゝある行動を、痛快に思う人間に二種類ある。一は日本の移民が自分等の生活を脅威すると信ずる者、一は有色人種を感情的に嫌惡する者である。此の後者の中には隨分甚しいのがあることを見聞した。電車の中でも往來でも日本人に會ふと眞ツ蒼になつて、卒倒でもしかねないやうな樣子をする老婆があるのを私は一二度見かけた。又前者のうちには排日新聞の誤報に誤られて居る者もあるが、偶には自家の經驗上、日本人を有害と見て居る者もある。それは何かと云ふに、地主と家持である。即ち有色人種に家を貸すと近所の西洋人が外へ轉居する。そして其の界隈の家賃や地代が下落する。單に其意味で日本人を嫌ふのであるが、偶々日本人に家を貸しつけた家主は、家賃に間違いが無く、日本人の正直で親切なことを喜ぶやうになつて、後には却つて日本人に限ると云う條件をつけるやうになる。土地法が實施されて後ち、農園を持つて居る米人地主が、日本人に土地を貸せなくなつたことをどれほど悔んで居るかわからない。その狀態を私は飽きるほど見させられた。

土地法は米人に賣渡すことは勿論のこと、貸すことも許さぬ。又歩合耕作をさせることも許さぬ と云ふ法の規定をくゞつて 實際上、日本人に土地を貸して優良な收穫を擧げようとするのが、地主たちの希望であつた。私はサクラメント滯在中、茫漠たるサクラメント・バレーに自動車を驅つて、日本の農夫が就働せるあちこちのランチを何回となく見に行つた。葡萄園もあつた。アスパラガスの畑もあつた。或時は自動車の刈入機械で刈るあとから 小束(こたば)にからげてポンと投げ出される稻の取入れも見た。又或時は刈るあとから莢と實を別けて、實をズックの袋に入れて袋の口を閉ぢることまで一臺の自動車の中で出來て了ふやうな豆の取入れも見た。その豆の刈入器械は一萬弗も二萬弗もすると云ふことで、大きな山がゆるぎ出すように見えたが、その大きな器械が豆粒大に見えるほど遠方まで往復して、瞬くひまに莢を刈りそげ、實を撰り出し百斤入の袋にしては地上に吐き出す。その器械はそんなものを一日に千袋作る。私の見た熊本縣人坂田緇音君の豆畑は 千六百エーカーに及び、事務所の小丘に立つて見渡す周圍の地平線を越えて猶ほ遙かに續いて居ると云ふ事であつた。一エーカーの畑から十五袋乃至三十袋の豆を收穫するのが普通だけれど、昨年の秋は不

作で十袋しか取れなかつた。幸い相場が好いので息がつけた。事務所には二十二三人の日本人と自動車運轉掛りの七八人の白人が同じ食卓に集つて、ランプの下で夜食をした〻めて居た。

稻刈は町の川口に在る長さ三哩の陸橋を渡つて、加州大學農科大學のデビス分科を左方に見て、又更に四十哩走つたナイツランデンクのランチへ見に行つた。そこのランチは一萬四千四百エーカーあつて、高田力藏の五千五百エーカー　國府田敬三郎の二千二百エーカーなどは屈指の大經營である。但し刈入れ自動車は茲でも白人によりて操縦されて居た。自動車器械の運轉ですら、日本人は到底白人に及ばない。加州の雨期は稻刈りの時節から始まるのだが　稻が雨に濡れるといくら白人でも此の器械で刈り得ない。永い天氣でサバ〳〵に乾いた稻でなければ、此刈入れミシンは用を成さぬ。と云つて人間の手で刈らした日には米の價値よりも勞銀の方が高くついて算勘が合はないから、刈入れ期に雨が降れば、稻を刈らずに立腐、れにして了う。米國の大農法が大バクチだと云ふのは玆のことである。日本の移民は資本が無い爲めに自分で大バクチを張るものは極く稀であるが資本家は誰であるにもせよ、仕事そのものは、日本人に及ぶ人種は無い。十五年前四萬五千石に過ぎなかつた加州米の産額を　今日百萬石以上にしたのは、米人の資本力と日本人の勞力と合體したおかげであることを、白人地主は一番よく知つて居る。そのうち二十六七萬石即ち二十六七萬人の命をつなぐ丈けの米が、加州から日本へ送り込まれる。日本の政府は國民に外米食を奬勵しながら外米に三十五錢づつの課税を實施することにしたが、それでも外米は輸入する。

又或時はメロン畑や梨子畑や玉ネギ畑や砂糖大根の畠なども見に行つた。スタクトンからモーターボートで川上に遡つて、ポテト王牛島謹爾君のポテト畑や其處に働く哀れな日本農夫の小屋や貯藏庫などを巡閲し、其夜はポテト王の家に一泊して饗應を受けた。到るところに私は日本人の汗と精血が加州の土にしみて、産物を肥して居るのを見た。インマン氏は日本人を招くも追うも米人の自由だと云うけれど、加州の地主は心から日本人の功勞を認め、今後も日本人に自分の土をいぢらせることが、土壤の爲めにも生産の爲めにも最も有利なことを知つて居るのである。

私は桑港に上陸して、市中を散歩する毎に、クロニクル新聞社の前の鋪道に並べる花屋の前に足を止めぬ事は無かつた。國粹論者が日本の花だとばかり思つて居る櫻が、ワシントン府では日本よりも見事に咲いて居るが、それと同じく私も日本の花だとばかし思つて居た菊の大輪が、盛んな花瓣と盛んな色彩を

以て、バラやダリヤやカーネーションなどの中に菊を含めて居た。バラはコロンビヤ、ロツセル、ヲフエリヤなどの各種が妍を競ひ、その紅に對してヴアイオレツトの紫や白が美しく配合されて並べてある。手帳にかきとめた値段を見ると、菊の大輪上等が一打で二三弗、バラは一弗から一弗五十仙、カーネーションが二打で七十五仙と云うところで、米國の生活費として寧ろ安い方である。菊や櫻ばかりで無く日本の百合も非常に賞美されて居る。花の世界に日本の花が乘出して今日年產額數百萬弗までに漕ぎつけた陰には、日本の花作りの汗と膏がどれ丈け苗床に滴り落ちたことだろう。今から三十年とか前に堂元君が初めて日本の椿の苗木を八本取寄せたのが、米國に於ける日本人の花作りの濫觴だと云う。

私は花と果物とに取卷かれて『春光蒸すが如き加州の夏から冬』までの五ケ月あまりを桑港、スタクトン、サクラメント、ローサンゼルス、サンデーゴの各地に送迎して、就中日本人の作れる野菜と果物と園藝を見た。あの明るい空の下に運動シヤツ一枚で自動車をドライブしながら、オレンヂの香の高い郊外を疾驅する人々は、眞に生を樂しむように見えた。加州のことを云へば誰しも直ぐに天惠國だと云うが、何もかもあれほど豐富であつて、時候があれほど快適ならば、正に世界の樂園、地上つて居ると謂つても差支ない位にまでなつて居るが、セリーの生產過剩には毎々五千萬弗の損失に陷ることもあると云ふことである。その原因は主として、日本人が餘りに好んで作りたがるからであつて、日本の農夫がアメリカの其れのように不器用でありさへしたら、こんな生產過剩には成らないだらう。これは兎も角、現に私のロサンゼルス滯在中に、一千五百萬弗の資本で六隻の冷藏汽船を作り、それを以て鐵道の運び切れぬ野菜類を東部諸州に送り出す計畫が成立した。捌け口さへつけば、生產の多きは最早や恐るゝに足らない。のみならず、日本の農夫は益々歡迎されるわけである。

雨期に入つて年末も近づく頃であつた。私は太平洋艦隊の根據地たるサンデーゴの町に二三泊したが、さすがに嚴格な米國人も私が寫眞機を提げて、要塞地帶内を逍遙するのは目についた樣子であつた。併し實を云へば私は要塞地帶には用が無く、其の昔ラモナの結婚したオールド・ミツションや、有名な人類館などに用があつたので、一と通り見物が濟むと北島ドクトルの案内で今度はメキシコ領へ入つた。是は其のドライヴ中の話であるが、なんでもサンデーゴの町を出離れてメキシコ境の方へ五哩ほど走つたと思う頃、見る限り青々したセロリー耕地に出た。そして其の青々したセロリー畑の間に赤茶けたセロリー

畑が交つて居るのが、碧色の湖水の中へ、赤湖が流れ込んだように見えた。北島君は夫れを見て笑ひながら
『あのセロリー畑を御覽なさい。青い方が日本人の作つたもので、赤く枯れかゝつて居る方が白人の作つたものです。萬事が是ぐらい違ひます』
と云つて居るうちに、我々の乘つて居る自動者が一枚の赤セロリーの前に來た。すると赤セロリーの畑中には果して十數人の白人が居て、今しも悠々とセロリーの手入れをして居た。そして其の直ぐ隣の青々と繁つたセロリー畑には眉も目尻も釣り上つた日本人が五六人居て、やはり何事かセロリーに對する作業に餘念が無かつた。日本人の作つたセロリーは青い色を通り越して寧ろ黒く見えるぐらいの生育であつた。成程一本の莖、一輪の花を小取廻しに世話するような事は日本の農夫の長所で、山のような刈入器を操縦したりすることは米人の長所であると思はれる。其の邊はセロリーの名所で昨年は殊に豐作で有つた。即ち加州サンデーイ郡チウベスタのセロリーと謂へばヴニエス及びパームスのセロリーと共に世界的に名高いそうで、その主つとも主として日本人の手で作られるのである。昨年サンデーゴの冬物セロリーは恐らく一エーカーに付三カーロード以上の豐作で、是も生産過剩の相場下落に逆つて困つて居る樣子であつた。獨りセロリーばかりで無く無茶苦茶に働いて無茶苦茶に作る事と、販路擴張の不得手とは日本農夫の特色であつた。

何時かリヴーサイドのアスパラガス耕地を視察した時、其處の日本人會に立寄つて吉田書記からアスパラ耕作史を聞かされた。いろ／＼長い細かい歴史があるが、約略して謂へばホルトギスでもメキシカンでも支那人でもイタリアンデも、アスパラガスの耕作にかけては日本人の右に出ずる者無しと云ふ事に歸着する。それ故罐詰會社でも、個人の地主でも、是まで他國人を使つては失望し、今では專ら日本人に土地を貸して來た。今度の土地法案に從へば、地主は日本人を單なる雇人として日給か週給で働かせる外に道が無くなつた。所がそれでは能率が上らない。罐詰會社では窮餘の一策を案出し、表面は雇人名儀で、生産成績に對する賞與金を出すことにした。個人地主も何度となく地主會を開き、日本人を参加させて合議の末、同じような事を決めた。そうすれば實質は在來の歩合耕作と同じく、日本人は勞働用役に對する利益配當を受けるのと寸毫も異らない。異るところは從來地借人又は歩合耕作者だつた名儀が、今後雇人となるだけである。是はいみじき名案だと思つて居ると、夫れから一ケ月ほどして一般に此の案が摘發されようになつた。裁判官は掛目も親目も無い法の運用者であるのだが、法

の運用が緊つて來ればくるほど、[illegible]日本の[illegible]を[illegible]の情は切になるのであらう。

四、ミス・シャーウッド（上）

ボストン旅行の幸チはボストンミユーゼアムとシャーウッド女史とであつた。ボストンなるジャパン・ソサイテイ本部の書記を勤むるミス・シャーウッドとは、高野山大學教授藤本眞光君の紹介で交ることができた。ボストン滯在の一週間は東奔西走例によりて多忙を極めたが、忙中シャーウッド女史とは前後三回ほど會見した。ジャパン・ソサイテイの無給書記を勤むる位だから、親日派たることと勿論だが、嬢の親日は富士山とゲイシャガールを讃美する程度のものでは無く、更に深き理解と強き信念の上に立てる徹底的の親日派である。左に會見當時の模樣を追懐して書いて見よう。

本年二月一日、夜來の大雪が晴れてニウヨウクの空は青く寒く輝いて居た。私は同室の藤本君と共に寓居なるミセス・ペツクハムの部屋を出で、東四十二街のグランド・セントラル停車場を正午發の列車でボストンに向つた。そして午後六時、日が全く暮れてからボストンに着き取敢えずハンチントン・アベニーのハンチントン・ホテルに[illegible]、[illegible]日[illegible]を[illegible]し、同日の[illegible]藤本君からミス・シャーウッドへ電話をかけると、

『私が今連れに行くからホテルで待つて居て下さい』

と云つて間も無く一人でやつて來た。丸顏の血色の好い四十未滿と覺しき美人であつた。下のパーラーで初對面の挨拶を交はしながら、女史はコロ〳〵嬉しそうな顏をして、形式的に非る強い握手を二人に與へた。それから二人は女史の乘つて來たタキシイに同乘して、デボンシヤ・ストリート二百番地なる女史の住居に迎へられた。其界隈は純然たる住宅地で閑靜な場所に風雅なアパートメント・ハウスが建ち並んで居た。其の晩も氷點に近いかと思はれるほど寒く、地上の雪が石の如く凍つて居る中に、何の木か知らぬ街路樹が慄えて居た。ミス・シャーウッドは先に立つて自働エレベターの釦を押しながら

『日本にも是が有りますか』

と尋ねた。有らゆる話を日本に結びつけて、日本と云ふ言葉を一度でも多く口にし度いと云ふ樣子であつた。

四五階登つたと思ふ頃にエレベターは自然と止つて、獨りでに扉が開いた。三人が出ると又獨りでに扉がしまつてスーと降りて行つた。三人だから好かつたが、若し一人で人の居ぬ室の

中を、而かも夜あんなものに乘つたら嘸ぞ薄氣味がわるかろうと思つた。

ミス・シャーウッドは其のアパートメント・ハウスの一部なる三四室を借りて獨身生活をして居た。アパートメント・ハウスを見て私の何時も感ずることであるが、共同生活のうちの個人生活――それが西洋人の生活であり、個人意識の朦朧たる家族生活――それが日本人の生活であると云ふ事を、その時もふと思ふのであつた。事實アパートメント・ハウスを見ると、極度に共同生活を享利享樂する一面に各人の部屋を金城鐵壁の如く嚴重に分界して、夫れ自體が一軒建ちの觀を成して居る。どこからどこまでキーを用ゐねば我が家の中をあるくことの出來ぬ西洋人の家居と、玄關の格子すら年中明け放しにして置くような日本の家居とは、取りも直さず双方の文化の姿を象徴して居る。話は餘談に入るが、アメリカでも英國でも近頃は此のレストレスに他人を雜居せねばならぬ共同家居に疲れて、小さい乍ら獨立の家を持ち、家の廻りに無茶苦茶ながら日本風の生垣などを植えることが新傾向となりつゝある。建築會社主催、新聞社後援の小家居展覽會と云うようなものが開かれると、朝から晩まで雲霞の如き奥樣さん連が集まつて來る。私がロンドンに居た時も、ハイド・パークをベルメルの通りへ出たところでその展覽會が催うされ、道路に面して建てられた日本風の外觀を持つた四間ばかりのバンガローを見ようとて、順番を待つレディー達の列が道路に沿うて何時も半町以上は續いて居た。

私は足一歩シャーウッド孃の部屋に入つて、孃の日本びいきが實に看板や物ずきの爲めでは無く、血肉にしみ込んだ熱情に基づくものであることを知つた。孃は日本を寶物にしてるのでも無ければ、日本を珍しがつて居るのでも無く、心の底から日本を愛して居るのだと云うことが、其の部屋の中をチラと見渡したばかりで合點が行くのである。居間の入口たる廊下に据へた本箱を埋むるものは、悉く日本に關する著書ばかりである。詳しく云へば日本の政體や社會の解説がある。人情、風俗に關する記錄がある。旅行記や傳説がある。紫式部日記、和泉式日記、武藏坊辨慶、中江藤樹、膝栗毛などの翻譯がある。尾崎夫人の日本の武士、太田正孝氏のソサイチー・エンド・ニウスペーパー、角田柳作氏の佛徒のシムボル等の英文著書や牧野義雄氏の述懐談とかアーネスト・サトウ氏の日本の外交、ヴイクトル氏の日本文學英譯、エリオット氏の極東通信、モールス氏の日本日記などがある。併し女史は日本を愛しはするが、自から日本に就いて多くを知つて居るとは思つて居ぬ樣子で

――私が日本のことを少しづつ知るようになつたのは昨今です。

一度日本へ行つて單なる旅行で無く二年でも四年でも日本に生活して、よく日本を知つた上で再び米國に歸つて日本の爲めに働き度いと思ひます」

と謙遜に云つて突然調子を軟らげ

『けれども私、日本に行きましても言葉はできず、仕事は有りませず、生活に困ることでしよう』

と淋しく笑つて見せた。

書物ばかりで無く、室内の器具も裝飾品も隅から隅まで日本の物で充たされて居た。鳥渡目についたゞけでも豐國の美人畫と廣重の富士山とを組合せにした額がある。大きな櫻の木の下に花見風俗の群をあしらツた造り物を違棚の上に置いて、その横に夢のような元祿人形が立てゝある。四壁に掛けた大小の額には光琳の磯馴れ松に鶴、誰かの牡丹、富士各態の寫眞や廣重の東海道があり、竹の團扇挿しには洒落れた團扇が挿してある。そして此の品々は一として女史が日本人の爲めに何か盡したことの記念で無いものは無い。櫻の大木は先年春日艦が入港の折、ジャパン・ソサイテーの主宰で艦内に開きし艦員歡迎會の卓上に飾られたものである。その外の品々も誰々さんからの贈り物だと云う思出のからまつて居ぬは無い。

私等は三十分と經たぬうちに、それこそ十年もつき合つた友達のような心になることができた。二人が二人とも[illegible]らしい硬ばつた感じから解放されて、自然な心持で[illegible]人が[illegible]愛しつゝ、相手の言葉の切れ目を待ち兼ねるようにして語りつづけた。娘は隙を見ては台所に立ち、最後に手製の菓子と暖かい珈琲を持つて來た。我々二人はまだ濟まぬ夜食を濟ましたつもりで先程から話して居たのであるが、腹は正直でお菓子を食べる調子が稍やガツ〳〵して居た。それに依つて我々の痩我慢が娘に看破された。娘は又台所に立つてお菓子の殘り全部と珈琲の補充とを持つて來た。

お茶の後ち、娘は棚の奥から面倒な思ひをして一つのかんから箱を出して來た。箱は目の覺めるような赤い千代紙で貼つてあつた。蓋を開けると中から色々の日本品が出て來た。縮緬の服紗、絹張りの扇子、春日艦長寺岡君から返禮に贈られた袋物、吉田雪子畫伯から贈られた鹽瀬の銀貨入れなど、そして服紗類が一番多かつた。女史は一々の品について其の贈り主の六ケしい日本苗字を悉く諳んじて居たが、中には無名氏から贈られたものも有つた。そして終りに

『私の日本名は森ひめ子です』

と妙なことを云ひ出した。よく聞いて見ると、是まで世話になつた日本人學生が、何かの機會に彼の寫眞額を贈呈す…

に、感謝の意を表する爲め森日米子の名を撰して贈つたのださうで、日米子は云ふまでも無く日米親善の功勞を現はす字、それから森はシヤーウッドに因める字だと云ふ講釋を、女史は得意になつて受賣して聞かせた。

森日米子の命名書と云ふものも見せられた。今はつきり覺えて居ないが、なんでも奉書紙の四つ折か何かへ持つて來て

『娘が多年生等を愛護されし功績を感謝せんが爲め、生等玆に謀んで森日米子の名を娘に贈るもの也』

とか何とか達筆を振つてあつたのを見て、藤本君も私も腹を抱へて笑つたことを覺えて居る。女史が此の命名を甘受したのは勿論自分の名が書けなくてはいけないと行つて、俄かに毛筆の握り方から習つて、字劃の順序も覺え込み、小學三年生程度の字で森日米子と書けるやうになつた。道理でさつきから見た扇子や服紗の隅に、枯れ枝を拾ひ集めたやうな手蹟で森日米子と書いてあつた。之れを私はモリ・ニチベイシと讀んで居たから、解わからなかつたのである。

日本人氣取りの日米子孃は初め私を見た刹那に、混血兒だらうかと思つたと云つて

『ミスター・ヤタは屹度ミスター・フヂモトの通辯に相違ないと想像しましたら、英語はミスター・フヂモトの方が遙かに上手ですネ、今はミスター・ヤタが純粹の日本人であることを知ると同時に、通辯に通辯の必要なることも知りました』

此の諧謔には皆ドッと笑はされた。どう云ふものか私が白人のやうだとか、アメリカン・スタイルだとかアメリカン・マンナーだとか途方も無いことを夫れまでにも諸處で二三度面と向つて云はれ、英語のしやべれぬ白人と云ふが有るもので無いと內心苦笑して居たが、日米子孃のやうに、スパリと夫れを云はれると、苦笑を通り越して哄笑し度くなる。

夜は何時しか更けて十一時になつた。私が度々時計を出して見ると、日米子孃は厭な顏をして

『そんなに度々時計を見るものぢや有りません。時間を忘れて話しましよう』

と其都度云つた。

私がボツリ〱と質問を放つに連れて、女史の熱情は其の眼の色や語調の上に高まつて來た。日本に對する女史の愛は、戀人に對する愛に似たものが有ると私は感じた。ピットが、我が愛人は國家なりと云つた心持を、女史の態度に認め得るのであつた。女史の返答を綴めると、

『今から十年前歐洲戰爭の最中でした。ボストンに在る獨逸の社會黨が、トレモント・テンプルでカイゼル彈劾の演說會を

催したのを聞きに行きました。その演說が濟んだあとで、一人の日本人が演壇に上り、時間を十分だけ拜借し度いと云つて、加州に於ける日本人の現狀を話し熱辯を揮ひました。その演說に依り私たちは初めて西部の米人が日本人に對してゲット・アウト(出て行け)を行つて居る眞相を知りました。そして非常に私は感動し是は捨てゝ置けないと決心して歸りました。私は翌日すぐに自分の小さな住居を日本の學生に向つて公開しました。何となれば、その演說をした日本人はハーバート大學の學生で、我々は米國の大學を募つて勉強に來ても、米國人は我々を憎んで住居すらも與へない……と訴へたことが私の胸を刺しましたからです。

私は一方に於て日本及び加州の日本人問題について研究を初め、益々西部米人の右の間違つて居ることを確かめました。一九二〇年に日本移民に對する致命傷とも云うべき加州土地法案が通過したので、私は最早や默視することは許されなくなりまして、日本人を救う有力な機關を設けることに着手致しました。併し一介のタイピストに過ぎざる獨身婦人が、どうしたら自分の計畫を成就するにいゝでしよう。私は其の方法すらも不案內でしたけれど、先づ此の土地の目星しい人百二十五人に對し、商業會議所に集まつて貰つて、私の相談に乘つて頂こうと思ひ、夫れ[illegible]しました。[illegible]お出で來るものゝ姓名に二十五名、併し私に[illegible]ン・ソサイティ設立の趣旨を述べ、內二十人のサインを得ることができました。夫れから二週間の間私は仕事の餘暇に方方へ電話を掛け、電話で議論して相手を屈服させ、遂々百十人の贊成者を得ましたから、創立總會を開いて會長、書記などの役員を定めて會を成立させました。現在の會員二百人、會費每月五弗ですが會長以下の事務員まで無給で働いて居ります。

最近の仕事としては、一昨年東京の震災に會員各自が直接義捐した以外、ソサイティを通じての救助金が千五百弗、ボストン在住の日本人學生が俄かに歸國せねばならなくなつたので、その五六十人の爲めに三千弗集めて、見舞金と旅費とを贈りました。それから全米の學校へ手紙を出して日本學生の月謝免除を運動しました。

私が日本人を愛するようになつたのは、日本人救濟事業を初めてから後ちです。隨分奇妙でしよう。普通の順序の反對でございますネ。私は自分の事業の爲めに段々に日本人と接近し、日本人の長所を、るようになつてから、日本人が大變好きになりました。私が餘り熱心に日本人の世話を焼くので、

會の發展と共に私は一部の米國人から狭まれて有らぬ噂も立てられました、けれど私は構ひません。只だあなた方のような旅人がその噂を信じて、私とのフレンドシップを傷つけられぬようにして下さい●

ハースト氏が日本人排斥の活動寫眞班を巡廻させた時など、私は心から腹が立ちまして、蹶起となつて夫れを妨害してやりました。私は排日法案の源泉地なるサクラメントで此の活動寫眞を見させては成らぬと思ひ、丁度サクラメントの市長もボストンの市長も猶太人なので、百數十のローマンカソリック關係の會から、サクラメント市長を盛んに脅迫せしめました。勿論それはボストン市長の手を經てやつたことですから、サクラメントの市長も遂に動かされて、市内に於て排日活動寫眞を映すことを嚴禁しました。

そこでハースト氏は眞ツ赤に怒つてボストン市長の許へ暴れ込み、終日議論して我々の運動を止めさせようとしましたが、正義の論には勝てず空しく引返しました。そうして今度は私に會見を申込んで參りましたから、私は喜んで彼を訪ひ、あべこべに說得して、今後は日本人に限らず凡ての外國人を惡し樣に宣傳するような活動寫眞を、斷じて寫さぬことを誓はしめて歸りました。』

日米子孃の聲はだん〳〵熱を帶びて來たが

『併し今後果して夫れを實行するかどうかは解りませんけれども——』

と一語鋭くハースト氏の人格に止メを刺して

『オホ、、、』

と笑つた。

此の活動寫眞の妨害運動は、ジャパン・ソサイテイとしてやつたのでは無く女史が個人として戰つたので、その爲め多くも有らぬ私財を蕩し、今は又振出しから初めてタイプライターの仕事で日本行の旅費を貯めて居ると云うことである。日本人のみの署名を集めてあるメモリー・ブックに森田米子の自筆で Mother of all Japanese students. Jan. 6th no year, と書いてある。『ノウ、エーヤー』がわからぬと云へば

『自分でもわからぬ昔から——』

と深い瞳を宙に向ける。そこで私は

『あなたが日本に行くとすれば、あなたの子供等がお世話をするでしよう』

と云うと

『私は自分の力で日本へ行つて見度いのです。』

と云うのであつた。

氣には[illegible]きねど、午前一時が過ぎたから、自分は[illegible]讀んで貰つて彼の許を辭した。

五、ミス・シヤーウッド（下）

翌朝私共は郊外へ出る前に、商業區域の中心に在る女史の事務所を訪ねた。事務所は二室から成り壁額も裝飾品も矢張り日本品一點張りであつた。私は前晩、米國艦隊のハワイに於ける大演習に關する往復文書を見せて貰うことを女史と約束した。文書の一は、神戸なる日米協會から、右の演習に就いて稍や抗議的に申込んで來た質問書であり、文書の二は、ボストンのジヤパン、ソサイテイが其質問をハーバート大學教授で國際學者たるウヰルソン氏に取次いで、同教授の意見を徵したものである。私は序に是等の文書の寫しを賴んだところ、女史は機嫌好く承知して瞬くひまにお手のものゝタイプライターで叩いて呉れた。女史のことを面倒だからタイピスト〳〵と書いて來たが、正確に云うと女史の職業はステノグラフアー又はステノグラフアイスト即ち速記者である。米國の速記者だから勿論タイプライターを打つ。鉛筆の削つたやつを二三十本も用意して、一枚の紙に大きな字を十五六字づつ書きとばして、絶えず次の[illegible]一紙をめくつて行く[illegible]國の新聞記者と云へば、タイプライターを打つこと、[illegible]つこと、寫眞を寫すことなど[illegible]必要條件になつて居るようなもので、それと同じくステノグラフイストたる女史がタイプライターを打つのを見て居ると、目にも止まらぬ早さである。それも我々と話しながら打つて居る。此の話は相變らず日本の事で持切りだが、間々職業上の話も出る。何字打ちますかと私が尋ねたのには答へずに、アンダーウツド・タイプライター會社のスチツクネー博士が米國第一等のタイピストであり博言學者である事と、あの邊の人になると一分間に五百字以上叩くのはなんでも無いと云ふことを話して聞かせた。又タイピストがピヤノを稽古すると相互扶助的に上達することも語つた。そんな話の間々に次の室から若いタイピストが三人ほど代る〳〵校正刷のようなものを持つて來て、女史の指圖を仰いで行く。女史はてんで盤の方は見ず原稿の字丈け見て、口では誰彼と應酬しつゝ叩いて居る。指先を見ずに叩くのは、タイピストの茶飯事であるのだろうけれど、私たちは驚くの外は無い。」

女史を單に一個のステノグラフイストと思つて此のオフイスに訪ねて來た者がありとすれば、何よりも先づ此の日本づくめ

の室内装飾に奇異の感を催うすであらう。先づタイプ、台を見よ。花鳥の彩色繪を描いた小屏風を無理に盤の前に立て廻してあるでは無いか。又棚の上には薩摩焼に武者繪を描いた花瓶と急須と茶器が並べてあり、天井の一隅には天照皇太神の神符が貼られ、別の小机には出雲のお札を貼つてある。そして更に驚くことは女史が出雲の神の御利益を知つて居て、

『ですから私も大いに縋つて居るんです』

と常談を云つたことである。

私は去りぎわに女史を廊下の窓際に引張り出して寫眞を一枚取り、萬一現像したら進呈することを約した。そしてウヰルソン博士の回答書の寫しを女史から貰つて、其處を出ようとすると女史は後ろから浴せるやうに、

『是から何處へいらつしやるの。そして何時にお歸りになる？』

と畳みかけて聞いた。

『今日はハーバート大學から、レキシントンの古戰場を見て、若し時間が有つたならエマスンの墓に詣り度いと思ひます。』

『それでは七時頃になりますネ、今日は晩餐にお招きし度いと思ひますから、食事をせずに歸つていらつしやい』

私共は其機會を、私共の返禮に利用するつもりで快諾した。

それから其の日は多事で複雑な雪中旅行をして、八時頃ホテルへ歸つて見ると、シヤーウツド女史の置手紙が有つた。我々の歸りが遅いので女史は態々ホテルまで見に來て呉れて、行違いの無いやうに連絡の手紙を置いて行つたのである。私共は實は身體綿の如く疲れて居たけれど、殘る隈なき親切に感激の情を禁じない。早速顔と手を洗ひ、カラーを換えて俟つて居るところへ女史から電話が掛つた。

『今、一人の友人と一緒に行きますから』

と豫告があつて、十分と經たぬ間に姿を現はした。友人と云ふのはミス、マクロアと云ふ女流辯護士、色白のスラリとした格好で、よく響く聲で初めから滔々と語る人であつた。ホテルを出る前に、此晩餐會は我々が主人役になり度いと申出でたが、女史は

『あなた方はお客では有りませんか。日本から米國へ來て、日本人が主人役になると云ふ法は有りません』

と云つて肯かぬ。さうして自動車のテップまで拂はせようとしない。

自動車の着いたところは、ボストン市婦人クラブであつた。堂々たるマサチユセツツ州の議會に比べては、比べものにならぬけれど議會の横に肩を比べて、左まで見すぼらしい建物では無かつた。ボントスに於ける第一流の社交倶樂部であつて、五

千の會員を有し、然かも會員たることには、二名以上の會員の推薦よりも其の人物を保證するほどである。いくら富豪でも會員一人の紹介で茲に會食することは出來ないので、シヤーウツド女史は特に日本びいきの親友たるマクロア女史を煩はし、兩人の紹介で私たちを其の食堂に招いたのであつた。

食事中、マクロア女史は、

『日本人は女のやうにしとやかで小食ですネ。私たちの方が男のやうに活潑で且つ大食でせう。あツはツはゝゝゝ』

と笑ひ出した。

食後又自動車を飛ばしてシヤーウツト孃の家に伴はれ、昨夜よりも一層うちとけた話に夜を更かした。マクロア女史の曰く、

『私はミス・シヤーウツドのように親しく日本の學生を世話した經驗が有りません。併しながら日本人を迫害する加州の諸法案がアメリカ精神に甚しく背馳して居ることを信ずるので、日本人の優劣を問う前に先づ加州自體が正しき法律を持たなければいけないと主張するので有ります』

と云つて、ミス・シヤーウツドと自分との日本人問題に對する態度の相違をほのめかした。シヤーウツドの日本人問題はハートの所産であり、ミス・マクロアの夫れはヘツドの所産であると云つてあざい、

『あの馬乗りですネ』

『はあ、馬乗りがナ』

と我々が鸚鵡返しに返事をするかせぬかにマクロア女史の脣から堰を切つて落つる水のように、馬乗りの經驗談が溢れ出た。

『私は以前D市に居ました時、婦人で馬に乘るものはまだ一人も有りませんでしたから、若い娘だつた私が馬乘り而かも横乘りで無しに男子のように馬の背に跨がつて乘つたのを見て、町の人は皆驚きました。どうせ馬乘をするならば横乘りなんかぢや面白くありません、矢張り眞向きに乘るに限ります。衞生上の見地から色々と女の馬乘りを批難する者も有るようですが、男が乘るものに女が乘れないと云う結論を得ることは、乘れると云う結論を得るよりも困難です。ですから私は落馬さへしなければ女の馬乘は批難すべき限りで無い、と申す持論です。そうして其の落馬と云うことが何もセツクスに關した事ぢや有りませんものネ。却つて女のお臀の方が据りがいゝから落馬率も男子に比べて少いかも知れませんですネ。若し夫れ女の馬乘が子宮を損うなど云ふ想像論は一顧の値打もありません。』

と銀鈴のような聲で大變な見幕で有つた。私も別段異存は無いから

『全く貴說の如く思われますナ』

と同意を表した。

ミス・シャーウッドの話は馬でも鹿でも無い、徹頭徹尾日本の國と日本人とそして所謂氣狂いじみた加州人の噂で持切つた。重復を避けて其の話は一切省くが、日本人の片割れたる我々兩人を一刻も永く引留めて置き度い樣子が通り一變のお世辭とは思へなかつた。十時頃マクロア女史が辭去する時、我々も共に歸ろうとしたけれど、ミス・シャーウッドは頑として許さない。手を取らんばかりに引留められて又々一時近くまで話し込んだ。

『日本の言葉は敬稱の使い別けが一番面倒なんですッてネ、私などは困ることでしよう』

と女史は日本の旅を頭の中に描いて話しつゞけた。

明朝は早くボストンを立ち、途中ニウヘヴン驛に下車し、エール大學に朝河貫一博士を訪ひて、夜中になつてもいゝからニウヨークの寓居まで歸り着こうと云う豫定である。なつかしき米國を去りてロンドンに渡るも近日中である旨を告げる時、我々の聲はさすがに曇つた。戀に上下の無い如く、友情に國境は無い。凡そミス・シャーウッドのように他の腹中に赤心を置いて、それで人を動かさぬ者が有ろうか？日本人でも癪にさわる奴は癪にさわる。異人種人でも誠實な者は親愛せずに居られない。否な人種の差違や言語の不通など云う枝葉の點を忘れさせられて了う。

我々は女史と他年日本に於ける再會を祈り、熱き握手を振りつゝエレベーターの戸口で別れた。屋外に出て自動車に乘ろうとして女史の部屋を仰ぎ見ると、女史は赤褐色のカーテンを半ば搴つた際間から顏を出して、頻りにキッスを投げて居た。

六、おばさんの宿（上）

ホテルに歸つても目が冴えて睡れぬまゝに、ナイト・ドレッスの上に外套を着け、其の上に襟卷を結んで報知新聞社へ送るべき原稿を書き初めた。スチームの絕えた室内の寒さが身にしみて、種々想念が亂れ勝ちであつたが、午前三時から四時半まで精神が統一して五六枚書くことができた。一睡して起き、出發前に自動車を急がせてバンカーヒルのワシントン紀功碑を寫しに行き、十時發の汽車に間に合うように、南停車場へ驅けつけた。

午後一時ニウヘヴン市、驛前のレストウラントで食事を濟ませ自動車を約束してエール大學に朝河博士を訪う。博士は日本人嫌ひと云う評判を取つた人だから、我々も喰はず嫌いをされる事かと思つて、大學寄宿舍の一房をノツタすると、英書、佛書、ラテン書の中から、白髪の首を出してなつかしげに迎へられた。ドアの見返しにミレーの晩鐘を貼りつけたのと、一方の寫眞立てに坪内博士や某々外人の寫眞を飾つた以外は裝飾品らしいものも無く、古書の匂むせるばかりの書齋の中に、氏は淋しく愉快そうな顔をして大きな痰壺に向つて、元氣好く血まぢりの唾を吐いて居た。膝を容るゝに足るとは日本に於ける小生の書齋のようなのをこそ云うのだらうと思つて居たら、朝河博士の古色蒼然たる書齋は遙かに其の上を行つて居る。本箱や本立に溢れた書物は壁に沿うて並べられたり、フロアの上に累卵の如く積まれたりしてある。稀に脊革の所え四角な字で新井白石全集とか、法制史書目解題とか現はした本を見ると急に氣強く思はれる。

『昨日蟲歯を抜きまして、まだ血が出まして』

と血を吐きながら、氏はエール大學の現狀を語り聞かせた。氏もエール大學出身者の一人として母校の學生に法制史を講じて居るので、日本人の學生は現に五六人居るとの事

『西洋人の東洋研究ですか、まあ研究はして居ます。同時に日本も研究されて居ますが、何と云つても支那の研究が一等でしよう』

と云はれたのは同感である。古本屋をのぞいて見ても、支那に關する西洋人の著述は日本に關するものに數倍するから。

午後六時教授俱樂部の食堂で、博士の饗應を受け、非常に見事で美味なオイスターに舌鼓を打ちつゝ時の經つのを忘れて話した。他の教授連も靜かに食事をして居た。その人たちが遠くの方から朝河博士と目禮したりする有様が、純然たる敬意の交換であるのを見て、加州あたりで排日問題を賣物にして居る政治家の品等を考へざるを得ぬ。博士は日本人が嫌いか知らないが、日本人の爲めに最も素晴しい仕事をして居る一人である。加州邊の無學な政治家が知りもせぬ癖に、東洋文明の質がどうのこうのと騒いで居る間に、博士は米國の最高學府の一講座を擔當して、アメリカン・ボーイに教へて居る。こんな皮肉な事は滅多に無い。又親日運動のうちでこれほど有意義な仕事は無い。併し親しく其の人に接すれば、少しも得意な所や、はづんだ所の無い、極めて、物靜かな書齋人である。靜かさを通り越して物淋しく思はれるほどである。聞けば今から十年前夫人を喪ひ、孤影悄然として寒素な生活を續けて居る。前にも云う通

く、博士自身は淋しく愉快さうであるが、見た眼は氣の毒である。

夕食後月を踏みつゝ公園を横切り電車まで送つて貰つた。電車が動き出して不圖氣がつくと、博士は路傍の雪の中に立つたまゝ、こちらを見て熱心に〳〵帽子を振つて居た。私は『日本人を愛する日本人嫌ひ』の熱情を此の篤學の士に見た。

ニウヘヴン驛からニウヨークまで二時間餘りを費し、そこから自動車で明るい大通りを三里ほど走つて郊外なるおばさんの宿に歸り着いたのは十一時であつた。おばさんは我々がキイを用ゐるのも待たず中から扉を明けて呉れて

『能く歸つた〳〵』

と大喜びである。見ればまだ晝の着物のまゝで電氣の下でハンカチのかゞり細工をして居た。

『昨日はお歸りかと思つて殆んど寢ずに待ちました。今夜は必ずお歸りだらうと信じたから、珈琲を沸かして今か〳〵と待つて居ました』

と相變らず其の言葉が先づ暖かい。物音を聞つけて、二階のアパートメントを借りて居る森村組の前浪君も降りて來た。ボストン、セーラム、コンコルド、エール大學などの話を前浪君が聞きたがるに不思議は無いが、土地ツ子のおばさんがあの邊の話を珍しがつて疊みかけて聞くのは面白い。それはいゝが我我はやはり日本人と話す方が勝手がいゝものだから、おばさんから聞かれた事までも、日本語で前浪君の方へ返答して了うので、おばさんはもどかしがり

『ボーイ等だけで互に話すことを止めて、すべての人が私一人に向つて話してくれなければいかん』

と不平を並べる。

『私のクレードルを見て來ましたか』

『えゝ、たしかに見て來ました』

そして

『イツト、イズ、ウエリー、ナイス、クレードル』

と褒めたら、見る〳〵おばさんの機嫌が直つて

『イエース、ウエリー、ナイス、クレードル』

と子供のやうに相槌を打つ。

おばさんが自から『我が搖籃』と謂つて自慢するのは、ニウヘヴン驛から少し先きのハートフオート町のことである。成る程町も美しく上品である。教會も壯麗であるが、おばさんの誇りは其の外に在る。いつか夕食後の夜ばなしの折に

『ボストン附近は米國中で最も清淨なところで、英國から移住したピユーリタンの血と氣風は今も鮮やかに傳はつて居ま

すむウァイルド・ウエスト（西の野人）の人たちと逢ひ、對話には敵なく外國人を排斥するやうな考を持つた者は一人も居りません。自由、博愛、平等の思想は皆なマサチユーセッツ州から出るのです。（……とおばさんは石炭かダイヤモンドのやうに云つて）私も幼少からさういふ思想の家庭に育てられ、詩を讀むことが大すきで、十八の歳に今は世に亡き主人から貰つた只一本の手紙で、一生を定めたほどのセンチメンタルな子でした。主人はあの通りの風采の人で、（と壁の寫眞を指し）マーチャントでしたが、男らしい、やさしい、嚴格な人でした。主人はどれほど私を愛して呉れたでせう。私は又どれほど主人に信頼した事でせう。私は、私は……』とナイス、クレードルを蹴飛ばして了つたことがある。そこで我々は汽車の窓からハートフオートの寫眞を一枚寫したことを告げて、うツかり

『フオア、アワー、スウヰート、メモリー』と口をすべらしたら、おばさんだぶ〱のからだを大業に動かして、

『ノウ、フオア、マイ、スウヰート、メモリー』

と右の人さし指で自分の鼻を差して、半世紀前の思出を追う。

此のおばさんと識つたのも初めは藤本君の紹介である。その藤本君とは渡米の航海中に識り、少くとも米國内の旅行は共にすべきを約したのであるが、私は西部沿岸の旅行に日を過して居る間に、藤本君はヨセミテ、ローサンゼルス、メキシコ、ソートレーキ、シカゴ、を濟まして既にニユーヨークに入り、ミセス・ペックハムの一室を借りて、頼みおいた同行の米人を待つて居た。そこへ私は一九二四年の大みそかの年越しをローサンゼルスなる上山草人君の宅で濟ませて、酷寒のロツキイ山を越え、ソートレーキ、シカゴを巡禮して心のどかにニユーヨークに着いたのは、今年の一月二十二日午後二時であつた。久しぶりでスキ焼が喰べたい爲めに、ニウヨウク第一流の日本料理屋でホテルも兼業する生稻に投じ、其の夜は藤本、武間、前波の三君と共に飽きるほど日本語をしやべり、飽きるほど白い米の飯を喰べた。

生稻を引拂つてミセス・ペックハムの家に移つたのは、夫れから三日ほどして、百年ぶりの皆既日蝕のあつた日の夕方であつた。初對面の言葉にミセス・ペックハムが、日蝕の薄暗い光景に對して何やら詩的感慨を洩らしたことを覺えて居る。藤本君は私のことを『短詩人』と云つて紹介したから、人の好いペックハムは

『日本の大學教授と詩人とを私の家に泊めたのは、マイ・ブライドだ』

と云ひ出して、新聞の詩苑の切拔きを山ほど出して來て、私は悲しい可憐な詩が好きだと女學生のやうなことを云つて一枚づつ朗讀し初めた。そうして一句々々に

『面白いでしよう』

と聞くから、仕方なしに

『えゝ、面白いです』

と答へはしたが、十中八九妙味を解しなかつた。

それが濟むと今度は、ミス・ペックハムがシカゴのロケーションから送つてよこした繪ハガキを出して來て、その手蹟を賞め、寫眞を出して來てその容色を褒めた。ミス・ペックハムは今年二十一歲の美人で、チヤーミングな米國女優のうちでも、特にチヤーミングだと云うのが新聞の定評で有るらしく、繪葉書の文句は母親の手だけあつて悉く詩的であつた。ミセス・ペックハムは俳優入りの大きな活字で我が娘の艶聞を書き立てた新聞を初對面の私に見せて、

『彼は常に二人以上の愛人を持つからツラブルが絶えません。併しそれも彼のような美しい娘としては已むを得ないでしよう』

と云つて濟まして居た。

夫れから私は滿一ヶ月ミセス・ペックハムの家に厄介になり、藤本君と同じ部屋で寢食を共にした。そこへ移つてから二三日すると私は一々ミセス・ペックハムと呼びかけるのが面倒でならなくなつたから、今後おばさんと呼ぶことを提議した。おばさんの意味を說明して聞かせると、ミセス・ペックハムは顏の相格を崩して嬉しがり私がおばさんなら、お前等は私の子供だと云つて、夫れからは我々の事をマイ・サンとかマイ・ボーイスとか云うようになり、外出の都度

『子供等よ、喧嘩をしてはなりません』

と買物袋を腕に通しながら我々の部屋をのぞき込んだ。

『マイ・ボーイがまだ外に一人ある。誰はとそれはお前等の兄さんだ』

と云つて一枚の寫眞を出して來た。寫眞の主は藤本君の前に部屋を借りて居た森村組の某君で、おばさんが病氣をした時親切な介抱を受け、それで初めておばさんは日本人を諒解したのだと云う。おばさんはその寫眞に見入りつゝ幾度も

『ヒー・スコールス・ミー』

とつぶやくから、一體どうしたのだと聞くと、病氣をした時、自分が聞別けの無いことを云うと、能く頭ごなしに自分を叱つて吳れた。あの親切は一生涯忘れられない……と云つて老眼に淚を浮べる。夫れ以來おばさんは日本人びいきで凝り固まり、」

日本人で無ければ部屋を貸さぬことにした。故にときめく活動女優でも、西洋人の事だから様子でも経済は別である。おばさんは亡夫の遺産を杖に、貸間料を杖にして其の日を過す身の上である。我々がたらぬうちに新聞へ廣告でも出して、誰でもいいから希望者を探したら?と度々口を添えたけれど、おばさんは强情に首を振つて

『私は日本人に居て貰ひ度い。日本人なら私は安心する。日本人は初め何も知らぬから世話が燒けるけれど、併し日本人は皆なゼントルマンだ。何ケ月空いて居てもいゝから私は日本人を待つ』

と云つた。

ところが、此の風潮はひとりおばさんに限らない。東部アメリカの人は、爭つて日本人を置きたがる。日本人を知らない爲めに毛嫌ひする者も偶にはあるが、日本人を知つて日本人を歡迎する者の方が、日本人の數よりも多い。それ故東部アメリカでは、間借りをしようとする日本人の困難は少く、日本人に間貸しをしようとするアメリカ人の困難の方が多い。

一と月の間に我々がおばさんから受けたような懇情を、日本人からと雖も無暗に受けられはしないと思う。前後不次第に二三の思出を書き留めて置かう。

七、オバサンの宿(下)

私は西部に居る頃、日本人街から脱出して西洋人の家に置いて貰はうと思つたが、教會の縁故か特殊の關係を有する者でなければ、白人の家庭に同居することは絶望であつた。そこで私と西洋人との交渉は、街頭かオフイスで會うことのみであつた。西洋人の家の中に入つて、其のプライベエトの方面に熟するようになつたのはおばさんの宿を以て嚆矢とする。併し初めておばさんの宿に移つた頃は、今から思へば西洋風の生活について殆んど不案内であつたから、箸の上げ下げにおばさんの指南を受けねばならなかつた。第一おばさんの言う言葉が私には少しも聞取れなかつた。外の人よりも取り別け聞取りにくい發音をするように思はれたが、前浪君や藤本君は

『いゝえ、そんな事は有りませんよ、比較的わかりいゝ發音ですよ、おばさんのは』

と之を否定した。おばさんは同じ事を五遍も六遍も繰返して、噛んで含めるようにナイフやフォークの扱ひ方を教えて呉れた。もう其の頃藤本君は餘程修業が積んで居たから、私の解し得ないところは、藤本君が代つて聞いて呉れた。私に

う事でいくら藤本君を煩はしたか知れない。

『ストロプルウには弱りましたネ』

『あの一語ですつかり悲觀して了つたんですネ』

とよく二人はそれを語り出しておばさんに笑はれた。それは桑港に上陸後私の中耳炎がやゝ恢復して初めて町を散歩した時であつた。咽喉が乾いたので飲み物屋に入りソーダ水を命じたところ、賣子の美人愛くるしく首をかしげて

『ストロプルウ?』

と聞くのが何の事やらわからなかつた。二三度ストロトプルウを繰返しても我々が顏を見合はすばかりで返辭をしないので、美人は終に吹出して棚のジユースの瓶を見せて、之を入れるかと尋ねた。それで漸つと苺入りのソーダ水に有りつく事ができた。

其の晩ホテルに歸り二人は額を鳩めて

『向うの發音も惡いのだけれど、今茲でそんな理屈を云つても初まらない。是ぢや此の先き永い旅が思ひやられるネ』

と悲觀した結果、藤本君は一刻も早くシカゴまで伸して白人の家庭に住み込もうと云ひ出し、私は日本人を歡迎するミス・ライヤンの所へ會話の稽古に通うことになつた。

おばさんは

『暇さへ有れば話せ、用が無くとも話せ』

と云つて少しも五月蠅がらずに話相手になつて呉れた。併し私は用が有つても餘り話さぬ方だから、會話の上達は覺束なかつた。

おばさんも他の日本びいきの人と同じく、日本に行き度い希望を有つて居た。いつもそれを云い出しては

『バツト、イツト、イズ、ツーマツチ、エキスペンシブ』

と旅費の無いことを歎息し、

『けれども待つておいで。私は泳いで行くから』と果ては滑談にまぎらした。

我々が活動寫眞を見て歸ると、おばさんは待兼ねて映畫の筋を語らせた。片言と手眞似で荒筋をしやべるのを、度々助け船を出して私の言葉を補足しながら、それでもどうやらこうやら大體の飲み込みが附くと、此の上も無く樂しげであつた。私がピーター・パンの原作を買つて來たのを見ると、是はアメリカ第一等の美しい話だと云つて、梗概を語り聞かせたあと、日本のお伽噺をせがまれて閉口した。

自分の生活を時間で拘束されることの嫌ひな私は、寢足らねば起きないし、空腹にならねば食べない。外出しても興が盡きぬうちは歸らないので、時間の正しい西洋人が快く思うわけは

無い。それにも拘はらずおばさんは、
『日本人には日本人の生活法が有る』
と云つて、一度も私を責めはしなかつた。いくら日本人でも私のような生活法は稀有であるが、先方でそう云つて呉れるのを好い事にして、自己流の生活法で押し通した。朝食だけはおばさんに拵らえて貰う約束であつたから。おばさんは私の起きる前に何ぺんベーコン・エンド・エツグを暖ため直し、何ぺん珈琲を掛けたり卸したりしたかわからない。時には不機嫌ぢや無いかと氣遣れのする事もあつたけれど、
『おばさん、グツドモーニング』
と一と言云ふと
『グツドモーニング、ツーアーリー』
と常談を云つて喜んだ。餘儀無い用事で朝の内に外出する時は、委細を藤本君に托して出て行く。大抵私より早く寝て早く起きる藤本君が、私の爲めに美味しい朝飯を作つて下すつたことも二度や三度で無い。

夜は何時になつてもおばさんは我々の先に寝ることをしない。居睡りがつく程疲れた時でも、我々が寝仕度にかゝらぬ限りは、共に起きて居て、我々への來客を心から歡待して呉れた。夜食後の茶菓とか果物とかは、最も多く我々の旅情を慰めた。

かくの如くおばさんの待に和氣であつたが、只一つ私に我慢のならぬものが有つた。それは藝能人で夫と別居してゐると稱するS夫人が、折々やつて來て蓄音器に合せてダンスを教へて遣らうと云ふのである。大概のダンスに感心し得ない私は、S夫人の色ツぽいダンスには閉口するの外無く、頃合を見て自分の部屋に引取り仕事をして居た。おばさんは大變それを心配して幾度も私を誘いに來た。そして私の態度の餘りに非社交的なのを見兼ねて、此の時ばかりは
『アメリカでは夜は働きません、あなたも一緒にお遊びなさい、一體あなたは餘りにシリヤス過ぎる』
と果ては私の手を執つた。私は
『日本人は夜も働きます。私はダンスを好みませんから、失禮ですが』
と最後まで拒絶した。

夜毎のダンスを重ねるうちにS夫人は藤本君の慇懃なところに心を惹かれる様子であつた。後ちには藤本君を抱えての踊りかたが段々露骨になつて來た。

夫人の歸つたあとで藤本君は
『ダンスも好いが腕香が臭くて――』
と顔をしかめた。おばさんがその顔を見て心配して尋ねたけ

れど、藤本君は顧みて他を言つた。

ミス・ペックハムの同業者なるドナルソンと云ふ六呎以上の大男が來た時は、肥滿せるおばさんですら根付けのやうにしか見えなかつた。その晩は非常な大雪であつた。ドナルソン君は二百パウンドの身體を、厚い外套で包み、雪に塗れて入つて來た。拳鬪家なぞならばいざ知らず、よくもあんな大きな活動役者が有つたものだ。ドナルソンとおばさんとは今年の雪に就いて語たり合つた。私がニウヨウクに着く半月ほど前に降つた大雪は二千五百人の雪除人夫で足りず更に四千人の臨時人夫を雇ひ、消防隊も參加し二百萬弗の費用をかけて漸く掃除した。一時は馬も車も交通杜絶し、海岸線の汽車は遲着し、汽船も出帆を見合せ、凍死人は日に三四人づつ無いことは無かつた。六十年目の寒さだと云ふことだ。男體山のような活動役者と女體山のやうな女優の母親とが『今度の雪も積らねば好いが……』と云ふのを聞いて居ると、日本の山家で獵師と樵者が榾火に當りながら語つて居るのに異らない。

おばさんは此の大男を我々に紹介した。ドナルソン君は目下露國の公爵に扮して居ると云つて明らかに得意の風を示し、

『うをツほツほツほ』

と笑ふ聲は食器棚も引つくり返しさうである。おばさんは露國のヂュークが何だ？と云ふ氣があるので、藤本君や私などに居て貰ふことは、我々の誇だと例の誰にでも一二度づつは云ふ言葉を、此の大男の頭にも叩き込むのであつた。ドナルソンは無論おばさんのプライドを承認して、

『イエス、うをツほツほ……』

と左も愉快さうに笑つた。そしてポケットからカーネギー・ホールの入場劵を二枚出して我々に呉れた。其晩カーネギー・ホールにはコリッツのモザルト誕生記念演奏會があつた。私は藤本君、前浪君と肩を寄せて自動車に乘り霏々と降る雪の中をカーネギー・ホールに急いだ。

カーネーギー・ホールの沿革と構造を茲で美文的に叙すればいゝのだが、ただ立派だと丈け云つて置く。西洋音樂もわからぬけれど、其の夜の曲目が同じ折返しの譜を重ねたクラシカルなものであることゝ、氏のヴァオリンがいら〳〵したヴアイオリンと違ひ、ごく落着いた氣分を出してゐることは私にもわかつた。記念樂が濟んだ後で氏のピアノに氏の夫人が十八世紀時代のスピネットを合奏した。それが又馬鹿に雅味に富めるものであつた。

翌日かの晩に往來でドナルソン君に會つた。我々が昨夜の禮を云ふか云はぬに

「面白かつたでしよう、ウオンダフルだつたでしよう、ラをツ・ほツほ」

と頭も肩もゆすつて大得意である。米人の眞率、無邪氣、是だから憎めない。

おばさんは來る人毎に我々の話をして紹介した。『なぜこんな人にまで紹介するのだろう』と打算的に我々が考へるのは寧ろ東洋流の疑問だつた。おばさんは誰彼を問はず一切の知人に紹介し、果ては自分の方から出かけて行つて、老友の間に新來の日本人を吹聴して廻り、時にはその友人を晩餐に招いて我々と引合はした。多忙な私は甚だ難有迷惑であつたが、それにも拘らずおばさんの親切は、滾々として泉の如く溢れ出た。我々は返禮のつもりで來客の母娘とおばさんを活動寫眞に連れて行つたりすると、彼等はその些細な好意を十倍にも受けて、別れるまで禮の言葉を繰返して止まない。

そのような晩餐會の費用を我々が負擔しようと云つてもおばさんは決して同意しない。そしてカラーの洗濯賃が一セント足りなくても、必ず請求する。米人を拜金宗だとばかし思つてゐた私は、おばさんの金錢に對する態度を見て、やはり米人の私生活は政治上に於けると同樣に理想家の實際家だと云ふことを知つた。筋の違つた金は取らぬ。とるべき金は必らず取る。そして其の多寡を論じない。金の多寡を見ないで道理を見る。又他人からの饗應や贈物は其の代價を見ずに。その好意を見る。我々二人で雪の道をいたはりながら日本料理屋へ案內した時の、おばさんの喜びかたなどは今でも眼に見えるやうだ。

我々の出立が近づいた或晩おばさんは、非常に感傷的になつて

『お前等の前途は多望であるが、私はオール・ゴーンだ。私は此の年で再婚の望も無い。毎晩私は床に入る時、明朝このまゝで永久に覺めされと願はぬことは無い。此世では何をする張合も無い。今まで色々の人を愛したが其の人だちは皆な行つて了つた。私は譬へば流し木が、あつちこつちの岸に觸れながら遂に海に入つて再び歸らぬような身の上だ。死後の世は信じられない。死後の生を信ずる確證は一つも無い』

と藤本君の領分へ話頭を轉じた。藤本君は私が日本から持つて來た熨し餅で汁粉を拵らへると云つてケツチンでゴト／＼やつて居たが、汁粉の鍋を持つて座に就きながら斷然たる口調で

『死後の世を信じないのは不幸だ』

と謂へば、おばさんは直ぐに

『イエス、眞に不幸だ』

と應じた。

『死後の世は信じないけれども、私は夫からの最初のラブ・レツターを棺の中に入れて貰うつもりで居る』

と知らずく自分の説を裏切つた。私は是も日本から持參の木の蝶鐵の鑵をこぢ明けながら

『おばさんは未亡人になつてから、そんな考を持つようになつたんですか』

と云うと

『ノウ、私は娘の時から悲哀な事や淋しい事がすきだつたのです。それだから東洋のミスチツクとセンチメンタリズムは私の最も好むところだ、日本人の好きなのも夫れだ』

と云つて又詩的な目を輝やかした。

二月二十一日、私は七ケ月ぶりで米國を辭した。その日おばさんは朝から泣いて居た。

『再び逢うことは有るまい』

と繰返した、我々は

『五年後には再會する』

と當座のがれを云つて慰めて、三人で十四丁目キユナード會社の棧橋へ自動車を飛ばした。巨船アキタニヤの甲板から棧橋の見送り人を見おろして居ると、群衆の一番前線の所でおばさんがハンカチで涙を拭いて居るのが見える。ロンドンへ落ちついてからも、日本に歸つてからも例の詩的の手紙が追つかく來る。

八、メーソン君

親日派として日本に聞えて居る知名の士の外に、日本と日本人とを愛好する米人が、東部にはどれほど居るかわからない。それはニウヨーク附近に居る二千有餘の日本人が良質で、米人に指彈されるようなことをしないのと、東部米人の思想がヨリ多く合理的であるためだらう。二千人の四分の一は家庭を有し、家庭の半分は白人の主婦を有して居る。白人の主婦は日本人の旦那さんを仲々大切にし、日本人の旦那さんは、白人の奥さんを仲々やさしくする。其の間人種問題も何もない。言葉が通じなくとも、戀はエスペラントの役を勤めて、双方の意志を疎通せしめ、一生涯を結びつけ、其の愛の實を藉りて人種偏見を見事に反證する。ニウヨクあたりで日本人と結婚したがつて居る娘さんは、日本人に部屋を貸し度がつて居るお婆さんよりも多いかも知れない。日本の娘さんに持てない人は、緊褌一番、ニウヨーク邊へ出動して見てはどうか？

本年一月の末であつた。私は藤本君に連れられて、ニユヨー

クに唯一つある猶太人の小學校を參觀した歸りに、西二十三丁目の五十三番地から五十七番地まで占領せる森村陶器店を見せて貰ひ、又地下鐵道でウォールド街に出て正金銀行で金を受取り、更に溯つてウォールド・ビルヂングなるユニオン・プレッス・アッソシエートに朝日の特派員楠田市平君を初め內外の同業者諸君を訪問した。私が大の日本びいきで聊道の渡り問まり屋としてロンドンタイムス通信員のメーソン君に紹介されたのは其の時であつた。いや夫れでは順序が逆つた。初めメーソン君に紹介されて、メーソン君の紹介で楠田君と相識つたのである。楠田君の部屋へ行くのにメーソン君は私の腰を抱へるやうにして廊下を押して行つた。西洋人ではメーソン君は小さい方だし、日本人では私は大きい方だから、二人が並ぶと私の方が二寸ほど大きいのであるが、日本人はすべて可愛らしく見えるとか云つて、私を子供のやうに扱つて嬉しがつて居た。私はニウヨウクの眞ン中で自分より二寸も介の小さい西洋人に子供の如くいたはられながら、日本人——それも同業者に紹介されて

『私はYです』

『私はFです』

『どうか宜しく』

『どうか宜しく』

と初對面のおぢぎをするの必要あることに困つた。

私は第一回目からメーソン君が好きになつた。自由な風、快の強い近眼鏡を正直さうに目に掛けて、ごく解りやすい英語で、打とけて話した。總じて米國人の動作ぶりは相手に親しい感じを與へるうちにも、メーソン君は態度に暖かく素朴な感じを與えた。中一日置いての午後七時からお茶に招かれたのを快諾して藤木君と二人で出かけると、日本人會書記の角田柳作君や紐育博物館の日本部に囑託されて來て居る津田文學博士及びコロンビヤ大學のカレッヂを卒業せし田中女史などが集つて來た。又してもメーソン君は是等の日本人を私に紹介して與れて、それから私の望みを納れて書棚を据えてある所に案內した。

書棚は台所を通りぬけた所の、日本で云へば納戸のやうな小房に仕つらへてあつた。台所で折角茶菓子を拵らへて居たミセス、メーソンとミス・メーソンは、主人公を先頭に五六人來客ドヤドヤ台所へ闖入したので青い眼玉を大きく開いて驚いた。メーソン君は其の方へは何の說明もせず後ろを振り返つて愉陽氣な聲で

「ジス、イズ、マイ、ケッチン」

と叫んだので夫人もお孃さんも

『ホツホツホ……』

と笑を爆破させメーソン君も

『アッハッハッハ』

と小さなからだを反らして笑つた。來客の後ろの方で田中女史が、日本の女らしく

『ホッホッホ……』

と四疊半式の笑を洩らした。

書棚には『デー・バイ・デイ』を初めとして、日本關係の著者は殆んど網羅してあつた。

『自分はクリスチャンで有りません、神道家です』

と自分で披露する丈けあつて、神道に關する書物が揃へてある。私は筧博士の古神道大意を誰かに翻譯して貰つて讀むことを勸めた。其他シャーウッド女史と共通の日本研究者が澤山ある。シャーウッド女史の飾り手をつけぬ方面では孔子、老子、王陽明、それに杜甫の詩などが見ゆる。應接間に歸つてから、メーソン君は老子と王陽明の思想を比較して何やら細密なことを述べるつもりで有るらしかつた。併し夫れは云ふ者の不備と聽く者の不用意の爲めに、能く徹底せぬ間に話は流産した。そして話は又神道の讃美に戻つた。メーソン君の說に依れば、神道は宗教であらうと無からうと夫れを穿鑿する必要は無い。現在の人間の有する宗教思想の源を爲すものが即ち神道であつて、純の純なるものである。神道に含まれたる清淨と簡素の二つの思想は文明中毒の現代人を救濟すべき福音である――と云ふのである。英學者で哲學者なる角田君がニヤリ／＼しながら是に半畳を入れて行くので、メーソン君躍起となつて神道の爲めに氣を吐く。角田君は少しも熱しないが去りとて鉾を納めもしない。兩々自說を執つて意外の論戰となつた。

メーソン君突然立つて奧から一枚の寫眞を出して來た。それを私の目の前に突きつけて

『此の人を御存じですか』

『いゝえ、一向知りません』

『そんな事は無いでしよう。あなたの親友の寫眞ですが――』

と餘り調子が眞面目なものだから、私も釣り込まれて刮目して見直した。神主の衣冠束帶を着け、笏を構へて横向きに立つた姿は、十六代將軍の東照宮參詣と云ひ度いところだが、私の知人のうちにこんな人は思當らぬ。メーソン君面白がり

『あなたはあなたの親友を忘れてはいけません、アッハッハ……』

と身を反らして笑ひ出した。それで初めて夫子自身の變裝だとわかつた。

『こんな着物が何處に有りましたか？』

と聞くと

「ミスター・キムラ・クワンジザイのです」

と云ふことであつた。觀自在が木村駒子氏の良人たるはいふを俟たぬ。

やがて食卓が開けて妙な物が配られた。誰ありて夫れが何だか云ひ當てることが出來ない。メーソン君も夫人も嬢さんも夫れが面白くて／＼ならぬ樣子。私の右横に坐つた嬢さんは矢繼早に私に

『當てゝ御覽なさい、さあ／＼』

と云つて迫つたが、フォークで扱つて見ても、口の中へ入れて見ても皆目得體が知れぬ。それで居て風味は好い。私は一體トーストは喰べても喰べないでも構はぬ程度である。どちらかと云へばトーストで腹を滿たすことは迷惑な方であるのに、其の夜のトーストばかりは不思議に美味く喰べられた。それは全くその上に掛けた山芋ようの得體の知れぬ物のおかげであつた。譬へば豆腐の嫌ひな者があんかけ豆腐を賞美した格である。扨て併し山芋やうの物の正體は何としてもわからぬ。最後に嬢さんの種明しに據れば、チユースにビールを調合したものであつた。そのぐらいの事で、こんな得體の知れぬ美味い物のできるのが皆に不思議であつた。

夫にその選に當てられた。[illegible]かならば[illegible]に。[illegible]の御馳走に客に對する主人夫婦の[illegible]の如き大根の鹽の香を活かす味のみならず、是に[illegible]白のミルクの鮮らけさのみならず、誠に此の邦人に對するメーソン一家の人の心づくしが私には何よりの御馳走であつた。果物きちがひの私は、果物の中でも好物の苺を腹一杯賞美した。

食後のメーソン君は來客の一々に對して生國調べを初めた。客が

『私は上州前橋』

『私は讃岐の丸龜』

などと答ふるあとから、メーソン君は卓上に擴げた大きな日本地圖の其の土地へ、その人の名を書入れて行つた。見ると方々の地名の横に日本人の名が澤山書入れてある。

『是は私の金澤です』

と云つて、能く日本の地理に通じて居た。私からメーソン君へ贈つた日本の繪葉書の中に、甲州御嶽の風景があつたのを捜り出して、メーソン君は地圖で其の位置を示して

『イザナミ、イザナギのミコトが籠られたのは茲ですか』

と奇拔な質問を出した。

その地圖は昔の分間圖のやうに城や山や川をパノラマ風に書入れたもので、高野山の所には獨鈷の繪が描いてあつた。藤本君が

『是は高野山のシムボルです』

と説明するとメーソン君躍り上つて何處からか本物の獨鈷を持つて來て振りながら

『觀音様はラヴの權化、勢至は智の權化、弘法大師の奇蹟は、基督の奇蹟よりも現實的で——』

と權化と云う東洋語を其のまゝ使つて暫らくは佛教を禮讃した。

夫人も孃さんも負けずに日本製の品物を出して來た。伊香保名産と稱する大きなクリ盆がある。百萬遍の念佛に用ゐたかと覺しき珠數がある。象牙に彫つた達磨の像があるかと思へば、大谷光演師の自讃に成る觀音像がある。十六菊を燒付けた九谷風の中皿が一枚持出される。果ては宗湘作、秀吉差料の黄金づくりの佩刀がメーソン君の手でスラリと抜き放されて、ピタリと正眼につけた姿勢の要領が好い。皆がメーソン君を取卷いて夏尚寒き日本刀に見とれて居ると、メーソン孃は人々の袖の下から一匹の青大將をニユツと出して驚かす。やがて夫れが巧みに作られし日本の玩具とわかつて後でも、長崎の不氣味に異りは無く、人々が逃げ廻るのを好い事にして、孃さんは追かけてキヤツ〱と面白がる。度々此の中で日本人を嚇かしたものと見えて、蛇の使い方が神に入つて居る。

そんないたづらをして夢中になつて喜ぶ所を見ると十七八の娘のようであるが、既にカレッヂを卒業して此の秋からコロンビヤ大學に入るので年は二十四とか云う。母親似で西洋人よりも日本人に近い感じのする面差しである。して見れば日本びいきのメーソン君は、其の妻選みに當り、日本人のような美人と云うことを主な條件にしたのかもわからない。三十四五にしか見えぬメーソン君は、妹とも見まごう孃さんを愛らしそうに眺めて

『恐怖のサイコロジーを研究したんですが、學校の成績は優等のAでした』

と云うと、孃さんは再び蛇を取直して

『ですから是も研究の一端なのですよ』

と鎌首をもたげさせる。

壁額の全部も日本の物で占めてあつた。徳川公から贈られた舞子の濱の刺繍や廣重の七里ケ濱や吉田博畫伯の明治神宮、それに西行の『何事のおはしますかは知らねども』の歌の寫しや、王陽明の詩句の寫しなどが、あちこちに配置してあつた。

間にす話し込んで十二時に及んでから辭した。我々はお礼家で受けしメーソン一家の持てなき招待は、然し我々の忘れ難いものゝ一である。其の後も私は殆んど毎日の如くメーソン君に色々の面倒をかけた。どんな忙しい時に、どんな面倒なことを賴んでも、決して厭な顏をせずに、底の底まで盡して呉れた。但しメーソン君のは、日本人なら無條件で好きだと云うのでは無く、其の選擇は可成り嚴格な方であつて、藤田君とあれ程と親しいからと云つて誰の上にも同じ調子を發見することは六ケしいのだと誰かに聞かされた。つまり人種の異同を條件にせず、個個の人間を見て好惡を別つ態度が、西洋人仲間でも偏人と云はれる程度に八釜しい人であるさうだが、私は幸ひに嫌はれずに一家の人から歡待された。

我々がニユヨークを去る前夜メーソン君は再び別れの茶に藤本君と私とを招いた。私は所用の爲め出席し兼ねたが、藤本君が歸つての話では今度も我々の爲めに數名の同胞を招き、殘る隈なき歡待であつたさうだ。

『あの人々と別れて行くのは辛いですネ』

『いつ又會えるかと思ふと暗い心になりますネ』

と語りながら二人はトランクの整理をした。

九、大統領の手すきに

ワシントン府に在る日本大使館で用事を濟ませる爲め、私は武者君と省して外に出た。足一歩館外に出ると、森の都の名に背かず、ワシントン府は商業區域と云はず住宅地と云はず凡てが公園のように美しい。道行く人もニウヨークとは違つて悠々寛かとして居る。家並も低く空が明るくそれにニウヨークから僅か六時間のところだが、すつかり南國氣分で、春雨の後の日ざしは今にも櫻を咲かせそうである。茲の公園には先年日本から寄贈した櫻の並木が植ゑられてある。ワシントンの春景の如何に美觀であるかを語りながら、我々はユウナイテッド・プレッス社にフランツ君を訪れた。

フランツ君はメーソン君の紹介である。生憎不在だから名刺と紹介狀を殘して、そこを出で議會の側のコングレッス・ホール・ホテルに引返した。折柄議會開會中なので、夥しい田舍議員が妻君携帶で澤山泊つて居た。コングレッス・ホール・ホテルは其名の示す通り議員宿とも稱すべき家で、ワシントンでも一流のホテルであるが各室滿員であつた。前觸れも何も無しにやつて來て東洋の旅人が、一儀に及ばず立派な部屋に有りついた。

は勿怪の幸と謂つても好い。

ホテルの食堂も悪くは無いが、晩餐の時のダンスには降參する。ダンスは忍ぶべしとするも、紳士連の妻君奉仕の容々しさは、辛抱ができない。ダンスが濟むと、亭主は大急ぎで席に歸つて、妻君の椅子を直しコートの皺をのばして待つ。すると妻君は鳥が成上つた孔雀のように胸を反らして椅子に腰を掛ける。妻君のからだが安定したのを見屆けてから亭主は自分の椅子に腰をかける。かけるより早く卷煙草を一本拔いて妻君に捧げ、マッチを擦つて差出す。その上にも小取廻しに奴隷の役を勤める。私はそんな風俗を見て居ると吐氣がついて來る。そこで珈琲の茶碗を置くか置かぬに、出て了うことにしてある。

其の晩は町を散步して活動寫眞を見た。寫眞は格別面白かつたが夢遊病者と稱するものは殊に面白かつた。眠りに落つる時の眼と、今度それを開いて夢遊を初めてからの眼とは實に鮮明であつた。何時かも上山君に話したことであるが、西洋の活俳と日本の活俳とは段違いである。性格の理解——それも勿論段違いだし、夫れ以上に段違いなのは表情である。西洋の役者は首を一つ捻ぢ向けても、深い心持をハッキリと現はし得るが、日本の役者は簡單な心持を現はすにも、色々と多くの仕草をする。色々やつてゐるうちに、その綜合から辛うじて或る心持を見物の方で模索するのが日本の活動である。それ故西洋の寫眞は或は何處の一斷片を見ても、その刹那が面白い。日本の寫眞は或る長さの筋を呑み込まねば今何をしてるのやら——極端に云へば怒つてるのやら、悲しんで居るのやらさへわからぬ。それには先づ役者の訓練が違うのである。私がローサンゼルスでユバーサルの撮影を見せて貰つた時の話に、名監督の役者を鍛える方は、全く火花を散らさんばかりだそうである。誰と誰の事だつたか名を忘れたけれど、

「おい、キッスだぜ、戀人と戀人とが命がけのキッスをしようと云ふんだぜ、赤ン坊と乳母とがキッスをするところぢや無いぞ」

と或る名監督が或る名優を怒鳴りつけたのが一つ話であつた。そのような一點紛れも無い鮮明な表情の累積が西洋の活動寫眞である。そして場面の作り方が又まるで日本とは違う。丁度綱を摑んで行くように、事件なり感情なりの頂點のみを寫して、成るべく平凡な過程を省略する。寫さんでも見物の連想でわかることは初めから寫さない。一つの瞬き、一滴の涙が可成り長い推移を暗示して、見物は寫されぬ寫眞の餘韻に酔はされる。日本の寫眞のやうにタラ〳〵と散文的の場面を續けては行かない。場面も表情も韻文的であり、精製的であることが、

西洋の活動を見て珍しく感ぜられる。日本で一年に一度も活動を見ない私が、西洋では暇さへ有れば活動を見たわけである。

其の晩もすつかり感心して小屋を出た。そして日本で使節団から受けた様な感じは何時しか消えて、自分も歓迎者のような嬉々たる心地になつて睡に落ちた。

翌日は日本の紀元節であつた。紬のような春雨が木々の梢を濡らして居る。ニウヨーク アベニウの料理屋で朝飯を済ませてフランツ君を訪ねた。フランツ君は仕事の都合をつけて我々を待つて居て呉れた。

『今日は君等の爲めに案内役を勤めましよう』

と云つて鶯オリーブのソフト帽を握り外に出た。自分で自動車をドライヴして先づナッショナル・プレッス・クラブと名づくる記者倶樂部に連れて行つて役員に紹介した。倶樂部からは私を大統領に紹介するカードを發行して呉れた。大統領に謁見することは、日本大使館からの手續でも容易なことで無いと聞いて居た。現に先年或る大新聞の主事で代議士たりし某君なども、大使館へお百度詣りしても埒が明かないので業を煮して斷念したと云ふ話である。私は必ずしも大統領に謁見するプログラムでは無かつた。然るにフランツ君のおかげで十分ほどの間にその資格を得たから、記者倶樂部の威力とフランツ君の親切

と、[illegible]

大に[illegible]

私は大統領の紹介[illegible]のポケットに納め[illegible]フランツ君の自動車に乗せて貰ひ、今日一日はフランツ君の連れて行く所に行き、見せて呉れるものを見ることに決めた。車は間も無く有名なるナショナル・ヂオグラフィック・ソサイチーの前に止つた。此の地理協會に秘書を勤むる美人が、自分の[illegible]の夫人であることを語る時に、フランツ君は顔を赤くした。アメリカ人に似合はず内氣な表情をする青年であつたが、妙に取られても何でも、案内すべき所へ案内すると云ふがの、矢張りアメリカ人である。

地理協會のやつて居る仕事や、圖書室其の他の設備を述べる暇の無いのは遺憾である。世界各國の地理、人文、歴史などに關する書物から寫眞に到るまで、一として備はらざるは無く、日本に關するものだけでも、嘗て私が日本で見も聞きもしなかつた書物が山のようにある。此の圖書館はフランツ夫人が設計して創めたもので、索引や保存法の上に新工夫が凝らされてある。動植物の標本圖を描く爲めに京都の高工を出た村山君が働いて居た。同君は間接に私の事を知つて居たので、江戸研究の一面を詳しくフランツ君に話し、フランツ君と連名紹介で私を

地理協會のメンバーに推薦して下すつた。

そこを出て或る日本料理屋で村山君の饗應を受けた。フランツ君に世界漫遊の途次、日本に滯在した時のことを追懷して

「銀座の散步は仲々面白うございました」

と提灯や傘のことを話した。

午後はまたフランツ君の案内でリンカーン・モニユメントや大使館を見、ホワイト・ハウスの横から税務局を訪ひ、轉じて内務省に書記官を訪ねて日の暮れがた再會を約して別れた。税務局や内務省に行つたのは、私が大使館で埒のあかなかつた用件を、フランツ君が自分の手で片附けてやらうと云ふ爲であつた。フランツ君はレーン・コートを着たまゝ内務省書記官の机上に腰を掛け、横向きになつて話して居る。頭の禿げた書記官は椅子に掛けたまゝフランツ君を仰いで、孫の話に耳を傾けるやうな風で聞いて居る。聞終つてから一冊の法令全書を開き、關稅に關する所を二三行朗讀して聞かせて莞爾と笑つた。問題は夫れで解決した。

其の翌々日私は大統領に謁見すべくフランツ君に伴はれてホワイト・ハウスを訪れた。その途中私は

「服裝は是でいゝでせうか」

と聞くとフランツ君は旅塵にまみれた私の脊廣を叩いて

「結構です」

と云つた。

その日は毎週一回クーリツヂ氏が、内外新聞社の代表者に向つて、記事の材料を提供すべき定例日であつた。普通に之を新聞記者會見日と稱するのであるが、實はアメリカ政府のニユウス發表日である。私の謁見は夫れが濟んだ後單獨に行はれる筈で、寧ろ其の方が會見とか接見とか云ふ言葉に相當するのである。

思つたよりも小さい、そして質素なホワイト・ハウスの正面右手にある玄關を入ると、其處に大きな守衞が居て我々を迎えた。パーラーには凡そ百名ほどの新聞記者が集つて大統領の手すきを待つて居る。其の中には豫て名を聞く世界的の記者が五六人まぢつて居た。フランツ君は人ごみの中を靜々と泳ぎ廻つて目星しい人を一人づつ私の前に連れて來て紹介して與れた。日本からの記者は私一人であつたが、白人記者のうちでは曾て東京特派員を勤めたと云ふ人が多く、隣のことでも聞くやうに東京の近狀を聞いた。アツソシエート・プレツスのコーテシイ。同パートレイ。ユーナイテツト・プレツスのヴアン・エヴリイ。官報主事のホー・ウイルソン。ロサンゼルス・タイムスのアームストロング。アゼンス・ハバスのレミイなどの諸君と識つた。

いきなり[illegible]出くはしたものであつた。如何にも一

特派員はフランツ君に向ひ

「君は此の頃ひどく痩せたネ、お酢の薬が過ぎるんぢやないか」

と云ひながらフランツ君の長い頭を撫でて居る。フランツ君は傍すがまゝに任せてモウ顔を赤くし、娘のように眼を伏せて

「そう云うわけぢやないんだ。仕事が忙しいもんだから」

と非常に辯解して居る。笑うと唇の兩端とも上がつて、色の白い八重齒が見える。人見知りをしない諸豪の間に立交つては、野武士の中へお孃さんをあしらツた感がある。

いくら平民的の米國でも大統領自身が來訪者を受附けることは無い。フランツ君は守衛の案内で豫め私を奥の一室に伴ひ、大統領秘書官のクラーク君に私を紹介して呉れた。間も無く析が鳴つてニウス發表が初まると云うので私も皆のあとに附いて大統領の室に入つた。玄關から步數にして五六十步、薄暗い廊下を突き當つて一度曲つたと思つたら、もうそこがアメリカ合衆國の元首の室であつた。光線の惡い天井の低い室で、蠟燭の形をした電燈も餘り明るいとは云へぬ。半圓形の机を前にしてクーリッヂ氏は右手に一枚の書附を持つて立つて居た。ドヤドヤと闖入する記者連が第一線を占めて、大統領の發表する

[illegible]ぬもせねば似顔を[illegible]すでもない。ポケツトへ兩手を入れて兩足を踏ん張つて居る者もあれば、大統領の口[illegible]く前にモウ何か質問しようとする者もある。大統領はそれに對し只だ口のきゝにして居る。書類を持つた右の手を胸の高さに上げて、一同のざわめきの靜まるのを一分ほど待つ間の顔には何の表情も現はれて居ない。云い換へれば顔の筋で威嚴を見せようとか、[illegible]のへガメ[illegible]たで不同意を匂はせうとか、能く日本の高官に見受けるような態度をして居ない。身の丈五尺五寸位、眞ツ白な皮膚に女のように桃色が差し、肉も薄く手の指なども、女のと人の感がする。大うつしの活動寫眞などを見る毎に私は、此の三千億の富を有する國へ、三十億以上の歳入の大世帯を預かる番頭さんは、どんなに雄大な風貌を持つて居るかと東洋流に連想して居たが、眼前に見る其の人は、氣の弱いお婆さんのように見えて、外形上には芝居がゝりの何物をも認めることができなかつた。おかげで私は氏の外貌を英雄的に描寫する[illegible]かれる。

クーリッヂ氏はニウス發表の前に、ニコ／＼した顔で何か一つの小話をした。私にはそれが少しもわからなかつたが、折々『メカニック、ホールス』と云う言葉が、氏の口から飛び出し

たので、器械の馬を軍事上にでも用ゐることを云つてるのかと思つた。後でフランツ君に聞いて見たら、それは其の例の某新聞紙に、大統領が生きた馬の代りにメカニック、ホールスを乗廻して居ることを冷やかしてあつたのに對し、大統領自身ガラに無く洒落を云つたのであつた。記者連は大統領の一語々々に

「わあーツ、わツ、わツ」

「ほーツ、ほツ、ほツ、ほツ」

と大口を開けて盛んに笑ひ出した。其の洒落と云うものも私には、わからないけれども、これが謹嚴な大統領の口から出たのと、話題がメカニック、ホールスで有つたのとで、なんでも素敵におかしいもので有るらしかつた。

机のおさひが済むと、氏は例の紙片を見ながら一項づつ新聞材料を提供した。これは其の日のうちに世界の隅々まで通信されたことは云ふまでも無いが、世界を聳動するような事件は一つも無かつた。戦時中押收せし獨逸人の私有財産に關する件とか、官吏任命の件とかであつた。最後にホワイト、ハウス修繕費として五萬弗を計上したことを語つた時は、皆が又笑ひ出した。そうして

「たツた五萬弗ですか？」

と云つたような好意的の顔をして、今更のように狭い室内を見廻した。

指が去つたあとで秘書官は私を大統領に紹介した。大統領は矢張り立つたまゝ手を伸ばして私の手を握つた。ルーズヴェルト氏に手を握られた者は、三日ほど手が痛いと云う話を聞いて居たが、クーリッヂ氏の握手は優美であつた。其の指は婆さんのように骨ばつて居ても、其の皮膚は處女のように軟らかであつた。私が先程から二十分ほどの間に氏から受けた印象は、一言にして云へば、新しき政治家と云うに帰する。私は何の方面にもあれ、衒氣のあるもの、山氣のあるものを好まない。私は直ぐにハツまない、直ぐに小才を働かさない、沈着で物靜かで、有りのまゝの姿の偷高き人に推服する。私は先づクーリッヂ氏の風格が、私の求めて居る政治家のタイプであつたことを見て、今後政治思想界の第一線に立つ人は、すべてこんな調子で有つて欲しいと云う日頃の注文を放棄するに及ばぬと思つた。それと今一つは、最近に氏の發表せし人道的の教書や、海軍擴張案と海相に對する處置などを見て、氏の政策が人類社界の最高理想に立脚せることを私は信ずるようになつて居た。併しそれすらも外交上のポリシイと云へば云へるかも知れぬが、シャーウッド女史から親しく聞いた處に據つても、クーリッヂ氏が人種偏見を憎むの念と、平和を愛好するの念とは、事毎の解決に著

聞いておいでなさうた。苟くも大統領の御前で握手し得ることで、是まで日本に行はれた態度を取つたことは一度も無い、こうして日本の爲めに緑の下の力持ちをして居る者は仲々多い――と女史は話して居た。

これや是やでクーリッヂ氏に對する私の好感は非常に高められて居た。私は心をこめて氏の握手に報ゐた。氏は極めて靜かに

『遠方からお訪ね下さいまして難有うございます。私は此の會見を喜ばしく思ひます』

と私の顔を見ながら述べた。私は

『閣下が常に世界平和の爲めにお盡しになることを深く感謝致します』

『難有う。私は日米の親善を切望して居ります。そして取別け商業條約に於て日米親善の増進を圖ろうと考へて居ります。近いうちに日本から新しい大使の來任さるゝことを私は喜んで待つて居るのです』

と話すうちに氏は片足を椅子の上に乘せ、上半身を稍や曲げて兩手で其の膝頭をさすりながらまだ何か話そうと考へてる樣子であつた。如何にして大統領の外觀を重からしめようかと云ふ舊時代の策略は全く影をひそめ、恰かも大學生が本郷の通り

で開けって居れ大學へ入る時分でもしてゐるようにしか見えなかつた。

話の切れ目を見て私は再び握手をして別を辭した。ファンツ君は

『先生、今日は大層上機嫌でした。いつもはむつつりしたつつりしてるんです』

と丁度學生が教授の噂でもするように話して聞かせた。

芭蕉

野口米次郎

一

「岩に添つた枯木のやうな」松尾芭蕉は、今大阪は御堂前南久太郎町花屋仁左衛門の別邸で、方ならない病苦に横たはつてゐる。元祿七年十月八日の朝。四十前後の頃からでさへ六十位に思はれて來た白髮の頭を彼は擡げて、まだ秋の終らない庭の樹木を眺める。庭にあたる太陽の光は弱い。彼は園女亭の會合から芝柏に與へた句「秋深き隣は何をする人ぞ」のことを考へ、孤獨の芭蕉は、隣人附合を知らない芭蕉は、今寂しく惡寒發熱下痢に苦しんでゐると思はざるを得ない。彼は寂しい。

彼は五年前の大旅行、行程大凡六百餘里といふ奥羽行脚を心に浮べ、陸路敦賀から美濃路に入り大垣へ着いた時、曾良越人前川荊口父子などが、どんなに無事の再會を喜んで呉れたことであつたであらうと彼はしみ／＼と思ひ出す。彼が肩腰を按摩して呉れた禮に、自分の紙衾を如行の弟子鍛冶竹戸といふ男に與へた所、竹戸は、「首出して初雪見ばや此衾」と喜び、曾良はそれを見て、「疊み目は我が手の痕ぞ紙衾」と詠んだ……このことも彼れの忘れられない追憶の一つである。「十月六日といへば大垣を去つて木曾川下りして、大神宮の遷宮を拜むため伊勢へ向つた日だ」と彼は心の中で叫ぶ。彼は木因に與へた「隱れ家や月と菊とに田三反」の句から、木因の送別の句「秋の暮行く先々の苫屋哉」に、「萩に寢やうか荻に寢やうか」と付けた脇のことを考へる。「萩に寢やうか荻に寢やうか」……細り行く年の秋の時節に死ぬといふことは、彼も時を得て居るであらう」と彼は心の中で思ふ。

彼は死の事を考へて戰慄く、然し彼は死を恐れる者でないと直ぐ氣を取り直す。彼は嵯峨日記の中に、「喪に居る者は悲をあるじとし、酒をのむ者は閑をあるじとし、愁に住する者は愁をあるじとし、徒然に住する者は徒然をあるじとす、哀に住するものは哀をあるじとす」と書き、『うき我を淋しからせよ閑古鳥』の句も吐い

一応への信は、則ちそれはないものにはなつてゐる。即ち旅を往とせねばならない。彼は今死に佇するものである。旅を往とするものである。彼は従僕の書疏と正直で主人の死を迎へねばならないものである。彼は既之到道にふ、「になるかなる行末をかゝへて、斯る病難東無しといへど羈旅邊土の行脚、捨身無常の觀念、道路に死なん、これ天命なり』と書いて居るやうに、旅に死んだ古人と等しく死骸を路傍に曝らしても悔はないといふ覺悟は十分彼に有つた。彼は『髪生て容顔青し五月雨』の句を吐いて以來、彼は『おとろへや齒に喰ひあてし海苔の砂』の句を吐いて以來、彼は『死にもせぬ旅寢の果よ秋のくれ』を吐いて以來、決して死のことを忘れなかつた。さうして心待に待つてゐた死が、いよ〳〵今彼の眼前に顯はれて來たのである。彼は死の面前から最後の場合に逃げださうとするであらうか。芭蕉はそんな卑怯者でない。彼は微笑んで死に接するであらう。庭の枯葉は靜に落ちる。彼はそれを眺める『秋もいよいよ終だ……野水の旅立を送つて、「見送りのうしろや寂し秋の風」の句を與へたが、今死へ旅立つ自分はその句のやうな心持がする』と彼は思つて、『腰間に寸鐵を帶びず襟に一嚢をかけて手に十八の珠を携へ、僧に似て塵あり俗に似て髮の無い』一人の旅行者が死の世界へ向ふ寂しい姿を心の中で描いて見る。芭[illegible]に入つて行く。

彼にとつて最も懐かしいものに幻住庵の生活である、詩的に同彼の気分が調和されるやうに感ずる。彼の一生、殊に奥羽行脚以來は其氣分の探求を詩の生命として居る。彼が石山の奧國分山の幻住庵へ入つたのも、この閑寂世界を完全に所有したい希望に外ならなかつたであらう。今彼の心に幻住庵の光景が浮いて來る。

さすがに春の名殘も遠からず、躑躅花咲き殘り、山藤松にかかりて郭公しば〳〵過ぐる程、宿かし鳥の便りさへあるを、木啄のつゝくも厭はじなど、そゞろに興じて魂呉楚東南に走り、身は瀟湘洞庭に立つ。山は未申にそばだち人家よきほどに隔たり、南薫峯よりおろし、北風海を浸して涼し。日枝の山比良の高根より、辛崎の松は霞こめて、城あり橋あり釣たるゝ舟あり、笠とりに通ふ木樵の聲、麓の小田に早苗取る歌、螢飛びかふ夕闇の空に、水鷄の叩く音美景物として足らずといふことなし。……かの海棠に巣を營び、主簿峰に庵を結べる王翁徐佺が徒にはあらず、只睡癖山民となりて、孱顏に足を投げ出し空山に虱をひねりて座す。たま〳〵心まめなる時は、谷の清水を汲みて自ら炊ぐ。とく〳〵の雫をわびて一爐の備へいと輕し。昨た

昔住みけん人の殊に心高く住みなし侍りて、たくみ置ける物好も宜し。持佛一間を隔て夜の物藏むべき所など聊かしつらへり……木曾の檜笠、越の菅簑はかり枕の上の柱に懸けたり。晝は稀々訪ふ人々に心を動かし、或は宮守の翁、里の男共入り來りて、猪の稻食ひ荒し、兎の豆畑に通ふなど、我が聞き知らぬ農談、日既に山の端にかゝれば夜座靜かに月を待てば影を伴ひ、燈を取つては罔兩に是非をこらす。斯くいへばとてひたぶるに閑寂を好み、山野に跡を隱さんとに非ず。やゝ病身人に倦みて世を厭ひし人に似たり。つらつら年月の移り來し拙き身の科を思ふに、或時は仕官懸命の地を羨み、一度は佛籬祖室の扉に入らんとせしも便り無き風雲に身をせめ、花鳥に情を勞して、暫く生涯の計ごととさへなれば、終に無能無藝にして、此一筋に繋がる。樂天は五臟の神を破り、老杜は痩せたり。賢愚文質の等しからざるも、何れか幻の住處ならずやと思ひ捨てゝ臥しぬ。

先づ頼む椎の木もあり夏木立。

芭蕉はなぜこの句通り、頼み甲斐ある夏木立の椎の木の影に安住の世界を得ることが出來なかつたか。假令山野に身を隱すのでないにしても、閑寂の内陣に卽く詩の燈明の前に跪く積りで無かつたか。虚弱な體が山中の冷氣に耐へられなかつたにしても、僅か半歳にしてこの佳山水の詩境を去つたといふことは、餘りに早過ぎる。彼には定期的に遁つて來て、彼の心の平靜を破壞する漂泊の不安がある。彼は風に破れ易い移氣な『風羅坊』であつたのであらう。彼は閑寂を所有しようとして、それを握ることが出來る最後の瞬間に、閑寂からするりと逃げて仕舞ふ。彼は人間界の人として人情生活に入らうとして、他から喜ばれ感謝されさうになると、彼は急に頭を孤獨の殼の中に匿くれて仕舞ふ。彼は閑寂世界にも又人間世界にも、感謝される選民、信用される常民として入ることが出來ない。彼は今病褥に横はつて、夢心地の間に、『精神的落人となつて、漂泊から漂泊へと寂しい人生をとぼとぼ歩いたのだ』と思はざるを得ない。彼はこれを考へて、自分で自分を責める氣分になつて來る。『彼は寂しい。なぜもつと安定の心、一定不動の堅牢性が無かつたであらうか』と、彼は自分の心を譴責する。

この風羅坊の漂泊癖が、いな漂泊宗が、去來の嵯峨の別墅落柿舍に於ける滯在を、僅々半月餘で打切らして居る。『落柿舍は昔の主の作れるまゝにして處々頽破す。中々に作り磨かれたる昔の樣より、今のあはれなるさまにこそ心留まれ。彫せし梁、畫ける壁も風に破れ雨にぬれて、奇石怪松も葎の下にかくれたる』といつた上舍の背景で、『机一つ、硯、文庫、白氏文集、本

[illegible]
ぺ、一瓢の[illegible]たる事の[illegible]に[illegible]、有酒
一壺玉を添へ、夜の人[illegible]物[illegible]より[illegible]來つて貧しからず、我
貧賤を忘れて清閑を樂む」と嵯峨の『嵯峨日記』の最初に書い
て居る所から見ると。彼の滯在は一年にも一年中にも渡りさう
なものだが、さうで無い。彼はもとより人の親切に答へないやう
な沒人情漢でない。風雅から正月に小袖を貰つて、『誰やらが姿
に似たり今朝の春』と打興じ、恐らく假作であらうと思はれる
『月見賦』の中に、「米くるゝ友を今宵の月の客」といふ句が
あり、乙州の新宅で春を待つといふ前書で『人に家を買はせて
我は年わすれ』といふざつくばらんな告白も彼はして居る。彼
が四十一歳の時に於ける吉野行脚中に、去來へ手紙で、『金子二
分御貸可給候、押付貰ひ溜め返濟可申候。されど我等事に候へ
ば、得なす間鋪も候以上』といふ金の無心をしたさうだ。二歩
位の無心は少々肝魂が小さ過ぎるやうに思はれるが、貰ひ溜め
も振つて居る。實際彼は親切な人の惠で生活した。然し彼は人
の顏さへ見れば無心を申込む低級な借金家ではなかつたであら
う。相手構はずに乞食し廻つた不見識な幇間俳人でない。彼は
惠むに六ケ敷い人であつたであらう。彼はどんな場合でも人の
補助に膝を屈した人でない。彼の落柿舍滯在が短い理由は何處

[illegible]
賤と、[illegible]貧賤[illegible]未だ[illegible]に
於ける[illegible]生活は、彼の心をたゞ[illegible]たせるに過ぎなかつた
かも知れない。それに訪問者もずい分ありすぎた。然しこの年月
餘の滯在も彼には無意味でなかつた……第一に彼は、『子規大
竹原を洩る月夜』といふ句を得て居る。第二は、前年の元祿三
年に死んだ杜國を夢見て涕泣して居る。第三に、彼は凡兆夫妻
の[illegible]人を親しく知るに至つて居る。それから所謂正風の圓熟時
代を代表する『猿蓑』が出版されたことは、彼に非常な歡喜を
與へた大事件である。

彼は『猿蓑』から『初時雨猿も小蓑をほしげなり』の句のことを
考へる。これは奥羽行脚から伊勢に入り奈良へ向ふ途上、伊賀
の長尾峠で作つた句で、即興的實感であるに過ぎない。然るに
其角は同集の序に、『只俳諧に魂の入りたらんにこそとて、我翁
行脚の頃、伊賀越しけるに山中にて、猿に小蓑を着せて俳諧の
神を入れ給ひければ、忽ち斷腸の思ひを叫びけん、あだに恐る
べき幻術也』と書いて居る。『……あゝ、これは下世話にいふ
贔屓の引倒しの感がある。眞實の俳諧は不易流行の四字で盡き
てゐる。俳人の數は多いが、だれ一人としてこの四文字を了解し
ない。幻術の力では到底詩の神に接することが出來ない。幻術

を忘れて幻術の奇蹟を與はすのが詩の力だ。俳諧を忘れて俳諧に入らねばならない。自然を忘れて自然に入らねばならない。俳諧に捕はれてゐる間は眞實の詩人ではない……其角嵐雪いづれも有望の俳人だが、まだ〳〵詩の神髓を握つて居らない。」芭蕉はげつそり痩せた大病の體を痩せた手で撫り乍ら、色々と考へざるを得ない。彼は今、近作の一つである「この道や行く人無しに秋の暮」を考へざるを得ない。「あゝ、詩の道は寂い…………孤獨の旅行だ。門人がいくら有つても畢竟無用の邪魔物たるに過ぎない」と彼は心の中で歎息する。

然し彼は門人を忘れることが出來ない。彼が關西の滯在を打切つて一年振で江戶へ向つた時、去來凡兆千那乙州などの親切を無にしたやうな氣がしないで無かつた。彼はどうして彼等に十分の機會を與へて親切を盡させることが出來ないか。彼が江戶の門人連のことを思ふと、しばらく目に歸つて來た彼を迎へる彼等の歡喜の顏が浮いて見える。彼等が力を合せて彼の爲めに造つて與れた新芭蕉庵が彼の眼に浮いて見える。

「三間の茅屋つき〳〵しう杉の柱いと淸げに削りなし、竹の枝折戶安らかに、葭垣厚くわたして南に向ひ、池に臨みて水樓となす。地は富士に對して、柴門景を進めてなゝめなり。浙江の潮、三ツまたの淀にたゝへて月を見る便よろしければ、初月の夕より雲をいとひ、雨をくるしむ。名月のよそほひにとて、先づばせをを移す、其葉廣うして琴をおほふにたれり。或は半吹をれて、鳳鳥の尾をいたましめ、靑扇破れて風を悲しむ。たまたま花咲くともはなやかならず、莖太けれども斧にあたらず、かの山中不材の類木にたくへて、其性尊し。

彼は庭の池から大川から續いて池へさして來る潮水のことを考へる。「名月や門にさし來る潮頭」は其實景の句だ。芭蕉庭の障子へ許六が描いた「雪中の南天」の繪を思ふと許六の顏が浮いて見える。彼は元祿六年五月上旬、許六の木曾行を送る爲め柴門辭を書いた。「……されば其師が畫は精神微に入り、筆端妙をふるふ。其幽遠なる處予の見る所にあらず。予が風雅は夏爐冬扇のごとし、衆に逆ひて用ふる所なし。只釋阿西行の詞のみ、假初にいひちらされしあだなる戱れ言も憐れなる所多し。後鳥羽上皇の書かせ給ひしものにも、これらは歌に實ありて、しかも哀しびを添ふるとのたまひ侍りしとかや。されば此言葉を力とし、その細き一筋を辿り失ふこと勿れ。猶古人の跡をもとめず、古人の求めたる所を求めよと、南山大師の筆の道にも見えたり。」芭蕉は「いゝ送別の言葉を送つて嬉しい」と心の中で

[illegible]……た。

「[illegible]間の[illegible]いつ[illegible]おにしなければならなかつた……

……[illegible]風雅の[illegible]には其儘だ』と彼は思ふ。

彼は併し乍ら、『風雅もよしや是迄にして、口を閉ぢんとすれば風情胸中をさそひて、物のちらめくや、風雅の魔神なるべし。家を放下して杖を友とし、腰にただ百錢を貯へて、拄杖一鉢に命を結ぶ。なし得たり風情遂に菰をかぶらんとは」と書いて居るが、如何にも其文通りである。『風情』とあるは賤へることとの出來ない氣分だ。僅々二年餘で折角出來上つた芭蕉庵をかなぐり捨てゝ再び漂泊の旅に上つた時、江戸の門人はどんなに悲の涙で彼を見送つたであらう。彼は空中に見える詩神の手に招かれて動くこと丈け知る風狂兒である。彼は銀色ゆたかに流れる風のやうな自由兒である。一旦かうと定めた時、彼の心を變ぜしめる何物も無い。表面謙讓な君子に見え、また多くの場合に謙讓の君子であつたに相違ないが、彼の行動自身は、片意地である。今彼は東海道をよちよち上つて京都に入り、落柿舎滞在の時竹藪へ月影と共に落ちる子規の聲を聞いたが、同じ竹藪を、『涼しさを繪に寫しけり嵯峨の竹』と賞め、『六月や峰に雲置く嵐山』といふ純正風體の定石句を得た。それから彼は近江湖畔を彷徨ひ、伊賀の兄半左衛門の消息に接して歸郷の上、菩提所

[illegible]

[illegible]奈良には古き佛達」[illegible]の句を吟、それより難波へ向つた[illegible]で、九月十日から二十日頃まで[illegible]に惱まされた。二十八日の晩に、園女亭で[illegible]の途中と相會つて何分の座に列し、園女の風韻を、自分の目にかけて見る暇も無し」と極力賞讃したはいゝが、其の齋物を多食したとかで勞しく下痢をした、悪寒發熱が下痢に伴つて、彼は非常に衰弱し、彼の病勢は容易なものでないやうに受取られた。

かくて彼芭蕉は今花屋の別邸に横はり、病を養ふといふよりは寧ろ如何に病状が進むかを、傍から、靜に凝視して居るのである。

彼はこれで彼の漂泊癖も終り、最早や風雅の魔神も彼を惱ます力が無いと思ふと、今度こそは閑寂を完全に支配し得るやうに感ずる。さうして彼は今彼を苦めてゐる病氣に對して感謝したいやうな氣分になる。彼は詩の探求も既に終つたと感ずる……

……彼は重荷を下ろしたやうな氣輕さも感ずる。

二

[illegible]月の午後は靜々と沈んで行く。死に後れた蟋蟀は細い寂い

壁で蟋の下で鳴いて居る。芭蕉の病室は一時の間赤い夕日で明るかつたが、今は薄暗い。芭蕉は重い頭を上げて、周圍から見守つてゐる木節、乙州、丈草、李由と去來の心配げな青い顔を眺める。彼は彼等の親切を感謝するといふよりは、寧ろ其親切が鋭い針となつて彼の肉を刺すやうに感ずる。彼は彼等を恐れる……彼等の柔順な顔の隠くれた隅から、彼を恨む或物が覗いて居るやうに見える。彼は彼等の順良で熱心な愛情に答へたか。彼は彼等が引止めて親切を盡さうとした時、沒義道にも彼等の袖を拂つて逃げた。彼等が教を乞つた時、彼は彼等に詳い説明のかはりに暗示を與へたに過ぎなかつた。さうして一層彼等を迷はした。彼等は親でゝもあるかのやうに彼を慕ひ彼に仕へた。しかるに彼は彼等を子のやうに慈しむことが出來なかつた。『……私は愛を缺いて居つた、少くも愛が少なかつた、私は恥づかしい……みなのもの許して吳れ』と彼は心の中で叫ぶやうに感ずる。

彼の頭に奥羽行脚の時、市振之関で遇つた新潟の遊女の青白い顔が顯はれる。この伊勢參宮の遊女は、『行方知らぬ旅路の憂さ、あまりに覺束無う哀しく侍れば、見え隠れにも御跡を慕ひ侍らん。衣の上の御情に大慈の恵を垂れて結縁せさせ給へ』と彼に縋つた。彼は、『神明の加護必ず恙無かるべし』などと役に立たない慰めの言葉を彼女に與へて別れた。彼は今病褥で寢がへり打ち乍ら、なぜもつと同情をこのか弱い旅行者に持つことが出來なかつたであらうかと、自分で自分を責める。彼にはもう一つ恥づかしい追憶がある……それは貞享元年彼が四十一歳の時で、甲子行脚の出來事だ。彼は東海道は富士川邊で三つばかりの捨子を見た。『如何にぞや汝父に憎まれたるか、母に疎まれたるか。父は汝を憎むにあらじ、母は汝を疎むにあらじ、唯これ汝が性の拙なきを泣け』と彼はいつて、通りすぎて仕舞つた。……あゝ、其時「猿を聽く人捨子に秋の風如何に」といふ句を吐いたが、實際に捨子を助けもしないで。こんな句に何の價値が有らう……私の行爲は無道であつた、不人情でもつた。愛を欠く俳諧は玩弄物に過ぎない。私の一生は遊戯であつたであらうか。』芭蕉はかう考へて身震ひをする。

彼は丈草去來等に別室で休憩して吳れといふ。部屋にはもうすつと前から燈火が點いて、壁や唐紙に寫る彼等の影は黑い。去來は芭蕉の枕元にすり寄る、そうしていふ、『門人の中でも私ばかりは、これまで親として師に仕へることが出來なかつた。世務の爲めとはいひ乍ら、今更に申譯がない。どうか今度こそは一刻も離れずに看護させていたゞきたい。』芭蕉は有難いと點頭づく。然し皆のものと一緒に別室へ退く時、燈火を暗くせよ

[illegible]
[illegible]て行[illegible]しい旅中でも[illegible]だと思ふ。[illegible]は明るい[illegible]を[illegible]ふ。「彼の更けるのが目に見えて來せはしい」と彼はいつて居る。今務衲に備はつて居ても、彼は時間の進みを薄明の中には游させたい、さうしてそれを悠々と昏めたり谷んだりして、永劫の氣分を味ひたいと思ふ。時間の麹で僅かすに彼の想像を醗酵させて行きたいと思ふ。彼は世にも稀れな俳諧の花を燦然と咲かしたいと思ふ。

然し彼は最早や彼には俳諧がない、風雅の妄執から全く離れる時が來たことを喜ぶ。人間の言語を忘れて、悠久たる沈默に合一して行く時が來たことを喜ぶ。風羅坊といふ百骸九竅の一嚢はいよ／＼破れて、大自然に歸つて行く時が來たことを喜ぶ。胸中に燃えてゐた虚實の戰爭は終結したことを喜ぶ。彼は長い年月の間、俳諧の修道者として孤獨の殿堂に坐り沈默の祈禱を自然に捧げて來た。然し人生の存在を言葉で歌つて、いつも沈默の祈禱を裏切つて來た。沈默の尊重と言葉の誘惑とのヂレンマに惱つて、寂しい不滿足な人生の道を歩いて來た。彼は今この痛ましい悲劇の最後の幕がいよ／＼するりと落ちるやうに感じて、喜悅と憂愁とに觸れる。

[illegible]
一日[illegible]
に感ずる。[illegible]門人[illegible]にさせる[illegible]な
い。彼等は變りに[illegible]する。彼等は彼の枕元に[illegible]つて、辭世の言葉でもあらば聞かして貰ひたいと問ふ。芭蕉は細い聲ごゑはして、俳諧は人間が刹那／＼に變化して行く經驗の記錄であらねばならないと語る。詩は如何に千變萬化しても眞行草の三つを離れない。さうして彼は其一だも滿足に盡すことが出來なかつたことを殘念がる。必竟彼はもう一つ敗戰の墓碑を築いたものに過ぎないと語る。

「今更辭世の句とは愚かなことだ……三十年間私が吐きちらした句は、どれでも私の辭世だ。私は一句／＼を、最後の句として風雅の神に捧げて來た。風雅の神は姤の神である。人間に完全をお許しなさらない……そこで人間の努力が生れる。然し努力だけでは眞實の俳諧は作れない……努力を忘れて努力を失つてはならない。造化に從つて造化に歸らねばならない。俳諧は自然に産れる。詩人は避けることの出來ない偶然を摑む、詩人とは創造的本能の出現を凝視する人をいふ。自然は時時刻々に其自身を消失して行く……その姿が姤はしい、消失の姿が即ち俳諧だ……あゝ、無益な事を語りすぎたであら

う。風雅の神様よ、私の饒舌を許させ給へ、風雅の神は沈黙の神であつた。』

芭蕉はかう語り終つて、心の中で、『古池』の句以後の作も意味があるが、初期時代の『内裏雛人形天皇の御宇かとよ』も『あら何ともなや昨日は過ぎて河豚と汁』も忘れられない懐しさがあると思ふ。彼は疲れて眠に落ちる。しばらく過ぎると彼は眼をぱちりと開ける。彼の眼は子供の眼のやうに涼しい。大病の疲勞で彼の頬骨が一層際立つてゐる。枕でひしやげた耳は大きい。薄い皮膚は灰色である。彼は今枕元に侍つて居る門人等を眺め廻して、『またもや詩の妄執に捕はれた……生死の轉變を眼前に控へ乍ら俳諧沙汰とは、我ながら後世の程恐ろしい……佛も妄執を戒めて置かれたのに……』といつて、彼は流涕する。さうして彼は、先日の『大井川波に塵無し夏の月』は園女亭の『白菊』の句と似るから、『清瀧や波に散り込む青松葉』と直して呉れと語る。彼は看護の門人の中から呑舟を呼びかけ、墨を磨れと命ずる。さうして呑舟に左の句を書きつけさせる。

旅に病んで夢は枯野を駈廻る

『これは涅槃の光明を認め乍らも、生前の執着を裁切ることが出來ない魂が呼ぶ斷末魔の告白だ、俳諧の神の招きに答へる深淵の恥づかしい僭越だ……神よ照覽あれ、芭蕉は自分を偽らない。だが、この句も辭世で無く、又辭世であるといふことを云つて置く。』彼はかう語つてまたもや眠に落ちる。

夜に入り燈火の下で、別室で門人等は左の如く病氣平癒祈禱の句を讀む。

落つきやから手水して神集め　木節
風の空見直すや鶴の聲　去來
足輕に竹の林やみそさゝい　惟然
初雪にやがて手引かん佐太の宮　正秀
起さるゝ聲も嬉しき湯婆哉　支考
峠越す鴨のさなりや諸きほひ　丈草
日にまして見ます顔なり霜の菊　乙州

その夜彼等は眠れないので、左の即興句を作つて互に慰め合ふ。

うづくまる藥の下の寒さ哉　丈草
病中の餘り啜るや冬籠　去來

[illegible]の一[illegible]に[illegible]　[illegible]

皆子なり蓑蟲寒く鳴き盡す　乙州

叱られて次の間へ出る寒さ哉　支考

思ひ寄る夜伽もし度し冬籠　正秀

鬮取つて菜飯焚かする夜伽哉　木節

芭蕉はこれ等の句を何と思ふであらうか。彼は今臨終の病褥にあるが、嚴正な批判を失はない。彼は詩の絶對境に立つて一歩も讓るもので無い。詩は、俳諧は不易流行の神秘を掴る現實的想像である……其以外に何物でも無い。彼の門人は所謂天下に散らばつて居る。然し其中誰が眞實に彼の衣鉢を繼ぐ資格があるだらうか。誰が彼と同じ俳諧の信念を持ち、其信念を言葉で表現し得るだらうか。第一、彼に『雨の手に丸と櫻や草の餅』の其角と嵐雪がある。其角の疎宕磊落は奇矯詭衒に落ち易い。『伊達を好んで細い』彼の詩境は、流行に即して永遠性の寂味から離れる。嵐雪は名利心に淡白な温良派だ。温精重厚でも敏感な獨自性が無い、外面的色彩を整理しても物凄い精神美を知らない。去來はどうだ……彼は正しい稟賦の武人的君子である。彼には定石に添ふ忠實性はあつても、天品發露の奇手あるを知らない。丈草は高脱恬淡の僧侶であるが、風雅の神と

其後三日に亘つて去來が[illegible]から、[illegible]る。去來に愉快な[illegible]だが、俳諧の上でも[illegible]たい。から芭蕉は病褥で[illegible]へた眼をやつと[illegible]へる。彼は師匠としても失敗者で、滿足な第一の[illegible]たないことを思つて來ると、彼の寂寞はますく深[illegible]にたらさるを得ない。

『「この道や行く人無しに秋の暮」だ……あゝ、寂しい一生であつた』と芭蕉は、心の中で歎息する。

彼が思ひがけ無い其角の看護を得たことは、臨終の際に於ける喜の一つである。其角は所用あつて泉州淡輪へ來て大坂へ立寄つたところ師の大病を耳にして驚き、取るものも取りあへず花屋へ駈付けたのである。其角は直樣師を病床に見て、[illegible]は ん力なき懷ひを述べ、力無き聲の「詞」をかはす。彼は十四五歳から芭蕉に師事した子飼の弟子である。門人に對して愛を久しうしたと心に苦痛を感じてゐる芭蕉は、其角の涙を見て自分も泣かざるを得ない。其角ばかりで無い、看護を勤めてゐる周圍の門人に對しても、眞實に深い契を感じて彼等の親切を無言の涙で謝する。彼は今路通のことを忘れることが出來ない……彼は破門の形で音信不通であるが、歿後は親しく交つて呉れと去來始め皆のものに依頼する。芭蕉は今臨終の心、愛の權化

として死の世界に入らんとしつゝあるのである。

十二日の朝、芭蕉は木節を枕元に呼んでいふ、「私の死期も最早や迫つたやうだ……水宿雲棲の身でこの藥のあの藥のと見苦く騒ぎたくない。私はお前の藥で結構だ、私はお前を信じて居る……最後まで脉を濡して見れよ。」さういつて彼は他の名醫招聘說を拒絕する。それから彼は人を遠ざけて沐浴、不淨を清め、香を焚いて默想に入る。その翌日、安臥無言の午前も過ぎ、午後も段々と傾きかける申の刻に、松尾芭蕉は西へ沈み行く太陽と共に、眠るが如き大往生を遂げる。

彼の遺骸は淀川を溯り伏見から江州木曾塚の草庵へ送られて、其葬式は營まれた……秋風彼の塚を廻つて、今なほ永劫の挽歌を奏して居る。

三

菊が無數の長い花瓣の指を延し、
（見るまに菊が千手觀音に成つて來る、）
あんなに巧に、あんなに確りと、
菊は足取の早い時（タイム）を捉へる……
捉へた時をぐんぐんと指先から蕊へ、蕊から葉へと呑んでゆく、
御覽なさい、見るまに葉の色が濃くなつて來る。
私もこの菊に倣つて、
章魚のやうな確な指の力で時を捉へ、
それをぐんぐん呑んで、その力で私の生命を醱酵させ、
世にも珍しい詩の花を咲かせたい……
その花が雨上りの青空に映る場合に、
五色の虹となつて空間を大きく壯麗に橋掛けたい。

これは私の詩だが、すべての詩人の詩であらればならない。人間が時を捉へるといふことは、人間が完全に生きようとすることである。時の理解で詩人の仕事は始まり又其仕事は終る。あゝ、時は永へに流動して果敢ない瞬間を刻んで行く。然しその流動する瞬間的姿に永劫の靜止を宿らする。私共詩人は瞬間の流動に永劫の意味を求めねばならない。又私共詩人は永劫の靜止の姿に流動する瞬間の意味を發見せねばならない。芭蕉の言葉を使用すると、私共詩人は『流行』の中に『不易』の姿を見出し、『不易』の胸の中から『流行』の意味を求めねばならない。不易流行の四字は、即ち眞實な詩歌の秘密である。

瞬間が永劫の靜止を暗示する場合には、それはもとより偶然的である。故に生きて居る、即ち『流行』の形を供へる。然し

諸君よ、永劫に生きるといつた理想に外ならないことを知つて、永劫の絶對を求めるであらう。永劫は絶對的である……故に靜寂である、力と眞理に滿ちてゐる。眞實な詩は偶然的であると同時に絶對的であらねばならない。不易であると同時に流行の姿を供へねばならない。自然の現象でもさうで、如何なる場合でも、絶對的から偶然的の意味を顯示しないものは一つも無い。川の流れる水を見よ、風に搖れる樹木を見よ。庭の青葉と青葉との間に赤く黄色に紫色に咲く花を見よ。澄切つた空を行から一筋の旗の如く動く破れ雲を見よ。黑い雲を推しやぶつて險しい空の路を寂く上る月を見よ。悉く不易流行の姿でないものは無い。芭蕉は偉い人だ……何故に彼は偉い俳人であるか。『山路來て何やらゆかしすみれ草』で風に搖らぐ菫草一本を見たに過ぎない。『草臥て宿かる頃や藤の花』で單一孤立な自然の現象を見たに過ぎない。『古池や蛙飛びこむ水の音』で靜寂を破る一つの小さい聲を聞いたに過ぎない。然しだ……形式の上では電文二音信に足らないものだが、みな偶然的顯示から自然の永劫を歌つた點に詩的價値がある。十七文字といふ結果は零細なものでも、彼をしてこの結果を産ましめるに至つた彼の心理狀態は廣い長い深い。諸君は外形的價値を理解する以前に、作者の人格を理解しなければならない。芭蕉の俳句は彼の人格を代表する完全品として、其價値を發揮して光輝する。彼の作品は時代の星の如く小さい。然し其星を包む空は廣大無邊である。

私は嘗て某誌で俳句界論を論じたことがある「俳句は詩歌の眞髓を透貫する自然的自發の聲である。最も純良な俳句の表現は、不思議に力強く或物を暗示するであらう。勿論、詩歌の創域では、文學的表現は第二義的の問題であらねばならない。又詩歌の聖苑では、嚴密な境界線があつて主觀客觀と分けられる筈のものでない。芭蕉の作品を見るに、外形では客觀的でも主觀的詩の精神に溢れて居るものが多い。それは、彼が歌つた題材と一寸の間隙もない程度に合同一致して、其魔術を行ふことが出來たのである「閑かさや岩にしみ入る蟬の聲」は外面的には蟬を歌つたものに過ぎない。然しこの句位主觀的香氣に滿ちる作品はあるまい。人はこの主客兩觀の交錯は、時に詩の感情を曖昧ならしめるといふかも知れないが、この一點こそ日本の詩歌が、自由な無比獨特の天地を握つてゐる所以であらう。詩歌の自由は即座に自然の權化と抱擁する……私共は其自由を尊敬せねばならない。もつとも私共は理解することが出來ない結果を產むかも知れない、支離滅裂になるかも知れない、理智幾班に落ちるかも知れない。然し私共は詩魂快愉や半睡

に墮落しないと信ずる。私は其の詩には各句各節の聯絡は無くても、讀者の心に特種な聯想を暗示する、燃燒することが出來る。日本詩歌の精神は暗示の二字で蔽ふことが出來る。……秀絕した俳句は制限を知らない。外形的には制限されて居つても精神的には廣潤である。芭蕉の句に、『奈良七重七堂伽藍八重櫻』といふのがある。この句にはテニヲハも一字の動詞も無いが、奈良は七重の七堂伽藍や八重櫻で見事な都だといふ意味を了解するには十分である。總てを體言で持切つてゐるこの十七字は、言語の精髓だけを行列させたものだ。然し言語上の檢束は、芭蕉の精神的自由を束縛して居らない。彼はこの不自由な形式で、莊重華麗な奈良を表現し盡して居る。詩歌は眞理の表現を目的とするといふことはいふまでも無い……さうして日本の詩歌の信ずる眞理とは外でない、自然の表現である。自然の表現とは、動かすことの出來ない天然自發の方則を表現することである。老子曰く、『人法地、地法天、天法道、道法自然。』この支那の古聖人は神と云はずに、單に自然といつて居る。私共日本人の詩歌は自然の自發的方則を其眞理として、それで律せられ乍ら其束縛を感じないのである。即ち『言葉のない形式で虐げられない』ものである。不易流行の共同行爲或は合唱が日本詩歌の本體であるといふことが出來る……』

不易流行から『寂と栞』の了解はたゞ一歩である。去來は、『さびは句の花なり、閑寂なる句をいふにあらず。譬へば老人の甲冑を帶し戰場に働き、御宴に侍りても老の姿あるが如し。賑やかなる句にもある者也』といつて、自分の句『花守や白き頭をつき合せ』を、芭蕉が『さび色よく現はれたり』と賞めたと書いて居る。私はこの句に對する芭蕉の言葉を批判しないが、去來の所說は低級な外形論に過ぎない。『閑寂なる句をいふにあらず』といふ言葉は何を意味するか。閑寂を目的として眞實の閑寂は得られ無いことはいふまでもないが、芭蕉の『寂』を單に句の花と了解しては、これは芭蕉の趣旨では有るまい。所謂蕉風の主要な特色は閑寂である。物象の不易自然の永遠性は、閑寂の微光で包まれ、蕭條の寂色を放つ。閑寂を外にして芭蕉の不易は無い。閑寂を實體とすると、栞はその姿である。言葉に風雅の餘趣曲折の無い閑寂は流動的で無い、詩の生氣が無い。去來は栞は『哀れなる句』で無いといつて居る如く、微細微妙な姿であらう。微細微妙は決して柔弱を意味するので無い。芭蕉の句『馬に寢て殘夢月遠し茶のけむり』或は『しら露をこぼさぬ萩のうねり哉』の如きは、寂と栞を備へる句であらう。芭蕉は細味を說いて居る。それは『寂と栞』の延長に過ぎない。去來はいふ、『細味はたより無き句にあらず、細味は句

の心に[illegible]と[illegible]のだ。
色と云ふ様な言葉も使つてはないが、彼は寂を[illegible]へて詠しを以て本領とした詩人である。彼は「細き一筋を失はなかつた俳人である。彼は「荒海や佐渡によこたふ天の川」に於ける如く、雄大な景色を見ても細味を忘れてゐない。奥羽行脚に於ても、彼は「五月雨をあつめて早し最上川」の如き句より、或ろ『田一枚植えて立去る柳かな』を喜んだであらうと私は想像するものである。私の想像は間違つてゐるだらうか。

彼は『馬ぼく／＼我を絵に見る夏野哉』と歌つて、自分の孤獨の影を地上に見出した時、太陽は自分を中心として廻つて居ると信じた。彼は足元に「道はたゞの木標は馬に喰はれけり」の木標を眺め、一里歩いては人生の一里塚を建て、二里歩いてはもう一つの一里塚を建て、感謝と反省の道しるべとして人生の旅客にそれを與へた。彼はどんなに小さい自然の現象にも、大きな存在の感念を與へる。彼は宇宙の諸相を無差別に眺める。其態度は虚無的である。彼は貴の上に於ける比較は愚かな感念であるとしてそれを破る、其態度は萬有神教的である。彼は自然の相違せる形状を理智的に眺めない。彼は感激の詩人である。彼の眼は明瞭である、偽らない。彼は自然の單純性を凝視して、自分を宇宙に結付ける。彼の詩的級感は眞に素朴至純である。彼は宇宙の大きさと時の永さとを[illegible]た態度に對し眞實な感想を傳へて居る。彼には[illegible]の一[illegible]を[illegible]の一變化たらしめる[illegible]的資料の人である。斯くる人は俳人で無くて何であらう。

然し彼は俳人を目的として俳人になつたのではない。彼は謙譲である。柔和である。正直である。彼は非凡でない感謝的でない。彼は普通の人間に過ぎない　いな、普通の人間としては彼は特殊である。即ち、神聖な普通人の一人であるに過ぎない。彼は内省的沈静寂の心で、普通の人生を歩いたに過ぎない。然るに結果として彼は偉大な人生を築きあげて居る。其理由は何處にあるか。彼以前にも、彼の時代にも又彼以後にも、彼のやうに謙譲の態度で普通の人生を歩いた人間は数へ切れない。然し彼等は芭蕉の如き奇蹟を作ることが出来ない。彼は、偉人が普通人として世に顕はれた人間であると云へる。眞實に普通人となることは、眞實に偉人となることゝ同様に容易な事ではない。芭蕉は眞實に普通人となることが出来た。故に彼は眞實に偉人となることが出来たのであらう。リンコルンは普通人であつたが、偉人的奇蹟を上げるに至つた理由は何處にあるか。それは正直な眼を開いて人生に直接したに外ならない。芭蕉もそれと同様の理由で、普通人の人生を偉人の人生を

して胸奥に留めるに至つたのであると云へる。

詩人としての芭蕉に關しても同樣の事が云へる。彼が永久に新らしい俳諧の親だとされる理由は何處にあるか。他なし……彼が正直な眼をかつと自然の上に開いたに過ぎない。彼は大詩人を目的として大詩人になつたのではない。彼は明晰無垢な眼で自然を本質的に凝視して、如何に彼が感じ又如何なる態度を取つたかを記錄に留めたに過ぎない。彼以外日本文學の上で、自然を正直な眼で凝視した詩人の數は計算されない。然し彼位所謂文學的石屑を詩から除いて、詩を最も重要な一主點に歸へらせた俳人は無い。彼の表現は單純である。單純であるから神秘的であると云へる。神秘的であるから表現に生氣があり新鮮であると云へる。『自然を正確に見る』といふ言葉以上に驚くべき言葉は無い。芭蕉は自然を正確に見た……彼が始めて『枯枝に烏とまりけり秋の暮』を見た。彼が始めて『よく見れば薺花咲く垣根哉』を見た。彼が始めて『淋しさや花のあたりのあすならふ』を見た。芭蕉以前に、秋の暮の烏や垣根の薺花や寂しいあすならふを見出したものが無いといふことを考へると、如何に自然を見ることの困難であるかは知れる。實に『西行の筋を遡り樂天が腸を洗ひ杜子が方寸に入ることが出來た』芭蕉で始めて、其等の發見が出來たのである。詩に生きる人で始めて自然の存在を見出す權利がある。理論や理窟では、自然を凝視する要諦は學べない。詩に生きるの方法は、『そぞろ神のものにつきて心をくるはせ、道祖神のまねき』に應ずる人だけが了解する事が出來る。思想と感激を自然禮讃の一念に集中した時、詩は君の方へ近づいて君の胸中に忍入るのであらう。

私は曾てかう書いたことがある、『西洋では詩人は特殊な人間だと云はれてゐる。日本の詩人は、歌人でも俳人でも所謂漢詩人でも、特殊な人間でないといふ事實が、彼等を論ずるに當つて所論の中心點であらねばならない。西洋では詩人は特殊の尊敬、實に永劫の存在を一般から要求するにも係らず、日本では詩人を花の如く鳥の如く、自然の一現象であるに過ぎないと取扱つて居る。詩人として私共日本人は創造力に缺けてゐるであらう。多くの西洋詩人のやうに、私共は人生の改造を目的とするものでは無い。私共は詩を單に藝術として取扱つて居らない。詩を最も必要な人生の原則と認めてそれに依り正直な人生を完全に發達させやうと努力するものである。私共が詩の面前に跪くのは、澄んだ純な精神の領域を作つて、靈感的音律の力で、私共の地上生活を整理したいといふ希望からである。』私がこの問題を考へると、いつも私の思想に對照として現はれる詩人は、松尾芭蕉其人である。

長いか細い詩道にただ俳諧的詩意を求めんとして、こゝに清澄な閑寂の世界を築き、如何なる場合でも其行手を遮る何物の態に入ることを許さなかつた。西歐の詩人が熱烈な人生改造慾に捕はれて、混亂の心理狀態をも恐れなかつたとは雲泥の相違である。一見芭蕉の態度は隱遁的である消極的であるやうに思はれるが、實際は危險性を帶びた積極的な態度である。彼に積極的態度があつたればこそ、彼の世界は流動する生氣で溢れる。さうして彼はこの世界の整理を『淸貧』の二字に賴つたのである。物質的缺乏が生活上の苦惱であることは、今日でも彼の時代でも何の相違は無い。彼はこの苦惱に耐へて、自分の世界を完全に保護したのである……彼が勇者でなくて何であらう。彼が俳諧行脚の途、金城の生駒萬子から餞別に金子三兩を贈られたことがある。彼は、不意な金銀を懷にすることは盜賊に狙はれる懸念があるといつて、彼の餞別を辭退した。これも彼が靜寂な詩的氣分を攪亂せられることを怖れたからであらう。加賀の北枝が火災に罹つて燒出された時、芭蕉に一句を送つた『燒けにけり花は靜に散りすまし』（ある本には『燒けにけりされど櫻は散すまし』になつて居る。）芭蕉は手紙を北枝に書いた、『池魚の災承り我も甲斐の山里に引移り、さま〲苦勞致し候へば、御難儀の程察申候。されどやけに兒の御秀作、かゝる時に臨み尤に感心、去來其外、醫中ともにあやかり度存候、命にかへたる古人も候へは、さのみ御悲しみなさるまじく候、目出たれ〲此度の難にまぬかれずや。途中たしかなる者不仕候細紙間、短紙も不進候。よく御保養可被下候以上。』

芭蕉は北枝に與へた簡潔の言葉は、『やけにけり』の發句の上に於てよりは、寧ろ火災といふ人生の悲慘事に面接して狼狽しない彼の態度を買つたのであらう。北枝が自分の家が灰燼になるのを眼前に眺める場合に、落ちる花瓣のやうな淸澄幽寂な心持を維持することが出來たといふとを考へると、彼も芭蕉と同樣に俳諧を無益に學んだのでないといふことが出來る。これぞ實に實行上の詩歌でなくて何であらう。この實行が伴はないと、詩歌は絕對の境地に立つことが出來ない。芭蕉は、路通が破門されて還俗したことを聞き、『とても西行能因の眞似はなるまじく候へば』と歎息した。芭蕉は隨所の曲筆に苦節で風雅の三等を說いたことがある。その言葉にかうある、『風雅の道筋大方世上三等に相見え候。點取に晝夜を盡し勝負に道を見ずして、走りまはる者あり。彼等は風雅のうろたへ者に似候へ共、點者の妻子をはごくみ、店主の腹を賑らし候へば、僻事せんには優りたるべし。又其身富貴にして目に立つ慰みは世上を憚り、人事言はんよりはと、日夜に二卷三卷、點取り、勝ちたる

者も誇らず、負けたる者も強ひて怒らず、いざ又一巻などと取かゝり、線香五分の間に工夫を運らし、終に即點などと興する事共、偏に少年の讀みかるたに等し。されど料理を調へ酒を飽く迄にして、貧なる者を助け點者を肥やしむること是亦道の建立の筋なるべきか。又志を勉め情を慰め、強ちに他の是非をとらず、是より誠の道にも入るべき器なり、などはるかに定家の骨を探り、西行の筋を辿り、樂天が腸を洗ひ、杜子が方寸に入るべき族、都鄙を數へて十の指をなさず。是も則ち此十の指たるべし。能々御慎み修行專一に存候。」芭蕉にこの抱負があつて、この渾身みな詩たらしめる信念があつて、始めて彼の作品は實質上小さいものでも、珍しい光輝と詩の尊嚴が突如として爆破させることが出來るのである。實に主要な問題はこれである……曰く詩歌の實行。詩歌の實行とは詩歌と身とが一枚になることで、詩即一身の境地に入ることとである。然らばどうして其境地に入ることが出來るだらうか。

芭蕉はいふ、「……しかも風雅に於けるもの造化に從ひて四時を友とす、見る所花にあらずといふ事なし、思ふ所月にあらずといふ事なし。像花にあらざる時は、夷狄にひとし、心月にあらざる時は、鳥獸に類す。夷狄をいで鳥獸を離れて、造化にしたがひ造化にかへれとなり。」造化に從つて造化に歸へるといふことは自分を失ふといふ意味でない。自箇の箇性が存在したいならば、どうして造化に從はれよう又造化に歸へることが出來よう。造化に從ひ造化に歸つて、始めて宇宙流轉の方則に合一することが出來る。自然の情調に入ることが出來る。茫漠たる無限の一部となつて、無礙自在な清澄境に生きることが出來る。この境地に住むと、私共は自然に其思想其感情の姿を整理することが出來、無理に求めなくても詩的飛躍を實行することが出來るといふものだ。

自然は動いて一刻も停滯しない。自然に進化はあるが進歩は無い。自然は形體を離れて常に豫想の心理狀態に生きる。見よ、春の花が散らない中に既に新緑の用意が整へられる。盛夏に炒りつけられるやうな蟬の聲の下で、私共は既に秋蟲の鳴く音がすることを知らねばならない。詩人も正に自然の如しで、流動的豫想の心理狀態を其生命とする。彼は言葉で表現する、然しそれは一箇の形體たるに過ぎない。さうして彼の精神は已に其形體を離れて居る。私に左の一詩がある。

芭蕉を圍繞する深山の人、
彼の歌ふ詩を聽いてみな感歎した、
「なんといふ驚異！なんといふ美麗！」と叫んだ。

そして彼等は彼の使徒であると自任して、
彼を中心とする一流を開いた。
この時位彼は心に悲哀を感じたことは無かつた。
彼は自分の藝術の門に立つて外を眺めた、
彼の心は所謂使徒と共にあらなんだ。
彼等の彼に見る所のものは、彼の形骸に過ぎないことを彼は知つて居つた。
眞實な彼の心はその豫想（アンチシペーション）の上にあつて、
彼の心は其領域に飛んでゐた。
だが、彼の使徒は彼の眞實な心を了解しなかつた、
「なんといふ美洌！なんといふ驚異！」と叫んで居つた。
芭蕉は自分に忠實ならんとするには、深山の使徒を振りすてねばならぬと思つた。
彼は獨りぼつちにならねばならぬことを悲んだ。
彼はその勇氣を缺いた……
誤解せられ乍ら、使徒が歌ふ讃美の言葉を聽いてゐた。
彼等の讃美を耳にする時位、彼に取つて悲いとは無かつた。
彼は落ちる花瓣に涙を添へて自分の運命を悲み、
彼は降る雨に歎息を語らして自分の悲哀を洩らした。

この詩は芭蕉晩年の上の作品を書いたものではないが、當時蕉風といふ形體に即して、その淺薄的意義の表現に滿足したこともう一層の飛躍の出來ない門人等を周圍に眺めた場合の芭蕉は、必ずやこの詩に於けるやうな悲哀を感ぜずにはゐなかつたであらう。彼は信じたに相違ない……彼の一句は他の一句を豫想させ、ある點に價値がある、彼の作品は互に心理的關係を豫想し合ふから價値があると。彼の宗房時代は江戸に於ける檀林風心醉期との關係に於て、檀林風心醉期は虚栗時代との關係に於て、虚栗時代は所謂蕉風初期との關係に於て、蕉風初期は圓熟期即ち細道猿蓑時代との關係に於て、圓熟期は晩年時代との關係に於て價値がある。作品に就いて具體的に云へば『枯枝に烏』の一句は『馬ぼく／＼我を』の一句を豫想させる、馬ぼく／＼我を』の一句は『道端の木槿は』の一句を豫想させる『道端の木槿は』の一句は『山路來て何やら』の一句を豫想させる、山路來て何やら』の一句は『古池や蛙』の一句を豫想させる、古池や蛙』の一句は『やがて死ぬ景色は見えず蟬の聲』の一句を豫想させる心理的關係に於て價値がある。然らば『旅に病んで夢は枯野をかけ廻る』の最後の一句は、如何なる變化を豫想するであらうか。彼が僅か五十一歳で瞑目し無かつたならば、彼の詩人生活は更に一段の變化をしたであらう、さうして彼の作風、

所謂蕉風とは異つた詩境を開拓するに至つたかも知れない。芭蕉ばかりで無く如何なる詩人でも、瞑想的心理狀態に立つから價値があるのだ。芭蕉の詩魂は流動する、一句は一句を追つて變化して居る、故に彼は永久に新鮮である。彼の作品に流動的瞑想を見ず變化の心理狀態に觸れないならば、それは完全に彼を了解するのでない。

『たゞ余（芭蕉）より言ひ出せば、肝をつぶしたる顏のみにて、善惡の差別なく醉の泥に醉うたる如し』と、俳諧問答」に書いてあるが、定めし彼は連句の上で人を驚かしたに相違ない。彼を藝術家として見ようとするなれば、是非共人は連句上の芭蕉を研究せねばならない。然し私の興味は彼の俳句に懸つて居る。俳句に於ても彼は容易に人を驚かして居る。無注意（不注意でない）が完全に働いて注意となり、眼を正眼に据ゑる場合の作は一番充實する。如何に無注意でしかも注意を失はないかが、六ケ敷い問題だ。詩を不用意に得るといふ言葉は徹底を欠く。芭蕉と禪との關係を說いて、彼の靜寂な自然觀は其處から産れるといふものがある。然し禪が芭蕉を作つたので無い。詩が其自身を書く』といふ言葉があるが、自分を確實に握らない詩人が、どうして詩を其自身書かせることが出來よう。家康は本阿彌光悅を『本性違はじの人間』と歎美したさうだが、其點では芭蕉は決して光悅に劣るまい。本性を確に掴んで居ればこそ、芭蕉は自分を完全に忘却することが出來る。彼は詩を（俳諧を）完全に忘却し得たから、立派な作品を得て、『我より古を成す』の詩境に立つことが出來たのである。彼は『俳諧に古人無し』といつてゐる。彼は左に掲げる私の詩の一節を讀んで、喜んで私に賛成するであらうと思ふ。

「新しい詩は私をもつて始まめねばならない」から私がいつたなら人は私を許すでせうか……
許さなくてどうしませう。
毎朝咲く朝顏を御覽なさい、どの朝顏でも、
朝顏の美は自分をもつて始まるといふ誇りに輝いてゐるではありませんか。
太陽の下どんな物でも、神様から與へられた魂を赤裸にさらけ出して、
（赤裸の場合位完全な場合はありません）
自分と大きな自然との對照を愼しやかに表現した時は、
生命の新しい一章に筆を附けた時でなくて何でありませう。

西洋の詩人はアポロの神様が着る着物の襞の中にも、詩の原理が波打つてゐると語る。彼等は空を飛ぶ小さい雲をも理智

[illegible]定まつた[illegible]然し一の様式に定まつた作品は場合に依つては変化する。芸術する、創作する、は自然である。之れに反して日本の詩人は詩的原理に捉へられない。理智の奴隷でない。それ以上に複雑な詩の形式に捕へられないことを喜ぶ。芭蕉の詩境は自由である、彼の精神的飛躍の領土は、縦に高くはないが横に広い。彼は感激の為め『失はれた詩人』となつたことが無い。『木枯しの身は竹斎に似たる哉』と感傷的感激に駆たれても『朝顔や昼は鎖おろす門の垣』や『物言へば唇寒し秋の風』に顕れる彼の道徳姿より、どんなに愉快か知れない。彼が風狂の詩人たらんとして、倫理に手をぐいと引張られた時位、彼の悲惨な事は無い。私は彼の倫理乃至道徳を軽蔑するものでないが、彼の『あらたふと青葉若葉の日の光』に於ける感激的情調を一層高く価値付けるのである。然し彼は感激を生の感激として出してゐない…………彼の感激が不思議に静止して、普通の状態に帰へる稀有の瞬間に彼は句を得て居るのである。即ち彼の『風狂』が静止する場合に、彼は偉大な芭蕉として顕はれる。

時代は変化する。今日の時代は芭蕉の時代で無い。彼の詩は私共の詩でない。然し彼の詩境を忘れて果して日本人の詩が成立するであらうか。私共は自然と人生との意味を発揮し直さねばならない。古い[illegible]理想へ[illegible]ならぬ。[illegible]に到達せしすに[illegible]せられる[illegible]詩人は[illegible]けることの出来ない不当な行の方法から逃れる。自然の[illegible]である。消失の心理状態に合一せずにも詩が有る事が無い。私共は芭蕉へ行つて、日本人本来の詩境に入る秘術を学ぶであらう。

四

私は今年の春は三月下旬、関西線を伊賀上野で降りた時、偶合月瀬観梅がこゝから始まらないとしても、確に芭蕉の故郷訪問は既に始まつてゐることを喜んだ。私共同行の四人を乗せて走る自動車の運転手から、私は始めて伊賀訛を聞いた………粗野なぎごちない音調を愉快なリズムが貫く。三百年前の芭蕉も恐らくかういふ言葉を使つた人であらうと想像して、私はこの伊賀訛に懐しい味を感じた。所謂故郷塚のある愛染院へ急ぐ自動車は、梅が盛りと咲いてゐる静かな町を通る………私は芭蕉の何ぞかぞへ来ぬ屋敷〳〵の梅柳』を心に浮べ、伊賀の或方にといふ前書のある『旅鳥古巣は梅になりにけり』の句を考へ、この辺は芭蕉時代にも沢山の梅があつたに相違ないと思つて見る。私と芭蕉を距てる三百年が急に短縮して、彼はつい近頃まで私共と一緒に居つたやうに感ずる。

私は今菩提所愛染院の墓碑の前に立つて居る。私を喜ばせるのは石碑を蔽ふ笠形の芽葺屋根でない。其庭に咲いて居る一本の紅梅でない……芭蕉に「紅梅や見ぬ戀つくる玉すだれ」といふ艶な感じを與へる句もあるが、彼は靜寂な、淸かな香にさへ薫る白梅である。然し私は「杖に白髪の」といふ言葉は誇張であらうが、晩年の芭蕉が家族と共にこゝへ墓參する有様を想像して喜ぶ……彼は粗末な茶色の羽織を着て居る。「茶漬三石六斗食つて」生きて來たといふ半俗半僧だ、悠然上花の詩人だ。彼は愛染院の眞言宗に異分子の感を與へない。私はふとストラットフオードに於ける沙翁の紀念のことを思つて、わが芭蕉を紀念するにもつと完全な設備がありさうなものだと想はさるを得無い。院内に芭蕉に關する何物も無い。

私共は猿雖の蓑蟲庵へと急ぐ。蓑蟲庵の庭内に小さい瓢簞池があつて、紅梅の古木が影を投げて居る。此處は芭蕉が逝去前秋の月を庵主の猿雖と共に眺めた所だ。今では庵の周圍に家が建つて、廣びろとした外の田畑を眼界へ入れることが出來ないが、「名月に麓の霧や田の曇り」、「名月の花かと見えて綿畠」、「今宵誰吉野の月も十六里」の風雅な光景を容易に想像することが出來る。然し今は「梅が香にのつと日の出る山路かな」の時節である。私は芭蕉を梅の香と對照して考へさるを得ない。

芭蕉は梅の木のやうな人間だ。

私はかう書て居る。「私共日本人は古い時代から梅を愛して來たものだ。梅花を歎美するといふ日本人の心理は昔も今も變らない。何故に私共は梅をさう珍重がるのであるか。私はしば〳〵西洋人から、日本人はどういふ花の美を梅に發見して居るのだと質問されたことがある。西洋人には梅に對する日本人の趣味は分らないであらう。實際に花として梅は櫻花に劣つて居らう、又桃の花にも劣つて居らう。五月の燃えるやうな躑躅は梅以上に見事であらう。秋の菊花に對して梅は競爭することが出來まい。それでも私共は梅花を第一に推して愛着し歎美して居る。もとより私共の祖先が梅花の趣味を支那人から教へられたものが、血に染みて、自然に避けることの出來ない、一種の傳統を作つたものでもあらうが、私共には理由があつて梅花を愛して居るやうな氣もする。長くて寒い冬を破る梅一輪に最高な先驅者の希望が輝く。一陽來復を報ずる梅花の微笑はこれ豫言者エレミアかジョン・バプチストの微笑であらう。雪と風とを恐れずに頭を持上げて存在の第一聲を發する梅花に敢爲の精神がある。少くもさう想像する時に、私共は愉快な勇ましい暗喩を梅の上に組立てる。量の點から見ると　梅には人を驚愕させる何物も無いかも知れない。簡單な花であらう、私共は清貧の高

七二[illegible]て、[illegible]
頭を[illegible]たい點は、[illegible]として[illegible]にあると云ふことである。人はそれは君の詩的想像に過ぎないといふかも知れない。又實際に私が自由に構成した空想でゝもあらう。然し梅花が放散するやうな香氣は體を優雅にして始めて持ち得るものである。又かゝる嚴肅な美は生命の最後の時代にのみ表現されるのではあるまいか。「さうだ、芭蕉は日本人の人間美が最後の發達に達した場合の人間である。

梅樹の幹や枝に付いてゐる青い苔を見よ、又禪僧のやうに乾枯びた其四肢の枝を見よ……芭蕉は詩的禪僧である。梅樹が春になると乾枯びた體に一段の勇氣を出して、眞白に笑つて見せる快活さを見よ……詩人として芭蕉は梅一輪の快活さである。ああ、何たる寂寞が梅花にあるであらう、寂寞は美が進化の最後に滲みだす雰圍氣に外ならない……芭蕉は寂寞である。早春の空を白く染め拔く梅花に何たる神さびた森嚴があるであらう。芭蕉の作品に神さびた森嚴がある。梅の態度は生命のあるものが最後に捧げる喜悅の默禱である……芭蕉の作品は人間が最後に神に捧げる喜悅の默禱でなくて何であらう。

私共は上野町の天滿宮へ行く……私はこゝで菅原道眞と松尾芭蕉とを一緒に考へる。天滿宮の境内にも今を盛りの梅樹

[illegible]がある。[illegible]には[illegible]へ[illegible]日に、[illegible]一[illegible]、[illegible]匠に宗房釣月軒は一人前の宗匠としてこの[illegible]から[illegible]れてゐたであらう。年齢二十九歳の青年宗匠は、幼少の頃から其詩才を發揮して居る。「犬と猿の世の中よかれ內の年」といふ句が、果して彼十四歳の作であるか否かは知らないが、彼の仕へた藤堂家の蟬吟公は和歌を冷泉家に俳諧を季吟に學んだ青年文學者であつてみれば、芭蕉は其影響を受けたに相違ない。傳說に依ると、主君蟬吟主の早世に世の無常を感じて二十三四歳の頃亡命したことになつて居る。又十九歳の時主君の侍女と通じたとの寃名を負つて、一旦主家を出奔したが蟬吟公の逝去を聞いて歸參し、其の遺髪を高野山へ納めて後遁世したともある。其他種々なる傳說の中に、主君の未亡人と通じたといふ醜名を怒つて亡命したといひ、甚だしいは、兄嫁半左衛門の妻との間に醜名を傳へられたのが遁世の原因だといふのもある。もとより根據の薄弱な傳說であるに過ぎないだらうが、早熟の俳人芭蕉が許されない戀愛を女と結んだといつても何の不思議でない。青年詩人の戀は年上の女で始まるといふことは古今東西を通じて[illegible]だ。若し假に彼が遁世した亡命したものとす[illegible]と、彼が五六年といふ短日月の後に公然俳諧合を[illegible]の天滿宮

へ奉納するといふことは腑に落ちない。又江戸に於ける最初の芭蕉庵入庵までに至る彼の作品は、遁世者らしくも亡命者らしくも無い。實際は遁世も亡命もへたくれもなかつたであらう。主君の死を機會に、文學熱に浮されて郷里を後にしたに過ぎぬであらう。彼も文學心酔の青年が普通取るべき道を取つたに過ぎぬであらう。彼は京大阪へ遊學したに過ぎぬであらう。

彼は大阪で西山宗因に師事したともいふ。彼は京都で伊藤坦庵から漢籍を學んだともいふ、北向雲竹に書を學んだともいふ、又北村季吟の門に遊んだともいふ。江戸東上までの五六年間を、彼はどうして京大阪で暮したであらうか。それを詳細にする何等の資料が無い。然し彼は始終郷里との關係を斷たずに、幾度も歸郷して居る點を考へると、金をねだりに歸つたであらうと想像される。文學心酔の青年を父兄が喜ばないことは昔も今も變りは無い。彼は松尾家の厄介者であつたに相違あるまい。彼が決意して東上の途に就いた時、どんなに彼の親は其前途を危んだであらう。彼の兄半左衛門は一先づ厄介拂ひしたの感に撃たれたであらう。芭蕉は俳諧では到底飯は食へない、又さりとて藤堂家へ再出仕も出來ないといふ所から、思切つて江戸へ上り所謂立身出世の路を開かうと思つたに相違ない。所で、後年幻住庵記中『年月のうつりこし拙き身の科をおもふにある時は仕官懸命の地をうらやみ』の言葉となつたのであらう。『雲と隔つ友かや雁の生別れ』の句は、彼が遁世の際詠んだと傳へられては居るが、或は彼が江戸へ上つた時に詠んだものであらう。もとよりそれは私の想像に止る。

芭蕉は江戸へ出た。彼は最初季吟門下で、所謂同門の好ある卜尺の厄介になつたであらう。又芭蕉の甥伊兵衛が手代をして居るといふ縁故から、幕府の御納屋商人杉山杉風（其後芭蕉に師事した俳人）の厄介にもなつたであらう。彼は中の郷定林院（今本所原庭町）の默宗和尚と東海道の某所で邂逅し伴はれて江戸に入り、其寺で草鞋を解いたとも云はれ、彼は駿河臺中坊家の好意で邸内の文庫（後に芭蕉庵と稱せられる）に一時の宿泊所を得たともいふ。然し彼が何處で草鞋を解かうが、誰の厄介になつたらうが、私には興味の問題にならない。芭蕉が貞徳派の俳人で松江重頼の門人なる高野幽山の執筆者となつたといふとが傳へられてゐるが、それも生活上止むを得なかつたであらう。彼はまた關口水道工事に關係して居る……關係せる職務や其年月に就いては諸説あつて一致しないが、恐らく江戸へ出て間も無いことであつたらうと想像される。地道な生活をしようといふ決心で郷里を出た芭蕉である。『仕官懸命の地を羨んで』江戸へ出た彼である。彼が水道工事の役人になつたことは

不明瞭でない。眞蹟文選に『與武小石川之文通、丙午歲』とあつても、其眞蹟は知ることが出來ないが、相當の年月に渉つて彼は役人の飯を食つたと思はれる。役人といつても端下役人に過ぎなかつたであらう。若し彼が官金を使込んで時の奉行所で處分されたといふ話が事實とすると、それは彼が工事に關係中であつたであらう。彼の職務は土方人足の監督位であつたかも知れない。奉行所で處分されたといつても、不德罪として彼を責めねばならない程度の不始末で無かつたであらう。都會の淫靡放恣な誘惑は田舍出の青年には甘い、彼等は微笑して其奴隸になる。如何に虛弱な體の所有者でも、年齡三十を越したばかりの芭蕉である。彼が遊蕩生活の情味に觸れたとしたならば、必ずやこの時代の事であつたであらう。彼は近松世話物の濃艶な場面を了解し、西鶴情調の表裏にも通じて居る。『むかし西行宗祇など彼好も長明も今日の芭蕉も酒色の間に身を覩じて風雅の道心とはなり給へり』と支考が書いてゐるのも理由があらう。假令確な根據がないにしても、どうして芭蕉に酒色耽溺の日無かつたといふとが出來よう。若し彼に官能主義（センシュアリズム）の日が無いとすると、どうして彼が左記の如き脂粉の文字を吐くとが出來よう。

埋火にはなやかにおきてこそ。

梅雨に醉すゆる閨のほのかなる　荷兮
うぐひす起よ紙帳とやして。

遊女四五人田舍わたらひ　曾良
落書に戀しき君が名もありて。

きぬ〲やあまりかほそくあてやかに　越人
風ひきたまふ聲のうつくし。

さま〲の香煎りけり月の前　越人
人一代の戀を問ふ秋。

細き筋より戀つのりつゝ　曲水
物思ふ身に物食へとせつかれて。

雪の狂呉の國の笠めつらしき　荷兮

芭蕉は生れ乍ら枯枝の烏を見、古池の蛙を聞いたので無い。少くも江戸へ出てから八九年間に於ける彼は、『手枕に細き腕をさし入れて』或は『かゝへし琴の蓋や重たき』或は『藝者をとな

る明月の關に』に『面白の遊女の秋の夜すがらや』と附句する感覺的詩人、陋巷の通人的俳人である。今文字の遊戲といふ一面を有する連句を別にして、彼の發句だけを見ても彼には感覺美の作品が澤山ある。『うぐひすを魂に眠るか嬌柳』や『紅梅や見ぬ戀つくる玉すだれ』の句には、前記の脂粉文字と相通ずる情調がある。彼位色彩に對する鋭感性を待つた詩人は少いであらう。特に彼の春の句は艶麗優美だ。其點で俳句文字中で蕪村だけが彼に匹敵することが出來よう。『煤ほりて炭たく家になく燕』の句を思ふと、眼前に忙しい田舍家に對する黑光りする紫色の艶美な燕が浮いて見える。濃艶な色彩の春の一夜は『春の夜は櫻にあけてしまひけり』の句で畫きて居る。彼は『あけぼのや白魚白きこと一寸』で薄暗い早朝の灰色を染拔く一點の白色を指示する。彼は、『石山の石より白し秋の風』で秋風の色、『星崎の闇を見よとや啼千鳥』で黑い夜の色を巧に紹介する。彼の詩人としての半世は感覺的色彩で彩り、後半世は靜寂な自然美で豐かである、さうして彼の一生は豐富な情調で包かれる。靜寂な彼だけ見て彼の感覺美を知らない人は、彼の全部を知る人でない。彼が寂に配するに栞を以てし、流行を不易と離れさせない理由は明瞭だ。私が讀者の注意を乞ひたいは、如何に彼が感覺的色彩から自然的靜寂味を引出したか、如何に彼が感激を靜思と變化せしめたか、如何に彼が『春の日』や『桃青二十歌仙』に於ける芭蕉から『猿蓑』の芭蕉となつたの發達徑路の點にある。彼が感覺的生活から靜寂生活に入つたことは、普通一般の人間と變らない。彼は文學者として、感覺美のの追求から人生の寂莫觀に入つたのである。故に彼の寂莫な人生觀は、華麗な官能主義との對照の上で一段の價値を添へる。若し彼に青年時期の官能主義がなかつたならば、どうして彼はかくも人生の寂莫觀に徹底することが出來よう。私は彼が、其等の二つを異つた價値から見なかつたであらうと信ずる。人間の思想感情に變化はある。然し其變化は相逆せる價値から眺めるべき筈のもので無い。所で芭蕉は、猿蓑時代と同樣の滿足を以て、或は不滿足を以て、彼の檀林風心醉時代を見たであらう。彼は如何に彼が變化し來つたかを振返つて、不思議な感激に打たれる瞬間があつたであらう。

芭蕉に壽貞尼といふ妾があつたことを問題にする人があるが、それは不倫の行爲でない。假令不倫の行爲としても、青年時代の出來事は深く責むべきでない。又將來清淨生活に入る前懺悔堂にての告白を有意味ならしめる機緣にもなるといふものだ。芭蕉の官能的生活は短い、少くも彼の官能主義が文字の上で續いたほど長くない。彼は本性的に官能生活に執着を持たな

[illegible]たらしい。前述の貞門俳諧につゞいて談林俳諧との時代的關係が、彼の詩魂を整理して俳諧化さしめたであらう。又學問と識見に富だ山口素堂との交遊が、彼の實際生活を成熟に導いたであらう。彼の芭蕉庵入庵は彼の三十七歳の時で延寶八年である。入庵の時の句『芭蕉植えて先づ憎む荻の二葉哉』で、彼は檀林風時代を打切つて居る。延寶九年は即ち天和元年であるが、彼がこの年に得た一句『枯枝に烏のとまりたる秋の暮』（後『とまけり』と改竄した）は、檀林俳人を愕然とさせたのみでなく、彼自身も將來彼が歩むべき詩の路を暗示されるに至つた。

所謂元祿時代は元祿以前の天和貞享と其以後の寶永を引括めた總稱である。芭蕉が寛文十二年に江戸へ出たとすると、天和に先つこと僅に八九年に過ぎない。私のこの時代に對する興味は平安朝に對するそれに決して劣らない。武士の階級は野蠻な戰爭と殘忍な血とを忘れ、祖父の戰場に於ける武勇談を追憶に誇り、下流社會は自由と富の解放を得て生氣を縱橫に漲らせる。この時に於て民衆詩なる俳諧は、時代の肯定と與はれ無理想な生活の賞讚者の役目をして居る。さうして如何にこれが流行を極めたか、或は將に流行を極めようとして居つたかは想像に[illegible]江戸は[illegible]に近い[illegible]て居る。如何に江戸の若い民衆が俳人即ち俳人や其下の名士を歡迎したかは容易に想像される。芭蕉が江戸へ入つた頃には、田代松意の得意時代であつたが、芭蕉だけの實力ある俳人なれば誰でも相當の歸依者を得たであらう。實際に江戸到着後二三年目に其角が芭蕉へ入門して居る又嵐雪も入門して居る。芭蕉はもとく世俗的立身出世を計らうとして江戸へ出たのであらうが、身體が弱い上に筋が思ふやうに運ばない、一方には俳人として珍重されて來るといつたやうな譯で、宗匠の看板を上げるに至つたものであらう。今日の青年が新聞社や雜誌社が自分の文章を買つて呉れるので、地道な銀行員や會社の事務員にもなれず原稿生活に入るやうなものだと思へば間違はない。

今芭蕉は深川の芭蕉庵に納つて居る。彼は『江戸三吟』『次韻』『門人二十歌仙』『常盤屋之句合』『田舍之句合』等の著者である。素堂の言葉に、芭蕉と『十暑市中に風月を語り』とあるが如く、彼が江戸へ出てから丁度十年目だ。芭蕉自身も、『[illegible]の戸に茶を木の葉かく嵐哉』の前書に、『九年の春秋を市中に住み詫びて居を深川の邊に移す』と書いて居る。この芭蕉庵は杉風所屬の別墅二つの一である。別墅といへば立派に思はるが杉風が商賣物の魚を貯へる[illegible]で、其位置は新大橋を下つて、

隅田川の本流と小名木川と六間堀とで三面水で取囲まれた所である。芭蕉の入庵の時には既に殿も廢池になつてゐて、庵も殿の番小屋を簡單に修繕したものに過ぎなかつたかも知れない。小川破笠の物語として二代目團十郎栢莚が『老之樂』中に書いてゐるのを讀むと、如何に芭蕉の生活が簡素なものであつたかを知ることが出來る。

『桃青深川の芭蕉庵、竈二つありて臺所の柱に瓢を懸けてあり。二升四合も入るべき米入なり。杉風文鱗弟子の貢にて、米なくなれば又入れてあり。若し弟子よりの米間違つて遲き時、瓢空けれぱ、自ら求めに出でられしが、其頃笠翁子は二十三か二十四の時の由、翁は六十有餘の老人と見えし由、其頃翁は四十前後の人歟。嵐雪も繋り人にて、三人居られ候由。嵐雪なども俳諧の外は翁を外し逃げなど致し候由、殊の外氣詰り、面白からぬ故也。左右翁は德の高き人也。今大樣翁の像に衣を着せ候へ共、笠翁よく覺え候由、常に茶の紬の八德のみ着申され候。其頃其角嵐雪は、夜具などもなき薄弊なる生活の由。翁の佛壇は壁を切く掘抜き、内に砂利を敷き、出山の釋迦の像を安置せられし由。目のあたり見たりとの笠翁物語。』

芭蕉自身に其簡素生活の一面を語らせる爲め、左の『蓑笠銘並序』を引かう。

草扉にひとり佗びて秋風さびしき折々、竹取のたくみにならひ、妙觀が刀をかりて、自ら竹を割り竹を削つて、笠つくりの翁と名のる。心しずかならざれば、日を經るに物うく、工みつたたければ、夜をつくして成らず。晨に紙を重ね、夕にほして又かさね〴〵、澁といふものをもて色をさらし、ます〴〵かたからんことを思ふ。二十日過るほどに、やゝ出來にけれ、其形うらの方にまき入り、外さまに吹かへりなど、荷葉のなかば開くるに似て、なか〴〵をかしき姿なり。さらばすみがねのいみじからんよりは、ゆがみながらに愛しつべし。西行法師の富士見笠か、東坡居士の雪見笠か、宮城野に供つれば、與天の雪に杖を曳かん。霰にさそひ、時雨にかたぶけ、除ろにめでて殊に興す。興の中にして俄に感ずる事あり、再び宗祇の時雨ならでも假のやどりに袂をうろほして、自ら笠のうちに書つけはべる。

　　世にふるは更に宗祇の時雨哉。

今芭蕉は貞德宗因の芭蕉でない。彼は宗祇西行杜甫の芭蕉である。彼は官能主義の芭蕉でなく、寂莫味の芭蕉である。彼は最早や『天秤に京江戸かけて千代の春』の芭蕉でなく、『梅さくやしら〴〵落くぼ京太郎』の芭蕉でなく、『年立つや新年古き米五升』の芭蕉である、『物一つ瓢は輕き我が世哉』の芭蕉であ

う」この[illegible]生活に[illegible]にたふて[illegible]する時代の反對であらうか。芭蕉今は時代の否定として[illegible]はれるのであるか。彼は人生の歡樂の裏に流れる愛執を讀んだであらう。時の人間が『於春々大なる讀春と云々』と笑ひ興じて居る間に、枯枝から飛立つ鳥の孤影一つを發見した芭蕉は、『眞夜中に東雲の聲を聞く』といふ豫言者である。元祿時代は、花やかな奇怪な紋繪子で人生の寂しい苦痛を包むとすると、芭蕉は一面の時代精神の代表者である……さも無ければ、彼にかくも驚くべき數の信者が附く理由が無い。彼は萬有神教的自然觀に入つて、時代謳歌の地方主義から逃れる。彼は生き乍ら永劫の一部となつて完全に人生を解放する。彼が孤獨に入り寂莫な簡素生活に入いつたのは、自分を救助する路に外ならない。彼は氣まぐれな風雅として簡素生活に入つたのでない。彼は人間が取るべき最後の手段として寂寞境に突進したのである。

生活上の負擔を極點まで輕減するといふことは、人生を經濟的に整理して崇高な精神的自由を摑むといふことである。簡素生活は文學が立籠る一番堅牢な最後の城廓である。この城廓に住んで彼等は完全に生きることが出來る。芭蕉は完全に生きた人間である、少くも他人の爲めに生きたので無く自分にのみ生きた人間である。今の言葉でいふと、彼は神と共に生きた人間である。又彼の言葉を用ひていへば、『そゞろ神のものにつきて心をくるはせ道祖神のまねきにあつて』生きた人間である。芭蕉の詩心の靜寂は時間を超越して古典的である、彼の人間心は[illegible]的に單純である。彼の簡素生活は世の隱者の生活でない。實際に於てアレキサンダーで無くては實行の出來ない純な生活である。彼の詩境は永久に破壞されない。彼の心は澄み渡い。

七八十年前の米國に、簡素生活に完全な自由を見出したソウロウといふ文學者が居つた。彼は基督教に近いワーデン池畔に堀立て小屋を造つた……『家には冬の用意が無い、單に雨露を凌ぎ得るだけで、壁も出來て無ければ煙筒も無い、滿足に削つてもない板を無造作に釘付けにしたものだ。板の割目から風が入つて夜は特別に寒い。何も塗つてない白い木の戶や窓は朝の內は別して清潔に見える……それは空氣の流通の良い白木の小屋で、通りすがりの男神や女神を款待するに適して居る。風でも吹くと、丁度山の天邊を吹きあれる風でゝもあるやうに自由な大きな聲で騷がされる。そして朝の內は、絕えず風が吹きすさぶ。創造の詩は此處ではついぞ妨害されたことが無いが、恐らく人はその詩を聞く耳を持つまい。』芭蕉の芭蕉庵もソウロウの小屋に比較することが出來る簡素なものであつたであらう。芭蕉は自然を精神の顯微鏡で眺め。彼は自然を耳喇叭で聞く。

彼の詩は寫眞的記錄のやうに正確である。彼は半里も離れた場所で咲く花の香氣でも嗅いだであらう。彼は眞黑な夜でも日中と同樣に、足元確に半野を歩いたであらう。彼の詩心は清い鏡のやうに、どんな自然の斷片でも映じたであらう。それで彼は聞いた……

艪聲浪を打て腸氷る夜は涙。

貧山の釜霜に鳴く聲さむし。

彼は天和二年十二月二十八日の大火で芭蕉庵を燒けだされた。ある本には天和三年の冬ともある。駒込大圓寺から火が出て、本郷下谷神田日本橋と甞めつくして兩國橋を燒落し、火が本所深川へ飛んで漸く鎭火するに至つたといふ所謂お七火事である。其後北枝が火災に遇つた時、『池魚の災承り我も甲斐の山里に引うつりさま〲苦勞致し候へば』といつて遣つた所を考へると、燒出されたといつても多寡の知れてゐる芭蕉でも、廣い區域の火事であつたから相當に困難を感じたであらう。住居を失つたといふのが動機で、其翌年の春早々甲州旅行に旅立つに至つた。彼は甲州で六祖五兵衛といふ佛所和尚の下僕で、目に一丁字が無くても優れた修禪の男に厄介になつたさうだ。又彼は磯部源左衛門といふ旗本の世話になつたり、甲州に居た杉風の姉を便つたとも傳へられて居る。然しこの甲州旅行の收穫は、『馬ほく〱我を繪に見る夏野哉』の一句以外にない。……

……木曾路にて發句の事此度は日數の間も無之故發句も二三句ならでは致さず候、其くせ不出來にて候、漸く淺間邊にて「馬ほく〱我を繪に見る夏野哉」此句ばかりかと存じ候、其外は不埒千萬なる句にて候故不申入候』といふ芭蕉眞蹟の書簡もあるといふことだ。芭蕉は今風でゆらぐ草の半野を馬背で居睡し乍ら通る。彼はうつら〱と地上に印する自分の影を眺める……

……それは果して自分の姿であるだらうかと、客觀的にそれを眺める間に、彼は自然と合一し行く。彼はこの句に於て『枯枝に烏』以來始めて、眼を詩の正眼に据ゑることが出來たと思つたであらう。彼はこの句を得た時、それが自己を忘却し得た特殊の瞬間であつたことを感じたであらう。彼は詩を忘れて、眞實の詩を得たのである……この句の如きは、句自身が自然に背いたものであらう。

芭蕉は其角等門人の熱心な招請を受けて、再び江戸へ歸らさ、るを得なかつた。彼等は師の顏を見て喜んだ、さうして燒跡に草庵を再び建てゝ彼に進呈しようと相談した。この計畫の動化

[illegible]

「一芭蕉庵を求む。力を二三生に囲まんや。思を數十生に費たんや。思ふに廣く求むるは、却て其心易きに似たり。甲を糺さず。乙を避づることと勿れ。各志の有所に任す。堂成るの外、亦何をか求めん。將た是をしかいふ。清貧とせんや。翁自らいふ、たゞ貧也と。貧之又貧、許子の貧それすら一瓢一軒の求めあり。雨を障へ、風を防ぐ備なくば、鳥にだも及ばず。誰か忍びざるの心なからんや。是れ草堂建立のより出づる所なり。」

彼は再び草庵を得て秋も老い、風吹き横ざまに雨が庵の戸を叩く時、窓外の芭蕉が凄涼の音を聞いた……『芭蕉野分して盥に雨を聞く夜哉。』彼はこの新庵に僅か一年間住んだのみで、『千里に旅立て路粮をつゝます、三更月下無何に入るといひけん昔の人の杖にすがりて』で始まる『野ざらし紀行』の行脚に上つて居る。彼が行脚の最初の句として得た作品は、『野ざらしを心に風の沁む身哉』である。秋は詩人傷心の期節である。

彼は都會の複雜と騷擾を芭蕉庵で拂り落した。彼は今既に單純化せる草庵生活を忘れて、一層に最少限度まで單純化せる行脚生活に入らんとするのである。彼は所謂生活の奴隷でない。彼は人生問題を解決した……何程不必要な生活を除くといふ點に眞實の意味がある。人間は省く物の數に比例して實際の貧

[illegible]

を發見する。彼は平野を過ぎる風を[illegible]つて、[illegible]の[illegible]を求める。彼は蟻の如く地上を這つて生きる……あらゆる飾裝を捨てゝ自然に入る時、彼は本地のまゝの人生に當たる。彼の行脚は物質的にも精神的にも精進である、苦行である、詩の祈禱である。彼の紀行は詩の凱歌である。彼の紀行は眞實な人生の巡行曲である。私は行脚生活に於ける芭蕉を、生活上の最大節約者精神的の最大修道者として尊敬するものである。

『行脚の掟』と稱するものは後人の僞作であらう。僞作でよい。其中に芭蕉の半面が顯はれてゐるから、其數節を拔かう。

『一つ宿に故なきに再宿すべからず、樹下石上に臥すとも煖かなる席と思ふべし。腰に寸鐵なりとも帶ぶべからず、惣て物の命を取ることと勿れ。……人のもとめなきに己が句を出すべからず、望を背くもよからず、問はざるに說くは說くにあらず、問ふに答へざるはよろしからず。たとへ險阻の境たりとも所勞の念を起すべからず、起らば中途より歸るべし。……主あるものは一枝一草たりとも取るべからず、山川江澤にも主あり勉めよや。……一宿一飯の主もおろそかに思ふべからず、さりとて媚び諂らふ事なかれ、如是の人は世の奴なり。此道に入るもの

は此道に交はるべし。夕を思ひ且を思ふべし、旦暮の行脚といふ事は好まざることとなり、人に勞をかくることなかれ、屢々すれば疎んぜらるゝを思ふべし。』

『野ざらし紀行』は、貞享元年八月江戸を立つて東海道を經、伊勢路から郷里伊賀に入り、大和巡りして吉野へ出、それから江州を經て濃美に入り甲州路をすぎて翌年四月江戸に歸る旅行記である。『秋十とせ却りて江戸をさす故郷』とある如く、十年振りの歸郷はどんな感激を彼に與へたであらうか。『しばらく身を立てむ事をねがへとも俳諧の爲にさゝへられ、暫く學んで愚を曉る事を思へども、これが爲に破られ、終に無能無藝にして只此一節に繋る』と彼が其後『笈之小文』に書いてゐるやうに、所謂立身出世を目的として江戸へ出たにも係らず、今依然として風雅の放浪者として彼は郷里に歸るのである。彼は紀行に書いて居る『北堂の萱草も霜枯果てゝ今は跡だに無し。何事も昔に變りてはらからの鬢白く、眉皺寄つてたゞ命ありてとのみ云ひて、詞は無きに、兄の守袋をほどきて、母の白髪拜めよ。浦島が子の玉手箱、汝が眉もやゝ老いたりと暫く泣きて』とあつて、芭蕉は『手に取らば消えん涙ぞ熱き秋の霜』の句を吐く。この六ケ月間に渡る旅行の詩的効果はどうであるか。彼は『道のべの木槿は』の句を得て居る。『山路來て何やら』の句を得て居る。これ等は『枯枝に烏』の句により、『馬ぼく〳〵我を』の句により、開け始めた彼の靜寂純雅の詩境を一歩進めたもので、自然を赤裸に眺めて人生即詩の表現を得たものである。『年暮れぬ笠着て草鞋穿き乍ら』『夏衣いまだ虱をとりつくさず』等の句は、無技工な人生の報告であるに止る。所謂蕉風とは何を意味するか。若しそれ等の作品が蕉風を代表するとするなれば、蕉風とは技工を否定して自然に驀進する人生詩に外ならない。さうだ。芭蕉は檀林調の技工から目覺めて、今人生即詩の詩境を發見しつゝあるのである。

然し彼は藝術家である。藝術家の視覺は鋭敏である……『辛崎の松は花よりおぼろにて』を見よ、彼は湖水が放散する春の夜の水蒸氣が松に咲かせる朧色に注意して居る。藝術家の聽官は鋭敏である……『海くれて鴨の聲ほのかに白し』を見よ、彼は夜の海上に一點の白色が光る所に鴨が飛ぶといふ光景に注意して居る。私は芭蕉が富士山に對して一句も無いことを寧ろ喜ぶものである。其後彼は吉野に於ても作品が無い。又松島に於ても作句が無い。藝術家は特殊な自然の身振りを見る、其感激は精細である其情調は緻密である。自然が芭蕉に特殊の振りを示さない時に、どうして彼に何あることが出來やう。彼は自分を僞ることが出來ない。彼は自分を強ひることが出來な

い。自分に對する批評をしていて、他人も批評の對象[illegible]ることが出來ない。

芭蕉の三大紀行と稱せられることの最初の行脚を終へ、芭蕉は再び深川の草庵へ入つた。彼の生活は、『貧ふて喰ひ乞ふて喰ひ、飢寒僅に逃れて、「日出度き人の數にもいらん年の暮」』の生活である。四十二歳位で既に老年を語るとは少々早すぎる。然し五十一で死ぬに至つた彼である……初老の悲哀を痛切に感じたであらう。『米買ひに雪の袋や投頭巾』は『深川八貧』の一人としての彼の句である。それでも彼は『伊勢が貧る家にも來たり千代の春』と喜んだ。『名月や池をめぐりて夜もすがら』と中秋の月を賞した。

私は今彼のこの頃の作『古池や蛙』の句に關して語りたい。私は嘗てから英文で書いたことがある、『日本人がこの句を歎美する理由は何處にあるか。草庵の秋もさびて古池へ飛びこむ蛙の聲は突然寂寞の天地を破るであらう……靜は動と轉換する。諸君は靜と云ひ動と云ひ、或は生と云ひ死と云ひ、これ唯境地の一轉に過ぎないと思ふであらう。然しこの句は哲理を說くので無い、禪宗の神秘主義を人に强ひるので無い。地下の芭蕉を再生せしめなければ、句の眞實の意味は分るまい……また作家自身でも其作の意味が語られない場合も多い。「この古池や蛙」のらは、作者自身でも其意味を知らなかつたのかも知れない[illegible]作者も自分[illegible]たない。然し讀者は讀者で勝手に了解して[illegible]であるかのやうに、各自の解釋を與へることが「讀者として詩を創造する」ことにもなる。。善良な讀者のない所に善良な詩のある譯がない。特に日本の十七字詩は讀者の想像に待つ所が多いのである。』私はこれ以上語る必要を見ない。千歳不易といふ言葉を使用したければ、この句以外に澤山適用し得る句があるであらう。然し私は芭蕉の俳道の極意この一句にあるといふ主張を否定しない。彼の自然正觀の幽寂な詩境はこの『古池や蛙』の句を持て一段の進歩をして居る……進歩といふ文字が惡るければ、一變化といつてもいゝ。

芭蕉は更に旅裝を調て再び西行の長行脚に出るのである。時は貞享四年十月。卯辰紀行は左の言葉で書き始められて居る。

『百骸九竅の中に物あり、假に名づけて風羅坊といふ。誠に薄ものゝ風に破れ易からんことをいふにや、彼狂句を好むこと久し、終に生涯の謀とす。或時は倦みて放擲せんことを思ひ、或時は進んで人に勝たんことを誇り、是非胸中に戰うて、是が爲めに身安からず。暫く身を立てんことを願へども、是が爲に障へられ、暫く學んで愚を喩さんことを思へども是れが爲めに破られ終に無

能無藝にして唯此一筋に繫かる。宗祇の連歌に於ける、雪舟の繪に於ける、利休の茶に於ける其貫通するものは一也。しかも風雅に於けるもの造化に從ひて四時を友とす。見る所花にあらずといふことなし。思ふ所月にあらずといふことなし。思ひ花にあらざる時は夷狄に等し。心月にあらざる時は鳥獸に類す。夷狄を出で、鳥獸を離れて、造化に從ひ造化にかへれとなり。

彼は東海道を下り伊勢路に入り、明くる元祿元年春三月舊主蟬吟公の遺子新七郞良長に其別墅に招かれ、『さまざ〳〵のこと憶出す櫻哉』と感慨胸に溢れ、三月十七日郷里を發して伊勢參宮後、兼て約束して置いた尾張の杜國事萬菊丸を作つて、いよいよ吉野をさして出發する。二人の笠の內に、「乾坤無住、同行二人、吉野にて櫻見せうぞ檜笠、吉野にて我も見せうぞ檜笠、萬菊丸」と書付けらる。彼は丹波市にさしかゝつて、この旅行中最も價値ある一句を得た……『草臥れて宿借る頃や藤の花。』漂泊詩人の行く路は寂しい。芭蕉は一日の旅行で疲れ、夜の宿を求めようとする……彼の疲勞した心は却つて心を單純化させる。彼の詩的意識は緊張して夕日に一房の紫色を添へる藤の花を見出すのである。

『寬步駕に代へ晩食肉よりも甘し。泊るべき道に限りなく立つべき朝に時無し。只一日の願二つのみ。今宵好き宿を取らん。草鞋の我が足に宜しきを求めんと計りは、聊かの思ひなり。時々に氣を轉じ、日々に情を改む。若し纔に風雅ある人に出會ひたる悦び限り無し』と芭蕉は書いて居る。千變萬化する自然に永久の宿を求めるのは、空間を超絕して生きる芭蕉の姿である。時々刻々に動搖して行く時間の中に靜止を發見するのは、時を超絕して生きる芭蕉の姿である。彼の行脚は道場に入る修業者の精進で無くて何であらう。彼は吉野より高野和歌浦を訪問し、奈良へ出て同行者の杜國と袂を別ち、轉じて大阪に遊び進んで須磨の夏を賞した。『蛸壺や果敢なき夢を夏の月』は彼の明石夜泊の句である。播州路から引返して山城に出、それから近江の大津を經て岐阜に入り、長良川の鵜飼を見て彼は、「面白うてやがて哀しき鵜舟哉」の一句を殘す。名古屋に入つて暫時滯在したが、八月更科の秋を見る爲め、越人同道で木曾路に入り寢覺の床四十八曲峠を經て善光寺に參詣した。さうして彼が再び深川の草庵に歸つたのは、九月某日である。

彼の最大旅行奧羽行脚はその翌年三月下旬に始まる。芭蕉時に四十六歲である。『月日は百代の過客にして行き代ふ年も亦旅人也。船の上に生涯を浮べ、馬の口捕へて老を迎ふる者は、日日旅にして旅を棲處とす。古人も旅に死せるあり。予も何

れの年よりか、片雲の風にさそはれて、漂泊の思ひやまず、海濱にさすらへ、去年の秋江上の破屋に蜘蛛の古巣を拂ひて、やゝ年も暮れ、春立てる霞の空に白河の關越えんと、そゞろ神の物に憑きて心を狂はせ、道祖神の招きに會ひて取る物手につかず、股引の破れを綴り、笠の緒付け替へて、三里に灸すうるより松島の月先づ心にかゝりて、住める方は人に讓り、杉風が別墅にうつる』……これが奧之細道の書出しの言葉である。これに正に私が左の詩を書い時の詩境であらう。

聖なる空、眼に見えねど確に、神の御手に招かれて、
我等は銀色自由なる風の如く放浪する、
胸には一つの歌を蓄へ、我等は祈禱の兒童。

我等は都城の亡ぶるを歌ふものでない、
王國の災は我等の足を止まらしめない、
我等の心は遠く、太陽、風雨を友とする、
我等、聖なる大道に於ける影の放浪者。』

初夏の自然は希望で溢れる。豐かな太陽の光線は日光の自然をどんなに青く、どんなに壯麗に見えさせるであらう。日光を[illegible]て緑く青み[illegible]來るのを。私は芭蕉のやうに四月朔日に日光へ詣つて、[illegible]院の山門の上から下の方の一帶[illegible]の緑が青い樹木の葉に乘つて動いてゐるやうに感ぜざるを得なかつた。私は芭蕉と共に『あらたふと青葉若葉の日の光』と叫ばざるを得たかつた。芭蕉はこの句の裏に恩澤八荒に溢れる日光の神德を述べて居るが、私はたゞそれを詩的にのみ了解したい『世の人の見付ぬ花や軒の栗』の句にしても、栗といふ文字は西の木と書いて西方淨土に便ありと、行基菩薩の一生、杖にも柱にも此木を用給ふとかや』の前書が無い方がいゝと思ふ。青葉若葉の間から栗の花を見出す所に、彼の詩的態度が×く。芭蕉と同行の曾良も黒髪山で『剃捨て黒髪山に衣かへ』と歌つて、詩的更新の世界に入ることを喜ぶ。那須野が原を横斷して殺生石を見、日頃見たいと思つてゐた蘆野の里にある遊行柳を一見して『田一枚植えて立去る柳かな』の句を殘し、須賀川驛の相良等躬を訪ひ、白河の關如何に越えたかと問はれて『風流の初めや奥の田植歌』を示し、この旅行の詩歡此處に始まるの感を洩らした。

五月一日飯坂溫泉へ行き名取川を渡つて、仙臺青葉城下に入

り、それから野田の玉川沖の石を尋ね、鹽釜が浦で入相の鐘を聞き岸の小舟を憐んだ。船を借りて松島に渡り天下無双の絶景を眺めたが、彼に一句も無く、十一日に瑞巖寺に參詣して十三日に平泉へ至つた。『三代の榮×一睡の中にして、功名一時の叢となる。國破れて山河あり、城春にして草青みたり』と感じて、芭蕉は『夏草やつはものどもの夢の跡』の一句を殘す。『五月雨のふり殘してや光堂』と彼は光堂で歌つて『七寶散らされて珠の屏風破れ、金の柱霜雪に朽ちて、既に頽廢空虚の叢となるべきを、四面新たに圍ひて甍を覆ひて風雨を凌ぐ、しばらく千歳の記念となる』と書いて居る。

此處から強力に案内されて、險阻な山間を手に汗を握り〲最上の庄へ出て、尾花澤の清風といふ『富めるものなれど志いやかしらぬ』男の歡迎を受けた。山形領立石寺は清閑の地である。七里も後へ戻つて其處へ行くに、『松柏年舊土石老て苔滑に岩上の院々扉を閉て物音きこへず、岩をめぐり岩を這て佛閣を拜し、佳景寂寞として心すみ行くのみ』を感じて、『閑かさや岩にしみ入蟬の聲』といふ名吟を得、芭蕉は最上川のほとり大石田といふ所に、俳諧の道の栞にもと所謂わり無き一卷を殘すに至つた……さうして芭蕉は『このたびの風流こゝに至れり』と極度に感激して居る。『五月雨をあつめて早し最上川』の句は、彼が最上の急流を下る時の句である。

私は此處でこの芭蕉論を閉ぢるであらう。彼はこゝに於て奥羽行脚の最高潮に達した。彼は『閑かさや岩に』の句と、『最上川』の句で、疑もなく彼の詩歌の絶頂に立つた……さうしてその後の彼の作品は、畢竟附錄に過ぎない。私は最早や最上川から敦賀へ出て美濃路へ廻る詳細を語る必要を見ない。彼の詩の絶頂が『閑かさや岩にしみ入蟬の聲』であり又『最上川』の句である如く、彼の一生もその以後五年間は一種の附錄に過ぎない。

美術界の展望

山本鼎

二種の美術家

現代の日本には、風俗習慣を全然異にする美術家の二大種族が對立して居る、一とつは固有の種族で日本畫家と云ひ、同系統の彫刻家工藝家を加へると其數萬を超へ、全國到る處に住むで居る。一とつは新興の種族で、明治以前には五十人とは居なかつたらうが、今日では三千人位はあり、これは西洋畫家と稱ばれて居る。そして此系統の彫刻家工藝家又加速度に殖えてゆくのである。此二大種族はお互ひに自惚れて居るが決して喧嘩はしない、喧嘩と云へばいつも仲間喧嘩なのである、例へば二科會が美術院に藝術上の戰ひを挑む事は將來もありさうでないが、二科が威を張ればすぐに三科が跳び出すのである。蓋し、此二大種族の共存關係は、農村對漁村のやうなもので、それぞれに異つた幸を惠まれて安堵して居るのである。

日本畫家の大多數は懷古と擬古に耽つて居る、歴史や古詩や伊理璃や古い繪卷や、支那の傳說、佛畫、花鳥などに題材を求めて、東洋の傳統的な技法で、屏風、懸物、襖、額、繪卷、色紙、短册といつた日本建築に缺く可らざる裝飾美術を作り、それを賣るのである。それらの繪畫は、畫家の心もちには單に高尚な仕事であるが、需要者にとつては貴重な實用品なるが故に、自然と市價を具へ、其ブローカを業とする書畫屋なる者が何處にも居て、賴まれなくとも注文の増殖を圖つてくれるのである。されば此種族の巨頭は宏壯な家を建て、多くの門弟を養ひ、或は妾を蓄へ、數十萬の資産を積むだ者さへある、彼れらの大多數は、かくして總ての新興藝術に風馬牛なのである。

西洋畫家の大部分は佛蘭西近代繪畫の追從者だ、彼れらの市場には、巴里で見られる程の新傾向は既に悉く輸入されて居る。最も多いのは依然セザニスト(セザンヌ崇拜者)で、林檎と花瓶と布をモデルにした靜物畫や、立木も家も佇像も鑛物的な硬さに表された繪畫が年々何千枚となく竹の台に集るのであ

る。此連中の描くものは、日本畫家の繪のやうに文學的な手管をもつたものでなく、率直に繪畫的効果を企圖した繪で、概して現實の物象である。則ち、裸婦、果物、花、風景、顏、等々、何れも各人の印象、感覺、認識の對象であり、技法も從つて自由だ。さてそれらの繪はどうなるのであるか、額椽をはめられて展覽會に列ぶのである。

日本畫には書畫屋といふ者があるが西洋畫にはそれが無い、日本畫は質屋で受取るが西洋畫は斷られるさうである、日本畫家は畫伯といふものを持つが西洋畫家は大ていそれを持たない、日本畫の大家は相撲のやうに多くの弟子をもつが西洋畫の大家で内弟子を置いて居る人はあまり無い。日本畫を描く人は多く職業的であるが西洋畫には澤山の餘業者(ディレッタント)がある。日本畫家の後援者(パトロン)には老年の實業家や貴族が多いが西洋畫家の後援者(パトロン)は概して少壯な實業家と學者である、日本畫のひいきは主に有產階級と書畫屋であるが西洋畫のひいきは主に無產知識階級や學生である、日本畫の大家は藝妓(げいしゃ)や幇間(たいこもち)の社會に巾が利き每月お茶屋へ何千圓といふ拂ひをする人もあるさうだが西洋畫の大家はそんなお金があれば、陶器や裂(きれ)を蒐めたり、丸善の上客(なじみ)になつたりするであらう。日本畫家で新聞雜誌へ批評を發表する人はほんの一二三人であるが西洋畫家はたいてい遠慮のない批評家だ、日本畫家には漢學の素養ある人多く、彼れらの遊學地は支那と印度であるが西洋畫家の遊學地は歐羅巴だ、日本畫家の風俗は羽織袴であるが西洋畫家はだんぶくろだ、日本畫家の仕事場は疊だが西洋畫家の仕事場は板敷だ、日本畫家は坐つて描くが西洋畫家は立つて描く、日本畫家は絹に紙に水を使ふが西洋畫家は多く麻に板に油を用ひる、——かやうに此二大種族はあらゆる點に反對を見せて對峙して居るのであるが、唯一とつ、世間に製作を發表する方法のみは同じである、日本畫家も西洋畫家も、彫刻家も工藝家も、其唯一つの方法、即ち展覽會なるものの經營にはずいぶん苦心して居る、彼れらは一年一回の展覽會に、名利の灸所(きゅうしょ)をぐつと攫(つか)まれて居るのである。

展覽會と公衆

美術展覽會の繁昌は近年最高潮に達した、文展から帝展への過程に幾度か葛藤があり、其都度私營の展覽會が出現して逐年其勢力を增大し、今日では在野の展覽會が質に於ても量に於ても官設の帝展を壓して居るのである、唯公衆の人氣は依然帝展に集り、來觀者數も繪はがきの賣上高も在野の展覽會に比べて五倍乃至十倍といふ盛況であるから、入選入賞の新聞價(ニュースヴァリュー)はいやが上に高くなり、全國に宣傳されて、漸次無緣の公衆をも惹き

寄せるのである。

近世の美術家は、東西齊しく展覽會を中心にして生活して居る觀があるが、展覽會にもいろ／＼あつて、日本のは専ら左の三つである。

一とつは、主催者が政府とか新聞社とかで、美術界各方面の權威者に鑑別及審査を依囑し、勿論主義を一定せず、流派や傾向を制限する事もなく、出來るだけ廣く各種の出品を募つて大展覽會を見せやうとするもの、これは美術家が經營や事務の責任をもたなくともよいもので、帝展や、先年試みられた大阪毎日新聞社主催の全日本美術展覽會などがそれである。一とつは、美術家の團體が主催して一般出品を受付け、鑑別のうちこれを世間に紹介するものであるが、これは二様に分けなければならない。Aは、會としては主義主張を有たず、鑑別をなるべく寛にして、中位の作品を網羅し、毎年の展覽會を欠損なくすましてゆかうといふ、單に平和な存續を志すもので例へば、國民美術協會、太平洋畫會、光風會、日本水彩畫會などがそれに當るのである。Bは、會として主義をもち、鑑別を嚴にして傑作を擧げ、時人の最高批評に浴する覺悟あるもので、これは日本美術院、二科會、春陽會、國畫創作協會などがそれに當るのである。なほ一つは、個人展覽會もしくは聯合個人展覽會とい

つたのであつて、[illegible]

日本の美術界は、今日新しい個人時代にはいつて居る。[illegible]畫も南畫も、大和繪も浮世繪も、印象主義も後期印象派も、寫實主義も、未來主義も、セザンヌもルノワールもマチスもピカソも、一と渡り祖述し終つて、無[illegible]無法な渦をして居る處だ。どれにも安心出來ず折むづかしく思へて來た處である。英雄的な氣慨が地を拂つた吾が美術界では、多數の平凡とこれを對象にはしやぎ廻る小賢しい奇矯をそくばく見るにすぎない。どの展覽會も生彩がなく、肉がなく、神經がなく、痛快さがない。列むで居るものは藝術であつても展覽會其のものは非藝術である。常に内部の協調を顧慮し、人氣と買氣の前には弱くなり、骨の折れる經營を製作者自からせねばならぬ有様は、まづ生産組合聯合會の感じである。

一體、美術家自身が經營に當り事務を見ねばならない今日の狀態は悲むべきではあるまいか。經濟上の心配は別にしても、評判に對して神經質になり、批評家に人質でもとられて居るやうないやな氣もちのする事や、(自分の繪に就てだけなら、誰れもわりに平氣なものだ)東京、京都、大阪の三ケ所で開くとすれば殆三ケ月に亘る閑つぶしとなる事などを考へる時、是れ賢ならず、と思ふのである。お百姓すら、すこし進歩した國で

は生産者は生産に就てだけを心配すればいゝやうになつて居る時代に、美術家が自分で店の事まで考へなければならないとはおかしな話だ、僕は、全部の美術家のために、展覧會の經營及事務を國家が執つてくれる時代が早く來るといゝと思つて居る。國家主催の展覧會、それと、個人展覧會、吾々の製作發表機關はこう二様で何の不都合もなからうと考へる。

とにかく、眼前の諸展覧會は、藝術上の何の運動(ムウブマン)をも語つて居ないと云つていゝであらう。

帝展、院展、國展

日本畫の新味は、帝展↓院展↓國展といふやうに移動し來つたやうに思はれて居るが、此頃は何れの展覧會でも相當の新味に接する事が出來る、昨年帝展は文展以來の優賞者を殆ど全部委員に擧げ、一部（日本畫）二部（西洋畫）三部（彫刻）を併せて六十八名の委員となつた。其なかには、寫生式な新味を帶び、どこか雄渾な感じを與へる結城素明の繪や、デッサンのうまみに富むと共に印象の清高な平福百穂の繪や、浮世繪の傳統に近代的デカダンの情緒を加味した鏑木清方の繪や、新ロマンチストの頽廢を宿した矢澤弦月の繪や、敦朴な詩情をもつた石井林響の繪などが見られるのである。又、磊落な着眼と神經質な技巧とが珍らしい型(タイプ)を作つて居る牧野虎雄の繪、平板な[illegible]式な技巧で變つた油繪を描き、佛蘭西政府から勳章を拜領するに至つた藤田嗣治の繪、和田三造の明快な佛蘭西風の寫生などを見る事が出來、彫刻では堀進二のロダン風の直情な肉づけ、石川確二のゴシック風の單朴化などが見られるのである。併し、此處の特色はやはり官學臭の強い事である、擬古と懐古と、無意味な大作が帝展の代表的な印象である事は依然として變じない。

美術院は、統領の横山大觀がまづ獨創を尊ぶ人であり、凝り性な小林古徑、新趣味で一つぱいになつて居る川端龍子、精緻描寫の一手を示した速水御舟、和魂洋才の小川芋錢、洋魂和才の近藤浩一路、女の自然な姿態を小品に把(キャッチ)する事の上手な酒井清爾、嚴格な眼と寛かな童心を併せ有つた石井鶴三など新鮮味に於てまことに多士濟々であるが、會としての印象は鮮かでない、大觀は西洋畫に對して殆ど排斥的な感情をもつた意固地な東洋主義者であるが、院展から西洋趣味を拭う事は困難と見えて、泰西繪畫の影響が漸次瀰漫してゆくやうである。各人的なのが近代生活の特色とすれば、院展は帝展に比してはるかに近代的と云はなければならない。國畫創作協會は、土田麥僊を盟主として打つて出た日本畫界に於ける有力なる新興畫家團であ

る、大正七年の創立である。この會は今六年の歳月を經てきたが、當[illegible]迄した作品展覽會は中絶し、今度久しぶりに竹の臺に於て[illegible]回目の展覽會を開いた。

此の展覽會では、日本畫と西洋畫の區別が徹底的に除かれて居た、版畫も油繪も絹の繪も、單に繪畫として取扱はれてごつちやに陳列してあつた、そしてそれが見た眼に少しも不調和でなかつたのである。つまりそれ程此會の所謂日本畫の大部分は、油繪化し、水彩畫化し、版畫化したものであつた、それはたしかに新傾向で、青年日本畫家の間に人氣のあるものらしいのであるが、僕らはそれを、新傾向のうちの一番感服出來ないものとして居る、なぜならば、それはちつとも新しいものでなく頗る舊いものだからである、畫題(モティフ)を眼前の實相に求める事、見たゞけの在りのまゝを描寫する事、色彩の感じを複雜に表さうとし、濃淡の調子を添へて圓味を見せる事なんかは、洋畫の畑ではやり古して居る事である。

國展には、東洋の風も吹いて居ないが佛蘭西の陽も照らず、北歐の蒼天が蔽ひかむさつて居る、寫實主義も、神秘主義も、デカダンも此處のは皆陰慘だ。但しそれは總括的な印象で、會員の繪は別個の新味をもつては居る、土田麥僊は才力兼備の雄將で、此人が展覽會に發表するものは、いろいろの不備はあるにしてもとにかく[illegible]作で、其に對する[illegible]、あらゆる近代繪畫の技巧を利用してある、印象主義も後期印象主義も、立方體主義(キュービズム)も、未來主義(フューチュリズム)も進んで彼れの繪の新味を助成して居るのである、頭のいゝ彼れは、それを統率する指揮官として、深い傳統をもつた東洋のリアリズムを選むで居る。

村上華岳の素描佛も、榊原紫峰の花鳥も、又東洋趣味に立脚した新畫人の心を語るものだ。之を要するに、國展も又、會としての意志は不明瞭で、共同團結は運動(ムウブマン)的のものでなく、御多分に洩れず、便宜團體なのである。

二科會の功績

二科會は創立後もはや十二年になり、會員十六名を擁して、吾が國西洋畫の中心勢力になつた、創立の動機は、文展時代故黒田清輝先生を中心にする學校派の壓迫を忍び難くなつた事に起因し、有島生馬、石井柏亭などが先登となり、反アカデミズムの旗を押し立て竹の臺に陣を張つたのである。

當時のアカデミズムは、白馬會及太平洋畫會の代表する處で、前者は佛蘭西のラフアエル、コランを、後者は同じ國のジヤンポドル、ローランを祖師とするものであつた。コランは、

青白い裸體の女に、草原や杜や毛皮などをあしらつて、甘い優美な繪を作つた人で、ローランの方は、ナポレオンの臨終とか、地下室のルーテルとかいふ戲曲的な歷史畫の大家であつた。

明治の三四十年代、白馬會派は美術學校に根城をおき、一方は在野黨として對峙し、油繪の天下を支配して居たのである。二科の出現した頃は、此二大勢力は既に權威を失つて居た。人體と背景で美的情緒を表す事は、女學校の活人畫に移り、英雄的な物語りは活動寫眞の受持となつて、畫家は率直に自然の繪畫的物象をのみ畫生活の對象にして進んだが、彼れらを導いたのは、今日でも二科の基調を作つて居る印象主義である。

佛蘭西から歸りたての有島や山下や正宗は、初期印象派のモネエや、ピツサロや、シスレーや、ドガや、ルノワールなどに導かれて太陽下の輝き生動する現象に見惚れ、色彩の濃淡の變化極りなき自然美に胸を躍らした、又安井曾太郎や石井柏亭は後期印象派を傳來した、セザンヌに傾倒して歸つた安井は、物體の客觀的な印象を嚴格な技術で表現して見せた、石井は色や濃淡の複雜な諧調を好かなかつたから、淡泊な表現で自然の明快な印象を要約して樂んだ。彼れらは殆ど構圖をしなかつた、いつも自然を前にして其處で仕上げるのであつたから初期の二科展には大作が少なかつたが、其代り寫生の生采に富んで居た、其、考究を要さない眼からすぐ心に親む純繪畫的魅力が一般青年を動かしたのである。青年達は、詩歌的な感情を背景にした弱々しい裸體畫や、脂ツぽい道路山水や、むづかしさうな構圖を遠慮なく見捨てゝ、憧憬と好奇心を二科へあづけたのであつた。

二科の蹶起は、何にしても大正の美術界に於ける最良い事件であつたと云へる、猛烈な反文展の感情は「本展覽會は何人と雖隨意出品するを得、但し同時に文部省美術展覽會に出品せんとする者に限り之を拒絶す」と會規中へ規定した程であるが、其戰鬪的な感情には藝術上の信念がバツクになつて居る、單に社會と三角關係にある專橫な既成勢力に對抗しやうといふのでなく、會員一致の藝術的立場から挑戰したもので、其處が他の會の成立より面白い處である。

併し、二科もさやうな挑戰的情熱をいつまでも持ち續けるわけにはゆかなかつた。なぜならば彼れらが勝つたからである。又、敵の集團に分解作用が行はれて、自分らと相似たものがそちらにも段々多くなつてしまつたからである。假想敵を失つた二科は、氣が弛むと共に旗色が不鮮明になつていつたが、利巧な幹部は其處に一とつの營業方針をつかむで會に對する世間の

[illegible]術を防ぐ事に成功したのである。それに[illegible]として[illegible]の藝術を[illegible]する事なく、[illegible]に於てする事である。即ち[illegible]二科と、[illegible]未來派や、立方體派や、[illegible]派や、分離派などの旗に會場の大半を[illegible]つて居るのである。かくて二科の對社會的風貌は、中心の凡化に頓着なく永遠に新しいであらう。そしてそれは、初期の戰鬪的な功蹟と呼應する運命的な事業なのである。

草土社の感化

草土社は、現畫壇の憎まれものである、なぜ憎まれるのか？、主腦者の態度が神經質でそして高飛車であつたからだ、價値觀念が強く自己并に自派を宣揚する事のあまりに執拗であつたからだ、其僞に人が一と言批評すると十言酬ひ、百千語評すれば千萬語返へすといつた行き方で、而も最高度の毒言を放つので、誰もそれにはまゐつちまひ、其ごう腹が悉く蟲になつて居るのである。もしそれが彼れの政略的な行爲でもあつたなら、誰れもおかしく思つて反感をもたなかつたであらうが、それが合にく眞面目なものと感じ、天地神明の前にしかく自認して居るのであるなと覺て見れば、誰れも氣もちが惡くなるのにさうゐない。併し一方、熾烈な自信に根さすごうかん不屈の態[illegible]數の[illegible]多いのはなおさらである、[illegible]へ行くところを信仰する青年にたちて居る。又、[illegible]個性に自[illegible]や、美術院の出品者にもかたの作者を見出す事が出來る。今もし、美術界で普選を試みたならば、最高點で當選するのは、おそらく岸田劉生であらう。

岸田の草土社は、美術界に如何なる感化を與へたのか、主なる點は、冷靜な認識及精細描寫、是れである、次に、中世紀趣味、卑俗趣味、暗い調色、といつたやうな事であらう。草土社は、二科の魅力である處の印象主義を頭から罵倒してかゝつた、そしてホルバインや、デューレルや、ジャンワンエークなどを祖述してそれに對峙した、それら北歐中世の諸家は、深刻な寫實家で、嚴しい素描家であつた。彼れらの調色は透明で明く、線は金屬的な剄さをもち、筆致は沈靜で、畫面は皮のやうに滑かなのである。

草土社人は認識を重んじ確な描寫力をもつて居るが、「自然」の讃美者ではない。例へば岸田の有名な「麗子像」にしても、靜物の模樣とか、皮膚の色とか、丸味などは寫實であるが、一見して誰にも在りのまゝの小女像とは受取れぬ不自然さがある。其處に俊先人の美術に做つた不可思議な陶冶があるのだ、

一個岸田は、もとから忌憚なく模擬する人である。ゴッホ、セザンヌ、ホルバイン、デューレル、宋元、又兵衞、といつたやうに轉々として移動するのである。それらのものは、自然に彼の肉となつてやがて岸田の獨創を偉大にするものかも知れない？、佛蘭西のピカツソは非凡な才をもつて居て、印象主派（アンプレッショニスト）、象徴派（サンボリスト）、立方體派（キュビスト）、未來派（フイチュリスト）、構成派（コントラクチュヴィスト）と移動し、此頃は又、新古典派（ネオクラシシズム）に逆轉して居るのであるが、僕はピカツソのやうなのを惜むべきデカダンと思つて居るから、岸田の仕事にも疑問を持つのである。

草土社は、岸田を首領に、木村莊八が女房役となり、中川一政、椿貞雄、横堀角次郎、河野通勢、などを有力な麾下とする趣味の共通した强固な團體で、大正四年以來年々仲間の展覽會を開き、それは美術界の名物であつたが、右の人達が全部一昨年春陽會に參加したので、其後は休會して居る。それに、各人が所謂草土社風に倦きが來て、名々別天地に自由な畫生活を展開し出したから、もはや昔日の凝集力をもつて草土社を復興することは難いであらう。

春陽會の成立

春陽會の成員は、もと美術院洋畫部同人の全部、前記草土社の人々、それから遊星の梅原龍三郎らを中心としたもので、其成立によつて、日本洋畫界は三大群（グループ）の鼎立となつたのであるが、其處に藝術上の鮮明な對立を見たわけではない。唯、春陽會の宣言によれば、近年美術展覽會が頗る興行化し、所謂會場藝術の漸次萌（はびこ）らんとするを顧み、其惡風潮を除（のぞ）こうといふにあつて會としての意志表示は單にそれだけであるから、此會も要するに便宜團體であるが、比較鑑賞して見れば、帝展及二科に對して大いに異色があるのである。總括的に觀て靜觀的な小品の多い事、南畫趣味の歡迎されて居る事などは此會の特色であらう、又個々に就て云へば小杉未醒の壁畫や、森田恒友の水墨など他の展覽會では絕對に見る事の出來ないものだし、石井鶴三の漫畫風な油畫（カリカチュール）も、木村莊八の芝居繪も、河野通勢の繪草紙も此會だけに見られるものである。

とにかく此會は、會員の誰れの好みにも緣の無いものは一切取らず、成心の生々（き）しい作を喜ばないのであるから、二科展のやうに新聞價（ニュースバリュー）は高まらない。想ふに、今日公衆相手の展覽會に興業的傾向を潔僻に除こうとしても無理であると共に、美術家が知らず〳〵左樣な配慮に囚はれるやうでも困るのである。春陽會は更に一步進むで此難問題を根本的に解決してはどうであらうか。

東洋趣味の更生

東洋趣味の更生は美術上近來の興味ある問題である。此傾向は偶然にも廣汎な新機運に併行して居る。廣汎な新機運とは、國家觀念もしくは民族觀念の復興をさすもので、これは世界的に目ざめて來たのである。此處に、美術に於ける其共鳴を偶然と云つたのは、美術家の革命的な仕事は必しも道德的意識から導かれず、多くの場合、藝術的價値の發見に出發するもので、畫壇に於ける東洋趣味の更生も宋元の繪畫や、南畫や、浮世繪や、其他固有の種々な東洋美術を新しい眼で見直した處に始つたのである。

新しい眼とは、泰西繪畫を見あきた眼の事である、其眼は東洋の繪畫に珍らしいリアリズムを發見した、發見したと云ふよりは暗示されたと云ふ方がよいが、とにかく、簡潔な線や點々や暈（ぼかし）で象徵されて居る躍活な『自然』を觀たのである。或人はそれをリアリズムなどと思はないかも知れない。併し、山は山を現さうとして描いてあるし、人は人を現さうとして描いてあるし、顏は顏を表さうとして描いてある。花は花、鳥は鳥、雪は雪として餘念なく描いたものである。それはすべて直接法だ、觀念化したものではなく、理論化したものでもなく、まさに直接觀たもの[illegible]直接に表現されてゐる。

蓋し此リアリズムに惚れ込んだのは西洋人であつて、日本畫家の方は却つて西洋のはつきりしたリアリズムに何物かを識つたのである。尤も日本畫の大家は東洋畫の精神を叫へて居るが、それは固定した觀念で求めて居るもののやうな氣がする、さもなければ、彼れらは西洋畫に對して排斥的感情をもつ筈がない。西洋畫家には東洋美術に對して排斥的感情をもつやうな野蠻人は一人も居まい。なぜなら彼れらは、滑稽な志士ではなく單に繪かきだからである。

今日、三十代以上の西洋畫家で、東洋畫に趣味を有たぬ人は殆ど無いと云つていゝかも知れない。とツくに油繪を廢めて岩繪の具や水墨に馴染むで居る人もかなりあるし、油繪のなかに其意を試みる人も澤山出來て來た。恐らく、此現象は遠からず吾が洋畫界を風靡するであらう。

未來派→表現派→構成派＝マボー

東西の繪畫の傳統は、『自然』を表現の直接の目標としつゝ推移した、それは如何なるものも、とにかく實在の形象を無視する事のない再現藝術であつた。處が二十世紀になつて益々近つ

た繪畫が現れた、それは、眼に於ける實在を否定したものであつた、繪畫の純潔な要素は形や色や濃淡や線や團塊であるとし、實在の何物をも象らない構成を企てゝ不純なものを一切却けたのである、此處に云ふ不純なものとは、まづ題材がそれであり、文學的要素がそれであり、描寫がそれである、其處でそれらの藥味は皆捨てられて、とんと模樣のやうな繪が作られた、未來派、立方體派、表現派、構成派、ダダ、シュプレマチスト、シンクロミスト、等々々極左黨のすべてが此亞流である、勿論それ〴〵にむづかしい藝術論をもつて居て、少しづゝ表現も異るけれど、或物を描くのでなく、前に擧げた所謂繪畫の純潔な要素を使驅して畫面を組織するものである事に於て同一である、此最新傾向は、未來派、表現派、構成派と云ふやうに流行が移つて來て、目下は構成派が全盛のやうである、構成主義の本家は露西亞にあつて、日本ではマボー一派が其支店である、マボーといふ名稱は話に聞くと、マボーの御大村山知義が、紙片にアルハベットを書いてそれを天井に吹き上げて順に落ちて來た二枚をとつて名としたものださうであるから、日本だけに通用の名であらう。此連仲は機智と勇氣に富み、好戰なのが其特色である。彼れらはむしろ宣傳のために製作するのであつて、彼れらの繪は悉くつまりポスターなのである、彼れらにとつては既成美術團體は全部敵で、其敵を罵弄したり怒らす事が一とつの事業なのである、彼れらは常に幸福である、なぜならば傳統の重荷を背負つて居ないから、又どんな行爲でも彼れらの行爲は此世の中に在つて嶄然と目立つから、だから革命當初露西亞の政治家は、美術界に於ける此極左黨を盛んに利用したものである、昇曙夢氏の著された『新ロシアパンフレット』のなかに、其事に就てすてきに面白い記事があるから、此處に摘要さして戴くとしやう。

「――その中でも特に未來派と立體派とが全盛を極めた。未來共產主義や社會主義と何の交渉もない彼等は、單に美術界に於ける革命家であるといふ理由で、直ちにソヴェート政府のおかゝへ美術家となつたのである、事實革命後一年有餘の間ロシア美術界はタトリンとシュテルンベルグを中心とする未來派の獨裁時代であつた。美術大學も美術學校も、博物館も、美術館も展覽會も金も手形も公債も凡てこの派の掌中に歸した。何十萬何百萬といふ金額が政府から美術家に下附された。幾百の銅像や記念像が革命の初期に政府から注文された。注文は若い極端な彫塑家達に殆ど漏れなく行き渡つた。

――反革命と戰はねばならなかつた時だけ、破壞的任務が當

者の目的であつたのだけ、[illegible]美術家は[illegible]の唯一の必要な[illegible]勞者であつた。が破壊的任務が終つて、積極的創造的使命の遂行に移つた時、事情は全く一變した。革命はその初期のほとぼりが覺めると間もなく、その同勞者に向つて勞農階級に解り易い有益な美術の製作を力強く要求するに至つた。――一九一九年四月カーメニエフは、モスクヴア・ソヴエートに於て次の如く表明してゐる。

「お道化はもう澤山だ。勞農政府は是迄未來派や立體派やイマジニストに與へてゐた補助を斷然打ち切らなければならない。是等の道化師はプロレタリヤ藝術家ではない。彼等の藝術は我々のものではない。それはブルジョア的邪道、ブルジョア的頽廢の所産である。我々には勞農民に解るやうな本當のプロレタリヤ藝術が必要である。我々はそれを創造しなければならぬ。たゞプロレタリアートに理解され、彼等に興味を與へる藝術上の傾向だけが國家の補助を要求する權利を持つ。未來派、立體派及び其他の藝術上のモダーニズムはロシヤの勞働者には不可解である。それ故に是等の藝術は無用な脚荷として之を放り出さなければならぬ。」

こんなわけで、[illegible]資本家は[illegible]つて貧しいものに[illegible]になつたのである。美術上の注文は大抵[illegible]に向けられるやうになり、實際主義に迎合した作品ならなんでも需要[illegible]より は四五倍も高く賣れたさうだ。美術も此の政策などに於いつい て來ると又面白いが、日本のやうに物の使ひ道を知らない國では極右派もさつぱり張合があるまい。併し彼れらの仕事は、舞臺裝置や建築や、裝飾工藝や商用美術の領域に段々開けてゆくに相違ない。

青海嶋游記

「日本の海上アルプス」

黒頭巾

其一

舟中の奇游、古より赤壁游と稱す。然れども、赤壁賦の聲價は、感興にありて、山水に存せず。江流有聲、斷岸千尺、山高月小、水落石出、その高興、想ふべし、かくの如き光景。何處の山水にか見る可からざらん。赤壁、必ずしも奇景にあらず、但だ蘇東坡の文章、千古、得難きのみ。入蜀記、吳船錄。ともに舟行の興趣を寫して、併せて岸上の奇峯を描く。然れども、その文の不朽なるは、流水、變化、極無ければなり、必ずしも岸上の風景、天下に絕奇なるにはあらず。若し夫れ岸上、絕奇の光景を得て、併せて舟中の感興を逞しくするを得ば、則ち斯生の壯游たるを失はず。

東に天龍川あり、西に玖磨川あり、水、清冷、澄むこと鏡の如し、急流を下る舟、箭よりも迅く、舳、波を衝いて水晶を粉碎し、大珠、小珠、舟に濺ぐこと驟雨の如し。或は木曾川の日本ラインより仰いで翠巒の嶺に、犬山城を望めば、朝辭白帝彩雲間、千里江陵一日還の詩を回憶するなるべし。然れども日本の川、滑絕はあり、汪洋の雄觀は、楊子江の泛々たるに比す可らず、これを以て、日本の舟游、或は赤壁に擬するものあり。未だ之を凌駕するの壯游あらざるなり。

舟游は則ち坐游なり、一步を動かさずして、萬里の游も爲すべし。笛吹くべく、詩、賦すべく、酒飲むべく、長嘯すべく、豪興、發して止まるところを知らざるべく、山岳、奔り、江海立ちて、乾坤、自から來つて、坐前に、變化を現す。況んや青海島の奇景たる、遠く赤壁の類にあらず。その峻嚴は、何ぞ啻、東坡の所謂、虎豹と虬龍との如きのみならんや。栖鶻の危巢、馮夷の幽宮、到るところに在り。日本海の碧波、限り無く天に連る。落日を呑み、明月を浮ぶ。輕舟に艤して青海島を環游すれ

ば、始めて赤壁游、未だ雄奇を極むるに足らざるを知らん。何人も、此に來るものは、悉く蘇東坡たるを得べし。獨り吾が文章の奇、島を傳ふると、彼が赤壁に於ける如くならざるを憾むのみ。

其 二

山水の一語は支那より來る。支那人、風景を論ずるに、山水といひ、江湖といひ、海を含ます。稀に、海を併せて言へば、山海といひ、山海經の一書あり。山海經にも、海岸の奇景、山水に匹敵するものを載せず。支那は平原國にして、また山水國たり。風土の粹、山水にあり、日本は海國なるに、古より文豪、畫家、概ね山水の二字に拘泥して、海及び海岸を詠嘆、描寫することを爲さざりしは、惜しむ可らずや。

日本は海岸線の國。風土の特徵、海岸線にあり。その美も亦た此に存せずんばあらず。日本と、希臘と瑞典那威との三國を推して、海岸線の風景國の代表的とすべし。その中、他の二は、ともに半島なるに、日本は、ひとり島國たり。海岸線の變化を縱ままにする所以のもの、想像するに難からず。抑、大八洲は皆、島なり。無數の大島、小島、羅列、散布して、海の世界に於ける「島の公園」なりといふを得べし。これを以て、島の風景、特筆すべきもの、固より少しとなさずといへども、青海島は、その尤も雄奇なるものの一なり。島は表日本に多くして、裏日本には少し。青海島は、則ち裏日本にあるが故に、その傑出する所以の要件をして、一層、光彩を擴大せしむるものあり。表日本の氣分は、壯麗にして優美。裏日本は、雄壯にして奇峭なり。青海島は、本洲の海岸線に沿ふて長く伸び、その半面は、裏日本の雄壯を、他の半面は表日本の美麗を現はす。則ち一箇の島にして、表裏日本の二つの雰圍氣を象徵す。裏日本にありとはいへども、その地位、未だ多く玄海を離れずして、濃厚なる裏日本の沈鬱氣分に浸さるゝに至らず。かくの如くして、表裏日本の特色の境界線に跨るを以て、此の島の天惠第一とせざる可らず。

日本は、その國土に比例して、三方里に對し、海岸線の一里を有するに、支那の海岸線は、その十分一、則ち一里の海岸線に對し、三十方里の國土を有す。高山峻嶺は、龐大なる大陸の一方に偏在し、山と海との間に大平原あり。海山、遙かに隔絶し、山嶺は平原に浮ぶ。これ即ち大陸風土の大觀なり。日本の國土の十分の九は山嶺にして、海山、接觸し、山は直ちに海に浮ぶ。太平洋と、日本海と、前後より山脚を洗ふ。山にして島、島にして山なるは日本の風土なり。殊に青海島は、岩壁、峭立し、磅然として、波濤の間より岩礁の拔け出でたるが如

しき表に、巻き、自ら消して、山頂を見たすかと疑ふ。

青海島は、既に日本の島國的風景の結晶といふべく、その完全にして、また極めて優秀なる標本ともいふを得べし。富士山は東海に臨めども、なほ裾野あり。青海島には、裾野もなく、麓もなし。唯だ突立せる岩壁あるのみ。岩壁は則ち峰なり、巓なり、岩境の群峰、搆峙して、瀑布あり、湖水あり、渓谷あり、洞窟あり、寺あり、部落あり。岩壁と茂林と碧海と、錯綜せるうちに人生あり。島は狭く細く伸びて、執拗なる複雑を以て、變化、測り易からざる海岸線を組織するあり。青海島は風景觀より見たる日本の縮圖なりといふを妨げず。その規模は大ならずといへども、その趣味は則ち深し。

其三

霧海に漂ふ峯頂は、青海島の趣味を想像するを得べし。島の群峯の海抜は太だ高からずといへども、その山根は深く海中に沒入す。若し海を排して、島の根を見るを得ば、生平、波に浮ぶは、高山の峰頂たるに過ぎざるを知るべし。或は、その儘にして、全島をせり上ぐるを得ば、その奇峻なる、これを金剛山の一部として見るを得る。趣味より觀たる金剛山は、幾個の青海島を陸上に置くものにして、青海島は、則ち海に沈める金剛山たらずんばあらざるべし。

造物者か、蓋ひの筆を揮つて、層々の岩壁、すべて青[illegible]

白紙に描き成せる自然の繪卷は則ち山岳なり。造物者は、また風雨を揮つて、海洋に萬丈の波瀾を湧き立たしめ、一時、滿海の山岳を畫き出だせども、風雨收まれば乃ち消えふつて痕なからしむ。山岳は久遠の波瀾なり。陸上の波瀾は、屹然として風雨に動かず。蓋し海洋一時、無數の山岳は一色にして、地上、久遠の波瀾は、その色彩、多趣多様にして、人間の筆力を以て、未だこれを模倣するを得可らず。

青海島は海中の山岳なり。その、殊に雄麗なるは、輪廓の奇抜なるのみにあらず、その色彩の變幻・陸離として、無限の快感を與ふるにあり。今、これを思ふだにも、淡紫、紺青、金光、銀光、五彩燦爛たる貝子の洞窟、白水晶の礎、陸離として筆端に湧くを覺う。吾輩、既に裏日本の海岸線を大觀し來る。一部分を以てすれば、その輪廓の奇偉なる、青海島に讓らざるもの、必ずしも少からずといへども、此の島の麗彩に匹似するものを見ず。況んや、此の麗彩の連續、約十里に渉ること、此の島の如きをや。天意、麗彩の一大畫卷を、紺碧一色の日本海に、久遠に畫がき出だせるもの、則ち青海島なり。

其四

本洲の極西、雲濱、微茫として三韓、蘇滿、望むべきに似たり。古より捕鯨の名所を以て知らる。名所は、海を以てすれば西、油谷灣より東、仙崎灣に至り、島を以てすれば、油谷灣中に俵島あり、仙崎灣外を蔽ふに青海島あり。俵島は、既に天然物保存法に據り、指定せらる。青海島は、近來、漸く世間の注目を惹くものありといへども、未だ大に天下に著はるゝに至らず。吾儕、七年前、初めて此の島を見たるとき、海上アルプスの一語、舟中、突嗟に、口を衝いて出づ。アルプスは山岳の宗、島はその絶顚といへども、海拔二千尺に過ぎざるべし。大雪谿と高山植物とは、アルプスの要件。島には、これあることなし。吾儕、徐ろに、これを理路に訴へ、以て、島とアルプスとを對照したるにあらず。然れども巍々蕩々たる岩壁千仭、直ちに舷頭を壓して峙ち、行くに隨つて窮まらず、縹渺として仙界を航しつつあるを思はしむ。汪々洋々たる日本海の蒼濤、遠く天を捧げて湛え、大空は波影に動搖し、限りなき雲烟、海中より湧く。ノアの大洪水に、孤舟に棹さして、高山の頂に至るかと想ふ。此時、何人か、舷を叩いて、海上アルプスを歌はさらん。上帝、若し億萬石の水を齎らして、アルプスをして、沐浴せしめば、浴中より現はれ來るアルプスの山、悉く此の島の如くならずんばあらざるべし。

鯨鯢、群をなして、南海より日本海に往來するや、川尻半島より青海島を掠めて過ぎ、或は迂回して島をめぐり、島の南面、所々の灣に入つて游戈す。長驅遠征の鰭を此の島かげに憩はしむるならん。冬は巨鯨の潮吹、川尻より青海島に至る沿岸一帶の青山に映ず。川尻より東、二里にして津黃の潮吹洞あり、鯨海の奇勝たらずんばあらず。北海の怒潮、洞を打つて、洞天の長孔、潮を吹くこと霧を吹くが如し。秋夏、鯨、來らず、但だ此の洞のみ潮を吹く。風、海を激すれば、吹いて百數十尺に至る。島にも幾多の潮吹の小洞あり、未だ津黃に比するに足るものなし。蓋し今より數十萬年の後、優勢なる日本海の水蝕は、これ等の小洞をして、恐らくは悉く、津黃の潮吹洞の如くならしむるに至らん。その頃は、日本海の鯨鯢、悉く人間に捕り盡くされて、天に向つて潮を吹くもの、唯だ鯨海の潮吹洞のみとならん。

其五

鯨鯢は、岬角、大海に斗出して潮流を激せしめ、そのかげに潮勢のよどむところに集まる。裏日本には、長州沖と能登沖とを鯨海とし、長州沖の鯨海は則ち川尻より青海島に至る。殊

に、青海島を以て、海龍王の王居となすべし。鯨群、[illegible]
を過ぎて日本海に入り、航程一時間にして青海島に到り、潮水
を高く吹上げつゝ、岩壁の絶景を觀て過ぎ、[illegible]に島を一周し
て、仙崎灣に進み、終に紫津浦の奥に入る。紫津浦は島の内懐
にして、仙崎灣より見れば、灣中、更に灣あり。譬へば八幡
の藪の奥底に潜みたらんが如く、鯨群の見て以て産所に適すべ
き安全地帶となすなるべく、島は則ち金城鐵壁を以て日本海の
怒濤を防いで、海龍王を護もるに似たり。紫津浦は、風光明
媚、宛然として瀬戸内海の入江の如し。内懐に確つかと海龍王
を抱く島は、青海島を除いて他にあることなし。

雷州府誌に、鯨を謂つて海龍王となす、未だ、その王都を記
さず。海龍王、豈、王都無からん。莊子、南冥に大魚あり、そ
の名を鯤となすといへるもの則ち鯨鯢なり。莊子、鯨鯢の威力
を識るといへども、未だ平生の生活を知らず。漫に、これを誇
張し、理想化して、鵬となるといへり。安んぞ知らん、事實は
想像よりも奇なるものあるを。鯨海に於ける海龍王の起居、動
靜もつとも放誕にして、荒唐なるものあり。これを忠實に記錄
すれば、直ちに英雄的小說をなすを得べし。抑、鯨鯢の事、玆
に詳論するを要せず。然れども鯨海を記せずんば、以て、青海
島の雰圍氣を明らかにするなきなり。また寧波府志に、鯨を浮

邑となす。[illegible]
絶ち、概ね鯨群に長須鯨多し。[illegible]長須鯨といへども、その大なる
[illegible]
少き日本海に、頗に、幾多の群嶼を現出す。浮島の群、東進し
て、海上アルプスの前を過ぐ。これ則ち海龍王の東游なり。海
上アルプスの岩壁、亦た色彩を鮮明ならしめ、山岬、峯頭に現
はれて、海龍王と遥かに相拱するならん。その壯觀、蓋し其想
するに餘あらずや。

大寶積經に、鯨鯢を稱して、摩竭魚王となすもの、此の鯨海
に於て、もつとも適切なるを覺えずんばあらず。日本は海魚の
國、而して魚府を東に銚子、西に下關海峽とす。海峽の魚府、
此の鯨海の魚を以て第一とす。青海島の南腹、仙崎町に山口縣
の水產研究所を設置するを以ても知るべし。鯨海は、日本海の
關門、海濶くして、潮勢の激越するところ、暖潮、寒潮、近
く、遠く、逆に此の海關を并跡す。潮、浴みて急に、魚みな肥
えて美なり。南北兩帶の魚、多く潮に乘じて集まり、魚の多
種、多趣なるも亦た天下に稀なり。これを以て日本の魚區なり
とするも、誇張にあらず。古より鯨鯢を以て魚となし、日本
紀、萬葉集にも勇魚（イサナ）、則ち伊佐灘（イサナ）あり、鯨鯢なり。此の天下の
魚王國に、魚王なくんばある可らず。此に於てか、摩竭魚王の

名、豫め此の魚區の爲に撰ばれたるかを思ふ。青海島は、此の魚區に於ける一大分水嶺なり。島の南、仙崎灣、深川灣を內海とし、島の北を外海とす。摩竭魚王は、島を環ぐつて、南北に往來す。島の北側、則ち海上アルプスには一の人家なし。南側には、海を環ぐつて皆、部落あり、山腹、水濱にも、みな茅屋、點綴す。島の北側は、雄壯なる大自然界にして、南側は則ち古き文化を有する歷史の分野なり。殊に、紫津浦に近く、島の東端には通浦あり、戶數密集するもの六百軒、夜は燈光、海を紅くす。摩竭魚王は、眷族を率ゐ、人家に近く、殆んど咫尺の間を、臆面もなく、堂々として進入し來るなり。

其六

油谷灣は早く著はれ、青海島の名、久しく知られず。蓋し油谷灣は、本洲と朝鮮との連絡の好地點に位し、將來に於て問題となるべき望あり。天然の港灣としては、灣入二里、幅廣く、水深く、幷て、日本の優勢なる大艦隊七十餘隻を容れて、綽々として餘裕あり、裏日本に於ける稀有の良港とすべし。これを以て經濟上に注目せらるといへども、その趣味に屬するものは知られず。青海島に至つては、その南半面に、千年以上の文化の歷史を有し、點々たる地名の、稍々世間に知らるゝものなきにあらずといへども、その北半面、則ち海上アルプスの風景美に至つては、近來に至るまで、全く顯はれず。日本海、航通の衝に當り、開闢以來、帆影、櫓聲、海上アルプスを見て過ぐるもの、恐らくは幾千億といふを知らずして、久しく著はるゝを得ざりしは、耶馬溪が街道にてありながら、山陽を待つて始めて海內に著はれたると同じ。惜しいかな、海上アルプスの好風景、未だ知己に逢はざりしなり。

青海島は、周回、約十里。東西に長く、南北に短かし。その大さを以てすれば、日本海に於ては佐渡を第一とし、隱岐を第二とす。此の二つは各、國をなす。これに次ぐもの則ち青海島なり。表日本には、これくらゐの面積の島は特筆するに値せず。裏日本にては、屈指の大島たるを失はず。此の意味に於ても、青海島の名は、知られざる可らざりしなり。同じ名の、伊豫の大三島は、神代よりして識られ、宮島はいふに及ばず、屋久島は杉に知られ、鬼界島は俊寛に知られ、種ケ島は鐵砲に知られ、耶馬溪は紅葉に著はる。東北には、松島あり、金華山あり。人事と風景とに論なく、表日本の島嶼、世に名あるもの舉げて數ふ可らず。皇天、若し一大愚公を世に下し、青海島を移して、東海に置かしめば、今より千年前、早く既に、天下に喧傳せしは、言を俟たざるなり。日本の歷史に、裏日本に起つ

波の音を得たるも[illegible]なし。[illegible]に、[illegible]、[illegible]に異ならず、況して人は動き、風景は動かず。且た裏日本の絶景、長門にも得難きものにして、世に顕れて顕はれざるもの、必ずしも青海島のみにあらざるべし。吾儕、暫らく、自から熟知するところを挙げて、海上アルプスを以て、稀有の好風景として、これを海内に推稱するなり。

役ノ小角は天下の名山を踏破したるも、青海島の海上アルプスに登らず。大雅堂は、一笠一杖、富士山、立山、白山に登り、三岳道者を以て自負す、日本アルプスの開拓者なり。然れども海上アルプスには來らず。およそ日本の登山家、專ら地上の山岳を見て、海上の山岳を見ず。僅に知られたるは金華山なるべし。青海島の海上アルプスは則ち海上の名山なり。その岩壁の奇峰を以てすれば、狩野派の描ける蓬萊島ならずんばあらず。その巓に巨鳥、舞ひ、人間の築づるを許さざるに似たり。日本の名所、靈地、殆んど弘法大師巡錫の傳説を有せざるはなし。青海島には、ひとりこれ無し。また以て、世間に隔たりたる仙島なりしを知るに足らずや。

其七

[illegible]

し。此の海上の感興に、[illegible]、人に、お鯨の歌あり、いさなとり、うたひをさして、にきたつのにたへるものこれなり。[illegible]、此の地に來ること、偶然あり。若し眞に雪爪を印したりとせば、此の海角に明魚を見しこともありしならん。

吾儕、嘗て此の岬頭に遊び、三府楼の明月に、捕鯨の唄を聞く。

鯨、射とめて血糊のついた、銛をひへば、沖が鳴る。

長天の海風、吾髮を吹き、鯨海の壯闊、髣髴として眼中に浮ぶ。身、此の境に臨み、此の唄を聞くにあらずんば、安んぞ此の感興を發するを得ん。人儕をして此に來らしめしならば、その壯心、感慨、果して何如なりしぞ。

抑、此の鯨海の趣味帶、觀ろべきもの鯨魚のみにあらず。油谷灣の北を劃る一帶を向津具半島といひ、犀の角の如くに日本海に斗出す、その尖端の犀角の如くに、堅岩の突起するを川尻岬といふ。則ち本洲の最西端の岬角なり。滔天の波濤、澎湃と

して立ち、晴日には、夕照、火の如く海を焚く。半島の草木、紅を染めて、秋晩の霜葉の如くなり。岬角の堅岩、刳ぐつて屋の如く、崖下の水深、幾百仞なるを知らず。西海の全勢を擧げて、此に突喊し來り打つては回り、旋つては溶す。憤波の怒聲、つねに地に震ふ、請ふ見よ、此地、崖上の堅岩、平にして大坐敷を爲す、直ちに綸を垂れて鰆を釣る。鰆は大魚、而して性、獰猛を極む。浪を離るゝ最後の刹那に至るまで、潑剌として慓悍に跳ばれまはること、衆魚に絶す。徒手、以て引上げんとせば、人、魚を釣にあらずして、魚、人を釣るべし。乃ち崖上、堅杭を樹て、重綱を卷き、綸、引かれて已まさるを候し、以て、えいく聲して卷き上ぐ。およそ釣魚の雄壯なるは、青海に鰆を漁するに若くなし。その話を聞くだにも、壯士の胸、躍る。然れども崖上に閑坐し、烟管を啣はへて、徐ろに鰆を釣るに至つては、即ち此の危岬、獨特の妙境にして、現世稀有の快心事。太公望、再生すとも、驚倒せしむるに足らずんばあらさるべし。

其八

吾儕、杜甫の釣竿欲拂珊瑚樹の句を喜ぶ。語、簡にして海の仙境を道破せり。東方、古來の詩人、すべて山水を歌ひて、海を歌はず、桃源を山水境にのみ求めて、海に無量壽國あるを期せざるなり。杜甫の此句は東方の寸璧たらずんばあらず。

吾儕、舟を浮べて青海島の趣味境に遊ぶとき、此海にも、珊瑚樹あれかしと思ふ。若し海底の仙女をして珊瑚樹の間を潜ぐつて遊戈せしめば、海中の無量壽國は即ち此にあらん。油谷灣の海女は、海底の仙女なり、世間所々に海女ありといへども能く水深二三十尋の秘境に至ると、人魚の如くなるを得るもの、唯だ油谷灣の海女あるのみ。灣中の漁村、大浦を海女の國とす。三才圖會に、人麿の「向津具の海若かく海女」の短歌をす。灣の南岸、人丸岬に人丸祠あり、明石、高角と併せて人丸の三社とす。人丸、果して此に來つて海女を見たるか。彼をして直に見せしめば、必ずや仙女の一雄篇を留めずんばあらざるべし。然れども萬葉集には向津具の歌を載せず。此歌、歌聖の佳作にあらず、その萬葉に採らざるもの、豈、當時の歌壇に傳はらずして、ひとり邊陬の祚跡にのみ存するなるか。

此の「日本海の第一關」に於ける青海島は美人の顏たり、花卉の花たらずんばあらず。美人は、風姿を描かずして顏のみを描く可からず、花卉は枝葉を除却して、花のみを畫く可らず。此の趣味帶の環境を語ることなくして、青海島を記せば恐らくは、但だ花木の花、美人の顏のみを畫くに類せん。皆に、畢調

[illegible]

るを得ざるべし。

青海島を視るの途、二あり。一は鐵路、他の一は船路よりす。鐵路を最も便とす。山陽線、厚狹驛より此に、分岐して、日本海に到る美禰線。中國の脊柱山脈を突破し、長門湯本驛に至れば、北方に起伏する嶺を越えて、島の最高峯を望む、恰も南畫の山水に見る遠山の如きなり。清淡の脊信川に沿ふて丈の正明市驛に至る頃、群嶺、左右に開けて、日本海の波光、平野を浸す。碧海を縁どる一帶の松林の上に、青海島の奇峯蜿蜒として現はれ來る。山陽線より此に達する、行程、僅に二時間に過ぎず。此を過ぎて、西、鐵路一時間、萩に到るの間、海岸、奇景多し。車窓よりつねに海を隔てて奇峯の起伏して、客を送つて萩に至るもの、青海島なり。既に萩に近くして顧望すれば島の山々、漸く逸趣を示すものあり。然れども鐵路、始めて島を見る者、未だ太だ絕奇なる所以を想像せしむるに足らざるなり。海上アルプスの一帶、奇氣、人を壓するものは、島の北半面にして、未だ全く見えず。車窓より望む島の西端、鼻刳岩、波上に孤立し、遥に、その巨洞を透して北海の遠光を見せしむるもの、海上アルプスの唯一の閃光ともいふべきのみ。島の全形、初めて人前に現はるゝものは、その南半面にし

[illegible]といへども、畢竟、[illegible]

如として[illegible]の前に現はれたる[illegible]

[illegible]

茫たるを失はず。極道の勝を以てしても、これを天下の許すなりと思はざりしにあらずや。

其九

美禰線は、石灰國の美禰郡を穿ちて通ず。滿目、すべて石灰岩。白石に草木を被らしむ、山骨、露はるゝもの悉く白し。蓋し海東の石灰國なり。鐵路に近くして、鍾乳洞群あり。代表的の四大洞は、北米のマンモウス、ケープを除けば、世界の巨洞たるを失はず、群中の少なるものといへども、日本には雄視するに足る。地底の別乾坤、上下左右、みな大理石の奇峯なり、山を敲き、山を見、山を踏んで行く。一切の點景竹木あることなし。怪奇と幽奥の極致なり。島を訪ふの途、吉則驛に下車して、洞群を探り來つて、海上アルプスの前に立つときは、傑作の大パノラマを經過して、大公園の廣場に出でたるの感興あらん。

石灰國は、中國の脊柱山脈の南側を占む。賴山陽は中國の大

山脈を以て、龍尾に比し、その盡くところに、壇浦の奇ありとせり。安んぞ知らん、中國の山、龍尾にあらずして、却つて孔雀の尾なることを。尾の窮まるところ、珠玉の精彩あり。長門峽となり、鍾乳洞群となり、青海島の趣味帶となる。惜、これ孔雀の尾端の精彩、陸離として煥發するものにあらずや。昔年、日本海岸の交通の不備なる、かくの如き精華、埋沒して顯はれず。奇游を好むこと山陽の如きも、これを識るに及ばずして逝けり。

石灰岡を過ぎ、中國の脊柱山脈を北に越ゆれば、則ち深川（フカワ）村とす。村は山脈の頂上より五里にして日本海に到る。古の所謂深川莊なり。近松巢林子を以て此地の人とするの說を宣傳するは、蜀山人に始まる。此村、青海島の山影、照映するところ、東に綠樹の丘を負ひ、柿の木の間に茅屋の參差として出沒するあり、日本海の海風、稻花の梢を渡る。巢林子誕生地の碑あり。文獻の徵すべきはなし、傳說は多く存す。或は傳ふ巢林子は萩の藩士、杉森（スギモリ）氏の次男なり、その采地、即ち柿の木の村なり。巢林子、實に此に生る。またいふ、その庶子なり。萩藩士の子弟、次庶子、出家して禪僧となるもの少からず。巢林子もそれなり。下關の西谷寺に入り、得度す。偶、唐津の近松寺和尚、上方の歸途、此の雛僧を見て奇とし、請ひ得て肥前に伴ひ歸る。唐津の近松寺に、巢林子の遺髮を埋むるは、此の因緣あるに由るといふ。百年來、大阪の俳優、時に、此村に來り、柿の木の村寺に詣でゝ、往事を弔ふものあり。文樂座の太夫、亦た碑畔に來り、假小屋に淨瑠璃の妙曲を語つて、巢林子の英靈を招きし事もあり。先年、正明市に近松座を設け、以て、東方の沙翁を記念するあり。抑、杉森氏、維新後、此地を去ること久しく、家、既に毀たれ、その系譜、また幕末の戰禍に失ひ、此の大文豪を紀念するの資料、英國に於ける沙翁村の如くなるを得さるは、もつとも惜しむべし。

天下の好風景の前に、百世の大文豪を語るは感激多し。青海島の島かげに巢林子を生むの傳說を有するは、會心事にあらずや。巢林子の生地は、古來、諸說あり、未だ一定するに至らずといへども、鐵路、既に通じ、觀光の客、亦た漸く多し。日本海の沙翁村、青海島と共に、大に著はるゝに至らん。

石屋和尚は曹洞門の英傑、南北朝の合一に斡旋するは、天下、知らさるはなし。萬世一系の國體に貢獻するの大功、或は以て、和氣公に比すべし、村の大寧寺は、洞門の名刹、即ち石屋を開山とす。大内氏、石屋を崇信し、兩統合一を企望するに當り、和尚をして、その事に當らしむ。他年、大内氏の滅亡の悲劇も亦た此寺に於てす。大内義隆、逆臣陶晴賢に襲はれ、山口

を脱出して、青海島に來り、寺を營ふ[illegible]
はいふ、山陰に奔らんとするの際、颶風起り、舟進まず、[illegible]
寺に入り、君臣、ともに髮に剃す。寺は因して法門の法脈とい
ふ。耶馬溪の羅漢寺は、則ち大寧寺の[illegible]寺なり。羅漢寺は耶馬
溪を以て著はるといへども、太寧寺は却つて著はれず。上杉憲
實、出家して諸國を行脚し、此寺に隱れて入寂す、當年、法檀
の盛、想像すべし。今、寺荒れて、昔時の面影を留めずといへ
ども、獅子峯、峻峭、削るが如く、本堂の前、一列に白檀の林
を爲す。當年、大内氏全盛時の支那趣味を記念するものなり。
門前に清溪あり、石橋を架す、題して磐石橋といふ。大石を組
んで造る、橋の雅趣、海内の名山にも、未だこれに比すべきも
のを見ず。橋下、石、亂れ峙ち、河鹿多し。妙音、一溪を涼殺
す。地、僻にして人に馴れず、手づから攫むべし

深川溫泉は、寺を去る數町、音信川を挾んで村あり、欄干に倚つて河鹿を聽き、岩に踞して清潭に鮎を釣る。處々茅屋を交へ、野趣掬すべし。溫泉の名物を南條踊とす。四十七人、武裝し、旗差物を押立て、戰陣に擬して、陣中歌を唄ひ、且つ踊る。豐稔を祈る爲に、赤崎社に奉納す。それに先だち勢揃して、太寧寺に到り、磐石橋を渡り、唄ひ且つ踊ること一番、山中の異彩を發す。赤崎社の常舞台は、山腹の平地を環ぐつて三

[illegible]
觀覽者を圍む。蓋し溫泉、臥龍山、[illegible]
南生指に、その花大にして、[illegible]
す。

青海島の南側、二里にして、深川溫泉の靜閑なる風趣あるは、譬へば刺味に、わさびを添ふると同じく、觀光の興味に、生氣を賦與するものなるべし。表日本より鐵路、北來する者、此に沐浴して、南方の垢塵を一洗し、以て、神氣一轉して、裏日本の海上アルプスに直面せんことを要す。

其十

朝鮮の金剛山に、叢石亭を以て、入門の第一勝となすと同じく、海路、南より海上アルプスに到るは、油谷灣の俵島を入門の第一勝とすべし。叢石亭も、俵島も、皆、玄武岩なり。

金剛山の前、通川郡の庫底岬、碧海の怒濤と戰ひ、岬角、崩れて、長嘴、鋭どく海中に斗出し、玄武岩の巨柱、叢立して、叢石亭の如く、半島をなす。俵島は、灣口に橫たはるを以て、大海に露出せずといへども、形態の雅趣、優かなるに至つては、海内、玄武岩の奇景中、錚々たるものといふべし。但馬の城崎及び肥前の七ツ釜は岩洞たり。筑前の大門と、俵島とは海

中に彷彿すれども、大門とは自から別趣あり。俵島は、命名、通俗に過ぐ、俵を積んで碧海に積み餘るとも、此の奇趣あるべからず。金剛山の叢石亭は、叢石概ね直立するにあらざれば、則ち水平に叢積す。俵島は則ち直立する叢石を骨子として、或は横斜、或は水平に叢積し、以て、一個、巍々たる仙島たるを失はず、直立する叢石の嶺、海に迫つてこれが背景をなすあり。俵島は、宜しく改めて海東の叢石亭となし、一亭を島に築くべし。

海東の叢石亭が、絶奇を逞しくする所以は、併せて海中の人魚にあり。金剛山の叢石亭には、此の靈奇なし。俵島にありては、寧ろ海東の叢石亭を以て、趣味的に、人魚の靈海を標示するものならずんばあらざるべし。石奇にして、海、靈、此の意味に於て、此、彼に優れり。

此の趣味帶の海を靈ならしむるもの、人魚はその一なり。人魚は海女なり。大浦の海女、群をなして俵島の海上に來り、海底に出沒す。厚布を以て頭髮を緊包すること、鉢冑の如くならしめ、耳を塞ぎ、大なる潛水眼鏡を嵌め、白衣のシャツとパンツ、確然と腹卷を締め、尺餘の鐵片を腰に帶し、副ふるに紐付の鮑貝を以てし、蟲くと舟中に立ちて、海面を凝視しつつあるとき、凛々たる彼女の意氣なくんばあらず。

海鏡を波上に押し付け、海底の海女を見る。日本海の水、澄みて純碧なること、斐翠を溶かしたらん仙液よりも美くし。數十尋の海底、鮮やかに望むべきこと、舷を以て欄干とし、海樓の欄角より、清明なる空氣を透して、海岸を眺むるに異ならず。海底、白沙、珠の如く一面に敷くあり。その麗はしさ、言句に絶す。龍宮の庭上は、かくの如くなるべしと思ふ。所々、磊塊たる奇巖、突立すること、奇趣の大孤石に髣髴たるものあり。海藻、丈餘、或は二三丈に到らん。巖に沿ふて、栽えたらんが如くに生じ、枝幹、分明にして、一々、數ふべし。深山の草木、雜然として野生すると異なり、一個の藻石も、高尚なる趣味の眼を以て、悉く精撰されたるにあらざるは無し。時に、海上、天晴れ風強くして、波立ち、空に雲飛ぶ。海底には、此の浪なく、塵なく、濁なく、一碧、澄明にして、寂閑氣の微揺だも見ず。但だ純眞と平和とあるのみ。奇なるかな、海底の別乾坤。人間、寧ろ此の清淨世界あらんや。

忽ち見る、鏡裏、一個の人魚を海中に點出し來る。續いて、また一個、悠揚として沈み行くあり。吾が胸、鼓動し、更に吾が兩眼を海鏡に接着して見耽ける。海女が海底に行くは、大魚の、靜かに江湖を渉るが如し。時々、稀に鰭と尾とを揮つて、その利那に方向を變更すると同じく、海女は脚を揃へ、[illegible]

[illegible]に[illegible]して、[illegible]の[illegible]を[illegible]り、[illegible]の[illegible]にとても[illegible]行く。時に、[illegible]として[illegible]を[illegible]ふと見たれば、一[illegible]して、斜に[illegible]を押し分けて下り行く。恰も、人が海面を遊泳すると似たるものを見ず、偏へに遊魚、深淵に下るに似たるあり。[illegible]野にして、悠々として余裕あり。その下り詰めて、海底に近く、白沙を隔つる一尋に迫り、急に手脚を揮つて、再轉すると見れば、忽ち水平に横たはつて、双手を前に出して、安らかに、徐ろに前進す。閑かなる池に、群鯉、徐々として遊戈するが如く、體を動かすとしも見えずして、意外に速かに進行しつつあり。肩を以て梶としつつあるならん。その翻然、體を捻つて、忽ち方向を變ずるは、群鯉忽ち、人影に驚き尾を揮つて水を潑し、身を轉じ去り、順次、これに倣ふが如きなり。第一の人魚、動いて、第二の人魚、續いて動き、次いで第三、第四の人魚、若干の間隔を保ちて、鏡裏に現はれ來り、鏡裏、幾多の人魚、集散、出沒して、諸方の石藻を潜ぐつて徘徊するを見る。

其十一

人魚の群の海底を游戈するを望むは、眞に、夢中の光景なるかな。いかに美くしき夢といへども、かくの如き鮮やかなるを見るを期し易からず。夢か現か、恍惚として、人をして美醉の

[illegible]實つ人[illegible]に[illegible]する[illegible]、[illegible]に[illegible]、[illegible]して[illegible]に[illegible]り、吾舟に近く、遠く、[illegible]たる[illegible]、人[illegible]たる[illegible]すべし。[illegible]天つ[illegible]、[illegible]として、人に[illegible]ける[illegible]迸ばしる烟の如く、消えて跡なし。吾をして殆んど茫然、自失せしむ。顔を海に俯し、海鏡のうちに沒頭すれば、龍宮世界、その瞬間に再現す。人魚、依然として海底にあり。再び頭を擧ぐれば、再び人間世界に返る。仙凡の秘鍵、唯だ海鏡にあり。海底に龍宮あるか、海鏡に龍宮を藏するか。海底の龍宮に對すれば、吾心、少年にして、永遠の春あり。頭を回して海上を見れば、世相、眼中に映じ、双鬢に數莖の白髮あり、吾をして老いしむ。昔、秦始皇、徐福をして東海を踏んで蓬萊を求めしむる、誠に故ありといふべし。蓬萊は、山中幽奥の境にあらずして、碧玉の海底にあり。人、若し、試に、此に來り、眼を海鏡の中に曝らさば、吾言の誣ひざるを知らん。海鏡は則ち玉手箱ならずんばあらざるなり。

海底の海女を望めば、奇異にして端麗、極まりなし。古來、人魚といふもの、豈、此にあらずや。白布、白シャツ、白パンツ、頭より膝に至る、渾べて白装し、白人魚といふべし。人魚の説、數千年の昔よりあり、近來、これを見たりといふ者を聞

かず。史記に、人魚の膏を以て燭となすの文あるを見れば、その說、太だ古くして、未だその記載の詳かなるを見ず。西洋には則ちナイル河、或は地中海に發見し、必ずしも珍ならずとす。東洋人、人魚を說くもの、支那には南方に多し。その形態、大小、必ずしも一致せず。古、支那人、これを尺餘なりとし、最大なるは五六尺、略ぼ人間と同じとし、西洋には、これを四五尺とするもの少からず。西洋の人魚は、大概、半人、半魚にして、腰以下は則ち魚なり。東洋には、必ずしも半人、半魚なりとせず、然れども、亦或は肘に紅鱗あり、海中のものたるを知らしむ。その髮、緒にして頗黑しとする者もあり、また時に、白色、美麗、その海波に浮び出るとき、斜陽、これに照映して、白光燦然たりとするものあり。時には、その髮、その眼、ともに青澗色を帶び、目は海の如しと言ふものもあり。これを捕へて池沼に養ひしことあるに至つては、東西、揆を一にす。蓋し人魚の說、荒唐無稽なるが如く、極めて眞實なるが如く、紛々として定まらず。愈、出て、愈、詩の如し。大浦の海女を見ば、則ち百疑、一掃せん。

其十二

人魚は果して歌ふか。海中、女あり、能く妙曲を唄ひて人を魅す。オールを早めて近づかんとすれば、恍惚として尚ほ遠く隔つ。舟、計らず岩礁に會つて砕くといふ。かくの如きは、一篇の詩にして、その事、神話のうちにあるべし、人間、唯だこれを夢想するのみ。海東、叢石亭下の人魚は、果して歌はさるか。但だ、その魚の如くに潜むを見て、鳥の如くに歌ふを聞かず。

龍宮には音樂を奏すといへば、人魚は固より歌ふなるべし。然れども、人魚を傳ふるもの、能く、その唄ふを記せず。これと水濱に相逢ふとあり、能く人に媚ぶ、相見て相排するのみ。これを養ふに人語を解することなし。これに語れば、嫣然として微笑するのみ。日を經て一語を發せず。況んや、律呂に合し、妙音を歌ふをや。人魚は恐らくは唄はざるべし。然れども、此に來つて、海底の海女を見つゝあれば、詩のうちより抜け出でたるかと思ふ。妙艶、言ふ可らず。美くしき魚は、捕へて、これを竹籃に盛るよりも、その生きて麗水にあるとき、もつとも美なり。人魚は海底にあるとき、これを望んで、詩よりも更に理想的になるならん。乃ち海鏡より見たる海女は、能く歌へかしと思ふ。若し、能く歌はゞ、畫ける美女が妙なる律調を奏するにも似たるならずんばあらさるべし。若し、それ月明かにして、天、水の如くなるとき、端麗なる海女、波濤に出沒

[illegible]一つの世界一に入つて[illegible]文界に[illegible]人かの[illegible]に、すしも沈む可らず。海上アルプスを訪ねて、海路、前よりする者、此に來つて、日本海の海女を以て、人魚と做して、[illegible]、界海に、縹緲たる妙音を送らしめんことを願はざるはなかるべし。

人魚は、漢字に鮫と書し、また魞とも書す。海人魚ともいふ。人魚に牝牡あるは、あまに男女あるが如し。あまは海女なりと思はるれども、實際には男多し、海士と書く。世間のあま、海士多し、海女は稀なり。大浦は、海女のみなり。海女なるが、潛水の能率に優なるのみならず、詩的にして人魚らし。されば人魚を以て、婦魚なりとするは世界的なり。西洋には、その雄を以て、單に「人魚の牡」と稱し、支那には海和尚といふ。ともに人魚といへば、直ちに婦魚を意味し、その雄には趣味を感ぜざるを知るべし。蓋し人魚は婦魚にてあり度し、婦魚ならざる可らず。雲の上に住むものは雷神、海の底を行くものは人魚なり。雷神が男ばかりなるように、人魚は女ばかりなるが善し。

大浦の海女を見れば、古來、人魚の下半身を魚とするの說の、自然なるを思ふ。彼等は、水を潛ぐるに、脚を揃えて行く。若し、それに鱗を描ける長き一脚のパンツを穿かしむる

[illegible]スの美女、落ちて[illegible]を引く、外科[illegible]あり。只、[illegible]二たに擬けて、完全に、人魚を創造し得る。これを深水に放ふに、波間に出沒して自由自在を極め、時に、岩陰に繋ちて能く唄ふ。月下に、玲瓏たる美音、珠を飛ばすが如し、好奇の人あり、遙に望んで、人か仙かと疑ふ。窃かに近づかんとすれば、女、驚いて水に沒し去る。魚尾、潑溂として、波、渦を卷く。これを久しくして、待てども浮び來らず。時に、また首を波上に出して、形勢を覗ふことあり、顏、花の如し。譬へば水に接着せる睡蓮花の如きあり。すでにして、外科醫、新生の人魚の孤獨なるを憐み、更に、求めて、幸にして、女人の下半身を得、魚と換へて、再生して人間に還らしむといふ。此の一段、人魚の詩を說き得て、新味あり。

抑、半人半魚は甚趣に生命あり、理想的の生活にあらず。西洋の古書、人魚を畫がくもの、その頭髮を梳けづらしめて、世間の女性に異なることなからしむるあり。假令、龍宮に粧鏡臺ありて、顏色を美ならしむるを得るとも、半人半魚は、終に魚たるを失はず。若し能く唄ふとも、海を離るゝことを能はずん

ば、又た甚だ憐むべし。人魚の肉一片を食ふのみにして、若狭の比丘尼は八百歳なるを得たり。人魚の壽は果して幾何ぞや。人に、不老長壽を與ふれども未だ萬年の人魚の存するを聞かず。寧ろ若かんや、大浦の海女、人にして能く魚たり。外科醫を俟ふて、人と魚と斷續せしむるを要せずして、倏忽にして魚となり、人となる、變化の自在なるに。

大浦の海女は、日本海の精たるを失はず。油谷灣を以て、一大水族館とし、偉大なる硝子を以て、灣口を仕切つて、これを魚函とし、以て、側面觀を逞しくすとせば、人魚の游泳するは、群を抜き、その異觀、衆魚の追隨を許さゞるものあらん。海生の人魚は裸體にして魚身なるに、大浦の海女は則ち白布を以て嚴しく甲へるが故に、頗る精采あり。彼等は、浪の下には魚の如く、波の上に浮べるは水鳥の如し。水面に浮び出るや、顏と腕とを水上に現はし、脚を以て海を踏みつつ、相呼んで語る。今、那邊の岩かげに大鮑を發見したるも、捕るの暇なかりしを惜む、請ふ、待て、直ちに得來らん。彼等は波上に語ること、吾等が野に語るが如きものあり。語り終はれば、一轉して波間に潜み去ること、かひつぶりと擇ぶところなし。或は、速に再來するに意なければ、腰帶の鮑貝を置き、占有を標章すること、占有地に國旗を樹つると似たり。腰間の鮑貝には、各、符號を特記せり。彼等が、鮑、蠑螺を取るは當然の事、時に或は、鐵片を抜きて大魚と鬪ひ、遂に能く大魚を制するものあり。海生の人魚は鬪はず、徒手空拳なればなり。大浦の海女は、則ち戟を持てる人魚なり。

夫れ佛にも鬪戰勝佛あり。戰は生者の使命なり。人魚は、何を以て戰はざるや。人魚の創世紀を思ふ。茫茫たる太古、人間が戰鬪魂と平和魂との二つを、上帝より賦與されて、始めて斯世に出現したるとき、地上はその占有に歸せり。次に出現したる人間には、上帝、唯だ一つの平和魂のみを與へ玉へり。地上には、既に行くべきところなし、即ち去つて海を占有し、海中の人となれり。然れども、それより先きに、魚、既に海を占有したりしかば、人と魚と合體して人魚となれり。魚みな人魚を敬ひ、人は人魚を玩ぶ。戰は宇宙に滿ち、人の世界、海にひろがる。人魚の嘆、息まず。海を出で、上帝の膝下に歸らんことを祈る。日本の人魚は、推古紀に始めて見え、近世に至りても、平賀源内、木村蒹葭堂の徒、僅に人魚をいふものありしといへども、今、一も存するものあるを聞かず。今や、人、代りて人魚となる。戟持てる人魚のみ、ひとります／＼日本海に榮え行く。

青海島の地脈、海を潜つて西に伸び、[illegible]山に到り、更に地上に登つて滲東江を溯ぼり、隠現出没して、鴨緑江を渡り、西風山に至つて窮まる。其風山を見れば、青海島を思ふ。遠く海外に旅行して、故郷の知友に逢ふが如きなり。

萩の海上に六島、散布し、併せて六島村と稱す。六島は青海島に比すれば、皆、小さし。地脈、南に、青海島に接し、波を渡いで追及せんとするが如く、譬へば群島の、巨島に追ふて飛ばんとするが如きあり。六島の北半面、奇峯削立し、岩壁の色彩、壯麗なることも亦た海上アルプスと相似たり。宜しく、ともに綜合して、海上アルプスの一大連璧となすべきなり。數十百萬年の古、かくの如くなりしやも知れず。今、即ち大小、群浮し、燦然として大珠、小珠の如きなり。

海路、北より萩を俯瞰して、海上アルプスを訪ふの途上、別趣味は六島村にあり。萩の城は、阿武河口、一帶の海岸を坐敷とし、北海を庭園とす。小火山、笠山は山燈籠にして、六島は則ち飛石なるべし。青海島の岩巣は遠景をなす。水天、髣髴の際、一點の青螺、則ち見、島なり。此の飛石は、築庭を設計して、据らし來たれるにあらず。此の飛石と山燈籠と、天然に備

[illegible]
[illegible]
す。六島は、まさにそれたなり。[illegible]
むる世外的の趣味が存在ならんとは[illegible]。六島のうちに無人島もあり。その最大なる大島には二百軒あり。次の相島には四五十軒あり。すべて群島の中、小祠あるのみ。神社なく、佛寺なく、神官なく、僧侶なく、醫者もなし。小學はあり。冠婚、葬祭、疾病の事、一に小學先生に頼む。新參の青年教師をして狼狽せしむ。或は、大音聲の老婆あり、高邱に登り、島中に向つて布令を傳呼す。別に廻文を要することなし。或は、婦女、四十を過ぎて、なほ高島田を結ひ、赤き手柄を掛く。萩の城下は一衣帶水のみ。終生、城下に渡ることなくして、壽を終はるもの少からず。島中、米を種ゑず、野菜を賣つて米に換ゆ。悠々たる桃源の民の如し。維新、回天の風雲、すべて相識らず。幾回か、城下の政變、世論の推移、見て、以て、其に對岸の火事と做すものは、此の島人なり。

六島の中、日島あり。無人島なりしを、近來、買入れて、支那人を傭ひ、支那の果樹園を經營する者あり。豈計らんや、西湖の枇杷、水蜜桃、何首烏などはいふに及ばず、禹域、著名の名木、果樹、紛然として、既に、此島に野生し、老木をなせる

あり。深林の中に古祠を發見す。棟札に元祿年中の題號あり。蓋し此島、當年、支那の密貿易者を流竄したることありといふ。流竄といふは名のみなりしなるべし。然らずんば、安んぞ百樹を雜栽すること、かくの如く自由なるを得ん。畢竟、此島、二百年來、今に至るまで、宛然、支那趣味の飛地たり。譬へば、支那の雰圍氣を一握して、此の海上に置くものにあらずや。北島雪山は、烏島太守を以て自負せり。此島、その人、その趣味、ともに烏島の比にあらず。新に此島に領主たる者、また以て誇るに足れり。

吾輩、笠山を以て、此の「趣味の大庭園」に於ける山燈籠に比せり。これほど小さくして、また完全なる圓錐形をなせる舊火山は天下になし。海岸に斗出し、その近傍に密接する火口灣を以て、取卷かれ、山麓、住吉社の明神池は、天造の養魚池たり。池は、海を離れ潮水を湛え、無數の鯛、繁殖しつつあり。池底の火山岩、濱を隔て遙に海水を浸潤せしむといふ。蓋し海内、唯一の鯛池とす。山腹の風洞、自然に冷藏庫を爲す。酷暑のときといへども、風を噴いて、冷々、居る可らず。洞前に屋を架して、暑中に、鮮魚を貯藏す。山、萩町の地籍に在り、炊烟、山を遶る。城市のうちに火山を藏するは、馴らされたる獅子を町に飼うと同じく、天下の奇觀にあらずや。當年、此地、無數の英雄、悉く逝いて夢の如し、山、亦た氣鋒を收めて、空しく城市に抱かれて睡れり。山腹は、半ば牧場たり、半ば公園たり。牧笛の聲、ときに帽影、傘影に交はる。山腹、延平にして、甚だ低く、荒海に浸る。滿天の風雨、怒潮のとき、高浪、飛んで山腹を弄る。彌勒菩薩、出現のとき、釋迦、此世に再生し來らんといへり。他年、此地、英雄、再び雲の如くに起らば、山また火を吐かんか。若し、此の可憐なる小火山をして、太古の如くに火を吐かしめば、則ち海上に斗出して、裏日本の海神に捧ぐべき、理想的の常夜燈ならずんばあらざるべし。

其十四

金剛山の麓に、長箭港あると相似て、青海島に渡るに仙崎港あり。ともにアルプスに對して、北海の良港灣たり。各方面より青海島に到るの途、皆、此に朝宗す。絶景の仙境に入る第一關なり。

仙崎は、裏日本、舟路の要衝に當り、裏日本、屈指の好港にして、また漁港たり。青海島に向って、その中腹に、直角に斗出し、島に觸れんとして僅に相離る。渡舟、僅に一錢。海を隔てて、兩岸の人、高聲に語るべし。此の海峽を瀬戸といふ。仙崎もと瀬戸崎。則ち此に因って名づく。佐渡志に、佐渡の語源

[illegible]といふ。[illegible]

瀬戸と稱するを聽う。[illegible]に、[illegible]し、[illegible]たるは、[illegible]、そのすぐれ[illegible]べく、[illegible]

は、海上アルプスの沖を過ぐ。仙醉は、仙醉湖の[illegible]海を右にし、深川灣を左にし、左右兩岸、各、一帶の青松を以て、白沙の岬を緣(フチ)どり、うちに人烟、棲住する千軒の町を爲す。玉女峯の層巒、重疊して、長箭港に映ずると同じく、島の群峯、雲烟、出沒して、直ちに炊烟に混ず。左右の碧潮、瀬戸の急潮、三面の海氣、此の岬の町を蒸して、山氣、海氣、相交はり、氣象萬千、自から趣味の町を爲す。中國脊柱山脈の波勢、後より潮の如くに湧く。四面、皆、青山。試に高樓に登れば、萬山の中に碧灣を湛え、町は帶虹の如くに、碧灣を截る。

青海島は、日本海に樹てし畫屏風ならずんばあらず。南に、二灣を擁ふて、蜿蜒として東西に伸び、嶺高うして、狹褊、北來の風を防ぎ、黒潮の暖流、島を廻つて南來するあり。群峯、蒼樹、鬱茂し、夏凉、冬暖、その風土の中和なる、日本海に稀に見るところとす。日本の測候表に現はれたる同溫線に徵するに、北に偏すれば、冬寒に過ぎ、南に偏すれば、夏熱に過ぐ。關門海峽を中心とする地方は、略ぼ、その中を得るものとし、その氣象帶に於ける溫度の、冬高、夏低、ともに第一の數字を示すもの則ち此地方なり。風景と風土と必ずしも相關せず。然[illegible]て快適ならしむるを得る。

一年、時として佳興あらざるはなし。[illegible]くべく、[illegible]ふべし。海上アルプスの探勝、豈、ひとり風景の佳のみならんや。海岸の町より山中の溫泉に逍遙すべし。深川には自働車、十円五分程、俵山には半時間に近し。俵山は千山萬峯の底にありといへども、頗る海峽の南北に名を得たり。此游、我髪を萬里の海風に吹かしめ、轉じて幽谷に鳴鳥を聽くべし。或は遙爾に眠り、或は清泉に漱ぐべし。太公望、忽ちにして赤松子となるを得る。半日の中、一舉手、一投足に隨ひ、變化自在、環境これに伴ひ流轉す。漫に一竿の風月といふ勿れ、右して日本海に大漁を釣り、左して音信川に香魚を釣る。淹留して、以て日を送るに足る。趣味に於けるも亦た、英雄回首即神仙の感、日々に繰返さるべし。

魚の都なるかな。魚、土の如く、酒、泉の如し。瓦鯖、鯛鱗、波を衝いて此の趣味帶に朝觀し、新鮮の珍味、招かずして膳に上り來り、敢て後れんことを恐るゝに似たり。穀食に代へて、魚貝を以て飯とすれば、島の生活は極めて安易なり。龍宮は即ち此にあらずや。都人の想像するを得べきにあらざるな

り。およそ世界的に、海魚を常食する民族は、日本人を第一とす。海洋は、日本人の爲に天造されたる大養魚場たり。日本人の細胞は海魚によつて養はる。海魚を食ふ點に於ては、猫も、黒狐も、日本人の前には逡巡するなるべし。然れども一たび此の趣味帶に來らば、如何に健啖の日本人といへども、恐らくは食慾の艱澁に忙殺されん。米俵に放り込まれたる米蟲の如く、砂糖器に忍び入つたる群蟻の如く、魚貝の中に棲息して、四顧、皆、美味なるべければなり。仙崎の著名なる旗亭に橋長と青金とあり。吾輩、玉堂山人と相携へて、袂を發して、青海島に遊び、第一夜を溫泉に浴して諸雲堂に歸り、第二夜を橋長に一宿す。閑かなる夜かな。海、靜にして湖聲の枕頭に至るなし、燈、海氣に潤ふ。相對して、半醉、陶然として深き睡に落つ。朝起、後窓を排すれば、裏町の小路なり。牆を隔てて、夏橙の黄玉、枝よりも大に、纍々として茅屋を照らすあり。無數青山、直ちに町より湧き、嵐氣、面を襲ふ。昨夜、山下に宿せしかと疑ふ。殆んど町と島との間に海峽ありしを忘る。青山は則ち青海島なり。

其十五

玉堂山人と、途すから青海島の趣味を説く。海濱の松林の間

より島を望んで、車を驅る。青山、蘿あり、人を嚇す。依々として手を擧げて我を招くに似たり。我等、亦た輕々しく門を叩くことをなさず。徧ねく、その空閑氣を識り、その趣味に共鳴するの後、始めて島の山靈と握手せんとするなり。

太寧寺を訪ひ、白檜樹下に、山僧と茗を啜る。閑坐清話、恍として定に入る。晩風に歩して磐石橋を渡る。溪影、行を追し、河鹿亂れ啼く。蓋し天下の絶景の前に立ち、山靈海伯の大藝術を批判せんとする、先づ空寂々の幽境に坐禪し、心を空しくし、靈を練るは、須らく身を、嵐の前の無風帶に置くなり。溫泉、滑らかにして凝脂を洗ふ。欄干に倚り、飄々として、魂、無何有郷に馳す。溪聲、耳に在り、月、天に在り。時に、杯を啣んで、ともに明日の青海島を語ることありといへども、魂、水藻の根の如く、此に繋ぐ、花、水面に開いて、流水を趁ふて去るに似たるを覺ゆ。海上アルプス未だ我前に現はれず。歩々、境地、皆、限りなく我を滿足せしむ。

格言は短かきを要す、珍肴は少量なるを貴しとす。山人と仙崎に宿してともに此味を語る。新鮮の雲丹は、海味の珍、酒客をして垂涎せしむるに足る。仙崎の膳に、雲丹を深皿に山盛りにし來る。東方朔は、僅かに一つの仙桃に隨喜したれども、「仙界には、籠に盛つて、卓上に放置せらるゝならん。大帝倉の

[illegible]
至つて、生守丹は、王存の殿に害なるものにまずして、飢を重
く寂寞となれるなり。かくの如き光景、一見、人を驚異せし
む。龍宮の經驗に於すれば、賤嗟、珠をなす。否く名言にし
て、特に名言といふものなし。龍宮には凡魚なし、特に珍味を
尊重することを解せざるべし。

仙崎を發して、青海島を回游するの方、二途あり。甲は、東に、仙崎灣を出で、島を環ぐつて夕陽を追ふて歸る。乙は、朝陽を負ふて深川灣を出でゝ西より東にまはり、最後に大日比に到る。甲乙二途、唯だ順序を異にするのみといへども、自から別趣あり。吾輩、既に島巡りを試むること八回、二途ともに知悉す。實は二途、併せ試みて、始めて大觀を得るに近し。快速なるモーター・ボートを以てすれば、一氣に馳せまわるは、約三時間に過ぎず。奇勝を一々、諦觀すれば二日といへども足らざるべし。此行、別に小舟を率ゐ、屈指の奇勝には、就いて細觀せんとす。嚮導に宮國君あり、海上アルプスのぬしなり。濱野君あり、島の長老なり。又野翁あり、鯛網の網者なり。黑田君は水産研究所長なり。その餘、船員及び海鄕、有志の青年、精氣、面に溢る。王堂と吾輩と合せて一行、十八人。島の趣味を說明するに足るべき錚々者を網羅す。吾輩、初めて海上アルプ

[illegible]
此の快[illegible]あらざるなり。[illegible]

其十六

此日、早曉、天晴れ南風强し。欣游を果さゞらんことを恐る。宮國君いはく、南風全く島に遮ぎられ、海上アルプスの前、日本海は青疊の如くなるべしと。又野翁、既に舟を艤して待つ。町の東岸、仙崎灣に纜を解き、瀨戸を過ぎて西す。又野老人、年七十、蓬々たる鬚髮、皆、銀白なり。筋骨逞ましく、赤銅の鑄型に嵌めたる、炬の如き巨眼、刻まれたる鷲鳥の嘴のやうなる高鼻、活ける銅像、揚々たる意氣、未だ毫も、その老ゐたるを見ず。風神、宛として、海賊の老船長、變報を得て、舟を驅つて、急に赴くが如きあり。日本海、荒海の魂、化して此の人を生ずるなり。吾が一行、皆、これに對して、意を强くす。また風濤の恐るゝに足らざるを覺ふ。

瀨戸の南岸、島に王子山あり。山を過ぎて北に灣入するを大泊の入江とす。青海島に見たる新らしき新趣味境なり。王子山の頂上に登り、林邸より俯瞰すれば、瀨戸を挾んで東西、兩灣を組成する海岸線の灣曲、複雜せる、剩さへ大泊灣、更に背後に別灣をなし、奥ふかく島を割るあり。介枝、連絡の形勢、恰

も蝸螺の殼の斷面に於けるが如く、水陸錯綜の妙、實に得易からず、或は、狂へるダリアの花の蕚より、カクタスの輪廓を辿り行くが如くなるべし。王子山は小邱のみ、旅客、多くは一瞥して過ぐ。山頂の感興、かくの如きものあるを知る者、稀なり。蓋し名勝を鑒識するは固より其人に待つ。然れども名勝を案内するも亦た容易ならざるは、山陽に於ける雲華師を見ても知るべし。雲華師、山陽を耶馬溪に案内するに、初め、師の推稱するところ、山陽、一見して、悉くこれを凡俗とせり。雲華師ほどの人格にても、豫ねて山水の鑒識に苦心せざりしを以て、山陽の爲に制せられたるなり。蓋し風景を愛するは、寶石を愛するが如し。漫に、これを愛玩するのみなる可らず、併せてこれを鑒識するを要す。然らずんば、好風景の好導師たるを得るは難し。

瀬戸は、湖、急に流れて息まず、王子山下、渡頭の二三家、頗る情趣あり。世間を超越しつつ、動く世間を見る。坐して、併せて東西兩灣の遠景を湖頭に望む。吾徒、從來、幾回か瀬戸を經過するごとに、幾回か此の家を思ふ。大泊の入江は、四面青山、絶えて風浪を起さず、部落五十軒、各戸に網を曬す、島の小桃源なり。宿野君、此に居る。海岸邱腹に湧く淸水を汲んで、名酒を造る。銘じて満島といふ。則ち島の仙漿なり。島の趣味に適さはし。大泊の小學は、南方、海に迫り、運動場は水泳場に直接す。海を隔てて仙崎の町を望む、帆影、笛聲、その間を過ぐ。氣分、極めて明かるし。世間、水邊の小學、往々ありといへども、かくの如く、趣味に富めるは、未だ見ず。王陽明は、山水、泉石の間に、人物を陶冶することを言へり。大泊小學の如きは未だ彼の夢想せざりしところならずんばあらず。霞浦は、高く水涯に小學あり。頗る韻致あり、然れども水と親味少し。此は即ち水と接し、親味の深きを特色とす。その運動場に、海に近くして八重櫻三四本、皆、地上より直ちに繁枝を着く。春ごとに爛漫たる花、簇々として、開いて地上より梢頭に至ること、花を以て木を包めるに似たり。地上の花瓣は、地に垂れて貼す。恰も滿開の花枝を折つて地中に挿入したらんが如し。此日、殘櫻、尙ほ餘香を留むるあり。此櫻、靑海島の華やかなる春を象徴するなるべし。

其十七

日和山、ひとり南方に斗出し、大泊と靑海村とを劃る。絶崖に、老松と紫藤花と多し。山を西に過ぐれば、浪の橋立、翠浪の洶湧するあり。浪の橋立は、天橋立と別趣をなして、相譲らず。喬松一帶、堤防をなして潮海を隔つ。潮水は靑海湖とい

ふ。松林は、[illegible]く、[illegible]く、[illegible]、[illegible]▲せられ、悉く問題をたす。松下の砂礫に臥して、仰ぎして[illegible]を送るべし。又宵、月、照らし到らば、一[illegible]の日月、直ちに湖海兩般の鏡面に映じ、淡鹹の浮水、一様に眞如の光を浮えん。須らく庵を結んで斯境に在るべし。北に、湖水を隔て、島の最高峯、多賀山、その麓を曳いて湖岸に到る。析地、脈々として人家と共に、山麓を彩づるに似たるを青海村の部落とす。東西に邱陵起伏して、自から一天地を爲す。部落八十軒、平家の餘裔なりといふ。壇浦の一戰、平家の殘黨、海潮に随つて南北に流る。南して阿波の祖谷山、肥後の五家庄に入るもの、既にその僻奥を以て却つて、世に知らる。北して日本海に隠るゝものは青海島に據る。此村、則ちそれなり。此村、當年また北海の逸隠たりしを失はず。近來、世運激變して、船車、眼前に映じ、好風景の僻村たり。他日、時運、更に一轉せば、裏日本、大に開け、大泊、青海の一帶、その趣味上の形勝を以て、「北海の文化村」とならん。」

浪橋立は、天橋立よりも、遙に佐渡の兩津町を連想せしむ。青海湖は、則ち加茂湖に似て、金北山が湖水に臨むと、多賀山と、形勢また相似たり。湖海交渉の風景に於て、日本海の双絶といふべし。然れども二者の趣味、また自から異同あり、湖山の[illegible]たるに、[illegible]、[illegible]、[illegible]き[illegible]に[illegible]し、[illegible]、[illegible]することあり。[illegible]に、一[illegible]、[illegible]たし。青海に則ち[illegible]、而して南に[illegible]を隔てゝ、[illegible]の[illegible]山、高下して、樹色、人烟、宛を見るが如し。兩岸には、松林に町あり。青海の松林は則ち湖海を隔てて、世塵に遮ぎさる。此の湖海、蒲籠境の一帶、莊、荘子の理想境の一にあらずや。

浪橋立、西に盡くるところ、雑木の叢光、屏として紺青の場の如し。花津浦といふ。岬角、一轉して、奇刻岩あり、東風瀬あり。大泊より、此に至る間を、青海島風景の第一節とす。對岸より歷々として正面に望むべし。此間、海邊、白砂の濱に接して、紅岬一抹、碧海を染むるに似たるもの、アミの蔟集するなり。手づから掬して容易に桶に充つべし。アミは小海老なり。仰げば、林叢、重疊して、多賀山、その上に峯勢を抜くといへども、未だ甚だ鋭機を示さず。金剛山に於ける、彩陰峯に至るの前、先づ温井里あるに比すべし。

其十八

花津浦の東風瀬より東赤壁群礁に至るの間は、島の側面を見る。海中に奇礁少し。奇勝は山にあり。多賀山の絶頂より海に

向つて、直下に劈開したるが、二等邊三角形を爲し、埃及の金字塔の一面に、青芝を植ゑたるに髣髴たるあり。直立千五百仭、その間、何等の老木も奇巖も見えず。却つて簡直、雄壯の感を與ふ。これ則ち島の奇景の第二幕なり。これを過ぎて、直ちに光彩絢爛たる東赤壁の壯觀を現出す。その前に、此の單調、壯大の一幕あるは、譬へば華やかなる場面の前に、無言劇の一幕あるが如きなるべし。東赤壁は、舊名、赤瀬群礁、今、改めて東赤壁とす。海東の赤壁の意なり。實は、その雄奇なる、蘇東坡の赤壁に勝さること遠し。但だ彼には、赤壁戰の追懐あり、以て、江山をして感激的ならしむ。此には源氏の追擊戰の口碑を傳ふ、蓋し壇浦戰の餘波なり。壇浦は、古來、大戰の、尤も劇的なるものなり。又た以て、東西赤壁の對照の意義を強からしむ。

花津浦の鼻刳岩は、帆舟、洞中を通過するを得べし。海上アルプスの第一洞門にして、また、その最小なるもの。海上アルプスの奇勝、一半は群洞にあり、鼻刳岩は、その標本たるに過ぎず。山靈、則ち海南に向つて、洞門の招牌を揭ぐるもの、鼻刳岩にあらずや。世間、屢、羊頭を揭げて狗肉を賣る、これは則ち、それに反し、狗肉を揭げて羊頭を賣る。山靈に商氣なし。賣ることを求めざるなり。開闢以來、奇勝の著はるゝに至らざりし所以ならずんばあらざるべし。

東風瀬は、鼻刳岩の西海中の奇礁なり。相傳ふ、素盞嗚尊、出雲より韓國に航するに、順風を得ず。此の礁上に立ち東風を祈る。故に、人立瀬ともいふ。爾來、此の礁邊、つねに東風の波あり。滿潮には、その頂、沒して見えず、舟夫、誤つて艫を觸るゝことあれば、忽ち風波の難に遭ふといふ。東風瀬を過ぎて、黄金巖あり。奇巖、高く峙ち、上に一塊の奇石を戴く。金剛山中の奇巖、先づ鷹巖あると相似たり。稍、奇とすべし。未だ特筆するに値せず。

舟、花津浦に到るの前、一奇事あり、吾輩をして大に笑はしむ。これより先、海賊翁、花津浦に朝網を引かしめ、大漁の收穫を以て、吾輩を驚倒せしめんことを期せり。舟、此に到る。岸上、人あり、衣を揮つて、吾舟を望んで信號す。海賊翁、猛然としていふ、奴輩、事を解せず、豈、無一物の理あらんや。乃ち大聲、岸上に向つて怒號す。彼、衣を揮ふこと益、急なり。翁いはく、我自から行かざる可らず。船員をして小艇の纜を解かしめ、袖を攘り、颯爽として艇に上る。銀髮、皆動く。吾舟を海上に待たしめ、岸に向つて急行す。上陸して、漁屋に入り去る。暫らくして、雜魚數十尾を拉して歸り來る。今朝の強風、吾が一行の來るなきを信じ、漁夫、大魚を賣れるなりとい

ふ。余、往來の間、甚だ此の風景、海上を壓す。船の去つて將[illegible]呵として笑ふ。吾儕をして、詩ならず、一場の滑稽劇を見るを得しめたるなり。

其十九

海上アルプスに東赤壁あるは、金剛山に玉女峯あるが如し。花の開くが如く、美人の眉を描くが如く、此に至つて精彩、忽ち發露す。然れども寫眞に見たる東赤壁は、全く、玉照君の寫像を見るが如くなりし。一見、太だ奇とせず、多く、人を魅するに足るものなし。眼前、相對するに及んで、始めて驚く。

東赤壁は、多賀山の衝角、西、日本海に突入するものなり、半里の間、奇峯、岩壁、群礁、皆、燦然として紅かし。七百年前、源平二氏の流血、西海に濺いで、今に至つて淋漓たるか。半開の罌花を滿面に塗れる如く、霧島の躑躅花の新に咲き溢れきが如く、數百千の子規、一齊に啼いて血を吐けるが如く、紅彩、鮮明にして碧海を射る。峯頂、所々の奇松、旆旗に擬すべく、石峯、皆、叢竹、以て劍戟に擬すべし、若し、それ怒潮、雰圍氣を動搖せしむれば、叢竹、忽ち相應じて風雨の聲をなすべく、雪天には千萬の銀竹、悉く白刃を植えたらん如く、壯容冥想するに條あり。今、即ち晩春、晴和の天、小舟、竹石の間に、一轉して[illegible]

東赤壁、突兀として右に屹立し、頂にて[illegible]す。岩片の落ちて峯面に散積するもの、また累々として對岸を放つ。峯容、缺けて小刹門を作す、奇岩の俊秀、水中に沈むを以て、小舟に非れば通ず可らず。小刹門の西、東赤壁、中斷してまた續いて起る。石峯を孫行峯といふ。頂上、延平にして、丘腹に叢竹を戴すること、千兵を擁するが如く、暫らく陣容を整へて、風雲を待つに似たるあり。戰機、忽ち動き、一峯、離れて進む。松雲峯といふ。巓に老松一樹、亭々として長風に嘯く、大旆を建て、石陣に號令するなり。これより以往、危礁、奔峙し、肩摩轂擊しつつ、突進するの氣勢、抑止す可らず。奇巖、また算を亂して、これに伴ひ、先を爭ふて大海に赴く。大海、これに應じ、波濤を激して、迎へ戰ふ。石、愈、紅に、波、沸騰して白雪を噴く。一大巖あり、先頭に立つ。獨り碧海に挺峙して、萬里の波濤を睥睨する雄姿。喩へば華々しく甲ろへる武者一騎、日に餘る大軍に向つて、眞先に陣頭に進み出でたる稀代の武者振に髣髴たるかな。則ち太刀峯なり。側立數十仞、舟を駆り、巖を環ぐつて、雄風を仰ぎ見る。巖頭に鶚の巣あり。鶚四五羽、朝陽を帶びて飛び且つ舞ふ。

請ふ見よ、東赤壁の岬角、僅に一轉すれば則ち一碧、日本海、

茫々として際涯なく、眼界、全く改まる。太刀峯下より手を額にして東望す。波は乾坤を涵し、四五里に亙る海上アルプス奇峯の岩壁、蜿蜒たる長蛇の陣形をなして、陸續として現はれ來る。何等の奇景、何等の壯觀、噫、天造の大映畫、夢の如くに展開しつゝあり。日は麗らかに、無縫の奇巖を射て、陽炎、水平線に續いて燃ゆ。此時、誰か舷を叩いて、アルプスを禮讃せざらん。吾輩、筆を賦せて海内を行くこと二十年、始めて此景を得る。感極まつて言句を絶す、海上アルプスなるかな。

東赤壁の趣味、未だ言ひ盡さず。鯨魚、波を蹴て、アルプスに來る。當年、水夫、松崖峯下に屯して、機を伺ふをつねとす。一日、岩壁、俄に崩壞して崖谷となる。水夫數十人爲に壓死す。此の崖谷を名づけて千人魔府といふ。赤壁の北側、魔府より小瀨門に至るの間、崖下に、群洞、西に向つて參差として開く。その奧數町、皆、舟を容る。洞壁、三方、皆、紅光、洞中に映發す。舟中の人、相顧みて赤し、群洞の最大なるを鷲酔洞とす、小瀨門の東に相雙ぶ。深淵碧を凝らし、清澄、鏡の如く、游魚、悉く數ふべし。洞天すべて紅、綠の五彩を織り成し、その精、その美、古段通の最上乘といへども、その興味の一斑を傳ふるに足らず。陶然として、徐ろに小舟に棹し、海洞殿の感激に酔ふを樂しむ。舟行、窮まらず、天、漸く低れ、洞壁の精彩、淡水に溶け、神秘的藝術の印像、ますく〵骨髓に刻す。爛を照らさば、洞殿の奧に至るべし、顧みれば、外海の微光、殘陽の、僅に水に映ずるに似たるあり。乃ち棹を返して洞口に至る。洞天の精華、外海に煥發するを覺う。蓋し、秋夏の候、晴天に、日本海の夕陽、洞口に滿つるとき、洞殿のうち、光明、燦爛として、洞壁の反照、無限に偏搖し、五彩、沸騰して息まず、端無く、神秘の「光の壺」を現出せしむといふ。

抑、夕陽の海上アルプスは、海上美觀の夢幻境たらずんばあらず。吾輩、先年、仙崎灣より島を東廻して、此に至つて、落日を望む。純金の太陽、輾々として西海に沈む。金光四散し、碧海、化して金の海となり。反照、アルプスを射て、岩壁もまた蕩搖するかと見ゆ、金海の太刀峯、屹立として、海中の火炎の柱の如し。此景、猶ほ恍として、眼前にあり。夫れ日の出を見るは、東海の富士山上にあり。落日を見るは、西海の海上アルプスに在り。此景、目睹する者にあらざれば、ともに感激を語る可らず。富岡君は、島の四季を熟知する者なり。いはく、冬天の東赤壁、凄壯、言ひ盡されず。海荒れて、洞口、皆、見えず、雪波を噴くもの、則ち群洞たるを知る。蒼海の潮湧、小瀨門に注ぎ、溢れて赤壁に飛揚す。千人魔府を打つや、谷、狭く、通ず可らず、爲に、白浪、奔騰して、高く浪塔を現す。刹那に

に聳え、巨巖に盡き[illegible]の[illegible]ごとく、千[illegible]く、交互に[illegible]して、[illegible]に大[illegible]、[illegible]むく。[illegible]として[illegible]立し水面のあちこちに隠現す[illegible]。此日、[illegible]の[illegible]、[illegible]中し、青海島の北面、南風到らず、一波起らず。陽光、[illegible]として、海山、笑を含み、舟坐して行くに似たり。かくの如き静和、南海といへども、稀なるべし。

其二十

東赤壁は、青海島西端の岬角、北海激浪の衝に當るを以て、その景勝、奇偉にして痛快を極む。但だ此の一あるも、島は、以て天下に誇るに足る。赤壁より平家台に至る、第三群、岬角の雄觀、終はる。

アルプス群峯の裾に、一大圓盆を海に浸すが如きものを平家台とす。アルプス一帯はすべて岩壁と洞門とを以て奇景を[illegible]す。平家台は譬へば臼の如し、圓ろく海中に斗出す。唯一の奇觀なり。高さ數十仞、頂上、扁平、周圍半里に近く、四面、皆、絶崖を垂る。天、何の心ぞ、此の大臼を造るや。口碑に、源平の古戰場と稱す。台の東に接し、アルプスの断崖に、一の白石、斜に嵌するあり、白旗の奇勝とす。赤旗倒れ、台、空しくして、白旗ひとり存するか。奇巖の象徴甚、一幅、人事の盛衰を[illegible]ふのに[illegible]す[illegible]。

一行、[illegible]下り、[illegible]に[illegible]る。[illegible]一十[illegible]塊なり。[illegible]なきの。往々、[illegible]の花を着く。[illegible]三、生の[illegible]力、かくの如きものあり。台上、所々、更に[illegible]の貝殼を留む。蓋し魚貝、大風濤に拉せられ、此の高臺を飛過するに當り、その一部分此に沈殘するものなり。かくの如き高浪、一年に幾日もあることなし、而して台上の岩石、摩滌せられて、平滑面をなせるを見る。此の堅岩を洗ふこと幾萬億度にして、果して能く此に至るを得るや。歳月の悠遠なる、想像するに餘あり。若し、それ大浪、此の高臺を飛過するとき、絶崖、大驟雨の瀑布をなすべし。或は、風急に、雲奔りて、海立ち、寒月天、大驟雨を照らすの奇景あらん。平家台は、白旗の外、萩石あり、長さ十仞餘、紫色の石壁にして、數四の家紋を印するに似たり。馬蹄石、甲冑巖も亦あり。臺、陸に近きは狹長にして、「柄」の如く、海中に斗出し、擴大して、開き「胴」をなす。宛然、石を以て、偉大なる琵琶を刻して、長へにこれを西海に置き、以て、平家を吊ふものならずんばあらず。知らず、何者か、能く、平家一曲を語つて、これを彈奏せん。平家台は則ち平家の紀念碑なり。但だ風濤、これを打つて大に聲を爲すとき、律呂、悲壯を極め、平家の怨魂、悉く出て、集まり聞くな

らん。

其廿一

平家嶽を下り、ます〱東に航す。蕃年洞、有名、金濟のエラ、エラは方言なり、すべて洞窟をいふ。既に岬角を過ぎ、漸く海上アルプスの本舞臺に入る。群峯の變態、岩壁の奇偉なる、且つ幾多の洞窟を點綴して、更に海岸線に複雜ならしめ、大門、小門に至る。岩洞はアルプス風景の一要件なり。岩洞頗る多し。洞殿の莊麗なるは、鴛鴦洞を推し、洞門の壯大なるは、大門小門を第一とす。蕃年洞より、大門に至る、アルプスの第四幕なり。

島の彩霞峯を多賀山とす。島の西端に聳ゆ。遠く望めば一峯、屹立するに似たり。近づいて精觀すれば、山膚、砢々、磔々として、千萬岩石の集成峯をなす。看るに隨つて觀を異にし、南、西より看て北に到り、殆んど別山の如し、また是れ、海東、一の東嶺峯たらずんばあらず。抑、青海島、龍の如く東より來り、犬嶋、委蛇として伸縮、起伏し、西するに隨つて次第に高く、太平山の圓錐峯を經て島の西端に迫つて山勢、崛起すること、蛟龍の、昂然として首を擧るが如くなるは多賀山なり。峯勢、殆んど四面、大海に接すること、金華山の如くにして、彼は孤立し、此は則ち、蜿蜒として長く尾を曳く。海氣、不斷に、山腰より蒸して峯頂に至るを以て陰晴に隨つて、雲烟、つねに搖曳、去來するあり。況んやアルプスに近くして、黑潮の暖流、烟霧を送るあるをや。譬へば、盥に湯を充てしめて、その中に、奇石を置くが如し。奇石、つねに水蒸氣に潤ふ。時に、一道の熱湯を注入すれば、雲烟、忽ち濛々として石を蔽はん。日本海は一大盆なり、その中に高峯を立つ。水蒸氣の興趣、限り無く好し。北にして、金北山の雪となり、南にして多賀山の烟霧となる。日本海の山岳、皆、彩霞峯の趣味あり。特に島にあるものを以て、興趣第一とす。而して青海島は日本海の南方にあり、氣温尤も高きを以てして、朝鮮海と玄海洋との潮流の要衝に當り、極めて豐富なる水蒸氣に浴しつつあり。海上アルプスの秀潤なる所以なり。

其廿二

海上アルプスの趣味の、特筆すべきもの、一は、草木の鬱茂にあり。鬱乎たる茂樹の一帶、翠被の如くに、岩壁の大を蔽ひ、時に流れて海に注ぐ。アルプスは山勢の起伏に伴ふ。山勢、伏して谷をなすところ、緑樹、渓を爲して、岩壁を横斷するあり。その翠色の鬱々たる、洪水の、直ちに山頂より汎濫し

て北海に見るが如きものなくんばあらず。石壁、岩角と、岩をなして北海に屹立す。色彩の變化、錯綜して、奥接に遑なく、奇巖の雄奇、人をして眼目張駭せしめやがて草木の繁茂、人をして恍然として顏を解かしめ、歴日、舟行、アルプスと相對して、坐して倦むことを忘れしむ。舟中、感嘆の聲、息むことなし。陸上のアルプスには、雪溪あり、可憐なる高山植物の花あり。海上アルプスは、海拔の低くして、これに、代はるに、山花あり、樹溪あり。瑞西や、落磯山や、日本アルプスの連峯や、萬仭の絶巓、必ずしも攀ぢ難からず。海上アルプスは、悉く絶壁なり。奇峯、峙、アルペルタならざるはなし。古より未だ海上アルプスの岩壁を攀づるを得たるものあらず。海上アルプスは舟中より探勝すべきものなり。

海上アルプスの莊嚴を極むるは、色彩の美なると、その變化とにあり。岩石の主成分は、石英斑岩、石英粗面岩、及び安山岩、玄武岩等にして、色彩、順次に變化し、配合の妙、天意に出で、人意の能くするところにあらず。その尤も美くしきは、淡紫と牡丹色とにあり。彩光の妍麗なる、一見、人を魅するに足る。裏日本の海岸、岩壁の雄奇なるもの少からずといへども、かくの如く、美麗にして、數里の長きに渉つて、その調和の美觀を保持するものを見ず。アルプスは、小品の傑作にあらずして、大卷の雄いなし。この一[illegible]、[illegible]ふを得ず。然れども、[illegible]然と、[illegible]とあり[illegible]ところに、千種の[illegible]を[illegible]せしむべきやまあり。やまとやまとの間隙、微妙にして、觀賞む緊張を持續し、些の倦怠を誘起するに暇あらしめず。朝に[illegible]を解纜して、夕に歸航するに至るまで、終始、喝采を以て、島を一周し來るを得しむ。況んや、舟中の興趣、言ひ盡さざるものあり。瀬戸より松雲峯に至る、茶菓を喫して、浪橋立を眺めつゝ、朝飯のデザートに適す。未だ深川灣を離れず、多賀山の金字塔下、尚ほ内海の氣分を失はず。赤壁の岬角、一轉すれば、豪興、忽ち動く。身は大千世界の中央にあり。一歩を動かさずして、アルプスの天造畫卷を讀み耽けりつつ行く。坐客と杯を擧げて應酬し、大海の和風、酒氣を溶かして、いつまでも飲んで爽醉を超ゆることとなし。驚異と快笑と舟に滿ち、爭ふてアルプス禮讃の警句を吐かんことを競ひ、敢て或は後れんことを恐るゝものの如し。然れども舟中の諧謔、また人を忙殺せしむ。舟は臥游たるを失はずといへども、舟中に臥するの暇なし。名優の登場の刹那に於けるが如く、吾が目、暫らくもアルプスの舞臺を離るゝを許さず。一景、一景、舟中の眼、悉く、アルプスに注ぐ。吾輩、先年、丸山晩霞を訪ひ、ともに此を觀して

あり。彼はアルプスの崇拜者なり、山を語れば、必ずアルプスを口にす。然れども海上アルプスを觀たるは、此を初とす。暫らくにして坐して觀て足らず、終に舷頭に立ち盡くし、觀盡せり。吾猶乃ちいはく、アルプス、必らずしも陸地に限らず、海上、則ち此のアルプスあるなり。

其廿三

海上アルプスの岩壁の美感は、色彩のみにあらず。實にその秀潤なるにあり。艶華の花彩の鮮麗なるは、水を出で、水に近くして、濕潤なるにあり。若し、此の海上アルプスを移して、深山の中にあらしめば、その輪廓は異なることなし。その秀潤の美觀は、則ち同じからず。

石を愛する趣味は、硯に至つて極まる。硯を愛するは、硯を養ふにあり。水鉢に淸水を充て、硯を貯ふ。乃ち石理、水を透して、燦然として現はる。端溪の美なるも、かくの如くして、始めて觀るべし。海上アルプスの岩壁、つねに豐潤なる水蒸氣に浸され、石、水を含み、水、石を隔つ。此に於て、石理、悉く著はれ、その鮮明なること、南畫の點描をして、皴法を描かしむるが如きあり。アルプスに對して、畫家の興味をして、愈深からしむ。然れども巨舟に駕して、遠くアルプスを觀て過ぐ、乃ち、その輪廓と色彩の奇偉、人を驚かすあるのみ。これ諦視、細觀して、以て、石紋を詳かにし、洞殿を探るにあらざれば、アルプスの美を窮むるに足らず。則ち島の周游、必らず小艇を伴ふを要す。

石、水を含む。故に、石上、草木多し。いかなる奇巖、絕壁といへども、苟くも皴理の、僅に刻するあれば、乃ち小草、矮木の寄生せざるはなし。山巓、懸崖、落ちんとして僅に留まるもの、或は、巖角の險奇を極むるもの、行くとして、奇松を帶びざるはなし。これを聽くといへども、尙ほ驚異を値するに足る。況んやこれを目擊するをや。幽草、矮木、定めて[illegible]の風力と苦戰しつつあるならん。その根は岩に結着し、その枝幹は、捻ぢまわされ、根、悉く露はる。巖壁に、一握の土を見ず、根幹を以て、巖角を縫つて、生存す。アルプスの草木、根を以て、手指となすものにあらずや。巖壁の木、概ね松、則ち奇巖と奇松とならざるはなし。或は海中の巖頂、土無き頂上に孤松の亭亭として峙つあり。その根は四方に這ふて巖角に到る。かくの如き巖松、これを山中、幽谷にあらしむるも、なほ奇觀たるを失はず。長風、荒濤の北海に於けるが故に、絕奇とするに足るなり。

アルプスの絕巓、巖角、往々にして殘櫻を見る。白雲一片、

[illegible]
■らし、岩に花咲き水草に浮ぶるなり。千代の下、舟中より仰いで望むに、既に見え、所謂の花、見る可く、求む可からず。紫藤花、雜木に交はり、杜鵑花、少からず。既に、而上に近くして、殊に懸つて咲く。アルプスの探勝、夏を多しとす。然れども、晩春、初夏、その新緑と燒花とを見るは、舟游の感興、殊に饒かなるものあり。アルプスの花、一々、舉ぐるを得ず。白花、もつとも多く淡樹に着く。未だ、その名を知らず。

其廿四

蘇年洞を見て、觀音洞に到る。洞、稍、奇趣あり。洞中、屈折し、洞道は西より東に通ず。洞壁、自然に佛像を刻するに似たるあり。鄉人、これを観音といふ。洞中水澄み、俯下、游魚往來す。魚籃觀音なるべし。然れども洞の東口に近くして、海中に蛇巖あるを見れば、これを辨財天とするも不可ならざるべし。蛇巖は、大蛇のとぐろを捲くに酷似す。海天に暗雲低迷し、風急ならんとすれば、蛇勢精氣を帶び、雲を呼び、天に登りて龍とならんとするもの丶如し、漁夫、皆、望んで恐る、舟を驅つて馳り去るといふ。鑑浦を過ぐ。絕壁の下、白沙の渚、遠く連なる、白沙、皆、珠玉。舟中の人、掬せんことを思はざ

[illegible]
玉巖、海中に對峙す[illegible]べし。[illegible]んとし、巖頭、粉碎として[illegible]せんとし、[illegible]金剛山の奇巖とも相似たり。双峯の間より、落日を望むべし。

双玉峯を過ぎて、また白沙の濱、續く。雜樹の谷、横流して此に濺ぎり、アルプスの間に青山を見る。奇巖、見るに忙はしく、ニイナブの[illegible]に[illegible]杯もて[illegible]せらるゝあり。此に至つて、架烟、齊しく捲き、玉杯頻りに舉ぐ。舟中の人、均しく眉を緩む。然れども大風の前、無風帶あり。天意、大にアルプスの奇を示さんとして、先づ青山を挿入す。幾ばくもなくして、雜樹、白沙盡き、巨巖の嵬嵬、一草、一木を點ぜず、極めて古頑なるが突出して舟路を扼するあり。中腹に三四の洞門を通ず。洞口、滄濶にして、仙家の門に似たり。洞中より更望すれば、前途の奇景、簇々として現はる。宜しく題して通仙洞とすべし。これより崎嶇たる巖壁、續々として高まり形勢一變して、奇巖、恰も奇雲の地より湧くが如くに舞ひ上る。遙に金剛山の御止台を想ふ。彼に玉流溪あり、此には大門、小門あり。崖下の洞門なり。大小、並び峙ち、大者は高、十數仞、小者は恰もその半に過ぎず。大者は鯨鯢を通すべし。既に選して

大門を過ぐ。堂々たる大巖柱、碧海、汪々としてその下を逸ぐる。その莊重にして生氣の横溢するは、山中の洞門と別趣なり。誰か能く、巧みに、その雄偉の感を歌ひ得ん。鼓を叩ひで、偏へに感嘆すれば、返響、洞に滿ちて、巨鐘を鳴らすが如く、餘韻、隱々として、海底深淵の潛龍を驚かすべし。岩壁、恐く神工、鬼斧、手に任かせて劈開し、荒削りの大洞殿を現出す。蓋し海上アルプス、第一の大洞門にして、アルプス岩陣の中堅、これより始まる。此の大洞門を通過したる者は即ち海上アルプスの洗禮を受けたるものなり。

其廿五

大門小門より島見門に至る約一里の海上、アルプスの岩陣、壘を高くし、峯頂、奇巖を列ぬること、劍戟を植うるが如く、巖壁、群洞、巨礁、皆爭ふて各種の奇構を致す。變化の多趣多様にして、緊張の氣分に滿つるに於て、アルプスの中堅たるを失はず。これを島の奇景、第五幕とす。

海上アルプスの岩壁の長城、大海に向つて展開するを見つゝ行けば、此は是、一大仙境の門墻にして、此の中に仙宮を藏するを想はしむ。巖䑓に花開き、自から巖壁の模様を爲せり。巨鳥、山上に舞ひ、鯨魚、濤外に出沒す。神仙、玉斧を提げて逍遙し、巨巖を穿つて洞門となす。洞壁は、桃源の門の如し、世人、その扉を認め得ず。崖下の洞殿、或は仙宮に通ずるか。魚龍、空しく守つて、恐らくは未だ秘鍵を解せず。景象、雄奇にして華麗、而して環境の壯大なる、すべて神秘的の快感を誘發せざるはあらず。大自然の藝術美、人間を魅するもの、或は山岳に於てし、或は海洋に於てす。此の海上アルプスは、則ち海上にして山岳の美感に耽るを得しむ。島の中腹に、船越の地峽あり。瓢簞の腹の極めて小なるに譬ふべし。南海の仙崎灣より小舟を擔いで、北海に超ゆるを得る。島の地籍、これより以西、仙崎に屬し、以東は、通浦に屬す。島の全形を大觀すれば、通浦は、水鳥の游泳するに髣髴として、眼、嘴、羽翼、極めて分明なり。南を脊にし、その腹を北海に浸す。西半は地籍東に倍し、その海岸線は、或は海獸の蹲まるに比すべし。すべて是れ水の趣味を象徴す。然れども、かくの如きは、海岸線の輪廓を以て言ふ。若し大海を乾かし、その水面をして低下せしむると假想せば、海上アルプスの奇觀、更に幾層を加ふるを知る可らず。或は、海上アルプスをして、自然の隆起をなすを得しめよ。壯麗なる巖壁は、縹緲として蒼漢を凌ぎ、海中の巨礁、雲中に挺立し、大門、小門は、その柱礎を露出して、偉大なる洞穴を現はすならん。かくの如き奇偉なる海上アルプス又に

對するは、殊に、その奇觀に投身さるゝのみたる可らず。その創造と、靈妙とを想像、賛美するは、則ち、その山靈、水伯を讃歎する所以ならずんばあらざるべし。

大門小門の東に長濱あり、濱の中央に、崎嶇たる奇礁、海中に斗出し、海波、これに激して、白浪つねに巖脚を打つ。巖上に青松、點々たるあり。靈趣、掬すべし。題して小蓬萊といふ。小蓬萊に接して潮吹の奇勝あり。潮汐急なれば、高く潮を吹いて半空に致る。津黃の潮吹岩の壯大たるには比す可らずといへども、アルプスの群峯、所々に潮吹あり、これを、その大なるものとす。潮吹は、海伯、山靈に向つて潮信を寄するものならずんばあらざるべし。北海、開闢以來、日本海の荒濤、つねに巖壁を打つて已まず。巖と海と相激して、天造の大藝術を創作しつつあり。海濤の彫刻するもの、洞殿となり、洞門となり、潮吹となる。譬へば潮吹はアルプスの特有する海笛ならずんばあらざるべし。その吹くや、日本海の律調、微妙に響く。小蓬萊の東、綠樹、アルプスを下つて海に至り、白砂の濱、その裾を劃して、明麗蒼翠と映發す。白蛇天に登るが如し。蓋し海金剛には、此の明麗少し。海金剛は、金剛山の餘勢、海を衝くものなり。海上アルプスは則ち然らず、精華を凝らして直ちに大海と、藝術的に折衝す。これを以て、神氣充實して、變化を逞しくするは、此、

端に懸きたるが如く、重疊の巖、自然に着色して、怒濤、直立屹百尺、截として天へに謝せる仙掌の形に似たりとすべく、その巖峯、壁の如く、屏の如く、鼓の如くに削成せるものあらず。恐らくは、大神斧を揮つて、石峯を直二つに劈裂せるものならずんばあらざるべし。峯頂より絕崖を縫うて、奇松、點綴し、海上の巖礁と、姿致を競ふ。靜浦は、鐵壁峯に隣る。小灣をなす。樹溪、汎濫して海に注ぎ、氣象、靜閑にして、暫らく奇巖の怒るが如きを見ず。群峯の雄奇なるもの、山を離れて海に入り、危礁、亂立して、海鳥、群がり叫ぶ。巖陰の叢、自から村を爲すに似たるを以て、島人、名づけて礁村といふ。靜日、和風、白沙の濱に踞して、礁村の間に、帆影の穿行するを望めば、大海原に人生の光、充つるを思ふ。靜浦は則ち紫津浦の地峽なり。船越の奇勝、此に在り。紫津浦は、南面、紫津浦の入江を抱く。島の南側に有する最大の入江とす。三百年前に至るまで、島の都たりし。入江の東奥、溪谷、蛇行して日本海に現はるゝもの、則ち此の靜浦なり。中古、紫津浦の全盛時、此を經て北海に往來したるならん。アルプス群峯、削立して、島の南北を遮斷すること、馬鬣の如し、但だ此の一路のみ、相通ず、島の仙遊たるを失はず。北海、滿天の大風濤、海上アルプスを打つの大壯觀、世人、夢想するを得るのみ。陸路なく、舟

路絶つ。ひとりこれを目睹するを得るの途、船越の一路あるのみ。吾輩も亦た嚴冬の雪天、此に來つて、海上アルプス群峯、雪濤に直面するを觀んことを思ふ。假令、嚴寒に、雲の海を踏んで瑞西のアルプスに登るを得るとも、恐らくは、此の奇趣をを得ざらん。奇趣は、海にあり。その時、日本海は雪の海、雲の海なり。滿天の海恐く濤立し、雪浪、宇宙に滿ち、海上アルプスは、雪と濤との大渦卷と戰ひつつ。坤軸の拔く可らざる大威力を象徴するならん。古來、海上アルプスの未だ著はれざりし以前、名士の島を探勝したる者なし。吉田松陰、青年にして海備を巡視し、榮津浦より此に來つて、北海を眺めしのみといふ。仰、海上アルプスの游、一日にして盡さず、北海に旅亭を作つて、滯留の處とすべきは、唯だ此の靜浦あり。觀湖亭の造に築かれんことを思ふ。此時、日、已に亭午に到る。又野翁、銀髪、頻りに動く。船員を促がし、纜を此浦に繋いで、徐ろに酒飯を饗せんことを請ふ。吾輩の期するところ、十八羅漢の奇勝にあり。十八羅漢の大群礁は、アルプス周游の中程にあり。アルプス群礁の尤も雄なるものなり。且つ、その傑特なるものに英雄峯あり。それに對して、痛快に、飲み且つ食はん。眼前の奇勝、觀來つて湧くが如し。一切の奇景、渾べて不老の仙糧たざるはなし。舟中の人、未だ曾て空腹を覺ふる者あらざるなり。

其廿六

十八羅漢も亦た靜浦の一奇勝なり。此に斗出する奇峯を以て東西を劃り白砂の濱の別乾坤を爲す。奇峯、重疊して、その背を擁し、數十の危礁、その前に錯綜、排列するあり。危礁、皆、巨岩、幅よりも竪に伸び、蟠るにあらずして聳ゆるなり。屹然として筍の叢生するが如く、群雄の對峙するが如く、互に、その俊偉を競ふ。その排列の間隔自から宜しきを得て密接して、眼界を遮ぎるなく、疎濶して間隙を生ずるなく、高低、錯落として、互に情趣を添す。譬へば大海を傾けて、池となして、群筍にたぐが如し。舟を下り、白砂に踞して、眺望を縱ままにするに、地位、尤も妙なり。一行、相呼んで、即ち珠玉に坐して浦嶋とし、夜光杯を挙げて、浦島の名酒を酌み、高く海神に捧げて、萬歳を絶叫す。酒、澄なこと、月の如く、蒼茫たる海色、杯中に浮びて見ゆ。白砂の濱、秀麗、拭へるよりも美くし、直ちに杯盤を陳ねて、飲み且つ食ふ。一瓶の盛花を要せず、濱に草花、自から粧を凝らして、可憐なるあり。白砂を湛たす淺海、嬋妍たる小魚來り戯るるあり。礫々たる砂礫のうち、幾多の奇姿、人目を惹くものあり。無數の魚貝、淺瀨に撒布するに似たるあり。殊に螺螺

を、し[illegible]して、[illegible]に、[illegible]して、[illegible]にし[illegible]て數十を得たる。或は、[illegible]て、快よく、[illegible]に[illegible]し、足指を以て、探ぐつて小蛤蜊を獲る。日、[illegible]にして[illegible]を[illegible]し、天、長くして、暇日を忘る。宮岡君、行厨を開き、料理と和布の握飯を供す。海賊翁、烏賊と雑魚とを味噌汁にして、いはく是れ磯煮なり、濱野君、酒を齎らす。吾輩、乃ち設、一句、これに酬ゐるなかる可んや。黒田君、魚を説き、金鈴、喜んで笑ふのみ、玉堂は、陶々として歌はんと欲し、玉山、未だ崩れず。三人の少婦あり、皆、去つて螺を拾ふ、一人の杯盤に侍するを見ず。青年及び船員諸君、斡旋して、興を助く。獻酬の盃、燕魚の波上に群飛するよりも、飛ぶ。

一日の中、悠然として萬年の樂を得る、これを仙境といふ。十八羅漢は則ち仙境ならざればあらず。此境魚の鮮美、酒の芳醇、未だ今日の如きあるを覺えざるなり。吾輩、先年、屢、海上アルプスの舟游を爲す。舟中、必らず橋長の鯖鮨（サバズシ）あり。吾輩の舌、從來、青魚の趣味を解せず、これを口にするも咽喉を下すを得ず。これを以て未だ嘗て、鯖の生魚に觸れしとなし。ひとり海上アルプスに面して、偶然に、鯖鮨の絶味、言ふ可らざるものあるを識つて、驚く。その後、此を離れて、再び鯖鮨を得るも、皆、多少の腥味あり、復た口にするを得ず。山崎に來れば[illegible]て、[illegible]、[illegible]に[illegible]して、[illegible]内より一[illegible]に[illegible]なり。故に、[illegible]に[illegible]る[illegible]の汁液、或は[illegible]の[illegible]を思ふあり。魚臭を忌み、[illegible]の清香を好むこと吾輩の如く太甚しきを以てして、鯖鮨を飽食すること、仙界の如くするを得るは、海内、唯だ、此の海上アルプスのみあり。吾輩、橋長を推稱して「天下の橋長」となす所以、此に存す。然れども、これ[illegible]、料理の美なるのみならんや。實に、此の魚「天下の魚」なればなり。

其廿七

此日、若し、吾等、玉堂、海賊翁諸君と、壯健、數士のみならしめば、十八羅漢の沙上に、一夜を送り、アルプスの下に、飽くまで大海の月波を樂みしなるべし。夜、靜にして、斎米、夢の如く、烟霧月光を溶かし、魚龍、出沒するとき、その光景、果して何如ぞや。これを想像するだにも、吾心をして恍惚たらしむ。

沙上の清宴、何事を語る、唯だ笑語の、耳に存するあるのみ。好景は、人の食慾を煽る。食ふもの悉く美ならざるはなく、多く食ふ可らざるはなし。況んや海氣人の肌を刺激して、

人をして悉く壯者たらしむるをや。握飯をむすびといふ。此日の和布むすび、特に大にして、海中の碧玉の如し。然れども、吾輩、生の海藻を食ふ能はず。たとへ和布を除却するとも、その香味、すでに飯に浸れり。和布むすびは長州の名物、譬へば桃太郎の黍團子に於ける、獨逸人のビールに於けるが如し。和布むすびを食はざるより見れば、吾輩は長州人にあらざるなり。船員の一青年、その齎らせるアルミ辨當の白飯を吾輩に贈り、自から和布むすびを取る。白飯、頗る多量。吾輩、健啖し盡さんとして、人の健啖を笑はんことを恐る。一青年に問ふ。海上の人、頗る健啖といふとも、君の一飯、かくの如きは、又た盛んならずや。一青年答へていはく、先生、怪しむを休めよ、そは昨晩の二度分なり。一坐、大に笑ふ。吾輩も亦た驚く。十八羅漢の遊賞の感激的なる、かくの如きものあり。偏へに、四五里の奇景、一亭あるなく、淹留するに由なきを恨むなり。

少婦、採り歸れる螺蠑、風呂敷に充つ。一行、亦た皆、腹足り、氣暢ぶ。酒仙の外、起つて渚に徘徊す。一行、實に十八人。七福人のうちに、一人の辯財天あると同じく、十八羅漢のうち、三人の女羅漢あるなり。羅漢に、十六あり、十八あり。吾輩は、此の仙境を、十八羅漢とすべきを思ふ。少くとも、吾輩、此日の遊、十八羅漢を以て紀念的とするなり。十八羅漢に、來る者は、自から箕庭の妙諦を悟るべし。奇峯、群礁、白沙、幾株の碧樹、滿天の水、實に水石の布置、乾坤を以て一大石庭と爲す。此の石庭、常主なし、山嶽海伯を以て主者とす。此に來つて、閑坐、耽賞しつつあれば、趣味の高尚なる名園に案内せられ、主者に伴なひ、默笑して逍遙するが如し、初、唯だ、淡として、その美觀を直覺するのみ、居ること、久しくして、漸く、その趣味を、細かに會得するに至る。名園の遊賞、閑人を淹留せしむるに足るの一亭なかる可んや。聞説、瑞西、アルペン行、一萬三千呎のアイガーより氷河の下を貫ぬき、ユングフラウ、ヨッホに至るユングフラウ鐵道は、歐洲最高の鐵道にして、此の間六哩、全部、隧道なり。その急勾配も亦た非常なり。ところどころに横孔を穿ち、外界を覗しむ。洞の軒端に、氷柱の懸垂すること、瓔珞の如く、洞外、雲霧の去來すること快風の如く、忽ち曇り、忽ち晴る。ユング、フラウ、ヨッホ停車場には、旗亭あり。ベランダには、寒風、人を吹き飛ばし、丈餘の氷柱、纓纓の如くに垂るゝあり、然れども、此に淹留して、以て、ユングフラウ門の絕巓、雲晴れて、その英姿を現はすを待つことを得る。海上アルプスの舟游は、これと全く世界を異にす。彼は、洞道の窓より大千世界を觀る、是は則ち大千世界、自から酒杯の前に來る。一笠一枚、萬似の絕巓を攀づ

ろに[illegible]いへども、[illegible]ても、一艘の仙舟に[illegible]して、[illegible]々として、自ら[illegible]上アルプスの[illegible]に迫まる、豈、一代の快游にあらずとせんや。此游、何人も[illegible]せずして、列仙傳中の仙人たらずんばあらざるなり。但だ、その中、一箇の仙館ありて、仙客を留宿せしめ、館に、此の風景のみならず、その趣味に浸るを得しめ、茶飯清素、酒、以て渇を醫するに足り、歌ふべく、賦すべく、時に爛柯の樂を極むるを得しめば、則ち李太白の所謂、海客、瀛洲を談ずるもの、或は此郷にあらん。一世の大俗に沒了する者、時に此に來つて、その心頭を滅却するを要す。紛々たる蝸牛角上の爭を事とするのみなるは、安んぞ英雄といふに足らん。此の清淨境に起臥すること一旬、鯤鵬の雄風に接して、心眼を開くべし。弘法大師、足跡、海內に遍ねし、未だ此には來らざりし。大師は、到處、坐禪の境地を求め、室戸崎に至り、廬を結び、無限の波濤を望んで坐禪したるに、蛟龍、南海を出でて來り侍すといへり。大師、若し、此に來りしならば、必らずや十八羅漢に至りて、廬を結びしならん。靜浦の一帶は、海上アルプスの禪堂なり。獨坐、直ちに禪の妙境に入る。大自然の坐禪は、師なく、伴なく、須らく獨修すべし。風雨、晦冥、乃ち雲、地に垂れ、老龍、闇に伏して、禪定を守護すべし。若し殘月に誦經せば、[illegible]

[illegible]群仙に十八羅漢、[illegible]、自由に[illegible]、古向、俯、統一なしといへども、[illegible]、所々として見るべし。群礁の間、散髮、[illegible]に現はるゝが如きもの、[illegible]なり。鶏[illegible]は、海岸の[illegible]、散髮を[illegible]作る。[illegible]、人間の[illegible]らさるところ、皆、鶏[illegible]あり。鶏[illegible]、[illegible]中に[illegible]り、[illegible]して母を呼ぶ。これを望めども見えず。[illegible]として仙[illegible]く[illegible]かと疑ふ。鶏、則ち飢れて空に舞ひ、雛に向つて相呼ぶ。聲、切々として笛を吹くに似たり。鳥と石と、宛とし相語る。微醉、與動いて已まず。見るに隨ひ、聞くに隨つて、萬象、皆、活きて躍あり。乃ち、舟を促がして、群礁の間を逍遙す。碧海は恰も瑞西のアルペンの雪解の水の如し。礁底の游魚、奸々、樂んで戯る。鱗、鰭、蠢くに似たり。海水、澄明、秋空よりも碧なり。鴎の飛鳴。魚の跳ねる音。風、微かに松樹を度るピアノの低調の音律。淙々として潜に湧ぎ來る北海。自然の律調、渾べて此の刹那の雰圍氣に音樂的波動を起しつゝある。一切の音樂は、皆、碧ならずんばあらず。色の碧。音の碧。碧の世界なるかな。群仙巖は、則ち悉く碧玉塔なり。

海上アルプスに於ける十八羅漢は、まさに海金剛に於ける萬

岩群礁に該當するなるべし。蟲岩群礁の錚々たるものは、造楽、松島、及び楓岩とし、楓岩を以て、その中心とす。楓岩は則ち一行、海金剛なり。十八羅漢の楓岩は、吾輩の所謂英雄峯なるものなり。英雄峯を思へば、壯心、躍つて息まさらしむ。海上、危峯の壯觀、かくの如きは、朝鮮の海金剛にはあることなし。英雄峯は、十八羅漢の群を抜いて、大海に向つて挺然として、獨り先頭に立つ。その巍々、蕩々たるは、太刀峯よりも、更に一頭地を抜く。その傀偉、崇嚴の觀、一代の大英雄、堂々として世間を睥睨し來る。如何に、巧みに、大英雄の肖像を造り得たる者か、その相貌を形似せしむるを得たるべし、その雄大なる精神の氣概として、此の英雄峯に匹似するものを造り得たるものを見ず。則ち是れ造物者の藝術品たる英雄像ならずんばあらざるべし。強く、飽くまで逞ましき巨巖、突兀として、海を排して立つ。峭立百仭。その裾より三分一の高さまでは、輕捷、アルセース、ルパンの如き者、或は、攀ぢ得るやも知れず。これ以上、天險、誰か敢て攀づることを企てん。但だ小草、幽花、その隙を縫ふて、ひそかに這ひ上ぼるあるのみ。絶頂に近くして、西壁に、凹處あり、白鳥、嬝々として双棲するあり。間に人海を俯瞰し、孤高の危きを知らざるものの如し。これ該、海金剛の内裏雛にあらずとせんや。海上アルプスの海金剛は則ち此の英雄峯なり。或は、これを「日本海の金剛峯」といふも可なり。疑ふらくは、海中、非常の大怪物あり、日本海を臥床として、横臥しつつ、その脊骨を海上に突出して、人間を驚かすもの、此の金剛峯にあらずや。或は、また地軸の一端、計らず此に暴露するものにあらずや。

英雄峯を讃美しつつ、その麓に網を擲げ、巨口細鱗の魚を釣る。渺然、仰ぎ視て、稀有の巨巖なりといふのみなるは、自然の英雄美を解せざるものなり。自然の英雄美は、露骨ならず、求めずして、自から環境美の協調あり。英雄峯を環ぐつて、遠く、近く、帆影の低迷するあり。青春の草色に、白蝶の群飛するが如く、或は白花の風に亂れて、片々、散り布くにも似たり。日本海を以て、一碧萬里、春風、吹き滿つる背景となせる、絢爛たる大光景のうちに、偉丈夫の、悠々、迫らざるが如きもの、此の英雄峯の威容なり。

其廿八

海上アルプスを以て、海を以て舞台とし、石の爲に描き卸したる一大傑作の劇として、靜浦は、その中幕なり。登場の名優、英雄峯を以て座頭とす。日本、現代の役者、これに對照すべきものなし。これを支那に見れば、武劇の巨擘、楊少樓は、

直に、[illegible]

峯の頂に映いて、岩壁に映發するだけなり。

十八羅漢の峯下る。頭、亂れ崎く。青燐の峯、石壁の後より流れ出で、光景一變す。淺黄色なり。鉢台面、數個戦、改まる。緑樹、蔽ひかぶさり、石壁、低く、海に添ふて彎曲す。中程に、奇峯、長く伸ぶるを象鼻岬といふ。その鼻端に、怪奇なる鼻孔あり、石柱三脚、海中に屹立し、宛として潮水を呼吸す。然れども、これを以て象鼻のみに擬するは、猶ほ盡さざるものあり。譬へば仙人の巨掌、指を三本、立てて、大空より垂れて海に挿入したるに似たるあり。仙人の姿は見えず。指と指との間、恰も門の如し、門に倚つて、前程の白砂の渚を望むに、清麗、我が目、爲に拭ふが如し。白砂を超えて、更に叢岩あり。幾箇の水晶塊、岩頭悉く自然の結晶、悉く、とがつて筍の如くなるあり。すべて陸離として、光線を反射し、精采を映發せしむ。

象鼻岬を過ぎて、東に、海上、玉泉巖あり。周圍、一町に足らず。形勢、海金剛の水源端に髣髴として、頗る小さし。試に舟を停めて仙巖に登れば、孤島、すべて一箇の巖塊、その中央に玉泉あり、深僅に十五六尺、清冷の淡水、つねに沸々として湧いて漲ぎる。これを掬すれば、幽溪の水の如し。泉に沿ふて、臂を枕にし、臥して會心の文學を讀まば、茫漠たる日本海上の

一[illegible]

世界のうち、[illegible]

海に[illegible]り、[illegible]

を貯へて、無盡の鹹水に浮ぶ[illegible]日本海の[illegible]にならずんばあらず。魔法瓶の水、飲み盡くすべし。玉泉の水、滾々として湧いて盡きず。仙人の寶瓶に似たるかな。海上アルプス既に此の玉泉あり、何處にか酒泉ある。恐らくは酒泉あらん。但だ能く大醉、浩歌して山嶽を驚倒せしむること、李太白の如きなきのみ。玉泉巖を過ぐれば島見門に至る。奇峯、遠く海中に斗出し、中腹に洞門あり。洞門より、西回顧すれば、過去の奇景、映畫の如くに展開し來る。島見門は、これを海上アルプスに特設されたる大造のオペラ、グラスといふべし。

島見門は、單に洞門としては、その高大なる、大門、小門に及ばずといへども、前後、洞口の外壁、雄壯、人を壓す。洞口に沿ふて、岩壁、數十仭、齊に大仙斧を揮つて、一擊に劈開したるべし。かくの如き淒壯、今世の如何なる大土木といへども、これを發見するを得ず。舟、島見門を過ぎて數丁にして白瀬に至る。奇峯、深く綠樹を戴き、斷崖二百尺、瀑布、白絹を垂るるが如く、奇綠の間より出で、皺を傳ふて下る。幾回か曲折して、水、石に激し、飛沫、日光に映じて、悉く三稜玻璃を透す

が如く、無数の彩虹、岩壁に點綴するあり。題して玉流瀑といふ。海上アルプスには、大瀑布の誇稱するに足るものなしといへども、尚ほ数條飛瀑、直ちに岩壁を奔つて碧海に注ぐあり。山巓の消息を漏らして直ちに海伯に到るなるべし。玉流瀑を第一とす。

島見門を過ぎて風景亦た一段落を爲す。これを海上アルプスの第五帶とす。此間、洞門稀にして、絶壁多し。これを金剛山の萬物相に比すべし。その第一關を高岸とす、高岸、重巖、屏風岩、渾べて是、一の彩畫峯ならざるはなし。高岸は、矢口濟に續き、四百尺の絶壁、半空に聳え突兀、その骨を露ふ。人をして仰ぎ視て眩倒せしめんとす、然れども彼のあるところ、往々して奇松を生じ、頂より樹蔭に至るまで、翠光、参差として斷續するあり。重巖は、横さまに数層を劃し、段落、截然として現はる。皺深くして、無数の矮松、石隙に生じ、蒼翠一滴たらんとす。絶壁に草木多きは、これに過ぐるはなし。絶壁の奇觀は屏風巖に至つて極まる。千仞の岩壁、屏風を列ねたらんが如し。石罅、僅に、一片の土を留むるところ、老松の蟠屈するあり。松、力を極めて石を推し開き、或は石を抱き、或は努んぎき、却つて自から顛倒せんとして、纔に支ふるものあり。その中、一翠巖有、多少の奇松を點ずるのみ。岩壁すべて、砥を以て磨くが如く、寸隙の、以て矮草を生ぜしむるなし。素月、これを照らさば、まさに明鏡の如く、海色を映ずべし、宜しく題して鏡如峯とすべきなり。島嶼の奇なるは、比翼峯あり、世俗これを夫婦巖といふ。光景、宛然として伊勢の二見浦に似たり。日本海の潮湧、双峯の間を回流して、渦紋を描き、双峯をして、動いて相寄らしめんとするに似たるあり。双峯の絶巖に、各、鶏の巣あり。鶏、相望んで相呼ぶ。谷々として、情に堪えざるが如くなり。江浦の海岸に烏鶏子巖あり。奇石を推積し、その上に一大石、烏帽子の如し。烏帽子巖を過ぎて、佛峯、巍然として海中に立つ。岸を去ること半町、大小奇巖を堆積し、絶頂に、一奇石、立つあり。恍として立佛なり。人をして粛然として敬意を起さしむ。石、亦た佛性あること疑なきなり。

其廿九

松島は、亂松の群島、自から陸前の松島を連想せしむるを以て名づく。小風景區なり。海澄み、松、石を抱く松影、海を染め、漁舟、往來す。

海上アルプスに漁夫を見るは、長門山中に虎に逢ふが如し。漁夫は、皆、青海島の南側より來る。海上アルプスのぬしならずんばあらず。雲慶の仁王像、北海に入つて人間となれるも

の、[illegible]く艀隊。漁舟、[illegible]く、沖に向ふ。漁夫の[illegible]、[illegible]す腕に、力瘤の、隆々として隆起して移動すること、譬へば[illegible]を瞰下しつつある此腹の起伏するが如く、[illegible]の[illegible]、[illegible]と緊張とを象徴する赤銅の彫刻と見え、その一動作ごとに、胸、肩、背に出沒、起伏する筋肉の波濤は、日本海を表現するかと思ふ。日本人の裸體に於ける、尤も筋肉美の發達したるは、日本海の漁夫を推すこと、なほ日本海の魚が、荒波に鍛練されたるが爲に、その肉引の締まつて極めて美なるが如きなり。彼等は眞に日本海に於ける活金剛なり。此の彫刻美の雄々しき裸體を、海上アルプスの前に縱觀するを得るは、此の舟游の大なる會心事たらずんばあらず。彼等が、沖を指して漕ぎ行く勇ましさは、消防車の馬が、渦まく火焔を望んで疾驅するが如く、肉鎚を揮り立てゝ決戰に臨める雄鷄の如く、宙宇を飛んで關ヶ原に馳せ參ずる薩摩隼人の如く、意氣揚々たる漁夫の武者振は、「生」の焔、波濤を壓して燃ゆ。夜々、天外、水平線を劃する、篝火の美しきイルミネーションは、是等の漁舟が焚く火を以て日本海を裝飾しつつあるなり。幾百萬とも數へ盡されざる、無數の珊瑚樹の紅く燃ゆる一線に似たるぞや。天上の珠星、悉く海に落ちて燃えて輝くにあらざるよりは、安んぞ此の

[illegible]人、[illegible]想、月あれば、月に[illegible]、[illegible]に[illegible]。今幻的の夜の日本海かな。吾等は海上アルプスの仙鄕[illegible]りて、長へに此の境味を翫しなを得んことを[illegible]ふ。今より二十年の後、白髮紅顏にして、夜、アルプスの仙鄕に靜居して、筆を走らすとき、世人、恐らくは、見て、以て、仙人となすならん。

請ふ看よ、燃ゆる珊瑚樹の舟に、幾人の活金剛あり。魚群、火を慕ふて集まること、燈に寄るの蛾の如し。火影より釣り上げらるる大魚、鱗光を浪の黝闇に漂はす。その快感、然れども成り難し。夜を徹して、波上の長風に、逞ましき裸體を曝す。鯉を抱く金太郎は、此の海上にては、餘りに平凡なるべし。魚、舟に滿ち、人は魚の中に棲む。篝火、絶えず光を搖かし、人と魚と皆、潑剌たり。魚、限りなく集まり來り、人、數知れず魚を取る。篝火、醒め、曉光微茫たるに至つて止む、乃ち再び櫓を急がせて歸る、歸つて海上アルプスに至る頃、朝光、俄に海を射て、岩壁に反映し、活金剛の舳に、凱旋の色、鮮やかに動く。

先年、吾誰、東、仙崎灣を發して、アルプスを周游したるとき、恰も此の海上に、一艘の歸舟に逢へり。裸體の活金剛六人。全身すべて渥丹の色、象眼をなせる如き[illegible]の肉、笑を帶

びて、高らかに唄ひつゝ、酒を求る。吾が渡舟の人、悉く感嘆して見る。通油の助役、舟を停めて、忽ち問ふ、魚ありや、活金剛答ふ、有り、〳〵、鮑あり。助役いはく、悉く買はん、乃ち命じて甲板に運び来らしむ。鮑、数十。蠑螺は山の如し。舟中に東京の人少からず、皆、驚き見る。忽ち、その價を問ふ、此の鮑、幾何、蠑螺は幾何。活金剛答ふ、鮑は一枚幾何。蠑螺は一山五十錢、一枚幾何なるを知らず。問者、再び驚倒せざるはなし。實に、青海島は魚の都ならずんばあらず。魚の美味にして廉なること、かくの如きは、海内、何處にかある。田中茂穗は日本魚學の創始者なり、研究の傍に、一たび島に來る、島の魚を評して天下の魚となせり。毎朝、早暁、魚市に至り、魚を探がす。暖流、寒流、此の海上に交流し、同一種の魚といへども寒魚あり暖魚あり、ともに一見して、その容姿を異にし、その味を異にす。吾輩、但だ嗜味よりして、島の魚を識る。東京より大阪、順次に南下して、張亭短亭三百程。魚味ます〳〵美、終に島に至つて極まる。天下の魚を味ふは須らく島に於てすべし。吾輩の如き味に昧らきを以てして、一たび島の魚に親しむとき、始めて鮮魚の眞味無上なるを知る。これを逆行して、朝に島の魚を餐し、夕に南海の魚を食ふとき、更に島の魚を思ふ。島の人、朝食の膳に刺味を常食とし、夕には朝の魚を食はず、朝暮の魚市、鮮魚を供給すること泉の如し。島の人、悉く漁獵たらずんばあらず。若し、穀食を廢して、一切、魚を以て飯に換ふるを得ば、島の人の生活は、極めて安價なるべし。則ち、これを魚飯といふ。魚と菜蔬と、皆、鮮美、これに加ふるに、島の南腹もつとも果實に適するあり。海山、茂林脩竹の間に於て、果樂、此の如きあり。日本趣味の不老郷は、此の島なるべし。

吾輩、海上アルプスに面して、魚を説くこと、稍、委曲に過ぐるやを疑ふ。然れども、山中、海涯、絶奇の境にして、滋味の得難きところ少からず。仙人なほ且つ松子を食ふ。人間、滋味なくして、何ぞ仙境を樂しむを得ん。島の食には干魚極に、罐詰も亦た乏し。島の人、魚を生食すること鶏と同じ、魚のみならず、多くの貝に於ける、亦た皆然り。蠑螺は、これを取つて、直ちに、肉を剥ぎ、北海の潮水に洗へば、その美味、壺燒の比にあらず。雲丹は、磯の岩礁に羅布、點々たる、譬へば飛門の斑よりも繁し。雲丹と鮑とを取るは、第一撃に、突如として、巧みにを[illegible]を拔くを要す。若し、これを誤れば、慢性の宿痾の拔く可らざると同じく、難攻不落なるべし。雲丹は、海中の栗、これを生食すれば、甘味、栗に勝さる。島より東は秋に、南は下關に至るの間、雲丹もつとも多し。海上の村、農家、往

に、[illegible]を取つて、[illegible]直にもつて[illegible]、再[illegible]を拵つて食ふ[illegible]ならず。[illegible]見れば、極味の、始めて[illegible]なるものなり。此丹は、その甲殼を剥いて、肉を取り、[illegible]海に浸して食ふを、特に美たりとす。這般の趣味、則ち島の遊味なり。

漁夫は裸百貫、褌一つの生命なり。彼等が笑つて茲に倚るを見れば、何等、世上に煩悶あるを知らざるものの如し。一點の雲影を留めざる碧天は彼等の顏なり。此の大自然を象徴する人物は、彼等、漁夫にあらずや。

松島を過ぎて、奇岩、百日紅崖といふ。峻峭、譬ふるに物なし。飛猿、亦た辷り落つといふを以て、此の名あり。海上アルプスには所々群猿あり、月明に、海風に嘯哀す、崖上、殊に多し。舟中の濱野君、絶崖を指して語る。崖壁に香蘭あり、淸芬、自から仙界の花なり、採るに由なし。頂上の老樹に、繩を垂れ、籠を釣り、人を載せ、空中に懸りて、絶壁の香蘭を採らしむといふ。蓋し信州の山中、百仭の幽谿に、岩茸を採ると同じ。趣味を求むるの奇險、此の如きあり。

其三十

百日紅崖を過ぎ、奇岩、數轉して、崖上、忽ち茶臺の青、畫くが如き[illegible]の可。[illegible]優を以てするが如し。[illegible]人の[illegible]見る。酒湯の港は[illegible]にあり。[illegible]べきなし。此に滯港するにあらざるよりは、今、唯だ、北海に向つて、海上アルプスの窓を開くに過ぎず。開くといへども、主客をして出入せしむるに足らざるなり。此の北面、日本海の長風を容る。夏の涼味、想見するに餘あり。人は皆、深閨の處女の如し、窓外を眺むといへども、交渉なきなり。舟中、暫らく人湖を望んで過ぐ。島、此に至つて盡き、更に大島あり、兩岸の岩壁、相擁して海峽を爲す。崖立ち潮早くして、大河の流るゝに似たり。これより南航して、青海島を南に回はるべし。海峽を停帆峽といふ。

將に、停帆峽に入らんとして、海上アルプスの靈峯を回看すれば、山勢、滿湖の如く、香舟を追ふて至る。湖影、香袖を浸して、依々、眷戀して、相別るゝに堪へざるものの如し。一日の中、山靈水伯と共鳴して歡を盡し、日出より斜陽に至る、別に望んで、豈、一言なかる可んや。蓋し、海上アルプスの奇峯、啻に、岩壁、群礁の奇觀のみにあらず。奇嶽の林泉、時に岩壁を中斷し、奇峯、悉く、その巓に森樹あり。斷崖の海と、

青緑の深林との間に、奇岩一帶、妍麗の色彩を染めて横さまに伸ぶ。奇峯の後に、群嶼、重疊するなり。雰圍氣、自然に、一箇の趣味帶をなす。若し、單に、一箇の岩壁、奇峯のみを以てすれば、或は、相比すべきもの、必ずしも求む可らざるに非ず。かくの如く、綠樹、群嶼、奇峯、碧海ともに協調を保ちて、相依つて、此の傑特の一大風景を組成し、變化、極まりなく、怪奇に失せず、尙ほ且つ、その長さ四五里に涉つて、些の緊張を欠くなく、人をして感激を續けしむるに至つては、眞に、天下に得易からず。これに添ふに、人生の趣味あり、自然と人生との調合、殆んど無きが如くにして、實は大に有り、南側の和暢と、北側の奇傑と、壁一重に存巾合はせにして、脊柱の山骨、これを貫通するあり。全體の構想に、大規模の意匠あり、部分的に、それ〲奇巧を逞しくするあり。大局の意匠を以て、これを統一して、しかも部分的の變化を極むるを妨げず。無限の部分的特色を集成して、これを一貫する趣味あり。人生を享樂せしむべき多趣多樣の興味、これに纏絡するあり。花あり、魚あり、避暑に宜しく、避寒に宜しく、四時の作興、皆、同じ。探賞すべく、隱棲すべし。島を擧げて、渾然として、日本趣味の結晶としての理想郷たるを失はず。島の趣味、孤ならず、環境、皆、趣味の淵叢たり遠くより島を尋ねて、雰圍氣を穿つて行けば、譬へば玻璨盤に盛りたる。百合根を、層層、剝いで、その中心の眞味に剝ぎ到るが如きあり。その核をなせるもの則ち海上アルプスなり。知らず、海上アルプスの山靈、水伯、敢て首肯するや、否や。

用、海上アルプスに沿ふて東航すれば、左右、背後、遠山を見ず、遠山は、前方に望む。東北に、無數青山、起伏して、杳杳として天を極む。澎湃たる青天の波濤なり。島の海岸線、ひとり不規則にして復雜なるのみならず、その空中に於ける山の輪廓の、不規律にして復雜を致すは、海岸線よりも、更に、遙に上にあり。故に、若し、島を倒して、海に浸たすとせば、その海岸線は、今よりも頗る奇拔なるもののなくんばあらざるべし。

小泉八雲氏、隱岐に遊び、その風景の描寫、忠實にして絢爛を極む。その出生の外國人たるだけに、如何なる細事も悉く好奇心を挑發せさるはなし。吾輩の青海島に於ける、自から精緻を期せさりしにあらずといへども、その郷國の風景なるだけに、他郷の人、見て、以て詩趣となすものも、吾輩の筆に上り來らさるもの少しとせさるべし。八雲先生、隱岐を望んで、日本の風景を論じ、日本の山岳線は、その唐突と不規則とを以て特色とす、一峯、一峯と相似たるもの一もあることなしといへ

か。[illegible]、海上アルプスに[illegible]
プスの[illegible]
[illegible]米、樹頭の如くに[illegible]へるうちに、閲兵形の一群、大日比、[illegible]然として峙つを見るは、金剛山の[illegible]成[illegible]といへども、此の[illegible]化なきなり。これを以て、風雲、烟霞、各、その妙趣を致すのみにあらず、月に宜しく、雪に宜し。相對して倦むことを忘るゝなり。停帆[illegible]を右に見て、直ちに金華山に向ふ。金華山は、大島にあり。大島は、千仭の岩壁、削るが如く、その絶巓は巨屋の蔽ひかぶさるに似たり。日本海の濤勢、岩壁の中腹を打つて、窟あり。岩壁の下、群礁、亂立す。奇礁、概ね石柱の聳立するが如し。舟、亂礁の間を縫ふて行く。宛として海中の石柱林を逍遙するなり、海上アルプス、大海に直面する岩壁を經過して、忽ち此の石柱溪に入る。恍として海上の夢路かと疑ふ。溪窮まるところ、則ち金華なり。金華洞あり。洞口は、金剛山の曉雲洞に似て、その奇趣、横生するは遠く優さる。金華には鬱蒼たる茂林の裕あり。まさに幾多の玉龍を藏するなるべし。

其卅一

大島を過ぐれば竹島あり、全島、皆、竹林。人家なし。舵を

[illegible]あり。[illegible]
青海島の南面は、すべて[illegible]、深[illegible]、南[illegible]し。深谷、[illegible]湖を作す。紫津浦を[illegible]とす[illegible]て、山に沿ふて離[illegible]外に、湖上平地、理想的の文化村を作るべし。湖の奥則ち船越あり、海上アルプスの十八景に到るべし。昔、湖上の商漁、町をなす。名けて商人といひ、商人千軒と稱す。後ち、町を擧げて南移す。今の仙崎町これなり。紫津浦は、湖内に坐して、鯨鯢、魚蝦の利を占む。古昔、風に、漁市の成立を見たる所以。紫津浦の西、一岑、突出して、更に一湖を圍す。大日比といふ。漁村五十軒、上利氏多し、昔の上利黨なり。相傳ふ大内義隆、陶晴賢の亂に、山口を脱し、此島に來る、義隆、飢ゆること太甚し。上利黨、出で迎へ。山路を導く。飯を爨せんとするに器具なし。山師木の葉に飯を盛り、竹を折つて箸となして、以て勸む。義隆、大に喜び、今本村の觀音像を贈つて、一飯の恩に酬ゆといふ。觀音佛、尚ほ村に傳ふ。大日比の地勢、北は峻嶺を以て圍ひ、入江を南にす。青海島の南腹に、勝の地位を占め、風土、宛として温室の如し。紫津浦は相似て、形勢、大なり、温室として大規模なるものなるべ

し。大日比は、長州蜜柑の原産地なり。此地より、秋に價はり、始めて天下に著はる。皮薄く、實張り、甘味にして、光澤の麗はしき、則ち大日比の夏蜜柑を推して天下第一とす。黄金色の麗實、翠色滴たる緑葉の間に、數十百、累々として亂れ輝やく。南國の情趣なるかな。

抑、大日比の名、近世の佛教史に著聞す。名刹、西圓寺あり、寺は大日比といひ、寺名をいはず。寺境、茂樹、白沙、實に拭ふが如し。京洛の古寺といへども、かくの如き清淨境、極めて稀なり、寺法清峻、今に至つて宛も羶腥の氣を帶びず。その建築堅牢、石寶殿の如し、開創以來約百年、未だ一回の修繕を施さず。器も亦た改めずして、尚ほ清新を失はず。浪打際に山門あり、典雅、甚くとも及ばじ。別に、山中に、尼寺あり、法船庵といふ。法岸上人、一たび法燈を掲げてより、大日比の名淨土宗に重きを爲す。法岸、阿彌陀經を講説し、肉食妻帶は佛弟子にあらずとして、大氣焔を擧ぐ。一向宗徒、槍、薙刀を以て包圍するも上人、泰然として屈せず。吾徒、これを島のルーテルといふ。法洲、法道二弟子相嗣いで、師説を鼓吹す。世にこれを大日比三師といふ。三師講説集及び、日本高僧傳、三師の面目を見るべし。青海島、秀靈の氣、此の英傑なかる可らず。金剛山に擬すれば、大日比は則ち楡枯寺なり。

島の南側、海市の盛を通浦とす。南灣より北海に通じ、町を以て地狹とす。人家六百軒、簇々、雲霞の如し、北海より遠く望めば、蜃氣樓と見ゆ。通浦に奇草あり、方言ゲンゴベイといふ。春、白花を開く。漢名前胡、有名なる毒草なり。ひとり此に産するもの、實に、無毒なるのみならず、可憐の花、芳香の葉、頗る美味なり。前胡の愛食すべきもの、天下唯だ此地あるのみ。これ豈、青海島の秀靈の氣を象徴するものにあらずや。

大正十四年、明治天皇祭の夕、油谷灣、久津の錦波樓に於て稿了。油谷灣の好風景、架説せず。久津は灣中、別に一灣を劃し、樓は邱上にあり。此地をして、若し、交通便利の地にあらしめば、その風光、千年前、既に日本の名勝たりしを疑はず。灣に日本海戰紀念館を設く、何日の後、吾が艦隊、此に來り、開館式を擧ぐべし。此夕、河村朝雲と共に來り宿す。海風涼々、燈下、蚊を見ず、頗る爽快を覺ゆ。

黒頭巾再記。

桂月先生の人と文章

田中貢太郎

告別式の日

時維大正十四年六月十七日、小石川區雜司ケ谷町百八番地の大町邸に於て、桂月先生の告別式が行はれた。その大町邸は桂月未亡人長子夫人の令兄、故鹽井雨江氏の邸宅であつた。桂月先生がその鹽井邸に移つたのは明治四十三年のことで、雨江先生遺愛の梅や柳が今に依然として綠葉を着け、實を結んでゐるのを見るにつけても、刹那の人生の儚さがしのばれる。

告別式には桂月先生の同人、武島羽衣、杉敏介、猪狩史山、東川楊舟、伊藤銀山の諸氏、及び門下親戚の者がその準備に當つた。表座敷の八疊に庭に面して桂月先生の靈を安置し、その三方を諸方より贈られた花輪で圍んで、右に家族が並び、左に親戚の者が控えてゐた。そこには白と黑の鯨幕を室の周圍から門口にかけて張りわたし、告別式に臨んだ者は、玄關の前を左に折れて往き、それから右に廻つて告別するのであつた。その際右の間には縁側に添うて青年時の桂月先生そのままの容姿をした喪主の芳文氏と、親戚の工學博士岡澤新兵衛氏が立ち、左には長い卓を据ゑて多くの瓦盃を並べ、桂月先生の靈前に立たうとする人人に傍の四斗樽から酒を酌んで勸めた。それは福島縣植田町から贈つて來た「清暉」と云ふ酒であつた。それは嘗て小波氏が植田町へ講演に往つた際、植田の醸造家から桂月先生に自家醸造の銘酒の銘をもらつてくれと頼まれたので、小波氏から桂月先生に手簡し、その結果、「世人不知梅花清暉、不知何物是清暉、窓外梅花天外月、與君相對的清暉」と云ふ絹本に書いた詩が小波氏の許へ屆いた。そこで小波氏はその詩を植田へ送り、返禮にはその酒を贈るが可いだらうと云つてやつた。醸造家では喜んで酒を贈ることにして高濕泉へ手簡したが、返事がないので、小波氏に訊いて雜司ケ谷の大町邸へ贈つて來たのがその酒で、それがその告別式の前日にたつてゆくりなく到着したのであつた。高濕泉の一室で依然として南山など

ぬ酒に對して寂しい一生を了した桂月先生の告別式にも、おしろ斎を衒ふやうに思はれた酒もかうした因緣のあるものであつた。

告別式は二時から五時までの間に於て行はれた。その十日午前九時十五分、蔦温泉で逝去した桂月先生の遺骸は、十二日の夜茶毘に付して、十四日東京に歸り、かくして告別式を行ふこととなつたのであつた。私達は酒を勸め、門口の受付と連絡を執り、休憩室へ往來し、時に箒を執つて庭の病葉を掃いた。さうした中にも私をして感ぜしめたことは、桂月先生の先輩同人の健康の變化であつた。

芳賀矢一博士の健康の衰へてゐたことは、だいいち私の心を暗くした。腎臓病のために眼に故障があつても酒を廢さなかつた博士も、その日は私の捧げた瓦盃に手を觸れなかつた。大町君がこんなになつたから、私も酒を飮まないことにしました、と彼の肥つた猫背のやうに體を曲げてゐる博士は、さう云つて眼鏡の下からしよぼしよぼした眼をしばたたいて見せた。芳賀博士は桂月先生が傾倒してゐる先輩であると共に、芳賀博士も亦桂月先生に相許してゐたものがあつた。

江見水蔭氏がめつきり老人になつて瘦せ衰へた姿を見せた。水蔭、小波、桂月の三先生は酒好癖の同人であつた。水蔭氏が元氣溌溂として角力に文壇の耳目を集め、柏木の桂月先生の許へも角力に來たことを聞いてゐる私は、その老衰の早いのに愕くと云ふよりは寧ろ恐ろしかつた。

私だけは病中もずつと逢つてゐたから驚かなかつたが、瀧川椙蔭氏の病後の姿も人人を驚かした。肥つて苹果のやうであつた頰もげつそりそげて、顏色も蒼く、門前から自動車をおりて僅に十數間步いて來るにさへ荒い迫つた呼吸をしてゐたには、知己の多いだけにその注意を引くこともひととほりでなかつた。椙蔭氏は桂月先生の知己であつた。桂月先生が晩年揮毫するやうになつたのも、椙蔭氏がその闊達な手蹟に注目して、これを慫慂したがためであつた。又桂月先生晩年の力作の中央公論に掲載せられたのも、椙蔭氏と崇拜相通ずるところがあつたためであつた。椙蔭氏は昨冬十一月以來酒を絶つてゐたが、それでも瓦盃だけは受けて、その冷たい強い一滴で桂月先生との最後の告別をしたのであつた。

稻田重政氏も腦に故障を生じてゐた。半ば眠つてゐる人のやうにして、そろそろと足を引摺つて入つて來た。大町家の同人として、漢學者で、酒徒で、快活兒で、酒席には何時も一座の長となつたものであつたが、もう殆んど廢人同樣になつてゐた。私が瓦盃を渡さうとしても右の手の指先をぶるぶると顫は

すやうにしただけで手には負へなかつた。私は一[illegible]に物故した和田垣謙三博士のことを思ひだした。明治四十三年比から大正五六年比にかけて桂月先生を中にして私達は博士と遊行を共にした。箱根の湖水行、熊谷堤の觀櫻、高尾登山。兩國の煙火、池上の旗亭にも一緒に往つたことがあつた。それは桂月先生が少年の讀物にと、日本外史、日本政記、國史略、論語、文章軌範などを和譯してゐる比のことであつた。その和田垣博士も腦のために逝去し、そして、その和田垣博士の死を悼んだ福田氏も、もう腦に故障が生じてゐるのであつた。

東川楊舟氏は桂月先生の遺骨を仙臺驛に迎へて、そこから一行に加はつたものであつた。その楊舟先生も何所かに故障があつて自分で『舌のまはらない病氣だ。』と云つてゐた。手も震へて文字も早くは書けなかつた。庭の杉や松の新芽を摘んで來て嚙んでゐることがあつたが、それでも煙草と酒は飲んでゐた。しかし、もう強情我慢、角力をとつて痛飲したやうな昔の俤はなかつた。私は淋しくもあれば氣の毒でもあつた。

桂月先生と同年の馬場孤蝶先生もめつきり白髮が眼にたつて見えた。横山健堂氏は髯を落して心もち若くは見えてゐたが、年は爭はれなかつた。芥川龍之介、今井彥三郎、石川千代松、國府犀東、桐島像一、沼波瓊音、長谷川天溪、佐藤緑太郎、石[illegible]さに焼香してくれた。[illegible]諸氏は一行中であつたがために、七月十日の追悼會に列してくれた。

川柳坂井久良岐氏は、その日弔句を高らかに口にした。それは『飲中の八仙一人星に化り』と云ふのであつた。

一　桂月先生の一家

明治三十五年の春、高山樗牛が湘南に逝いた時、桂月先生は一篇の誄詞をものして畏友を弔ふたが、その中に『酒間嘗て樗牛醉ひて戯れに余に謂つて曰く、君は體が弱さうなり、必ず早く死なむ、君死なば、われ弔文を作らむと。われ曰く、柳に雪折れなし、君こそ却つて早く死にさうなれ、君死なば、われ弔文を草せむと。座に芥舟、醉茗諸氏ありき。必ずや記憶せるならむ。爾來わづかに七八年、戲謔、讖をなして、樗牛先づ死せり』と云つてゐる。その樗牛の弔文を草した年の暮、桂月先生は落合直文氏の忘年會に招かれた。その時落合先生は、桂月先生が痛飲するのを見て『そのやうに痛飲すれば、君も高山氏の跡をおふべし、[illegible]君死なば、われ、弔文を作らむ』と云つた

が、『その音、なを耳に在り』ながら「早く白玉樓中の人となり給ひぬ」とは、明治三十八年に長逝した秋谷先生を弔ふた弔文の云ふところであるが、その桂月先生に大正十一年以後、桂月全集を出版するやうになつた前後から、「君は何處かに弱い所がある、僕より早く死にさうだ、君が死んだら全集を出版してやる、今まで出版した本も、新聞や雜誌に書いた原稿も集めておけ」と云つて、私のことを心配してくれてゐたが、その心配をかけた私は殘つて、心配してくれてゐた桂月先生が杉牛秋谷二氏の跡を踐むやうになつて、私をして悲しい追憶の筆を執らしめることにならうとは、かけても思はないところであつた。

桂月先生は高知縣高知市の生れであつた。家は山内家の弓馬術で百五十石をはんでゐた。嚴父は通と云ふ名であつた。桂月先生はその通氏の三男として明治二年一月二十四日を以て生れたのであつた。

桂月先生には二兄二姉、及び庶腹の妹があつた。長兄物東氏は太政官の屬官となつてゐた。これは桂月先生の『寂寞の秋夕』の中にある所謂亡き兄であつた。私の友人で南滿鐵道の瓦斯部にゐる大町茂春はその長男であつた。次兄の政次郎氏は、別家の大町利平の養子となつてゐたが、これは明治二十九年に四十二歳を以て病沒した。政次郎氏の次男政利氏は工學士で、桂月先生逝去の際は北海道の勤務先から蔦へ駈けつけた。長姉千代氏は大谷家に嫁してゐたが、今は高知市の親戚の家に寄食してゐる。次姉田鶴氏は野中家に嫁して貞恒と云ふ小息があつた。庶腹の妹といふのは高尾家に嫁してゐて、千代と云ふ女の小供があり、それは桂月先生と土佐へ行つた際に私も一度見たことがあつた。

桂月先生の母堂は糸と云ふ名であつた。久德宗守と云ふ人の女（むすめ）で、兄を宗義、弟を宗德と云つてゐた。その久德家は後に改姓して多賀と改めてゐた。明治三十六年、私が初めて上京して桂月先生に師事した年、それは八月比の暑い時であつたが、その母堂が病氣になつたので、私も看護人の手がはりをして、夜の十二時から起きて氷をつけかへた。その時鐘で氷を碎いてゐると、蟲の聲が何所からともなしに聞えて來て淋しかつたことを覺えてゐる。母堂は痩せて小柄な老婆で、齒が落ちても「なみあみだぶつ」を唱へてゐた。桂月先生はその比西大久保の俗に鬼王さんと云ふ社の傍にゐた。私はその時桂月先生の書齋で日本文明史の校正刷を見たことがあつた。政次郎氏と逢つたのもその前後であつた。

母堂は明治四十年に六十八歳を以て病沒した。次姉田鶴氏は大正九年になつて病沒してゐるが、その田鶴氏とは母堂を看護

したがらなつてゐるところへに、[illegible]行した時にも一緒であつたから嬉しかつた。多賀宗徳氏も明治四十年比、私が二度目に上京した比、桂月先生の許でよく逢つた。芳衛は弱い、芳衛は弱い、と腕をほめながら懐しい話をして酒を飲んでゐた。その宗徳氏は要馬の名人と云ふことで、桂月先生をとほしてよく要馬の話を聞いた。要馬は土佐藩に行はれた武藝で、組を分ちて馬に乗り、初めはたんぽ槍で突き合ひ、次に竹刀、最後に組打ちして敵を馬から落して勝を制する實戰の練習であつた。宗徳氏はその時煙草専賣局に勤めてゐた。

桂月先生にはこの他に父の同胞になる伯母が二人あつた。一人は国澤新兵衛氏の母堂で、九十有餘の高齢を保つて、桂月先生の長逝の翌日に死亡した。私は蔦温泉にゐてその訃報に接した。他の一人の森姓の家に嫁してゐた人のことは、長尾景正翁から聞かされてゐたが、それには會ふ機會がなかつた。

桂月先生の嚴父通氏は桂月先生が十二歳の時になくなつたので、桂月先生にはただ叱られたと云ふ印象があるばかりでその人となりはあまり知らないやうであるが、長姉千代氏の夫であつた大谷氏から聞いた話だと云つて桂月先生の書いてあるものを見るに、名人氣質の人であつたやうに思はれる。それは通氏が臨終の際、遺言があると云つて大谷氏を呼びに來たので、大谷[illegible]には、[illegible]してゐた、[illegible]と云つて[illegible]私は桂月先生の生涯に通過した人々も、今はこの[illegible]みつけられたものだと思ふのである。

二　土佐に於ける桂月先生

大町家は高知市北門筋にあつた。家の背後には竹藪越しに川の水が澱み、築地になつた門の前には小溝があつて石を渡して橋にしてあつた。桂月先生はその北門筋の家に八歳まで育つた。桂月先生が當時の記憶は、その八歳の時、嚴父に伴れられて同家所有の小舟に乗つて何處かへ往つた日のことであつた。それは朝の十時比、嚴父は小舟を或る古い橋の下へ繋いでおいて、桂月先生を殘してあがつて往つた。その橋の橋杭には、[illegible]に小孔があつて、船蟲がちよろちよろと出たり入つたりしてゐた。桂月先生は小供心にそれがおもしろくてたまらなかつた。船蟲はこべりを傳ふて舟の中へも入つて來た。桂月先生はその船蟲に慰められて何事も忘れてゐたが、そのうちに十二時になり一時になつて、空腹を感じて來て苦しくなつたので、聲をあげて泣きだした。その時の空腹は今に覺えてゐると云つて時折私はじめ土佐に關係のある者に話した。その橋の[illegible]には[illegible]

あつて老人夫婦の者がゐた。茶店の者は小供の泣聲を聞きつけて舟へ來、桂月先生を伴れて往つて店で賣つてゐる菓子を喫はした。

そのうちに二時か三時頃になつて嚴父が歸つて來た。嚴父は老人夫婦に禮を云つて、桂月先生の喫つた菓子代を拂つて伴れ歸つたが、武士氣質の嚴父は、人から物をもらつて喫つたことを怒つて桂月先生を叱つた。そして舟を出して歸途に着いたが、その途中に堰があつた。それは水を集めるために堰の中央に勾配のある樋を作り、底に板を敷いて水路としたものであつた。嚴父は舟を堰の頭に繫いで、『ちよつと待つてをれ。』と云つて堰の上を步いて往つた。桂月先生は初めのやうに待たされては大變だと思つて、舟を出て嚴父の後を追ひ、堰の上を渡らうとしたところで、足が滑つて水路の中に陷ち、そのまゝ落口の淵の中へ流れ込んだ。嚴父は子供が流れたと云ふ通行人の聲で氣が注いて、水の中へ入つて救ひあげた。

大町家は桂月先生が八歲になつて江の口へ移つた。江の口に移つたのは、桂月先生の所謂士族の商法を始めるがためであつた。侍でも家祿がなくなつたうへは、商法をはじめて金を得なければならないと云ふ、その當時の流行意識に支配せられて、嚴父が風呂屋を譲りうけたがためであつた。桂月先生はそこで初めて追手筋小學校に入學したが、內氣ではにかみやで、學校へ往くのを嫌つたので、その當時追手筋小學校の教師をしてゐた長兄の惣策氏が、何時も引摺るやうにして伴れて往つた。

翌年になつて大町家は秦泉寺村に移つた。士族の商法の風呂屋が旨くゆかなかつたがためであらう。秦泉寺は高知の北方になる山下の村であつた。桂月先生はそこで秦泉寺小學校に轉校した。

秦泉寺では厭た役目が一つあつた。それは嚴父が家から三四丁ある畑へ肥料をやる時にその先棒とせられることであつた。しかし、その役目さへすめば、後は自由であつた。桂月先生は鎌を腰にして山に入り、木の實を喫ひ、小鳥を獲り、喧嘩をし、ねつきをやり、蟲送りに隨いて步いた。ねつきとは二尺位に切つた握りごろの木の枝の一方を削つたもので、それを地に打ち込んで敵手のねつきを倒して取る遊びであつた。蟲送りとは稻の害蟲を凍死さす年中行事の一つで、これには農家の青年が松明を點け、鐘、太鼓を打ち鳴らして、田の中の小徑を廻はつて往くのであつた。『さいとう、べつとう、さアねもり、いねの、むウしや、ひイしやげた』と大聲に調子を取り取り鐘を打ち太鼓を鳴らした。他人の控山の楊梅の木にのぼつて、その實を喫つてゐる所へ持主の老夫婦が來て『大きな鳥がゐる』

と云はれ、[illegible]とであつた。

桂月先生が九歳の時は西南戦役のあつた年で、土佐の立志社が勃興して世の中が何となく騒然しかつたが、それは桂月先生には影響しなかつた。ただ西郷隆盛の降伏と戰爭の結末とが少年の心を刺激した。桂月先生が後に軍人に志すやうになつたのは、かうした影響が一因をなしてゐるやうに思はれる。

桂月先生が十一歳になつて大町家は高知市内の山田町へ移つた。厳父はそこで蠟の製法を始めた。桂月先生は南街小學校の生徒となつた。この南街小學校の校長は、次兄の養父晩翠大町利平氏であつた。この大町家は桂月先生の曾祖存平氏の弟高七郎氏から出た家で、晩翠氏はこの子であつた。二人とも儒者であつた。政次郎氏は桂月先生の生れない前からこの大町家に往つてゐた。長兄は一家が桑泉寺に住んでゐる比、既に[illegible]を發して上京してゐた。

山田町に移つてから桂月先生は毎夜米を搗かされた。桂月先生の家には、日本百將傳一夕話があつた。桂月先生は紙鳶を揚げ、旗ばひをやり、或は水の中に浸つてゐたので、日中家にゐることはなかつたが、たまたま家にゐる時には、この一夕話の繪を見たり、又繪を描いたりした。

それ[illegible]いやうなものであつた。[illegible]へこ討論のやうなことをやつた。[illegible]と云ふやうなことであつた。

その當時桂月先生は、厳父に仕へてゐた女に伴はれてその家へ往つたことがあつた。それは所謂「腹違の妹」を生んだ女であらう。女の家は浦戸港の入江に沿ふた南の村であつたが、その日はその家の近くの社の祭禮であつた。女は桂月先生に二錢の小遣を持たして見物に往かした。桂月先生は社へ往つて、その一錢遣ひ、一錢を殘して歸つた。女は「氣の小さい小坊さんぢや」と云つて笑つた。

三 大叔の感化

翌年になつて厳父通氏は、四十八歳を以て病死した。それは明治十三年であつた。その三月桂月先生は母堂と共に小叔多賀宗德氏に伴はれて上京した。汽船は左に青松白沙の沙洲を見、右に海中に突出して岬となつた丘陵を見て浦戸港口を出るのであつた。その丘陵の海濱が桂月先生の雅號のよつて起つた桂濱であつた。桂月先生は大叔宗德氏に養はれることになつてゐた。宗德氏は青島占領當時の民政長官であつた陸軍少將多賀

之氏の家臣で、砲兵少佐であつた。今、雑司谷の墓地にある浦塩形の石碑はその宗義氏の墓標であつた。『をらが死んだら浦塩の石塔を建ててくれ、』宗義氏の遺言によつて嫡子宗之氏、桂川先生、及び元の宗義氏の部下の軍曹などで建立したものであつた。

　桂川先生は十二歳から十五歳まで宗義氏の許にゐたが、その間の大叔の感化は偉大であつた。大叔の人となりは桂川先生によると、『古武士の典型とも云ふべき人也。磊落豪壮、口数少なくして何となく威厳あり。細事に拘はらず、妄りに怒らず、こせこせ言はず、ぶつぶつ小言いひたることなし。常に余を戒めて曰く、男子は決して弱音を吐くべからず。痛くとも、痛しと云ふな、苦しくとも、苦しと云ふな、暑くとも、暑しと云ふな、寒くとも、寒しと云ふな』と云ふ底の人であつた。この痛くとも痛しと云ふな、苦しくとも苦しと云ふなと云つた大叔の教訓は、所謂痩我慢となつて桂川先生の一生を支配した。

　大叔の家には毎晩のやうに同僚や部下の軍人が五六人も集まつて来て酒を飲んだ。それには叔母一人では客の執りなしができないので、桂川先生もその手だすけをして酒を行ふことがあつた。大叔をはじめ客は皆西南の役に出征してゐた軍人ばかりであるから、めいめいの手柄ばなしに花が咲いて、時とすると鐵拳の飛ぶことがあつたが、大叔は何時も泰然自若としてゐた。大叔は西南戦役中に頭に銃創を受けてゐた。

　大叔は客のない時には晩酌の後で、桂川先生と腕押しをしたりした。ある時大叔は晩酌してゐて桂川先生に、『屋根から飛んでみよ。』と云つた。桂川先生は言下に屋根へあがつて飛びおりた。大叔は喜んで、『お前は軍人になれる。』と云つた。郷里にゐる時、西郷南洲に憧憬し、西南戦役の錦絵に心をときめかしてゐた少年は、その時から軍人を志望するやうになつた。桂川先生に云はせると、『西郷降伏以後、また民間より出でて、大将となりたるものなし。われ陸軍士官學校に入り、第二の西郷とならむと氣張りしに、我ながら滑稽千萬なる哉』やであつた。

　大叔は武辯ばかりの人ではなかつた。西南戦役の論功行賞に不平を抱いて、近衛兵が暴動して所謂竹橋騒動を起した日は、自己の隊伍に行軍を命じて郊外に出た。陰謀に加はつてゐる兵には、『隊長をヤッつけろ、』と云つて怒り、銃を擬して肉薄して来た者もあつたが、大事に至らず、他にも大叔の隊に倣ふ者があつて、暴動は諸隊に行きわたらずに一部に終つたのは、大叔の機略の致すところであつた。私は桂川先生にもこの一面があつたことを知つてゐる。

　桂川先生はこの大叔から非常に愛せられたが、一度執拗で命

ちやうこたま[illegible]たま[illegible]に酔つた[illegible]
の手にした盃は二つに割れてゐたんだ。大叔は後にこのことを
桂月先生に話して、「お前にこの酒管一本のお陰で、よくなつ
た。」と云つた。大叔は曾て天長節の時、宮中で諸人に天盃を
賜はつた際、「もう一盃。」と云つて天盃のおかはりを飲んだが、そ
れを明治天皇が御記憶になつてゐて、翌年の天長節に、「今日
も二盃飲んだ男は見えて居るか。」と仰せられたと云ふ逸話を持
つてゐた。衣食住に質素を尚んだ大叔の家には、他に何もなか
つたが、たゞ一つ七升入りの大きな酒瓶があつて、何時も滿々
と酒を充たしてあつた。

大叔宗義氏は昇進して聯隊長となつてゐたが、後、病を得て辭職し、晩年は人の借金のために苦しむやうになつた。桂月先生はまだ大學在學中であつたが、父に優る恩人の急を視ては傍觀することができなかつた。それに大學生と云ふことが信用になつて金を借りることのできた當時にあつては、大叔のために印を捺さないわけにゆかなかつた。桂月先生は大叔の云ふままに印を捺したがために、大學卒業後大いに苦しめられ、中學校の漢文教科書を編纂して、その大半を埋め、殘額は出雲中學校に赴任して、衣食を節し、毎月俸給の半を割いてこれに當て、一年半にして皆濟したのであつた。この桂月先生の行爲は凡庸の

[illegible]學ぶこと[illegible]きないこと[illegible]
一読いた桂月先生[illegible]
はれる。

四　明治義塾時代

桂月先生は大叔の下に養はれるやうになつてから番町小學校に入學し、翌年から學校の傍ら山本と云ふ漢學塾に通ふて漢籍を學ぶことになつた。その當時番町小學校には吉野作造、後に醫學博士となつた北島多一、山岡熊治の諸氏がゐた。山岡氏は日露戰役の際、乃木將軍の參謀として旅順の勅語使に往き、その後負傷して盲中佐として盛名のあつた人であつた。その山岡家と多賀家とは親しかつたので、桂月先生も山岡氏とはすぐ親しくなつた。山岡氏も山本塾に通ふてゐた。山岡家には漢籍が多かつた。書籍を買ふことの出來なかつた桂月先生は、山岡家に就いてその蔵書を借りて讀んだ。

山本塾では漢籍の他に塾生に作文を課した。山岡氏の文章が塾中で異彩を放つてゐた。桂月先生は山岡氏に競爭して文章に熱中したが、山岡氏には到底及ばなかつた。二人は又塾以外に題を設けて文章を作りあつたが、桂月先生の云ふところによると、「いつも山岡氏が優れたり。余はますます熱心に為り[illegible]

を作り、進境を見たれど、われ進めば、山岡氏も進む。到底比較にならず」であつたが、文章の趣味はその時から養はれたものであつた。番町小學校では習字の時間に、字を習はずに漢詩を寫した。受持の田村と云ふ漢學者の教師がそれを見て、「お前、詩が好きか、詩が好きなら、作ることを教へてやらうか」と云つた。

山本塾に入つた年に桂月先生は番町小學校を卒業して大成社と云ふのへ入學して數學を修めた。その桂月先生は十四歳になつてゐた。十五歳になつて桂月先生は近眼になつたので、軍人を斷念して大學へ入つて學問しやうと思ひだした。桂月先生はそれを大叔宗義氏に話した。宗義氏は笑つて、「芳衛が大學に入つたら商賣で鼎をくくる」と云つた。商賣で鼎を括るとは到底できないと云ふ譬喩であつた。宗義氏は桂月先生の學才を認めるに至らなかつた。

桂月先生はその年即ち明治十六年三月になつて明治義塾の學僕となつた。それは千頭清臣氏の紹介であつた。桂月先生によると「塾僕の仕事は、玄關の取次をなすこと、教員室の用事を辨ずることだけにて、報酬とてはなかりしが、月謝を出さず食料をも出さずに寄宿して、學ぶことが出來たり。時には給仕役塾生にて、貧書生の勉强するには、至極都合のよきもの也」であつた。

その明治義塾は今の中央大學のある處にあつた。校長は豊川良平翁で、當時三十歳内外であつたと桂月先生は云つてゐる。その學校には馬場辰猪、千頭清臣の諸氏が教員としてゐたので、大石正巳、末廣鐵腸などがよく教員室へ遊びに來た。當時は自由黨の盛な時で、馬場、末廣、大石の諸氏は、自由黨の將星として嘖嘖の名があつた。中でも「馬場氏は東洋のガンベツタと稱せられ、辯論の雄、天下を壓せり。中肉中背にして、色白く、男らしき好男子也。其音聲亦た美麗也。その美貌、その美音、三十年後の今までも、余の耳に殘り、余の目の前に彷彿たるを覺ゆ」とは、桂月先生の云ふところであつた。その馬場氏に時折、弟と云つて遊びに來る少年があつて取りついだ。それが今の馬場孤蝶先生であつた。

明治義塾内塾生として寄宿してゐる生徒の中に、今の東京第一中學校長をしてゐる川田正澂氏がゐた。桂月先生は川田氏と漢詩の數を多く知ることを競爭してゐたが、後には自分で詩を作るやうになつた。無論文章は絶えず作つてゐた。その當時「穎才新誌」と云ふ唯一の少年雜誌があつて少年の投書を輯錄してゐた。そこは學校から三四丁の所で、店頭には穎才新誌を置き、傍に投書函を備へてあつた。それは週間雜誌で一部二錢で

きつた。

桂月先生はこれに投書するやうになつた。投書は一つも没書にならなかつた。桂月先生はその雜誌を毎號讀みたかつたが小遣が不自由であるから、自己の文章の掲載せられてゐる分だけ買ふやうにしたが、それさへ思ふとほりにならないので、投書の數もすくなくならざるを得なかつた。

桂月先生は時間があると今の教育博物館のある所にあつた帝國圖書館へ往つた。その當時の圖書館は下足賃五厘の他に閲覽料を要しなかつた。桂月先生はそこで日本外史、日本政記を讀んで頼山陽に私淑するやうになつた。頼山陽の感化は非常に深かつた。桂月先生が文章のことを云ふ場合に頼山陽の名の出ないことはなかつた。桂月先生はその圖書館で土佐の小學校の同窓生であつた宮崎と云ふ少年と逢つた。それが後年森槐南門下の四天王の隨一と云はれた宮崎晴瀾であつた。晴瀾氏には有名な『晴瀾焚詩』と云ふ詩集がある。

長兄惣作氏はこの時太政官の屬官となつてゐた。桂月先生は日曜が來ると長兄の許へ出かけて往つて、鼠入らずを探し、戸棚を開けて、鼠のやうに食をあさつた。『また大きな鼠が來た、』と云つて嫂は笑つた。

五　高等學校の入學試驗

明治義塾は間もなく廢止した。桂月先生は同塾内にあつた英吉利法律學校の學僕となつてゐたが、十七年の九月になつて同校を出て再び大叔の家に身を寄せることになつた

その年の十一月になつて桂月先生は原要義塾へ入つた。原要義塾では獨逸語と數學を修めた。これは長兄惣作氏から大學に入るには外國語と數學を修めなければならないと云はれたがためであつた。翌年の二月になつて桂月先生は獨逸協會學校の入學試驗を受けて入學した。その時同じく入學試驗を受けて、獨逸語の力量があつたがために桂月先生より二級上に編入せられた用川清秀の少年があつた。それが巖谷小波氏であつた。巖谷氏はその時自作の小說の草稿を桂月先生に見せた。

それは明治十八年であつた。その六月になつて大叔は仙臺に轉任したので、桂月先生は長兄の家へ移つて、學費を大叔から仰ぐこととなつた。その獨逸協會學會は漢文の作文があつて、それに滿點を得た者はその一學期間一週三時間の漢文の時間に出なくても可いことになつてゐた。漢文の作文に滿點を得た桂月先生は、漢文の時間には運動場に出て、木馬を飛び、手より
を飛び、鞦韆に乘つて得意になつてゐた。

桂月先生はその當時馬琴の小說を好んで讀んでゐた。その明治十八年は官制改革のあつた年で、それがために長兄惣兼氏は免官になり、一ヶ年間僅に俸給の三分の一を得ることになつて、生活上の不安に襲はれたうへに、生來虛弱であつた長兄は肺病になつた。長兄は自己の運命の既に極まつたことを知ると共に、桂月先生を一日も早く第一高等中學校に入學させやうとした。第一高等中學校は今の第一高等學校の前名であつた。その高等中學校の入學試驗は七月に本試驗があつて、九月と十二月とに補缺試驗があつた。桂月先生は翌年七月の入學試驗に應ずることにして、困難な數學ばかり勉强した。

やがてその年の七月が來たので應試した。その時桂月先生は『數學三千題』の中にある問題は說き得ないものもないほどに數學を勉强してゐたにもかかはらず、その數學で不合格になつた。その時長兄は鄕里へ往つてゐた。桂月先生は仕方なしにそれを長兄に通知すると共に、九月の補缺試驗には必ず合格しようと思つて、馬琴の小說も讀まず、文章も作らず、一心になつて數學を勵み、九月の試驗に應じたが、成績の判らない際に長兄が氣息奄奄として歸京した。そして、試驗の成績が判つて合格の報を齎らした日は、長兄逝去の前一日であつた。長兄は三十一歲であつた。「余は幸にも及第せり、之を兄に告ぐれば、莞爾として微笑せり。嗚呼これ實に兄が此世に於てなせる最後の笑ひにてありしなり。既にして曰く、學資定めて多きを要せむ。汝如何にして、これを辨ぜんとする乎と。嗚呼これ兄が此世に於てなせる最後の心配にてありしなり」とは『萱脚の秋夕』に叙したところである。この長兄の貧しい葬式の日に、その時は深い關係もなかつた杉浦重剛氏から、すくなからざる香典を贈つてくれたと云つて、桂月先生は杉浦氏の德をたたへる例の一つとして平生私達にそれを話しました。

この當時の高等學校は、豫科三年本科二年の五學年であつた。桂月先生はその豫科生となつた翌年、即ち明治二十年九月に仙石貢氏の食客となつた。軍人志望の多賀宗之氏も仙石家の食客となつてゐた。そして、翌二十一年七月になつて仙石氏が洋行することになつたので、桂月先生は仙石氏の紹介で杉浦重剛氏の稱好塾に入塾した。稱好塾はその時小石川の久堅町にあつた。その際桂月先生が稱好塾に提出した履歷書があから引用する。

一、明治二年一月二十四日を以て土佐國高知北門筋に生れ申候、父は通と呼び、母は多賀氏、小生は其三男に御座候。

一、明治十三年三月小叔父、小生の母及び小生を伴うて東京に上り、大叔父の家に寓し、小生は番町小學校に通ひ申候。

一、[illegible]候。

一、明治十五年番町小學校を卒業致し候。

一明治十五年大成館にて數學を修め申候。

一、明治十六年三月千頭清臣氏の紹介を以て明治義塾の學僕となり專ら英學を學び申候處、數月にして英學を厭ふの念を起し、斷然之を止めて漢書と詩文とに耽り申候。既にして明治義塾解散致し、小生は同塾内に在りし英吉利法律學校の學僕たりしが、終に明治十七年九月に至つて同校を去り、又叔父の家に寓居仕候。

一、明治十七年十一月頃に至り、小生は翻然として漢學の以て身を立つるに足らざるを悟り、叔父に乞うて原要義塾に入り、獨逸學を修め申候。

一、明治十八年二月より獨逸協會學校に入り主として獨逸學を修め申候。

一、明治十八年六月叔父仙臺に赴きしを以て長兄の家に寓居仕候。先是父は病死し兄は官に就きて東京に來り申候。

一、明治十九年一月頃より第一高等中學校に入るの念を起し、頻りに數學を勉强致し、同七月の入學試験を受けしに落第致し、同九月の補缺試験にて及第致し、今は同校に在[illegible]

一、明治二十年九月より[illegible]

一、明治二十一年七月飯石氏は洋行せられたれば、出發するに臨み小生を介して杉浦先生の門生たらしむ。依つて小生は幸にも本塾に入るを得申候。

六 土方の二日

稱好塾には巖谷小波、江見水蔭の諸氏がゐた。そこは八疊の室に三人づつ机を並べてゐた。集會の日には[illegible]を取りはづして大廣間として集まつた。集會の日には酒を許された。その席では必らず指名會と云ふことをして、思ひ思ひに指名し、指名せられた者は、歌、詩吟、劍舞、何によらず一藝を演ずるのであつた。

そこでは下駄や傘に所有權がなかつた。そこでは一年の中に數回遠足することになつてゐた。この遠足の日には梅干を入れた握飯を淺草海苔で包んだものを携へて往つた。塾生はこの形が彈丸に似てゐるので、何時となしに彈丸を以て呼ぶやうになつてゐた。

桂月先生は稱好塾に一年間ゐた。桂月先生はその前後に[illegible]と云ふ家にをり、親戚島崎好忠氏の家にもゐたと云つてゐるが

判らない。又次兄政次郎氏の未亡人は、明治二十一年の春から翌年の夏にかけて、桂月先生と多賀宗之氏の二人が自宅にゐたと云つてゐるが、私の考へでは桂月先生と多賀氏のゐたのは、二十二年でなくて、十九年の高等中學校の入學試驗を受けた年から、翌年仙石邸に往くまでの間のやうに思はれるが、もすこし詮議しないと斷定することはできない。ただ桂月先生が稱好塾を出たのは仙臺から轉任して來た大叔の許に移るためであつたと云ふことだけは確のやうである。

東京に歸つて來た大叔は、桂月先生が豫科を卒業する比になつて、病のために聯隊長の職を退いて歸鄕することになつたので、愛馬を當時の大藏次官渡邊國武氏に賣ることになり、桂月先生が使になつてその馬を伴れて往つた。その馬は桂月先生も時時乘つたことがあつた。桂月先生はこれで再びこの馬に乘ることもできないと思つたので、乘り納めにと思つて乘つて往つた。渡邊邸は麻布の蝦蟆が池にあつた。桂月先生は渡邊氏に逢つて馬を見せた。渡邊は馬の値を聞いた。桂月先生は大叔から『百八十圓と云へ、まけろと云ふなら百六十圓でもいい。』と云はれてゐるので、『百八十圓です。』と云つた。渡邊氏は『百六十圓でいいだらう。』と云つた。桂月先生は『それでは、その中間をとつて、百七十圓にしませう。』と云つたが、渡邊氏が承知しないので、百七十圓と百六十圓との中間の百六十五圓と云ふことにして馬を渡した。

大叔の命令どほりにやれば取れない金を五圓取つて來た桂月先生は、その內を二圓もらつて往きたい往きたいと思つてゐる日光に往かうと思つて、歸つて大叔に話してみると、大叔が快諾してくれたので、それを懷にして出かけて往つた。それは明治二十二年の夏であつた。先づ日光祠を觀て、日光の諸瀑を探り、中禪寺湖を經て足尾に往き、そこから庚申山、妙義山にと往つて、夜、富岡驛におりた時には嚢中僅に三錢しか殘つてゐなかつた。桂月先生はそこで殘りの三錢を投じて眞桑瓜を二つ買ひ、それを喫ひながら歩いたが東京までは三十里あるから、一二泊しなければ歸れなかつた。しかし無一物になつてゐるので宿屋へは入れない。その夜は稻田の畦に寢て、翌日ひもじい腹をかかへて本庄驛に往き、そこから路を中仙道に取つて歩いた。土方の親分が通りかかつて仕事をしないかと云ふので、本庄驛の北半里の所にある沼田村と云ふのへ往つて、二日間利根川の堤防工事を手傳つたが、とても苦しくて續かない。握飯八つと草鞋を二足もらつて歸つて來たが、それでも多年の宿望を達したことであるから嬉しくてたまらなかつた。

この桂月先生の旅行は殆んど天性であつた。爾後桂月先生は

[illegible]ました。今、中學校に[illegible]になる[illegible]の生れた[illegible]なには　やはり旅行に行って[illegible]十分りたいので知らすこともできなかった。旅行に出られたい時には[illegible]一はいに參謀本部の地圖を散らかして、それを見て話をやってゐた。明治四十年後は私も桂月先生に隨從して旅行したので、桂月先生の紀行文の中には私の名も散見してゐる。

七　豫科時代

第一高等中學校の豫科時代の桂月先生は、大政治家が理想で辯論會を設けて辯論を練習した。會員には丸山嵯峨一郎氏たどがゐた。桂月先生は更に同級の有志と平凡會と云ふものを起した。會員は桂月先生の他に、野田兵太郎、飯尾元之進、副島義一、伊藤歐橋、中村進午、吉浦平六、吉川五郎の七人がゐたが、後で下の級にも及ぼして、本間九介、鈴木榮太郎、飯尾元四郎、筧克彦、夏秋龜一の諸氏も加へた。會費二錢、副島義一氏のゐた寺を會場にして、燒芋を嚙りながら天下の英雄を罵つた。大會の場合には十五錢の會費で、豚と酒を買ひ、それを道灌山に持ちだして、肉を煮、酒を飲み、詩を吟じ、角力をとつた。時とすると徹宵遠足したこともあつた。桂月先生の旅行の[illegible]まつた。その[illegible]あつた。それに[illegible]義一氏の[illegible]のことなど[illegible]た。その當時の副島氏は制服以外のぼろぼろに破けた[illegible]た、[illegible]を衝く底の服を着け、竹の皮の草履を穿いて西洋乞食にも劣つた服裝をしてゐた。

その副島氏は或日、主任の教授に服裝のことを叱られて、制服を着ることを命ぜられた[illegible]で桂月先生がゐたが、副島君は[illegible]し、他に聞きたいことがあつたところで、それを野田氏が聞いて大に怒つた。「何故副島君のために辯解してやらない、平凡會員たるの資、何處にある」と云つた調子で、先づ中村氏の許へ往つたが、中村氏が留守であつたから、「今日は、首を頂戴したいから、飯尾君の下宿まで來るやうに云つてくれたまへ」と云ひおいて歸つて往つた。

野田氏の去つた後で家に歸つた中村氏は、何事だらうと思つて飯尾氏の下宿へ出かけて往つた。下宿では野田氏が飯尾氏をつかまへて大に罵倒してゐるところであつた。野田氏は鐵火箸で火鉢を叩き叩き、二人を相手にして論難攻撃の果は、その火鉢を叩きわつてしまつた。桂月先生は野田氏から來いと云ふ前

的があつたので、その翌日學校の歸りに野田氏の下宿へ往つた。そそして桂月先生が室の中へ入つて坐らうとしたところで、野田氏がつかつかと起つて來て、いきなり桂月先生の頭をなぐつた。何も知らない桂月先生は吃驚して口をもぐもぐさしてゐた。

副島氏について汚い服裝をしてゐた者は、なんと云つても桂月先生であつた。『七年の久しき、制服は唯ヘルの冬服一つにて濟ましたりき。靴は前後、兵隊靴三つ四つにて濟ましたりき。和服にて通ふの日多かりき。一週に三時間の體操の時だけは、制服を著ざるべからざれども、足が痛むとか何とか口實を設けて、草履にて濟ましたること多かりき。從弟陸軍幼年學校に入りたる時、不用になれりとて、その纏ひ古りたりし外套を與れたるが、その外套、余には小さ過ぐ。それでも無きにはまされりとて、肩に引つ掛けて、冬の寒さを凌ぎたることとなりき。』と自分で云つてゐるが、その惡衣のさまが思ひやられる。後に桂月先生が大學を卒業して、佐佐木高行侯の嗣子であつた佐佐木高美氏の許へ往つた時、佐佐木家に長くゐた婢が、『今までは何人も大町さんの奥さんになる者はなかつたが、これならなる者もある。』と云つた。この日桂月先生は初めて紋付羽織を著てゐたと云ふことであつた。それは伊藤銀月氏の話であつた。ある冬の如きは片方の足袋しかないことがあつたと、桂月先生が私に話したことがあつた。それは貧しい汚穢な學生であつたが、そんな外面的なことは桂月先生にとつてはなんでもなかつた。

桂月先生はその一方で、やはり詩文に耽つてゐた。文は賴山陽、馬琴、成島柳北、菊池三溪。詩は維新諸志士の感化を受けてゐた桂月先生は、德富蘇峰、志賀矧川二氏の文章に接するに及んで、又その影響を受けるやうになつた。その當時學校の中に二種の廻覧雜誌があつた。桂月先生は双方に關係してゐたが、その雜誌は間もなく合同して『青年志叢』と云ふ活字の雜誌になつた。それは小田切磐太郎氏が發行者で、桂月先生が編輯主任であつたが三號で倒れた。

その時英文科の方に『文園』と云ふやはり活字の雜誌があつて、大森金五郎、伊吹山徳司、山縣五十雄、高橋作衞の諸氏が筆を執つてゐた。鹽井雨江氏はそれに山陰樵夫の名で小說を書いてゐた。『文園』は發展して今の校友會雜誌となつた。

桂月先生は辯論文章の他に運動もやつた。トラツペーをやつたことや、高飛をやつたことは時時私も聞かされた。

八　佐佐木高美氏

高等中學校の三年の豫科が終つて本科に移る際になつて桂月

[illegible]と法律科であるが、桂月先生は[illegible]になることも、[illegible]辯護士となることも厭であつた。大政治家になりたいと思つてゐる桂月先生の入りたいのは政治科であつた。政治科に入るには英語でなくてはならなかつた。桂月先生は獨逸協會學校以來苦心した獨逸語、併てはレーマン先生が辭職した際に、總代として獨逸語で謝辭を述べて、レーマン先生から君は辯護士になるのかと從められたことのある、その得意の獨逸語を棄てゝ、三年間英語を專修したが、終つた時にはもう政治科に入るの志願[illegible]になつて文科に入つた。その文科の桂月先生の組には、原勝郎、島文次郎、内田銀藏、建部遯吾、瀧精一、幸田成友、桑木嚴翼、武島又次郎、岡田正美の諸氏がゐた。

桂月先生はその時洋行から歸つてゐる仙石貢氏の玄關にゐた。その當時桂月先生の得る學資は僅かに三圓であつた。桂月先生はその三圓で豫科の時は一圓五十錢の月謝を拂ひ、本科になつてから二圓の月謝を拂つた。豫科の時でさへ僅か一圓五十錢では、教科書を買ひ、紙筆を買ひ、交際費を支辨することができなかつたのに、本科になつてはどうすることもできなかつた。それを伊藤痴山氏が佐々木高美氏に話して、毎月一圓の補助を受けるやうになつたが、それとて僅かな金であるから一ヶ[illegible]

[illegible]たために[illegible]ただ。時時校友會雜誌へ投書するので、終にその[illegible]げられた。

桂月先生はその時、仙台第二高等學校の地に、[illegible]の酒を飲むことを許されてゐた。大叔の家にゐる時には、水曜と日曜の二度、大叔に侍して酒を飲んでゐた。桂月先生はその比、酒徒として同級の間に認められてゐた。桂月先生は文[illegible]を以て所謂荒鷲の雄を以て自負してゐた。酒を飲み、文を作り、詩をうち、角力を取つた桂月先生の客氣を滿足さす所は、佐々木高美氏の許であつた。

佐々木氏は當時英國の留學から歸つて、父高行侯の預つてゐた竹田宮殿下の御養育の主任をしてゐた。その佐々木氏は桂月先生によると、「顔、渥丹の如く、美髪漆より黑き二十四貫の大兵、」で、「善く談じ、善く笑ひ、胸襟を披いて書生を容れ、少しも紳士振ら」ない紳士であつた。桂月先生が初めて佐々木氏を知つたのは、明治二十二年國澤新兵衛平行氏人の兩氏が大學を卒業して、芝のいいはらしで先輩友人を招待して宴を張つたときのことであつた。そして佐々木邸に出入するやうになつたの

は、高知縣人の團體又土佐協會の前身の一つであつた同志會の「席上で、佐佐木氏が正月二日に屠蘇に來いと云つて學生を招いた時からであつた。

川田久信、岩崎鏡川、岡正藤太郎、津田茂麿の諸氏は書生として佐佐木邸に養はれてゐた。前第一高等學校長瀨戸虎記氏も桂月先生などと一緒に佐佐木氏から補助を仰いだものの一人であつた。佐佐木氏は書生を愛して、書生に角力を取らし、酒を飲み、時には書生を引率して旅行した。

ある年の夏、佐佐木氏は桂月先生初め藤井、高三、瀨戸虎記、生駒勇の四氏を伴れて、房州館山に避暑した。その當時の旅行記は桂月先生の「房州の一夏」に書いてある。それは佐佐木氏が一時歸京した後で、運動嫌ひの瀨戸氏を殘して、三人で内浦賀の濱に野宿し、清澄山に登り、鋸山に往き、富山を經て歸つた記事であつた。

その翌年佐佐木氏は桂月先生を初め、藤井、生駒、中城桃闈の四氏を伴れて富士登山を試みた。その月桂月先生は、富士から歸るなり佐佐木高行侯に呼ばれて日光へ往つた。昌子内親王殿下と房子内親王殿の御養育係になつてゐた高行侯は、夏は兩親王殿下を奉じて日光の御用邸にゐた。桂月先生は佐佐木侯の傍で談話筆記をした。その時桂月先生は暇を見て白根山と男體山に登つた。それは「日光山の奥」と云ふ桂月先生初期の名文の一つとなつてゐる。その時桂月先生は御用邸から湯本に往つて泊らうとしたが、夜で、一人旅で、それで汚い風體をしてゐたので、旅館を軒並みに歩いても滿員と云つてことはられた。最後に往つてことはられた時、「僕は日光の御用邸にゐる大學生だが、」と云つてみた。桂月先生の機智は圖に當つて、忽ち二階の三疊の室へ通された。

破衣破帽で旅行した桂月先生には、かうしたやうなことは平生つきまとふてゐた。ある年上州の草津へ往つて白根山に登り、歸りに草津で知りあひになつた富澤と云ふ醫師を中之條に訪ふと、富澤氏は井上と云ふ醫師と二人で發起して、同地の有志を集め、桂月先生を一旗亭に招待した。この時文學に趣好のある素封家の一人も來たが、蓬頭垢面の桂月先生を見て、井上醫師に「本物か、本物か、」と囁くばかりか、果ては桂月先生に向つて、「君は眞箇の大町桂月か、」と云ひだしたが、富澤氏の説明によつて、正眞正銘の桂月先生と云ふことが判ると、「それはすまないことをしました、」と云つて涙を流してあやまり、皆の止めるのもきかずに歸つて往つた。それは、「上州の耶馬溪」の中にある。

その桂月先生には、上州赤城山の北にある追貝の吹割れの瀧

[illegible]にも、それに[illegible]てゐた追貝の[illegible]の主人は、多少文字が[illegible]つて桂月を知つてゐ[illegible]を知つてゐる所から、ちやうど遊びに來た村の小學校の教師はじめ二三の者に、桂月先生が來てゐると云つて、その服裝から容貌まで精しく話してきかせた。すると教師が、『先生のやうな名士が、わざわざこんな追貝のやうな偏鄙へ來るはずがない　又そんな粗末な風體をしてゐるはずがない、きつと贋物だ、化けの皮をはいでやれ』と云つて、強いて面會を申しこんで話して往つた。

私も後に桂月先生と片品川の溪を溯り、彼の追貝の吹割れの瀧を見て、根精峠を越えた時にも、小川のてまへで日が暮れて、そんな目に逢つたことがあつた。

佐佐木高美氏はその當時『明治會叢誌』と云ふ雜誌を發行してゐたので、桂月先生もそれに投稿して文才を認められてゐた。その雜誌には岩垣月洲の孫にあたる雨森菊太郎、落合直文、池邊義象の諸氏が執筆してゐた。當時は西洋崇拜の反動時代で、國粹の保存論から國文學の復興となり、落合直文氏の文名の隆隆たる際であつたから、桂月先生もおのづから影響せられて國文學に志すやうになつた。それと共に德富蘇峰氏の漢文直譯體の文章に影響せられてゐた文章は、次第に和文脈の多いものとなつた。かくて、[illegible]寓する[illegible]になつて[illegible]に[illegible]に出入するやうになつた。その時落合氏のもとには[illegible]日に歌合せが[illegible]た。その歌合せの會名は淺嘉町の名を取つて淺香社としてあつた。桂月先生もその淺香社の歌合せに出席した。

伊藤氏は二十四年から二十八年まで落合邸に寄宿してゐた。それには一ケ月三圓の食費を納めてゐた。與謝野寛氏は伊藤氏が落合邸を去らうとする年に寄宿して來たものであつた。桂月先生の知人で早くから落合氏に接してゐた者は鹽井雨江氏であつた。雨江先生が明治三十七年三月に出版した『湖上の美人』の序文には、該書第一章の初稿は秋のや主人の添削を經たと云ふことが書いてある。

九　帝國文學時代

桂月先生が高等中學校の一年の本科を三年費して帝國大學の國文科へ入つたのは、明治二十六年であつた。同窓八人。林森太郎、杉敏介、武島又次郎、下村莢、吉川豐、佐佐醒雪、岡田正美、及び桂月先生であつたが、岡田氏が病氣で休學したので七人となつた。そして三ケ年を通じて首席は何時も林氏で、桂月先生と佐佐氏とは、二年の時はすこし上であつたが、一年の

時も三年の時も、二人で末席の前後を爭ふたものだ。

桂月先生はその比、大叔から學資を仰ぐことができないので、佐佐木氏の一圓を基にして文章を書いて學資を得てゐたが、土佐へ歸つてゐる母堂と、やはり大叔から學資を仰いでゐた從弟の茂春氏を補助しなくてはならなかつた。桂月先生はそこで貸費生となつて毎月七圓五十錢を得、それに佐佐木の一圓を加へ、そのうへを原稿によつて充してゐたが、どうも思ふやうにゆかないので、鹽井雨江氏が同情して、自分で書いてゐた雜誌『女鑑』の原稿を桂月先生に讓つてくれた。その同窓中佐佐氏も桂月先生と境遇に似たところがあつて、やはり文章を賣つて學資にしてゐた。桂月先生と佐佐氏とは趣味にも似たところがあつた。二人は遠足して學資をつかひすごして、その紀行文を書いて埋め合せにしたことがあつた。

翌年になつて桂月先生は仙石家を出て鹽井雨江氏の許に身を寄せることになつた。それは雨江先生の令妹、桂月未亡人の長子夫人との結婚問題で仙石家の感情を害したがためであつた。それには桂月先生の創作『埋香塚』を發禁させるやうな事もあつたらしい。

その當時の文壇は德富蘇峰氏の『國民之友』、三宅雪嶺氏の『日本人』、坪内逍遙氏の『早稻田文學』、森鷗外氏の『柵草紙』があつて、おのおの文壇の一方に覇を唱へ、國文學復興期の國文界には、彼の落合直文、池邊義象の兩氏が雄飛してゐて、絢爛人目を眩すると云ふありさまであつたから、青年志望、文園以來の文科大學の學生達も食指を動かした。その文科生の中でも高等中學校時代に讀賣新聞の懸賞小說に『瀧口入道』を投じて當選してゐた高山樗牛が中心となつて、今でも『樗牛の叔父さん』で通つてゐる太川齊藤氏が大日本圖書株式會社にゐるのに說いて『帝國文學』を發行することになつた。そして先生側では洋行歸りの上田萬年氏が先になつて、外山正一、井上哲次郎の諸氏が力を添へ、庶務には岡田正美氏が當り、委員には三年生の狩野直喜、鹽井雨江、二年生の高山樗牛、島文次郎、一年生の上田敏、内海月杖及び岡田正美の七氏があげられて編輯發行したところで、初號八千部を賣りつくすと云ふ好況を呈した。

四號から『帝國文學』は委員を改選して、二年生の畔柳芥舟、佐佐醒雪、武島羽衣、藤岡勝二の四氏及び桂月先生、一年生の上田敏、岡田正美兩氏が選ばれた。その時三號までの時評を一人で書いてゐた高山樗牛氏は、『太陽』の時評に筆を執つて逍遙鷗外の先輩と對峙してゐた。

桂月先生は帝國文學が起ると共に、漢文直譯體の文章と和文をあはせた所謂美文を創造して續續それを發表した。その當時

[illegible]が、前表の文ばりの美文調のすいものであつた。桂月先生が當時の美文は、『夏町の秋夕』、『古塚』、『老臣』、『須磨の一夜』、『芝野の諷詠』、『あだ形見』、『夢の跡』、『よける美人』、『縁塚』『かた袖』、『殺胎』、『小春日和』、『風流門』の諸篇であつた。中でも『かた袖』の一篇は『中央公論』がまだ『反省雜誌』と云つてゐた際、はじめて文藝物を掲載することになり、社長の麻田駒之助氏が直接桂月先生の所に來て、『小説を書いてください』と云つて頼んだから出來たものであつた。それは最近麻田氏から私に話してくれたことであるから、まちがひのないことである。

桂月先生は美文の他に、紀行文、評論、新體詩も書いた。桂月先生の同人では鹽井雨江氏が新體詩人として第一に現はれた。次に現はれたのは武島羽衣氏であつた。土井晩翠氏が發起して新體詩會を起したので、桂月先生もそれに加はることになつたが、加はつてみると競爭心が起つて詩作に熱中するやうになつた。『琵琶瀧』、『巣立つ雛鳥』、『秋蟬』、『野末の伏屋』、『夢野の鹿』、『加藤清正の告別』、『浪の花』、『地藏堂』、『胡蝶』、『わが涙』、『山の影』、『いさゝ川』、『花さくら』、『やつれし姿』、『松杉問答』、『雕陽城』、『柳の糸』、『女ごころ』、『かたみの言葉』、『涙の味』[illegible]作』、『[illegible]』の[illegible]以めぐり』、『日光山の奥』、『淺間のひとよ』、『佐渡の月』などが傑出してゐて有名であつた。作品は鹽井雨江氏、武島羽衣の二人の作を集めた『花紅葉』と『[illegible]』の文[illegible]の中に收めてあつて、日本全國の男女學生に讀まれ、當時の中學校と女學校の作文の文體を一變してしまつた。芳賀矢一博士が桂月全集のためにに寄せた序文の中に、『私は年年中等教員檢定委員をつとめたが、[illegible]作文の[illegible]常に多いのに驚いた。それは形式の上の事だが、随つて思想にの感化も無論多かつたに違ひない』と云つてゐるが、これに依しても桂月ばりの文體が、一世を風靡したことが判ると共に、それに至るまでの桂月先生の文章上の苦心も想像することができるのである。

十　簸川中學校時代

桂月先生は仙石邸を出た年、長子夫人と結婚して鹽井家に同居してゐたが、翌年になつて長男芳文氏が生れた。その翌年は明治二十九年で桂月先生は大學を卒業した。三人合作集の『花紅葉』が刊行になつたのはその年であつた。桂月先生はその年

鹽井家を出て原町に家を持つた。それは家賃三圓位の二室しかない家であつた。桂月先生はそこで『契沖阿闍梨』を書いた。机に向つて原稿を書いたり、疑義があると圖書館へ往つたり、それは樂しさうであつた、と、桂月先生が原稿に追はれて、いやいや筆を執つてゐるやうな場合に、長子夫人が私達に云ふことがあつた。

契沖阿闍梨は鹽井雨江武島羽衣桂月先生の三人で筆を執ることになつてゐた『國文學大綱』の中に入るもので、それには武島羽衣氏が加茂眞淵を書き、鹽井雨江氏が香川景樹を書いてゐた。かうして三人が手を分ちて、柿本人丸を書き、在原業平を書き、紀貫之を書き、紫式部を書き、清少納言を書き、定家を書き、西行を書き、兼好を書き、本居宣長を書いて、國文學上時代を劃した十二名家を評傳するのであつた。それは帝國文學を發行してゐる大日本圖書會社の事業で、そこでは國文學大綱の姉妹篇として『支那文學大綱』にも着手して、莊子、孟子、韓非子、白樂天、李笠翁、蘇東坡、湯臨川、元遺山、韓退之、屈原、李白、陶淵明、司馬遷の諸家を評傳してゐた。それは藤田劍峯、白河鯉洋、笹川臨風、田岡嶺雲、及び桂月先生の五人で、桂月先生は『白樂天』を書いた。契沖阿闍梨も白樂天も翌三十年になつて刊行になつた。

桂月先生はその年原町から千駄木町に移つたが、その家は狹くて不便であつたから、すぐ傍の稍廣い家に移つた。その時桂月先生は近くの車宿に專用の車を置かして乘つてゐた。その時田岡嶺雲先生が桂月先生の傍にゐたが、放縱不覊、車の上から小便をすると云ふ際で、車に乘つても車賃が滯りがちであつたから、車宿の亭主が『田岡さんは困ります、大町さんが引受けてくださらなくちや、』と云ふので、桂月先生が引受け人になつたと云ふ話もあつた。それは嶺雲先生の生前に、直接私が聞いたことである。

三十一年になつて桂月先生は、『黃菊白菊』を刊行した。その年次男の文衞氏が生れた。桂月先生は黃菊白菊に續いて『詩及び散文』を刊行した。花紅葉の美文によつて男女學生の渴迎するところとなつてゐた桂月先生は、黃菊白菊によつてその欽崇の的となつた。桂濱月下漁郎の名は人の耳目を聳動さしたと云つてもいい位に騷がれた。その盛名隆々たる桂月先生にもその時人知れぬ苦痛があつた。大叔多賀宗義氏の云ふがままに捺した印判から來る苦痛であつた。それは安い原稿料位ではどうすることもできなかつた。そこで桂月先生は漢文の教科書を編纂してその後始末をしようとしたが、その印税ばかりでは足りないので、その當時鹽井雨江氏がゐた出雲の簸川中學校へ教員と

[illegible]それは明治三十二年の夏であつた。桂月先生はこの年、[illegible]小説『文學小觀』の二冊を刊行してゐた。學校との契約は三ケ年在勤すると云ふ契約であつた。桂月先生は一家を纏め、雨江先生の[illegible]を作つて、岡山で汽車を乗りかへて津山に往き、津山から車で米子を経て、中國山脈の絶頂四十曲りの險を冒して出雲へ入り、いよいよ簸川中學校の教壇に立つたが、日本の古國出雲には、太古からの史蹟と、太古ながらの山水が桂月先生を待つてゐた。桂月先生は時間をこしらへて島根半島に遊び、美保ケ關に往き、三瓶山、簸の川上、断魚渓、伯耆の大山にまで登つて、山水の情をほしいままにした。

そのうちに博文館から入社を慫慂して來た。その時博文館では高山樗牛氏が外國に留學することになつて、評論の筆を絶つたので、樗牛氏に代るべき人を物色して桂月先生に注目したところであつた。しかし、桂月先生は雨江先生を中にして學校との契約があるので、直にその慫慂に應ずることができなかつた。博文館では巖谷小波氏がその衝にあたつてゐた。桂月先生は終に知己に許すことになり、翌年の夏期休暇を利用して東京へ引きあげることにしたが、夫人が姙身して臨月になつてゐたので、家族はそのままにして一人で歸京した。そして博文館に入[illegible]つたので、[illegible]男文[illegible]であつた。家族を[illegible]へに往つたことは『[illegible]』と云ふ文章になつてゐる。桂月先生はその途を紀行には[illegible]面の紀行文を交へた紀行文集『一蓑一笠』をその翌年になつて刊行した。博文館に入社した年には『道徳實踐法』を刊行した。

十一　博文館時代

桂月先生が博文館の月給は百圓であつたが、その當時では破格な月給であつたらしい。その當時の文藝雜誌などには、桂月三顧の禮を取らして博文館に入る』と云ふやうなことを書いてあつた。桂月先生はその時駒込蓬萊町にゐた。それは根津の方から來ると右角に酒屋のある所を曲つて二三軒往つた所であつた。近くに草津温泉があつた。

桂月先生は『太陽』『中學世界』『文藝倶樂部』などに評論の筆を執つた。その當時は文藝倶樂部が第一流の創作雜誌として名のある時であつたから、桂月先生の文藝批評にも權威があつて、當時の若い文學者達は爭うて桂月先生の門を潜つたものだ。

大叔宗義氏が亡くなつたのはその比であつた。小叔宗德氏は四十一年になつて亡くなつた。大叔はその比淀橋にゐた。大叔が亡くなつた後の多賀家が淋しくなつたので、桂月先生はその近くの角筈へ移つて往つた。そこは『東京の西郊、花園神社の傍ら、市街をはなれて、一字の平屋立てり。屋外凡そ千坪、前に葡萄棚あり、後ろに竹林あり。梅や、櫻や、柿や、栗や、松や、柏や、椿や、楓や、無花果や、百日紅や、其間に簇生す。四顧ただ木立を見て、人家を見ず。環睹蕭然、何となく我心に適する處なり』と桂月先生の云つてゐる家であつた。そこで桂月先生は『田園雜興』と云ふ所謂美文、叙事文を書いたが、これは桂月先生の文章中の白眉で又傑作である。

桂月先生は角筈から千駄ケ谷に移つた。その前後桂月先生は『學生訓』、『續學生訓』、『鬼吉川』、『第一筆のしづく』を刊行した。三十六年になつて『日本文明史』、『處生訓』、『女學生訓』、『少女と山水』、『第二筆のしづく』、『社會訓』の諸書を刊行した。三十六年は私が初めて桂月先生に贄を執つた年で、桂月先生は西大久保の鬼王さんの傍に家を移してゐた。私が初めて桂月先生に逢つた日は、岡上と云ふ男からもらつた紹介狀を持つて往つたが、桂月先生は『紹介狀を書いた人は知らないが、まああがりたまへ』と云つてくれた。桂月先生はその時、今戸燒の狸のやうな吹殼入れを手にして出て來た。

私はその時京橋にあつた小さな新聞社に入つてゐたが、主筆排斥の運動に加はつたので社を逐はれ、桂月先生の厄介になることになつて、牛込天神町にゐた東川楊舟先生の許に寄宿することになつた。桂月先生は來客が多くて執筆をさまたげられるやうな時には、何時も東川に來て筆を執り、できあがると私がそれを博文館へ持つて往つた。夏になつて桂月先生の母堂が病氣になつた。私は桂月先生の許へ移つて母堂の看護を手傳つてゐたこともあつた。その時分は四歳になつてゐた文男氏が、『頭がやぶけたア』と云ふやうなことを云つて泣いてゐた時であつた。芳文氏の往つてゐた淀橋小學校が旋風のために倒れて、生徒に半死する者があつたので、芳文氏は泣きながら裸足で走つて歸つたと云ふやうなこともあつた。

私はその比、桂月先生の世話で神田鎌倉河岸にある『女鑑』の發行所にゐたが、ちやうど神田橋から日比谷まで電車が通じた時であつたから、もの珍らしさにそれに乘りに往つたことがあつた。桂月先生はその年、久保天隨氏と三保から富士の山麓を廻つて、『駿甲の山水』と云ふ紀行文を書いてゐるが、それも名文の一つである。その旅行には二人とも口が[illegible]るので、甚

と書くて喝つたと桂月先生が話したことがあつた。

それは日露の關係が切迫してゐる時であつたが、翌年になつてとうとう戰端を開いた。私は前年の暮に病氣になつたので土佐の郷里へ歸つてゐた。桂月先生は鬼王祠の傍から柏木に移つてゐた。その柏木の借居は春日局の別莊の址だと云ふ傳說のある所で、家も大きければ庭も廣かつた。桂月先生はその庭に土俵を築いて、詩人學生を集めて角力を取つた。花の比は人を招いて庭で酒を飲んだ。櫻の盛の比に集まつたのは、坪谷水哉、巖谷小波、押川春浪の博文館の同人、及び田岡嶺雲、江見水蔭、佐佐醒雪、宮崎來城の諸氏であつた。櫻の花の咲いた比には家族同伴の知人親戚を集めたが、この際は百人ばかり集まつた。和田垣謙三博士、杉敏介氏、親戚では鹽井雨江氏、國澤新兵衛氏などが來た。夜なつて客が去つた後に、庭の前の小川の中で人聲がするので往つてみると、その日の來客の一人であつた川村清雄氏が、醉つて足を踏みはづして落ちてゐるところであつた。

その園遊會の光景は、『春の庭』と云ふ敍事文になつてゐて、田園雜興につぐの名文である。桂月先生はその年『軍國訓』、『青年訓』、『我が文章』の三冊を刊行した。その年令嬢愛子さんが生れてゐた。

十二　「閑日月」時代

三十八年になつて桂月先生は「我書」、「家庭と學生」の二冊を刊行した。その頃になつて桂月先生は「一笻一笠の旅遊を覺え」て、「身を酒陣香國の中に沒して、山水に寄食する」やうになつた。書くことになつてゐる雜誌の原稿も遲れがちになつて來た。たまに博文館に出ても夜具を引きだして寢てゐるやうなことが多かつた。東京近郊を散歩する時には、桂月先生の所謂「小羊」が隨いて往くやうなことがあつた。三十九年になつて桂月先生は博文館を退いた。退いたと云ふよりは退けられた者であつた。さうして桂月先生は博文館の桎梏から免がれることができた。事實に於て桂月先生のやうな詩人肌の人に、毎月枚數を定めて趣味のあるなしにかかはらず筆を執らすことは無理であつた。

桂月先生はその年になつて『新體書翰』を刊行し、『東京遊行記』を刊行した。二冊とも雜誌に書いたものを輯錄したものではなかつた。皆新しく書きおろしたものであつた。博文館を退いた桂月先生は、その日から一本の筆にたよらなければならなかつた。しかし、齋藤緑雨が云つたやうに筆は一本で箸は二本であつた。その翌年即ち四十年になつて私が二度目に上京した

時には、一錢のはかり木炭も買へないと云ふやうなことは珍らしくない程の生活であつた。

その時桂月先生の家は柏木から移つて西大久保の四百七十番地にゐたが、私が玄關にころがりこむ間もなく、すぐ近くの二百五番地に移つた。そこは門を入つてから玄關に往くまでの間の長い家で、左側に隣家の窓があつた。そこには初めに軍人がをり、後から吉江喬松氏が移つて來た。

私はその時ほど桂月先生の高朗な人格に接したことはなかつた。さうした貧しい中にあつても、不平を云はず、人と爭はず、悠然として詩を作り、文を練り、近郊を散策してゐた。その時分に出來た桂月先生の詩を見れば、その當時の桂月先生の心境が伺はれる。

我家有二四兒一。二男與二二女一。嬌痴未レ解レ讀。索レ食恰如レ鼠。
兒笑我情暢。兒泣我心傷。皆有二讀書癖一。且喜健而康。燕雀
不レ生レ鵬。何貴二兒不一レ賢。文章了二我生一。衣鉢何兒傳。
故人贈二佳肴一。可レ無二一杯酒一。問レ婦婦曰無。問レ有レ錢日有。
提レ瓶夜自行。深巷出二吠狗一。得レ酒心未レ足。途路呼二吟友一。
殷勤相和高。月下雙影走。春來久不レ逐。借問有レ詩否。
我有二枕頭錢一。何作二春又飲一。古祠仰二大木一。曠野臨二清流一。
人間長擾擾。天地何悠悠。心中懷二一德一。神佛豈外求。
不レ必思二富貴一。唯好二野人趣一。伴レ書行二郊外一。興來傾二村酒一。
袖中兩卷詩。寒山與二淵明一。淵明取二其高一。寒山取二其清一。

桂月先生が近郊を散策する際には、私は何時も隨從した。文章の話をしたり、古今人物の批評をしたり、俳句を作つて見せたり、疲れると野社の階段に腰をかけ、草の上に寢ころび、金があれば、掛茶屋に入つて酒を飲んだ。小遣のない時には古本屋に書物を賣つて出かけた。松本道別氏と山根勇藏氏が時折一行に加はることがあつた。學校の休みの日には、子供達も伴れて往つた。移植鏝を持つて往つて草を採つたり、しやくひ網を持つて往つて小川で鰌をしやくふたり、飛沙魚を追つかけたり、空氣銃を持つて往つて雀を打つてみたり、走りつくらをしたり、角力を取たり、それはもう皆で嬉嬉として遊び戯れた。そして歸つて來ると、私達おとなは桂月先生の傍で酒を飲んだ。

時とすると散策家一行が吃音ぞろいになることがあつた。桂月先生も、芳文氏も、文衛氏も、私も、田岡氏の子息の貞恒氏も皆吃音家であつた。その吃音家ぞろひの時には、路を訊くこともできなかつた。「もし、もし、」と云つて、畑の中にゐる人

[illegible]胃袋がすくでないので、折角起ちあがつた人も、「なんのこつた。」といふやうな顔をして腰をおろした。後れ遅つた人はさつさと行つてしまつた。一行には近眼も多かつた。ある時多摩川縁を歩いてゐて、日が暮れかけたところで路が判らなくなつた。桂月先生は人が立つてゐるから訊いてみると云つて、畑の中に向つて聲をかけた。そこには案山子が默然として立つてゐた。私は「それがしは案山子にて候桂月殿」と云つて笑つた。思へばこれも忘れられない思出の一つである。その一年間の散策記は、翌四十一年一月に刊行した『閑日月』の中に收めてある。

桂月先生はその秋、松本道別氏を伴れて日光に往つたが、その時できた「紅葉の旅」と云ふ紀行文は出色の文字で、大叔の馬を賣つた時に知つてゐた渡邊國武子が感心して呼びに來たが往かなかつた。その年は時の首相西園寺公望侯が文士を駿河臺の邸に招待した年で、桂月先生もその一人であつた。

桂月先生はその數年間の惡酒に健康を害してゐた。僅に四五年の間に紅を帶びてゐた顏色も黄ろくなり、煙草を口にしても吐きたいやうな氣がすると云つてゐた。思ふやうに筆の執れない原因の一つもそこにあつた。その桂月先生の境遇に同情してゐる友人の一人から、『信濃毎日』に主筆の口があるからと云つ

[illegible]生の返事はどうであつたか。

片田舎のうれしさは、この頃は、[illegible]候。飛び廻るといふよりは　むしろ這ひ廻り申候。未だ齢に還らず、聲もまだ確つて若若しく候。さてこの度御手紙にて、御勧誘御推薦の件、おぼしめしの程は、難有拝受仕候。然るに内から顧るに、新聞記者と申す柄でも無し。まアまア志を肆にして、江湖に放浪いたし居るべく候間、[illegible]下度、不取敢御返事申上候。荷御自愛。

松本道別へ御傳へ下されし御好意の趣、感佩に堪へず候。かばかりの重ね重ねの御好意に對し、唯一言、新聞記者といふ柄でもなしとのみ御斷り申すは、折角の御好意を無にする次第、今夜か明夜か參上してお伺ひも致し、然る後に改めて確たる御返答仕るべく候。いづれお目にかかりて申上ぐべけれど、ここに一寸小生の考を申さば、御令弟の如きは、政治科を出でられて、政治や經濟や　社會やの事情に通じ居られ、其上にも文藝の才を有せらるる事にて、立派に新聞記者、殊に主筆の資格あるものに候。小生の如きは、全く經濟た個ら

ず、政治にうとく、社會の事情にくらく、新聞記者としての一大要件を缺く。それで主筆などとは、自から顧みて餘り鳴呼がましく候。もとより狂狷愚鈍の者、常人よりも智慮が十年以上も後れ居り候。この頃書を讀むに、始めて事物が分りかけて來たやうに覺え申候。今より自から檢束し、節を折り、成るべく俗交をさけ、書物と親しみて智識を得、思想を養ひ、識見を練るつもりに候。とかく小生は臆病にして氣の弱き男、何事も消極的にして進取の氣象に乏し。先年は自から文藝評論の才なきことを自覺しながら、高山樗牛の如き奇才の後をつぎて、世に恥をさらし候ふに　今又新聞記者の資格も無き身に主筆となりて、又世に恥をさらさむこと、餘りに男子の恥辱なりと、心弱さに御辭退申す次第、何卒惡しからず御了承願上候。

二錢のはかり木炭を買ふ金のない際に、かうして自己を守つて泰然としてゐた桂月先生には、古武士の風格があると共に、そこにも大叔多賀宗義氏の感化が閃いてゐるやうに思はれた。

桂月先生はその時高利貸にも苦しめられてゐた。二口あつた借金の一つは、物を書くはずで前借した金を、仕事ができないためにその書肆から高利の金にふりかへられたものであつた。そのうちに一方の金主から執達吏が來て家財一切を差押へられて、競賣にふせられることになつたが、家財の主なる物と認められてゐた桂月先生の藏書は、朱で縱横に書入れをしてあつたり、圏をつけたり、點を打つてあつたりして金にならないので、夫人が所分してくれと云つたに係はらず貸してくれると云ふ名目でそのままになつたこともあつた。その時桂月先生の自分で揮落した軸に一圓五十錢の價格のついてゐたのを覺えてゐる。

四十年から四十一年は、桂月先生のもつとも苦しんだ年であつた。この間の著書は、『閑日月』、『新體文範』、『雜木林』、『日本文章史』、『一枚の紙』、『國文評釋』、『青年時代』、『作文法講義』『筆』『平生の文章』、『代表日本人』などであつた。私は四十年の秋から下宿に移つてゐた。

十三　雜誌『學生』時代

四十二年になつて桂月先生は、『源氏と平氏』、『鎌倉武士』の二冊の書きおろしの史傳を刊行し、關東に關係のある紀行文を集めた『關東の山水』を刊行し、『行雲流水』、『筆尖』、『月影集』三冊の文集を刊行した。そのうちで源氏と平氏及び鎌倉武士の二冊は日本橋村松町の弘學館と云ふ書店で發行した。私はその時[illegible]の書肆の編輯にゐたが、主人と衝突したので[illegible]

[illegible]るつもりで、桂月先生の宅へ相談に往つた。桂月先生はこの頃弘學館の二階へ籠つて鎌倉武士を執筆してゐた。

私は桂月先生を訪ねて往つて右の事情を話した。桂月先生は『いい年をして、俺の食客でもなからう、これへルビでもふりたまへ、金をもらつてやるから、』と云つてくれた。私は桂月先生の調に從つて、神田の下宿から通ふてルビを振つたが、その翌年は大逆事件が突發して秋水氏は刑死し、後から食客に入つてゐた坂本清馬は無期になつて秋田の獄にゐたが、とうとう獄死してしまつた。恐ろしかつた私の運命は、桂月先生によつて活路に向けられたのであつた。

鎌倉武士の脱稿したのは、四十二年十月であつた。その草稿は今私の手許にある。私はその時から桂月先生の助手として少年に讀ます漢籍の書きのばしをやつた。四十三年になつて『新譯日本外史』が刊行になつた。桂月先生は弘學館のために『四十七士』を書いて刊行した。四十七士は錦町三丁目の私の下宿へも來て書いた。その時蕗の薹をやほ屋から買つて來て、これを醤油で煮ながら罐詰の空罐に入れた。桂月先生は胃がわるかつた。

その年になつて桂月先生の先輩で『東京日日』の社長をして[illegible]よ『學生』を寄稿することとなつた。

桂月先生は四十二年に雜司ケ谷町の百十四番地に移つてゐたが、翌年になつて目下の住居となつてゐる[illegible]井田へ移つた。鹽井雨江先生は出雲から歸つて女子大學にゐたが、その年奈良の女子高等師範學校へ往つたので、[illegible]桂月先生に[illegible]したものであつた。桂月先生は百十四番地にゐる時、久保天隨、結城蓄堂、遲塚麗水の三氏と但馬の城崎溫泉に遊んで、『城崎溫泉の七日』がある。烏谷部春汀氏と初めて十和田湖に遊んだのもその時分であつた。『蔦川の左岸をよること半里、通天橋をわたりてゆくこと又半里にして、蔦溫泉にいたる。午後八時也。春汀兄弟は、既にあらず。江渡省三氏ひとり留まりて、われを待てり。法奥澤村の村長小笠原耕一氏も、わざわざ來りて我を待ち、酒肴を饗せらる。この溫泉は、氏と小笠原岡吉氏との經營する所に係る。この頃、家を普請して、三本木より人力車を通ずるやうにせり。泉質は鹽類泉也。』これがとうとう終焉の地となつた蔦溫泉に對する桂月先生の最初の印象であつた。そして、その第一回の時に逢つた小笠原耕一氏にみとられて長逝したのも何かの因縁のやうな氣がする。

『新譯文章軌範』『桂月[illegible]』、『筆のすさび』、『新譯日本政記』、

『文章三百題』、『新譯論語』、『箱根山』、『新處世訓』、『すゞりの水』、『名文解剖』、『人の運』などが四十三年比から大正二年比にかけて刊行になつた。

大正三年になつて『伯爵後藤象二郎』が刊行になつた。後藤傳は千頭淸臣氏の手を經て岩崎小彌太氏から依賴せられたものであつた。桂月先生は明治四十三年比からその材料を持つて箱根の湯本にある岩崎家の別邸に往つてゐたから、明治天皇崩御の際、湯本の人々と箱根神社に御惱平癒の祈願に往つた。『箱根神社祈願の記』は桂月先生でなければ書けないと思はれる所のある文章である。桂月先生はその箱根では後藤傳が一枚も書けなかつたので、岩崎家の督促を避けて伊豆の大島へ往つたり、伊東へ往つたりしたが、そこでも書けないので、大正二年の夏から品川の岩崎邸に籠つて漸くにして脱稿した。その大正二年の早春には雨江先生が奈良の客舍に胃癌で倒れた。奈良に驅けつけた桂月先生は、二月八日、若草山を燒く夜、雨江先生の遺骨を擁して東京へ歸つた。雨江先生は四十五歲であつた。桂月先生と第一高等中學校の本科一年で一緖であつた。雨江先生は但馬の豐岡の生れで、健男、若菜と云ふ男女の小供があつた。未亡人は菊代夫人。

その時も桂月先生は酒を病んでゐた。私と松本道別氏は病氣のことは知らないから、二人で、『すこし、涼しい風に吹かれて來ましよう。』と云つて銚子へ往つたが、その日、桂月先生から後藤傳を書いて金が入つたからと云つて、富士見樓へ招待してくれた招待狀が屆いてゐたが、銚子方面に二晩ゐたのでその席に連ることができなかつた。

後藤傳のできた年には『日本男兒論』、『日本人の弓矢』、『桂月文選』。その翌年には『修養の礎』、『男の中の男』、『人間と自然』、『修養二訓』。その翌年には『婦人訓話』、『冷汗記』、『名物男』、『杖の跡』、『一喝錄』、『傑人佳人』『百人一首新解』を刊行した。その大正五年の八月には、私は金子幸吉氏と二人で長柄川の鵜飼に往つてた桂月先生を須走口の大米谷旅館で待ちうけて、翌日富士に登り、その夜は八合目の石室に一泊して日出を見た。桂月先生は富士に登ること五六回、中道めぐり、裾野めぐり、富士に關する紀行文が多く、一度は須走へ別莊を建てると云つてゐたこともあつたが、そのままになつてしまつた。桂月先生はその前後、濱名湖畔に滯在して筆を執つてゐたことがあつて、正月の年始狀に蒲團から耳の長い男が頭を出して旭を見てゐる繪を書き、それに『蒲團から頭だけだす初日かな』と云ふ句を書いてあつた。その頭だけだしてゐる男の頭から頸筋の具合が如何にも桂月先生に似てゐたことを覺えてゐる。

[illegible]『[illegible]』、『作文教範』を刊行した。その大正六年の八月には、桂月先生は白河の奥の甲子温泉に往つてゐた。その時桂月先生から來た葉書の端に『下界より酒樽のせて今日や來る明日やと馬の待たれぬるかな』と云ふ狂歌が書いてあつた。私はその月の十七日になつて、急に桂月先生に逢ふ用事ができたので甲子温泉へ出かけて往つて、翌日打ち連れて山を降り、南湖に往つて二三泊した。

大正七年には、桂月先生は『七英八傑』、『雅俗文』、『新作文』、『泉聲録』、『小生の手紙』を刊行したが、この年になつて雑誌『學生』は廃刊になつた。その大正七年であつたか、正月早早私は桂月先生と宮島から耶馬溪に往き、別府へ廻つて歸つて來た。その時も桂月先生は酒で健康を害してゐた。

十四　『鐵窓三十日』

雑誌『學生』が廢刊になると桂月先生は心がのんびりした。その時満州にゐた川鶴氏が、土佐へ墓参に往くついでに廻つて來た。『月の名所は桂濱といへる郷里のうたただ記憶に存するのみにて、幼少の時より他郷に流寓して、未だ郷にかへりたることなければ、まことはその桂濱の月を見しことなければ、』と『月[illegible]』[illegible]京して以來、一度も土佐へ歸つたことがなかつた[illegible]、妻[illegible]鰤千代氏も土佐にゐて兄弟二人で墓参もできるといふのであつたので、この機會を利用して二十八年ぶりに故郷の土を踏むことになつたが、それには夫人も同伴するし、私にも是非往けと云ふので、私も同行することにした。

桂月先生はその時も酒のために節をすこし損じてゐた。それは五月頃であつた。一行は神戸まで汽車で往つて、その夜の十二時比に兵庫を出帆する瀬戸内海航路の汽船で徳島へ渡つたが、船室は乘客がたて籠めてゐて窮屈いので、私達は甲板へ蓆を敷かして坐つてゐた。桂月先生はその蓆へ無理に入つて來た若い男をつかまへて、兩手で鳥の羽たたきをするやうに膝頭をぱたぱたやりながら所謂説法をやつた。朝になつて水夫が甲板を洗ひだすと洋杖を片手にして叱咤した。

その日は徳島市から汽車に乘つて池田の終點驛に降り、人力車で吉野川の渡場を渡つて内地に往き、車をそこへ待たして置いて雲邊寺山へ登つた。雲邊寺山は長曾我部元親が四國を統一した時に馬を立てた寺であつた。一行は寺で一泊することにして、汚い額椽のやうな四國遍路の入つてゐた五右衛門風呂で汗を流したが、その夜も桂月先生は夫人に説法をはじめて夫人を

怒らしてゐるうちに、傍に置いてあつた火鉢の中の鐵瓶に手が當つた。鐵瓶はひつくりかへつて濛々とたちのぼつた灰のために洋燈の火も見えなかつた。桂月先生もそれには閉口して說法をやめた。

翌日は雄大な日本全國にその比を見ない吉野川の溪谷に沿じた國道を往つてその途中にある大步危小步危の奇勝を探つた。『水の豐富なること耶馬溪などの比に非ず。この一條の吉野川を除して、左右は高峯相連なる。峯には樹木茂れり。木曾と相似て、木曾よりも更に幽也。鹽原とも似て、鹽原よりも更に大也。川に沿うて街道通ぜるが、部落は山の半腹以上に在り。狹路も社も林に埋められて、その下端に鳥居あり、人は雲表を往來す。これ木曾にもなく、耶馬溪にもなし、われ吉野川の上流に於て、始めて南畫的實景を見る』とは桂月先生が『三十八年ぶりの故鄕』に云ふところである。一行はそれから大田口の特別保護建造物となつてゐる藥師堂を見て、その夜は吉野川の支流に沿ふた杉に一泊した。杉の北一里の吉野川の本流に沿ふた川口に小學校敎師をしてゐた私は、その邊に知人が多かつた。そこには天王杉と云ふ女夫杉になつた杉の大木があつた。翌朝一行はその杉のある所へ往つて、大きな方の杉を手をつなぎあつて測つてみた。それは十一抱あつた。

翌日一行はすぐに高知に向はずに、杉から三里の吉野川の本流に沿うた本山へ往つて、野中兼山の母の墓のある歸全山と云ふのを步いた。そして本山から十三里の道を往つて、その夜の十二時比高知市の人となつた。

桂月先生はその翌日から祖先の墓に詣で、北門筋にあつた舊宅の跡を尋ねた。前に築地があつて裏に竹藪のあつた家は、家の容も變り、築地もなかつた。桂月先生はそれから桂濱の月を觀、長濱の雪蹊寺に往き、佐川に迎へられ、伊野に寄り、橫波三里に眞珠養殖場を探り、浦戶港內でまはしうちをやつた。まはしうちとは撒網を打つ舟が十艘も二十艘も集つて、魚を圍むやうにして順順に網を打つのであつた。魚はおもに鯔であつた。そのまはしうちは最近まで土佐獨特のもののやうに思つてゐたが、支那に遊んで蘇州から杭州へ民船を買つて出かけて往つた時、太湖緣の川の中でそのまはしうちをやつてゐるのを見て支那傳來のものだと云ふことを知つた。私達は歌妓の乘り込んだ屋形舟の中でそれを見た。

長濱の雪蹊寺へ往つた日は、桂月先生は私の家へも寄つてくれた。『一日伴はれて其の家に到る。父なる人、路に迎にて、唯ほろほろと淚をおとす。母なる人酒食を調へて待つ。土佐名物の鰹のたたき、既に座に陳ぜられたり』と桂月先生が書いてく

[illegible]へ往つた時には[illegible]にあきれた。[illegible]の巣から[illegible]舟に乘つて、『夏の月』と云ふ畫讚を作りながら往つた。桂月先生は『[illegible]きうしろ姿や夏の月』と云ふ小栗風葉が熱海の金色夜叉の碑に書いた『宮に似たうしろ姿や春の月』と云ふ句と同巧異曲の句を得て最高點になつた。鼓打と云ふ俳號を持つてゐる歌妓は『夏の月あるき勞れて戻りけり』と云ふ句を得、私は『夏の月枝豆の味淡はかりき』と云ふ句を得た。

それは土佐名物の楊梅が熟し、土佐名物の松魚のたたきが膳に登る季節であつた。桂月先生は彼方此方で講演もやつた。私は貧厨を控へてゐて長くは遊んでゐられないので、一人でさきに歸つて來たが、桂月先生は四十日間、土佐に滯在して朝から晩まで、晩から朝まで、湯にも入らず、ろくろく寢もせずに強い土佐酒を飲んでゐたので、東京に歸る日は、棧橋の上に土下座をして見送つてくれた人人に挨拶した。汽車の中では外人に指をさして、『あの毛唐の眼がいかん』と云ふやうなことを云ひ云ひ歸つて來た。私は桂月先生一行の打つてくれた電報によつて雜司ケ谷の宅へ往つてみた。瘦せて骨ばかりになつたやうな桂月先生は、縁側で瀬戸びきの湯飲みで酒を飲んでてゐたが、いきなり起つて來て『よう來た、よう來た。』と云つた。

桂月先生はすつかり體を壞してゐた。瀧田樗陰氏の許へ朝早

[illegible]買ひ、[illegible]氏の宅へ往つたところで、[illegible]氏は[illegible]ゐたので面會しなかつた。桂月先生は怒つて[illegible]でなぐりつけ、その聲に『[illegible]川先生、私は明治十[illegible]年の頃、明治義塾にて高恩に浴したる者に候。今日訪問せしに、[illegible]人、私を[illegible]待す。故に大に憤る。』と落書したが、これは[illegible]川家の塀でなしに隣家の江森と云ふ家の塀であつた。大町家の鷄小屋に隣つてゐる家に不謹身な若い細君がゐた。桂月先生は二本の小さな竹の先に眼の繪を描いた半紙をつけて鷄小屋の節穴から隣家の庭へさしだした。『眼があるぞ』と云ふ意味らしかつた。少年の寄宿舍の傍にお師匠さんがゐた。桂月先生は『少年のためにならないから立ちのけ。』と云ふやうな意味の文句を書いて、小石に包んで垣の外から投げ込んだところで、床の瓶に當つて碎けた。さういふ常規を逸した場合でも桂月先生のやつたことは高い道徳性を帶びたものであつた。お師匠さんの家へは後であやまりに往つて、その紙片を返してもらはふとすると、『何か書いて戴きたいと思つてきしたところですから、あれを紀念に戴きます。』と云つて返してくれなかつた。『富士をこしらへるのだ。』と云ふので、私達は云ふままに庭の土を堀りかへして丘をこしらへた。桂月先生は裸體で屋根の上にあがつてそ

の丘の上に飛びおりた。』あの木の枝ぶりがわるい、あれを切れ、『桂月先生は斜に食指を見せて睨むやうにしてさしづした。桂月先生は又、『おい桃葉の船大工、』と云つたり、『道別の禿げ頭』と云つたりした。私達は苦笑しながら云ふままに土を掘り木の枝を切つた。

桂月先生の病氣は極度に惡しくなかつたが、自から酒を中止することが出來なかつた。家人が酒を出さずにゐると酒屋へ往つて、小僧を前棒にして酒樽を持つて來た。普通の手段では桂月先生から酒を奪ふことはできなかつた。桂月先生の所謂『鐵窓の三十日』の日を出現させなくてはならなかつた。『醉ひくたびれて書齋に泥臥せしに、東川楊舟先頭となり、松本道別、弘田東行、田中桃葉等の面々之に次ぎ、顏も知らぬ白服の人さへ四五人加はりて、どやどやと亂入し、白服の人の手にて余の手足を捉へて、余を胴上にす。余其何の故なるを知らず。且つ驚き、且つ怒りたるものの、孤身隻手、到底敵すべからさるを知り、唯足に餘裕あるまま、白服の一人を蹴たるだけにて、復抵抗せず。楊舟口を開いて曰く、貴方はアルコール中毒なるを以て、斷然之を治するの處置を取らむとす。これ親戚一同熟議の結果に出づ。余曰く、發起人は汝か、楊舟默して答へず。白服の人、素早く余の左腕に注射す。余曰く、いくらでも注射せよ。答へて曰く、一回にて足れり。さらば余を卸せと云へば、一疊の上におろさる。余顏を少し斜にして疊に俯し、兩手を伸ばして背後に交叉す。なほ余の手足を押ふるものあり。余曰く、一決して抵抗せず。余を押へつくるな。白服の手なほ離れず。男子の一言と云へど、なほ離れず。先生が斯く云へば、大丈夫なりと桃葉の云ふに及んで、始めて離る。桃葉さすがに余を知るとうれしく思ひぬ。道別、汝も楊舟と同意が、絶交するぞと云へば、道別辯を勵まして絶交せらるゝとも厭はず、後でわかる事なりといふ。桃葉、汝も同意かと云へば、涙を含める聲にて、仕方なしと云ふ。余復た言はず。』と云ふ演劇のやうな一齣があつて、桂月先生は第一高等中學校の豫科に一緒にゐた石川博士の病院に入院してゐたが、一箇月にして退院して、東北に清遊し、又富士に登山して落雷に遭遇した。そして、その秋になつて朝鮮から滿洲に遊び、年を越えて歸つて來た。それは滿鐵の理事長をしてゐた國澤新兵衛氏に慫慂せられたがためであつた。その桂月先生はその紀行文を纏めて『滿鮮遊記』を刊行した。冊も刊行してゐた。桂月先生はもう斷酒してゐた。」

十五　筆行脚

[illegible]雲へ往つた。『土佐は余の故郷也。東京は余の第二の故郷也。出雲は余の第三の故郷也。二十年ぶりにて、雲州に遊びしに、當年の父老なほ多く存し、腕白盛りの數へ子、今や男盛りの年歯となりて活動す。珍らしや先生と、あちらにても、こちらにても、優待の限りを盡されし』たりと『二十年ぶりの雲州』の中に書いてある。私の知人では高木八太郎、安田恭平、岡山茂右衛門の三人はその當時の生徒であるが、高木氏は今に桂月門下に終始してゐて、桂月先生が臨終の際にも、『田中はまだおいらを知らない所があるが、高木は眞面目である』と云はれた程信用を得てゐた。

出雲では安田恭平氏と井原錄之助氏とが主となつて桂月先生のために揮毫會を斡旋した。桂月先生はその時から揮毫會で旅費を辨ずることを思ひついた。

出雲の滯在は一箇月ばかりであつた。その年岡澤新兵衛氏が土佐から代議士に出ることになり、高岡郡を地盤にして立候補を宣したので、東京方面からも知人が續續と應援に往つた。桂月先生も親戚として座視することができないので、土佐に向つて出發した。私も隨行して土佐に入り、高岡郡須崎を中心にして政戰を見てゐた。須崎の『吉村』と云ふ旅館には、岡澤新兵衛氏も

[illegible]を呼んで有權者に好感を與へた。

開票の結果は、岡澤氏が當選して片岡直温氏が落選した。私と桂月先生は、その時揮毫で旅費を作つて土佐を旅行することにしたが、仕事のぐあひで桂月先生は一度東京へ引返した。私は後に殘つて揮毫會の準備をしてゐるうちに、案内が揃ふやうになつたので、桂月先生を迎ひかたがた東京へ歸り、改めて土佐へ出向ひて東西を旅行した。東は室戸岬から甲浦に往き、西は蹉跎岬から龍[illegible]、宿毛に往つた。

その時桂月先生は禁酒したと云つて、はじめのうちは杯を手にしなかつたが、幡多郡中村町に往つた際、夕飯の後で『今晩は遊びに往け』と云ふので、高知から伴れて往つてた近澤と云ふ青年を伴れて外出し、彼方此方と歩いたが私がすすまないので、近澤を殘して旅館へ歸つてみると、禁酒のはずの桂月先生の枕頭に銚子が一本置いてあつた。『先生、へんですね、』と云ふと、桂月先生は、『齒が浮くと、酒でうがひをすると癒るよ、』と云つて、向ふむけに寢がへりした。私はおかしくつてたまらなかつた。安藝郡へ往つて室戸岬に遊んだ時にも、桂月先生

が不意に見えなくなつたので、一行が待つてゐると傍の茶店から出て來て、『酒をくくなと齒の痛いがなほるよ、』と云つた笑つた。

博多の歸りに須崎に寄つて揮毫會をしてゐると、隣村の戸波と云ふ所から講演を頼みに來た。そこで戸波へ往つて講演してゐると、高岡町から講演を頼みに來たので、桂月先生は『君が先へ往つて準備をするがいい、僕は虚空藏へあがつて後から往く、』と云ふので私は近澤を伴れて三里位ある高岡町へ往つた。桂月先生はその日、戸波の青年四五人とそこの虚空藏山と云ふのへ登つた。青年達の水筒の中には燒酎が入つてゐた。桂月先生はその燒酎を飲み、その夜は戸波の旅館に徹宵して酒を飲んだ。

桂月先生の酒はそれから復た始まつた。村から村へ往く時には、五人も六人も随從者ができた。揮毫で得た數千圓の金は一方から散じ盡して、二人で東京へ着いた時に桂月先生の懷に五圓札一枚あつた。『先生そいつをください、家には小供の菓子代もありません、』と云つて、私はその五圓をもらつて家へ歸つたが、これも忘れられぬ思出の一つである。

十六　晩年の桂月先生

大正十年七月、桂月先生は北海道に旅行脚をしたが、その歸りに十一月になつて蔦温泉に寄つた。桂月先生が本年の三月に本籍を移した青森縣北上郡法奥澤村の蔦であつた。鳥谷部春汀氏に導かれて十和田湖畔に遊んでから十六年ぶりであつた。平福百穂氏もその時の一行であつた。明治四十二三年比、桂月先生や和田垣博士達と箱根に往つた時にも、平福氏が加はつてゐて、私はその平福氏から桂月先生と和田垣博士の似顏を雜記帖の中へ書いてもらつて今に珍重してゐる。

桂月先生はその時から蔦を第四の故郷にすることとになつた。その翌年則ち大正十一年には『桂月全集』十二卷を刊行することとなつた。全集の刊行は私の發議であつたが、最初は桂月先生が『生前に全集を出すはいけない、』と云つて承諾しなかつたが、やつと刊行することになつた。その春桂月先生は酒のために復た健康を害して、仙台の旅館の襖を塗抹し、東京に歸つては、私のうちへはたきを小便に浸して持ち込んで來たりしたが、斷酒數日にして癒え、雪の富士に登山してから蔦温泉へ往つた。後に私の家へ酒の一升罎を持つて來られて、家内に『奥さん、この間のお侘びに來ました、』と云つて笑つた。桂月先生のすることは何所までも凡俗のできないところであつた。

その時蔦へは桂月全集の裝釘を依頼した小杉未醒氏と同行し

た。[illegible]の入口には[illegible]の桂の老木が立つた。[illegible]めて村の木の如何なる人であるかを知ると共に、[illegible]の上包みに書いた村の翁の誤つてゐることを知つた。その小杉氏は温泉旅館に依頼せられて薬師如来の像を頌んで、新に建立した薬師堂に收めた。旅館では薬師堂の餘材を用ゐて、桂月先生の庵室を作ることになつた。「蔦の薬師堂の餘材をやるから庵を結べと云ふ宿の主人の好意に甘えて、蔦沼池の側に鍋塩を携へ可申候。餘材庵と先づ命名いたし候。老齢旦夕を図られず、地獄に墮つるかも知れず候ふが、先づ極樂に往生するものと獨斷安心して、――極樂に越ゆる峠のひと休み蔦の出湯に身をば清めて――供御一笑申候」とは、桂月先生が飯坂岡收氏に送つた手簡の中にある。

十二年の大震災の際は、桂月先生は京坂地方の筆行脚に出かけ、一度歸京して改めて和歌山市に行き、同地の公會堂で講演をしてゐて大地震の微震を感じたのであつた。私はその年の四月から支那に往つてゐて、七月になつて歸り、桂月先生に逢つた。この時は桂月先生が大坂の筆行脚から歸つてゐる時であつた。支那に出かける前には、桂月先生と一日、日本中學へ往き、歸りに飯田河岸の旗亭に登つて、興に乘じて二日間流連したので金に窮し、桂月先生の手簡を持つて郷里に行つたことがあつた。[illegible]

桂月先生は[illegible]、[illegible]記を書くために蔦へ往つて滞在しよう、その時[illegible]生に随行して往つた。こののんだくれの酒人には桂月先生も[illegible]はらされた。「花外はまだ一本を飲み終らざる間に、余は二本を平げ、さつさと引上げて臥る。花外も一本にて止めて説けば無理なるが、三本目には管を卷き出し、三本飲み盡せば、ぐでんぐでんになりて、足もたたず、女中に手を引かれて、漸く寢に就く。余往往一睡して覺め、便所に行く途中にて、ぐでんぐでんの花外に逢ふ。花外は是より旅宿に遊ばむとし、余は[illegible]して、余を呵する也」と『蔦温泉籠城記』に云つてゐるが、しかし桂月先生は何時までも花外を捨てなかつた。

杉浦先生傳記編纂會の連中も酒徒二人を同宿さしておいては安心ができなかつたであらう、十一月の下旬には池田長吉氏が監視かたがた材料の一部を持つて雪の中を登つて來た。

『池田氏は陸軍教授にして、(杉浦)先生の日本中學校の詩吟の教師也。馬の屁の如きオルガンに合せて、蛙鳴の如き唱歌をうたひたりとて、何ぞ日本男兒の志氣を養ふに足らむや。日本中學校に詩吟の課あるは、(杉浦)先生の熱心の然らしむる也。その詩吟の師たる池田氏は、一代の快男子也。背[illegible]、吟詠斷續に

して沈痛、高山峙ち、大河流る。』と桂月先生は云つてゐる。五月十六日の夜、池田氏は桂月先生の顔前で涙を流しながら詩吟をやつた。

十二月の末になつて猪狩史山氏が傳記を受け取りに來た。桂月先生は温袍にねんねこを著、頭巾を被つて、花外を伴れて山を降つて迎へた。史山氏は蔦に滯在すること十日、大正十三年の元旦になつて桂月先生の筆が終つたので、その原稿を持つて山を降つた。桂月先生はこれを燒山まで送つて別れた。

私はその年の二月から二ケ月ばかり朝鮮から滿洲、山東の一角を歩いてゐて歸つたところで、五月になつて土佐の故郷で老父を失つた。すると桂月先生から弔問の手簡に添へて莫大の香典を送つて來てくれた。桂月先生はまだ蔦にゐた。私はそんなことで彼方此方してゐたので、十月まで桂月先生に逢ふことができなかつた。十月比、澗川樹陰」同作で逢つた時には、扁額のことを思ひだして絹を書いてもらつた。それは二人の旅人が火を焚いて野宿してゐるところで、その一人の男は彼已氏に髣髴としてゐた。それには陸奥姫森山作として、『吟杖踏ニ堆雲一。深山欲レ訪レ仙。偶來巖石上。焚レ火抱レ雲眠。』の五言絶句を書いてあつた。

その次に私の逢つたのは十二月十三日であつた。桂月先生はその夜、傳通院前の西川で開かれた杉浦重剛翁の追悼會に往くといふので、一緒に高等師範前まで歩いて來たが、これが、桂月先生の音容に接する最後となつた。その時桂月先生から『君も一緒に往かないか』と云はれたが、竹村眞澄氏と一緒であつたから往かなかつた。私は何故あの時同行しなかつたらうと思つて残念でたまらない。

蔦で越年した桂月先生は、四月二十七日の夜、火閣の中に寢てゐて火傷をした『一醉陶然、床を枕に火閣にもぐり込みしに眠り申候處、衣服に火付き、火閣の柱少しもえ、兩脚に火傷して、目がさめ申候。右脚は微也。左脚は膝頭より股へかけて長さ七八寸、幅二三寸の間、一分ぐらいの厚さにて皮が剝がれ申候。左脚を脇にふくれ、凡そ三週間は疼痛と不眠とを忍んで、空しく仰臥いたし候。』とは猪狩史山氏に報じたところである。

桂月先生は四月に東京へ歸つて子息達の結婚式をあげることになつてゐたが、とうとうあげることができなかつた。私は五月三十日、父の一年祭をやることにして、桂月先生が歸つてゐるならと思つて、その朝雜司ケ谷へ往つてみたが、歸つてゐなかつた。歸らないのも無理はなかつた。桂月先生は胃に異狀があつて、東京へ歸る日を延ばして、うつらうつらとしてゐるところであつた。そして、六月十日午前十一時を以て、五十七

[illegible]一冊として上梓したのであつた。

桂月先生はこの最後の旅の文稿に[illegible]を訂正補修した。桂月先生の臨終の前後のことは『桂月先生終焉記』の中に略叙してあるから茲には避けることにする。

私が最後に桂月先生の手簡に接したのは『十五より酒のみ習ひて』と云ふ酒に關する隨筆集を刊行して蔦へ送つた時であつた。

私は桂月先生の人となりは、ある時は頼山陽の如く、ある時は貝原益軒の如く、ある時は陶淵明の如く、ある時は西行の如く、ある時は芭蕉の如く、ある時は本居宣長の如く、ある時は山鹿素行の如く、ある時は蘇東坡の如く、ある時は李白の如く、ある時は寒山の如く、ある時は拾得の如き人であつたと云ひたい。そして、桂月先生の文章としては、叙事文が第一、紀行文が第二、書簡文第三、修養物第四、史傳は寧ろ不得意で、人を評して正鵠を得てゐないものが多いやうに思はれる。

詩歌のうちでは、漢詩は桂月先生でないとできない作品があるが、和歌も俳句もあまり旨いものはない。しかし、これはまだ私がこれを玩味する能力が足りないからもか判らない。

桂月先生の遺骨は、八月八日午后六時の汽車で蔦温泉に奉送して、十日午前十一時に同地に埋葬したのであつた。法學博士市村瓚次郎、[illegible]、[illegible]、[illegible]、[illegible]、[illegible]、[illegible]、[illegible]、[illegible]、[illegible]山八郎、[illegible]の[illegible]参列した。

亡き父を哭するの辭

遺兒諸氏

父を懷ふ

大町芳文（長男）

少い紙數の中に父の思ひ出を、思出ひす儘に順序もなく書き列ねた。此の蕪雜の一文で、父の一斑を傳へ得るならば滿足である。

夏が、また來た。登山の時が、來た。併し、父は、夏を前にして死んで了つた。父には、まだ、登るべき山があつた。探るべき谷が、殘つて居た。晩年殆ど其全力を盡して、非常に勇むだ日本高山巡禮も、挫折して了つた。看病に行つた母に、病氣するには好い時候だと、暢氣さうに言つたが、之れからが、父の天地であつた。死の病床を訪ねる風は、暖かつた。窓外の綠も、一日一日と濃くなつてゆく頃であつた。ぢつと半年、雪に埋れ乍ら、山へ、山へ、と勇むで居た父が、其の夏を前にして、病むだ時の思ひは、如何であつたらう。去年は、甲斐の山で天氣に惠まれたが、一昨年は、雨に惱まされたと聞いた。今年は、あの甲斐の山々は晴れて居るであらうか。

父は種々の仕事を持つて、去年の春に、東京を立つて、好きな旅で冬籠りを始めた。私は秋の初めからずつと、關西に旅をして居たので、父が東京を立つて行くのを見送ることが出來なかつた。併し、私が東京を立つ時父は、態々、東京驛迄送つて來て呉れた。これは珍しい事であつて私はその情けを感謝したが驛頭の別れは慌しかつた。危篤の電報を手にして、私達が東京を立つ頃は、父は、すでに、此の世の人では無かつた。一年

[illegible]に、私に[illegible]、[illegible]の、東京驛の別れは、生前、[illegible]て死別であつた。父の[illegible]見おさめであつた。三月の末には歸る、四月にもならば、五月の中旬には必らずと書き寄こした父は、歸つて來た。併し、ものいはぬ、變り果てた、父であつた。

父の一生は痩我慢の連續であつた。中でも醫者にかゝるのが大嫌ひであつた。氣一つで身體を左右した。同時に心持をも支配した。今年の冬は大分身體が惡く、死ぬ一ト月程前から米の飯が嫌になつて、蕎麥がきばかりを喰べてゐた位であつたが心配させまいと云ふ慈悲の心からであつたらう、東京には何時も丈夫だから安心しろと言つて來た。今度もいつもの樣に痩我慢で、何くそと思つたのであらう。若い時には、それも叶つた。併し、五十七年酷使し續けた身體には、遂に大爆發すべき時が來たのであつた。胃から、血が、止め度無く出た。

臨終に驅けつけた醫者が、之迄にこんな事があつたかと尋ねた時、父は、大正十二年に一度血を吐いた事があると言つた。私達には、青天の霹靂である。それは、父にきいても、笑つて了つてあと十年は大丈夫だと、言つたらう。何月頃か、何處でか、今は知る由もない。併し、私達肉身の中の一人でもそれに氣づいたならば、と思ふと息がつまり胸が裂けさうな氣がする。[illegible]思に、自[illegible]つた。血を吐いてから、父は酒を、[illegible]したのであらうか。

去年の夏、佐渡と甲越旅行の前後數日家に留まつた。其の時の父は、浮世から、又、死生から、超脫しきつた人に見えた。か、何處となく、身體に力が無かつた。腰の曲りが、眼についた。赤坊にでもなつた樣に、些細な事にも、非常に喜んだ。又、彼は、山登りで危險を冒すのだから、用心はするが、どんな事が起るかも知れぬと、いつも言はぬ事を言つた。併し、其の直ぐ後で、十年は、まだ、大丈夫だよ、安心して居るがよいと付け加えた。晩酌の後、盆栽の位置をなほしたりして庭を眺めて居た淋しげな後姿が、今でも、目に浮ぶ。今度の病も此の頃から、父の身體に巢くつてゐたのであらう。お父樣も、隨分、年をとつたものだと、其の時、涙がにじんだ。

蔦での事だ。去年の晩秋、醉つて炬燵に眠つた。どうしたはづみか、布團に火がつき、着にも移つた。其の上、父の大腿部を、前面殆ど燒いた。それでも、醫者にかゝらずに了つた。亡き父を己が父の樣に、よく面倒をみて呉れる、下の村の小笠原松次郎氏へも、告げなかつた。勿論、東京の誰れへも知らせなかつた。母が行つて、始めて私共に解つた。その時は、月餘經

たきりで居た父も、漸く杖をたよりに、宿の庭位は歩ける時であつた。その故でもあらうか。今年の冬籠りには、其のあやまちをした自分の室には、炭一つ置かなかつた。湯から出れば、手拭が直ぐ氷る様な北の果ての冬の夜を、どうして過した事であらう。雪に埋れつくした山中、枯林の月を眺めて、夜の眠られぬ儘の父は、何を考へて居たであらう。

血を吐いたのは、夜中であつた。一度二度は便所へ行つた。もう、身體からは、生命の火が消えかけた。父は、死を思つた。武士が、便所で倒れるのは面目無いと、三度四度は室から吐いた。それでも、朝まで、主婦の來る迄默つて、靜かに寝て居た。主婦が、驚いて、直ぐにも醫者を呼ばうと言ふのを、二三日様子を見やうなどと、また、痩我慢を張つて居た。四日といふもの、苦しいとも言はなかつた。悲しいとも言はなかつた。平然と漢詩に讀み耽つた。今はのきはまで、いつもの様に、元氣よく、話をした。

父は、散歩が好であつた。東京の近郊がこんなに開けなかつた頃であつた。夕方には、子供を連れて、畑を野を、逍遥した。父の手には、いつも杖があつた。夕闇せまる原に、父の詩吟の聲が低く漂つた。思ひ切り大きい聲を出せなどと父の命のまゝに、森の木立に興じた事もあつた。

日曜日を待つ様にしては、武藏野を歩きまはつた時があつた。代々木の原であつた。軍隊の掘つた塹壕があつて、人がかくれる位に深く幅も相當に廣かつた。父は、子供達を順々に跳ばした。私達は、うまく跳んだ。最後に父が跳んだ。どうした事か、跳び損ねて落ちた。一同揃つて目的地の玉川まで行つて、歸つて門に入る頃、父の、跛に氣がついた。落ちた時跳ぶ時で、向ふの壁に、爪先を、打ちつけたのだ。痛くても痛くない、苦しくても苦しくない、感情は一切秘すといふ父の氣象がこんな時にも現はれた。

風雨のかなり強い冬の日であつた。父と私等は、湯河原を出て、土肥の大杉を見に行つた。濡れた熊笹を分けねばならなかつた。足は、幾度か石に、躓いた。宿につく頃には　肩まで雨が滲み通した。これは、父の痩我慢の教育の一例であつた。

父は、海よりも、山が好きであつた。但し、幼い私等は海の方が面白かつた。又、同時に、身體の餘り強く無い子供等には、海が非常に効能があつた。夏休みには、必ず、父は、私等を海にやつて呉れた。父も、一緒になつて、波とよく遊んだ。北條の事であつた。父は、獨りで、鷹の島に眠つて來た。翌晩は、私等に、其處へ眠れと言ふのである。遊客も歸り盡し、茶屋番も歸つて了つた離れ島で、私達は、一夜眠らねばならなか

つた。蚤が出たと、[illegible]父の[illegible]つ一
つであつた。

父と酒とは、決して離しては思ひ出せない。酒を飲むと、父の面目がはつきり表はれて來る。ひどい吃音の故もあつたらう。又、始終考へて居なければならなかつた故もあらう。室に居る時は、いつも默つて横になつて居た。字を書く外に、横になつて讀書するか眠つて居た。用以外は、ものを言はなかつた。來客との對談を隣室で聞いて居ると、聞く方が苦くなる位の吃音であつた。併し、思ふ事丈けは、つかへ乍らに言つた、刻煙草は吸はなかつたが、煙草の欲しい時には、きつと「まきだばこ」をと言つた。之れは、吃音者通有の「た」を發言し難いので、「まき」を冠したのだ。併し、大抵の場合は、父の言ひきらない中にそれを察して、私達は、その用を便じた。父も、よく、手でものを告げた。

こんな吃音であつたが、一度杯を口にすると、大分口が輕くなつて來た。朝は、大抵、酒は呑まなかつた。が、身體の調子が惡いか、宿醉の時には必ず呑むだ。夜は、殆ど呑むだ。一合位入るコップを一息に飲み乾した。一杯で止めた事もあつたが、二杯になる事もあつた。そして、性急に、さく／＼と飯を掻き込んだ。晩は、どんな事があらうと、必ず杯を傾けた。酔が少し出てくると、[illegible]

二三本指を向けて、一とわたりお辭儀をすると、[illegible]た時には、皆を順番に、又起める。[illegible]動が始る。親子の弟の相撲が始る。柱を相手にする。[illegible]に、鴨居にぶら下る。家で一寸の座敷も、障子骨が折れる。疊の緣が裂ける。とんだ騷ぎが始まつたものだ。父の一番得意としたのは、兩手を背ろへまはして勝頭で立ち、其の儘前へ倒れる術であつた。それには、訪ねてきた若い者も、大分消らせられたものもあつた。運動が濟むと、父は、胡坐をかき、後へ手をついて、私達の暴れるのを嬉しさうに眺めて居た。小さい弟が、する／＼と柱を上つたりすると、手を拍たんばかりに喜んだ。何事に依らず、氣骨を振ると、父は喜んで居た。

お說法に興が乘つてくると、三時間でも、四時間でも續く。痩我慢のしつくらだと言つて、朝迄坐らせられた事も稀れでなかつた。私達は、苦しい事もあつた。が、其れ以上に、父の呑み過ぎを案じた。何とか理由をつけて、早く切り上げる事を心掛たが、それでは、氣に入らなかつた。或る一晩は試驗の前日であつたので、早く止めて貰ひ度くて、明日は試驗があるからと言つた。試驗で好い點を貰ふよりも、今のお說法の方がいくら、お前等の爲めになるかと言つて、逐々十二時頃迄續いて、

試驗準備の時間を失つた事もあつた。

此のお說法が、家での樂みであり、又、教育の手段とも考へて居たらしい。親類へ行つても同じ事で、子供等を集めては、お說法をして喜んで居た。いつも相好を崩した事の無い父も、その折はよく笑つた。醉がまはるにつれて、手が動き出した。頭が動き出した。終には、足まで、表情をしだした。今の人間は、金、金と金や己れの事ばかりを考へて、蟹の樣に橫ばかりに這ふと言つては、腕を擴げて指を動すのであつた。今の若い者は、高い山に上つて天下を睥睨する事を知らぬ、己が、天下を救つてやるといふ氣概が少しも無いと言ひ乍ら、親指を高く立てゝ、前へ強く押すのであつた。若い時に、日光を見物しての歸るさ、旅費がつきて、すゝめられるまゝに土方になつて、砂利の畚を擔いだ事もあると言ひ乍ら、頭を兩手で抱へて、兩足を上げる樣にして笑ふのであつた。

父は、自分ひとりで呑むのは嫌ひで、多勢で愉快に呑むのが好きであつた。男と生れて、酒位呑めない樣なそんな弱い事でどうするものかと言つて、父自ら德利をとつて、私達に注いで呉れた。煙草も、死ぬ程呑むでみるがよいと言つた。私は、父に似て吃つたのであるが、樂石社に入つて矯正した。癒つて退社する時に、故伊澤修二先生が、お前の吃音は癒つた。が酒を呑むと、復た、吃る。お前の父は、酒呑みだから心配だ。お前の父は、偉いから、何でも眞似するがよい。只だ、眞似していけないのが二つある。それは吃る事と酒を呑む事だと、訓へて呉れた。其の上に、私は父の酒の生活から、暴飮の弊も知つてゐた。中學の頃は、呑むまいと思つて居た。私は、中學時代から身體が弱くて、高等學校へも入れず、ぶら〳〵して居た時があつた。きつと、靑い浮かぬ顏をして居たのに違ひない。お前は、少し、酒を飮むがよいと言つて、父自ら德利をとつて、すゝめて呉れた。之れが私の杯を手にする始めであつた。それから、私は、酒の味を覺えた。高等學校へ入つて後は、寮から土曜日に歸る每に、一本宛父の相手をした。父は、私に、いくら酒を呑んでもよい。が亂れてはいけぬと言つた。酒を呑むと、父は多少、氣焰も上がつたが、決して平生を亂しはしなかつた。

お說法の中には、種々の事があつた。秀吉も偉いが、家康も偉い處があるといふやうな英雄評もあつた。明治義塾の塾僕をして居た時、月に五十錢きり小使錢が貰へなかつた事や、握り飯を携えて、徹夜して遠足をした事や、獨逸協會中學時代に作文の代作をしてやつた事や、作文が一番よく出來たものは、漢文の時間を自由にする事が出來たが、父は、よくその一人になつて運動場で得意の器械體操を行つたなどゝいふ若い時代の思ひ

出ぶしてくれた。[illegible]に、[illegible]、[illegible]話して呉れた。

或る時は、將來の計畫も語つて呉れた。俺は、五十年も、人一倍酒を飲むで來た。だから酒の事を書く資格があるだらう。きつと面白いものが出來ると言つた。材料も餘程集めてあつたが、遂に果さずに了つた。

勿論、名聲は大いに上つた。世に名も要らぬ。金も要らぬ。命も要らぬといふ人がある。土佐言葉で、馬鹿珍といふが、之れ程怖いものは無い。俺も、その馬鹿珍の一人かなと笑つた。馬鹿珍の家庭は、物質的には苦むだらう。併し眞に、國を憂へるものが、居なくてはならぬと言つた。此の馬鹿珍を書いた原稿が、父の最後の文章となつたのも何かの因縁があつたのであらう。又、今の教育は、青年を殺して了ふ。終には、この日本も亡んで了ふ。俺は、獨特の教育法を考へて居るが、世に問ふてみたいと言つて居た。之れは、遂に文章にならなかつた。

今の人間は、才は利く。が、ふは〳〵して、吹けば飛ぶ様に輕薄だ。大小を辨へない。高低、强弱の問題が解らぬとも言つた。學士學士と言ふが、大學出る位は誰れもする。普通の頭があれば、誰でもなれる。眞實に、腹の出きた學士が何人居るかと言つて私等を暗に叱つた。酒の上でといふが、俺は醉へば醉ふ程、[illegible]面倒くさくていけないと[illegible]ならなかつた。了ふと、父は、家に居た[illegible]ならなかつた。

父は、自分で自分を批評した。文士でも無い。學者でも無い。教育家でも無い。まあ村夫子といふのだらうと言つた。但皆が飢え無かつたのは、只だ一本の筆の力に依つたのみであつた。併し、父は、單なる村夫子ではなかつた。[illegible]に救はれてたまるか、日進に助けられてたまるかと、土佐武士の[illegible]に、意氣地を叫んだ。一面に、又、武士を以て任じてゐた。實際の士を以つて任じてゐた。刀を筆に代えたが、[illegible]に生れなかつたのを、どんなにか歯がゆく思つてゐたらしい。酒に病むで居る時であつた。眠つて居た父は、ツト起きて、袴を持つて來い。陛下がそこをお通りになる。是非[illegible]申し上げねばならぬ。袴を。早く。と私に命じた。其の時は、午前二時頃であつた。其の然らざる事を返答したが、父はきかなかつた。二三度問答の末、仕方なく、袴を出した。袴を付けて、下駄を穿いた。二三歩いて氣がついたのであらう。然うか然うかと言ひ乍ら室へ戻つてきた。何を夢みたかは知らない。併し、父の身體には、骨の髓にも、肉の一片にも、忠君愛國の念が漲つて居た。そして、どうかして、此の思想を、子供にも傳へた

いと力めた。父の子供等に對する教育は、酒間の此のお說法にあるばかりであつた。私は此のお說法を今では非常に有り難く思つて居る。

世間からは、父は、至つてずぼらの樣に思はれた。が守るべき處は嚴然と守つた。杉浦重剛先生が、お訪ね下さつた時は、いつも袴を穿いて、お迎へ申した事を覺えて居る。約束の原稿は大分遲れて、編輯や出版の方々に迷惑をかけた。併し、之れは、なまけて書かないのではなかつた。未熟のものを發表して、世の人を誤つてはと、考へに考へを重ねた故であつた。後藤象二郎の傳記を著す時には、五年餘を費した。其の間四年位といふもの、一枚も書けなかつたのであつた。此の思想を錬つて居る間は、側に居る私等にも、氣の毒な位苦しむだ。併し、想が纏つて書き出すとなると、非常に早かつた。一氣呵成に書き終へた。それからは、餘り筆を加へる事はしなかつた。だから、父の原稿は、清書した樣に、非常に綺麗であつた。人に出す返信も然うであつた。考へないでよいものには、直ぐに返事を書いた。が考へなくてはならぬものは、愼重に考へて、返事も隨分遲れた。

服裝は至つて無頓着であつた。或る夏、私達が沼津に滯在して居た時の事であつた。父と弟と、私との三人で三島を經て箱根に出で、十國峠を越えて、夕方熱海に下りた。伯母が富士旅館に來て居たので、その旅館を訪ねた。處が、番頭が、烏散臭さうに私達を眺めて、上れとも言はぬ。それも尤もだ。揃ひも揃つて、經木眞田の海水帽を被り、汗で汚れた浴衣を着て、草鞋穿きで、乞食に遠からぬ服裝であつたからである。その他本物の大町かなどと、粗服の爲めに、怪しまれた事は再三では無かつた。平常は、此の樣に無頓着であつたが、儀式に出る時は、無い乍らも紋付の羽織を着、袴を穿いた。それさへも、時には着古した木綿であつたかもわからぬ。が、實際に、父は、それ以上無かつたのだ。去年の夏、地圖を買ひに行くから着物を出せとの事で、差し出すと、之れは良過ぎる、もつと惡いので好いとの事であつた。然し、それは、浴衣地であつた。只だ新しい縫ひ立てのをみて、好いものと思ひ込んだのだ。父自身は、こんなに、無頓着であつたが、粗服は結局損だ。お前等は出來るなら、相當のなりをしたらよいと言つた。

父は、一見、豪放で、細事に拘泥しないやうであつたが、併し、決して、然うでは無かつた。非常に敏感であつた。私達には、とても、氣のつきさうにも無い事にも氣がついた。人の言ふ裏が直ぐわかつた。私達は噓は決して言へなかつた。併し、父は決して人の缺點は見なかつた。自分には他人の美點ばかり

が見えるとも言つた。心は細く細くて、決して口には出さなかつた。父の所謂「民衆」をやつて居たのだ。お前も丈夫で居て、惡さうにも見えなかつた時、私に、あれは、少し氣をつけてやらなくてはならぬと言つた。私は、腑に落ちなかつた。がそれから間もなく、弟は大患に罹つた。

父は、平生、本を讀み乍ら、寢てばかり居た。が、却々、まめであつた。家で何か破損すると、子供等はどうもお坊つちやんでいかんと言ひ乍ら、登山用の鋸や、小刀を出して繕つて呉れた。手工は無器用であつたが、思ひ付きはよかつた。默つたまま、コツコツと、種々のものを手製した。四五年も前であるが、水の入つた小桶を屋根から吊して、ゴム管で巧みに水を落して瀧を作つた。旅を待つ間の、都の暑熱を、その水聲で忘れて、獨り寂んで居た。今の庭は、父自ら、植木屋へ行つて樹を買ひ集め、自ら鍬をとつて作つたものである。深山幽谷を作るんだと力を入れた。汗ばむでくると、着物を脱いで、シヤツとヅボン下になつた。夏の盛りには、六尺褌一本の裸體になつて半日を跣足で居た。疲れると、簡單に、おう、おうと言ひ乍ら、緣側に來て腰をかけ、煙草を吸ひ乍ら、樹の配置等を默然と考へて居た。六尺褌は、父の主義であつた。男は、此の褌で、睾丸を締めて、下腹に力を入れて居なくてはならぬ。又、[illegible]無いとけなした。いつであつたか、[illegible]中に、側に脱いであつた褌が焚火で燒けた。早速、[illegible]して居た新しい褌で代用した事もあつた。

家族の身長を座敷の柱に印づけては、子供の大きくなつてゆくのを、父は樂むだ。初めは、父の下にあつた弟等の線も、今は、皆、父の上に越して了つた。此の澤山の線の中に、父のも一本殘つて居る。五尺四寸と五寸との眞中頃にあつて、大正二年七月と記してある。父の體重は、十四貫を越して居たらう。どつちかと言ふと、痩せて居た。が、構つた事をきかないので、明瞭にはわからない。眼は、ひどい近眼で、その爲めに、初志の軍人志願も放擲しなければならなかつた。右左は、思ひ出せないが、六度と七度とであつた。耳は右が聞えなかつた。顔を右に傾けて聞き返す事が度々あつた。晩年は、殊に甚しくなつて、お父様も隨分、聾におなりだと言つても、父には聞えないで、便利だと言つて笑つた。但し、聞える左を枕につけると、子供が騒ぐのが聞えなかつた。齒は全部揃つて居た。筍が好きで、此の春も、東京から送つたのを喜んで喰べた。父の長兄が肺を病むで死むだ時に、醫者が、父も、餘程氣をつけないと、同じ病氣で死ぬだらうと言つた位で、若い時は、決して丈

夫で無かつたらう。が私が覺えてからは、病弱だと感じた事も無かつた。いつ頃、鍛えたかは、わからない。高等學校時代ででもあつたらうか。

父は、私達には、全く放任主義であつた。口喧しく叱つた事も無い。亂暴をしても、失策をしても、亦何をしやうと默つて居た。人をみて法を說いたのであつたらうが、惡戯位出來る人間で無くては駄目だと、惡戯をすゝめる位であつた。可愛いとかいふ樣な言葉を口には出さなかつたので、子に對する愛が無いかの如く見えた。併し、父の愛は溢れる位であつた。父の行動を噛みしめると、大きい深い情が潜むで居た。子供の病氣の時に、特に表はれる。私が病氣の時などは、平生面倒だと言つて芝居など見た事の無い父が自ら、當時流行の雲右衞門を聞きにつれて行つて呉れた。又、母に命じて、芝居にもやつて呉れた。私を溫泉にも連れて行つて呉れた。

父は、暗記力が强つた。一度讀んだり、聽いりした事は、忘れ無かつた。云つた當人が忘れてゐる事を話題にしては、私等を困らせた。數學の爲めに一度、高等學校の入學試驗に落第したが、それからは數學ばかり勉强して、その秋には見事通過した。勉强すれば、數學も出來たのであらう。私が宿題の代數で困つて居る時に、解いて呉れた事もあつた。

父は、晩年になつて書を山登りの資に當てた。それで、書を研究しなければならなかつた。その初めの一二年は、寢ても覺めても、書の事ばかりであつた。起きては、法帖とにらめくらをした。眠る床の枕上には、いつも法帖が、數冊、散らかつて居た。併し、父は、他人の眞似をするのを嫌つた。父一流のを編み出さうとした。此の父一流といふのが、父の主義の一つであつた。用ふる筆も種々使つて見て非常に研究した。遂に、最も硬い狸の毛製のが適するのを悟つた。穗の長短、大小、毛の硬軟、百にも餘る種々の筆をみても、父の心情が忍ばれる。山登りも、これと同じで、東から上り、西から上り、山そのものを研究し、それが終ると、その山の遠望はどこがよいかと、諸處を探しまはつた。父が一つの山を叙するにも、之れ丈け徹底せねば氣がすまなかつた。此の徹底すると言ふ事は、父の總處に表はれた。酒に徹底して、遂に病氣になつた。父は十二の時、國土佐を出たきりであつた。先年、先祖の墓を纏める目的で歸國した。國の人々は、三十餘年振りで歸つた父を、非常に喜んで迎へて呉れた。殆ど毎日、眠る事を許されなかつた。夜は一時二時過ぎまで宴會が續いた。朝は早くから人が訪ねて呉れた。どんなに苦しからうと、人が來れば、快く迎へるのが、父の主義であつた。人の顏をみれば、酒をもてなすのが、父の

辭であつた。[illegible]は[illegible]つた。そして、[illegible]い未だであつた。自分丈としては、苦しい時もあつたらう。お[illegible]の痩我慢を出して、四十餘日酒と相撲をとつた。よく口にした「まけてたまるか」を發揮した。父は勝つた。が悲しい事に、勝つたのは氣丈けであつた。肉體は遂に敗けて、病院に入らなければならなかつた。

父は酒で命を短めた樣にも思はれる。併し、酒が無かつたら、この[illegible]は、[illegible]に、[illegible]一杯、山から見下ろしては、[illegible]に浴した。又、酒の中から、或る者を[illegible]たこと[illegible]。三男が高等學校へ入學出來た時も、[illegible]中ではあつたが、信濃の山の中で、一杯を傾けて喜んで呉れた。死ぬ今はの際まで、酒を、呑むだ。そして快哉を叫んだ。私の擧る杯には永久に、父の面影が映ることであらう。

父の最後の冬籠り

大町文衞（次男）

いろ／＼下界の用事で父の蔦溫泉行は段々と延びて行つて、去年の暮れも押し詰つて來た。あまり遲れては雪が深くなつて、途中が難澁になりはすまいかと案じてゐる中に、いよ／＼十二月二十三日午後六時の汽車で二度目の冬籠りをする爲めに上野を出發すると云ふので、私は平塚村から出て來て父を驛まで見送りに行つた。先きに來てゐた父は末の弟と母と嫂の母に當る金澤夫人の三人に圍まれて發車の時刻を待つてゐた。他の子供達は他出してゐたり、學校の試驗があつたりして來られなかつたので、私達夫婦を加へて五人の者が暫く言葉を交してゐたが、平生のやうに父は餘り口數をきかなかつた。そして相變らず粗末な着物を纏つてぽつねんとしてゐた父の姿は如何にも淋さうに私の眼に映つた。仙骨が顯れたと云はうか、枯れ盡したと云はうか、老いがもう知らず／＼の間に肉を食べ骨を蝕んでゐたのであらう、その父の瘦も一層淋さの感を強めた。まし

て自ら好んでとは云へ浮世に背いてこれから雪に埋れた山の中の一軒屋に一冬を過しに行かうとする寒さうな父を眼の前に見て、唯わけもなく淋しくなつた私は自然と眼の中に湧いて來る涙を押へねばならなかつた。然しこれが此世の別れにならうとは一寸も思はれなかつた。上野驛は見送り客をプラットホームに入れないので、父がすた／＼と列車の方へ歩いて行く後姿を見送つて私達は歸つて來た。

蔦からは早速葉書が來た。それには唯、

　　雪とくるまでは籠らん山の中
　　　餌とる役は熊に任せて

と云ふ歌が記してあるだけであつた。溪流から魚を捕るのは熊の役、果實を醸して造つた酒を捧げるのは猿の役、狸や兎は父の前で相撲でもとるであらうか。雪に浮世を隔てた山の中で、爐邊に酒を酌み、興來れば詩を賦すと云ふ父の心に最も適つた生活が始まつたのだと私は思つた。尚その葉書の端に「上野へ有難く存じ候」と小さく記してあつた。此頃の父は自分の子供に送つて貰つたことすらにも心から感謝の念を抱かずにはおられなかつたやうである。然し父の本當の心は、世の中の心のない人にわい／＼云はれても一寸も嬉しくなかつたに違ひない。それでも父はどんな人にでも快く接してゐた。唯餘り迷惑をかける人があるとうるささうにしてゐた。私はなんだか涙がこぼれる。

蔦は既に雪が積つてゐた。其頃の父の日記を開けて見る。

　　廿六日　積雪二尺ぐらゐ、猫居らず別館に四五の客あり、
　　鷄三匹（二雄・一雌）縁下に嬉遊ぶ、豚一匹
　　二十七日より臺所の爐に出張、日あたる日は二階の日のあたる室に陣どる
　　爐火大明神

猫がゐない。動物を可愛がる父はいち早く去年の冬籠りにゐた猫のゐない事に氣が付いた。父はその猫と一所に寢た事もあつた。

　　今日爐邊猫、小皿飯、若魚、鴨の骨（首）二片、涙を流しながら食へり。

これは大正十二年十一月二十一日の日記である。

　　この朝だいどころの土間にて猫兒の悲しく泣くをきゝつれ來り肉をやりふとんに入れる、我眼をとらむとす畜生恩をしらず、おひ出せり、らうかへ出せり。

これはその翌々日の日記である。同じく十九日の所に、

　　子猫二匹かくれんぼ、靴かくる。牡さがす也。

猫も父の爐邊の友であつた。

[illegible]
[illegible]伐採遣[illegible]　[illegible]六十六[illegible]

これもその頃の作であらうか。[illegible]所は四間に五間もあらう大きな板の間でそのよい所に一疊敷もある爐が[illegible]けらてあつて火が絶えなかつた。父は好んでその側に坐を占めた。今年は其處へ出て來ても猫がゐなかつたので、父も少し淋しかつたのであらう。

間もなく年が明けた。山中でもやはり暦日はあつた。

大正十四年元日、日光さしかけて雪となる　自彊術を行ふ、三ッばかり出來ず。
仙食をのみはじむ、姉のをくられしもの、酒、金澤夫人の贈られしもの
干食、大賀弘、茂山清太郎の贈られしもの　以て元日を祝す。

この日記の一頁は特に大きく書いてある。雪のために外へ運動に出られなかつた父は中井式と云ふ自彊術を行つてゐた。それは三十一種類のいろ／＼な體操を順次に行ふのであつた。父がそれを行ふ所はそれは見物で宿の者を笑はせた。この自彊術と土佐にゐるたつた一人の姉から送られた仙食と貰ひものの酒と干物とで雪の元日を父は何事もない様に平然と祝つたのであつたらう。

前年の冬籠りには[illegible]た。今年に[illegible]で[illegible]を[illegible]いた[illegible]の[illegible]今[illegible]に改訂を加へ新らたに評を入れる大役があつた。[illegible]見と兆遣族とへの心盡しに父は努めて衰い身體を励ました。然し山中の寒さは劇しい。朱筆も氷り、赤インキも氷り、遂に赤鉛筆だけしか役へなくなつた。その赤鉛筆も盡きかけて代りがなく。短くなつた赤い心だけをとり出して細筆の軸の端へつけ、都へ頼んだものの着くまでの間に合せた。父の死後それを居間に發見した。實際今年の冬は寒かつた。父の老いた骨に餘程こたへたであらう。病もこの頃から潜んでゐたに違ひない。然し父は

湯を出でてかべにかけたる手拭の
やがて氷りて棒となりぬる

と云ふ様な暢氣な歌を詠んで痩我慢を張つてゐた。

新古今の仕事の他に自彊術と、讀書と、酒を傾け、詩を賦す千篇一律の單調な生活の間にも、いろ／＼の變化はあつた。やつと初めての誕生を迎へた勇太郎と云ふ赤坊を父は非常に可愛がつた。勇太郎もチエンチエー／＼と廻らぬ舌にその地方の訛りを表した。父はよくその子を脊に負つた。三歳の孫を[illegible]でよく負つては外へ出たと云ふ父が、それから[illegible]經つた[illegible]

森の山中で孫の樣な温泉の子が行つたのも決して不思議には思はれない。夜はまた夜で、宿の小さな用事に使はれてゐるお梅と三太郎とに字を教へた。お梅は十三で三太郎は十であつたが、小學は一年位しか行つて居らず、山中勿論學校へは行けない。父はこれを憐んでたのであらう。又山中の淋しさを少しはまぎらせたであらう。父は人なつこい質であつた。父は東京から雜誌を取り寄せたりしたが、どうもこんな所で行ふには新らたに特別な教科書を作らねばいけないと云つてゐた。

一月の中頃から宿では川へ放すために鱒の側で姫鱒の孵化を始めた。父もその中の少しを分けて貰つて別の器に入れ、毎日毎日卵から魚の形をしたものが離れそれが段々大きくなつてゆく變化を見て樂しんだ。父はこれを簡略な繪で畫にかいて姫鱒日記を作つた。それは一月の二十二日から二月の四日まで續いてゐる。小さな器では弱るからと云つて其處で止めにしてしまつた。東京へは姫鱒にその繪と次の樣な歌を副へて送つて來た。

卵より出でたるまゝの鱒の子の
卵かゝへて泳ぐ強さよ

思ひ出すのは私達がずつと小さかつた時父は夏になるときつと庭に池を作つた。子供を相手に自分で掘つて自分でセメントを塗るのである。そしてそれへ金魚を入れて自分も樂しみ、私達をも喜ばせるのであつた。雜司ケ谷の庭には四つも出來た事があつた。今はその中のたつた一つが殘つてゐる。冬われる樣なものを作つてはいかんと云つて嚴重に造つた池である。父はへなへなものは大嫌ひで、こんな事にも念を入れなければ承知しなかつた。宿にも大きな池があつて食用にする緋鯉が飼つてあるが、父はいまに宿へ作な樣になる時の用意に讓げると云つて温泉の主人と測量した事もあつた。雪の中で父はその趣味をやつと姫鱒の卵で滿足させたのであつた。

この一月の末頃讀賣新聞で父と子と云ふ讀物にいろ／＼の人物を捕へてゐた。私達兄弟もそれに捕まつて、新聞一流の提燈をもたれた事がある。その切抜を送つた所がさすがの父も嬉しかつたと見えて、早速温泉の主人夫婦の所へ見せに來た。その時父の眼には涙が宿つてゐたと女將が云つてゐた。然し子供の事へはそんな事は一日もちらさず何を感じてかいろ／＼教訓の言葉を四畫にして書いて來た。その端には「躬と口とは世間榮辱に對して用ひさる也」と云ふ文句も入つてゐた。生れつき涙もろい父の半面には武士と云ふ精神が強く焼きつけられてゐた。子供の教育をその全く好むに任せてあつた中にも武士的訓練を與へると云ふ念は終始父の頭にあつた。そのために子供達は困らされた事もあつた。父は旅にあると缺かゝさずきめに家へ便りを

ところが[illegible]
に送つて來た手紙を出して見ると父の近況を語る[illegible]長い紆
卷物の末に一家團欒のたすけにもとしてその終りに慨父と書し
こある。母の處へは自分は未だ曾つて自分の悲しい事苦しい事
では涙を流した事はないが、この頃子供の事を思ふと涙がこぼ
れると云ふ便りがあつた。それ程までに子供の事を思つてゐて
呉れた父を思ふと此方も不肖な涙が止めどもなく湧いて來る。

萬ではますく\雪が積つた。郵便は一里下の燒山まで行かな
ければ往復しなかつた。勿論訪ふ人もまれであつた。

あはれしる人の外には俗客を
とほさぬ山の白雪の關

父はそれを淋しいとも思つたであらう。又結局よい事にもし
たであらう。

逢ひたしと思ふ人には逢はねども
逢ふて苦しき人にも逢はず

多く來るのは炭燒とかりうどであつた。

二月四日はれ、立春なり
主人新太郎未だかへらず炭燒老人あり、戶來よりパンドリ
とりのまたぎ六人來る。きじのめすをもらひてくへり
正氏の父病死四郎氏の叔母病死不幸三人も出來たり

[illegible]
この間[illegible]
パンドリとはむさゝび。またぎとはかりうどの方言である。
父はそのパンドリを食べてうまいく\く\と日記につけてゐ
る。猫が羽織を着たやうだと家へは云つてよこしてゐた。去年
の日記には「内田赤也花外きみわるがりてくはず」とも記し
てある。兒玉花外は去年の冬半年あまりも父と一所に萬へ籠つて
ゐたのであつた。父はこの飽まみを買つて食べた。兎の肉も買
つた。その代りねぎをやつたり酒をやつたりして樵い間にま
たぎを集め、自ら酒盛りの大將となつた。

兎くれしかりうど呼びて酒やりて
かたらう雪の山のゐろり火

同じ日の記事に不幸三人も出來たりといふのは宿の主人の[illegible]
で正氏の兄に當る者が炭燒小屋で醉つてゐて大火傷をし、遂に
三本木の病院で死んだのを加へてあるのである。それは一月
十六日の事であつた。

下界にはいろく\へんある哉
あはれく\く\

と云ふ文句が日記に見える。然しへんがあるのは下界のみで
はなかつた。

篤に罹つてから早や一月半、父の頭髪は長くのびた。平素頭髪の長くなるのをうるさがつてゐた父も、寒さには敵はないと見えたか、遂に意を決して頭の前から上部へかけてバリカンで刈らせた。「女將大いに笑ふ」といふ文句と戯畫が二月十二日の日記の端に見える。その滑稽な姿を見たら女將でなくとも誰れでも笑つたであらう。

わが頭前は草原上は岩
うしろの森に雪ぞつもれる

漸くなつて白髪も交つて來た父の頭が眼に浮んで來る。

翌十三日は杉浦先生の命日に當つてゐた。前の冬籠りに完成した先生の傳記を携へて大雪の中を都へ歸る猪狩史山氏と燒山までさがつて、姿の見えなくなるまでその後姿を見送つたのもこの山中であつた。續いて先生危篤の報に驚いたのもこの山中同じ大雪の日であつた。

去年今夜哭先生　今年今夜祭先生
同是山中風雪夜　泣繙遺編誦先生

自分を知つて呉れた唯一の先生を失うた父はどんなに落膽したであらう。然じ今は哭された身も哭した身も共に空しくなつてしまつた。

とやかくする中に三月になつた。新古今の仕事も捗つて遂にその六日に完成した。父は此度の執筆の苦心は餘程身に泌みたと見えてその原稿を家へ保有して置けと手紙を寄こした。父には珍しい事であつた。原稿は東京へ送るばかりになつたが七日八日と大雪が降つてそれを郵便に托しに行く事が出來なかつた。やつと九日に晴れたので宿の者がそれをもつて燒山へさがつた。

父は一先づこの冬籠り中の第一の大役を濟ませた。心と身體にゆとりの出來た父はこの七、八、九の三日間に爐圍戰鎧と云ふものを作つた。それは父が自ら工夫し、自ら作り、自ら命名したものであつた。寒がりの父は爐にあたる事が好きであつたが、爐の薪から飛んで來る火の子をうるさがつた。其處で考へたのはすつぽり被つて頭と手だけを出せるものであつた。父はたんねんに自分から厚紙を切り、その表へ絣りの木綿をきせてゐたいの知れないものを作つた。そしてそれを宿の主婦に着せて見ては悪い所を直しまた着せて見た。出來あがつた所は大砲を出す孔が二つ開いてゐる防寨を小さくした様なものであつた。主婦は父の死後それを見るとまた思ひ出していけないと云つて戸棚にしまつてゐた。父はこんな事を工夫するのが大變得意であつた。

この冬の初めは少いと喜んだ雪が冬も終り頃になつて反つて

よくなつて、三月の彼岸も近づいたが中々暖くならなかつた。父も寒かつたであらう。

　三十一日ふり　日光さす

　三十日寒さ恰も厳寒の如く彼岸過ぎても中々寒し

三月はそれで終つたが、この日小笠原松次郎氏から米二俵を送られた。父はそれから思ひついて自分の一年に食べる米の量を、一日の量を基として計算した。それにつけ加へて酒の量も計算した。前者は四俵半、後者は四斗樽三個と記されてある。これも實は父が茲へ永住する準備であつたのである。父は何を思つたかこの三月に籍を[illegible]として茲に移して、私達を皆青森縣人にして仕舞つた。

いよ〳〵四月に入つて雪も漸く薄くなつた。父はシヤベルを持つて宿の前の雪を掻いた。それを宿の子供と一所に雪達磨にしたり大きな山に積んだりして楽しんだ。

　雪だるま大きくなりていつしかに

　　富士の山とはなりにける哉

そんな時にお客でも見えると「おかちやん　お客」と大きな聲で宿の者に知らせた。宿の主婦をおかちやんと呼ぶのが其處の慣はしであつた。

四月の二日は晴れであつたので父は入山以來始めて宿から五六丁目[illegible]

事でであつたらう。[illegible]は或は近所の沼へ釣りにゆく宿の男に從つた。或は[illegible]森山へ村の人と登つた。或は溪流の流れに流入する小川の端に出た蕗の薹をとつたりした。十八日には蛙の聲を聞くやうになつた。四五日の中に蛙の聲はいよ〳〵繁く、小鳥も多く[illegible]にとまる様になつた。二十二日の夜から雨が降つた翌朝は濃霧で一日中雨が降つてゐた。これは今年の初雨であつた。この日の朝四時頃に鶯の鳴くのを聞いた。父は毎年非常に早起きであつた。床の中で鶯の聲に耳をすましたのであらう。鶯の聲よりも美く優しいと云つて父は鶯を好いてゐた。鶯を詠つた歌も數多い。

　落葉して雪に明るき山の上

　　そこともしらずうそとりのなく

水芭蕉の花も始めて一つ見た。大きな[illegible]が沼の水から出てゐる所もよいが、その眞白な一枚の花瓣の様な葩で出來てゐる花も殊更に風情あるものであつた。

　舟後光おへる佛の如くにて

　　見るも貴き水芭蕉かな

月が變りて山はいよ〳〵新緑の頃となつた。山の春程新[illegible]

滿ちてゐてめまぐるしくあはたゞしいものはない。まだ所々に雪が殘つてゐるのに柳花は黄色く、白木蓮は白く若葉の間に點ぜられてゐた。草も萠えて來た。山の食物も一勢に出て來た。ふき、あざみ、うど、こごみ、ぜんまい、わらび、みづ等山には食べられる草が多かつた。父はその中でもわらびを最も好んでゐた。そんな間にも山の氣候は猫の眼の樣に變つた。五月七日の夜から春雨の樣にしめやかに降つてゐた雨は八日の午後から急に雪に變つた。翌る九日は忽ち晴れて雪は瞬く間にとけてしまつた。

「新綠に雪ふる也」「うぐひすはじめて鳴く」等の文句がその日の日記に見える。

　擁樹生新葉　山櫻花將開
　夜來怪寒氣　曉見雪成堆

庭の池には蝦蟇も産卵しに出て來て皆おんぶをした。へびも出て來た。山櫻の花も見る間に滿開になつた。父も花見をしなくてはならない。

十五日はれ、午しんかい（地）の僵樹（一丈五尺周）の上に毛布。二本の山櫻を
見て獨酌す、ぐるり山毛欅のしんりよく。上に赤倉白し。
沼めぐりをなす、二本杉をまはりて來る

十六日はれ風なし
始めてわらびをとる、誤つて「たら」と「せん」との芽をとり來れり
新開（地）のさくら盛り也
沼しづか也、ます飛蟲をくはんとてはねあがる、波紋を生ず
十七日　はれ、くもる、雨、
わらびをとる
きつゝきの聲　雨となれり

父は何時も實況實感をすぐ詩や歌に表した。

　雪解山中纔數日　春花夏葉一時生
　負喧石上傾瓢酒　閑聽空林啄木聲

又

　是山是影幾難分、鏡樣澄湖絶俗氛
　啄木聲中停杖立、岩魚時躍水生紋

是等は皆其の眼前の影であつた。父はよく森の中を歩き廻つた。そして原へ出てはよくわらびを摘んだ。父はわらびを採る事が大好きであつた。わらびが拳を擧げてゐる所を見ると手折らずには居られなかつたらしい。父はそれを宿へもつて歸へつては自ら煮て食べた。

[illegible]にたつてゐき。大さも去つて快い季節になつてゆくのに氣いて、父はどうも身體の工合だけはおかしくなかつた。然しその苦痛は誰れにも訴へなかつた。五月二十三日にはその身體を押して太田吉司氏と共に十里の山道を越して七戸へ出た。

牛蔵山中忘世機　八幡嶽上跡烟霏
明朝欲訪人寰土　帶月先敲禪寺扉

これは父の最後の詩になつた。

七戸ではその禪寺の飯坂圓坂和尚等の案内で藩の石文の遺跡等を訪ねた。

よしや今石文なくもつぼのさと
　ますらたけをの忍ばるゝ哉

また盛川喜平治氏の酒倉へ案内され、生れて始めて酒倉を見たと云つて喜んだ。

身をかへて樽にならばや倉の中
　一百石の酒をたゝえん

七戸でも皆父を桂月々々と尊び十二分の款待を盡した。二十八日に父はやつと蔦へ戻り着いた。その歸途燒山でかねて知合の村長小笠原耕一氏と共に痛飲し共に肝肺を盡した。それから十日も經たない中に突然血をひどく吐いた。それは六日の眞夜[illegible]

[illegible]體に[illegible]起きたのもたつた[illegible]日で、[illegible]にもう[illegible]すとうとう死んで仕舞つた。[illegible]吐いた[illegible]人を作つて八甲田のお山へ立つた小笠原[illegible]氏や私共[illegible]に明日は東京へ歸ると云つて別れをつげた。實はこの一行を待つために父は歸京を延ばしてゐたのであつた。父はその晩から立たなくなつて仕舞つた。

此間蔦へ行つた末弟から「なんだかお父様が山から迎へにおりて來て下さる様な氣がした」と便りが來た。父の遺骸は私達の眼の前で炎々と燃え上る火の中で骨となつた。然し東京に離れてゐると父は今でも蔦の森の中を逍遥したり草原に出てわらびを採つてゐるに違ひない様な氣がする。蔦へ出かければ何時でも、父に逢へる様な氣がする。私は寂しくなつたらきつと蔦へ飛んで行くに違ひない。

此處は深い森で、梢はすつかり天を掩ひ、青空はちら〳〵と見えるばかり、所々に太い幹が地と高天井とをかけ渡してゐる様は大きな殿堂のやう、がらんとしてひつそりした所は太古の様に似てゐた。見てゐるとその中に一人の老人が顯れた。顔は柔和で頭は既に白くなつてゐる。丈は高くなく、手にはその丈よりも高い杖をついてゐる。身體は痩せてゐて衣は肉を被ふと

云ふ名に過ぎない。全體として險しい山が長年の風雨のために稜が磨りへつたと云ふ様な姿である。その姿がひよろ〳〵として來たしづ〳〵として歩きながら、時に幽谷の鳴き聲に耳を傾け、時に清泉の流れを掬つてゐる。

暫くしてこの仙人は森を出て青い原へ顯れた。地上へ眼を落してゐた身はつとかゞんでまた起きあがつた。手を見ると一本のわらびが握られてゐる。太平の世に伯夷叔齊を氣どらなくてもよささうなものをこの仙人はしきりにわらびをとつてゐる。やがてその手には握りきれない程の束が出來あがつた。仙人はそれをもつて何か小聲で詩を口ずさみながらのそ〳〵と自分の住ひへ歸つてゆく。殘陽はその顔を赤くほてらしてゐる。「アッお父さん」と云はうとすると忽ち姿が消えて仕舞つた。ナンダ今の姿はふと頭に浮んだ夢だつたのだ。燒かれた父が今山の中を歩いてゐる筈はない。勿論その庵もあらう筈はない。唯死んだ父の記憶と庵の名だけが殘つてゐる。

名だけ殘つてゐる庵は餘材菴と云つてゐた。この庵は父の老後の最も大きな樂しみの一つであつたらしい。父は至る所の知友へそれを吹聽してゐる。その大體の計畫は去年の夏既に出來あがつてゐた。その前々年父の案內で十和田、蔦、八甲田を週遊した小杉未醒畫伯が蔦の藥師のために自ら進んで新たに本尊を作り黄銅に鑄て贈つた。蔦温泉の主人夫婦は日頃信心してゐる藥師のために大喜びで新たに藥師堂を建立して去年の秋開眼式を行ふ事になつた。實はその用材の餘りを主人が父に提供する事を申出たのであつた。その上に、平生父を父と慕ひ犬馬の勞を惜しまなかつた十和田の主と呼ばれる小笠原松次郎氏と、同氏と共に常に父の陸奥の山水巡りの案內であり伴侶であつた山の神と呼ばれる太田吉司氏の兩氏の好意が加はつていよ〳〵小さな庵が出來る事に相談が纏つた。父はそれが出來ない先に餘材庵と名だけつけて喜んだ。これを知つた子供達も父母の老後を養ふ恰好な場所の出來た事を喜んだ。

思へば五十七年の一生は惡戰苦鬪の跡のみであつた。一介の平民として江湖に放浪する身の上に難行苦行の數は積まれた。然し今は育つ可き子もやつと手離し出來る年頃になり、下界の仕事も一段落つきかけて來た。あとに殘るのはかねて着手してゐた日本の高山を極め盡す事のみであつた。今は浮世の塵を拂ひ、身の傷を醫し、心がゝりなく餘生を盡す可き時であつた。父は身體の衰へない中に一日も早く山登りをすませなければならぬと考へた。そして夏は旅で送り冬はこの庵に籠つて之れを文に記す計畫であつた。この高山を極め盡した後の山登りに適せぬ身體には、國中の靈跡めぐりを考へてゐた。そしてその後は

い[illegible]てはならぬとの[illegible]もあへてゐたのであらう。

實際父はこの石山巡りを後世に遺す可き晩年の一大事業と考へてゐた。「一抵死曖探山水奇」と自らも吟じてゐる通り、そのためには命を投げだしてかゝつてゐた。隨分危い斷崖や溪流を歩いた。然しその勇む心も自然に身體の老衰して來る事を感じないわけには行かなかつたであらう。殊にこの冬はたゞさへ弱い胃腸の工合が惡く身體も倒かつた。二月十四日の日記には次の記事がある。

はれたりふつたり、夜そばをくふ　うまし、めしはやめる、この頃、豚鳥をそつぷにして、おじやにしてすこし食ふ　副食物も多く食はず、酒は二合ぐらひ也

それから父はずつとそばがきでしのいでゐたらしい。

父の遺稿を開いて始めて知つたが、その頃はまたしきりと「何悲鏡裏老衰姿」とか「老去身疎懶」とか云ふ句の詩を作つて身の老ひを歎つてゐる。これは平生氣丈な父には無かつた事である。しみ〴〵と父も老を感じ死を思つたであらうか、然らばこの餘材庵は生と死を境する恰好な休み場所でなければならなかつた。

父は始め死なば地獄へ墮ちるものと考へた。二月十八日の日記の端に、

すさまじ[illegible]地獄へまいて[illegible]一休み
いつ湯も清き[illegible]のいは

と詠め書いてこれから「浮」の字を消して「愛」の字に、下の句は「からだ消ゆる蔦の出湯に」と訂正してゐる。然し思ひかへたのであらう。その翌日の所には

極樂へ超ゆるばかりのひと休み
蔦のいでゆに身をば清むる

と新しい歌が記されてゐる。これから三四回推敲して最後の歌が出來たのであつた。これらのゆきさつは成坂和尚にあてた四月一日附の手紙の端に明かである。

「蔦の藥師堂の餘材をやるから庵を結べと宿の主人の好意に甘へて瓢箪池の側に蝸廬を構へ可申候餘材庵と先づ命名いたし候老爺旦夕を圖られず地獄へ墮つるかも知れず候ふが先づ極樂に往生するものと獨斷安心して

極樂へ超ゆる峠のひと休み
蔦の出湯に身をば清めて

供御一笑申候」

父はとう〳〵樂しみにしてゐた餘材庵の出來あがるのを待たずに死んでしまつた。かりそめの歌も本當に辭世の句になつて

しまつた。死ぬ時に「もう餘材庵もいらないや」と嘆息した。ゆつくり身を淸める暇もなく遽しく極樂へ旅立つた父に餘材庵の必要はなかつたであらう。たゞ殘念だけが殘る。

父はこの餘材庵のために詩が作つてあつた。皆五言絕句であつた。

淸淨山中地　造堂安樂師
餘材容我膝　堪賦百篇詩

林樹遮天日　一池形似瓢
淸泉自然落　日夕奏笙簫

馬飮瓢池水　我傾瓢裡酒
草庵人不到　好是雲爲友

父にとつては馬と人の境がなかつた。唯馬は前の池の水を飮み、人は庵中酒を酌むだけの違ひであつた。父の情は到る所に逢ふ動物に及んでゐた。

子を連れてわれも越えゆく山路に
　子をつれて來る馬もありけり

これは大正六年白河から六里奧のやはり山中一軒屋の甲子溫泉に家族一同と遊んだ折りの歌であつた。

一里來て追ひて漸く別れけり
　二十日慣れにし湯の宿の犬

父はその歸りに犬とも別れを惜んだ。宿もやはり山中の一軒屋で山に放牧してある馬も同じ子連が多かつた。

子をつれて來る馬見ても子をつれて
　山に遊びし昔忍ばゆ

父の情は馬にかぎらなかつた。途に逢ふ犬、家へ來る猫、すべてすぐ友達であつた。況んや勇太郎も、三太郎も、お梅も、炭燒きの老人も、またぎの連中も皆父の友達であつた。否これのみではない。自然そのものが父の友達であつた。父は自然に段段と融合して行き、その身體が自然に還つた時は丁度自然と全く合致した時であつた。

お父樣の御靈に

大町文男（三男）

お父樣。私達兄弟が揃つてお父樣の枕邊に並ぶ事が出來ましたのは、もうお父樣が最後の息をお引き取りになつてから、まる一日も經つた後でした。お父樣は不斷のまゝのお顏をしていらつしやいましたけれども、私達の方を向いても下さらず、たつた一言『よく來た』と云ふお言葉さへ言つて下さらなかつた事が悲しう御座いました。不便な土地の事故、どうぞお役に立つ樣にと買ひ集めて來た藥も、醫療器械も、今はたゞ徒らにお父樣の枕邊に並べられるだけでした。こんなに泣いてはお父樣に叱られると思ひながらも、涙が後から後からと頰を傳はりました。此の世の最も大きな悲しみに、あまりにも突然に會つた兄弟達は、どうして泣かずに居られませう。病氣と云ふ電報を受取つてから、三日經つか經たない中に、お目にかゝる事も適はずにお父樣にお別れしやうとは、あまりに情ない浮世で御座います。お父樣。なぜお父樣はそんなに慌しく此の世をお去りにならなければならなかつたのですか。

その翌日はお父樣の亡骸ともお別れしなければなりませんでした。お父樣もきつと笑ひ乍ら御覧になつておいででしたらう。午前中にお棺が出來上つたので私達はお父樣の最後の門出の裝ひを調へました。お母樣の涙ながらの指圖で、姉や妹は同じく涙に濡れながら、その前日の旅の疲れも忘れて縫ひ上げた白裝束を、お父樣の身に着けて差上げました。頸にお懸けになつた頭陀袋の中には、皆んなで書いた南無阿彌陀佛の紙片が何百枚と入れられました。三途の川の渡錢であると云ふ六文錢の型も、忘れずに入れて差上げました。『お父樣に筆を持たせて上げやう』と一人が筆を入れれば、『原稿紙をも』とまた他の一人が原稿紙を袋の中に入れて差上げました。『お疲れの時にお讀みになる樣に』と漢詩集を枕の下に入れるものがあれば、『では目鏡をも』と日頃お用ひになつた目鏡をお顏の側に置いて差上げました。『先生のお好きなお酒を入れてあげて下さい』と宿の主婦が四合瓶を持つて來れば、兄はお父樣がいつもお使ひになつ

た瀬戸引きのコップを頭陀袋の中に收めるのでした。『何か藥を』とさすが女心に姉妹は寶丹だの仁丹を袋の中に入れて差上げました。此の子供らしい仕草も、お父様に盡し得る私達の最后の心盡しでした。珠數をお懸けになつたお手、白い頭巾、白い脚半、白い足袋、杖の枝、併し是が十年計畫で日本の山々をお歩きにならうとされた、お父様の最後のお姿であるのかと思ふと、また涙が零れました。

一同がお父様に最後のお別れを告げた後で、お棺には蓋がされ、兄弟は重い心に代る代る金槌を振り上げて、お父様を永久に此の世からお隔て申し上げました。もうこれきりお父様にお目に懸れないと思ふと、すつかり暗い氣分に襲はれて了ひました。

午後になつて心からの葬式が營まれてから、お父様の棺は宿から少し離れた開墾地に運ばれました。其處はお父様が生前お父様の大好きな蕨を、よくお摘みになつた處だと聞いて居ります。その日は曇つて居りましたが、その時には雲が晴れて、まだ白い雲が殘つて居る赤石嶽が夕日に染んで見守つて居て呉れました。用意された薪の上にお棺が載せられ、僧侶の讀經と一同の燒香が濟んでから、薪に油が注ぎかけられ、一番上の兄がお父様のお頭の方に火を點じました。パツト燃え上つた焰を後に一同は宿に向ひましたが、泣き崩れさうになるお母様の姿を見るにつけ、また新らしい涙が流れ出ました。振り返へり振り返へり盡せぬ名殘を惜んで私達は宿に歸りましたが、宿の二階の窓からも、トツプリ暮れた夕闇に高く高く燃え上る焰を見る事が出來ました。あゝしてお父様の肉體が此の世から消えて行くのだと思ふと、涙が止め度なく流れ落ちるのでしたけれども、また考へて見れば都近くの狹い火葬場で、練瓦積みの煙突の中から、悄然と自然に歸つて行くよりも、お父様のお好きな山の中で、靜かな林に見守られて、大自然の懷に歸つていらした方がどんなにお父様のお氣に召した事でせう。さう考へる事が私達のせめてもの心遣りでした。

その翌朝私達はお父様のお骨を半片をも殘すまいと拾ひ集めて、甕の中にお收め致しました。そして其の日の午後兄弟は代る代る白骨と變られたお父様を抱いて、高山を下りました。お父様は子供に抱かれて東京の家にお歸りになる事を、きつとお喜びになつた事でせう。併し、今日はお歸りになるか、明日はお歸りになるかと待ち焦れてゐたお父様を、かうも變り果てたお姿で都にお連れ申さうとは、誰も夢にだに考へませんでした。

お父様。私達はこんなに早くお父様にお別れしやうとは思ひ

ま[illegible]ませんでしたが、もう二十年にもなつた[illegible]お[illegible]にお[illegible]しやつて居た此の二、三日を[illegible]すつかり[illegible]にしてしまひました。いつかお父様が熊谷直實が自分の死期を一年も前から豫言したお話をして下さつた後で、『自分もその位の事は出來さうなものだ』とおつしやつたお言葉を私は覺えて居ます。何だか私は、お父様も御自分の死期を一年も前から知つて居られたのではないかと思はれてなりません。大正十二年十一月頃のお父様の日記帳の隅に、お父様が御自分でお作りになつた戒名のある事を極く最近發見致しましたがそれを見ても此の感を深く致します。四月十七日お母様にお手紙を下さつてからは、いつも旅の先き先きから子供達に繪葉書を下さるお父様が、葉書一枚下さらなかつたのは、後へ遺る肉親の悲しみを、幾分でも薄めやうとなされたのではなかつたのですか。

私が思ひ出す事の出來る最も古いお父様の記憶は、私が漸く四つか五つになつた頃で御座います。柏木の蜀紅園に住んで居た頃で、お父様は毎朝私を連れて廣い庭を散歩して下さいました。廣い庭の隅の竹藪の側には、お父様がお作りになつた『こぼて』が仕掛けてあつて、きつと毎朝赤腹等の奇麗な鳥が捕はれてゐたのを覺えて居ります。私は幼い頃の朧げな記憶によつて、お父様に手を引いて頂き、片手には捕へた鳥を下げた、喜

て[illegible]から[illegible]縁を延長して下さつた事を覺えて居ります。そしてお父様は優等の賞状よりも精勤賞状の方を喜こんで下さつた事を覺えて居ります。お口の御不自由のせいか小さな事に關しては何もおつしやいませんでした。失策した時もたゞ一言『まあいゝや』と云はれただけでした。さう表面にはお表しになりませんでしたけれど、お父様は心から私達を大きな愛で包んで居て下さつたことをよく知つて居ります。その大きな愛と、またお母様の厚い情とで、この私も漸く來年學校を卒へることになりましたのに、お父様が此の世にお出にならないと思ふと、ほんとうに悲しくなつて了ひます。併し今まで神をも、惡をも信じなかつた私も、お父様の靈だけは消えて了ふとは思はれません。きつと何處かに私達兄弟の生ひ立ちを見守つて居て下さるに違ひないと信じます。

どうぞお父様、これから浮世の荒浪に乗り出して行く私をいつまでもいつまでも見守つて居て下さいまし。それだけがせめてものお頼みで御座います。

父との最後の遠足

大町四郎（四男）

私が父と最後の遠足をしたのは昨年十一月末日と其翌日十二月一日の二日でありました。

遠足の目的地は荒川の放水路でした。

父と母と從弟の武彦君と私が池袋から電車に乘つたのは午前九時頃でありましたでしよう。赤羽から荒川へ出て岩淵の水門を渡つて放水路の堤の上へ立つたのでした。

父は此の荒川の放水路を東京の人達の是非一度見ねばならぬ所であると言ふ事をしきりに言つて居られました。この放水路の爲めに水害から逃れる事が出來る樣になつた多くの人がその恩義に無頓着であるのは不都合であると思つてゐたのでせうか。又こう云ふ樣な工事は一般の人の見る價値があると考へたのでせうか。父は中々さう云ふ所に眼のつく方でした。其の日は西新井の薬師樣へ御參りして、各自の腰に在る彈丸を食べて電車で家へ歸りました。

丁度、此の日の樣に思ひます。私は其頃身體をこはして學校は休學にして居りましたので翌日は放水路を洲崎から下からのぼることになりました。私達は早稲田へ出て洲崎まで乘り、岸寄りの堤防へ出て川に沿つて東へ進みました。

富士の山が頭に雪を戴いてゐるのが望めました。北には筑波や、赤城も見えました。

父は此の放水路に少くも五遍出掛けて來て上から下からと歩いた樣でした。父はどんな所でも見樣と思ふ處は極め盡さなければ氣が濟まない質でした。其の日は父と私と二人でしたので思ふ樣に歩きました。放水路の口は未だ完成せずに居るらしく、トロッコが盛んに動いて居りました。私達は放水路をのぼつて小菅の刑務所の近くまで歩きそれから荒川へ出て、一錢蒸氣に乘りました。私が小さい時に父と母と三人で向島に七福神のお寺を一々尋ねた時にも此の船に乘りました。又父は私達をよく運動へ連れ出しては此の船に乘りました。船の中では繪草紙や玩具を持出して賣る人がありました。昔し父はよく私に繪

に[illegible]つい[illegible]て[illegible]言つ
て下さつた事を覺えて居ります。
川を下つて[illegible]へ着いた時、私達は[illegible]から上つて[illegible]へ電車で行きました。角の家だつたと思ひます。私達は牛肉を食べました。

其の時父は大變私の身體の弱く氣の弱いのを心配なさつて氣を強くする樣に仰しやいました。父は平生は默つておいでになりましたが子供の事をそれは思つてゐて下さいました。お酒をお飲みになるといろ〳〵話して下さいました。私は其の日平塚[illegible]
は[illegible]へ[illegible]にした[illegible]父と別れました。其後十一月の[illegible]にお[illegible]見送りしたのが永遠の別れにならうとは夢にも思ひませんでした。

父は放水路について何か書く樣にとの事でしたが、下書だけで遂に御目に掛け得なかつたのが殘念でたまりません。この文をせめてもの申譯に父へのお供へにし度いと思ひます。

お父樣の思出

淡谷愛子(長女)

「チヽキトク」の電報に驚き旅立つてやつと蔦に辿りついた時お父樣はもう此世の方ではありませんでした。迷信を信じなかつた私も、いつか誰かに親指をお葬式に見せると親の死に目に會はないと云ふ事を聞いてから私は通りで會ふお葬式に一度として親指を見せた事はありませんでした。それも効がなくとうとう最後のお目にもかゝれず、こんな生れて始めての悲しみに出逢はねばなりませんでした。

お父樣は佛樣のやうに横はつたまゝでお出でした。私はその前で「一目お會ひし度う御座いました」とさめ〴〵泣きました。ふと見ると微笑でもなさつておいでになる樣に思はれるの

で肌にお觸り申すと全く冷くなつておいでになるので涙は又も湧いて來るのでした。着いて見るとお父樣の好まれた地とは云へあまりに淋しい所、この山中に獨りでお出になつたお父樣に何故私はもつとお便りでも差し上げてお慰め申さなかつたでせうとつく／＼後悔されました。まだ枝に殘つてゐる白い山櫻の花もうらめしく見えました。

小さい時の思ひ出でです。七ツ位の時でした。或る日私はお父樣のお供をして親類の家へ行きました。軈がて夕方になつて茶の間で私はそこの子供達と一緒に夕飯を御馳走になりました。お父樣は座敷でお酒を御馳走になつてゐらして良い氣嫌が洩れて居ました。私は何をして待つて居たかは忘れましたが其處を辭したのは十一時も過ぎて居ました。人通りも全く絶えた眞暗な戸山の原を私は千鳥足のお父樣に負はれて歸つて來ましたが、全くの暗がりで大分に醉はれたお父樣はふら／＼と脊丈もある叢の中でよろけて、ころがりかけました。私はお父樣の脊の上で恐さにぶる／＼とちゞみあがりました。するとお父樣は「おつとつと。怖くはないぞ。泥棒が來たらお父ッさんはお金を持つて居るから五圓札一枚やれば逃げて行つて了ふぞ」と云はれました。この言葉に私はすつかり安心して、ふら／＼とよろけるお父樣に負はれて歸つて來ました。原を横ぎり明るい町へ出て家へたどりついたのは眞夜中でありました。細目に開いた戸の中からはお母樣が迎へに出られました。お母樣の汲まれたバケツの水でお父樣は足を洗ひ私もその後でお母樣に洗つて戴いて家へ上りました。お父樣と共に無事にお母樣の元へ歸つたことをうれしく思つて安心したのでせう、私は直ぐ、ぐつすり寢込んで了ひました。その頃の事は多くは忘れて了ひましたがこの夜の事丈は今も猶頭に殘つてゐます。

又嬉しかつた事はもう七八年も前になりませうか、お酒を飲み過されて御身體を傷められて居た時でした。お父樣は自分でも惡いと知りつゝ猶召し上つて段々と身體を傷められて居ました。平生私はお父樣の前ではあまり口がきけませんでしたが、やつとの思で「どうぞ、少しお酒を召し上らないで下さい」と涙もほろ／＼に申上げました。お父樣は私の云ふ事を默つて聞いておいでになりましたが、私が云ひ終ると、お叱りと思ひの外、につことされ、「お前がそんなに優しく云つてくれるからお父さんは嬉しい。お前の爲に今日はもう飲まない。けれど今日は演説に行くから一杯丈飲ませてくれ」と仰しやいました。私は瀬戸引のコップに一杯差し上げました。お父樣は約束の御言葉通り後をおねだりにもならずそれきりお飲みにはなりませんでした。そんなになさるのを見て私はお氣の毒になつて了ひまし

[illegible]

[illegible]て身體[illegible]ではれて[illegible]代々木の[illegible]に而發していこの時でした。私は人に迎へられて其處へ連れられて行きました。數日後、お父様の高尾山へお供する爲に父訪ねて行きました。お父様は大儀そうで寢て本を讀んでおいでになつて、私に身體を揉んでくれと云はれたので、私はお父様の身體を揉み始めました、お父様はだまつて本を御覧になつてお出でした。大分工合がお悪い様でありましたが、醫者にもかゝられず、苦しいともおつしやりませんでした。私は揉む手がくたびれて了ひましたが、もうい〻とおつしやらなかつたのでお父様の身體を終日揉みました。その日は遂に高尾には行けませんでしたが今から思へば餘程胃腸がお悪かつたのでせう。

お父様は何か婦人雑誌を讀んでおいでゞした。その中に私と同じ[illegible]學校の生徒で自殺をして死んだ人の事が書いてあつたのでお父様は私の事も心配されたのでせう。私の年などを聞かれました「あまりはたから天才〳〵と云はれると苦しくなるから自殺をする。お前はゆつくり勉強するがよい。未だお父さんは十年は大丈夫だ」と云ふ慈愛あるお父様の御言葉に私は心の内で深く感謝しました。私は恥かしくて自分の思つて居る事を云ふ事が出來ませんでしたので何の話もせず、たゞお腰を揉みつ

[illegible]

け[illegible]にな[illegible]ましたが、[illegible]のですし、强いて辭して家へ歸り[illegible]ました。それ[illegible]の事がお氣にかゝつたからでした。然し歸つて[illegible]ると唯一人殘して來たお父様の事が氣にかゝつて今更乍ら後悔されてたまらなくなり醫者にお[illegible]を[illegible]きました。けれどそれが[illegible]倒したかどうかは忘れて了ひました。なぜその晩泊つてお父様をお慰め申さなかつたかと今となつては餘計殘念でなりません。まだ十年は大丈夫と仰しやつたお父様はそれから一年もたゝずになくなられて仕舞ひました。

近年私の心に最も強く殘つてゐる思出は私が志して田舎に行く日、上野驛迄送られた時の事でした。汽車[illegible]は[illegible]れて盃を上げられたお父様はよい機嫌に醉はれてゐました。發車の時刻も迫つて來た時お父様は一寸呼ばれて

「何にも心配する事はない。御兩親を敬へばよいのだ」と一言お諭し下さいました。その御心籠れる御言葉に私は熱い涙がこぼれて來ました。お父様の眼にも何だか涙が宿つて居た様に思はれました。いよ〳〵汽車はゆる〳〵動き出しました。今更の様に慈愛ある父様にいつくしまれて育つた家へもう歸れないのかと思ふと私は悲しくてたまりませんでした。涙がとめどなく

流れてくるのを兩親や夫の前どう隱してよいかわかりませんでした。

私はお父樣のお顏が好きでした。お齡よりは大變老けて見えて、よく人に六十幾つかときかれました。私はそのお顏を一度は繪にして置き度く思ひました。未だほんの繪を習ひ始めの頃お母樣をモデルにして描いた事がありました。その時お母樣が「お父さんも描いてもらつたらどうです」とおつしやつたら「そんなまづい繪描きに描いて貰ふのは御免だ御免だ」と仰しやつて、描かして下さいませんでした。お父樣は面倒な事がお嫌であつたので、じいつといつまでも座らせられるのがおいやであつたのでせう。私は今に、もつと上手になつて是非立派に描き度いと思つたのにそれも叶はぬ事になつて仕舞ひました。

晩年になるほどお父樣のお顏には淋しさが宿つて來た樣に私には思はれました。何故でせう。元氣なお父樣にと思つても、はたからお父樣のお顏を見て居ると何だか眼から涙がにじみ出て熱くなるのを感じました。もうこれでお別ではないのかしらとよく旅行をなさるお父樣を停車場にみおくる度に人知れず涙をこぼしました。最後の旅にはおみおくりも出來ませんでした。とう〳〵もう御目にかゝれる日はないと思ふと何んとも云へない程淋しくなつて來ます。何も御恩に報いる事の出來なかつた私は唯お父樣の靈の前にお詫びするより外ありません。

時論

野古川生

普選と政治教育

政治教育を標榜する團體の簇出　新聞の報ずる所によると、水野錬太郎氏を總裁とする「政治教育協會」なるものが去る七月十五日を以て發會式を擧げたとやら。普選は則ち政治的國民總動員であり、從て政治智識を普及向上せしめるのが先覺者たる吾々の任務だといふ邊に、設立の目的があるらしい。之より先き、同じ目的の「大成會」といふが有松英義氏を會長として生れたといふ報道もあつた。普選の實施に依て俄に一千萬の新有權者ができる之を從來のまゝに放擲すべからずとして色々の團體の發生を見るは蓋し怪むに足らない。斯うした團體は今後も色々の人により色々の動機から設けらるることであらう。

併し乍ら之等の團體が純粹忠實に政治教育を目的とするや否やはまた別に考量する必要がある。前記の報道を載せた同じ新聞は同一項目の末段にまた斯んなことを傳へて居る。『普選一部の有力者間には前記の如き諸運動以外に今少しく政治的色彩を濃厚にし既成政黨の圏外に眞に民意を基礎とせる新政黨を樹立しようといふ計畫もある』と。之から推すと、既成政黨の埒外に振り落された政界策士の中には、新有權者を踏台にして自家將來の地歩を作らうとたくらんで居る者のあることも想像される。普選實施後の政界の傾向が小黨分立の勢を馴致すべく、斯かる新形勢の下に在ては數十名の同士を集めたゞけでも相當の勢力を振ひ得べきを思ふとき、今更既成政黨に頭を下げるを肯とせざる大小の政客が、政治教育などゝいふ勿態らしい名目の下に新有權者の瞞着を試みんとするは、成程ありさうなことゝ察せられるのである。

新有權者に對する三樣の態度　普選の實施と共に激増する一千萬の新有權者は色々の意味に於て放任しては置けぬ、之を何とかしやうとしていろ〳〵對策を講ずるものある訳だが、大체の人は一體どんな考で出掛けるのかといふに、其間凡そ三つ

異つた態度がある樣に思ふ。一は純然たる啓發的態度で、何等裏面の野心を藏せず、新に得たる選擧權を如何に行使すべきかにつき親切に民衆の相談相手たらんとするものである。水野有松兩氏の運動が純粹に斯の趣旨に出づるや否は、兩氏從來の經歷に徴して疑はれるのは已むを得ないが、假令他に積極的の政治目的を有せずとするも、少くとも無産政黨運動等に對抗して新有權者の邪路(?)に誘はるゝを保護せんとする位の動機に出づるは間違ひないらしい。果して然らば之等の團體は寧ろ次の第二類に入るべきものであらう。純粹に此の第一の態度を執る團體はまだ多く起らないやうだが、個々の運動としては本誌最近の態度の如きは之であり、又學者先輩の個人的運動のうちにも此部類に入ると觀るべきもの少くないではない。之等の個々の運動が將來何かの機會に於て組織的に統一さるゝこともあらば洵に結構なことゝ考へる。

第二は民衆の教育乃至訓練を表面に標榜はするものゝ、實は自家の主張に民衆を引込まんとする態度である。水野・有松兩氏の運動が精々善意に解釋してもこの第二種のものに外ならぬは前述の通である。水野・有松兩氏と正反對の目的を有すと觀らるべき「政治研究會」の運動の如き亦この部類に屬するは言を待たない。この態度を以てする運動は、既に各種の團體に依て始められて居り、今後更に益々盛になると思ふが、我々國民は之等の運動に對しては、其の掲ぐる所の旗幟の何であれ、そは決して民衆の爲の運動ではなくして直接には彼等自身の爲の運動なることを忘れてはならない。其人の世俗的經歷や其のならべ立てる美辭麗句に眩惑し、直に我々の爲に謀て呉れるものと盲目的渇仰を捧ぐるのは大變な間違だ。さればと云て彼等の所説を我田引水の噓八百の御託とのみ蔑し去るのも正しくない。どうせ商人は賣らんことを欲して我が品物を只管に吹聽する。我々はまた必要あつて物を買はうといふ以上、諸商人の言ひ分を比較研究して愼重に進退を決せねばならぬ。故にこの第二種の運動に對しては、之を停車場前の宿引位に見做し、我々はどこまでも其間獨立の批評的態度を失つてはならぬ。

第三は新有權者を露骨に政治的に利用せんとする態度である。此態度をとる者の主として政黨であるべきは言をまたぬが、我國に在ては、近き將來に結成を見るべき無産政黨の準備的母體たる各種の團體に依て既に盛に此種の運動が始められて居る。之に比較すると、本來誰人よりも此事に熱心であるべき筈の既成政黨が今なほ案外に鎭まり返て居るのは一寸不思議である。が、是れ併し乍ら、既成政黨の地盤たる從來の有權者が主として有産階級であり、新有權者たる無産階級に改めて媚を

にするに當て昨秋以來[illegible]とする所ではまさま
いふ[illegible]にせしただけだと思ふ。是からな
お、既成政黨は擧つて新有權者に對し積極的態度に出づるを辭
み、一方俳に有産階級の意嚮を傷はざる程度の軽い社會政策的
新綱領を餌に遠巻に無産階級の意を迎へつゝ、他方別働隊を組
織してかの勞資協調的精神の下に民衆を指導訓練せんとの異想
的運動を試みんとして居る。斯うした下らない運動が、水野・
有松兩氏の試みに繼いで今後可なり盛に一起一伏すべきはまた
略想像するに難くない。此間に處して、夫の無産政黨主義者の
運動は頗る意義あるものであり又大に刮目に値するものである
が、今のところ其運動に統一が缺け、確乎たる方針も定らず、
兼ねて着實重厚の風に乏しいのは、我々の太だ遺憾とする所で
ある。

猶ほ無産政黨運動に關しては我々に特殊の意見があるが、そ
は他日項を改めて大方の教を乞はうと思ふ。

普選に伴て必要とせらるゝ「政治教育」の意義　前述の如
く、政治教育を標榜する運動には種々隱れたる不純の目的を包
藏するものが多いから油斷が出來ぬ。そんなら純粹に「政治教
育」を大事な目的と掲ぐるものは皆安心していゝかといふに、
さうも可かぬ。そは「政治教育」の意味を取り違へて飛んでも
ない迷妄を我々に與へるものもあるからである。[illegible]
「政治教育」の意味を取り違へた結果、[illegible]
肝腎の弊害をば却てそのまゝ放任するといふ樣なものに至ては
ザラに在る。そんなら選擧權の普及に伴て憲政の完を期すに必
要とさるる「政治教育」とは一體どんなものであるべきか。

そは外でもない。團體公共の事務を托する爲には、常に眞に
優良な人を擧げ、其選に當つた人は多數國人の期待に背かず誠
實に其任務をつくすといふ、共同生活に於ける極めて平凡なる
習性を政治關係にも活用する樣民衆を訓練すること是である。

この事を明にする爲に吾人は先づ次の三點に讀者の注意を促
したい。

（一）従來政界の弊害は、選ぶ者も選るゝ者も共に眞面目で
なかつたといふことに原因がある。立憲制度に關して一ト通
りの知識があつたとか無かつたとかいふことにはあまり關係
しない。否、知識の相當に高い者の側に却て惡い者が多い事
實もある。

（二）政治知識は全く無用だといふのではない、少くとも代
議士たらんとする者には必要だ。一般公民の素養としても之
を知つて居るに越したことはない。が、併し之を知らなけれ
ば絶對に選擧權の行使が出來ぬといふ訣のものではない。

(三) 政治のことは能く分らぬが兎に角大事の事だから信用のおける立派な人に投票しやうとの平凡な誠意さへあれば、其人は立派に立憲國民としての任務を盡し得るのである。

そこで今日我國の政界に何が一番必要であるかゞ明であらう。政弊救濟の爲に所謂「政治知識」の普及向上が必要だといふなら、中學卒業以上の國民は總べて政弊の埒外に超然たるべき道理だ。然らば概して高等の教育をうけたと観るべき代議士間の腐敗の事實を何によりて説明するか。故に予輩は斷言する。我國の今日に缺けてゐるのは知識ではない、誠實なる習性である。時弊救匡の目的で唱へらるる「政治教育」は、先づ第一にこの點に着眼すべきであるまいか。

然るに世上の所謂政治教育論者は、どうしたものか此點を重視しない。口を開けば政治知識の普及向上をいふ。こゝが予輩の彼等に慊らない所である。

所謂政治教育論者と吾人の立場との相違　有權者の激増に伴て俄に政治教育の必要なるを騷ぎ出す人々の立場を分析すると、凡そ次の様なものになると思ふ。

一、從來の制限選擧制の下に在ても選擧民の無識は政弊の大原因であつた。普選の實施に伴てこの原因は一層強く活らくであらう。

二、之を防ぐには何よりも先づ選擧民を教育せねばならぬ。即ち立憲政治といふものゝ本來の意味を能く了解する様教へ込まなければならぬ(公民教育の普及)。

三、恒産なき多數の下層階級者の間には、輕卒に過激危險な宣傳に乘る者なしと限らぬ。之等の弊を防ぐ爲にも我國獨特の政治組織を理解せしむることは此際頗る必要だ。

右の中の第三點を論ずることは、自ら一箇の思想問題の討論となるから茲には略する。第一點に就ては吾人の服し得ざるもの二つある。一つは選擧民の無識を政弊の主因とすることで、二つは從來見るが如き政弊(例へば選擧界の腐敗の如き)は選擧權者の數に正比例して増大すべしとの見解である。

予輩に云へば、我國憲政の腐敗をもたらせる主たる原因は實は政客彼自身に在て決して選擧民にはない。假令今日選擧民は概して腐敗してゐるといふが事實だとしても、之は政治家に教へられ又は誘惑されて識らず〱斯うなつたので、始めから惡い事をしやうといふ了見であつたのではない。加之今日腐敗して居る程度から謂つても、一般民衆の方は遙に政治家自體よりも淺い。故に若し今日の政弊を矯めるといふ目的で政治教育を云々するなら、それは第一着に先づ政治家に向けられなければならぬ。と云つて予輩は民衆の政治教育を全然無用といふのでは

ないが、今日の政治教育なるもの[illegible]、教育せらるゝ[illegible]であると云ふ點にのみ止まれること、予等は、逆に云ふべき[illegible]たる政客者流の腐敗が看過されて了ふ恐あることを憂へずには居れない。予等は、今日政治家の腐敗たるや所謂教育に入るものにして到底一朝に癒し難きを知るが故に、逆に民衆の教養を高め之に由て政界の醜状を制せんと考へることはあるが、本來政治家さへ誠實に復れば民衆は自ら正路に落ち着く筈のものと信じて疑はない。何となれば民衆の腐敗はもと政客に誘はれた結果だからである。この見解はまた吾人をして普選になれば今日の政弊は一層増大するといふ斷定にも反對せしめる。選擧權の極度の擴張は政客慣用の民衆誘惑手段をして頗る活躍に不便ならしめ、爲に政界廓正の運動に意外の功果を奏せしむる機緣となることは、從來多くの國に於て實驗せられた所だからである。斯う云ふ點からして、吾人は普選の實施と聞いて假に「政治教育」の必要を痛感するといふ一派の人々の態度には、其儘賛同することは出來ぬのである。此等の人々のいふ様な「政治教育」は、普選の實施如何に拘らず常に同一の程度に於て必要であるべき道理ではないか。

併し吾人は之とは少しく別様の意味で、普選の實施に伴ふ「政治教育」を矢張り必要と感じては居る。從來の選擧權者の大[illegible]にも[illegible]正路に[illegible]なつた[illegible]の民衆[illegible]とすることに[illegible]しく指導する外はないからである。之が實に吾々の政治教育を[illegible]立場である。結果は同じことになるが、動機が根本的に違ふ。從て實際の運動に伴隨する志向に於ても色々相違する所がある。

第二點の政治教育の内容に關しては、前にも述べた如く吾人の見解は全く論者の立場と相反する。どういふものか我國の識者間には、民衆間に於ける多少の政治知識の普及が政界現行の弊害を防ぎ得べしと考ふる者が多い。普選を實施するに先ち國民教育年限を延長する必要なきやとは、屢貴族院で繰り返された質問だ。普選の實施に應ずる教育的施設として公民教育の課目がどうの中等教育に於ける法政經濟の課程がどうのと、是亦再三文部當局から説明された様である。當局の施設だけでは足りまいとて、更にまた民間に諸々の團體の起るを見るのであるが、之等の總てを通じ、政治組織に關する知識の青年間に於ける普及が實に今日の急務だとする見解には皆一致して居る。之等の知識は無論無用ではない。併し其の機械的記憶はどれ丈け憲政の正しい運用に資するだらうか。衞生學をそらんずる者必しもからだが丈夫でない如く、足の弱い者に旅行記を與へたか

らとてすぐに達者になるとは決まらない。況んや今日の政弊の主因は決して知識の欠乏に在らざるをや。

吾人は平素、政治知識の普及向上など云ふことは決して今日の所謂「政治教育」の重要な内容をなすものでないと考へて居る。尤も工業教育とは工業上の知識を授くることであり美術教育とは美術を教へることだといふと同じ形式に政治教育を云々するのなら、之は正しく政治知識を授くることに外ならない。併しさういふ意味の政治教育なら、工業教育や美術教育と同様高等専門の教科に屬し、普選の實施に伴て特に必要を痛感せらるべき事柄ではない。そもそも當面の問題は、從來とても憲政の運用はうまく往かなかつたが普選の實施を見ば此點一層氣遣はるゝ、之には國民の側に何等か缺陷のあるのであらう、之を一つ矯正したいと云ふ所から起る。そこから昨今「政治教育」といふことが叫ばれるのであつて見れば、文字に拘泥して之を單純な知識普及の問題なりと早呑込みすべからざるは亦明白であらう。

如何にして政治教育の効果を擧ぐべきか　そんならどうすれば政治教育の眞の効果を擧ぐることが出來るかと云ふに、第一の先決條件は敢て其の任に當らんとする者に考へ直して貰ふことである。從來のやうな考では前項にも述べた通り結局効果もあがらねば時としては悪い結果を伴ふことすらある。第二には彼等に自分達が必しも其の最適任者でないことを反省して貰ふことである。政治教育の要諦は智識の傳達ではない、特殊なる習性の訓練であるとすれば、タマに顔を見せて一場の講演をした位で出來る仕事ではあるまい。最適任者の誰であるかを見定め専ら其の人々の活動を促し、我々は謙遜して之等の人々を助成するといふ態度に出なくては、本當の効果はあがるまいと思ふ。

そんなら誰がこの仕事に於ける一番の適任者か。理想的に云へばそは母親である。所謂三ツ兒の魂は百までとやら、一生涯に亙る習性の多くが幼年時代の訓練に基くとすれば、母親の感化を第一に問題とするは決して奇矯の言ではない。況んや他日公生活に於て見るが如き選擧代表の事實は、頑是なき幼童の間にも行はるゝものなるに於てをや。例へば兄弟數名集つて御母さんに菓子をねだる相談をする。すると其中の誰かゞ總代に選まるゝに相違ない。其場合談判に成功した總代が途中でコツソリ盗み喰ひしたり又は特別に餘分の分け前を取らうとしたりなどせば、彼は決して他の子供達の心服を得ることが出來ぬ。此際もし母親が、總代を選むにはどんな心持で爲すべきか、選れた者はまた如何なる心懸であるべきかを、夫れとなく親切に教

[illegible]、其の心持がなくてはならぬ。[illegible]心持となるのである。公民教育たるんで特殊の内容を有するものと思ってはいけない。子供同志の遊び事にでも必要とさるる心持の自然の延長で沢山なのである。此意味に於て予輩は政治教育の最適任者は極端に云へば母親だといふのである。

併し今日の母親に此の大任をまかして安心出來ぬことはいふまでもない。母親其人に對する心得としては幾度之を繰り返し力説しても無駄ではないが、急速に効果を擧ぐるを要する當面の問題としては、母親以外に別な最適任者を求めなければならぬ。斯う考へて來て私は、玆にどうしても小學校教員に着眼せずには居れぬのである。何となれば彼等は幼年期の習性訓練を專門の仕事とする特別の階級であるからである。

所が小學校教師と政治教育との關係に就ては、由來我國に飛んでもない誤解がある。政治教育は中等以上の學校教師の考ふべき事で、小學校教師は全然之に關知しなくてもいゝと云ふ見解の如きは、政治教育の意味を智識の傳達と誤解した結果に外ならずして固より取るに足らぬが、小學校教師は國民教育の神聖を保持する爲に斷じて政治に關渉しては成らぬなどとの見解に至ては、一面に於て相當の理由もあるが、又一面に於て政治教育の效果を擧ぐるの唯一の根源とも云ふべき彼等の活動を故[illegible]渦中に投ずべからざるは云ふ迄もない、[illegible]昧に[illegible]を苦々しき事の限りと思つて居る。政治に關する[illegible]くして[illegible]政界の渦中に投ずるは、[illegible]印するの感なしとせぬ。此點大に警戒を要するが、されば と云つて小學校教師に全然政治と沒交渉たれといふのは、更に誤りて喇叭を吹くの類たるにとゞまらない。私共はこの點を讀者と共に大に考へて見たいと思ふのである。

我々の共同生活に於ては、どの道、代表者を擧げて或る事業の遂行を托するといふ必要は再々起る。此場合我々はどんな人物を擧ぐべきか又選に當つた者はどんな心持で受託事項を處理すべきか。之等の事は實は小學校生徒の間にでも屡起る事柄だ。或は級長の選擧或は運動會の委員若くは學友會の幹事の選定など、特に其の機會を拵えないでも幾らでも出て來る。之等を我々は決して子供のやる遊び事だなどと輕視してはならぬ。若し學校長や教師やが、之が他日公民としての必要なる資格を作る根基となるのだといふに着眼して、不眞面目な選び方をするの不利、選ぶ者選ばるゝ者相結んで私利を圖るの不道徳等につき、十二分に教え込まんか、所謂習ひ性となり、他日公民とな

つた場合、如何にして彼等は不義の誘惑などに陷ることがあらう。悪い事をしたくとも出來ぬといふ習性は、是非とも小學校時代から作るのでなければ本當のものではない。

私は更に斯うまで考へて居る。總選擧などのある場合、小學校でも學校長教師の眞面目な監督の下に生徒をして亦試みに投票さして見たらどうかと。之が本當にまじめに行はるゝなら、之こそ一層適切の具體的政治教育になると思ふ。尤も之には學校當局者の政治に對する一層の聰明と地方有志家の短見偏僻なる苦情に屈せざる獨特の見識とを前提要件とする。生活の方便を町村に依て左右されてゐる現今の教員に之を期待し難きは言を待たぬが、本來の理想からいへば、英米諸國に屢見るが如く、小學校がモット實際政治の興味に兒童を引ツ込む樣にして欲しいものと思ふ。

去年東北の某縣で、總選擧直後、ある小學校で級長の選擧をやつたら一票幾錢とかで買收したものがあつたといふ。教師は公民教育の意味で生徒の自由にまかしたのだといふが、之などは公民教育の意味を理解せぬに基く監督疎漏の一好例である。

次は小學校の問題ではないが、高級の學校でよく擬國會をやることがある。本來の主意は矢張り政治教育といふ事にあるのだらうが、予輩は未だ甞て一度も、この擬國會が國家の選良たるものはどういふ氣持で國事を議すべきかの眞面目な例を示したといふ話をきかぬ。概していふに現實の議會に於ける最も不仕鱈な點のみを最も誇張して笑ひさゞめくといふのが擬國會の面目と謂ていゝ。故に擬國會は訓練の機會でなくして宛として一場の餘興に過ぎぬものとなつた。そしてこの擬國會のチャンピオンが他日選れて本當の議員となる。昨今の議會が此種の青年議員に由て更に大に不眞面目にされて居るは讀者の既に氣付かれた所であらう。

そこで私の結論は斯うだ。政治教育の最適任者は小學教育當局者である。不幸にして彼等は今日此事に餘りに無理解だが、之は彼等の責任といふよりも寧ろ彼等を不當に政治から遠ざからしめた社會の罪である。故に政治教育を憂とする識者は、この點の蒙を啓發するに大に努力する所なくてはならぬ。彼等自身の力で政治教育の效果を擧げ得ると考ふるは誤りである。斯う態度をきめれば、更に進んで如何なる具體的方策に出づべきやは自ら明白であらうと思ふ。(十四・七・三〇)

近き將來に於ける解散の有無

解散の有無　憲政會單獨内閣の成立と共に近き將來に於ける解散の有無が問題となつて居る。假令新内閣と貴族院の多數勢力との提携が出來ても、下院に於ける政本兩黨よりの脅威はまだ十分に去らない。或る方面の噂の如く、政府が研究會を介して政友本黨と聲息相通ずるに成功せば格別、萬一何かの拍子で政本兩黨を意外にかたく結ばしむる樣な事でもあれば、解散は避けんとして避け難い。いづれにしても政界の現狀が斯んな風である以上解散は全然ないと安心する訣には往かない。

解散忌避の傳統的信念　我國では由來解散を非常に怖がつて居る。議員の之を厭ふは尤もだが、政府もつとめて之を避けんとし、世人一般も之を不祥事視して疑はぬ趣がある。さればこそ政變の度每に「解散の餘儀なきに到ては陛下の宸襟を惱し奉るの畏多し、出來る丈政局の安定を保持し得る者を」といふやうな事が、後任奏薦の任を辱うせる元老の週邊に物語られる。即ち我國に於て何人に大命を降すべきやを決する最要の標準たる[illegible]味に外ならない。[illegible]憲政會の多年の唱道たる憲政常道論が屢中間内閣の出現に由て一蹴されたりしたのも、みな此の「政局の安定」が何よりの大事と認められた結果に外ならない。其の癖我國は可なり解散を頻發する方だが、それでも解散は成る丈避けやう又避けるのが正しいとする傳統的原則の儼存することは忘れてはならない。

解散の本質　併し解散の本質から云うと、屢之を繰返すのが手數だといふ以外、何等之を避くべき理由はない筈である。固より面白半分に之を弄ばれては堪らない。原内閣が一度試みた樣に黨勢擴張の目的に之を利用するが如きは確に一の罪惡である。が、普通に解散を必要とするは新に選擧民の判斷を問ふ場合で、謂はゞ計算のやり直しともいふべき筋合のものである。正確を期する爲には、疑の起つた場合、計算は、何度でもやり直さねばならぬ筋のものである。それ計りではない。解散に伴ふ總選擧は、その理想的形態に於ては、選擧民の政治教育を高むる最も有効な機會でもある。故に純理論から云へば、必要に促さるゝ解散は何度でも繰返して結構な筈である。

何故解散を忌むか　所が我國に於て之が不祥事とされて居るのはどう云ふ譯か。是れ多揣を要せず解散も總選擧も理想通り

に行はれないからである。總選擧の教育的意義が全然沒却され否却て反對の結果を呈するは謂はずもあれ、解散に依て新に眞の民意をきくなんどいふは、痴人一場の夢に過ぎず、無用の金を費し莫大の精力を消耗して得る所は僅に腐敗と怨恨と頽廢とに過ぎぬとすれば、屢之を繰返すを天下に畏多しとするは尤もな話ではないか。だから我國では、行掛り上飛んでもない時に解散を斷行するクセに、必要缺く可らざる時に却つて之を省略して怪まぬといふ事實もある。例へばかの普選法通過の場合を見よ。普選案はどう云ふ趣旨で通つたのか。從來の制限選擧制は憲政運用上よろしくないといふ熱烈な要求に基いたものではないか。そしてやッと改めた新選擧法は數年の後に到らされば實行せぬといふ。丁度今まで飲んだ藥は間違ひだ病氣の爲によろしくないと分つて、さうぢやないと反對する頑迷派を口說き落し、やつとのことで新しい處方箋を書いて貰つたのに、此藥は三年後から呑むことにする、當分は依然前のわるい藥の服用を續けるといふやり方だ。外の國なら普選案が通ればすぐ議會を解散して面目の一新をはかるに相違ない。之が當然の事理だのに、この當然の事理の當然ならぬ所に實に我國の特色があるのだ。しかし是れ獨り政府の罪ではない。

將來の豫測　憲政會の黨略から云へば、解散を誘導する方が得だ。けれども政界の傳統的信念に迎合するといふ意味に於ては、出來る丈解散を避けた方がいゝ。理論から云て解散必しも避く可らずとするも、目今の政情の許に於て、解散が黨略以外に利用さるゝ見込なき限り、故らに之を誘致するは必要でない。この意味に於て貴族院操縱や本黨誘致やの策略を廻らして所謂「政局の安定」に苦慮する現内閣の方策に聊か諒とすべきものあるを見る。之が何處まで成功するかは今後に於ける解散の有無を判ずるに重要な鍵となるものであらう。(十四・八・九)

思想的暴力團の蠢動

厄介な暴力團　暴力團の橫行に對しては其の趣旨の何れであれ、本誌は從來無條件に其の不都合を鳴らして熄まなかつた。相手方の辯明を聽かず事實の眞相を究めず暴力を以て一擧に我意を通さんとするは、其自身正義の蹂躙であるからである。而して此種暴力團の橫行近時やゝ下火になりかけたと安心してゐたのに、此頃又もや一種の變裝的暴力團が思想戰の假面を冠つて評論界に現れて來た。社會進步の大勢から觀て、時代落伍者の蠢動は、よし其が死物狂ひの亂舞であつても、全然齒牙にかく

るに足らないものできるだ、[illegible]ただ、一時的には厄介千萬此上もなきものである。就中之と趣向を異にして外形を同うせる眞面目な運動（假令頑迷固陋の譏はあつても）が彼等の爲に不當の誤解を招ぐものあるに至つては、實に氣の毒の至である。

暴力團共通の性質　純粹暴力團と變裝的又は思想的暴力團とには共通の特徴があると云ふ人がある。其說によると、街頭にステツキを振り廻す人も文筆を以て惡罵冷嘲を逞する人も、共に頼まれてやつて居るといふ點は同一だといふのである。物質的報酬の對價としての仕事と見れば、之も生活の方便と大目に見てやるべきものかも知れぬ。就職困難の當節口腹の爲には女郎屋の番頭でもせにやなるまいといふ場合、生活の爲なら宮内大臣の私邸に亂入したり何々博士を惡罵呼はりする位は屁でもないわけだ。兎に角割のいゝ日當になれば何でも引受けるといふに不思議はない。不景氣風の段々浸み込んで來るに從つて此種の文化的（？）賣節勞働者の著しく殖えて來るのも、一の時勢粧と見れば致方もない。私は此說の當否を判ずるだけ事情に通じて居ないが、相當信用されて居る學者級の人までが曲筆舞文で平氣に友人を傷けて居るのなどを觀れば、商賣として之をやつて居るのだといふ說も或は本當かとも思ふ。

[illegible]た生眞面目でもあつた。[illegible]に於ては、[illegible]せば解く分るとの信頼を繋け得たのであつた。此頃の暴力團は、理否の分際を相當に分つて居りながら、たゞ口腹の爲に心にもない惡聲を放つといふのだから始末にをへぬ。併しそれ丈けまた一方に眞に人を動すの力もない。

思想的暴力團の特徵　反動的思想團は從來とても澤山ある。頑迷な點は厄介であつたが概してまじめなものが多かつた。而して之等眞面目な團體にも迷惑をかけて居る最近策動の所謂「思想的暴力團」は主義信念の爲に反對派を糺彈するのでなく、單に惡罵の爲に惡罵を試みるといふ點に新しい特徵を示して居る。どうせ職業として之をやるのだ。惡罵が痛烈であればそれ丈成績が擧るといふ訣なのだらう。彼等は其發する惡罵を裏付ける爲に、遂には事實を枉げ針小を棒大にし甚しきは無い事をあるが如くに揑造する。殆んど君子の云爲ではない。あゝまで極度の罵詈を列ねては却て效果が薄くなるだらうと思はるゝが、固より公衆に聞いて貰ふよりも依頼主に見せるのが主眼であらうから、之も利口な方法かとうなづかれぬでもない。

思想的暴力團の發生の社會的意義　昨今いゝ氣になつてうごめいて居る何とかいふ思想的暴力團が頻りに惡罵の鋒先を公私

の大學に向けて居るのに對し、此間或讀者から次の樣な投書を寄せて來た。一面の解釋として傾聽するの値があるやうに思ふ。

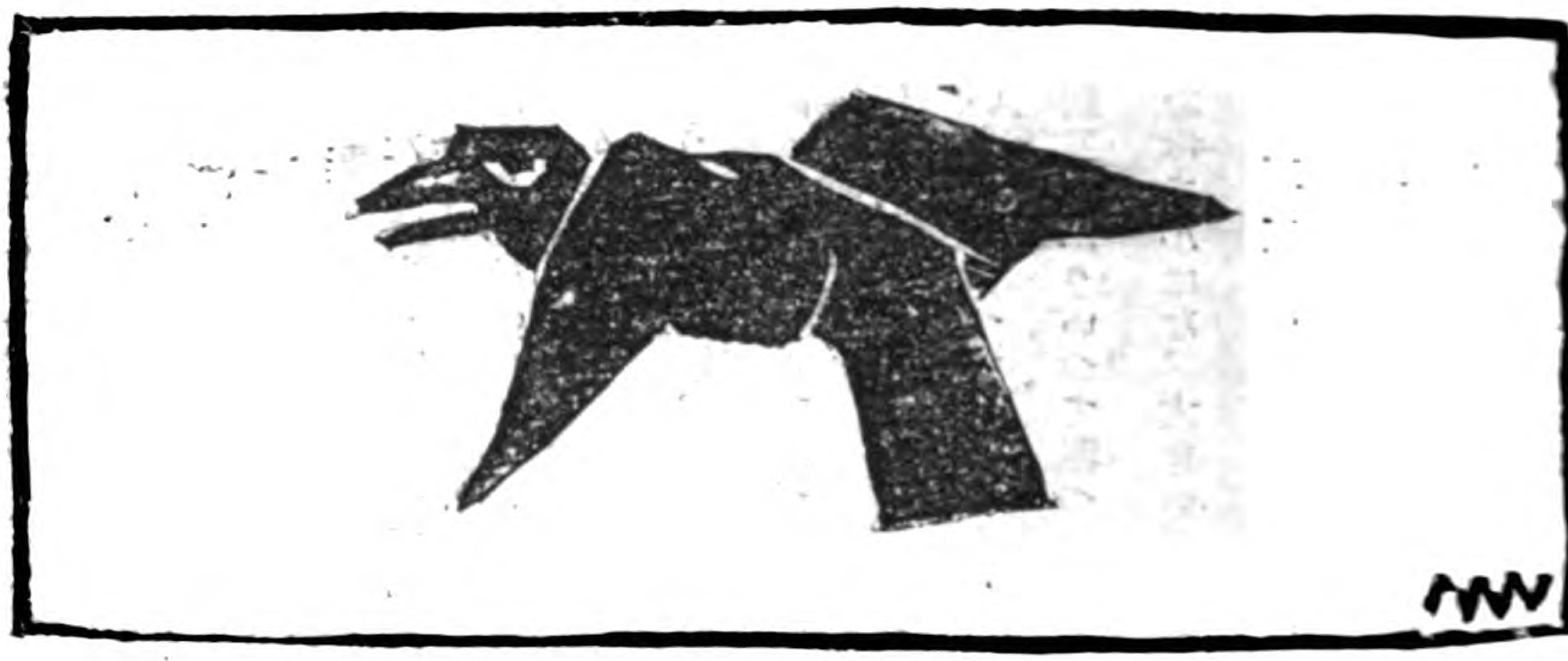
「思想的暴力團が捏造誇張の事實に基いて公私各大學に攻擊の鋒先を向けて居るのは、取も直さず之等各大學に動いて居る清進活發の思想が今や如何に全國の青年を影響して居るかを語るものにして、人文の進歩の爲め誠に喜ばしい現象だと思ひます。

「私の聞く所では、普選實施の結果新に一千餘萬の新有權者が殖えるが、其の多數を占むる都鄙の青年が一體どんな思想を有つて居るかを調べた所、それは概して新思想（老人輩の所謂）にかぶれて居るといふ事が明になりました。新思想と云つても色色あり一概には云へぬのですが、頑迷な或る一部の階級は之を頗る憂ふべきことゝし、國家の將來の爲に是非とも何等かの方策に出でねばならぬと云ふことになつたのださうです。其の爲に二つの方法が案出されました。一つは積極的に民衆を善導する運動です。政治教育協會なんといふのは此の機運を代表するものでせう。も一つは消極的に民衆を新思想宣傳の根源から遠ける方策です。夫には事理を諄々しく說くよりも離間中傷が一番有效だといふので、さてこそ思想的暴力團の發生を見るに至つたのだといふことです。而して各大學の洩なく鎗玉に上げられてゐるのは、大學が實に新思想宣傳の根源と觀られてゐるからであります。

「私は思想的暴力團の大學攻擊に刺擊されて、實は各大學內に鬱勃せる清新活發の奉仕的改革精神が今や意外に廣く深く全國の青年間に影響して居ることに氣付かされました。之では頑迷派の死物狂ひに狼狽するのも無理はないと思ひます。夫れだけ私は日本帝國の將來に於ける隆運を樂觀せずには居られません。思想的暴力團の蠢動が悪辣になればなる程、全國青年の國家的精神は益々本當の規道に目覺めて來るものと見ていゝと思ひますが、どんなものでせう。（一四・八・十二）

八月十八日から東京朝日新聞に桐生悠々氏の「民衆の永久的基礎＝學校立憲國の提唱」なる論文が連載されて居る。本欄所載の「普選と政治教育」と符節を合するが如きものがある。併せ讀まれんことを讀者におすゝめする。（野古川生附記）

中央公論第四十年秋季大附録號創作



地獄

中河與一

一

健太は二十八時間といふもの汽車にゆられ通して來た。

三等車の堅いシートで腰が痛くなつてゐた。額にさはると黑い脂汗がべつとりと指につく。それにあまり食事をとらなかつたのと、ろくろく眠りも出來なかつたのとで、何となく身體全體から力がぬけ、眼が落ちこんでゐるやうな氣がした。

電報の事についてはもう考へつくしてしまつたし、唯だ歸つた上は思ふ存分に父を面罵してやらう――そんな氣持だけが、それも殆どものうく繰り返されるともなく頭の中で繰り返されてゐるのであつた。

汽車が山科驛へ着いた時、彼は前半身をのり出してプラットフォームの方を見た。誰れか來てゐるかもしれない。若し來てゐたら自分はひとまづ途中下車をしよう、そして此處にゐる筈の母親にも逢つておかう――さう出來た方が都合がいゝのだが――と思つた。あらましでも電報をおこしたいきさつに就いて聞けるにちがひ

ない………

『兄さん、兄さん、』

續けさまにさう云ふ聲が聞えて來た。健太はすぐ田舍臭い弟達が二人改札口の處につつ立つてゐるのを見つけた。親しい興奮が感じられた。彼は小さい手提鞄を取りあげると平凡に下りて行つた。

あたりはもう暗くなつてゐた。

『お母さんは此處にゐるんだらう』

『うん』

『どうしてお前達、電報なんかよこしたんだい、つきのからで到頭お母さんが離縁でもされたのかい』

健太は怠るい舌で云つた。つきといふのは父がおいてゐる妾だつた。

田舍町らしい電車が宵淺い灯を入れて時々からのまゝで三人の前を走つて行つた。

『いや一寸待つてくれ、もう少し暗い處へいて話すけん』

新二はかういつて默つたまゝ急くやうに健太の先きにたつて裏路の方へ這入つて行つた。

『お母さんにな、大きい兄さんが歸つたと云ふといつてくれ、さき走つて行つて』

新二が三郎に命じた。三郎は爽むさうに身體を前こごみにして走りだした。病身らしく身體がとがつて鋭く見えた。

『まるで話にならんのや』

『お父さんだらう』

『うん、お父さんもやが、お母さんもや』

新二は一寸氣をつまらせてから

『わしも此頃會社の方を休んで帰つたばつかりやけに、くはしいことは知らんが、どだいがお父さんが馬鹿で、あんなつまらんつゝきなんかをそばへ置いといたのがもとや』

それをきくと健太は喉をしめつけられるやうな氣がした。實際その事に就いては、彼はもう長い間父をいぢめ通して来てゐるのであつた。

『それでどうしたと云ふのかい』

『お父さんがなあ、お母さんが人と二人でゐる所を見付けたんやさうな』

『けど其の位の事ならええやないか』

『まあ 待つてくれ』

『けど、お 母さんが二十幾年もお父さんと一緒にゐて、十年位は唯だ一緒に住んどつたと云ふだけだつたのをお前も知つとるだらう。わしはお母さんに少々のあやまちがあつたにしろ、その位の事は許してもええと思ふよ。そんな事を云ひよつたらお父さんにはどれ位罪があるかわかりやせんぞ』

『まあ待つてくれ』

新次は静かにさういつて、

『けど、そんなんぢやないんや。お父さんとあのつゝきといふ女がな、お 母さんの現場を見つけたんやいふから』

『現場とは何んだ』

『そなな事云へるもんか』

平生はよくふざける新二さへが苦い顔をして云ひにくげにさう言つた。そして續けて附けたした。

『それだけならええが、まだ他にむつかしい問題が出來とるんや』

健太はたつた今先き迄心に抱いてゐた母の幻影を一時にバタバタとくづされるやうな氣がした。(あゝ自分の長い間愛してゐた母が、そんな事をしようとは!)

『どんな問題なんだい、一たい』

彼は暫くして尋ねた。新二はそれには答へないで、

『お母さんはもう長いこと眠らんのや、兄さんに逢ひたいが、逢ふたらひどいめに怒られやせんかしらん云うて、心配しとる』

かういつて向ふへむいた。

健太は咽喉がつまつたやうで長い間、ものが言へなかつた。彼は一寸でもそんな事を母に就いて考へた事があつただらうか。彼は家庭に事件がある度に、母を氣の毒に思ひ、父を憎んで來た。それだのに今度の出來事は彼が想像してゐた事とは餘りにも違ひすぎてゐる。健太は昏倒しさうな氣がした。

二人は默り込んだまゝ町はづれを通り、何時の間にか田圃道に出てゐた。月の光が稻の切り株をしらじらと照らしてゐた。向ふの製紙場の黒い低い屋根の下からは、ものうい機械の音がむせぶやうに聞えてくる。

家に着くと母と三郎が炬燵にあたつてゐた。

母は髮がほゝけ、頬が落ちて、何となく顔がどす黒く醜く見えた。母はすぐ炬燵の上にうつむいて暫く顔をあげなかつた。健太は一瞬間、つよい憎悪を其のみじめな姿に感じた。

「白状白状だ、殺したのはお前たちまへだ」さういふ氣がした。
「健太や、お前が早よもどつてきて、ええようにしてくれるのを待つとつた」
母はやつとそれだけ言ふと、又布團の上へ顔を押しつけた。すすり泣く聲が聞へて來た。
健太は一寸またたきした。……然し今度の事件も母を離婚する爲めに父やつきが、母を陷入れやうとして計略にかけたのではなかつたらうか……さう云ふ考へが思ひがけず頭に閃くと、不安な疑念がつぎつぎと起つて來た。
が兎に角、彼は先づ父の家へ歸るのが順序だといふ氣がした。さう云ふ事になつてゐる母と話さなければならぬのは第一嫌だし、父一人を單純に惡く思つてゐただけに、此處へ寄つてゐる事が、少し父にすまなくも思はれて來た。話があまりに思ひがけぬ！
健太はろくろく話もしないで、其の夜すぐ終列車に乘つて、和氣の家まで歸つて行つた。
床につく前、彼は東京で留守居してゐる妻に、無事に着いた事だけを知らす短いはがきを書いた。

二

健太は父には一寸挨拶したきりで、其のほかの事では一口もものを言はなかつた。そして父に顔を合はすのをさへなるべく避けるやうにした。平生から父とは何となく話しにくいのだつたが、その上 父にはすぐうわてに來る癖があつたし、事件がまだどうなるかも知れんのに甘い顔を見せても惡いと思つたからである。
彼は今度の事に就いては木山と云ふ出入りの老婆が、誰れより黒幕にもなり、又表向きにも關係してゐるといふのを、新二から聞いてゐたので、朝早くから老婆の家へ出かける事にした。母が非常に木山を憎んでゐる事、それも知っ

てゐたが、事の眞相にふれるには老婆に逢ふのが何よりだといふ氣持があつたからである。

老婆は健太を見付けると炬燵から立つて來て、丁寧に彼を客間へ招じ入れた。

彼は簡單に御無沙汰を詫びた後、火鉢の前の坐蒲團に坐つた。

健太は年の寄つた老婆と對坐したまゝ、何故今度の問題を未然に防ぐ事が出來なかつたのかと先づそれを尋ねてみた。そして何故、あれ程彼が常々からいつてゐたつきなどを家へひき入れたのかとなじつてみた。

『つきさんを入れたのは、お父さんがあんまり忙しいおつしやるもんやけに、それに奥さんもええおつしやつてな』

老婆はしらとぼけたやうにそんな事を言つて、

『なんせ此の度びの事はもう世間一般が知りましたけに』

とおどすやうな顔つきで仰山に付け足した。

『何ですつて、どうしてそんな事があるんです』

『どうして云うて、先方がふれまはるんやからな。奥さんには昔から同情しとりましたが、今度のなさり方だけはどつも………』

老婆は時々うつむいて煙管を火鉢の中へのぞけて火を吸ひつけた。

彼は思ひきつて言つた。

『そりや惡い。何といひわけしてみてもそりや母が惡いけど。が貴方もどうしてつきなどを家へ入れてくれたんです。そして父とつきとが、母が人とゐる襖を開けたといふぢやありませんか。父やつきが母を離婚しやうと思つて奸計に陷れたんやと僕は思ふんです。でなければ、どうして二人がそろつて俄然襖を開けたんです』

彼はさう信じきつてさういつた。おきと云ふ女がそんな[illegible]事を単純にしようなどとはどうしても信じられなかつたから。然し彼は、それを言つたあとですぐ、あまり安心に言ひすぎたといふ氣がした。

『あんたがさう思はれるのももつともやけど、あなたはいろいろなことお知りにならんけになあ』

『ぢやもつと話してくれたらいゝぢやないんですか』

『あんたはお母さんお母さん云はれるが、お父さんのお心も考へてあげたらよござんすぜ、ちつとは。東京から歸つても、あなたは一口もお父さんに、ものを云はれんさうやが、あんまりですなあ』

『それには僕の方に考へがあるからです。けど、實際僕達は小さい時から父には叱られ通して大きくなつたし、さう父にはなじめないんですからな』

『そなな事はどうだか私は知りませんけど』老婆は其時、さういつて一寸うそぶくやうにした。彼はその態度にムッとして、呻るやうに言つた。

『どんなになつたつて今度の事件はなまはんかではすましませんから。貴方がつきを家へ入れた以上、貴方も責任をもつてあの女だけでもきつぱり追ひ出してくれなけりや……いつたい今何處へ隠してあるんです』

『けど、それどころやないんですぞ』

かう云つて、老婆は落ちつき又大きくでた。そして『嫌な話やけど』と前置して、仰山に聲を低くめてから始めた。

『貴方のお母さんが向ふの男にかなり澤山の金を借つとつたんです。ところが、その男と母さんとが居るのをお父さんが見付けたんでせうが、初めはお父さんの方で怒つておいでたんやが、今度は逆に、先方が貴方のお父さんを訴へにか

かつとるんです。借金をふみたくろと思うて、お父さんと奥さんとが腹を合してそなな事をしたというてな、なかなかむつかしうなつとるんや』

健太は坐つたまゝ膝がガタガタふるへて來た。恐ろしい氣がした。實際母や父がそんな考へを持つてゐたのではなかつたらうか…………

『けど、そりや向ふの男がえつぽど意地が悪いんや』

老婆は憩いるやうに其の事をきつく、きはだてて言つた。

健太は頭がこんがらがつて、見當がつかなくなつて來た。

彼は異常な事件を氣味の悪い老婆の口から幾つか聞かされて外へ出た。空が曇つて寒さが一層強く感じられた。

夕方になつて三郎が山科から來た。

母が淋しいから是非健太にも來てくれと云つてゐると云ふのであつた。

健太は自然に事件の内容に觸れて行きたいと思つた。觸れられるところから觸れて行かなければなるまい――さう思ひかへしたので、とにかく彼は三郎とつれ立つて停車場へ行く事にした。

身體の事を三郎に尋ねると『やはり面白くない』と云ふ。三郎は神經性胃病にかかつて、それがかなりひどく、半年位前からブラブラしてゐるのであつた。

汽車が山科へ着いた時には、もうすつかり日が暮れてゐた。

二人は先づ小西といふ家へ寄つてみる事にした。母の家へ行つても何處かへ出てゐるかも知れないし、出てゐるとすれば小西へでも來てゐるかも知れないと思つたからである。

『いんまさつきまで居られたんやが、お駒さんとこへ行くおつしやつて居られたところやさかい……まあおあがりなさんせ、お氣の毒に』

お内儀さんは健太達にさう云つて、おあいそをつかつた。さう云ふ意味ではなかつたのだらうが、二人はさう云はれると自分自身の中に、一層みじめな、氣の毒がられるやうな氣持ちを發見した。そしてことごとに心を暗くさせられるやうな氣がした。

お駒さんと云ふのは、三郎の話によると女祈禱師で、母が始終行くところだと云ふのであつた。二人は母の迷信をののしりながら歩いて行つた。

『けど、お前、お父さんが山科へ來たのは知つとるのか、お母さんが居るのを見つけに來たのは』

すると三郎は何の屈託もなしに、

『お父さんとつきと木山とがそろて來たんぞ、三人が組んで來たんぞ』と言つた。

『木山も來たのか』

『あゝ來ただんか』

健太はそれを聞くと老婆に對する憤怒がむかむかと起つて來た。まるきり第三者のやうな顏をしてゐた今朝の彼女の事を考へると、確かに彼等が母を陷入れたのに違ひない——と云ふ考が一層はつきりと頭められたやうな氣がして來た。金の問題や訴訟云々の事は、それで母をおどして父の家へ寄せつけない爲めの虛構にすぎない…………

二人は不潔な埃くさい小さいお駒さんの家へ來て尋ねてみたが、此處へも來てゐないと云ふのであつた。で仕方なしに外へ出た。

『あ、お母さんや』

暫くして三郎がさう云つて健太につげた。

ひどくうつむき加減に身體をちぢめながら、母が一心にこちらへ歩いて來てゐた。

『あゝよう來てくれた。淋しうて困つとつたのや』

母は炬燵をこしらへてからお駒さんの家へ行かうと思つて出て來たところだと云つた。が、そろつて三人は又家へひきかへす事にした。

『木山でいろいろ聞いたんですが、あれみんなほんとですか』

健太は炬燵にあたりながら尋ねた。

『木山の云ふ事は信用せずにおいといてくれ』

母は後の襖をしめながら答へた。

『金の事、云うてゐたが、あれもほんとですか』

『あんな事いうておどかすんや、たちが悪いけに』

母はどもりながらオドオドして答へた。そして健太とさういふ話をするのが恐ろしいと云ふ風だつた。健太はそれに氣付くと、もう少し、この事は母には尋ねないで時を待つべきかと思つた。母の心は今はげしく轉倒してゐる、それにも拘はらず母につきつめた事を尋ねると云ふ事は――それは可哀相な事だ。

然し暫くすると、母は『どうぞ頼むけに』と云つて、しつこく氣違ひのやうに、和氣の家へ連れて歸つてくれといふ事を繰り返しだした。

で健太は幾度も其事に就いてことこまかに話した。今はとても歸へれないし、いくら何んでもそれにあまり父に對してすまぬ事ではないか、父を無視した仕方だ……といふ風に云うた。

『けどお前、お母さんが可哀相やろが』

『それはわかつとる』

『そんなら賴むけにつれて歸つてくれ』

『ぢやお母さんはその人と一緖になる氣はなかつたんですか』

『それはあつた』

『ではどうして今になつて歸りたいなどと云ふんです』

『子供の事が心配になつて來たけに』

『向ふの人が惡いんでせう』

『それもさうや、けど子供の事が一番心配になつて來たけに』

『けどそなな事言うて、お母さんはあんまり勝手がすぎる』

『そんな事いはずに連れて歸つてくれたらええやないか、息子がお母さんを連れて歸るのに惡い道理がないやないか』

『しかし今はいかん』

『たのむけに、どうぞ歸らしてくれ』

『いかんといふたら！今は。なんべん同じ事いふんです』

『そなに言はんと、健や、どうぞたのむけに』

『しつこい！』

健太はあまりくりかへして同じ事をせがまれると、しまひには餘り事のわからぬ母に腹が立つて來た。

『何んです、しつこく言つて、わしを困らしたらええと思ふとるんや。お母さんは自分が惡いことをしといて、それを少しも惡いと思つてゐないんだからいかん。お母さんのやうなのはどうでもするがええわ、どうでも』

彼は毅然として鞭でなぐるやうに怒鳴りつけた。

『自分の惡い事をちつとは知るがええ、馬鹿馬鹿しい……何と云ふたつて過失をしとるんやから』

『けどお母さんは騙されたんやからの、つきが來てお母さんに印をつけ言うて離婚の印をだましてとつて歸つたんや、さうせんとお父さんが訴へられたら罪になるけに言うて。それで印を押してやつたのに……今更家へ歸らさんと云ふ事があるもんか』

まあ待つてくれ。そんなに性急に言はんでもいづれは歸るやうにする。けど、なんだつて又離婚に印を押したりなんぞしたんだ！

彼は口から出ようとしたやさしい言葉をグツとおさへた。

『ひつきやわん言うてもお母さん位ひつきやわんのはないわ。親切をしてさかしにやりつけられたんやから』

母はひどく泣き聲になつて來た。健太も怒りながら幾度も愛情の爲めに聲がくもつて來た。

『とにかく私は今夜和氣へ歸る。お母さんが家へ歸る話なら、なんべん聞いてもきりがないし、終列車の間にあはんと困るから』

『さう云はずにどうぞ連れて歸つてくれ、小んまい子供達や甲吉が見たいけに』

小さい子供と云ふのは末の子の十二になるのと、其の上の十五になるのとの二人だつたから、甲吉といふ、十歳の死んでゐる四男だつた。

「しつこい！」

健太はもう一度怒鳴りつけるやうに言ふと、少し血相を變へて表へ出た。彼はわけのわからぬ興奮で一杯になりながらやけに道を走つてゐた。

然し彼が驛へ着いた時、終列車は靜かに動きだしてゐた。彼は仕方がないと思つた。で今走つて來た道をポツポツとひきかへすことにした。

彼は母の爲めに藥種屋へ寄つて催眠劑を買ひ、それから共逕の起きてゐる菓子屋で饅頭を買つた。

歸ると湯湯をコップにとつて藥を一氣に飲まし、あとで饅頭を食べさした。母はおいしさうにして幾つもたべた。

『眠らなくちや駄目ですぜ。身體をこはしたら何んちやにならのやから……多分これで少しは眠れると思ふけど』

健太も飲む事にした。三郎も『少しくれ』と云つた。で四粒だけ掌にこぼしてやつた。

× ×

一寸眠つたかと思ふとゆり起された。枕下に母が坐つてゐるのであつた。彼は腹を立てた。眠い時に起されるのは、特別に彼は癪に觸はる癖があつた。

『もうお母さんのことなんか知らん、しつこい』

彼は幾度も背中を向けるやうにして蒲團をひつかぶつた。

『小さい子供や甲吉に逢ひたいけに、どうぞ歸らしてくれ』

彼は何時までも知らん顏をして相手にしなかつた。が、母は到頭、朝までそれを止めなかつた。

彼は其時ふと、母を東京へ連れて行かうと思ひついた。それが何よりいゝことかもしれない、二十幾年もの間、父と母とが爭ひつゞけながら、あれ程不機嫌に一つ家に住んでゐた事を思ふと、ソッとしないではゐられなかつた。きつと、母を連れてゆく事が母を救ひ、又父を落ち付けるに違ひない。母が家へ歸らうとしてゐる事、それには色々複雜した理由もあらうが、離籍といふ事を侮辱と思ふ古い習慣もあるに違ひない——東京へゆく心の用意さへ出來れば事件を究める事や、それに正しい解決を與へる事、それは急がなくてもいゝ——彼はさう思つた。

で彼は早朝、顏を洗つてくると、すぐ其の事を云つてみた。

母は勿論なかなか承知しなかつた。が、彼はその條件として、母を小さい子供達に一度逢はせる事、及び衣類を取りに和氣の家へ夜歸つてもいゝ事などを母に約束して承知させた。然しこれは云ふまでもなく一應父に相談して許しを得ての上でなければならなかつた。

彼はその日和氣へ歸つてから木山へ行つて、父にその事を言つてみてくれと言つた。

夜になつてから其の返事をきく爲めに木山へ行つた。子供達を見るのはいゝが家へ歸つてはいけない。子供達が山科へゆくのはイヤだが許す——と云ふのであつた。彼はその事を電話で母に知らさうと思つて家へ歸つた。と電話室でしきりにベルが鳴つてゐた。聞いてみるとそれは老婆の聲で、木山へ今母が山科からやつて來たといふのであつた。

健太はガチヤンと受話機をかけながら、『仕方のない奴だ』と云ふ氣がした。

たした宅に旬、小さいあにをつれて、彼はもう一度木山へ出かけることにした。

母はさし向ひに老婆と炬燵にあたつてゐた。そしてみそげな何かのやうに、母が買つて来たらしいたべ物が傍に置いてあつた。

一番小さい弟は母を見るといきなり泣きながら母の胸にさばりついた。健太はこれを見まいとしてよそを向くやうにした。

然し母は彼と約束した事などはてんで忘れたやうに、依然として「うちへ歸りたい」と其の事許り言つてゐた。弱り込んでゐるやうなく**せ**に、こんな事をこれ程しつこく云へる母はなかなかずるいと彼は思つた。

「けど奥さん、今は世間がやかましいし」老婆が言つた。

「やかましい云ふたつて、わたしはだまされたんぞな」

母はなかなか押しが強かつた。幾度となくこれを繰り返した。

「けどお母さんは幾度同じ事を繰り返すんです。東京へ行く決心がお母さんに出來ないんなら、もう私は明日にでも東京へ歸つてしまうから」

健太は母に其のことを言はれると、その度びに腹がたつた。そしてことに母のさういふわけのわからぬ處を他人に見られるのが一層不愉快でたまらなかつた。

彼は弟達を殘したまゝ怒つたやうにプイと木山の家を出ると自分のうちへ歸つた。

裏庭へ廻ると離れの座敷牢で、氣の違つた甲吉が何時ものやうに歌をうたつてゐた。彼は暗い心になつて、じつとそれを聞いてゐた。その夜はそれが馬鹿に淋しく耳についた。

三

翌くる朝、彼は新二と二人で自分達の子供時代からの室の掃除をした。そして埃のたまつた本箱の中にあつた彼の中學時代の教科書やノートを皆ごみすてに捨ててしまつた。

甲吉の日記帳などが出て來た。丁寧に字が書いてあつて、ちやんとしたものだつた。他人(ひと)の惡口などは一寸でも云ふ事を妙に嫌つた彼の日記には、隨所にその氣質の見えるやうな一節があつた――兄さん達と山へ行つた。山には萩が咲いてゐた。兄さんは萩を綺麗な花だと云ふ、然し自分にはどうしても不潔な感じがする。殊にあれが散りだした頃の腐りかけたやうな紫とも赤ともつかぬ花のむらがつてゐるのは見ても氣持が惡い。母に小さい松の苗を持つて歸つてやる――さういふのや――父に叱られた。父はなぜ口で云はないでなぐるのだらう。その事を思ふとなさけない。母はよしよし云うてくれるが、少し自分達をかばひ過ぎ、愛を強ひるやうなのが嫌だ。母は僕達に、父を惡く思ひ込まさうと努力してゐるのではあるまいか――そんなのがあつた。

長い間の父と母との爭ひ――その間にたつて子供達は小さい時から今迄どれだけ迷つた事だらう、そしてどれだけ惱まされ、小さい心を傷つけられて來た事だらう。他にどんな原因があつたにしろ、甲吉の氣が狂つたり、兄弟みんなが惡くしか成長してゐない理由に、どうしてかういふはげしい兩親のいがみ合ひが影響してゐないと云へるだらうか――――父が子供を叱ると、母はすぐ自分の味方にでもするといふ風に子供を自分の部屋へ連れてゆく、そして父がやくざで腕が無いといってきかす、父に叱られたつて平氣でゐればいゝんだと言ふ。父も機會がありさへすれば、子供の前でおらうと何處であらうと、女の癖に商賣に走りまはつて主人を主人とも思はぬ毒婦のやうな女だと母のことをののしる。

健太に思ひ出す――たしか五つ位の時であつた。

母の膝からおろされると、急に頭の上で大きい聲がした。母がよろよろと立ちあがりさまに、父は母の髮をつかまへてひきずり倒さうとした。

母の着物がくずれ、帶がその邊に長くなつた。それから母は父の手に咬みつくやうにした。やがて泣きながら立つてゐた健太は、父の爲めに荒々しく室の外へつき出された。扉が閉められると室の中では爭ひが益々はげしくなるやうだつた。それから健太は頭が重くなつて來て女中か誰れかに支へられたのを知つてゐる。その翌る日から母は暫く床についでゐた。今から考へると其の時の爭ひがあまりに慘酷すぎた事を父も母も自分で知つてゐたのにちがひない。そしてその時ばかりは子供に見られるのに堪へられなかつたのにちがひない。健太は戸の鍵穴からじつとのぞきながら、ガタガタふるへてゐた時の恐ろしさをよく覺えてゐる――

それだのに父と母とは別れなかつた。それが健太にはわからなかつた。父の社會上に於ける名義が、母が商賣する上に好都合であつた――母は夫婦生活が乾燥するに從つて父の商賣下手をののしりながら株式などに興味を持つて來た。……父の方から云へば、母に對する憎惡を强く持ちながら尙ほかつ母の經濟に關する手腕にたよつてゐたのではあるまいか。然し二人の間には何か喧嘩に對する嗜好――そんなものがあつたとより考へられない。爭ひながら二十幾年間一つ家の中で生活が出來たといふ事は人生の一つの特殊な狀態にちがひない。父は多くの點で異常な潔癖を持つてゐたが、屡々女の事では過失（あやまち）をした。この事も常に子供逹に大きい迷ひを與へてゐた。父は口が下手で、いつでも云ふ代りに手を出す。そして子供逹も母と同様に、事があるたびになぐられた。あはれな子供逹！　彼等の精神は蝕ばまれ陰鬱に歪んでしまつてゐる。

健太は掃除をすますと、甲吉の日記帳だけを新二にしまつておくやうに云ひつけて、氣持ちを晴らす爲めに外へ出た。

餘り廣くない川の岸に、灰色に枯れた蘆が寒さうに風に鳴つてゐる。そして中程から折れさがつたまま水につかつてゐるやうなのは、じつとささつたやうな氣持ちで濁りの中に靜まりきつてゐた。

彼はうつむいたまゝ歩いてゐた。

道が墓場へ出た時、彼は頭をあげてその邊をひとわたり見渡した後、冷たい石塔の間を暫く歩きまはつた。

時々落葉がヒラヒラと落ちかかつてくる。彼は歩きながら平安で明るい感じだと思つた。葉が殆ど散りつくして、白い石塔のぐるりを全部樺色につつんでゐる。彼は心から落ちつけるやうな氣がした。

それから寺の方へ出て、經堂の石段に腰をかけてかなり長い間休んだ。

家へ歸つてみると、伯父から健太に宛てた手紙が來てゐた。母の兄である。自分が行くから暫く上京しないで居れ――、と云ふやうな文面であつた。

父の方でも健太や新二が何か言つても返事をしなかつた。

「伯父が來たら一緒に話しする」

たゞさう云つてゐるのであつた。健太は伯父が早く來ればいゝと思つてゐた。

夕方になると其處此處の堀が凄い冷たさで生物の眼か何かのやうに光つて見えた。彼は裏庭に立つたまゝ、ふと甲吉の姿が昨日頃からしないのに氣付くと、嫌な豫感を胸にした。で臺所へかけ込むなり、下女に甲吉の事を尋ねてみた。

そして温い御飯とお茶とを持つて座敷牢へ行く事を命じた。暫くして下女は持つて行つたままの物を持つて歸つて來

た。そして

『まだほしうないおつしやいます。うす暗いからよう見えなんだけど、口から一杯血のやうなものお出とりました。血のやうなものが』

と恐ろしさうに慄へながら云つた。健太は胸がドキッとした。急いで新二を呼んで來ると、二人はカンテラに灯をつけて米の錠前をあけ、中へ這入つて行つた。臭いしめつた空氣が鼻をついた。

口から——何か嘔吐でもしたらしく、血ではないらしいが、一杯口のはたに着いてゐた。此四五日御飯をたべないで蜜柑ばかり食べてゐたといふから、そんなものでも吐いたのかも知れなかつた。

甲吉は垢のついた小さい袷の着物から兩膝をはみ出したまゝ坐つてゐた。やせて細くなつた身體が痙攣的に寒さでガタガタふるへてゐる。そして髪や髯が凄い程のびてゐた。彼は怒つたやうに二人の闖入者を長い間にらみつけてゐたが、突然機嫌のいゝ顔になつて、自分勝手なことを何か呟きだした。健太はこんな有様を見るにつけても父に腹がたつた。

『何がいそがしくてつきなどを家へ入れたんだ。此の有様は一體どうしたのだ』

彼は憤慨して新二にさう言つた。新二は奥の間の炬燵に一杯火を入れてから、其處へ甲吉をつれて行つた。甲吉のふるへはいつまでもやまらない。

『子供が地獄へ落ちるのを知らんのか、馬鹿！』

時々そんな事を云つた。ふとすると

『お茶だけ飲ましてくれ。魚の浮御堂が來たら春になるけんのを』そして、ははははつと間放もない哄笑ひをしたり

した。

やはり痙攣が止まない。おどけ者の新二は古い毛のシャツを探しだしてくると、それを冠つて甲吉を脅すやうな恰好をした。

『ウウウウ……ヤイ、コラ！』

然し甲吉は微笑しながらシャツの上から新二の頭を撫でた。

『こりやいかん、だめや』

新二はシャツを投げだした。そして甲吉のよごれた襦袢をそれに着かへさしてやつた。

暫くしてから健太と新二は裏庭に出て、座敷牢の窓に大きい雨戸を打ちつけて、せめてもの寒さを防ぐ用意をしてゐた。二人ともそれをしながら涙がとめどもなく頬を流れおちるのをどうする事も出來なかつた。みじめな兄弟だ——そんな氣がした。

「そなな事したつて何にもならんぞ。」

茶の間の窓からそれに對して父が大きい聲で怒鳴つた。良心的にも少しはとがめるのか、自分がさうしなかつた事に理由でもあるやうな事を云つた。二人は父を相手にしなかつた。

夜になつてから二人はそろつて伯父を停車場まで迎へに出た。がやはり來ない。

多分夜中の十二時頃だつたらう、新二は父に起されて甲吉の番をする爲めに奥の間へ行つたらしかつた。

四

翌る日も伯父はやつて來なかつた。
健太は少しイライラして來た。彼のかんがへでは何處までも事件をつきつめて。白日にさらさなければならなかつた。伯父の奸計に陷し入れられてゐる事をはつきりさせ。そしてそれを公表してやらなければならない と決心し。伯父が[illegible]によつて圓滿で。もつと穩事に都合よく解決がつくならば。勿論それでも惡くはない。さう思つてゐただけに。伯父の來ぬ事は少し彼をじらしだした。
夜になつてからであつた。
誰れかが表戸を叩いてゐるやうだつた。彼は伯父かと思つていそいで戸を開けてみた。と其處には從妹が小さな子供をおぶつたまゝ立つてゐるのであつた。彼はその意外に一寸驚いたが、兎に角茶の間へ通した。
『どうかしたんですか』
『私ね、少し惡い事したんですの』
從妹はそんな事を云つて明るく笑つた。嫁入り先きから逃げて來たといふのだつた。
『六時間も汽車に乘つたので子供が可哀想でしたわ、伯母さんゐて』
『あいにく留守なんだがね』
『何處、御遊方』
『いや一寸』
『をばさんに是非きいて貰ひたいと思つて來たんですけど』
彼は今のところ、どんな事情にしろ、父に云つては一も二もなく駄目だらうし、ひとまづ山科にゐる母の宅まで[illegible]

を連れていつてやらうと思つた。で子供をおろさうとしたのを止めて、二人はすぐ停車場へかけつけた。

『隨分久しぶりだね』

『ええもう………かれこれ七八年にもなるでせうか、あれからずつとお眼にかゝらないんですから、』

『姉さんも丈夫？』

『ええ、おかげで』

健太は從姉の家からK大學に通つてゐた頃の自分がどんなに放恣で、だらしがなかつたかを思ひ出して、少し氣づまりになつて默つた。――それでゐて父や母を責めようと云ふのか――一寸そんな考へが心をかすめた。

少しの間たつて汽車が來た。

彼は從妹を先きに乘せてやつてから自分もつゞいて乘つた。

『はじめからあんまり氣が向かなかつたんですけれど』

從妹は突然に、そんな事をいつたりした。

『幾つ違つてるんです』

『おなひどしなの：：何處がどうといふことはないんですけれど、ものを食べながら口をふくらましてものを言つたり、何となく下品で嫌なんですの。今度だつて、さうとりたてて云ふ程の理由はないんですけどね、つまり棒が折れたんですわ、こないだも：：：：：：』

と云ひかけて彼女は事實にふれるのを避けるやうに口をつぐんだ。

『理由がないつて事はないだらうがね』

いところがないんですよ、ほんとに』

それから暫くして富枝は

『いつたい、をばさんはどうしたつ』と尋ねた。

『こつちにも今一寸こまつた事があるんでね』

それに對して從妹は格別深く尋ねやうともしなかつた。そして

『どこもかしこも惡い事ばかしですわね』と云つた。

汽車の中で腰をかけたまゝ彼女は十分間餘り首を垂れてうとうとと眠つた。かなり疲れてゐるらしかつた。

汽車を下りてから暫くして背中の子供が泣きだした。彼はうしろから歩きながら靜かにたたきつけてやつた。彼はさうしながら東京に殘してゐる自分の子供や妻の事などを思ひ浮べてゐた。

母の家へ連れて行つたが、誰れもゐなかつた。健太は從妹をひとまづ其處へ屆けておくと、すぐ停車場の方へひき返した。

父の家へ歸つてみると、伯父が來てゐて一人客間に坐つてゐた。そして火鉢の灰にしきりに何か書いてゐた。

父が丁度留守だつた。伯父はいくらか聲をひそめて云つた。

『お母さんは今何處にをるのかい』

『山科、山科の方の家に、問題が起る前からゐたらしいんです。でやつぱし問題もあの家で起つたんださうです』

『でお父さんはひどう怒つとるかい』

『歸つてからまだ格別話しはしないんですが』

『それがお前いかんよ』
其處を伯父は一寸高い聲で健太をたしなめるやうに云つた。
『もう籍の上でも離婚になつてゐるらしいんです』
『離婚』
伯父は鸚鵡返しにさう言つて、一寸當惑したやうな顏をした。
『母自身同意の印を押したといふんですから』
其時、父の足音が外で聞えた。健太はすぐ立ちあがつて自分の居間へひきこつた。

五

少しばかり雪をまじえて風が烈しく吹いてゐた。健太は伯父に言はれて役場へ出ぬ前にと思つて起きぬけに戸籍吏の家へ出かけた。
行つてみると火鉢に一杯火をおこして蒲團を山のやうにかぶつたなり、戸籍吏は喘息の發作で寢てゐた。
『お寒いのに朝早くからやつて來て。よろしいでせうか、……大變急な事でして』
『持病のこつちやから別にかまんが、どなん事ですな』病人は重い蒲團の下から悪い笛のやうな聲で言つた。
『母の籍のことなんですが』
『ええ』
『あれはいつたいどうなつとるんでせうか。實はつきや木山など云ふ人間の奸計にかかつとるんで、吾々殘念がつとる

んですが』彼は一人ぎめでさう云つた。

『あれは貴方のお母さんの認印もありましたし、受けつけましたんやがな』戸籍吏は苦しさうに文箱のすゝけた蓋を出した。

『けど、里方で母の籍を受けとる人がなければ』

『いや、それや年齢が年齢やし、合意の離籍といふ事になつとりますから』

『だつて伯父は……母の兄が向ふの戸主なんですが、何にも知らんと云ふんですが、それでもええんですか』

『それはとにかく役場にうけつけた日から有効になつとるんです』

『里の方の戸主に關係なしにですな』

『ええ……實はお母さんのお在る處を貴方のお父さんにも聞いたんやが、どうしても言はれんでなあ、考へなをす事も四度許りお父さんにすすめてみたんで、何しろ二十四年も一緒に居られたんやから』

『そうですか、それはありがたうございました』

『けど、お父さんの言はれるには、もうそなな事云うてくれるな、わしは身を切られるような思ひをしとるけに、樣が惡いとおつしやるんです……』

健太は折角の希望をすつかり失つて辭して出た。

彼は歸つてくるとその事を一寸伯父に云つて置いてから、又伯父の手土産を持つて木山へ出かけた。

陰欝な顏をして老婆が坐つてゐた。神經痛だと云ふので、少し彌の上の方が眼にひつかけて張れてゐた。彼はその事の見舞も言ひ、又伯父からの言葉をそのまゝにつたへた。

彼は此の老婆を見るとイヤに反撥心が起つて、ひどくおどしつけてやりたいやうな氣がする。それは向ふのとりよう

した善人振りにも腹がたつからであつた。その癖、すこしは恐ろしいのである。

『な、木山さん、つきなどを二度と入れるやうな事をしたら、僕はたゞではすましませんぞ。それが父の慰めであらうと、そんな事はどうでもいゝんですから』

『それはもう、私にしてもお家の爲めを思うて何事も致すのやけになあ』

『僕だつて、女がそれほど必要なのなら家の外へ置いといてくれと云つて父に幾度手紙を出したか知れないんです。父が淋しいとすれば、それ位の事はわかつとるんです。子ですからな。けど父は頭からそんな事は相手にしてくれなかつたし、……で到頭こんどのやうな事になつてしまつたんです。斷じてあんな女を二度と寄せつけたらいけませんよ……いゝですか……わかりましたか』くりかへしてさう云つた。

『けど此の際、貴方がどなん言うても、つきさんを怒らしては御家の御損ですぞ。裁判沙汰にならうとしてゐる時に。若しつきさんが貴方の御兩親が相手から金を卷きあげやうとしてしたとでも云うたら……』

『しかし、貴方もあの時、父やあの女と一緒に山科へ行つたんではないんですか。いつそのこと、こんな連中は父だつて母だつてですよ、珠數つなぎになつて監獄へでも何處へでも行つたらいゝんです』

彼は興奮して、寧ろさうなつた方がいゝと實際思つてさう言つた。なんだのかんだのと、互に弱點を握りあつておどしつけながら事件を自分の都合のいゝように片附けようとしてゐる。——こんな下らぬ老婆にそそのかされて、あんな愚劣な手段で父が母を離緣したり、女を家へ入れやうとしたのか——それを思ふと彼はムカムカと腹がたつて來た。そして父も母もあんなみぢめな狀態に陷入つてゐる……彼はゐたまらなくなると、肩をそびやかして立ちあがつた。

『どうにでもなつてしまへ』そんな氣がした。電燈がともる頃、木山の老婆がやつて來た。客間で火鉢を眞ん中にする

と、老婆に、健太と云ふ人をたづねて來た二人に違ひないが[illegible]してゐる。

健太は其處へ這入つて行かうかと考へたが、這入つてゆく事に氣がおちない一向強つてもなかつた。もうこんな偏つたやうな問題にはふれたくない——寧ろそんな氣がした。

が暫く彼は床に這入るのを辛棒してゐた。木山が歸つたら話の經過を伯父から聞かなければならない……さう思ひながら目が自然にふさいで來た。連日の疲れでも出たのか、眠むくつてとめどがなかつた。

六

冬の空の鮮かしく晴れた朝であつた。

健太は顏を洗つてからすぐ叔父の部屋へ行つてみた。昨夜十一時頃まで話をし、それから伯父は一人で寢酒を飲み、三時頃まで起きてゐたといふのであつた。

彼は伯父が木山にゴマかされてはゐなかつたか、その事を氣づかつていろいろと尋ねて見た。然し伯父は、なかなかむづかしい事件だといふやうな顏をして、

『お前が東京へ連れて行くと云ふとるさうやが、それが一番えゝかもしれんぞ』と言つた。健太は大方夜があけるまで一人で酒をのんでゐた伯父のことを考へると淋しい氣がした。

木山といふ老婆は歳はとつてゐるが、なかなかしつかりしてゐる——伯父はさういふ意味の事を年長者らしい口吻で彼に云つて聞かせたりした。

九時すぎであつた。彼はふと思ひだすと、郵便局へ行つて電報をうつた。

『ケンシンノタンジョウヲシュクス』

最初の誕生日である東京の健信——自分の子供への祝電を妻に送つたのである。

彼が郵便局から歸ると

『まあまあ小旦那さん』と云つて中年寄の方の女中がひよつこり彼の部屋へ這入つて來た。彼女は暫く彼の顏を見てゐたが、少し唐突に

『御心配でござんすなあ』と云つた。

『いや仕方がないよ』

彼はあまりとりあはぬやうに答へた。

下女はさも重大な事を話すやうに低い聲で、つきといふ女がどんなに弟達につらくあたり、又どんなに氣の違つた田吉を虐待してゐたかを言葉ばかりの誇張で話した。

『しじゆう、わたくしやこし見とりましたんやけに』

それが誇張である事は相手にもわかつてゐると彼女自身も知つてゐながら、やはりさう話してゐると云ふ風だつた。

健太は見えすいた同情の口吻や、斯う云ふ場合、そんな事を云つて媚びられてゐるやうなのが不愉快だつた。で『さうかな』とか『そんな事もあつただらうな』とか、唯だそんな風にばかり答へた。

『けど金持や云ふやうな所には、たいがい、こいよなことがあるもんですつせ……世間もすぐ忘れてしまひますしな……』

何と思つたのか下女はそんな事をつけ加へた。親切のつもりで、世間にさらにある事件だと云つたものらしい。彼は

これを聞くと、張つて一時をつになつたやうな氣がして、心が陰鬱になつて來た。

下女が靜かに障子を閉めて部屋を出て行つた。彼は急にもう一度呼びとめて、下女にこちらから積極的にもいどみかけたい氣が起つた。もつと事件の眞相にハッキリと觸れたい。（いよいよは仕入にまねさせてみやうか。然し實際は誘惑せられただけなのだらうか。あの金の問題は一體どう云ふいきさつなのか……）

葉頃だつた。突然山科から電報が來た。三郎が危篤だといふのであつた。三郎の病氣は平生から思はしくなかつたし、神經性だといふのが、中吉の例もある事ではあるし、かなり氣になつてゐた。

兎に角、新二が先づ一人で行く事にした。

『死んだつてかまやせんわ。あいつはお母さんにばかりついて。死んどつたら向ふで葬式するやうにするんやぞ、うちへなど持つて歸るんでないぞ』

父はぷりぷりしながら深鮮に幾度もさう云つてゐた。それでも新二に金を五十圓ばかり渡してゐた。

健太は父の言葉を聞いた時にカツとした。何といふ冷酷な態度だらう！さう思つた。然し伯父は

『お父さんも苦しいからのを、世の中からはいろいろと沙汰をせられるし、そりやお父さんの身になつたつてたまらんぞ』

といつておいて但し書のやうに

『けど家といふものは心が大事や、だいたい心が駄目やからこなな事にもなるのや』と附けたした。

『さうです』

健太は其の時、勢ひこんでさう云つたが、父が悪かつたから家が駄目になつたのだといふ伯父のありふれた見解に對

しては、唯だそれだけではないといふ氣持が突然强く心の中に起つて來た。
『今朝、お父さんにも言うといた。わしをわざわざ呼び寄せておいて、何にも云うてくれんのや困る。遊びに來たんやないからのを』
『自分でその事を云ひたくないから、逃げとるんでせう』
『けど今晩は意見を吐くと云ひよつた』伯父はさう云つた。
健太は此の間掃除をした時、見つけ出した寫眞機で、學校から歸つて來た小さい弟を二人並ばして寫してやつた。現象をする爲めに三人は赤い暗室ランプをともして押入れの中へ這入つた。
『お父さんやつきが出てしもて、子供と下女だけにしといて、警察からや云うて、家へ電話をかけたりするんぞ、嚇すんや、悪いけに』
そんなことを云つたりした。子供ながらに木山や女に對する反感をかなり强く抱いてゐる事が、健太にはいぢらしく思はれた。
暫くすると闇が眼に馴れて來た。末の弟が小さい脛を出して窮屈げに坐つてゐた。寫眞はみな失敗だつた。
新二が歸つて來た。
『三郎はたいして悪いんでもないけど、お母さんがだいぶん僕等に逢ひたかつたのい。又歸らしてくれ云はれて困つた』
さう云つた。そして、父に對して三郎のことを、どんな風に返事しておくべきか、そのことに就いて二人は暫く相談した。
七時頃になつてから、伯父のゐる客間へ父が行つた。そして健太が這入り、新二がつづいて這入つた。火鉢のぐるり

へ詰め寄つた。

父は云ひにくげにして始めた。

『わしは一體何んでもこちらへとる方やけど、今度の事だけは實際、泥位たらええが、面目を丸つぶしにせられたんやけに。わしが好かんのに平生から株式や何かに勝手に手を出したりしよつたが、その事はわしもほつといた。ところがお前に一ケ月前には、男と一緒に人もあらうに木山へ云つて宿めてくれと云ふたと云ふ事もあるし、或る日聞いとると、或る人間を斬り殺してくれと云ふて女祈禱師を雇うて來て祈禱しよつた事もちやんと聞いとる……叱つて從順に聞くやうなんならええが、わしの云ふ事など、てんから馬鹿にしとるし……ほんまに、しまひには恐しになつてくるんや……』

そんな事をいちいち話した。そして

『あれも同意したから離籍してしもた』さう言葉を結んだ。

健太は時々、話の中で嘘らしい處や、急所のやうな點だけは突くやうにした。たとひ思ひがけぬ悪徳が母にあつたにしても、父が他の女を傷つけたこと、そして同時に家族の者に與へた迷惑、それは又打ち消さるべきものではない筈だ。それと同樣に此の場合、つきや木山の罪も勿論不問にせられるべきではあるまいと考へた。

それは父自身が今度の問題で苦しんでゐる心は充分に察せられた。然し、母を離籍しようとして木山の指し金で事を運んだといふ事が健太には不滿足に思はれた。いくら手際は拙くつても、父自身の考へと行動とによつて、もつと卒直に母を離籍する事が出來なかつたのか。

然し、そんな事を考へながら矢張り母と云ふものに對する憎惡と、父への氣の毒さが、今更らのやうに強く健太の胸に湧き起つて來るのだつた。

『いや、よくわかりました』伯父が云つた。

『我田引水と云つて、世には自分の便利のええやうにだけしか物を解釋出來ぬ人もある。が何にしても此の度の問題は妹が惡い。妹として刺し殺してもまだ足らん。いやあんなものはどうなつてもええ』

暫く沈默が續いた。何か抗議でもするだらうと思つてゐた伯父が、うは手に父の言葉を承認してしまつたので、一寸思ひがけなかつた。で、其の當座、どう云つていゝのか、健太や新二にもわからなくなつてしまつた。父も少し面喰つてゐるらしかつた。健太は此の場合、まさか伯父に全々贊成するやうな事も言へないし、それかと云つて父をひどく怒らすやうな事とか、或ひは子が母の事に關して不潔な質問をして、父がそれに答へる――さう云ふ事も出來ないと思つた。父が默つてゐるので、伯父も二の句が出ないといふ風だつた。で、みんなやはり默り込んだまゝで坐つてゐた。やがて新二がしきりに火箸で灰をいぢりだした。それが益々イライラしくなつて來る。そして息づまるやうな沈默でみんなの心が重たくなつて來た。

暫くしてからであつた。

父はそれが外交的手腕とでも思つてか、突然、骨董品の話を始めた。

『山陽が竹田にやつたといふ手紙が手に這入つたんですが』すると伯父が、

『賴家へ行きましたが、丁寧なもんですなあ、四日位するとちやんと鑑定書をつけて……』

そんな事を話しだした。そしてしまひには勳章の話になつたりした。健太にはそれ等の話があまり唐突でたはいなく馬鹿らしかつた。こんな話をしてみてもどうにもならぬのにと思つた。然し彼自身も何んとなく一二度、それに口をそへたりした。

『そんなら眠たくなつたけに、お互に止めにしませうか』

父が先づさう言つて立ちあがつた。みんなそらぞらしいへんな氣がしてゐた。つかみどころのない、何か物淋しい氣がしてゐた。張りあひがなかつた。健太も新二も、さしづめ云ふ事がないやうな氣がした。で默つたまゝ、久振り部屋を出た。

淋しいイヤな氣持で一杯になつてゐた。二人は二階へ上ると默つたまゝ床に這入つた。二人共ねむれなかつた。

三十分位して新二の方から始めて聲をかけた。

『今日のは、ありや何んや、親睦を計つたやうなものやなあ』彼らしい諧謔で批評した。

健太もそれを聞くと蒲團の中でたまらない程の笑ひが、ひとりでに出て來た。

七

『つきの事だけはわしがひきうけたけに』

翌くる日の朝、伯父はさう言つた。健太は弟達にも云つて若し困つた事でも起つたら、伯父が一番近いんだし、すぐ知らすやうにせよと云つて聞かせた。兄弟はみんなして伯父を停車場まで見送る事にした。

なかなか腕ききだといふ名取りの伯父が、殆ど何の張り合ひもなく、父からあれだけの挨拶をうけただけで歸つてゆくのが、健太には氣の毒に思はれた。やはり母の方に何か大きい缺點があつたのに違ひない……

『今朝、つきの事はわしからお父さんによう話しといたがお父さんも弱つとつた』伯父はやはり少し酒に醉つてゐた。

汽車に乘つてからも又窓から首をつきだして云つた『それからな、お母さんの事やが、健太、お前がしやんとして監督

せなならんぞ』

伯父の言葉には肉身としての母に對する感情がこまやかににじんでゐた。

『そんなら、さよなら』

『さよなら』

『お母さんの事たのむぞ』

汽車が風を切ると酒くさい息が健太の眼の中へ這入つて來た。兄弟は暫く伯父を追つかけるやうに汽車についてプラットホームの上を走つた。

汽車の影が見えなくなつてから、皆はひきかへした。

『伯父さんだいぶん醉うとつたのを』

『うん』

『淋しさうやつたのを』

『うん』

健太は歸り路で柳行李を二つ買つた。母の手近かな着物などを詰める爲めである。

彼はもう此の上、此處にゐたつてどうにもなりさうにないし、つぎの事を伯父が引きうけてくれた以上、後事を人に托して東京へひきあげてもいゝと考へた。

金の問題や、動機の問題に就いては、昨夜は一寸も觸れられなかつた。その事はもの足らなくもあつたが、又恐ろしくも思はれる。何かそれには深い理由がありさうでもあるし、つゝついて失敗しても馬鹿らしいと云ふ氣がした。第一

母を受けとるべき住居を、広い野原も持たないで、今のやうに間借りにでもすまはせておいてみることが、どういふ
に、事件を明るみにさらけ出すにも及ばないと云ふ気がして来た。これは少し賢がないやうで仕方なく、自分でもイヤだつたが、母を東京へつれて行く事だけでも、小さい事ではない！　彼はさう云ふ風に負け惜しみからでも考へた。

そして彼は東京で自分を待つてゐる者の事を考へ、彼等がどんなに不安に、自分の帰京を待ち暮してゐるだらうかと考へた。

時間表をくつてみて、彼は早速その晩の汽車で山科まで出る事にきめた。然し彼は自分の心の中だけでも、もつと安心が出来るやうに、母から事件の内容をつきつめて、はつきりと聞いておかうと決心した。これはどんな事があつてもしなければならない事だ。

彼は新二と二人で、さしあたり入用さうな母の衣類を、長い間かかつて選択した。そしてひとまとめにすると、一枚一枚行李の中へつめていつた。健太はさうしながら、ひどく感傷的な、あはれな気持になつてゐるのに気付いた——小さい時から自分達にその愛を強いやうとまでした母、然しもう死んでしまつた木の片、そんなものにかぶせるこれは着物にすぎない——

細びきをよくしてから行李にかけると、健太と新二とがそれぞれ其の両端を持つて、しめつけるやうにした。

『一寸お父さんが来いと云ひよる』

末つ子の弟がさう言つて健太を呼びに来た。行つてみると父は机の前にちやんと坐つてゐた。

『今後は何事も戸主の権利でするから、お前達は一切黙つとる方がええぞ』

そんな事をいつた。そして、

『節季の取りたてにも人手が無いけに、もう商買も止めてしまう』さう言つた。

それが健太をおどかさうとする子供じみた言葉に聞えたので彼は敢然として答へた。

『それもええでせう。が僕等で言はななならんことは、これからだつてはつきりと言はしてもらひます』

健太は父の臆病なくせに、高飛車にこちらを参らせやうとする態度が嫌だつた。もういゝ加減にお互の氣持をわかりあつてもいゝではないか……父はやはり苦りきつた顔をしてゐた。

彼は夕方の六時になると、俥屋を呼んで來て、母の行李二つと、自分の小さい鞄とを積みこました。

驛へ行くとまだ三十分位あつた。新二と上の弟と、年増の方の女中とが見送りに來た。彼は女中には金一封をやつた。暫くしてから末の弟が風呂に這入つとつたと言つて、湯上りの濡れた頭のまゝ慌てて見送りに來た。

『東京へ着いたらな、寫眞の藥を送るから待つといで、それから、お母さんは兄さんが東京へつれて行くから安心しておいで』

弟達は一寸涙ぐんでうつむくやうにした。

汽車が出るまぎはになつて、富枝を探しに來たといふ男がやつて來た。

『山科へ御いでになるとお父さんから聞きましたんで、どうぞ御一緒に』

『あゝさうですか』

健太は従妹の事も考へられた。嫌つて逃げて來たのに、又もとの所へ連れて歸られる――それも仕方がないと思つた。

『ぢや一緒に行きませう』

れ反対に歩きだした。その時、突然、新二には目はきつと見はつて行くと云つて[illegible]中へ入つて[illegible]小さい[illegible]に悲さうな目附きをして見送つた。

山村へ着くと朗はすぐ人力車を雇つた。健太達よりも一足先きに向ふへ着きたい様子であるらしい。二人は仕方なく歩いて行つた。

『昔なら、木山やつきのやうな奴は斬り捨てごめんといふところで、すぐ片がつくんやがのを』

新二らしい事を言つた。

八

富枝の子供が危げにしかし思ふまゝに、室中を走り廻つてゐた。時々おぢいさんの後へ行つて肩をたたいたりする。

朗は富枝に、何處かへ宿をとる事を相談してゐた。

『けど、ええでしようが、あまりなさくろしごさんすけど』母がさう云つて、それを止めてゐた。健太も

『折角ですから、どうかおとまりになつて下さい。今から行く云うても、もう十時ですから』と云つた。

『けど御氣の毒ですし』そして向ふへむいて『富や子供を負ひなさい』

そんな事を言つてゐた。富枝は不平らしく子供を背中にさばらしてゐた。

『折角ですから、どうぞ宿つて下さい。もう宿へ行かれても戸が閉つとりませう』

健太が二三度くりかへして言つた。すると朗は思ひ返すやうに

『ぢや、とめてもらひませうかな』と云つた。

七人は少い蒲團をかぶつて、炬燵のぐるりに、窮屈げに眠つてしまつた。

眠れない母は暫くしてから、同じやうに眠れない健太に、又和氣へつれて歸つてくれと云ひだした。

『けどお母さんはちつとは自分で考へてみないかん、悪いことをしてゐて、それがわからんのか』

と健太は怒りつけた

『お父さんから聞いて、もうあきれてしまうとる』

『お父さんがどなんこと云ふたか知らんが現に此の事の始めに、お母さんは木山とつきと二人で相談しとるのやから木山がうまい話がある云うて、お母さんを誘ふたのやから』

母は低い聲でさう強く云つた。その言葉は健太をつきのめすやうにドキリとさせた。

『お父さんはその相談には加はらなかつたんですか』

『加はらなんだ。お父さんにそんな事が出來るものか。臆病やから』

ではやはり母は木山やつきの計略に巧みにのせられて、裏をかかれ、離籍せられ、木山やつきが父の滿足を買はうとする材料になつたのに過ぎないのか。然し母達が訴へられるやうな事を計畫したのも又全くの事實に違ひないのか。——

さうしてみれば、よしそれがどんな風に解決せられるにしろ、又そんな事を誰れに示唆せられたにしろ、誰れと相談したにしろ、そんな動機でそんな事を、誰れが一體出來るのだらう。恥しらずめ！

『もう聞きません、お母さん、よして下さい』

健太は横へ向いて、蒲團をはねのけて立ちあがつた。

「家の爲めを思ふばつかりに、計略にかけられて、お母さん一人が苦勞せんならんことや。今日はまるさいな、また
の状態がどうなつとると思ふのや」
「そなことどうでもえゝやないか。とにかくお母さんが欲すぎた」
母はそこのところに一種の自信を持つて言つた。
「なるほどお母さんは惡いやろ、けど、それもたゞの色慾でしたことではなし」
母はそこのところに一種の自信を持つて言つた。平生から「忠臣藏」が好きで「不如歸」を馬鹿馬鹿しいと言つてゐる母だけに、さう云つた氣持がはつきりとわかるやうな氣がした。
健太はみんなが眼を醒まさねばいゝがと心配になつて來た。が暫く默つてゐてから、また彼の方から質問した。
「ではお母さんは、向ふの男をちつとも好いてはゐなかつたんですか。前にはそれと反對のやうなことを私に言つておいて」
母は答へなかつた。母の心の中には、一種の感傷を越えた誇りのあることが一瞬間、健太には察せられた。色慾だけでしたのではない——あやまられた理智の行動に對する母には少くとも俠固とした誇りがあつたやうに思はれた。若しくは、さう考へることによつて母自身、自分をなぐさめてゐるのではなからうか。憫れあれ！
「何もかにもお父さんを助けようと思うたばつかりに、それで裏をかかれたんや」
母は泣きながらさう云つた。
「が、さうではないでせう。お母さん自身が余に欲すぎた」
「けどお前はうちの財政を知らんけに」
「ではどうしてあのつきまでを手先きに使つたんです。どうしてつきを惜まなんだんです。それでうちのことを

したと云へますか』

『たゞ、つきや木山のたちが惡うなかつたら……それでお父さんがもう少ししつかりしてくれとつたら……』

母はしつこく少し殘念さうに、さう云つて繰り返した。

『しかし、さう考へると自身、初めから違うとる。もうお母さんとは話しません。みなが目を醒ましますよ。馬鹿馬鹿しい』

『健太や、さう言はないで、どうぞお母さんの心もわかつてくれ』

母の未練は何時までも盡きなかつた。そして子供のやうに手の甲で眼をこすりながら、今にもわつと泣きだしさうな聲になつて來た。

『もうそんな事はどうでもいゝです。昔の事です。明日からは新らしい事を始めるんです』

健太は火鉢の前に坐つたまゝ、咽喉からやつとしぼり出すやうにさう云つた。母親に對するおさへがたき愛情の爲めに頭が混亂し、こみあげてくる涙で聲がつまつて來た。――不安定な母に過失をさせて、然もそれを利用しやうとしたつきといふ女や木山のやり方は、何といふ憎むべき卑劣な振舞ひだらう。それでも彼等の身體に人間の血が流れてゐると言はれるだらうか。たゞ母があやまつてその相談にのつたといふ事は、性の不安定もあつたにはあつたらうが、然も金の事までを考へに入れて、その一番みじめな役目をしたといふ事は、何といふ口惜しい事であつたらう――

それにしても彼は父だけは兎に角、その相談にはちつとも關係しなかつたと云ふ事を一縷の慰めにしなければならなかつた。さう云ふ點での父の潔癖は信用出來る――今更らさう云ふ氣持が強く起つて來た。甲吉の日記の一節に「父を惡く思はすやうに母は子供達をしつけてはゐないかしら」とあつた。思へば實際、父は子供達の爲めに餘りに惡くばか

自[illegible]せられずにゐてにたなかつただらうか…………[illegible]には[illegible]につきに[illegible]て[illegible]、そして[illegible]見したのに過ぎない。それは何といふ最惡の役目だつたらう。

母も暫くしてから眠つたらしい。彼の頭には絶えず[illegible]や、それを乘り越えやうとするものが入り亂れて往來した。藝術の名によつてさう云ふ罪を犯した者はかなりにある。然し金の名によつてその罪を犯したといふ事は！ 藝術家がその犯した罪の悔恨によつて清められ、償はれるやうに、その罪は清める事の出來ないものであらうか。物質はその人を藝術のやうに再び救ひあげるだけの能力なき古來からの輕蔑を何時までも受けるべきものであらうか。物質がさうである爲めに母の罪も、また他の如何なる罪惡よりも輕蔑られるべきものであらうか…………

夜中の三時頃になつて炭がきれて火鉢が次第に小さくなり、到頭消えてしまつた。彼は冷たい火鉢の前に端坐したまゝじつと頭を垂れてゐた。

外ではかすかな雪のけはひがしだした。時々サラサラと雨戸に降りかかつては落ちる音がする。

彼は一寸も眠くならなかつた。益々頭が冴えて來るやうに思はれた。みんなの寢息が苦しさうに聞える。そしてものうい舌打ちが時々する。疲れこんだやうな寢ざまがあさましく眼に這入つてくる――見てゐると、その有様だけで充分人間といふものがみぢめに思はれて來た。

六時頃になつてやつと夜があけた。

外は眞白になつてゐた。健太は母の金を少しばかり持つと、マントのまゝ傘もささないで外に出た。粉雪が一面にあらひながら降りしきつてゐる。顏といはず胸といはず降りかかり、景色はほんの眼の前しか見えなくなつてゐた。

彼は銀行へ行つて母の金を小切手にし、東京へ送つておく手續きをした

歸り途で新聞を包む蓆と綱を六本だけ買つた。歸つてみると富枝や娘はもう居なかつた。少しでも害の淺い内にと云つて行つたといふのであつた。

彼もまたこんな處は少しでも早くひきあげたいと思つた。で新二にも手傳はしていそいで荷物の用意にかかつた。

『何もかにも新しくする』

彼は始終さう呟いてゐた。新二と二人で不要なものはみな押入れから引きずり出しては火鉢の中へ入れてゐた。初めくすぶつてはボッと焔をあげる。母は炬燵にあたつたまゝじつとうつむいてゐた。

暫くして彼は戸棚の隅から氣味のわるい女の戸を見付けた。墨でぬつた頭の髷と腰のまはりのグロテスクな描寫——それには生々しく乳房のところへ錆びついた針が三本つき刺してあつた。彼は手にとると忙いで其れをかなぐり捨てるやうに、火の中へ投げ込んだ。

何といふ不吉ないまはしい發見——彼は胸が惡くなつて嘔吐を催しさうな氣がした。

彼は母を東京へ連れて行く事にこれでも希望が持てるだらうか。地獄の眞ん中へ落ち果てゝゐるやうな母、それを自分のやうなものが何ほ導いてゆく事が出來るであらうか、その爲めに自分が汚され、何にも知らずに待つてゐる妻や子供の生活までが蝕されはしないだらうか——

彼はつゝ立つたまゝ燒けてゆく焔をじつと見てゐた。(心の狂ひ果てた母よ。他人を惡く言ふよりも先づ母自身が最も打たれなければならないのだ)

外ではやはり雪がさむざむと降りしきつてゐる。

『お母さん立つて下さい。さあ一日も早く此處からは出て行かなならん。着物を着換へるんですよ』

「いやもう此處からは歸るん」小さい子供の可哀さうな事を考へると、どうしても病院へ行く氣にはならなかつた。

彼は又外へ出た。俥屋を呼びにである「あゝ母をつれてゆくこと、これは自分の苦しい為めだ。母よ恕いあらためてくれ」彼の口や眼の中には雪の粉が容赦もなく吹き込んで來ては冷たく消えた。

健太は途中で鼻緒を踏みきつて下駄をさげたまゝ裸足で歸つて來た。雪が益々盛んに降つて來る。

彼は新二や三郎に、是非母を俥に乘せる事を云ひつけておいて一足先きに出た。電車で汽車の乘り場まで出る積りだつたのである。長い間待つたが來ない。雪のために停電したらしい。

彼は仕方なしに又歩きだした。脹脛のあたりまでふかぶかと雪の中に埋まる、前後左右からは寒さが沁み込むやうに彼のぐるりに襲ひかかつてくる。彼は足袋を濡らし、着物を濡らし、涙ぐみながらもう夢中になつて歩きつづけた——

彼が驛のストーヴで足袋をあたためてゐる時であつた。母と三郎とが俥で、そして新二が歩きながら疲れきつてそれでも何處かをかしい風格を見せてやつて來た。健太は雪をかついだ幌俥の中から二人をいたはりながら下してやつた。

三郎はそれでも病身の上に吾々を見送る爲めに、淋しさうな晴衣裳をつけて來てゐる。

長い間母とのみ暮して來て今更ら殘される三郎——この事を思ふと健太は重いもので心臓を押へつけられるやうな氣がした。

「三郎、お前は一層さびしくなるだらう。が新二兄さんがずつと家に居る事になつたし、なるべく氣を樂にして、早くよくなるんだぞ」

さう云つて聞かした。すると三郎は急にせぐりあげて、おいおいと人前もなしに泣きだした。

（自分は母と一緒に地獄へ落ちてゆくかもしれない。自分の弱い生活はやがて破られるかもしれない。然し自分はそしに堪へて行かなければならない）彼はさういふ風に腹の中で確然ときめた。

『汽車が二十八時間かかるんです』

彼は母のそばへ行つてその事を教へてやつた。

——完——



昔の西片町の人

正宗白鳥

「日本の文壇は今全く不良少年の手に落ちました。何等の教養も何等の傳統もない不良少年の手に落ちました」と、博士はその華やかであつた青年時代の、唯一の名殘りであるやうな、美しい眸を輝かしながら、嘆聲を洩らすのを聞く時には、雄吉は不良少年の手に落ちた文壇を悲しむよりも、博士自身に對して、妙な寂しさを感ぜずにはゐられなかつた。………

覇氣に富んだ人氣作家K氏の小說集を讀んでゐるうち、「葬式に行かぬ譯」と題された一篇の中の、かういふ記事のあるところまで來ると、私は思はず、獨笑ひを洩らした。そして、書物から目を離して、作中の博士について考へた。

「日本の文壇は、今全く不良少年の手に落ちました」

中田博士が、今から十餘年前に、京都大學の教室で、かう云つて歎息したといふことは私をして、十年前に若くして世を去つた博士の面目を、印象鮮明に思浮べさせるよすがとなるのである。

成ほど博士の云ひさうな言葉である。他の老大家などが云つたのなら、私は何の興味もなく聞流すのであるが、中田博士が、京都の文科大學の教室で、學生に向つてさう云つたのは、私には甚だ面白いのである。

その頃の文壇には自然主義がまだ跋扈してゐた。詩が輕んぜられてゐた。田舍臭い蕪雜な文章や卑俗な思想が、新文學の名の下に臆面もなく世に現はれてゐた。博士の胸に抱かれてゐた全醇の藝術とは相容れざること氷と炭との如くであつた。

「天下の文章、不良少年の手に落つ」私は、中田博士の假聲を使つて、二三度呟いた。博士の心にあつた不良少年團の名簿には私の名前も黒い字で記されてゐたに違ひない。

私は、官學出の文學者のうちでは、中田鋭氏には比較的頻繁に接してゐた。學生時代にも一二度訪問して、歐洲新文學の研究法を訊ねたり、書物を一二冊借りたりした。氏と私との年齢の差は五六歳に過ぎなかつたが、氏の博學は早くから評判されてゐて、私の同窓の一人は、「中田さんは訪問客と話をしてゐる時でも、外國の本を手に持つて讀んでゐるさうだ」と、感心して私に話した。「頭が二重に働くんだな」と、私も、氏の頭が凡人に傑れてゐるらしいのに敬服した。耳で人の話を聞きながら、目では本を讀む癖をつけると、時間が無駄にならなくつていゝと、自分でも眞似をしようと思つた。その頃は讀書慾が旺盛で、多讀をえらいことのやうに思つて、千駄木の大家が夜二三時間しか眠らないで讀書するといふ噂を聽いて感歎したり、道を歩きながらも書物を讀んでゐる學生の勉強ぶりに心を惹かれたりした。そして、私自身も、無茶苦茶に本を讀みたがつてゐた。獨歩の「あの時分」といふ小説に、「あの時分は、誰れも彼れもやたらに本を讀んだものです」と書いてあつたが、あの頃の學生は一體に今の學生よりも讀書に努めてゐたのかも知れない。……カッフェーも活動寫眞も蓄音機もラヂオも音樂會もなかつた時代だから、本でも讀まなければ爲方がなかつた

のであらう。

私は學校卒業後間もなく、Y新聞へ入社したが、これと同時に早稲田附近から西片町の下宿へ移轉したので、中田氏の西片町の住居に近くなつた。そして、新聞の材料を漁りがてら、外國文學に關する新知識を得るつもりで、たびたび氏の宅へ足を運んだ。氏は内心私の訪問を好んでゐないらしかつたが、しかし、一度も居留守を使はれたり、常に話して玄關拂ひを喰はされたりしたことはなかつた。いつも、上べだけは快く會つて呉れた。顔付にも言葉にも角がなくつて、西片町界隈の他の學者達よりも親しみ易かつた。

「中田君はギリシアだのラテンだのと頻りに語學の通を振廻してゐるが、あれはどういふものかなあ。僕らには心根が分らないよ」と、ある時、中田氏の友人が私に云つた。

衒學、氣取り、淺薄といやうな惡評を、私も氏に對して下すやうになつた。氏に不快を感ぜさせるやうな記事を遠慮なく紙上に揭げながら、私は何喰はぬ顔して氏を訪問してゐた。「中田さんは、此間お酔ひになつて、兩肌を脱いで箸を前に置いて、顔にお白粉をおつけになつた」と、下谷のある料理屋の女中が話すのを聞いて新聞に出した。「中田さんは江戸ッ子だから、少しでも東京を離れるのが苦痛なんださうです。此間も横濱へ講演に出掛けた時に、一人娘の××子さんと別れるのがつらくつて、玄關で父子の愁歎場を見せたさうですと、氏と懇意な歌人が面白さうに話すのを聞いて、それにおまけをつけて新聞に出した。

ことに、官學の文科出身者評論を連載した時には、ことに中田氏に對しては、斟酌しない惡評を連發した。氏に反感を抱いてゐた同窓のある人々は、紙上の罵詈を痛快視してゐたらしかつた。

「此間、大學の正門の側で、A君と中田君とが立話をしてゐたよ。A君の評が新聞に出た時には、はじめの一回が（上）と

しであつたから、長くつても（中）（下）とあと二日で終るんだから、まだ氣が樂だつた。ところが、今日から出掛つた中川論は（一）としてあるから、あと何日續くか分らないと云つて、中川君がこぼしてゐたよ」と、中川氏の知人が、笑ひ〳〵私に話した。

その評論が終つて、大分時日が經過してから、私は氏を訪問した。拒絶もされないで、いつものやうに、玄關の次の客室へ通された。いつものやうに、氏は二階から下りて來た。

「××をお讀みでしたか」と、氏はこの前會つた時に私に勸めた歐洲の新刊書の名を覺えてゐた

「いえ、まだ讀みません」

何度會つても、心の中まで打解けることはないのだから、話題は直に文學に關係したことに止まつた。

「此間、アストンの日本文學史を讀みましたが、あんなものは詰りませんね。外國人の批評だと買被つてあんなものまでも卓見があるやうに云ふ人がありますが、文學は外國人には本當には分らないんでせうね」と、私が云ふと、

「あゝ、あれは大した物ぢやありません。……しかし、あの中に、西鶴を批評したところに、西鶴の外は、たゞ見て過ぎよと書いてあります。あの言葉は、ダンテの神曲にある言葉で、神曲を讀んでゐないものには、あの面白味は分りませんな」と、氏はふと興に乘つたやうに云つて、「見て過ぎよ」の伊太利語を口に出した。

一しきり文學談をしたあとで、氏は圓い柔い顏に微笑を湛へて、

「何でもないことを、人は大袈裟に話したがるものですからね。人の噂は常識で判斷して加減しなきや滑稽になりますよ」

「さうでせうね」私は、氏が横濱行の愁嘆場の記事を差して云つてゐるのだらうと察してゐた。

「消極的な人を非難するのも感心ぢやありませんね。匿名にしてゐる人はボロを出す機會はないでせうが、それにしても褒めたことぢやないでせう。」

「さうですね。」

私が、當時はまだ文壇に現はれてゐなかつたN氏を推讃して、中田氏を貶したやうな事を記した新聞、雜誌に對して、何の婉曲な皮肉を云つてゐるのだらうと、私は察しながら空呆けてゐた。そして、

「男はボロを出しても傷を受けても、積極的に活動する方がいゝんですね。だから、私も人に憎まれても恨まれても、思つたことはどし〳〵書くつもりです」と、笑ひ〳〵云ふと、

「しかし露骨な攻擊は攻擊としても効果が少いものですよ」

「そりや藝術的ぢやないでせうね」

そんな話をしてゐる間に、隣りの茶の間から、中田夫人と女客との話が絶えず聞えてゐたが、女客はふと、高い聲で、

「あら。お宅ではまたY新聞をお取んなさいますの。此間うちはお止めになつてたぢやありませんか」と云つた。

私はハッと思つて、中田氏の顏から目を外らした。夫人は小聲で何とか答へてゐたが、私はそちらの話聲を打消すやうに、熱心らしい聲で文學談をはじめた。

「ドーデーのナボップを讀みましたが、あの人のものはどれでも話が面白いから、しまひまで退屈しませんね」

「ナボップは結末がいゝ。」

私は話が一くぎりついたところで暇を告げた。雨が降りだしたのも關はずに出かけると、

「傘を持つていらつしやいな」と、氏は私を呼留めた。そして、夫人が茶の室の方から持出した雨傘は、氏の手を經て私の手に渡された。

文壇の風潮はその頃から急激に變化して、消極的なN氏が世間へ引出されて、俄かに文壇の視聽を蒐くやうになり、一方ではS氏やK氏の作物が清新なる文學として持囃されるやうになりだした。

私の同窓の先輩であつたS氏が歐洲留學から、大抱負を持つて歸つて來たので、その歡迎會が紅葉館で開かれたが、そのあと間もなく、私は、中田氏を訪問した。その時、歡迎會席上で起つたいさかひが話題に上つた。……知名の二作家がふとしたことから言爭つて、腕力沙汰にも及ばうとしたのであつたが、隔たつた席からそれを見てゐた獨歩氏が、ふと麥酒罎を摑んで立上つて「××の奴生意氣だ。毆れ」と叫んで、喧嘩の一人を目かけて突進したのださうだ。

「獨歩は、その前に××の前へ出て挨拶して自分の名を名乘つたのださうです。さうすると、××が呆けた顔して、あなたは新體詩をお作りになるんですねと云つたさうですよ。それが獨歩の癪に障つてゐたのでせう。人心の機微に觸れてゐますね」

中田氏は靜かにさう云つて微笑した。その笑ひは冷笑か苦笑かである筈なのだが、氏の笑ひは、私の目にはいつも穩かに見えて、冷苦辛酸の現はれを面上に認めることが出來なかつた。

氏は「人心の機微に觸れてゐる」と云つたゞけで、露骨な說明はしなかつたが、氏の意味するところが、私にはよく解つてゐた。……長い間隱忍して來た獨歩も、小說家としてやうやく世に重んぜらるやうになりかけた頃で、「おれも小說家だ、甘く見るな」といふ腹であつたので、中田氏に取つては、詩よりも小說が重んぜられる當時の文壇の惡傾向の一例として苦々しく思はれてゐたのであつた。

私もやがて創作家の一人として文壇に立つやうになつたので、自然、中田氏の門へは足が遠くなつた。[illegible]学窓で会つたことのある二三の官學の俊才も、現代の作風によつて一代を風靡しだしたX氏の膝下に集まるやうになつた。博學の誉れ高かつた中田氏も、文壇の風潮の變化に連れて、影が薄くなつたやうであつた。東京が好きで地方にも出ないと云つてゐた氏が、京都大學へ轉任すると聞いた時に、私は氏の心の寂しさを思ひやつた。

四五年も經て、久振りに氏に出會つたのは、帝國劇場開場式の夜で、そこの廊下で雑沓のうちに擦違ひさま、私は挨拶したのであつた。長らく御無沙汰をしてゐた間に、氏は文學博士になり、佛蘭西へも行つて來たのだが、頭のひどく禿げだしたのが、特に私の目についた。

「あなたの弟さんの繪を先日拜見しました。非常に面白う御座んした」と、氏は云つた。西片町訪問を止めて以來、私は創作に努力して、過分の名聲を得てゐたのであつたが、氏は、私の成績については、一言のお世辭も云はなかつた。弟の繪はその時分は極めて未熟であつたのだ。

「京都へいらしつたら、お寄んなさいな」と云つて、「永井君が來てゐる筈だが」と呟いて、氏は行過ぎた。

私が、中田博士に會つたのは、これが最後であつた。

「中田さんも、あれでスバルの仲間なんかでは巾を利かせてるんだらうな」と、私は知人に向つて云つたこともあつた。

博士の死亡の通知は、どういふものか私のところへも屆いた。滅多に葬式には行かない私も、昔度々訪問していろいろな新知識を授けて貰つたことを思出して、謝恩のつもりで、禮服を着けて、式場へ出掛けた。儀式は型の如く運ばれたのであつたが、たゞ一つ異樣な印象を殘されたのは、京都大學學生總代の弔詞であつた。靈前に向つて、突如として

て、「先生」と叫んで、死者の靈魂を眼前に見てゐるやうな態度で追弔の辭を述べたことであつた。かういふ型を破つた弔詞も、今では珍らしくなくなつたのであらうが、あの時は、危く噴出さうとしたほどに、私には滑稽に感ぜられた。博士は言文一致が嫌ひで、「みんなの文體がさうなつたら、一葉のたけくらべのやうな面白い文章は見られなくなりますね」と歎じてゐたのに、その教へ子は、日用語で、散文的に亡師の靈を弔つたのである。

中田博士を取扱つたK氏の小説を讀んで、こんなことを、取留めなく思出したのであるが、最後に、今一つ興味をもつて思出したことがある。

それは、去年の一月歸省した時に、弟が購讀してゐた雜誌「明星」を明けて、ところ〳〵走讀みすると、千駄木の老大家が、京都にゐた中田博士に寄せた書翰のうちに、二ところ私の名前が出てゐるのが目についた。これは不思議だと思つて、その二通の手紙を熟讀すると、私がY新聞の新社長に嫌はれて文藝部の主任を解職されたことなどを内報してゐるのであつた。

千駄木の老大家や中田博士のやうな人でも、私のやうな若輩が新聞の地位を去る去らぬを、多少でも心に掛けてゐたのは不思議であるが、しかしよく考へると、それが自然の人情なのであらう。

「人心の機微に觸れてゐますなあ」私は、中田博士の靈に向つてさう云ひたいのである。

私は、昔の學者町西片町に住んでゐた幾人かの官學出の學者を知つてゐるが、そのうちでは、何と云つても中田博士が最も話が面白かつたし、人間としても味ひがあつた。あの蜿曲な暗示的な皮肉だけでも、多く得難いのである。



鏡地獄

牧野信一

一

「この一年半ほどのあひだ……」

せめても彼は、時をそれほどの間に限りたかつた。別段何の思慮もなく、何となく切ツ端詰つた頃から、ふつとそんな言葉が滑り出たのであるが、そして如何程藤井に追求されたにしろ、何の續ける言葉も見當らなかつたのではあるが、思はずさう云つた時に漠然と——せめても時を、それほどの間に——そんなことを思つたのである。一年半、といふのは、父の死以來といふほどの代りに用ひたいらしかつた、誇張好きの彼にして見ると。

「……」

藤井は、困つたといふ風な氣色を示した。次の言葉を待つまでもなく藤井には、彼の意圖は解り切つてゐたから、

どうせ、また法螺まぢりの愚痴か！——斯う思ふと、舌でも打つて顔を反向け

たかつたが、この時の彼の語調が如何にも科白めいてゐたのに操られて、思はず藤井は朗らかな苦笑を浮べて、
「相當、苦勞したかね、はじめてだらう。」と、噴き出したいのを我慢して訊ね返した。――まつたく藤井は、噴き出したかつた。彼が、そんな言葉を事更らしく、感慨あり氣に用ひたのも藤井は、可笑しかつたが、それよりも、脈に物々しく、見るからに愚鈍な顏を歪めて、唸つたりなどした身柄に添はぬ彼の勿體ぶつた樣子が、藤井にとつては先づ噴飯に價したのである。
「え？」
「冗談ぢやない。」と彼は、無下に打ち消した。そして彼は、あゝ、と、當人はそのつもりかも知れないが、傍の者にはさつぱり憂鬱らしくも、倦怠らしくも見えない息のやうな溜息を洩した。
「それやアさうと……」
「その話は、また明日にでもして貰はうか。」
彼は、さう云つて、氣分家らしく輕く眼を閉ぢて、直ぐにまた洞ろに開いた。
「もう間もなく一週間になりさうだぜ。」
「だがね、僕近頃、相當酒を樂しんでゐるんだよ。だから、せめて斯うやつてゐる間だけは僕の……」
彼は、出鱈目を云つてゐるのに氣づいて言葉を呑み込んでしまつた。
「君の氣分になんて、つき合つてゐたひにはいつ迄たつたつて埒が明きさうもないぜ。」
藤井は、人の好い笑ひを浮べた。――「晝間は、殆んど眠つてばかりゐるんだし……」
「君だつて、どうせ歸つたつて用はないんだらう？」

[illegible]やたい——と、その、[illegible]のこぞ、僕アこのごろ忙しいんだよ、一[illegible]になる[illegible]、[illegible]、[illegible]れたひには、これでも一ツ端の[illegible]だからね。」と藤井は、[illegible]に彼の心を[illegible]するやうに云つた。[illegible]は、[illegible]ヲダハラ村の一人の彼の友達なのだつた、藤井は、ヲダハラの彼の村から[illegible]に[illegible]彼の[illegible]に就いて、いろいろ彼の意見を正す爲に、わざわざ招まれて出かけて來たのであつた。

「手紙の返事も君は、碌々出さないさうぢやないか？」

「うむ——。だけど僕の手紙嫌ひは何も今に始まつたことぢやないからね。」などと彼は、言葉を濁して、不平さうに口を尖らせたりした。

「そんなことは何も責めやアしないがね……。」と藤井は、常識に達してゐる大人らしく一笑に附して「ともかく、その銀行の方が——」

「藤井！」と、彼は云つた。「僕ア——今、そんなことに耳を傾けちやア居られないんだ、——僕ア……、僕ア……」

「呑氣だね！」

その時、隅の方でぼんやりしてゐた彼の細君は、

「チエッ！」と舌を鳴らした。彼には、聞えなかつたが、藤井は同感した。

「嫌ひだ／＼だよ、僕アさういふ面白くない話は……。」

「誰だつて好きぢやないが——。」

「どうなつたつて、關はないと思へば、聞かないだつて好むだらう。」

「ぢや、それア、明日でも仕様よ、——酒興を妨げては悪いからね。」

「中學の頃の話でも仕様か――。」
「う、うん――君、何も東京に住ふ必要はないぢやないか。無駄ぢやないか？マザーもさう云つてゐたぜ。」
「さう云つてゐたか？」と彼は、酷く驚いたといふ風に眼を輝かせた。
「尤もさ――馬鹿だなア！」
「…………………」
別段に彼は、逃げるといふ程の積極性もなかつたが、破産に關する話よりは、興味が動いた。彼は、盜賊の心になつて、母の家の前を、爪立つて通らなければならなかつた。……さつきから、彼は、秘かに――消えかゝりさうになる心が、時々それに觸れる毎に、怪し氣な光りを放つては消え、放つては消えて來たのであつた。
盜賊と稱ふ形容は、無稽に過ぎるかも知れないか、それは何氣なく云ふ藤井ではあつたが、それに依つてヲダハラの母の話に觸れて、ヂロリと猜疑の聽耳を立てる彼の心は目的を定めて、姿を窶して日夜目的の家の周圍を探偵してゐる仕事準備中の泥棒のそれに比べるより他に、比較するものはなかつた。――あゝ、到々俺は、泥棒になつてしまつたのか……さつきから藤井に、遠回しに取ッちめられて、感傷的な醉ひに走つて來た彼の鈍い頭は、その時、そんなに馬鹿馬鹿しいことをほんとうに感じて、厭な氣がした。
「今までは、俺はだらしかなかつたが、もう凝ッとしては居られない。いよいよ俺は、俺のライフ・オークに取り掛るんだ。三十年間俺は、秘かに準備して來たんだ――もう、そろそろと取りかゝつても好い時機に到達して……その俺は、いよいよ……」
彼は、ついこの間の晩、眞面目さうな顏をして細君に向つて、突然そんな途方もない高言を吐いた。周子は、あまり

珍らしい氣がしたので一寸夫の顔を眺めて見ると、彼は飽くまでも六ヶ敷気な表情を作つて「うむ！」などと、肚に力を込めたり、仰山に拳固で胸を叩いたりしてゐた。——彼が、曾て何とかいふ同人雑誌の一員であつた頃、五六年も前の事なのだが、今と同じく無感想だつた彼は、一度もその欄に筆を執つたことはなかつたが、その六號感想欄には、毎月それに類する亢奮の言葉が、多くの同人達の筆に依つて花々しく羅列されてゐた。

「大きく！……力のこもつた……。どうせ俺は、田舍育ちの野蛮な人間である……。」

「………………」

何を云つてゐるのか、と周子は思つた。好く酒飲みの友達などと彼が、好い氣になつて喋舌つてゐるところを、この間狭い家にばかり住んでゐる爲に、厭でも見聞させられるのであるが——やれ、彼奴は田舍ツペ、だとか野蛮臭い奴だなア！とか、田舍者の癖に生意氣だ！とか、誰のことか解らないが、そこに居ない人の噂に違ひない、そんなことを喋舌ツて卑し氣な笑ひを浮べたことがあつたが、そして彼女は、一層夫に軽蔑の念を起したことがあつたが、今更、彼の獨言にそんなことを聞いても、反つて肚立しい思ひがするばかりであつた。——氣の毒な氣さへした。

「どうしたの？ 務めでもするつもりなの？」

「何をするか、解らない。」と彼は、重々しく呟いだ。——「素晴しく大きな希望に炎えてゐるんだ。俺も一人の人間として生れて來た以上は……、うむ、あまり馬鹿にして貰ひたくないものだ。」

「いつ、あたしが、あなたを馬鹿にしましたよ……ひがみ！」

「それが嫌ひなんだよう。」と彼は、叫んだ。さう云つた彼の聲は、從令どんな種類のものであらうと「素晴しく大きな希望に炎えてゐる」人の聲ではなかつた。

「見てゐろ！」と彼は、云つた。

「ちつとも怖くはない。」

「手前えんとこの奴等は……」

見てゐろ！と、彼が云つたのは、たつたそれだけの意味だつた。漠然とした大きな希望に炎ゆるのは快い——折角の夢が直ぐに斯んなところで淺猿しく崩れた。

今までなら彼女は、自分の家の惡罵に會ふと立所に噛みついて來たのであつたが、次第にマンネリズムに陷つた今では、何と彼が惡態をつかうとも、平氣になつてしまつた。——「あなたが、いくら口惜しがつて、暴れ込んだつて、家のお父さんの方が餘ッ程強いからね。賢太郎だつて、あなたよりは力があるから……」

暴れ込むぞ！などと彼が云つた時には、彼女はそんなに云つた。

「何だ、あんな爺！俺よりもずッと脊が低いちやないか！」

「でも強いのよ、——五人力なんですつて。」

彼女の父は、以前に酒亂の癖があつたさうだ。山梨縣の百姓の子で、青年の頃出京して長い間運送店の丁稚を務め、後に無頼漢の群に投じたのである。酒亂の酷い頃は連夜、吾家に歸つて亂暴を働き、その頃小さな運送店を經營してゐたのであるが、店の者などは恐くなつて逃げ出したさうだ。そして或る夜などは、家人が警察に願つたさうだつた。警官が取り壓へに來たら、その巡査の背中をどやして氣絶させたといふことを、彼は聞いた。

ヲダハラの「淸親」との爭鬪以來彼は、自分の腕力に自信を失ふてゐたので、そんなことを聞くと竦然とした。

「見てゐろ！」などと叫んでも周子の前より他に彼は、云へなかつた。

「こんな低能的な奴ぢやないんだよ——もう少し上等な奴の云はうとしてゐるんだよ——」
　彼は、さういふより外はなかつた。團子の想像以上に彼は、腕力に惚れを持つてゐた。
「お前などは眼中にないんだよ。──人類の一員として、或る自信を僕はもつてゐる。相當の自信にあるんだ！──などと云ひながら彼は、拳を固めてぬッと前に突き出したりした。
「隨分、あなたの腕は細いわね。」
「嘲ける者は、嘲けろ！」
　彼は、眼を瞑つて呟いだ。──野蠻な焦燥を鎭める──そんな氣がした。そして「理想的な希望」とか「大きな力」とか、何でも思想的に花々しく、勇敢なことを思はうとした。何の目的がなくても、故意にさういふ空想に走ると、變な力を感ぜられるものだ──そんな氣がした。五六年前の同人雜誌の連中が、それは彼のやうな口先きのことゝは違つてゐたのだらうが、それに類する大きな充奮をしてゐたが、そんな氣に故意に浸つて見るだけでも奇妙な昂氣さが感ぜられる──彼は、自分は漸く今になつて彼等の域に達したのか──などと思つて、一寸空虚な力を感じたりした。
（あゝ、それが、また自惚れだつた……力だ！などと思つたのは……何といふ馬鹿々々しい自分だらう！吾家に忍び込まうとする泥棒の氣焔だつたのか！あゝ！）
「吾家（うち）も、他家（よそ）も──そんな區別が……」
「──なるほどね。いつの間にかすつかり一ッ端の酒飲みらしくなつたね……見たところ、いかにも醉、陶然のかたちだよ、一寸羨しいな！」
　藤井は、彼の云ふことが、聞くのも面倒だつたので、さう云つて、風にゆられてゐる如く上體をゆるがせてゐる彼の

妻を、凝ツと眺めた。

その時彼は、突然大きな聲を擧げて笑ひ出し、藤井と周子を茫然とさせた。――親が自分の家に入つた泥棒を捕へて見たら、それは自分の子であつた……さういふ話見たいな話があつたと思ふんだが、さつぱり面白い話ぢやないが、誰だつたか？自分の知合の者で、それを實行した奴があつて、いつだつたか、大いに笑つたことがあつたが、えゝと？あれは誰だつたかね？――彼は、さつきからそんなことを思つてゐたのだが、突然今、氣がついたのである。――（何アんだ、この男か、あまり眼の前にゐたので、そして厭に大人振つた口ばかり利いてゐるので、すつかり見失つてゐた。――うん、さうだ〳〵。）

「藤井、藤井！おい、君！」と彼は、ひとりで可笑さうにタツタツと笑ひながら

「君は、ハヽヽ、ずつと前、ハヽヽ、自分の家に、ハヽヽ、泥棒に入つたことがあつたつけね、ハヽヽ。」と、大變なことでも發見したやうに笑つた。

藤井は、赤い顏をしてうつ向いた。藤井は、放蕩の揚句家を追はれてゐた頃、實際にそんなことを行つた經驗があつた。――今になつて、そんなことを云はれたつて藤井は、大して耻しくもないし、別段可笑しいこともなかつた。

「そして、ハヽヽ、あの、ハヽヽ、あの時、君は、ハヽヽ、捕へられたのだつたかね、ハヽヽ。」

「おひ、止して呉れよ、そんな話は――。」

藤井は、迷惑さうに顏を顰めた。

「だからさア……」

彼は、甘ツたるい聲を出して、ねちねちと笑つた。すつかり朗らかな醉漢に變つて、家庭などに何の蟠りも持つてゐ

たい不良少年の手ょだ[illegible]一お[illegible]しよう、今更、お[illegible]出つて、[illegible]以前のやうに二人で他合もない話をし合つて、面白く遊ばうぢやないか――彼は、斯う云ひたいのだつた。[illegible]には、藤井のそんな失敗談に気づいてから、一倍彼が惜しくなつてゐたのである。

そんな心境は、もう抜けてゐる――とか、あの頃に比べて、この頃は――とか、そのやうに好ましいあらゆる比較級の言葉は、成長力を知らない彼の心境にとつては、決して適用したい他山の攻石であつた。彼の心は、常に一色の音しか持たない単調な節に過ぎなかつた。その印には、一年も逢はないで出逢つた友達は、それまではどんなに親しい仲であつても、乾度もう相手の方が何となく進歩してゐて、前のやうに熱心に語り合へなくなつてゐることばかりだつた。だから彼には、朋友などといふものがなかつた。彼の友達は、大抵半歳か一年で變つて行つた。

二年前だつたら藤井も彼と一處になつて、そんな馬鹿な話でも、彼と同じ程度に笑へたものだつた。

「明日あたり僕は、歸らなければならないんだがな！」

「嘘々！」

彼は、甘えでもするやうに云つた。

「愚図〳〵してゐると、また勘當されるかも知れない。」

「勘當されたら、また先のやうに俺の處へ來てゐれば好いぢやないか。」

「御免〳〵、君には、もうそれ位ひの猶豫だつてありやアしないぜ――なるべく家から金を取らないやうにし給へよ。」

「でも、今年一杯位ひなら大丈夫だらう。」と彼は、事の他熱心な眼を擧げて藤井の返事を待つたりした。

「さア……。」

藤井は、にや〳〵と笑つてゐた。

「ケチ臭い顔をするない！チョツ、面白くねえ、しみツたれ！折角ひとが愉快にならうとすれば、直ぐに厭な思ひをさせやアがる、何でエ！ それが如何したといふんだ！」

彼は、そんなことを云つた。自分が、ケチ臭くて、しみツたれで、小心翼々で、面白くなくて堪らなかつたのである。

「おい、憤るなよ――。」と、藤井は云つた。

「第一俺は、ヲダハラだなんていふ名前からして氣に喰はない！あの村の奴等の面で、落つきのある野郎が一人でもゐるか？」

大分、親爺に似てゐるな、やつぱり親と子は不思議なものだ！などと、彼は思つた。――（吾家の親爺の顔も落着きはなかつたなア！それでも俺よりは、ずつと大面だつたが……）

「おい藤井、君も何となくヲダハラ面になつて來たぞ、――氣をつけろ、氣をつけろ！……生温い潮風に吹かれるからか知ら？」

「俺だつて何も……」と藤井は、云ひかけてつまらなさうに笑つてしまつた。――「あまり大きな聲をするなよ、往來から見通しぢやないか。」

「あゝ――。」と彼は、また傍の者には決して憂欝らしくは見えない溜息のやうな吠聲を、わけもなく吐いて、暮れかゝつて行く外の景色を眺めた。木立の多い東京郊外の夏であつた。夕陽に映えてゐた木々が、見る間に黒く棄てられて行つた。彼のこの家は、森蔭に立ち並んでゐる一筋の長屋の角で、何の目かくしもなければ、門や塀は無論のこと、椽側

に日ひとつ迷へてゐなかつた。監獄みたいなもので、あまり人通りはないし、またでもそれの一[illegible]にはまだ[illegible]にすらな
かつた。滅多に訪れる者などはなかつたが、偶に東京（この邊では、市内へ行くことを東京へ行く、といふところであ
つた。）あたりから遊びに來た者は、それとなくその邊をジロジロと見廻して、彼が夕飼の膳に誘ふと、蒼くなつて慌て
て逃げ歸る者もあつた。そして、二度とは來なかつた。——無理もなかつた。隣傍の、往來から見通しの家などで、加
けに大變行儀の惡い男を相手に酒などを飮むのは、誰だつて閉口だ、彼だつて、こんな男（自分のこと）と、出來得る
ならば對坐したくはない——時には彼は、そんなことを思つた。彼は、まつたく行儀が惡かつた。痩せてゐる癖に、非
常な暑がりやで、其へ性がなく、始終どたどたと脚を投げ出したり、裾をまくつたり、水泳するやうな恰好で轉がつた
り、腕をまくつたり、肌拔ぎになつたり、酒興中と雖も少し暑さが厳しいと、終ひには胡坐なのだか、立膝なのだか、
しやがんでゐるのだか判別し悄い恰構になつたり、時には和製の食膳であるにも關はらず椅子の上から手を延すことな
ども珍らしくはなかつた。——生家にゐる時分、彼の父はそんなことには一切頓着ない人だつたが、それでも彼が海か
ら歸つて來て、褌ひとつで食膳に向つたりすると、時には困惑の情を露にして、おい、出掛けよう！などと知人の家へ
誘つたりした、着物を着ろと命ずることの代りに——。

往來から見ゆる、といふことに彼は、決して坦々としてゐられるのではなかつたが、長い間の習慣で何としても行儀
は改められなかつた。

「東京にでも行つて住ふことになつたら、どうするんだらう。」

母は、好くさう云うた。——ケチな家には住まないから……などと彼は、うそぶいた。

周子から、肌拔ぎになつてゐるところを巡査に見つかると罰金をとられる、といふ話を聞いて以來、こゝで彼は、

抜ぎだけは辛棒したが、暑くなるに作れ、檻にでも入れられたやうな苦しみだつた。——彼は、海邊が戀しかつた。

「××の家も、もう人手に渡つてしまつたんだつてさ。」

裸のまゝで海へ出かけ、その儘歸れて、近所といへば二三軒の、それこそ年中裸で仕事してゐる彼と親しかつた漁夫の家だけで——そんな海邊の家を彼は、思ひ出して悲し氣に憧れの眼を輝かせた。

「あれなどは、君さへもう少し確りしてゐれば、たしかに殘せた筈なんだがな。」

藤井は、さう云つて、何とかといふ村會議員のことを惡黨だと云つた。

「酷い奴だなア！」と、彼も云つた。

「こんな處で、愚圖々々云つてゐたつて仕樣がないよ、だから君、思ひ切つて……」

「でも歸つたところで、反つて……」

「第一マザーひとりで氣の毒じやないか。」

「……」

俺が歸れば一層氣の毒だ——彼は、もう少しでさういふところだつた。……大體自分は、積極的な自己紹介を求められる場合に、何とか答へる己れの言葉に眞實性や力を感じた驗しはないんだが、そして何か話してゐる間は、何だか嘘ばかり口走つてゐるやうな寂寞を覺ゆるのが常なのだが、せめて、嘘だ！と自ら云ふ心の反面に、何らかの皮肉が潜んでゐたり、意外な自信がかくれてゐたり、案外眞正直な性質が眼をむいてゐたり、でもすれば多少は救はれるんだが、自分のは、その種の人々の外形を模倣したゞけで、心の反省があり振つたり、嘘つきがつたり、細心振つたりするだけのことで、大切な反面の凡てが無である、都の花やかさに憧れて遙々と出かけて來た氣の利かない田舍の青年が、

本性を忘れて一々[illegible]になつて[illegible]へつらへする[illegible]つてゐる。この[illegible]自分
得々として自己[illegible]に陥つた[illegible]などと云ふことを[illegible]鏡[illegible]した[illegible]自[illegible]に[illegible]ない
て、臆面もなく己れの[illegible]を映照するのであつた。ほんとうの自分の姿には、常に[illegible]れの白いやな、[illegible]
よりと濁ふてゐるばかりである。人は夫々生れながらに一個の鏡を持つて來てゐる筈だ。自分の持つて來た鏡に、[illegible]
な使用に堪へぬ剝げた鏡であつた。僻地の理髪店にあるやうな凸凹な鏡であつた。自分では、寫したつもりであても、
寫つた物象は悉く歪んでゐるのだ。自分の姿さへ滿足には寫らない。更に云ふ、凸凹な鏡である。泣いた顏が笑つたや
うに寫る。頭の形が、尖つたり、潰れたりする、眼がぴつとになつて動く毎に、釣りあがつたり、丸くなつたりする、鶯
のやうな鼻になつたかと思ふと、忽ちピエロのそれのやうになる、狼の口のやうに耳まで裂けたかと見ると、オカメの
口のやうに小さくなる……實際そんな鏡に、暫くの間姿を寫してゐると、何方がほんとの自分であるか解らなくなつて
しまふ時がある……

以上のやうなことを彼は、もつと／＼長たらしく呟き初めた。自分の責任に依る話であるにも關らず、[illegible]家につことに
なると直ぐに話頭を轉じてしまふ彼の心が、服部には一寸了解し悪くかつた。小膽なのだな！と思はずには居られなか
つた。

「もう少し、はつきり云へよ。比喩は御免だぜ！」

「いや、ヲダハラの△△床の鏡は……」

「既にヲダハラばかり輕蔑するね。」

「……銀行の奴等にさう云つてくれ。利息ぐらひ何でえ！」と、彼は云つた。語尾が「でえ」といふやうになると彼

は、もう駄目だつた。誇大妄想に等しい醉漢に變つてゐるのである。――此奴、社會主義の仲間にでもなつたのかしら、いつの間にか！あれの下ツ端は、皆な氣の小さい貧乏人ばかりださうだが――ふと藤井は、そんな氣がした。

「幾らだア！幾らだア！」

「……おい、止せよ、外を通る人が變な顏をしてゐるぜ。」

「俺ア、泥棒だアぞう！」

さつき彼は、變に心細い氣持に陷つて、如何に自分が情けない存在であるかといふことを知らせる爲に、鏡の比喩などを、當つぽうに用ひたのであるが、折角の言葉に藤井がきつぱり耳を傾けなかつたのが氣に入らなかつた。彼は、そんな原始的な比喩に得意を感じたのである。……「何だつて、はじめての苦勞だらう、だつて！ヘツ、止して貰ひたいね。苦勞たア、どんな塊りだア！いくつでも持つて來やアがれ、皆な喰つてしまふぞう……親爺が死んで、長男即ち吾輩が、だね、あまり無能だからか、そりや無能は困るだらう、困るには困るが、無能だつて餘外なお世話だ、今更無能を悟つて、誰が驚く！苦勞たア、何だ！」

彼は、そんな似而ヒロイズムを呟きながら、がくんがくんと玩具のやうに首を動かせた。何だか眼瞼が熱くなつて來る氣がした。

「困ツたなア！」

藤井は、さう云ひながら彼の細君の方を顧みて「やつぱり僕ぢやいけなかつたですね…………石原さんに來て貰つた方が好かつたんだがな――」と云つた。

「誰だつて同じよ。」

周子は、情さゝうに云つて笑した。

「毎晩、こんなに飲むんですか？」

「毎――晩！」と周子は、力を込めて、うつ向いた。パン、ンのンがお祭りを報ひてゐた。

「心馬悪道に馳せ、放逸にして禁制し難し……………どうだ藤井！景気の好いお経だらう……………心猿踊るを龍めず、意馬馳するを休ます――五欲の樹に遊び、暫くも住せず…………あゝ。」

「……………」

「俺ア…………」

藤井は、また彼が調子づいてどんな野蛮なことでも云ひ出すか解らない、それにしてもさつきからの雑言は如何だ！　一本皮肉を云つて懲えてやらう、と思つて、

「旗をかゝげて、何とか――なんて、君はいつかハガキの終ひに書いて寄したが、旗なんて何処にも掛つてはゐないね。」

と、笑ひながら側を向いた。

「…………ありア、だつて君――詩だもの。」と彼は、不平顔でテレ臭さうに弁解した。

藤井は、更ににやく〳〵と笑ひながら、

「斯うやつて、毎晩、酒を飲みながら君は、詩を考へてゐるのか？」と訊ねた。

「…………うむ。」と、彼はおごそかに點頭いた。

二

芝・高輪から彼が、此處に移つて來たのは晩春の頃だつた。――東京に來てから二度目の家であつた下谷の借居を、突然引き拂つて芝に移つたのは、前の年の暮だつた。

「隨分、引ッ越し好きだね――折角、東京に來たといふのに、さつぱり落着かないぢやないか。」などと知合の者に問はれると、

「どうも、せめて居場所でも變らないと…………その、氣分が――ね。」

そんな風に彼は、餘裕あり氣に答へた。彼は、氣分も何もなかつた。引ッ越しは、嫌ひなのである。

暮の、三十日だつた。午頃、いつものやうに彼は、二階の寢床の中で天井を眺めてゐると、階下に何かドタドタと聞き慣れない物音がした。

(おや!――今時分になつて、煤掃きでも始めたのかな!)

普通の家らしいことをするのが、出京以來特に、妙に氣が引けてゐた彼は、そんなに思つて苦笑した。――(たしか賢太郎が泊つてゐたな?姉の夫は、さつぱり兄らしいことを振舞つたことはなし、それぱかりでなく周子にも、一日だつて主人らしい行ひをしたことはなし…………)

何と彼等は頼りない感じだらう――そんなことを思つてゐると彼は、わけもなく可笑しくなつたりした。

「どうしたんだ?」

「賢太郎は、これやアもう好く働くわよ、これ、あらかたひとりで…………」

周子は、さう云つて、だらしなくからげて轉がつてゐる夜具の包みなどを指差した。賢太郎は、シャツ一枚になつてセッセッと、もう一つの包みを拵へてゐた。

「どうするんだ、冗談にでもおつて行くのかい？」と、姉に尋ねると
「何を寝とぼけてゐるのさア！あなたも少しはお手傳ひなさいな、日が暮れてしまふぢやないの！」姉は
うきうきとした調子で、さう云つた。引ツ越しなのである。二・三軒の間の兩親、兄達の住んでゐる家へ引ツ越す
る爲に、相當彼が好んで住んでゐるこの家を今、彼女等は、毀さうとしてゐるのだ。
「厭だなア！」と、彼は嘆じた。但その上に腰を許して、煙草を吹した。いつも光りが軒先きにさへぎられて、この部屋は晝日中でも幻燈ほどの明るさだつた。こゝで繪いてゐる自分達の姿を彼は、水族館の魚類に例へたり、軒先に限られて、狭く青ずんでゐる空を眺いて、水の表面を見あげた魚のつもりになつたり……いろいろ彼は、そんな風に甘く、寂しく、樂しい夢を作つては、この頃は、そつと生きて來たつもりであつた。——もう、あの夢もお終ひか！彼には、そんな氣がした。
「だから、昨夜(ゆうべ)あれほど念をおしたぢやアないの？……さツさツとして下さいよ。」
「さうだつたかね……」
彼は、酷く退儀に、心細く呟いだ。さう聞いて見れば前の晩、彼女達を相手に、そんな話をしたやうな氣もした。
「姉さん！」
忙しく立ち働きながら賢太郎は、女のやうにやさしい聲で、周子を呼びかけたりした。——「うちの二階は、そりやア素的よ。日あたりが好くつて、却けに新しいでせう！」
「さうね、この頃はうちも隨分綺麗になつたでせう。」
「そりやア、もう！ 僕、カーテンをつくつたよ。自分で刺繍して……それをね、窓にかけると、とても好いぜ。」

好い日なんて部屋中がバラ色になつて――。」

「ほう！でも折角のところを兄さんに占領されちやツては、あんたに氣の毒だわね？」

「僕は、また階下の六疊を素的に拵へるから好いさ……」

「賢ちやん見たいな人がゐると、隨分好いわねえ！」

「さア、こん度は二階だ〳〵。」

賢太郎は、勇ましい聲を擧げながら梯子段を驅けあがつた。

「そんなに突然行つても差支へないのか？」

彼は、未だふくれツ面をしてゐた。彼女の家では、未だ何も知らないのである。たゞ彼等の英一が二三日前から預けられてゐたゞけだつた。

「そんなこと關やしないわよ。」

彼は、觀念して、帽子もかぶらずに外へ出かけた。こゝに來てから、家のことでいろいろ厄介になつた二三町先きの友達の家へ、息を切つて驅け込んだ。

いろいろ家族の人達に禮を云ふつもりだつたが、彼は、友達の顏を見ると同時に、たゞ「引ツ越し……」と、だけしか云へなかつた。

「君が！」

「弱つちやツた。何でも僕が、昨夜、醉ツ拂つて、贊成したらしいんだね。今、起きて見たらもうあらかた片附いてゐるのさ。あゝ、困つた〳〵――芝・高輪の女房の家なんだがね、その行先きといふのは――。行かないうちから解つて

あるんだ、チョッ！チョッ！あゝ。」

「……………」

「そもそも、その女房の家の……。……ブッと、失敬、こんなことを云ひに来たわけぢやないんだよ、チョッ。逆上せてゐやアがる。兎に角、断らなきや。どうすることも出来ないんだ。あゝ、何といふ落つきのないことだらう。僕の村のローカル・カラーか。いや、失敬、ぢや、さよならア！」

彼が、また慌てゝ引き返して来ると（友達の處へ行つてから急に彼は、當り前の引ッ越しする者らしい働き手の心になつてゐた。）もう荷物は全部、一台の貨物自動車に楽々と積み込まれてゐた。

「さア働くぞ、さア、さア。」

彼は、さう云つて羽織を脱いだりした。

「狡いわね、お終ひになつたところに歸つて來て……」

賢太郎は、人の好い笑ひを浮べて、女のやうに彼を眺めた。

彼は、慌てゝ二階へ驅け上つたり、何にも殘つてゐない押入を開けたり閉めたりした。……「自分で片附けなければ、困るんだよ、いろいろ。」

そして彼は、舌を鳴らしながら、夢のやうにガランとしてしまつた部屋の中を歩き廻つて、清々とした。――ひとりで、この儘此處に暮らうかな！　そんなことを思つた。

「小さいトランクがあつたらう、そして風呂敷に包んだラッパがあつたらう、鍵の掛つてゐる箱があつたらうそれから

……」

彼は、自動車に飛びついて、風呂敷包みや、古ぼけたトランクを取り降したりした。

「これは俺が、持つて行くんだ、自分で持つて行くんだ。」

「ふざけるのは止して下さいよ、折角積んだものを――。何さ。そんなガラクタ！」

彼は、むきになつて、歯ぎしりして女の頬つぺたを抓つたりした。

「べら棒奴！」などと、彼は不平さうに云つた。――「玩具になんぞされて堪るものか。」

賢太郎は、困つた顔をして階下に降りて行つた。檀周子の、弟や妹たちは十代の子供ではあるが、他人の物も自分の物も見境ひのない性質だつた。彼が留守だと、その机の抽出をあけて手簡箋にいたづら書きをしたり、悪意ではないんだが、他人から借りた物は返し忘れて紛失させたりして平氣だつた。

「冗談ぢやない！」と周子は云つた。そして、彼の言葉に卑屈な針が潜んでゐるやうに感じた彼女は、

「ケチ！」と、附け加へた。

彼は、故意に、なかのものがこわれやアしないか、といふやうに疑り深い眼を輝かせて、陰にかくれて秘かに蓋をあけて見たりした。――實は彼自身、今まで押入れの隅に放り込んだまゝ、すつかり忘れてゐたのだつたが、斯んな場合に強ひてでも、そんな眞似がして見たつかたのである。自分にだつて「秘藏の物」「他人の手に觸れられたくないもの」「いくら斯んなに偏雜な生活をしてゐたつて、これ程の豫猶もあるんだ。」――見得で、そのやうな意氣を示し、これが意地悪るのつもりで、さつき起きてから彼女等に出し抜かれて應へやうもない鬱憤の代りに過ぎかなつたのである。

「何んなものであらうと自分のものには、夫々自分の息が通つてゐるんだからね、困るんだ、矢鱈にされては――。物品を、ぞんざいに取り扱ふ奴は、皆な碌でなしだ。」

穴に、さう云つては……いたつ……は、先へさに

「遠くなるッてエば！」と、叱れた。

「先へ行つたら好いおやないか。俺は、まだいろいろ用もあるんだっ」

彼はそんなことを云ひながら、悠々と風呂敷をはらつて、學生時分に獨りで、稽古の爲に口を吹奏したことのあるコルネットを、久し振りに口にあてゝ、音は發せずに、仔細に具合を験べるやうな手つきをした。

「觸つたらう？　こゝのところが、どうも凹つてゐる。」

「觸れと云つたつて、觸りませんよ。そんなもの、馬鹿々々しい！」

「俺は、子供の時分から、何か知ら座右に獨りだけで愛措する物品がないと、寂しかつたんだ――。今でも、勿論さうなんだが――。」

「この頃、何だか、醉はない時でも醉つ拂ひ見たいだ！」

「對照の物は、常に變つてゐた。或る時は何、或る時は何といふやうに、だが、その心持は常に……」

彼は、ぶつぶつ云ひながらラッパをまたもとの通りに丁寧に包んだり、トランクを引き寄せて、塵を吹いたりした。

――みんな、彼が何時かシダハラから、今の通りに芝居染みた考へで、持つて來たゞけで、つい今まで手も觸れずにゐた、現在の彼にとつては毛程の興味もない過去のセンチメンタルな「秘藏品」なのである。――周子の前では聞かなかつたが、その中には、ミス・Fから貰つたオペラ・グラスとか、同人雑誌に「凸面鏡」などといふ題名の失戀小説を書いた頃、参考の爲に集めた十二三枚の小さな凸面鏡と凹面鏡や、やはりその頃、生家の物置に忍んで昔のツヾラの中から探し出した價打のない古鏡とか、顯具の顯微鏡とか、昔の望遠鏡とか、父が昔アメリカから持ち歸つたおそろしく精巧

ピストルで、今ではもうすつかり錆びついてゐて決して使用には堪へぬものとか、同じく父の二三個のマドロス・パイプとか、子供の時母の針箱から拾ひ出したのが、小箱に入つてその儘殘つてゐた數個の玉蟲とか、蓋の裏側にミス・Fの寫眞が貼りつけてあるゼンマイの切れた懷中時計とか、二十年も前に父のアメリカの友達から貰つたのだが、今でもネジを卷くと微かに鳴るオルゴール・ボックスとか、父が蹴球仕合で獲得した。あまり名の知られてゐないアメリカ何とか大學の銅製カップとか――、以上十二種の他、未だ之れに類する五六種の愚劣な廢物が藏つてあつた。古くからそのトランクには、そんなものが詰まつてゐたのだ。大火の時誰が、これをさげ出したのだらう?――彼は、そんなことを思ひながらこの唯一切コレクション嫌ひに陷つてゐる心を、目醒してやらう。といふ程のたはれ氣で、重たい思ひを忍んで持ち出して來たのであつたが、汽車を降りる時には、もう少しで置き忘れて來るところであつた。

「ほんとうに、自分で持つて行くの?」

「さうも行かないかなア?」

思はず彼は、さう云つて笑ひ出してしまつた。彼は、冷汗を覺えてゐた。――「屑屋にでも賣つてしまへよ。」

「暇がありませんよ。」と、なだめるやうに周子は云つた。

三

「七草過ぎなければ、とても出來ないんですツて!あたし今も建具屋を二三軒きいて來たんですけれど、皆な同じなのよ、困つたわね、辛棒出來る?」

周子は、氣の毒さうに云つた。建具が一つも入つてゐない部屋なのである。この六疊一間だけの二階だつた、彼の今度

の三・四疊の書齋は——。片側に一方が廊下で、もう一方には夫々一間宛の窓があいてゐる。其の窓には、硝子代りの硝子戸が入つてゐたが建てかけて三年も放つて置いた家で、その間には知らぬ間があつたし、障子だけだつた。硝子戸と天井との間には、小さな板戸が入るやうになつてゐるのだが、板戸は入つてゐないので、紙が張つてあつた。西の窓にも北側の窓にも簾がピンで止めてあつた。その簾には、賢太郎の手で、得體の知れない模樣が描きかけてあつたり、靜取りが仕かけてあつたりした。——風があたる度に、三方の簾が帆のやうに脹れたり凹んだりした。これでも賢太郎が懸命になつて、壁に雜誌から切り取つた名畫を貼つたり、德利のやうな花瓶に水仙を活けて、床の間に飾つたりしたのである。

「困るはね！」と、あたりを見回して、更に周子は云つた。

「いゝよ、いゝよ、關はないよ。」

彼は、さう云つて行火の上に頬を載せた。行火といふものにあたつたのは、この冬が彼は初めてだつた。こゝに來て以來彼は、午後の二時頃寢床を這ひ出て、それから夜おそくまで斯うして、この部屋に丸くなつてゐた。ドテラを二枚も重ね着して。——また、バカに寒い日ばかりが續く正月であつた。

天氣が好いと彼は、三方の簾をはらつて、丸くなつた儘外の景色を眺めた。——南側は、西岡回りの旅人が初めに詣でる大きな佛閣の、厨房に面してゐた。北側の窓は、腰高だつたから、坐つてゐると青空と、眼近かの火見櫓が見へるだけだつた。そこには、いつでも黑い外套を着た見張り番が、案山子のやうに立つてゐた。彼は、時々筒形の望遠鏡をトランクから取り出して、射撃をする時のやうに一方の眼を閉ぢて、見張番の姿を眺めた。ものゝ好くない、加けに昔の眼鏡だつたから、肉眼で見るよりも反つてボツとした。いくらか對照物が大きくは見へたが、線が悉く靑地に滲んで

ゐた。如何程視度を調節しても無駄だつた、それでも彼は熱心にそんなものを弄んだ。はつきり見へるよりも反つて興味があるんだ、などゝ呟いだ。西側の窓は、キリスト教會堂の裏に接してゐて、朝からオルガンの練習の音が聞えた。それが時々俗曲を奏でた。佛閣からは、御詠歌の合唱が聞えた。

少しでも風が出たり、曇つたりして來ると直ぐに彼は、立ち上つて三方の幕を降してしまつた。

「これぢや勉強が出來ないでせう。」

「いや、そんなことは心配しないでもいゝさ。」

彼は、さういふより他はなかつた。勿論、この寒さに、この吹きツさらしの二階などに籠つてゐることは、どんなに彼が「アブノルマルの興味」を主張すべく努めても、第一寒くてやり切れないのだが、まア仕方が無いとあきらめたのである。

階下は、割合に廣かつた。尤も、この二階と、下の三間は古い母屋にくツつけて、三年も前に建てかけたのであるが、その儘で完成させなかつたのである。母屋の方だつて、地震に遇つた儘何の手入れも施してなかつたから、唐紙は動かず、壁は悉くひゞ割れてゐた。彼が、周子と結婚した當座、半年ばかり二人だけで母屋の方に住んだ。さうだ、三年ぢやない、建増しをしかけたのはその時分のことだつたから。――英一は、もう四歳になつてゐる。

その頃、この家が彼の「名儀」のものであるといふことを彼は、たしか周子から聞いて、名儀とは何か？と思つたことがあつた。

「抵當なんですツて！」

「へえ、シホらしいね。だが俺の名儀だなんて怪しいぢやないか？」

一ミツね。」

彼は、こういふことに就いても相當の見解があるんだといふ風に云つた。「君はお金をやつてくれたのに、おや、[illegible]なア！三千圓——此方が欲しいや。」

「ほんとにね。」

間もなく彼女の一家が、大崎からこゝへ移つて來た。彼は、彼女の母と〳〵何でも彼女の母が彼のことを、ケチだ！と云つたり、威張つてゐる！と稱したり、彼の母のことを、息子に對して冷淡だ！などと彼を嘲けるやうに云つたり、一度位ひ來るのが當り前ぢやないか！と批難したり、彼の父が、一度訪れた時、大變景氣の好さゝうな法螺を吹いて、泊りはしなかつたのに「さんざツぱら酒を飲んで」、歸る時に小供に小使ひ一つ與へなかつた、「田舍の人は、やつぱり吞氣だねえ、お前エらお父ツちやんは、乾度永生きをするだらうよゥ、お前エは幸福だよゥ。」などと云つて、諂同した厭味を述べたり——し、醜い云ひ爭ひをして、ヲダハラへ移つてしまつた。ヲダハラではまた彼は、自分の兩親と醜い云ひ爭ひをして、間もなく伊豆の方へ逃げ伸び、山陰の、畑の見張り番でも住みさうな小屋に一年も住んだ。

父が死んでから間もなく、彼が東京・牛込に間借りをしてゐた頃、周子の母が來て、

「ほんとうに、親類ほど賴みにならないものはない、家のお父さんはお人好しだから仕方がない、あゝ、厭だ〳〵。」などと云つて歸つたので、どうしたんだらう？　と、彼は周子に訊ねた。

「憾んでゐるはよう！うちのお母さんが——」

「貴様も好く似てゐるな、下品な云ひ回し方が！——」と、彼は怒つた。

「高輪の家が競賣になるんですツてさ！」

周子も憾むやうに云つた。

「フヽン！」

住ふところが無くなつては、そりやアさぞ困るだらうな！　と、彼は思ひもしたが顔色には現さなかつた。

「訴へられたんですツてさ！　その訴へ人は、タキノ・シン……」と、彼女は、彼の名前を云ひかけて、笑つた。

「へえ！」――――「好い氣味だア！」と、彼は云つた。何となく彼は、かツとして續けて惜態なことを二三言云つたが、何だか彼は怪しかつた。――可笑しくもあつた。

彼が、その次にヲダハラに歸つた時母が

「原田（周子の實家の姓）の代理の川崎といふ人から、お前に宛てゝお金が來てゐる。」と云つて、二百圓渡した。――彼と母とが極端に仲の惡い頃だつた。

さういふ種類の書きつけは、見ても彼にはわけが解らないので手も觸れなかつたが、母の説明に依ると、高輪の家が競賣になつて、第何番目かの抵當權者である彼に、返濟された金なのださうだつた。

「あそこまで、そんなことになつてゐたのかね！」

「どうだか、僕だつて知らなかつた。」

「だつて名前が……」と、母は、變に靜かな調子で變な笑ひを浮べた。

「僕の名前なんて、どうせ普段から滅茶苦茶なんぢやありませんか――好い面の皮だア長男だなんて！」

彼は、如何にも迷惑さうに不平を洩して、世俗的な常識に長けてゐる者らしく眉を顰めたりした。

「そんなことを云ふものぢやない。」と、母も云つて顔を曇らせた。その色艶のあまり好くない、だが眼立つほどの皺も

たく、そしてそれからびこはゐない窮屈すしろと彼は、初めて非常に滅茶な浪費をこゝろみたた。——そして實は、また死んだ父の名を徒らに思ひ描いたりしたから、何といふわけもなくバカ〳〵しい氣がして——（フフフフフ……。馬鹿な奴中ばかしが、好くも斯うこそつたものだ！）などと思つたりした。

「いくら僕が、仕様のない人間だからと云つたつて、ですね。」

彼は、胸を擴げて開き直つた。（何か、ひどく尤もらしい文句がないかな？　何か？　何か？——）——「これほど仕様のないことなんて考へて見れば、別段何もありやアしないや。普通の息子なんだ、自分で自分のことを仕様のない人間だ！と、自分に思はせるやうにしたのは……」

「お默り！」

「……」

「一體お前は何のつもりなの？　如何いふ了見なの？——幾つになるまで親を瞞すつもりなの？」

「瞞す？」

「やれ、學校の研究科へ通つてゐるの、新聞社に務めてゐるの……大うそつき奴！」

「……」——何アんだ、そんなことか！　と彼は思つた。「え、え、どうせ大うそつきですよう、だ。」

斯んな馬鹿氣た爭ひをしてゐるよりも彼は、思はぬところで、飛んだ儲け物をしたので、その金の使ひ道を考へてゐた。——（面白い〳〵。俺の名前が、俺の知らない間に役に立つてゐるなんて、一寸不思議な氣がするぢやないか。それにしても親父が死んで以來、こんなウマイことに四度も出遇つてゐるぢやないか、ひよッとすると俺の知らない間にも斯ういふ儲けがあつたのかも知れないぞ？　まアいゝや、そこで……　チエッ、バカ氣てらア、これッぽ

ツちの金で、想像をたくましくするなんて――」

彼は、父が死んで以來、例へば金に就いて考へるにしても、その額面が急に大きくなつてゐることが可笑しかつた。

「如何いふ了見なの？」

「了見ツて？」――彼は、今母と何か云ひ爭ひをしかけてゐたのを忘れてゐた。

「お前は、一體何なんだい？」と、母は努めて落着いて訊きたゞした。

「煩いなア！私は、私ですよ。」

「幾つだい、年は？」

「親の癖に、子の年を知らないの？」

「知らないよ。」

「二十九歲。」

彼は、さう云つて悠々と煙りを吹いた。

「そして何なの？」

「幾度同じことを聞くんですね！僕は、何でもありませんよ、――人間だよ、二十九歲の――。」

彼は、庭に眼を放つて、ピーピーと口笛を吹いた。そして火鉢の傍に投げ出してあつた金を、徐ろに懷中に容れた。

――（お蝶にやつてしまはう。）さう思つて彼は、淸々としたかと思ふと、直ぐまた斯んなことを考へた。（お蝶の奴、微々俺を尊敬するだらうな、何と云ふだらう、お光を呼んで、二人でお辭儀をするだらうな、ホツホツホウ。）――彼は、他人から感謝の禮などされたことがなかつたから斯んな空想が殊の他物珍らしかつた。――（突然なんだから一層彼女等

はいふだらう。よしッ、そこで一番[illegible]
さうな興味のある話を出して見ようかな？）

　彼は、口笛を止めて變な咳拂ひをした。母はそれに一層反感を持つたらしく

「それでも、人間のつもりか。」と、口惜し氣に呟いた。

「………？」

　いつもならこんな場合に、極めて圖太い度量を持つて、馬耳東風に聞き流すか、或ひは易々と相手を嘲笑ひ反すのが常だつたが、ふつと今彼も、母の詰問を自分に浴せて見た。――だが、これだけはまさか笑ふわけにもゆかない――ほんとに彼は、そんなことを思つた。――（たゞ、私は、あなたのやうにそれであることに、一抹の誇りも持たない者なのです。）

　さつきから彼は、自分の名前が、自分の知らない間に活動する？などといふことを、酷く濁つた頭で「不思議」に考へてゐたのであつた。夢で、自分の姿を見るやうに、氣付かずにゐたところを寫された寫眞を見るやうに、「考ふるが故に吾在り」の吾は、何も考へてゐない存在で、多少でも考ふるが故の吾は、別にその姿の陰にでもかくれてゐるやうに、彼は、ぼんやり、極めて單純なことを、「不思議」に、非科學的に想つてゐたのだ。

「名前」が活動するんだから一層怪しい……彼は、すれ違つた汽車の中に、嫌に取り澄して乗つてゐる自分を、チラリと見るやうな想ひに打たれたりした。

「ピー、ピー、ピー。」

　斯うやつて、犬でも呼ぶやうに口笛を鳴してゐると、今にもその姿の陰から

「何だい、何の用だい、僕アお前などに呼ばれる用はない筈なんだがなア。」などと云ひながら、迷惑さうに自分の「名前」が出て來さうな氣がした。

「やア、S・タキノ！」

斯う云つて彼は、その傍に寄つて行つた。

「君は、誰だい？」と「名前」が云つた。

「S・タキノさ。――だが、そんなことは如何だつて好いぢやないか、名前位ひのことを。」

「好いけれどさ、他の名前を呼ばれゝば俺は、返事はしないからね。S・タキノでなければ――どうも、その生れて來て以來の習慣でね――H・タノキと云へば、やつぱりあの親父……」

「解つてゐるよ、馬鹿〱しい――。シンの奴、シンの奴！斯う云つて何時か親父が、おそろしく怒つたことがあつたつけな。」

「うむ、あつた〱。」と、云つて「名前」は氣色を尖らせた。

「あの時は、俺は、隨分面白かつたよ、シンの奴、すつかり參つたね。」と、彼は、相手を嘲弄した。

「僕ア、面白いどころぢやなかつたぜ、冗談ぢやない、身が縮む思ひがしたよ。」

「フッフッフ、意久地のない奴だな。僕は、また、親父がカンカンに怒つてさ、シン、シン、シン、シン、シン――と、斯う怒鳴るのを聞いてゐると、何だか、それは名前ぢやなくつて、――景氣好く釘でも叩き込む音のやうな氣がして、胸の透く思ひがしたぜ。」

「笑ひごとぢやないよ、俺ア隨分痛かつたからな！」

「名前」は、もう[illegible]出したらしく、頭をさすつた

彼の父が、玄関を入ると云つた。

「シンの奴は居るか？」

その勢ひがあまりすさまじかつたので、彼の母は、居ない――と、かくした。彼は、奥の書齋で机に噛りついて、背を背いてゐた。

「何處へ行きアがつたんだ？」

「さア。」

「畜生奴！歸つて來やアがつたら――」

それらの言葉が手に取るやうに彼に聞えた。

「どうなすツたの？」

「赤ツ恥をかいちやツた。」と、叫んで、少し落着いてから父は、次のやうなことを説明した。

山本の家（近所の父の友人）へ行くと、娘の咲子が、化物のやうな畫の描いてある表紙で「十五人」とか「十七人」とかといふ變た名前の薄ツぺらな雜誌見たいなものを持つて來て

「シンちやんの散文詩が出てゐるわよ、をぢさん。」と云つた。

「ほう！」

「こんなのよ、こゝの處だけ一寸讀んで御覧なさい――ホツホツホ、さんさんね、をぢさん！」

咲子は「父の章」といふ個所を指差して、彼の父に渡した。

「滅茶苦茶に俺の悪口を書いてゐやアがるんだ、畜生奴！もう俺ア、彼奴とは一生口を利かないぞ、カッ！」と、父は母に向ッて怒號した。

「詩ですつて？」

「田舎藝者を妾にもつて、女房にヤキモチを灼かれてゐる間抜け爺――そんなやうなことが、一杯書いてあつた。……元來、貴樣が馬鹿だからだア、伜の前も關はず、云ひたい放題なことを云やアがつて。」

「自分が、行ひさへ……」

「何だつて、行ひだつてツもう一遍云つて見やアがれ、ぶん毆るぞう。――何を云やアがる、手前は何だ、手前は何だ、手前エこそ俺の顏に……」

父の激亢の聲が、何だか彼には、笑つてゐるものゝやうに聞えた。

「叱ッ！」

「手前エこそ今に、息子の碌でもない詩に書かれないやうに要心しやアがれッ！」

「聲が大きい。」

彼には、父の云ふ意味が好く解らなかつた。

「手前エには、な、何だらう、伜の前かなんかでなければ大ッ平に俺のヤキモチを灼くことも出來ねえんだらう、ヘッ！俺アこれでも世界中を渡り歩いて來た人間だア！」

偉いよ！と、彼は父に悪意を持つて呟いた。彼は、母に味方してゐたからである。――父の聲は、益々高まつた。

「俺のことは、關はないよ、勝手にしろ！

勝手にしたら好いだらうがな、と、彼は呟いた。

「これよりも手前エの息子のことを考へな、いつか一度に引出したいやうに思つてゐるらしいが、手だてはあるまい、何げに彼奴は、シンの奴は、ぬすッと見たいな野郎だ、面からして私に似てねえやア……――どうせ、手前が生んだガキだ、俺ア知らねえよ。」

彼は、ぬすッとのやうに呼吸を忍ばせて、窓から抜け出した。そして山本の家へ駆け込んだ。

「雞で――どうしたの？」

雞小屋から出て来た咲子は、彼の鋭い顔を見てなじつた。――草花を庭に植えてゐたところだ、といふやうなことを云つてから彼は

「どうして×××なんかを、持つてゐたの？」

と、雑誌のことを訊ねた。

「買つたのよ、この間――東京で。」

「さう、――おや、さよなら。」と、云つて彼は直ぐに引き返した。淑子好みな、婦慢な咲子の美しい姿が、もう彼の手のとゞかないところで、古い夢のやうに煙つてゐた。

「随分、ひどい人ね――」と、うしろから咲子が浴せかけた。彼は、瞬が空中に吹き飛んだやうにテレた。たゞ、彼女の際を、甘く胸に感じて、一層身が粉になつた。――咲子のことを、カンナといふ名前に譬へて彼は、二つの「散文詩」の中で、咲子が若し読んだならば酷い幻滅を感じるに違ひない程に書いてゐた。咲子と彼とは、彼がまだ明子と結婚しない頃、親同志の婚約があつた「この金持の娘は、金に卑しい。」とさへも彼は書いた。彼女は、金持の一人娘だつた

「自らそれを得意としてゐる哀れな娘」などとも彼は書いてゐた。

外から、そつと覗つて見ると、未だ父と母との間では、盛んに彼の名前が活躍してゐた。……――「まつたく俺は、あの時、父や母の間で交されてゐる、シン！　シン！　が、さ。暫く聞いてゐるうちに自分とは思へなくなつてしまつたよ――戸袋の陰に、ぴつたりと雨蛙のやうに體を壓しつけて、彼等の悲痛た争ひを聞いてゐると、まつたく馬鹿々々しくなつたね――たしかに俺は、蛙だつたよ、あの時、シンとかといふ彼奴等の息子は、悪い野郎だな――と、蛙である俺は、あきれて呟いだのさ。」

「お前は、そりや呑氣だつたらうよ、さぞ面白かつたらうね。」

「面白くはないさ、そんなありふれた騒ぎなんて……」と、彼は、退屈さうなセヽラ笑ひを浮べた。

これは、彼の先程からのあやふやな自問自答である。相手は、あの「名前」である。

「だが、君。」と、彼は感傷的な聲で相手を呼びかけた。――「阿母とは仲好くして呉れね、特別に親孝行なんて仕なくつても好いが、普通の息子らしくさ……それだけのことも俺には出來さうもないんだ。」

「お前は、何かにこだはつてゐるんだな、倫理的な立場で――」

「――憎んではゐないさ。親だもの、たしかに母親だもの、――父親ツてエのは、これで疑へば疑へないこともないが、母親だけは疑へないぜ。周子が、子供を生んだ時、親父が泌々と云つたぜ――母親には、自分の子供を疑ふ餘地がなからうな、たしかに自分の子だからね――だつてさ、馬鹿だね。……俺、あの時、一寸厭な想像をして、思はず親父のBawdy appearance を覗いたぜ。」

「馬鹿だなア」、お前こそ――。」

「そんな話は止さう。ともかく阿母のことは頼むぜ。」

「よし〳〵、俺が引きうけた。」

「名前」は、斯う云つて見得を切つた。――

「安心しろよ、何だい、べそ〳〵するない、ぬすッとらしくもない。」

「阿母だつて、寂しいだらう、親父にはさんざ憂目を見せられ、そして俺が、俺が……俺は、阿母に好きなんだ。顔だつて、心だつて随分俺は、阿母に似てゐるぢやないか！」

「よし〳〵もういゝ〳〵、お前は、名前のない人間なんだから愚痴を溢す必要はないんだよ。」

「それでも、いゝかい？ほんとうに。何かにつけて不便なことがありやしないかね。」と、彼は絶へ入りさうな聲で念をおした。

「そんなことは、俺たちの狭い世界だけの話だ、お前は獨りでさつさと歩いて行つて關はないよ。」

「いよう！君は、随分、度量が擴いんだね。――いや、有り難う、ぢや、失敬するぜ。」

「うむ。」

「ぢや、さよなら。」

「早く行けよ。」

「今、行くよ――握手しようか。」

「そんなことは御免だ。さつさと行つてくれ、少し焦れッたくなつて来た。」

「俺、何だか行くのは厭になつた、急に。」

「女のやうな奴だな。」

「厭だ〳〵、俺ひとりぢや、やつぱり寂しいや、せめて君が……」
「それぢや何ンにもなりやアしない……」
「何ンにもならなくなつても好いから、行つてくれ、一處に。ひとりぢや厭だ、厭なんだ、さつきから云つてゐたことは、ありやアみんなカラ元氣なんだ、あゝ……。」
――しやア〳〵と、洞ろな眼つきで口笛を吹いてゐた彼の眼から、ぽた〳〵と涙が溢れ出た。……しまつた！と、彼は氣づいたが、面白いやうにハラ〳〵と涙が溢れ落ちた。
「…………」
ふツと氣づくと眼の前に居る母の眼にも、涙の珠が光つてゐた。まだ、彼は、母のそれをキレイに、感じなかつた。
そして彼は、自分で自分を「邪魔」にした。

四

雪が降つてゐた。
彼は、隙間のないやうに無數の鋲で、三方の窓をしつかりと塞えた。――靜かな午後だつた。賢太郎が拵えかけたカーテンは、短かゝつたので、悉く白い布に取り換えたのである。
風がなかつたから、濕つた布は凝ツと、この樸拙な部屋を取り圍んでゐた。彼は、行火に噛りついて、トランクの中から取り出した金製の古いカツプで、チビチビとウヰスキイを舐めてゐた。
――「それぢや、原田では、この先き如何するんだらう、家(うち)がなくなつては？」

いつか彼の母は、この家に就いて一寸妙な話を洩したことがあつた。

「どうするのかね……」

「割合に大家内でもあるし——。」

「原田の叔父は、この頃何ンにも仕事がないんださうですぜ。」

「まア、氣の毒な——。」

あまり氣の毒らしくもなく、彼の母は苦笑を洩した。その後彼が、この家に就いて周子に訊ねて見ると彼女は

「うちのお父さんが、また買ひ戻したんですツてさ。だから今度は、あたし達は相當の家賃を拂はなければならないでせうね、うちのお母さんが、時々あたしにそれとなく云ふわよ。」などと云つた、——原田は、この頃一文の收入もないといふ話だつた。

「毎日あんなに忙しさうに出歩いてゐるのに、一體何をしてゐるのさ。」

決して訊ねたくはなかつたが彼は、彼女に、輕蔑的な笑ひを見せて訊ねたりした。

「人が好いから駄目なのよ、うちのお父さんは——」と、彼女は云つた。

「未だ半月しか經たないんだから、金はあるだらう、あの?」と、彼は云つた。引ッ越しの時前の借家の敷金を三百何十圓か、彼女は彼に斷りなく領してゐることを、彼は知らん振りをしてゐたが、忘れてゐたわけではなかつた。

「ホツホツホ。」と、彼女はわざとらしい下品な笑ひを浮べて「隨分、あなたは細いのね。——もう三十圓ばつちしかありやアしないわよ。」と云つて、何に使つた、何に使つたなどといふことを立所に說明した。

「俺ア、知らねえよ。」

「でもいゝわね。この頃は手紙を出さなくつてもヲダハラから、お金が來るからね。」

彼が、原田の家へ同居してゐることを彼の母はあまり喜んでゐなかつた。彼は、ずつと前に此處に居た頃は、その種の母の不快を察して、それも一つの理由で歸郷したのであるが、今度は、母が明らさまな不機嫌を示さないだけ、彼は、反つてどれ位ひの意地惡るを母にしてやることが、辛くもなかつた。

「お前は、隨分親孝行だねえ、感心だよう！　ほんとうたら今お前がヲダハラの主人なんだから、阿母さんの口なんて出させないのが當り前なのに、斯うして書生時分と同じ暮しをしてゐるなんて！　ハ、、、、おとなしいんだね、つまり。陸辨慶……」などと周子の母は、巻煙草などを喫しながら親味を裝ふ笑ひを浮べた。と彼は、ワザとこの老婆の言葉に乘せられたやうに、心中の不快は押し隱して、放蕩兒のやうな不平顔をして

「ほんとうに、バカ〳〵しいや。」などと呟いた。そして、反つて相手の似非親切に研究の眼を放つた。すると老婆は、益々愉快がつて

「確りしなよ。油斷してはゐられないよ。」

さう云つて暗に彼に「親不孝」を强いた。

「まつたくだね。」

こんなに彼は、變な落つきを示して、相手の醜い感情を一層醜くしてやれ！などと計つたりした。

「阿母さんの前に出れア、碌々口も利けないツてエんだから仕末に終へないな、この子はよう、ほんとうに——。」

「ほんとよ、お母さん。」と、周子も傍から口添へした。彼は、何となく好い氣持だつた。

「間に入つて一番辛いのは、お前だけだのう。」と、老婆は娘に云つた。——「阿母さん任せにして置いたら、後で一番

言ひはしないにしても、

「どうしたら好いだらうね、お母さん？」

「うちのお父さんも、それを心配してゐるんだよ。」

「あたし、ヂリヂリしてしまふわ。」

「無理もないさ。好くタキノと相談して御覧よ。餘計なお世話だなんて思はれるとつまらないからツて、お父さんも。」

「さうよ／＼。直ぐにうちのお父さんを邪魔者呼ばはりをするんだからね。」

「バカだね。うちのお父さんも――。そりアやさうと、ヲダハラの阿母さんは髮を切つたかね？」

老婆は、知つてはゐるんだが、知らん振りをして、彼の、割合にそれに就いては潔癖らしい道德的な反抗を煽てる爲に、済して娘に訊ねたりした。

「いゝえ。」と、娘は、白々しい殘酷感を胸に秘めて、首を振つた。

「へえ！」と、老婆は、仰天するやうに眼を視張つた。そして、拙い言葉で今更のやうに女の貞操に就いて、娘を諫めたりした。そして自分が、どんなに不行跡な夫と永く暮して來たにも關はらず、貞操觀念は如何に神聖なものであつたか、といふ事などを附け加へた。――彼女達は、彼の母の不德を稍ともすれば吹聽したがつた。それで、哀れな自慰を貪つてゐるらしかつた。

彼は、この家に同居するやうになつてから自分が今迄母に對して抱いてゐた「道德的な反抗」が、ウマク影をひそめて行く氣がして寧ろ淸々とした。今迄、自分がひとりで焦立ツてゐた卑俗な感情を、この家の卑俗な連中が悉く奪つて呉れた――そんな氣もした。それで自分の心は、別段デカダンにも走らず、あきらめといふ程の云へばエゴにも陷ら

す、別段改まつた人世觀をつくることもなく──彼は、そんなことを思つて、氣附かずにたゞ己れの愚鈍に安住しようとした。

(母上よ、安んじ給へ。)

彼は、斯う祈つた。──彼の頭は、使用に堪へない剝げた鏡だつた。あの、昔の望遠鏡のやうに曇つてゐた。彼は、自分の頭を例へるにも、こんな道具に引き較べるより他に仕様のない己れの無智が可笑しかつた。

「でも、寂しいだらうね。」

「そんなこともないだらう……」

「さうかね、タツタツタ……」

老婆は、缺けた齒を露はにして笑つてゐた、娘と共々に。そして彼の方に向つて、話頭を轉ずる爲に

「だけど、ちつたアお前だつてかせがなければ……、そんなことも考へてゐるの？」などゝ訊ねた。

「とても駄目だ。」と彼は云つた。

「嘘なのよ、お母さん。」と、傍から賢太郎が可愛らしい聲で口を出した。「兄さんは、時々雜誌やなんかに童話を書いて、お金を儲けてゐるのよ。」

「ほう！童話ツて何だい。」

「お伽噺のことよ──だから、この頃毎晩出かけて、屹度醉つて歸つて來るぢやないの！あれ、みんな自分で取るお金なのよ。」

「ほう、偉いんだね。──ぢや、ヲダハラからはいくらも貰つてゐるわけぢやないんだね、遠慮深いんだね、感心だね

さうよ」

「あたしなんて、病院へ行くんだつて逆上してゐる位なのよ」と、妹に云つた。彼女は、婦人科の病院に通つてゐた。そ妾は、忽ちカッとして彼を何か罵つた。

階下の仲間入りをして、母上よ、安んじ給へ！などゝ祈つてゐることも彼には、面白かつたが、一時間も辛抱してゐると、反つて不純な己れを見るやうな淺猿しさに辟易して、ほうほうの態で二階へ這ひあがつた。そして、この狹さも厭はず、この村社の急拵への神樂殿にも似た部屋に、襖を引き回らせて、匙投げたやうな顔をして閉ぢ籠つてゐた。

「郵便」と、云つて賢太郎が襖の間から、彼が一目見れば解る母の書狀を投げ込んで行つた。

近頃氣分が勝れない、といふやうなことが長々と書いてあつた。その一節に彼は、次のやうな個所を讀んだ。

「……御身は近頃著述に耽り居る由過日村山氏より聞き及び母は嬉しく安堵いたし候、酒を慎しみたるものと思ひ候、父上なき後の痛き心を風流の道に向けらるゝも亦一策ならん、務めの餘暇にはひたすら文章に親しむやう祈り居り候、如何なるものを執筆せしや、母は日々徒然に暮し居り候故著書一本寄贈されたく御承知の如く爾後書店の出入なければ何卒至急御送り下され度候、孰れ閲讀の後は改めて母の感想を申し述ぶべく到來を待ち居り候、御身は英文學士たればその昔母の愛詠せるおるすおるすにも似たる歌もあらんなどゝ徒らに樂しき空想を回らせ居り候……」

母は、W.Wordsworth の古い翻譯詩の愛詠家だつた。日本では、馬琴を最も愛讀した。母の實家は、昔、その父や祖父の頃から村一番の藏書家だつた。そして、娘は母一人だつたが、二人の兄弟は揃つた讀書家だつた。その反對であるタキノ家や彼を、常々母は輕蔑した。彼は、いつか母からいろいろ文學に關する質問をうけて一つの返答も出來なかつた。――では、お前は一體何を主に研究してゐるんだ？と訊ねられて、彼は思はず顏を赧くした。話を聞いてゐた私立

大學の文學部で、彼は英文科に籍してゐることに氣付いて
「英文學！」と、喉のあたりで蚊のやうに細く呟いだことがあつた。傍で聞いてゐた父が
「へえ！　お前は文學なのか？俺ア、また理財科だとばかり思つてゐたんだ。ハツハツハ……」と笑つた。
「私は、文科の方が好いと思ふ。」
母は、きつぱりとさう云つた。
「そりやア、好きなものなら――。」と、父は云つた。
彼は、たゞ樂をする目的でそれを選んでゐた。好きか？嫌ひか？そんな區別も彼は知らなかつた。母が輕蔑した彼の父でさへ、彼よりは遙かに英文學に通じてゐたらしかつた。彼には父の少しばかりの藏書である英文學書すら讀めもせず、讀まうともしなかつた。
誰が讀むといふわけでもなく、彼の家にも古くからの習慣で、月々村の書店からいくらかの雜誌が入つてゐたが、そのうちの通俗的でないものだけを彼は、伊豆に逃げのびた頃から、巧く母に斷つて、書店から直接彼宛に郵送させた。東京に住む現在でも、それ等は附箋がついて回つて來た。彼は、母にいろいろの書物を呈供することを約したこともあつた。近頃の書物は、お前に選定して貰つた方が好いだらう、と母が云つたので――。
村山氏といふのは、あまり彼の家と仲の善くない近所の會社員だつた。
村山氏が、自分の何を讀んだのだらう――と、彼は思つた。そして彼は、自分が今迄に書いたいくつかの小說の題名や內容を回想して、案外呑氣な笑ひを浮べた。――たゞ村山氏が何んな氣持で、彼のことを母に通じたか？が、解る氣がした。ずつと前父をモデルにした小品文を父に發見されて激怒を買つたことがあるが、そして酷く困惑したことが

あるが、この頃ではそれ位ひのことで体をよくする程の餘裕もなし、若しかも頼んで一層をかへてくれてしまへ！一ふ
た、好くさういふことを云ふ人である　と、云つたら、
「自殺は嫌ひだ　黙つてゐるところでも開け放しにしてくれ！一体この厭々しさは周知してゐるんだね、何時暴露され
たくはない。」

村山氏といふ人は、他人の不祥事や秘密を發いてセヽラ笑ふことが好きな人である。内容には觸れずに、好い加減な皮肉で、彼の母を悦ばせたのであらう！村山氏を、憎む氣にもなれなかつたが、愚かな批評子者の非文學的な彼の小説のつまり彼である主人公が、ペラペラと吾家の不祥事を吹聽したり、親の秘密を發いたりする文章を書き綴つてゐる浅猿しさを、彼は自ら嘆いた。そして、何も知らない母が氣の毒であつた。彼に、想像力に欠けたこれの仕事が恨めしかつた。また、下らない奴に邪魔される迷惑も感じた。

「言譯をして、母に送らう。」

彼は、母の手紙を讀み終ると同時に、思はず斯んなことを呟いた。一寸以前の彼であつたら、ワザと意地悪る氣な笑ひを浮べて、――斯んな刺激も必要だ！とか、不徳の制だ！とか、と安ッぽく露悪的に呟くに違ひなかつたが（現に彼は、さういふ小説を書いてゐる。）そんな感情は巧い具合に、この家の一種彼にも通ずる卑俗な連中が、あゝいふ態度で彼の心を拭つたやうなものだつた。この家の連中が暗に彼に要求することの、反對の結果が彼の胸に拡がつてゐたから――。一體彼には、さういふ癖があつた。例へば自分の前に来て、誰かの悪口を吐く人になど出遇ふと、一應はウンウンと云つて聞いてはゐるが、そして時には自分も一處になつて嘲言ることもあるが、いつの間にか、そこで悪口を云はれてゐる向方の人が、反つて懐しく、好きになつて來るやうな場合があつた。

「さうだ、これはたしかに巧い思ひつきだつた。」と、彼は思はず口に出して獨言した。

古い浪曼的な幾つかの英詩を探し出して、耽念にこれを飜譯して、そして厚い紙に綺麗に清書して、何枚かを丁寧に立派にとぢて、恭々しく母に捧げよう……これやア、案外仕事としても面白いかも知れないぞ——などと、彼は呟いた。

(先づ、おるずおるす——か？)

彼は、母から英文學士と稱ばれたことが、奇妙に嬉しかつたのである。そして彼は、一躍嚴格な學究の徒になつた氣がして、衒學的に眉を顰めて、窓の間から暫く外景を覗いたりした。——花やかに、大片の雪が降つてゐた。火の見塔が、雪にぼかされて煙突のやうにぬツと突き立つてゐた。勿論、見張りしてゐるに違ひないのだが、見張り番の姿は見えなかつた。顏つきばかりで、彼の心は無暗に白いばかりだつた。たゞ、今漠然と心を躍らせた形のない力が、形あり氣に、ハラハラと顏や胸に雪のやうに暖く、冷たく、こんこんと降りしきつて間もなく五體までも、埋り、溶けてしまふやうに恍惚とした。——さつきからのウヰスキーがさせる業なのであらう、冷たく、暖かく、雪が、雪景色が、冷たく快かつた。——無い智識を振りしぼつて、努めて飜譯などをしないでも、三つや四つ位ひは立所に叙情的な詩が作れさうだ——ふと、そんな氣もしたが、永遠に詞想からとり殘されたカラの頭が、窓の間から雪景色を眺めてゐるだけのことに氣附いて、彼はテレ臭い苦笑を浮べて、窓をとぢてしまつた。——そして、飜譯に心を反した。だが、二ツ三ツうろ覺えのウオーズオースやテニソンでは、折角飜譯しても、母だつて見覺えがあるかも知れない「英文學士」の稱號を取り上げられてしまふかも知れない、——それじや、何もならないし、語學力は中學の頃と何の變りもないし、「折角の計畫も、駄目かな。」と、思つて彼は、行火の上に首垂れた。——いや、いや、そんなことぢや仕方がない、間もなく自分の生活は、大變惨めなものになつて到底斯んな種類の仕事に耽つてゐる餘裕はなくなるに違ひない——彼

に、[illegible]考へを起したりして、[illegible]――（[illegible]、[illegible]、また
お字引の引き方を忘れてもゐないだらうからな。）

彼は、なみなみと注いだウヰスキイのカップを一息に飲み干した。――そして、またトランクの中から、ボロ〳〵になつてゐる英詩集を取り出して、断れ〳〵に歌つた。

「She was a Phantom of delight
When first she gleam'd upon my sight;
A lovely apparition, sent
To be a moment's ornament;
Her eyes as stars of twilight fair;
Like Twilight's, too, her dusky hair;
But all things else ……」とか「何だか、はつきり解らないぞ、この、わるすわるすは！」と、云つて、また、別の處を開いて――「Who is the happy warrior? Who is he—Whom every man in arms should wish to be?」などゝ叫んで「といつも、解らねえ、チョツ！」と舌を打つたり「おや、こんどはテニソンだ。」と、云つて、ひよろ〳〵と立ちあがつて

「Ring out, wild bells, to the wild sky,
The flying cloud, the frosty light:
The year is dying in the night;

Ring out, Wild bells, and let him die.」

——「これやア、好いなア！」と、感嘆して「Wild bell は、好いなア！」などと悦びの眼を輝やかせた。この英文學士は、かの有名な、"In Memorium," をこの時初めて眼にしたのである。そして彼は、更に聲を大にして

Ring out the old, ring in the new,
Ring happy bells, across the snow:
The year is going, let him go;」と、のろい怪し氣な發音で切りに歌つた。——「Let him go——彼ヲシテ、行カシメヨ、か！」

それから彼は母へ宛てゝ手紙の返事を書いた。母の手紙が、彼と争ひをした彼のものゝやうではないと同じく、彼の手紙も亦白々しい親情に充ちてゐた。

五

初めは、さうしなかつたが、いつの間にか彼は、階下の連中と同じ夕餉の膳に向ふようになつた。そして、機嫌の好さゝうなことばかりを喋言りながら夜、深更まで晩酌を續けて、翌朝、子供達の間に、子供達と同じやうにモグラのやうに轉ろがつてゐる自分を見出すのであつた。

ヲダハラの母に敵意を持つてゐるといふ心持を仄めかせたり、金錢の話をしたりすると、周子の母が相好を崩して二ヤニヤするのでそんなことで彼は卑賤な愉悦を感じて、恰も七面鳥のやうに呑氣な倨傲を示した。

「うむ、俺はもうヲダハラなんかに歸らないんだ。面白くもない！」

―お前に、そんなにゐる許りはそんなにお前なんかにはできなかつたんだつてね！」

さう彼女が云ふのは、彼女と違つて、彼の様は作に大変冷淡だからそんな時にお前など云ふだつて「お前のやうな捻れた者が」落着ける筈はあるまい、それに引換へ自分はこのやうに親切だから定めしこの家の消息は楽しみであらう！――それ程の意味で、若し彼が、その意味に氣附かないでゐると、彼女はそれだけのことを明らかに附け加へるのであつた。彼女は、機嫌の好い時には稍もとすれば相手を茶化す爲めに「お前のやうな氣性の者」といふ言葉を使ふのが癖であるが、機嫌の悪い時には、この同じ言葉を悪い意味に通用させて、陰で他人のことをそしるのであつた。また彼女は、自ら「私は、斯ういふ人間だから。」といふ言葉を、自讃の意味に用ひて、自分の話を續ける癖があつた。――彼は、この重寶な言葉が夥しく嫌ひであつた。迷惑を感ずるのが常だつた。だから彼は、いつでも彼女のその自讃の言葉を耳にする時は、「如何いふ人間なのか此方は知らないよ、云はゞ、まア、あまり好い人間だとは思つてはゐないだけのことだが――」といふやうに、此方も概念的な冷淡さに片附けておくのみであつた。……彼が、そんな思ひに耽つてゐる時、丁度彼女は

「そりやア、もう私は……」

そりやア、もう私はゝとはゝ……と、この仲々彼女などには敗けてゐないつもりの鸚鵡のやうな彼の胸に繰り反させて

「そりやア、もう私は、斯ういふ人間だから――」と云つた。「他人の事となると……」などと云ひながら、膝の上の食物を指でつまんで、具合の悪い入齒でニヤグ〱と嚙んでゐた。

「ほんとうに、子供達に對しては親切だなア……羨しいやうだよ。」

そんな風に彼が雷同すると、多少の嘲笑が含まれてゐても、それには氣づかず、自分の讃められることだけには

素直で、子供らしい彼女は、身をもつて點頭くのであつた。

「お前なんて、貧棒こそしなかつたらうが、相當これで人知れぬ苦勞が多かつたらうからな！」と云つて、また彼の母を遠回しに批難するのであつた。と、ウマク彼女の罠に陷つて他合もなく彼は、胸がグッとするのであつたが、我慢して

「さうとも〳〵、貧棒はしなかつたとは云ふものゝ、何も贅澤をしてゐた譯ぢやなしさ……賢太郎なんかの方が、反つて幸福だよ。」

彼も體全體で點頭いたりするのであつた。この相手に、おもねる爲に彼はさう云つたのであるが、云つて見ればこれも僞りではないやうに思へた。

彼女は、他合もなく悦んだ。——「まつたく私ア、子供には心配をかけたことはないからな、氣苦勞だけは——。」

どんな範圍で彼女が、さう云ふのか解らなかつたが、彼の知つてゐる二三の實際的のことで見れば、この彼女の言葉は彼れには噓としか思へなかつた。兩子と一つ違ひの姉の賢子は、行衞不明だつた。父親のない赤兒を伴れて暫く歸つてゐたが、母親に僅かばかりの所持金を費消されてしまつて、と急に母親は彼女を冷遇し始めて、いつか賢子から彼が聞いたのであるが、妻子があつたつて何だつて關はないから成るべく金のありさうな男を引ッ掛けろ！とか、カフエーの女給になれ！とか、と、この母に似てずんぐりした姿の醜ひ賢子に命ずるのだといふ話だつた。そして到々「死ぬなら死んでしまへ。」と云つて追ひ出したのださうだ。賢子は、赤兒を置いて出掛けた限り戻らなかつた。

面を見るのも厭だ！などと云ひながら母親は、赤兒をぞんざいに世話をしてゐた。彼女は、飯よりも菓子が好きで、それがなくなると急に不機嫌になつて、赤兒の頰ッぺたを抓つたりするといふ話だつた。優しい賢太郎が、大變困つて、電報配達になつてついこの間まで彼女を養つてゐたさうである。

「お前なんか、いくら働きがないと云つたつてまだ〳〵安心ぢやないか、家の者なんか……」と泣ながら、愚図ついて何か云はうとすると、
「お母さん。」と、傍から賢太郎が、たしなめた。
「僕だつて、子供ぢやないんだからなア。」
「さうとも〳〵、立派なお父さんぢやアないかよう。」
斯んな風に彼女を、悦ばせて彼は、悠々としてゐたかと思ふと、急に山羊のやうに哀れた髭を振り絞つて、自分には實際的には何の働きもないし、徒らに齢ばかり重ねて、この先き一體どうなることやら、自分のやうな人間が一朝にして貧乏人になつてしまつたら、それこそ水に浮んだ徳利も同様だ――
「あゝ！」などと女々しい溜息を吐いて、忽ち彼女の側から、にやにやを笑つて、その心を白くさせてやつたりした。さういふことを云ふと彼女は、見事に早變りをして、娘を質物にしてゐる頑婆のやうに冷淡になるのであつた。そして若し、彼がこの時後架にでも立たうものなら、狹い家だから聞えるのである。そこで子供等と遊んでゐる彼の四歳になつたばかりの英一を指差して
「この子は、うちの子供達と違つて、悧口だぞう、――あの顔の大きいこと……」などと憎々しく呟いた。悧口だぞう！は勿論揶揄だつた。
後架から戻つて來ると彼は、また七面鳥になつて
「何ヤに、△△の土地だつて未だ殘つてゐるんだ、近いうちにあいつを一番手放しさへすれば……」
そんな風に、止せばいゝのに思慮ある肚の太い實業家が何事かを決心したやうに唸つたりした。……すると、また彼

女も、彼の豫期通りに、忽ち笑顔に返つて

「しつかりおしよう、タキノやア。」と、薄氣味の惡い猫なで聲を出して――まつたく、斯んな種類の中婆アさんといふものがあるんだな！と、彼を變に感心させて

「お前さへしつかりしてゐれば、大丈夫だよう、いくつだと思ふのさ、ほんとにお前はよう……ほんとうなら阿母さんは、ク、、、、。」と彼の惡感をそゝる意味あり氣な忍び笑ひをはさんで「ク、、、、もう隱居なんぢやないかねえ、クツクツク……、お前は未だカラ子供なんだねえ、なんにもクヨクヨすることなんて、ありやアしないぢやアないかねえ……」

その聲色が、見る見る飴のやうに甘く伸びて行つて、毛蟲になつてうねうねと這ひ寄つて來て、

「ヲダハラの阿母さんは安心だよう……まア、斯んなおとなしい伜をもつて……」

あゝ、もう堪らないなア！あゝ、厭だ〳〵！と思つて、彼が身を引く途端、ポンと彼女の營養不良の薪のやうな手が、彼の肩先をさするやうに叩いて、彼をゾッとさせた。

彼は、この中婆アさんの歡心を買はうとしてゐる己れの所置に迷つた。

（ヲダハラの阿母さん！）

彼は、そつと繰り反した。周子の母に、遠回しな厭がらせを浴せられて、今迄自分が母に抱いてゐた反對の心境が擴けたなどと思つたのも、みんな苦し紛れの痴夢で、斯うあくどく殘虐な手に攻められると、一瞬間前の餘裕あり氣な心持などは、鵞毛の如く吹き飛んでしまひ、腑抜けた自分が「ヲダハラの阿母さん。」と、この中婆アさんの前で、夫々彼女等の命ずるまゝに、泣いたり、笑つたり、舌を出したり、出たら目に踊り狂ふ、魂のない操り人形である己れの所置に迷つた。道德的な理窟で母に義憤を覺えたのでもないらしい、また感傷が、彼女の幸福を祈つたのでもないらしい…

……（カッ！何てつ役ないに目を遭はされて、ソウと済む話のものか！）

「………」

「お前は、なかなか感心だよう。」

カッ！と、風船玉のやうな已れの頭をはちいて、彼は——この「悪婆」の面上に唾を吐きかけてやる！やれる境遇か？やる代りに、こゝで已れの母をカッと罵るか？罵れば、代りにはなりさうもない、心から已れの母を呪つてしまひさうである……何と、この「悪婆」が手を叩いて嬉ぶことであらう、相手が此奴でさへなければ、自分は拳を挙げて自分の母を罵れる、そして清々する……いや、鏡に向つて、同じ程度にこの二人を罵つてやりたい、いや、鏡では、自分の馬鹿面が寫つて泣き出してしまふだらう。天に向つて演説するか？星を見れば、斯んな亢奮は、また鴻毛になつて飛散してしまふだらう……（あゝ、俺は、とてもこの眼前の妖婆には敵はない——）

そつと彼は、にやにやしてゐる「妖婆」の横顔を眺めると、間もなく此奴に酷い幻滅を覺えさせる程のボロが現はれて、と忽ち妖婆は悪鬼となつて、胸を突かれ腕をとられて、子供諸共戸外にほうり出されてしまひさうな危惧を覺えて、——ふと、その危惧が反つて思はぬ安易に變つたり、自分の母からの白々しい通信に滑稽な戰きを持つたりした。——彼は、幼稚な自稱科學者が、顯微鏡下に、人畜に害をなす怖るべき病菌を見て、思はず身震ひを感じたのであるが、大人であることゝ、研究家であつたことゝを顧みて、擽つたく身震ひを堪へながら、昂然として、厭々ながら眼鏡を覗いてゐる愚かな見得坊に過ぎなかつた。無能な衒學者に過ぎなかつた。カラクリの眼鏡を覗いてゐる兒童に過ぎなかつた。また、何の得も取れない詐欺師にも等しかつた。——まつたく彼は、こゝで厭な顔を現さずに凝つとしてゐることは、如上の形容でも足りぬ程、随分苦しかつたのである。

「なア、タキノや――」

「アッハッハッ――まつたくだなア。」

いくら程あれば、以前の運送店を取り戻して、あんな働きのない夫などは頼ますに――云々といふ、彼女は、醉になつてゐる愚痴を滾して、夫を批難しはじめてゐた。――母から遠ざかれば、いくらか彼は救かつた。

「それツぽツちのこと、何とでもなるさ。」

何となく彼は、吻ッとして、ほんとに、それツぽつちならといふ氣で、何の成算もなく

「俺がやる〳〵。」などと、景氣好く叫びながら、また呵々と笑つた。――諧同しないと、怖い氣もしたのである。

彼は、斯んな場合に限らず、一寸感情がもつれると、直ぐに己れの姿を見失ふ性質が、幼時からあつた。無神經な物體になつてしまふ病氣を持つてゐる。

斯んな嘘のやうな經驗がいくつもあつた。――幼時、發狂してゐた叔父に手を引かれて（彼には、叔父が狂人といふことが好く解らない程の幼時だつた。家人にかくれて叔父が彼を伴れ出したのださうだ。）裏の山へ散歩に出かけた。父の直ぐの弟で、彼が父のやうに慕つてゐた叔父である。細いことは忘れてしまつたが、何でも叔父が、可成り高い崖の上から、下の畑に、俺も飛び降りないか？と誘つたのである。低いやうに見えたので、叔父に續いて、飛んで見ると、案外に高くつて、彼は、脚が地につた刹那は平氣だつたが、一寸間をおいた後に卒倒した。――二十二三才の頃、父と一處に、初めてミス・Fを訪れた時、父はFの父と用談をしてゐるので、快活なFは彼を、自分の部屋に誘つた。いくらFが、話しかけても彼は、アセるばかりで答へることが出來なかつた。彼女は、おぼつかない日本語を用ひるのであつたが。――彼は、彼女の洋服の下に躍動してゐる鹿のやうに明るい四肢を想像して、自分が彫刻家でないことを後悔した。

彼が返答に困つてゐると、彼女は、袋の口を両側に裂いて

「うちの黒猫よりも、アナタはおとなしい。」

などと、皮肉でなしに云つた。彼は、紅くなつて立ちあがつた。——彼には、洋装の同伴などと、たゞ珍らしかつたので、不躾けにあたりを見廻した。Fが、一寸部屋から出て行つた時彼は、隣りにも同じ部屋があるので、その方へ進んで行くと、突然、酷く咳くて、冷いものに、イヤといふ程頭を殴られた。——気附いて見ると、壁に嵌り込まれてある大きな鏡だつた。惚き見をしながら、歩いて行つたのだらうが、余程酷くテレてゐたものらしい。今、思つても、その時鏡に写つてゐた筈の己れの姿は、どうしても思ひ浮ばない。その晩、家に帰つてから彼は、熱を出した。誰にも見られなかつたから、好かつたが——と呟いで、胸を撫で降ろしてゐる自分が、一層堪らなかつた。

彼のは、物思ひに耽つて眼前のものを忘れるといふ類ひのものではない。

「さうなれば、ほんとうに私は救かるんだがな。」

「救かるなんて！そんなことを云はなくつてもいゝよ〳〵。」と、彼は、無造作に頷いて、円子の肩を一層気味好くさせた。——ブランコに乗つて、中間に達する程の弧を描き、風を切る身に、足の裏から冷い風が浸み込んで来る快くもない勢ひで、五体が硝子管になつてゐるやうな面白さだつた。

悪事を働いて、茶屋酒を飲んでゐる小人の心持は、斯んなものかも知れないぞ！——彼はまたそんな風に概念的な馬鹿た比喩に身を投じて、鈍重な明るさに浸つた。——だが、彼は、そつと左手をふところに忍ばせて、右手では飽くまでも洒落を装ふて、徐ろに酒盃を上げ下げしながら、秘めた手の平をぴつたりと胸に押しあてゝ、微かな鼓動をさぐつて見たりした。と、それは、次第に鋭く凝りかたまつて、そして、見る間に、いくつかの粒に砕けて、小さくき

と鳴りながら脆弱の淵に沈んで行くのであつた。

この小さな、無神經な物體の音は……？と、彼は夢想した。渚の岩陰に潜んで、波が來ると驚いて窓を閉ぢ、引けばまたこつそりと顏を現してあたりを眺めたり、産れて以來それを續けてゐるにも拘はらず一向波に慣れない愚かな「ヤドカリ」が、稍大きな波にさらはれて、アツといふ間もなく岩間から轉落して、ころころと水の底に沈んで行く心細さだつた。

「またやられてしまつたぞ、殘念だな。あの岩まで這ひあげるには、また相當の日數がかゝるんだな。あゝ、厭だな…」と、怠惰なヤドカリは呟いた。――「眼もあけられやアしない……うつかりすると、砂に埋つてしまふぞ。口も利けやしない、息苦しくつて……水の底なんて――。ウゝゝゝ。」

「酒ゝ！」と、「ヤドカリ」は叫んだ。

「もう、よしたらどう？」

周子は、さつきからの彼の困惑を悟つて、珍らしく夫に同情する程の氣になつた。

「好いぢやアないかねえ、お酒位ひ……」と、彼女の母は、親切に酌などした。「私は、なんにもやかましいことなんて云やアしないしさア。」

彼は、何とかして、饒舌な周子の母を默らせてやりたかつた。

「Hermit-Crab ツて、何だか知つてゐる？」と彼は、突然周子に訊ねた。

「知らないわ。」

知つてゐると、彼は思ひはしなかつた。自分だつてさつき彼は、Yadokari〔寄居蟹〕n. the Hermit-Crab, と、和

想ひ出したい文字を和英字引で引いたのである。

「何さ？」

「いや、知らなければ好いんだがね——僕が、一寸忘れたんだよ、えゝと、えゝと」などと彼は、苦々しく呟きながら何時も夢に耽る表情を保つた。好いあんばいに彼女の母は、黙つてしまつた。これはかりでなく彼は、一三日前から切りにヤドカリの痴夢に耽つて来た阿呆らしさを、こんな風に喋舌ることで拂つてしまひたかつた。若しこれを和語で云つたならば彼女等ですら、そのあまりに許はな意味あり氣を悟つて苦笑するに違ひない、などと彼は、怖れたのである。——彼は、二階で、和英字引を引いたり、Hermit といふ名詞をワザと英文の字引で引いて、"one who retires from society and lives in solitude or in the desert". などと口吟んだり、また「やどかり——蟹の類。古名、カミナ。今俗ニテ、ガウナ。海岸ニ生ズ、大サ寸ニ足ラズ、頭ハ蝦ニ似テ、螯ハ蟹ニ似タリ、腹ハ少シ長クシテ、蜘蛛ノ如ク、脚ニ爪アリ、空ナル螺ノ殼ヲ借リテ其中ニ縮ミ入ル、海濱ノ人ハ其肉ヲ食フ。俗ニ、オバケ。」と、わが大槻文學博士が言海に述べてゐるところを開いて、面白さうに讀んだりしたのである。

「どうしたのよ？」

「………」

斯んな時彼は、うつかりすると、盃を鼻に突きあてたり、襖を忘れて次の間に入らうとして、襖に頭を打たれたりするのであつた。

「阿父さんの一周忌は——」と、周子の母が云ひだした。またか！と、彼は舌を打つた。これは三月の例句だから、未だ遠いのであるにも關はらず、彼女は、それに事寄せて彼の母を話柄にしたかつた。

彼は、周子の方に向つて、前の續きを喋舌らうと努めたが、何の材料もなし、自分達のことを話材にすれば直ぐに、その母が口を出すし、うつかり「煩いッ！」などと癇癪を起せば、それこそ如何な酷い目に遇ふか？想つただけでも竦然とするし

「うん〳〵、僕は、前の日にでもなつて行けば好いんだらう――どうせ。」などと受け流しながら、酷く焦々とした。――何でも好いから、何か別の話材に逃げなければ堪らない、と思案した。――（なぶり殺しにされてしまひさうだ。）

彼の口調が、亂鉢な風で、そして不平さうに口を尖らせてゐるのを、彼女は、自分が煩さがられてゐることも氣付かず、彼が遠方の自分の母に向つて反抗してゐるものと思ひ違へて――にやりとして、狐となつて彼を諫めたりするのであつた。

「何を云つてゐるのさア、お前は、よう！　前の日にでもなつてだなんて……フツフツフ、そんな呑氣なことで如何なるものかね、ゑゝ！　當主なんだぜ、お前は、さア！」

「……御免だ。」

「こりやア、向ふぢや何もお前を無理に呼び寄せようとはしないだらうかさ、ヲダハラの阿母さんだつて……」

――どうしても阿母を罵しらせるつもりなんだな、この俺に……斯う俺が思ふのは、決して邪推ぢやない、邪推なもんか、この狐婆ア奴、どつこい、そんな手に乘つて堪るものか、チョッ！

「あゝ、厭だア！」と、彼は、顔を顰めて溜息を衝いた。

「だが、可愛想になア、お前も。お前は、これで規丁面なたちなんだものねえ。」

――ばかされたやうな顔をして、あべこべにばかしてやらうかね、何の斯んな婆ア狐ぐらひ……阿母さんの悪口なん

て云ふもんぢやないよ、なんて積めたいんだな、心では快哉を叫んでたゞらう　などと云ふには、[illegible]か、何としてもばかし返す手段として、自分の心を選ぶわけには行かなかつた。と、云つて彼には、他の方法は一つも見出せなかつた。——全く彼は、この婆アさんに心まで見透され、操られ、打ちのめされてしまつたのである。いくら口惜しがつても無駄だつた。笑ふことも憤ることも出來ない穴の中に封じ込まれて行くばかりだつた。——彼は、口惜しさのあまりギユツと唇を噛んだ。

「そりやア、お前としては随分口惜しいだらうがね、お前は、仲々辛棒強いから口にこそ出さないが、私は、ほんとうに察するよ。お前の心を、さア。」

「鬼だ！」

「うん〳〵、我慢をし〳〵、私はもう……」

——憤慨の情を露はに出來たゞけでも彼は、いくらか救かつた。彼は、腹立しさのあまり滅茶滅茶に、この眼の前の「狐婆ア」に向つて、胸のうちで、思ひつく限りの野卑な罵倒を叫んだ。——（畜生奴、鬼だ！と云つたのは手前のことを云つてやつたんだぞ、この鬼婆ア！営養不良の化物婆ア……淫売宿の業欲婆ア！ぬすッとい尻おし！くたばつてしまへ！夫婦共謀の大詐欺師！烏の生れ損ひ！食ひしん棒！）

彼は、そんな風に、如何な下等の人間でも口にしさうもない幾つかの雑言を繰り返してゐるうちに、このうちの何れでも好いから、一つはつきり相手に悟れるやうに叫んで見たいな　などと思つてゐるうちに、ふと名案が浮んだやうに、ポンと膝を叩いた。

彼は、横を向いて

「Devil-Fish!」と、叫んだ。周子の母を罵つたのである。

「え?」と、周子は、一刻前からの續きで邪氣なく問ひ返した。無智な彼女の母は、娘がさういふ話(English)に興味を持つてゐるらしいのを悦んで

「お前達の話は、何だか私には解らない。」などと微笑みながら娘の顔を眺めてゐた。

「Devil-Fish! Devil-Fish!」

彼は、ふざけるやうに叫んで、すつと胸のすく氣がした。――(烏賊が墨を吐いて、敵の眼を眩ませるんだが、自分の墨で自分が眩まないやうに氣をつけろよ。)――「ウーツ、怖ろしく醉つ拂つて來たぞう。」

「お酒はね、醉ひさへすれば樂だよう、この頃お前は、隨分氣持よさゝうに醉ふぢやアないか。ヲダハラに歸つた時など、如何なのさ?」

「Devil-Fishツてえのはね、お前知つてゐる?」

「さア!」と、周子は、考へるやうに首をまげたりした。

「どれ、ひとつ餘興でも見せてやらうかな、……Devil-Fishぢやア、困つてしまふな、いや、お前なんて、烏賊の泳ぐところを見たことがあるかね。」

彼は、氣嫌の好い醉つ拂ひらしくそんなことを云つた。

「ないわ。」

彼も、烏賊の泳ぐところなどは見たこともなかつたが、

「斯んな風な恰構でね。」などと云ひながら、上體を傾けて、スイスイと頭を突きあげたり、ブルブルッと、幽靈のやう

に手や脚を空にさせたり、うねうねと脂を小躍させたりした。

周子も、その母も、腹を抱えて笑つた。そして彼は、この運動の合間に、擬態のやうに見せかけて、口調の洒し詩は、こゝぞと云はんばかりに力を込めて、

「Devil-Fish！」と、呼んだ。

「アッハッハッハッハ。」

「デビル・フヰッシユッて、烏賊のことなの？」と、周子が訊ねた。彼女は、自分の母の前で彼が氣嫌の好いのを悦んでゐた

「……何しろデビル・フヰッシユぢや食へないんださうだ。」

彼女は、彼がもう醉ひ過ぎてわけの解らぬことを云ひ初めた、と思つた。

これは、曾て彼が、父から說明を聞いた英語であつた。ある種の紅毛人は、章魚、烏賊、鮟鱇などの魚類を、俗に「惡魔の魚（デビル・フヰッシユ）」と稱して、食膳にの匪すことを厭ふといふ話だつた。——彼は、周子の母を鮟鱇に例へ、己れを或る種の紅毛人になぞらへて見たりしたのであつた。

「うちの阿母は？」と、彼は、思はず呟いで、同じやうな不味（エグ）さを覺えた。その時彼は、周子とその母の眼が、不氣味に光つたのを感じてヒヤリとした。……（鮟鱇と烏賊の相違位ひのものかね、フ……。）

彼は、間の拔けた笑ひを浮べた。……（俺も、俺も……）

「ぢや、ひとつ今度は、章魚踊りをやつて見ようか。」

周子の母が、何か云ひかけようとした時彼は、斯う云つて、厭々ながらひよろ〳〵と立ちあがつた。

「キヤツ、キヤツ、キヤツ――タキノは、仲々隅には置けない通人だよう。普段は、あんまり口数も利かないけれど酔ふとまア何て面白い子だらう。」

そんなことを云ひながら周子の母は、火鉢に凭りかゝつて、指先きで何か膳の上のものをつまんだり、チビチビと盃を舐めたりしてゐた。

「いくらか痩せてゐるだけで、やつぱり斯うやつて見ると、阿父さんにそつくりだわね、ねえ、お母さん。」

周子は、母親に凭り添つて、母に甘へる笑ひを浮べながら彼を見あげてゐた。

彼等は、夜毎、このアバラ屋で、彼様に花やかな長夜の宴を張るやうになつた。

六

三月上旬、彼の父の一周忌の法事が、ヲダハラの彼の母の家で、さゝやかに営まれた。遅くも二日位ひ前には帰る筈だつた施主即ち彼は、當日の午頃になつて、のこのこと招かれた客のやうに気取つて、妻子を随へて戻つて来た。別段彼は、母に意地悪るをする為とか、不快を抱いてゐたからとか、そんなわけで遅れたわけではなかつた。わけもなく無精な日を送つてゐたばかりである。

二三日前彼は、この日を忘れないやうに注意された母の手紙を貰つてゐた。それと一處に、高輪の彼が同居してゐる原田の主人に宛て、差出し人が彼の名前で、ヲダハラから招待状が配達されてゐた。彼は、偶然それを原田の玄関で配達者から受け取つた時、母の手蹟で、れいれいと書かれてゐる封状の裏の自分の名前を見て、母に済まなく思つたり、いつかのやうに怪しく自分の存在を疑ふやうな妄想に走つたりした。――勿論、原田では誰も来なかつた。反つ

て、彼が出發する時に[illegible]、彼は、殆ど夜に眠られないでゐた[illegible]

もう、少數の招かれた客達は、長椅子に就いてゐた。彼は、[illegible]

見ても斯んなに貧しく忙しいのに接した覺しはなかつた。彼は、次第に怖ろしい谷に落ち込んで行く自分の[illegible]しい姿を見る氣がした。

母が、彼の代りに末席に控へて、客のとりなしをしてゐた。——彼は、止むなく母に代つて座に就き、默つて一つお辭儀した。

彼が、小說「父の百ケ日前後」のうちに書いた岡村の叔父もゐた。叔父は、彼の方に眼を向けないで隣席の客と世間の話をしてゐた。彼は、自分が小說に書いたといふことで、とんだところに自惚れみたいな心があつて、叔父に妙な親しみを感じたり、人知れず冷汗を浮べたり、「若し、今夜、百ケ日の時みたいな騷動が持ちあがつたつて、今度こそは敗けないぞ。」などと、運動競技のスタートに立つた時のやうに胸を躍らせたりした。葉山老醫も居た。日本畫家の田村も居た。また彼が、二度目の苦しい小說「惡の同意語」で、岡村の叔父のやうに強い人に書いたり、周子が口惜し紛れに彼に向つて「お前の阿母は何だッ、間男、間男！」と叫んだ當の志村仲介も居た「淸親」と、彼は書いたが、それは彼が苦し紛れに岡村の叔父と志村との印象を、ごつちやにする爲めにその一つの名前を借用してしまつたのである。叔父と志村との間に、もう一人「淸親」と稱ふ得體の知れぬ人間が「居ない」とは彼れは思へなかつた。彼は、小說でない場合でも自分のことを平氣で「彼」と稱び慣れてゐた、殊にそれらの小說を書いて以來、歪んだその狹い世界と自分の生活との區別もつかなくなつてゐた。彼は、往々他人に向つて自分のことを「彼奴」と吹聽する癖が出來てゐた。

「君は、さつきから彼奴〱ッて、酷く惡口を云ふが一體それは誰のことなんだい？」と、相手の者から詰問されて閉

ひ返されて、醉拂ひの彼は、思はずハッとして言葉を濁らせることが屢々あつた。せめてそれより他に能が無いのである。その癖彼は、決して「彼奴」を客觀視出來なかつた。出來る位ならば彼の小說だつて、多少は小說らしい巧さが出る筈だつた。縱令「彼奴」が、如何(どん)なに馬鹿であらうと、無智であらうと、法螺吹きであらうと、取得のない醉拂ひであらうと、多くの愚と惡の同意語で形容すべき人間であらうとも――。彼は、小說家としてのあらゆる才能に欠けてゐた。無理に、已れに、肩書を要求される場合に出遇つたならば、彼は徹夜をして、何か、突飛な名稱を考案しなければなるまい。「周子の母が、俺を厭がらせる道具か、あれと、これが！」

そんな心持で、あまり出來のよくない木像でも見物する程の無責任な眼で、輕く志村の横顏を眺めたり、母を振り返つたりすると彼は、可笑しく心が平靜になつた。

「どうも、何ですな、……今日の法事は大變貧弱で、恐縮で御座いますな、親父は、どうもお客をすることがあの通り好きだつたので、その、仲々、何で御座いましたが、いや、その私も、大變好きなんですがね、どうも、斯う……」

何かお世辭を云はなければならないと氣附いて彼は、急にそんなことを喋舌り出したが、久しく使用しなかつた爲か、改つた叮嚀な言葉使ひをすつかり忘れてゐて、直ぐに行き詰り、困つて、仕方がなく出來るだけ大人(おとな)らしく構へて「ハッハッハ……」と、笑つた。

「何を云つてゐるんだね、お前は。失禮な。」

と、傍から母がたしなめた。――「どうも、これは口不調法で。」

「何ですか、この頃は、務めの傍ら著述などに耽つてゐるさうですが。まア、何をやつてゐるか私も未だ見ないんで御座いますが。でも、まア、そんな方に心が向けば、いくらか落つきも出て來るだらうと……」

母が、[illegible]一[illegible]いた。
その晩、歸るといふ志村を彼は無理に引き止めた。
「留守ばかりしてゐるんで、いろ／＼厄介を掛けてゐるね。」
彼は、盃をさしながら言つた。志村が、何となく自分に一目置いてゐるらしい様子が彼は、愉快だつた。夜になつてから清友亭のお園が來た。お園を見ると彼は、急に故郷に歸つたらしい懐しさを覺えて、そして、そこに居る父に不平でも訴へに行く、たつた二年も前の時日が、昨日のことのやうに蘇り
「お園さんのところへ行かうか――どうも、デビル・フヰツシユばかりで面白くねえ。」と云つて、彼女を呆然とさせた。
……「迎へに行く振りをしてやつて來たのさ、今まで阿母を相手に飲んでゐたんだが堪らなくなつてしまつてさア。然し何だね、斯んな場合に僕が若し、所謂だね、善良な青年だつたら阿父さん、やり切れないでせう。」
　斯んなことを云つて彼は、父を參らせた。
「何アに俺ア、善良な青年の方が好いよ。親のだらしのないところに附け込むやうな奴に係つては敵はないからね、キタナラしい氣がするぢやないか。」と、父も敗けずに笑つた。
「そんなことを云ふと、また詩を書くぜ。」
もう時効に掛つてゐるので安心して彼は、そんなことを云つた。
「御免だア！」と、父は、大口を開けて叫んだ。
「怒つたね、あれぢや。」
「お前に面と向つて怒りはしなかつたらう、阿母に、だつたぜ。」

「どうして僕に、直接……」

「——止せ、止せ。……おい、お蝶、シンの奴がまた遊びに來たから、トン子ちやんでも呼んで騷がうぢやないか。」

「ひよつとすると今晩あたりは、また阿母がやつて來るかも知れないよ。」

「えツ！」

「さうしたらね、お蝶さん、僕は、急に態度を變へて阿父さんと喧嘩を始めるかも知れないからね、そのつもりでゐておくれ。」

斯う云つて卑し氣に口を歪めた時彼は、ふつと母が堪らなく慕しくなつた。そして彼は「まさかね、それほど僕も不良青年でもないさ。」と、靜かに附け加へて、お蝶を白けさせたり、父の顏を曇らせたりした。……

「君は、この頃酒を止めたといふ話ぢやないか、それとも相變らずかね。」と、退屈さうに云つたのは志村だつた。

「酒位ひ何でえ！止めようと、止めまいと、俺ア、そんなこと……」

「俺ア、酒の爲に命をとられたつて平氣なんだ。死んだあとで一人でも泣く奴があるかと思ふよりも、彼奴が死んで清清と好いと思はれた方が餘ツ程面白いや。」

よく父は、そんなことを云つた。

「僕ア、さうぢやないな。僕は、別段酒飲みぢやないが、若しもつと年をとつてから、酒を止めないと危いよ、と云はれゝば直ぐに止めますね。」と彼は、父の健康を慮つて云つたことがある。

「今ッから酒飲みのつもりになんてなられて堪るかよ。」

……「清々と好いや！」と、彼は叫んだ。

「お酒に飲んだなおむいよ」と、お園と話してゐた彼の叔母が戯つて云つた。
「話があるのか？」と、彼に志村を紹介した。志村は、たゞ笑つてゐた。
「東京も面白くないし、また此方にでも住ひ戻らうかな、だが戻つたところで――か。旅行は一遍もしたことはなし、だから未だ好きだか嫌ひだか解らないし……」
そろ／＼危くなつて来たぞ、と彼は気付いて、ふらふらと立ちあがり、父の位牌の前に進んで、跪つてから、二度目の線香をあげた。

七

朔日と十五日と、毎月、夫々の日の朝には、彼の家では「蔭膳」と称する特別の膳部がひとつ、仰々しく床の間に向けて供へられた。そして、それが下げられてから、彼ひとりがその膳を前にして、しよんぼりと朝の食事を執らせられるのがその頃の定めであつた。――彼が、写真でしか見知らなかつた外国に居る父の「蔭膳」なのである。その冷たくなつた定り切つた貧しい料理を食ふのが、ひとつは妙に薄気味悪くて、往々彼は、厭だと云つて、祖父母や母に叱られた。
「頂くんだ。」
祖父は、斯う云つて彼を叱つた。――写真で見る父などを彼は、それ程慕ひはしなかつた。――嘘のやうな気がしてゐた。
彼は、ふと、今自分が盃を上げ下げしてゐる膳に気づいて、そんな思ひ出に走つた。定紋のついた、脚の高い、黒塗

りの、四角な小さな膳だつた。

「斯んなお膳が、未だあつたの？」

　隅々の塗りの剝げてゐるところを觸りながら何氣なく彼は、母に訊ねた。

「どうしたんだか、それは殘つてゐたんだよ――もう使へないね。」

「えゝ――。これ、蔭膳のお膳ぢやないの？」

　蔭膳といふのは、遠方へ行つてゐる吾家の同人の健康を祈る印なのだ――と、いふ意味の說明を彼は、新しく母から聞いた。

　いつかお蝶の家で父と飲み合つてゐた時彼は、その蔭膳を食はされるのが隨分迷惑だつたといふ話を父にしたことがあつた。

「馬鹿爺いだなア！」

　父は、自分の父のことをそんな風に稱んでセヽラ笑つた。

「どつちが馬鹿だか！」

　彼も、眼の前の自分の父のことをそんな風にセヽラ笑つた。――「ちやんとそれにはオミキが一本ついてゐたぜ。」

「貴樣もやがて蔭膳でもあげられないやうに氣をつけろよう……碌なもんぢやない。」

「何がさ？」

「あいつ等がさ……」

「あいつ等ツて誰れさ、おぢいさんのこと？」

「……フフ、つまらない。」

――母は、昔の話には興味を持つてゐた。彼は、今話を成るべく古い方へ持つて行くことに努めてゐた。近い時代は、危くなる心を鎮めて、百ケ日の時のやうな不始末もなく済んだので、今、ホツとしてゐた。自分さへ心を鎮めてゐれば、今の吾家には何の風波もないわけか――さう思ふと彼は、こんな心を鎮める位ひのことは何でもない氣がした。

周子は、隣りの部屋で二郎や從妹達と子供のやうに話してゐた。――彼は、周子の心になつて、この母とこの伜が話してゐる光景を想像すると、他合もない氣遅れを感じた。……（何しろ彼奴には、あんな事を知られてゐるんだからな、何んな氣持で俺達を見てゐることやら？）さう思つても彼は、こゝで周子に何の情緒も覺えなかつた。――母は、彼も周子も、母のそんな事は何も知らない氣で、飽くまでも母らしい威嚴を保つてゐるのだ。百ケ日の頃には、父の突然の死を悲しむあまり彼が狂酒に耽つてゐたのだ、といふ風に母は思つてゐるのだ。

彼は、周子を感ずると一層母と親しい口が利きたかつた。

斯うやつて彼は、「薩摩」を前にしてチビチビ飲んでゐると、いつの間にか自分の心は子供の頃と同じやうに白々しくなり、寫眞でしか見知らない若い父が、嘘のやうに頭に浮ぶばかりであつた。二十年程の父との共同生活は、短い夢のやうに消えてしまつた。

「阿父さんが早く歸つて來れば好い、なんて思ふことがあるかね。」

時々、そんなことを聞かされると彼は、子供の癖に酷くテレて

「どうだか知らないや。」と、叫んで逃げ出すのが常だつた。

「そんなものなんだらうな、子供なんて。」

祖父は、さう云つて彼を可愛がつた。

祖父が死んでから間もなく父が歸つて來たのだが彼は、少しも父になつかず、本心からそんなつもりでもないんだが「あんな人は知らないよ。」などと云つて、到々父を怒らせたといふ話だつた。

今、彼は、それと同じ言葉を放つても、そんなに不自然でもない氣がした。

「阿父さんが歸つて來るまでは、これは續けるんだよ。厭だ、なんて勿體ないことを云ふものぢやない。」と、祖父から命ぜられて、何時歸るか解らない者の爲に何時までもこれを食はされるのぢや堪らない――などと彼は思ひながら、情けない氣がしたのである。だが、その度毎に、ぼんやりと「無何有の境」に居る父の姿が、止り止めもなく靜かに空想された。情けなく明るい幻であつた。

……さう、想はせることが「お陰膳」の有り難味なんだ、といふ祖父の說明を聞いても彼は、さつぱり有り難くなかつた。ボソボソと、大豆の混つた飯を嚙みながら、一層不氣味に海の遙か彼方の街を餘儀なく想像させられることは、頼りなく物悲しかつたが、一脈の甘さに浸つて、己れを忘れる術になつたには違ひなかつた。

「ぼんやりしてゐないで、早く頂くんだ。」

想ひ描けない空想に、己れの身を煙りに化へてまでも、何らかの形を捕へようとする彼の想ひは、徒らに渺として、渺渺と連り、古き言葉に模して云ふならば、恰も寂滅無爲の地に迷ひ込む思ひに他ならなかつた。

彼は、盃を下に置いて、仰山に坐り直して眼を瞑つたりした。――（今の心は、まさしく幼時のそれと一歩の相違もないらしい。あの頃だつて、別段父の現實の姿を待つ程の心はなかつたぢやないか……おや、おや、また今日は、例の陰膳の日か、お祖父さんとお祖母さんの姿が見へないやうだが、何處へ行つたのかな、畑の見廻りにでも行つたのか

た。まア。ぢいや煩くなくつて。そいつちに早く死んで出てしまはうや。だが[illegible]……たね。[illegible]た積りでもして置かうかな……ヘンリー[illegible]なんてことは考へたこともない。寫眞一目[illegible]……だな。この間の寫眞で見ると。五六人の級友達と肩を組んだりしてゐるぢやないか。女も交つてゐるな。あちらではあんなに大きくなつても。あんな女の友達が學校にあるんだつてね。何だか淋しいな……阿父さんッて一體何なんだらう。俺にもあんな阿父さんとやらがあるのかね。手紙と玩具を送つて吳れる時は嬉しいが。面とぶつかつたら何だか變だらうな。やつぱり手紙のやうに優しい聲を出すのだらうか。そんなものが阿父さんと云ふのか。何だかほんとゝは思へないや。それに阿父さんの癖に學校の生徒だなんて。何だかみつともないな……）

「もう。これからは務めをしくじらないようにしておくれよ。」と。母が云つた。

「……」――（お陰膳のオミキか！）

「阿父さんが居る時分とは違ふんだからね。」

「……さう。」――（えゝと。俺は何處に務めてゐる筈になつてゐたんだつけ？新聞社？雜誌社？△△會社の無收入の重役？學校？學校だつたつけな。ハヽヽ。親父のことは笑へないや。俺だつてもう英一の親父だつたね。ハヽヽ）

「ハヽヽ。どうも貧棒で弱つちやつたな。未だ當分お金は貰へますかね。」

「少し位いのことなら出來るだらうが。無駄費ひぢや困るよ。」

「どうして。どうして無駄どころか。」と。彼は。厭に快活に調子づいた。「研究ですからなア。」

「そんならまア仕方がないけれどさア。」

「それアもう僕だつて――」――（阿母の奴。奇妙にやさしいな。ハヽヽ。氣の毒だな。こんな惡い悴で。だが。自分

は如何だ、仕方のないやさしさなんだらう。ァッ。嘘つき、前かも知れないよ。こんな悴が居るのも。……一寸。一本悴かしてやらうかな。）――「だけど勉強なら何も東京にばかり居る必要もない氣がするんで。當分田家に歸らうかなんて、思つてもゐるんだが？」

「また！」と、母は眼を視張つた。

（どうだ、驚いたらう。――大丈夫だよ、お金さへ呉れゝば歸りアしないよ、面白くもない。……志村の泥棒！）――「また、と云つたつて、阿父さんが亡いと思へば、さう阿母さんにばかり心配かけては僕としても濟まない氣がするんですもの。ちつたア……」

「直ぐにお前は、險しい眼つきをするのが癖になつたね、お酒を飲むと、東京などで、外で飲んだりするのは、お止めよ、危いぜ。」

「えゝ。」と、彼は、辛うじて胸を撫でおろした。

「間違ひを起さないようにね、いくら困つたつて好いから卑しいことはしないやうにしてお呉れ。貧ハ士ノ常ナリといふ諺を教へてやつたことがあるだらう。」

「…………」

彼は、默頭いた。もう彼は、惡い呟きごとは云へなかつた。自分が、卑しいことばかりしてゐるやうな不甲斐なさにガンと胸を打たれた。先のことを思へば、一層暗い穴に入つて行く心細さだつた。――「僕……大丈夫です、士、さうだ、士です、士です。」

彼は、悲しい、悲しいやうな、嬉しいやうな塊りが喉につかへて來る息苦しさを感じた。悲しさは、己れの愚かに卑しい行動

である。母の言葉は、それをさおに柔しく包んで呉れたのである。——[illegible]なさい、[illegible]なさい、[illegible]。母さん、たつた一人の阿母さん、阿母さんが何をしたつて私は、別れません、とは、まだ云へない、[illegible]て貢はう、不貞くされは胸に畳まう、だが、この神経的な不快感は、おやどうすれば好いんだ……さうッ、面白い、酔つてしまへ、酔つてしまへ、神経的も、感傷的も、卑しさも、そして士もへつたくれもあつたものぢやない、どうせ俺アぬすッとだア、アッハッハ……)

「ハヽヽヽ、士ですからね、私は。何時、官を退いて野に歸るかも知れませんよ、ハヽヽヽ、歸る、歸る、歸る……例へば、ですよ。」

「それア、勿論、それ位ひの……」

「ハヽヽヽ、何と僕は見あげた心をもつてゐるでせう、ハヽヽヽ、願クバ骸骨ヲ乞ヒ卒伍ニ歸セン、でしたかね。」

「口ぢや何とでも云へるよ。」

母は、彼の調子に乗せられて、笑ひながら、明るく叱つた。斯んな調子は、母は好きなのである。斯んな言葉は、彼が幼時母から授かつたのである。母は、その幼時その父から多くの漢文を講義されたさうである。——母は、彼が斯うい ふ態度をすると、タキノ家に對して淡い勝利を感ずるのであつた。實際の彼は、そのやうな母の血を少しも享けてはゐなかつた。

母は、その兄達と共にタキノ家の者、就中彼の父を「腰拔け」と呼んだことがあるが、そして彼の父を怒らせたのであるが、父以上のそれである彼は、その時内心父に味方しながらも怒つた父を可笑しく思つた。母の兄は、七十幾歳だつたかのその母（彼の祖母）に向つて、陰で彼のことを

「やつぱり、飲んだくれのＨ・タキノの子だからお話にはならない。」とか「あんな墮落書生に出入りされては迷惑だ。」とか「阿母がしつかりしてゐるから、若しかしたら彼奴だけはタキノ風にはなるまいと思つてゐたんだが、あれちやＨよりも仕末が惡い。私立大學で落第するとは、あきれた野郎だ。」とか、（その叔父は、大禮服を着た寫眞を親類中に配布して、常々、親類中に俺の話相手になる程の人間が一人も居ないと云つて嘆いたさうだ。）そんなことを云つて、その祖母は、長く彼と一處に暮したことがあるので、どつちかと云へば孫のひいきで

「それでも貴樣は口惜しいとは思はないのか！」と、少しも口惜しがらない彼を、焦れツたがつた。彼の父なら、多少は口惜しがつて「俺は、フロック・コートだつて着たことはない。あんなものは坊主が着るもんだ。」位ひのことを云ふだけ彼より增だつた。彼は、嘗て屢々この祖母の金を盜んで、故鄕の村で遊蕩を試みたことがあつた。彼の父も、若い頃その父が大變頑迷だつたので屢々業を煮やして、この彼の祖母から金を借りて、秘かに村の茶屋で遊蕩に耽つたといふ話である。

隣室に周子が居るので、彼と母の間ではいつものやうに原田の噂は出なかつた。彼は、少しはやつてやり度く思つた位ひだつた。

「僕は、たしかに阿母さんの影響を多く享けてゐる氣がしますよ、この頃時々ひとりで考へて見るんだが。」

彼は、そんなよそよそしいことを臆面もなく呟いて母におもねつた。……そして、また野蠻な情熱は、言語とうらはらに悉く心の呟きに代へた。――（ひとりで思ふね。あんまり俺はタキノ風であることをさ。……歸るといふ素振りをすると、それとなく顏色を變へるから、がつかりするよ。――若し、こゝんところに志村の畜生が來やアがつたら、何とか文句をつけて、ぶん毆つてやるから見てゐるが好い。もう敗けるもんか。）

「一度び、東京へ出すれば、ですね・僕、さう、おめおめと歸つて來やしませんから安心して下さい、ねえ」

「お前は、仲々强くなつたから、私は安心してゐる。」

「さうともく。」──(フツフツフ、あべこべに煽てられてしまひさうだぞ。)

それでも彼は、ばかに好い機嫌に醉つてしまつた。……「歸る時には──ですね、僕は、その、楯に乘つて歸ります よ。」

(だが、斯んな法螺を吹いて好いかしら、來月あたりは、もう高輪の家をほうり出されるかも知れないぞ、あゝ、怖しいく、行きどころが無くなるなんて!)

「うん。」と、母は、默頭いた。彼は、益々調子づいて

「楯に乘るといふことは、目出度い話なんですよ、その話を、阿母さんは知つてゐる、スパルタのさ。」

「好く知らない。」と、母は、一寸薄氣味惡るさうに首を振つた。──彼は、簡單に、多少の出たら目を含めた古代スパルタの歷史を說明してから

「即ち、生きて歸るな、花々しく戰場の露となれ、生きて歸れば、汝の母は泣くぞよ──といふわけなのさ──その、楯に乘りて云々といふ一言がですなア!ハ、、、どうです、偉いでせう、僕は──」などと、彼は、何の計較も介はぬ、夢にもないことをペラペラとまくしたてた。

「日本にだつて、そんな話はいくらもあるよ、そんなスパルタなんぞでなくつたつて。」

母は、楠正行の母にでもなつた氣で、他合もなく恍惚として──彼を、悲しませた。

ともかく、この夜の彼等は、異樣に朗らかな二人の母と子であつた。

（お陰樣のオミキか！）と、また彼は、これが新しい口癖になつたかのやうに呟いだ。――たゞ、慘めなことには彼の心は、子供の頃のそれのやうに容易く「寂滅無爲の地」に遊べなかつたのである。頸を擧げ、脚を蹴り、水を吹きして身を躍らせるのであつたが、たゞ見たところでは弱々しく邪慳にもなりさうもなく漂ふてゐる多くの水藻が、執拗に四肢にからまりついて、決して自由な運動が出來ないのである。岸から傍觀してゐる人は、一體彼奴は、あんなところで何を煩悶〱してゐるんだらう――と、訝かるに違ひあるまい――彼は、そんなに、山陰の小さな水溜りで水浴びをしてゐる光景を想つたりした。

……（もう少し醉つて來ると危いぞ、どんな失敗をしないとも限らないぞ――。……折角のところで阿母と、飛んだ爭ひをしてしまつては、何んにもならないからな……第一、東京へ歸つてからの暮しが出來なくなる……あつちには、あつちで、あの怖るべき周子の母が、裕福になつて歸るべき自分を、空腹を抱へて待つてゐるのだ。母だつて、自分が今まで斯うして、例の靜屈とやらを――、ツマラナイ、馬鹿なことだが――卑怯に我慢してゐればこそ、此方に秘密を――ヘッ、かくさないでも好いのに、が、まアそれも好いさ――悟られまいとして、やさしくもする、氣味の惡い手紙も寄す……凡て、自分が知らん顏をしてゐればこそである。これで若し自分が、いつか周子から浴せられたやうな雜言を、一寸でも洩したならば、もうお終ひだ。ぢや、どうとでも勝手にしたら好いだらう――と、斯う突ッ放されたら、俺には訴へどころがないんだ。親爺は、ゐないし――か！周子の阿母にでも訴へるのか！そして俺は、どうする、みすみす阿母に棄てられて、どうなる、……阿母だつて、悲しいだらう、俺だつて、悲しからうさ、これでも。――阿母だけは、お前の世話にならないでも好いやうにして置く――と、常々アメリカ勘定の親父は、俺に云つて、アメリカ勘定嫌ひの俺の顏を顰めさせたが……成る程なア！親父が死んだら、乾度俺が彼女に反抗心を起すだらうといふ懸念があつた

んだなア！大丈夫だよ、ヘンリー叔父さん、あなたのお陰で俺に、金も財も一緒になつてしまつた[illegible]は
に反れむなんて我はせやしないよ、ハゝゝ、うまくいつてゐやアがらア、ヘンリーさんの計画が、失敗に終らなかつた
のは、これ位ゐのものかね。だが、阿母の方だつて、もうそろそろ熟したらしいぜ……でも、好いよ、――安心しておへ、
ヘンリー……と、斯う彼に呼びかけたいものだな。あなたの何時かの言葉を一寸拜借して見る――「俺の眞似をされて
は困るぜ、シンー！貴樣には、阿母を責める資格はないんだよ。」

「そんなことは解つてゐるよ。」

「縱令、阿母にどんな落度があらうとも――だぜ。」

「變なことばかり云ふなア、阿父さんは。どうしたのよう。」

「お前が阿母に逆らへば、何と云つたつて俺ア阿母の味方だぜ、ハゝゝゝ。」

「ハゝゝゝ、淋しいや、お蝶が嫉妬をやきはしないの？」

「好い氣なもんだなア、俺は、さア！」

「まつたくだね、――變な女！お蝶だよ、阿母さんぢやないよ。」

「馬鹿ア、そんなことはどうでも好いよ。自分は、どうでえ！」

「ハゝゝ、周子かね。」

「ハゝゝ、周子さんと、トン子さんかね。」

「ハゝゝ、困つたね。」

「英一は、いくつだ。」

「三つさ。」

「ぢや俺が、丁度貴樣と別れて外國へ行つた年だな！」

「あゝ、僕も行きたい、僕も行きたい！」――――（忘れやアしないよ、阿父さん、阿母は、乾度大切にしますよ、ハ、、、――）

「阿母さん！　僕は、今までだつて別段贅澤をしたわけぢやないが、この先きだつて……、ホラ、よく岡村のおばアさんが云つたこと、あの……その、人間は――だね。」と、彼は、ゴクリと酒を飲んで「人間は、その――乞食と泥棒さへ……」と、云ひかけた時、胸が怪しく慄へた。「……さへ、しなければ――――さへ、しなければ、でしたかね？　フゝゝ！」

「さうとも。」

「……さへ、しなければ、何の人に恥ずるところはない、ボロを纏はうとも、でしたな。」

「乞食と泥棒と、そして――」と、母は、一寸と氣恥し氣に笑つた。「親不孝と――」

「あゝ、さう、さうその三つでしたね。」

それだけかな？などと思ひながら彼は、荒唐無稽の幼稚な例へ話を笑ふやうに、笑つたが、喉を落ちて行く酒の味に、雨だれのやうに冷く胸を打たれた。……「味噌と醬油と米と、そして薪さへあれば――とも云つたね、岡村のおばアさんがさア？」

「戰爭の時の話だらう。」と、一寸母は煩さゝうに云つた。

「さうぢやないよ、普段でも、だよ。それだけあれば不自由はない――とかさ。」

「こんなことを知つてゐたならお前に、どうさす——」と、母は苦笑した。

「直ぐさう云つてしまつてはお終ひだよ。僕は、何もこんなおばアさんの言葉に感心して居るわけぢやあるまいし、寧ろ、軽——」と云ひかけて彼は、「蔑」を呑み込んだ。

「いゝよ。」と、母は益々煩ささうに受け流した。すると彼は、もつと、これに類する退屈な話を持ち出して母の欠伸を誘つてやりたくなつて

「あの、マーク・アントニーといふローマの大将ですね、あの人は手に負へない贅沢な放蕩家だつたが、何かの行軍の時にですね、食糧が欠乏してバタバタと兵士が斃れた、ウン、その時、彼は、ですね、俺も腹が減つたから、これを飲む！と叫んで、道傍の濁つた水を飲み、それも尽きた時には、馬の尿を飲んで、そして無事に行軍を終へた。

「まア、キタナラしい、そんな話は止めておくれよ。」と母は顔を顰めた。「お酒を飲みながら何のことさ——。武士は食はねど——の方がキレイで好い。

いつの間にか彼は、「正行の母」のやうに惚恍として、「アントニー」に想ひを馳せ、ひたすら矮軀短小の身を嘆いた。

「ところで俺には、デビル・フイッシユさへ苦手か。」

「えゝ？」

「いや——その僕は、そんなに小さい時分には食べ物の好き嫌ひが多かつた？」

「生魚は、何にも喰べなかつたよ。だから今もつてそんなに痩せてゐるのさ。痩つぽちに限つて、口先きばかり大きなことを云ひ、心は針目度のやうだと云ふがね。」

母方の者は、皆な肥つてゐた。

「ベツハツパー——。おい、皆な此方に來ないか。」と、彼は隣室の子供達を呼んだ。醉つて來るのが自分ながらはつきり解るので彼は、不安になり、子供達が居れば母に惡いことを云ふ筈がない、とこれで豫防したつもりだつた。周子も二郎も入つて來た。

それから彼は、どんな風に醉つ拂つたか殆ど覺へてゐない。子供達に接して、一途に吻つとして、異樣に朗らかになつた。翌日、一同の者の話とうろ覺えを總合して見ると、大體に氣嫌の好い、愉快な、當り前の醉漢であつたらしい、殊に子供達から、絶大な賞讚を博されたことでも解る。——彼は、二つばかりうろ覺えのお伽噺をして聞かせた。その種が盡きると、星の話をした。これも少し熱心に追求されると直ぐに困つて、次にはお神樂の眞似をした。軍歌や唱歌を吟じた。その邊までは母も、一處になつて氣嫌が好かつたのであるが、だんだんに種が盡きると終ひに彼は「烏賊泳ぎ」や「章魚踊り」を演じて子供達を笑ひ過ごさせ、母の顏を曇らせた。「烏賊泳ぎ」は、さうでもなかつたが「章魚踊り」を母は、何か通俗な遊蕩的の餘興と思つたらしかつた。その上彼は

「そんなら今度は、狐に化されるところを演つて見よう。」などと云つて、膳の上を片づけ、それを兩手でたてにさゝげ

「狐に化されると、こんなものがほんとの鏡に見へるんだぜ、いゝかへ……」——「斯うやつて飮んでゐるこの酒が、實は馬の小便でさ。」

彼は、片手で盃を干し「あゝ、うめえ、うめえ……コリヤ〳〵ッと。」——「俺が斯んなに女にもてたのは始めてだぞ。まさか夢ぢやアあるまいな。どれ〳〵、どんな顏をしてゐるか一寸鏡を見てやらう。」

そんなことを云ひながら彼は、氣取つた顏をして凝ツと「鏡」を覗き込んだ。

「子供の前で、何です。」

突然、母が叫んだ。

「いや、諸君。」と、彼は子供達に向つて云つた。「若し誰かと私に任されたならば、だね。こいつの背中か頭をガン一杯殴つてやると氣がつくさうだよ、――斯う。」と云つて彼は、ポカリと自分の頭を殴り、急に夢から醒めてキヨロ〲とあたりを見廻す動作を巧みに演じた。

「冗談にも程がある、第一縁儀が悪いよ、塗物に顔を寫すと氣狂ひになるツ！」

母は、ぶつ〲云ひながら彼の手からお膳を取りあげてしまつたさうである。それから彼は、この失敗を取り返して更に子供達を悦ばせる爲に、クロール泳ぎの型や呼吸の仕方を説明したり、兵隊の眞似をしたりして、到々過激な運動の結果ゲロを吐いて椽側にのめつてしまひ――「ウー、苦しい、ウー、苦しい、死にさうだよう！」と、腸を絞つて息も絶へ〲に唸つた。

「ゲロを吐く位ひならお酒なんて飲むな、この腰抜け奴！」――「まア、何といふだらしのない格構だらう、あきれたお調子者だ。」

母は、そんなことを云つたが、もう何と罵られようが何のうけ答へもなく、たゞスースーと云つてゐるばかりな淺猿しい悴の姿を、悲し氣に視守るより他はなかつた。

それから一同の者が、彼の手足をとつて輕々と寢床に擔ぎ込んだのである。

八

「あゝ、海が戀しい、海が戀しい。」

彼は、毎日のやうにこんなことを呟きながら東京郊外の陋屋で碌々とその日その日を送つてゐた。醫家に嚴禁されたこと位ひは生來不攝生な彼であつたから別段に意ともしないのであるが、酒も今では殆んど飲めなくつなてゐた。――春、原田の家を逃げ出し、どうしても未だヲダハラの母の家へ歸る決心はつかずに、來る二日前までは名前も知らなかつた此の郊外に偶然引き移つてから、もう夏になつてしまつた。――下谷から移る時にはあんなに好く働いた賢太郎も、高輪を引きあげる時には、奥でハーモニカを吹奏してゐるばかりなので彼が獨りで荷拵へをしなければならなかつた。彼は、彼の所謂、何らかの「人間的な刺激」幼稚な俗臭を欲する幼稚な男であつたから、寧ろ同所に引き止まることを主張したのであるが（如何（どう）して引き上げなければならなかつたかの經緯は省略するが。）返つて周子が己の家を嫌ひ始めたことも、幾つかのうちの一つの理由であつた。

この頃の彼は、蟬の空殼のやうであつた。酒も飲めず吾家の晩酌は倦々もした。）街に出掛ける元氣もなく、ヲダハラを想つても、原田のことを想つても、瞬間だけで悉く噓のやうに消えてしまつた。たゞ、この一年半ばかりの間の……と、云ふ程のこともないのであるが、己れの痴態が、時々呆然と眺める眼の前の木々の間や、直ぐその先きには海でもありさうな白壁の白い路に、ヒヨロ／＼と蹌るばかりであつた。昔、或る國に不思議な刑罰があつた、天井も床も四方の壁も凡て凸凹な鏡で張り詰めた小さな正立方體の部屋が重刑者を投ずる牢で、其處には晝夜の別なく怖ろしく明るい一つの燈火が點じてあつた。凸凹な鏡に歪んだ己れの姿が、鏡は鏡を反映して無數に映る。この牢に投ぜられたものは大概三日目には白痴になつてしまふのである――そんな卽席のお伽噺を彼は、いつか子供に聞かせて、その先はまた出たら目に、こゝに投ぜられた一人の青年が如何してこの牢を破つたか？などといふことを、「破る」あたりから眠々ながら冒險小說風に話したりしたこともあつたが、その空想の牢獄を更に細かく構想したりすることもあつた。

或る日彼は、あの青い[illegible]に出來ないミスト[illegible]にして[illegible]を捏造したが、毛程もそんな気分は味はへずに、テレて相手に厳い顔をして直ぐに引き返した——また、アメリカのドに出す手紙の文案を二日も三日も考へて、断念したり、静岡のお嫁を訪れて大逆説を試みようなどと思ひ、秘かに五円の貯金の畫策を回らせたり、アメリカ行の夢に耽つたり、時には小説家を装つて、家人を退け、近所に間借りを求めて、物物しく机の前に端坐して、顔を顰めたり、した。

前の森では、夜になると梟がボーボーと鳴いた。あまり英一が騒がしく怒れると、彼は、ありふれた親父らしく眼をむいて

「ゴロスケにやつてしまふぞ。」などと、さう云つても一向平気な英一を悸したりした。彼の故郷では梟のことを俗にゴロスケと稱び、魔法使ひの異名に用ひた。幼時彼も往々家人から、さう云つて悸されたが

「ゴロスケとなら一所に住んでも好いよ。」と、云つて祖父を口惜しがらせた。

「ゴロスケつて何さ、田舎言葉は止めて下さいよう。」などと、周子は云つた。彼女は、もうそろそろとほとぼりが醒めて自家との往復を始めてゐた。時々賢太郎も、草花などを持つて訪れて来た。賢太郎は、相變らず呑氣でごろごろしてゐるらしいが、外出の時は私立大學の制服などを着てゐた。

また、或る日彼は、郷里の區裁判所からの書留郵便に接して、刑事に踏み込まれでもしたやうに胸を戦かされた土地家屋競賣の通知書だつた。彼の「海岸の家」は、高輪の原田の家の代りに抵當になつてゐて、高輪が殘り、これが失はれたのである。

「俺の親父が斯んなことをする筈がない、チョッ、チョッ、……あゝ、もう海の傍にも住むことは出来ないのか。」

「何さ、自分の方で訴へて置いて……」

周子は、洒々としてゐた。彼は、憤る張り合もなかつた。――間もなく、傳來の屋敷あとの土地や、少しばかり殘つてゐた蜜柑山の競賣通知書も配達された。

「あゝ、これは親父の土産か！」

彼は、さう云つて苦笑を洩した。「ハ、、、、面白くない話だなア。」

「うちのお父さんに頼みなさいよ、何とかなるわよ。」

「何とかすることは巧いだらうよ――ぢや、頼まうかね。」と、彼は、弱々しく呟いた。

母からも手紙が來た。彼女は、未だそんなことは知らないらしかつた。そして、彼の著述の催促などをして寄した。

秋になつたら、御身の新居を訪れ傍々、芝居見物の爲に上京したいからその節はよろしく案内を頼む――そんな文面もあつた。

「秋になつたら――か！」と、彼は繰り返して、母の來遊の日を樂しく待ち遠しがつたりした。

また、當方を顧慮することなく、ひたすら勉學にいそしみ餘暇あらば風流に心を向け給はれかし、とか、御身の爲に蔭膳を供へ始めたり、尙また震後頃に涌水鈍りたる舊井戸を埋め、吉日を選び、新たにこの借地の泉水の傍に掘拔き井戸を造るべく井戸淸に命じたれば、御身歸鄕の節には前もつて通知あらば、新しき水に冷菓冷酒を貯へ置くべし――などと報じてあつた。

（十四・八）



十軒路地

宇野浩二

大阪の宗右衛門町といふのは、道頓堀川に沿ふた、日本橋から戎橋までの間の、北側の川添ひの町をいふのである。私は少年の頃この町に十年ばかり住んでゐたことがある。

なぜ突然こんなことをいひ出したかといふと、つい近頃のことであるが、私は珍らしい舊友から一通の手紙を受取つた、活版刷の書面で、××市カフエー・サン・パウロといふのが差出人になつてゐて、暑中見舞の文句の後に、今度當店の店主山木宇三吉が××縣多額納税議員の互選資格者になつたといふ知らせなのである。一寸見ると、この手紙は私に全く不意のものだつた。何故といふに、カフエー・サン・パウロから手紙をもらつたことも、多額納税議員資格者の山木宇三吉から便りを受けたことも、私には全く生れて初めてのことだつたからだ。もつとも、カフエー・サン・パウロの存在も、山木宇三吉の名前も私には初めてのものではない。現に數ケ月前、或雜誌社から『カフエーの思出』といふ感想を求められた時、私はその

カフェー・サン・パウロのことも、私の舊友山木宇三吉の思出と共に、文章に書いたことがあるのだ。考へて見ると、山木宇三吉は多分私のその文章を讀んで、私のことを思ひ出して、今度多額納税議員資格者になつたのを機會に、部下に命じてその披露の手紙を私のところへよこしたのだらうと思はれる。

かういつてしまふと實も蓋もない話であるが、私はこれを機會に私の古い友人である山木宇三吉との交際を回想すると共に、その頃の私たちの場面であつた大阪の宗右衛門町といふ町について書いて見やうと思ひ立つた譯である。實際私は自分が十年餘も住んでゐたその一風變つた町のことを、どんな風にどういふ機會で書かうかと長い間考へてゐたものであつた。今、少し無理だが、山木宇三吉からの手紙をきつかけにして、彼や私が住んでゐた町の記憶を少しばかり書いて見ようと志した譯である。それにはしかし全然理由がないこともない、といふのは、私が宗右衛門町に移つて來て最初に言葉を交したのが彼で、又最も親しくしたのも彼だからである。而も彼の家と私の家とは向ひ同志だつた。

十軒路地といふのは、當時彼の家や私の家が屬してゐた路地のことである。落合直文の辭書に依ると、路地といふのは門内又は庭園の通路、或は市中の人家と人家との間の狹い通路といふ意味で、東京の言葉だとしてある。路地といふ言葉そのものゝ本來の意味はさうかも知れないが、私がこゝで使はうとする路地といふのは、東京の言葉といふよりは、最も大阪的な意味で使ふのである。だから、若しかすると『路地』と當てた字が間違つてゐるかも知れない、兎に角私のこゝでいふ路地といふのは、大阪によくある特種な路地の長屋を指すのである。この言葉を大阪では訛つて『ろうぢ』といひ馴らしてゐる。それには袋路地もあれば、拔路地もあるが、大阪では前者の方が多い。特徴は『ことばのいづみ』の文句ではないが、門を持つてゐることである。門の中は大抵コンクリートか敷石の路になつてゐて、それを挾んで十軒なり、五軒なり、向ひ合つてゐたり、時としては片側だけだつたりして、何軒かの家が建つてゐる。つまり、

私がこゝで十軒路地と呼んだのは、門の中に二列に五軒づつ並んだ、東京流にいふと十軒長屋のことなのである。この路地は南北に通つてゐたから、東西の側に五軒づつの家が並んでゐて、私の家がその西側の三軒目で、山本佐一君の家が東側の三軒目だつた。路地とか長屋とかいふと、ひどく見すぼらしく聞えるが、宗右衛門町は貧民窟ではなく、所謂許可區域に屬する色町であつたから、五軒づつ各々棟つゞきの長屋にはなつてゐたが、格子造りの丈の高い二階建で、色町獨得の磨き込んだ家々だつた。

私がこの町に來て住むやうになつたのは十歳かの春だつたと思ふ。それ迄は同じ大阪ではあるが、ずつと山の手の方に住んでゐた。それは大阪城の大手門通のすぐ隣の町だつたから、宗右衛門町が芝居とか見世物とか、料理屋とかお茶屋とかの町つゞきであるやうに、そこからは五町と離れないところに城の馬場があり、馬場の周圍には歩兵聯隊とか、砲兵聯隊とか、衛戍病院とかゞあるといつた風た町だつた。私の通つてゐた陸軍偕行社附屬小學校といふのもその邊にあつた。この學校は風變りな學校だつた。入學させる生徒の資格に制限があつて、餘り貧乏な家庭の子弟は許されなかつた。主に軍人の子とか、でなければ二人以上の軍人の紹介がなければならなかつた。私の死んだ父は軍人ではなかつたし、寡婦の母は間もなく破産して、そのために私が宗右衛門町の伯父の家に引取られた位であるから、餘り貧乏でなくもなかつたのだが、どういふ軍人の紹介で私たち（私と兄）はそんな學校に入るようになつたのか、私は知らない。東京でいふと、ちよつと曉星學校のやうな風で、あれより武骨だつたが、貴族的たところたど似てゐた。まだ今日のやうに洋服の用ひられない頃であつたが、偕行社の生徒は七歳の尋常一年生から制服と制帽と、それに背嚢を負うて、雨の日は夏でも傘を許されなかつた、外套に頭巾を被つて行くのである。それが丼陸軍兵の様式を眞似たものだつた。ズボンの脇にはたてに赤い線が入つてゐて、上衣の袖には山型の線が縫ひ込んであつた。帽子は、一般の學生帽に見る樣

軍型のでなく、陸軍型の桶のやうな恰好のであつた、そして背嚢も兵隊の持つてゐる通りの黄色い毛のついたのだつた。普通一年の子供にかういふ服裝をさせなければならなかつたのだから、成る程貧乏人の子は、向うから拒んだに違ひない。この學校の規則に、學校の制服を着てゐる時に、途で少尉以上の軍人に會ふと、兵隊と同じやうに擧手の敬禮をしなければならなかつた。その代り制服さへ着てゐたなら、聯隊でも、師團司令部のある城の天守台へでも、門衛に擧手の敬禮をするだけでどん〳〵入つて行くことが出來た。こちらは七歳や八歳の少年であつたから、將校に敬禮をして、向うから敬禮を返されるのは愉快であつたが、大人の將校たちは隨分迷惑なことだつたらうと思ふ。さういふ學校だつたから、教師を呼ぶのに先生といはないで教官殿と呼んだ。隨分古風な學校であるが、今でも存在してゐるといふことである。

軍人ぎらひの當節のことであるから、そんな古風な學校は多分止めになつたらう位に思つてゐたところが、これも亦つい近頃、山本宇三吉の消息のあつた半月ほど前に、私は名前を辛うじて思ひ出せるやうな古い友人からの手紙で、偕行社時代の同級生が東京に二十人近くゐるので、毎年一回づつ會合をしてゐる、近頃君の消息が分つたので、今度通知する云々といふ知らせを受取つた。して見ると、私が七歳から十歳まで同級だつた人々が二十人近く東京にゐて、毎年一度づつ會合をしてゐる譯である。同級といつても全體三四十人だつたと思ふ、それも大阪の小學校の同級である、それが二十五年經つて二十人近く集まつてゐるとは、さすがに東京は大都會だと私は感心した。偕行社の友人なら大抵軍人になつてゐるものが多いだらう、二十五年も會はない友人といふものはどの位變つてゐるだらう、手紙に書いてある名前を一々讀んで行くと、全然思ひ出せないのもあつたが、少しづつ思ひ出せる顔や、或はその名前の少年と交際した日の記憶までだん〳〵よみがへつて來て、懐しくなつたので、私は指定された日に會場の鳥屋に行つて見た。（未完）

彼等の顔を見た時も、前に名前を手紙で見た時と同じ現象が起つた。すぐに思ひ出した顔もあつたし、終まで思ひ出せない顔もあつた、話したり笑つたりしてゐるうちに次第に思ひ出した顔もあつた。中には名前も思ひ出せるし、その子の家へ遊びに行つたことさへ思ひ出せるし、その子の父の聯隊長が或日馬に乗つてゐたのを見た記憶さへあるのに、その名前の少年と現在その名前の大人とがどうしても一所に考へられないやうなのもあつた。十五六人ばかりの會合だつた。多くの人たちも私同様に、軍人の子に限つてゐなかつたと見えて、その中に軍人は三四人しかゐなかつた。もつとも軍人の子で外の者になつてゐたり、外の者の子で軍人になつてゐる者などあることはいふ迄もない。その時の話で、あの自分たちが二十五年前に通つた、不思議な古風な學校が今でもあるといふことを聞いたのである。

その偕行社の近くにあつた山の手の町の家は私の母の家だつたのだ。その私の母の家が立ち行かなくなつて、私は今いふ宗右衛門町の伯父の家に引取られることになつたのであるが、彼はその時まで未だ家をなしてゐなかつたので、その時初めて家を持つた譯なのである。彼は當時心齋橋通の或町で三人の從兄弟たちと共同で、羅紗と洋傘の卸賣を商賣にしてゐた。私の山の手の家があつた間は、彼は私の家から毎日その店の方に通つてゐたのであるが、私の家がつぶれたのを機會に、私と祖母を引取つて、その宗右衛門町に借家することになつたのだ。何故彼が宗右衛門町などを選んで住む氣になつたのか知ることは出來ない。これ迄の山の手の私の家からも彼の店まで相當の道のりがあつたが、宗右衛門町からも同じ程の距離があつた。彼はそこから以前のやうに毎日心齋橋の店に通つた。彼はその時四十歳に近かつたが、獨身だつた。若年の頃清元節に凝つたのが始まりで、それに美貌だつたのが手傳つて、彼は茶屋遊びに身を持ちくづして、十年ばかり行方不明になつてゐたのだつた。その間に何でも東京の方で妻も持ち、子もあつたといふ話を後に聞いたことがあるが、それ等との關係はどんな風になつてゐるのか、私は今も知らない。そして彼は三十五歳の

時、ふらりと十年振りでその山の手にあつた私の母の家の玄關に姿を現したのである。彼を最初に見つけたのは私だつた。玄關に鈴の音がしたので、當時六七歳であつた私は、次の間で玩具でも持つて遊んでゐたのだらう、誰か來たと思つてちよこ〳〵と立つて見に行つた。私はそんな幼年であつたから、疊の上に立つてゐて、玄關の土間に立つてゐる見知ぬ人と同じ位の高さだつた。彼は片手に羅紗の小さな鞄を持つて、丸い帽子（たしか茶色の山高帽子だつた）を被つてゐた。それが私の生れる前から行方不明になつてゐた伯父だつたのだ。彼はそれから三年餘り私の母の家に居候をしてゐた。そのうちに店を立てゝ、今いふ從兄弟たちと共同の商賣を始めて、だん〳〵成功したものだから、幸ひ私の家が立ち行かなくなつた時、彼が私たちを引取つてくれたのである。それが宗右衞門町の十軒路地だつたのだ。

この町へ引越してから間もなくの或日のことだつた。私に所在がなかつたのと、一體どういふ町だらうと思ふ好奇心とで、町に子供の出てゐない隙を見計らつて、一人でそつと家を出て見た。路地を出たところが宗右衞門町の通で、すぐ傍に日本橋があつた。日本橋の方は餘り人通りが賑か過ぎるので、私は反對に西に向つて歩いて行つた。いや、初めから私はそのつもりだつたのかも知れない、といふのは、家を出る時、小さな玩具の錨を懷中に忍ばせて來たからだつた。それはまだ山の手の自分の家にゐた時分から持つてゐたもので、本物の錨をそのまゝ小さくしたやうな形の玩具で、錨の端に長い紐がついてゐた。どういふ目的で造られたものか知らないが、前の家にゐた頃、私は近所の子供友達に連れられて、近くの堀割へ出かけて行つて、水の上に流れて來る藻を、こちらからその錨を投げつけることに依つて引つかけては、岸でたぐり寄せて採集する遊びに使つたものである。山の手の家の時には東横堀川まで藻を取りに行くのは、道が遠かつたので一二度しか行かなかつたが、今度の家はすぐ近くに道頓堀川があつた。私はこゝへ引越して來てこの堀割を見た時、一番初めに思ひついたのは、あの錨でこゝへ藻をつりに來てやらうといふことだつた。たゞ、内

頃だつたので、まだ荷の立つてない午前の[illegible]に見られたないように、一人[illegible]
のだつた。

　私がこゝへ來た數年前に、宗右衛門町燒と呼ばれた大火があつた。どういふ譯だつたのか、さういふ色町にもかゝらず、私が越して來た時分には、宗右衛門町の北側はすつかり家が建ち並んでゐたが、南側の道頓堀川に面してゐる方は、相合橋寄りの半町ばかりと、太左衛門町と戎橋との間は燒跡のまゝに殘されて草が生えてゐた。それが川に面してゐる側であつたから、川の岸は往來よりずつと低くなつてゐたので、緩い傾斜をなした草の土手になつてゐた。だから、この側に建つてゐる家は、往來の方から見ると二階建だが、川の方から見ると三階建になつてゐるのが常である。その燒跡の草原には、ところ〴〵に柳の木が繁つてゐたり、かと思ふと砂利が積んであつたり、そして柳の下には甘酒屋が荷を下ろしてゐて、車力が甘酒を飲んでゐたり、砂利の山では子供がいゝ遊び場にして、角力をとつたりしてゐた。それでゐて、往來を隔てた反對の側は一面にお茶屋が並んでゐるのである。それ等の家はみな新築だから綺麗だつた。どの家にも入口には長方形の行燈が掛つてゐた。さうだ、まだ電燈のない時分だつた。

　かういふ川岸のことを大阪では「濱」と呼んでゐる。その濱側には家の建つてゐるところと燒跡とに拘らず、半町目位毎に、往來から水際に下りて行く石段が造られてあつた。舟からの上り下りや、洗濯の便利のためであらう。私は外に見る人がないのを見定めると、懷中から玩具の錨を取出して、片手に錨を、他の手にそれを結びつけてある絲の端を持つて、藻は澤山流れて來るだらうか、これ迄の家から行つた横堀の川よりもあたりが賑かなせゐか、川幅が狹く見えるし、川の水が汚なく思はれるが、などと思ひながら水際への石段を下りて行つた。ところが、私の失望にまで、そこには木切だとか、藻屑だとか、古下駄だとか、そんな不用なものが無數に流れて來るばかりで、肝腎の藻が少なかつ

た。稀に見出されても、新鮮な青い色をしてゐるのはなくて、大方黒味がゝつたのとか、茶色がゝつたのしか流れて來なかつた。それに、以前の横堀の川だと、さうして水際に立つてゐると、あたりが靜かなので、世界が水の流と藻とだけにしか考へられなかつたが、こゝでは幾ら一心に流れて來る藻を探さうとしても、すぐ川向うの道頓堀の雜踏や、背中の往來を隔てたお茶屋に出入りする人の話聲やさざめきが耳について、いつの間にか藻をとることを忘れて、錨を手にしたまゝで私はぼんやり立つてゐる自分を見出さねばならなかつた。が、それではならぬと思つて、青い藻でも黒い藻でも、かまはず取る方針にして、いろ〱な塊の間に辛うじて見つけられる藻を目がけてはそれを引つ掛けるために錨を投げつけ投げつけしてゐた。いつの間にか、少し一心になつてゐたと見えて、

「何してなはんね？」と突然聲を掛けた者が近づいて來たのを知らなかつた。そして、その時私の傍に立つたのが、山木宇三吉だのである。（或小説の中で、私はこの時の場面を使つてずつと後に知り合ひになつた、筆屋の猪之吉といふ男に聲をかけられたことにしてあるが、本當はこの宇三吉なのである。）無論、その時は未だ宇三吉の名も、彼が私の越して來た伯父の家の、ま向ひの家の子だといふことも知らなかつた。

私は宇三吉に聲を掛けられたが、答へそびれてだまつてゐた。で、彼もだまつて、暫く私と並んだまゝ立つて川の流れを見てゐた。

「前にどこに居なはつてん？」としばらくして彼の方から又尋ねた。彼の方では私が昨今越して來たものだと知つてゐたらしいのである。

「××町……」と私は答へた。

「××町……？」と宇三吉はそんな町を知らないといふ風に首を傾けた。

それ切り又二人とも言葉もなくなつたので、どちらからともなしに、そこから西へそれてしまつた。川の方へ、反対から堀を越した向うは、大阪第一の繁華た町である。道頓堀筋に軒を並べてゐる家々の裏側になるのだつた。こちらから見ると、どの家も地下室があるので三階以上だつた。直ぐ正面に見える裏側の家は芝居茶屋らしかつた。それだけが毛色の変つた家で、その両隣の七八軒は同じ大きさの同じ構えの芝居茶屋だつた。その芝居茶屋の尽きたところに、赤や青の色硝子の嵌まつた、硝子越しに見た様子では、うどん屋であるらしかつた。とある一軒の芝居茶屋の座敷では、数人の男女が食事をしてゐる様が、障子が開けつ放しになつてゐるので、手に取るやうに眺められた。彼等の笑つたり話したりしてゐる聲の響が、堀割に水の上を渡つて聞えさへした。さうだ、うどん屋だ、数組の客が色硝子の明滅で、或客は赤色に見えたり、他の客は青色に見えたり、或は半分赤色半分青色に見えたりする中に、客の注文を聞いて、これを料理場に傳へる呼び子の聲が聞えるのだつた。

かと思ふと、それ等の向ふ岸の家と家とのある切れ目の間から、少しばかり幕を開いた芝居の舞臺でもあるやうに、賑かな道頓堀の雑踏が覗かれるのである。家々の屋根の上には芝居小屋の櫓も見えるのである。家と家との間の切り取られた道頓堀の通を、東から西から、祭のやうに大勢の人々が歩いてゐる。

「賑かだすな、」と見とれてゐた私が思はず溜息をついていつた。

「……あんたの前にゐなはつた所はもつと寂しいところだんの？」と宇三吉が聞いた。

「えゝ。」

「うちが元ゐたとこも寂しいところだしたで……姉ちやんがお花に行つて歸つて來ると、いつも水道場のところにさめだがゐましてんて、」と宇三吉はいつた。そんなにお喋りではないが、彼は私よりもよく話して、そして話し振りに人懐

しいところがあつた。『姉ちやんがお花に行く』といふ言葉はその時私に分らなかつたが、藝者が座敷に行くことだつたのである。後で聞いたところに依ると、宇三吉の家は半年程前まで、つい近くの鍛冶屋町といふところの、稲荷神社の裏手の路地にゐたのださうである。

私は又しばらく言葉の切れてゐた間、川向うの家と家との間に切り取られた道頓堀の雜踏を眺めてゐるうちに、以前山の手の家にゐる時分、乳母に連れられて、車に乗つてよく千日前に遊びに來たことがあるのを思ひ出した。千日前は道頓堀と同じところではなかつたかしら、と思つて、

「千日前近うおまんの？」と宇三吉に聞いて見た。

「えゝ、ぢきそこだすがな。」と、彼は斜め右の方角を指さして見せた。

多分それは日の暮時分だつた。やがて私たちが歸らうとして立ち上つた時、

「あんたの家どこだす？」と私が聞くと、

「あんたの家の向ひだんがな。」と宇三吉は笑つて答へた。――

宇三吉との交際の初については、私はこれだけのことしか覺えてゐない。が、いつとなしに外の誰よりも私は彼と一番親しくなつた。それには、彼の家と私の家が向ひ同志であつたことがその原因の一つだらうが、そればかりでなく大勢の同年輩の子供友達の中で私は彼と一番うまが合つて、好きだつた。考へて見ると、悧巧なことも彼が一番だつたかも知れない。唯、どういふ譯だつたか、外の子供たちは皆それ〲子供同志の親し味のあるぞんざいな言葉を使ひ合つてゐたにも拘らず、私だけは誰とでも大人の使ふやうな叮嚀な言葉を改めなかつた、一番親しい宇三吉との間でもさうだつた。これは私の性質が惡い意味で固苦しいために違ひない。その證據に今でも私はこの、言葉の點でのこだわりから

解放されない、貧相臭い友達とか、或は附合ひ初めの時に打ちとけて親しい言葉を出さなかつた人達には、一旦さういふ他所行きの言葉で附き合ふと、どうしてもそれが改められない。だから、宗吉つちやんの友達と違つて、私とだけはいつ迄も最初の時と同じ言葉遣ひを改めなかつた。それからもう一つ、他の友達仲間は皆な俗称に宗さちやんとか、貞ちやんとかいふ名前で呼び合つてゐたが、私だけはいつでも「加部さん」と姓を呼ばれた。

宗右衛門町に越して来てから私が一番困つたのは毎日の學校通ひだつた。といふのは、そこから偕行社までたつぷり一里以上あつたからである。無論、電車などのない時分だつた。この道の遠さには私は餘程閉口したと見えて、今でもその時の辛かつた感じを覺えてゐる。もつとも身體も人一倍弱かつたからでもあらうが、冬の朝寒さで手が冷えて困つた。それで十歳位の時分だつたから馬鹿々々しいことを眞面目に考へたものである。一例を擧げると、樂隊の小太鼓を叩く人はよく太鼓を肩から紐に依つて腹の邊にぶら下げてゐるが、あんな風に火鉢を腹の前にぶら下げて、町を歩いても可笑しくないやうには流行らないものかと考へた。それから又、私はその頃から腸が悪かつたと見えて、よく道を歩いてゐる時に便を催した。もつと小さな時分に一度腹を悪くして、學校から歸りに洋服のズボンの中へ粗相してしまつたことがある位だ。自然、小便も近かつた。だから、その一里の道を學校へ往復の途で幾度用を足したくなつたらしい。これには先の火鉢よりもつと馬鹿げたことを考へたことを覺えてゐる。それは各々自分の家の便所に通じてゐるホースを尻にくつつけて歩いたらどうかといふことである、さうしたら道を歩いてゐる最中にでも隨意に大便でも小便でも出來て便利だらうと眞面目に毎日考へたものだ。これは學校の往復の途といつたが、かういふことを考へるのはいつでも行く時の朝の道だつたやうである。ホースも自分だけがやつたら見つともないが、一般の人がやればいゝ譯だと考へたが、ふと、一里も二里も遠くへ行く人だと餘程長いホースが入る譯だし、そんなに大勢の人がホースをつけて歩いたら、

町がそのために歩けなくなるだらう、これは駄目な考へだ、と思つて止めた。

も一つ困つたのは先にいつた偕行社といふ、風變りな學校の生徒である爲だつた。さういふどちらかといふと貴族趣味の學校だつたので、一般の學校の生徒たちから偕行社は反感を持たれてゐた。まつたく七歳や八歳から、兵隊と同じ型の帽子を被り、同じ服裝をして、背嚢など背負つてゐるのだから、大人の目には何でもないだらうが、不斷着の和服に、袴さへ穿いてゐるもの丶少なかつた當時の大阪の小學生たちの目には、小憎らしく映つたのも無理はない。この學校では登校する時は別々であつたが、歸りは上級生と下級生の區別なしに、生徒の家のある町を十幾つに大別して、堂島の隊とか、谷町の隊とかいつて、それ〴〵自分の家の町の屬してゐる隊に入つて、上級生がそれを引率して歸る規則になつてゐた。自分の家が近づいて、隊長が歸ると、殘つた中の一番上級生が隊長になつた。その隊の者の家の近いところから始まつて遠くに行くに從つて、最後に一番家の遠い者が一人になる譯だつた。以前××町にゐた時分は、私は大手の隊であつた。が、宗右衛門町に來てからはどこの隊に屬していゝか分らない程、私の家だけかけ離れてゐた。だから、どこの隊について歸つても、私は一人になつてからの道が長いのに閉口した。一人になると、今いふ、私の學校に反感を持つてゐる他の學生たちに會ふことが恐れられた。それにも拘らず私は一人になつてから幾つかの小學校の區域を通らなければならなかつた。彼等は私の姿を見ると、「ゑらばり（威張り）學校偕行社」と節をつけてはやし立てては、私に挑戰して來るのである。だから、私は毎日道をかへて歩いた。まつたく、私が毎日向つて行く方角から、私が出發する場所の方へ歩いてゐる人は何人かあるに違ひない。私はこちらからあちらへ行くのだ、無駄だから、何か交通とか往來を調節する神様があつて、あちらからこちらへ來る人と私とを置き換へてくれるやうな譯に行かないだらうか、と私は眞面目に考へたことが幾度あるか知れない。それ程、宗右衛門町へ越してからの偕行社通ひは肝に銘じて辛

かつた。

もつとも私がかういふ思ひをしたといふのも、私の體質と共に氣質の爲であつたことはいふ迄もない。まつたく私の氣質のうちでも、人並外れた内氣さの爲にはどんなに惱まされたか知れない。私は先づ私の十軒路地の中に住んでゐる人々を恐れた。私がいつも學校が引けて、一里の道を重い足を引きずりながら、家の方へ近づいて來ると、どうか路地の中に人が出てゐてくれなければいゝが、といふ思ひで胸が堅くのを覺えた。考へて見ると、それ等の人といつても、大抵は大人たちであつたから、そんな十歳やそこらの子供が傍を通つたところが、氣にとめる筈がないのだが、私にはそれが堪らなかつた。私は下町に來ると一層目につくに違ひないと思ふ、借行社の服裝が氣にかゝつた。人々の中には私と同い年の子供たちもゐたに違ひない。その子供たちの思惑も憚られた。それに、もはや男性より女性に特別の感じを抱く年頃にもなつてゐたので、それが生憎十軒路地の中は藝者とか娼妓たちが、大抵の家に一人や二人の割合で住んでゐたので、年頃の女が多かつた。さういふ女たちに見られるのが恥かしくて堪らない氣がした。

路地の入口の、門のあるところは一間の幅だつたと思ふ。雜貨店と足袋屋とに挾まれてゐた。だから門を入つてから四間ばかりの間、即ち表通の雜貨店と足袋屋の奥行の間だけは家がなかつた。が、こゝに家がないだけに、花道のやうな氣がした。全體がコンクリートのタヽキになつてゐるので、靴の音を立てまいと思つても、ぱた〳〵と音がするのである。そこを過ぎると、片側に五軒づつ格子造りの家が並んでゐるのである。大體が博奕打とか、藝者の置屋とか、髮結とか、藝人とかの住家だつたから、晝間のうちは閑な人間が多いと見えて、私が遠い學校から歸つて來ると、一ト所か二タ所位にかたまつて、二人とか、三人とかの組が何を噂話でもしてゐるのか、必ず立つてゐるのだつた。その間を両側の三軒目の家まで歸つて行く私の決心は、その度毎に身體が少しづつ縮まる思ひがした。彼等はみな隣人たちなので

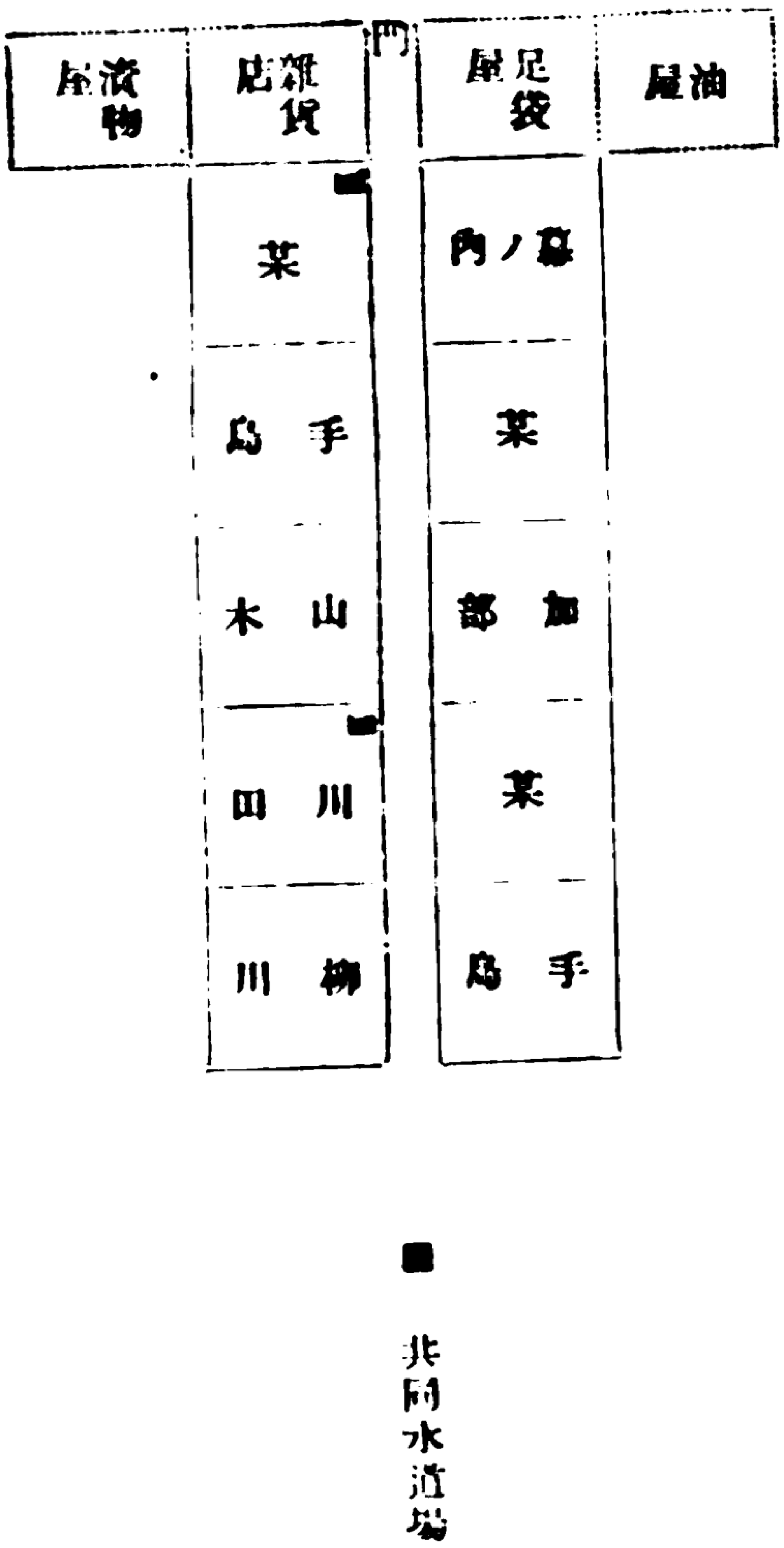
あるから、こつちから長者としてお辭儀でもして通るか、でなければ子供らしく無視して通り過ぎればいゝのであるが、私にはそのどちらもが出來なかつた。

路地の入口の門は觀音開きになつてゐた。それに中へ車などを引き込ませない爲にであらう、まん中の扉の合はせ目に鐵の棒が一本嵌まつてゐた。十二時になると規則として、當番の家がこの門を閉めることになつてゐた。が、中の十軒が悉く夜遲くなる商賣のものであつたから、それでは毎日何人となく戸閉めに會ふ譯で、少し位戸を叩いても、會いつた雜貨店と足袋屋の奥行だけは家がなかつたから、容易に路地の中の家まで聞えないし、又聞えても誰が誰の家に向つて叩いてゐるのか分らない譯だつたから、どこの家でもその門の入口の脇に、自分の家の名を書いた札をぶら下げてあつた。その札に針金をつけて、銘々の家まで引つ張つて行つて、家の中で針金の先に鈴をつけてあるのだつた。だから、門の兩側の脇にそれ〴〵家の數だけ五枚の札が下がつてゐる譯である。私はこの札を見るにつけて、いつそのことこの路地の中を十に仕切つて、それ〴〵塀をつけてあつたなら、いつ歸つて來ても他所の人たちに顏を見られずに濟むだらうにと考へた。が、せい〴〵一間か一間半かの道幅を十にも仕切つたら人が通れないだらう、では、二軒づつ共通にして五つに仕切つたら、とも考へたが、それでもまだ狹過ぎる、ぢやア三つに……いや、矢張り出來ないことだと考へた。が、そんな馬鹿らしいことをも、何度か改めて眞面目に考へた程、私は人と顏を合はすのが辛かつた。

そんな風にして、私が宗右衛門町から踏行社へ通つたのは一年ばかりだつたかと思ふ。何でも尋常科の四年を経つて、高等科の一年に半月も行かなかつたうちに病氣で床に就いてしまつた。どういふ病氣だつたか、今覺えてゐない。病院へ入る程の病氣ではなかつたらしいが、一ケ月や二ケ月床に就いてゐたやうに覺えてゐる。私は子供の頃から身體が弱かつたから、頭が痛いとか、腹の加減が悪いとかいつて、一日二日床に就くことは月に何度となくあつた。その時

もそれのひどいのではなかつたかと思ふ。もしかすると、餘り早く直つてしまふと、又毎日あの遠い路を[illegible]へ通はなければならぬと思つて、わざと起きなかつたのかも知れない。多分あまり毎日遠道をしたので、疲れが出たのかも知れない。今度病氣がなほつたらこの近くの學校に變へた方がいゝだらうなどと、伯父たちが相談をしてゐるのを聞いて、是非さうしてもらひたいものだと心の中で思つてゐた。それで病氣のためだつたが、そんな風に私の學校通ひが延びなかつたからだつたが、私は春から夏を過ぎて、十月の末まで學校を休んで家にゐたことを覺えてゐる。もうその頃には宗右衛門町にも馴れて、宇三吉の外にも友達が出來つゝあつた。

だが、その宗右衛門町から偕行社に通つてゐた時分の交友の記憶が曖昧で殆ど思ひ出せない。先に話した宇三吉と初めて言葉を交した時も、引越して間もなくだつたか、それとも偕行社の通學に疲れて、病氣になつた學校の時分だつたか、はつきり思ひ出せない。が、宇三吉と遊び初めの時分の或時、私の家の入口の左手の壁に、次のやうな畫を書いたことを覺えてゐる。



何でも壁は茶色だつた。白黒がなかつたと見えて五寸釘の尖で彫りつけて書いた。だから書いてから五年以上殘つてゐたやうに覺えて居る。右のうちで、點線で表はした分と共同水道場の印だけは、今私が便宜の爲に書き加へたので、當時宇三吉と相談しながら、壁に彫りつけたのは十軒路地の兩側の家の名を右のやうな箱へ嵌めて書いたのである。その代り、某と書いてあるのは、私が忘れてしまつたので、その當時はそれぞ〱名を認めてあつたものだ。私の家は先にもいつたやうに私の家でなく、伯父の家であつたから、梁谷といふ標札が出てゐたのであるが、これは私たちその家に屬する子供の方を主にして、私の名字を認めたのだつた。私がこれを壁に彫りつける主唱者だつた。宇三吉は釘で彫りつける仕事であつたから、やつてしまつたら後で取返しがつかないと思つたのであらう、「叱られまつせ、叱られまつせ、」と二三度止めた。だが、私は自分の家に屬する壁だから、かまはないと主張して、やつと彼を納得さしたものだ。何しろ、私には今迄ゐた山の手の家と違つて、こんな風に同じ恰好の家が兩側に並んでゐるといふことが驚異だつた。そればかりでなく、それ等の家々に住んでゐる人たちが、山の手の家の近所では見たこともないやうな風變りな人々に思へた。無論、それには違ひなかつたが、丁度自分以外の人々を觀察する興味が目醒めかゝる年頃でもあつたからだらう。現に、私がこれを書いたことは、書きながら、傍に立つてゐる相談役の宇三吉に聞くことに依つて、彼の方がこの路地の古參であつたから、それ等の家々の人たちに就いての概念を得る目的だつた。これは決して小説の筋を進めるための作り事ではなく、實際その通りだつたのだ。

「森の内といふのは可笑しおまんな、何といふ名前だすやろ？」と私は聞いた。

「さあ、」と宇三吉はそのアクセントにひどくませた調子のある少年だつた。「お婆んの人が一人より居へしまへんねよつてな、」と首を傾げながら、「ちよつと待つとくなはれ、」と彼はいひ捨てゝ、その家の前へ標札を見に走つて行つた。が、す

くに改まつた所で語つて文て[illegible]にしよへん。「森の内」にしときまひよ、といふのだ。

といふのは、その取つ附きの家には、表通りのお茶屋にあるやうな四角な行燈が格子先に掛つてゐて、それに「森の内」と大きく認めてあつたからだ。四角な行燈が格子に張りつけたやうに掛けてあるのだから、三方が紙張りで見えるやうになつてゐた。その三方共に「森の内」と書いてあつて、その正面の一側にだけ「森の内」とまん中に大きく書いた傍に、「ちよと一ぱい」と認めてあつた。この「ちよと一ぱい」の読み方について、いつか宇三吉と議論したことがある。「ちよと」はをかしい、「ちよつと」でなければ間違ひだといふのと、「ちよと」といふのは早口に「ちよと」一ぱいといふ意味だらうから、かまはないといふ二つの説だつた。そんなことをいひながら、「ちよと一ぱい」が多分酒のことだらうが、どうしてそんな事を書くのだらう、酒屋にしてはをかしいし、などと考へた程度の私たちは少年だつたのだ。なる程主人といふのは七十歳近い老婆だつた。頭が禿げてゐて、本當に毛の数が読める程しかないのに、それをまん中に引張り上げて、御叮嚀に小さな髷をくつ附けてゐた、そして頭の地一面に墨を塗つてあつた。今考へると、これは大阪の所謂待合といふやつに違ひなかつた。私たちがもう少し年を取つてゐたなら、色んな男女が出入りをするのを見つけたのに違ひないのだが。

その次の某といふのは殆ど女ばかりの家のやうであつた。主人格の男が一人位ゐたのであらうが、餘り女の数が多かつたから、目につかなかつたのかと思はれる程である。女といふのは藝妓が四五人と、同じ位の数の娼妓とだつた。つまり東京でいふ藝者家と同じ種類のものなのだが、東京のやうに何々家などといふ家號を持つてゐない、それに東京のさういふ稼業の女たちよりも、氣質が無邪氣みてゐて、浮氣な稼業を浮氣にしないで、随意にしてゐるやうなところが

あつた。もう一つそれらの家が東京と違ふのは藝妓の外に娼妓を抱へてゐることである、つまりそれ等の娼妓と藝妓とは抱へられてゐる家は同じでも、店（検番の役をするところ）が違ふ譯であつた、無論出先も違ふ。——さういふ女たちのゐる家であつた。

三軒目は加部、即ち私の伯父の家で、その隣は何といつたか、これも名を忘れたが、博奕打だつた。それから一番奥の手島といふのは自前の藝者の家で姉と妹の二人の藝者が住んでゐた。その姉藝者の子の幸一といふのが私より二歳の年上であつたから彼女は相當の年輩に違ひなかつた。彼女は美人であるらしかつたが、病のせゐか、始終首をぶる／＼と細かく震はす癖だか、病氣だかがあつた。手島といふ名を覺えてゐるのは、今いふ彼女の子の幸一が私と近い年頃だつたので、餘り親しくはならなかつたが、今だに年始状位はやり取りしてゐる友人だからである。その妹の藝者にも子があつた。それは女の子で、私たちよりずつと年下だつたが、この子が伯母の癖の系統を引いて居ると見えて、藪睨みの目を、どうかすると白眼にしてしまふ癖があつた。凄い癖だつた。

今度はその向側の家を奥の方から數へると、手島の向ひの柳川といふのは、柳川と呼ぶ大阪角力の家でちよんまげに結つた三十歳餘りの角力取だつたが、もう角力は取つてゐないらしかつた。娘が一人あつたが、まだ藝者の見習中の年頃だつた。柳川は博奕が好きで、始終私の家の隣の博奕打の家へ遊びに來ては、博奕を打つてゐる、との宇三吉の話であつた。四軒目の家は何故か川田といふ姓を今でも覺えてゐるが、かつら職であつた。普通の家に見る三倍もあるやうな標札に川田卯八といふ名が書いてあつたのを、その書體まで思ひ出すことが出來る。この家は複雑な家庭で、妻妾が同棲してゐて、どちらにも子供があつた。妾の方の子は赤ン坊だつたが、本妻の方の子は私たちと同じ年頃の娘だつた。ところが、その娘はその家で生れた子でなく、本妻の連れ子だといふ話だつた。

その上私の家の向ひの、山本宇三吉の家であることを、宇三吉は[illegible]在だつた。父親は宇三吉に似て脊の高い人で商賣は下駄屋だつた。一番上の姉は當時三十歳位で[illegible]らしてゐる年増藝者で、顔はよくなかつたが、藝が秀でてゐるといふ評判だつた。その姉の下に男兄弟が二人あつて、四番目と五番目が女姉妹だつた。そして六人目が宇三吉といふ順だつたが、私が知り初めた時分には一番上の姉をのぞいては、まだ後の姉は藝者になる年頃ではなかつたから、彼の一家は藝者である姉の稼ぎと、下駄屋の父親の收入とで生活してゐたに違ひなかつた。しかし、下駄屋であるにも拘らず宇三吉の父は近所で評判の、正直な男だつたから、商賣の方の收入は一向ないらしかつた。彼は毎日朝早くどこかへ出かけて行つた。そして必ず日の暮れる少し前に歸つて來た。歸つて來ると、入口で足袋を脱いでぱたん／＼と大きな音をさせてはたくことと、羽織を兩手でひろげてぱた／＼ふるふことを忘れなかつた。それが濟んで、暫く家の中に姿をかくしたかと思ふと、夏なら褌と肌襦袢一枚、冬ならばその上に印絆纏のやうなものを着て、入口の戸から格子戸をきゆつ／＼と音を立てながら拭き始めた。頭は少し禿上つてゐたが、今いふオールバックといつた風な恰好の、その時分としては珍しい髮の刈り方をしてゐた。彼は今でも八十近い年で生きてゐるさうであるが、長い一生に彼のした仕事は、六人の子の父となつたことと、掃除をしたことだけしか數へられないに相違ない。

何でも宗右衞門町に來てから、宇三吉の家は次第によくなつて來たらしいのだが、以前は隨分貧乏であつたらしかつた。それで一番上の姉は西國の或町へ娼妓に賣られて行つたことがあるのださうである。だが、この姉がしつかり者で、年期を勤めると、大阪に歸つて來て藝者になつた。娼妓をしてゐるうちに、一心に藝事を勉強したといふのである。それに天成の美聲が役に立つた。つまり宇三吉の家が鍛冶屋町から宗右衞門町に引越して來るやうになつたのは、

この姉の奮發の力だつたのだ。彼女は男兄弟にはことごとく愛想を盡かしてゐた。で、二人の妹を藝者に仕上げることに骨を折つたらしかつた。だから、私が宗右衛門町へ行つた時分、向ひの宇三吉の家では毎日二人の姉と妹とが朝から晩まで三味線の稽古をしてゐるのが聞えた。家と家との距離は一間そこ〳〵だつたし、先にいつた私が偕行社通ひの疲れが出て、半年餘り何もせずに家にゐた間、大抵入口の部屋に寢たり起きたりしてゐたので、彼女等が師匠に習つてゐるのも、師匠が小言をいつてゐるのも、後で彼女等が二人切りで稽古をし、教へ合つてゐるのも、手に取るやうに聞えて來た。私が男の子供だつたくせに、「紀伊の國」とか、「春雨」とか、「黒髪」とかいふ唄をその頃大抵覺えてしまつたのは、彼女等の勉强のおこぼれである。

山本の一家に就いては後でいふ機會があるだらうから、次に移ると、向うから二軒目の手島といふのは、奧の手島の姉妹で、幸一の母の姉に當る人がこゝの家の主人だつた。以前は矢張り藝者をしてゐたのださうであるが、その頃は誰かの圍はれ者になつてゐた。兄妹の多い人たちと見えて、その家には弟になる二十四五歳の男が居候してゐた。頭が少し低腦だが、足が達者だといふので、近所の用達しをする便利屋のやうな仕事をしてゐた。煙草を始終口に啣へてゐて、その煙の吐き出し方に特長があるといふので、「パッパ屋さん」といふ綽名がついてゐた。別にどこが馬鹿といふ程、目に立つほどの馬鹿ではないのだが、私たち少年が見ても、どこか輕蔑したいところがあつた。彼は先にいつた私たちの同年輩の友達である手島幸一には、母親の弟で、即ち叔父に當る譯だつたから、幸一はそのやうな叔父の存在を友達の私たちに對して恥ぢてゐるやうだつた。このお妾さんは四十歳以上だといふことであつたが、私たちの目から見ても二十歳代にしか見えなかつた。この人も矢張り奇麗好きで、隣の宇三吉の父と競爭するやうに、毎日暇さへあると雜巾で格子の桟を磨いてゐた。表に水を撒いたり、掃いたりする役は弟のパッパ屋にさしてゐたが、格子戸は決して人の手にか

けさせなかつた。最後に、一番の内側の向ひに年寄りの夫婦がゐて、亭主は水道の方の役人だといふことで、毎日詰襟の職人のやうな洋服を着て出かけた。人の話では両者のまだ六十歳以上年上だといふことだつたが、私たち子供の目から見ると、二人とも相當の老人としか見えなかつた。

さつとこれだけが、私が宇三吉と二人して私の家の入口の壁に書いた十軒路地の家々の顔觸れであつたが、後で私が書き足した表通の一二軒について簡單に述べておくと、雜貨屋は眞山といつた。こゝにも私より一二歳上位の少年がゐた。どういふ譯だか、眞山は色が西洋人のやうに白くて、髮の毛が金茶色で、目の色も日本人らしくなかつた。だから、あり觸れた呼び方だが、子供たちの中では『合の子』といふ綽名になつてゐた。それで父親も母親も普通の日本人であつた。彼がいふには、小さい時分に激しい熱病をわづらつたので、こんな風になつたので、合の子などではないといふことだつた。私たちはそれを大體信じてゐた。餘程經つてから、私の伯父の世話で、眞山は商人の家へ奉公に上つたことがあつたが、その時伯父が誰かに話してゐたのを聞いた記憶だと思ふが、眞山の母親は元やとなをしてゐた人で、眞山はその連れ子だといふ話だつた。そして無論彼はその母親とどこかの西洋人との間に出來た子だらうといふのである。

それから路地の出口の、足袋屋の隣に油屋があつたが、こゝにも三人の男の子があつて、みんな私と一二歳上か一二歳下かの範圍であつた。大原といふ姓だつた。この大原の兄弟が私たちの町の腕白小僧の大將だつた。中でも大原作蔵といふ、兄の子が一番強かつた。私など表に出てこの作蔵に出會ふのを最も恐れた。何故といつて、私はそんな風に内氣な性分で、容易に友達を作らなかつたので、作蔵たちから反感を持たれてゐた。若し途で彼に會つて、喧嘩を吹きかけられたら、負けるにきまつてゐた。町内でも、たとへば湯屋の天窓から突然石が降つて來たとか、夜中に商店の看板

を外して塊溜の中に入れてあつたとか、さういふ子供の悪戯らしい出來事があつて、その本人の分らない時には、きつと油屋の作蔵だらうといふことに決められた位だつた。

だが、やんちやんな點では宇三吉は決して人後に落ちなかつたやうだ。唯、彼はそんなに體格や力の劣つた子供ではなかつたが、人と喧嘩するやうなことは滅多になかつた。が、どういふものか、極端に學校嫌ひであつた。私と彼との交際では、彼のことを「宇三ちやん」と呼び、彼の方では私を「加部さん」と呼んだばかりでなく、私が尋常科の四年の時、彼は一年か二年かであつたから、私の方が二三歳年上のつもりでゐたし、彼もそのつもりらしかつたが、だんだん附合つて見ると、同い年かせい〲一歳違ひ位だつた。私が病氣で學校を休んでゐる時分のことだつたと思ふが、彼は毎日學校へ行くのを厭がるので、彼の父と母とが彼の頭と足とを抱えて、無理耶理に表へ運んで行くのを、私はしばしば自分の家の格子の間から見たことがある。私などと不斷話をしてゐる時あんなにませた口をきく、どこか優しい氣質の彼が、まるでその時は別人であるかのやうに見えた。先にもいつたやうに、彼の父も背の高い人であつたが、母も大柄な人だつた。その父親が先に立つて、彼が絶えず泣きながら暴れるので、彼の兩足を自分の兩方の腋に掻い込むやうにして、母親は彼の兩手と頭とを持ち添えて後から抱えながら、擔架なしに負傷者を擔ぐやうな具合に運んで行つた。彼の學校の本を入れた鞄の持ち手がないので、それは擔がれてゐる彼の腹の上に載つてゐて、彼が身をもがく度に落ちさうになるのだ。

この兩親の心配は大變なものだつた。何故といつて、餘り近くにほり出しておくと、彼等が歸る迄に、宇三吉は泣きながら走つて歸つて來た。といつて、彼の行く學校までは六七町の距離があつたから、そこ迄運んで行く譯に行かなかつた。だから、大抵一二町先の、何でもその邊に學校の先生の家があるといふ邊まで運んで行つて、往來のまん中にほ

り出して來るらしかつた。だが、宇三吉にはこんなところのある少年で、こんなに學校すきであつたかと思ふと、それから突然進んで行くやうになつた。それから表の格子の間で毎日大きな聲で讀本を讀む聲が聞えるやうにさへなつた。彼にはどの位の成績であつたか、私とは學校も違ふし、年級も違ふから知らなかつたが、私が彼の讀むでゐるのを自分の家から聞いてゐた範圍では、彼は相當に出來るに違ひなかつた。私が聞いてゐるのを知ると、彼は讀本を讀んでゐて、分らない字に出合ふと、「加部さん、」と呼びかけた。「この次は何と讀むんですやろ？」

路地は先にいつたやうに一間そこ／＼の幅であつたから、聲は差向ひでゐる程によく聞えたが、彼の家にも格子が嵌まつてゐたし、私の家にも格子戸があつて、それ／＼障子が嵌まつてゐたので、姿を見ることは出來なかつた。それに彼の習つたのと、私が一二年前に習つたのとでは、教科書が違つてゐたから、想像のつくこともあつたが、まるで見當のつかないのもあつた。すると、私の方では「どういふ字だす、何冠とか、何偏とかいうて見なはれ、」と聞いた。それでも分らない時は、私たちは各々格子戸の傍に立つて行つて、戸の上の部分の、目の荒くなつてゐるところから彼が讀本を突き出し、私がこちらから顔を突き出して見るといふ風にした。

私はたしか口笛の吹き方を宇三吉から教はつた。教はつてゐる時には中々鳴らなかつたが、一人でゐる時どうかした拍子に、突然ひゆうと鳴つたのが始まりで、すぐに私も一人前の吹き手になつた。この口笛で、私たちは路地を隔てゝ、互の家から話をする方法を發明した。發明といふよりはもつと無茶なもので、言葉でいふだけの長さと節を、そのまゝ口笛で鳴らすのである。だから、私たちのやうに互の言葉癖と、音とを知り合つてゐなければならなかつた。例へば、「宇三ちやん」と呼びかけるには「ぴ、ぴ、ぴーん」と吹くのである。音は口笛であるからどの音も同じだが、言葉の時と同じアクセントをつけて吹くのだから、複雑な言葉は駄目だが、普通に使ふ位のものなら大抵通じた。

「宇三ちやん、」と私が家から口笛で呼ぶと、
「なんだす？」と宇三吉が口笛で吹く。
「遊びまよか？」と私が吹くと、
「えゝ、」とか、「えゝ、遊びまよ、」と宇三吉が吹き返す。
「お出でなはれへんか？」と私が吹く。
「行きます、」と宇三吉が吹く。「ちよつと待つてとくなはれや。」

この位のことはなんでもなかつた。だん／＼馴れると、これで人の噂や、その日の見聞ぐらゐ話し合へた。馬鹿なことだが、こんな點でも宇三吉は目から鼻へ抜ける悧巧な質だつた。

だが、宇三吉の一番上の姉が、自分で藝者として稼ぎながら、男の兄弟には全然望みをかけなかつたといふことも無理はなかつた。その姉のすぐ下は男兄弟であつたが、不斷は家にゐなかつた。何でも宇三吉の話では、彼は水兵であるらしく吉野艦に乘つたとか、今でも乘つてゐるとかいふことであつた。二三度宇三吉たちの家へ歸つて來たのを見たことがあるが、水兵服を着てゐた時は一度もなかつた。が、この兄は、今考へて見ると、宇三吉の家の隣の手島のパッパ屋に似た人物らしかつた。パッパ屋だつて、兵隊検査に通つたら、水兵になつてゐたかも知れないからである。彼も亦そんな年輩をしながら、私たちのやうな少年を相手に話をしてくれた。軍艦の底は二重にも三重にもなつてゐて、一つの底が破れても、又別の底の蓋を閉めたら大丈夫だといふやうな話を聞いたことがある。さういふ狭い路地のことであるから、かういふ居候的人物は退屈すると屹度自分の家の入口に立つて、ぼんやりと往來の方を見たり、天を見たりしてゐる。そこへ私たち少年が外へ出ようとして自分の家を出るとすると、それが眞向ひの家なら、一間と隔てない目の

前にぼんやり立つてゐる明と顔を合はしたのだから、向ふで笑ひかけ、此方でそれに應じてやつたやうにもなる。その
いふ近代的人物は子供より話相手になつてくれるものがないからでもあらうが、それにしても、氣輕つぽさ、反つて何かと細
詳しくしてくれたことを考へると、彼は三十歳もの年でありながら、姉の藝者に輕蔑されるのも無理がないことかも知
れない。この宇三吉の一番上の兄は、それから何年ほど後だつたか、朝鮮で氣狂になつて死んだといふことを聞いた。
朝鮮の仁川の港の沖に一つの島があつて、汐干には歩いて渡れるのださうであるが、彼は氣が狂つて、毎晩女達の處に
會ふのだといつてはそこに通つてゐたうちに、或時滿汐に遭つて死んだといふのだつた。誰に聞いたか覺えてゐない。
別に宇三吉の家から改めて葬式は出さなかつたやうだつたが、父親がその時朝鮮に行つたやうに覺えてゐる。

その次の兄のことは、日露戰爭が始まつた時に、彼が戰爭に出たといふので私は知つた。砲兵で旅順口の攻撃軍に加
はつてゐたのであるが、間もなく負傷して内地に返されたらしかつた。私が初めて彼を見た時は、彼は片腕になつてゐ
た。が、この人はその兄のやうに私たちを相手にして戰爭の話などしてくれなかつた。もつとも、彼が歸つて來た頃に
は私も中學の何年生かになつてゐたし、宇三吉の家の様子も大分變つてゐた。といふのは、宇三吉のすぐ上の姉と、そ
の上の姉とが、中一年ほどおいて藝者に出たのである。二人ともすぐれて美人といふ程ではなかつたが、藝が達者だ
し姉の引きがあつたので、相當の藝者になりつゝあつた。だから、一番上の姉が考へた通り、上の兄は死に、次の兄は
兵隊にとられして、男の子たちは何の役にも立たなかつたが、女の子たちが大人になつて來ると共に、宇三吉の家は明
るくなり繁昌して來たらしいことが私にも感じられた。

彼のすぐ上の姉はたえといつて、私より一歳上だと私は思つてゐた。後に、二三歳下であると思つてゐた宇三吉が私
と同年か一歳違ひと分つた時分に、たえは私より二歳上だといふことを知つた。これは初めに宇三吉姉弟が私に年を隱

してゐた譯ではなく、私の方で何か思ひ違ひをしてゐたらしいのだ。この町には男の子より女の子の方が多くゐたやうで、路地の塀や、家々の壁に私はいつもたえと名前を並べて書かれてからかはれた。もつとも、それはそれだけの話で、私にも多分たえにもそんな氣はなかつた。それどころか、私は宇三吉の家へ行くと、ずつと少さい頃は彼とたえと、その上の姉のきよと四人で角力をとつたり、鬼ごつこをしたり、かと思ふと、まゝ事をしたり、藝者ごつこをしたりして遊んだ。そのうちにいつか遊ばなくなつたのであるが、妙なもので、私が中學の何年だつたかの時、或日學校から歸つて來ると、路地の中から一群の印絆纏を着た人たちが出て來た。何氣なくその人たちとすれ違はうとすると、その中に、人々に護衛されてゐるやうな恰好で、たえが盛裝してゐるのを見出して、はッとした。たえも私も向う前に佇みながら半年以上見なかつたのである。私たちは顏を見合はして、兩方で赤くなつた。だから挨拶などする間もなく、私は彼女と行違ひに自分の家の方へ歩いて行つた。それが彼女が藝者たつた最初の日なのである。

彼女には妙な癖があつた。どちらかといふと内氣な、音無しい性質で、言葉數も少ない女であつたが、突然肩でもこゐやうに首を二三度縮めたり延したりすることがある。かと思ふと、咽喉に何か物でも詰まつたやうな激しい咳拂ひを二三度つゞけ樣にして、さういふ時は手近にある壁とか、障子とかを痙攣でも起つたやうに兩手で叩きつけることがある。それがいつでも發作のやうに突然に起つた。起つた後では本人は何事もなかつたかのやうにけろりとしてしまふのであるが、傍にゐるものは驚かされた。丁度路地の一番奥の、手島の母親が絶えず首を振るのと同じやうな、激しい病癖らしいのである。それでゐて、たえの場合では、不斷はヒステリイ的なところなど少しもなく、姉妹中でも一番音なしく素直な氣質らしかつた。その後聞くところに依ると、彼女は座敷で時々その發作を起してしくじることがあつたさ

った。仙川の畔で[illegible]に會ひに行つて死んだといふ兄と、[illegible]

つとも、今では人妻になつて、二人もの子の母親になつてゐるとのことであるから、さういふ[illegible]に上らなくなつたのであらう。

私が中學五年の夏休の時、脚氣をわづらつて、毎日家に引込んでゐたことがあつた。が、夕方になると、迚も暑くて退屈さで堪らなくなるので、家の前の路地の細道に床几を持ち寄せて涼みに出た。すると、その頃矢張り例の脚氣が激しくなつたと見えて、藝者を休んでゐる彼女が、同じやうに夕方になると自分の家の前に床几を持出して涼みに出て來た。八月一ぱいのうちに、雨が降つたのは一晩か二晩だつた。が、雨の時は入口の雨のかゝらない軒下のところに床几をおいて、私は矢張り涼みに出た。すると、彼女も同じやうにした。それでも路地の幅全體が一間しかなかつたから、私たちが話をするのに何の差支へもなかつた。しかし、彼女がお披露目の日に會つた時も、言葉をかけそびれた位だつたから、初めのうちは私たちは少し固くなつた。しかし、あの頃と違つて互に二十歳前後の年頃になつてゐたのと、時間がいつも日が暮れてゐた時だつたのと、それに何といつても一間の路を挾んで向ひ合つてゐる近さだつたので、いつとなく子供の頃の舊交を温めた。それどころでなく、私たちは互に大人の感情で好きになり合つてゐたに違ひなかつた。

上の姉のきよは、私とは子供の時分を除くと餘り交渉がなかつた。彼女はたえよりも無論藝者としては成功したらしかつた。多分今でも四十歳位の年増藝者として、奉公のつもりで出てゐるかも知れない。何とかいふ有名な會社の社長を保護者に持つて、その間に生れた子供が最早や中學を出る時分だといふ話を聞いた。一番上の姉は五六年前に死んださうである。彼女には子がなかつたが、葬式は店（東京の檢番に當る）から出したといふ程の、名妓になつてゐたとい

ふことだ。

さて、宇三吉であるが、私はいつ彼と別れたか、といふよりもいつ頃から彼を見なくなつたかさへ、はつきり覺えてゐない。もつとも、それは考へて見ると宇三吉ばかりでなく、かういふ町の子供たちといふものは誰も彼もいつとなく居なくなつてしまふのが例である。といふのは、私のやうに曲りなりにも學校を順々に進んで行くものにはそんなことはないが、かういふ下町の、殊に女の子より男の子が厄介者に見られてゐるところでは、或者は尋常科を出ると、又或者は高等科の中途から、又別の者は尋常科の中途から、突然ゐなくなつてしまふのが常だつた。それにしても、私と宇三吉のやうに親しくしてゐたものが、その一方がいつからゐなくなつたか分らないなどといふのは迂濶な話であるが、考へて見ると女同志の交際のやうなもので、顏を見合つてゐる間は親しくて、顏を見なくなるとけろりとしてしまふといふやうな性質の友達だつたのだらう。現に、私が中學五年の夏、先にいつたやうに毎晩彼の姉のたえと涼み台で話をするのに、殆ど宇三吉の噂をしたことがなかつたやうに思ふ。無論、その時分彼はもう家にはゐなかつた。そこで思ひ出したのだが、その一二年前、宇三吉のすぐ上の兄の政吉が旅順港の戰爭で左手を一本なくして歸つて來た時分のことである。政吉には無事な身體で歸つて來るよりも、手を一本なくして來たことの方が仕合せだつたかも知れなかつた。何故といふのに、彼のしつかり者の姉や、兩親やが相談して、彼は最早やかういふ片輪者なのだからといふ口實で、當時賣出してゐた彼のすぐの妹に當るきよの旦那から、彼に小間物店を出すだけの補助をしてもらふことになつたのである。もし彼が滿足な身體で凱旋して來たのだつたら、彼も男だからさうおめ〳〵と藝者をしてゐる妹の世話になどなれなかつたかも知れない、さうしたら、昔吉野艦に乘組んでゐた兄のやうに、昔日露戰爭に出たといふ經歴だけを持つて、彼も亦狐にだまされて狂ひ死にしたかも知れないからである。

[illegible]で彼に宗右衛門町の私たちの住居のあつた所から二三町と離れてゐない町に小[illegible]のである。そして、初二三年は彼の家の方と、これ迄の宗右衛門町の方とに、山本の一家は二ヶ所に分れて住んでゐたやうであつた。私が宇三吉の姿を見失つたのは、たしかその政吉の家が出來てからであつたやうに思ふ。ただ、政吉の家の方へ行つてゐたとしても、そこに落着いてゐたのなら、つい目と鼻の所であつたから、彼は時々宗右衛門町の家にも來なければならぬ筈だつた。が、いつとなく、私は全く彼を見失つてしまつた。

先にもいつたやうに、私はそんな風にして多くの友達をいつとなく見なくなつてしまつた。だから、私が伯父の家にゐた最後の年である中學の五年の頃には、子供の時分の馴染は一人もゐなくなつてゐた。一番遲くまでゐたのは藝者の子の手島が一だつたかと思ふ。彼は藝者の子だけに、役者のやうに見える、色の白い、鼻の高い、美少年だつた。彼自身も子供のくせに、人からいはれるのでそれを自覺してゐたと見えて、子供たちの中で一番氣どつてゐた。私たちがみんな筒袖の着物を着てゐるうちから、彼は袂の着物を着て、香水の匂のする半巾を持つてゐた。だが、絶えず何か病氣でも掛けられてゐるやうに、ぴりぴりと首を振つてゐた彼の母が間もなく死ぬと、彼は急に大人になつた。丁度大人になりかゝる十五六歳の年頃でもあつたからだらう。それと共に奥の手島は家を畳んで、二軒目の手島の家に合併してしまつた。だから、幸一も暫くその伯母の手島の家へ來てゐたやうだつたが、その頃は餘り私と言葉を交す機會がなかつた。そのうちに伯母の旦那の世話で、彼の關係してゐる會社へ入つたといふやうな噂を聞いたが、私が宗右衛門町を去る時分には、彼も伯母の家と一所にどこかへ越して行つた。それから六七年後、大阪の××新聞社の社員になつて、俳句に凝つてゐるといふ彼に會つた時まで、私は彼の消息を聞かなかつた。

表の油屋の作哉は一番早くゐなくなつた。私は先にもいつたやうに、この町内での腕白大將を一番恐れてゐたので、

彼とは長い間交際する機會を持たなかつた。が、或日ふとした機會から彼の弟の作三郎と知るやうになつて、それから彼とも物をいふやうになつた。背は高くなつたが、身體が丸々と肉づいてゐて、力があつたのと、たしか彼は手品と同じ年だつたと思ふが、私たちの中で一番年上だつたので、いつとなく仲間うちの大將に仰がれてゐたらしいのだが、言葉を交して見ると案外音無しい男らしかつた。どつちかといふと、彼の弟の作三郎の方が腕白で、彼が威光を借りて亂暴をするので、一口に油屋の兄弟として、近所の親たちにも子供たちにも恐れられてゐたらしいのである。だが、私はこの作藏とは物をいひ合ふやうになつてから一ケ月もしないうちに別れてしまつた。彼とだけはどんな風にして別れたかを覺えてゐる。それは、彼の家は大變な金光教の信者だつた。もつとも彼の家に限らず、大阪の色町にはこの信者が最も多いやうであるが、その金光教の教會に、彼は近いうちに預けられることになつた。と私と附合ひ初めの頃からいつてゐた。金神さんの家（教會のこと）へ行つたら、もう今までのやうに遊べない、一生金神さんの家にゐなければならぬかも知れない、とその時彼は附け足していつた。その代り中學校でも大學校へでもやつてもらへる、しかしそこへ入ると、朝は毎日夜明け頃に起きて、金神さんにお參りをして、それから學校へ行く前に一時間勉强して、學校から歸つて來ると金神さんの御殿の掃除をして、それから晩まで勉强して、晩寢る前に又金神さんにお參りをしなければならぬ。だから遊ぶ間などはちつともない、が、金神さんの家にゐたら病氣になることはないし、大きくなつてからも貧乏になることはないし、始終神さんのお蔭をいたゞける、——と彼は多分彼自身が母親からいひ聞かされた通りの話を私たちにして聞かせた。そして間もなく、彼は言つた通り金光教の教會の何とか生になつて行つたらしいのである。

間もなく中學生の洋服を着て、作藏が學校から歸り途に寄つたといつて宗右衛門町に現はれたことがある。私は往來で會つて、彼がそれだけのことを得意さうにいふのを聞いて、それ切り別れてしまつた。その翌年私は彼と同じ中學に

入つたのであるが、その時に彼は中學校にゐなかつた。伯父に聞くと、とつくの前に學校を止めて、叔父の店に奉公にやられたとのことだつた。が、どういふきつかけだつたか、彼は中學を卒業する前から、この作藏と通信をするやうになつた。その頃は彼の父親が色んな事業に手出しをして失敗したとかで、内地の家をたゝいて番頭の斧松といふ男に讓つて、一家を擧げて朝鮮に移住してゐた。私が作藏と手紙を往復したのは即ち朝鮮との間であつた。別に用事があつたではなかつた。が、用事もないのにどうしてそんなに頻りに手紙を往復してゐたのかといふと、二人とも文學が好きになつてゐることを見出したからである。あの作藏が文學好きにならうとは思はなかつた。

同じ表通の雜貨店の『合の子』の武山は、先にいつたやうに、高等小學校を出ると、私の伯父の世話で、彼の同業者の家へ中小僧になつて行つた。中々しつかり者で、よく働くのでだん〳〵重く用ひられるやうになつて、間もなく番頭格になるだらうといふやうな噂を伯父から聞いたことがある。が、番頭になつてから女のことで何か間違ひを起してしくじつたといふやうな話もその後聞いたが、その他のことは知らない。實をいふと、私はそれ等の幼な友達の中では、大人になつてからの消息は宇三吉よりも誰よりも作藏について一番よく知つてゐる。何故といつて、却つて子供の頃は彼と親しくする機會を持たなかつたが、彼の朝鮮時代から、彼も亦文學に志を立てゝ、苦學するために東京に出て來たので、東京での學生時代に私は彼と親しくしたやうな關係で、今だに彼とは交際をつゞけてゐるからである。が、こゝでは彼が主題ではないから、その事は省くが、肝腎の宇三吉に就いては、先にいつたやうに私は少年時代に親しくしたゞけで、彼が宗右衛門町を去つてからはどういふ風に彼の立身の生涯を始めたか殆ど聞くところがなかつた。それに彼と最も親しかつた頃は互に年の行かない頃のことだから、殆どまとまつた記憶といふものが浮んで來ない。だが、誰よりも宇三吉といふ存在を考へる時、私には宗右衛門町の十軒路地の思出が最も生き生きと蘇みがへつて來るのである。

私は十五六歳にもなる頃まで、祖母と一所に寢てゐた。それはもつとも伯父の家が狹くて、間數が少なかつた關係からでもあるが、私はいつも家にゐる時は、向ひの宇三吉と口笛で物をいひ合ふのに都合のいゝ、表の二疊の部屋にゐるやうにしてゐた、そして夜になると、そこで祖母と二人で寢たのである。その部屋の外は格子戸一重で、路地の敷石の道になつてゐたから、冬の晩など、夜の商賣の人たちばかりの部落であつたから、十二時一時になつても、から〳〵と人の歩く下駄の音が、枕元のすぐ傍を通つて行くのかと思はれる程近くに聞えた。路地の門が締つてからも、宇三吉の所謂『お花』に行つて歸つて來る近所の藝者たちとか、その附添の箱屋とか、遲く出先から歸つて來る旦那とかゞ、絶えず歸つて來た。すると彼等はそれ〳〵自分の家の鈴に通じてゐる路地の入口の札を引くのであるが、そこできいきいと多くの針金の擦れ合ふ音、やつとしてからどこかの家で鳴る鈴の音、起きて路地の入口まで戸を開けに行く人の足音、それ等の人々が自分たちの家へかへつて行く氣配などに、私は子供のくせによく目を醒まされた。祖母は私の頭を撫でながら、「お寢、お寢、お前、子供があんな音に耳を立てるもんやない、」そして後は半分獨言のやうに「これは全く子供には惡い所や。可哀さうに、父親がゐたらこんな所に置いときはしないやらうが、」といつた。初めは私はこの祖母のくり言を聞くと、悲しくなつた。が、終には餘り度々なので反感を持つやうになつた。或晩、私はこの祖母の繰言を片方の耳で聞きながら、ふと宇三吉はもう寢たらうか、と考へた。そこで思ひついてわざ〳〵寢床を拔け出して、したくないのに小便に立つた歸りに、格子の傍に寄つて、例の口笛の合圖で、

「宇三ちやん！」と試みに吹いて見た。返事がなかつたので、無論もう寢てゐる時刻だから、無駄だらうとは思つたが、もう一度吹いて見ると、案外にも、

「何だす？」と宇三吉の巧みな口笛の返事が向うから聞えた。彼もすぐ表の間に寢てゐると見えて、口笛はすぐ近くか

ら起つた。

私は彼の名を口笛で呼びかけて見たものゝ、若しや間違したらと思つたので、一寸きまり悪くて、

「まだ起きてなはつたの！」と吹いた。

「えゝ。あんたも起きてなはつたの？」

「えゝ、あんたもう寝床に入つてなはつたの？」と私は稍々複雑な言葉なので、思はず力を込めて吹いた。すると、その時相手が寝床の中から首を持ち上げて、

「まあ、今頃何だす、口笛を吹いたりして……」と私を叱つた。無論それは路地を隔てた宇三吉の家までも聞えたに違ひなかつた。

「おはゝゝゝゝ」と宇三吉はひやかすやうに口笛で笑つた。そこで、

「おやすみ、」と私は口笛で挨拶した。

「おやすみ、」と宇三吉も口笛で應じた。そして元の沈黙にかへつた。……

宇三吉のことは幾ら思ひ返さうとしてもこんなことと切りである。彼とはその後、私が東京に出て、その頃東京にも初めて銀座の邊に一二軒出來初めたカフエーで會つたのが、宗右衛門町以來だつた。その時私は二十一二歳で怠け者の大學生だつたので、その時分銀座の或裏町に開店したカフエー・サン・パウロへ私は殆ど一晩おき位に出かけて行つた。すると、丁度そこへ行き初めて四五度目の或晩のことだつた。こちらの客席の方から見ると、珈琲沸しから珈琲をついだり、後の棚から洋酒の瓶を出したりする台の左の端のところに、別に何の役もしないで、ぽかんと給仕たちの仕事を見たり、こちらの客席の方を眺めたりしてゐる男があつた。給仕の服に似て、それよりも少し上等かと思はれるやうな詰襟の服

を着てゐた。場所が不思議なので、私は幾度もその男の顔を見直した末に、思ひ切つて此方の席から私自身を認めさせる爲に立上つた。果して彼の方でも私を見るとにツと笑つた。それが山本宇三吉だつたのだ。彼は私の坐つてゐる卓子の方へ近づいて來た。

「珍しい所でお目にかゝります、皆さんお變りはありませんか、」といつた。それがすつかり大人の調子で、子供の時分のやうな人懐つこいアクセントはなくなつて、どちらかといふと太い聲になつてゐた。

「やあ、暫くですね、こゝにゐるんですか、僕は殆ど毎晩來てるんですよ。君はこの店に初からゐるんですか？」と私は子供の時分の親しみを取り返すつもりで、わざと快活な調子でいつた。

「え、初めから居りますんです、」と彼は先と同じ改まつた調子で答へた。彼はそれから給仕を呼んで色んな菓子を命じたり、「お酒を何か？」と私に聞いて、私がそれを飲まないと答へると、改めて珈琲をいひつけたりして、もてなしてくれた。そして歸りに菓子の土産をくれたりした。その時彼とどんな話をしたか覺えてゐないが、私の方がまだ少年時代のつゞきのやうなつもりでゐたのに、彼が詰襟の服などを着てゐながら、言葉や物腰が大人大人してゐるので少し勝手が違つたやうな氣がした。彼はいつの間にそんな事を覺えたのか、珈琲についての中々詳しい話をしたり、ことに依つたら一二年のうちにブラジルへ行きたいといつたりしたことを覺えてゐる。そして、その後も二三度同じ家で彼と會つた。が、それから彼は半年ばかりそこにゐて、暫くどこかへ行つたか、見なかつたと思ふと、一年程後同じサン・パウロといふ名のカフエーが神田に出來た時、私はそこで又彼を見出した。神田のカフエーでは彼は先の時より少しいゝ位置にゐるらしかつた。そこで二度ばかり會つた時、彼はどうも經營がまづいのか、銀座の店もこちらの店も收支償ふ程度にさへ行かないなどと大人らしい調子でいつてこぼしてゐた。そして、そこでは三ケ月ばかり姿を見せた切りで、す

くにゐなくてしまつた。

それから三四年ばかり後のことだつた。私はもう學校を止めて、小さな出版社に勤めてゐた時で、その出版社の用事で大阪へ出かけたことがあつた。金を借りに行つたのだつたか、賣れない本の捌け口を見つけに行つたのだつたか、兎に角餘りはえない用事だつた。そして私自身ヒステリイの女に惱まされたり、極度の貧乏に苦んだりしてゐた時だつた。その時の用向は私に到底不適當なもので、成功する見込はなかつたのだが、何といふこともなく、たとへ一日でも二日でも息抜きに旅に出たかつたのと、行先が大阪といふので、故郷の懐しい氣持もあつて、無理に出版社の主人に頼んで出かけたのだ。だが、思つた通り用事は成功しなかつた。私は東京へ歸るためにすご〳〵と梅田の停車場の待合室に入つて來た。そんなに困つてゐても、私は妙な見栄坊で、汽車は二等に乗りたかつたので、二等待合室に入つて行つたのだつたが、待合室に入つて行くと、矢張り懐中のことが考へられて、二等の切符を買つたら東京に歸つて殆ど金が殘らないと思ふと、急に惜しくなつた。そこでたつた一晩のことだから三等にしようかと思つてゐるところへ、突然私の肩を叩いたものがあつた。それは中學の同窓で、どこかの會社員になつてゐる友人だつた。矢張り東京へ行くといふので、その男は時計を見ながら、しかしまだ少し時間があるから一杯飲まうといつて、驛の前のカフエーへ私を連れて行つた。私は飲めなかつたが、久しぶりの友達なのでいろ〳〵雑談をして時を潰した。だが、友達と話しながら、私の最も氣にかゝつたのは汽車の問題だつた。といふのは、その男と一所に行かうと約束したが、さうすると、やつぱり二等に乗らなければならない。私は心の中で幾度も決心したり、それを飜したりした。が、夜の長い汽車の中で、却つてこの位の程度の友達があつては退屈すると思つたので、急に用事を思ひついたやうな振をして、一汽車遅れるから、と彼に斷りをいつた。相手は案外淡白に、さうか、では先に失敬しようといつて、カフエーを出たところで別れた。で、私は用事

ありげに停車場から反對の方へ歩いて行つて、時間が經つた時分に再び前の待合室に歸つて來た。二等のつもりだつたのだが、足は又自然前の三等室に來てゐた。先の汽車の客は立つた後で、次に出る汽車に乘る爲の客がもう大分集まつてゐる時だつた。私はしばらくその室内を眺めて、もう十分したら向ふの部屋に行つて二等客にならう、もう五分したら、いや、改札を始めてからでもいゝ、などと思ひ乍らぶら〳〵してゐた。すると、「やあ、」「やあ、」と聲をかけ合ふ友達を見つけた。それは前の東京のカフェー時代とはすつかり面目の變つた山本宇三吉だつた。元から長身の宇三吉は一層長身になつて、一層肥つたやうに思はれた。千三ツ屋の彼の父も背は高かつたが、痩せてゐた。彼は誰に似たのだらう、とふと考へる迄もなく、さうだ、彼の母親は背が高くて肥つてゐたと私は思ひ出した。彼は和服に袴を穿いてゐた。當時私自身はそんな貧乏たくせに二等切符を買はうとしてゐた位だから、二十四五歲だつたが、着物のよしあし等にすぐ目がつく性質だつた。そして私自身のは母の古着を仕立直した大島の羽織に、出版屋の主人のを借りた糸織だつた。それでどうやら人前をごまかしてゐるつもりだつたが、その時、宇三吉の高貴織か何かの仕立下しの服裝を見た時、忽ち引け目を感じた。

「やあ、東京へですか?」と宇三吉は元氣な聲でいつた。それはもう東京のカフェーの時のやうな、大人らしいとか、改まつたとかいふのでなく、ぴつたりと板についた大人の調子で、腹の底から出るやうな、太い聲だつた。「やあ、」と答へながら、私は自分の背が小さくなつたやうな氣がした。「あなたも、東京へ?」

「いゝえ、私は今××に居ります、」(××といふのは今度彼が多額納稅議員の互選資格者になつた縣の縣廳の所在地だ、)といひながら、彼は折鞄の中から大型の名刺を出して、「××で、例のサン・パウロをやつて居ります。お蔭樣で、カフエーとしては成功しまして……」そこで懷中から時計を出して見て「あの、東京なら、××まで御一所に參りませう、

もう改札をしてゐるやうですから……」

「さうですか、ちやあ、一所に、」と私は全く壓迫されてしまつて、ゐる。僕はまだ切符を買つてきませんから、ちよつと、」

といつて、切符賣場に駈けつけた。「もう仕様がない、やつぱり二等を買うか。」と思ひながら。

そして、大阪から××までの四時間ばかりの汽車の中で、私は宗右衛門町以來の長話を彼と交した。どんな話をしたかと復習するのは無駄だが、一つ驚いたことを聞いた。それは一ケ月程前に、あの十軒路地が火事のために全燒したといふ話である。火元は油屋の作藏の家ださうだ。作藏の一家は先にいつたやうに朝鮮へ引越してゐたから、彼の父から商賣を讓られた番頭の斧松の代になつてゐたのだ。斧松の家の揮發油の倉に火が入つて、見る見るうちに、油屋も、足袋屋も、雜貨店も、十軒路地も火に包まれてしまつて、二度目の宗右衛門町燒になつたといふのである。

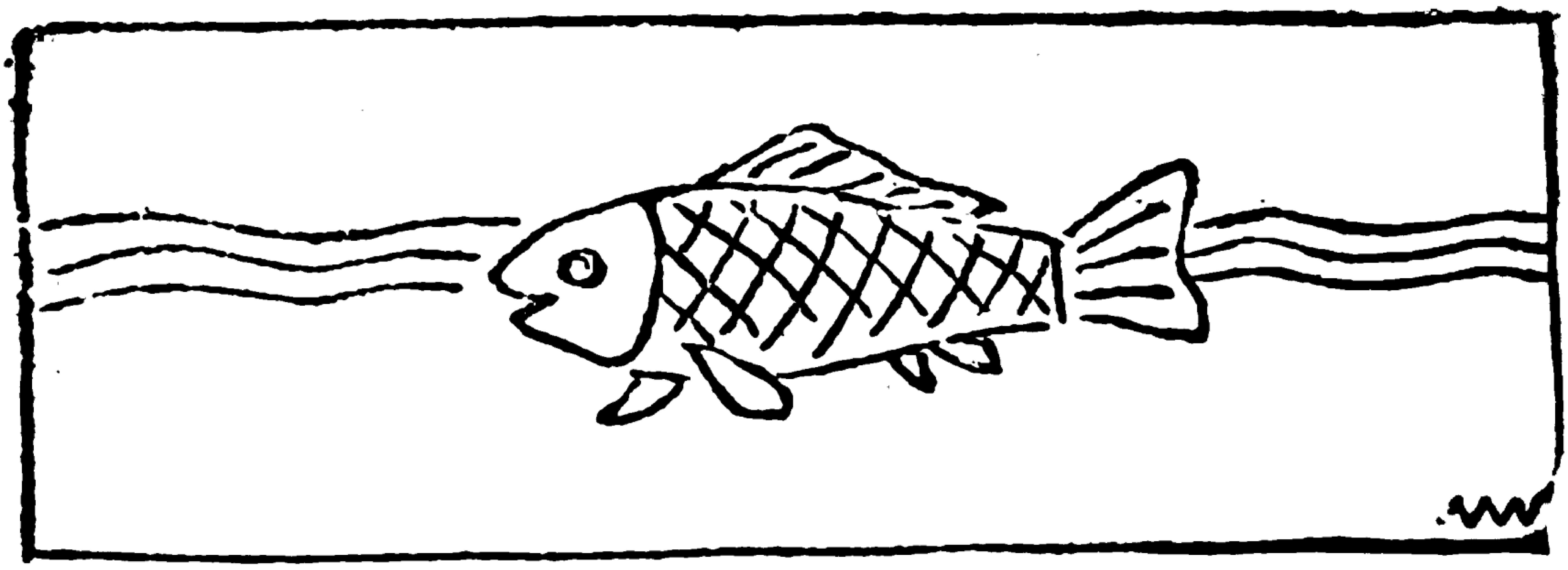
「それは大變なことでしたね。」と私はいつた。「だけどお宅の皆さんは……」といひかけて、私は自分がぼんやりしてゐて、私よりも早くあの十軒路地に別れた山本の家が、まだあそこにあつたかのやうな挨拶をしかゝつたので、「さうさう、お宅は無論大丈夫でせうが……」とあわてゝ言葉を濁しながら、「皆さんお達者ですか？」と先に一度聞いたことを聞いて見た。

「えゝ、有難う。」と宇三吉は相變らず動じない顏でいつた。「いづれ家のものを全部××の方へ引取らうかと思つてゐますのです。」

それを聞くと、私はいくらか成功してゐるんだらうが、この男何を途方もない法螺を吹くのかと思つた。サン・パウロの名を揭げてゐるカフエーは日本中に何幾つとかあるが、成功したのは自分の店が一軒だといふのは本當かも知れないが、あの二人の姉たちや、兩親や、片手の兄やを全部引取るといふのは、贅言だらうと心の中で思つた。それは私自身

が困つてゐる時なので尙反感を持つたのでもあつた。それ切り私は彼と會はないのであるが、それが先にいつたやうに、私が最近カフェーの思出話を或雜誌に書いた次手に、一寸彼のことを書いたのを、彼が見たのだらう、最後に汽車の中で彼と會つてから最早十年になるのであるから、多額納稅議員互選資格者になつたところを見ると、あの時の言葉は滿更の虛言ではなかつたと見えるのである。

此間大阪へ行つた時、元の町を步いて見たら、すつかり近所の樣子は變つてゐたが、矢張り元のところに、前よりはずつとハイカラになつた十軒路地が出來てゐた。今はどんな人たちが住んでゐるのだらう。



茶料理

野上彌生子

二人が三時に落ち合ふ筈になつてゐた東照宮下までは、曙町の家からは電車で十分とかゝらなかつた。併し依田は半時間前に家を出て、電車道に向ふ代りに大學の鐵門を入つた。十一月の下旬の、寒いけれども爽快な午後であつた。近く外國に行くことになつて、それまでに、專門の研究に關する著書を纏めようとして毎日書齋にこもつてゐる依田は、久しぶりに晴れ〲した空の下が歩いて見たかつたのである。と云ふよりは、その書齋から不意に彼を引つ張り出した珍しい人（もう十年以上も消息を知らなかつた久子から、依田は今朝突然逢ひ度いと云ふ電話を受け取つた）に就いて、またその誘引に應じた自分の態度に就いて、今一度はつきり考へて見ようとするには、妻子の目から自由な、靜かな場所の散歩が必要なのであつた。何もさう深い意味をつけて見るには及ばない。學生時代に知つてゐた人が、新聞で洋行の噂を聞いて、久しぶりに逢つて暇乞がし度いと云ふ。こちらも逢つて見てもいゝと思つた。たゞそれだけのことぢやないか。極めて自然な、罪のない話

だ。――今朝何度も胸を往來した考へ方に、最後はやつぱり落ちて行つた。不意な人の出現と、過去の急激な思ひ出で混亂した感情を整理するには、これは最も都合のよい考へ方であつた。併し彼の氣持がそれほど平淡で陰影のないものならば、何故電話の後であゝ落ちつきを失つたか。この頃は面倒臭がつて毎日あたらない髭を、それも昨日床屋に行つたばかりなのに、ヂレットの刃まで取り換へて何故あゝ丁寧に剃つたか。洗面場の柱鏡の中のまだ若い血色のいゝ顔が、何故常よりも一層滿足であつたか。何故ネクタイの擇り好みをしたり、いゝ方の洋服を着たりしたか。――彼は誰かに詰問されたかのやうにどぎまぎして、振り廻してゐたステッキの手を止めて立ち留り、俯向けた顔をあげてあたりを見まはした。一人の肥つた看護婦が、肘の上までむき出しにした裸かの腕を、くわつとした初冬の射光に輝やかしながら向ふから歩いて來た。左手の運動場の中では、テニスの球の音が調子よく續いてゐる。これだけだ。しーんとしてゐる。勿論餘計なことを尋ねたり、乃至あとをつけたりする人は何處にも見當らない。兎に角。彼はまた歩きながら考へる。二人は最後まで潔白であつたのだから、何時どんなところで逢つたつて決して疚ましい筈はない。實際、愛すると云ふ言葉さへ口に出しはしなかつたのだ。――

地方の高等學校をすまして大學に來た時、依田は保證人の紹介で小石川の或る官吏の年取つた未亡人の家へ下宿した。ちんまりした持家と恩給で生活に不自由はないのだが、女中だけで不用心だから、確かな學生に限つて一人世話をすると云ふその家は、最初窮屈であり、未亡人の勿體ぶつた風も氣に食はなかつた。併し馴れて見ると、幾らかの窮屈は普通の下宿の亂雜よりは彼の性に合つたし、未亡人の態度も惡氣のない上品ぶりに過ぎないことが分つた。依田はその離室の六疊にすつかり落ちついて、卒業するまでゐてもいゝと思つた。若し無事に此處で工學士になれてゐたら、十年後の今日、細君に默つて出掛けるやうな用事も發生しなかつたかも知れなかつた。が、話は順序を追はなければなら

ない。

二年の一學期の時、彼は關西地方に研究旅行に出て、一ヶ月間ばかり留守をした。風物の推移の著しい頃で、立つ時にはまだ淡く煙つてゐた屋敷町の木立が歸つて見ると深々とした青葉であつた。もう夏だと思ひながら依田は暫くぶりで馴れた家の門をくゞつた。彼はいつも玄關からは出入りしなかつた。これは同居人の卑下ではなく、毎日土間のタタキを鏡のやうに洗はせなければ承知しない、而してまたそれを汚されるのを何より厭がる未亡人の潔癖を尊重したのである。彼自身の勝手から云つても、わざ〳〵其處を通つて、出入の度に茶の間の年寄の馬鹿丁寧な挨拶に惱まされ度くなかつた。で、その時も臺所の横から裏庭に廻らうとして、雜多な植込の間を部屋の側まで來ると、彼は思はず立ち留まつた。離室と直角になつた座敷の縁側に、一人のネルを着た娘が長い脚を斜に庭に向けて投げ出し、後の障子の桟に凭りかゝつて、人の來たのも知らず俯向いて熱心に編みものをしてゐる。これが依田のはじめて見た久子であつた。一本のゑにしだが、彼女の小さい、先細りの素足の向ふに黄色い花を群がらして立つてゐたのを、今でもはつきり思ひ出すことが出來る。

明けの日、彼は未亡人に頼まれて、今までの離室を久子に讓るために自分は二階に移つた。彼女が未亡人の姪であること、父親の轉任で一家は急に朝鮮へ立つたが、久子だけ學校の都合で伯母の許に殘つたのだと云ふ事情も知つた。同時に非常に婉曲にほのめかされたのではあるが、彼はこの家には長くゐられないこと、二階も今までの義理で、適當な移轉先がきまるまでの足溜りに提供されたに過ぎないことが分つた。依田は部屋探しを始めた。友達にも頼んだ。その癖よさゝうな處があると云はれると當惑した。彼はわざと直ぐには見に行かなかつた。後れて行つてもう塞つてゐると遁れた氣がした。併しこの感情の底に横はつてゐるものを覗いて見る勇氣はなかつた。彼に取つてはそれは未知な、新し

い、幾らかの恐怖を作つたものであつた。

久子が來てから未亡人はますます勿體ぶつて、而してますます鄭重になつた。依田は下宿人と云ふよりは、大事な預かり息子かなにかのやうに待遇された。これは巧妙な垣根であつた。鄭重にされゝばされるほど彼は階下の生活から隔てられ、寄りつき場がなかつた。たゞ一週に一度か二度代數か英語に就いて久子が教はり度い事のある時に限つて、女中が慇懃な切り口上で呼びに來る。依田は降りて行く。勿論離室ではなく、茶の間である。大抵夜で、明るい電燈の下には不斷置いてある小さい圓卓の代りに、桑材の廣いテーブルが出てゐる。が、久子は見えないで、未亡人だけ横の長火鉢の傍にきちんと坐つて彼を迎へ、餘計な暇潰しをさせることを詫びながら、それからやつと久子を呼ぶ。久子は屹度直ぐには來ない。時に依ると十分位も待たせてから、むつちりした風で部屋に入つて來て、默つてお辭儀を一つして、テーブルの下手に坐る。一體に久子は依田に對してはいつも無愛想であつた。めつたに顏を合せることもないが、たまに廊下で逢つたり、學校の行き歸りに出喰はしたりしても、にこりともしない。また決して恥かしがつた樣子を見せない。白粉つ氣のない、淺黑い、頬だけに新鮮な血の色の透いた棗形の小さい顏をまつ直ぐにし、長い光澤のある黑瞳で相手の顏を見据えながら、たじろがず進んで來て、輕く默禮して行つてしまふ。その度に依田は負けた氣がした。生意氣だと思つた。それでゐて本氣に怒れなかつたばかりでなく、彼はその素つ氣なさに強い魅力を感じてゐた。彼女の用事で呼び下ろされるのが樂しかつた。

併し質問はいつも三十分とはかゝらない。久子は聞き度いだけのことをさつさと聞いてしまふと、

『ありがと』

とたつた一言、これもちつとも有り難がつてゐないらしい調子で云ひ、書物を片づけはじめる。未亡人がお茶を入れ

ろからと云つても、

『澤山。』

と云つてその儘行つてしまふ。

『あの通りですから。』

未亡人は姪の我儘を取りなしながら、併しその態度が氣に入らないのではないらしく、上機嫌で依田のためにお茶を注いだり、食籠から取つて置きの菓子を出して勸めたりする。久子が未亡人の弟の大事な後取り娘であること、母親が逢つてゐるのでちよつと面倒なこと、でもその方の近い血縁で、今北海道の大學にゐる青年が多分養子に極まるらしいから、さうなれば萬事旨く收まるだらうと云ふ内輪話をして聞かせたのは、或る晩の斯うした場合であつた。依田は何かに警告されたのを感じた。いよ〳〵引越さうと決心した。これ以上ぐづ〳〵してゐるのは屈辱であつた。殊にどんな屈辱を忍んでもこの家にゐたいと思ふほど久子を愛してゐる譯では決してない。依田はさう信じようとした。容易にそんな氣になれた。さうだ、この次何か教へてくれと云つて來ても、敢然と拒絶してやる。而してあんな高慢ちきな娘のことなぞ、何んとも思つてはゐないと云ふことを、未亡人にも久子自身にもはつきり思ひ知らした上で、引つ越してやる。この計畫は、彼の鬱した重い心を反撥的に勇氣づけた。彼は待つた。三四日たつと、女中がいつもの通りまた迎へに來た。その晩は彼も自分の勉強が忙しかつたし、それが立派に拒絶の口實になつたに拘はらず、矢張り斷れなかつた。依田は自己厭惡と弱い意志に對する憤りで、常よりは亂暴に階段を驅け下りた。

茶の間には今までになく久子がひとり待つてゐた。未亡人は來客らしく、隣りの座敷に灯がついて話聲がしてゐた。間の唐紙は二枚とももう旅乘であつたが、庭に近くゐると見えて、姿は見えなかつた。この稀有な狀況は、どんな氣持

で二階から下りて來たにしろ、依田には嬉しくなくはなかつた。それだけ忌々しかつたので、今夜は非常に忙しいから簡單にして呉れと云ふ意味を最初にきつぱり斷つた。斯んな調子で依田が久子に應待したことは今までなかつた。彼はせめてこれで、氣弱く破棄した計畫の鬱憤を償はうとしたのであつた。

久子はぢろりと彼の顏を眺めた。が、その言葉には直接答へず、默つて英作文の書いてある雜記帳をテーブルの上に擴げた。依田にはそれが圖々しく感じられた。それに作文はいつになく間違だらけで、直すには和英を引いたりしなければならないので、面倒臭くなり、眉をよせた。餘り分りきつた間違を見つけると、短い惡口を云つた。未亡人が側にゐないのが、彼を自由にした點もあつたし、また惡口でも云はなければ、珍らしく二人つきりでおかれた、一尺と隔たつてゐない相手から受け取る息苦しい感に堪へられなかつたのであつた。六月下旬の蒸暑い晩で、久子はもう浴衣を來て赤い帶をしめてゐた。依田はなるたけ彼女の方を見ないやうにして、作文を直した。併し久子は相變らず落着き拂つて、幾ら直されても惡口を云はれてもすましてゐた。その平氣さには何處か人ごとのやうなよそ〳〵しささへあつた。十題近くの問題がやつとすむと、久子は代數の方も十八番と二十一番と二十二番が分らないと云ひ出した。

「斯んなものはなんでもないぢやありませんか。」

依田は少しいら〳〵して云つた。實際やさしくもあつたが、それよりもそれ以上其處に坐らされてゐるのが辛くなつて來たのである。一題位で逃げ出すつもりで十八番から説明しかけたところへ、未亡人の聲で久子を呼んだ。久子は立つて行つた。依田は説明を中止した。離室へ何か取りにやらされた樣子でちよつと歸つて來なかつた。ぢれた依田は、待つてゐる間に一人でやつてしまはうと思ひ、手を伸ばして、久子が擴げたまゝにしてある雜記帳を取らうとすると、紙がめくれて、同じ代數の綺麗に運算したページが現はれた。（久子が依田に見て貰ふ時の帳面は厚いノートで、代數も英

[illegible]出來なかつた）よく見ると驚いたことには、出來ない筈の十八番の問題が、其處では立派に解いてあり、なほ調べて行くと他の二十一番も一番も同じく出來て、完全な式と解答を並べてあつた。一體これはどうしたのだ――不快な疑惑の底から、むらむらとした怒が湧き立つた。依田はすべてを久子の意地の惡い惡戯にした。彼の忙がしいのを知つて、わざと無駄な勞力を費やさせて、面白がつてからかつてゐるのだと思つた。先刻英作文を直してゐる間の、しらじらしい、無感動な顏つきが、小憎く思ひ浮べられた。あの作文のひどい間違ひだつて今では故意にしたとしか考へられなくなつた。同時に英作文の方にも同じ惡企みが潜んでゐさうな氣がしたので、熱心に捲つて見た。若し發見したら、その二つの場所をテーブルの上に擴げておいて、默つて二階に歸つてしまはうと思つた。併しちよつと見つからなかつた。先に行くと帳面は段々亂雜になつて、手紙の下書きがあるかと思ふと英語の單語が書き取つてあり、同じ詩らしいものゝ拔萃に交つて、數字が滅茶苦茶に護符のやうに書き並べてある。その解譯と見える分らない文句が書き散らしてある。或る場所には學校友達の似顏らしい女學生風の頭部が三つ並んで描かれて、その各の頭に一羽づつ小鳥がとまつてゐる。上に Noisy Chickadees と書いてある。多分この三人が級の代表的お饒舌家なのだと思ふと、我ともなくほゝ笑まれた。一體これ等のいたづら書きは、率直で、無邪氣で、平生久子の素つ氣ない態度から受け取るものとは、別人のやうな可愛らしい親しみを依田に抱かせた。彼は最初の怒をもう持ち續けることは出來なくなつた。何の目的でこの帳面を覗きかけたかさへ忘れ、ぼんやりした樂しさと、同時に新たに現はれた惡氣のない好奇心でページを翻してゐるうちに、不圖或るページの或るものが彼の視線を引きつけた。それは花と唐草風の葉で丹念にピラミツト形を編みあげたもので、ちよつと見にはたゞそれだけの、幼稚なデザインに過ぎないやうであるが、注意すると單に花と唐草ばかりではなく、中央にアルフアベツトで何か書いてあつた。而して唐草の葉や莖や花瓣に紛れるやうに巧妙に模様化されてあつた

に拘らず、依田はその四つの自分に最も親しい文字を見逃しはしなかつた。と、心臓の血が一時に沸騰して身體ぢうに迸つた。彼はまつ赤になり、震へ、きら／＼する眼で、雜記帳を掴んで電燈の球にくつつけた。その飾り枠に飾られた幸福な文字が、自分の名前に相違ないか、今一度はつきり確かめたのであつた。丁度その時久子が部屋に歸つて來た。而して彼の持つてゐるものを、一目見ると共に、彼女の顏は極度に狼狽を現はし怖ろしい勢で彼の手に飛びかゝつた。いつもの依田であつたならば、この權幕に喫驚して、盜み見の罪を恥ぢながら逃げ出したであらう。併し彼女の秘密を知つたことが、殊に名前を知つたのが、彼を勝利者の氣持ちにした。平生の落着を失つて、泣きさうにあせつてゐる相手の樣子も、氣味よく面白かつた。で、依田は素早く身を捧はすと立ち上つて、雜記帳を握つた手を出來るだけ高く上に突き上げた。久子は縋り、伸び上つてなほ奪はうとした。二人は爭つた。而かもどちらも隣の部屋を忘れなかつたので、一言も聲を立てなかつた。終にどうしても取り戻せないのが分つた時、久子は手を離し、口惜しさうな怒つた顏で彼を睨んで突つ立つた。何か云ひ度いやうに脣を動かした。が、何んにも云へないじれつたさ、忌々しさ、すべての不自然な、壓しゆがめられた感情が、不意に彼女を夢中にした。久子は小猫のやうに今一度依田に飛びかゝつたと思ふと、行きなり雜記帳を掴んだ彼の右の手首に噛みついた。

それから十日あまりの間、依田は他のことは何んにも考へなかつた。その一夜は彼に取つては夢のやうな樂しさであると共に、變に氣懸りな謎であつた。あの不都合な代數の奸策と、あれほど丹念に飾り慈しまれてゐた自分の名前の間に、何の關係があつたか。また久子が自分をひそかに愛してゐたとするならば、何故いつもあんな失敬な態度を示したか。解くことが出來なかつた。――いや、假に愛してゐたとしても、もうお仕舞になつたのだ、と彼は考へた。あの晩雜記帳の秘密を發かれたことが、彼女をすつかり怒らして仕舞つたのだ。――實際久子は以後決して依田に教はらうと

したかつた。のみならず密符にかけた。どうしても顔を合せなければならなかつた場合は、前の無關心たつんとした様子の代りに、明かに敵意の籠もつた態度で、丁度怒つて噛みついたあの時と同じ眼つきで彼を見た。依田はその度に興ひ、悩んだ。若し彼女の感情が何かで解けるなら、どんなことでもしたであらう。彼にせめてその氣持だけも通じたかつたが、機會がなかつた。手紙を書く？そんなことは當時の依田には考へられもしないことであつた。どうかすると、ピラミッドの中の名前を自分のだと思つたのは怖ろしい妄想で、あはてて見誤つたのだと云ふ氣がする。誰か似寄つた他の名前であつたに相違ない。でなければ、久子がいつまでも眞劍に怒つてゐる筈はない。――この考へ方は絶望的であつたが、矛盾がないだけ彼の心を悲しく慄へ、諦めに導く便りになつた。殊に母方の大學生との縁組の話が嘘でなかつたら、勿論未亡人がそんな嘘を吐く筈はないから、久子は半分夫の極まつた女だ。それを知つてなほ積極的に感情を働かせることは罪でないまでも、それに近い無節制な行爲である。それともどんな罪を犯し、どんな無茶をしても久子を得なければならないほど自分は彼女を戀してゐるのだらうか。その獲得に伴つて生ずべき一切の險しい責任、他の運命に喰ひ入つたものが當然身に負ふべき刺を悔いなく受け得るだらうか。――其處まで考へて彼はふと自分で恥かしくなつた。斯んなことを考へてゐるのを久子が聞いたら、大きなお世話だと怒るだらう。誰をあてにそんな戀人ぶつた眞似をする積りだと嘲笑ふだらう。依田は怒られることには我慢出來ても、嘲笑には堪へられない男であつた。彼はもう餘計なことは考へまいと決心した。この一二ケ月自分は最も愚かな役目を演じてゐた。而して頭を惡くし、勉強を怠り、女々しい厭な人間になつてしまつたと思つた。彼は以前の快活と平靜が取り戻したかつた。學校もあと一年きりだ。する事は山の如くある。この際すべての迷妄から脫して、落ちついて眠り、靜かな氣持で秩序正しい勉強生活に入ることは何より必要であつた。それにはもう一日も此處にゐてはならないのだと彼は思つた。併し夏休までよそへ引つ

越す間もなかつたので、彼はすぐ國に歸らうと決心した。未亡人にもその旨を傳へた。未亡人は相變らず慇懃に、併し確かに安心したらしい様子で彼の通知を受け取ると、机や本箱は九月まで預からうと云つた。依田はそれも斷つた方がいゝのだと知つてゐたが、かすかな未練が決心を挫いた。併し、いつでも運び出されるやうに片附け空いた押入に仕舞ひ込んだので、いよ／＼明日の朝立つとなつた夕方には、八疊の二階は鞄と縛つた行李がころがつてゐるだけの、がらんとした空部屋になつた。何もかも整理された寂しさと空虚さに於て、その部屋はそのまゝ彼の心であつた。彼は行李に腰掛け、廊下の手摺に黒々とせまつた一本の高い女松の梢越しに、半分暮れながら、底に夕映の明るみを湛えた葡萄色の空を眺めてゐた。星がたつた一つ出てゐる。風のない澱んだ空氣には、打水のあとの土の香と、蚊遣線香の煙のかすかな匂がしてゐた。追はれた蚊の鳴き聲が、遠い河の瀬のやうに響く。垣の前を子供らしい下手なハーモニカが通つた。階下はひつそりしてゐる。よかつたら一時間ばかり留守を頼み度いと云つて、未亡人は久子と女中を連れて先刻出掛けたのであつた。今宵珍らしく茶の間で晩飯を一緒に食べた時の未亡人の話ぶりで、土産物かなにかを買ひに行つたのだと推察された。本統は彼も出て來たかつたのであるが、先に頼まれて斷れなかつたし、今夜きりの部屋にひとりぢつとしてゐ度い氣持もあつた。さうだ。いよ／＼今夜きりだ。それでこの二ケ月間の苦しい夢も終るのだ。――彼は行李から立ちたり、いつも考へごとをする時の癖で、兩肘を張り、組合せた掌で後頭部を押へながら、部屋の中を行つたり來たりした。それにしても今夜の久子の風はなんだ。とうとう最後まで誰とも口を聞かなかつた。――彼は食事の間の光景をまざ／＼と思ひ出す。――あの様子は僕に怒つてゐると共に、未亡人にも怒つてゐるとしか思へない。一體何にさう肝癪を起すのだ。僕と一緒に食事をするのが氣に入らなかつたのなら、すんだら直ぐ部屋に歸ればいゝではないか。今夜に限つていつまでも坐り込んで、それであんな噛みつきさうな眼をして默り込んでゐた氣が知れない。兎に角

恢ろしく我儘な娘なのだ。あんな娘を愛するのは美しい料を愛するやうなものだ。――彼はその危險を直ぐに脱け出したと信じた。もう大丈夫だ。本統はあんなたちの娘が決して好きではない。彼は自分自身に言ひ出すやうにさう考へた。併しその下から今までも時々現はれた、その度に危く押しつけてゐた一つの誘惑が、不意に倍加された力で迫るのを感じた。それは離室が覗いて見度いと云ふことであつた。久子に讓り渡して以來、一遍も入つて見る機會がなかつたから、机の位置ぐらゐ知つてゐたが、委しい樣子は分らなかつた。自分のもとの親しい部屋が、彼女の娘らしい持物や、可愛い裝飾品や、その他男の身のまはりには決して見出されない特殊な美しいもので、どう變つてゐるかを思ひやるのは彼の樂しい想像であつた。今なら想像したものを實際に見られるのだ。と云ふ氣が強くした。彼等が出てからまだ三十分とはたつてゐない。少くとももう三十分彼はこの家でひとりつきりだ。階下におりて十分ゆつくり見度いものを見ることが出來る。若しその間に皆んなが歸つたとしても、急いで茶の間の廊下まで來てゐれば、便所にでもおりたとしか思はれないであらう。――明け放した、階段の見えてゐる入口に近づく度に依田は怖くなつた。その儘危く下に向きさうになる足を、僅かに動いてゐる意志で食ひ留め、行き詰まつた檻の中の獸のやうに引き返した。併し最後には彼は大膽になつてゐた。ぐづぐづしてゐる間に、一氣に駈け下りて仕舞へばいゝのだと思つた。彼は窓際から拵へた落ちつきでまつ直に踊り場に出て、電燈のスイッチを捻つた。

その時であつた。表のくゞりのベルがけたゝましく鳴り、誰か半分走つてゐるやうな足音が前庭の敷石の上を入つて來たかと思ふと、玄關の戸が開いた。依田はベルを聞いた時には未亡人が歸つたのだと思つて、周章て階段のつけたばかりの電燈を消して部屋に歸つた。時機を失した殘念さよりも、救はれたやうな心安さを感じた。併し足音と玄關の開け方で、歸つたのは久子ひとりだと分つた。何故またひとり先に歸つたのだらう。――この怪しみは直ぐその後から激

しい驚愕に變じた、久子は玄關から離室の方へ行く代りに階段を上つて來るらしい。歸つた時の氣忙しげな樣子とは打つて變つた、注意深い靜かな足どりで、灯もつけないで上つて來る。留守をして貰つた挨拶のためか？平生の彼女から考へて、さうだとは信じられなかつた。では何の用事があるのだらう。あれほど露骨な敵意を示してゐる自分の部屋へ、而かも今まで決して來たこともない久子が來ようとしてゐる。——疑と驚と、漠然とした期待で、うす暗い階段の方を見詰め、棒のやうに突つ立つた依田の眼の前に、久子の白い浴衣を着た姿が、頭部から肩、肩から胸と順々にせり上つた。久子は俯向いてゐた。併し階段を上りきると、顏をあげ、依田の方へ靜かな一瞥を投げてから、その儘まつ直ぐに進んで來た。二人は部屋のまん中に三尺と離れないで向ひ合つた。

『九月にはもう歸つてゐらつしやらないの』

興奮を押へつけた、低い、かすれ聲で久子は口を切つた。その調子が依田の驚を二倍にした。彼は大きく瞬きをし、自分の前に立つてゐるのが本統に久子であるか信じきれないやうに、相手を眺めた。左から受けた電燈のせゐで、半面が青白く、半面が濃い陰になつた久子の顏は、優しい言葉つきとは反對に硬ばつて震え、一つの强いこれまで見たことのない感情で燃え上つてゐた。あの雜記帳の中の名前が他の人のではなかつたのを依田ははじめて信じた。

『奧さんが何か云ひましたか。』

彼は夢中で口を動かした。

『いゝえ、何んにも。』

『ぢや、どうしてそんなことを云ふのです。』

『私があんまりやんちやをしたから、怒つていらつしやらないかと思つて。』

『馬鹿なこと。』

さう云つた時、實際不思議にも二ケ月間依田を悩まし續けた苦痛や不快や寂寥さ、嫉妬を制しないまでも、一時に手品のやうに頭から去つてゐた。

『ぢや矢張りいらつしやるのね。』

『來ますとも。』

彼は誓ふやうに云つた。久子の愛を確かめた悦び、久子に待たれてゐると云ふ思、この次逢ふ時は今までと別な久子に迎へられるのだと思ふ樂しい想像がその噓を最も自然に吐かせた。本統は噓ではなかつた。彼はその瞬間どうにかして歸らなければならないと決心した。机と書棚のことが意識に上つた。二つのものは、少くとも今一度自由にこの部屋に歸る權利を彼に保留してくれてる筈だ。その時どんな都合でその儘ゐることにならないとも限らない。

時間にすれば十秒とはなかつた沈默に對して、久子は敏感に念を押すやうに聞いた。

『いらつしやればいつ頃？』

『九月になればすぐ來ます』

『十日頃？』

『それより遲くはならない。』

今となれば歸る必要はなかつたのです。さう打明けて云つて仕舞ひ度い氣持が、その時突然彼を大膽にした。

『指切(いびき)してもいゝ。』

久子も率直に手をさし出した。二人は小指を繋いだ。わざと子供らしく高く振つた。がその後で急に熱い火に觸れた

やうなあわただしさで久子の方から手を放したと思ふと、彼女の兩方の眼は涙で一杯になり、電燈に向けた明るい方の半面を大きな粒が轉がり落ちた。

『私も何處か遠い田舍へ行つてしまひ度い。――誰もゐないたつた一人きりのところへ行つてしまひ度い。――』

久子は急に咽びあげ、袖で顏を蔽ふと、立つてゐられないやうに入口の柱に倒れかゝつて聲をあげて泣き出した。その泣き方のあまりに發作的で猛烈なのが依田を吃驚させた。どう慰めていゝか分らなかつた。近づいて何か云はうとすると、怒つた泣き聲で遮られた。

『寄らないで、觸らないで――誰にも慰めて貰はなくても、構つて貰はなくても私はいゝの。何んとか云つても、誰も決して心から構つてくれやしないつてことを私は知つてますわ。――知つてますとも、知つてますとも、何もかも知つてゐます。――あなたが本統は九月から來やしないつてことも。――私を打つちやつて――』

『――――』

『いゝえ、御自分さへ田舍へ歸つて呑氣になれば、私なんかどうなつたつて構はないのですわ。』

依田は頰ばかりでなく、身體ぢうまつ赤になるのを感じた。彼は震えてゐる久子の肩に飛びつき、今日までの苦しい思に對して、彼女の言葉がどんなに殘酷すぎるか訴へたかつた。併し、久子は嘘は云つてゐない。――強い恥と自責の念が彼の足を釘づけにした。何んにも云ふことが出來なかつた。その暇がなかつた。門のベルが鳴つた。

あはてゝ柱から離れた時、久子がちらつと後へ投げていつた、涙と愛と憎惡の交り合つた眼が、今はつきり依田の前にあつた。急いだ足音が階段を駈け下りた。ベルが――あの瞬間のベルが今一度彼の鼓膜に甦つた――まだ鳴つてゐる。――依田は驚いて腰掛から立ち上つた。根津から乘つたばかりの電車はいつの間にか東照宮下を一二間通り過ぎ

て、前の線路で鶴嘴を振るつてゐる横着た工夫達に向つて、運転手が性急に警告を與へてゐた。依田は足早に少ない人をかき分け、既に並みの速度になりかけた車掌臺からやつと飛び下りた。早過ぎたかな。東照宮の石の鳥居に近づいた時、彼はさう思つて左の手頸を見た。時計は約束の時間より三分前であつた。彼は鳥居の際にちよつと佇み、また近所を行つたり來たりして見た末、石段を五六段上つた。其處に立つてゐれば、向ふの停留場に下りる人はいやでも眼に入る筈であつた。牛込の方へ住まつてゐるのだが、今日丁度日本橋まで行く用事があつて、その歸りに廻ると云つた電話の言葉で、どの方の電車を注意すればよいか依田は知つてゐた。知つてゐるのはそれだけで、他のことは何んにも知らなかつた。彼女は矢張り未亡人の話した相手と結婚したのか？子供は？家庭生活は？併し、これ等のさま〲な想像が直接脅迫にも嫉妬にもならず、却つて親しみのある關心で考へられることや、また彼女の足音を聞き、最後の一瞥を眼に見るほど生き〲と現はれたあの一と晩の思ひ出が、當時の苦痛と惑亂を脱し、遠い夢の追憶に似た懐かしさで染に享けられたのは彼自身にも意外であつた。五六年前の彼が、斯んな落ちついた氣持で此處に立つてゐられたであらうか？その安らかさは、同時に一種の寂しさでないこともなかつた。彼はステッキをつつかい棒のやうに突き、かすかな感動を以つて目前の冬枯の池を眺めた。おれももう三十八だ。久子さんだつてそれより四つしか若くはない。――遊の枯れた池の肌が荒涼と見渡される。赤い、凝結した太陽が、向の岩崎の森に傾きかけた。工夫たちはまだもとの位置を離れない。彼等の振りあげる鶴嘴と池の水が同じ鋼鐵色に光る。待つてる方の電車が走つて來た。留まつた。ボールの傍に先刻から立つてゐた二三人を乗せただけで誰も降ろさなかつた。依田は今一度時計を見た。三時を過ぎてしまつた。待たされてゐると云ふ感じが急にしだした。彼はつつかい棒にしてゐたステッキを離し、空に一二回振つた。理由なしに、彼は久子の方が先に來てゐようとは思ひもかけなかつたから、その時上の石段に起つた足音を聞いても何等の

注意も拂はなかつた。が、足音が彼の方を避けようともせず、却つて彼の立つてゐる場所を目がけてまつ直に近づいて來るらしいのに氣がついた時、本能的の期待でふり向いた。丈の高い、黑づくめのなりをした女の姿が頭の上にあつた。さつきの年はこの瞬間何んにも助けなかつた。彼の胸は十八の青年のやうに打つた。

久子は依田のふり向いたのを見て五六段上に立ち留まつた儘動かなかつた。而して依田が傍まで上つて來ると、他のことは何んにも云はないで出し拔けに聞いた。

「この石段が何段あるか御存じ？」

「數へたんですか。」

「七十三。」

彼は坂の上下に對して建築家らしい眼を動かせた。その何んでもない專門的考慮が、今一つは久子の毎日逢つてゐる人のやうた、寧ろ、依田の意識にある彼女とは別人のやうなこだわりのない明るい態度が、彼に落ちつきを取り返させた。

「もつとありはしないかな。」

「だつて、上つたり下りたり、三遍も數へさせられたのだから、間違ひつこなしですわ。」

「どうも相すみません。」

「どういたしまして。」

二人はわざと丁寧に、はじめて頭を下げ合つて笑つた。

「併し、あなた位變化した方もありませんね。」

五重塔の傍から公園の淋しい木立の道に入つた時、依田は一番にそれを云はずにはゐられなかつた。

「肥つたせゐでせう。それに今日は斯んなものを着て出たので、なほとふくれつちまつて。」

久子は依田の言葉を單に外面的な意味に取つたやうな話しぶりをしながら、少し風邪を引きかけてゐるのだと云ひ譯けして、時候に早過ぎる自分のコートを笑つた。久子はまつ黒なフラステンのコートに包まれてゐた。一般の婦人の場合はめつたに身につかないこの毛織物が、脊丈の十分な、それに厚味のつり合つて來た久子の體格にはぴつたりしてゐた。が、髮や襟許からのぞいて、彼女の現在の裕かな生活を語つてゐる贅澤な着物の割には、ひどく地味なつくりをしてゐた。顔には相變らず白粉つ氣がなかつた。それが黑いコートや、同じ黑の薄手なショールや、その上に抽ん出てゐる、娘時代には長いだけに細かつたのが、今では肉のたつぷりついた、ちよつと日本人離れのした、まつ直な立派な頸と共に、彼女の姿を重々しく見せた。

「いつそ洋服を着るといゝぢやありませんか。」

依田はたしかにその頸を意識に置いて云つた。

「そしたら、思ひきりハイカラな洋館でもあなたに拵へて頂くのね。」久子は自嘲するやうに云ひかけて急に調子を變へたから「さう云へば、昨年輕井澤に小さい家を建てた時、あなたに設計して貰ひ度いなんて話が出たのですよ。一高に入つてゐる工科志望の弟があなたの信者で、お書きになつた論文や著物は悉く集めてゐると云ふ熱心家なものだから。——えゝ、宅の弟。まだ他に中學に通つてゐる弟もあれば、お嫁入前の妹もあるし、それに私の小さいのが二人ゐるつて騷ぎで、家ぢやそれは〳〵大變、でもお宅樣はお嬢樣がたつたお一人でお淋しいのね。お母樣とお撮りになつたお寫眞をいつでしたかの「建築畫報」で拜見しましたわ。お可愛い方」

話題が其處まで流れた。依田はもう何を聞いてもいゝのだと思つた。
『さうすると、御主人はよそから入らうした方ぢやないのですか。』
『いゝえ。どうして？』
『小石川の家では、あの時そんな話をしてゐましたよ。』
久子は返事の代りに、右側を並んで、併し、間に人が二人入れる位離れて歩いてゐる彼の方へ靜かにふり向いた。それがあなたをお國に追ひ立てたのでしたね。——と云ふやうに。が、その視線には恨も動搖もなく、旣に過去になつた娘時代の一つの熱情に對して、朗かに興がるやうな微笑の影さへ浮んでゐた。
久子は母方の靑年を鄭情に拒絕してから、今の夫と結婚したまでの顚末を簡單に話した。彼女は愛を以つて夫のことを語つた。この場合あり勝な誇張も不自然さもなかつた。それが依田には快かつた。安堵でもあつた。
『でも人間つてけちな根性ですわね。』
久子は何か思ひついたやうに言葉をついだ。
『それはどういふ意味です。』
『だつて、よくさう思ひますわ。例へば、弟があなたの話を熱心に私にして聞かせて呉れる時なんか、何故、その方なら姉さんがよく知つてゐますつて、からりと云つて仕舞へないでせう。その氣持が自分で口惜いことがありますわ。』
『何故仰しやらないのです。御主人の前で仰しやつたつて差支へない筈ぢやありませんか。少くとも我々の場合、殊に今に於て何等の邪心はありはしないし——』
『勿論そんな意味で云つてやしませんわ。それ位なら、どんな必要があつたつてあなたに電話なんかかけやしませんか

ら。」

『僕だつて出て來やしない。』

二人は喧嘩する兄弟のやうな調子で云ひ合つて、云ひ合つたことに氣いて考へて見るやうに默つた。丁度動物園の手前の森を抜けてゐた。早い灯が行手の道や木立の間につきはじめた。寒い風が出て狐が啼いた。久子はショールを咽喉もとに引き寄せながら感情のこもつた、しつかりした聲で沈默を破つた。

『私がどうして今日急にお目にかゝらうと決心したかお分かりになつて?』

『僕の洋行のことを知つたからだと今朝は仰しやいましたね。』

『洋行の噂ならもうずつと前に知つてゐましたが、お目にかゝらうとまでは思ひませんでしたわ。それが急にどうしてもお逢ひして置かうと決心したのには譯がありますの。』

久子は落ちついてゆつくり話すといつた。その積りで用意させて置いた處があるといつた。その家は芋坂を下りてごたくした町並の裏に、やつと昔の根岸の閑靜を取り留めてゐると云ふ風な通りの一つにあつた。網代に組んだ古い竹垣にはからくになりながら、殘つた葉だけは赤い蔦が絡まつてゐた。客商賣の家と云ふよりは物持の寮の感じのする門には、看板はもとより軒燈さへなく、見渡しの深い玄關にともつた一つの電燈が、すでに暮れ方の色になつた庭石と植込を奥の方からかすかに照してゐた。久子は極懇意な家に來たやうな氣安さでさつさと門を入つた。式台の前に手をついた女中の物腰にも、鄭重な中に共通の親しみが現はれてゐた。

『どちら?』

『お茶室の方へいたしてございますが。』

『結構。』久子は電燈の下に立つて應揚に女中にうなづいてから、靴を脫ぐだけ後れた依田を顧み、自分の家に案内する調子で云つた。『どうぞ』

玄關から中庭を控えた奥の四疊半に通るまでに、依田は專門家の眼で、その家が、どんな好みで、どの程度に金がかけてあるかを見遁しはしなかつた。併しその時彼の心を捉へてゐた問題はそんなことではなかつた。久子は彼の考へてゐることを見拔いてゐるかのやうに、座に着くとその家に就いて、また家と彼女との關係に就いて話した。其處は日本橋の大きな唐物店の年寄夫婦が、好きな茶の趣味から道樂半分にやつてゐる家で、その妹娘が久子と學校時代に親友であつた關係上、彼女等の仲間の茶の會などはよく其處で催されるのだと云つた。併しその說明は依田を一層不安にした分でも安心させはしなかつた。彼は、知つた家なら寧ろ避くべきあつたのを、たとひ心に疚しい點はないと云ひ條、平氣に選んだ彼女の無邪氣な大膽に呆れた。

「ぢや、その人も此處に一緒にゐるんですか。』

彼はさう尋ねて見ないではゐられなかつた。

『勝子さん？』久子は名前を云つて、『こちらにゐたり日本橋の方にゐたり極まつてゐませんの。獨身で、氣儘に暮らしてゐられるのですから。』併し父親がレウマチ氣で熱海に轉地してゐるので、今は母親と一緒にそちらへ行つてゐると話した。『でも、そんなこと、氣になさるには及びませんわ。東京へゐらしつたら、今日あなたに逢つて頂かうかと思つた位ですもの。——私があなたに逢はうと決心したのもその人のためなら、私に其をすゝめたのもその人なんですから。』

依田は今はたゞ强い驚を以つて相手を見た。同時に疑の眼で云つた。

『女の友達が、一體こんなことまで話すものですか。』

『藝術は詩みたいなものでせう、私たちだつて、今までこんな話をしたことになかつたし、しようとも思ひませんでしたわ。それが妙な機會から。』と話しかけて急に言葉を切り、改まつた口調で聞いた。『覺えてゐらつしやらない？この間、日本の畫家でフランスに長く行つてゐて亡くなられた方を、——あちらでも評判がよかつたとかつて、新聞紙なんかでひどく惜しがつてゐましたでせう。』

『H——君のことですか。』

『御存じ？』

『いや、作品だけ。』

『勝子さんを今日まで、いゝえ、多分一生、獨身におさせになつたのはH——さんですよ。』

久子が話して聞かした彼等のローマンスは、簡單な割に變つてゐた。女學校を卒業した後、勝子は偶然の機會でH——と知り合になつた。既に妻があり、その上女性の心を掴むことに自信のあつたH——は、最初から誘惑的に出た。勝子は彼を怖れた。怖れながら、その魅力から脱することが出來なかつた。苦悶と陶醉の一と月が續いた後、終に彼女はH——と二人だけで郊外に出る約束をさせられてしまつた。二人は逢つた。併し、最後の瞬間に於て勝子は逃げ出した。H—の妻に對して罪を感じた。と云ふより、初めて本體を現はした男のあまりに露骨な姿が彼女を震ひ上らせた。にも拘はらず運命の皮肉に依つて、逃げ出した瞬間から、勝子ははじめて本統に彼を愛し出した。恐らく彼が付つて知らない意外な結果に驚いて、苦笑ひをしてゐたであらう時、勝子は心から彼を戀ひ、血の涙を流してゐた。

H——がフランスへ行つたのはその後間もなくであつた。二十年の間は、時々思はせぶりな葉書などを寄越した。勝子は一度も返事を書かなかつた。彼の不幸な妻のことを考へた。思ひきらなければならないのだと思つた。その決心は

自分の心がどんなに強く彼に結びつけられてゐるかをいよ〳〵はつきり彼女に思ひ知らせただけであつた。或る場合、勝子は犯さぬ罪を惜んだ。それがためには、一生日陰の身で終つたとしても滿足したであらう。H――が想像以上の女たらしであつたのを知つた後でさへ、思慕は滅じなかつた。勝子はすべての縁談を嫌惡からでない場合も潔癖から斷つた。その秘密な火が消えない以上、どんな仕合せな結婚にも近づく權利はないのだと信じた。實際、一切の幸運と、殊に取り返しのつかない若さがその間に彼女を見捨てた。今はたゞ、音信さへ絶えたH――の歸りを待つこと、今一度――死の瞬間でもいゝから彼に逢はうと云ふことより外には、地上の望はなかつた。巴里からのH――の訃音は、彼女の生きる目標を突然奪つたものであつた。

その死が新聞で公けにされた明けの日、勝子は久子を訪ねて來て、初めて打ち明け話をした。考へて見ると、H――と知り合ひになつた當座の一と月は、樂しいよりは苦しさと恐ろしさが先に立つた。本統の夢見心地で、何もかも忘れ盡した恍惚狀態になれたのは、二人で郊外の停車場に落ち合つて、まわりの田舍道を散歩した間の一時間半であつた。その一時間半のために、彼女の心は十三年間彼に縛りつけられ、惱み通して來たのだと云つて泣いた、と久子は話した。

『斯んなことがなくて、若し望み通りH――さんに逢へたら、勝子さんにはたつた一と言ぜひ云ひ度いことがあつたのですつて。』

『どう云ふことです。』

『あなたにはほんの氣紛れな遊びに過ぎなかつたことが私の一生を支配しました。而して恐らく名前さへ忘られてゐた間に、絶えずあなたを思つてゐたのです。――と。』

以上の言葉をわざと無技巧に、女生徒の時分見たいに砕けた久子を、依田は悄然とした、併しその後ですぐ落ちつきを取り返した、厳粛な表情で見詰め、自制した調子で、口を開いた。

『久子さん、序でにあなたの一言を聞かせて頂きませうか。』

『――――』

『あなたは勝子さんぢやありません。決して、そんな不仕合な人と一緒にして考ふべきではない。あなたは立派な御主人があり、可愛いお子さん達があり、世の中の誰よりも幸福に暮らしてゐらつしやるのだと信じ度い。實際、僕はさう信じてゐます。併し、昔の――あの當時の僕の意久地なさは、あなたにどんなに責められても、侮辱されてもいゝ筈です。だから――』

『侮辱されるなら私の方ですわ。』久子はその時あわたゞしく彼を遮つた。『あれから一年とたゝないうちに、私は平氣で、いゝえ、從弟との面倒がなくなるので、大悦びで今の夫と結婚したのですもの。』

『そんなことを云へば誰も同罪ですよ。今朝の電話の聲を聞くまで、あなたのことなぞ僕は今まで思ひ出しもしないで暮らして來られた。』

『おや、私の方がそれでも幾らか情があつた譯ね。』短い、回顧的な沈默を受けて久子は靜かに言葉をついだ。『どうかするとあなたのことを思ひ出しましたよ。いつだか分らない、この世でか、また先の世でか、それも分らないが、今日のやうにお目にかゝつて、昔話をする日が乾度ありさうに思へましたわ。その時云はうと思つたのは、勿論勝子さんの云ひ度かつたこととはまるで別だし、もつと短かい、本統に一と言で盡きることなの。――あの時は有り難うございました。』

『――』

『それだけ。――だつて、內輪のごたく〱や、從弟とのいやな結婚問題で眞つ暗になつてゐたあの頃の私の氣持では、相手次第でどんな無茶もやり兼ねなかつたのですから。――逃げろと云へば一緒に逃げたかも知れませんわ。死ねと云へば死んだかも知れませんわ。でも、あなただからこそ、その怖ろしい瀨戶も無事に通り拔けさして下すつたのだとしみぐ〱思ひますよ。』

『併し、僕はあなたがそんなに苦しんでゐるなんてことは夢にも知らなかつたから、たゞ幸福な、忌憚なく云へば。』久子の眼に初めて二滴の淚を認めた依田は、わざと誇張した快活さでつけ加へた。『どうも怖ろしく我儘なお孃さんだと思つてただけです。』

效果があつた。久子の淚はその言葉ですぐかすかな微笑に變つた。

『殊にあなたにはね。どうせ序でだから謝りませうか。』

『それには少し遲すぎたやうだ。』

『お氣の毒さま。』

二人は初めて口に上つた冗談を、あまり年寄りすぎもせぬ、またあまり若過ぎもせぬ、丁度彼等の年配に似合つた落ち着きと平靜で云ひ合つて、さう云ふ間柄の男女だけで笑へる笑ひ方で笑つた。親しみに交る寂しみと諧味に於て、それは何んとなしに彼等が今其處で味つてゐる料理の味に似てゐた。

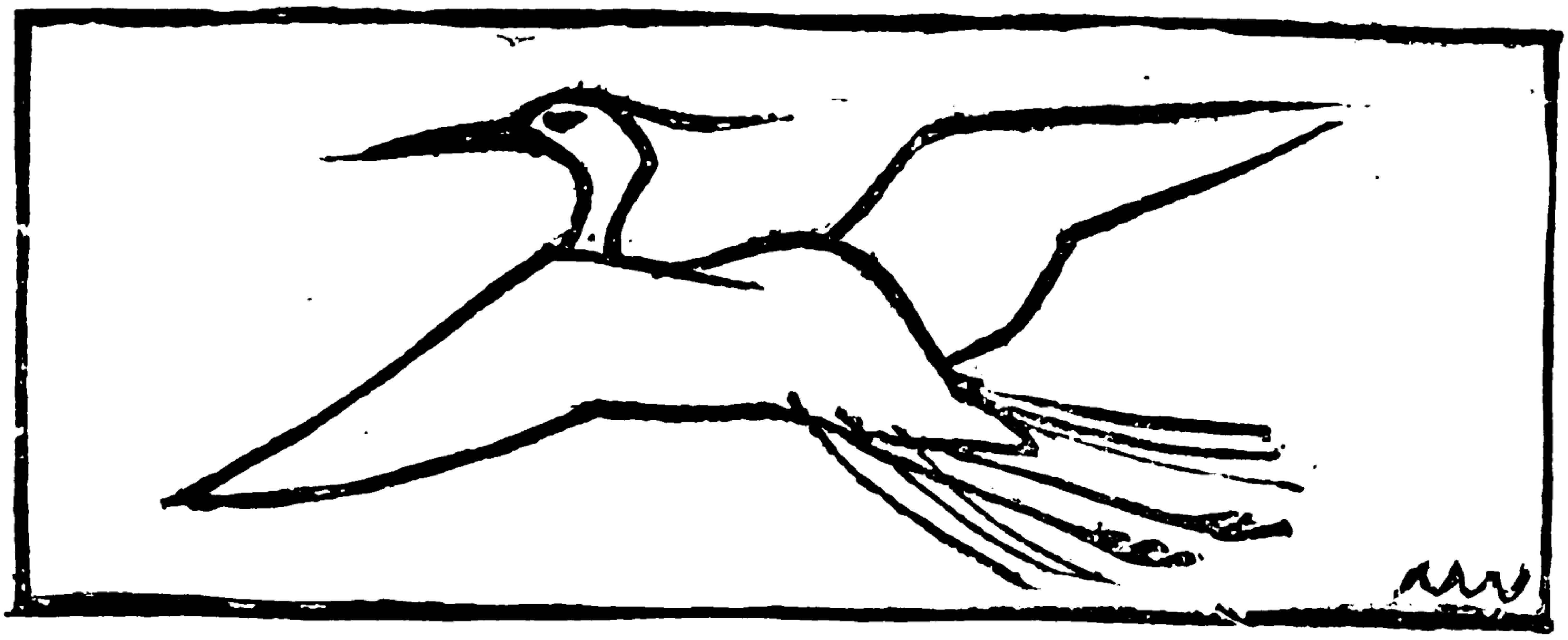
一時間の後、依田は久子を見送るために廣小路の自動車屋の前に立つてゐた。久子はもう車に乘つてゐた。エンジンの工合が惡くて急に出なかつた。運轉手は一旦把んだハンドルを離して飛び下り、車の前にしやがんだ。道順からすれ

ば依田は途中まで一緒に乗れたのであるが、避けた。久子も強ひはなかつた。久子が乗つて車が動き出すと、久子は幌の中から優しく呼んだ。

「では、左様なら。」

「左様なら。」

依田も應じた。併しお互ひの左様ならが、本統は何に向つて叫びかけられてゐるかは十分よく知つてゐた。彼は狹小路の光の散亂の中を、うすく下りた霧をついて駈けて行く車の赤い灯を見送りながら、默々と電車路の方へ歩いた。



月夜

久保田万太郎

口

杉谷。小使　四十七八

側。小使　五十二三

掛貝。小使　五十五六　（登場せず）

越智。訓導　五十一二

相良。訓導　二十六七

生徒の母。　三十五六

萬燈まはりの講中大勢。

□

現代。――東京市内

ある小學校の小使部屋。

十月はじめの月のごくいゝ晩。七時すぎ。

……ぢきにもう御會式の、萬燈まはりをしてゐる團扇太鼓の音が、遠く、にぎやかに聞えてゐる。――小使の杉谷、暗い、ぼやけた電燈の下で、一人箱膳を置いてぼそ〳〵夕飯を喰べてゐる。

長き間。

通用門のはうの出入のガラスをあけて、訓導の越智、ネルの着流しで入つて來る。

越智。いま飯か？

杉谷。…………（口をもぐ〳〵やりながらだまつて頭を下げる）

越智。えらい遲いぢやアないか？（いひながら腰をかける）

杉谷。へえ。（いそいで嚥みこむ）

越智。みんなは？（あたりをみまはす）

杉谷。みんな、今夜は、掛貝のところへよばれまして……

越智。掛貝のところへ？

杉谷。へえ、昨日の表彰の、その……

越智。うん、お祝ひか？

杉谷。へえ、今夜は内輪だけの、水入らずの……（土瓶をとつて茶をかける）

越智。で、一人留守番か？

杉谷。下戸の出る幕ぢやアどうもなささうでござんすから……

越智。それアさうだ。――酒の席に飲まない奴のゐるのは、ゐるはうもこまるだらうが、ゐられるはうも工合のわるいもんだ。――何だか料簡をみられるやうな氣がしてな。……

杉谷。飲まない身になるとまた。――これは先生のまへですが、酒の席へ出るほど辛いことはござんせん。――まるで針のむしろへ……

越智。さう酒飲みを嫌はなくてもいゝだらう。（わらふ）

杉谷。いえ、全く……（喰ひ終つて茶碗を下に置く）

越智。しかし、誰が強いね、一番……？

杉谷。小使のなかでゝござんすか？

越智。うむ。

杉谷。さア……？

越智。新藤はどうだな？

杉谷。つよさうにみえてあんまり強くございません。——二合もいたゞけばすぐ酔てしまひます。

越智。三村は？

杉谷。あれのは意地がきたないんで、あればあり從ひにいくらでもいたゞきます。——さうしちやア、あとで、苦しがつてをります。

越智。あのかつぷくだ、照井はやれるだらう？

杉谷。ところが根つからやれません。——あの男ばかりはみかけ倒しで、お猪口にもう三つもいたゞけば、たちまち金時のやうに眞つ赤になります。

越智。あの男が？

杉谷。へえ。

越智。分らんもんだね。

杉谷。そのくせ好きなことはだれよりも好きで、それだけいたゞけば一升も飲んだやうに陽氣になります。——陽氣になつて自慢の「そりや聞えませぬ、傳兵衛さん……」ときまりでやり出します。

越智。ほう、さういふ隠し藝があるのか？

杉谷。當人にいはせると大阪で年期を入れた藝なんださうで。——不味いとでもいはうものならいろ〳〵効能をならべます。

越智。それアはじめて聞く。——一つ、それは、拜聴の榮をえなくちやアいかんな。

杉谷。どうかいたすと、廊下で、掃除をしながらなんぞ一人でうなつてをります。（膳を片附ける）

越智。と、まア、掛貝はお前組だ。――話にならん。――あとの面々でも揃つてみんな弱卒か？

杉谷。とても、それは、先生のお相手にはなりません。

越智。いや、待て。――まだゐる。――佃がゐる……

杉谷。…………

越智。あれは飲むだらう、あの男は……？

杉谷。へえ、いたゞきます。――佃はいたゞきます。

越智。で、強いだらう、あの男は……？

杉谷。あの男ばかりは強いんだか弱いんだかわたくしどもには分りません。

越智。分らない？

杉谷。へえ、幾らいたゞいてもビクともしないかと思ふと、わづか飲んでもすぐ顔のいろを青くして、駄目だ、もういけねえ。――いくぢなくへたばつてしまひます。――あゝいふのはどういふんでござんせう？

越智。さ、さう聞かれてもこまるが、つまりは弱いんだらうな。

杉谷。（うなづくやうに）弱いんでござんせうね。

越智。しかし弱いはうがいゝ。――酒なんか強くたつて何のたそくにもならない。

杉谷。わたくしどものやうに、しかし、まるつきりいたゞけないといふのも、思へば果報のない話で……

越智。そんなことはない。――飲めなきや飲めないに越したことはない。――飲めないのは弱いよりもつと仕合せだ。

杉谷。さうでござんせうか？

越智。早い話が掛貝だ。――あの男が、お前、今度のやうなうまいことをしたのもつまりは飲めないからだ。――どうして、飲む奴に、二十五年も一ツところに辛抱が出來てたまるものか。

杉谷。へえ。

越智。しかし幾つだね。掛貝は？

杉谷。五で……

越智。五？――六十……か？

杉谷。いゝえ、五十五で……

越智。わりにそれは若いんだな。――どうしたつてあの頃の工合から顔の肉のたるんだ工合、五十代とは思へない。

杉谷。やつぱり、それは、苦勞してをりますから……

越智。してゐるかい、苦勞を？

杉谷。それは、あなた、三十一から今日が日まで、この學校で、代々の校長先生に間違ひなく御奉公して來たゞけでも大へんなことでございます。どんな可笑しいことがあつてもわらはず、悲しいことがあつてもめつたに涙をこぼさないまでのあの修行を掛貝がつむまでには、それア先生のまへですか……

越智。理屈はつけやうだ。（わらふ）

教員室からの呼鈴鳴る。――杉谷、いそいで土間に下りる。

越智。今夜はだれだ、宿直は？

杉谷。相良先生で……（いひ捨てゝ教員室へ行く）

間。

越智、手近の新聞を引きよせて擴げる。——團扇太鼓の音だん〱近づく。——門のまへあたりをとほるとおぼしく、太鼓のその入亂れた音と一しよに萬燈を押立てた群集のどよめきにが一しきり手にとるやうに聞える。

間。

杉谷、土瓶をもつてかへつて來る。——藥罐の側へよつて湯をさしかゝる。——すぐ、また、教員室へもつて行く。

間。

太鼓の音、だん〱また遠ざかる。——杉谷、かへつて來る。

越智。誰か來てゐるのか？

杉谷。へえ、五年の生徒さんの親御さんが……

越智。よつぽど前からか？

杉谷。へえ、三十分ほどまへから……

杉谷、上へあがらず、手を伸ばして膝のそばの土瓶を取り、流しのはらへ行く。——出がらしをあけて新しいのを淹れる。——湯をさし、棚から茶碗をとつて盆のうへにのせ、越智のそばにかへる。

杉谷。淹れかへました。……（越智のまへについで出す）

越智。これは御馳走。——有難う……（新聞をわきへ離して茶碗を取上げる。）

杉谷。（同じく茶碗を取上げながら）　今夜は、しかし、外はいゝ月でござんすね。

越智。うむ、いゝ月だ。——すごいやうだ。……

杉谷。教員室で、いま、何の気なしに窓のそとをみると、運動場がまるで水の底へでも沈んだやうに……

越智。さうだらう。眞(ま)つぴかりだらう……

杉谷。へえ。

越智。（ふと、流しのはうのくらがりに、ほそ〴〵蟲のないてゐるのを聞きつける。）ほう、蟋蟀(こほろぎ)がないてゐる……

杉谷。へえ、そろ〳〵もう鳴き出しました。

越智。なるほどフランネルぢやアひいやりするわけだ。

杉谷。それは、先生、明後日(あさつて)はもう御會式でございます。

越智。いはれてみれば無理はない。——（急に）どうだ、久しぶりで一番さゝうか？（茶碗を下に置く）

杉谷。さうでございますね、願ひませうか？

杉谷、立つて、戸棚のなかゝら将棋の道具をもつて来る。——二人、盤をなかにしてすわる。

越智。（駒を並べながら）だが、この夏は、おたがひにさういつてもよくさしたよ。

杉谷。（同じく駒を並べながら）みんな先生の根(こん)のいゝのに驚いてをります。

越智。敵は大ぜい味方は一人……だからな。（わらふ）

杉谷。将棋には負けないが、根(こん)のいゝのに負けるとみんなさういつてをります。

越智。莫迦(ばか)いつちやアいかん。……

二人、勝負にすぐ夢中になる。——蟲の音、たえ〴〵につゞく

やゝ長き間。

ガラス戸をあけて、佃、ぼんやり入つて來る。――二人は氣がつかない。……

佃。…………（默つて二人のそばに立つ）

杉谷。（ふと顏を上げて）早いな。――もうかへつて來たのか？

佃。（物憂げに）うむ。

杉谷。外の連中は……？

佃。知らねえ。（離れる）

杉谷。どうして？――一しよにゐて、お前……？

佃。俺だけさきへ出たんだ。――わるく酒がまはりやアがつたから……

越智。醉つたのか、そんなに？

佃。さア、醉つたともつかねえんですが……

越智。醉つたともつかなくつて、たゞ足もとがふらつくか？（盤に眼を落したまゝ）

佃。足もとはしつかりしてゐるんですが、體がわるくふら〳〵しやアがつて……

越智。（杉谷に）お手は？

杉谷。銀一枚の桂、香……

越智。銀一枚の桂、香、と。……（駒をうごかしてから佃に）……どつちだつておんなしことぢやアないか？

佃。（冷やかに）戯談いつちやアいけません。足もとのふらつくのと體のふら〳〵するのとはまるつきり規模が違ひます。――先生も酒飲みに似合はねえ……

越智。さて、と、――不味かつたかな。此奴は……(それにはこたへないで駒をうごかす)

杉谷。で、まツすぐに直ぐかへつて來たのか？

佃。眞つ直でもなかつた。――里ごゝろがついて何だかくさ〳〵して來たから、ついふら〳〵あつち此方へよつて來た。

杉谷。どこへ？

佃。こゝで三合彼處で五合……よ。

杉谷。外でまた飲んだのか？

佃。なアに、それほど飲みやアしねえ。

杉谷。(間)そこにある土瓶。――いまそれ淹れかへたばかりだぜ。……

佃。あゝ、有難う。

杉谷。(越智に)お手は？

越智。金の、歩が三つ……

杉谷。では、一つから下つて置きます。(駒をうごかす)

間。

教員室から相良、客(生徒の父兄)を伴つて出て來る。

客。(ふり返つて)おそれ入ります。どうぞ、もう……

相良。えゝ。

間。――客、草履を脱いで下駄と穿きかへる。

客。……とんだ、どうも、お邪魔をいたしました。（相良のはうを向いて、もう一度、叮嚀に、腰をかゞめる）

相良。どうぞ、まア、お大切に……

客。有難う存じます。——（杉谷のはうへ）御免下さいまし。……

杉谷。どうも……

客、さびしく、泪ぐましきさまに背をみせて出て行く。

越智。（間。——急に）やア、いかん。——負けた。（思きりよく駒を投げだす）

杉谷。…………（優越感をもつてわらふ）

相良。御勉强ですな、先生。……（越智の側による）

越智。（わらつて）やア。——うちにゐても所在がないもんでね。——（駒を、また、並べながら）いまのは……？

相良。五年の原田の母親です。

越智。原田といふと……？

相良。御存じありませんか？——××から來る、あの色の白い、音無しい子供……？

越智。うむ、あの、副級長をしてゐる……？

相良。えゝ、さうです。——あの子供、この間から、體をわるくして休んでをりましてね。……

越智。可哀さうに、それは。——どこが惡くつてね？（駒をうごかしはじめる）

相良。それが分らんのださうです。

越智。わからない？——病症がゝね？

相良。さうなんです。

越智。それはいかん。――それは大學へでも連れて行つて……

相良。いえ、大學でそれが分らんのださうです。――脊髄の疾患だらうといふ鑑定はやアあるさうですが……

越智。大學で分らんといふのは。――で、入院でも？

相良。させたさうです。

越智。何日ね？

相良。一昨日ださうですが。――經過が、しかし、好くなくつて、衰弱する一方なんださうです。

越智。（杉谷に）おッと、待つた。――さうはさせない……（待つたをしていそいで駒を直す。――相良のはうを向いてしみ〴〵）しかし、それは……

相良。もしものことでもあつたらどうしよう。――さういつてもうおろ〳〵してゐました。――一人つ子といふだけ無理はありません。

越智。（聞き返す）一人つ子？

相良。さうださうです。

越智。（眉をひそめて）それは敵はんな。

相良。いろ〳〵もう愚痴をこぼしてゐましたが……………

越智。生憎なもので、われ〳〵どものやうな掛替のしこたまあるところでは、揃つてみんな、風邪一つひきをらん。:

相良。失禮ですが、先生は？

越智。五人ゐます。（勢よく、一つ、駒を下ろす）

相良。それはいゝお子持ですね。

越智。男一人の、あとはみんな海軍でな。……（わらふ）

杉谷。お手は？

越智。角があります。

杉谷。…………………（駒をうごかす）

越智。さう來れぱもう……（駒をうごかす）

そのまゝ二人ともしばらく無言。――勝負に夢中になる。――相良、袂をさぐつて煙草を出し、火をつける。

佃。（暗いものかげから急に身を起し）先生、一本いたゞかして下さいな。

相良。（みて）何だ、佃か……？

佃。…………　…………

相良。そんなところに何をしてゐるんだ。

佃。（それにはこたへず）わたしやお前にもりつぶされ。風にふかれてゐるわいな、さ。

佃、相良のそばへ來る。――煙草をもらつてうまさうに吸ふ。

佃。へえ、有難う。――御馳走さま。……（ぼんやりそこを離れる）

相良。どこへ行くんだ？

佃。いゝ月ですぜ、外は。……（運動場のはらへ出て行く）

圖。

將棋の勝負つく。――二人、愉快げにわらふ。

越智。どうです、相良君、一番……

相良。いや、一向に……

越智。やられんのか？

相良。駒のうごかしやうも知りません。

越智。それア珍しい。――いまの若い人は大ていやるがな。

相良。いや、それが、子供の時分さういふ勝負事を一切、兩親に禁じられましてね。――それが習慣性になつて、とうとう將棋も覺えずにしまひました。

越智。よほど堅い御兩親だつたとみえる。……

相良。いや、それが、さういふわけではなくつて、僕があんまり子供の時分、勝負事が好きで、且、うまいのを怖れて、將來のためにさういふことにしたのです。――とにかく外へ遊びに出ると、必ずかへりにはメンコだの海螺だのでふところを一ぱいにして來たといふんですから……（わらふ）

越智。なるほど。

相良。恥をお話すれば、僕のぢいさんといふ人が相場で身上をつぶした人で、それに懲りてゐるので、兩親、ぢいさんのあとつぎが出來ては大へんと思つたらしいんです。

越智。………………

相良。兩親がしかしやかましくいはなければ、いまごろは、こんな白髪だらけになつてゐないで、兜町あたりで大きに成金風（なりきんかぜ）をふかせてゐたかも知れません。

越智。（うなづくやうに）それア何とも知れん。

杉谷。（横から）この學校の先生をしてゐた方で、しかし、ほんたうにいま兜町で、まん〳〵とやつてゐる方がござんすさうですが……

越智。（信じられないやうに）ほんたうか、お前……？

杉谷。いゝえ、くはしいことはわたくしも知りませんが。——二十年もまへにをつたといふ方ですから……

越智。名前は？

杉谷。さア、何とか先生と申しましたよ？——掛貝はよく知つてをります。——兜町では、いま、たしかヤマ水とかいふ…

越智。ヤマ水？

相良。その店なら新聞なんかでよくみます。

越智。一向その方は不案内でな。（わらふ）

杉谷。その先生のゐた時分、學校に、もう一人、その先生の合棒がをりましたんださうで……

越智。やつぱり先生でか？

杉谷。いゝえ、小使で……

越智。小使で？

杉谷。閒（ま）さへあると、二人より合つて、やれ今日は何の株が高いの、何の株が安いの、と、新聞をみちやア評議ばかり

してをりましたさうで……

越智。變つた奴だな。

杉谷。へえ。

越智。で、どうした、その小使は？

杉谷。學校をやめて、やつぱり、間もなくそのはうへ入りましたが、この方はすつかり失敗りました。（わらふ）

越智。失敗つた？

杉谷。へえ。——一時は、でも、すつかり儲けてお手車であるいたこともござんしたさうですが、いまは尾羽うち枯らして、もとのまた學校の小使をしてをります。

相良。（わらつて）分つた。——何だらう、それ？

杉谷。（同じくわらつて）へえ、さうなんで。……

越智。何といつて、あの……？

杉谷。へえ、いま、こゝにをりました……

越智。（全く意外のやうに）あの男、そんな經歴を持つてゐるのか？

杉谷　へえ。——それは、もう、學校へ舞戻つて來るまでには、周旋屋のやうなこともしたり、金貸の番頭もしたり、
それからまた料理屋の帳附もしたり……

越智。ぢやア、學校では、ずつと古くになるんだな。

杉谷。へえ、もう、それは。——掛貝の學校へ入つたときにはもういゝ加減古顏だつたさうでござんすから、

越智。掛貝より古いのか？

杉谷。へえ、ほんたうにいたすと……

相良。音無しく、ぢやア、學校に辛捧してゐれば、掛貝と一しよに昨日、二十五年勤續の表彰をされる資格があつたわけなんだね？

杉谷。そ、そうなんで……

越智。（わらつて）それは佃の奴、今夜掛貝のところの祝ひによばれてへんな氣がしたらう。

杉谷。（憮然と）したらうと思ひます。――外のものより早くかへつて來たのも、畢竟その所爲だらうと思ひます。

越智。醉つてゐるのかゐないのか分らんやうな醉ひ方をしてゐるのもつまりはそれだな。

杉谷。さうかも知れません。

相良。だが、佃は、運動場へ何しに行つたんだ？（そのはうへ眼をやる）

杉谷。何をしてゐるんでござんすか……（いひながら立つて土間へ下りる）

越智。世の中が味氣なくなつて、大きに、首でも縊りやアせんか？

杉谷。眞逆、先生……（わらふ）

相良。いや、何とも分らんぜ。――あんまり月がいゝと妙に身につまされるもんだ。

、ふと三人の身うちにありえないことの豫感が感られる。――越智も、相良も、ともに無言。――杉谷、ふといそいだ足どりで運動場のはうへ行く。

間。

相良。臥龍です。

越智。臥龍？――ほう、さうですか……

相良。失禮ですが、先生は？

越智。福岡です。

相良。福岡？

越智。おたがひに遠國の座ですな。（聲をあげてわらふ）

そのまゝ、また、二人とも無言。――たえだえに鼓の音。……

間。

杉谷。かへつて來る。

杉谷。後生樂（ごしやうらく）が席を引つ張り出していゝ心もちに寢てをります。

越智。寢てをる？

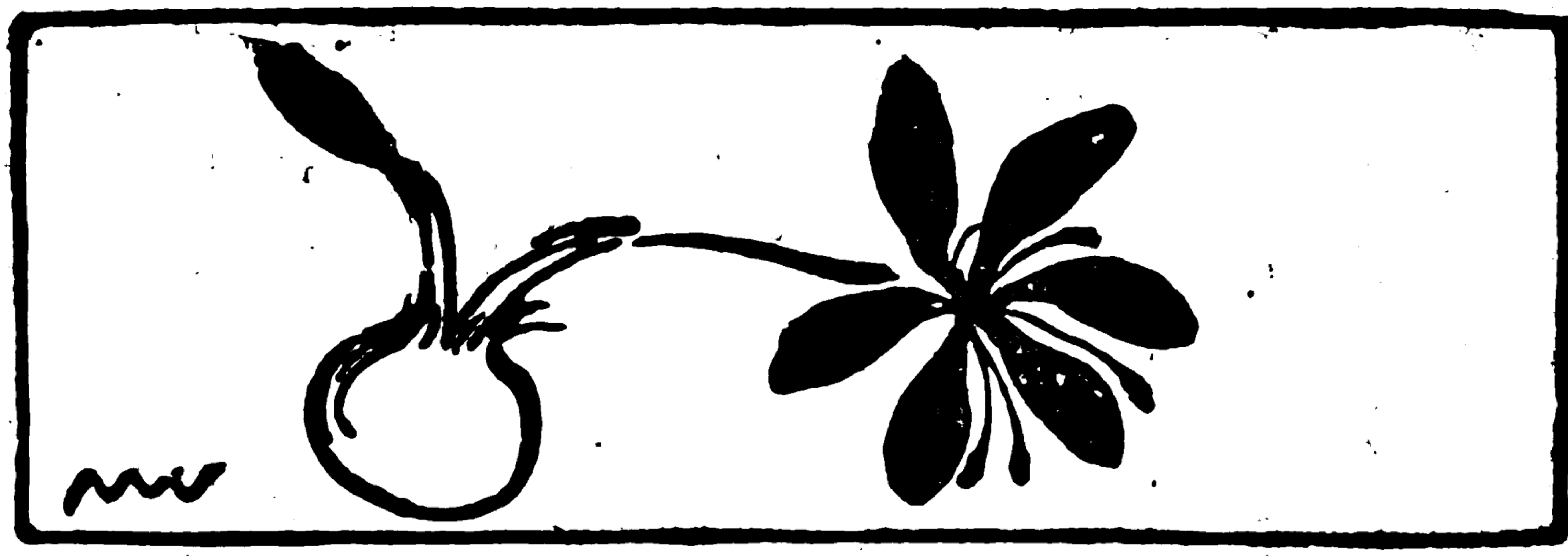
相良。風邪でも引くといかんぜ。

杉谷。だから、ええ、起こして來ました。

杉谷が入口を開けつ放しにして來た運動場の水の底のやうな月あかり。――萬燈まはりの太鼓の音だんだんまた近づく。

（幕）

（十四年八月）



銀河を仰いで

近松秋江

私はこの間一晩泊りで興津にいつてきた。興津といへば、天下の政客が西園寺詣をするので、古來世に知られた東海の名區といふ以外に、近頃殊に評判の地となつてゐるが、一箇の閑人である私にはそん用ではない、此の一夏小さい子供達をあそこの海岸に避暑にやらうと思つて、土地の樣子を見かた〲貸別莊を探しにいつたのだ。

私自身は本來海岸よりも山の方が好きで、自分だけならばやつぱり山の方へ往くところであるが、子供達や女供には海岸の方が陽氣で好からうと思つたのである。私自身の生活は、もうそれだけでも家族といふものゝ爲に自己を犧牲にしなければならぬことゝなつた。それでも私は、それを、そんなに堪え難い苦痛とも思はなくなつた。それを考へても親の愛情といふものは強い力を持つてゐるものであることを意識せずにはゐられない。

そして興津にいつたついでに清水市外の不二見にある鐵舟寺と、高山樗牛の墳墓

で龍華寺に詣うでたこともあつた。清見潟、清見寺、三保の松原などの風光は、固より夙に聞いてゐたが、昔の青年時代崇拝措かなかつた樗牛の名文によつて、清見潟の風光の美が新しい感情によつて稱へられ、そして、遂に、その埋骨の地が駿河灣の一角に選ることゝなつたので、私の彼の地に對する氣持ちが更に深いものとなつたのであつた。それで、たしか、あの大理石の面に「吾人は須らく現代を超越せざるべからず」といふ文字を刻した墓石が龍華寺畔に修築せられた翌年かに詣うでゝみたのであつた。

そこの高みからは三保の入江を隔てて富士の秀麗なる姿がまともに眺められた。樗牛は殊にその風景が氣に入つたのであつた。

此の間も、鐵舟寺畔に父君とゝもに住んでゐる、ある文學好きの青年のO氏を足のついでに訪ねて、そこの座敷に坐してゐると、淡藍色に染まつた清楚な夏の富士は白雲の間から直ちに眉端に迫つて來た。寺の山には柑橘や茶の樹畑が開けてゐるのも見るから暖い駿河國が偲ばれるのであつたが、庭のまはりに梅の木が多かつたり、到るところに芙蓉が伸びてゐたりするのも私の心を惹いた。私と東京から同行した若い實業家のS氏は、龍華寺畔に殆ど落成せんとしてゐるO氏の別莊を見て、頻りに自分もその邊に家を建てたいことを洩してゐた。三保の入江の彼方には清水港外に碇泊してゐる巨船が幾つとなく靜かな波の上に横はつてゐるのも何となく壯大な眺めを增した。

しかし今度私の興津にいつたのは、初めからそこが目的地ではなかつたのだ。每時汽車で東海道を旅するごとに、窓外の景色を眺めて、興津の一つ手前にある駿河灣の由井といふ處が私には何となく氣に入つてゐた。青い海波に迫つで、薩埵峠の嶮阻な山が聳えてゐるのが、ちよつと南畫めいた趣を成してゐた。高い嶺から山腹にかけて杉檜などが蓊

體として繁茂してゐるも見る眼に快感を與へた。

もし私の經濟上の事情が許すならば、あんな處に居つて冬を過したら好いであらうと、そこを通るたびに窓から海と山とを眺めて空想してゐた。もう四月頃にそこを通つてみると、漁夫の子達が眞赤に潮燒けのした素裸體で大きな盥の舟に乘つて磯で遊んでゐるのを見た。沙濱には美しい朱色の櫻海老を干してゐるのが見えた。

私が近頃、そんな海岸で冬を過したいといふ氣になつたのは、從來身體のあんまり强壯でない割りに冬期滅多に風邪を引かぬ方であつたのが、近年どういふわけか度々風邪に罹り安くなつて、殊に今冬などは、去年の十一月の中旬に、はじめて今年の冬の風邪を引いたのを最初として、それから殆ど毎月のやうに一と月の中七日か十日か風邪で臥床せぬことはなかつた。以前のやうに、自分獨りさへどうかかうか活きてゐれば可かつた時分とちがひ、妻子を扶養しなければならぬ責任のある身體となつて、殊に徒食してゐることの出來ない境涯の身であつて、一と月の中十日も寢て暮らすことは、直ちに一家族の生活問題に影響することであつた。その爲にもう去年の冬の初にも大磯か何處かへ避寒したいつもりでゐたのであつたが、それには人手の不足があつたり、妻が重患の後の二度目の出産を眼の前にひかへてゐたりするところから遂にそれを實現することが出來なかつた。そして案の定冬中始終風邪に冒されづめであつた。

そんな次第で今年の冬こそは萬障を排しても冬季を何處かの暖い海岸で過さねば殆ど一家族の生存問題にも係はることになるのであつた。

冬季を暖い海岸で過すとは私自身にとつて最も必要なことであつたが、今から、來る冬の準備に避寒場をつくつて置くために、ついでに此の夏、その瀨踏みとして一家族で避暑に出掛けてみるのも好いだらうと思ひついたのであつた。

東京から短時間で往復することが出來て、最も便利なことをいへば湘南地方であつたが、あの邊は何かゞ發達してゐ

た。どうしても函嶺から向うへ越していつてみたかつた。それのみならず駿河といふ國に何となく私は好きであつた。富士を見るにも都合が好かつた。そんなわけで先づ由井に志していつたのであつた。同行のS氏の妻君の弟が由井に住んでゐるので初めS氏に紹介を乞ふと、それなら自分も今のところ一寸身體があいてゐるし、此の間から少しく病氣をしてゐたので、その邊の海岸まで汽車に乘つて往くのも保養になつていゝだらうといふので同行することになつた。しかし由井は、東から行くとこれから薩埵峠にとりかゝらうとする昔の東海道の一驛が、まだ大分古風の建築のまゝ殘つてゐるやうな一と筋町であつたが、避暑客を迎へて家を貸すとか貸間をするとかいふやうな設備のある所はなかつた。それで結局興津にいつてみることになつた。

久し振りでその興津にいつてみたり、此の一と夏を其地で過すことにしたりしたことから、前にもいつたやうに、今から二十一年前に一度そこに行つた頃のことを自然に聯想して、自分の生活の推移といふやうなことを振顧つて考へたり、それに從つて又、これから先の生活が何う落付いて往くかといふやうなことを考へさせられるのであつた。

生活の資源とする確實な財産といふものを所有してゐない自分どもの生活がいかに不安定なものであるかは、私自身の過去の生活を思ひ浮べても分るとほり、これから後、窮極死に到るまでの生活がやつぱり今までのやうなものであるとすると、やつと二二年此の方生れ出でたばかりの小さい子供達の生ひ立つて行く前途に慘めな世界が擴がつてゐるやうに思はれてならなかつた。

尤も自分の過去の生活が隨分不安定な、流轉の生活であつたにしても他の何者の爲にも自己の欲望を犠牲に供しなけ

ればならぬことは何時の場合にもなかつた。不安定は不安定なりに毎時自分のことさへ考へてゐればよかつたのである。それゆゑ私が以前の生活に於てある女に金を貢いだりしたのも或は、身に聊かの係累のない氣樂さから、そんな處に手を出したのかも知れなかつた。――それは自分で承知してしたことでもあつたのだ。

そんな次第で、常に殊に物質上の不足を感じながらも私は、今日となつては、自分自身のことばかりに全力を盡して生きて來た果てゞあるところから、これから先の私の生活が小さい子供の犠牲になつて生きるべく餘儀なくされるのであつても、自分に對して多く遺憾を感ずることもなかつた。それは理屈の上で、さうあつても爲方がないといふ諦めからでなく、いはゞ自分一個の欲望ばかり思ひ詰めて生きて居るといふことに倦んだ結果とも考へられるのであつた。

つい、いふことが理屈めいて來たが、今から二十餘年前には私は小石川の高臺に住んでゐた。それは丁度日露戰爭の開始された時分であつた。その戰爭と私の思想や生活とは直接に何等の交渉を有つてゐなかつたが、私が自分自身で營む生活はその頃から始まつてゐたのである。それから此の方ずつと二十幾年の間荒い實生活の波に揉まれて喘ぎ〳〵、生きて來たことを考へると、――それが一半は、自分には誰れをも扶養しなければならぬ責任を有つてゐないといふ氣樂さから人間に對する戀愛その他の興味に刺戟せられて、生活の冒險を敢えてして、厭はなかつた點もないではなかつたが、それが自分の故意に出でた業であつたにしても、又自分の如何ともすべからざる性格の力に驅られて必然的にさういふ生活の進路を選んで歩いて來たのであつたにしても、その生活は、荒い波浪に掀翻されてゐたといつて可いか、又は、曾て一度も平坦な處に出會はない、峻嶮な坂路ばかりを絶えず攀ぢ登つてゐるもの丶やうに、肺臓がい辛つぽくなるほど悲しい呼吸を續けて來た心地がせられるのである。固よりそれを第三者の側に立つて見たならば、それくらゐのことは何でもないことなのであらうが、その痛苦を何の程度に深刻に感ずるかどうかは各人の個性によつて甚しく相違

とにかく私の生活は外見派手で、そして自分自身では何週間といふ平衡を保たなければならないやうな日々どろゝの生活を満身に浴びた時が想像せられるのであつた。下併私はその故に世間を怨むとか人世を呪ふとか、又は自己を憐むとかする氣には未だ嘗てなれなかつた。けれども私がこれまで生きて來た經驗からいつても、矢張人生は無惨な勢であるといふことを、痛感せずにはゐられないのである。

その小日向臺町に住んでゐた頃、半歳ばかりの間國から母が來てゐた。母はその年春の終ころに、その時横濱からアメリカに渡つて往く私のすぐ上の兄と一緒に出京したのであつた。母は東京に來て暫らくの間でも私と一緒に生活することに、どんな樂しい期待をもつてゐたか知れなかつたのである。そして、その時やつとまだ八つを頭の男の子供を三人、妻に預けて遠くアメリカ三界まで出稼ぎに渡つて往く兄の心事は、潤澤な旅費を持つて漫遊などに出掛けて行くやうな氣樂なものでは決してなかつたのであるが、それでも、早くから他家へ養子にいつて隨分苦勞したらしい兄が老母と二人きりで、東京まで樂しい春の旅を續けて來たことは十分想像せられるのであつた。

彼等は私の些かな家に落着いてから、寢起きの間にも私と三人の間に、いろ／＼な古いことと新しいこととの情話を持ち出して、長い春の日の立つのも知らなかつた。兄は、船の都合で、たうどうそこに二十日餘も逗留してゐた。その兄はそれからアメリカの西海岸に渡つて三四年働いてゐたが、ある秋の初の劇急性な腦出血の爲に敢えなく不歸の客となつてしまつた。

その兄が向うへ渡つて往く前に、私の家に逗留して居る間、前途についていろんな空想を描いてゐたことが、假しその幾分をも實現することが出來なかつたにしても、幾年かの後無事に歸つて來ることが出來たならば、その時母と同伴

して樂しい春の旅をして來たことが永久に樂しい記憶となつて殘つたであらう。又私の家に居つて水入らずの情話に春の宵を更かしたことが、いつまでも樂しい思ひ出となるのであつたらう。けれども此の人世には、豫期したことが常に裏切られがちである。悲しい人間の運命は、一度は明るく樂しかつたことをも、全局の上から振顧ると、それを不幸な憂鬱な色に塗り消してしまはうとする。そんな理由からも私はその頃の記憶を明るい感じを以つて思ひ浮べることは出來ないのであるが、それでも、その時々の刹那の心持ちを樂しく思つて生きてゐなかつたこともなかつた。

その頃の母はまだ六十を二つか三つ越したばかりのところで至極健康であつた。その時からまだ十年も前、私が東京へ志して出て來る時分の樂しい空想の一つは、少年の頃愛讀した日本外史の著者賴山陽が老母を伴つて吉野の花を觀たといふ、ある繪物語を讀んで、自分も將來、文事に志を達することを得たならば、必ず山陽に倣つて、老母を伴つて諸國の名勝を見て歩きたいものだと思つてゐたのであつた。今、その母を東京に迎へて一緒に住んでゐるが、私の少年の空想は容易に實現することが出來なかつた。……

それから二十一年の歲月が慌しく過ぎた。私は、つい二た月ばかり前、今年の五月の初、滿二年見なかつた老母を鄕里に歸省した。そして二年前見た時よりもひどく老耄してゐるのを見て、少なからず驚いた。八十四といへば隨分人間としては長命した方で、老衰するのは無理からぬことであるが、私はそこに、人間の死に近づいた場合の、ある物凄さと恐怖とを見ることが出來たやうに思へて、悽愴の感を抱いた。それは、今からもう三十年も前に私の、上から二番目の兄が二十九歲の壯齡でインフルエンザから肺炎を起して死んだ時の、人間の一命を奪ふ病勢の猛烈な有樣を面りに見て驚いたのとは又別な意味に於て死といふものゝ如何に暗澹たるものであるかを見たのであつた。

母はアメリカに往く兄を見送りがてら東京に來てゐた時分から、ずつと十年ばかりの間は極めて息災であつた。そし

…父の憎れなる死に……も、見たところが……程つ……

た。尤もそれは、精神的打撃を強く感ずるに堪へないくらゐに、もう生命の力が衰へてゐたからであつたかも知れなかつたが。とにかく母は七十四までは、身體に少しの異狀もなかつた。七十四の春の初になつて突然中風を發して、その時一時は、これが序になるかと思つたが。よく／＼壽命があつたと思はれて、健康は又追々囘復して、これから半身自由な身體にはなつたが、尚ほ十年後の今日まで生き延びてゐるのである。その間にも、もう今度こそはいけないだらうといふやうな騷ぎをして、はるばる東京から驅付けていつたことも一度や二度ではなかつたが、身體の組織が餘程强壯に出來てゐると思はれて、その度に病衰に打勝つことが出來た。子としては親の長命してゐるのを見ることは、最も大なる悅びの一つであつた。父には三十餘年前死別れたが、その代りにせめて母の長命してゐることは遺傳的に、父の早死によつて短命を豫言せられてゐるものが、その爲に自分の命數を乘除せられてゐるやうな氣がするのであつた。私は一昨年の春歸省した時に、心ばかりの酒宴を開いて母には孫に當る多勢の甥達を招いて長壽を祝したのであつた。その時はまだ、暖い春の日に炬燵にあたりながら不自由な手を運ばして何かしら自分の身に着けるものをつゞくつたりしてゐた。そして今年いつて見て、始めて、めつきり老衰してゐるのを見て驚いた。

その間には例の關東の大地震があつたり、又私自身につゞけさまに二人も子供が産まれたり、その母親が重患に罹つたりして境遇の變化があつたゝめに、度々鄕里の甥から、近頃は祖母の樣子が大分先と異つて來たからぜひ一度早く見に來てもらひたいといふ催促があつたにもかゝはらす、その內にそのうちにと、心ならすも一日のばしに日を送りながら容易に尻が上らなかつた。

甥は、そんな手紙のたびに、祖母が呆けてしまつて、風呂湯の中に鯉が泳いでゐる、やれ皆な早く來てくれといつて

騒いだり、若い者の肉眼でも見ることの出來ない向うの山の上に人が歩いてゐるのが見えたり、御飯を食べたのを忘れたりするといつて、手紙で私達を笑はしてゐた。

十年前に中風を患つてからは、少し調子の變つた時にはそんなことはめづらしくなかつたので、私は、又いつものだらうくらゐに考へてゐた。それが五月に往つてみると、老耄は想像してゐたよりもずつと深刻になつてゐた。

誰れも親が死ぬのを悲まぬものはないが、八十四年も生き延びた人の壽命を、私はこの上尙ほ慾ばつて長かれと、强いて祈らうとも思はぬ。それよりも、私は、宛も老木の枯死してゆく如く老衰した人間の靈魂が、今にも地上から何處かへ離脱せんとして暗い冥途を求めつゝ昏迷してゐる狀態をまざ〳〵と眼の前に目擊してゐるかのやうな恐ろしさに打たれたのであつた。

彼女は半分以上精神が呆やけて、意識が錯覺してゐるがためにある場合には、その行動といふことが子供のやうに正直であつた。何か話をしてゐることが後からあとから筋道をまちがへたことに變つていつた。自分が獨りで續けて言ふことには違つたところはなかつたが、今まで他の者と交へてゐた話題からひよいと他の方へ脫線してしまつた。

「お婆さん、そのことぢやないんですがな。」傍に附いて居つた私の姉が寂しさうに笑ひながら、正していつた。

しかし、そんなことは何のことか老婆には解らなかつた。

その姉は私達同胞の中の一番上で、もう六十五の好いお婆さんであつた。近年悴の職務の都合で神戸の方に住んでゐた。老母が四月の末に又一寸樣子が變つた時に、もう度々の事なので、方々の親類に知らすことは遠慮したが、產みの子の姉と私にだけは生きてゐる間にもう一遍會ひたいといふ本人の希望で至急見に來るやうに通知を發したのであつ

おに寝つてゐた。

いつたその晩から姉は老婆の寝床に二人で枕を並べて夜を[illegible]つてゐた。此の四月中は日が少し暖かつただけで、格別病氣といふほどの病氣でもなかつたが、生命の力はもう大半枯死してゐるのであつた。五月の月に入つてからも足が氷のやうに冷えるといつて始終炬燵に這入つてゐるにも係らず、眞夜中に熱くつて堪らないといつて、どうかするともぞく寝床から這ひ出して、縁側の硝子障子を開けて素肌になつて夜風に吹かれてゐたりすることがめづらしくなかつた。

傍に寝てゐる姉がふつと眼を覺まして、

「お婆さん便所ですか。」

と、訊ねると、老婆はきよとんとして、

「お前何處へいとつたのか。」と、あべこべに訊ねた。

「さうぢやありませんがな。お婆さん便處に用事があるかときいて居るんです。」

「いゝや、わたしや、そんな處に何にも用はありません。」と、知らんことのやうにいふのであつた。

姉は爲方なしに泣き笑ひをしてゐた。

「わたしも長生きはしたいと思ふけれど、こんなに長く生きようとは思はん。」そこへ隣の座敷から眼を覺まして起きて出て來た私に向つていつた。

「そこは寒いから、お婆さん此方へ入んなさい。」といつて姉と二人で寝床の中に連れ込んでおくと、彼女は又もやむくりと起き上がつて、

「不思議なこともあるもんぢやゝ」と、さもさも不思議さうな聲を出した。

「この熱いのに、あなた方は皆た寒いとは若い者のやうでもない」と

そんなことをいひながら、又寢床から立ち上がつて、枕頭に置いてある竹の杖を取つて、何處かへ探りさぐり往かうとするやうに、もぞくく歩き出した。

姉自身もいゝ年寄りであるので、この三四晩の介抱に大分睡眠不足を感じてゐた。

「お婆さん便處に用がないのなら、靜つと此方へ來て寢てゐなさい。」

私は少しく大きな聲を出した。

「いや、わたしや自分で好きなやうにするから…………お前がた入らんことぢや、夜々中寒いのに早う寢るかいゝ。」剛情な調子でいひながら、がたぴし硝子戸を開けて何處か外にでも出て往きさうである。

姉は又泣き笑ひの顏を拭ひながら、

「今、熱いあつついといふとるかと思ふと、此度寒いといふたり。…………もうこんなになつたら、熱いのも寒いのも分りやせんのぢやなあ。」といつて笑つた。

私も大きな欠伸を一つして、

「毎晩これぢや全く傍の者がまゐつてしまふ…………お婆さん便處の用事でもないのに、時々何か探ねるやうに夜でも晝間でも何處かへ往かうとするやうに、歩き出すのは、何か入るものがあつて探してゐるの？」私は訊ねた。

「…………死ぬるのはもうそれほどにも思はんが、何かゝら途に迷ふやうな氣がして、どうもならん。」

杖に縋つてそこに立つたまゝ獨り言のやうにいつた。

私はこれを聞いて、何ともいへない悶え[illegible]
間に時々確れるこんな暗い心の中に這入つてゐなければならぬ運命のものだと思ふと、老婆のそこに寝たつてゐる姿にある陰氣を感じた。さう思ふと老婆が可哀さうであつた。が、それは、いかに[illegible]る名僧知識の有難い說教を以つてしても、どうすることも出來ないことであつた。

豫期してゐた以上に生き延びた母はもう夙うから死の到ることを覺悟して、姫雄に凭りかゝりながら、覺束ない假名文字で辭世の歌のやうなものを幾つとなく反古紙に書きしるしたりしてゐた。そのうちにはちよつと面白いものなどもあつた。しかし此の頃ではもうそんなことさへ物憂くてする氣がないまでに腦の機能が衰へてゐた。

いくらかまだ性根の確かな時分には、死といふことを道理で判斷することも出來るので、吾々が信仰の功德によつて救ほれることの出來るのもその時までゝあつた。肉體を組織してゐる總べての機關や要素が衰へて腦の働きが退歩して來ると、死そのものは極めて自然の推移であつて健康體の者が想像するほど恐ろしいことではないかも知れぬが、そこに衝つてゐる瞬間が無明の暗に迷ふやうな氣持ちに襲はれるのもまた極めて自然のことのやうに思はれた。

私は、自分の力で出來ることなら何處へでも老母の手を引いてやらうと思つたが、それはかりはどうすることも出來ないことであつた。そしてたゞ微かに喘息を洩しながら、彼女の枕を力に、老い衰へてそこに突立つてゐる容姿を見てゐるほかなかつた。

そこへ次の方の室に寝てゐた兄がまた起きて來た。

「お前方が來てからまだ大分様子がよくなつた方ぢや。此の間うち悪かつた時にはこんなことぢやなかつた。」

「こんな具合ぢや一人きり此家へ寝さして置くのは、心配で爲様がない。神戸の自分の家へ歸つても、夜半にふつと此

處のお婆さんのことを思ひ出したら、氣になつてとても眠られんと思ふ。何時起き出してそこへ緣端から轉げ落ちるかも知れんもの。」

苦勞性の姉はいふのであつた。

「いや、自家でも氣は付けてゐるんぢや。此の間中ずつと惡かつた時には離れが此處に寢て居つたんぢやけえど、少し好うなると、お婆さん自分の方から、他一人で寢る方が氣樂でえゝから、お前方あつちへ行て寢てくれといふんぢや。」

「お婆さん自分でそんなことをいふたて、自分で自分のことが少しも分りやせんのぢやもの。」

此の間中の老婆はどうかすると自分の寢室から幾間を隔てた上り口まで、他の者の寢てゐる間に這ひ出して來て庭に下りてがたがた入口を開けて外に出て往かうとした。その物音に眼を覺ました他の者が、

「お婆さん何處へ往かれるのですか。」と訊くと、彼女は

「自家ぢやどうもよう寢られんから、河原へいて寢る。」

河原といふのは、家はづれの小川の土手に墓地があるのでそれを意味してゐるのであつた。

「河原へいたつて寢る處などありやあしません。」

抱き留めようとすると、老婆はぷりぷり怒りながら、

「留めずにわたしの好きなやうにさしておいてくれ。」といつて、容易なことではきかなかつた。

中風から脚が惡かつたが、近頃はそれがずつと甚くなつて、突立つた場處から一足踊り出すのも手間がかゝつた。

彼女は、私達がそんなことを話してゐる間も、それが自分とは何の關係もないことのやうに、耳にも入つて居らぬ様子で、きよとんと突立つたまゝ、動くことも出來なかつたが、

「それ、ついでに小用を一つ[illegible]」

姉の姉は、[illegible]一人で[illegible]あつて、私と二人きりの時など、

「一體此處の家では、いつもあゝしてお婆さんを一人で寢さしておくのだらうか[illegible]

ちやと思ふ。……わたくしも何時までも此處に居つてみてあげればえゝが、さういつまで居ることも出來んし。お婆さんがあんな、一尺歩くにも一時間もかゝるやうな足附きで、ひとりで寢たり起きたりするのを見て居ると、可哀さうで私は歸るにも歸られん。おぢいさんなど時々起きて來て見るんだやらうか。」

といつて、心配してゐた。彼女は必ずしもよくある姑根性からばかりでもなかつたらうが、弟嫁やその息子達の若い者夫婦などが、八十四にもなつて、いさゝか死期をとりちがえてゐるやうな老母を、眞心から傷はつてゐるであらうかといふやうな疑念を抱いてゐた。もう六十を通り越した、實弟である此家の主人が母を粗略にするとは少しも思はなかつたが、いつも孫達にかまけてゐる弟嫁のしてゐることには少からず不安があつた。主人は居村から、一里ばかり離れた處にある或る會社の事を專ら擔當してやつてゐるので社務の繁忙な時などには七日も十日も戻つて來ないことがめづらしくなかつた。そして二人ある孫の六つになる大きい方を弟嫁であるその祖母が抱いて寢てゐた。その相續人であるすぐの孫なども、老祖母に對してあんまり優しい口をきかぬといふやうなことを、それが事實であるかどうだかは別として、彼女ははたから何時となく聞いてゐた。

「こんな汚い蒲團でなく、もつと綺麗なのがいくらもあるでせう。それを出して着せてもらうたらよろしいがやありませんかお婆さん。」

姉は、炬燵にかけてある、むさくるしい、手織り縞のやうな古夜具を撫でゝみて、老母の耳元に聲をかけた。

「もう二十年も三十年も、……それよりもつと昔の物ぢやないか。……こんなものは私がまだ嫁にゆかぬ前に此家で織つたことがあつた。」

六十五歳の姉は情熱のあまり、そんなことを誇張していつた。

「う丶、この蒲團は少し暑苦しいなあ。……私が夏の間に一つ三越あたりで出來てゐる、輕いのを買つて送つてもいい。」

私は東京へ歸つたらそれを必ず實行しようと思つたが、それくらゐのことは、其處の家でしようと思へば何でもないことであることを思ふと、わづかの、夏蒲團を買ふ金を、自分が惜む、おしまぬといふことよりも、其處の家で、老祖母に對してそれくらゐの注意を拂つたらいゝのだがといふ氣になつた。けれども、萬事に質素なそこの家では誰れでも皆な手織り縞のやうな古風な夜具を夏も冬も用ゐてゐるのであつた。

——少しく餘談に入るが、私は、姉が今誇張していつたやうな、大きな縞柄の手織木綿の大夜具や蒲團が、姉や私の產まれたその家に昔からあつたことを記憶してゐる。——と冬中通して用ゐられたそれ等の夜具類が、土用最中になると、解きほぐされて洗濯をして竿に懸けて、裏庭一ぱいに乾されてあつた。その頃まだ存命でゐた私達の祖母が、そんなことには、自分がまだ主になつて采配を振つてゐるのであつた。そして一旦水濯ぎをした蒲團の皮を今度はすつかり解いてしまつて、それに、一寸でも觸ると痛いほどの強いつよい糊をしてそれを、がは〳〵するほど土用の炎天に乾かしたのを、大きな砧で女中共が、よいしよ〳〵と掛聲で、とん〳〵持ち柔げてゐた。夏の農繁時には何處の家でも用が多いので、そんな洗濯物がとかく豫定よりも遲れがちであつた。祖母や母などは、それに氣が急かれるやうな調子で、

「早うせんと、もうぢきてんぽおどしが來る。」

と、いひ〳〵砧を持つ手を速めた。私の十歳ばかりの頃は、父の代から酒造家であつたので杜氏などに着せる夜具の

衣服などが多かつた。

「てんぼおどしに何のこと？」母によく訊ねた。私にはこの言葉の意味が能く分らなかつたが、[illegible]

訳であらうと思ふ。まだ若いと思つて、うつかり油断をしてゐると、すぐに[illegible]

間に洗濯するものは、ちやんとして置かないと着る物に事を欠くといふほどの意味であつたらしい。

「……土用半ばに秋風ぞ吹くといふから、今に追き涼しくなる。」といつて、母は砧を搏つ手をとめて、その時分もう、めつきりと高くなつてゐた碧い空を打ち眺めた。

そのわたりだけ割合に土地の開けた谷川に涼しい初秋の風が渡つて來るのは、それから間のないことであつた。百人一首の中にある「昨日まで早苗とりしがいつの間に稲葉そよぎて秋風ぞ吹く」といふ素樸な古歌の意味そのまゝの感じが草深き賤の伏屋に忍ばれるのもその頃であつた。

それから三十年も四十年も過ぎた此の頃では産業状態が變遷して來たので、私の故郷でももう砧を打つ音が聴かれなくなつた。三抱もあるやうな大きな木の株で造つた砧が二つもあつて、幾代の昔からの人が衣を打つて、つる／＼滑るやうになつてゐたが、近頃偶に歸郷しても、もうそんな物は見られなくなつてしまつた。おほかた割つて風呂を焚く薪木にでもせられたことゝ思ふ。さういふ世相の變遷を進歩と考へてみても三十年四十年の昔に比べて今の世が頗ち住み好い世とも思はれない。

姉はこの先尚ほ五六日も逗留して老母の介抱をしてゐたら自分も、まだその附近に住んで居る伜や娘達の處へも一三ケ處立寄つて、それから神戸に歸らなければならないが、自分が去つた後のことを考へると、足腰の[illegible]

を引かれて歸るにも歸へられないやうな氣のすることを私に向つて喞ちてゐた。

そんなにいはれると、私も何だか、老母の側から、又遠くの方へ歸つて往くのが氣の濟まぬやうな心持ちにならされるのであつた。しかし、こゝの家でも相當に氣は附けてゐるやうだから大抵大丈夫だらうと思ふ。………それでも眞實の實の子に介抱してもらふのが、何よりも一番に恩みになるのだから、あんたはもう自分の家の事は構はない身體だし、始終來つきりにしてゐるといふことも出來ないだらうけれどあんたが二た月に一度とか、出來るなら、每月一度づつ來て、一週間も側に居るのが、一番いゝことだと思ふ。もう年を取つて、兩方とも世を讓つてゐる人なんだから六十五になる婆さんと八十四になる大婆さんと二人で生きゐて話してゐられたら、それくらゐ仕合せなことはないぢやないか。……私も男であつても、出來ることなら、少し長く側に居つて上げてもいゝが、まつたく困るよ、五十にもなつて小さい子供が二人も殖えかけて出て來て、私などはこれから大いに働かなければならないのだから、年寄りの事も思はんこともないが、もう先きの見えてゐる者のことよりも、まだ〳〵先きの遠い者の方のことを考へて遣らねばならん。………何といつても此處の家やあんたの家はいゝさ。主人に萬一の事があつても、後がどうもならぬといふやうな心配はないんだから。そこになると私などは自分が死んだら、後の者は忽ち餓え死をしなければならん。」

私は、老母の五月炬燵に、自分も足の尖だけ踏み入れて、肱を枕に身を橫へながら、太息を吐くやうに、さういつて笑つた。

姉は考へるやうに默つてゐたが、

「そんなものでもない。お前そんなに早う死ぬものかな。」

「いやさうぢやないよ。何時死ぬかも知れん。たとへ明日の日に死なうとも、死んだ後が困らぬやうになつてゐなければ

に少しも安心して居られやしない。」

私は、絶えず思つてゐることを搾み出すやうにいふのであつた。實際そんなことを思つてゐると、今にも自分は死んでしまふやうな氣持ちに衝かれてならなかつた。まだ今、乳を飲んでゐる最中の赤ン坊や、そんな後が早かつた爲に無理に乳を離れるべく餘儀なくされた、上の子供や、さういふ、口さへまだ利けぬ二人の乳呑み兒を遺して自分は、何時陥ち掛つて來るかも知れない運命の星の下に生存らへてゐるのだと思ふと、まるで底の知れぬ深淵の斷崖に臨んで立つてゐるやうな不安を感ずるのであつた。勿論、そんな危惧の觀念に衝かされ勝ちなのも、自分の死後に殘される小さい者共の慘めさを悲む氣持ちが主なる理由であるにはあつたが、又ひとつは、次第に老境に入つて來た自分を生存の悦びに繋ぐその兒等の生育を樂む幸福の感じを意識するの餘り、どうかして、その幸福が毀たれはせぬかといふ取越し苦勞の不安も大いに手傳つてゐるのであつた。

「私が死んだら、二人の子供を一人づつ此處の家と、篤（姉の相續者）の處へ頼んで引取つてもらふよりほかはない。……さうしてくれるだらうな？」

私は、今にもそんな事が起りはせぬかといふやうに半ば眞面目な表情をして、半分戲談のやうに言つた。

「そりやお互だから、もしそんな事があつたら、それは又その時のことで、どうでもならあな。」

姉は穩かな氣持ちでさういつた。

それでも、もしそんな場合が事實起つたならば、死ぬる自分よりも、自分の手を離された兒等の不幸が透徹して何處までも思はれるのであつた。それを考へると、實際、子供達は生れて却つて不幸であつたのだ。が、又さうばつかりも形付けて考へ決められない所に、やつぱりこの人の世はいゝ加減な、不徹底なところで、放念して置いていゝのだとも

思はれた。

十日ばかりそんなにして、古い、離れた家で、死に瀕してゐる老人の傍にゐる間に、私たち、へたつたやうになつてしまつて、何もしないでたゞ靜としてゐても生欠伸ばかり出るやうな氣持ちになつて來た。

初め東京驛から夜の汽車に乘つて立つた時や、その夜が明けて、尚ほ曉霧の底に眠つてゐる美濃近江の野路に燃る秋を眺めたりした時には自由な旅行氣分を享樂してゐたが、その十日の間に清新な氣持ちはすつかり凋れて興が醒めたやうになつてしまつた。氣持ちばかりでなく身體までが何となく疲勞を覺えて來た。東京を立つ前にいろ〱空想してゐた豫定の旅行氣分も崩れてしまつて、もう此の上何處へも行つてみようといふ興味も消えてしまつた。

そして尚ほ五六日逗留して行くといふ姉よりも一と足先きに私は京都まで引揚げて來たが、京都では久し振りに自由な氣持ちで、前にも大抵一度は見たことのある洛の内外の古い寺院の庭などに行つてみて、靜かな泉石の鑑賞に浸つて見たいと思つて樂んでゐたのであつたが、そんな庭へさへもう一歩も足を踏み出す元氣がなくなつてしまつた。これは鄕里にいつてゐる間に氣持ちが倦んでしまつて神經衰弱に罹つてゐるのだらうと思つて見たりした。

そんなこととの一面には、東京に居る二人の小さい者が、五月の好い季節になつて、わづか十日も見ぬ間にもどんなに元氣になつて、よく遊んでゐるであらうか。それを早く歸つていつて見たいといふ心地に唆られるのでもあつた。

そして京都ではたつた二泊したきりで何處へもいつて見ず、翌々日の特急列車に乘つて歸京を急いだ。

留守は、よく働いてくれる年とつた女中や子守などがゐて人手には不足はないし、時候もよくなつたので、殊に、この一月からやつと歩き出した大きい方の子供が、さぞ元氣になつてゐるであらうと、それを一刻も早く見たいと思つ

て、門の外で俥を降りるなり玄關に入つて、そこへ迎へに出て來た妻に、

「どうだ？子供は皆な何事もなかつたか。」

と、何より先きにそれを訊くと、

「百合ちやんが、一週間ほど前、今月の初にひどく又寒かつた時から、少し風を引いて、まだ癒らないんですつ」といふ。

私はそれで土間に突立つたなり、

「なに百合公が風を引いた。熱はあるのか。」

「えゝ、八日の日だつたかに三十八度と一寸あつたのです。それから、それでも段々良くなつて、もういゝと思つてゐたところ、又昨日あたりから少し熱があるんです。」

私はそれを聞いて、靴を脱ぎ棄てる間ももどかしさうに座敷に上つて、急いで奥の八疊に入つていつてみた。子供はもう、うと〳〵眠つてゐるところであつたが母親が傍に寄添ふて、

「百合ちやん、これゆりちやん。お父ちやんがおかへり。」と、そうつと呼び覺ました。

眠つてゐるその顏を電燈の明りに見ると、五月の好い季節に、十日見ぬ間にも、きつと先より肥つてゐるであらうと思つてゐた想像は全く裏切られて、前よりは見ちがえるほど憔悴した顏の色が蒼く血の氣が失せてゐた。さういはれて、ふつと眼を覺まし、私の立つてゐるのを見て、ちよつと笑顏を見せたが、そのまゝすぐ傷々しさうに咳をしながら又うと〳〵眠りに入つた。

私はそれで、ひどく失望を感じた。久し振りに老母を見舞ふた郷里でも、何が原因といふ譯もなく氣分が錆れてしま

ひ、京都でも樂しい旅行氣分が失せてしまつて、何に心を向けて樂しく生きてゐるといふ目標もない、たゞ早く東京の家に歸つて、二人の小さい子供を交る〴〵抱いて、高く差上げたり、揺ぶつてみたりするのが、まあせめてもの樂みくらゐに思つて戻つてみるとそのとほりである。私はそこで又洋服も脱がずに、暗い顏になつて小言を始めた。

「いつでも私の留守となると此の通りだ。………さぞ、一寸見なかつた間にも、今の好い時候だから、寒い時分とちがつて、元氣になつてぴよん〳〵飛び廻はつてゐるだらうと思つて、樂んで歸つて來たのに、何だ、俺の留守の間に風邪を引かしてゐる。此の子は、去年のあの時乳に離れたために病院に入れたが、それは病氣の爲に入れたのではない。生まれて今日まで、三十八度などといふ熱のある風邪を引いたことは今度が始めてだ。………私が居ないと、すぐ此のとほりだ。旅に疲れて、やれ〳〵家に戻つて一と安心しようと思つて戻つて來ると、これぢや安心も休息もあつたものぢやない。すぐ又心配しなければならん。………俺も一體全體何時になつたら少しは安心が出來るんだらう。………そりや病氣といふものは、どんなに氣をつけてゐたつて、出る時には出て來るが、これの風邪なんぞは、確かにお前の不行屆きからひどくしたにちがひない。それは、本當お前のしてゐることで、私の見當は外れないんだ。」

私はさういひながら、そこにどつかり尻を落して兩脚を投げ出した。

家内はそれを聽いて默つてゐた。自分にも奥さんと一緒に大分責任を感じてゐるらしい樣子をしてゐる年上への女中も同じやうに默り込んで板の間の方に下がつてゐた。

私はやゝ暫くして又口を利いた。

「そして今、熱は何度あるんだ。」

「今日は昨日よりもずつと好いんです。一度此の間三十八度あつたきりで、それからもう癒つたかと思つてゐたら、昨

日の晩夜中癇を起して、百合ちやんばかりぢやない、お前さんも病氣になつたくらゐです。それで今日早く女中に連れていつて診てもらつたら、なに大したことはない、少し氣管を惡くしてゐるから注意したがいゝといつてゐました。今日は七度二分です。……今日は昨日の晩ほど泣きませんなあ、おばさん。」

家内はさういつて女中の方に話しかけた。

それで女中は又茶の室の明るい方に顔を出して來て、

「えゝ、今日はずつとおとなです。昨日の晩は泣きどほしでしたもの。」

私はそれでも甚く不興な顏をして、

「なに今日だつて、ちつとも良かないぢやないか。あの顏色を見なさい、眞靑ぢやないか。そしてたつた十日ばかりの間にひどく顏が瘦せてゐる。その七度二分くらゐの熱が、私自身にも覺えがある。咽喉や氣管に絡んだ熱といふものは、餘程注意しないと、なか〳〵とれるものぢやないんだ。」

「赤ちやんも引いてゐるんです。」

「二人ともやつてゐるのか。」

「今月の初め頃又陽氣が一時馬鹿に寒かつたんですもの。……その時あゝ少し風邪を引いたなと思つてゐると、八日の日になつて眼がひどく赤くなつて、少し變だから手をあてゝみると大分熱があるらしいから、すぐ細川さんにいつて診てもらつたんです。きつと痲疹だらうと思つて、さうぢやないでせうかといつて訊くと、細川さんもまだ出來ものは出てゐないが、きつとさうかも知れんから氣を付けて決して外に出さないやうにして置くがいゝ。痲疹のやうだつたら、往つて診てやるといつてくれたんですけど、やつぱり風邪だつた。赤ちやんも、きつと百合ちやんのが移つたんでせ

う。少し咳をしてゐましたけれどこの方はもう何でもないといつて、藥もくれないんです。」

「うむ、寒いことは馬鹿に寒かつた。もう五月になるといふのに、今年はどうしてかう寒いんだらうと、溢しながら私達も田舍でお婆さんの炬燵に脚を入れてゐた。それで少しも、熱くつて氣持ちが惡いなど丶いふことはなかつた。これぢや東京もきつと寒いにちがひない。子供に風邪を引かさなけりやいゝがと思つてゐたら、果してそのとほりだつた。……醫者は何といふか知らんが、どうも顏色がまるで血の氣を失つてしまつてゐる。明日早速連れていつて診てもらはう。」

私は、自分の家に戻ればもどるで、そこも亦た何だか牢獄のやうな氣がして、これでは何處へいつても生きてゐる間は安らかに精神の休息する場所はないやうに思はれた。

近處の醫者はもう大分良くなつたといつて、熱も七度二分くらゐなものであつたが、朝早くから寢るまで一日まめに動いて少しの間も靜つとしてゐない子供なので、その程度の輕微な熱が何時まで立つても除れなかつた。傷々しいやうな小さい咽喉でしてゐる咳がだん／＼氣管支の奧のもつと深いところへ入つて行くやうで、それを見てゐると自分の咽喉や胸が痛くなるやうな氣がした。私は毎日何度といふこととなく、子供が咳をするたびに面を顰めて、

「私が居ないと定まつて此のとほりだ。きつと、寒いからといつて餘計に着せてやるといふやうな細かい注意をしなかつたにちがひない。いくら暦が五月になつたつて、寒けりや二月も五月もあつたものぢやない。少し長引いたつて、今に癒るはなほるだらうが、どうも私がゐないとなると留守の間に何かしらん事が出來てゐる。これぢやとても安心して俺は死ぬことが出來ん。」

私は又してもそこへ考へを以てゆくのであつた。

普通ならば放擲つておいてもゝう癒るのであつたが、私自身の氣が濟まないところから、それから一週間ばかり樣子を見たうへで又牛込の方の小兒科に十日ばかり通けてみた。その結果此頃も今までよりは大分進むやうになつて健康はよい〳〵回復して來たが、近年冬中每月風邪ばかり引いてゐる自分のことを考へると、とてもこの分では、これ等の小さい者の將來はおろか、現在さへも幸福にしてやることは出來ないやうな氣がするのであつた。それでやがて來る恐ろしい冬の支度に何處か、騷い浮世の風の當らない暖い海邊を求めて、そこに家族ばかりでなく、うるさい世間からも逃れてゐたいやうな氣持ちがするのであつた。

しかしながら、いくら身體ばかり遠くへ持つていつても、生活の資源が東京に繫がれてゐる以上は、絕對的に世間からの交涉を打切つてしまふことの出來ないのが、生きてゐる限り、どうすることもならない苦惱であつた。そんなことを思つてみるにつけて、煩はしい現實から逃れようとするには、せめて過去に對する懷しい思ひ出でを現在の上にまで引伸ばして來て、そこに、自分の聯想作用によつてイリユウシイブの世界を造り出して、その氣分の中に閉ぢ籠つてゞもゐるよりほか爲方がなかつた。

兎に角私は何といふことなしに今から二十年も三十年も前の東京が懷しかつた。その頃は德富蘆花氏の「自然と人生」によつて、自然を愛する心を思つたり、國木田獨步の「武藏野」を讀んで武藏野の自然を懷しんだり、又は紅葉や一葉の小說によつて古い東京の街やそこに住む人間に興味を湧かしたりしたのは、二十餘年後の今日となつては、もう遠い夢の如く果敢なく消えてしまつた。その時分には、年齡とゝもに私自身の心がまだ若かつたから、凡ての人生の若

望を將來に期待してゐたから、これから尚ほ先きになると、人間は——從つて自分にもどんなに樂しい幸福が待つてゐるか知れぬ、いや、必ず幸福が待ち受けてゐてくれるに相違ないといふやうな希望に滿ちた心でゐたから、それ等の幸福が滿たされない前であつても生存といふことが樂しみであつたのであらう。併しながらそれから二十年三十年の歳月が過ぎてしまつた今となつてみて、人生に對する興味といふものは、若い頃期待してゐたほど樂しいものではなかつたといふことが分つてみると、その頃懷しんだ自然や人間が都會のやうなものまでが自分を裏切つたやうにも思はれるのであつた。

それは、一寸した東京の市街やそれを圍繞してゐる市に近接してゐる古い武藏野の森林や田野の變化を思つてみても、そんなことが考へられるのである。獨歩の詩眼に映じた武藏野は實に懷しい自然であつた。そして私自身もその散文詩に書いてあるとほりの心持ちで武藏野の自然を懷しむことが出來たのであつた。然るに今日となつては、その武藏野の處女地がだん〳〵都會の人間によつて開發されて交通が便利になつて來たゝめに、それ等の自然が珍らしくなくなつたゝめであらうか、武藏野が必ずしも以前のやうな懷しい自然ではなくなつたやうな氣がする。それは一つは武藏野が客觀的に變化したゝめと、今ひとつの理由は、自分の主觀的な氣持ちの變化も手傳つてゐるのであらうと思ふ。二十年も三十年も昔の、何か知ら希望に充ちた懷しい氣持ちで自然を眺めたり、都會生活を樂んだりすることが出來なくなつたのは、それが自分の年齡のせいであるとすれば、どんなに悲しんでも爲方のないことである。

年齡の必然性は、凡てのものに若い時分のやうな空想めいた希望を樂むことを許さなくなつたとゝもに又一面から考へると、たゞ自然を自然としてそれ等の風物をありのまゝに樂しむことで滿足するやうになつたのは、五十にして天命

を知るといふものかも知れぬ。

今の私にもいろ〳〵希望はある。けれども、それは二三十年も前のそれとはひどく異つてゐることが知れる。私は、自然や凡ての人事に對して空想に充ちた感懷を寄せたことは、私の生活にとりて何よりも最も大きな失敗であつたことを悟つた。私は最早そんな超現實的な空想に惑はされてはゐられない。たゞ自然と人事とをかけ値なしの現實のまゝ樂むことが出來ればそれで滿足である。

私が此の文章の書き始めのところでいつたやうに、二十餘年前と今日とでは、今現に來てゐる駿河灣の風光に對する氣持ちだけでも、甚く變つてゐることを感ずる。私の心は今も尙ほいろんな不安や惱みに充ちてゐるやうであるが、それでも二十餘年前のやうに、たゞ徒らに焦燥する氣持だけでもやゝ鎭靜して來たのは、或は健全なる意味で靜まつたのではなくして、それだけ、若い氣持ちが、その二十年三十年の歲月の勞苦に腐蝕されて、消磨されたゝめであるかも知れぬが、それならばそれでも私はそれを悲まうとは、決して思はぬ。此の間も、こちらから三保灣のすぐ對岸に見えてゐる久能山の東麓鐵舟寺と龍華寺とに詣つてみたら、寺の境内はそこら中に芙蓉の木の多いのが眼についた。私は何となく芙蓉が好きである。いつの年でも、懷しい初秋の風は先づ芙蓉の葉から渡りそめるやうな氣がする。この地に來たのは七月の末であつたが、その頃は座敷から見渡すと、丁度水平線につゞいて見えてゐる三保の松原や久能の山つゞき、その手前に水に醮つて見えてゐる江尻、淸水の港内に碇泊してゐる外國通ひの巨船など白い水蒸氣に模糊として霞んで見えてゐたが、昨日今日曆の上で立秋を過ぎると同時に實際海の上にも空の色にも冴やかに秋の立つのが眼に見えて來た。夕陽の沈む頃淸見潟の波打つ際に立ちいでて海から吹いて來る凉しい風に吹かれながら東の方を見ると、そちらには遠く海の方まで裾を曳いた愛宕山が晩靄の中に淡蒼く浮き立つて見える。その左の方には箱根の山地が靜かに雲を被

いでゐるのも見える。今年の夏はとかく雨氣が多かつたゝめに土川中富士はあんまりよく見えなかつたが、それでも此の間からは時々密雲の切れ目から折々その雄姿の片鱗を露はして來た。

右手に三保の入江に水の色が日に〳〵冴へて、その向うに久能の山つゞきが、もう此の頃では山の木立の布置から麓に拓開かれてゐる柑橘や茶畑のやうなものまで明るい日に輝いてゐるのが見えてゐる。

以前のやうに、今に懐しい新秋が來たら、そこには何か知ら樂しい幸福が自分を待ち受けてくれてゐるといふやうな空想はもう痕跡もなく打破されてしまつたが、それでも季節々々の移り變りには、たゞそれだけでも懐しい氣分の悦びのあるのは爭はれない。やがて八月のをはりになつたら東京の西郊の家に歸つて狹い庭先に青葉を茂らしてゐる芙蓉や葉鷄頭などに水を灌ぎながら、新竹の清風に搖れる音を聽かうか、それとも此のまゝ來る一と冬をつゞけて此處で過さうかなどゝ迷つてゐる。小さい子供達はさすがに海邊の空氣が健康に効目（きゝめ）があると思はれて、こゝへ來てから大分手足なども肥つて來たやうである。私達にそれ等の者に夜中惱まされた揚句、やつとこさ彼等が蚊帳の中に靜まつたあとで涼しい縁先に端居して、荒い濤の音を聽きながら冷たい水に浸しておいた西瓜を割らして、暗い夜の大空を仰ぐと遠く南北に渡した天の河は宵々ごとに冴えて來るやうであつた。

（をはり、八月十三日）

淺倉リン子の告白

――品座龍彦の妻だつた女性――

松永延造

私はもう相當の年輩の女なんで御座いますけれど、それで、未だに、人樣から「丁度、指三本ですか？」なぞと尋ねられる程、若やいだツヤなり、フリなりを惠まれてゐる性質なんで御座いますの。然し、おことわりして置きますが、私は世間樣で好く云ふ「娼婦型」なんてものに、ぴつたりとはまるやうな女でもありませんの。と云ふものは、貴方、聞いて下さいましな。品座との同棲は私を二人の子の母にしたばかりか、まあ、何う云ふ神樣の思し召しでせう、それも念入りに双胎で御座いましてね、この爲めには、私、並々ならぬ苦患な思ひをも忍ばねばなりませんでした。何せよ、姙娠八ケ月目からは、足全體へ水氣が廻つて家の中を這つてゞなくば動けなかつたんで、まるで、大病人と同じやうに、仰山な有樣でしたの。

いえ、事件は其れだけで止まつては呉れませんでした。八ケ月の終り頃には、顔

も手もムクみ放題にムクみ、足はしびれる、眼は凹む。その内、到々、いくら見張つても、碌々、物の形さへ見分けられぬやうになつて了ひました。

醫者を呼むで見て貰ふと、腎臓が悪いと云ふ話しで、私、大あわてに慌てた爲め、その時の事を好く覺えても居りませんが、何でも人工早産をせねば、母胎が危險だとか云ふので、まあ、早速、その手術に取りかゝりましたの。所が、胎兒を包むでゐる何とか云ふ膜が、私のは頑丈過ぎるので、一寸もお醫者の思惑通りに行かず、私は私で、三度も四度も同じ手術を繰り返して受けた爲め、極度の精神の緊張が、不眠、肩凝り、眩暈なぞを誘引し、了ひには、額から冷汗が一杯出て、

『やめて下さい。死ぬ方が増しです。子供と一緒に、何處迄も私！』なぞと、囈語めいた言葉を放つたりする程でした。

私の切ない心の程が、天に通じでもしたものか、その時、不意と私の身體の狀態が持ち直し、あの唯物主義の醫者さへが奇蹟だと云つて驚く程、一週間ばかりの中に、半分以上浮腫が去つて了ひましたの。つまり、必死に心を緊張させた事が思ひがけなく藥以上の功を奏したのか存じませんわね。

この分なら、もう手術はしないでも……と云ふ譯で、仕合せにも、私の愛しい子供たちは、その温かな眠りを、自然が呼び醒ます迄は、私のお腹の中で充分むさぼつて育つて行く事を許されましたの。

月が滿つると、分娩は極く正規的に、順調に初まり、そして、終りました。それにしても初産で双胎の事故、まあ、――その苦しみと云つたら並大抵のものでは御座いませんでした。あの時の事を思ふと、今でも、額が冷たく汗ばんで、息がはずむで來さうですわ。何んにせよ、障子のサンが一本も見えなくなる程のイキみ方なんで御座いますものねえ。

そんなふうなんですもの、私などは人様の一生に一度にも二度にもない程にきつちりはまつたこんなだと申せますでせうね。それまでは、完全に、私が母らしい母であつたかと云へば、これも何うやら當つてはゐない様ですわ。何故なら、私は自然と出る乳を子供へやるのを拒んで、早く、上げて了ひました上、前後の強制的な云ひ附けで、出來た子供は皆、里子に出して了ひましたんですもの。

子供達は大きくなつてから、この事を隨分恨み初めるやうになつたのですが、私としても斯んな罪深い自分の行爲を決して悔いないでゐる譯では御座いませんの。然し、此處で子供のお話しを初めたら、もう切りも御座いません。それ故、今は一先づ省略する事を選びませう。

その代り、何より、當の私自身の身の上に就いて、細かい所迄もお話し致したう存じますわ。

さあ、何から、きつかけをこしらへませうか。先づ、自分の氣の持ちやう――それを考へて見る必要が御座いますわね。

私の性質ですか？さあ、何と申し上げませう。早く申さば、斯うで御座います、私は自分で考へを編み出せないので、人様の巧みな言葉を此處で拜借して見ませう。

『窓から灯火が洩れてゐるのを眺めただけでも、人生はもう一杯に樂しいものだ。食堂でお皿の音がちよつとした丈でも、それでおいしい匂ひの湯氣が心に描き出され、充分氣持が豐かにされる。』

ね？木統では御座いませんか？どなたにしても、斯んな氣持を全然感じないと云ふ方は恐らくないでせう？大體人間はお日様のよく照るこんな明るい世界に生れ合してゐるのですもの、唯茫、立つて、それから來る丈の行爲にも、何となく、生き生きした好い心持が伴ふのが當り前かと存じますわ。

私がさう云ふサツパリとして、歯切れのよい生れつきだと云ふ證據は、まあ、私が毎晩かゝさずお風呂へ這入り、次に鏡の前へ娘のやうに、龜の子坐りをして、粉の白粉を顔へはき、それから、夏の夜なぞであれば、二階のベランダへ上つたりして、遠い街の芝居の灯なんかを眺めやるのが、今の所何よりの樂しみなのだと云ふ事からも充分發見出來ますでせう。

貴方は斯んな女の娘時代の生活が何んな風だつたかに興味をお持ち遊ばさないでせうか？でも、まあ、お聞き下さい。斯うなのです。

私は萬づハデ向きな子で御座いましてね、家が破産するせつぱ詰つた前の日と云ふに、大家の令嬢でなくば着ないやうな高價な、お振袖を平氣で父にせびつて買つて貰つたと云ふ始末なんでした。もつとも、父だつてその時は隨分自暴自棄になつて居りましたんでせう。私に桃色の振袖を着せ、花カンザシで髪を飾さらして、方々連れ廻つた上句、お酒を飲みすぎて大通りで歌をうたつたりしてね、貴方、それから、今度はパン屋で何斤もつながつた食パンを大きい儘、一本買つて、それをしつかり胸に抱きしめつゝ、

『さあ娘、この長いのを、柔かい所丈掘つて喰つて、煙突のやうにして了はうや。』なぞと申しましたの。父はそんなにも陽氣に騷いでゐるかと思ふと、今度は急に萎れ返つて、子供のやうに、唇の兩端を下方へ垂れてベソを掻きましてね、其處を行き過ぎる、見も知らぬ郵便配達などに迄、『さよなら、さよなら！』なんて挨拶し、電信柱にも、色々娘の行く先の事なぞを頼み入り、了ひには、もう、あのM唐物店の石疊みの上へ轉がり返つて、『グットバイ、グットバイ！』と、足を上げて天を蹴るやうな身振りを致しましたの。勿體ない。いえ、父は何んな不遇に落ちても決して天を怨むと云ふやうな風は御座いませんでしたの、まあ、そんな勿體ない身振りもお酒の上での事なので、何うか許してやつて

下さいませ[illegible]

からも長い下を持つて來て、それを一本々々、丁寧に並べるのが御自慢でした。唯だ彼女の一寸した氣紛に、[illegible]よりも門を立派にしたいと云ふ性質で、その御城には、あの山口さんへ抵當流れになつて取られて了つたHの商店の別莊なぞは、隨分上等の御影石で門が出來て居りましたでせう? あの石だつて、あの商店迄、擔ぎ上るには、大層な人手を要したので御座いました。えゝ、私今でも、時々、そんな昔の事を覺えて居りますの。

「そ所よりも門を!」この氣性は、人が上げ潮の運命に引きずられて、その事業を益々發展さして行く時代には、其のて、商人の事を派手に飾り立て、外見から初めて、内容を向上せしめる好い手段となるものですけれど、一旦、その人の運命が下り坂となつて來れば、さて、斯うした心の持ち方から來る結果は實に大きなもので御座いませう。たとへばウヱの身が死に去つた後、ウヱの殘丈が殘つてゐる状態をお考へ下さいました。その通り、父の事業は隣の方から内部の方へバタ／＼毀れ初めると、もう一たまりもありませんでした。向うの方の事が、こつちの方の事に關聯してゐて、一事の爲めに商事がくつかへされて了ふと云ふ始末でした。

生糸商を本職に、それから羽二重仕立で、縫ひ取りだらけなキモノスの小賣を内職にやつてゐた、私の父の大きな店。あの淺倉商店は斯うしてまんまと破産致しました。さあ、其處で、このハデ好みな娘は一體何んな處分を父から受けましたでせう。

早く申しませう。私は父と合意の上、父の一寸した友達に當る一西洋人——あのギルモーアの所へ、大人見習ひとして、お恥かしい奉公に上りましたの。

あの時の變な氣持ちを私何うしたら忘れられるで御座いませう。N競馬場に近い、シンカンとした西洋館。石造り

で、蔦が赤々とからむで居りましたつけ。その玄關の扉は雨風にさらされて、白つぽく色が褪せ、その一部分の五寸四方位の所丈が、僅かに鮮かな元の儘の色をとゞめて居りました。この五寸四方―私の考へでは、其處に久しい間、TO LETの札が貼つてあつたのに相違御座いません。それとても、紙では何度か貼りかへなくてはならないから、屹度、頑丈な櫻の板か何かを打ちつけて置いたらしいんですわね。さう云へば、釘の跡らしい小さく深い穴が、その扉には二十程も明いて居りましたわ。あゝ、扉はその家の口と云ふより、寧ろ眼と云ふのが至當で御座いませう。何故と申せば、扉の表情如何に依つて、家全體の氣品や重みやは大概察しがつくんで御座いますものね。所が何うでせう。この色褪せた様子、その上、所きらはぬ釘の穴！　若い私は何とも云へぬ淋しさにおそはれて、ぞつと背中に寒氣の粒を立てずにはゐられませんでした。

えゝ、この家の主人、ギルモーアは此處へ越して來てから、一ケ月位にしかならず、從つて、未だ此の屋敷全體を自身の趣味に委せて手入れする暇がないのだ――と、その時、一緒に來て呉れた父は私に辯解がましく説明するのでした。

私、よく覺えてますわ。その扉を開いて這入ると、直ぐ顔へぶつかる白い壁に、何だか大層荒い手つきで五本の線が引いてあり、其處へ音樂の譜が、讀めない程不完全に、書きつけてありました。父はその汚い壁を見ると、ベソをかくやうな顔附きをして、――娘よ、この家には以前、亂暴な音樂家が住むでゐたのだ、この音譜を、こんなに汚く書いたのも、つまり彼れなので、新らしい主人のギルモーア氏ではない。さうだ、ギルモーア氏は實に落ち着いた立派な御仁で、本來ならば、奇麗な壁をお好きになる筈なのだが、何んにせよ、未だ、引越して來たばかりなのでな――と、又しても、餘計な説明を心配相にして聞かせました。

且はもうすつかり諦めを附けましてね、

「いゝえ、お父様、荒れ果てゝゐると云ふ事には、一種の洗練された淋しさがあつて、これは趣味の高い人には却つて懐しいものゝ一つなんでせう。ありがたい昔の佛畫のお掛けものなんかだつて、鼠が觀音様のお眼を食べて了つたのお價も高く、見ごたへもあるんでせう?」と、ひそかに涙を拭いて、父に申しましたの。

もつとも、此處で一寸附け加へて置きますが、私はその頃の新らしい女だつたと見えて、異人の匂ひは少しも嫌ひでは御座いませんでした。で、斯んな一見淺間しいやうな企ても、半ばは自分の意志から出た事なのでしたが、もつと根本的に云ふならば、之は矢張り、自分の悲しい運命として、結局は、私の出し入れの息と同じく、のつぴきならぬものだつたので御座いませうね。

私が初めて此のさびれ果てた家へ、お妾奉公に上つた其の日、當の主人は何か急用のためK市へ出掛けて、留守でした。それで、家の鍵迄も預かつてゐる信用の厚いボーイ頭と云ふのが、落ち着きの悪い私を哀れむで、何くれとなく世話を焼いて呉れましたのですが、この男と云ふのが、まあ、お聞き下さい、それは、それは西郷隆盛の銅像に似て居りましてねえ、若い私の興味を痛く引きつけましたの。父が其處を去つて了ふと、彼れは私を横の方から眺めやりつゝ、何處か深く嘆息して、斯んな立派な處女を西洋人にむざ〳〵と渡して了ふのは惜しい、惜しいと、云つてね、貴方「西洋人は××か何うかなんかは決して問題にしないし、この家の主人は極くボンヤリの方で、その上、洋服のボタンがもげてもその儘にして置く程、無頓着な性質なんだから、一層、惜しい、惜しい。」なんてね、貴方、まあ、早いとこ、このボーイ頭はその××と云ふのを自分自身が貰ひたいやうな氣振りも一寸は見えましたんですよ。と云ふものは、彼が或る夕方、暗い室内に灯もつけないで、いきなり私に斯う申したんですもの。

『大體、西洋人の所へ上がるお客は、祝儀を呉れる代りに、その家のボーイ頭、もしくはコック頭へ、××を呉れるのが、この仲間での規則になつてゐるのだが、何せよ、貴方は大家の令嬢だつたんだし、貴方のお父さんには私も色々御恩義を蒙つてゐるんで、何ともうまく行かない始末なんですよ。然し、惜しい、途方もなく惜しい。大體、毛唐つてものは無頓着なんだから……。それに、貴方のお父さんと云ふ人は實に下々の者をよく劬つて呉れる仁でね。話しが分つて、よく切れて、まあ、早い話しがチップの爲めに身上をおやして了つたと云ふやうな方なんでさあね。何しろ、五町のK園で豪遊をおやんなすつた時にや、えらい景氣だつたね。K園の女中衆へ縮緬の浴衣を一通りお廻しになつてさ。――さあ、かまはず、そのそろひの浴衣を着た儘で、皆一緒に、千人風呂へ這入つた、這入つた――つてんだからね。それにしても、西洋人と來ちや、根つから、無頓着なんで……。』

まあ、その點がこのボーイ頭には隨分氣にかかつて居つたやうなんですの。で、一週間たつても未だ主人が歸宅しないので、到々、考へに考へた末、ボーイ頭は一つの思ひ附きを致しましたの。次手に申して置きますが、その家にはボーイ頭の他に、普通のボーイ達は居りませんでした。だから、何もこの人をボーイ頭と、頭をつけて呼ぶ必要もなかつたのですが、彼れは誰れに向つても「私がボーイ頭で……」と云つて居りました。

然し、皆さんは先くどりをなすつてそれから先が何うなつたと仰言るんでせう？ えゝ、そのボーイ頭が或る夜の事、隣家の別當さんと話し合つて、馬車を一臺借り込むで、自身が馭者になつて、私を一人乘せて、あの電燈會社の裏に當る、Kと云ふ芝居茶屋へと出驅けて參りましてね。私が前々から好きだと云つてゐた、その役者に呼び出しをかけて呉れたりして、まあ、そんな事にボーイ頭は一生懸命骨を折つたんで御座いますの。彼れは――――

『何うもお待ち遠さまですね。いえ、今來ます、今來ます。』なんて、自分がお茶屋の番頭にでもなつた氣で、額に汗を

一杯出して不安な私をなだめて吳れたりしました。

『一體、この人の心底には何う云ふ見算り書が書いてあるんだらう？』私は隨分大膽な女で、その頃はまだ役者買ひこそしませんでしたが、樂屋へ花束やお鮨をくばる位の事は間々やつた覺えがあるんでした。それにも拘らず、この時ばかりはボーイ頭の心の底がハッキリ分らないので、私本統に薄氣味惡う御座いました。

『ことによつたら、こんな秘密を言ひがゝりに、私をおどして、結局、自分のものにしやうと云ふのではないかしら？』

私はさう考へると、全く不愉快になつて、急いであの天水桶の業々しい芝居茶屋を飛び出して、足袋はだしの儘、自分の父の家へ駈けつけました。然し、そこは既に他人様が住むでゐて、看板も書き替へられ、その上、もう、戸をしめ切つて、中では帳合ひの聲が聞える丈でした。えゝ、父はもうその時、上海へ何かの商用で行つて了つたのでした。

私はそれでも泣きませんでした。えゝ、私はそんな性質なんですわね。で、又、諦めて、異人館へと歸つて行きました。いゝえ、其處へ行く事は一寸も恐ろしくはなかつたのです。何故と云つて、ボーイ頭のおかみさんと云ふのが、掃除人を勤めながら、この家の屋根裏に世帯を持つてゐますんでね、この室にさへ居たら、何の不安も起るすきがなかつたのでした。それに、この室は疊こそ敷いてありましたが、普通の日本間とは趣きがずつと變つて居りましてね、天井の半面はコーバイが附いて、頭がとゞく程低く下つて居りますし、縞模樣の紙で貼つた壁はその一部が二尺も凸起してゐて、そこへ寄りかゝると、背中が暖かくなりますの。何う云ふ譯かと思つたら、そこはコック場のストーヴの煙突が通つてゐる場所だ相なんでした。

『えゝ、この室たら……、夏場は禁物で御座いますよ。おや、貴方、新らしいお足袋がよごれましたね。』と、ラクダの

やうに生ぶ毛の多い顔をしたおかみさんが、お鍋で藥に使ふタンポポの葉をうでながら申しましたの。

一寸、申し上げて置きますが、このお内儀さんは、その外見丈でもつて、直ぐ人から信用されて了へるやうな女性でした。いゝえ、實際に於ても大變な實直者で、そればかりか、仲々御亭主孝行なのがその言動で、私にも氣づかれました。彼の女は何んな話しをするにも『好くヤドと相談致しまして、』『ヤドが斯う申しますので、』『ヤドが許しませんので、』『ヤドに叱られますので、』『ヤドに笑はれるといけませんから、』『ヤドはそれが好きで御座いまして、』『ヤドはそれが何より得意で御座いまして、』なぞと云ふキツカケから初めると云ふ妙な規則を持つて居りました。いゝえ、私は何もこの規則を笑つてゐるのでは御座いません。一人の女性が一つの家庭を持つた場合、多少とも、この規則を應用するならば、其處に存在しない幸福迄も、事實存在するやうに見えて參るのが受け合ひだと存じますわ。

さあ、此處で、もう一度、お話を前に戻しませう。

『それより、貴方の旦那の心持ちが、てんで私には了解出來ないんですよ。』と、私は例の奇異な事件を語り初めました。

『了解なんのと、そんな手數をかけてやる程の六ケ敷いもんぢや御座いませんよ――あの人の心持は……。』と、おかみさんはさも萬事を飮み込むでゐる風に申しましたの。ボーイ頭はおかみさんにも例の計畫を前々から相談してあつたと見えるんですね、で、尙ほ、彼女は續けました。

『あの男には貴方、ちつとも惡氣と云ふものは無いんですよ。一生の内一度位は人樣の上に立つて、尊敬されるやうな身分になりたい、それには成る可く上品な方とつき合つて、人格を造らねば……なぞと兼ね兼ね申してはゐますが、こんなムホン氣は何も貴方惡氣と云ふ程のものぢやありませんわね。あの男は詰る所、貴方に同情してるんですよ。御心

気たくね、どうぞ。何、貴方、思ひ切つて、やつてお了ひになればいゝのにね、さあ、見栄をお張りなさいな、何、おとてイキサツがそんな事のないのは私受け合ひますよ。費用ですか？さあ、それは社費として、御主人から請求なさつて好いんですとも、やはり、雑費に相違御座いませんからね。』

斯んな譯で私が湯氣に包まれたやうな氣持でゐると、外の暗の中に、馬車のキシミが段々はつきりと聞えて來て、さうと思ふ内

『おチカ！嬢さんはカンバツキしてらつしやるか？』と西郷さんの聲がしました。えゝそのカンバツキと云ふのは、カムバツタの意味なんですの。

それからボーイ頭は室へ這入つて來て、私の氣性の激し過ぎる事、あまり苦勞性な事、之からはもつと氣を大きく持つ可き事を話り聞かせ、次には彼れ自身の早計から出た手落ちを詫び入りました。

『もつとよく説明して上げて、それから、やれば好かつたのだよ、お前さん。』と薄い眉毛のおかみさんはラクダのやうな口附きで笑ひました。

私は彼れ等夫婦が全く惡氣のない者達だと云ふ事を、その眼附きや、言葉つきで察しました。そして、急に安心が出て、大きな聲で一笑ひ笑ひましたの。

『うまい。それ、その調子だ。』と西郷さんは感心したやうに云つて、私を５と云ふ番號が戸口に打つてある一つの室へ連れて行きました。その室の不思議な印象は私今だによく記憶して居りますの。太い木造りのベットがあつて、そのベットの下が皆黄色塗りの抽き出しになつて居りましてね、水色とトキ色の縞の布が冷たい光りを出して、ベットの上にかかつて居りましたの。四方の壁は灰色で、三方に古い油畫の肖像畫が沈むだ色彩をして下つてゐました。その一つは

裁判官のやうな上着を羽をり、白髪のやうなカツラを冠り、一寸見たのでは、男か女か判斷のつかね顏をして居りました。

これは何うでも好いとして、其處へあとから、おかみさんが色々の冷たい肉のうす切れ、砂糖づけにした果實、サラダ油をかけた青い菜などを運びつけ、

『ハイ、お藥……。』と云つて、西洋の金色のお酒を私について呉れました。

さう斯うしてゐる間に、ボーイ頭は、しきりと顎の所を指で押して――(之は西洋人の風を眞似たのが、習慣になつたんですわ。)――何か考へ、それから女の子がするやうに肩をもむで振り、いかにも恥かしさうにしてゐましたが、到々

『ベレ、サレだ。ベレ、サレだ。(ベリーソリーの事。)』と云ひ初めました。『そして、惜しい。』

未だ彼れは同じ事にこだわつてゐるのが此の言葉で分りました。

すると、今度はラクダのやうに眼を細くしながら、おかみさんが私の手をとらへ、

『ねえ、貴方、ヤドはね、實を云ふと、その貴方のお好きなアクトーを、馬車でお連れ申したんで、外の暗の中へ、待たしつぱなしにしてあるんですわ。さあ、貴方、如何でせうかね?』

私は顏が眞赤になつて、胸が煽ぐ扇のやうに鳴りました。ボーイ頭は慌てゝ向うを向いて、背中が痒くでもあるやうに、肩を振つてゐました。えゝ、アクトーと云ふのはアクターの事なんで、惡黨とは違ふんで御座いますの。

『お孃さんのお父さんから受けた御恩を此處でお返し申さないぢや……。さあ、お前さん、此處だよ、早く、そのあれをお連れ申さないぢや……。』と、おかみさんは獨り合點をして、夫をうながしました。男は私の顏をもふりかへらず、人形が動き出すやうに、眞直になつて戸口から出て行きました。

――も、困りますッてこと、私は自分で何すたいものになりたいと申しました

一ために、貴方、容貌として私には好く御座いますよと、旦那人はケチなお方ですね、でもやはりこのやうな何様にも入らせ難

を見せますよ、きつと、えゝ、何の臣用も皆、まうですからね」

此處へ、ボーイ頭が、アクターと云ふのを連れて這入つて來ました

さあ、又しても、私、一寸、此處で說明のやうなものを加へねばなりませんわ。

ずつと昔の壯士俳優と云ふのは、隨分氣の荒い者ばかりで、何も白粉の匂ひに憧憬れて、この職業へ這入つて來たのではなく、早く申さば、その頃の政治の根本思想――即ち『自由』と云ふものを、一般民衆の心へ植ゑ附ける手段として、演劇を利用するのだと云ふやうな考へを持つてゐたのでしたわね。それ故、あのＮと云ふ俳優なぞは唯だ舞臺の上に立つてゐる丈では氣が濟まず、お得意の長い板垣さんが大阪の掛つき場から上つて來る所を、「おのれ、國賊！」なぞと大聲で叫むで、仕込み杖か何かで、あの大臣さんを切り附けたりしたでは御座いませんか。えゝ、あの頃は、今のヲヂオが流行すると同じ程度に、仕込み杖と云ふものが流行しましてねえ。小さい子供迄が、玩具のそれを持つて廻つて、樂しむだ程で御座いました。

所で、私がそれとなく好いてゐた例の俳優と云ふのも、矢張り、俳優よりも壯士の氣質を多分に持つてゐる男性でしたらうか？

いゝえ、もう時代はずつと變つて居りました。俳優の腦の中から、漸く壯士氣質が拔け出し初めてゐた時代――それがもう到來して居りましたの。私、電燈會社裏の、あのお芝居で、何度か、このアクターの演技を見物したものでしたが、まあ、この人と云ふのは、當時の新進で御座いましてねえ。賢過ぎず、柔らか過ぎず、壯士ともつかず、俳優に成

り切つても居ず、見てゐて、それはそれは氣持ちの好い事と云つたら……まあ、一寸形容の仕方も御座いませんでした。えゝ、勿論、現代人の高い趣味から申せば、それはもう時代遲れの無雜極まるものとも評し去られるでせうが……その時代の全體の空氣、その時代の娘の心……それを何うか酌量して下さいませ。

さて此處で又、元へ戻る事に致しませう。ボーイ頭に伴はれて室へ這入つて來た例のアクターはチラッと金屬の鈴のやうな眼で私を見やり、一寸、又、眼を外らし、白い扇子を器用に三コマ程廣げたり、閉じたりして、好い容子をして居りました。エリの合せ方が素人とは異つて、本統に氣持ちよく見えました。顏は舞臺で見つけた時よりも、ずつと陰鬱でした。私恥かしがつて赤面したりしては侮られると思つて、もうずつと蓮つ葉に振る舞ふやうに努め初めました。

『ヘイ、お藥。』と云つて、おかみさんは三人へ西洋のお酒をつぎました。

『さあ、俺たちはもう之で御遠慮しやう。おチカ！たんぽぽはよくうだつたらうな。』それで二人は室を去つて行つて了ひました。

アクターと私とは本統に手持ちぶさたになつて、油繪の額を見たり、曲つてゐる電燈の笠を直したりしました。男の方でも斯う云ふ場所には慣れぬせいか、まるで素人のやうに臆病になつて、戸口や窓の外ばかり氣にしてゐました。

『あの、御主人の方は…… 大丈夫なんでせうねえ？』と、アクターは何度も私に尋ねました

私は彼が私へうまく取り入るため、業と内氣をよそほつてゐるのかしらなぞとも考へて、油斷なしに體を堅くしました。

あゝ、私はこのアクターの素性を未だお話し致しませんでしたね。彼れはあの川上音次郎や貞奴と一緒に西洋を巡遊して來て、新しく自分で別派を立て、その頃、一かどの腕を見せてゐた藝名をHと云ふ若手だつたんですの。指と爪の

形の大層美しい男で御座いましたつけ、え、? 顔だちですか? ツヤ消しの柔らかさで、鹿皮のやうなとでもいひ度い膚をして、眼は鈴のやうでしたが、然し何處か沈んだ顔をして居りましたの。

私この男の擧動なり、言葉使ひなりが、一時間ばかりの中に、すつかり氣に入つてしまひましてね、貴方、お酒はまはつて來ますし、まあ、胸の中は引つくりかへるやうにやるせなう御座いましたの。

で、ベットへ並んで腰をかけながら、二人の仲は今後何うなるかなんて、ね、そんなあてにもならぬ事を二人でまあ何時迄たつても倦きもせず話し通してたんですわ。あの舞踏曲なんかで、同じ節が何度も起つて來るやうに、とりとめのない事を繰り返し、繰り返し、持ち廻つたのでしたがまあそれだけで二人の樂しみは尤分過ぎる程でしたわ。やはりこの人はその道のものだけに、話しの綾取りが仲々上手で、私をやるせなくして置いては、くすぐるやうな喜びを後で味はせるんで、その喜びなり、くるしみなりが、本統に鮮かに對照され、きつく心に喰ひ入るのでした。

その内、開いた儘になつてゐるベットの下の抽き出しに、私はトランプを見附け出しましたので、直ぐそれを手に取上げて、戀の占ひなんかを初めました。あまり占ひをやり過ぎたので、紛失物出です、だの、思はぬ金儲けあり、だの、遠方より手紙來る、だのと云ふ筋違ひの答へが出て、二人を樂しく笑はせました。

まあ、細かい事は皆忘れました。で、この事件のお話は之位にして置きませう。で、飛ばして申しますが、さあ、夜中の三時とも覺しい頃、例のボーイ頭がやつて來て、私たちの休むでゐた室の戸をたゝき、『餘り時間が遲くなりますのでな……。』とさいそくを致しました。

私はアクターと別れるのがつらう御座いました。「きぬぎぬの心」と云ふものを、え、、私、生れ落ちて、初めて、その時、味わいましたの。けれど、私は氣丈なたちなので、別段、聲も顫はさねば、涙の半粒も落しはしませんでした。

『では、さようなら……。』と、私はアクターに出來るだけ甘く云つてやりました。もう何うにでもなれと云う自棄の氣味が手傳つて、胸は氣持ちよくふくれて居りました。

『さよなら、さよなら。然し……。』と、沈むだ顏のアクターは扇子をしなやかに開いたり、閉したりしながら、思ひ餘つたと云ふ風に首をかしげ、悲しい眼を上げて、私をそれはやるせなげに見入りました。彼れは又何時會へるか。その約束を待ちこがれてゐる風でした。それを思ふと私の胸もつまりました。主人と云ふ人が歸つて來て了へばもうそんなに自由な振る舞ひも出來はしない。あゝ、二人が樂しむのはほんのこの三四日に過ぎないのだ。それに、お金がない。お金がない。何うしたら、もう少し身の廻りが樂に出來るんだらう……。私の嘆きはその一點に集まつて行きました。

『貴方、私、さつきも云つた通り、お金がないんですわ。』私は眼を落して、斯う優しい男に訴へました。そばに居たボーイ頭が何か口を挟まうとしましたが、不意に慌てゝ自分の室の方へと何か用をたしに、一人で駈け戻つて了ひました。アクターは涙を一杯眼にためて、……………………………………………………あゝ、その切ない氣持ちを、私今でもよく覺えて居りますの。

『お嬢さん。お金なぞが何で入りますものか、お金なんか。……………』アクターの細い聲が私の耳元で顫へました。

『では……私の眼丈で好いの？お金はなくつても？』

『明日もね、でないと、私悲しむで、北極へ行つて了ひますよ。』アクターはうなづいて、うつすりと微笑みました。ほの暗い廊下の奥へと、その微笑みは小さな波紋を造つて消えました。

『では、きつと、きつと、一分間でも忘れないで………。』と私は自分の指を折て問まして、云つてやりました。

『私は息を吸ふ度に貴方の事を思つてゐますよ。』と、彼れは扇子を口の前で二度揺り動かしました。

『では、私、息を吐く度に貴方の事を……。』

二人は面白くて、又、笑ひました。然し、心の奥は雨が降つてゐるやうに、望みなく暗う御座いました。二人は胸を顫はしてもう一度抱き合ひました。男とも思はれないやうなアクターの柔かい頬が私の頬に貼りつきました。ほんとに新鮮な鹿皮のやうでした。

合ひ悟、ボーイ頭が、そり氣味になつて其處へやつて參りました。彼れが忘れて取りに行つたのは、紙へ包むだ幾らかの金員だつたのですわね。えゝ、包みにはのし、と書いてありましたの。彼れはそれをそつとアクターにつかませ、お禮の言葉を云はせないやうに、矢つぎ早に斯う申した。

『隣りに惡いブルドツクが居るから、私が其處迄送つて上げませう。……と、それから、お孃さん、もう宜敷いんですか？あのさ宜敷いんですか？』

私はうなづく印に、唯だ微笑むで下を向きました。アクターは急に愼しみ深くなつて、私にもう一度挨拶すると、ボーイ頭に連れられて外の闇へと消えさりました。私はその足音のする方へ眼を送りながら、長い事、窓のそばに立つて居りました。植物の匂ひのする夜風が私の頬に吹いて、すぐ、男の柔かい頬のことを思ひ出させました。

『あゝ、私のしてゐる此の戯れは世にも儚いものだ。危い、危い虹の橋に似たものだ。』

涙が出さうになりましたが私は「馬鹿、馬鹿！」と云つて押しとめて了ひました。

軈て、ボーイ頭は歸つて來ました。私は急に、きまり惡くなつて了つて、もう立つ場所も座る場所も見附け得ません

でした。彼れの方でも、私に近くよるのが氣象ねらしく、遠くの方で、はすかけに體を向けながら、

『ねえ、お嬢さん。悪く取らないでおくんなさいましよ。だが、そのさ、宜敷いんでせうね。』

彼はいきみ出すやうに、喉を鳴らして斯う云ふと、ヒリツピン人式に、頭へ貼りついてゐる太い縮れ毛をガリ〳〵掻きました。

『こうつと、洗面臺もキレイになつてゐると。ぢや、おやすみなさい。醉つたあとは風を引きやすう御座いますよ。』斯う云ふと、彼は早々その場を立ち退いて行きました。

一人殘つた私は胸が嵐のやうで、到底その儘ぢつとしてはゐられませんでした。が、よく考へると、結局何でもない事でした。『明日』さうだ、それを寢て待てば好いのだ――と、呟いて、私は一人でベツトへ又這入りかけましたが、もうそこには何のぬくもりも殘つてゐず、本統に昧氣なく淋しう御座いました。

さて、絹の布團へ長々と横になると、もう私は、『明日の夜の計畫』で胸の中を一杯にして居りましたの。ボーイ頭へこの事を頼むだら、彼れは何う思ひ、何う答へるかしら？彼れも匂ひの強い男盛りではあり、さぞ、嫉妬のやうな感じを起すことだらう、まあ、是非さうなければなるまい、一度丈は義俠心のやうなもの、それから好奇心のやうなものが手傳つて、斯う云ふ計畫を彼れはして呉れたのだが、いざ、私の方から二度目をさいそくしたら、きつと、或る憤りを感じるに相違ない。

『灰のやうにアクの濃い女！　甘え過ぎるな。俺もお前も同じ奉公人ぢやないか？』

私は彼れが黒い唇をむき出して、斯う叫ぶ所を恐れながら想像しても見ましたの。

『困つた。では？』

疎に落ち着いて眠れもせぬ間に、到々朝が來て了ひました。黄色いカーテンから洩れる淡しい光りの中にひたりながら、私は自分の眼の前に掛かつてゐる大きい肖像畫を見入りました。それは黒い背景を背負ふた若い娘で、栗色の髪へは、うつりの好い大きな紅いバラを二つ附け、銀の耳環を蛾の眼かなぞのやうに仄かに光らしてゐました。頬は木犀の花のやうに黄色く、口はうすい透明な紅、眼は褐色でした。胸にはコバルトとうす黄の紐をすじ交ひに掛け、着物は絹らしく、醤油の中へ落した眞珠のやうな色合ひをして居りました。手には透き通つた桃色のハンケチを持つて居て、又、その手の影は青く、光る方は白つぽく、瀬戸物のやうに滑かでした。

私、生れて以來、斯んな美しい繪を見た事がなかつたので、胸の中へ香水でも撒かれたやうに好い氣持ちになつて了ひました。

『まあ、紅ばらの娘さん、あなたのいらつしやるのも知らないで、昨晩は飛んだはしたない所を御目に掛けて了ひました事……。』と、私はその畫像に一寸笑ひかけて、挨拶致しました。

氣がつくと庭の外では白鳥やら七面鳥やらが陽氣相に鳴いて居りました。白鳥は我が儘な子供のやうな聲だし、七面鳥はまるで怒りながら笑つてゐるお婆さんの聲のやうだと、私つくづく、その時、感じましたの。

私はお庭へ出て行つて、鳥へ餌をまいてやつてゐるおかみさんの前へ立ちました。二人は朝の挨拶をするのが、お互ひにきまり悪う御座いました。私は自分の耻らひを何うかして、他人に氣取られまいとつとめながら、業と大膽に問いてやりましたの――――

『この家の御主人と云ふのは、未だ、今日はお歸りにならないんでせうね？』

『え丶、明後日！』白い生ぶ毛だらけの頬が正直相に憔れました。

あゝ、三日の命だ。その夢にも似た短い間を、思ふさま底のオリ迄樂しまねば……と、私は自分の心が納得するやうに、云ひ含めてやりました。短い、短い、あまり、短かい、と、心はぐづねて、じれて返答するのでした。私はそれを強ひて隱しながら、何も知らぬ風に、

『あら！　あそこに居る雄猫は耳が二つともありませんのね？』

『えゝ、まるで、フクロウのやうな顔をしてゐませう？』

『あゝ云ふ新らしい種類なんですの？』

『いえ、飛んでもない、貴方、あの猫は小供の内、不用心にも、おへつついの中へ駈け込むで、足と耳を大やけど致しましてね。それ以來、あんな風になりましたのよ。』と、おかみさんはラクダのやうに笑ひました。

『あの、杭を打ち込むやうな音は何ですの？』と、私は自分の内心を氣取られぬやうに、業と斯んな問ひをして見ました。

『オホゝゝゝ。あれは貴方、ヤドが二階で鼻を力まかせにかんでゐるんですわよ。』

私は振りかへつて、二階の窓を見上げました。西郷さんは汚いハンケチを振つて、私に朝の挨拶をしましたが、昨夜の事を話題に上せたくないと見え、急いで首を引込めながら、

『おチカ！今日はモノ日だから、門へフラフを立てろ、次手に、タンポポをもう少し……。』なぞと、云ひつけました。

フラフと云ふものはフラグの事なので、まあ、この人達と云つたら、まるで一種特別の世界の王や女王のやうに、勝手な言葉をつかつてゐるのでした。

私は自分の室へ戻ると、若い娘やら、法官やらの肖像畫を相手に、落ち着きのない時間を過しました。御飯は並に頂戴しましたが、何時も程樂しくはありませんでした。私は强ひてボーイ頭に顏を合せぬやうに、室から一歩も出ません

でした。向うでも、氣が引けると見え、朝食を濟ますと、そこ〳〵に、何處かへ外出して了ひました。私は一人いそいそとしつゝ、

『あの黑さんは夜遲く迄、歸つて來ねばよいが：：。』と、何度も胸へ手を當て、祈りながら時間の足どりを見送つてましたの。

やがて、ゆつくりと、夕暮が參りました。灯が黃色く灯り出すと、私は不意に昨夜の事を思ひ出して、もう氣が氣でなく、足ぶみして見たりスリツパを壁へ蹴つけて見たりしました。それから仕方なしに私は窓口へ立つて、向うからこつちへ連なる垣根づたいの道を、何時迄も眺めやりました。

思ひがけなく、あんまり早く、アクターは私の所へ舞ひ寄つて參りました。えゝ、その道の向うの曲り角から、いきなり、彼れの美しい姿が表れた時には、自分の靈の影でも見たやうに、私、驚きで脈がとまりました。その姿が彼れと分ると、今度は私の胸は溫かいお湯へつかつたやうに柔かくふくらみました。そして、私は白い手を上げ、桃色のハンカチを振つて合圖致しました。

向うでも、それと見て取つて、手袋を拔いて振りました。本統に、本統に、樂しい事で御座いましたわね。それも、若い時の事なんですもの、皆、お許し下さいましね。

アクターは窓の下の所迄近よつて來ると、細い聲で

『森へ、あそこの：：。』と、東の方を指して、それから、競馬場に添ひつゝ、一人先へ、ずん〳〵行つて了ひました。私は急いで階段を降り、まるで風のやうに扉口へと出て行きました。おかみさんは庭で白鳥を抱いて、それに目藥だか何だかを注いでゐました。彼の女は一寸私の方を見るやうな風をしました。私は、ハツとしました。然し、彼の女は何

も氣づかないらしく、又、直ぐ屈むで、自分の用事を續けました。私はつまつてゐる息を、一時に吐き出し、石段を又降りて、垣根を出、それからアクターの影を追つて參りました。

もう、外の景色は濃い褐色を増し初めて居りました。私は樹の下に何度か彼れの遠い姿を見失つては、又、見つけました。

二人は暗い森の中で、到々一緒になりました。

『まあ、よく忘れずに……。』さう云つた私の眼から涙がしみ出さうなので、「馬鹿な！」と思つて、私はそれを大急ぎで消しました。

『私……私は……。』と、アクターもせき込む氣味で私の方へ縋り寄りました。…………

……………………………………………………………………

……………………………………………………………………。

時はたつて行きました。闇は濃くなるだけ濃くなつて了ひました。アクターはその日の朝、東の方に見たとか云ふ名も知らぬ不思議な形の鳥の事を思ひ出して話し、それは何かしら、この「新らしい戀」の豫告、もしくは象徴なのに違ひない、なぞと云ふ決論をさへ引き出しました。

『私は……』と、アクターは考ながら初めました――『私は今迄、一目見ての戀なぞと云ふものは決してありつこはない。それは天國内での事件であつて、この地上では望む事すら不可能なものなんだと、斯う思つて居ましたが……。』

『まあ、お上手な事を仰言つて……貴方と云ふ人は、そんな考へを一體幾人の女へお洩らしになりまして？』と、私は扇を振りながら、笑つてやりました。

森の樹の下は暗さが一層きつう御座いました。私が樹に足を引かけて、轉びさうになると、アクターが風の樣でも追ひかけるやうに、す早く、私の腰を抱きとめて與れました。好い植物の匂ひが香油のやうにあたりへ漂つて、イタチか何かゞすぐそばの樹影から飛び立ちました。私たちは確かに一時間もさうして草の間を歩いたり、樹の下に立ちどまつたりして、色々の話しを致しました。さあ、その話しと云ふのはもう大概忘れて了ひましたが、何でも、このアクターが、最近に、自分の相手のおヤマと死に別れた事、その相手は天にも地にも又と掛け替へのないと思はれる程、自分に息がシツクリ合つた事、彼が病氣すると、アクターもよく病氣になつたりした事、『マアチヤント、オヴ、ヹニス』を演じた時、女優が居合さなかつたので、このおヤマがポーシヤをやり、このアクターがアントニオをやつた事、幕がしまるやいなや、二人は本統の夫婦のやうに抱きついた事、だのに、このおヤマが死んで間もない今日、新らしい戀人を得るのは何う云ふ廻り合せなのだらうと云ふ事、先づそんな見當で御座いましたの。

私はこのたわいもない話よりも、もつと別の方へ氣を引かれて居りました。えゝ、餘り遅くなつては……と云ふ懸念で。何うも心が安らかでなかつたんですの。

『貴方、時間は？』

と、私が聞くと、アクターはマッチを取り出して、直ぐ火を灯しました。然し、時計を引き出すよりも前に、二人はその灯の光りで、お互ひの微笑を見交しました。その間に、もう、マッチは消えて了ひました。殘像だけが赤く黄色く眼前に漂ひました。二人はもう堪へられないで笑ひました。その笑ひ聲が段々接近して、そして、ぴつたりと止りました。

それから、一分位して、又、アクターはマッチをすりまして、今度は、大急ぎで、時計を見ました。

『八時半……』

『歸りますわ。』

『もう少し……。』

その次、マッチをすつた時、時計は九時五分前でした。その二十五分間、私は一生涯、この短い緊縮した時間を忘れる事が出來ないと存じました。それは云はゞ、あらゆる時間のエッセンス――永遠が生ひ茂る葉ならば、この時間こそ、花だつたとでも申したら御座いますわ。

さて、それから、私はアクターに惜しい別れを告げ、又、明日會ふ約束を胸に樂しく疊むで、主人の家へ歸りました。そつと濡れ縁に立つて、私は内部の樣子に聞き耳を立て、それから、中へと辷り込みました。

私は例の肖像畫のある寢室の前迄、出來るだけ足音をひそめ、爪先立つて近づいて行きました。そして、息を殺しながら中をのぞくと、驚いた事に、例のボーイ頭が向う向きの儘、ベットの絹布團へ顔を押し當て、じつと身動きもせずにゐるのでした。えゝ、彼れは多少ツンボだつたので、私の這入つて來る足音を聞き取る事が出來なかつたのでせう。

私はぞつと寒氣が背からお腹へ突き通るのを感じました。で、又、忍び足に、そつと、其處を立ち去り、屋根裏のおかみさんの部屋へ行つて、業と大きい聲を立てゝ無駄話を初めました。

『おや？ヤドとお話ししていらつしたのではないのですか？』

『あら？叔父さんは何處にいらつしやるの？』

『貴方、このソースはすつぱ過ぎはしませんの？一寸味わつて見て……。』

『あら、卵の黄味？』

『お酢と黄味と合すと、精分がつきますんですね。ヤドの好物なんですよ。時にヤドは……？』

其處へ這入つて來たボーイ頭の顔は銅のやうに輝き、それとは反對に、眼だけはツヤ消しガラスのやうに沈むで見えました。私は彼れに二言、三言かはすと、すぐ、自分の寢室へと逃げ去つて行きました。法官と娘との肖像が暗くちつと押しだまつてゐるのが妙に味氣なくて、何だか別れた父の身の上なぞが不圖思はれましたの。それから續いて胸の中へ湧き出して來るのはボーイ頭でした。私はもう一度改めて身を顫はしました。

『今夜、何か恐ろしい事が起るのではないかしら？何か？何か！』

私はベツドへ横たはると、頭の上迄、絹をかぶつて『恐ろしい豫覺』を眼前から掻き消さうとしました。で、私は強ひて、あの優しいアクターの美しい齒並、形の好い爪、高尚な指つき、なぞを思ひ起して見ましたの。

一寸、私、こゝでお尋ねして置きますが、貴方は一體このアクターの名が何と云ふのだか、覺えていらつしやいますか？えゝ、私未だそれをお打ち明けしなかつたでは御座いませんか？

『よもや、その男が品座龍彦なんぢやあるまいな？』と、貴方は仰言るんぢやないのですか？

所が何うで御座いませう。實に、その通り、それに相違御座いませんでした。えゝ、私が品座となれ初めた次第はそんな風なのでした。

では彼れが鐵道の方へ勤務してゐたと云ふのは嘘かと、又、貴方はお聞き直しになるでせうね。いゝえ、その事も本統だつたのに相違御座いません。彼れが俳優の群へ投ずるに至つたのは、もつと、それから後の事だつたんでせう。とは云へ、未だ二十代の男が、驛の助役なぞと云ふ高い位置へ坐り込める譯もありませんから、その點丈には多少の飾りが加へられてゐると見るのが至當で御座いませうね。

さあ、そんな詮索は後にして、私、もつと急いでお話しする筈の要件を思ひ出さねばなりませんわ。

それは、私の主人になつた英國人、ギルモーアの事なんで御座いますの。えゝ、私がボーイ頭の來襲を氣にして、まんじりともしなかつたその夜の明け方、ギルモーアは徒歩でもつて、留守宅へと立戻つて參りましたの。で、私と品座との三度目の會見は到々期待され得ないものとなつて了ひました。もつとも、彼れは翌日の夕方、窓下の垣根のそば迄來て、池へ石を投げ込むだりして、合圖を私にしましたが、丁度その時、私は主人とかけ向ひで居たものでしたから、「否」とも「應」とも返事してやる隙さへも得られなかつたんですの。

主人は池へ石を投げた男が誰れであるかを見るために、二階のベランダから首を伸ばして、横手の方を眺めました。さあ、何う致したら宜しいでせう？きかぬ氣とは云へ、未だ二十そこそこの娘に過ぎぬ私は、背中が冷い汗で濡れる程、胸を痛めました。然し、自分でも、そんな氣味の惡い心持ちを早く忘れたかつたので、「えゝ、何うともなれ……」と口先で云つて、眼を閉じてゐました。アクターだつたか、それとも、他の惡戯者だつたか、それは知りませんでしたが、兎も角も、石を投げた男は上手に身を家の影へ隱して了つたので、幸ひ主人の目には入らずに濟みました。

『それ御覽、取り越し苦勞はせぬものだ…。』と、私は指を振つて私の心に教へてやりました。

ギルモーアは何方かと云ふと、西洋人には珍らしい默り屋でした。そして、話し下手でも御座いました。

『フム、お前が何を思つてるか私は知らん。だが、何か思つてゐるとしても、そりや、ほんのつまらん事なんだ。』と、彼れの大きな鼻先は何時も語つてゐるやうに見えました。で、彼れはこの鼻を、さう業々しくもなく、又、さう引込み加減にでもなく、極く自然な工合に人の前へさらして、何時迄でも平氣で默り込むでゐると云ふ風でしたの。まあ、私、その後の長い年月、この鼻と古馴染になつて暮して來ましたが、本統に、深い味はあるが、少しも甘味のないもの

でしたわ。

そんなら、彼れは初めて會つた私――彼れの爲めには可成り結構な贈り物――に、何かしら不滿を感じてゐたのかと云ふに、別段さうではなかつたんですの、いや、それどころか、隨分、私が氣に入つたやうな氣振りが影の方からチラチラと見えてゐましたんですわ。

『お父さん氣の毒です。私の好く知つてゐる友達です。貴方は安心しなさい。何時迄も此處で幸福に暮せますよ。貴方の好きな人があつたら、私が好く見て、結婚さして上げてもよろしい。私が貴方を監督します。』

と、彼れは確かな日本語で申しましたの。その癖、この老人の眼は「友人の娘」としての私を見ないで、唯だ「若い女」をぢつと見つめてゐるやうな風でした。それは、私が横を向いてゐる時、殊にひどく露骨に表れるやうな氣がしましたの。

『この娘は紐を一杯つけ、着物を幾つも着てゐる。だが何故、そんな餘計なものを着てるんだ。』

若し、彼れが率直に思ふ通りを云ふ性質だつたら、いきなり、私に向つてさう叫んだに相違御座いませんでしたわ。陰險でゐながら好色な人、この主人もやはり多少その型に落ち入つてゐるやうな男でした。

と、又しても、池へと誰れかゞ石を投げ込みました。私は胸の中を掻き廻されるやうに驚いて立ち上り、もう、やめて呉れゝば好いと思ひながら、ベランダの端へ行つて、外を見ました。私はチラとアクターの影を目で捕へました。困つたな、何うにかせねばと、胸の中で云つては見たものゝ、さあ、何んな手段をこの際取る可きかゞ私には思ひ浮びませんでした。で、素と大聲で

「御主人様、御主人様。」と云ひながら、ベランダから身を隱して了ひましたの。之でもつて、大概、アクターは室内の

事情を悟るに相違あるまいと、まあ、私は考へたのでした。元來、その頃の私は物事を餘り深く反省して見るのは嫌ひでしたし、又、實際、出來もしない生れつきだつたので、斯んな行爲もたゞ、ほんの當坐しのぎに、やつてのけた丈なんでした。

それから十分程して、主人は私の室から立ち上り、私が友人の娘と云ふ手前、直ぐみだらな事もしかねたと見え、『少し、事務と學課とをせねばなりません。然し、今後の日夜は私樂しみです。』と云ひ殘すと、淋しさうに笑つて、私の手を握りしめ、もう私から離れて行つて了ひました。無口の癖に「樂しみ……」なぞと云ふお世辭を使ふ……本統に西洋人は妙なものだと私はつくづく感じました。私はやうやくほつと息をついて、急いで階下へ駈け下りて行きました。もしかしたら、未だ、アクターが其處らを歩き廻つてゐはしないかと思はれたからでしたの。

所が何うでせう。アクターはボーイ頭の眼に止つて了つて、二人は裏門の所で何か話しをしてゐましたの。向うで私の影を未だ見ぬのを幸ひ、私は再び自分の室へ取つて返して業と知らぬ風をしてゐました。何だかボーイ頭を挾むで、あの戀しい人と會ふのは、私としても餘り氣の引ける事だつたんですものね。

軈て、ボーイ頭は藥でも飲むだ時のやうな顏をし、ホーキを規則正しくかつぎ、體をまつすぐにして私の室へ這入つて參りました。『姉さん！』と、彼れは洞の中で響くやうな聲を出しました。えゝ、もう私をお孃さんとは呼むで呉れなかつたんです。彼れは卑しい視線をゲジ〳〵のやうに走らせて、ベッドの下の方から上の方迄見やり、それから絹布團の皺の一つ一つを味わうやうにしらべましたの。私は全く不快になつて『奉公人の分際で……。』と、一つおどしてやりたい位でした。

「姉さん、何ですか、主人はもう……？』

ど、彼れは割合ひ耻ぢ知らずに私へ問ひ掛けて來ました。

『私は御主人の友人の娘として、充分待遇されてゐるんですよ。』私は怒つたやうに斯う云ひ返してやりました。ボーイ頭は眞黒な眸の兩方を下の方へ下げて、一寸、悲しさうな顔をしましたが、さも、私を附け上らせまいとでも謀らむでゐるやうに、直ぐ

『實は例のが……。』と言葉を押しかぶせて來ました。私は急に身が小さくなつたやうな氣がしましたが、此處で敗けては、先々迄祟りが續くと思はれたので、もう、ずつと、大膽になつて

『まあ、商賣人にも似合はず、あの人は妙な仕打をしますのね。』と云つてやりました。

『全くです。あの人も、もつと愼しむで呉れないと困ります。昨晩だつて……。』

私は胸の中へ手をつつこまれたやうに、たじろぎました。ボーイ頭は昨夜の事を知つてゐたのでした――尤も、斯う云ふ秘密に對しては第三者の眼は異狀に鋭く働くのが通例ですし、ボーイ頭は随分私と云ふものを前々から氣にしてゐたんですからね。――

『で、あの人、今日は歸つて行きましたか？』私はあなどられまいとして、大急ぎに斯う話を變へて見ました。

『やうやく、納得させてね……。困ります、姉さん、仲へ這入つた私がさ……。』彼れは泣き出した相に、片方の眼尻を細くしながら下げました。その悲しみの感情は仲介人の迷惑と云ふ事より、彼れの私に對する失戀をより多く含むでゐるに相違なかつたんですの。いゝえ、取り持ち手とか媒酌人とか云ふものの心中には、何の道自己の犠牲のやうな、失戀のやうな氣持ちが混つてない事は少う御座いますからね、まあそれは本統で御座いますよ、だつて、ボーイ頭はその日の朝方、白鳥の羽蟲の事からおかみさんと云ひ爭ひを、初めて到々、彼の女の髪の毛を二十本程むしり取つたん

でした。つまり、この男は心のウツプンの持つて行き所が他になかつたんですわね。

おや、お話しが又肝腎な事から大部外れました。では、もう一度、私の主人、ギルモーアの方へ注意を向け直しませうね。

えゝ、彼れの職業――、それは後になつて、私と大變大きい關係を結ぶやうになつたんで――一先づ細かくこの點を明らかにして置きませうね。

彼れは二つの仕事を持つて居りました。一つはY町に店を出して、彼れは寫眞師をして居りましたの。もう一つは、著述で、それは寫眞術に關するもの、それから、何かしら應用化學に關するものらしう御座いました。えゝ、それらの原稿はイギリスのロンドンへ送られ、そこの或る出版社の手へ委ねられてゐたのでした。私には好く分りませんが、寫眞術の方の本は何かの事情のため、いくら再版をせまられてもギルモーアがそれを承知しないので、古本へ可成りなプレミヤムが附いたと云ふ話でした。で、著書にプレミヤムが附くと云ふ事は、取りもなほさず、オーサーにプレミヤムが附いた譯に當りますんでせう。だから私、この話しは隨分氣持ちよく、又、滿足して聞いたものでしたわ。

彼れは寫眞師こそして居りましたが、何もそれで御飯をかせぎださねばならぬ程窮迫しては居りませんでしたの。いえ、それどころか、彼れは五十萬圓からの財産家でね、この話しを知つた時も、私決して惡い氣持ちは致しませんでしたわ。が、いくら、お金持ちでも、商賣人である以上、人樣へのお世辭をかゝしてはならない筈でしたが、何にせよ、生來の無口であり、又、その無口を當然なもののやうに、人樣の前へさらすと云ふ方だつたので、この欠點のつぐなひとして、彼れは技術で名をとることに熱中したらしいんですわね。それとも、之れは私の間違つた推量に過ぎず、彼れ自身にはてんで初めから熱中なんて事は起りもしなかつたか知れませんわ。それにしても、「冷かな凝り性」と云ふもの丈

は彼れも持つてましたの。つまり、倦怠したやうな顏をしながら、然も順序よく研究すべき事項を着々と片附けに行くと云つた風なんですの。

彼れは日本の寫眞屋さんのやうに「修整」はしませんでした。その代り、撮影の時に、好い効果の全てを擧げるやうに骨折りますの。例へば、頰骨が凸出して、鼻の凹むだ顏へは何んな方向から光線を當てると、最も見好い風になるかなぞと云ふ事を好く心得てました。又、そんな技術の奥秘を會得するため、彼れは自分で樣々な顏を土で造つて、これを色々な方角から來る光線の組合せの下で、色々な位置にして、撮影して見たりしてましたの。可笑しい事に、彼れの使ふレンズは極く價ひの低い水晶製でしたが、彼れは之を自分で磨き直して自分に適した感じのものにしてゐました。

「名人の彫刻家は切れ味の鈍い刀を使ふと或る有名な日本人が云ひました。貴方、その日本人の名を知つてますか？」と、彼れは恐ろしい日本通を自慢しながら、私へ尋ねた事がありました。

その他、私が彼れに就いて深く感じたのは彼れの大變犬を愛する習癖でした。彼れは犬との交際に於いても、例の「冷かな凝り性」を應用したと見えて、獸の泣き聲によつて、その心持ちをよく理解する迄に進んでゐましたし、その上、彼れ自身も犬に對して自分の苦痛や喜びを訴へる術を會得してましたの。

或る日、過つて彼れはナイフで自身の指を切つた事がありましたが、その瞬間、彼れはその苦痛を傍らにゐた犬に打ち明けるやうな鳴き眞似をしましたの。すると、犬はすぐ立ち上つて、主人の手の先を嘗めてやりましたのでね、私、可笑しいやら、不思議やらで、しばらくぼんやりとしてゐた程でした。

私、時々、たわいもなく考へるのですが、若し遠い將來に、犬と對話し得る新らしい人間の種屬が生れ出るとすれば、それは何うしたつて、黑い毛の人種からでなく、黄色い毛の人種からに相違御座いませんわ。何にしても、西洋人と云

ふものは好く動物を愛しますし、又、動物の方でも好く彼れ等の便益をはかつてやるやうですわね。

ですが、斯んな取るに足らぬ事を申し上げてゐる暇があつたら、もつと必要な事の方へ移りたう御座いますね。

え丶、思ひ出して見ますに、ギルモーアと私との新らしい生活は直きと古いものになつて了ひましたの。つまり、私は出來る丈早く四圍に同化するやうに努めましたし、又、何うしても同化し得ない場合は、向うを改革して、自分に適したものにしてやつたんですものね。

『もう、之で、何も珍らしいものはありやしない。』私の嘆きは結局其處迄行きついて了ひましたの。

斯うなると、思ひ起されるのは、品座の身の上で御座いましたわ。もつとも、それ迄だつて、私と旅先にある彼れとの文通は割合自由に行はれて居りました。彼れは田中とか山本とかまあそんな姓名の人を發信者に見立て丶は私に手紙を呉れましたの。で、私はギルモーアから、田中さんとは？と聞かれると、妹の夫だと答へ、山本さんとは？と尋ねられると、從兄と戰友だなんて云ひ拔けて置きましたの。

『おや、貴方、田中さんはお父さんの弟だつて、この前、云つたでせう？』と、ギルモーアは陰鬱に笑ひました。私、さうも云つた覺えがあるやうなので、斯う突込まれると、一寸不氣味でしたが、例の取り越し苦勞をゴミのやうに厭がる性質のために、あまりその點を氣にも掛けませんでしたの。それに西洋人なんてものは妾に情夫があつても、それな餘り騷ぎ立てたりしないのが通例なんですものね。

私は人から輕い嘘を云はれても餘り氣に掛けないと同じ程度で、自分が一寸した嘘をついても、人から責められる可きではないと、まあ、斯んな意見を持つてたらしいんですわ。何故つて、責めるだの、許すだのつて事は、この愉快な人生へタガをはめるやうなもので御座いますものね。人の心が怒つたり、詫びたりし初めなけりや、そんな面倒は他の

何處からも起つて來やう答もないんだと貴方お思ひになりませんの？

そんな譯で秘密な手紙に就ての私の心配は直き無頓着と同じものになつて了ひましたの。品座の方も、餘り熱心して事を運むではゐないと見えて、田中や山本に飽きると、今度は宮池と云ふ姓を名乘り初め、その次には、何う間違へたか、宮地とも書いて來ましたの。ギルモーアは私の知らぬ内ちやんと斯んな細かい相違を檢べ上げて置いて――

『宮池と宮地は二人の人ですか？』

『いゝえ、同じ人ですの。』

『自分の姓名を間違へぬやうに云つてやりなさい。それから、覺えときなさい。私はお父さんから貴方の監督を賴まれてゐるのですよ。若しかしたら、手紙を開いて見るですよ。』

私はギルモーアの氣まづい顏を見ると息がつまりました。何しろこの寛大な主人は好く漢字が讀めるのですものねえ、然し、品座は決して、戀しいの、懷かしいのと、優しい文字を並べ立てる性質ではなかつたので、手紙の内容は主人に見られても、たいして恥かしいものではありませんでした。それには、地方巡業を終り、近くこの都へ歸つて來られる喜びが認めてあつた丈ですの。

で、私は業と、古い手紙の二つ三つを主人に見せてやりました。

『さあ、之を見て、二人で樂しみませう。』と私は云つてやりました。

『日本人の手紙は淡白でよろしい。』と、彼れは滿足げに云つてましたが、その内心は何んなものだつたか私には分りませんでした。

が、一般に西洋人と云ふものは、此の道となると、極く寛大なのですわね。このギルモーアの友人、アーノルドさん

なぞにしても、そのお妾に夫がちやんとあつて、御自分もその男と平氣で交際してね、二人でヨツトへ乘つて、その男にカジを取らしてらつしやる位なんですものねえ。

『今日はナラヒだな。』

『オモカヂ！』

まあ、そんな風に仲が好いんですものねえ。けれど、ギルモーアは私のハシヤギ方を幾らか毒々しい冷たい目附きで、ちつと、見つめて居りました――之はまづい――と、私は直覺的に身を顫はしましたが、でも、ぢき私、又そんな點には無頓着になつて了ひましたの。と云ふものは、品座が私と二人で舟遊びをする日取りを、もうちやんと手紙に書いてよこしてたんですもの。私、もう、進軍喇叭を聞きつけた軍馬見たいに勇み立つて了ひましたの。

さあ、其處で私は、毎日、毎日、その日の來るのを心待ちに待ちましてね、ある時なんか、餘り、もどかしいので、女の癖に、一二三！と、椅子を飛び越して見たり致しましたわ。えゝ、さうしたら、時間もきつと、何かを飛び越して呉れるだらうと、思つたんでした。けれど、私、その間中だつて、食事を減らすとか、夜も寢られないとか云ふ事は別段なかつたんですの。

いよ〳〵その日は參りました。それは私が期待してゐたよりも以上の樂しみを私に持つて來て呉れました。港は靜かで、お日樣は手一杯に晴れ渡つて照つてゐました。私達を乘せた赤い帆のヨツトは鷗が猫のやうに鳴いて飛ぶ下に浮むで居りました。

『鷗は皆嘘のやうに見えますね。』

『何故でせう。一羽もお婆さんらしいのが居ない。皆、娘のやうだ。』

『あの白い柔かな腕へ、ピツタリと附けた足が桃色をしてるためでせう？』

斯んなたわいもない話しでさへ、もう私たちを醉はせるに充分でしたもの、その先、二人が取り交した自分の事に關した話しになると、もう二人は好い心持ちに興奮して了ひました。

『ぢや、夫婦に……。』

『でなきや、尼になるわ！』

『時に、ギルモーアの病氣は？』

『段々、重いんですの。』

『直き、死ぬかしら？』

話しは山のやうにありましたが、皆、たわいもない事でしたの。戯れの戯れの戯れ。だから、細かく此處で申上げるより、貴方の想像にお委せする方が賢いやり方だと存じますわ。もつとも、此處で氣の附いたのを幸ひ、ギルモーアの病氣に就て丈は、もう少し明らかにして置く必要があり相ですわね。

えゝ、彼れは相當の年輩だし、持病の腎臓炎が大分重くなつてゐた所へ、リユウマチスムが手傳つたりして、もうその頃では寢たきりになつてましたの。それで、愈よ自分でも、もう駄目と氣附いたのか、ある朝、恐ろしく早く、私を呼び起して、斯う申しましたの。

『私が助かるか、助からぬか、その點をドクターから確實に聞いて、何方にしても安心したい、死ぬにしても、死の安心を……。』

私は眼に涙を一杯ためて、主人を見やりました。可哀相に、斯んな異國で、一人の身寄りにもかしづかれず、儚く死

んで行くその心持ちは何んなだらう。人間よりも犬に多くの親しみを感ずると云ふこの人の心持ち、それも、人の世の信じ難く、頼りがたい事をつく〴〵味つた上で、行きついた心の境地に相違ないのだ。氣の毒に、氣の毒に。第一、ギルモーアが一昨日、私に云ひつけて、玄關へ貼り出させた、訪客への斷り書きを思つて御覽。それは、本統に、次のやうな、世を儚むだ氣分の一杯溢れたものだつたつけ――

『……私は去る十月二十八日より、完全に孤獨なる靈となれり。戸外の事、いや、手近い周圍の事さへも、旣に私の關せざる所なり。私は毎夜、一種異樣な、極めて獨創的な靈の祭壇を案出し、その上に一人坐す。大方より寄せられたる書翰さへも開く事なく燒き捨てらる。私を見舞ひに來て吳れる親切な人々よ。どうか私の代りに、門前の犬の頭を愛撫してやつて、その儘、靜かに歸つて下さい。』

少し氣が變なのでせうか、いゝえ、さうでは御座いません。始終彼れは極めて嚴粛で、眞面目な時間を過して居りました。

私は彼れの命令通り、ドクターのゲーリーさんに、主人が助かるか死ぬかに就てのキツパ詰つた明答を要求致しました。ドクターは患者のベッドの周圍を廻りつゝ、大變、云ひ憎さうに、患者の狀態の危險な事を打ち明けました。そして『然し、然しですね、落膽なさいますな。曙光が再び來るかも知れない。それは學理丈で推し量り得る程、容易なものではないが。』と附け加へました。

ギルモーアは之等の答へに耳を傾けつゝ、驚く程美事な落ち着きを保ち續けました。了ひには打ち興じて、ドクターへ火葬と土葬との優劣なぞを論じて聞かせたり致しました。さすがは紳士だ。人はいざとなつたら、斯う云ふ風に諦めをつけたいものだと、私、かたわらに坐つてゐて、つく〴〵感じ入りました。

所が、ドクターお前を殺つて了ふと、忽にメルモーアの態度が一變致しましたの。私は驚いて立ち上りました。彼れはシュスの枕を天井へ向つて投げ、犬のやうな聲で泣き叫びました。そして、『自分が死んだら、日本人流に屍骸を燒いて呉れ。その灰は何處へも埋めずに、庭へ撒いて呉れ。おゝ、俺はあの葡萄の葉の上に、雫のやうに憩ひ、そして雨に打たれるんだ。打たれるんだ。』と、日本語に英語を交ぜて、私に云ひ聞かせました。

氣の毒に、お金は澤山あるけれど、氣の毒に。私は彼れに抱きすがつて、嘆き悲しみ、又、思ひ直しては、色々と彼れを慰めてやりました。

彼れは鼻の頭を赤く腫らし、鼻の穴を水つぽく、しゆく〳〵と鳴らしながら、眼を丸く動かして、天井の隅、扉の隙、窓の枠なぞを、その視線で脊め廻りました。彼れの顔面の筋肉は何かしらに恐怖して、こわばりながら顫へました。まあ、何を見送つてゐるのだらう。あのトゲ〳〵しい眼附き！天井の隅の蜘蛛の巣へ、自分の胸から拔け出した靈が、引かゝつて悶えつゝ揺れてでもゐるのが感じられるのかしら。えゝ、實際、風もないのに、ねえ、貴方何故かその蜘蛛の巣は淋しく上下に揺れてゐるんでした。

それから、今度は、何を思ひ附いたのか、彼れはいきなり枕元にある紫色の一輪差しを手に取り上げました。まあ困つた事だ……。それを投げてはいけない。薄い瀬戸物は粉微塵になつて室中へ散らばるだらう。私は心も心ならず唯だ、手を開いたり、閉じたりして默禱でもする時のやうに、體をじつと堅くしてゐるより他、適當な仕事も知りませんでした。

すると、哀れな主人はじつとその花瓶を握りしめ、――えゝ、指が折れさうにソル程堅く握りしめ、それから、又、そつと放して、滑らかに光る、その丸みのある面に深く注目しました。

『見なさい、この表面を！これ、指紋、私の指紋、立派な渦巻、そつとしとけば何時迄も殘る。殘る。可愛らしい、だ

のに、私の生きたこの指はもうじき燒かれて湯氣を立て脂を垂らし、パサ〳〵の灰になる。』

彼れはさう云ふと、鼻毛があらはれて見える程、鼻の穴を大きく開いて、もう無遠慮にすゝり泣きを致しました。

私も我慢が出來ず、自分の溢れかへる感情をわつとばかり聲に出して、ギルモーアに抱きつきました。けれど、ああ、何うした風の吹き廻しでせう。彼は矢庭に私の體をふりはらひ、私より花瓶の方が可愛いと云つた風に、それをしつかり抱きしめました。

彼れの依り所ない淋しさは云ふ迄も御座いませんけれど、斯うなると、私の淋しさだとて、決して彼れのに劣るとは思へませんでした。それでも私、すぐ諦め直し、この曲つた氣性の主人へ出來るだけ物柔かな慰めの言葉をかけてやりました。

さあ、そんな詮ない慰撫の一方、私の心配の一部分になつて、こだわつてゐたのは、一體、ギルモーアが死んだら、彼れの遺產五十萬圓を誰れが受け繼ぐのだらうかと云ふ點で御座いました。

父が破產して色々の苦しい目を見て以來、、私のお金に對する熱望は私の胸をまるで花園のやうに大袈裟に飾つて居りましたの。で、『遺產？』『五十萬圓？』そんな疑問がまるで微妙な音樂のやうに花園の間に響いてゐたと云ふ譯なんでしたわ。自分で斯んな强い本能を恥しくも思ひ、時には少し抑制して見ねばなるまいかと考へ直した事も隨分あつたのですが、そんな手ぬるいカセで、この心持ちがすつかり淨化されるものでは御座いません。私の夢は美しく、汚く、大きく廣がり育つ一方でした。

——私はこんなに汚くて、然も、美しい日を見た事がない。——

私、自分で、自分に驚いては、よく斯う自分の心持ちを獨白致しましたわ。

品陸とお暮するに就いても、何より先立つて入用なのは金と銀で御座いました。だつて、貴方は悲しい顔をして、何度もお資の不足を告げ、立派な家を借りるなんて事はもうほんの夢に過ぎないなんて、悲しさうに私へ暗示したんですものねえ。

それだのに、我が欲しいと思ふ家財道具は皆高價なものばかりなんでせう？何はともあれ、ソーフアのどつしりしたのを是非用意せねばならない。何しろ、あれは『戯れる臺』と云ふ位のものなんだから……。それにカーテンは絹のが欲しい、半分木綿が這入つてゐるのでも好いが、でも、手に觸れば直ぐ分つて了ふんだから……なんてね、貴方、私、もう毎日、思ひ悩むでゐましたの。そして、その間、間に、首を持ち上げるのが、あの言葉『遺産？』と云ふ言葉だつたんですの。

で、到々、或る日の事、病氣の重いギルモーアの枕元へ私はすがつて、それとなく、私に遺されるものゝ大きさに就いて尋ねて見たり致しました。ギルモーアは私の氣性を一番好く飲み込むでゐたので、斯んな思ひ切つた私の行爲をも殊に意外とも思ひ取りは致しませんでした。

『皆、遺言狀に書き込むで置いてあるよ。好し、好し、好し。お前にやるものから、猫と犬に分けるもの迄な。』

彼れは苦しい氣分の中で、莞と笑つて見せて呉れ、私の額に接吻しました。それで私もこの不遇な孤獨な人への痛い同情から、その上に詳しく聞きたゞす事や、探りを入れる事をひかへて了ひましたの。

かいつまんでお話しすると、それから直きギルモーアは他界致しましたの。私は一通りその事を泣くと、やがて悲しみを通り過ぎた時に共通な水々しい輕々しい心持ちになりました。『遺産？』この言葉はもうセレナードではなくて、賑かなマーチに變つて居りました。けれど、私はギルモーアの殘した重要な書類に一寸も手を附ける事を許されませんの。

した。あゝ、書類と云ふものが此の時程嚴肅に見えた覺えを私未だ知りませんでした。本國からは主人の甥に當ると云ふハッチソン氏が、若い身空で、もう頭をはげ上らしながら、眼も鼻も一と所へ寄せ集めたやうな窮屈な赤い顔をしてやつて參りましてね、貴方、それが、ローヤーのマクドナルドさんと始終ひそ〳〵立ち話しをしては私の顔を流し目で見ますんでせう？私本當にもう氣が氣では御座いませんでしたの。

『あんな性根も知れぬ若僧に大切なものを皆さらはれてたまるもんか？姉さん、しつかりしてなさいよ！』例のボーイ頭も、氣の沈む私を一生懸命に引き立てゝ呉れました。私に取つて善い事は延いてこの西郷さんに取つても善い事なんだと云ふ風な解釋を彼れは抱いて居た譯なんですわね。

『所が何うで御座いませう。恐ろしく大きな靴をはいたローヤのマクドナルドさんは樫の木のやうに堅くなつて斯う私に打ち出して來ました——

『先づ、ボーイを一日も早く解雇せねばなりません。さうする事の權利をギルモーア氏は全部私に授けてお出でゝすよ。

　私の胸の花園は何だかこのローヤーの大きな靴で半分以上破壞されたやうでした。まあ、それに、この人と云つたら、何だか莊嚴で、首のまはり一杯カサブタが出來てゐてね、それがカラへさはつて、カサ〳〵云つてるんでした。彼れは儀式でも行つてゐるやうに、兩ひぢを張つて、室を四方に歩き、眼鼻の一所くたになつたハッチソンへ書類を渡すと、相手からも別の書きつけを受け取り、それへ矢鱈にシグネチヤを書き込むだり、前に渡した書類と引き合した上重ねて見たり、又、別の證書を作製したり、計算したり、測定したり、法律の本を參照して、ハッチソンに説明したり、又、何かの説明を求めて、それに反對したり、同意したり、まあ、何時迄もそんな儀式が續いて行きましたの。

一方、私は私で呉れた花嫁のつくろひに急がしう御座いました。品座と家を持つ！ 何うしても西洋風にせねばいけない。調理ストーヴは西洋のジャアナルで見かけた二本口の石油のを使ふやうにし、ナイフやサジやフォークは醫療器械屋に賣つてゐるあの外科手術室用のガラス張りになつてゐるニッケルの棚へ並べて置きたい。眞鍮製のものへは決して緑青を湧かせないやう、又、鐵製のものへは赤錆を出してはいけない、然しなぜ、緑青は青く、錆は赤いんだらう？ それからネヂやバネの仕掛けを出來る丈多く使ひ、水タンクは出來る丈セイの高いのが好い。井戸は風車で吸ひ上げポプを動かすやうにするのが好い。それとも、下町に住むで、水道にするか？ 兎も角、太く、勢ひよく水の出るニッケル製の舶來のネジグチを取り附けたいものだ。寢室の中へ洗面臺を置いて、鏡は青くない、純粹のガラスのものを選ばないといけない、寢台は品座の趣味に委せるとしても、絹布團の柄は私が見立てなくては承知出來ない。

けれど、斯んな紛らし位では、私の不安は治つて來ませんでした。私は出來る丈の聲で叫びました。

『我れを知るものは世界にして、世界を知れるものは我れなり……』などと、自分でも分らないやうな大きな事を云つて見ましたの。何でも、廣々とした考へを持つたら、胸の中にこの不安の居所があるまい、と、獨りで感じたらしいんですわね、本統に愚かしいお話しですこと。

さあ、さう斯うしてゐる内に、到々、一番重大な日が參りました。マクドナルドさんはギルモーアの遺書を親戚立ち合ひの上で、私に示しましたの。その書き附けには大體に於て次の通りの事が英文で認めて御座いました。

――リンには情夫があるため、私へあらゆる不親切を仕向け盡した。この點で、私の不滿は仲々大きい。それ故、ボーイ頭へ與へるのと同じ金額、五百圓をリンへ讓る丈で、他の便宜を計つてやつてはならない。但し、リンは私の訓練の下に、相當の寫眞技術を學むでゐるから、私の愛用した寫眞機二個其の他操作用の器具一切を彼の女へ殘す。――

まあ、この遺書の不親切！　私は怨みと羞恥とで滿座の中に赤面して了ひました。マクドナルドさんはこの時殊さらに威嚴を保たうとして、牛のやうにいきみ返つてお出でゝしたし、猿のやうなハッチソン小僧は頭から足の先迄を朝の光線でしきりと光らして居りましたの。

私は默つてその場を引き取らうとしました。すると、ハッチソンがまるで私を罪人あつかひに引き捕へ、英語の早口で何か怒鳴りました。

『承諾なさい。』と、マクドナルドさんが毛だらけな手で遺書を叩きました。

『アブソリユートリー、アブソリユートリー。』と、外の遠縁の男も下顎を出つぱらして叫びました。何がアブソリユートリーなのか私には分りませんでしたが、この男はかう云ふのが口癖だつたんですの。それから、もう一人の遠縁の背低爺さんは、お腹をつき出して、『ダッツオール！』と云ふのが癖で、二言目にはダッツオール！とやつて居りましたの。

私は敗けたと見ると、ぐつと氣丈になりました。ノー、ノー、ミスタ、マクドナルド！と私は彼れの煙突のやうなヒヂを兩手で押して、それから鳥が逃れるやうに、服をハダけて、そこを飛び出して了ひました。

『こりや、唯だでは濟まされねえ！』次の室から西郷さんが轉がり出して、私のあとを追つて來ました。

『世話します、世話します。私に世話さして下さい。』

『何をなの？』

『辯護士でさあ。家内の妹が奉公に上つてゐる、あの栗田先生を！』

彼れは依然として世話好きでした。私は遺書がさうなつてゐる以上、辯護士の力なぞはもう賴る譯に行かない事を彼

れに聞かしたのでしたが、彼れは少しも承知しないで、外へ駈け出して行つて了ひました。

私は之と云ふ目的もなく、一人門を立ち出で、坂を降りて海岸を走りました。品座が居れば相談相手にもなつたのですが、彼れは合憎、又、巡業に出掛けて留守で御座いました。父？父は上海で再度の失敗をし、もつと遠くの方へ渡つて行つて了つたとの報知でした。で、之もあまり遠すぎて、何とも助力を乞ふ事が出來ませんでした。私は仕方なしに考へました——えゝ、考へ嫌ひの私が、夢中になつて考へ初めたのです——五十萬圓に對する五百圓？一體、それは何パーセントに當るんだ？少くとも私へ五萬圓は呉れるのが至當ではないか？それに、ギルモーアと私との眼が暗々裡に默契した遺産の金額は丁度その位の見當なのを私は知つてゐる。私は無言でそれを彼れに要求した。彼れも無言でそれを承諾してゐた。それだのに……いや、之は何たる意外だらう？彼れは死に際になつて急に自身の計畫を變更して了つた！さう。辯護士には一つ嘘を吐いてやらう？何と？ギルモーアが私に五萬圓呉れると口授した！之が裁判のきつかけになる。然し、然し、はてな、立ち合ひ人なしの口授では……。

さて、私は怖える胸をおさへながら、方々さまよつた上句、家の裏門から自分の室へ這入つて行かうとしました。ボーイ頭は既に歸つて來てゐて、栗田先生が一度私に會ひたいと云つてゐる由を告げて呉れました。で、私は

『之で西郷さんには二度お世話になつてね。』

『いや、あれとは異ふ。今は、危篤の場合だ！』

私はこの「危篤」と云ふ言葉が、こゝへは當てはまらないのを思つて微笑みました。

『私、一生忘れませんよ、貴方の御親切をね。えゝ貴方が死んだ後は、時々上野をお參りして上げるわ！』とは云ふものゝ、私の心は全く戲談どころではなかつたんです。

さあ、もつと急いで申しませう。私は結局不當な遺言の取り消しに就いて、栗田さんに賴み入りました。そして、この人を代理人にして、ギルモーアの親族會招集の申請を致しました。所が、あゝ、何う云ふ惡魔が道を切つたのか、事はちつともうまく運ばず、東山判事主任様が取り調べた上

『申請は理由なし、却下す！』

と、なつて了ひましたの。

栗田先生は之を不當だと云ひ、ボーイ頭は餘り論じ立てゝ、喉を惡くして了ひ、私も强い頭痛に落ちて了ひました。其處で、栗田さんは裁判所へ「抗告の申し立て」とか云ふものをして下さいました。で、民事部の岡本さんが審理をなさいましたが、又も、無効と云ふ始末で御座いました。

之であらゆる策も盡きました。私は却つて肩が輕くなりました。遺言通りの五百圓と寫眞機一式を私はもらつて引き下り、五百圓の内から、二百圓丈、ほんの志として、ボーイ頭を通じて栗田先生にさし上げました。殘りは僅か三百圓！もうソーツワを一つ買へばお終ひになりさうでした。それに、斯んな手一杯のお金で買つたソーツワは「戯れの臺」どころか、「悲しみの乘り物」になる恐れがあり相では御座いませんでしたらうか。

お金の方を一時諦めた私は、當然の結果として、品座と同棲したいと云ふ希望で夢中になり初めました。然し、その頃の彼れはお恥かしい程懐ろの輕いたちで御座いましてね。二人が遊むで暮してゐたら、それこそ、直ぐひもじい思ひをせねばならぬ始末でしたの。で、私は「藝が身を助けて呉れるなら……」と思つて、ギルモーアから受け繼いだ寫眞機一式を賴りに、あのY町の賑かな横丁で、女寫眞師と云ふ妙な仕事を初めました。それとても、仕事が面白いからではなく、何うかして、品座と一緒に何時迄も暮してゐたかつたからですの。この事業を起すためには、その頃でも、八

百圓からの仕度金が入用でしたが、之は品座がひどい工面をして用意して呉れましたの。私が權利を買へたのは、丸で古い寫眞館で、スチユヂオの照明の工合は誠に不都合なものでしたが、然し、當分の間は、何事に對しても忍耐するのが私の不快なつとめで御座いました。

斯うして寫眞屋の女主人は何うやら自分丈の生計を立てゝ行けるやうになりました。そして、悲しい事に、もう、直ぐ、姙娠と云ふ災難が初まつて了ひました。

『鷲や鷹なぞと云ふ鳥は動物園の檻の中へ飼はれてゐると、決して雛を返さない。つまり環境に不滿を感ずると、或る種の動物は自然と子を造らないものである。』

斯んなお話しを此の頃、私は河合さんと云ふ醫學者さんから聞いた覺えがあるんですが、して見ると、まあ、私は寫眞師と云ふ職業にも、品座と云ふ夫にも滿足した形ちなんでしたわね。

いえ、所が、別にそれ程でもなかつたのです。貴方も御存知の通り、目的は達せられた場所で消えて了ふのが常で御座いますものね。私、時とすると、急に氣がついて、歯ぎしりしながら、品座に斯う云つてやつた位ですの——

『貴方！ソーフワは何うなりましたの？暖房裝置の事を何故私たちは忘れて了つたんですの？ピラ〱した絹のカーテンや、ベランダの中のアスパラガスの大きい鉢や……皆、一體、何處へ行つて了つたの？』

考へて見ると、本統に味氣ない事で御座いますわねえ。それに一時うまくはやつて呉れた店の方も、人々の好奇心が薄らぐと一緒に、すつかり暇になつて了ひましてね、貴方、この事は一番まとまつた惱みらしい惱みとなつて私の上に激ひかゝつて來ましたの。

『どうも、ギルモーアから讓られたレンズが私の技巧としつくり適合しないのだ。一層ダルメヤと云ふ玉と替へて見や

うかしら?』

ええ、その頃はダルメヤ、グロンとか何とか云ふのが隨分仲間の間でも評判好かつたのです。それにしても、先立つものは莫大なお金なんで、私、すつかり、氣を滅入らして了ひましたの。

其處へ持つて來て、品座は自身の仕事——ガイドです——にもはげみがなくなり、私ばかりを頼りにして、私の家に晝間から寢轉んでゐると云ふ有樣なんですもの、私、餘計あせらずにはゐられませんでした。その上に、まあ、何うしたのか、彼れは、惡くしないでも好い胃なぞを惡くして了ひましてね、私が氣の向いた時、造らへてやつた、アルブミナイズトオレヂだとか、やれ、スパニッシュタリームだとか云ふ面倒なもの丶味をしめして了つて、

『ババア!あれを又、こしらへろ!』

『コツタぢやありませんよ、このふくれたお腹を第一見て頂だい!』

と、云ふ騷ぎでしたの。私はまだ二十になるや成らずで、ババアなぞと呼ばれる事が何より不服でしたので、時々、彼れの事をヂヂイと云ひ返してやりました。すると、彼れは男らしくもなく、沈むだ顏になつてね、貴方、急いで床屋へ驅けて行つて、奇麗にヒゲをすつて歸つて來ると、まるで雄雞のやうにヨタヨタして私の前を廻つて歩く始末なんでした。

その内、私のお腹から生れ出たのは、本統に可愛い双胎兒でした。實に、實に、可愛かつたんですの。然し、品座がこの子等を大變嫌ふ上、私の職業の邪魔にもなり、生計にもこだわつて來る關係上、可哀さうには思ひましたが、赤兒は親戚に當る、ある寺の住職へ預けて了ひました。今考へると、本當に罪な事で御さいましたわね。

けれど、もつと、不快な事件がその次に控えてゐたのを、皆様はよもやお察しにはならないでせうね。私は内々、さ

う云ふ事の起る可きを豫期してゐないでもなかつたので御座いますが、その豫期がまだ與へられぬ内に、もう現實の方が待つてゐては呉れませんでしたの。

或る夕方——お〻夕方に何か事件の起る事が多う御座います事——その夕方ですの一人の車夫が私の家へ這入つて來て、品座が在宅かを尋ねました。

『ハテ?』と、私は考へました。車夫?車夫と私の戀人とに何んな關係があるのかしら?

『貴方は誰れのお使ひ?』と、私ははづむ息を殺すやうにして、彼れに聞き返しました。

『お留守なら、よろしいので……。』

『云つて頂戴、呼び出しなんか掛ける人は一體誰れ?女なんだわね?』

『實は向うの横丁に、私の車へ乘つた儘で待つてらつしやるんですがな。』

其處へ警察から歸つて來たのは私の戀人品座でした。車夫はまるで品座に面識でもあるやうに、そつちへ寄つて行き、私に隱し立てでもするやうな風で、外に待つてゐる女の名なぞを打ち明けるのでした。

品座は苦しさうな表情をしきした。それから私の方を振り向いて、許しを乞ふ時に、彼れが何時もする通り、額に皺をよせ、鼻の片脇の筋を深めて、唇を曲げました。

品座と車夫は出て行きました。私は血が踊るやうになつて、獨り手に、そのあとへ從ひました。私のその時の氣持は之々とはつきり申し上げる事さへ出來ません。私は口惜しまぎれに

『S、S、S、』と、犬の名を呼むだりして見ました。

品座はもう車上の女の方へ、あんなに近よつて參ります。女は急いで車から降り、背負つた子供を一ゆり、ゆり上げ

て、何かを囁くと、之も品座の方へ歩き出して來ました。一寸微笑むだやうです。然し、品座の方がそれに笑へないので、又、眞面目な表情に返つて了ひました。私は耐へる事が出來ませんでした。

『何うにでもなれ。私はあの人たちに注意してやしない。愛しても居ねば、憎むでもゐない。唯だ、邪魔してやるのだ。丁度、岩が水の流れを邪魔するやうに、全く無感情に、無感覺に……。』

私は遠慮なく、ずつと、女と品座とのすぐそばまで出て行きました。

女は一寸も笑はずに、むしろ、泣き出しさうな顏で、私の戀人に挨拶をしてゐる所でした。全體が植物のやうな感じのする變な女だ事！眼のへんが凹んで、暗く、口のまはりがとがつて、明るく輝いてるやうな女。猿の眼と、狐の口、そんな顏つきをしてゐるんですの。それに、髮飾りから足袋の形迄が何だか田舍風でした。なるほど、邊鄙な片隅にゐてこそ、之でも多少『新式』なんでせう。然し、この町の眞中に出されては、もう、しほれた野菜物以上ではないやうな女でした。

『陰氣な顏で、氣が長くて、一日中でも大豆の粒を數へてゐるやうな人なんだ。』私はすぐさう思ひました『さう！この女が着ると、新らしい好い格好の着物まで、變な形になつて、垢じみて見えるんだ。』

その內、不意に背中の子が泣き出しました。それで、この重苦しい狀景が少しばかり活氣づいたのは何よりでした。

私は彼の女へ注意するのが苦しいのに、尙も執念く、ぢつと彼の女へ蔽ひかぶせるやうな視線を投げつゞけました。若しかしたら、顏に痣でもありはしないかと、思つて見ましたが、まづ、そんなものは無しに濟みました。然し、彼の女が大きい眼を持つてゐるに拘らず、それを近視眼者のやうに、まぶしさうに細めてゐる事。——（之は、あふれる悲しみや喜びを強ひて耐へてゐる爲めでしたらうか？）——それから、唾液の分泌が盛ん過ぎる質と見えて、下唇がした

くり相に溜れてゐる事を私は素早く發見しました。

『おや？この人は入れ眼かも知れない。そして、子供の時は、さぞ涎れをこぼした事だらうね。』

彼の女はもうさつきから、私の凝視を恐れ厭ふてゐる樣子でしたが、とうとう、光りから逃れやうとする僥倖かなぞのやうに、もじ〳〵と腰の邊をゆすつて、何かしら、私の事について、私の戀人へ聞き正し、不意に沈むだ顔をし、又、一寸ぼんやりし、それから私の方へ徐々に、進み寄つて來ました。

笑ひもせず、眉毛一本、睫毛一本も無駄には動かさぬと云ふ顔附きをしながら、彼の女は五歩ばかりを内又に歩き、それから悲しさうに歩調を崩すと、今度は露骨に外又になつて、私のすぐ前迄至りました。

彼の女は通り一遍の挨拶を、下手な聲色使ひのやうに、無性格に述べ初め、その言葉の終りを『ヤドが、色々お世話になつて居りますさうで……私から改めてお禮申し上げますわ。』と結びました。實に、當り前の文句で御座います。けれど、私の胸は風で鳴る障子の破れ口のやうに、ビリ〳〵ふるへました。

『このヨダレ女め！』と、私は喉の筋肉をむづ〳〵させて、お腹の中で呟きました。

彼の女は私へ訝かしさうな表情を向けながら、靜かに、丁寧に頭を下げました。けれど私は體へ定木を當てたやうに、眞直ぐに突立つて、まるで、瀬戸物のやうに筋肉を堅くした儘でゐてやりました。

彼の女は頭を上げて、私の高慢な樣子をちつと怨めしさうに眺めましたが、すぐ強い羞恥と屈辱とで、顔をいきみ、さつと、ソバカスの色を濃くしました。えゝ、まるで感觸した烏賊みたいに……。

『可哀相に……』と、私は思つて、涙ぐみ相になりましたが、然し、彼の女が直ぐ、戀人の方へ戻り出したので、又、油斷をせずに心を緊張させました。

彼の女は戀人の肩へすがつて、さめ〴〵と泣き入り、何事かを管々しく囁いては嘆息しました。私は構はず、大膽に品座のそば迄進むで行つて、目がしらが痛む程強く彼れを睨めつけました。彼れは急に澁面作つて、その先妻の胸を向うへ押し、體を離らして了ひました。

『私は餘り……餘り……やるせ……』と、女はどもつて、こみ上げる涙のために、額を小きざみに搖がしました。戀人はそれをなだめながらも、又、私に遠慮する積りか、幾らか冷たい調子で、金をやるから、K市へ歸つて、もう少しの間、成り行きを待つやうになどと語り聞かせました。

『まあ、細かい事もお打ち明け出來ぬ内に……』、歸れとは餘りひどいと言ふ意味を目で訴へながら、彼の女は私の方へ正直さうな顏を向けました。そして、『貴方さな、後生一生の御願ひです。何うか最後のお願ひを一つ丈聞いてやつて下さいまし。』と、小さい聲で云ひました。彼の女は業と私に丁寧な言葉づかひを致しました。その方が「他人同志」と云ふ事をハツキリ意識するのに都合がよいと思つたらしいんですわ。

『仰言い！何だか！』と、私は初めて口を利きました。

『貴方を御邪魔にする譯ではないので御座いますがね、あの、何うしても秘密で話さねばならぬ家庭のある事情が御座いますので、せめて、あの、ヤドを、ヤドと……ヤドに停車場迄送つて貰ひたいと存じましてね、貴方……』

何だか彼の女は全く萎れて、涙を新しくしながら、之丈を云ひました。私は品座を振り向いて――

『貴方、その必要がおありと思ふのですか？』と、聞き正しました。品座は一寸考へて、

『いや、無いさ。何故ならある譯がないんだから……。』と、妙な言ひ廻しを致しました。之を聞くと、田舍女はワツとばかりに泣きくづれて、そばのポストボツクスへ抱きすがつて了ひました。心配ひさうな顏をしてゐた幼子がその時一

緒になつて泣き叫び、『母ちやん、何うしたの？』と云ひ出したので、私迄、何とも云へぬ悲しみのために体がふるへました。えゝ、私は不圖、里子に出してある二人の子の事を思ひ出しましたの。

けれど、此處だと思つて、私は力み返り、よく考へてから申しました。

『では斯う致しませうよ。私たち二人で貴方を停車場迄お送りしませう。そして、切符なども買つて上げなくちや……
…。』

『それぢや………なんにもならない……ならない……。』と、女は苦しがつてもだえました。

『叔父ちやーん……。』と、子供が恐ろしがつて、何の譯も分らず叫ぶと、小さい足をあまり振り動かしたので、茶色の靴を下へ落して了ひました。品座はそれを拾つてやりたさうに、垂れ下げてゐた指の先を、蟹の足のやうに動かしましたが、私の方を見ると、顎をしやくつて、「拾つてやるやうに……」と云ふ風を表しました。この有様を見兼ねて、涙ぐむでさへ居た、例の車夫は、鞠のやうに其處へ轉がり出して、靴を拾つてやりました。

子の母は、それを知ると、また、ふるへ立つ程泣き入つて——、

『他人様さへ……斯んなに……御親切なものを……。』と、獨り言のやうに云つたかと思ふと、今度は幼な子の足を撫でさすつて、

『ねえ、坊や、この靴だつて、隣りの叔母ちやんが下さつたのね。都のお父ちやんの所へ行くと云つたら、それぢや、恥ちをかゝないやうに、……つて、私には、この帯を貸して下さるし、この子には……去年死んだ武ちやんのこの靴を、下さつたんだわ。』

車夫がワツと泣き出しましたので、私も風を吸ひながら涙をふり落しました。品座も外の片腕を緩めて、手の指を顫

の足のやうにして居りました。それだのに、私は又しても意故地を取り返して、

『人が立つて見て居りますわ。さあ、三人で停車場の方へ參りませうよ。歩きながらでもお話しは出來ますから……。』

斯うして、私たちは動き出しましたの。そして、彼の女が汽車へ乘り込む迄、品座と口をきかせない事に私は成功して了ひましたわ。それは罪深い行ひに相違御座いませんでした。私、あとで考へると、氣の毒で、氣の毒で、何度も涙を落して、彼の女へ同情致しましたの。けれど、あの場合になつて見ると、私のやうな勝ち氣の女には、何うしたつて、自分を踏みつけられて我慢してる譯には行かなかつたんですわ。私がもう少し、謙遜の美徳を知つてゐたら……斯んなにも心は苦しくなかつたらう、斯んな廻りくどい惱みの下をくゞる前に、手足を引込めて、自分をも、他人をも樂に息づかせてやる事が出來たのだらう、とは何度も私が考へた僞りない悔恨でしたの。

彼の女に私は蔭ながら手を合してお詫びしました。然し、彼れ！　彼れに對して、私の方から讓らねばならぬ謂れが一體何處に御座いましたらう？　私は此處で到底正直には申し上げられないやうな仕打ちでもつて品座をいぢめてやりました。

それから、――それから何うなりましたらうか？　私はあらゆる適當の手段を用ひて、あの品座の先妻とか云ふ女と品座との仲を引き別け、、幾らかのお金も惜しまずに使つて、到々、面倒な緣を切つてやりました。その爲めに、隨分あの女は私を怨むで、悶え苦しむだと云ふ噂を私は聞き込みましたが、又、一方では、案外平氣で暮してゐたと云ふやうな事を傳へて呉れる人も御座いました。

その後、ハッキリとは分りませんが、何でも、あの時、背負つて來た幼い子は、腦膜炎だかに罹つて死に、それが結局、女の仕合せとなつて、彼の女は荷物なしの身輕な體で、K市の何町の乾物屋だかへ嫁ぎ直したと云ふ事でした。

さあ、之で私の不快な夢はあとかたも無くなり、又、一二年すると、その忌はしい思ひ出さへ、あるかないかと疑はれる程、薄れかすれて了ひました。

けれど一番悲しいのは、それと同時に我れ我れの日常生活が新らしい驚異と云ふやうなもの、或ひは生き生きした潤ひと云ふやうなものから段々と懸け離れて參つた事でした。まあ、それが悲しいなぞと云つては申し譯ありませんわね。何故つて、戰鬪まじりの、はげしく、荒い生活と云ふものも、結局はその次に當然到來すべき安穩と平和を目的としてのみ行はれる事なんで御座いませう。其處で私、何時も自分の心に斯う教へ込んでやりましたの――『この平和、この休息を尊重しないならば、最早、人生の中で、一つでも尊重すべきものはありはしない。萎縮の心ではなしに、耐忍の心をもつて、この靜かさの中に生きて行きなさいよ。その耐忍が軈て喜びと變る迄も……。』

まあ、それは好いとして、斯んな長い平和の次には、又しても、實に、豫期以上の動亂が隱れて待つてたでは御座いませんか。それが何だつたとは御問ひ下さいますな。まあ、この忌はしい事件を考へ出すと、私のやうな氣性のものさへ、全く、沈み返つて、望みない深い歎息に浸されて了ふでは御座いませんか。忌はしい事件、斯う云つた丈で、貴方は早くもお察しでせうね。えゝ、品座の入獄――それなんで御座いますの。私は餘り不快でなりません。それ故、この邊の事は細かく探らず、深く觸れずに、急いで透れ去りたう存じますわ。それに、私、品座が犯した罪の内容に就いて、底の底まで承知してゐる譯でも御座いませんの。何故と云ふに、品座がそんな暗い秘密に携はつてゐた頃、彼と私とは別々の所に暮してゐたんですもの。えゝ、彼れはK市。――彼れの故鄉――、そして私はこのY市に！

さて、私は彼れを未決監に訪ひ、その前から内々相談が出來てゐた通り、ハッチソン氏のお宅に上る事を、明確に承諾して貰ひましたの。品座は好い氣なもので、『その方が好い。丁度好い、都合が好い。』なぞと、「好い」と云ふ言葉づく

めで贊成して與れましたの。えゝ、あの人には何となく、やり放しな氣性が秘むでゐるんですわ。凝り性でゐながら、倦き性でね――色々、自分の職業を代へたりして、却つて出世し損つたのも、皆その爲めだつたと私今でも時々思ふんで御座いますの。いえ、そんな些末な事は何うでも好う御座います。其れ故お話しをずつと、飛ばして、今度はもう少し明るい事へ移りませう。

　前にも一寸噂に上した事のある、ハッチソン氏と云ふのは、亡くなつたギルモーアの甥で、五十萬圓の三分の一を亡き人から讓られて、今も尙ほ、舊ギルモーア館に起き伏ししてゐる、極く普通な、つまり惡い癖のない英人でした。一時は私と遺產爭ひ迄して、すつかりお互に感情を害ね合つて居りましたが、その頃、あれや、これやのクダ〳〵しい理由から、又、お近づきになつて了つたやうな工合でしたの。もつとも、ハッチソンは本國から女醫上りの奥様を呼び迎へ、長い事一緒に仲よく暮してゐたのですが、その奥様に連れ子がある事から、面白からぬ騷動が初まり、一萬圓だかの慰藉料附きで、早速離緣をなすつて了つたので、丁度、その時、心淋しいハッチソン氏の目にとまつたのが、之と云ふ職業もなしに、喰ふや喰はずでゐた此の私なんでした。

　さて、ハッチソンとは何んな人か？　もう貴方もお倦きでせうから、極く掻いつまんで、ほんの一寸、この點を申し添へるにとゞめませう。

　F保險會社の支配人をしてゐた彼れはカッチリとした商人氣質で、時間と勞力を無駄に使はず、一度出來した事は、少々氣に入らなくても、やり直しなぞ絕對にせぬと云ふ風でした。買ひ物も仲々上手で、賣り手からまづい品物を押しつけられるやうな例は一度もありませんでした。とは云へ、律義一偏と云ふ方でもなく、いへ、それどころか、妙に、「ローマンチック」で、私と初めて、斯んな事になつた夜だつて

『キツネノボタンは獨身生活を意味する植物です。おゝ、淋しい。』

なぞと、文學的な洒落の一つや二つをも洩らすと云ふ工合で御座いました。その上、何うやら、一寸した迷信なぞをも面白がる性質と見えて、『星の近く大きく見えるのは悲しみの來る知らせですよ。』とか、『池の魚が水面に跳る時は雨が近いのです。』とか、『雀が水を浴びるのは喜びの知らせ。』とか、未だ、その他、ソーチヤツクと云ふもの〻說明なぞは實に手に入つたもので、

『リンは七月生れだから巨蟹宮の支配を受けるです。』

なぞと、まことしやかに話して聞かせたものでした。あゝ、申しおくれましたが、彼れはギルモーアより、遙かに善良な生れつきで、

『パンを長い事、嚙む人は正直です。』

と云ひ云ひ、一生懸命、食物へ充分な唾液を混ぜる癖がありました。

あら、貴方、聞いていらつしやいませんの？　では、取り急いで、もう少し妙な事の方へ移りませう。

一番困つたのは、彼れが子供風な鬼ごつこを愛好する惡癖でした。

『さあ、リン、日本風の鬼ごつこ。逃げる、追ふ。風のやうに！』

斯うなんで御座いますの。私、本統に一生懸命になつて、もう、腕も、足もハダけ放題ハダけらかして、其處等中を逃げ廻りましたの。ベランダに飾つてある四季咲きゼラニユームの鉢を三つ一度に飛び越える位は普通の事、日の當つてゐる明るい室が、白や黄色の細かい塵のために煙つて、ボーツとなる程、馳けに馳け廻り、椅子は横に倒す、デスクは押してくる、ジユータンにつまづく、スリツパはやぶく、それはもう實に、醜い有樣でした。

『鬼ごつこは日本式のが好い。』と、彼れは汗だらけになり、息切れのため、舌を半分ばかり出して、好く感嘆したものですが、では、西洋風の鬼ごつこと云ふのは一體、何んなものなんでせうか、私、その點はちつとも存じませんの。」

それから、彼れは私を背負つて、葡萄棚の下やお池のほとりを走るのが大好きでしたが、私、ハッチソン氏の幅廣い背中の上に居ながら、あの葡萄の葉をぢつと見上げた時には不圖、今は無いギルモーアの病ひにやつれた苦しさうな顔を思ひ出さずにはゐられませんでした。だつて、あの病者は私に向つて、死ぬ際に、斯う申したでは御座いませんか―

『私の骨の灰が、あの葡萄の葉の上に乘るだらう、そして、雨に打たれるだらう。打たれるだらう。』

それ故、私はこの青々茂る葉が大嫌ひになつて了ひましてね。成る可く、そつちへ行かないやうにと、好くハッチソンに頼み入りましたの。

斯んな工合に勿體ない日を重ね、私がたわいもなく樂しい夢をむさぼつてゐるのが、他の人達に何う見え、何う考へられたで御座いませう。それを私は存じません。然し、あの七面鳥さへが隨分と嫉妬のやうなものを起して、何時だつたかは、私がうつかりお池のほとりに立つてゐると、いきなり、後から、私の腰の邊を蹴つて、顔色を變へて怒つて居りましたわ。それから、あの白い鸚鵡は『ホー、ホー、キヤツ』と云ふ私の聲色を覺え込むで了つて、退屈するとは、それを繰り返してゐると云ふ有様で御座いました。

けれど、お許し下さい。私が斯んなに快活な態度を取るやうになつたのも、一つにはハッチソンの理想なり注文なりに從ひ、少しでも餘計氣に入られやうと努めたからなんですの。だつて、彼れは多くの方々がさうであるやうに、『普段は快活に、大切な時には沈着に――』と云ふ注文を絶へず私へ持ちかけたんですものねえ。えゝ、彼れが『樫の木の根方がシメる時は、憂鬱が來る。』などと云ふ迷信を樂しむ事も、結局はそんな言葉で人間の心の中にある快活な稚氣を出

來る丈け多く蘇らせやうとしてゐるからに他ならないのでした。

いゝえ、そんな事は何でも御座いません。もつと面白いのは、彼れが自慢でイカモノ商人のコバルスキーから買ひ込むで來た蝙蝠と三ケ月の模様を散らしてある羽二重の布團でございました。おゝ、このしなやかな品物こそは、その内部に一杯の稚氣を含むだものだと私主張したう御座いますの。貴方、お聞き下さいまし。その布團の怪しい性質！まあ、之は何事でせう。中に這入つてゐるのは決して唯だの綿では御座いませんでした。それは一體、何と云ふ名の物質でせう、ふくらむでゐながら、ちつとも彈力が御座いませんでね、例へば、私が掌を一杯に廣げて、ぐつと押すと、さあ、そのあとには手の形が何時迄も印されてゐて、仲々消えようともしないんですの。ですもの、想像して下さいましな。

まあ、この布團の上に人が仰臥したら一體結果は何うなりますでせう。もつとも、この物質は日光に當てゝ二三日置きますと、元通りにふくらむで工合よくなるのですけれどね、本統に、本統に、人の好奇心をそゝる妙な性質の品物でございました。

それに、私、もう一つ申し上げたい重要な事柄を持つて居りますの。それは――？

あゝ、不思議と申しませうか、恐ろしいと申しませうか？あの寢室。あの寢臺――黃色く塗つてあつて、抽き出しが附いてゐる――。それに法官とバラ娘の油繪。これは元通りの色彩と形狀と位置とを保つて、今も尙ほじつと落ち着きはらつて居たでは御座いませんか。

『バラのお孃さん。何時もピカ〳〵と、フックラとしてらしつて、結構ですわね。けれど、まあ、見て頂戴。私、こんなに淺間しい姿あになつて了ひましたのよ。』

私はよく、さう申しましては、クリームが泌みた自分の頰を逆さに撫で上げ、泣きたいやうな笑ひを以つて、頰ふち

へ擦り寄つたものでした。『婆あじみた若い女。』若しくは『若々しい婆あ。』それが當の私であるのに氣づいた時、何だか心臟の後ろ側がムヅ痒く、好きな鏡を見るのも恥かしう御座いました。

それでも、まあ、ハッチソンが私へ大層身を入れて、後々迄も世話してやらうと云つて臭れるのが、胸にこたへる程、嬉しう御座いましてねえ。ええ、ハッチソンですか？彼れは非常に律義でも御座いますが、それと同時に仲々好色でも御座いました。私、獨りで內々思ひますんですが、律義と好色とは一寸も矛盾したものぢやないので御座いますまいか？さあ、此の點に關する貴方のお考へは如何でせう？

然し、斯んな年頃の女がその淺間しい情事を如何にも樂しさうに話すのは餘り他人樣にとつて快いものでは御座いませんので、私は一切この寢室內のイキサツを略して了ひませう。

それよりも、貴方聞いて下さいませ。年期が明けると品座はＫ刑務所を飛び出して、いきなり、このＹ市へ乘り込むで參りましたの。この事を私少からず不快に思ひました。何故と云つて、彼れは、あの時、未決監の中で、『もうお前の住むでゐる近くへは一生行くまい。』なぞと、指切りを私と取りかはして、ちかつたので御座いますもの。いや、いや、彼れをそんなにうとんじてはいけない。それは何と云ふ過つた考へだ。兎も角も彼れは昔の私の夫だつたのではないか？それはまあ好い。皆、分つてゐる。唯だ、いけないのは品座が柄にもなく、向上會と云ふものを自分で經營し初めた事で御座いました。私この點に就ては、極力彼れに反對して見ましたのですが、監獄生活を經驗してからは、品座の頑固な氣性が一層募りに募つたと見え、二言目には首の根つこ迄も赤くして、私を叱りつけると云ふ有樣でした。

では、何故、私があの高尙な立派な事業に對して反對の聲を上げねばならなかつたか？その理由は――と、貴方は聞いて下さるでせうね。私、それに對して、次のやうな實例まじりの意見を持ち出したう御座いますわ。

えゝ、私が頭の中で考へて居りますのは、あの家具商人の息子、氷川道二さんの事なんですわ。彼れは出來の古い兒分でしてね、惡い方へかけては仲々の利け者でしたが、一度入獄して、改心して以來は、もう、すつかり生れかはつた氣で、身の廻りもキチンと奇麗にし、暗く不快な友達からは縁を切り、足も兩足洗つて了つて、私なぞからも見ちがへられる程、晴れ晴れした顏附きをして歩くやうになりましたの。えゝ、地道に、古着屋なぞを初め、手堅い所から、新らしく内縁の女房も迎へ、一から十迄、注文通りに、都合よく進むで行きましたんですが、丁度、初めての子をまうけたばかりの頃、S町の放射線狀になつてゐる幾つかの道の集まつた、あの街角で、まあ、折り惡しく、あの人は關山四郎に出會つて了ひましたの。關山と云ふのは、氷川と刑務所内で初めて親しくなつたナラズ者で、改心と云ふものが氷なら、彼れこそは味噌コシと呼ばれねばならぬ人物でした。彼れは、適當な職にありつけないで、路頭に迷ふてゐる始末だから、何うか暫らく、氷川の家へとめて與れと、泣き附いて、えゝ、本統に涙を流して氷川へ頼み入りましたんです。私、知つて居りますが、惡黨には好く常人以上に涙もろいのが見かけられるもので御座いますわ、そして、この關山も丁度そんな種類の性質だつたんですわね。さあ、其處で氷川は街の眞中に立つた儘、つくづく當惑して了ひましたの。何故つて、この關山には入獄中大變世話になつてゐる。自分がお腹を痛めた時なぞも、人事とも思はず關山は一生懸命になつて、體をさすつてなだめて與れたり、看守に、あれこれと色々治療の所置を頼むで與れたりしたものだつた。刑務所内で受けた恩――之は後の月になつて、一番、始末の惡いカセとなり易いもので御座いますね。はて、關山を家へとめる譯には何うしても行かない。何しろ、新奇に迎へた妻には自分が出獄者だと云ふ事實を打ち明けてはない。唯だ、K市の方へ長い間、旅をしてゐたのだと云ふ風に、つくろつて話してある。關山を家へかくまつたら、それが端緒となつて、舊惡は悉く發露する、妻は驚いて逃げ出すだらうし、商賣も他にやり惱くなるだらう。困るではない

か、仕方がない。其處で、氷川は思案の末、關山をハゲ娘の居るあのM旅館へこつそりと連れて行つて、四日分の宿泊料を先拂ひして、大急ぎで家へ逃げ歸つて來て了つた譯なんでした。然し、話しは之丈でおしまひにはなりません。四日たつと、トーザンの給や、燒焦げのある東コートや、その他色々の古着がつるしてある例の小店へ黑光りのする鴉のやうな男の顏が、いきなり、のめり込むで來て、

『私はやつぱり來て了ひましたよ。へ、、、、。』と、きまり惡い爲めに、却つて、圖々しさを裝ふやうな笑ひ聲を、氣味惡く、あたりへ撒きちらしましたの。驚いたのは氷川です。彼れは色々と口實をもうけて、關山を外へ誘ひ出し、今度はS下宿店へ連れ込むで、又、下宿料十日分を前拂ひし、獨りで、飛むで歸つて來ると、早速、家を疊むで、O町から、H町の横丁へ引越して了ひましたの。けれど、之でも、まだいけませんでした。關山は惡黨の本性を表して、もう意故地に執念深くなり初めました。大體、斯う云ふ生れの人は、新らしい南京錠なぞが發明されると、直ぐ、それを買つて見て、何うしたら、箸でコジ開け得るかを、一日がかりで工夫する程、惡い事柄の方へ對して丈は忠實で執心なのが常で御座いますもの。それだから、たまりませんわ。幾日も幾日も遊びがてら、氷川の住所を探し廻つてね、到々その隱れ家はHの横丁と云ふ事を突きとめて了ひましたの。

『私はやつぱり來て了ひましたよ。貴方がお懷かしいんでね。へ、、、、』

と、關山は臆病らしく、又大膽らしい何方つかずの笑ひを洩して、氷川の面前へ詰めよりましたんですわね。氷川も引越しの費用を、さう何度か支出する譯には參りません。それで、まあ、仕方なしに、關山を同居させることになつたのですが、其の後が、大變いけませんでした。之程にして、關山を恐れ、彼から遠ざからうと努めた氷川が、何うやら、又、お互ひに親密の度を重ね初めたんですもの。そして、關山が持ち込むで來た贓品を格安に買ひ込むで、その事から

足が附き、又、その筋の御厄介になるやうな始末に立ち至つたんですわ。さあ、貴方、この事實を好く存知し、甘耐して下さいましな。だから、私、品座に何度も斯う忠告してやりましたの――

『貴方の今度の事業は成る程、高尚で立派には相違ない。然し貴方は松岡岡造や、その他の悪い人達と群を造つてゐてはなりません。貴方の心が朱ならば、彼れ等の心は臙脂です。朱と臙脂とが混つた所に、白が出來るなんて、一體誰れが考へませう。いけません。氣をおつけなさい。そして何うか身體が透明に見える程な清い孤獨になつて、シンガツポールへでも出掛けて了つて下さい。』

之が理にかなつた願ひで無いとは貴方も仰言いますまいね。本統です。品座の心は揺ぎ易い舟のやうなんですもの、波が右から來ても、左から來ても、それを同じ程度に受け附けて、ゆら〳〵するのが彼れの持ち前なんで御座いますからね。私、何時だつて、この點を心配すると、もう居ても立つても、我慢が出來ませんの。

そんな議論はいづれ又の時に譲るとしても、此處に見逃せない、もう一つ別の心配事が持ち上つてゐるのを、私、何うしたら宜敷いでせう。

それは他でも御座いません。私と品座との間に出來た可愛い息子の一人、あの正二の身の上に關する事件なのでした。既に貴方も品座と正二との間に交された、うるさいイキサツを御存知の事でせうね。えゝ、品座は少しの我慢も容捨もなく、云はゞ、人の頭の皮膚を脂肪ぐるみ引き剝くやうな態度で、シャニムニ正二をせめますんでせう。私とて、正二の素行にも欠點のあるのは重々知つてゐるんですが、斯う品座がいかつい態度に出ると、却つて、正二の方へ多少の同情を拂はずには居られなくなつて了ひましたの。だつて、人間の心と云ふものは、大抵な器具機械も及ばぬ程、微妙な作用を持つてゐるもので、たとへばその心の中に秘む惡を外から關渉して、追ひはらつてやらうとする場合でも、由の

鬼を獵るやうに、四方八方から大勢で、喧嘩まじりに、わめき立てる丈では、何うにもならぬばかりか、却つて、その秘むでゐるものを、意故地に內訌させて了ひ勝ちですわ。ね、さうでは御座いませんか。そんな譯故、まあ、何處か一方へ丈は、隙を造つて、其處から、心のシレ者をおびき出してやらねばならぬと私思案致しまして、正二へ對する品座の叱言がきつければきつい程、私丈は、出來る限り、息子へ物柔らかく接してやるやうに努めましたの。その結果は豫期以上に良好で、正二はすつかり私になつき、私の親切な骨折と紹介に依つて、彼れは向上會から拔け出したあと、あの辯護士の栗田さんが開いてお出でになる法律事務所へお世話になる事にきまりましたの。

然し、正二は日常生活の斯んな外面的變化に關せず、依然、その戀人である春子と云ふ若い女性から緣を切る丈の決斷が起らず、その點で、長い事、私達を惱ませ通しました。

では、その春子と云ふ戀人は何んな生れ附きで、何んな顏立ちの若い女性なんで御座いませう。その點を品座に一應尋ねて見た所、彼れはもう力み返つて斯う說明して吳れましたの――

『正二より年上らしい。然し、未だ若い。ギラ〳〵する程、生氣が滿ち滿ちてゐるやうな奴だ。馬鹿な事だ。乳房の上さへも蔽ふ程、高々と帶をしめてさ、おハショリ無しで、帶の直ぐ下から、丸々と腹を突き出し、まあ、顏よりも、足よりも、下腹を先にして步くと云つた風な威張つた女だぞ。えい、えい、よせばよいに、正二め、いや、あの女の口の大きいと云つたら、さうだ、眞面目の時と、笑つた時とでは、全然、顏の相格が異つて了つて、別人かと思はれる位なんだからな。』

私も品座の斯んな言葉を聞くと、蔽ひかぶさつて來る氣持ち惡い不安を胸一杯に感じない譯には行きませんでした。

『で、貴方はその女を御自分の眼で以つて見たんですか？』と、私はねじ寄りました。

『見たも同じだ、あんな奴！』と品座は口惜しがつて立ち上り、その拍子に、何かの角へぶつかつて、衣服へカギザキをこしらへて了ひましたの。

それから十日程立つと、品座は今度こそ本統に、その若い女、春子の切つ立つた前姿、伸び上つた鷺のやうな後ろ姿迄も確かめたと云つて、色々細かい説明をし、「之でもお前は正二の味方をするか、若い者好きめ！」と云つて、私を痛く難詰しました。

私は品座が云つて聞かせる春子に就ての色々な噂話しが信頼を置けるものか何うかを、もつと確實にたしかめるため、向上會の小使ひ替りを勤めてゐた、あの毛脛の松岡國造にも、この秘密の一番深い所を聞き正して見る事を忘れませんでした。

其處で、國造が切れの深い目をギロギロさせつゝ私に打ち明けたその事件の内情と云ふのは、まづ大體に於て、次のやうなものだつたと私記憶して居りますの――

『好い女ですぜ、姉さん、その春子と云ふのはね。實に、價の高い果物のやうだ。私はあの女が鏡に向つて、自分の眉毛のまはりを剃つてる所を横手の方から見た事がある。指の先へ附いたモク毛を、フツフツと口の先で吹き飛ばす形なんか、實にもう立派で、見上げたものだ。立つたり、しやがんだりする動作がすばしこいのに、然も喰へやうもな物柔かで、何だか、栗鼠を女に仕立て上げたやうな所がある。さうさ、あの女はN市から渡邊巡査を頼つて、この街へ上つて來たんだが、渡邊さんは女房子のある身で六疊一間に暮してゐる始末だから、仕方なしに、林泉會の尼さんの家へ暫を一寸の間預けたんだよ。それは實にまづい方便だつたと私は思ふね、何故つて、林泉會には、その時も三人ばかり、性質の悪い少女がお禮奉公をしてたんだらう。だから、その女等は何の道、春子に善からぬ事ばかりを敎へるだらうか

やないか。え？春子かい？彼の女は林泉會に泊つてゐる間、一生懸命、渡邊巡査に取り入つて、何でも、この人の紹介で就職口を探し當てたんだな。ミシンの名人だからつて云ふので、K洋服屋の裁縫部へ勤める事に極つたんだ相だ。それから急に春子は林泉會を飛び出して了つた。何故だらう？その頃、春子の妹のシマ子と云ふのが、H小學校の小使ひ室に同居してゐて、春子を呼び寄せたんだ。では又何故、春子はN市から最初出て來た時、直ぐ妹の元へ落ち着かなかつたのか、その邊の事情は私にや全然分らないんだ。變だな。變に相違ない。然し、春子は不良な少女なのかしら？それで巡査はこの子を尼さんの元へ預けたのか？姉さんは何う思ふい？いや、まだ此處にもう一つ妙なツケタリの話があるのだよ。聞いとくんなさい。それは春子の後を追つて、一人の若い男がはる／＼N市から林泉會へ訪ねて來た事なんだ。尼さんは驚いたらう。何しろ、女の後にまつわる男と云へば、影のやうに細々としてゐるのが普通だのに、この男と來てはヅングリと太りじしで、顏が又馬鹿にまるくて大きいのだ、まるで無地のお盆のやうんだからね、ハツハ、女に惚れると云ふ柄でも無ささうだが、然し、その問題は仲々柄では取り極められやしないからな。この男は極く温順で洗ひざらひ運むで來た有金は全部盡きる迄、下宿屋に泊り込むで、毎日のやうに林泉會の春子を訪れる。可笑しい事には、春子がその家から居なくなつた後も、今度は尼さんを話し相手に遊んで行く。そんな譯で、尼さんは人なつといこの丸顏の男がつくづくと可愛らしくなつて、まあ、この儘で居ては早速食ふに困るからと云ふので、心易い葬式會社へ紹介してやつてさ、枯れた柳の葉見たいな細々とした眼をしてゐるのを幸ひ、そこの事務員に住み込みませたんだ相だ。何だか嘘のやうな話しだけれど、然も、現に、私はその丸顏で目の細い男と直接會つて、春子の事で、色々とサグリを入れて見たんだからね。ちつとも間違ひぢやないんだよ。』

お聞きですか、貴方？春子はそんな風な女だつたんで御座いますの、それで、私、一寸考へた末、松岡に斯う云つて

やりました――

『私がヂカにその葬式會社へ行つて、事務員さんに會つて見る事は出來ないかしら。そして、正二と春子さんの不愉快なイキサツを、その人が何う思つてお出でかも聞いて見ないぢやならないし、又、春子さんの本統の性質――つまりN市にいらしつた時代の、素行が何んなだつたかも、明らかに知つて見たいからねえ。』

國造はそんな事なら造作あるまいと受け合つて呉れました。けれど、品座が其處へ割り込んで、――この上、リン迄が手を出しては、餘計事態が面倒になるから――と、まあ、しないでも好い反對を、如何にも尤もらしい理由や口實をつけて説明して聞かせましたの。本統に、昨今、あの人のアマノジヤクになつた事と云つたら！例へば私が「萬年筆」と一言云ふと、もう直ぐ、それを「字書き棒」なぞと言ひ改めて、つまらぬ樂しみを樂しみとする癖がタツプリとあつたんですものねえ。

然し、此處で、正二や春子の身の上に關した、あれこれの事件を、殘らず並べ立てゝゐたら、もう切りが御座いませんでせう。其れ故、この問題は全部又別の日の話材に取り殘して置いて、いきなり、次の事件へと移りませう。もつとも、あまり、不意に、切り出すと、何だか嘘事のやうにも危ぶまれ相ですが、然も、之こそ、一番眞實な、その上、極く切實な、まあ、私に取つては身を切られるやうなセツパ詰つた大きい問題なので御座います。

多くの時間が雨や風を伴ふて過ぎて行きました。――そして、新奇に起つたのは一體何で御座いましたらうか？亡きギルモーアが臨終の床から、冷たい魚のやうな眼附きで、眺めやつては悲しむだ、あの福楠の葉も、枯れ果てゝ色がなくなり、そこをカサコソと鳴つて渡る風の音にも潤ひのない淋しげな冬が參りました。そして、私の最愛の主人、あの快活なハッチソンが大變重い胃の疾患――胃痛――のために、もう起き上る事も出來ない程、やつれて了ひ、その上、

肝臟の力へも妙な寄生蟲が頭をつ込突むだとかで、到底、この後、長く生き伸びる望みも絶え果てたので御座いました。
さあ斯うなると、ハッチソンへ敵意を持つてゐる品座は急に緊縮して、淋しい生け垣の向うを影のやうに行つたり、來たりし初めました。

『今度こそ、今度こそ、しくじるな！』と、彼れは鼻の穴へソラ豆でも押し込むだやうに力みかへつて、何だか、底意地の惡い武者ぶるひを致すのが常でした。私も落ち着きのない日々を、あゝでもない、斯うでもないと、じれながら過して行きました。さう、さう、今度こそ手落ちがあつてはいけないぞ、さうだ。ハッチソンの眼が開いてゐる内、何でも、確かな證書を書いて貰つて、こつちへ取り上げて置かねばいけない。さあ、それには何う云ふきつかけから此の相談を彼れに持ち出さう？よし、よし、いや、いけない。

まあ、私のやうな深く考へるのが嫌ひな女も、年をとつたお蔭で、相當の分別が心の片隅みにキチンと出來上つて來てゐるやうで御座いました。

で、私は重い悲しみの錨を足に引きつゝハッチソンの病室へと、息を忍ばせて這入つて行きました。彼れは大きなべースンをかゝへて、さつき醫師に反對して食べた薄切りのジヤガ薯を一生懸命吐き出して居りました。彼れは私を見上げると、苦しいやら、嬉しいやらで涙を一杯眼に浮め、ヒゲへ附いた汚いものを、プープーと吹き落しました。

私は何うも例の事を切り出し惡う御座いました、斯んなに彼れが苦しんでゐる最中に、まさかねえ、貴方……。で、私は又、胸がふさがつて了ひ、出來る丈彼れに同情深い眼附きを向けてやるやうにつとめましたの。所が、まあ、何うしたんでせう。彼れは私のそんな情深い眼の中に、尚ほ私の變な要求が含まれてゐるのを早くも見て取りました。

『よろしい。書く、書く。』と、彼れは私に紙とペンを要求し、それから、又、一吐き何かを吐き出しました。私は彼れ

の背中を撫でゝやりながら

『おゝ苦しい。おゝ苦しい。マリヤ様。』と云つてやりました。『おゝマリヤ様、では紙とペン！』『何だか私も胸が苦しう御座いました。

額の汗をふき取つて、やつと落ち着くと、ハッチソンはさら／＼ペンを走らせました。私はシメ木へかけられたレモンのやうに息を吐きつゝ緊縮致しました。何うなる事か、何うなる事かと

あゝ、私は此のへんのイキサツを何うも上手にはお話し出來ません。だつて、主人を失ふ悲しみで斯んなに息苦しく胸がつまるんですものね。

で、はしよつて、先へ飛びますが、まあ、私はその帝書と云ふのを自分の手にしつかり握ると、内出血でも起したやうに額が急に冷たくなつて、眼が霞むで了ひました。えゝ、今度こそ、大丈夫、もう之は大丈夫なものでした。十五萬圓を彼の女――リン子に讓る――私は一體何うして、この苦しい境地に踏みこたへたら好いでせう。眞に、眞に、餘り強い歡喜と云ふものは、一種の恐怖でもあり、一種の悲哀でも御座いますね。えゝ、私、齒を喰ひしばり、ベッドやテーブルへ爪のあとが着く程しつかりしがみ着いて、身の顫へを忍びましたの。

ハッチソンはもう絶望の日に這入つてゐました。彼れは湯葉のやうな手を差し上げては、神に祈りを上げ、そしては、自暴自棄で食べた小牛の肉を、醫師の豫言通り吐き出しました。私はせめてもの思ひやりに、涙を落し落しバーレーのスープを上手にこしらへて彼れに飲ましてやりました。えゝ、そのスープは私の涙でからかつたで御座いませう。

品座はしつきりなしに忍むでやつて來ました。彼れは怒つた蜂のやうにブンブン鼻を鳴らし、そして、私に申しました――

『しつかりしてゐて異れよ、な、大丈夫かい？大丈夫かい？何處か體に工合の悪い處はないかね、う？別段氣附かないかね。さあ、此處へ朝鮮人參エキスを持つて來た。何より腰を冷してはいかんよ。夜寢られなきや、カルモチンと云ふ藥を買つて來るよ。何しろ、氣をたしかに……。あせつちや、いけない。』

彼れは私よりも一層慌て返つて居りました。

さあ、それから例の西鄕さんもこの事を何處からか聞きかじつて私の處へ驅け附けて來ました。悲しい事に、この人は、もう腰が曲つて、日の下の溝になつた皺には、目やにが流れてたまつて居りました。頭には白癬が一面に出來、歯は一本もなくなつてゐました。彼れは昔飮んだお酒が祟つて、何うやら中風の氣味でした。それで、次のやうに云つた言葉もロレツが廻らず、大層曖昧に取れました――

『姉さん。どうかお願ひです。猫柳の銀の毛をウコンの布へ包むで帶の間へ狹むで下さいましよ。えゝ、それが運を強くする一番好いおまじないなんです。何うか、しつかりして、下さいよ。何しろ、こりや、强せいな事だ。私は姉さんに御注意して置きますがね、腦を大切にして下さい、腦を……。さう、さう、私の知つて居る男で南米ブラジルへ稼ぎに渡つた奴があるが、向うであの有名なソエルテと云ふ富クジを歌唄ひの女から無理に押しつけられて貰つた所が、それがまぐれ當りに當つてさ、苦しまぎれに到々ピストルで自殺しちやつたなんて事實もありますからな。』

すると、品座が話の尾を取つて

『うまい、實にその通りだ、現に北米にだつてそれと似た話しがある、一人のせつかちな未亡人がやつぱり富クジに當つてさ、その札を持つたまゝ如何にもゆつくりと一日椅子へ坐つたなりでゐるから、よく見たら、もう眼がガラスのやうに死んでゐたんだ。』

今度は、それを受けて、又、ボーイ頭が云いました――

『さうだとも、つまり、剃刀や細引縄で自殺なんかを態々決行しないでも、人間は餘り強くイキみ過ぎると、その位、儚くなつて了へるものなんだ。姉さん、しつかりよ。だが、餘りいきばつてはいけないよ、その位になつて了つたら、何も彼も水の泡だからな。』

私はそれらの下品な言葉が悉く氣に入らぬので、彼等が一時も早く自分の廻りから消え去つて呉れゝば好いと祈り續けました。貴方も御承知の通り、一人の人が高く飛躍しやうとする時には、その周圍から彼れを抱きすくめる古く汚い族類達は、一層不快に見え易いものでは御座いますまいか。

さう斯うして、惱ましい日を過す內、愈よ、期待されてゐた恐ろしい時間――最後の最も悲しむ可き時間が到來致しました。それは痛ましい迄に冴えた朗かな朝で御座いましたわ。隣室に休むでゐた私はハッチソンの寢室に當つて、一種身をすくませるやうな、物柔かい震動を自分の注意力全體で感受致したました。私の息はつまり、私の手足の指はこわばりました。その物柔かい震動――之は器物と器物の衝突から起つたのではない。何でも人間の肉體と、厚い布團との間から波動して來るものに相違ない。さう直覺すると、私は我れを忘れて、扉を押し、その細い隙からいきなり、彼れの寢室へイタチの如く飛び込みました。眞白な朝の光りが、暗い室から出て來た私の睫毛と瞼を痛めつけて、前の方がハッキリ見え分らぬ乍ら……おゝ、見えぬのではない。凡てが閃きのやうに早かつた丈の事です。光線は金屬と木質のあらゆる形あるものゝ上で、白い眞綿のやうな陽炎を燃やしてゐました。おゝ、その陽炎と丁度同じものでゞもある如く、ハッチソンはとろ〳〵と體を燃え立たせる形で、ベッドの上に素早く立ち上りました。その早さ。捲き上る帆のやうに！そして彼れは躁擾く丈躁擾きました。その蟹の足形に縮めた手は矢庭に、天井から紐でつるしてある鐵の環――

―夏の頃蠅よけに使つた――へと、武者振りつきました。銀の玉は一層強い光りを出して、朝の陽炎の中で輝き渡りました。玉を釣つてある紐はハッチソンの體の重みに依つて、彈力的な鈍な音響を致して切れました。それが切れると、まるで尻尾を摘み取られたミミヅのやうに、烈しい痛みで螺旋狀に縮むで、ピン／＼と飛び上り、其處から黄色い塵芥が、ピストルから出た煙りのやうに八方へと散亂致しました。その拍子に可哀相なハッチソンは、飛び込むで來た私の顏を恐めし氣にヂット見入つたやうですが、然し口にも出せない死の苦しみのため、眼は開いた儘で居ながら、もう何も看取出來なかつたのでせう、私が其處に居るのも分らぬ樣で、彼れは木と木が擦れる如き、底深い唸りと共に、胸は床の上へ、足丈はベッドの上へ、バッタリと倒れ伏して了ひました。之で彼れの靈の緒は完全に斷たれたのでした。私は彼れの屍骸に抱きつくと、その開かれた儘の恐ろしく深い眼の色を見入りながら、聲を立てゝ泣き叫びました。ギルモーアと全く異つて、本統に人の世の情を理解し、親切の上にも親切だつたこの主人！之は餘りにも惜しく いたましい命では御座いませんか。

醫師さへも間に合はぬこの早急な臨終。その瞬時的に來た死が私の身の上へ直ぐ災ひして來るとは、悲しみの頂點に居て、分別を取り亂した私には少しも豫期されない事で御座いました。

けれど、ドクターは私を怪しげに横目で睨め、その口元に深い疑ひの皺を宿しながら、まあ、露骨にこそ打ち明けませんでしたが、それでも「何うもこの死因が不可解だ。胃癌の方は未だ一ケ年大丈夫の筈だつたし、肝臟の方も油斷がならないと云ふ程ではなかつた。何か毒物？　それは誰れが飲ましたか？」斯う云ふ風な言葉がドクターの喉の中側でうごめいたり、亂れたり、壓倒されたりしてゐるのを、私は漸く察する事が出來ました。勝手に疑へ、じれろ。彼れの不注意から起つた過ちを、この私に塗り附けろ、私は深い悲しみが、得てして誘ひ出し易い所の、絶望的な自棄でもつ

て斯う呟いたのを好く覺えて居りますわ。」

それでも仕合せな事に、ハッチソンがドクターへ與へた遺書には、死後の解剖を託する件が委細に認めてありました――え丶、彼れの胃痛の方は別段取り立て丶不思議な病狀とは申せませんでしたが、肝臟の方は外部からの診察丈では何う云ふ病的な變化が來てゐるのかドクターにも見當が附かなかつたんですの。

ハッチソンの冷たくなつた肋は開かれました。そして、その胃壁の腫物もすつかり檢分され肝臟の方は一層丁寧に審判されました。私も、その恐ろしい有様を一目丈見せて貰ひましたが、まあ、何うで御座いませう、一時は自分の主人として、睦まじく同棲した男の肝臟が今や私の眼前に露出され、それも貴方、白く大きな寄生蟲が約二十匹ばかり、標的へさゝつた矢の如く、頭を半分以上肝臟へ突込むで居たでは御座いませんか。

斯うして、私の身にかけられた暗い疑ひは氷解される機會に廻り會ひました。私は晴れ晴れした氣分と、主人を失つた痛みとの混淆した一種喩へやうもない不確實な氣分をもつて、その日、その日を過して行きました。けれど、この先には一體何う云ふ運命の綾が仕組まれてゐるので御座いませう。

十五萬圓の財産を受け繼ぐ事が愈よ確實になつて來ると、私の身をめぐる色んな種類の人々が皆顏を輝かし、私へ向つて好奇と尊敬の眼を見張り初めました。

例へば今迄つき合ひを斷つてゐた田舍の親戚からは急に味噌漬の樽がとゞきました。又、S町の山田家では主人が業業私の所へやつて來て、若し宴會でもするやうなら、うちに黒塗りの膳椀が十二人前一揃になつてゐるから喜むでお貸しする、その代り、自分の息女がもう年頃だから、然る可き所があつたら世話をたのむ、なんて事をそれはそれは優雅に骨を隱してうまく云ひ廻したりしました。それから、Y町の上野さんは今度消火器と莚織機械の製造販賣會社を設立

するのだから、是非重役の一人になつて與れと手紙をよこし、A町の園川さんは八分利の北海道拓殖債券の出物があるから買つといては何うかと云つて與れ、O町の石川さんは「利殖には土地を」と云ふパンフレットを持つて來て與れ、自分の息子が高等學校を中途で退學して、毎日家に遊むでゐるから、適當な勤め口があつたら宜敷くたのむなんて念を入れて行きました。

唯だ、私の身に起つたこの著しい變化を見て見ぬ振りをしてゐたのは、以前市役所の吏員をしてゐた私の遠縁の簑川さんでした。このお爺さんは「高雅なる人は南風の競はぬが如くにありたいものだ。」と誰れだかに歎息して聞かせたと云ふ噂が私の耳へ迄傳つて來ました。

所が一番私を驚かせたのは或る救世軍の一兵士でした。彼れは私の前へ來ると全く沈みかへつた顔附きをし

『奥さん、僕、今こそ懺悔するです。僕、三年以前に奥さんの好い匂ひの御襦袢を一枚盗みました。あゝ之は罪です。罪であります。』

なんてね、涙さへためて居りましたの。

私に對して單に好奇の眼を見張つてゐる人、この際私を利用しやうとする人、私に反感を持つ人、何の目的もないが金それ自身への尊敬から私にお世辭を使ふ人、それらの群の中央に立つて、私は何とも云へぬ豐滿な暖かな感じを胸へ一杯に宿す事が出來ました。然し、その傍から、私を一寸傷い氣持ちにされたのは例のボーイ頭が餘りに老いぼれて、もう先も短かさうに見える事でした。

『姉さん、しつかりよ……しつかり……』なぞと力む拍子に、ものへつまづいて、造作もなく、子供のやうはばつたり前へ倒れ、急には起き上れないで藻搔いてゐる有樣を見ると、私の眼にさへ、さすがに涙が湧いて、何うしても止りま

せんでした。お〻、年老いたのはこの人ばかりではない。ギルモーアが死んだ時、本統に私の苦手になつて幅を利かしたあのローヤーのマクドナルドさんもすつかり見ちがへるやうに衰へ切つて居りました。彼れの靴は成る程昔通り大きくつて何だか海龜のやうでしたが、然も、もう、この老人はその靴を穿いてるのではなく、靴に穿かれてゐると云つた風でした。

『何うか靴よ、歩いて呉れ！』彼れは一歩ごとに、斯う自分の穿物に歎願してゐるやうに見えました。それでも、未だ油斷のならない事に、口の方は仲々達者で

『事の初めに、それが進む經路を推しはからねばなりません。』

とか、

『個々を檢する事も、結局、全なるものへの思慕の情からなされねばなりません。』とか、相當の理屈を、いかにも、造作なくあつかつて居りました。やはり經驗に時代がついて、六ケ敷い事が容易くなつて了つてゐると云つた風なんでしたわね。

で、私はこの人を一目見ると急に緊張して身ぶるひをさへ感じました。え〻、彼れはハッチソン遺産の整理を依囑されて又やつて來て居りましたの。まあ、何て見たくない狀景でせう。彼れは證書を作製したり、ふるへる手でシグネチユアを入れたり、そんな昔通りの事を熱心に繰り返して初めました。

いえ、未だ他に私にはずゐぶん不快な事が御座いました。聞いて下さいまし。何う致しませう、ハッチソンの從弟とか云ふ或る知らぬ男が最近英國から船へ乘り込み、もう直き日本へ到着すると云ふんですの。この妙な噂に見舞はれた時は、私を初め、品座も、ボーイ頭も何とも云へぬ不安に襲はれて、椅子の廻りを唯だ譯もなくまはつて歩いて見た

り、顔を見合せて苦笑しました。

其處へ持つて來て、辯護士の栗田さんが私の心をおびやかせるやうな事を、まともに向いて仰言るのは何う云ふ譯でせう。えゝ、仰言つた言葉と云ふのは斯うんなんです――

「何うも、この日本では、外交上の關係から、一般に、西洋人へ花を持たせる傾向が暗々裡に出來上つて了つてゐる。之は勿論好い禮義だ。然し、時とすると、隨分、こつちに取つては手痛い事がある。例へばだね、今から三年前にも、今度の貴方の場合のやうな事件が起つた。ちやんとこつちの手が遺産贈與の承諾書を握つてゐるのに、向うの親戚共が正の物を何時迄も渡してよこさない、そこで、何萬圓贈與契約履行訴訟と云ふのを引き起して見たんだね。悶着は永い事續いたが、結局馬鹿に有力な醫師が出て來て「病人があの承諾書へ署名した頃は、もう精神に異常が來てゐたんだ、彼れの瞳孔は散大し、彼れの舌は廻らず、その上シツキンしてゐた」とか何とか手當り次第にやつたものですから、到到この恐ろしい證言のために、原告の敗訴になつて了つたがね……。まあ、今の場合、心配なのは、その日本へ向けて船へ乘り込むだとか云ふ男だね、こいつが意地惡く何かしら大きい波亂を造り出すかも知れんて……。」

さあ、私の未來は一體何う云ふ仕組みになつてゐるんでせうか？本國から來る男が若しや若い癖に頭が禿げて、猿のやうに赤い顔をしてゐるんだつたら何うしませう？私は昔、ギールモーアの死んだ頃にもそんな若造から隨分苦しい思ひをさせられたのでは御座いませんか？そのためか、何うも強迫觀念のやうなものが私の胸の中にわだかまつて居りましてねえ、末だ思ひ切つてお金の入る買ひ物なんかも、じつとひかえてゐる始末なんですわ。

さあ、貴方、私は一體、之から何んな風に出世するでせうか？それとも何んな風に零落致すでせうか？自分ながら本統に自分の行く末が見ものだと思つて居りますわ。私、この頃やうやく考へ着いた事なのですが、何うやら、運命と云

ふものには二通りあるやうですわね。一つは全く自然の運命――つまり本然の運命で、例へば死とか病氣とか戰爭とか、まづそんなあたりなんでございますわね、所が、もう一つの方は僞物の運命で、云ひかへれば、人爲的の運命なんですわ、もう一度云ひ直せば、他の個人に依つて變形される或る個人の運命の事なんですわ。ねえ、貴方、考へて下さいましな。私の生活が此の儘順調に行けば、もう定められた丈のお金が私の手へ默つて居ても這入つて來るのは當然なんですのに、ひよつと彗星のやうなものが飛び込むで來て、すつかり、私の身のめぐりを凶作の田舍のやうにして了ふなんて事が一體あつても好いので御座いませうか？一つの星は他の星と引き合ひ、力を及ぼし合つて初めて自分の位置を保つて行く事が出來るのだと申しますが、さうして見ると人間なぞでも、自分丈では本統に自由な身と思つてゐるにも拘らず、遠くから他人の力が影響し、何時とはなしに、自分の行動を束縛してゐる事が多いんで御座いますわね。

いえ、そんな理屈は今必要では御座いません。さあ、大切な事は他にあります。私は之から何んな風に自分の運命を開拓して行くでせう。何うか見てゐて下さいませ。えゝ私の前には闇が一面に廣がつて、その中に怪しい雷光の影が閃いては消えて居ります。

……斯んなに美しくて、然も汚い日を

私は未だ見た事もありはしない……

私は毎日さう呟いては、遠い彼方の空を眺め、自分にも解らぬやうな深い、綾の細かい物思ひに、胸苦しく、怪しく、ぢつとひたつて居るので御座います。

お許し下さい。貴方。私は之でも、ハッチソンから受ける遺産を、自分の樂しみの爲めにのみ振りまかうとは心掛けて居りません。きつと、受け合つて、私はあの可愛い息子、正二を自分の手元に引き取り、彼れを一かどの市民に、

又、紳士に向上させてやる爲め、充分な高等教育をも施すやう努めませう。彼れの「小利巧」から、小の字を引き去り、もつと愚に見える程の、深い重みを、心の底に貯へるやう、色々とはげましてやりませう。そして「一般に女性を敬愛し、笑ふ可き時と默す可き時との差別を辨へ、快活な動作を持ちつ沈着な情操を藏し、自己の主張を信ずると共に、他人の意見にも耳かたむけ、力強く、肩幅廣く、愛の心で、憎しみの心の領域を押し縮めるシャンとした一個の男性」として彼れが押しも押されもせぬ器量を發揮し、行く末末は、町會議員から經上つて、市會議員の椅子をも占め、あの立派な市長さんに肩へ手をかけられ、大男の知事さんからシガーの火を貰へるやうな、そんな落ち着いた壯年時代の來る事を、樂しみにして、私の餘生を送りませう。正二をしつかりと仕立て上げ、且つは破産した私の亡父の名譽を取り戻すために、あゝ是非共必要なのは何より先に莫大なお金で御座います。何うかお許し下さい。貴方！私が斯んなにも汚く美しい夢に儚く醉ひしびれ、好い諦めの小さな一とカケラさへ知らず、あわたゞしい日を、氣ぜわしない日にと重ねつゝ、斯うして暮して居ります事を……。



妻が里

室生犀星

出迎えの人もなくこつそりと停車場に降り立つて見たが、ぬか雨に濡れた電車や、砂利道の隙間にたまる水溜りにも故郷の七月の色が深かつた。前の晩荻生の家で二人寢そべりながら東京の住居が窮屈でゆつくりのうのうした氣もちにならないことや、近く荻生も利根川の貸家へ行つて四五日ねそべつて來る氣だと言つたが、それまで決心のにぶりかけてゐた秋本も、急に母の用件かたがた東京から足を退く心固めが出來かかつた。

「僕が四五日遊んでかへると妹が四五日行き、その次ぎには家内も行くことにしてあるんだ。僕は倦きるまでゐるつもりなんだがね。」

「君が行くといふんで僕も行きたくなつた。何か土産はいらないか。」

「河豚の鹽漬をくれたまへ。」

荻生はこの春久しぶりで上京して借家してゐたが、三十八年も父母兄妹と暮したせいか事々に故郷の風物を懐しがつた。文學的異常な才分も故郷では印刷小僧にま

で輕蔑されて、荻生が通ると指差してのらくら息子のやうに言ひそやした。今も少なからぬ仕送りを父から受けてゐたが、自家の坐敷でのうのうする氣持は秋本のやうに故郷に家のないものよりも深かつた。一家のものが二ヶ月目くらゐには利根川へ氣休めにでかけた。

その前の晩いつになく荻生の妹までが行つてゐらつしやいましと言つたことや、荻生も旅行に出てゐるだらうと俥の中で揺られながら思ひ出した。長町川岸の用水の古い石垣べりに故郷らしい巴旦杏の熟れた下枝が水面にすれすれに垂れかゝつてゐるのを見て、いまが果物の季節らしいと思ふた。

宿につくと松の枝を透いた霖雨に音もなく、古い池の半ばを繁つた河骨の陰でぽつかりと浮いた雨蛙が、程よい時間を置いては友呼ぶらしく啼き立つてゐた。やつぱり來てよかつたと思ふた。馴染のある宿だつたが女中は出代つてゐた。

「僕は離れをかりたいんですがね。明いてないのか。」

「唯今はラヂオの方がゐらつしやいますのですが、すぐおあけするやうにいたします。」

秋本は草深かるべき此處へもラヂオが來たのかと思ふと、何氣ない不機嫌を嘗めたやうな氣がした。が、間もなく離れが明いて引き移つた時には、ラヂオきらひな秋本の機嫌はなほつた。誰にも會はないでこつそりと四五日寢そべつてゐたい秋本は、ともあれ母だけには逢はねばならないので、俥やを呼んで迎えにやつたが、外出をして留守だつたと空車を引いて歸つて來た。あとで俥で母を迎えに遣るなんて生意氣のやうな氣がして、これはこちらから出掛けるべきものだと考へ直した。長途の疲れもあつたので音もない霖雨の松の葉なみを眺め入つてゐたが、わけもなく人間の行末といふやうなことまで思ひ出された。

午后に高安の寺の多い町に母の借りてゐる二階をたづねると、ちやうど今から行かうと思つてゐたところだと、いつた。

「とにかくお前からも一應あいさつをして貰ひたいと思つてね。二階の上りくだりにも骨が折れるし、水一杯にも大へんな廻り路だから。」

「妻の里でもそれは入らつしやいと言つて手紙は來たんですがね。あちらにも年寄夫婦もゐることだから、どういふことから氣拙い思ひをしなければならないかも知れない。若し話が纏つてもなるべく控え目にしてほしいんですね。」

「そりや解つてゐる、年も取つたから仲たがひするやうなことはない。」

母は口前ではさういふものの、あちこちを越して歩いて何處でも落着けなかつた。みんな結局は氣拙い往來で侍つても口を聞かないやうな工合で越したりしてゐた。

「人の家へ行つたらそこの暮しをかれこれと口を出すのはよくないことですよ。あなたにはそんな癖があるから何處でも折合が良くないんです。」

「いやこんどはそんな事もなからう、あそこなら死水も取つて貰へるし、他人とちがふから。」

妻の實家は年寄夫婦に妻の姉とがゐたが、その姉さんの手紙では兩親は見てあげてもいい、幸ひ離れが明いてゐるから彼處へ這入つてもらへばいいのだが、何時どういふことから若しも氣拙いやうなことになりはしないかといふことが心配だと書いて、そんなことから妹——秋本の妻に餘勢を引いたりして困るから、一應あなたからお母さんにとつくとお話くだすつた上にしていただけないかと、二十七から後家で通して花のお師匠さんをして來た人らしい、明快な事理を盡した手紙だつた。秋本は老ひて益々頑固な母親も知らぬ他人の二階借りをしてゐるより、妻の里にゐた方が萬一の

ことがあつても母親自身も安堵であるし、秋本も氣が安まると思つた。母には特に言つて置くやうにするから是非際れに母を置いてくれるやうに書き、秋本はいづれ歸國のせつお話すると返辭をした。

第一かういふ田舍で年寄りが一年に一度くらゐづつ、宿を越してあるくといふことが世間體もわるく、本人も落着きのない、うら悲しい暮しであらうと秋本は考へ今度は一つ話をまとめたいと思つた。こまごました事は抜いて

「自分だけのことをして人のことは氣にかけぬことです。」

「わたしもそのつもりでゐる。」

母はさう答へた。

窓越しに美ごとな杏が枝一杯に撓みついて、濡れた消炭いろの板屋根の上にかげを映してゐた。秋本はその美事なのに驚いたが母は色はいいが酸ばいと言つた。よく見ると杏にはそばかすが附いて成程酸ばさうであつた。こんどは誰にも會はぬつもりであるから、秋本の來たことは誰にも話をしてくれぬやうに母に話をした。

階下のよめさんが枝葉のある杏を盆に盛り、暗い段梯子の上り口でお客さまにあげてくださるやうにと、母を呼んで言つた。やさしい女學校から卒たばかりのよめさんだつた。人の花はうつくしいものに見えるものだが、しかしそればかりではないと好意をもつて杏に齒をあてて見たが、よめさんは美しかつたが杏はひどく酸ばかつた。

「明日にでも里の方へ行つて話をすることにしませう。」

秋本は段梯子のくらいのを手さぐりに降りながら言つた。

「盆が濟んだらすぐに越したいと思ひますから。」

凉しい寺領のある町には早や蟬の聲が秋本の耳に親しかつた。秋本はその聲を油ぜみではなく灰色の小紋のある小蟬

であると思つた。うら盆の近い町に切子燈籠を下げた葬式歸りらしい人の連れが、電車からぞく／＼と降りた。秋本は歩いて行つても電車に乘つても、人に會ひさうに思はれ、一そ電車の方が誰にもあひさうに思はれなかつたので、濡れた昇降口にこつそりと後見たい氣もちで足をかけた。

母ははじめ川べりの洗濯屋に居たが、それも一年と續かないで或る寺の座敷を借りて住んだ。が又何時の間にか下町の道具屋の離れに越して、こんどこそ落着くだらうと思つたが、間もなくもとの寺の座敷へ借り戻つてゐた。どの家でも物も言はないやうな別れやうをして、荷車を指揮する母の疲れた顏を東京で手紙をよみながら考へると、人事でないやうな氣もしたが一體どうする氣だらうと思ふた。その寺も去年の秋の末には又引越して今の二階を借りたのだつたが、こんどこそ落着いて妻の里へ行かうといふ氣らしかつたが、うまく先方の老夫婦との折合が付いてゆけばいいがと考へると、秋本は大きな家を二軒まで賣り拂ひ、むかしからあるがらくた道具を車に七臺まで積み込んで搬んで歩く母親の、珍らしく他人と容れない意佔地な性質を鳥渡頬笑んで勇ましくも思ふたが、それよりも何からら悲しさが身に沁みた。

朝眼がさめると雨は濛々と庭を覆ふて、松の幹に生えた苔ばかりが蒼々と目についた。そのくせ遠くから蜩のこゑが沈んで來て、洗面所の窓さきから射す明りにも暗さがつきまとふやうな日だつた。秋本は離れの緣側の冷たいのにぺつたりと坐り込んで、こんな日がらが親しく肌に馴れてゐるやうな思ひで、池の面をたたく森々たる雨を聽いてゐた。舊藩の時にこの庭をつくつた男は僅かに兼六園の名所を三ケ處ばかり抉り取つたものらしく、そのため何百石かを領して

ゐた此處のあるじは百日の閉門を仰付けられたとの事だつた。それが明治になり荒れたまゝ今の宿屋の庭になつてゐた。この庭作りは餘程變な男らしく兼六園の諸々の景色の中でも詰らない龍のゐる井戸と言はれたところを眞似て、石彫りの拙い鯱のやうな二頭の龍を池のへりの石の上に置いてあつた。それが蒼い水苔がつき雨風にさらされ、雅致のある風貌を背の上にそなへてゐたが、昨夜も蛙のこゑに睡り込まされて不圖目をさますと、漏電のやうなひかりが斜めに蚊帳を掠めたので、驚いて寢呆けて見入るとそれは螢だつた。

「螢ならたくさんに居ります。」

と、けさ女中は言つてゐたか、この二頭の拙い石の龍も濛々たる雨の中をきつと池の中へ入つて、河骨や水芭蕉の間を泳いでゐたにちがひない、——雨戸を繰つたときには淺い水の面はけぶつて濁りを交えて見えた。不恰好な石の龍が泳ぎながらゐるありさまが、秋本の描く蕭條たる百年の庭の中にあつた。全くこんなとぼけた子供らしい庭作りがゐたとの面白さが、秋本の心を太平にした。市の中にこんな古い庭をもつてゐる宿やは殆うなからう、それでゐてどうやら二流くらゐの格の宿やらしかつた。秋本はどうして一流とか二流とかいふのか、腹立たしくも思はれた。秋本はここは一流だと思はねばならなかつた。石といふ石の間には、品の變つた能く四季を見渡した下草の用意がしてあつた。秋の乾いた石の間から誰が曼珠沙華の獅子がしらが上る用意ができるものか、まして小型の一番すぐれた石燈籠が離れのうら庭にあることを、こんなにもひつそりと內所に据えられるものぞ、——秋本は市井の一流の旅館の緣板を白くする埃を嗅ふた。そして世にいふ人事一般の一流もけだしこの類ではないかと、ひそかに薄濁りした水のおもてに辷るが如くして知らざる水すましの、あくこともない條長の姿を見とれてゐた。

が、秋本はそのとき昨日のお晝にふと手紙を入れに出て、小路の角で、擦れちがひに會つた瘦せぎすな見覺えのある

男がひよつこりと頭を下げて挨拶したのに慌てて頭を下げたが、その男に大きな[illegible]と大いさに一[illegible]さうに挿んでゐた。手紙を入れてかへると帳場に先刻の男がきつちりと疊の上に坐り、花の稽古をしてゐるらしく一輪ざしに試を入れてゐた。あれが主人だつたかと始めて氣がついたが、女中がお晝の膳をはこんで來たのをちらりと見て、鯛のさしみがついてゐるのを眺めると、物悲しい顧みにならぬ人生をぬすみ見たやうな氣がした。大方、小路の角で皿にあはせに取つて來た館であらうが、秋本の信ずるごとき一流の此の宿のために味氣ない氣がした。しかしそれも田舍めいて愛嬌があるではないかと思ふたが、此の主人はあまり庭のことは關はないと聞いて鯛もあさましく感じた。八十五になる隱居がゐて色々草木の面倒を見てやつてゐると女中は言つたが、その女隱居はあたまを剃めて一部屋に寢起きして、膳も自分の部屋で食べてゐた。女中など手のつけぬ客のものをその部屋の閾の上に置くと、隱居はそれを嬉しがつて食べてゐた。氣が向くと庭へ出て來て永い間かかつて不時萠えの枝葉を拔いて鉢ものの植木の世話をしてゐた。頑固な、寺詣りと植木の世話より外に人生の些事にはなれぬ人らしかつた。

「でも君はよく氣がつくね。」といふと、

「何時の間にかさうして上げるくせがついたのです。」と言つた。

秋本は殊勝な女中の心づかひに敬意を拂ひながら、退屈な濛々たる雨をながめてゐるうちに、にはかに手を叩いた。そして俥を呼で外出の用意をしたが、その思ひついた考へは秋本自身にも懷しげな、よろこばしい思ひつきであつた。

秋本は裏町の李や巴旦杏や唐林檎の色づいた築地の塀を歡迎する幌の內で、やれやれ樂しみなといふ寛ろいだ氣もちで、小さい用水を渡り、あをくさ屋や魚やのある町へ出ると、大川べりへ出てくれと俥やに聲をかけた。川べりの向ふ土手につづいた河原は陰森と繁つた草のあたまに、白い穗を靡してゐるなどあつた。

「こちらに入らしつたときによくお乘り下すつたことがありますよ。」

「へえ。」

秋本は幌の內から俥やのうしろ姿を見て、見覺えがあるやうに思つた。俥やさんは能くおぼえてゐてくれたものだと、些細なことにも人情のほつれが感じられて興深く沁々するのだつた。

橋の袂から土手をゆつくり行つてくれるやうに言ひ附け、幌の埃を拭きながら、前に一年を暮したことのある川岸町の家を見やうといふ氣だつた。黑塀を過ぎ玄關前の庭先きを覗き込むと、秋本が植えて置いて來た芭蕉が四五尺にも伸び擴がり、水々しい若卷が幾本となくつツ立つてゐた。秋本は感慨に幸福な涙感さへ漂はせながら、いろいろな仕事をした二階を見上げると、簀すだれが斜に屋根の上へ食み出て、すぐ露虫の夜這ふ景色を思ひ出した。俥は過ぎた。芭蕉は何本生えてゐたのかと考へながら、俥は茫々たる河原つづきの土手の上を駛つた。そして不圖目についたのは居牛所前の石垣に今年も釣をしてゐるらしい子供の一人を、煙る雨の中に眺めたのだつた。

去年からあの子供は釣りつづけてゐるやうなものだと秋本は思つた。さつきの二階にゐたころ、每日子供の釣を垂れてゐるのを見てゐたが、あんなにも好きなものかと秋本は呆れて每日見てゐたのだつた。それだのに今年も同じところに去年の子供らしいのが糸を垂れてゐる——秋本は忍ずの池のほとりで、蓮の葉と葉と茂る水面の隙間にやつと糸を入れて、數限りある弱々しい鮒か鯉かを釣つてゐる東京の子供のことを思ひ出して、何やら物悲しかつた。といふより此の子供が去年も今年も暇さへあれば釣糸を垂れてゐるのが、宿緣のごとく秋本には數奇に目に映つてくるのであつた。

次ぎの橋へまで行くと秋本は俥を捨てて、對岸の人通りのない土手をぶらぶら步く考へであつた。雨はやはり濛々と

眺めてゐたが、よく散歩した土手のととて一草一石にも親密の思ひが加つたその釣をしてゐる子供のそばへ行くと、何處かの長屋者の小汚ない子供のやうで、こちらで何を釣つてゐるのかねと言つても、こちらを向くには向いたきり無愛想にぶつつりした子供であつた。小さい尾籠（びく）は流れに浸してあり石垣を縁（へり）取つた草のわきに、うしろの減つた下駄がならんでゐた。合羽のやうなものを着てゐる、――秋本は話しても返事をしないので仕方なしに歩き出した。よつぽど、變な子供だな……。

秋本はちやうど元ゐた家の眞正面の土手の上で、煙草をふかしながら考へ事に耽つてゐると、下流から空の魚籠（かご）を持いださかなやらしい素足の男の來るのが見えた。近づくと毎日自家にやつて來た男であつた。

「や、どうもお久しぶりで……。」

「しばらく、もうかへりかね。」

「こいつを片づけやうと思ひまして、しかし珍らしいところでお目にかかりますね。」

空籠の中には賣れ殘りの鯰を三本ばかり持つてゐた。秋本は二三日前こちらへ來たのであるが、すこし所用で忙しいからこんどは近隣へは挨拶に寄らない心算（つもり）だから、君も僕が三日ばかりして歸つたあとで話すなら話してくれたまへ、それまではなるべく默つてゐてくれるやうにと秋本は笑ひながら言つた。「それから河豚（ふぐ）の鹽漬をすこし宿までとどけてくれたまへ。」と何も注文しないわけにゆかないので、左う言つて別れた。しかしあの男と話してゐると、去年のやうな新しいひやかしの口をも利けない、どうもこれは異郷の感じだと思つた。親しさはあつても元ゐた家を眺めるやうな、東京を離して考へられなくなつた異郷の感じだ。やはり人に會はないでこつそりとかへつた方がよいと思ひ、橋詰で人目を忍ぶやうな思ひで俥に乘つた。宮本さんの前で雨の中を遊んでゐる子供を呼びに出た背の低い美しい奥さんが、前晩

のはだけた秋本の顔にちらりと目をくれ、いぶかしさうに見送つてゐたが分るまいと秋本は思ふた。宮本君とは親しくしてゐたが、結婚前に宮本君はその日記の三四年分を見せて求婚したのださうであるが、すぐ話は纏つたとかれ自身言つてゐた。すげなくその前を通りながら寄らないのにも、何か濟まぬやうな氣はしたが、却つて餘情があるやうに思はれたからであつた。

妻の里は樹の多い裏町にあつた。築城當時に故意と紆曲した町なみに作つたもので、何處の家も二階は禁められて六十坪に決つてゐた。古めかしい木や足輕長屋が續いてゐるうちの一軒、――白い粉を吹いた李の實の垂れた格子戸をあけると、妻の姉さんが出て來て何處にゐらつしやるのか分らないので、東京から知らせはあつたものの、いづれお出でになるだらうと心待ちにしてゐたと言つた。秋本はすぐ用件を話し出した。

「母は非常に來たがつてゐるんです。やはり年取つて一人暮しをしてゐるのが段々にさびしくなるのでせう。」

「わたくしも來ていただくのに決めてゐるんです、けれどうちにも年寄りがゐることですし……」

「だから僕からも色々說教して置いたんです。なるべく人のことは氣にかけないでゐるやうにとね。」

「大概大丈夫だと思ふんでございますけれど、それに家の母はなるべく控え目にしてゐるでせうし、父のことはああして終日臥たきりなもんですから、まるきり關係がないやうなものでございますから。」

「お父さんはどんなあんばいです。」

「年弱りでございませうね。この間もおかしなことがあるんですよ。」

姉さんは笑つて心臓で臥てゐる病人がどうも天井から埃が落ちて來ていけないと言ひ、眼鏡を掛けねばならぬと頑張り出したりして困ると言つた。それに全きり見えない眼をしてゐて、時々大學目薬をさして、どうも目薬をさすと見えるやうな氣がすると言つて、薬が切れると八釜しく叱りましてね、實際はぼおとくらゐ白いものなら白いものが見えるらしいとも言つた。

「眼鏡だけはおよしなさいましと言ふんですけれど、中々やめないんでございます。臥てゐて埃が這入るわけがございませんぢやないんですか。」姉さんは又言葉を繼いで、

「お母さんはだいぶもうろくの方でしてね。いま言つたことを最う忘れてしまふんですよ、二三日前もあなたが入らつしやるかも知れないから、そしたら出先へ知らすやうに言つて置きますと、あなたをお母さんと間違へて知らせるんですもの。」

半身不隨の父親と耄碌してゐる母とに挾まれてゐる姉さんは、殆終日生花の出稽古に町の端れから郊れまで歩いて、夜は近隣の娘だちに鋏の入れ方、枝のため方なぞを教へ、半日の間も手足を伸す閑暇さへなかつた。そこへ秋本の母が離れを借りたら、まるでこれは年寄りどもに取り憑かれて、溺れかかるやうなものだと思ふた。ただ勝氣なだけに通り通せるが大概のものなら參つてしまふだらうと考へた。

「子供などならどんなに澤山ゐてもよござんすが、默つてじりじりと來る年寄りは餘計に氣苦勞なもんですよ。しかしあなたのお母さんはまだお達者ですから、年寄り連には却つて話對手になるかも知れません。」

「しかし二人の面倒を見るのは大變なことですね。」

「いいえ、同じことでございますよ。そのうち片づくやうにもなりますから、今ンところ誰が先きに片づきますことか、

そんなことも考へるんでございますよ、それに三人揃つて見ますと……」

「そりやさうですね、誰かが一人まゐるとあとを引いて、つぎの一人がまゐつてしまふ例がありますからね。」

老年といふものは妻の方が倒れると、半年足らずに夫も死ぬことがあるものだ。妻の父が最初になくなるとすれば、つぎには秋本の母親か、妻の母かの孰方かでなければならなかつた。見て悲しんでぽつきりと折れてしまふ、一人が手本を示すやうなものだ、何のことはない、三人巴になり生き競ふやうなものであるが、また亡くなるのに競争をするやうなものだと思つた。さしづめ妻の父は八十二だがこの順序で初まるのだらうか、秋本は變な考へを持つやうになつた。これはなるべく一人でも先きへやつてはならない、若しさうしたらあとは一と耐りもなくばたり、ばたりと倒れてしまふだらうと不安であつた。

「生きてゐられるうちはどうにかして行きますが、片がつきましたら家をも片をつけたいと思ひましてね。」

「賣るんですか。」

「仕方がないんでございます。なかなか細腕ではやり通せませんからね。」

この町の人の家を失ふのは何時でも人が死んでからであつた。秋本の母もさうだつた。二軒とも賣り拂つて金のあるうちに小ぢんまりした家を見つけるやうにしながら、段々に金が減つてゆく、そして焦り出す時分には足りなくなつてしまふ、そのうちにといふ氣持で何かの機會をねらひながら遂ひ一文なしになる、吝々しながらじりじりと人生の波が嚙み砕いて、何も彼も持つて行つてしまふ、氣がついたころは老軀を投げ出されてゐるだけだ。秋本はこれは家を賣る前にその二分の一くらゐの家を見つけ、何時でも買へるやうにして置いたらいいのだと思つた。有金を掴んで散歩でもするやうな悠々した氣もちで、小ぢんまりした家を見つけやうとしたら既う遅いやうに考へられた。樹や草や晴天まで

が今はせち辛く暮しよせてゐる瀬戸際で、こんな考へは飴を舐めてゐるやうな甘い考へだと思へた。
「しかしその話は考へものですね、あとで後悔したりなんかするやうでは……」
「ええ、いくら考へても同じことでございますから。」
　姉さんは瞭然と左う言つて未練のないやうな顔付をした。この人なら下手なことはしないだらうと思つたが、それさへ當てになるものかと考へた。
「離れをご覧になりますの。けさ奇麗に掃除して置きました。」
「では見せてください。どうもいろいろお世話さまです。」
「狹いんですけれど家のものと離れてゐられるからいいんですよ。」
　離れは六疊で緣側づたひに行けるやうになり、李と老梅の繁つた狹いけれど蒼々した庭が腰高の窓ぎしにあつて、母ひとりだけなら靜かに暮せさうに思はれた。中々小ぢんまりとしたいい部屋ですね、秋本はさう言つて老梅の根元に蒸しついた苔や川石らしい薬石などを眺めた。
「荷物は八疊の方に入れるやうに明けときました。」
「それはどうも――。」
　秋本は八疊の方も見廻りながら、「これで落ち着いて貰つたらわたくしも安心ですよ。知らない他人同士の二階などで、夜中にぽつつりと死んでゐたりすると困りますからね。よくそんなことを考へることもあつたんですよ。」
「充分にはできませんけれど、まあお互様でございますわ。」
　秋本は小さい泉水に入れてある生花川の、磯馴の一束に目を觸れた。弱々しい金魚の二三尾が揃い針のある磯馴に肌

ふれぬやうに泳いでゐた。緣側、天井、柱、さういふものが古く蝕んで見えた。

「ではなるべくわたくしの居るうちに越させるやうにしますから。」

「そのときはお手傳ひしますよ。」

姉さんは前庭、——玄關わきの庭へ秋本をあんないして、

「あなたのお庭だと言つて朝から葉一枚散らぬやうに掃除してゐるんです。」

國の方を引上げるときに、手洗石や唐棕櫚、石、しの竹、寒竹などを妻の里の庭へ移し、植木やに指圖をしながら幸ひ老梅があつたのでそれを中心にして些やかな庭を作り、妻の母のために置いて來たのだつたが、老ひた彼女は秋本の庭だと言つて暇さへあれば掃いたり雜草を拔いたりして、今かうして見ても一塵を交へない澄んだ打水さへしてあつた。秋本が故郷にゐる間にあつめた安ものの石や綺麗など、元氣よく根を張つて守られてゐた。

「お老母(おば)さんらしく綺麗にしてありますね。」

秋本は自分の殘したものがかうも叮嚀に守られ敬まれてゐることに、羞恥を越えた心嬉しさを感じた。秋本夫婦がゐたころの老母は、妻に叱られながら色々なお茶になるものを年寄りらしく搬んで、老ひ朽ちた一片の好意を示した。その老母は來るごとに財布を忘れて行つたので、おばあさんの財布といへば、いつも秋本ら夫婦の寂しい暮しの笑ひの種だつた。こつそりとその中へ小使を入れて置いてあげても、氣がつかないらしかつたが、あのころから少しボケてゐるらしかつた。姉さんと話をしてゐるので勝手に何か働いてゐたが、ひよつこりと玄關へ出て來て、どうも手がととのきませんと言つた。その顏の老けたことよ、秋本はそんな思ひで、あいさつを交した。

「梅がだいぶ實つてゐますね。」

「家の分なら餘るくらゐです。干して送りませう。」

話すこともないのでおばあさんは勝手へ引き上げた。そのうしろ姿を秋本は見送つた。

宿やに悠長に坐り込んでゐると、漸と晴れた空から蟬の秋ない聲が落ちて、畳の上に何かかげを映すやうだつた。秋本は何か書かうと思つた。からだの何處にも疲れがなかつた。机の上に短冊が置かれ硯が揃られてあつた。秋本は緣側から机の前に坐ると短冊を物色して、俳句を一つ考へふけつた。が先刻から机のまはりを離れない羽蟻のやうな羽虫が、ふと机のまわりでぶむぶむ言つてゐるのでなく、どうも硯のわきに舞ひてでもゐるらしかつた。かれは硯を見たが居ない、が羽音がしてゐた。秋本は耳を持つて行つた。かれは最後に一本の筆の穂のさやの中から、靜かにすり拔けて出た一匹のほそ長い羽虫を見て、これは面白いと能く簾の竹などにもぐる虫だらうと思つた。

時を經て又た羽蟲は來た。女中が最う短冊が書けたらうかと、それとなく覗きに來て、あたりの散らばつたものを片づけ去らうとした。

「短冊かけはあるのかね。」

「ございます。」

女中の顏はあからんだ。先刻も古いのならあると云つたが、直覺的にあれは噓をついたのだなと思つた。行末は下宿屋を初めやうとして三年の間に千圓つくつたといふこの女は、事々に悲しく秋本の目に映じた。ただ悲しく、わけなく秋本自らに引きくらべても悲しく……。

流れ藻や疊りてあつき水すまし、秋本は筆を置いて、揮毫を托まれたときのがらにもない自身への羞恥をほんのりと感じた。對手が物の分らない人のときはなほその感じが深かつた。自分から進んで何か書きたいと思ふことがある、さういふときには書かなくともいいことが泌々とさせた。

秋本は庭へ出て芝草の間にこほろぎの子を見つけた。胡麻粒くらゐの啼かないこほろぎの子であつた。時既に至れりわが神なんぞ我をためすや、秋本はひとりでこんな戲談を言つて滿庭の秋風をせめぐ氣慨をもつた。こほろぎの子を見る芝のちぢれかな。――風の向きで勝手から鮎を燒く匂がして來た。ふと鮑を思ひ出して苦笑した。見ると女中が部屋に立つてゐる。

「古くていけないと思ひまして新しいのを買つてまゐりました。」

天に雲の文様が抜かれ、地に菊水の流れを透かした短冊掛けであつた。そんなものをわざわざ自分で買つたのかといふと、ええ、と氣まりわるさうに答へた。秋本は憂欝になつた。

「大したことをしてくれたものだ。」

秋本は默つて短冊を女にやり、女がこのごろは一品づつ世帶を持つまでに揃えるのだといふのを耳に入れた。女中が去つてから秋本は輕蔑できない漠然たる人生を感じた。

秋本は母の引越しに間にあふやうに出かけた。母は人夫らの間にうろうろ歩き迷ひ、一つの荷物のあとに尾いては表通りへ出た。サイダーのビラ札までくるくる巻いて、荷物の間に入れやうとした。

「そんな廣告繪をどうするんです。棄てておしまひなさい。」

「切角階下のねえさんが下すつたものだから。」

秋本は無學文盲を憐れむやうな氣がして、生々しい女の肉體を描いた廣告繪を手に取つた。

「一文にもならない繪ですよ、つまらないものだ。」

「そんなら棄てやうか。」

秋本はその廣告繪を引裂いた。むかし子供の時分に見馴れた品物が追々に見えた。がらくた物でも可憐に持ち廻つてゐて、缺けたり壞れたり罅が入つたりして皆不具になつてゐた。漆塗りの古い木地の出た母の鏡臺、――今どき何處の道具屋でも對手にしない鏡臺があつた。秋本はその蓋を取つて剝げ落ちた水銀に醜い木地の出たのに、自分の顏をうつして見て肩青い母の記憶に打つかつた。秋本は母を哀れむよりも、自分のことを考へた。

「要らぬものはこの際だから少し處分するといいね。」

「要らぬものなんて一つもないものぢや。」

母は古暦まで戸棚の中に入れた。去年の暦が何になるものか、秋本はそれを裂いてあれは去年のだからといふと、それは知つてゐると言つた。知つてゐて何にするんだといふと、また要ることがあるかも知れないと平氣で答へた。

荷物は坂を下り元住んだ町を左に見て橋を渡り、樹のある妻の里へとどいた。秋本は荷車のあとに尾いてゆく母の姿を一人で目にえがいて、何となく歎息をした。氣もちがひどく疲れて離れへ運ぶ荷物を茫然と眺めたきりであつた。母は昨夜あたり考へてゐたのだらう、一つ一つの置場所を區劃つてきちんとした指圖をした。一つも亂れてゐなかつた。秋本は母が引越しになれてゐるといふより、秋本自身の荷物のやうに五年や六年の歴史を持つたものと違つて、みんな四五十年くらゐづつ年代を經てゐるためだと思つた。それゆえ何處に何を置くかといふことが既うむかしから決つてゐるやうなものだ。秋本は自分の荷物といふものに幾らの年代の經つてないことに或る嫌厭を感じた。水桶につかふ唐金の大

きな水入れに秋本は目にふれ、これは中々いいものだと思ふた。生水といふものを四五年飲んだことのない秋本は、不衛生な、投げ遣りな子供時分の暮しを考へて慄然とした。あのころ病氣にそんな恐ろしいものがなかつたのかしらと思つたくらゐだつた。

夕方ごろに漸と片づいたが、有繋の母も疲れ、秋本もぐつたりしてゐた。妻の姉も草臥れてゐた。秋本は宿へかへらうとすると、母はこんなことを言つた。

「お里のお母さんと今夜一しよに寢てもらふことにしました。一人では寢にくいだらうからと言はれるので、……。」

「そりやいいですね、おばあさん大丈夫ですか。」

秋本は妻の母が秋本の母と一しよに寢てやると言つた年寄りらしい好意を心嬉しく感じた。年寄つても女同士には何か變つた吾々男に取つては物珍らしい感情が殘つてゐるものだと思つた。

「始めて寢る部屋といふものは連れがあつた方がいいんですからね。」

おばあさんは左う言つて、早寢の枕を搬んだりした。この樣子ならみんな仲が善くていいあんばいだぞと思つた。が、姉さんは玄關前で、まあれならいい工合ですと、すこし皮肉に笑つて言つた。

「長生きしてくれればいいんですがね。」

「若し工合が悪いやうなことがあつてもそれはその時のことですよ。」

「ええ、さう思つていただけば樂でございます。」

「ではいろいろどうも――。」

「いいえ、おつかれさまでしたらうに。」

姉さんに別れたが母はいつものとほりに、半町ばかり見送りながら従いて来た。
「ご飯も別に炊かうと思つての。」
「その方がいいんです。そして成るべく人の家のことはしやべらないやうになさい。」
「そりや分つとる。」
「ぢや、また明日。」
「いろいろ心配をかけてすまん。」
「どういたしまして。一杯飲んで早く寝るやうになさい。」
秋本は何處で夕食を取らうかと迷ひながら、通りへ出た。いろいろ食べたいものがあつた。公園の坂を登りながら薄暗い料理屋に入り、そこの離れにある崖からの、絶え間もない落ち水に聴入つた。まだ宵の程の棚から垂れる青々しい藤の實を眺め、茶をのみ煙草を喫んだ。秋本は默々として飯を食つた。落ち水の音はしたしたと流れてゐて、秋本の考へをともすれば母とか妻子とかへ誘ひ、漫然とした薄い月夜のやうな稀薄な間色的な考へにふけらした。何か面白いことがないかと心さぐりをして見たが、それも急には思ひ立たなかつた。
勘定を拂ふたときに、次の間に山百合の生けてあるのを見たが、先刻からの烈しい匂ひはあれだなと思つた。二度ばかり行つたことのあるお茶屋ではあるが、女たちは顔を見忘れてしまつたのか、普通のふりの客のやうに取りあしらつて、少しも愛嬌らしい言葉もかけてくれなかつた。切角笑ひかけた顔を佗しく納めてしまひ、秋本は他郷の思ひが日々に募つてゆくことを感じた。

朝、妻の姉さんがぎぼしの花の二三本と、蔦の莖とを提げ床の間の掛花瓶に生けに來た。秋本は茶人風の投入れを好いてゐたので、姉さんは蔦の葉を垂らしぎぼしの花を抜いて生けてくれた。

「わたくしのご馳走はこのくらゐのところですわ。」

姉さんは何か實のあるものがないかと思つて捜したが、見當らなかつたと言つた。秋本はこれはなかなか能く生かりましたと言ひ、野趣のあるぎぼしの花を眺めた。

「けさはまるで子供同士のやうに何かしてゐましたよ、あれならもう心配なんかしなくともようございます。」

「さうですか。」

妻の母と秋本の母とが二疋の蟲のやうに睦じく、とまで考へたが蟲はあんまりひどいと思ひ、口へ出しては言はなかつた。が何か黒ずんだ蟲の感じがあつた。

「わたくしも少し風流がつて家で生花を教へたいんですけれど、さうもまゐりませんしね、やはり若くても出かけなければなりません。」

晩は十一時ころまで出先きが遅くなることなどを言つて歸つた。秋本は今日は歸京しやうと思つて宿の女中に荷物などを托んだ。ほんの四五日ではあつたが安閑たる氣もちになつたゞけでも、來てよかつたと思つた。

松の枝のかげが置石の上に落ち、やはり遠蟬の啼く聲がした。秋本は氣の遠くなるやうな心で、ささ濁りをさせる池の中の小さい生きものなどを見てゐたが、その微かないのちを守る境まで考へを伸ばしてゐると、言はゞ幽寂といふものであらう、秋本は煙草に醉ふたやうな茫然たる氣もちになつた。が、そのとき不意に池のまん中からいきなり六本の

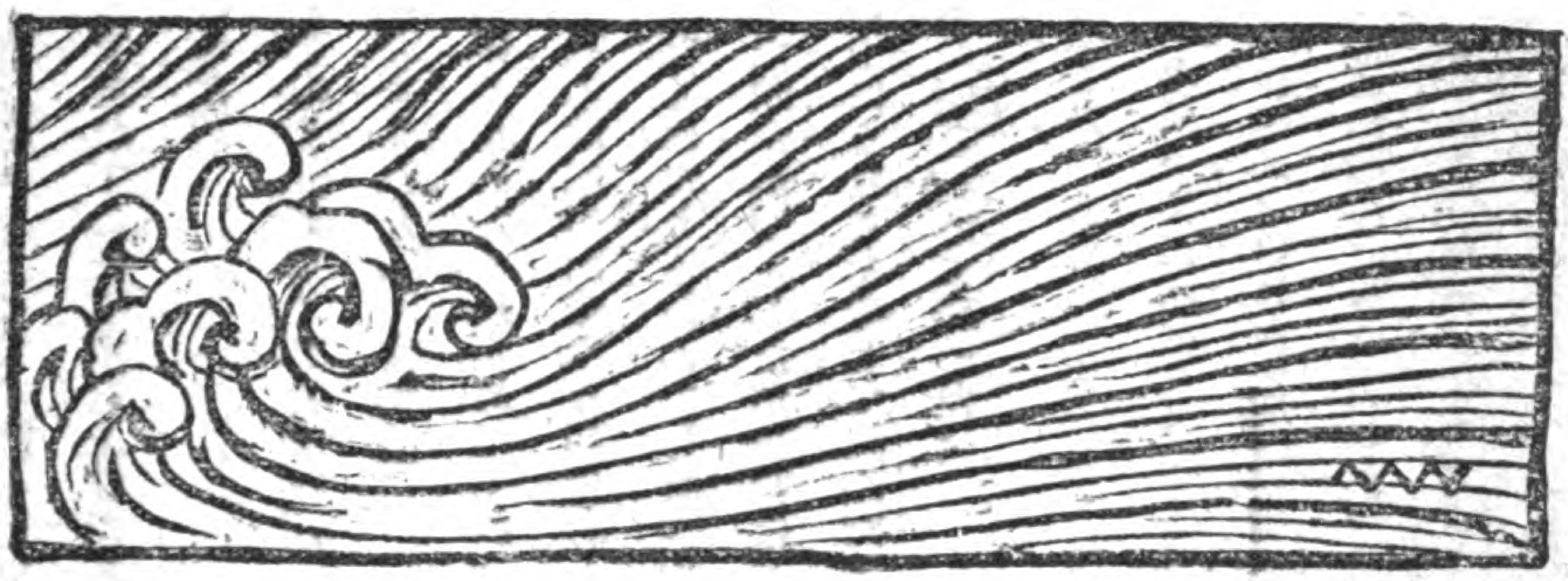
噴水が劉々と上つて、騒々しい水音が手痛く秋本のあたまを掻き亂した。秋本はすぐ自分へ對する意地惡のつもりで今まで忘れてゐた噴水を上げたものに違ひないと思つたが、その突然の仕業が腹立たしかつた。秋本は手を叩いて女中を呼んだ。

「あれを止めてくれたまへ。」

「おきらひなんですか。」

「早く止めてくれ止めてくれ。」

秋本は怒つたやうな顔付をしてゐたので、女中は勝手へ行つてスヰッチをひねつたと見え、噴水ははじめ弱々しく間もなくはたりと歇んでしまつた。しばらくすると又た別な女中がかけたと見え、噴水はふたゝび上りはじめた。秋本はまた頭がかつとしたが先刻ほどでもなかつた。直ぐまた歇んだ。秋本は自分で自分の怒りを噴水のやうに感じ出し、庭の上にまなこを曝して睨んだ。その妙な人爲的な靜かさがなんだか悲しかつた。噴水の落ち絕えるときの弱々しさが秋本の頭を掠めて殘つた。



海のほとり

芥川龍之介

一

……雨はまだ降りつづけてゐた。僕等は午飯をすませた後、敷島を何本も灰にしながら、東京の友だちの噂などした。

僕等のゐるのは何もない庭へ葭簾の日除けを差しかけた六疊二間の離れだつた。庭には何もないと言つても、この海邊に多い弘法麥だけは疎らに砂の上に穂を垂れてゐた。その穂は僕等の來た時にはまだすつかり出揃はなかつた。出てゐるのも大抵はまつ青だつた。が、今はいつの間にかどの穂も同じやうに狐色に變り、穂先ごとに滴をやどしてゐた。

「さあ、仕事でもするかな。」

Mは長ながと寢ころんだまま、糊の強い宿の湯帷子の袖に近眼鏡の玉を拭つてゐた。仕事と言ふのは僕等の雜誌へ毎月何か書かなければならぬ、その創作のことを

指すのだつた。

Mの次の間へ引きとつた後、僕は座蒲團を枕にしながら、里見八犬傳を讀みはじめた。きのふ僕の讀みかけたのは信乃、現八、小文吾などの莊助を救ひに出かける所だつた。「その時蜑崎照文は懷ろより用意の沙金を五包みとり出しつ。先づ三包みを扇にのせたるそが儘に、……三犬士、この金は三十兩をひと包みとせり。尤も些少の東西なれども、こたびの路用を資くるのみ。わが私の餞別ならず、里見殿の賜ものなるに、辭はで納め給へと言ふ。」――僕はそこを讀みながら、おととひ屆いた原稿料の一枚四十錢だつたのを思ひ出した。僕等は二人ともこの七月に大學の英文科を卒業してゐた。從つて衣食の計を立てることは僕等の目前に迫つてゐた。僕はだんだん八犬傳を忘れ、教師になることなどを考へ出した。が、そのうちに眠つたと見え、いつかかう言ふ短い夢を見てゐた。

――それは何でも夜更けらしかつた。僕は兎に角雨戸をしめた座敷にたつた一人横になつてゐた。すると誰か戸を叩いて「もし、もし」と僕に聲をかけた。僕はその雨戸の向うに池のあることを承知してゐた。しかし僕に聲をかけたのは誰だか少しもわからなかつた。

「もし、もし、お願ひがあるのですが、……」

雨戸の外の聲はかう言つた。僕はその言葉を聞いた時、「ははあ、Kのやつだな」と思つた。Kと言ふのは僕等よりも一年後の哲學科にゐた、箸にも棒にもかからぬ男だつた。僕は横になつたまま、可也大聲に返事をした。

「哀れつぽい聲を出したつて駄目だよ。又君、金のことだらう？」

「いいえ、金のことぢやありません。唯わたしの友だちに會はせたい女があるんですが、……」

その聲はどうもKらしくなかつた。のみならず誰か僕のことを心配してくれる人らしかつた。僕は急にわくわくしな

から、雨戸をあけに飛び起きて行つた。實際庭は緣先からずつと廣い池になつてゐた。けれどもそこにはKは勿論、誰も人かげは見えなかつた。

僕は暫く月の映つた池の上を眺めてゐた。池は海草の流れてゐるのを見ると、潮入りになつてゐるらしかつた。そのうちに僕はすぐ目の前にさざ波のきらきら立つてゐるのを見つけた。さざ波は足もとへ寄つて來るにつれ、だんだん一匹の鮒になつた。鮒は水の澄んだ中に悠々と尾鰭を動かしてゐた。

「ああ、鮒が聲をかけたんだ。」

僕はかう思つて安心した。――

僕は目を覺ました時にはもう軒先の葭簾の日除けは薄日の光を透かしてゐた。僕は洗面器を持つて庭へ下り、裏の井戸ばたへ顏を洗ひに行つた。しかし顏を洗つた後でも、今しがた見た夢の記憶は妙に僕にこびりついてゐた。「つまりあの夢の中の鮒は識域下の我と言ふやつなんだ。」――そんな氣も多少はしたのだつた。

二

…………一時間ばかりたつた後、手拭を頭に卷きつけた僕等は海水帽に貸下駄を突つかけ、半町ほどある海へ泳ぎに行つた。道は庭先をだらだら下りると、すぐに濱へつづいてゐた。

「泳げるかな？」

「けふは少し寒いかも知れない。」

僕等は弘法麥の茂みを避け避け、（滴をためた弘法麥の中へうつかり足を踏み入れると、ふくら脛の痒くなるのに閉口

したから。）そんなことを話して歩いて行つた。氣候は海へはひるには涼し過ぎるのに違ひなかつた。けれども僕等は上總の海に、――と言ふよりも寧ろ暮れかかつた夏に未練を持つてゐたのだつた。

海には僕等の來た頃は勿論、きのふさへまだ七八人の男女は浪乗りなどを試みてゐた。しかしけふは人かげもなければ、海水浴區域を指定する赤旗も立つてゐなかつた。唯廣びろとつづいた渚に浪の倒れてゐるばかりだつた。葭簾圍ひの着もの脱ぎ場にも、――そこには茶色の犬が一匹、細かい羽蟲の群れを追ひかけてゐた。が、それも僕等を見るとすぐに向うへ逃げて行つてしまつた。

僕は下駄だけは脱いだものの、到底泳ぐ氣にはなれなかつた。しかしMはいつの間にか湯帷子や眼鏡を着もの脱ぎ場へ置き、海水帽の上へ頬かぶりをしながら、ざぶざぶ淺瀨へはひつて行つた。

「おい、はひる氣かい？」

「だつて折角來たんぢやないか？」

Mは膝ほどある水の中に幾分か腰をかがめたなり、日に焼けた笑顔をふり向けて見せた。

「君もはひれよ。」

「僕は厭だ。」

「へん、『嫣然』がゐりやはひるだらう。」

「莫迦を言へ。」

「嫣然」と言ふのはここにゐるうちに挨拶ぐらゐはし合ふやうになつた或十五六の中學生だつた。彼は格別美少年ではなかつた。しかしどこか若木に似た水々しさを具へた少年だつた。丁度十日ばかり以前の或午後、僕等は海から上つた

體を熱い砂の上へ投げ出してゐた。そこへ彼も潮に濡れたなり、すたすた板子を引きずつて來た。が、ふと彼の足もとに僕等の轉がつてゐるのを見ると、鮮かに齒を見せて一笑した。Mは彼の通り過ぎた後、ちよつと僕に微苦笑を送り、

「あいつ、嫣然として笑つたな」と言つた。それ以來彼は僕等の間に「嫣然」と言ふ名を得てゐたのだつた。

「どうしてもはひらないか？」

「どうしてもはひらない。」

「イゴイストめ！」

Mは體を濡らし濡らし、ずんずん沖へ進みはじめた。僕はMには頓着せず、着もの脱ぎ場から少し離れた、小高い砂山の上へ行つた。それから貸下駄を臀の下に敷き、敷島でも一本吸はうとした。しかし僕のマッチの火は存外強い風の爲に容易に卷煙草に移らなかつた。

「おうい。」

Mはいつ引つ返したのか、向うの淺瀨に佇んだまま、何か僕に聲をかけてゐた。けれども生憎その聲も絕え間のない浪の音の爲にはつきり僕の耳へははひらなかつた。

「どうしたんだ？」

僕のかう尋ねた時にはMはもう湯帷子を引つかけ、僕の隣に腰を下ろしてゐた。

「何、水母にやられたんだ。」

海にはこの數日來、俄に水母が殖えたらしかつた。現に僕もおととひの朝、左の肩から上膊へかけてずつと針の痕をつけられてゐた。

「どこを？」

「頭のまはりを。やられたなと思つてまはりを見ると、何匹も水の中に浮いてゐるんだ。」

「だから僕ははひらなかつたんだ。」

「譃をつけ。——だがもう海水浴もおしまひだな。」

渚はどこも見渡す限り、打ち上げられた海草の外は白じらと月の光に煙つてゐた。そこには唯雲の影の時々大走りに通るだけだつた。僕等は敷島を啣へながら、暫くは默つてかう言ふ渚に寄せて來る浪を眺めてゐた。

「君は教師の口はきまつたのか？」

Mは唐突とこんなことを尋ねた。

「まだだ。君は？」

「僕か？　僕は……」

Mの何か言ひかけた時、僕等は急に笑ひ聲やけたたましい足音に驚かされた。それは海水着に海水帽をかぶつた同年輩の二人の少女だつた。彼等は殆ど傍若無人に僕等の側を通り拔けながら、まつすぐに渚へ走つて行つた。僕等はその後ろ姿を、——一人は眞紅の海水着を着、もう一人は丁度虎のやうに黑と黄とだんだらの海水着を着た、輕快な後ろ姿を見送ると、いつか言ひ合せたやうに微笑してゐた。

「彼女たちもまだ歸らなかつたんだな。」

Mの聲は常談らしい中にも多少の感慨を託してゐた。

「どうだ、もう一ぺんはひつて來ちや？」

「あいつ一人ならばはひつて來るがな。何しろ『ジンゲジ』も一しよぢや、……」
僕等は前の「嫣然」のやうに彼等の一人に、――黒と黄との海水着を着た少女に「ジンゲジ」と言ふ渾名をつけてゐた。「ジンゲジ」とは彼女の顏だち(ゲジヒト)の肉感的(ジンリツヒ)なことを意味するのだつた。僕等は二人ともこの少女にどうも好意を持ち悪かつた。もう一人の少女にも、――Mはもう一人の少女には比較的興味を感じてゐた。のみならず「君は『ジンゲジ』にしろよ。僕はあいつにするから」などと都合の好いことを主張してゐた。
「そこを彼女の爲にはひつて來いよ。」
「ふん、犧牲的精神を發揮してか？――だがあいつも見られてゐることはちやんと意識してゐるんだからな。」
「意識してゐたつて好いぢやないか？」
「いや、どうも少し癪だね。」
彼等は手をつないだまま、もう淺瀨へはひつてゐた。浪は彼等の足もとへ絶えず水吹きを打ち上げに來た。彼等は濡れるのを憚れるやうにその度にきつと飛び上つた。かう言ふ彼等の戲れはこの寂しい殘暑の渚と不調和に感ずるほど花やかに見えた。それは實際人間よりも蝶の美しさに近いものだつた。僕等は風の運んで來る彼等の笑ひ聲を聞きながら、暫く又渚から遠ざかる彼等の姿を眺めてゐた。
「感心に中々勇敢だな。」
「まだ背は立つてゐる。」
「もう――いや、まだ立つてゐるな。」
彼等はとうに手をつながず、別々に沖へ進んでゐた。彼等の一人は、――眞紅の海水着を着た少女は特にずんずん

進んでゐた。と思ふと乳ほどの水の中に立ち、もう一人の少女を招きながら、何か甲高い聲をあげた。その顏は大きい海水帽のうちに遠目にも活き活きと笑つてゐた。

「水母かな？」

「水母かも知れない。」

しかし彼等は前後したまま、更に沖へ出て行くのだつた。

僕等は二人の少女の姿が海水帽ばかりになつたのを見、やつと砂の上の腰を起した。それから餘り話もせず、（腹も減つてゐたのに違ひなかつた。）宿の方へぶらぶら歸つて行つた。

三

……日の暮も秋のやうに涼しかつた。僕等は晩飯をすませた後、この町に歸省中のHと言ふ友だちやNさんと言ふ宿の若主人ともう一度濱へ出かけて行つた。それは何も四人とも一しよに散步をする爲に出かけたのではなかつた。HはS村の伯父を尋ねに、NさんはS村の籠屋へ庭鳥を伏せる籠を註文しにそれぞれ足を運んでゐたのだつた。

濱傳ひにS村へ出る途は高い砂山の裾をまはり、丁度海水浴區域とは反對な方角に向つてゐた。海は勿論砂山に隱れ、浪の音もかすかにしか聞えなかつた。しかし疎らに生え伸びた草は何か黑い穗に出ながら、絶えず潮風にそよいでゐた。

「この邊に生えてゐる草は弘法麥ぢやないね。――Nさん、これは何と言ふの？」

僕は足もとの草をむしり、甚平一つになつたNさんに渡した。

「さあ、鯊ぢやなし、——何と言ひますね。Hさんは知つてゐるでせう。わたしなどとは違つて土地つ子ですから。」

僕等もNさんの東京から聟に來たことは耳にしてゐた。のみならず家附の細君は去年の夏とかに男を拵へて家出したことも耳にしてゐた。

「魚のこともHさんはわたしよりはずつと詳しいんです。」

「へええ、Hはそんなに學者かね。僕は又知つてゐるのは劍術ばかりかと思つてゐた。」

HはMにかう言はれても、弓の折れの杖を引きずつたまま、唯にやにや笑つてゐた。

「Mさん、あなたも何かやるでせう？」

「僕？　僕はまあ泳ぎだけですね。」

Nさんはバットに火をつけた後、去年水泳中に虎魚に刺された東京の株屋の話をした。その株屋は誰が何と言つても、いや、虎魚などの刺す譯はない、確かにあれは海蛇だと强情を張つてゐたとか言ふことだつた。

「海蛇なんてほんたうにゐるの？」

しかしその問に答へたのはたつた一人海水帽をかぶつた、背の高いHだつた。

「海蛇か？　海蛇はほんたうにこの海にもゐるさ。」

「今頃もか？」

「何、滅多にやゐないんだ。」

僕等は四人とも笑ひ出した。そこへ向うからながらみ取りが二人、（ながらみと言ふのは螺の一種である。）魚籃をぶら下げて歩いて來た。彼等は二人とも赤褌をしめた、筋骨の逞しい男だつた。が、潮に濡れ光つた姿はもの哀れと言ふよ

りも見すぼらしかつた。Nさんは彼等とすれ違ふ時、ちよつと彼等の挨拶に答へ、「風呂にお出で」と聲をかけたりした。

「ああ言ふ商賣もやり切れないな。」

僕は何か僕自身もながらみ取りになり兼ねない氣がした。

「ええ、全くやり切れませんよ。何しろ沖へ泳いで行つちや、何度も海の底へ潜るんですからね。」

「おまけに澪に流されたら、十中八九は助からないんだよ。」

Hは弓の折れの杖を振り振り、いろいろ澪の話をした。大きい澪は渚から一里半も沖へつづいてゐる、――そんなことも話にまじつてゐた。

「そら、Hさん、ありやいつでしたかね、ながらみ取りの幽靈が出るつて言つたのは？」

「去年――いや、をととしの秋だ。」

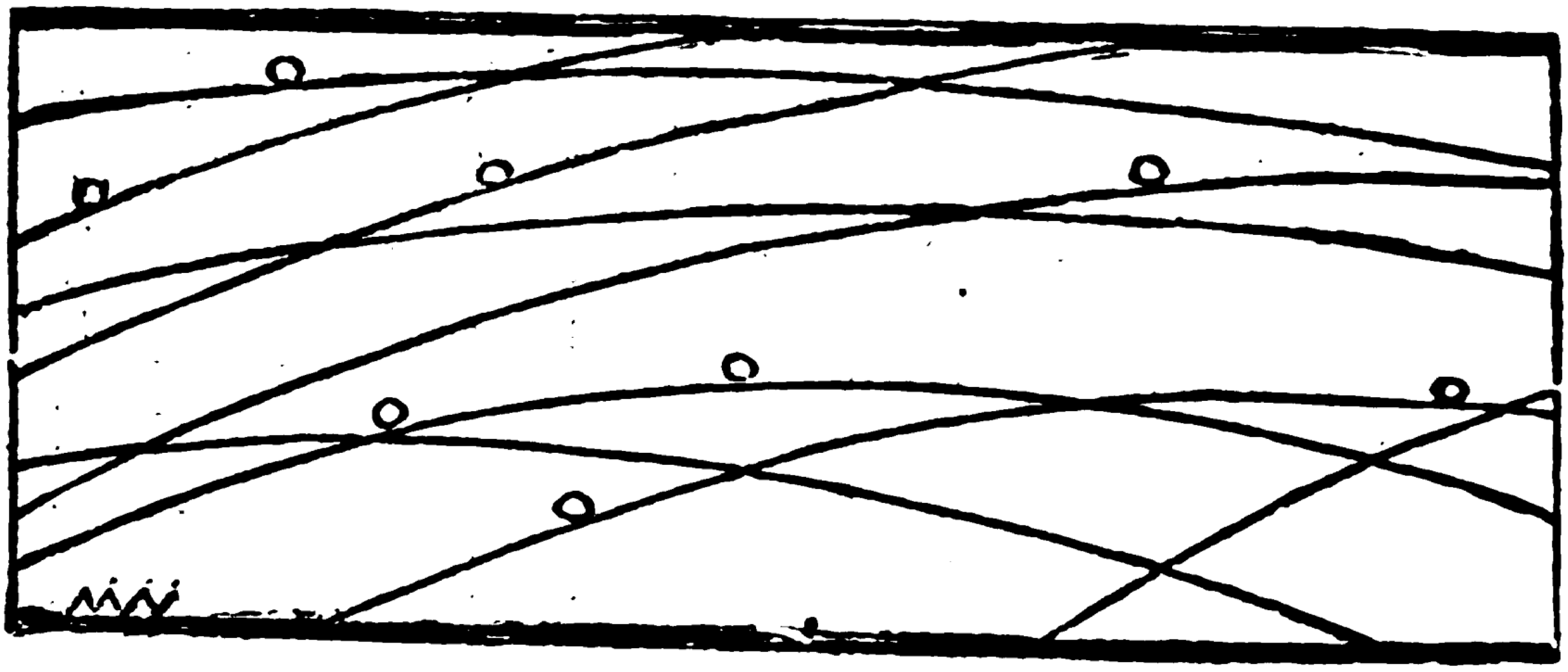
「ほんたうに出たの？」

Hさんは M に答へる前にもう笑ひ聲を洩らしてゐた。

「幽靈ぢやなかつたんです。しかし幽靈が出るつて言つたのは磯つ臭い山のかげの卵塔場でしたし、おまけにその又ながらみ取りの死骸は蝦だらけになつて上つたもんですから、誰でも始のうちは眞に受けなかつたにしろ、氣味惡がつてゐたことだけは確かなんです。そのうちに海軍の兵曹上りの男が宵のうちから卵塔場に張りこんでゐて、とうとう幽靈を見とどけたんですがね。とつつかまへて見りや何のことはない、唯そのながらみ取りと夫婦約束をしてゐたこの町の達磨茶屋の女だつたんです。それでも一時は火が燃えるの人を呼ぶ聲が聞えるのつて、ずゐぶん大騒ぎをしたもんですよ。」

「ぢや別段その女は人を嚇かす氣で來てゐたんぢやないの？」

「ええ、唯毎晩十二時前後にながらみ取りの墓の前へ來ちや、ぼんやり立つてゐただけなんです。」
Nさんの話はかう言ふ海邊に如何にもふさはしい喜劇だつた。が、誰も笑ふものはなかつた。のみならず皆なぜともなしに默つて足ばかり運んでゐた。
「さあこの邊から引つ返すかな。」
僕等はMのかう言つた時、いつの間にかもう風の落ちた、人氣のない渚を歩いてゐた。あたりは廣い砂の上にまだ千鳥の足跡さへかすかに見えるほど明るかつた。しかし海だけは見渡す限り、はるかに弧を描いた浪打ち際に一すぢの水沫を殘したまま、一面に黑ぐろと暮れかかつてゐた。
「ぢや失敬。」
「さやうなら。」
HやNさんに別れた後、僕等は格別急ぎもせず、冷びえした渚を引き返した。渚には打ち寄せる浪の音の外に時々澄み渡つた蜩の聲も僕等の耳へ傳はつて來た。それは少くとも三町は離れた松林に鳴いてゐる蜩だつた。
「おい、M！」
僕はいつかMよりも五六歩あとに歩いてゐた。
「何だ？」
「僕等ももう東京へ引き上げようか？」
「うん、引き上げるのも惡くないな。」
それからMは氣輕さうにティッペラリイの口笛を吹きはじめた。



髮

德田秋聲

お榮が髮を氣にしだしたのは、何時頃からのことだつたらう。多分彼女が祐吉の双鬢に白いものが、目に立つほどになつてから、幾許かの歳月が經つてからの事であらう。

祐吉の鬢に白髮が目につきだしたのは、十二三年も前のことであつたが、多い黑い髮の數に比べてはまだ九牛の一毛といふくらゐの程度であつた。

「大分目に立つて來ましたよ。」お榮がさう言つて、彼の白髮を拔いたりするやうになつたのは、それから三四年もしてからであつた。

「大分白くなりましたね。」

行きつけの床屋の親方が、バリカンと櫛をもつて、後ろへまはつてさう言ひながら、ぐつと周りを短かく刈込むことにしてくれたのは、それから又々少し年月がたつてからであつた。

毛の白くなるといふことは、迅速のやうで其の實づゐぶん緩漫なものであつた。

二つしかない目は左に右として、歯なども祐吉は幼少のをりから奥の方を蝕まれ、それから幾年目おきかに、一本くさり二本くさりして、三十代のをりにはもう三本も拔いてしまつてゐた。醫者にかゝつて綴くり普請をしたことも度々であつたけれど、年を取つても、その割りにはさう大して酷いことにはならないのであつた。髪もそれと同じで、一夜のうちに髪が白くなるといふやうな事はなかつた。神は氣づかないうちに、漸次に少しづゝ彼を老年に導びくのであつた。

お榮は度々お産をしたので、歯はづゐぶん酷くなつてゐた。今では自然の歯は少ないくらゐであつたが、頭髪が少し禿げかゝつて來たのは、祐吉の白髪と大抵同じくらゐの時期であつた。

「わたし隨分禿げましたよ。」

祐吉はその頃から、屢々それを聞かされた。

「禿げたつていゝぢやないか。」

祐吉は初めのうちは、さう言つて笑つてゐた。少しくらゐ頭でも禿げた方が、生活氣分に諦めと落着ができて、いくらかしんみりした氣持が出て來はしないかと、寧ろそれを好いことに考へたくらゐであつた。勿論お榮とても、さう無闇に娑婆氣の多い女でもなかつたし、尚また祐吉の仕事に妨害を與へるほど派手でもなかつた。贅澤だとか金使ひが荒いとか云ふ側では尚更らなかつた。多少の虚榮と、服裝なぞの趣味はもつてゐたけれど、それは都會の女が普通誰しも持つてゐる程度のもので、祐吉の生活を破壞するとか、家政を紊すとかいふやうな不検束なところは認められなかつた。晴着一枚作るにも選擇がづゐぶん熱いと同じやうに、作らなければならない場合には、づつと前から其となく祐吉に匂はせるといふくらゐ用心深いのであつた。祐吉もこの女から着物の趣味を封じることは、殘酷だと思つた。餘り

目に立たない程度で、身裝のたしなみをもつてくれることが、寧ろ望ましかつたが、餘り好い目にばかりもしてゐられなかつた。それは彼女のものに限らず、祐吉自身のものや、子供達のものについても同じであつた。お菜は時々どこそこで祐吉に似合ふやうな何を見つけたとか、餘程買はうと思つたけれど、叱られるから止めたとかいふやうなことを暴く口にしてゐたが、祐吉が着物を作らうといへば、いつでも悅んで贊成した。祐吉も身裝ではづゐぶん恥かしい思ひをしたこともあつたので、餘り無頓着ではゐられない方であつたが、絶えずお菜を應えつけておかなければならないやうな氣がしてゐたので、誰のものに限らず、一應は制限を加へておかなければ氣がすまなかつた。それにお菜は少しきちんとしすぎる感じもあつた。同じ着るにしても、もつと無雜作にしてほしいと思つたが、それが又たお菜にはちつとも似合はないのであつた。

「おれはそんな贅澤なものは着ないよ。短い一生に着物なんか着たつて仕方がないぢやないか。」いつでも祐吉はわざと言つた。

子供のものとなれば、彼は一層頑固であつた。そして折目のある切立ての着物が大嫌ひで垢でへとつく着物の方が好きであつた自分の少年時代を、直ぐ引合ひに出した。今から思ふと、祐吉の育つてきた頃は、家が零落れてゐたし、父や母がそんな事に無頓着――といふよりも亂次のなかつたことが、彼にもしみ込んでゐるので、お菜の遣方の方が總てに妥當だと思はれるのであつたが、でも几帳面で、多少の趣味性があるだけに、お菜の遣方が、着物に限らず、總てに於て無駄でないまでも、少し氣がつき過ぎる感じであつた。そんな外面的のことよりも、お菜に注文したいことが澤山あつた。もつと生活を淋しく、氣分を落着けてもらひたかつた。けれど今更らそれを注文したところで仕方がなかつた。

祐吉は或時お菜の頭の禿を見た。ちやうど髮結が髮を釋かしたところで、前髮を取りあげる踊りのあたりが、直徑一寸

の艶も毛が殆んど生えてゐなかつた。

「成程少し禿げて來たね。」祐吉は笑つた。

「禿げてるでせう。」お榮は氣が引けるやうに言つた。

「でも此のぐらゐはね。こちらの奧さんなんか未だ好い方ですよ。」髮結が言つた。

「綠屋のお神さんなんか何うでせう。私よりか若いのに、ひどい禿げ方ですよ。あんなに縹緻がよくて、毛も好い毛なのにね。」

「若くてもづゐぶん禿げてる人がありますよ。」

祐吉はいつも見馴れてゐるので、さほど氣にもならなかつたけれど、彼女の髮は年々惡くなつてゐた。少し長めな揉あげが、いつとはなし消えてしまつたのは、もう餘程前のことであつた。蠟塗りのやうな黑さをもつてゐた毛も、お産の度每に色が惡くなると共に額の相が變るほど拔けた。拔けたあとから、又細い纖毛のやうなのが生えはじめたりしたが、何といつてもお産の度ごとに、齒と髮から彼女の若さが逃げていつた。

お榮の頭は、しかしさう際立つほどではないにして、年々いくらかづゝ禿げの部分が擴がつて行く譯であつた。して禿げたところへ貼るやうに工夫された羽二重の裂を用ゐたりしたこともあつたが、それも頭がむれて、氣分に障るので、辛抱ができなかつた。勿論髮をちやんと結つてをれば、前髮の下になるので目に立ちもしなかつたが、禿が大きくなるにつれて、毛の色が惡く、髮の薄くなるのが、お榮に取つては一等辛いことであつたと同時に、祐吉の彼女に對する全體の感じにも、淺ましい幻滅に似たやうな間隙が生じない譯に行かなかつた。髮と云ふ異様な敵ひものに飾られ

て、しかも毛の質が惡くても何でも、前髪を立てたり、髱を脹らませたりすることによつて、顏の缺點が蔽はれたり、餘り尋常にできてゐるとは言へない顏骨や耳や鼻の缺點が調節されたりしてゐたお榮の顏に取つては、その天然の裝飾物が滅びかゝつて來ては、何うにも始末が惡いのであつた。若い時分は線の柔かみもあつて、目立たなかつた顏の骨格が、年を取るにつれて硬張つて來て、前髪や鬢を脹らませない、たとへば束髪や引詰髪のやうな場合の彼女の顏は、それが丸髷である場合には、生き〳〵してゐる目その物すらが、不思議に美しさを失つて、顏の生彩が全く消されてしまふのであつた。それで顏ばかりでなしに、さういふ時の彼女は、性格その物までが、今迄の情味と晴やかさを失つて、惡い生地が露骨に出てくるやうな感じであつた。そして庸吉のその感じ方が、また又た彼女の神經に反映しないではおかないので、彼女の表情や態度からは、女の媚態といふやうなものが一切消されてしまつて、たゞ硬化した骨張つたものが、そこに殘されてあるだけであつた。勿論お榮の丸髷も、毛の質が惡いところから、長くはもたなかつた。少し水々して見えるのは、結立ての一日だけであつた。一と晩立つと、後ろの髱が割れたり、前髪がぐしや〳〵になつたりした。そして其間際水々してゐた日までが、張りを失つて來るのであつた。

「厭な毛だな。」

「え、猫毛ですもの。それに蹄搨頭で、禿げたところへさはると、ぶく〳〵してゐるんですもの。」

「丸髷なんか止して、束髪にしたら可いぢやないか。」

「束髪は似合はないんですもの。」

「何か似合ふのがありさうなものぢやないか。」

「前に結つてゐた事もあるんですけれど、年取つてからは何うしても映らないんですもの。でも仕方がないから、その

うち束髪にしようと思ひます。」

さう言つても、お榮はやつぱり束髪に親しみがなかつた。一つ長く結ひつけてゐる髪結が、束髪が下手で、それかと言つて其の髪結を止してしまふのも氣の毒だつたので、思ひついて束髪に結つてみても、つい又た丸髷に返つてしまふのであつた。お榮は丸髷の結立だけは、何んなに氣分の惡いときでも、生れかはつたやうに生采が出て來て、初めてお榮らしいお榮になるのであつたが、それが少し崩れだしてくると、又すつかり可けなくなるのであつた。祐吉はそのぐしやくやした髪を見ると、彼女の表情や氣持までが凋びたやうに感じて、氣がむしやくしやした。引詰や束髪もいけなかつたが、丸髷の崩れたのは、一層可けなかつた。それは彼女の毛の惡いためばかりでなく、その重苦しい髷の形が、現代の生活の生活氣分とふさはないからでもあつた。彼は七三や耳隠しを、さう特別に新らしい髪だとも思はなかつた。丸髷のやうに堅苦しくないものだつたら、洋風の髪と共通點のある昔し風の意氣な髪の方が、どのくらゐ日本の女を美しく見せるか知れないと思つた。髪が女の生命であることを善く知つてゐた昔しの女の方が、餘計髪の結ひ方に氣を使つたに違ひないのであつたが、しかし新らしい髪にはやはり清新な時代の感覺が潑溂として漲つてゐた。時代の若さをお榮に求めることは出來ないにしても、いくらかでも扮裝をお品よくすることによつて、生活氣分を高めたいと望んだ。それはお榮自身が痛いほど感じてゐるとほりに、彼女の一番の弱點は學校的な教養のないことで、そのためにお榮の生活氣分が、何のくらゐ萎縮してゐることか判らなかつた。勿論教養のない割りには、世事や人情に理解もあつた。頭腦も働いた。祐吉に取つては、なまじつか教養があるよりも寧ろ無い方が、好い場合もあつたけれど、それは大抵目の先きの些やかな事柄に目端が利く程度のことで、人間として、女性として、家庭の主婦、多勢の子供の母として、人格的中心のないのは、矢張り物足りなかつた。祐吉は今更彼女に向つて、食物の滋養だとか成分だとか、ビタアミンや

カルシユームに關して智識をもつてもらひたいとは思はなかつたけれど、今少し向上的で努力的であつても可い筈だと思つた。彼女の弱い退嬰的な氣質としたら、家庭に苦難が襲つたとき――たとへば祐吉の死後、多勢の子供を引受けたとき、惡いことや醜いことはしないにしても、子供たちを力づけ勵まして行くだけの氣慨があるか何うかは疑はしかつた。彼女は子供のために、頭の天邊から足の爪先きまで、餘り氣がつきすぎるのであつた。子供達を試煉にかけるやうなことは、何一つ氣をつかはないのであつた。

「お前は己が死んだら、ぐしや〱になつてしまふだらうよ。」祐吉は言つた。

「でも愈よとなれば私だつて……。」お榮は答へるのであつた。

祐吉はしかし、困難を乘切るだけの勇氣が、彼女にあらうとは思へなかつた。ちやうど彼女の母が、朝から晩まで洗濯や襤褸いぢりに働きづめで、子供たちの身のうへについて肝腎のことは何一つ考へてやらなかつたやうに、また彼女の父が、頭腦が利くかはりに大の無精ものであつたやうに。そしてお榮の性格には、その顏や體質がさうであるとほりに、その双つのものが混り合つてゐた。

「滅びゆく種族！」祐吉にはさうも思へるのであつた。

勿論祐吉自身の種族にも、澆季的のものが左右多かつたし、お榮の種族にも、繁榮を矜つてゐるものが多かつたけれど、お榮一人だけで言つて見れば、祐吉が手を放せば、他愛もなくぐしやりと崩れてしまひさうに思へてならなかつた。それが光子の死とともに、漸と祐吉にわかつて來るまでには、祐吉の頭腦には、妙に勝氣な張りの強さが、いつも彼女を對等に扱はせてゐた。それは愛の問題であるとさへ思はれた。そして彼はそのために惱み苦しんだ。二人の間に劇しい爭鬪が續いた。彼は彼女を占有することができないのに悶えた。抱擁力が乏しかつた。彼女の性格を理解しえな

かつた。今祐吉は彼女を知ることができて來たと同時に、年と共にヒステレカルになつて來た、本質的に滋ひと感傷性の乏しい彼女の骨張つた性格が、髪の薄くなつた頭が、段々共の大切な掩護から剝ぎ出されて來たやうに、著しくその醜さを見せて來た。髪と頭と彼女の性格とが、交互的に彼女の若さを失つて來たことが、露骨に現はれて來た。

しかしお榮がその大切な掩護物を、全く諦めてしまふには、まだ大分の歲月がかゝるだらうと思はれた。ちやうど祐吉の髪が、もう餘程前から白くなりはじめたに拘はらず、白が黑を征服しきつてしまふまでには、まだいくらかの歲月を要するであらう。と同じに、彼女もまだ彼女の道樂である手絡の必要がなくなるまでには、唯一の賴みである丸髷を幾つか結ふであらう。結ふ度に彼女の髮は、幾本づゝかの毛根が衰へ失せて、遠い過去の幻影が鏡のうへに萎びていくことであらう。

晚に一の間で、子供たちが紅茶なんかを入れてゐるときなぞに、時には髮の話も出るのであつた。長男の芳男が、もうその問題とは沒交涉ではなかつた。

「どうもお前の毛は少し怪しいね。」祐吉は皮肉な微笑を浮べた。

芳男はもう大分前から、それを氣にして髮の手入れを相當にやつてゐた。

芳男は少し不機嫌な顏をして、頭へ手をやつた。

「そんな毛はもつと短かく刈つた方がいゝぢやないか。」

「短かくですか。けど、どうも毛の惡いのは、何うにも。仕方がないさ。床屋でも早く禿げる頭だと言ふのさ。」

「家ぢや大抵毛がわるいね。毛性のいゝのは道次くらゐのものぢやないか。」

そんな時はきつとお榮の頭へ、皆んなの目が移つた。

「でも貴方もづゐぶん薄くなりましたよ。」

「薄くなつたね。そのうち禿げるだらう。白くて禿げるのは汚ないね。」

「日の當るところで、地がすけて見えますよ。貴方もさう好いつて毛ぢやないんですね。」

「それあ毛にも色々あるさ。」

「まあ濃い方さ。少し濃すぎるくらゐだ。」芳男が皮肉さうに言つた。

祐吉も毛が棕櫚の毛のやうに、大分前からばさ／＼して來たことに感づいてゐた。後ろの方へバリカンが入ると、繁みの深い樹林へ風が通るやうに、冷かな外氣がすうと頭の地にさはつて、氣持がせい／＼したのは、つい此頃のやうに思はれるのであるが、それももう十二三年も昔しのことであつた。床屋の親方から「大分お白くなりましたね」と言はれてからも、十年近くにもなつてゐた。

お榮はどうかすると、祐吉の頭へ手をあげて、ちか／＼する白髪をぬいたりしたが、彼自身は餘りむさ苦しくならない程度で、散髪は比較的氣をつけるやうになつてゐたが、白くなるのが格別氣になると云ふほどではなかつた。孰にしても大した差違はなかつた。たゞ生活氣分を、頭腦にふさふやうにしたいと希ふだけであつた。いつまで經つても、子供々々してゐるやうに思へてならなかつた。

毛の話が出ると、死んだ女の子の噂がきつと出た。目を瞑つた朝、誰れかゞ來て梳かした大人のやうなたつぷりした黒い彼女の髪が、蒲團から疊のうへに、長く這つてゐたことを、祐吉はいつも憶出すのであつた。

「あの毛をおいていつてくれたらね。」お榮は溜息まじりに言ふのであつた。

しかし死者のことは、お互ひに遠慮し合つて、不斷は口にしないことにしてゐた。その死を思ふと、誰も彼も息がつまるやうであつた。禰吉は殊にもさうで、いつになつても鳩尾が痛みだして、腦貧血を起しさうであつた。取る年と共に堅いしこりが胸先へ出來さうに思へた。

「しかし禿げるといふことは、何んな人でも淋しいものと見えて、禿げてゐる人は一本の毛でも大切さうに撫でつけてゐるからな。」

「禿と白髪と孰がいゝかな。」

「禿の方がいゝね。さつぱりしてゐて、愛嬌があつて。白髪頭も人によつては、老蒼の氣があつていゝけれど、顏にもよりきりだからね。」

「しかし是からの人は、みんな早く禿げるやうだね。西洋人なんか大抵毛が薄いけれど、好い顏してるから可笑しくないけれど、日本人は滑稽に見えるからな。」

「肉食すると早く禿げるんぢやないか。アルコル性のものなんか、無暗と振りかけるのも、地が焦けて却つて好くないんぢやないか。髪の手入れなんか、餘りしない方がいゝんだ。」

「しかし禿げるものは、何うしたつて禿げますね。」

「お前なんか今から地が透いて見えるとすると、谷さんの年頃には隨分禿げるだらうな。」

谷はよく來る親類の青年であつた。

「谷さんづゐぶん薄くなりましたね。あの人があんなに早く禿げるとは思はなかつた。」お榮が言つた。

「禿げたつていゝぢやないか。氣にしたつて仕方のないことだからね。」

「男は熟したつてね。高木のやうに、足が毛むくじやらだと言つて、お婆さんに熟るのも妙だね。」

高木はお榮の弟で坊さんであつた。

「高木の叔父さんも頭が禿げたね。ずゐぶん氣にするんだよ。」

「三十くらゐでね。坊主だからいゝやうなもんだけれど。それよりもお前のお友達が、君の眉毛は薄いねと言つたのが、何う考へても可笑しくて爲樣がない。げぢ〳〵のやうな此の太い眉毛が目に見えないのかね。」お榮はさう言つて、堪らないやうに笑つた。

さうしてみんなの眉の品評が出ると、そこで又死んだ子の半月なりの、長く目尻へ引いた眉毛のことが噂に出た。

「けれど何が辛いと言つて、女は毛の惡いほど辛いことはないですね。」

「お母さんなんかもう可いぢやないか。」

「でも、幾歳になつても、毛は大事ですからね。若いうちは毛が少しくらい惡いたつて可いさ。年を取ると目に立ちますからね。」

「けど、芝居なんか行つてると、生際へ何か貼つてゐる婆さんなんか、それがぴか〳〵光るんでね。」

「え、髮かぶつてる人もありますよ。お母さんなんか、あんなになるまで生きてゐたくないと思ふね。誰も一緒に歩いちやくれないだらうからね。さうかと言つて、染めるのも厭だし。ずいぶん勸められたけれど、一度染めると、始終染めてゐなけあならないからね。」

お榮は近所の細君に、髮を染めることを善く勸められた。その藥品についても、色々講釋を聞かされてゐたが、染めてしまふのも惜しいやうな氣がした。

「でも私なんかまだ好いんですよ。猫毛だから可けないけれど、まだ髪が結へないといふほど薄くないの。紋屋のお神さんなんか、毛並はいゝんだけれど、もうすつかり薄くなつて結ふのに大變な細工をするんですよ。禿げだつて私なんていふもんぢやない。もう髷の引つかゝりもないんですからね。それあ可笑しいんですよ、あの人娘さんがなくなつてから、よく旦那と方々お詣りをして歩きますからね。去年は身延へ行つたり、その前の年はお伊勢さま。それから讃岐の金比羅さまへもお詣りしたりなんかして、始終方々旅をしてゐるんですよ。やつぱり寂しいんですね。」

その娘さんが、本郷座で芝居見物中、頭腦がぐら〳〵して、擔ぎ出す間もなく死んだのは、もう十二三年も前のことであつた。長唄なんかの旨かつた、愛らしいその娘さんを、新吉たちはお河童さんの時分から知つてゐた。その日彼女は母親と二人で、平土間の前の方で、幕のあくのを待つてゐた。そして序幕があくと程なく、何だか氣分が變だと言つて、お茶を呑みたがつた。土瓶がちやうど殆んど空になつてゐた。母親は有るだけ絞つてやつた。娘さんはその茶碗手にしたまゝ、母親の膝に崩れ折れかゝつたきり、永久に口も開けず、目も開かなかつた。それは心臓痲痺であつた。紋屋といふのは、その父親の食料品店の屋號であつた。

「それにあの人、この頃着物なんか好いものを隨分拵へるんですの。春とか秋とかには、きつと何處かへお詣りをして、今年は高野山へも登るつもりで、途中京都見物をしようと思つて、御夫婦で立つたんですの。ところが何でうせう、汽車のうちはまだ可かつたけれど、京都へついて宿屋まで自動車に乘つてゐるあひだに、折角骨折つて結つた髷が、立つたとき天井に閊へたとか何うとかで、すつかりへたばつてしまつたんですつて。頭の地へ裂を張つたり何かして、それに前髪や髷を引きつけてあつたんだから堪らない。その裂が汗で剝がれかゝつてゐたところへ、髷を天井へ引つかけたものだから、づるりと剝げてしまつて、何うにも始末に行けなくなつてしまつたんです。あれは結ひつけてゐるお弱さ

[illegible]して、その翌朝すぐ京都を立つて歸つて來たんですつて。その話をして、涙を出して笑つてるんですの……あの人も生粋の下町つ兒で、あのとほりの意氣づくりですから、束髪といふ柄ぢやありませんしね、毛の好い人を見ると、痴にさはつて仕樣がないんですつて。」

お菜はこれも涙をふきながら、堪らなさうに笑つて話すのであつた。

「だから私なんかも京都見物でもさして下さるなら、今のうちですわ。」

「あゝ何時でも。」

「行つて來たら可いぢやないか。」

「でも、さう行きたいと思ひませんね。谷田のお姉さんのやうに、いつそ丸坊主になつてからの方がいゝかも知れませんね。」

谷田の姉といふのは、祐吉の嫂であつた。彼女も髪の薄いことでは、人に負を取らない方であつた。祐吉はいつか川合へ歸つて、しばらくそこに逗留してゐたときも、彼女の來遊を勸めた。しかし彼女もうつかり旅へは出られない。特別に手數のかゝる頭の持主であつた。毛が黑いので、ちよつとは氣がつかなかつたけれど、能く見ると、疎らな髪の隙間隙間から、墨の色が黑く透けて見えるのであつた。彼女は逢ふ度に、いつか祐吉が案内した歌舞伎のお禮を言ふのであつた。その時彼女は兒と一緒に、養嗣子夫婦の赴任してゐる四國から大阪京都を見物して、東京を訪問したのであつた。そして暫らく兒が泊りつけの芝の旅館に逗留してゐた。それきり彼女はどこへも踏出さなかつた。

「私ももう一度東京へ行きたいとは思ひますけれど、何分こんな頭ですから、土地から離れられないのでございます

の。」彼女は言ふのであつた。

芳男はこの休暇に、弟と二人で祐吉の郷里を見舞つた。そして一週間ばかり伯父さんの家に泊つてゐた。祐吉はその時も、嫂に傳言させた。

「何しろあの几帳面な人でせう。口の利き方が莫迦に落着いて叮嚀なんですから、僕がお遊びにいらつしやいと言ふと、あの調子で、更つて、伺ひたくても伺へない譯をお話ししませう、どうかお氣持を惡くなさらないやうと言ふので、東京にはこんな頭を結ふ髮結さんがないだらうし、あつても極りが惡いから、まあこの毛を剃つてしまふ年頃になつたら、寄せていたゞきますつて、まさか三十分もかゝらなかつたけれど、叮嚀に細かい話をするのさ。あの伯母さんなか〳〵話が面白いんですよ。田舍の親類の人は皆な窮屈だつて言つてるけれど、僕はあの伯母さんが一等好いな。」芳男は話すのであつた。

お榮が、前髮のあたりに時々白髮を發見して、すつかり氣を惡くしてしまつたのは、つい今年へ入つてからであつた。

「私白髮がぽつ〳〵出て來たんで、厭になつてしまつた。」彼女はそつと祐吉に告げた。

彼女はそれが始終氣にしてゐる咽喉の腫物や持病の腎臟どころの騷ぎではなかつた。忌避してゐた近年の重ね〳〵のお産よりも、それが彼女の心を戰かせた。

お榮の氣管の可也深いところにある腫物に惱みだしたのも、大分前からのことであつた。腎臟は第二のお産以來、彼

る體質のせいであつた。冬になると、[illegible]についてゐ[illegible]こ
とがあつた。もう長いあひだ、冬が來るごとに耳鼻科へ通つてゐた。そして其を切る練習をしてゐた。しかし堅剛なお
榮は、手術の練習――それは腫物を切取るあひだ、口を開いてゐなければならないので、それを遣り方々咽喉を洗つて
もらふために、隔日くらゐに博士の自宅へ通ふのであつたが、いつも好い頃になると、ちよつとした差閊で一日も休んで
しまふのが、つい其れきりになつて、毎年々々根本的治療を怠つてしまふのであつた。陽氣が暖かになると、咽喉もさう
氣にならなかつた。彼女が長いあひだ惱んでゐる持疾も、いつも姑息な一時的の手當をするだけで、メスを加へるのを
恐れた。祐吉の見るところでは、彼の或る惡い血が、いつか彼女の血素に巣くつて、年々彼女の體質を破壞しつゝある
のだとしか思へなかつた。お榮はもう本質的に完全なお榮ではなかつた。彼女の體質は、本來のお榮自身でもなければ
祐吉自身でもなかつた。末に行くほど子供の體質が自分に似て來るのが、何よりの證據だと、彼は自分の場合だけで、
獨斷的に決めてゐた。孰れにしても、お榮の肉體は年々蝕まれてゐた。それについ近年までは、祐吉の拳が、地のぶよ
〳〵した彼女の頭の上に能く飛んだ。お榮の頭腦がぼんやりして來たのも、そのせいだらうと祐吉は時々考へた。けれ
どお榮の心には妙なえらのやうなものや角のやうなものがしこつてゐて、折にふれてそれがむくれて來るのであつた。
祐吉はそれを打ちすゑなくては氣がすまなかつた。

今彼女にも段々その、えらや角が一つづゝ剝落しつゝあつた。思ひあがつたやうな、張り切つた明るい氣持が歸つて
來た。そして其の代りヒステレカルに氣むづかしくなつて來た。

或る日も祐吉は寢床のなかで、女中たちに何かぶつ〳〵言つてゐる彼女の聲で目がさめた。それは彼女の潔癖か、女
中たちのする事を何かにつけて齒痒く思ふからであつた。少しでも目を放すと、何をするか判らないと思つた。一人は

粗笨で横着であつた。一人は實直で野呂間であつた。自分が出れば一時間できちんと片付くことを、彼等は三時間もの時間を、それにかゝつてゐて、おまけに何一つとして、年だけのことは得爲ないのであつた。いくら教へても小言を言つても、間に合つて行かないのが腹立しかつた。

「誰が火鉢を掃除したの。この炭の注ぎ方は何うしたといふんだらう。こんなに落しを擦つてしまつたんぢや仕方がないぢやないか。灰だつて、こんなに深く掘つちや駄目ですよ。」

女中が何か答辯してゐるのが聞えた。

「この佛さまの御飯は何うしたの。いつまで此處におくの。」

祐吉はその聲で、朝の氣分がすつかり損はれるやうに思つた。もう少しあつさり遣つてくれゝば可いと思つた。しかしお榮に言はせると、臺所にかけては、彼女たちは全く半間人足であつた。「今にお嫁に行つて何うする積りだらう」と言ふのであつた。

それから暫らく經つと、お榮の小言が臺所の方に聞えてゐた。聞いてゐると、火起し兼用の石綿造りの十能が、昨夜買つて來たまゝで、もう臺なしになつたといふのであつた。女中の一人は、昨夜これをお榮から受取ると、綺麗好きなお榮のために、それを洗ふつもりで、いきなりバケツの水に浸けてたわしで擦つてゐたのであつた。

「煩いね、もう可いぢやないか。」祐吉はさう言つて茶の室へ出て行つた。

「朝少し早くおきると、何時でもさうなんだから。」

「だつてこの人達が餘り莫迦なことをするんですもの。私の買つて來た十能を水に浸けて擦るんですもの。これは瓦斯のうへにかけて、火をおこすやうに中に石綿を張つてあるんですよ。」

「そんな物必要ないぢやないか。餘り色々んなものを買ふからさ。」
「だつて炭が經濟ですもの。」
「しかし洗つた方がいゝと思つたんだらう。」
「ちよツ」お榮は舌打をした。
「ちよつと見れば解ることですものね。」
「ちよつとやりさうな事ぢやないか。お前の小言は餘り煩いよ。」
お榮はぷり〱して四疊半の方へ行つた。髪を引詰にしてゐたので、顏が一層峻しく硬ばつて見えた。
「私が少し何か言へば、いつでも女中の肩をもつて遣込めるんだもの。私ばかりが惡者になつて、貴方はいつでも好い旦那さまで通るんです。それぢや女中を仕込むことさへ出來ないぢやないか。」そしてお榮はひどく不機嫌になつて、あつち行き此方往きしてゐた。
「何だつて言つてるんだ、見ともない。」
「貴方は私に小言があるなら、蔭で言つて下さい。女中達の前で遣込めるのは止して下さい。」
「何に。まだぐづ〱言ふのかい。」
「誰にでも聽いてごらんなさい。何うしてそんなに、貴方は女中の肩ばかり持つんです。」
お榮の聲はひどくえら立つて來た。祐吉はそれが頭へくすがるやうであつた。彼はいきなり起ちあがつて彼女の哀れな引詰頭を、いやと言ふほど撲りとばした。
女中が一生懸命祐吉を抱き止めた。

祐吉は餘り好い氣持がしなかつた。あの厭なえらさへとれてくれゝば、何んなに助かるだらうと思つた。彼はそのえらにふれる毎に、子供たちの母親でない別の女との靜かな隱退的な同棲生活を空想した。

しかし何時も大したことにはならなかつた。成りやうもなかつた。とにかく幸福らしい家庭生活がつゞいた。彼女もいつもえらばかり押立てゝはゐなかつた。

中央公論大賣捌所

東京 [illegible] — 東[illegible]
同 [illegible] — 北[illegible]
同 本郷區春木町 — 盛春堂
大阪市北區梅田町 — 盛文館
同 北區東梅田町 — [illegible]盛社
京都市七條停車場前 — 共盛社
同 新町通七條南入 — 大誠社
名古屋市中區富澤町 — 中京堂
朝鮮京城本町二丁目 — 日韓書房

● 定價 金八拾錢郵稅金貳錢五厘（海外郵稅貳拾八錢）

冊數＼區別	國內	國外
六冊	金四圓八拾錢	金六圓四拾八錢
十二冊	金九圓六拾錢	金拾貳圓九拾六錢
	以上郵稅共	

▲ [illegible]

廣告取次所

博報堂　萬年社　告天社
正路喜社　帝國通信社　日本廣告社
信[illegible]社　金蘭社　・星社

[illegible] 東京三[illegible]番　長野三二〇[illegible]

代金引替 [illegible]

集金郵便 [illegible]

中央公論及婦人公論 [illegible]

受領證請求 [illegible]

大正十四年八月廿[illegible]日印刷納本
大正十四年九月一日發行

禁轉載

發行所 中央公論社

印刷所 [illegible]

CHUO KORON (*The Central Review.*)

By THE CHUO KORON SHA PUBLISHING Co., Published Monthly.
Terms of Subscription: Annual subscription *yen* 12.48; Single copy 80 *sen* including Postage. Entered at the Post Office at Los Angeles, Cal. U.S.A. as second-class mail matter.

◉本號特價金壹圓八拾錢

郵稅金五錢

東京小石川精研社印刷